
完全なる予定違いより予期せぬ未来を求めて...

埼玉ペンギン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

完全なる予定違い より予期せぬ未来を求めて…

【Nコード】

N3682P

【作者名】

埼玉ペンギン

【あらすじ】

次話6日投稿予定です

偽予告 食糧が一切ない。

(…………肉だあ…………)

食べようと手を伸ばすと…我が子だった。

(何をしてんだ?!俺は)…………

すみません思いつきで投稿いたします

本人初執筆です よろしくお願いいたします

設定上は

オリ主はMuv・Luvの知識0の状態でMuv・Luvの世界に
……なります

またオリキャラもありですのでご了承を

1話から7話は勢いで書いてしまった…ある意味後悔

8話からはある意味ペースを重視しています

途中ある人物加入後初期プロットは崩壊しています…
が、やっぱり理想の形を目指して頑張ります。

ヒルダさん……「モオ、ド・オ・ニ・モ・トマライ」
と歌っています。

当小説は、各種世界の設定、人物、技術を盗み出し、技術反映、流入させ、BETAに打ち勝とうがコンセプトの二次小説です。らいとすたつふるーる2004を遵守します。

プロローグ

そうそれは、何の些細な違いか… 予定外の力が働いたのか???

.....

side 俺

「いや悪かったね」

へ?ここは..... 俺は、確か..... MY単車の運転してて.....

信号無視してきた赤い自転車に真横から突っ込んで..... 俺死んだの???

「うーむ うんそうじゃ で、そこから記憶ないようじゃの?

そこに事故見学してたわしがいて、わしの方におぬしの体が突っ込んできたんじゃ

予定では死ぬ筈ではなかったのだが、悪かったのう」

へ...?心の声よま「うんよんどるよ」... あゝ はいはい、で... 死神様?に「いや神じゃ」えっと神様に自分の体が突っ込んでいってどうしたのです??

「いやのう、おぬしの体が飛んできたから思わずはたいて..... 潰してしまっただのじゃ... 悪かったのう」

あゝ... まあ理解します、所で相手の方は??

「携帯持ちながら自転車乗ってた女子高生の事じゃの?腰の骨を折る程度の重傷じゃよ」

視界悪い為の信号機だったのにのう」

とりあえず無事だったんですね「予定外のおぬし以外はな」で、神様、復活は「無理じゃ」あ..... はい「じゃがわしのせいでもある

よって第二の人生を別世界によって授けよう」

何で別世界?なら今復活させても「だから無理じゃ おぬしは死んだのじゃ、その因果はもう壊せない で、元世界だとおぬしは別人

になる記憶もの　なので別世界にサービスつけて転生もちろん肉体
つきてとわけじゃ」

はあ……「もちろんそのサービスは、物語の力である」え??まさ
かエヴァとかも?「そうじゃ肉体で再現できるぞ人間Sizeで」
じゃあATフィールドは欲しいよなあ…で各使徒の力とか「うゝむ

ATフィールドは可能じゃの　後はもう少し絞ってくれ」

えゝと……　サキエルのパイルや光線、シャムシエルの飛行と触手
ラミエルの加粒子砲、ガギエルの水中能力、イスラフェルの分裂合
体、サンドルフオンの熱耐性、マトリエルの溶解液、

サハクイエルの宇宙航行能力、イロウルの能力、レリエルの虚数空
間、バルディエルの寄生浸蝕改造能力、ゼルエルの力、アラエルの
…アルミサエルの精神浸蝕だねを遠距離で、

だねゝ「人間やめとるのう…ま、良いじゃろ外見上は渚カオルで再
現したぞ

さてこんなもんじゃるか」あゝまさに戦闘系…ゼロ魔の世界にいつ
たら「可能じゃぞ」え?ゼロ魔の世界に是非お願い致します　原作
の4年程まえあたりで…あ、じゃあ虚無魔法も杖無し可能で「あゝ
わかったわかったほれ　じゃよいかの?ほほう、ハーレ…」神様!
「助平じゃのう…わしとおぬししか居ないのに…ま、じゃ送るぞ」
はい　いつてきます

と、俺は穴に落ちていった……

side out

「助けて……誰か、タケルちゃんを助けて!!」

そう、神の力を歪めた願いがまさに……

第一話 物語の始まり2001年4月22日（前書き）

本人能力の使い方学び始めます

第一話 物語の始まり2001年4月22日

side)俺)

穴を落ちて行くと、気を……

ううん……ここは？

意識を回復しながら目を開くと…… 想像してたハルゲニアの緑美し

い……… 赤土だらけの……え？

「は……？え……？」

……… かれこれ暫くほうけている……

何処だ？ハルゲニアのにこんな赤土だらけあつただらうか??

んゝハルゲニアでなくとも、別大陸かな……んゝゝゝわからん……

別大陸なら人の手が入ってる設定原作にはあんまりなかったし、

赤土だらけ……の平野??んゝゝゝ

わからん………しょうがない、探すしかないか……… 能力もちゃんと

確かめないとな……シヤムの飛行どうだすんだろ??やっぱ此処は叫

ぶのかな??

「シヤムシエル!!」

少し赤面しながら叫ぶと 何と説明すりゃいいんだか、ようわからん体が

「あへゝゝゝ!!」

はい、急に空にロケットスタートしました 体が体が 音速越え

て………どうやって制御すりゃいいんだ!! ……

何となくわかってきたような…… 思考で力を制限するんすね……

さっきは上に飛びたいの一心だったので最大級の力のもと……

幸い自動的にATフィールドを進行方向にはってたみたいで…

「はあ……………」

とそうだなさて此処が何処だか調べないと……………あと宇宙航行能力もあるんだよ…ね…???

ん〜自動なのかな??まあちよつとずつ出れば……………

そういえば高度が高くなると酸素や寒さが…だったよなあ…???

ん…大丈夫みたいだな…多分これも自動的なのかな…?

うっし、行くか……………

「ほ〜…ガガーリン、地球は赤かった……………」えつとまず呼吸については自動的にしてない模様です…で気圧に対しても大丈夫な模様…人間やめてます

が、問題が…確かに地球に似てる大陸図です はい、ハルゲニアがないんですね…

しかもハルゲニアの所が赤いんすよ…緑がないんすよ……………?なんで…?で良く見れば山とかの起伏がないような……………

確かハルゲニアは、ヨーロッパ大陸の辺りに位置してる筈だし、浮遊大陸もあるはず…それがどっこも目をこらしても赤く、またない状態

ん〜…ますますわからなくなってきたなあ

となると ここが地球だとして東の日本目指しますか、じゃあ再突入〜

第一話 物語の始まり2001年4月22日（後書き）

ハルゲニアではなかった模様と自覚しました
まだ人とあつてません

とりあえず日本を目指す模様です

第二話 本人 日本へ向かって 歩きだす（前書き）

歩き 歩き 歩き まずは徒歩で探索をしようと思います

第二話 本人 日本へ向かって 歩きだす

side)俺のまま)

いい加減何か見つけたいなあ……ほんと、何処の世界にほづり込んだんだ？あの神、アフターケア位しやがれつうの！！

ゼ口魔の世界でハーレムウハウハしたかったのに！！
歩いてても歩いてても赤土だらけ、建造物見つからねし……、
やっぱり大気圏外からみた赤は、植物もない土の世界だったんだなあ……

でも、土の世界??んゝ 建造もない世界ってあったかなあ？
何か、山もかなり削られてるように見えるし……

「ん？」 あ、何かあった…… (と拾って見てみる)
「コンクリか?、かなりんゝ破碎されてるみたいだけど……」

(歩いてなかったら、また、たまたま色がついてなかったら見落と
してた位な物)

おっし、文明はあるっう事かな?か……または最悪滅んだ……

え……、ちと心配、……流石にシンジのように、誰も居ない世界で
なんかやだよ……まさかねえ……

でもこのコンクリ片見ると……いや、まさかね

まさか……まさか……まさか……

ちと、ほんと神様やだよ……泣けてくるよ……あ、泣けて……やだよ……気狂いそうだよ……

なんでこんな世界にほつり込むんだよ……まさか世界に一人???

どんな破滅的なんだよ……

ジョセフをぶん殴ろうと思ったのが悪いの？アンとウハウハしようとしたのが悪いの？

ウェールズを見殺しにしようとしたのが悪いの？ルクシャナとウハウハしたいと思ったのが悪かったの??なんなんだよ!!此処はどの世界なんだよ!!

「シヤム シエル!!!!!!」泣きながら叫び、飛行しはじめる……

暫くすると 目に何が見えはじめる

あ、な……… なんか 誰かいるのか?? 誰か……

かなりはつきり見えてきたぞ、えっと 円筒型の……何だ……?あれ

ふと気になって地上におりはじめた、

そう……それがこの世界の異質な物との遭遇であるのに……

本人はまだ知らない……

第二話 本人 日本へ向かって 歩きだす（後書き）

さて、何と遭遇するかはお分かりですよ？
また何をみたかもお分かりですよ？

本人は全くわかっていません

第三話 本人…何と…?? (錯乱注意) (前書き)

何と遭遇するかは……

第三話 本人…何と…?? (錯乱注意)

side俺

はあ良かったあ 文明が何かわからないけどありそうだし… でも、あの円筒型のなんなんだろう…?

と気になりながら着地する……

ん… 何だろ…? とりあえずいく……ん? 何かが…? 何だ?

(ちょうど視線の先の方から何かが こっちの方に来ているようだ)

何かの 生物みたいだなあ…ん…ん…ん!! え…な…

side俺out

”俺”は思考が停止したように動きが止まった

その異質な物が近寄って姿がはつきり見えはじめたからだ
丈は2m程、頭ずんぐりで、大きな口、つぶらな瞳、
そう、この世界で俗にいう兵士級との初遭遇である

side俺

え……あ……な、な、なん、なんなんだよ、 な なんなんだよ

なに こいつ、 なんなんだよ、 なんて こっちに くんだよ、
なんなんだよ、

生き物？ いや 地球の でない、 なんなんだよ

え?? ?? うお!!

(後方にとびのく)

な、な、 こいつ おれをくおう と した？

いや いや いや いやだ いやだ いやだ いやだ いやだ
だ いやだ

いやだ いやだ いやだ いやだ………

ころしてやる ころしてやる ころしてやる ころしてやる ころ
してやる ころしてやる

殺してやる 殺してやる 殺してやる

こいつ 殺す!!!

「パイル!!」

side)俺out)

”俺”の右手がすごい勢いで変形しはじめるのを感じはじめる…
そう、サキエルのパイルバンカーの能力を使って串刺しにしてやる
うと全力で思ったからだ そしてパイルバンカーが完成し…

「うおおおおおおお!!!」グシャ!!!

俺は少しジャンプし、パイルバンカーの先端部分を、やつ頭にあた
るだろう部分にあてると一気に撃ち込んだ

そう、エヴァでさえも貫いたあのパイルバンカーで…まさにオーバ
ーキルであろう

貫く時にやつが血が一面に もちろん俺にもかかるうとしたが、A
Tフィールドを盾にしたためかかる事はなかったが… 血生臭い異

臭が…

「はあ はあ はあ はあ はあ」

肉体的には疲れはない、が精神的にかなりの疲れを感じた

「はあ はあ はあ はあ…うゝ ウゝエ」

何も食べてはないのに、胃酸が逆流する感じがでて戻し、いや、嘔吐してはない

人間を捨てながらも人間である感情…それが嘔吐する幻覚というだろうか…を呼びおこしていた

そう、俺はかなりまいってしまった

特に、人類が生存しているから、否定、で、会った異質なものにいきなり喰われかけ、

そのまま勢いのまま貫き、貫いた瞬間の感触等

神にいじって貰ったとはいえ、元はただの現実世界の住民であるいきなり戦えた事でさえ奇跡であるだろう

暫くは立ち直れそうにもなかった

が時間は待つことを知らない…世界は非情である

第三話 本人…何と…?? (錯乱注意) (後書き)

初戦闘を経験しました

精神力に50pのダメージをくらいました

第四話 一匹の何かと遭遇後（前書き）

時はまたない…

第四話 一匹の何かと遭遇後

「ひいひい！！」

そう、”俺”は情けない事に悲鳴をあげていた…力があるにも関わらず

そりゃ、で精神的にまいってしまった状態で息つく暇もないのに異凝なものが現れ沢山近寄ってきたからである

まずは先程貫いた異凝な物 これまた複数

で先程のとは違い鼻？だろうな 象の様な長い鼻をもち二本、また複数の目…大きさは先程のよりかは一回りでかいやつ

また六本足（錯乱していてこの時点ではそう思い込んでます）の更にでかいやつ 勿論口は 噛まれたらひとのみだろ…

のが

わら わら わら わらわら わら わら わら

わら わら わら わら わら わら わら わら

わら わら わら わら わら わら わら わら

わら わら わら わら わら わら わら

とあらわれ、近寄りはじめたからである

「い、い、い、いや いや いや いやあああああああ！！」

数にして 5？ 6？ 7？ 0 いや どんどん増えてくる…

俺一人に対してだよ……流石に錯乱し、混乱してる状態では対応す

らできない……

そう このまま喰われるだろう……

おい、いいのか”俺”喰われて終わるぞ……

「いやあああ」

… いつまで混乱 してるんだよ 物語ここで終わるぞ……

そうこうしてるうちに、近寄ってきて……

〽Fin〽

にさせるかあ！

「ウゝオオオオオ」

”俺”は体が巨大化しました元が使徒の力ですからね…錯乱し暴走
というか…

少し記憶あります 思い起こすだけで、ウゝエ 吐き気が…

はい、異凝なやつらをく、う づぶ くい う 喰いました

……

”俺” がですよ？ ご都合主義でも… なんであんなのを 喰わ
なきゃ いけないんですか??

体がいきなりぼこりと膨れあがって、16m位になったのかな？

最初の異凝なやつが手に掴んで口に う づぶ
ほうり込んだので

で かみ砕いて、 うゝ うええ 泣けてくるよ……
で、 でっかいのを 掴んでヒキチギツテ、口のなかに……で……
すみませんこの辺りまでしか覚えてないです

気がついた時には、大気圏外に居ましたので……

はい、真っ先に吐きたかったですけどもう戻りません

大きさは元に戻ってるのは大気圏内に戻ったさいに
やつに出会って確認しました

はい… そっこう

「シヤムシエル!!!!」逃げました

二度と喰いたくないですから!!!!!!
神の馬鹿野郎!!!!

第四話 一匹の何かと遭遇後（後書き）

”俺”は、食べる事を覚えました

暴走モードを覚え??ました

第五話 何かを何した後…2001年5月だろうか？（前書き）

”俺”は喰った事を非常に後悔しています

第五話 何かを何した後…2001年5月だろうか？

もう喰いたくない……………

その一心でまずは能力の再確認しなきゃと…、

side〜俺〜

「はああ……………」

猛烈に後悔、なんであそこで この力使わなかったんだろう……………？

そしたら喰わ う うぶ

あの生肉と いや やめよ

ひたすら能力を考えよう

諸行無常の響きあり……………

まあ一匹ずつ釣ってきて

あ、虚無空間は楽だなあ……………ほური込んで全力ではなれて安全地帯でだして試せるんだもん

とまずはパイルバンカー、

まだ貫く時の感触がイマイチやだけど…

ん〜貫けないの無いんじゃないのかな？？右手、左手両方ともなる

し、ただ建造物がなあ……………まだ試してないからなんともいえないが…

まああんまり接近しなくとも撃ち込めるのは良いなあ

目測5km位までは伸びるけど、精度かな？問題は…

次に光線…カんで〜「光子力ビーム!!!」

少し溜めロスだが…これ使えば広域排除できるだろ

というか使ってれば……orz
が掛け声なければ威力おちるし……ん
「サキエルよりか光子力ビームと唱えた方が威力強い何故?」
無発生連射も可能だが威力もおちるみたいだし……

さて 次に触手 これも両方の手が変化 し……一種のブレードだな
あ……回転すりゃあ……
輪切りが大量に生まれそうだなあ

飛行はもう慣れたから良いや

加粒子砲……「ラミエル!」ん……しょっと 右手が変化して な
んか溜めが長いんだよなあ
まあでもたまやーだが 溜めで本来より弱体化してないかなあ……??
お、溜まったか
掛け声はっと……「狙い撃つぜ……デットエンドシュート!!」
ふう スッキリ
でもこれ以外あんまりしっくりこないのは何故なんだろう??

さてっと 水中はいいや、

分身 ん…… (「メリメリ バリ!!」)
「よう、俺」「よう」「まだ分かれる時が少し気持ち悪いんだ
よなあ」「だなあ」「してこの後……」……

話が長引いた模様だ

「合体……」 (「ググググ パシ!!」) 最後の擬音はな
んだらう?

さてと 溶解液はまあ使えるなあ 本物よりかよくなってないかな

?これ…

にほいも出ないし、溶かしてる物のにほいもしないし…
後はどういったものが溶けるかだよなあ…

あとはイロウルとアルミサエルは 使えないから後…
イロウルはコンピューターがないからいらないこだろ
ゼロ魔の世界にいつても…だろうなあ…
アルミサエルは…人が居ない事にはどうしようもないし…

バルディエルか…んんん使えたら困にできそうだが…飼っている間
食事はどうすんだろ??

とつかやつら食べ物食い尽くしてどう生活してるのだから…??
まあ…やつらには使いたくはないなあ…

俺みたく体内にS2機関もって まあ…腹減った感を感じるが、
肉体的にはもつとは別そうだからなあ…

飼ったら飼ったらで餌に苦労しそうだし…あとはゼルエルの力が…
?? こればっかりは力試ししなきゃわからないが…
そういえば接近戦闘って、

パイルバンカー撃ち込んだ一回だけで、あとはひたすら掻っ攫って
遠距離から撃ち込むだけだしなあ……………
力試ししなきゃ駄目か???

いやいややめとこ やつら気持ち悪いし……………

そういえば巨大化ってどうやるんだったっかなあ??
今だにできないし…んんん

できれば足で踏み潰す事もできそうなのになあ…まあできないねだ

りはしょうがない
うん 能力の再確認はこんなものか…

しかし…ほんと、人類いない世界って…なんなんだろ

どうするの???

俺……

はぁ……

ん?? 爆発音??? え? あだだれ かいるん?? 「シ
ヤムシエル!!!」

side)俺out)

そう”俺”は叫ぶと爆発音の聞こえた方向に向かい 飛び出して
いった……

第五話 何かを何した後…2001年5月だろうか？（後書き）

さて…その先は？

第六話 この世界の何かと……

side??????

「ちくしょー！だから無理だったんだー！」
愚痴を叫んでた

BETAに迫られ仲間はどんどん減る
ふざけんな 援軍くるまで生き延びろ??
こんな戦力のできる訳無いだろー！

「た たすけてくれー！」

ほら今また誰かの声がながれた 確かついこの間はいったばっかの
新人の……

『うわああああ ザツー！』

サジタリウス42のマークが消えた 多分やつだろう

残機何機だ？ くっそー！ 15 いや14に減ったか しか
いねーじゃねーか

そう俺はハイブ間引き作戦のB 1部隊にいた いたが… 「く
そつたれー！」全滅だろー！これは…
いつのまにか こっちの担当は俺の部隊とお隣りさんの部隊しかい
ない

まだ補給物資のコンテナはあるものの、それを護らざるえなくなっ

ている

いや…護らないとすぐにやられちゃう

護ってもやられちゃう

逃げだそうにも辺りBETAだらけ

NOEで離脱しようにも光線級がまだかたついてない

引き際を絶対間違えた隊長はあの世に既にいつてる

『なあ　タリス　どうすんだよこれ』　通信がながれた

古参の外人衛士だ…確かやつは朝鮮半島撤退作戦をいき…

『おい！！　俺ら　みすてら』

『ばかやろう！！CPが援軍いれるつたる！！』

通信が割り込んできた…がそのCP自体が反応しなくなってどの位たつのか…

現状いつかくる援軍がくるのを耐え忍ぶしかない…

弾薬はコンテナに沢山、元々1個連隊規模の補給用によっいされていたから

まだ沢山ある…

何処で間違えたのだろうか？

いつもの間引き作戦だったはず

だったはずで　いつものようにちよっかいをかけ、たはよいが…

予想を超えたBETAがでてきやがった

本来司令部がいる場所は既にBETAに占領されている

俺らの部隊はとりあえず補給コンテナのある地点までは　撤退でき

た できたが…である

そうついた時には既に囲まれていた

何故？といいたい

耐えきれなくなったのだろうか？

消えたマーカー、サジタリウス11が多分光線級に飛び上がった所をやられたみたいだ。爆発音が聞こえ衝撃波もきた
後方をまもってたやつだ

「くそ！！」

ますますBETAの圧力が強くなってくる

またマーカーが一つ減る、そしてまた一つ

無線からは断末魔の声しか聞こえない…さっき愚痴ってた僚機はとつくにいった模様だ

「ダア…… すまない 生まれてくる息子の顔 みれなかったな

……」

俺は トリガーを引きながら あきらめていた…

すると、横からの衝撃で機体がひしゃげ飛ばされたようだ

声はもうでない……

僚機はまだ何機かは

戦っているようだ……

網膜投影越しに、なにかがうつった あれ は???が最後の

いしきに…

side???end

”俺”は急いでいた　そう爆発音が聞こえた方向にむかって　飛んでいた

そうすると……

「げ……」

やつらだと思っかなり巨大なのが見えてきた　40m程か…　それ以外も20m程のとか…それも大量に…

が爆発音はやつらの先の方向の筈　無視して飛びつづけようとする
ATフィールドが展開した　やつらの集団の中から光線みたいなものを撃ってきたからだ

最初は一発だったのが、今は何十発…

音速近くで飛んでるのに正確に当てやがる…

うざくなってきた……

爆発音の方角から黒煙がのぼっている　それも十何本も…

そろそろ何かが見えてきてもよいが……

「あれは？ロボット?!?!」

やつらとロボットが戦っているようだ

機械生命体なのだろうか…　いや　モビルスーツ???

とにかくあのロボットを救助した方が良さそうだと気がついた

やつらの圧力でまたひとつロボットが見えなくなったからだ
残り5体…いや4体

「く、間に合うか?？」

音速突破し、ロボットに向かった

マニアアワナカッタ……

そう最後の一体と思われるロボットが目のまえで上半身と下半身が
分断された

いや下半身にやつらが手だともうが、あて下半身が無理矢理潰さ
れ勢いでとれたとっていいだろう…

「く!!しょうがない!!」 そう叫ぶと、そのロボットの上半身
を虚無空間にほつり込み、一目散にこの場を離脱した…

流石にこの巨大な集団あいてにやる気はおきない…

大分離れただろうか?

虚無空間からさっきのロボットを引っ張りだしてみた

(はあ もう大丈夫だろうなあ… にしてもこのロボット… な
んだろう?)

(モビルスーツ??機械生命体??)

(モバイルスーツならハッチがあるとおもぅが………)

(あ、あつた!!)

ま、まさか人が???)

「ブレード!!」 シラムシエルの触手による高周波ブレードに右手を変化させた

ハッチなら中に人がいる… その一心でなれない切断作業にはいったこのブレードも切りすぎて中にいる人を傷つけないように で一苦労している

早く早くの心が焦りをよぶ… が深く入れすぎると殺しちゃう… から余計に焦りがでる

かれこれ二分位か? ハッチ部分が切断できた

ハッチ部分を殴り飛ばす

駆け上がり中を覗きこんだ

(ひ、人がいる!!)

目をつむっているから気絶しているのだろう

「大丈夫ですか?」 言葉が通じるかわからないが 声かけた 反応なし

とりあえず横にしようとして丁寧にわきに手をいれ 引き上げた…

上半身だけ………

「ウゲエー」

”俺”は気持ち悪さから吐きたかった

人の死体みるのも初めてなのだ…

腸がでろんとたれ、血は流れきったあとだろうか……

「はあはあはあ………」

なんとか落ち着いてきた

モビルスーツらしきのをすこし調べると分断されたときにひしゃげてパイロットの下半身が潰され切断…したのだろう

あんまり中は気持ち悪いのでしらべなかった…

状況を少し整理しよう…

まずはモビルスーツらしきものと、やつらは戦っていた

人は全滅はしてなさそう いや、やつらの方が強そうに見える…

とりあえず人がいるのは確定したからこのモビルスーツらしきものの軍隊を探さないと…

は………日本は???

そう考えたら行動しなくっては…

とりあえず死体をすこし切れてない部分をしらべ認識標らしいタグをみつけた

かかれていますのがわからない……orz

あとは 写真？

この人と娘さん？奥さん？ 三人の写真だ…

届けられれば良いな…

タグとセットにして虚無空間内の小物いれにいれておいた

パイルバンカーで穴を掘り、死体を埋め土を被せ、墓標……

このモバイルスーツらしきものの銃を手から引っぺがして墓標にたてた

そこまで作業し、お祈りしたあと

「シャムシエル!!」

一路東へ飛んでいった…

第六話 この世界の何かと……（後書き）

本人 やつと人類…死体と遭遇できました…

第七話”俺”はマヨツテイル

(え〜と…………どこだ…………orz)

とりあえず海岸についたが… 正直自信がない……

そう迷子である…

(こんなことなら世界地理もつとやつとくべきだった……)

いや世界地理だけでないだろう

エスカレーター式の三流学校で最低限赤点をとらなきゃいいやで
中高時代は昼寝ですごし、今年そのまま大学に入る予定だった…

(確かまっすぐ東目指したから中国だろ、で朝鮮半島から渡る予定
だったけど……)

何しろ人がいない、都市がないのである
海岸線までくると廃墟はみつけられるが……

(たしか北京の下に南京があつてで更に南にベトナムだっけ？ 北
京の上に上海で、上海から右側が朝鮮半島だよな??)
そう ツッコミありがとうレベルなのである

まあ 人がいても”俺”に現地の言葉が話せないわけだが……

また廃墟でもう看板すらみつけられない……

(ん〜海岸沿いにとりあえず北?で釜山から南東目指せば日本だろ

うし…)

そう”俺”正解だ!!

(あつれ〜でも南かなあ?)

駄目だろ!! 寒くないだろ ロシアでないんだし!!

(ん〜〜〜とりあえず北??いくか)

ととりあえず”俺”は海岸沿いを北へ飛んでった

s i d e ~ 俺 ~

しかし…この世界の地形もやつらがやったのかな…
邪魔な起伏や建造物は削って…

まだいった事のないチベットやらも多分がりがり削られて…
平野や丘ばかりでほんと… 迷うよ…

しかし…本場の、中華料理…たべたかったのに…
たべれなかったか…

s i d e ~ 俺 e n d ~

かなり落ち込みながら北上す…

落ち込むとスピードが落ちるんだからモチベーションたもてよ”俺”

で…そのまま海岸沿いに北上していると右手に段々曲がりはじめ
川 があり、で海岸線が南東方向に向き始める

(ん……朝鮮半島かな? このまま進めば韓国で…突き当たり左で
釜山だよな?)

(あとちよいで日本だけど……まさかだよな？
でもあの東洋人だからどっかの国は絶対残っている筈だし……)

考えながら朝鮮半島を南下する……

そして突き当たりとみられる海岸沿いから西進……
釜山あたりに到着

(ん〜ここ釜山かな??)

若干廃墟が残っている状態である

(若干疲れたけどあと少しで日本だな……東洋人と遭遇した後、不眠不休で飛んできたので、若干疲労感が出てる

が……今は夜明け前 陸地も目標となる太陽もでてないので迷う恐れもある

(ん〜角だからとりあえず南東にいけば日本なんだよな……多分こっちだけど……朝日がでるまでまつか……
やすめそんな場所探すかなあ……)

探してみると……

「あ……」 モビルスーツらしきものの残骸がみえる
撃沈して少したつのだろうか？所々塗装がはげかかっている

(そういえば……まだこの世界のモビルスーツ調べてなかったよなあ……死体なきや良いけど……)

コクピット部分が見当たらない

(…ん?と あゝ足が潰れて機動できなくなって脱出したのかな???)

コクピットごと脱出するシステムなのか……)

側にでつかいビルが倒壊した後がみえる

辛うじて避けたは良いが…なのだろう

(うつし、調査調査)

喜んで調べ始めた

(へえ日本帝国?? 撃震っていうんかあ…)

「イロウル」 ハッキングし始めた… だがcpuが見当たらない…

(コクピット部分に搭載されてたか…orz)

(んんん魔改造???)

「バルディエル!!」浸蝕し始めた

まずCPUと直結してそんな駆動部分及び、動力部を変化させ、生体駆動+S2機関をいれた

そうミニエヴァ(”俺”)外見撃震仕様である

コクピット部分は正直迷ったがLCLを作れないから、エヴァ仕様にはできないので
手をつけれない…

ここは現物まちな?と思い 改造は後ほど…

足の部分は まだ生えさせないのでこれも後ほど…

外装は塗装がはげかかっていたので変化させ、
とりあえずカラーリングを赤にした

（武装か…んゝ長刀みたいなのしかないなあ…
しかも刃がすこしかけきみ？）

これは変えなきゃ

が…知識がないのに気がつき……orz
とりあえず修復のみにとどまった

（材質強化でも良いんだけどビームアックスなど欲しいよなあ……）

（あと弄れそうなのは…？）

「ふう…とりあえずここまでかな？」

で虚無空間のお気に入りを持ち込んだ

その後

（他にもないかなあゝ）と搜索し始めた…

で気がついたら夕方だったためかなり焦りながら方角確かめて日本
を目指したのはいうまでもないことだった……

自重しろ！！”俺”

第七話”俺”はマヨツテイル（後書き）

ちていよいよ日本に……？？

第八話 いよいよ日本???

投稿日20101211 (前書き)

日本上空は 必死に急いでます… 時間ほうけて夢中になってた
のでね

第八話 いよいよ日本??

投稿日20101211

俺は猛烈に凹んだ…

(なんで??なんで?? 日本だよな?ここ……)

福岡ドームは?? 中洲の可愛いねーちゃんは??

九州の豚骨ラーメンは??

なんで???)

日暮れると同時に日本と思われる大地になんとかついた

が、光もない 調べようにもわからない状態のため

一晩動かず休んで 朝になって調べ

福岡空港の残骸らしきを見つけ冒頭に部分の状態になった…

side)俺)

ひ、人は…… どこなん??

福岡がこんな調子だと…… 日本は……

でも、あの戦っていたモバイルスーツの所属の国は確実にあるんでしょ???

で、日本帝国はある筈なんだよね?釜山でみたし……

それともまさか滅んだ???

けど、確かガン〇レだと 九州は幻獣に占拠され…岩国で徹底抗戦した筈だよな??

北は本州と北海道を分断目的で、青森辺りが戦場になった筈……

となると…北海道は無事かな??

うっし とりあえず北海道目指すか…

この調子だと…大阪や東京もやばいかなあ……

side～俺ends～

＝ 関門海峡上空 ＝

(ん～やっぱり下関も駄目か……河豚料理が消えたか… 玄海灘産の味が……)

(と…北回りで行くか…松江のしじみ無事であってくれよ…)

＝ 松江 ＝

(orz……しじみ汁があ～～)……はあ……

現世の時スタンプ位置ゲーしてた旅館も廃墟になってるし…

あん時の料理おいしかったのになあ……

しかも天然温泉付きで、5千円で泊まれたのに…)

(このまま温泉街も駄目かな??この先で丁度鉄橋架け替えの為、
ダイヤみたら駄目だったから折り返したんだよなあ……)

〓 〓 餘部 〓 〓

(……………余部鉄橋が……………旧鉄橋が残ってる!!)

”俺”は感動した

現世ではすでに建て替えられて新型鉄橋になってた為だ…

起伏にとんだ地形がかなり残っていたためにやつらの進行ルートか
ら外れたのだろう…

思わずアーチくぐりそのまま上昇、またアーチくぐり
どっかのシュミレーターの如く遊びにほうけた

ただ… やはり人の保守の手がはなれたためか、鉄橋はかなり錆が
つき、

満載貨物列車が通る際には倒壊の恐れがあるだろう

(残念だなあ…人が残っていれば……………)

そのまま東進……………する…

〓 〓 丹後半島北端 〓 〓

(ここまでやっぱり人いなかったなあ……………
北海道には人が居るんだ!!スキノ行くぞ!!
札幌みそラーメン食べるぞ!!)

……食べる事ばっか考えてるが、
この世界の通貨もたず食い逃げする気か？”俺”は……

(と……この北端から海上を東に進むと……)

確か現世では原子力発電所、で福井県の確か南越前町だったよな？
で……そのまま北に進めば、福井市内で、その先に金沢、能登半島横
断で、富山つと……
青春18切符でスタンプ旅行いったとき、ゴーゴーカレーおいしか
つたなあ……あるといいな……)

(あ、と……福井は確かすこし内陸部だから……迷いそうだなあ……海岸
沿いにすすんで金沢かな？)

「若狭湾横断後北上、小松基地小松飛行場上空」

(はあ……ここも駄目か……)

廃墟の小松基地…… がモバイルスーツらしきの残骸もない……

(んゝ人の手で引き上げられた感じはするなあ……痕跡はありそう……
となると北海道か……急ぐか！……)

「金沢」

建物は比較残っているが人の気配がしない……

(こっから能登鉄道にのってスタンプ奥能登とりにいったなあ……
かにみそゼリー……無くなっただか……)

と、確か北陸本線沿いにすすめば富山か……)

幸いに線路はこっちのほうはのこってる状態である

(途中確か県境でトンネルあったなあそこで迷わなければ大丈夫か)

「富山」

金沢と同様 建物は残っているが人がいない

(ん〜どこまで避難したんだが……………)

けどここら辺は人が戻れば復興は早そうだなあ…)

「新潟県」

(!!!!!!あ、あれは!)

前方に見える島は佐渡島… そこにやつらの巣がみえる そう…円筒型の物体が…

(そうか、だから富山や金沢は避難したのか…そりゃ…北海道が首都だとしたら 佐渡島にやつらの巣があったら分断されるからな…)

(ん〜県内側に進んで北上のが無難か…)

内陸部側にはいり迂回しながら…………

(爆発音!?!?まさか…………今度こそは!!!!)

気合いをいれ爆発音に向かう

side??????

『ヴァルキリー7 フォックス1!!』

『ヴァルキリー8 フォックス1!!』

『ヴァルキリー9 フォックス1!!』

ババババババババババババババババシユ！！
制圧支援の3機より、92式のミサイルが撃ちだされる

ドドドドドドドドドドドドドドドド！ 全弾命中 最前列の突撃級に直撃
撃 粉碎する 突撃級の後ろに控えているBETAがつまる…

弾装 交換中

そう、接敵視認し遠距離攻撃を食らわせたところだった

2001年5月9日 旅団規模のBETAが新潟上陸
編成中だった帝国軍第13師団は奇襲の形で半壊

補う形で第15師団が増援にくるも 既に突破されてた約1000
辺りのBETA群がそのまま横浜方面に向かいだし、今回増援要請
に応じたA-01の相手だ
後詰めで厚木からの部隊も駆け付ける予定である

92式ミサイルの命中を9回程繰り返すと、
レンジが縮まってきた

- 『ヴァルキリー1 フォックス2！！』
- 『ヴァルキリー2 フォックス2！！』
- 『ヴァルキリー3 フォックス2！！』
- 『ヴァルキリー4 フォックス2！！』
- 『ヴァルキリー5 フォックス2！！』
- 『ヴァルキリー6 フォックス2！！』

一斉に120mmの火がふく

今回 A - 01 は初出撃の 00 年度組が居るため、完全な射撃制圧によるリスク減の形をとるようだ
幸い最大の脅威となる光線級は見えてない

突撃級は足止めとして使われ BETA 群の進軍速度は落ちている
事は落ちてている

なを今回の編成は

ヴァルキリー 1 迎撃後衛
ヴァルキリー 2 突撃前衛
ヴァルキリー 3 強襲前衛
ヴァルキリー 4 強襲掃討
ヴァルキリー 5 突撃前衛
ヴァルキリー 6 迎撃後衛
ヴァルキリー 7 制圧支援
ヴァルキリー 8 制圧支援
ヴァルキリー 9 制圧支援
の前衛 3 後衛 3 支援 3 の 9 機編成である

『ヴァルキリー 1 フォックス 3!!』

が流れるとともに 36mm が火を吹きはじめた
それまで 120mm 撃つてた他機も順次 36mm に切替火を吹き始める

(今回は死の 8 分は大丈夫だろうか?)
そうヴァルキリー 1 の頭によぎる

順調に BETA の数が減る

暫く殲滅戦かな? とふと頭が過ぎった時破綻が訪れた

光線級の視認

最優先で始末しなければならぬBETAが出たからだ

通信で警告すると、ヴァルキリー7、8、9から順次頭ごしに92式が放たれる

そして 『キヤアアアアー!!』

『ヴァルキリー9!!』

すこし外側に出てしまったヴァルキリー9に何かがおこったようだ

side ヽヴァルキリー8ヽ

『キヤアアアアー!!』

『ヴァルキリー9!!』

(おぐ!?!?!?)

そう一瞬で思うと体が無条件に彼女を探し出す

彼女の機体は戦車級にたかられていた…

「おぐ!!」

そう私は叫ぶと92式をパージし彼女の元へ急いだ

(やだ!やだ!やだ!)

『私もいく!なんとか振りほどいて堪えろ!!ヴァルキリー4穴頼む!!』

いつも一緒にいた生活…それが崩れる…先がみえない

自分の半身である彼女を失いたくない
しかし

『どうも駄目みたい…ゴメンねイッチー』

『あきらめるんじゃない！ヴァルキリー隊規忘れるな！…』

しかし…装甲を食い破ったのだろっ…戦車級が入ろうとしてる
ようすがみえる

マニア ワナイ

(やだやだやだやだやだ誰かおぐ 助けてー！ー！！)

その瞬間

上空から何かが連続してふってきて戦車級の貫いた

コクピットの中に入ろうとした戦車級の動きが止まり またコクピ
ット回り、機体にたかったた戦車級が次々と落ちる

(え??何???)

なにかがヴァルキリー9の機体の前方にきた……

(天使???)

そう ありえない事にそれは 飛んでいた…しかも人であった…

第八話 いよいよ日本？？

投稿日20101211（後書き）

さあ… この後のA 01 は…??

注釈 途中の日本散策読んで頂きありがとうございます

まあ位置ゲーで巡った時のネタを少しいれちゃいましたf^_^ ;
あと小松基地や金沢富山辺りはどうなってるのか調べてみたので
が…なかったので、
佐渡島にハイブがあるいじょう 京都の後方とはいえ、十分に戦闘
地域にあたるな…
で直接被害はないものの、疎開の形をとらせてもらいました

山で進行ルートに当たらず…で

第九話 生きている人類と…… 投稿日201212121212 (前書き)

たあしよしよ……

第九話 生きている人類と……

投稿日20121212

side)俺)

(こっちの方か?)

(この間は助けられなかったが…このチートで絶対助けてやる!!)

戦場が見えはじめた

(やつらの集団は比較的大が多めの…800位…)

(モビルスーツは…9か…)

(チッ!!) ATフィールドが展開 この間よりは本数がすくなく段々と増えて…15本程度だ
うち一本は出力が少し高めのように感じた

(見えた!!モビルスーツは…9か…かなり劣勢??もてよーもてよー)

モビルスーツの集団に近寄る

その時 うち一機の様子が変に感じた
まだ遠距離だから詳しくわからない

(ん?やばそうだ間に合うか??) 一気に音速突破

じりじりと時間が過ぎる

体感上は一分いじょうにも感じる 焦ると時間が長く感じる……

（見えた！！やばいか！！）そう思った瞬間無声光線を連発

無声光線ならやつらの体内まででそれ以上貫く事はないのを確認してるから かなりの速度で連発しながら近寄る

CIWSのチート版と思って貰えば良いとは思う が実際問題精度はリーダー付きの自動制御には勝てない
しかも有効範囲は、視界範囲内だけだし……

まずは最初の数発は中に乗り込もうとしたやつに当てた

活動停止を確認……

でその開構部回りにたかってたやつらにあて 機体から落ちるのを確認……

更に機体にたかってたやつらに次々あて そして範囲を若干広げたところで

そのモバイルスーツの前に到着した

仲間のモバイルスーツもこっちに急いでたのを視界の隅で確認していた
中にはいりこもうとしていたやつらの死骸をほうりなげる

中を覗きこみながら

「大丈夫ですか？」と声をかけようとした……

side～俺end～

side～ヴァルキリー8少し戻る～

『な…何??』 おぐからほうけた通信が流れる

『無事か!?!』 『どうなってる??』 『状況おしえて下さい』 無事なんですか??』

おぐの機体の天使は、中に入りこもつとした戦車級の死骸??を掴んでほうり投げた!!

(え???)

『ヒイイ』

『おぐ!!』

緊張がはしった

その天使が中に入ろうとして……

『パンパンパン!!』 『フリーにしたと思う通信から……

side～ヴァルキリー8end～

side～ヴァルキリー9少し戻る～

『な…何??』

(い…きなりどう…って…の?目のま…のBETAい…なりび…んと…って…かなくな…った…ど…た…たす…か…た?)

《注 精神が弱くなってそういつた思考になってます》

『無事か!?!』 『どうなってる??』 『状況おしえて下さい』 無

事なんですか……？』

（あ……あ……あ……た……し……）

涙は既に流れきったって……もう流れない

あ……あ……鼻水もだらし無くたれ……涎もで……かなり恐怖の思いがして
たみたい……

あ……勿論………下の方も………やだ………

わたしも……恐怖になると………いやこれ以上恥はかけません

いきなり光が射した

私を食って命をとろうとした戦車級が、

いきなり多分強い力でだろっ外に持ってかれた

「ヒィィ」

また恐怖の時間がおとずれた……

（いや……いや……いや……いや）

手探りで武器になるものを無意識に探していた

パニックになり、ペイルアウト後に使う携帯銃の置場も忘却してしま
まった位………

けど、彼女の無意識の努力がみのり 手が銃に触れた

彼女は銃を手繰りよせ 落ち着いて銃を構え……

（死力を尽くして任務にあたれ

生ある限り最善を尽くせ

けして犬死にするな）

そうBETAが見えた瞬間彼女は発砲した

視界は怖く怖く怖く怖く、もう目をあけられなくとも……

side〜ヴァルキリー9end〜

side〜俺〜

「大丈夫で……」

パンパンパンパン！！

ATフィールドが自動展開し弾を止める

パンパンパンパンパンパン カチツカチツカチツ

目の前の女は 多分恐怖だろうか……

穴という穴から体液を垂れ流しながら目をひっしにつむり、銃が弾
ぎれにもなってるにも関わらず

トリガーをひいていた

カチツカチツカチツカチツ

俺はしずかに近寄ると 「もう大丈夫だから」と声かけながら手を

女性の銃を握っている手にそえる……

女性がびくつとして目をいきなり目をまんと驚いたようにあける

(綺麗な目だな………)

「もう大丈夫だから……」そう 女性の手の指を一本一本銃から離さ
せて 銃を床にもってゆく……

「あ…… あ あ あ あー！！」女性の目から涙が出はじめる
鼻からも体液がさらに……

よっぽど怖い思いをしたのだろう…

「もう大丈夫だから…もう大丈夫だから…」

少し抱き寄せて髪を撫でる……

10秒位そのままにした…

(怖い思いしたんだろうな…が戦力としてはもう使えないか…他にもやばい機体あると思うし…)

そして「ごめん、少し回りかたずけるからさ…少し避難しててな

…」

撫でながら体を離させ コクピット部分から出よとする

「え……？あ？…」

ほうけていたのを最後にみてコクピットからでた時に… 彼女の機体毎虚無空間に入れ込んだ

side～俺end～

side～ヴァルキリー8少し戻り～

『パンパンパンパンパンパン カチツカチツカチツ』緊張がはしる

(何？何があつたの？)

36mmを撃ちながら彼女の機体に近寄ろうとする

ヴァルキリー3の先任も74式長刀を使いながらくるがまだ距離が少しある

他の隊機は 今のBETAの圧力対応におわれている

『もう大丈夫だから…』通信が流れた

(????あ……)

ヴァルキリー9のマイクが拾ったのだろう

(天使の声??)心地好い男性の声……

『もう大丈夫だから……もう大丈夫だから……』

『ヴァルキリー3戻るぞ、ヴァルキリー8、ヴァルキリー9のフォ
ローしろ』

「了解!!」

(もう大丈夫だから……が二回目に流れた瞬間、先任は対応を私にま
かせてくれた、

あのこは……天使?)

(けどおぐはまだ動いてない……あたしが守らなきゃ)

『ごめん、少し回りがたずけるからさ……少し避難しててな……』

『え……?あ?……』

そう流れた瞬間……悪夢が訪れた おぐの機体が……消えた一瞬で……

……

「オゲーー!!」

あたしが馬鹿だった

あたしが馬鹿だった

あたしが馬鹿だった

あたしが馬鹿だった

あたしが馬鹿だった

あたしが馬鹿だった

あたしが馬鹿だった

あたしが馬鹿だった

あたしが馬鹿だった

あたしが馬鹿だった

あたしが馬鹿だった

あたしが馬鹿だった

このやろつ!! その悪魔に向かって突撃した!!
36mmフルオート!がその悪魔め空中に変な模様がでた
きいてる筈

120mmも混ぜて撃つ

BETA? 少し関係ない!!

「ああああああああああああああ!!!!」

悪魔がなんか叫んでるが関係ない!!

悪魔め 殺してやる!!!

抜刀!!

短刀で殺してやる!!

あと少し!!!!

いきなり目の前が……

side〜ヴァルキリー8end〜

side〜俺すこし前〜

(やば なんか俺間違えた??)

女性の仲間からみられる機体からいきなり発砲を受けた
ATフィールドが展開する

「ちよつと待つて!!!!」

その機体の銃から更に射撃がくる

「まてつてんだろ!!!!」

その機体はこっちに突撃しようとしている

「まてつてんだろ！このわからずや！！くそつ！」その機体に飛び掛かるうとしたやつらに向かい 無声光線、少し大きめなやつには「パイル！」変化を急がして撃ちこんだ

その機体はナイフだろうか？抜いて

「だあー！わからずやー！」

とりあえず落ち着かせようとその機体を虚無空間に

さっきの機体の真つ正面に位置固定物理力制限でおいた

side～俺end～

side～??～

(え？そんな)

『あああああああああああああああ！！！！』

ヴァルキリー8の流れると

ヴァルキリー9のマークがロストしていた…

「ヴァ… ヴァルキリー9 応答して下さい」

『え？9？』

『まさか！！！？？』

「ヴァルキリー9！！」

(確かに装甲は食い破られてたけど… いきなりロストは… ……
え?)

「ヴァルキリー8！！！！」

ヴァルキリー8も信号ロスト

(なにになになに？なにが起こってるの???)

「ヴァルキリー8！！！！」

『8も!??』

『イヤアアア』

「ヴァルキリー8!!」その瞬間…

いきなりズレた位置で信号復活確認

『こちらヴァルキリー8…』

side??end

sideヴァルキリー8

「こちらヴァルキリー8…」

『え?なに?』

『どうなってるの?』

「こちらヴァルキリー8 ヴァルキリーマムどうぞ…」

『は、はいこちらヴァルキリーマム』遥先任の声 flowed

「ヴァルキリー9確認しました 生きてます」『え??』

その瞬間 機体の制御が効かなくなった

「え……あ……こ、こちらヴァル!!」

「はいちよつと機体使わしてね」

あの悪魔が…コクピットないにいきなり……あらわれた…
ハッチがしまってるのにも関わらず…

「あ…き…き」

「はいまず通信つかうよ」 あゝあゝテストスやつらあの生物ぬ
ところすの協力しますよ」

おぐ「ねえ作者さん」

作者「ん？」

おぐ「あたしの純潔かえしてよ……なんであんな描写を……」

作者「あゝストーリー上な……それにおま……」

おぐ「かもーん」

作者「な……なんでここで36mm構えた不知火君が……？」

おぐ「辞世の句は……？」

作者「ち……ちよつとまて……今ここでだと……死亡フラグだすぞ……」

おぐ「どーせ、エログロになんてしょ？ならいまここで、あ、俺”さんが何とかしてくれるわよ
じゃーね」

手を前に振り合図

バラララララララ！！

作者 チーン

第十話 遭遇後 投稿日20101213 (前書き)

サブタイトルうまく浮かばない……

戦闘に介入!!

第十話 遭遇後 投稿日20101213

side)俺)

突撃してきた機体を 少したってから安全そうにみえる場所に出した

その機体を使って介入しようとしたからだ

「イロウル!!」

機体と同化した…

(ん??なんじゃこのosは…はあ?一回決定したらそれが終わるまで止まらない??糞じゃん!!)

ついでにかえとくか…とcpuも強化か…「バルディエル!!」さてと…)

ぬつとコクピット内に 勿論機体との同化は切らずに…

「え…あ…こ、こちらヴァル!!」

「はいちよつと機体使わしてね」

(丁度だれかと通信しようとしてたなあ…)

にしてもこの人も美人だなあ…うん がんぜんやる気でした)

「あ…き…き」

「はいまず通信つかうよ」

あ…あ…テステスやつらあの生物ぬ

ところすの協力しますよ」

『はあ?』『ちよせんと…』『ヴァル…』『おい!!…き…』『ぶぎぬ

け…』『いいか…』『…』『え?…』

「あ…あ…あ…あなた…ね…」

「まずは論より証拠」と
自分の本体をコクピットから機体外に

そのさい「ちょ……」なんか掴みかかろうとしてたが無視無視 どう
せ同化した以上話せるし

機体外に本体をだし……

「ラミエル!!」

マーカールの位置を機体から読み取り……やつらの集団に向け……
コクピットからうるさいなあ……

「この悪魔!!」「わたしのになにしたの!?!?」「やら
ん? 脱出装置つかおうとしたか……でも無効になってるのに……

あ、おちこんだか?

画像システムも奪ったからなあ……

かわいそうになった……しょうがない……

システム再開つと

「あー聞こえるよね??」

びびっちゃったか

「聞こえてるよね? 無視しないでよ」普通に話せばいいから

「あ、あんた……なにもの??」

「それはなくなるからおい……」

「説明しなさいよ!!」

「あとでね、すこしききたいんだけど……」

「あとでじゃなく!!……なによ」

「この機体みたんだけどやつらみたいなのレーザー砲であるの???」

「はあ…？ないに決まってるじゃないの…！」

「なる…」

「なるじゃない…！」

「じゃあ撃つねよく見ててね」

「何を撃つ……」

「狙い撃つぜー…！」

「いい加減、何してんのよー…！」

「デットエンドシユート…！」

その瞬間 右手から変化した加粒子砲から一気に力が放たれた…

地面をえぐり やつらを巻き込み…巻き込み 巻き込み

その終着点で力が解放 光の十字架がそそり立つ

やつらの半分以上巻き込めたようだ

(やばちつとやり過ぎ???)

光が通ったあとに強風となって空気が巻き込まれる

見ると彼女の仲間の機体ももってかれかけてた…急いで着地したよ
うだ

「ごめん 気合いいれすぎちゃったよ」

コクピット内からは反応ない…

side～俺end～

side～ヴァルキリー3少し前～

『あゝあゝテストスやつらあの生物ぬところすの協力しますよ』

「ヴァルキリー8…！誰をいれてんだ…！」

男性の声 flowed 民間人?? 不可解な事が起こりすぎる

「クツ!!」そつちに気を取られすぎて接近をゆるしてしまった
長刀を切り付ける
倒れただろぅ かくしんし BETAとの間合いをとりながら
36mmを連射しまくる

「こちらヴァルキリー3よりヴァルキリーマム!!8はどうなっ
てんだ??」

「こちらヴァルキリーマム ヴァルキリー8は現在制御不能、
こちらからの信号も受け付けません」

「ちっ…ヴァルキリー1…どうします?」

『制御不能となるといけない状態と考えた方がよいわね……フォーメ
ーション、アローヘッドツィで立て直すわよ』

『『『『『了解!!』』』』』

陣形が動きだす その時……

『きゃあ!!』 『え!』 『まぶ……』

わたしは奇跡をみた…

わたし達の後方の方からその光は前方に…

光の回りのBETAが融解して

そして …… おおきな十字架が……

「クツ!!」 気をぬきすぎていたようだ 光がおさまったところ
に強風で持ってかれそうになる

うまく着地し、風に抵抗する

しかしあの光は……

side〜ヴァルキリー3end〜

side〜俺〜

「ごめん 気合いいれすぎちゃったよ

コクピットから反応ない…

「おい

「……………」

しょうがないなあ…ジャンプし

「きゃあ!?!」

「おーいもどつたかあ???」

「な な な な な な」

まだ駄目か… もう一回ジャンプ

「イダ!イダヒィ〜」

ん? すこし目をコクピット内に増設した…

あ、舌かんじやったか……

「ごめん 舌噛んだ??」

「ゴベンジャナビバヨ〜」

「ほんとゴメンね と、しゃべらなくなっといういから顔くちやうで返事
してくれれば良いから」

舌を抑えながら頷く姿がみえる　かなり痛そうだ

「機体の制御は君に後程預ける　あとosちよつと弄って性能アップさせたから」

目をまんまるにさせながら頷くのがみえる　そのあとで傾げる
「やつらが残ってんだろうが」

なるほどか？　大きく首おつごかす　が　人差し指を前に……あゝ

「さっきのレーザー？あれ仲間の側でぶつ放すと巻き込む恐れあるから…使えないんだ

そのかわし　君のナイフをちつと弄って　大剣タイプの高周波ブレードにしたから

あと接近戦でよろしく」

へ???な顔して最後の接近戦あたりで無理無理な首振り運動…

「んゝまあ高周波ブレードは…とても切れやすい剣なんでもきれるよやつらでも」おーなジェスチャー

「で接近戦は…」

コクピット内に光線級の照射警告

彼女の顔が青ざめる　まだ操縦権渡してないのにひっしにそうさし始める

俺は、多分この機体だと一発で駄目になるのかと理解する

光線がくる　彼女の顔は青ざめて…　ATフィールド展開

「これが答え…俺がいるかぎり君をまもるから」

最初 この世の終わりで、目をつむってたら、目をあけて、驚いた顔して理解しようとして理解をあきらめた顔してそして力強く頷く

(面白い)

「じゃいくよまずはそのじゃまなのいつか…コントロールユー
ハブ」

彼女は力強く頷く

side～俺end～

side～ヴァルキリー4～

まだ生き残っていた光線級から 光線が…こっちに来ない… え
?と見ると

『ヴァルキリー8!!!!』

(あたっ…え?なにあの紋様…

光線を…???)

『ヴァルキリー8移動開始しました!!』

見るとまずは光線級の方へ…

『ヴァルキリー8突出しすぎだ!!!!制圧支援仕様だろ!!』

(え?違和感が あそこ あんな大剣いつのまに…)

『ヴァルキリー8下がれ!!』 『隊長!!』

(あのこあんなに動きすごかったっけ???)

(それに機体の上に人……いや兵器……??)よくみると その兵器から 光の槍が延びてBETAを貫き、またちじむ
また光のシャワー?らしいの浴びるとBETA小型種はいきたえる
ようだ

大型種はシャワーには堪えるが 光の槍で一撃でいきたえる

「すこ……」

『とりあえずヴァルキリー8は味方ながらもアンノンとする、あの動きは普通ではない』

彼女の機体の持つ剣もそうだ ありえない切れ味……

(あ、今突撃級?あぶ……
て……?)

(突撃級を正面から一刀両断……ありえない……モールス15を誇る装甲殻が……)

そのまま光線級を横一文字にするとこつちの前の残敵方向に……

『ヴァルキリー4!!』

(え……?あ)要撃級の腕部による一撃……間に合わない
(ごめんね舞ちゃん同期一人になっちゃうね……あれ?)

ヴァルキリー8から いや兵器からの 光の槍が要撃級から抜かれるところだった

瞬時にその槍は……兵器に戻る

残敵掃討は終了した……

side〜ヴァルキリー4end〜
side〜俺〜

「とりあえずBETAの掃討の協力感謝する…が貴様何物だ??」

(ほ〜可愛い声 凄みがあっても美人そう)

あ、モビルスーツの銃は勿論向けられてるね…

「え〜と俺ですか?とその前に…よつと」機体から離れ 自分を囲んでいた円陣が広がりまたもとの様にもどる

今度は8つ機いや 自分のついてた一機 は判断悩んでいそうだしりゃそうだ… あ、因みに剣はもとの短刀に戻しましたよ

切れすぎて鞘におさまらないからね…

鞘を改造しちゃってもよかったけど…

「ごめんもうちよつと広がってくれない?避難してた彼女の機体だすからさ…

機体自体は結構おしゃかつぽかったから、横にしてだすから広さがほしいんだ」

円陣が広がる

彼女の機体をだす

「ヴァルキリー9!!」「おぐ!!」俺がとりついてた機体の娘は彼女の状況みたら落ち着いてそうだね

まあ虚無空間に持ってた娘はPTSDにかかりそうだったから 若干精神治療はしたけど…

おぐつて呼ばれたこがコクピットから下りてきた 駆け寄った仲間が 抱き合っている

(うお！ 美人美人 というかみんな女性？あとのパツツンパツツン作った人GJ!!！)

が尋問してた人と、結構動きがよかった人あと、彼女を助けようとした人と、もう一人は降りてきてないな…相変わらず自分にでっかい銃向けたままだし……

「もう一度問う、貴様なにものだ??」

「ん〜どっから説明すればいいかなあ……まあこの通り普通の人間ではないのわかるよね？パイル！」右手を変化させまた戻す

「ん……うむ……」 「まずは自分も知りたいんですが……この世界なんなんですか？」

「は……?」「こんのふざけてんじゃ……」

「ふざけないっすよ!!！」

「……」

「正直はなしませす。自分は異能の力をもつこの世界以外、つまり異世界人です!!！」

第十話 遭遇後 投稿日20101213 (後書き)

作者「あ、いつしーお疲れ〜」

いつしー「……」舌をだす

作者「あ〜はいはい救急箱つと…薬は…」唐辛子…

いつしー「……!!……!!……!!」 ひっしに首振り が見えない力
によって動けない

作者「さてこれで治るからね〜前回おぐにはぬっころされたし…
…」

いつしー(やめてよしてやめてよして!!…おぐのばがー ああ
あ!!…)

おぐ ちーん

作者「まあヒロインポイント5点あげとくから」

作者「ただ次回がちつとある部分難作なんだよなあ…どうすつか…」

第十一話ぶちまけたあとの続き… 投稿日20101214(前書き)

さあ…問題発言はどうなるんだろう…??

どうまで…??

「正直はなします。自分は異能の力をもつこの世界以外、つまり異世界人です!!」

皆さんフリーズしましたね… おーい 手を振って あ、最初についた機体の娘と 虚数空間にほうりこんだ娘 は、再起動はやかっ
たか

「ふ、ふざけてんじゃないわよなにが異世界よ!神が認めてもあ
しが認めないわよ!!」

あちゃー 面倒な人の方が先に再起動したか…

「じゃあ、この力はなんなんですか?他にも持っている人います
か?」

「えー!!……えっとそれは……」

あ、最初の人再起動したっぽい

「…君、すまないが同行はしてくれないかな?」「え?ああ、リリ
ンをさがしてたので、人が恋しくてね…

えっとお姉さん方の姿もみたいので良いですよ〜で何処にいくん
すか?」

「ついて来ればわかる」

「あと自分の話はきかなくても?」

「あ、ああ…私達の権限外の話になった為、上の者が詳しく聞く
うだ」

「え〜〜〜…ん〜お姉さん方も同席を要求します」

「………上には伝えておこう」

「一応この世界の話はお姉さん方から聞いても大丈夫なんですよね
道中にでも あと お名前とかプロフィール等も」

「……………ああ、それ位は先に説明しろといわれてる」

「了解 あ、話聞くなり名前っすね〜自分渾力オールド
カオルってよんでください」

まずは隊長 (部隊名言わないのつまんない〜) さん
伊隅みちるさん

年聞いたら睨まれちゃった 年は秘密なんだそうで…

階級 大尉

彼氏きいたら…今度は顔真っ赤 あ〜こりゃいるかな???
が、うぶな一面をみれたなあ〜

そこんところを取っ掛かりにしたら面白くできそう

4姉妹の次女だそうで… 美人4姉妹かあ〜

おつぎは

早瀬 水月さん

ん〜顔だしてくれない…マイクごしorz

終始ガルル〜って唸ってるし…………

階級は中尉

年は、19歳だそうで… 唸ってなければなあ〜

涼宮 遥さん

戦闘には出ずに指揮車で戦域管制してたそうで…

これまた美人さん

年齢は19

ガールの子よりやっぱりこっちかな？

ガールの子と同期で99年入隊だって

彼氏の事きいたら……ゴメンね……ほんと……

西坂 舞

99年入隊組

年は19歳

降りて来なかった内の一人、先任だって

髪は短め少し青はいつてるか……

ボーイツシユながらスタイルGJ

いいね〜

ただ趣味は将棋……イメージあわないよ……

彼氏はいないし、なんとまだ作った事がないと……!

つまり……あ、鼻血でた……

河田 瞳

99年入隊組

年は4月生まれの20歳

この人もショート

他の色は入ってないね〜

趣味は整体……

もんで下さいおねーさま

なんかよく隊の仲間から全体の神様といわれるそうで……

彼氏いないって〜

でも、いそーなのにはぐらかすん〜

なんかキャバ嬢的な会話術ありそう

要注意枠だな

さてここからが初陣だった00年入隊組

高畑 貴美

年は18歳

今回あんまり活躍しなかった人…

え…？睨んじゃいやん

髪はショート的青

あんまりしゃべんないよね

スタイルは…ん〜がんばれか…

彼氏なし

趣味は読書

宗像 美冴

年は18歳

この人油断ならないよ……

ママン助けて…

因みに隊内の噂（誰かにききました）だと風間さんねらってるとか…

彼氏は勿論ナツシング

風間 栲子

年は18歳

趣味は音楽だそうで、

なんかおっとりお嬢様

彼氏は…音楽だとか…負けないぞ…!!

小倉 九琉華

彼女が今回虚数空間の利用者+精神的にちょっと強くし治療した人
えっとグラマラスボディに

髪は赤系長め

彼氏はいないっていうか嘘っぽいぞオマ…え???うん本当にいないよね(やば強くしすぎたか??)コワコワ)

石橋 屢伊

彼女の機体を今回利用させて貰ったよ

年は18歳

ピンクブロンド…クォーターだそうで…

髪は結構長め

スタイルは…かんばれそっち系の需要がある…いわゆるツルペタロ

リ…へ???ち

ちよつと…(チーン)

まあ…いわゆるすぐに手をだす性格ね

まあ…でも面白いかも

さて でこの世界の話も聞いてみたんだけど…ありえない…

まさに死亡フラグ満載じゃん… こんな可愛い彼女達… 護らなき

やと改めて思ったね

まあゼロ魔でウハウハもよかったけど…

見捨てられない…

side～俺end～

〓〓 横浜白凌基地〓〓

「うんで伊隅、この子が??」

「ハッ!!その通りであります!!」ピシッと敬礼がきまる

「かたいかたい、そういうのはいらなから…」

「しかし…」

「ま、ちやつちやとすませましょう」

「はあ…」

「で、あんた、ずばり聞くけど本当に異世界人なの??」

「はい そうです。証拠はパイル」

右手を変化させ戻す

「この通りの力があります。また銃で撃っても死にませんよ」

「うつふぶん。おもしろいわね…撃つてみていい?…」

伊隅ジト目

「じょーだんよ……で伊隅例の物は…?」

「は!!これです」気を取り直した顔で、MOが渡される
この博士らしい美人がコンピュータに差し込んでKeyboard
をカチャカチャやって調べている

(しかし…この人もグラマラスなナイスばでいなあ…)

「ぶん。ますますおもしろいわね…気に入ったわ であんた、こ
こにきた訳は?」

「ん…この基地??」

すこし焦り気味で的違いのを答えてしまった…

「違うわよ、この世界よ」

「わかりません」

「なんでわかんないのよ？」

「自分にも」

「異世界人なんですよ？なんかで渡ったんでしょ？指さしながら近寄ってくる…いいねえ…」

「神の力ですが…」

「神??？」

とまった…orz

「ええ、ただ目的の世界とは違いまして」「目的？」

「本来ならここではない世界にいきこうと自分に力を付けてくれた神に頼みました」

「え？あんたの力は貰い物なの？」

「ええ…そうです。お詫びで貰ったわけで…本当の自分は、神の趣味の事故見学の際に飛んできたから、思わずはたかれて殺されたそうです」

「想像の斜め上に入ったわ…」

頭に手をやる美人科学者…いいねえ！

「でそのお詫びに力をもらって元の世界では駄目だが、希望の世界で楽しんでこいと送りだされたのですが…」

「それが何かの作用で、お願いした以外のこの世界にきたわけね…」（椅子に座って脚組み替えた…うん）

「はい、多分その通りです」

「で、あんた帰る力は…」

「あ……、そういえばすっかり忘れてましたけど、多分あります」

「え??？」

「けど帰りたくないです」

「それはなぜよ?」

「この世界をいや彼女らを見捨てたくないからです」

(美人が沢山…死なすのもつたいない!)

「……くく……くく……くははは……あゝははははははははあゝ」

落ち着いたようだ

「おそれいったわね…本当に奇跡がおこったようね…」

見苦しいところみせちゃったようね

けど道化じゃなきゃ奇跡の夢物語よ」

「……自分もそう思いますね…自分を間違つて殺した神を最初は恨

みましたが、今は彼女らにあえて満足してます」

(神よ美人がいっぱいの世界であります)

「私達も感謝しなきゃね」

頷く伊隅

(うっっしゃ好感触かも)

「ところであなたの要求は？」

「そうですね、彼女らの側にいて護らさせて下さい」

（これは絶対だもんなあ）

「ええ、わかったわ他には？」

（おっしや）

「あとモビルスーツを弄ったのですが」

「モビルスーツ??ああ、戦術機の事ね」

「あ、戦術機というんすね…まあ軽く弄ったんすが…正直BETAに勝てないですよね？」

「まあ〜ね〜その為の私なんだけど」

（ん??）

「え?ん〜いや、戦術機の方話戻します」

「ええわかったわ、戦術機では正直苦戦しっぱなしのようね…」

（あややつぱり……）

「まあ硬直や対応速度、また装甲やら武装面やら…」

「質で勝たなきゃいけないのになかなかてないですよね…?」

「まあ…ね」

「弄ったりあと、持ってこようかなと思います」

「持ってくる?」

「ええ…」

立ち上がり（多分使えるよな…？）

「……”世界扉”」

自分が連想したのは機動戦士ガンダムの世界

「ちょ… ちょっとこれは？」

「自分のもらった能力の一つ、世界扉です、別の世界に行き来できますよ

自分が連想できる世界へね……」

「おどろいたわねえ……」

（うんチート万歳）

「まあこれでこの世界におけるオーバーテクノロジーを、盗みはしませんが人同士戦争してる世界ですので破壊等で破棄されたのを涵養しようかなと……」

（流石にその物語は影響させたくないもんなあ…
ガンダム盗んで連邦消滅は目もあてられないし……）

「はぁ斜め上いったわ」

「もっとも持ってくるだけで、根付かせるのはこの世界の人ですけどね」

（俺はそこらへん知識はないし多分感覚で改造かな？）

「はぁ… わかったわあと他には？」

「ん〜とりあえずそんなところですかね??」

まあ随時協力できそうな事はしようかな？と思いますが…」

「うん…そうね…あ、あなたの名前は？」

（あ、最初にいってなかったな…）

「渚カオルです」

「香月 夕呼よ」

（いい名前だなあ…）

「よろしく願います」

「…あ、…そうね…少佐の身分をつけてあげる」

「了解です」

（お…上官プレイフラグ??）

（あたしより上…）

「身分あった方が楽でしょ？じゃあ…」

電話で誰かを呼んでいる

…シユン…

「失礼します」

（うお…美人 プロフきこ〜っと）

「ピアティフ中尉よ こちらは渚カオル少佐」

「え…ハッ！よろしくおねがいたします」

「私からの特別って事でよろしくおねがいね」

「わかりました」

「部屋の案内と基地施設の案内よろしくね IDと階級章等はあと

でとどけるから」

(となると……)

「じゃあ明日にでも？」

「ええ、使いはだすわ」

「了解です では……」

「あ、最後に言い忘れてた」

「はい？」

「彼女や、…伊隅… A - 01は大半事情を？」

「はい」

「じゃしようがないわね…もいれて、

それ以外には力みせずに、また何処からきたとかも喋らないでね」

「聞かれたら？」

「階級と私の名前だしてよいから need to know によるしく」

「わかりました」

「で、いっていいわよ 伊隅あなたも今日は特別扱いだったけどね」

「はっ失礼します！」

シユン ……………

「霞」 シユン

「どうだった？」

ふるふる 「見えません」

「そう……」

「ただ……」

「ただ？」

「鑑さんが暖かい色してました」

「そっ……」

作者「かなりぶっちゃけたなあ…まああの人なら…
だが下心はひたすら隠してるみたいだが…」

カオル「当たり前だろ、落としてなんぼよ!!」

作者「まあ…俺の願望まざってるしな…正直頑張れ」

カオル「おう!!」

………

イッシー「ねえ作者」

作者「ん？イッシーにおぐ、タバタ（高畑）じゃないか…」

おぐ「あたしたち最初のころと変わったの??」

作者「ああ、丁度この話つくっている時に外見をどうするか…
で99年組はわりとすぐにできたんだけどなあ…で、なやんだんだ…
ただタバタに関しては、名前は変わってはいるけどたまたま偶然だ」

タバタ「……うそ……」

作者「…ほんとだよ…そりゃ外見は…たまたま悩んでたらあつとお
もったんだよ…後悔はしてない…」

作者「それに、タバタは元々氏名不明の一人の設定だったし…」

作者「ただ、ぶっちゃけ裏設定というか、

考えたたら毎年ABで、だしてんだよなあ…で、きみらは決まったよ
うなもんだよ」

イッシー「となるとあたしたちはあの場で本来は？」

作者「本来はしらんが、多分カオルが来なきゃな…で、タバタは1
月の新潟で病院行き枠だったわけだ…」

イッシー「99年の先任方々は？」

作者「一応、西坂は、おぐを助ける際につくまえあたりに突撃級
に背後から…」

河田は、そのショックでほうけた内にとの設定でね「イッシー」な
るほど…」

作者「因みにイッシー、おぐ本来の名前は由理と由梨でユリユリ
コンビのはずだったんだぞこの話の前まではな」

おぐ、イッシー「え…つまり？」

作者「ああ、想像通りだ」

おぐ、イッシー「作者…あ…あたしたちの素晴らしい関係をかえ
せー！！パーンチ」

作者^{そいつから}……

ちゃんちゃん 後悔はしてませんw

第十二話 副司令との対談後 投稿日20101215

sideカオル

部屋を退室したあと、
自分の個室の場所及び食堂PXや格納庫や、A-01の待機室に
案内するという事で、
美人なピアティフ中尉に並んでついでにごうとしていた

「え〜とピアティフ中尉？で良いんすよね？」

「ええ、その通りです」

「中尉は博士の何？というかこの基地の役割は？」

「わたしは香月副司令の秘書官をつとめています、また当基地の通
信士官です」

「じゃあ香月（副司令）だったのかあの若さで…（副司令）がみつらな
かったら中尉をさがしてか…」

「そうなりますね、けど大体はあの執務室に居るはずですよ」

「ん わかった」

「ところで少佐お伺いしてよろしいですか？」

「どうぞ〜」

「少佐は…衛士なのですか？それとも技術士官です？」

「あ〜……そこんと聞いてなかったなあ…まあ多分副司令から聞

くと思うけど、

異世界人だからあんまりこの事わかつちやないから」

「はい？」

「あ、こういった力もってんのパイル」

(定番化だな…これ)

「え〜とわかりました…」

頭おさえてるなあ……

「まあだから突っ込まれてもボロがでちゃうから…フォローよろしくね」

「はい、わかりました……ところで異世界というところ？」

「ん〜俺が元いた世界は、BETAがいない世界だったね〜」

「BETAがいない世界ですか…素晴らしいですね」

「が人間同士でやっぱり争っていて、俺がその世界からいなくなる前には、

韓国と北朝鮮が挑発行為でやばい事にもなってたし、

後はいろいろの紛争や、内戦等ばちばちね」

「はあ……」

「うんでもまあ日本あ、ここでは日本帝国でいつてるのか、まあ元の世界の日本は比較的平和だったね〜

一人が殺されればすぐに全国ニュースになるし、まあ人身自殺、

ん〜列車に飛び込んで自殺するのはほぼ毎日あったけどね…」

「BETAが居ない分、別の問題があるんですね…」

けど…こちらの世界より希望があるはずですよ

あ、着きました。こちらが、少佐の個室になります」

中尉は部屋の表札にネームプレートをさしながら説明してくれた

「どれどれ…？」

部屋の中は機能的にデスク、ベッド、クローゼット、シャワー室＋洗面台＋トイレ等でまとめられている

(成る程…一般的な士官室なのかな?)

「次にA-01の待機室まわってから 格納庫によります」

「ん」

「ところで少佐、先程の力以外にも？」

「ああ、光線うったりとか、取り付いて改造したりとか、コンピュータ取り付いてハッキングしたりとか、後はそうだなあ」

「も…もういいです なんでも有りなんですな…」

「なんでも…ではないけどね、戦闘ではBETAに負けないつもりだよ」

「はあ……」

「まあ最初にこの世界に来た時にはいろいろ苦労したけど……ね……あ、そっだ」

虚数空間からドックタグを出す

「これは……大東亜連合のドックタグですね」

「その関係者の方に連絡をとってもらいたいんだ」

「わかりましたが……」

「まあこつちくる途中に死体から、家族と思える写真を回収してね……まあ最後はみれなかったが、渡してほしいんだ」
で写真も渡す

「あ……はい……わかりました、善処します」

「よろしくね」

「ところで少佐……何処からこれをだしたんです？」

「あ、これも異能力だからあんまり気にしないでね…
壊れた戦術機も入ってるから」

「はあ…わかりました…あ、こちらが待機室になります…」
今は誰も居ない…

「では格納庫に案内します、最後にPXですね」

「この世界に来てからの初めての食事だから楽しみ」

「はい!？」

「あ、一応人間やめてるから、食べなくとも大丈夫だけど…食べるのは楽しみなんだ」

「はあ……………」

かなり頭おさえこんでグリグリしてる…

「まあそこら辺はおいといて…格納庫でしょ？」

「あ、はい こちらになります」

整備士の方々が忙しそうに作業している……
声かけたら今はまずそうだな…

「ん、じゃあお腹すいたらかP Xお願い」

「わかりました、こちらになります」

移動の間に、個人情報聞こうとしたらはぐらかされたよ…ママン…

…orz

「こちらがP Xになります。食事の仕方はこちらにいらんで最後にIDカードで、会計をして下さい
今日はゲスト用のIDカードをお渡しいたします」

「ん」

「では、わたしは別の仕事がありますので、これにて失礼いたします」

「ありがとう」

(さつとど、はつめしはつめし…メニューはつと…ん…合
成???...まあいいか)

「すんませ〜ん」

「あいよー、おや、みかけない顔だね〜お客さんかい？」

「あ、俺は今日から厄介になる渚力オル少佐といます
ひとつよろしくお願いします」

「ほう〜若いのに少佐さんなのかい

あ、わたしやこの食堂をあずかる京塚 志津江っていうんだい
戦時なんたら法で臨時曹長をもらってるけどね」

「志津江さんですね…よろしくお願いします」

「…若いのに礼儀ただしいな〜
気に入ったよ、何頼むんだい？サービスしてくよ！」

「お言葉に甘えさせてもらいます とじゃあ…トンカツ定食で」

「あいよー 今作るから先の方でまっててな」

まっている間あたりを見渡す… 遅いからか、あんまり人が居ない…

「あいよ〜おまちどうさん」

「ありがとうございます」 で会計し、席につく

「いったきます」

（ん……何か違和感が……これが合成なのか、
ご飯の方もそうだなあ…

味つけは良いけど……素材で……少し残念…） 完食し

「ごちそうさま〜」

で部屋にもどって明日ねよ…この世界はつのベッドだし〜

side〜カオルend〜

その頃格納庫では……

「チーフ！来て下さいよー！」

ヴァルキリー8の機体、コクピット部分みてた人から声が であ

「ん？どうした？」

チーフだろっ年期はいつた整備士が来て、年若い整備士に声かける

「ここみてくださいよ……」

「ん？……おい、お前……大至急整備記録もってこい！！」

……

「持ってきました！！」パラパラパラ

「記入漏れはないんだな？」

「はい」

「……わかった博士に報告しておく、8番機に関しては、一時封鎖処置をしておく」

「はい!」

「あと代替機を大至急用意しろ!!! いか、今夜は徹夜だぞ!!!」

あゝあ……

作者「一応お知らせしておきます、

次の話が広がり過ぎてるので…遅れそうです」

石「なんでよ？」

作者「この次の次にカオルのあの力…の話を入れる予定でしたので、次を一つの話にしようとしたら…はしよるか、長くなるか…どっちかになつてしまいました……」

石「あたしの活躍部分いれるのよね？」

作者「……………」

石「登場は？」

作者「…みている…」「一応はね」

石「一応つてなによ!」

作者「ん〜その線の筋の話ではないし…この流れでいうと…」

石「あたしを活躍させないとおぐから不知火君借りて作者、撃つちやうよ?」

作者「まあ…考えとくよ」

というわけで現時点で本当にどうするか悩んでます事をお知らせし

ます…

分割しちゃうかな?？」

第十三話 翌日… 投稿日20101217 (前書き)

すみません 前予告通り…はしよった部分あります

整備士さん達には今度登場してもらいますm(´|´)m

第十三話 翌日… 投稿日20101217

2001年5月10日

〓 〓 香月副司令執務室 〓 〓

「おはようございます」

「あんだねえ」

「ん??」

「ヴァルキリー8の機体に何かした？」

「あゝ、OS弄って、CPU関係強化しましたが？」

「強化したって何時なのよ？」

「やだなあゝBETAと戦ってる時に決まってるじゃないですか」

「はあ……まあいいわ、朝から大変だったのよ、整備の人も徹夜だったそうだし……」

「あちゃー」

「まあわかったからいいわ…でできるのね？」

「ん？何をです？」

「強化よ強化…馬鹿なのかわからないわ…まったく」

「あゝまあ異能力で取り付けば強化できますよ」

「なるほどね…なら不必要には見せたくないわねえ…いいわ専用のハンガーと執務室用意してあげる、

搬入出以外は資格がない人以外は立入禁止にしておくようにね」

「了解」

「ハンガーはB555のを使ってちょうだい、許可は今だしたわ」

「とりあえずそれだけよ」

「あの副司令？」

「なによ？」

「昨日気になったのですが、PXで…全てに合成ってついてたのですが、なんでです?」

「それはね、…あなたの日本の食料事情はどうだったの?」

「俺の日本です?」

「そっ、早くいいなさい」

「俺のところは、自給率米が100%越えてましたが、あとの大体の食料は輸入に頼ってました」

「何処から?」

「えっと中国や東南アジア、アメリカ等ですね」

「アメリカは関係悪くなってるわ、中国や東南アジアはBETAに占拠されてる、

あと日本の関東ー新潟から西は軍関係以外はないとしたら?」

「あ、食料やばいですね…」

「そ だから合成プラントからできた合成食料に頼ってるのもっとも、軍関係だけよ合成ながら三食まともに食べれるのは」

「ありゃー」

「天然物で自給可能なのは、今だBETAのこない北南米大陸、特にアメリカと、オーストラリアぐらいなものよ」

「かなり悪いんですね……」

「どうしようもなくなってるわね」

「テコ入れ必要か……な……」

「できれば必要ね」

「これも異世界でさがしてみますが、自分の知ってる世界で食料事情強化できるのあったか、わからないので努力はしてみます」

「あらそう……期待は？」

「食料事情に関しては……あんまり……」

「残念ね……あ、異世界いつたら天然物のコーヒーだけはお願いね」

「わかりましたが、お金は……？」

「あらそうねえ……こっちのお金は使えないとして……何が売れそう？」

「ん……個人用武器＋弾薬、戦術機……位ですかね？多分コレクターはどの世界にもいると思うので

あとは調べないとわからないですが……」

「武器弾薬はともかくとして戦術機だと輸入もできそうね
勿論必要ではあるからそうそう売りには出せないわ」

「ま、輸入は可能かとは思いますが」

「まあわかったわ……考えとく、

あ、異世界は無断ではいかないでね、あなたを捜して大騒動になっ
ちやうから」

「わかりました、その際には一声かけます」

「他にはないわね?」

「あ、あとひとつ、自分は技術士官なんです? 衛士なんです? 昨日ピアティフ中尉にきかれ答えられなかったのですが……」

「そうねえ…技術士官にしておくわ、他には?」

「とりあえずは、ですね、また何か気がついたらきますので」

「わかったわ」

「では」

シユン

シユン

「あら霞?」

「鑑さんがまた暖かい色をだしてました」

「そう……」

side〜カオル〜

(とりあえず…A-01の待機室にいくか…いるかなあ……?)

シユン

(お、イッシーだけか…)

「よう…!」

「あ、カオル」

「どうしたん？」

「それがねーわたしの機体、代替機になったんだけど、急遽元の機体に戻ったり…」

「あ、それ俺のせいだ」

「はあ？カオル!!あんた!!」

「まあ〜ゴメン ほら戦闘中に弄ったつたる？」

「あ〜OS?」

「そこら辺関係なんだだからまあ…なおしておかなかった、俺のせいでもある
まあ他の機体も強化する事なったし」

「他の機体も？……あ〜先任に勝つ夢が……」

「ん？？勝ちたいん？？」

「うん！！絶対勝ちたい特に早瀬中尉には！！」

「あ〜……かんばれ……」

「……なによ……」

「まあ……俺の実験台になるなら別だろっけどな」

「う〜〜…わかった…やる」

「うっし、実験動物ゲット」

「あたしゃハムスターかい！」

「はははまあ〜ね」

シユン

(お、伊隅隊長達だ)

伊「あ、少佐こちらに」

石「え？」 「……………少佐ー?!?!?」「……………」

伊「改めて紹介するぞ、昨日付けで少佐になった渚カオル少佐だ」

「まあいきなり少佐になっちゃいましたが、階級気にしなくて構いません。もらいもんですし、ぬきのお付き合いでよろしく」

伊「しかし……………はあ……………わかったかおまえら」

「……………了解!!」「……………」

「あ、A-01付けの護衛と、技術士官にもなったのでそれもわすれなくね」

「と、もうひとつ、みんなの機体順次強化するから」

「強化?」「どのように?」「レーザーうて」「バレエでき」「早くしてー」「早瀬中尉に勝て」「楽しみ」

「いっぺんに言わない…説明すつから静かにな」

「まず昨日の戦闘の時俺がイッシーの機体に取り付いたの覚えてる

よね？」

大多数頷く一部「大胆」「純潔うば」

「まあその時にかかるく弄って強化したんだけど、今朝のイッシーの機体の件はそれが原因だったわけだ……」

「で、まあその強化をみんなの機体にも施す、プラス順次魔改造するつもりだから」（魔改造でキョトンとしたな…お）

「高畑少尉」

高「具体的には？」

「うん、まず魔改造の前の段階は、OSの強化でおもに硬直の除去」

う「え…それって？」

「あーつまりだ、みんなの機体は長刀等で切ると切りおわるまでの動作できないだろ？」

一斉に頷く

「それじゃ例えば横からいきなり敵に切ってかかられたら、切られるまでまつしかない」

高「細かい操作いれる」「あーまあそれもだが、だけど切るの中止して、他の動作、例えば避ける事ができれば？」

誰か「あ！」 や驚いた顔

「そう、それが今回の目玉硬直の除去だ」

誰「あ、でもでも、機体が転倒しようとした時に、受け身自動でとるけどそれは除去できないよね？」

「あーそこら辺はコンピュータも強化するので判断と、どっちか片手だけは射撃するようにはなってる
またはバーニアふかして浮上可などね」

高「シユミレーターにはいつ？」

「へ？あるの？」
一斉にうなづく

「あー知らなかったから後で副司令に許可とるけど…いれる事可能だよ…今案内して貰えればね」「まああとは即応性の向上等だな…大体ソフト面で30%は向上可能とみてる
具体的には昨日の俺が取り付いた後のイッシーの機動だ」
みんなイッシーをみる…首を引つ込めて照れているイッシー

「あとは…まだ具体的には思いつき改造にはなるが…
とりあえず昨日つけた大剣のような高周波ブレードは可能だぞ」

西「正面からの両断ね」

「もっとも模擬戦にはその剣は使えないから、別なのでそういった設定でよろしくな」

「とまあ…こんなところか…じゃあ、シュミレーターの話かたざい
たら、順次隊長の機体えつと…」

伊「1番機から順番にコールサイン通りだ」

「に改造します、なを他の人には力みせれないので、専用ガレージ
B55にて改造しますのでね」

「俺からは以上です」

伊「おい、昨日副司令に見せた力は？」

「あ、わすれてた…まあ具体的には魔改造のプランとか、この世界
でのオーバテクノロジーの入手する為の力がありますので皆さんに
も見せます」

「”世界扉”」

伊隅以外は一斉におどろく

「え？」「ふわー綺麗ですね」「肉がきれる？」

「まあこれで手に入れてきますので、技術に関しては、
この世界の方々の頑張り次第で反映できると思いますよ」

風「個人的ですが楽器とか手に入れられます？」

「あゝそれは向こうの通貨がないと無理ですので、こっちの何かを
向こうで売って、それで仕入れる形ですね…
副司令にもおなじようなの聞かれました」

風「そうですか……」

「まあ何からしか考えてはおきますが、協力してもらうかも知れませんがその節にはよろしくお願いします」

「あとはないかな？うん以上です」

伊「あゝ全員の機体の改造が終わる期間は？」

「んゝシュミレーターの方許可おりて、シュミレーター改造後、搬入出時間だけですな… B55がどんなところを見る前にここにきたので」

伊「じゃあわかったら知らせてほしい」

「了解〱隊長」

「じゃあ、おまえらは…今日は各自の仕事かたずけろ、解散！！」

副司令に許可もらいにいこうと廊下にでて執務室にいこうとすると…
… イツシーが横に並んできた

「ねえカオル」

「ん??？」

「甘いもん好きなんだけど…異世界の手に入れられるかな??？」

「んゝ協力してくれりゃあ……」

「うんするする」

「ん 了解、そのときは声かけるよ」

(犬のように尻尾ついてたらぜってー振ってるな……)

石「あ、わたしここまでしか、エリア進入許可ないから……」

「あ、そうなん？ん、じゃゝな」

「うん」

sideゝカオルendゝ

|| || 副司令執務室 || ||

コンコン「カオルですーよろしいですか？」

「あらゝびじぞ」

シユン

「失礼します」

「で？なによう？」

「あ、シュミレーターの改造したいんで許可を…」

「彼女らのね？専用台、独立ブロックだからいいわよ
他には？」

「あと少し俺に関してなんすが、戦闘時の力の公開は何処まで？」

「秘密にしては欲しいんだけど、で、護れないのもねえ…」

「ばれなければ？」

「そつねえ」

「あ、ならこういった感じにすれば…」幻影”」
俺の外観に幻影を纏わせる…人の大きさの不知火の完成
滑る副司令…

「な………」

「これでどうですか？」でターン

「はあまあいいわ…ようは、余計なところからの詮索入らなければ
良いだけだし…」

これなら新兵器で普通にいけそうだしね
で元に戻る

「うんじゃま戦闘時はさっきの格好でやりますので」

「他にはないわね？」

「今のところは」

「わかったわ」

「では、失礼しました」

シユン

シユン

「夕呼さん…」

「霞、また？」

コクんと頷く霞

「あれに接触を試してみるべきかしら……？」

side↳カオル

(……………そういえば場所何処だっけ？……………んん待機室誰かのこつてれば……………お 高畑か？)

「高畑少尉」

「なに？」

「シユミレーター室の場所教えてくれる？」

「こつち」

「お」

「ところでさ、自己紹介いらいだっけ？」

あんまり喋ってないけど、何か聞きたい事ある？」

すこし考えてる模様

「ない……………あなたの力……………想像できない位大きい……………わからなくなったら聞く」

(か、絡み辛い……………)

「ああ、わかった」

「ついた」

「ここか、同フロア内だったんだな」
頷く高畑

「わたし戻る」

「ああ、ありがとな」

何処かに行く高畑…待機室の方向かな？
さつてと…改造しなきゃ

シユン

オペレーションブースかな？に、涼宮中尉がつめている

「涼宮中尉」

「あ、カオル君ね」

「シユミレーターの改造にきました」そこ、オペレーションブース
ですよ？」

「ええ…そつよ」

「じゃ、お邪魔します〜…これかな？」
手を触れて…

「イロウル」

解析中、このブースで更新すればいいみたいだね… じゃ弄って

…cpuも代えよう

「バルディエル」右手が同化… 更新完了つと

「終わりました〜」

「え…ええ……………終わったの??」

「はい、チェックしてみてください」

涼宮中尉、急いで確認作業にはいる…

「ほ…本当…ね…」

「うんじゃあ他のところいつてくるので失礼します」

「……………」

side〜カオルend〜

side〜涼宮すこし前〜

オペレーションブースで昨日の戦闘ログの整理をしていると…

「涼宮中尉〜」

「あ、カオル君ね」

「シユミレーターの改造にきました〜そこ、オペレーションブースですよ〜」

（何にも持ってないのに??）

「ええ…そうよ…」

「じゃ、お邪魔します〜…これかな?」

（カオル君なにを?そんなところに、手を触れて…）

「イロウル」

（え…??モニターログが凄スピード目がついてけない……ありえない……）

「バルディエル」

（な、右手が…中にはいった??いえ…同化??）

「終わりました〜」

「え…ええ……終わったの??」

（う、うそ……）

「はい、チェックしてみて下さい」

「チェック作業はいつたら…」

（見たことないOSになってる……）

「ほ…本当…ね…」

「うんじゃあ他のところいつてくるので失礼します〜」

(…：夢かしら…：朝ご飯ぬいたから貧血??)

side～涼宮end～

side～カオル～

その後B55のガレージを確認し格納庫までの搬入経路を確認、
ついでに整備士の方々にお詫びをして、…

伊隅隊長を捜しにいった みつけ

「隊長～」

「カオルか」

「改造時間の大体の見積もりでした
いっぺんにに搬入するなら約1時間で可能です」

「ふむ…シユミレーターの方は？」

「もう既に完了です」

「わかったよろしく頼むぞ」

「了解」格納庫に向かい、整備士の方々にお願いし、B55まで
搬入してもらう

で、30分後に引取に来てもらうようにお願いする……

さて改造タイム……

内容 OSの更新 cpuの強化

高周波ブレード…俺がついてないと駄目じゃんが発覚 主機の出力
たらず… あとで報告か…

と思ったらカートリッジ方式にしたらどうかな??で、あ、知らない…

駄目だ… 研修(別世界)に行つてきますorzで見送り…

S2機関搭載も考えたが…万が一の時回り含めて全滅の恐れあるか
ら…

あと整備中に事故が…無理だ…

以上 改造タイム終了

引き取りに来てもらいました

隊長に報告しなきゃ… みつけ

「隊長、報告です」

「改造のか?」

「はい、OSとcpuの方は問題なくできたのですが、高周波ブレードが主機出力が足りないため、
今回は見送りになりました」

「そうか…」

(残念そう…)

「ですが、ちっと別世界にいけば解決予定です」

「もういくのか?」

「ええ、やれる時にやっておかないと…ですから、じゃあ副司令に一声かけに行ってください〜」

「あ、ああ…」

「副司令執務室」

「副司令よろしいですか？」

「はいっていいわよ」「シユン」

「あら、またなにか？」

「異世界にいつてきますのど、お願いが」

「あらさつそく??と、なにかしら??」

「改造のテスト用に、不知火一機と、破棄された撃震でいいんですが、

コクピット部分と下半身いただきたいです

あと随時改造テストしますので武装を種類多く」

「不知火ねえ…すぐには無理かもよ、武装と撃震の方は可能だけど何故下半身とコクピット部??」

「まえ撃震の上半身ペイルアウト後の機体確保しまして、生体兵器として改造しちゃったので続きを…」

「ふーん、おもしろそうね、いいわ」

「ありがとうございます」

「あ、そうそう、いつもどる予定なの？」

「多分…二日あればっすかね？」

「わかったわ…いってらっしやい」

「”世界扉”」

行き先は機動戦士ガンダム、一年戦争真っ只中……

第十三話 翌日… 投稿日20101217（後書き）

作者「な〜カオル…」

カオル「ん？」

作者「一年戦争ってさ…もう少しあとのスターダストメモリーの、
GP-02核装備つきがいいんじゃない？」

カオル「ソロモンよ、私は帰ってきた!!」

作者「うんうん、で佐渡島で…」

カオル「佐渡島よ、私は帰ってきた!!で、核バズーカでハイブを
吹っ飛ばすんだね？」

作者「うんうん」

カオル「突入する部隊が核まみれで…」

作者「……あとがこわいね……」

カオル「それに俺の設定上、その世界のワンオフ機は駄目なんじゃ

ないの？」

作者「だな……」

第十四話 帰還してから 投稿日 20101218 修正1

2001年5月16日

〓 〓 副司令執務室 〓 〓

夕呼はかなりいらついていた……そう日付みればわかる通り……
まだカオルが帰還してないからである……
ある事をしようと決めてから……

その間、ピアティフ中尉はおるか、あの霞までが近寄らなくなつて
しまったのを付け加えておこう……

執務室の中央に変化が現れた……そう6日前に消えた”世界扉”が現
れたのである

それをみると用意してた？レンガを両手にもつと……夕呼は待ち構え
ていた……

side～カオル～

「ただ……イタ！」

……自動ATフィールド突破された怒りの一撃……！

(つぁ……レンガ???)

「あでっ！いで！？」

……や、やめて下さいよ……！！ATフィールド最大……！！」

やっとなまるレンガ攻撃……

「な、なにすんすか……いきなり……」

「なにすんすか〜じゃないわよ!! いったいどんだけまたせるのよ!!」

「え??? え〜と……」

「約束よりも4日よ!! 4日!! どんだけまたせるのよ!!」

「あ、……すんません自重忘れました……」

「たく、……で、成果は? 約束時間よりオーバーして成果ないは認めないわよ」

「はい、まずはガンダムの世界にいき、MS-05 MS-06C
MS-06F MS-06J MS-06FZの破棄されたのを
再生し完成させました」

「ここら辺は実体弾が主流のモビルスーツですので反映はしやすいと思います」

「装甲、武器、主機 〇sあたりですかね、あ、核融合炉搭載し」は
あ? 核融合炉?」ええ、

「していますから取り扱い注意して下さいね」

「なんなの……どんな世界にいったのよ……」

「またビーム兵器いわゆる荷電粒子砲兵器搭載のRGM-79ジム
も提供できます」

裏で「ふ、ふざけてる……」と副司令がつぶやいてたが気にせず……

「あとは適当に集めたので整理はしてませんが、研究派生用はそんなものですね」「……他には？」

「あと、目玉かな？農業用コロニー1基」

「コロニー？」

「破棄されてたのをたまたま見つけたのですが、直径6km、全長30km、勿論後遺症は残りますが、破片でさえ、オーストラリア大陸のシドニー近辺を地球上から削った大気圏外落下質量兵器にもなります」

「捨てなさい、返して来なさい」

「やだです」

「そんな兵器危険過ぎて使えないわよ」

「あ、すんません兵器でなく人工の宇宙島です、たしか1000万人自給自足可能です」

「え？兵器じゃ……」

「いえ、人の住む島です基本は…
それをその世界のジオン公国軍はコロニー内部に毒ガスまき、その中の人を全滅させ、質量兵器として使用したわけです」

「そ、それって…」

「ええ、たしか全人類110億人の内、一週間で28億人が死んだ世界です」

「……………」

「まあその世界の一年戦争の兵器が今回する物ですから優秀ですよ」

「た、たしかにそう思いたいわね…
けど、コロニーはさすがに使えないわよ…」

「ん…まあコーヒー豆程度なら提供できるかと」

「使いましょう！！大陸の形が変わってもいいわよ！！」

「……………一応虚数空間での全自動で、食料生産可能でしたので、持ってきたので大丈夫ですよ
多分この基地に天然物おろすや、どっかに提供可能な位は作れるかと」

「それで問題ないならいいわ…コーヒーは忘れないでね」

「あとはこれは意外でしたが、改造したものがコピーできますね
同じくらいの部材が必要ですけどね」

（バルディエル万歳）

「まあ俺からは今回はとりあえずこんなものですね」

「わかったわ…じゃああたしからね…」

「こっちに来なさい」

シユン シユン

「こ、ここは…?」

すこし暗い部屋だが目の前にシリンダーがあり、脳髄??がある…

「この部屋の主は彼女よ」と、シリンダーをさす…

「それと、彼女が社 霞「ペこりm」(・)mと…」

(カオルくんてーだしそう…自重自重)

「彼女ですか…」脳髄に液体が…

「……生きています??」

「ええ、彼女はBETAに捕われ只一人生きている、二元捕虜よ……」

「捕虜……」

その言葉に愕然とした…肉体の無い脳だけ……が…

LCLだろうか?その液体に少し興味がいった

「すみません、その脳の保護液LCLです?」

「LCL?いえODLよ」

「それって何処で作られています?」

「それって重要??」

「ええ、かなり……」

「ふん……わかったわついでらっしやい……霞あとでね」霞へ……

「 地下最下層 」

「この反応炉で作られているのよ……満足？」

「副司令……ここは……反応炉とは？」

「BETAのエネルギー源ね……もっとも詳しくはわかってないわ……それを研究、利用するのがこの横浜白凌基地の役目なの」

(……まさか……)

「少し試してみたいのですがよろしいです？」

「なにを?……いえあなたは規格外ね……壊さなきゃいいわよ……」

「イロウル!!」

(思った通りだ生体コンピューターでもあるこの反応炉……情報が瞬

くまに流れてくる……

ん？逆ハッキングか？？小癪な……乗っ取りかけたところでSOSらしいのを発信しかけたので阻害

…更に解析)

「何かわかった？」

「解析中です面白い事わかりそうですよ」

(上位存在の確認、ほつき型、更に上位者、スパイ行為…ふむ…こんなものかついでに)

「バルディエル」

……

「副司令……」

「なんかわかったの!？」

「これ何なのかわかっていて、基地のエネルギー源にしてみました？」

「それを研究してたんじゃない」

「こいつは当ハイブの、重要なBETAです」

「?!?!BETA?」

「ええ、しかも、それを統括する上位存在が認められますね
地図があれば……」

「甲1号の事ね……」

「で、ついさっきまでこのBETAから上位存在に情報つつぬけでしたが、
ダミーをおいて、そこで上位存在と通信
このBETAはある意味コンピューターだったので
完全に乗っ取り自分の指揮下におさえました」

「ODLもひよっとして…」

「はい、交換で情報つつぬけでしたが、もう安心ですよ」

「で、次に光線級ですが…最初は居ませんでしたよね?」

「ええ…そうよ…」

「人類の航空爆撃に対抗して作ったクラスだそうです…」

「やっぱり…」

「で、過剰な大量な強力な兵器は、BETAにおける上位存在が感知すると、それに対抗した戦力を精製する…の流れですね」

「……………」

「ジムのレーザー兵器は多分発展を促す可能性もあります、
高周波ブレード程度は大丈夫ですね…」

俺単体+A-01位の数なら問題なさそうですが、（が連発したら
やばそうだな……………」

軍隊レベルで新兵器更新すると対抗手段がでそうな感じです

幸い前は殲滅できたので、情報を持ち替えた可能性はないですが…

今、上位存在との確認でも認められてません」

「他には？」

「また上位存在を集中とするほうき型の司令系統と確認できました地球上ではその上位存在を消滅させればBETAの発展もない事も…ただその際には他の星から、この場合月ですね期間ははっきりしません」

あらたな上位存在が撃ち込まれてくる事もわかってます」

「他には？」

「あとは他ハイブの構造、BETAの生産データ位ですね」

「それ何処かに表示できる？」

「執務室のPCにデータ表示させる事可能ですよ
あとはないですね、ところで提案なんですが」

頷く夕呼

「ダミーから上位存在へスパイをやりたいんですが」

「あなたがいればできるのね？」

「はい」

「わかったわ、やりなさい、けど必ず成果は報告する事」

「はい」

「他にはないわね？、じゃあ戻るわよ…」

（戻りながら考える…）
「副司令」

「なに？」

「ハイブ攻略戦の際状況等教えてください？」

「このハイブ攻略の？」

「ええ、」

「とりあえず記録などあるから上でね」

「はい」

side〜夕呼〜

(まさかまさかまさか…こんな棚から牡丹餅って…ありえない!!
なんなのよ…苦労しっぱなしだったのに…)

でも…凄い情報…これで人類は…)

(けど、とりあえず諜報員に関してはこいつがいるけど、
凄乃皇操縦に関してはやっぱり00ユニットは必要ね)

side〜夕呼end〜

|| 副司令執務室 ||

「このPCにDownloadすればいいっすね?」

「ええ……………あちよ「イロウル」まったあ」

「へ?……………あ……………」

「あんだ、まさかみたの?」

「あ、オルタネ「プロテクトの意味もないのね」……………みたいですね」

「はあ…みてのとーりよ」

(オルタネタイプ4…対BETAに対する諜報員育成計画
量子脳搭載の00ユニットによる情報入手を主目的としている)

オルタネイティブ5：アメリカ主体の他星系脱出移住計画 + G弾集中投下によるハイブ殲滅作戦通称、作戦名バビロン計画

A-01に関する裏情報：00ユニット素体適応者

00ユニット：機械の体に人間の魂を宿らせた

オルタネイティブ4の中核となる存在

生物根拠0生体反応0

量子電導脳搭載

などなど…)

「そ、この当基地はオルタネイティブ4の達成を主目的とした、わたし香月夕呼の為の基地といっても過言ではないわ…

あんたそこまでみたからにはただでは帰さないからね…覚悟しなさいでなんか助言はあるの？異能力者さん」

「と…まずは、オルタネイティブ5によるG弾での殲滅ですか…失敗しますね」

「対抗手段ができるのね？」

「はい、過去の作戦でG弾使いましたよね？」

それでBETA側での警戒ランクというのがあがってますね…多分もう2、3回で対抗手段を作る…まできてます」

「良いカードかもしれないけど、人類にとっては最悪ね…」

「あと、BETAは10の37乗の上位存在がありますので、他星系いっても…無事ではすまないでしょう」

「その数あるなら…でしょうね」

「G弾使う位ならまだ質量兵器…」

「コロニーはオーバーキルで被害が…ですが、の方がよいですよ…」

（ATフィールドつかつてのサンダルフォン攻撃かな??）

「そうねえ……」

「オルタネイティブ4に関しては…00ユニットは…ん、現時点ではわかりません…」

「AIという存在ならある事はあるのですが…」

「それでも、このハイブ内部情報やら、BETAに関してなどや、スパイ行為でかなりの達成度があがるわよ
これだけでも良いカードになるわ」

「まあ…正直オルタネイティブ5の地球に残った1000万人以外の人々は…」

「G弾による住めなくなった環境下の元 最後の一兵まで…ていうのは賛成できませんので、」

「改めて香月 夕呼副司令、協力いたします」

「わかったわ、せいぜい働いて頂戴ね」

「はい」

そう、よりよき未来へ…異邦者と、魔女が真に手を組んだ瞬間であった……

〓 〓 B55ハンガー内 〓 〓

副司令執務室から1番でまずはハンガーにきた

…そう取り込んだ残骸の改造整理等をするために…

「こうしてみると……自重忘れた??」

連邦、ジオン軍問わずに、戦艦やらも……戦艦はさすがに出せない
ので、スクラップのは、改造資源の元になるかな??とも思った

「あ、…やば忘れてた…とまずは…」

74式近接戦闘長刀 高周波ブレード化、電源：バッテリーカート
リッジ式へビームライフルのエネルギーcapの技術から、
カートリッジ方式を学び（貯める部分で）流用
多分連続使用可予定…ただいま運転テスト中

カートリッジの充電器…戦艦から剥ぎ取ったもので、普通のコンセ
ントプラグを付けてみた…200V専用か…
あったあったこれで利用できる
カートリッジの予備充電中

「で整理だなあ…」まずは完動品虚数空間内

ザメルへこれは終戦間際のどさくさでゲット
ハイゴックへミハエルのお古

副司令に話したザク系他

次に再生作業

ホバートラック

量産型ガンタンク

ジムトレーナー

61式戦車

マゼラアタック

ザクトレーナー

アツガイ

再生予定

陸戦型ジム

陸戦用ジム

ジム・コマンド(宇宙・地上)

ガンキャノン量産型

ザク・デザートタイプ

ザクフリッパ

グフ

ドム

リック・ドム

ゴック

ズゴック

陸戦強襲型ガンタンクへこれをゲット狙いでオデッサ作戦に…見事に

クラブロ

セイバーフィッシュ

現地で再生後取り込み

ビクトレー改…つぎはぎながら

ギャロップ カーゴ付き

サラミス、後期生産型

マゼラン

ムサイ

ユーコン

マットアングラー

ザンジバル

H L V

以上なもんです

再生予定は睡魔たえきれ……………

ハンガー内部で床に倒れてのカオル……………

夢の中では…赤いゲルゲグ機に遭遇し、二日間ほど、追われてコロニーに逃げ込む夢を…

…コロニー 密閉型農業用コロニー…売りに出せる作物をゲットした模様だ…

作者「な〜カオル最後の夢オチは？」

カ「実際にやられた夢ですよ、宇宙空間で、
残骸ひろってたら、宇宙人と間違えられて追っかけられたんですか
ら…。」

作者「おまえ、その時の格好は？」

カ「人間やめさせてくれたんですよ？そのままですよ」

作者「はあせめて宇宙服きて、作業用ポットでも…そしたら追いか
けられなかったのに…、でどうなった？」

カ「廃棄コロニーに逃げ込んだのですが、1個大隊のMSと、多分
陸戦歩兵旅団規模においかけられて、逃げ切れませんでした」
作者「かなり戦線に影響でてね??」

カ「で駄目かなあ…の時コロニーに同化わすれて…」

作者「それが持ってきたコロニーか…」

カ「はい、でも酷かったなあ……………」

第十五話 武装強化実行後の翌日その1 (現実世界トリップ込み)

投稿日

2001年5月17日

side(石橋)

(…………カオルまだもどってないのかなあ…………?)

最近、カオル探して定期巡回ルートとなっている執務室から最近許可がおりたB55ハンガーに向かつてエレベーターで下りていた

(…………今日もいなかったら…たしか5日前には帰ってくると聞いてたのになあ…)

エレベーターがとまり、ドアがひらくと…
一面戦術機と思われる残骸の山だった…

(え?なにこれ…)

見たこともない頭部、みたいなものもあるし…

この銃も…へえ

これは…バズーカー?戦術機サイズの…

これは斧よね??

なんか一つ目の色々な頭部あるわねえ)みると所、高熱のようなもので斬られたあとも見受けられる

しかし、昨日まである程度の武器(改造するとからしい)しかなかつたのに…

その残骸の山をまわっていくと…見慣れない機体が見えた

(この機体、口がくちばしのようになってるわね…

その隣は…タンクと戦術機を合体？

あ、タイヤなしの、装甲車みたいのもある…

隣のタンクは…見たことないわねえ…二連装ねえ

その隣のタンクはなんか翼がついてるし…

あ、丸っこい…この機体はマニピュレーターないの？

強そうでないし…何用かしら？

この機体は 頭部の部品が胸のあたりにもあるわね…

この機体だけ頭部の形が違う…)

のあたりまで見てると、床に突っ伏しているカオルが見えてきた

寝てるようである

(やっと帰ってきたとおもったら…油性マジックあったかなあ？?)

(あら？タバタ?)

招きました

「タバタ、どうしたの？」

「見ていた」

「あの機体群を？」

こくり

「今までのと違う戦術機だよね？」

「いや違う…根本的に」

「え？」

「私たちの戦術機は元は飛行機から発展したもの」

「あゝそうだったわね」

「これらの機体はタンクらしいのは別として、

二足歩行を主として航空力学を備わってない」

「……つまりは……」

「陸上兵器から発展されたと推測される

このタンクもどきもあるから多分」「はあゝ……久々に聞いたわタ

バタの解説…よっぽど興奮したのね」
／／／／こくり

「多分いやほぼ異世界の兵器よね…動かしてみたいなあ…」

「許可とれてる」

「本当??」

命令書…副司令印

武装はカオル立ち会いのもと限定だが、
自由に演習場内なら動かして良い

との命令書

対象A - 01

「じゃあ先任よばないと…あとであれさねちゃつゆ…」

「イベントだからよんである」

「いつのまに?」

「残骸みたら朝一で副司令にその後すぐ……」

「……………ひょっとして……………」

水「……………イッシー、あれってなに?わたしをどうみてるの?」

石「い、いえ…サー!!速瀬中尉!!ナンデモアリマセン!!」

水「……………うんぶんぶん声が裏返ってるわねえ……………」

高「そんな事よりこれら」

(助かるか…?)

水「……興味そるわねえ、タバタ、動かせそうなのあった？」

(助かったあタバタありがとう)

高「あの頭二つついてるのはハッチあいてる」

水「いくわよ!!」

side↳石橋end↳

……

「タバタあつたあ…?」

操縦席みると、こつちと違つとの事で多分解説書あるんじゃないか？で探してる最中である

「あつた…多分これ」

新兵でもわかる!!漫画入り操縦マニュアル MS系統ザク編
パラパラパラ

「へえ……正直これならわかりやすいわね ん？タバタは？」

「先任には無理なのみてる」

「タ〜タバタ!!」が本を奪おうとしてやめた……確かにそうみたいだ書いてある事が難し過ぎる

「操縦席はこの下、ここは教官用らしい」

「わかったわよ!!」

でていった瞬間にツマミをタバタは操作した… 初級

「みてらっしやいぬ〜」

……

side（石橋）

（タバタと中尉、のつてつちやった…私は…んゝ悪戯あきたから…
けどいきなり操縦方法わからない機体は怖いわねえ…

決めた、車両のにしよう…

……… どれが良いかなあ？この二連装のかな？

でも…この大砲…かなり長くでかいわね…74式の51口径105
mm以上??）

車体ハッチを見つて覗き込む

（こっちは…砲手席かな…?）（こっちは…操縦手席ね…

通信手席は…?乗員2名??）

（じゃあ、のつてみましようか

…シートも良いわねえ）

戦車の操縦方法は大体は一緒である…

（見慣れないスイッチもあるけど…セルは…これかな??）

動力音がした…ディーゼル音がしない…

（動力は何かしら?）

そう思いつつ地上の演習場に61式戦車を、後に改良型がG型戦車
と呼ばれベストセラーになるのを進めた…

〓 〓 地上演習場 〓 〓

「きゃ、あ、ありえない」

限用戦車にはありえない機動力だ、不整地速度踏破速度が90km
最高速度がキャタピラにして整地200kmを越えてるのである

「はあはあはあ、なによこのモンスタータンク…」普段戦術機で高
機動おこなってても高さが違う、

地面に近いのである…

飛行場着陸時にB747でのとB737の違いでわかる筈…

しかもジャンピングブースタ付きである…

衝撃もほぼ直にくるから半端ない

MSとちがってGキャンセラーは使ってない……

(少なくとも…突撃級の速度から撤退可能よね)
そこが重要ですね…

一通り運転終了して、ハンガーに戻すとカオルが悪戯された顔のま
ま起きていた

「カオルー！！」

「おう、イッシーか」

「何なのよこの戦車」

「61式戦車、レーダーが無効になり、有視界戦闘となった為に、
時代から駆逐された戦車」

「え？レーダー無効??」

「…まあ異世界の話しだからきにすんな…

モビルスーツに主役の座を奪われただけだよ……とそっぴゃあ、何

機が足りないなあ……」

「副司令から操縦のみなら許可でたからね……」

武装は今のところわかる人、つまり

カオルが立ち会わないと駄目って話よ」

「なるほどね……あ、ちっと聞きたい事あるんだ……まあ座って」

「なに？」

「この間の戦いの時気になったんだが、おぐの機体に戦車級がとりついちゃったよな？」

「ええ……」いやな事を思い出した……おぐが食いつかれた光景が……

「なんで取り付かれたんだ？取り付かれた後の対応は？」「え？普通は87式の36mmで弾幕をはる、または120mmの散弾で遠距離のうちに駆逐するのが普通よ、

あの時は、無理にミサイルを撃とうとして出ちゃったからって話してたわ……」

で、取り付かれた後は、振りほどくか他機に短刀でそいでもらうしかないわね」

「だからイッシーが急いで近寄ってたわけか……」

頷く（そこで、カオルが助けてくれたんだけどね）

「じゃあ、戦車級に寄られたら効果的な、取り付かれたら効果的なのはないんか？」

「ええ……逃げるしかね……多分1番衛士を食い殺してるといってもいいかも」

「武器改造も良いけど戦車級対策性急だなあ……」

「なあCIWSは何故使ってないん？」

「CIWS？あ、ああ、アメリカ側での呼称ね、長刀の事よ」

「あ……確かフアランクスだ、そうバルカンフアランクスはどうなってるんだ??」

「……知らないわ……」

「おし、……今度は行き先決まったかな？」

「え？今日かえってきたばかりじゃない」

「昨日だよ昨日」

「昨日だって、ほとんどかわりないわよ」

「でもみんなを守る力がそこにあるなら取得しておくべきだろ??」

「……わかった、すぐにかえってきてね」

「ああ、」

西「いいかんじで悪いけど…後ろの山どつするの…？」

「西沢（先任）少尉」

西「このままで？」

カ「手足りなかったんですよね〜さすがに…ちょっと行ってきた後で考えますので失礼します」
タ「……逃げた……」

イ「うん」

side〜石橋end〜

〓〓 副司令執務室 〓〓

シユン

「失礼しまあ〜って霞ちゃん？だったよね」こくり

「副司令は…？」

顔をドアの方にむけた……

シユン

「あら、なに？……さては霞に手を出したのね？」

「あの〜まだ手を……」

「まだ…ねえ…手をだす予定なのね？駄目よ犯罪よ？」

「……………もういいですよ……………話変えましょう」

「強引ねえ」

「別の世界にまたいつてきます」

「また??……………今度はオーバーしないでよ、で今度は何処に行くのよ……………」

「自分の元の世界に……………で自動近接防衛射撃兵器を学んできます」

「ふくん…期間は？」

「そうですね…余裕いれて二日いえ、三日程かな?と……………」

「わかったわ…ところで、行く前に自分の顔みた？堪えるの大変なんだけど……………」

「へ??？」

「はい鏡……………」

(肉の字……………いつのまに……………)「JJJJJJ」

「洗面所は??？」

「扉でて、右まがったとこよ」

シユン

……………

シユン

「準備いいのかしら？」

満面の笑み……

やられたと思っただ瞬間……

「いってきます……」世界扉”」

” 現実世界 ”

「とここは……」

そう、見慣れた光景が広がった……簡素な住宅街の中の部屋……

俺の部屋である……

(……親父、お袋、美幸《妹》……)

(……)

俺の部屋はそのままだった……

(……は！！そうであれば処分しなきゃ！！)

うんわかるよ、わかるよね　つまり親に見せられない物

(えっとあれ、これ、それ、これも、あ、これもだ)片っ端から虚数空間にほりり込む……　どんだけあるんだか……

(あと、どのDVDだったかなあ……ラベル交換したから……)

あ、本もそうだ……)

確認しようとした時……

ドアを開け

(やば！)「”幻影”」

られた……　相手はバットをもった妹の美幸だった……

カランカランカラ……

「え……え……？お、おにいちゃん？？」

（あ、やば……しんでたんだよな……おれ……）

「お、お兄ちゃん！！」泣きつかれて飛びかかられた……

「お　お　グス　おに　い　」

（美幸………けど………）

「美幸………ゴメン、俺しんだんだ……」

「グス　な　な　なに　グス」

「美幸！！話をきけ！！」　で剥がす

「　お　グス　に　い？」”幻影”解除

「！！力………ヲル君？で、でもお　に　い……」

「美幸、おまえ2次小説好きだよな？」

驚きながら頷く

「たまたま、それになつたんだよ……」

「え……？グス　じゃあ……」

「ああ、多分思った通りだ…俺はこの世界にいられない」

「う…ん…」

「だからな、美幸悪いが…」

「わかった、お兄ちゃん」

「ゴメンな…」

「あ、お兄ちゃん、父さんと母様、

あたしの為に頑張るって立ち直りつつあるから、心配はしないで」

「ああ、わかった…とじゃあ、美幸…バルディエル」で造形した元の俺の像を作る

「これでいいか？」

「うん…あ、お兄ちゃん、やっぱり他の2次のように酷い世界なの？」

「ああ、死亡フラグまんさいのな…だから見捨てられなくなってさ…」

「そう、あ、もし私がいたら…護ってね」

「おう」

「また来てくれればいいな…じゃあ、いってらっしゃい…」

「あ、美幸、一つ頼みが…窓から飛んでいくからさ、鍵しめといてな」

「うん」

「じゃあ…な」

|| || 池袋 || ||

(やばったやばったやばったやばったやばったやばった)

追われている…女性の集団に…

この顛末は、自宅の隠しておいたこずかいでパチンコで少し稼いで、お土産もかっしておくか？でマイホに、いこうとした時だ…

渚カヲル君がリアルにいたら…の騒動になっていた…

(どーすんだよ、これ、どんどん増えてくるし、まだ陸戦隊相手が楽勝だああああ!!！)

30分経過…池袋は大パニックになっていた…

(ちっくしょー)

第十五話 武装強化実行後の翌日その1 (現実世界トリップ込み)

投稿日

まいど後書きまでありがとうございます
今回は二部構成でお送りします

第一部

少し兵器についてご説明します

地球連邦軍61式5型戦車

不整地踏破能力は記載あるのですが
最高速度が記載が見つからないので
モンスターマシンに仕上げました…

ガンダムの世界にならなきゃしばらくは主役だったのでは…？
だと思いましたので

また装甲で勝てないザクに勝つにはが機動力でしたので

まあ詳しく私見解してるのは後ほどかく、後書きで…

61式たんぬはロマンだ！！(イグルファンの叫び)

…………… 第二部

作者「ねみいいい」

うん徹夜で仕上げてるもんね…話がどんどん進む…好きだもんなあ…

けど 自重しないと絶対あ号は対抗手段だしてくる…必ずだ！！

あ号「その…とおり…だ……………」

作者「おまゝ、らすばすが個々にきていいんか？」

あ号「……わたし…より…うえ…いるぞ」

作者「……らすばすでなく、バラモスレベルかよ……妄想力越えるぞ……」

あ号「……宇宙戦艦ヤマトをだせば……よい……」

作者「あゝヤマトね、惑星破壊レベルだしなああれ……パチンコもまけたし……なんでガラミスたおさないんだああ……」

あ号「……わたしが……そうさした……」

作者「てめええ!!ぬっころす!!」

チーン 作者帰りうち……

この後書き書いてある頃…… 作者はジャンフェスの参加つかれで……
酒を飲んでますw

テレビのワイドショー等のニュースから

「ただいま社会現象となっておりますこの騒ぎ

なんと、ここに渚カヲル君が現れたとの情報で、沢山の方がこの池袋に集まっています」

別チャンネル

「のように、ネット上にも写真が流れて」

別チャンネル

「すみません、なにをなさっているのです？」

「カヲル君を探しにきました!!」

別チャンネル

「昨日の騒動により、怪我人44名出て、店頭が壊された等の被害で、

損害額の見積もりは3千万にのぼる予測です

しかしながら未曾有の人々の集中により店舗の売上はかなり出始めています

また早速ながら便乗コピー商売が出始め版權元の…」

その頃カオル君は…

（やばかったなあ…時間くった…幻影はうまくかかってるよな？）
カラスになっていた

都会部分でも十分に怪しまれず全国的にいるからである

さて、前回の池袋騒動の逃げたルートは…

池袋駅の男子トイレ個室に逃げ込み

バルで同化し、物質として移動しながら、埼京線の車両に同化

で終電で上手く新木場につくようにし、
離脱してカラスに”幻影”でなり、飛んでるのである

(お…見えた海上自衛隊横須賀基地…目指すのは…きりしま)
最新式のCIWS Block 1Bを使用しているからだ
ある意味趣味に走っているかもしれない…

(さてつと)

バルディエル

CIWSだけでなく艦全体と同化…離脱

(うまくいった…あ、そくだ99式自走砲と弾薬給弾車)…北海道
だったよな?…
飛行機に同化した方が無難か…)

…

羽田にくると…うたれました…バードストライク対策ですね…

しょうがないので…北海道の方角にいく飛行機ねらって…

(ん?あれはSKY!!あれなら!!)北にいくは…羽田―新千歳
―旭川線のみ、
B737-800ウイングレット付きに同化して、空の旅を楽しみ
ました…

新千歳空港手前で離脱…そのまま滑空で東千歳駐屯地へ…

見事、二台とも取得できました

ついでに目についた90式戦車回収車、重レッカも…

三日目

さてつと…北海道きたから、今度はミスらずに…

「”幻影”」朝一から駅近くのパチンコ屋へ…

花の慶治にすわり…

「イロウル」（お、ここが大当たりか、チェッカーとおったなうっし）
でふきはじめました

（イ）20連3連41連5連で終

60箱しめて、30万、余りはお菓子に変えて…

北12条のドトールで珈琲豆…ブルーマウンテンブレンドと炭火珈
琲でいいか…ゲット

駅なかで、生キャラメルとりあえず12箱ゲットし…

大通り公園のトイレ入ったところで

「”世界扉”」

（残金はとつとくか…）

2001年5月20日

〓〓 副司令執務室 〓〓

「あらお帰り」

「ただいまっす」

「今回は予定通り??」

「お土産です」で珈琲と生キャラメルを渡す

「あ、ありがとね」

(珈琲で目を麗しいてるなあ…生キャラいらんかったかな???)

「では、後程…ごゆっくり」

シユン

(霞ちゃんは…脳随の部屋かな?)

シユン

(あ、いた)

「霞ちゃん」振り向く

「はいお土産」

「これは…?」

「俺の世界の札幌土産、生キャラメル甘くて美味しいよ」

「ありがとうございます」ペリリ

「じゃあね」

「ばいばい」

シユン

(さつとと、A-01の待機室に)

〓〓 待機室 〓〓

「誰も居ない…となると…?」

〓〓 シュミレータールーム 〓〓

「お、いたいた」

模擬戦闘訓練をしてる模様だ

(ん〜まあ、あんまり模擬戦闘訓練は見てもなあ……)
涼宮中尉が見えたから、手をふるると気がついたようだ…

お土産で一人一個ねを伝えて退出する

邪魔しちや悪いからなあ……

〃〃 B55ハンガー 〃〃

不知火と、撃震の下半身及びコクピットブロックが入ってきたよ
うだ

改造タイム

不知火

んゝ ガンダム世界の装甲材超硬スチール合金に変えてみた……

防御力UP 機動力大幅down

…主機出力が足りないんだよね… スチール装甲だし（重い…）

主機を核融合炉に変えて見ました

防御力そのまま 機動力最初よりUP

ふむ……

ものは試しに 射撃テストを廃材使ってやってみた……

87式突撃砲vs超硬スチール合金

36mm突撃砲 ききません

120mm突撃砲 徹甲弾……2発は耐えた……

いいんじゃない……

…初期のザクマシンガンで試してみた

M120A1vs超硬スチール合金……1発耐えただけなのか…

あ、チタン・セラミック複合材 ジム・コマンドやザク 改使ってたんだ で思い出した… 廃材装甲テスト

120mm 徹甲弾vsチタン・セラミック複合材……8発…

M120A1vsチタン・セラミック複合材……4発か…

あ、確か…

MMP-80…これは2発耐えたね…

ビームスプレーガンvs超硬スチール合金 うん これも1発はたえてる

vsチタン・セラミック複合材2発堪えるなあ……

あ、ジム陸戦型…ルナチタニウム合金ガンダリウムだった…試してみました

120mm徹甲弾…20発でも貫通せず

M120A1…15発か？ジム陸戦型、ガンダムの戦価納得

MMP-80 8発か…

ジムスプレーガン 6発…

ガンダム主人公機最強だなこれは

確かこの後ビームライフルの高出力化が始まるから……
ガンダリウム合金が標準化なるんだっけ…（Z以降）

さてっと…

ルナチタニウム合金に改造しました

結果、
防御力大幅UP 機動力大幅UPに成功…
C I W S 要らない子になりかねない…
案外戦車級の噛み付きに耐えちゃう?? なので、捕獲しなきゃ
なりました…(要検証)

撃震エヴァ仕様(上半身)

撃震の下半身をくつつけて、下半身も生体構造にしました

コクピットは…一応弄らず

装甲…ルナチタニウム合金に変換

エヴァ撃震仕様の完成かな?

武装は出力が余ったし 後程…

とそこへ…

「カオルー生キャラメルありがとうね」

「ん? あ、イッシーか…」

「あ、改造? どころへんを変えてるの??」

「ああ、不知火は、装甲材と、主機ね…ルナチタニウム合金と核融合炉搭載してみた」

「で、で??」

「結果多分だが…戦車級にたかれても耐えられる装甲、機動力

大幅UPになっちまった……」

「それ本当!?!?!?」

「実験データーな、一番下のルナチタニウム合金、87式突撃砲徹甲弾20発でも耐えてるだろ?」

「え、ええ本当ね……」

「ただ、このルナチタニウム合金は、月にある素材が必要になってくるっつ話なんだよ……」

今は俺が直接装甲材を変えるっつ事でしか無理だな
しかも、これは変換時間がかかる……」

「ね、これ貰っていい?」

「ん〜どうせならもう、少し弄りたいからもうちよつとまってる
れ……」

けどあの撃震はとりあえず乗っていいぞ」

「え〜〜〜　撃震?」

「中身は全て変えたから、外側に撃震を纏ってるだけだよ、コクピットはいっしょだけだな」

「う〜……乗ってみる……」

「あ、ちょっと一言、フルパワーで動くとしぬからきいつけるよ」

「………なわけないでしょ、撃震が……」

「中身は別物だぞ……」

「……………わかったわ……」

結果……撃震エヴァ仕様のGに耐えられず失神したイツシーが見つかった……

要耐G設備……

……………

さてつと、イツシーが乗っていったところで残りの作業を……

今日再生できたもの

陸戦強襲型ガンタンク

ザク・デザートタイプ

残り10機種か……人手が足りないなあ……………

人が駄目ならロボットか……作業用補助出来そうなのは……
00のハロ？、ナデシコの木連のコバツタ？……………

ナデシコに決めた

明日 またいくか……

2001年5月21日

〓〓 副司令執務室 〓〓

「あちゃーあんだけいったのに……………」

「あんだねえ…どういった機体作ってるのよ…
しかも一週間入院の話じゃない」

「一週間もですか…」

「あと、さらにもう一人も失神、こっちも二日間程入院、帰って来ないわ…」

「……………」

「しかも、整備士の手におえない、生体駆動…不気味がってたわ…」

「まあ…でしょうね」

「使えるの？そんな危ない機体つくって」

「使えると思いますよ、別世界の決戦兵器がモデルですし」

「決戦兵器？」

「ええ、人類の存亡をかけ、神の使わした使徒と戦う為に、14歳の子供が乗って戦うという」

「……………14歳??」

「適格者しか操縦できないから…が正しいでしょうね、で世界でも、5機までしか、
が暴走事故とかで、戦わずに損失等で
厳密には3機しか戦いぬいてません」

「……………」

「で、自分の能力はその使徒の方の力なんですけどね」

「あなたの力と戦った兵器ね……」

「本来ならLCレプラスエントリープラグ等で総合的にGをキャンセルするんですが……
なかったので戦術機コクピットを……です」

「決戦兵器ねえ……………テストしてみる？BETA相手に……」

「はい？」

「実は、今日佐渡島ハイブ間引き作戦が実施されてるけど、苦戦してるみたいなのよ……で要請が入ったわけ」

「なので軽く戦闘に混ざる程度で良いからいつてみる??？」

「了解です」

「駄目そうだったら撤退でいいから、生きて帰る事を重点においてね、あとA-01も」

「あ、今回はA-01の方はご遠慮を……」

自分一人だけのほうが逃げるなら逃げやすいですし……

あと虚数空間に撃震もつてくつもりなので、
移動手段は要らないです」

「……あなた一人で大丈夫なの？」

「……世界の命運をかけた異世界の決戦兵器の実力見てみたいと思
いません??」

「……わかつたわ……いつてらっしゃい」

「渚カオル少佐!!!佐渡島ハイブ間引き作戦に出陣します!!!」

……

カオル報告

シャワートイレを覚えました

JR205系を覚えました

臨海高速鉄道70000型を覚えました

レール関係設備を覚えました

海上自衛隊 こんごう型きりしま 覚えました

B737 - 800ウイングレット付き覚えました

陸上自衛隊 99式自走155mmりゅうだん砲 及び99式弾薬

給弾車

及び90式戦車回収車

及び重レッカ

覚えました

作者「カオルくシャワートイレ覚えたん？」

カオル「ん？覚えてけど？」

作者「なら一つ作ってくれよ、最近下痢気味で拭きすぎて血がでちやうんだよ……」

カオル「まあいいとしてなんで下痢？」

作者「多分お酒飲み過ぎ??？」

カオル「飲み過ぎ!!太るよ、アル中になるよ!!」

作者「う……」

カオル「禁酒汁!!」（作者が倒れたら俺どうなる???)

作者「わかった……明日からやるよ」

カオル「はあこりゃ駄目だ」

何日もつかない???

…… 第二幕 ……

イッシー「ねえ作者」

作者「なんだ??」

イッシー「CIWSはわかるけど…リスト上の99式はなに？」

作者「趣味に走ったw」

イッシー「本当に？」

作者「まあ本当は異世界土産とおもって、甘いもの甘いもので、俺が買った事あったので、あっと思っただけなんだ…」

イッシー「なるほどね…うん甘いよ」

作者「うんこの話で途中退場だからお詫びな」

イッシー「え？ちょっと作者!!さらっとな重要な事いわないですよ！」

作者「実は、思いつきり全力機動して…全身複雑骨折で衛士生命がたたれる…」

イッシー「ちょっと！そんなに重体じゃないわよ！！勝手にしないでよー！！」

作者「で、カオルがお見舞いにきて、そうだなあ…病室内でイチヤイチヤ」

イッシー「！！……………」

作者「うっしそれで行くか…」

イッシー「そんな話にするなあ…！！パワーボム！！」

作者 チーン

俺は佐渡島に向け不知火君で飛んでいた
撃震の検証をする為に……

撃震エヴァ仕様スペック 変更点

装甲 ルナチタニウム合金(全面的)

主機 S2機関

駆動 生体駆動

武装 高周波ブレード(駆動時間未検証)専用バッテリーカートリ
ッジ10個

M-120A1 ドラムマガジン5個装弾数332発だから、16
60発分

MMP-80(90mm) 100連装バナナマガジン10個

予備としてもう一本高周波ブレード

間引き作戦とは…攻撃側人類が攻撃後補給等含めて5割以下の戦力
に下がるにも関わらず、
奇襲攻撃されないために必要な攻撃である…
との説明を聞いた

それおかしいんでないの?とも思う

組織的抵抗できる基準が3割≡全滅の基準5割≡壊滅

10割≡文字通り玉砕

って事になる

何故なら、その後の兵力の回復が…文字通り…回復に時間かかるからだ…

5割へった状態からそのへった5割を回復させるのにどれ程時間かかるのだろうか？

また兵站到しかりだ

第二次大戦の日本と同じ、

つまり日本⇨人類

連合軍⇨BETA

の図型がみえてくる…

その物量でせめられると……崩壊するのが目に見えている…

が予定数を削らないと、先日の防衛戦のようになるらしい…

本当BETAは嫌らしい…

そうこう考えているうちに佐渡島近辺に入ったらしい

光線級の照射をよけ 低空飛行へとうつつる

海岸線が見えた、

がまだBETAは視界内に見えてない

(うつつし 出すか)

虚数空間から撃震エヴァ仕様を引っ張りだす

ハッチを開きコクピット内に

「それじゃあ、いっちょやりますか…！」

…… 3分後

「や、やばい……」

Gがキツすぎた…というか、なに？

こりゃあ、みんながみんな失神や病院送り当たりまえの欠陥機……

というか、この世界のコクピットのGキャンセル能力のなさに……

「う、動かせないなあ……」

要改修の結論をつけた

「バルディエル!!」

(結局は俺が同化するしかないんだよな……)
になってしまった…

不用意に強化しないでおこつ

全身のチェック、正常

(いつきまーす!!)

BETAのいる方向へ

うん快調快調……

発見!!

まずは戦車級8か…合金テストなのでたかって貰いましょう…

(ほーらしい子いい子

よっし……たかってきたぞ…

登ってきて……歯が滑ってるな…

うん食いつかれない)

歯はたてようとしてるが…歯よりも、装甲の方が強度は勝っている
…orz)
(うん：ルナチタニウム合金の場合は学んだC I W S いらぬ子だ
ただ、歩兵いたらやっぱりなので、
なにか考えるべきかな?とも思う…)

(さて、戦車級相手は終了か…)
戦車級は潰しまくりました 手が届かない場所は 兵装担架のアー
ムを使って…
一匹は捕獲 洗脳して配下にし虚数空間行きに
(要撃級はどこにいるかなあ)

要撃級発見!!

(こんちわあ) ああ、喜んで叩かないでくださいよ)

つまり要撃級の腕による殴りは効かない…のがわかった

うんルナチタニウム合金万歳 かな?

この子も洗脳して、虚数空間行き

(…、光線級重光線級か…体にあなあけなきや駄目か…)
(集団の中の方向だよ…) M - 120A1を構えて…突貫!!
装甲耐久に使った弾は徹甲弾 つまりは対大型種用…
ひとなぎだけで…

この世界M - 120A1だけでいいんじゃないかなあ…の印象

装弾数も一マガジン332発だし…

(固いやついなかなあ…あ、突撃級…)

かるく一発で沈黙した模様

うん超硬スチール合金以下ね
ただこのドラムマガジンも結構な大きさするから…マガジンラックも考えなきゃ

(お、いた光線級ちゃん…カモン

流石ルナチタニウム合金…びくともしないな…インターバル暇…

…

うん…ジムスプレーガン以下?位か?)

7発おんなじ箇所にくらって溶けはじめたから斬

補修…

(あと相手してないのは重光線級と、要塞級だなあ…何処だろ?)

(あ、要撃級君、殴らさせてね…腕にあたって手の間接が痛いよ…)

マニピレーターの間接部分がひしゃげた…流石に弱かったようだ

補修…

(ナツクルガード付けてみるか…

これなら?? うんいいね)

手甲で要撃級の1番固い腕ところを貫く

(ただそのさいは銃はもてないなあ…)

まあルナチタニウム合金製ナツクルガード 完成かな…

(スパイクガードいや、レッグガードというかブレードはどうだろ？)

とりあえず高周波ブレードを、はやしてみると…面白いように、小型種がきれるきれる

(出力の問題もあるから、核融合炉搭載型以上限定かな？)

そうこう、してるうちに 取り残され、やばそうな戦術機集団を…
(あれは陽炎だったけ？)
助けにいった

side 陽炎パイロット

『HQQこちら第1351中隊所属6番機、当方面壊滅状態、付近大隊含め残機7離脱不能、至急救援をこっ！』

(壊滅的に絶望よね…お兄ちゃん敵とれずにごめんね…)

『こちらHQ、今臨編3個大隊向かわせた！頑張れ生き延びろ！』

(あ、弾が無くなったさっきのでラスト？)

今の指揮官はさっき発信してた6番機さんだっけ…)

「こちらホーク12誰が弾頂戴！！弾ぎれ！！」

『ホーク12、パープル5だ、一個わたすぞ無駄弾うつなよ！！』

「ありがとう！以上！」

弾を貰い マガジンをかえて…

撃つ！！

ブ
ブ
ブ
ブ
ブ
ブ
ブ
ブ
ブ
ブ

(フルバーストでないときちゃう くわれちゃう……)

『チヨコレート6!!!2時の方向!!!』

『2時!要塞級でたんか!?』

『いや、救援みたいだ!助かったぞ!』

『ちよつとまって!なんでハイブの方向から救援くるんだ』

『そんなのしらねーよ、とにか……え?』

『一機??なんでBETAが…切りひかれて?』 道を切り開いて
る……

撃震???

『異常だな…まさか斯衛か?』

『あれ撃震みたいけど…』

『撃震???だったらあんなにならねーよ』

通信しているうちに… その撃震 私達の周りを回って
小型種は、

撃震の、良くみたら脚部に刀をつけてたみたい
それでたかられる前にきれるのね…

突撃砲はみた事もない形のが担架に装備されてる…

『助かったよおたく一機なのか?』

『そうだ』

なにか聞き覚えのある

『おたくの機体テスト機なのか？撃震の格好しながら』

『まあそう思っていていいかもな』

その撃震の方、そのままBETAの分厚いところに突っ込んでいって、

戻ってまた別の方角のに突っ込んで

小型種を切り刻み、切れない大型は殴る斬る…

『なあ俺達撤退をしたいんだが…、弾薬も底が見えてるし、テストの邪魔かもしれないが手伝ってくれるか？』

『わかった、どっちの方角に逃げるつもりだ？』

『8時の方向』

『わかった…切り開く…！』

『俺らもいくぞ…！アローヘッドワンでいいか？』

『『『『『了解！』『『『『』

『予備の弾薬もここらもないのか？』

「はい、わたしの87式弾ぎれして、貰ったのです
長刀ももう折れてます…」

『ポジションは？』

『突撃前衛、コールサイン ファイヤー12…第1352中隊所属です』

『わかったこれを貸そう。』

『試作品だから稼働時間はわからないから、これがカートリッジだ』

『カートリッジ?』

『剣に電源を通す為のバッテリーと思ってくれ、きれたらこうかえる』

ボタンらしいのを押すと、刀の色が濁って、

つかの後ろ部分からカートリッジ?がでた…それをかえた

『この色の交換で判断してくれ…予備カートリッジもつける』

といって、担架にあるマガジンラックに…

『よくきれる剣だからな、切り開くぞ!』

「あなたは?」

『なに拳と銃があるさ』

みると、手の部分を手甲らしいので隠している…

(あれで殴ってたのね…)

あと担架につんであった、見たこともない突撃砲を左腕に構えてる…

『いくぞ!』

「はい!」

撃震の方のすぐ後ろにつく…小型種が面白いように死んでゆく、(10時突撃級!!) 邪魔な小型種をひとなぎして後方回って

小型種ひとなぎ、突撃級の背部から!

サクッ!!

(貫いた??)

『ああ、正面からでも大丈夫だぞ』

(天国にいるお兄ちゃん!! この剣ほしいです…)

「この剣は、いつ配備されますか？」

『さあ?…よつと……とりあえず作ったばかりで、今のところ…ふりしかないぞ』

「この剣早く配備してほしい……えい!!……ですね」

(突撃級正面からでも楽でした!!…!!)

(後衛も順調について来てるようですし…)

要撃級!

サクツ 腕も軽く切れるんですね…

ますますほしいですよ兄ちゃん!!)

「ところで所属伺ってなかったのですが…」(肩のエンブレムは見たことないなあ…)

『ああ、俺か?国連軍…』

『おいおい、国連さんがかよ…』

(いいところなのに!! まあビル21、は…しょうがないか…)
『また俺らをおいてにげ……照射警報!!…』

(え?)

後方確認すると… 回避行動とって…

『ギャー!!……!』

ビル29が、光線さげきれずに…

『そつちにいくぞ!!8時は任せた!』

「はい!!」

『また照射警報!!』

(危な!!え???)

『え?う、嘘だろ??』

(撃震が体でルクスの光線受け止めたの?)

『あつちか!!』

あの機体は、切り開いて光線級の集団方向に…

(あ、重光線級!!光って危な!!!!)

……

重光線も体で受け止めたの??……

……

あのテスト機なんなの??)

『た、助かった、ようだな……』

『あ、あ、』

「ほら…戻ってくるようだし先にすまないと…」

『なあ…あなた、その装甲なんなんだよ…重光線級の耐え切れるって聞いた事ないぞ』

『耐えてはないな、四発目はやばかったな』

『それでも十分だぞ！なあ俺の中隊にまわしてくれよ』

『抜け駆けすんな！俺が』

「あ、あたしも」

『いや、まあ操縦できるかどうかよりGに耐え切れるか…だな』

『そんなにすごいのか？』

『あの機動だと…』

『俺以外に二人乗ったんだが一週間と二日それぞれ入院したと聞いた、多分全力で動かしてないがな』

(そんなモンスターを軽々……)

『国連さんは大丈夫なのか？』

『まあ俺は人間やめてるしなあ でもキツイぞ、

この問題が片付かないと、とても出せないようになったからなあ』

そうしゃべる余裕がでたとき…

「あ、救援部隊だ！！」

『お、じゃあ俺はまだBETAにちょっとかいだすから刀とカートリッジ』

「はい……」

(返したくないですううお兄ちゃん…)

「ありがとうございます！」

（あのエンブレム忘れない！！）

あ、所属名前……）

……

あとで、中隊は解散になったので連隊長さんに
こっぴどく怒られました…

所属名前なんできかなかったのかを

その撃震の話は、かなりひろまったみたいです…

第四世代機とか、どっかの国のテスト機とか……

光線を受け止めたのがインパクトありましたから……

早く、ほしいです……

……

カオル報告

撃震エヴァ仕様

変更点

追加武装

ナックルガード（ルナチタニウム合金製）
レッグ高周波ブレード
すねの外側、前面

太股の下側前面

作者「ん〜」

神「作者どうした？」

作者「いやあつてたかなあ…と装甲や武器とか…」

神「なら根拠だして納得して貰えれば??」

作者「すね…まあ一年戦争の記述で、まずF型のザクマシンガンが歯がたたず、反対にガンダムのバルカンでやられた…がありますよね？」

でイグルでは対モビルスーツ戦術で61式はザクJ型と対戦しなければならぬ…でした」

作者「正面から集団で待ち伏せし集中砲火でザクを仕留めてるシーンもあります、逆にいうとそこまで集中しないと…ですね」

作者「で連邦のMSがでてくるとそれにあわせて被弾し歯がたたなくなるので、

武器及び装甲材を開発…」

作者「で戦術機とMSはと考えると片方は航空機、片方は陸上兵器…になるからです

単純に浮くもの、陸上を制圧するもの…の違いですね」

作者「そうかんがえると155mmキャノンでも、正面からは耐え切れたのが、超鋼スチール合金」

作者「でそれにまさったチタン系合金、更にまさったチタンセラミック合金、その更に上をいくZ時代のルナチタリウム合金系、」

作者「まあ、そんな感じかな？の設定です

今現在でも軍用機ではチタン合金（比重の重い）はエンジンなど重要な部分、アルミ合金はそれ以外の部分に使われています」

作者「チタンとスチールは比重の違いで、装甲の厚さも…でまあ前回の話の結果ですね」

神「まあいいんじゃない？」

作者「でもさあ初速200m/sってなによー！！航空機まで届かんw」

〓 〓 副司令執務室 〓 〓

コンコン「副司令、いますか？？」

開かない……

司令部かな？？

〓 〓 司令部 〓 〓

「失礼します」

（初めてだなあ……副司令、中尉もいないか）
「すみません、どなたか副司令に報告なんですが」

「火急ですか？？」

「いえ、」

「でしたら明日にでも……」

「わかりました……来たことだけは言付けを……失礼ですが」

「リン・ミン準尉です。ピアテフ中尉付きの、」

副官兼オペレーターです」

「よろしくお願ひしますね、渚カオル少佐です副司令直属の技術士官です」

「確かに言付けをうけたまりました!!」「さてっと寝よう…」

2001年5月22日

〓〓 副司令執務室 〓〓

コンコン「副司令いますか？」

「どつどつ」

「失礼します」

「お帰り、報告は？」

「一応纏めておきました」
パラパラパラパラ

「ふん…対Gが一番ネックなのね、あとこの主機のS2機関？」

「スーパーソレイド機関の略称ですね。永久機関ですが、取り扱いは難しいですよ」

失敗するところから帝都までが消滅します」

「こっちの整備士には絶対扱えなさそうね……」

「ええ、ですのでワンオフか、数機程度かな」と……」

「装甲材は、面白そうね……量産はできないのね……」

「基本こっちのアルミ合金系よりも重いですし、ルナチタニウム合金は製造の問題で地球ではつくれません
ですので自分が改造するしかないです」

「ですので戦術機には主機を改造の上でないと、搭載不可がガンダム世界の装甲ですね」

「で、……この駆逐数に間違いないとすると……報告合わせて、多分増援来ない限り3ヶ月は大丈夫かしら……」

「まあとりあえずいいわ、引き続き改造等お願いね」

「あ、でまた別世界に行きたいのですが……」

「また？、今度は何処よ……」

「機動戦艦ナデシコの世界で、目標は木連の作業ロボット、コバツタです」

「作業ロボットね……」

「まあ人手が足りないというか、B55に整備士が「整備士は駄目、消滅したくないもの」ですよね……なので」

「わかったわ…期間は？」

「木星に行くので「なんでもありね」「一、二週間位かな？」と……」

「できれば、5月29日は途中でもいいから、基地にいてね。面白
い事あるから……」

「？なにかあるんすか??」

「いいから」

「わかりました」

「じゃあ、いってらっしゃい」

「”世界扉”」

＝ 機動戦艦ナデシコの世界 ＝

「ここは……ん？」

テレビで見たことのある戦艦ナデシコAが、大気圏外へ上昇しようとしてた

「原作の前半か？なら……」

こっちの世界にくる前に考えた作戦は、

バツタに遭遇、乗っとり

イロウルで同化しながらチューリップでジャンプ

(多分死なないはず…イロウルはコンピューターだ！！)

木連へ プラントゲット

のながれだ… となると…

(ナデシコに取り付いた方が早いかな…)

たしかサツキミドリコロニー崩壊あたりで、

ちよっかいあったような…うっし!!)

「シヤムシエル!!」幻影”」

レーダーに引つ掛かるか心配だが…
相転移エンジンの噴射口から近寄れば…

(よっしや!!)
「バルディエル」相転移エンジンの一部となりました
さすがに乗っとりはばれるって…オモイカネに…

地球圏のビクバリア脱出したか…艦載機が出たね…
テレビでは好きだったよ ダイゴウジ!!ガイ

二日目 相転移エンジン同化後、
艦体前方にあるグラビティブラストにも同化、
ついで重力波ビーム発生装置にも同化

三日目 物質のまま移動で、格納庫を探してます
アサルtpittuコクピットがかなり優秀なGキャンセラーと気が
ついたからです

ついでにディステーションフィールド発生装置にも同化

四日目

女子風呂と同化してます……

しばらく動けそうもありません…

(天国だ……ミナトさん 胸がGJ)

(ルリ嬢だ……霞ちゃんと面影やつぱり被るんだよなあ……)

原作介入するつもりはないので、自重はしません
堪能しました

五日目 急いで格納庫を探しています…

衝撃波がきたからです!! サツキミドリコロニー消滅
つまり目的のコバツタとの初戦闘、

で二週間後火星に行くこの時点でオーバー
その後八ヶ月かかるからだ

丁度格納庫につき、四機揃っているのを確認…

フレームも確認

(まだ時間あるか……)

フレームに取り付いた後、

リョーコ機に取り付く

…… 出撃した…

サツキミドリコロニーに進入…した時点で離脱

サツキミドリコロニーと同化

またたくまにコロニー内掌握…

(デビルエステは…いた!!)

デビルエステバリス乗っとり、

コバツタ達も掌握、イロウルの方でもって全部のコバツタを洗脳

その中の、背後にくつついてたコバツタに本体をうつす…
離脱！！

見つからないように…同化解除して
虚数空間にコバツタほつりこんで ”幻影”

離脱！！ チューリップは確認したから
コロニーを抜けて… (うっし…)

再びコバツタを出して「イロウル！！」
で同化

チューリップへ〜

六日目

チューリップ突入だ…

(俺はコンピュータだ俺はコンピュータだ…)

エネルギーフィールドを潜りねけて…

たどりついた

（生きててよかった…）

（都市ってどれだろ??あ、あれか……）着地して…
「バルディエル!!」

コバッタの設置した足の部分から
体の領域広げ、自重せずに広げてく…

（お、プラント発見）
同化して…

離脱!!
見つからない内に
「世界扉」

2001年5月27日

「副司令執務室」
世界扉が開いたとおもったら…変な機械が現れた!!

カオルのターン 副司令を探している

カオルのターン 誰もいない為、途方に暮れている

同化解除…

（いないなあ…三回目だけどいないの久々だぞ…）
副司令探すミッションを受けおった…

（別ゲームかい
”（ノ<>）ノ”）

(一人ツッコミはわすれて探すか…ここ居ないとなると司令部???)

〓 司令部 〓

「ちわあゝすみかわ屋です、副司令はいますか??」

「香月君かね?彼女なら評価試験で出張だが」と…白髪、口ひげをはやしたいかにも、多分50歳位の御老体が答えてくれた……

(やばい!!多分司令か??ふざけすぎた??ええいままよ)

「あゝわかりました……あっしはこれで……」
「ぺし!!とオデコ叩くの忘れず」

「ほう……初めて見る顔だが……君は?」
「俺は生真面目に表情かえ」

「大変失礼致しました!!副司令直属技術士官、渚力オル少佐であります!!」

(どうか???)

「ああ、例の君か……」

彼女の部下に面白いのが入ってきたと噂になったの

………明後日には帰って来る筈だよ。と、わたしが当基地司令ラダビノット准将じゃ」

(ふざけすぎたの見逃してくれたか……)

「はー！ありがとうございます。では小官は作業がありますので失礼致します」

シユン

（危なかったあ……）

「 B 5 5 ハンガー 」

さてつと作業開始しますか……

まずはコバツタを虚数空間からだし、自分の複製をボディでいいから作るように命じた

CPUとプログラミングは俺のハバルディエルとイロウルの仕事だ

……

1号は仲間を4体増やしました

俺は5号までコバツタが増えました

2号から順次、残骸仕分け作業を命じました

改造報告

不知火

ローラーブレード（エステバリスより）をつけてみました

レググ高周波ブレードを付けてみました

アサルトピット技術を流用したコクピットにしGキヤンセラーをいれてみました

（操縦方法は戦術機のまま）

CIWSかぁ……順調にいったけど、やはり取り付かれた時に削ぎ落とすだけ……
というのはいただけでない、自機は大丈夫だとしても……だ
散弾発射機かな？

機体が傷つかないレベルの……
ん……明日だ！！

で……明日動かして貰おう……

あ、イッシーの見舞いってなかったなあ……
今日の作業結果……
ゴッゲ再生

コバッタ5号まで増産

会話機能コバッタつけたいなあ……

……
カオル報告

プラントを学びました
それによりナデシコのほとんどの技術を
無人兵器製造技術
テラフォーミング技術

重力波エネルギーアンテナの組み合わせ学びました
グラビティプラストを学びました

相転位エンジン学びました

エステバリス+各フレームを学びました

コバッタは便利だね!!整備士だし...フォークリフト操縦するし〜

作者「う〜どうしよう」

あ号「作者よ……どうしたのだ??」

作者「ああ、あ号か…実はな、当初の計画とちがって、この話かいてるときにな…

ある物語のをいれなくなっただよ……」

あ号「むう……その話とは??」

作者「かも〜ん○○○○○」

あ号「ふ、伏せ字ながら……あれはなんだ??……この感情はなんだ???

愛でたいだと????」

作者「だろ〜で兵器がね……かも〜ん」

あ号「……あ、あれが兵器か??……かわい過ぎる……作者よ……
だしてみたらどうだ??」

作者「弱いからだして構わないとおもつたらあ号よ……」

あ号「……つよい……のか……」

作者「うん……完全に壊す事は地球上に存在する兵器でも不可、
いずれ復旧するが、一時的に活動不能にするのに核兵器を直撃させ
なきゃいけない……」

あ号「……あれが……」

作者「……で、彼らの主人は……あ号……お前では敵わないぞ……星
駆逐かるくできるレベルだからなあ」

あ号「……むう……」

作者「しかも萌えるし」

あ号「なんだと?!?!」

さて……彼らの正体は…… 秘密ですが、大体想像つきますよね？

第十九話 病室で……………（現実世界トリップ込み）

投稿日20101223

2001年5月28日

「お見舞いだぞ〜遅れてすまん」

「カオル??何退院間際に今更……………」

（う、怒ってるなあ……………）

「ゴメン!!お詫びに甘いもんなんかもってくるから」

「今すぐじゃないと駄目!!」

「今すぐ?」

「そつよ!!」

「わかったよ…内緒にしとけよ”世界扉”」

””カオルの元の世界”””

「やっぱり俺の部屋になるんだよな……………」

「ま、いつさ…」

「バルディエル!!」

窓と同化：解除

「”幻影”シャムシエル」香月副司令になる……………」

俺の近所だと多分これが1番無難

近くのスーパーのはす向かいの

セブナイレブンに……………」

ん〜商品かわってなければ……あった

” たっぷりホイップ&デニッシュ ”

クロワッサンの中にホイップクリーム たっぷり…

俺のお気に入り これなら機嫌よくなる筈

「これ下さい〜」

痛い目で俺をみないでよ……

「…………… 2点で276円になります」

うん流石プロだね

「はい」

「…………… お釣り24円です」上下みてるよ……………

さて、ここでわかる”幻影”の特徴

姿だけ…つまり声はかわりません……………

渚カヲルの声で美女が発すると……………

男なのに胸が…私よりも…な外見になる…

女性店員さんにはとてもシヨック

受けとって外でたあと、店員さん店外にでちゃ駄目だろ…だ

適当に人気のない公園にきて…”幻影”解除して「”世界扉”」

うん…次は男性…整備士の方をもっと観察して”幻影”纏えるよう

にしよう…
と心に決めた…

|| || 石橋の病室 || ||

「ただいま〜ほれ、これでどうじゃ?」

たつぷりホイップ&デニッシュをわたす

「おいしいそう〜」

「俺も好きなんだぞ」

「いったただきまーす」
はむ

「あま〜い」

あ、こいつ…別腹か……………

「もう一個」

「あ、おめ、俺のだ」

「だ〜めあたしの」
はむ

食べられた…orz

半分でとまってるイッシー
「食べる?」

「え？いいん」

「はい、あ〜ん」

「あ〜ん」で食べようとしたところを

「だーめ」「引っ込めて全部食べやがった……俺のが……」

「そんなに落ち込まないの、許してあげるから」

「俺の「イジイジ」

「もう……立場が逆になっちゃったじゃない……」

「しょ〜がないなあ……河田先任直伝」

「という手を肩に…… ちょ…… おま…… あふん…… いやん……」

「とろけました……」

「どっつ？気持ちよかった？」

「はい……とても……」

「じゃあしゃんとして……ね」

「ああ……」

「流石、わたしのペットね」

「ん？どつちがだ？」

「まあいいや、ところで、今日副司令もどつてくるんだろ？」

「ええ、みんなもね」

「みんな？ヴァルキリーズの？」

「副司令の護衛で一緒に……ね」

「あ……まあ……」

「カオルのせいだしね」

「死ぬかもしれんから注意しろったぞ」

「またなんかよろしくね」

「たく、太るぞ〜」

「甘いものはふとらないも〜んだ」

「あ、速瀬中尉は？」

「あ〜先任なら隊長に話聞いた後、病室にいられっか！〜で無理やり退院してついてったよ」

「あ〜あの人らしいな…」

「ところで退院何時に？」

「ん〜検査結果次第で多分もうそろそろだけど……」

看護兵がきた…

「石橋少尉、どこも異常ありませんね。原隊復帰の許可ができました」

「お世話になりました」ペこり

「お大事に」

で病室を荷物まとめて退出

まあ部屋まで荷物持ち

「カオル〜ところでわたしが怪我した後は、どうしてたの？」

「佐渡島の間引き作戦に撃震でいって、その後、ナデシコという別世界にいったあと、改造さ」

「不知火？わたしの怪我した撃震？」

「不知火だよ、まあ撃震も現地で改造したが……」

「後でみにいくね、荷物ありがと」

イッシーが個室に入ったあと、ハンガーに作業の続きにいきました

1号は黙々と仲間を作っていて、8体増やして居ました

「うっし1号」

あ、額のあたる部分に数字の1をいれてあるのはお約束です

「とりあえず50号まで作り続けてくれよ」

1号は了解の意を返した……

うん後悔しないように、コバッタ魔改造しようー!!

発声機能はつけないが、背中から空中に、電光プラカードみたく、会話を表示させるように

改造を1から5号に施した!!

さあどうだ??「おお!!」「マスターと会話できる!!」「会話万歳」「わたしは別に」「うるさくなるのでは?」

うんうん大成功か?こっちは自重はしない!!

「じゃ1号はそのまま増やしてくれ、2号から5号は引き続き整理俺は最終作業にはいるよ」

「」「イエス マイロード」「」「弟妹ふえたら…グフフ」

微妙に一体変だな……設定ミスった??

ま、いいか…

6号から順次増やしていった

side↳石橋↳

B55ハンガーにつくと)……あれ??)

(整理されてる…あ、小型のなんかがふえて作業してる)

その内の一体が、近よってきた額に11とかかかっている

「こちらは立入禁止です、所属と氏名をのべて下さい」と空中に浮かび流れた

(…話せばよいのかしら?)

「あ…、A-01所属の石橋留依少尉よ」

「大変失礼しました 立入許可が出ております。
次回以後はフリーパスになります」

「あなたたちは？」

「わたしどもはマスター、渚力オル少佐の補佐をします作業用コバ
ッタ、わたしは11号です」

「よろしくね」としやがみ頭を撫でた

「(ノノノ)」

顔文字で照れを表現する11号

「では、作業ありますので失礼します」

11号は、横たわっている機体の方に向かっていった…

(11号ねえ…ふん…)

何機かふえているコバッタ みると機体を修復作業中?している集
団もいるし、
仕分け作業している集団もいる

(人手が不足してるうとぼやいてたから…なあ…)

入院する前のあつちこつちに残骸があり、とりあえず通路は確保できてた…状態から、急速にハンガーとしての機能を回復しているようだ

（あ…不知火??）

前回見た時より変わっている
特に脚部面で…

（剣が脚部の前と横についてるのね。これなら小型種きれそうね…。けど何で今までの不知火ついてなかったのかな？）

（あと、足の踵にローラー？）

（かなり変わったわねえ）

とみたところで、更に隣に小型の戦術機らしきもの6m位の高さであろうか…をみつけた

カオルもその機体にたかっている

「カオル」

「おつきたか」

「この機体は？」

「ん？ああ、ナデシコの世界の機体、エステバリス陸戦型フレームだ」

「かなりちっちゃいのね」

「ああ、主機がこの機体にはついてないからな」

「ついてない？」

「ほれ、後ろにアンテナあるだろ？」

「うん」

「あれで戦艦などから動力動かす為のエネルギーを受けとってそれで基本は動かすのさ、アンテナ範囲外は非常用にしか動けないからな」

「だから、かなり小さいのね……」

「あと機体的特徴は、コクピット毎移し替えて別の機体に移す事可能、

まあ衛士の強化服と一緒に蓄積が無駄にならない等の利点がある」

「少し動かしてみたいなあ」

「あ、無理だよ」

「なんで？あたしには無理なの？」

「この世界の人間にはね」

「????」

「IFSだっけか…：ナノマシン注入による、特殊な入力システムが条件、まあ一種の改造人間がね」

「そうなの…」

「まあ、あとは実際に作ってみて不知火に反映できそうなのは反映しちやおつかなあゝの、データ評価目的なのと、こいつらの作業ワーカー用ね…：3号！！」
ふよふよ寄ってきた

「マスターできたんすか？」

「ああ、もういいぞ」

「ありがとございます。これで作業はかどります」とりつくと…動き出し…操っていつちやった…

「6m位の高さだから作業用にも丁度良いしね」

「あの作業用の子達はどこから？」

「ああ、ナデシコの世界だよ。コバツタっうんだ
会話機能はなかったから、くつつけたけどね
イッシーもコミュニケーションしやすかったる？」

「表示して、会話しやすかったからね」

「あとは、あいつらの機能として、ああいったコンピューター制御で動く機械を操る事が可能なんだ」

「かなり優秀なんだね」

「わざわざ取りにいったかいがあったよ」

「ところで、不知火動かしてもいい？」

「ん？もう体はいいん？」

「大丈夫だよ」

「うん…ならいいぞ」

「操縦席ハッチ」

中に入ろうとすると…あれ？と違う事に気がついた

「カオル〜??」

「ああ、エステバリス参考にして弄った

結構優秀なGキャンセラー入ってたからなあ」

あ、追加したの忘れてた、これがローラーダッシュの機能スイッチだ」

「ローラーダッシュ?」

「地上を高速で移動するんさ、NOEと違ってね」

「面白そうね」

「まああとはジグザグにダッシュしながらブレードで小型種きりながら…とかね」

「へえ…」

「まあ論より証拠、さ、乗ってみて感想よろしく」

〓 地上演習場 コクピット内部 〓

『イッシー自由に動かしてみてくれ』

「わかったわ」

（お言葉に甘えまして…まずはGねえ反復飛びからかしら？）
軽く横とびを繰り返す

（あら…??）

Gがあんまり来ない…

（じゃあ…これなら…）

機体制御限界まで

ハ機体が踏ん張れる…限界

あんまりやるとずるっとコケるか、

踏ん張りきれずに上半身が持ってかれる

地面との相性もある

反復とびをする

機体限界まですると普段は体が持ってかれるほどのGがかかり、
跡がつき、しばらく泣きをみるのだが…

（軽い…軽い）どっちの方向に機体がいって、
とまって、

反対方向に機体が飛ぶのを感じる位のGしかかからなくなっている

『どつだ？？』

「Gが極端にかからなくなってる これなら戦いやすい」

『うん…いれて正解だったな』

横反復とびのあとは前後、斜め、またその組み合わせ

一回限界超えて踏ん張りきれず、ずるっとこけたのも付け加えておこつ…

でもGキャンセラーは有効に働き、石橋はご機嫌だった

(あ、ローラーブレード試してないなあ)

スイッチをいれた

(あ、脚部が接地固定されるのね…ジャンプはできるけど…)
恐る恐る前進……

結果…石橋は、はまってた

「おもっしろい」

『どつだ？気に入ったか？』

「うん 特に、こつ急転回させるよ」

足を横にさせ進行方向にたいし直角にさせる

ローラーが地面を削りとりながら土煙をはく

で、足の正面にむけて一気にダツシュ

『あゝまあ程々にな…後で整地する人たいへんだから
うん…かなり地面えぐられてるなあ……』

イッシーはローラーブレードを気に入っただようである

side～石橋end～

〓〓 B55ハンガー 〓〓

イッシーが機体を戻したあとコバツタがたかり機体のチェックをし
始めた

また今まで残骸のままだった、

残りの機体の組み上げが終わってたので
同化して機体情報をゲットしておく

と、そこへ

「マスター」

「ん？6号か」

「命令の、一種一機の組み合わせおわったけど、この後は？」

「そつだな…残骸からどの位できそつなんだ？」

「材質による違いがあるから」

「ああ、そつか…」

「プラント作ってくれば、時間はかかりますが、材質を変化し、加工させた状態で材料だしてくれるから、そこから作成可能です」

「へえ…プラントそんな機能あるんだ…結構な儲けもの??」

「マスターがおこなった機能強化のおかげで材料さえあれば、1から作れるから」

「その方がはやいです」

コバツタの機能強化

鯖による情報共有により

機体情報さえあれば1から作成可能

「じゃあプラントつくるか」

まあ、材料や廃材、集めや涵獲、破棄集めだけ専念すればよい状態になりました
あとは完成品コピーのみ

「ただヘリウム3の問題もあるから、新規MSだと33機が限界です」

つまり木星へいけフラグなのですね…わかります

「S2機関は無理か？」

「撃震解析しましたが、主機、駆動方式もプラントできても正直無理です、異常です、メンテナンスも無理ですね」
ワンオフ確定……うん異常なんだね

「問題なく作れるのはバッテリー駆動の61式とホバートラックです」

「なるほど…」

「あ、副司令が戻ってきましたね」

「じゃあ…報告いくから、
うんそうだなあ…61式をスモークチャージャー除去して代わりに
CIWSを砲頭部分に搭載できる?」

「可能です」

「じゃ、それで超硬スチール合金とチタンセラミック合金で各1両、
ホバートラック未改造でいいか、超甲スチール合金、
チタンセラミック合金、
ルナチタニウム合金で各1
陸戦強襲型ガンタンクをルナチタニウム合金製で3機できる?」
「プラント製造前ですので
今の状態なら…ルナチタニウム合金が足りないので1両と2機で
したら」

「じゃあよろしく」

……
カオル報告

一年戦争ののこりの機体再生しました

コバッタ14号まで増えました

家の窓と窓枠取得しました

たっぷりホイップ&デニッシュは、どうかな?と思いましたが、

無理でしたorz

(食べ物は無理みたいで…)

作者「うん、後悔はしないなあ……………」

1号「あざーす！！これで勝つる！！！」

作者「ん？誰に？」

1号「八口とか、前回でた○○○○○とかにですよ」

作者「……………○○○○○がメインの別物語かくつもりだよ」

1号「なに〜〜自分も出して下さい！！！」

作者「関連性がつけれないから無理だ…良いじゃんこっちで活躍すれば」

1号「なる…うんマスターを超えてやる！！！」

たきつけました…さてどうなる事やら…

あ、作中にでた、たっぷりホイップ&デニッシュ 自分も好きです

〓 〓 副司令執務室 〓 〓

「コンコン」副司令います〜？

「いるわよ〜入ってらっしゃい」

シュン

「失礼します、だいぶご機嫌ですね〜リフレッシュされました？」

「まあねえ ひっさびさの海だったし

天然物を釣ってくるしA-01連れて正解だったわ」

（そっち行きたかったかも……ナデシコ行く〜って言わなければ…
…）

「あらなに？あんたも行きたかった口？？」

「……ですね〜」

「あ、でも石橋に怨まれたかもよ〜」

「いったら…かもですね…」

「だから黙ってたんだから感謝しなさい
まあ今回落ちたのがいるからまた冬にやるから」

「冬…に寒くないですか？」

「中途半端なところでやると思ってるの？
勿論おさえたわよ。11月11日約半年後よ
勿論泳げるわよ」

「副司令の水着姿
楽しみにしておきますね」
たちまち赤面する副司令

「……………わかったわ」
美貌のため！という
横浜基地特有のダイエット週間の始まった瞬間であった

勿論、参加の強制権はない
余力のある人達による

続に美女とBETA戦中戦意こうよつこの為
ミスコンを開催する人種の始まりだった
主にパイロットでなく後方勤務である事務方による参加
が、過酷なパイロットの参加だと…瞬く間に戦乙女と称された
そう、後の神に愛されたヴァルキュリーと……

赤面したのち

「報告は??」

「ナデシコの世界にいき、コバッタ及びプラント等を取得了しました」

「そのナデシコの世界の説明k w s k」

(いつの間に2 c h用語を)

「その世界は、ネルガル製の機動戦艦ナデシコによる……」
「それ採用」

「へ？」

「だから採用よ」

「あの何を？」

「機動戦艦ナデシコ……取り付いたんでしょ？」

「はい……」

「なら採用よ」

(やばい…自暴自棄にいたってる???)

「あの副司令……前話した事覚えてます???’

「何よ」

「あくまでも技術の吸収及び、
過剰な技術は、地球上における上位存在の、
更なる発展を促すの事を……」

「クッ………」

「だからいくら、異世界のオーバーテクノロジーといっても、
それが普通に製造できる段階にいたってないと
自分の首を締めかねない……です」

「……………」

「だから、技術の吸収をお願いし、人類の財産に……とお願いしてま
す」

「ならなによ……あなたの目標は」

「現有技術可能兵器による平和…

この世界だと実弾兵器のみで、戦っています間違いないですね？」

「……………」

「だから実弾兵器による甲1号の攻略を目指しています」

「…………それができないんじゃないの?!」

「なんでできないのです??」

「損耗率及び補充率及び補給」

「それが埋まるとすれば??」

「!?!……………」

「ルナチタニウム合金いわゆるガンダリウム合金による耐久性、
または、それに及ばないながら、

生産性の高い 超硬スチール合金、または チタンセラミック合金
による耐久性

あとは補給の問題及び、衛士の問題かたつけば…ですね？」

「……………」

「耐久性さえ片付けば、衛士の補充率あがってきますよね？」

補充率にかんしては、

耐久で生き延びれば前線にいく人達がへる

結果的にはあがると思います」

「……………」

「ですので、ここ一番の時以外はオーバーテクノロジーは使えない
……………と思って下さい

あとは上位存在に気づかせないように…です」

「わかったわ…」

「では改めて報告を…」

「ええ」

「ナデシコの世界にいき、作業用コバツタを取得、また、機動兵器
であるエステバリス、

テラフォーミング技術等を取得しました」

「あ、テラフォーミング技術は復旧に約にたちそつ？」

「ええ、緑化促進、など遺伝子に影響でない方法や、今ある合成食料プラントの性能UP等できそうですね」

「あ、じゃあ、テラフォーミング技術は大丈夫よね？まとめてレポートもらせる？」

「わかりました」

「あと、作業用コバッタは？」

「今13号まで増やしてB55での整理や機体修復、また製造等を任せています」

「ふ〜ん……後で見に行くわね、さて夜もそろそろ遅くなっただし……明日の話ね」

明日0900にB15シュミレーターデッキに着てちょうだい
面白いものみれるわよ」

「了解です 0900にB15シュミレーターデッキですね」

「じゃあ、お休みなさい」

「失礼しました」

2001年5月29日

(シュミレーターデッキで面白い物？なんだろう…)

シュン

「おはようございます〜」

「おはよ」

「面白いものってなんですか??」

「いいものよ……まりも!!こっちにきて」

「なに?夕呼〜 あ、こちらの方は?」

(美女だなあ…)

「あたし付きの技術士官、渚カオルよ」

「は!!当基地207訓練少隊の担当教官をしています、
神宮寺まりも軍曹です!!」

「渚カオル少佐です。」

あ、階級なしの付き合いでよろしく〜
もらいもんの少佐なんで」

「しかし……」

「さっきの呼び方からすると親友？」

「ええ、大学時代からのね。飲み会でもあだ名は」

「夕呼！！」

「な、感じよ」

「じゃあ、そういった事で」

「………わかったわ、ただ他人のいる間は規律を守ります
……夕呼のまわりってこんな感じの方ばかりね……」

「いいんじゃない」

「しょうがないか」

「で……そろそろ？」

「ええ…なんだけど…まあしょうがないね」

カチャ…ドアがあいて……………

（はあ???)……………

か、かみさま……………この世界ますます好きになりました……………

な、なんという、恥痴ぶれい

強化服の前、が申し訳ない程度しか隠れてません…

ちバキュンが…すけてみえる……………おかバキュンバキュン!!

あ、後ろも……………

けっがけっが……………

「あら、つぶなのね…」

「ふ、ふくし」

神「前線では、男女わけて等できないから、その為に慣れる事が必要なのよ。

その為の訓練生よう衛士強化装備ね。

わたしも最初は恥ずかしかったわね……………」

神宮寺軍曹をガン見

（……………あかんおかバキュンバキュン!!

……………ほんと……………この訓練生用の衛士強化装備作った人、マジGJだよ

と、いうか、趣味入ってるだろ)

「他の訓練養成でも同様に？」

神「ええそつよ…」

(マジでか!!!この世界G)

「し、…小隊集合!!」「………」
かなり赤面しながら隊長とみられる人が号令をかけました

「2 2 207A分隊、全員集合しました!!!」「………」
まだ恥ずかしくて、胸を隠しながらや、
微妙に足をすりすりしている娘も……

「うむ、よろしい」

「あ、あの教官」

「こ、この強化衛士装備につ、ついてなのですが」

「いいか、お前達、前線では男女の区別等できない環境だ…
シャワー、トイレ等…」

その為、訓練生時代に慣れて貰う、のが、
この訓練生用の強化装備の目的だ。

最初は恥ずかしいと思うが、その内慣れる…わかったか?!」

「……了解!!」「……」

(うんでも、その強化服なら…最初はわかるよわかるよ
恥ずかしいのがバキュンバキュンバキュンバキュンバキュンになる)

作者へ頼むからカオル…やばいの思うな!!」

カへ男だから無理!!」

作者へとりあえずいつでも擬音修正いれるから」

カへなら…イッシーとバキュンバキュン」

作者へいい加減自重し話進めろ!!」

はい、作者よりR15修正の力でツッコミ入りました…

カ「副司令」

香「なに？」

カ「面白い事って……」

香「もう少し後だから…待ってなさい」

(あ、別の事? 訓練生用の事かと思ったしかし…いいバキュンバキュンバキュン)

カオル…自重しないでガン見だなあ……

「では、戦術機適性検査を始める
座学で説明した通りだが、非常スイッチが右側に設置してある
だが、押せば検査に通過できず、衛士の道は閉ざされる事をわすれ
るな!！」

「「「「はい!」「」「」」

「これが?」

「ええ、これからよ…さうして誰が犠牲者なのかね」

「????」

(あ、…成る程ね)

(やっと意味が通じてきた…
この検査はGキャンセラーのない、戦術機を操縦できるかを見極め
る検査か……)
最初のプレッシャーもあるだろう、歩行の段階で心拍数などがっ
てくる

走行になると うん、やせ我慢してるのがモニターにも写ってくる

急制動等

そんな検査をへてGや酔いに対する適性を見極め、衛士への道へと進むようだ

ここで落とされると歩兵、戦車兵等に進む…

(成る程ね)

「あら、この娘ね……」

「追加ステージGO」

みるみる青ざめてくる、模擬戦闘行動してるんだもんなあ……

「よっし」

(あ、機内でぶちまけた……副司令……Sなんすね)

結果 全員合格し衛士への道を進む事になった

ぶちまけた訓練生には、お掃除の追加命令も入りました

「はあ〜面白かった。どうだった？」

「はい、とつても」

(また見にいきたいなあ……あ!!)

「副司令、彼女らのOSはどうするんですか??」

「あらそうねえ……いいわ、あなたのOSにしなさい」

(うっし!!また見れる!!)

次は自重してね……by作者

「了解です!!」

「シュミレーターはそうねえ……どうせだし……」

うん……訓練生用の専用シュミレーター室にしちゃいましょう。

確か、B11のがあんまり稼動してなかったような……後で調べて知らせるわ。

あ、あと訓練機にも施してね。」

「はい!!では後ほど」

|| || B55ハンガー || ||

「マスター」

(えっと……どうしたら記録が残せるかな……)

「マスターーてばあ」

(回線を新たに作って、ここまでひくか?いや!……遠すぎる
もっと近寄らなければ!!)

「マスターー」

「どうした?1号」

「マスターが反応しないの…」

「……ほんとだ上の空だ……」

(小型のなにかを彼女らの近くに……)

「こついつた時はしようがないか……」

少し距離をとりはじめた……全速力で……突進!!

「グオ!!」

見事に脇腹にクリーンヒット!!

「ちょ!!5号!!」

「な……なに……我ながらよい仕事を……した……」

「みんなー5号が暴走して、機能停止寸前ー修理よろしくー」

カオルは……悶絶してたが……復帰し始めたようだ 1号と目があう

「あ!!そつだそつだ!!おまえらがいたんだ!!」

「ちょ!!いきなりマスターなに??」

「重大任務だ!是非とも記録映像を……あ、1号は駄目だ……2号!!」

「なに?マスター」

「お前は別作業で記録映像をとるよつに、かつシュミレーターーム専属にしよう」

「イエスマイロード」

……うん……自重なしだね……

(そうと決まれば内線で……)

いそいで電話をとり、コール……
カチャ

「すみません副司令！」

「いきなりさっそく、どうしたの?」

「自分のコバツタをシュミレータールーム専属で、1機使いたいの
でよろしいです?」

「……なら機密エリアがいいわね……そうね、B21使ってちよ
うだい」

(うっし明日以降が楽しみだ!!)

「あ、マスター……」

放置される1号……頑張れ……

……
カオル報告

コバツタ

増えませんでした ボディは作るも…カオル暴走中の為…

組み立て作業進行度

陸戦強襲型ガンタンク2機…20%

ホバートラック50%

61式 80%

コバツタ振り分け

1号 仲間増やし

2号 シュミレーター専属に変更

3号～5号 整理整頓

6号 機体製造チーフ 7号 整備チーフ

8号 以下手隙の為、

各自で整備または機体製造…

要は自分で仕事みつけてる

作者「いいなあエロカオル……俺なんか俺なんか 俺なんか〜！
！今日は仕事だあああああ！！
世間なんかしらねえうええ〜！」

あ号「作者……つるさい……黙らすか……」

ザシユ！！！！

作者チーン

あ号「……よし……後書きは……乗っ取った……」

1号「そうはいかないにょ〜！！」

あ号「……おまえは……！！」

2号「天がよぶ」

3号「地がよぶ」

4号「水がよぶ」

5号「月に変わってお仕置きよ」

1〜4号「」「」「ちやうだろ!」「」「」

乱闘…… 1から5号チーン

あ号「……なにしかった……?」

作者「本当は仕事しないで遊びたかっただけなんさ……orz」

作者「でたまたま書いてたら24日にエロ話が当たって…カオルう
らやましい……」

次あたりでカオル潰して主人公変えるか…」

第21話 カオル君暴走中で物語終了の危機?? 投稿日20101225

2001年5月30日

(よっし、これで勝つる!!)

イロウルで、鯖の内部に映像保存用の専用スペースを確保していた
勿論訓練生用衛士強化装備を録画する為だ…

つまり一晩あけてもまだカオルは暴走していた…

作者の心の声1、以下作1(うゝんこの日は飛ばしちゃった方がよ
くない?)

作者の心の声2以下作2(いや、いままで1日ずつ書いてるんだし
さ)

作1(うゝん…昨日介入しても自重あんまりせんからなあエロカオ
ルは……)

基本、カオルはゼロ魔の世界でウハウハするためにいこうとした
ものすごい煩惱の塊です

なので昨日の今日でおさまるわけがない……

作2（なら、少し介入して時間午前中にしちゃえば？ なら夜にはおさまるかも）

作1（それでおさまると思う？？）

作2（期待しようよ……）

作者の介入力…シユミレーターの時間変更

午前中の座学 シユミレーターへ

午後のシユミレーター 座学へ

内線…プルルルプルル

「こちら、B55のカオルです」

『少佐ですね、ピアティフです。シユミレーターの時間が変更になりました。』

準備よろしくとの副司令からの伝言です』

「へ？…えつと…何時に…？」

『9…00からです』

(なぬー)

「あ、わかりました。では準備しますので…」(やっぱり…OS書
き換えてねーよ!!あと30分!!)

キヨロキヨロ

(2号はもういつてるな)

「1号B21にいつてくる!!」

飛んでいくカオル

〓〓 B21シュミレータールーム 〓〓

(たく、なんでこんな時に1台エレベーター点検してるんだよ…あ
と20分か…)

2号以外、誰もいないな)

オペレーターブースにいき、

「イロウル」

「バルディエル」

………

カチャリ

間一髪セーフであった

「あら?カオルさんいらしてたんですか?」

「あ、まりもさん、OSの書き換え等でね…2号!」

「で…こいつがシユミレーター専用に、メンテ及びアシストする、コバツタの2号」「よろしくお願いします。神宮寺まりもさん」

「え?えつと…よろしくね……」

あのカオルさん、OSの書き換えって??」

「?副司令から聞いてませんか?」

「はい、まったく」

「あ、自分の作ったOSが入ってます。今はA-01にOS入っていますね。

キャンセルや即応性の向上などがこのOSのつりです」

「はあ……でもなんで訓練生に??」

「あ…そこまで……聞かなかったのですが、…多分広める為なのでは??」

「…後で夕呼に聞いてみるか……
まったく…時間変更も急だったし…
あ、少しお願いが…訓練生くる前に試乗してみても…？」

「あ〜どうぞどうぞ、
訓練生来たら待機してるように伝えますので」
(うっし！観察できる)
自重しいよ〜

2号にCPを任せて…勿論、コンピューターを介せば、
合成音ができるようには向上させている〜
内線を福司令宛に…
プルルルル
『もしもし？』

「副司令、カオルです」

『ああ、なに？』

「訓練生に自分のOS入れた訳を、
どう説明すれば…よろしいのですか？」

『彼女らはそのままA・01にあがってくるから〜なんだけど、
そうねえ…新OSの第一期生として、実証部隊に選ばれてるにして

ちょうどい。

このまま、次期訓練生にも新OSになるから。
……お披露目もすべきかしらね……』

「了解です」

『後は？』

「ないですね、ありがとうございます」

『そ、じゃあね』

電話が終わったあと……

（んふふふ）

カチャリ

（お、きたきた）

訓練生が集まってきたので、そっちの方に近寄った。

「集合！！」

／＼／＼／＼

（まだみんな、赤面してるなあ）
「ああ、そのままが良いよ」

「と、自己紹介がまだだったね。俺は副司令直属の技術士官、渚力オル少佐だ」

（やばいやばい…）

絶対慣れないよ…

なにしろ目の前に<バキュン>

で、<バキュン><バキュン>

それに<バキュン>だ！！！！）

俺は、表明上なんとか平静を保とうとしている…が、ファールカップをつけていて正解だった…

「と、今君らの教官は、

乗っているので変わりに俺がいるが…2号！！

……

こいつがここのシュミレータールーム専属でメンテ、アシストをする、コバッタの2号だ」

「よろしくお願いします。207A分隊の皆さん」

「かつわいい」「よろしくね」「浮いてる」「分解したい…」「食べれ？」

(しっぴかり撮れよ)

「さて、君らには俺の作ったOSによる訓練生での第一期生となる。まあようするに訓練生での実証部隊となる訳だ」「マスターいつでも?」

説明途中なので頷くカオル

「ところで、今までのOSについて座学などはあったか?」

「今日やる予定でしたが…」

(あ、成る程ね…)

「なら余計な知識はまだついてない…って事だな……
このOSの売りは硬直の除去と、即応性の向上だ」

「硬直の除去?」

「まあようするに、今までのOSは長刀をふると、振り終わるまで別の行動ができないが、

このOSでは別の行動の介入ができる。

つまりだ、…やばいと思ったら、

逃げるや、途中で止めてしまう等の行動ができる。

より人間らしくな…ということだ。」

プシュー

「お、終わったか…」

「教官！！207A分隊集合完了してます！！」

「時間通りにはきてましたよ…どうでした？軍曹」

「少佐…このOSすごいですね！！」

これを訓練生達が？」

耳に近寄り小声で

「行き先には既に実装されています」

頷くまでも…離れる

「彼女らには第一期生になると、簡単な違いは説明しました…と…この後は…？」

「今日は新人課程として、基本動作からいきたいと思ってます」

「では…俺は立ち会いで、今日はいますので…」

「わかりました」

……

（むふふ）眼福眼福）揺れる上下左右に揺れる）

彼女らはやっぱり可愛い。

現実世界でいえばAKBクラス以上かな？の評価である……
ブチッ

そんな世界にいきやがってうらやましいぞ！！てめこの！！

！！しばらくお待ち下さい！！

大変失礼しました、ナレーションを担当する心の声が暴走した模様
です。

深くお詫びをいたします。

では続きをどうぞ。

丁度、午前中の訓練を終了し整列しているところだ。

勿論2号を側にいかせたのはお約束。

(さてと、どんな映像が…グフフ)

「カオルさん」

「ああ、何？」

「新OSありがとうございました。」

……これで訓練生達が戦場に行っても、死なずにすみそうです……」

「……………」

「わたしの教え子達は、沢山いましたが……」

その半分以上がもうこの世にいません……。

……私達教官は、

行き先についてはわかりません。

……が、訃報は入ってきます。

……あんなに成績のよかった子、

……お茶目で可愛い子、

……少し……どじだった子、

……また、訓練生同士で相思相愛になった子、

……沢山……いました……

今では……、なんとか……堪え……ています……

……ですが……心苦しいのは、変わ……りありません……

けど、この新OSで、やっと……やっと……

その……苦しさ……は……終わりそうです……

本当に……ほん……とうに……本当に……ありがとうございます……ぞいます……」

90度の礼をしながら涙が垂れている……

「……顔をあげて下さい……」

ただ単に俺は、俺が思った通りに作っただけ。

これを実らせるのはあなた方、教官の仕事です……
だから……あなた方の仕事を、よろしくお願い致します……

また俺も、このOSだけで終わらすつもりはないので、
感謝は全て、BETA戦が終わってからですね……」

「はい……本当に……」

「そこまで、そこまで、きりないっすよ」

「わかりました」

「じゃあ、俺はB555にいくので……」手をひらひらさせながら……

「はい!!」再び90度の礼…カオルが見えなくなるまで……

(……いきなりか……)

はぁ……ヘビーだな……)

ちよっとは反省していた……

(まさか、ただ単に硬直?なんだこの糞OSが!

で、作っただけくなんてあの場で言える雰囲気でもなかったし……

はぁ………やましい目的だったのが………

……まリモさん……泣いてたし……

あゝクツソ!!

俺最低だ!!

クソクソクソ!!

クソクソクソクソクソクソクソ!!……!!)

|| || B55ハンガー || ||

「1号!!今どれくらい増えてんだ?!6号製造状況!!

3号!!、整備担当だったよな?!状況しらせる!!」

「「イエスマイロード」「祝マスター復活 祝」

「まずは僕から、作業進行度もうまもなくホバートラック完成。

あと61式は完成済み。陸戦強襲型は50%で、

僕らが増えるなら明日には完成予定だよ」

「次に僕ね 一昨日の結果だけど、
股関節にかなりの負担がかかってたよ。
とりあえずは修理したけど……」

僕らの意見としたら、
連邦軍のフィールドモーターシステムに変えるのオススメする。
今持つてる中だとそれが1番かもね。
更に他関節も格闘するなら、変えるのオススメするよ」

「とりあえず製造はそのまま続行。
不知火の関節変更に関してデメリットは？」

「1この世界では製造不可、技術が追いついてない。
2関節部分が複雑になり重量が5%重くなる。
3メンテナンス費用はいいや……
以上なくらい」

「重くなるなら機動力は？」

「出力あまり気味だから問題点なし」

「なら、変えるか…こっちでメンテ等も…な。
コマを流用すれば大丈夫かな？」

「うん。それで大丈夫だね」

「じゃあそれでよろしく、俺はコバッタ増産とプラント作るから」

「イエスマイロード」

「あ、こいつらの研究よろしく、特に歯と外殻」と虚数空間にいれっぱなしの戦車級と要撃級……
「やっぱり餌がないので死んでました…をとりだす…
(うん腐ってはないな)」

「イエスマイロード」

……
カオル報告

プラント(ナデシコ世界の)製造しました

コバツタ30号まで増やしました

陸戦強襲型ガンタンク進行度60%

61式ス1 チ1 完成

ホバートラック ス1 チ1 ル1 完成

スII超硬スチール合金

チIIチタンセラミック合金

ルIIルナチタニウム合金

コバツタ振り分け…

変更なし

30号まで増えた

第21話 カオル君暴走中で物語終了の危機？

投稿日20101225(後

作者「いやあ…一時期はどうなるかと思ったが…助かったあ…」

あ号「……だな……このまま…エロカオルになり……R18に…
…いくかと…思ったぞ」

作者「流石、教え子思いのまりもちゃん」

あ号「……けど、彼女…食われる運命なんだよな…」

作者「…認めん、認めんぞう！！武ちゃん3週目がくるし、運命は
変えてやる！！」

あ号「けど…何故…3週目だ??」

作者「ぐわ…今ここで聞くのか？おめえ」

あ号「…うむ…説明できなければ…プロット変更させたる」

作者「あゝまあ…最初は二週目でも十分かなあ〜と思ったんだけど、

二週目で夕呼先生を納得させる理由が
この物語上ないからなあ……」

あ号「何故だ？」

作者「ほら、ゲームガイもたないしさ、教えるのは情報のみだし……」

あ号オルタプレイ中最初の辺り……

あ号「むう……確かに」

作者「だからそうなってくると、
元から00ユニット情報、XM3情報持つ、3週目しかありえねえ
んだわ……」

あ号「確かに」

作者「ま、そんなわけで、まりもちゃんをまもりぬき、
あ号本編ではプチリっとなる運命でよろしく」

あ号「……いやだ……オルタプレイで対策情報たててやる」

作者「ところで、あ号、それは反則」

あ号「どっちがだ!!」

PS 作者ぼやき

次回が難作でした…

ある事を納得させるのが、
スランプに陥ってましたが…
何とか通過できそうです。

第22話 更にチート化計画 投稿日20101226

2001年5月30日

|| || B55ハンガー || ||

「おはよう〜」

「おはようマスター」

「進行状況は？」

「陸戦強襲型ガンタンク2両完成したよ」

「で、引き続き…あと31機分なんだよな？
A-01分残すと、18か…いやテスト用で、15だな…
うん、あと10機増産よろしく」

「イエスマイロード」

「あ、マスターパイロットはどいつなの？」

「ああ、考えてはなかったな……おまえらは？」

「自分らよりもヤドカリ君をお勧めするよ、
で、マスターの力でチューンして…」

「ヤドカリ君？ああ、情報処理特化型か……」

「うん。自身での整備製造等は、できないけど、オペレーターとしてなら一流だよ。」

「またパイロットとしても優だし」

「わかった。3号、頼めるか？ボディーのみ」

「イエスマイロード」

「あとは、ヘリウム3の問題だね」

「ん〜木星かあ……距離があるしなあ
…補給船なんか飛ばして、

「オル5側にはれても痛いしなあ……」

「ん???そっさいやあ」

「チューリップを固定で使えない??」

「ちょっとまってね」

「AチューリップとBチューリップのみ行き先固定の、ワームホール式。」

色々な所に行くから演算ユニットが必要なんだろ??」

「うんいける!」

「うっし、今から製造して設置しにいくと?」

「ステルス、相転位エンジン、操縦席くつつけてなら…うん。3ヶ月でいけるね」

「9月初めか…じゃあそれでよろしく。」

それまでは、ガンダム世界に回収にいかなきやな」

「だね」

「あと足りないと思うのは補給と、輸送か」

「弾薬については、プラントで鉄系統からでも、精製可能です」

「うは…プラントチートだなあ…」

「元々少ない資源で木連ができ、僕達無人兵器群ができ、バッタ先輩などは、ミサイル搭載してるからね」

「となると後は輸送かあ」

「光線級がいるから空は、撃墜されない、かつ大型が一番望ましいね。」

または離着陸容易、荷物積載容易なの」

「うしろはミデアかな？専用コンテナ着脱だから、前は、やっぱりあれだろ」

「あれ？」

「全長317m全幅524ペイロード9800トン成層圏プラットフォームフォームガルダ。

けど離着陸が問題点だから、強襲救命艦メデューシンの機能をつけたい」

「データーがないからなんともいえないけど…凄そうだね。単純にいうと、ザクなら200機弱積める」

「後は陸上輸送か…ギャロップがあるが…」

そこからもう少し前線に運べる何かほしいな…」

「だね…」

「あそこ…いけるかな？」

「あそこ？」

「メタルマックスの世界、できれば3…」

「とりあえず出して見れば？」

「だな”世界扉”」

世界扉がでる…

「ちつと覗いてくるわ」

「メタルマックス3と思える世界」

(お、確定か…)

俺の姿見かけると、もの凄い勢いで、実物は初見の、四脚に大砲をくつつけた、

メタルマックス3でのエネミー”キャノンホッパー”が跳ねてくる。

俺は、きた世界扉をそのまま潜り…

「B55ハンガー」扉をけす。

「行けるな。俺の知っている敵がいたし」

「ゲームの世界か…僕らもいつてみてもよいのかな？」

「あ、この世界はやめとけ、

暴走した自立機械VS人間の構図だから、横からいきなりやられるぞ」

「わかった…やめとく」

「しかし、ゲームの世界も良いとは…恐るべき世界扉…、
となると…」

鋼鉄の咆哮の世界も良いって事だし、
無限弾薬装填装置も大丈夫なのか」

「無限弾薬装填装置？」

「言葉通りだな。」

物理を無視してるから見てみたいことは見たかったんだ…」

「へえ〜」

「ただ、主人公側が手に入れなければならないけど…
敵側もある意味無限的に撃つて来るから、
下手したら簡単に手に入るかもしれん…」

「魔法も、もってこれたりして」

「あ、世界扉は魔法だぞ。ゼロ魔の虚無」

「ガン…そ、そうなの…orz」

「知らなかったか？」

「データいれてくれてないじゃん!!」

「まあまあ…しかし、

FFの世界のメテオを喰らったとし、情報が渡ったと仮定する上位存在

…どう抵抗すると思う??」

「メテオ??」

「小惑星を上空から落とし相手にぶつける魔法」

「レーザーの集中砲火による破砕」

「しかも…連続魔のスキルだったかで、精神力切れるまで、連発できるし」

「流星群なみの小惑星が狙って?……」

流石に物理無視は、無理、チート」

「だろうなあ……」

(FFの黒魔導士達による…ハイブ破壊攻撃、面白そう)

「まあ魔法は忘れて…、とりあえず俺の行き先は、もう一回ガンダムの世界で材料と、核融合炉の回収…いや、Zあたりだな、ガルダのコピー目論むから2回…」

ん…先Zだな…

でその後は…

あ…メデュシン…

はまだいいか…メタルマックスの世界だな…」

「何が目的??」

「あそこの自立機械達だね主に…」

ガンタワールとか、ガンホールとか…洗脳して強化を施す」

「うんうんでその後は?」

「メデュシンって次に鋼鉄の咆哮の世界探索か…
まあその前あたりに一年戦争いくとして…」

「各世界5日だとして、休みおいて6週間だね」

「メタルマックスと、鋼鉄の咆哮は2週間」

「あ、じゃあ8週間だねマスター」

「だな…」

「確か佐渡島ハイレベルだと…3ヶ月だから、その終わったあたりでまた、間引き作戦だよな…多分」

「それまでに何百機作れるかだね…
しっかり集めなきゃ」

「ああ、……鉄関係の採取地もほしいけどなあ……」

「アステロイドベルトは？」

「あ、じゃあ…チューリップセット2個??」

「だね」

「じゃ、それでよろしく」

「イエスマイロード」

「不知火の換装はどれ程？」

「あとすこし…あ、マスター」

「ん？」

「今のペースだと僕ら、たらないから300まで増やす許可ほしいな」

「いいよ…そねで」

「イエスマイロード」

「さて、一回副司令に報告後、
不知火の武装面すこしまたみるか」

「逝ってらっしゃいマスター」

「漢字違つぞ」

「いや、あつてるよ」

(たく…)

「副司令執務室」

「副司令いますか」

「待ってたわ、はやく入ってらっしゃい」

シュン

「失礼します」

「んふふ、あんたまりもを泣かしたわねえ？」

「え？…ええ…はい」

(昨日のか…)

「あなた…責任とって結婚しなさい」

「はい…いいいいい？」

「了承したわねえ式は」

「ちよ、ちよ、ちよまっつて下さいよ…！」

「あらあの子嫌いなの？」

「いや、そういうわけじゃ」

「ならいいじゃないの〜日程は」

「いやそうじゃないっすよ!〜!」

「あら、まりもは優良物件よ〜」

家庭的で、料理はもちろん、家事全般こなせるし〜」

「……………肉じゃがも？」

「勿論絶品よ〜さ、日程日程」

「は?! いや、まりもさんに聞いたんですか？」

「あらわたしが決めたら大丈夫よ〜」

「当人同士の恋愛の上でないと……………」

「あらじゃあ、恋人から」

「それもまず当人どうしから!〜!」

「うんもつ、どつ責任とるのよ〜」

「いや、そもそも責任って…むこうがこんな思いをしなくてすみません！って…」

「あら…そうだったのね……」

「そもそも、副司令…あの場にいたんすか？
何で知ってるんですか？」

「さあねえ〜」

「……まあ確かにまりもさんは……」

「あ、脈ありなのねじゃあ責」

「それはおいとく!!」

「もう……わかったわ…で何？」

「と、これからの行き先決まったので報告を」

「いつ行くの？」

「明日にでも…」

「期間は？」

「5日間前後、長くとも7日間」

「今回行くところと目的は？」

「Zガンダムの世界、1番最初に行った世界の後の時間軸です。
主にガルダと核融合炉集め」

「ガルダ？核融合炉はもう持ってるじゃない」

「ガルダは飛行母艦でペイロード9800tを誇ります」

「飛行機は落とされ…まあなんかしら考えがあると思っけど…」

「ええ、まあその辺は…」

「それにそんなに必要なの？」

「今現状ですとA - 01の分含めて33機分しか、作れませんので」

「それで十分なんじゃない？」

「足りないですね」

「なに？あんだ…どの位機体を、作るつもりなのよ」

「数限りなく…億でもこの世界からBETAが駆逐するまで…」

「……………」

「昨日まりもさんから、なされました…」

俺がちよつと取り付いた、

なんか動作がおかしい、

だから、ちよつと弄ってみた……………」

ただ、そんだけの、OSだけでですよ??？」

「……………」

「で、その時、これでこんな思いをしなくてすみませ…と言われま
した。

俺から言わせると、おかしい、異常です……

そんな思いをするのが異常なんですよ！……！

……最初この基地に来た当初は、
技術を渡して彼女達を護れば、それでよしと思ってました……
けど、それじゃあ足りないです……」

「あんた…そんなに力もつと、この世界の異端者になるわよ」

「それでもかまいません…BETAを駆逐し、
この世界、いえまりもさんのような、
思いがしなくてすむなら……」

「どうやら本気のようなね…後悔はしない？」

「はい！……」

「わかったわ…好きになさい……
けど、そんな億の機体作っても補給が間に合わないわ、どうするの
？」

「そこら辺はあてがあります。
作っちゃえばいいんですよ」

「原材料どじするのよ」

「アステロイドベルトから調達します」

「は？」

「アステロイドベルトです」

「輸送艦とかは？」

「いいません」

「……………馬鹿にしてるの？」

「いえ」

「………おじいちゃんのこと……」

「この間ナデシコの世界に自分いったの覚えてますよね？」

「ええ……」

「その時、別目的でプラントをゲットしてたのですが、
ワームホール式のワープ技術があったので利用します」

「……………現物みたいわね……………」

「どっちを？」

「そのふざけた技術両方よ……！」

「わかりましたじゃあ行きましょう」

……………行く途中……………

「あ、副司令ひょっとしてオルタ5に〜と思ってます？」

「あつたりまえじゃないの！！そんな超空間技術ば」
「大丈夫っすよ」

「え？」

「生き物はワームホールを無事抜けられません、カチンコチンに固まります……
まあ同じ世界の技術で、ディストーションフィールドで、包まれてない限り……
なのでそこところは大丈夫ですかね」

「そうなの……」

「それよか、オルタ5側増長になる可能性の世界が、
宇宙戦艦ヤマトや、ガンバスター、
マクロス7以降、
銀河漂流バイファムとかの単独ワープ可能な世界ですね」

「その世界って……」

「宇宙戦艦ヤマトは、往復約30万光年を旅し、
襲撃する異星人を退けながら地球を救う世界……
次に、ガンバスターは、最終的には銀河中央まで、万単位の艦隊で
殴り込みにいく世界。」

あ、ガンバスターは太陽位を軽くキックで砕きます。
あと、マクロスシリーズの世界は、1000万人規模の都市船団で
もって銀河開拓の世界。
因みに巨人族もいます。
バイファムは、異星人の襲撃を逃れた子供達13人が、
航宙艦一隻プラス5機位の機動兵器でもって戦い、両親達を助けに
行く話です。

どれもオルタ5派が喜びそうな技術満載の世界ですね…
ワープ技術ありの、移民できる技術ありのですし…
まあ、今までいった世界はまだ、地球圏活動の世界ですから…」

「ほんと、あなたってふざけてる力、”世界扉”だっけ？もってる
のね」

「ですね」

「 B55ハンガー 」

「ふ…ふ…ふざけてる……」
副司令の目に映っている光景、
作業ロボットがふよふよ浮いて、機体を組み上げている

「なによあのロボットは!？」

「ああ、あれが作業用のコバッタ達です…5号!」

「あいあいマスター

あ、香月夕呼博士ですねおはつ」

「え…ええ…おはつ……」

「ぼくちゃんは作業用ロボットのコバッタ5号ですよ
よろしゅうにい」

(コバッタ選択まちがえた…汗)

「5号、いって作業続け」

「マスター…そんな事いわず」

「8号9号!…!…!いつにonhanashiして…!…!11号!…!」

「あれ〜」

8号9号に牽引される5号

「5号が失礼しましたm()」
[B]と顔文字表示の11号

「……で、このご達、なんでういてるし、

会話？自我があるみたいだけど…」

「反重力推進ですね、
自我は元々あったみたいですよ…が、
命令が優先で抑え付けられてたみたいですよ。
まあ会話機能つけた際に、
そこから辺解放し、変えちゃいましたが…」

「そしたらあんな子もいたのね…」

「大変ご迷惑をおかけします…」

「さて…でこれが異世界の技術の塊のプラント。
砲弾製造、材料の変換、無人兵器製造、
ナデシコ世界のオーバーテクノロジーの塊」
黒光りする正四方形
中が空洞になっっているようにみえるが、
光通さず不可視の状態だ…

「な…なにこれ…」

副司令が見えないエリアに近寄る。

「ストップ！！分解されますよ！！」
ビクとして動きを止める。

「コピーし作成しましたが正直こいつは……俺にも解析できてないオーバーテクノロジーの塊です。で見える部分を触れたいなら触って下さい……」

「あんたでも？コピーした本人の……」

「ええ、正直俺の能力を超えてましたね、

コピーはそのままだせば良いとしても、改造は、サイズのある程度の変換のみです。

中身を完全に弄れませんでしたね……

だから、こいつらがいなかったら、砲弾製造できるは、知らなかったですし……」

「私たちは記憶として刻まれてました」

「俺もわかんない力があるんすよ……で、11号、チューリップは？」

「……材質変換中みたいです」

「……現物はまだってとこですな……」

「あ、あれが陸戦強襲型ガンタンクです」

副司令を正面へ案内した……

「この世界を変えていく、そう…重装歩兵の様にね…」

「この機体がねえ…」

ぐるりと見回し…

「異質に見えるわ…ほんと…」

「ま、そのワープ装置できたら見せてよね、救世主さん」

「はい」

「あ、コバッテリー機わたし付けに付けてほしいんだけど…
良いかしら？」

「副司令付けに？」

「部屋の整理って、ピアティフから言われてたのよ
もちろん分解はしないから」

「そうですね…彼らに聞いてみますか…、
アテンション！！」

「一斉に静かになるハンガー」

「副司令がアシストについてほしいとの要望だ！誰か？」

「10秒ほどすると22号がこちらに近寄ってきた」

「わたしがなるー」

「よし、じゃあ頼んだぞ」

「イエスマイロード」

「じゃあ…いらっしやい」

「まあ結構全般的なのできますから、かなり役に立ちますよ」

「わかったわ」

「では自分の方は以上ですので作業の続きを…」

「ええ」

改造タイム

不知火

現用 運搬担架トラックに合わせて微調整

脚部外側にあたる高周波ブレードを戦闘時のみ、
展開にする収納式に

空中散霧式（ショットガン形式）、12・7mmホローポイント弾
追加
装填数30発

……

カオル報告

陸戦強襲型ガンタンク2両追加
1両作成中60%

コバツタ振り分け
変更

3号 ヤドカリ増産担当

5号 ohanashi中

22号 副司令付き

50号まで増えた

第22話 更にチート化計画 投稿日20101226 (後書き)

作者「億っていつちやってるよ……」

カオル「多かった?」

作者「銀河中央殴り込み艦隊が8700隻、
でその旗艦の70km級エルトリウムで
シズラーマシン800、その他戦闘機3800だぞ」

カオル「多かったね…でも自重しない〜」

作者「はあ……うんで次はZにいくんだよな…
趣向変えて、」

ジャジャー

作者「Zガンダム編!!!続編になります!!!」

カオル「おおっ!!!」

作者「実はカオルが自重しないため……」

一日一話のペース内に、おさまり切らなかつたので……
あんな事こんな事を画策せざるえなくなりました……
なので、明日の冒頭から、しばらくMuv-Luvの世界からお別
れです……」

カオル「コロニーレーザーもってくる!!!サイコガンダムもってく

る!!
Zガンダムもってくる!
あと、あと」

作者「このようにカオルはコレクター癖があるので……………」

カオル「あ、でも5日の制限枠なら5話ですむよね?」

作者「その期間内に戻ればね…けど、ナデシコでのチューリップの
ように八ヶ月たつと、

カオル、お前は次の当日八ヶ月後だからな…注意しろよ」

カオル「へ〜い…うんじゃあゼダンの門コピーしちゃって…
ルナ2もコピーして、ハイブに落とすか……………」

カオルの妄想は続く…

作者「しかしよ…コロナー落としの後影響考えてるのかね??」

不明だ!!

作者「多分コロナー落としするに1票いれておじい…」

第23話 Zの世界へ ”カプセルの中” に 投稿日20101227 (前書き)

予告通り 暫くZの世界内での暗躍活動中心になります。

数話はZ編となりますので、ご了承を……

第23話 Zの世界へ ”カプセルの中” に 投稿日20101227

〓 〓 自室寝室 〓 〓

(さてとガルダか……)

取得にいくとしたら地上編なんだよな…ZZの世界でも良いが)

ストーリーを思い出している。

(確か数機だったから無傷で、取り返そうと四苦八苦してたんだよな…)

台詞を思い出している。

(一番わかりやすいとするとジャブローか…)

エウーゴの地球降下作戦のあたりである。

(あの辺りだと、地上に着陸してて目指しやすいはず)

カオルはまどろみのなかへ……

2001年5月31日

コバッタ同士の通信で、直接会いに行かなくとも、密談ができるフラグが増えた。

が呼び出しくらった。

(…なんだろう……)

「 副司令執務室 」

コンコン「カオルです」

「いらっしやい」

シユン

「えっと…何よつです?」

「行く前に二つね…」

帝国軍からあなたの撃震くれ!!ときてるんだけど…」

「あげるのはメンテ面で絶対無理ですけど、
調べるならご自由に良いと、思いますよ」

「……そ、それで良いの??」

「あ、生体駆動の中を弄ると帝都が消滅しますよ、の、説明つけ加えてなら、
五日間程どうぞで、貸してあげて下さい。

あと…操縦するは構わないんですが、全力駆動はしないようにと、付け加えてください。

流石に死人がでた機体は乗りたくないですし」

「え、ええ……」「あ、武装もこの間のM - 120A1と高周波ブレードを貸してあげて下さい。
要返却で…

自分がどっかいつている間ならご自由に…って」

「え…ええ、わかったわ…」

「あともう一つのは？」

「お兄ちゃんに会わせる…のが来てるんだけど…」

「は？」

(まさか美幸がついてきた??)

「わたしも今一わからないけど、あなたの撃震に乗ってたのお兄ちゃんだ!!」

で、会わせてくれの催促きてるの…」

「あ…(なつとく)

釜山で放置してあった上半身なんですよね…俺の撃震は…
その説明しなきゃ駄目みたいですね。
わかりました。その当人に後日にでも、

放置してあつた状況を説明しに行きます。帰ってからだと仲介お願
いできます?。」

「めんどろだけど、話ふつた以上、しょうがないわね。
わかつたわ。日程はわたしが決めていいのね?。」

「はい、お願いします……………
では行つて来ます……………」世界扉”」

” ” Zガンダムの世界 ” ”

「ありや?座標間違え……………」

カツカツ

「やば、バルディエル!。」

(……………セーフ、あの制服は、ティターンズ??
……………状況把握が先か……………乗っ取るか……………基地???)

乗っ取ると……………艦船名アレキサンドリアと把握……………

(……………マラサイがない??……………初期の頃か……………?
時空系間違えた……………?
おっかしいなあ……………ジャブロー想像してたんだけど……………
ん、あれは……………?)

自分の意識をリクラインニングスペースにうつした…

「カミーユがガンダムMK2を盗みだしたなんて本当なのですか？」

「わたしが知る訳無いだろ」

「あなたはいつも、そう自分の事しか頭ない」

(ん…あの人は…)

バン！！本を机に叩きつけられる。

「今はバスクの事を考えてる。この状況が異常な事ぐらい承知している！！」

「どうですか。マルガリータという若い女の子の事を考えてるのでしょ」

「クッ！！」

ビシィ

「あう」

（あ、みぎほはたかれて赤い…
そうか、たしか第3話??）

やはり時間を間違えましたっただようだ…

（たしか彼女は装甲材の開発技術士官だったよな…で、真空に…）

今俺が注目してるのは、”カミーユ・ビタン”の母、”ヒルダ・ビ
ダン”である…

彼女程優秀な技術士官、どうせ死んじゃう人ならば、
連れて帰っても…と思いはじめた。

（戦術機の装甲素材発展や、ガンダム世界の装甲を根付かせるのに、
役にたつかもな…

多分、俺が死ぬ役やれば…変わりないはず…）

そう思ったつと、実行し始めた。

（まずは、逃げれない状態にならないと、
取引すらできないからなあ…）

悪魔の取引をしようと考えてた…

このままこの世界で死に逝くか、
別世界で別系統の技術に触れ、

開発技術士官で生きるか…

(うっし…なら)

アレキサンドリア掌握しつつ、意識を格納庫に…

(ついでにハイザック情報ゲットしとくか…)

一部を同化、解除、

引き続きカプセルを…

(お、これか…な?)

艦全体をもう一度くまなくサーチしてみたが、この一つしか見つかってない。

しかし、艦を掌握して見てみると…

(結構面白いなあ…)

で、はまってしまった…

シムタワーみたいなのが、リアルな人間生活で、覗けちゃうのである…

パイロットスーツに着替えている女性士官、

女子トイレで四苦八苦して…

あ、やっと出たらしい…ほっとした顔だ…

(ん？あゝ不倫ばいなあ)

いかにも年齢差のあるカップルが、
人気の無い所でキスを交わしている…

(おっ)

人が近寄って…

(あ、ばれるか??)

と思ったら…バツ、凄く素早さで上官と副官みたくなった…

(おいおい、愛人を副官にしてんか？この士官…)

と観察にはまってる…

ヒルダさんが、ティターンズ士官に、連行されているのを発見した。

(おっと、ヤバヤバ、同化しなきゃ)

艦の掌握解除し、カプセルに急いで同化する。

カプセルの前までに連行されてきて…

「はいれ!!」

ヒルダさん精一杯抵抗はしている。

「こんな状態で宇宙に出すなんて正気ですか!!」

「つべこべいわず入ればいいんだよ!!」

力付くで、カプセルの台座部分に押し出す。

「きゃあ
」

「おっと…対真空ガラスだから、気をつけるよ。
なあと、交渉が上手く行けば、また帰れるさ。
奪いに来たら…ズドンだな」

「酷い！ひとでなし！！」

「貴様、ティターンズに逆らうのか？
第一貴様だって、交渉成立したら、
特進になるだろうが！」

「こんな状態ですとは聞いてません！！」

「あーうるさい！！黙れ！！」

強化ガラスが下ろされ固定された…

ヒルダさん…シクシク泣きはじめた…

(そろそろ宇宙にだされ…)

ハッチがあげられカプセルは静かに進み始めた。

(そろそろかな?)

「イロウル」

通信回路をのっとった…これで聞こえない。

「ビダンさん」

「ひっ!!」

「落ち着いて話を聞いて下さい、あと顔を少し下に向けて下さい」
俺を軽く頭だす

「ヒイ!!」

「まあ驚くのも無理ありません…
自分は異能力を手にいれた、異世界人ですから…」

「……異世界人? 異能力?」

「ええ…、で自分はあなたの運命もしています…
あなたはもう間もなく、ハイザックの弾で、
ガラスが割れ真空に放り出され、

「この世から去ります…」

「そ、それ本当なのですか？」

「はい。あそこに見えるハイザックが…
迎えにきたカミーユさん操縦のガンダムが近寄ってきて…
奪われない為にです」
ハイザックが辺りを回っている…

「パイロットはジェリド中尉、
彼はあなたとは知らず、このカプセルを爆弾だと思っています。
また、奪われそうになったら、撃てと命令されています」
「ああ、あああ」

「おっと…まだ立っててください…
あなたの運命に、介入してるのを知られたくないので…」
自分の腕を棒に変化させ、倒れる前にささえた。

「……はい…」

「さて…運命のご選択をさしあげます。
最後まで聞いて下さい。

- 1 あなたは今話した事を俺の能力で忘れて、
この世界でもうすぐ死ぬ運命を受け入れる。
- 2 あなたは別世界で、別の技術に触り、技術士官として活躍する。

以上どちらかです…」

「今助けていただけ」

「無理です。」

実はこの世界で、

あなたの息子さんは、

あなたの死によって、英雄となる世界なのです……
ですので、残念ながら、どちらかしかありません」

「……………カミーユは、わたしの死でもって??」

「ええ、あ、2を受け入れたら、

代役は宇宙でも死なない、自分がやりますから
大丈夫ですよ」

「別世界へなら…」

あの子のこれからの事も、教えて下さるの?」

「はい。お約束します」

「……………わかりました…助けて下さい、
異世界へいきます」

「では、さっそく…あ、少し血を頂きますよ。
運命で必要ですので…」

「いた！」

「あと少しです。我慢して下さい…」
100mIを急いでぬきとる…

「終わりました。では、変わりますので、異次元でしばしお待ちを、アルミサエル」

彼女を睡眠状態にし虚数空間に押し込んだ。

「”幻影”」

（俺は、ヒルダ・ビダンだ…）

さって一世一代の大丈演技とくごらんあれ…）

アーガマから 有線カメラがきた…

（カメラか…）

で、次がガンダムがくるから、
驚いて、怯えるんだよな…ガンダム…見えた！！）

ビームライフルが撃たれ、ガンダムは避けこつちに接近する…

俺は、後ずさりながら怖がって…

ガラスに手をつけ

「きちや駄目！あたし撃たれるからきちや駄目！」と叫んだ！

（次は怯え…手をだな…）

手を口元に…

「やだやだやだやだやだ」

ガンダムの手がのびてきた…

（そろそろか）

マシンガンが発砲

バリーン

真空にさらけ出される俺……………

（う…これがプレッシャーか）

ガンダムが…悲しみの為暴走し始めた…

ハイザックにガンダムが突撃し始めた…

(ヒルダの出番はここまでだな…)

「”幻影”」

姿を消す

(しばらくは良いとして、ガンダム3号機に取り付かないと…
あ、ガルバディベータか…あれもほしいな…)

ガンダムが突進逃げハイザックが背後から捕まり、

(あ、ガンダムが殴ってる)

発光信号が 赤いリックディアスから…だされ…
ガルバディが監視の為動きをとめた。

(よっし今か)

「バルディエル!!」

(ラミアの機体が……ばれない内に離脱してっ)

クワトロ大尉がハッチにたかっている…

(停止している…今のうちに)

「バルディエル」

3号機にとりつく…

(カミーユ …泣いてるな…でもこれで彼は強くなれるんだ…)

そのまま俺が取り付いたガンダムMK2 3号機は、アレキサンドリアに着艦。

もちろん指先に血をくつつけておくのは忘れてない…
塗ったあとは自分は、
コクピットブロックのスクリーンになっている。

「開ける!!」

「開けないか!!」

「ちい! おい強制解除の準備しろ!!」
外で整備士がたかかってきてるようだ…

「セットOKです!」

「早く入力しろ!！」

「まだか？」

(エマさんか)

「なかからキーを固定しています。解除用のコードを送り込んでいます」

「開きます!！」

シューーン

エマさんが入ってきた

「やっとあえたわねカミーユ」

(やっと会えたよエマさん…)

「答えなさいヒルダ中尉は乗っていたの？」

バシッ

(いたそう…)

「いたの？いなかったの？」

「見ればわかるでしょ」

「ホロスコープじゃなかったのね？」

「三号機の指を見ればわかるでしょ」

「指？」

エマさんが確認の為に指先に…

整備士が、乗り込んできて…

カミーユの両脇捕まえ引きずりだそうと…

「クツ…離せよ人殺しども！いけっというなら一人でいくよー！」
振りほどいてメットをメットをガコ！つとたたきつけた…

「父さん？」

「……………」

（声聞こえないな…）

カミーユ降りていった。

「カミーユ！！！」

殴られた音も微かに

「やめないか！！！」

「ほんとうの事だろー！！！」

「……その母さんをやったのは、この船に乗っている連中なんだ！」

静かになった…

(後は…しばらくおとなしくしてよ…)

そのうちアーガマにいくさ…

うんで、次は父さんか……たしか2号機だったっけ…?)

機体の足から床になり、2号機に取り付き、

コクピットのスクリーンになった。

(さて…ねますか…)

……

「ハッチをあける！開けないと撃破する」

「ノーマルスーツ着用してないものはエアロックはいれ」
ブオアアアア

「もう一度いう ハッチを開ける、開けなければと爆破する」
ガアン！！

「今度はビームライフルをしようする」

グウイイイイン

『二号機 二号きつじつて』

「わかってるいきたまえ」

『いきます
クイーン

(ん…………んあ…ああよくなた…)

フアアアア

「いいしんどうだ　いくぞ！」
ブオオオー

(予定通り、フランクリンだな)

戦艦からのビームが…

「かすめた！」

(当たった…ノズルがよていどおり破損したな…)

「心配しないでくれ　エマ中尉。

ノズルの一本位使えなくとも干渉はしない設計になっている」

『ではついてくれますね』

「もちろん 最大戦速ではないが」

『カミーユ コースは2号機が固定してくれている。
外れたら迷子になるわよ』

(うん迷子になりたくないさ…)

『了解!』

ビーム!

「は、わあ!」

正面にガルバディベータ…いった。

『なんでライフルうてないんだ!

自分で開発したモビルスーツだろ!』

「バルカンもあった」

(そりゃ、いきなり操縦できるとはいえ、
戦闘素人には無理だよ…君と違ってさ…)

お、クワトロ大尉(まってたよ)

「エウーゴのモビルスーツだ」

着艦 うっし…

「バルディエル」

艦と同化して掌握… 一部をリックディアスと同化し、解除。
(今の所は、めぼしいのないなあ…)

船外タイルに物質のまま移動し、モンブランを視認、離脱して…
取り付き成功、

「バルディエル」

モンブラン掌握、

(格納はつと…ジム2か…)

一部同化、解除

(さて、ヒルダさん対応しなきゃな…人気のない部屋はつと…)
発見しその部屋で解除し本体のみになる…

「世界扉」行き先は現実世界…

(彼女分の弁当と…)

次こそはジャブローに…)

………

カオル報告

ヒルダ・ビダンさんが加わるようです

機体情報のみ

アレキサンドリア

ハイザック

ガルバディベータ

アーガマ

リックディアス

モンブラン（サラミス改級）

ジム2

カプセル

B55 状況はわかりません

作者「やっちゃったやっちゃったやっちゃった…」

あ号「どうした？作者よ……」

作者「非常に後悔している……」

あ号「なにを後悔??」

作者「さらなる異世界人の拉致？強制?……」

あ号「ぶっそつだなあ……」

作者「……当初プロットには入ってなかったんだよ……」

あ号「……わしにも何かくれ」

作者「……マクロスのエビルシリーズかな」

あ号「……乗っ取られる……やただぞ」

作者「贅沢いうな…何が欲しいんだ？」

あ号「…わが主、ケイ素系生物…」

作者「別世界ならいるぞ」

あ号「本当か??是非とも!!」

作者「考えとく…話戻すが、

一人や二人ならまだ修正が効くか……どうするか……?」

あ号「こついつた時は…酒飲みながら…語るつ」

作者「お、銘酒か？」

夜はふけていく……

ヒルダ「わたしは、登場しないの??」

あなたは次回、今回は寝てる扱いだから

〓〓 現実世界 〓〓

「さてっと」

相変わらずな俺の部屋から抜け出した。

「 ”幻影” シャムシエル」

フランクリン・ビダンになって町に降り立つ。

（まあ少しは目立つ外国人だが…彼女に飯だな…
あとは適当な家コピーしておくか…）

丁度よさ気な家見つけたのでコピーし、

一回公園で鉄製で作って改造…成分変換

窓無し、ドア無し、電気をS2機関、

上下水道はタンク式にしてから、

虚数空間に取り込む。

先にビジネスホテルにツインで、チェックイン。

コンビニで飯やドリンクを買い、ホテルの部屋へ、
幻影解除して、彼女をだした。

睡眠状態解除…

「ん…ん…は、ここは…」「ようこそ異世界へ…ヒルダ・ビダンさん」

「異世界!？」

「窓から町の光景を見ればわかりますよ」

窓にかけよるヒルダさん、

「は……………はは……………ほ、本当みたい…ね、時代遅れみたいですし…」

「まあ…ここは西暦2010年の世界ですしね」
テレビをつけてリモコンを渡す。

次々チャンネルをかえる。

ニュースの時間帯だ…丁度良い…

「俺がこっちからいなくなっって一ヶ月今日か…」
そう呟くと、しばらく彼女と一緒にニュースを眺めた…

「で、ここは、わたしに技術士官して貰いたい世界なの?
ニュースみた限り戦争もそれ程なさそうなんだけど」

「あ、その世界の説明がまだでしたね…
長くなりますが…」

俺は死亡フラグ満載のMuv-Luvの世界について、俺の知ってる限りを話した…

……約1時間後

「はあ…そんな世界があったのね」

「はい、なのでテコ入れに自重はできないのですよ」

「けれど…話しから聞いた限りでは、技術者冥利につきそうね」

「はははは…」

「どちらにしる選択権はないんでしょ？
向こうの世界でご期待通りの仕事をしてあげるわよ」

「よろしくお願いいたします」
深々と頭を下げ、感謝の意を表した。

「で、この後のお話なのですが…もう一回あなたの世界に渡り、その後活躍してほしい世界にいきますので、
明日以降…3から4日程、虚数空間に家を用意しましたので、

おとなしくお待ちして下さい」

「わかったわ…けど食べ物とかはあるの？」

「明日行く前に、コンビニ弁当を買いますので、持ち込んで冷蔵庫に入れておいて下さい。あと私物等はトランクに入るサイズで、後ほどご案内する世界の部屋に…の形ですかね」

「……とりあえずその虚数空間の部屋に案内してもらえますか？ 20分後に戻して貰えれば、足りないものリスト出せるから」

「はい」でヒルダさんを部屋に置いた。

……20分後……

彼女を引き出した。

「リストできました？」

「生活必需品があんまりないんだけど…」

「あゝ今日ビダンさんの為に作ったばかりなので…すんません。明日行く前にもう一つ、手荷物にして揃えましょう」

「で、わたしの方は、洋服と、そうね時間つぶす…本かしらね…
TVは電波入らないみたいだから無用だったわ…」

「明日ですね」

「ええ…さあこのあとは、大人の時間ね」

「…はい??」

(いきなり何?)

「幸いホテルみたいだし、あなた、若く見えるし…美味しそうだし」

「………とりあえず飯にいきましょう」

(ヤバイヤバイヨイツブサネバ…オレガヤバイ…
か、洗脳か……)

「チツ…そうね」

「あ、そうだ俺このままでは、外に出られませんので…」

「え？」

「俺は、この世界では、追っかけパニックを起こす人の姿なんですよ……」

「……その可愛らしさだからなのね……」

「なので、今あなたが会いたくはない人の、
外見を借りますが……ご了承して下さい……”幻影”」

「まあ……どうなって……」
ペタペタと触ってきてる。

「これも異能力の一つです、
幻影を纏ってると思って下さい……
なので、顔の感触も違いますよね」

「ふふふ、皮肉なものね……」

「すみません、他人の幻影を纏える程、
レパトリーは少ないので……」

「しょうがないわねえ……、」

夕食食べにいきましょう、あなた
スッポン料理屋さんいきたいわぁ」

（やばい、やばい、絶対酔い潰してやる！、
俺が食われない為にも！！）

結果、酔い潰れさしてベッドにほうり込んで就寝。
なんとか貞操はまもったぞ…

二日目…

翌日、二日酔いしてるビダンさんを起こして、
シャワー等々全裸で襲われかけるのはお約束
をすませて買い物へ…

必要な物

（生活必需品リストは正直助かった）
揃えて、虚数空間の家に送り込んだ。

お疲れの様子のカオル君。

（はぁはぁはぁ…あんなに原作ではエロかったのか？、
ヒルダ・ビダンさん…

何回襲われかけたか…）

多分、若い燕みると中年女性はあなる人いるはいるよ…

（作者：ナレーションありがとう…次は何か考えよう…）
また、誰か拉致るつもりなんだね…

（特に予定はないが優秀な人材で死亡はな）
はいはい、先すすめて…

「わかったよ”世界扉”」

作者のナレーションに反応しないでね……

|| || Zの世界 || ||

(と、またアレキサンドリアかな?…ばれる前に)
「バルディエル」

状況把握中……

艦全体を掌握し、格納庫を覗いてみる…

(あ、マラサイバリユートシステム付いてる、
調整中みたいだな、時間はあってるか…よし頂くか)
マラサイ同化…解除

(あとめぼしいのは…シャトル?ほう…頂き)

シャトル同化…解除

(こっからだとする…、ジェリドのマラサイと同化して、
MK2と戦闘前に離脱、回収しまくって、ジャブローに単独降下か
???)
バシユ

(おや、バリユートテストか、となると)

クイーン

思った通りジェリドと思える人が乗った機体が、運ばれてくる。
(ストーリーからだとの機体か…)

「各機バリエートの取り付け急げ!!」

(おっし、取り付いてまつか…)
艦掌握状態から格納庫に移動し、運搬中のクレーンから、マラサイに取り付く。
取り付いた後はコクピットのスクリーンとなり、出撃をいまかいまかと待っていた…

……三日月

(あつれええ？一日過ぎしちゃった…なんでだろう???)

まだエウーゴ艦隊を捕捉できてない為、出撃がまだなのである……

ファイファイファイ
ブザーが鳴り響く。

「友軍より入電!!」

エウーゴ艦隊発見!!

MS隊出撃急げ!!」

途端に騒がしくなる。

(おほっおらワクワクしてきたぞ)

この部分はテレビでは流れなかった所だ、
の為カオルは興奮してた。

「エウーゴMS部隊は推測通り、ジャブローに降下予定と思われる。
各機、大気圏進入戦闘になる。
健闘を祈る！！」

各MSパイロット達が、自分の愛機に向かって飛び出す。
無重力だからそのままコクピットハッチまでたどり着き、
コクピット内部に乗り込む。

「まわせー！！」ジュレネーター起動、
ハイザックのモノアイが光る。

準備できた機体から、順次カパルトまで進んで射出されている。
勿論、機体武装を途中で掴んでいつてる。

ジェリドが乗り込んだ。

(ジェリドう待ってたよう)

ピッ「生体認証確認」ピッ「正常スタートオペレーション」クイ
ーン

機体がスターターを通し、ジェネレーターが起動する。

「カスタムスタンバイ マラサイ」

「こちらジェリド、出撃準備完了。
カパルトの順番まだか？」

『2番手です…』
シューーン

『順番きました、ご活躍を』

「ありがとう」

ガンガンガンガンカチャリ

「こちらジェリド、射出準備完了」

『コントロールどうぞ』

「ジェリド、いくぞ!!」 シューアアン パシユ

「編隊そろえよ」

『『『了解』』』

「ガンダムMK2は俺の獲物だからな、
見つけたら報告しろ」

『『『了解』』』

『こちらオペレート、方位3 5 3 0 8 0 0にセットして下さい』

ジム

ジェリドがオートパイロットの方位を設定した。

『会敵予想時刻、480後、敵艦隊はMS部隊発進済み』

「ちい、奇襲にはならんかったか」

トークスイッチは入ってない為、一人言みたいだ。

『敵艦隊、アーガマ、他サラミス改級他6です』

「情報より少ないな…もう撃沈したのか？」

『敵金色新型1』

「例のできそこないか…」

（百式だよ百式！）

『リックディアス、ネモ、ジム2多数です』

「MK2は？いるだろう」

（ありゃ…流れてないのか…）

トークスイッチを入れ

「オペレーター、こちらジェリド、

「どっかの部隊が出てるのか？」

『交戦中です。：友軍機体情報入りました。IFF設定送ります』

トークスイッチは切った様だ。

「メツサーラねえ」

(シロツコタソか、確かこの部隊付く頃は離脱なんだよな…)

『当該が単機による奇襲により、敵艦を沈めた模様です』

「ほう…」

『隊長、そんな火力あるなら、欲しいですね』

トークスイッチon

「まあな。だがこのMA、隊報でも一切出てなかったじゃないか。特殊設計かもしれんぞ」

……

「見えた！各機オールウェポンフリー」
バラバラ

「ガンダムMK2はでているか？」

『あせるなよ、場所が場所だ。重力に引かれるぞ』

「だからこそチャンスだっていったんだろ」

『それもそうだ』

「俺とカクリコンはMK2探す！

各機突撃せよ！

ジャブローであおう！」

『了解！』『了解！』

（さって回収作業に勤しみますか、

ジエリドさんありがとうね〜）

離脱「幻影」

宇宙空間を纏い、高速で回収にむかった

（まずはエウーゴ艦隊あつた…爆沈あるなあ…）

回収

（3隻か、MSも結構つんでたな…うおっと）

進路をそらし、自分が進んでた進路を、

ジム2がブースターを吹かしながら、通り過ぎてく。

（結構大破多いな…）

回収回収…

（あ、エマさんのリックディアス？片腕がないな…）

見ると、赤いリックディアスの右腕が無くなってる。

（うおっと…お、回収、回収）

流石にビームの直撃はまずい…

何にもない空間にATフィールドが展開されるのである…

そりゃあばれちゃうね…だからだ。

…そのうち…

大気圏内に入ったと思われる先頭から、
順次バリエートが開かれる。

バリエートからの弾幕

（そろそろか…）少し離れると、虚数空間から死体を出し、宇宙空間にまいた。

虚数空間の中の死体回収ロボットによる収集で、
死体置場から出してきたのだ…

（ご冥福をお祈りいたします…皆さんの機体、有効活用させて頂き

ます…)

大気圏をみると、

アーガマが大気圏摩擦熱をだしながら降下していた。

(エマさんの回収か…)

アーガマは最大戦速で、大気圏脱出し離脱し始めた。

(戦闘終了だな…俺も突入するか…)

単独生身で大気圏突入し始めた…

(フライングアーマーの回収はグフフライトタイプだけ？

遭遇後なんだよな…急がなきゃ…あ、)

見ると、フライングアーマーの翼がマラサイのバリユートを引き裂いた。

瞬時に機体は摩擦熱で真っ赤になり、マラサイのコクピット内部では耐え切れない熱で…カクリコン死亡…

そして、機体は5000度以上に及ぶ熱に耐え切れず、溶けだし…推進材に引火し爆破。

何しろ最適突入角でなく、ほぼ90度近くに及ぶ、垂直突入である…

それを傍目に速度をます。

勿論、真っ赤だが傍目には見えない小さい、
何か燃えてるように見えるだろう。

(チートばんざーい)

そろそろ青くなっても良いんだが……

無理です減速してね。

の状態で、雲を突き抜ける……

雲が衝撃波で穴がぼっかりあく……

(ヤバイ、暗躍が……)

急いで減速し始めて、背後を確認しようと、空中で振り向くも、
まだどの機体も、
来てないのを確認した。

減速しきり、大気摩擦熱が、おさまりし始めると周囲の様子が……

一面緑緑緑である。

(美しい……)

別世界とはいえ、深い緑の中、アマゾン川が流れている……

その中ほどに滑走路が見える。あれにガルダ級が脱出準備を続けて
いるのだろう……

(さってアウドムラ、スードリちゃんまってね)

メイン滑走路を目指す……

(あつた…)

さらに減速し…「幻影」傍目にはスピードの早い蚊になった…
アウドムラの屋根に軟着地「バルディエル」同化…離脱

ウィーンウィーンウィーンウィーン
サイレンが鳴り響く。

(きたか…)

めぼしい機体を同化離脱しながらはしる。

ザクタンク

ガンタンク2

グフ飛行試験型

「第一小隊はエリア1へ急行してくれー」

「軍人以外は滑走路へ迎えー」肉眼でも見えた
対空ミサイルが打ち出される。

迎撃向かう飛行機群…

火線が火弾をあげている…

迎撃に向かった飛行機群は、かなり落とされるが、空中制動の効き
辛いMSも少なからずの被害をうけ、
爆散等になっている。

地上に落下したのを順次回収しはじめた…

(大量大量)

比較綺麗なジムカス確保

頭部だけが損傷して放棄されている…

また下半身損傷の機体もあった…

(お、あれか?)

百式がブースターふかしながら、川を走行中のグフ飛行試験型3機と交戦している。

その内一機にフライングアーマーが突進!

火をあげ川の中に、

「燃やすならクレー!!!」

水没鎮火したのをほうり込む。

(TVには写ってなし!!!)

百式、リックディアス、ガンダムが揃った…

会話を聞きたかったが…

(あ、)

ブースターふかしながら滑走路へ…

(マター!!!)

とりあえず密林のなかの機体を片っ端から…拾いながら滑走路へすすむ。

ジャングル及び滑走路での戦闘音がしなくなった。

(…そろそろ中か)

ジャムキャノン

作業用ジム

アッグガイ

大破や中破で摺り座中…

片っ端から幻影をかけて回収…

「核による破碎の為、勿体ない精神ではなればよして、戦闘中にもかかわらず、回収作業」

(お、)

ガンキャノン重装型摺り座、もう一機発見。

更に奥へと…

でっかい爆発音が…

(ビームの相打ちか…

あ…マラサイぼかーん…

本編だとこれでラストか…

百式たん〜)

爆破したマラサイに幻影かけて回収し、百式コピーをもとめて入口

の方へ…

（あ、いた…）「バルディエル」

（確かここから35分のリミットか）

中でクワトロ大尉が会議してるの見た

（急がねば…）

中での戦闘行為は終了しているようだ…

そりゃ…核による基地破壊…

戦闘意思がない地球連邦兵士を見かけた、

エウーゴのMSが見逃す光景を何度も見かけた…

また、避難できるのか？を聞いて無理だと聞くと、保護⇨捕虜にしているMSもいる。

俺は動いてないのを片っ端から…

（ビル資材も回収するか…）

ビルも幻影かけて片っ端から回収し始めた。

そのうち…奥に向かう百式が見えた…

（あ、そろそろ10分だっけ？カミーユ達と合流して…だから…
ん??人が…いる…??…

流石に核にのまれるからな…助けるか）

足がみえた所へ向かうと…

横たわった女性連邦兵…
赤十字マーク腕章「看護兵みたいなのがいた…

幻影解除して、ペシペシたたく

「おい、起きろー!」

「ん…は!…敵!」

「ちょっとまった…敵じゃねーよ、それよか、やばいんだろここ」

「!…時間は?…う、うそ…」

腕時計みて絶句している。

「た、助けて下さい!…奥にも二人が…」 「は?奥?」

「こっちです」

奥に移動すると…ベッドに寝ている女性が二人…

「わかった、とりあえず外へ」

「はい」

「どうやら病院施設だったようだ…」

「ベットをおしたした…カラカラカラ」

「車あるのか？」

「車を回そうとしたら後ろから…」

（しょうがないな…出すか）

外にでて、回収した摺座コンテナトラックを、虚数空間からだす。

「え？あ、あなたどこから」

「説明はあとにかく積んでくれ」

「え、ええ」

後ろのコンテナにベットごといれて、急いで固定する。

コンテナを閉めて、目から光線で軽く溶接…

「は？…」

「あなたは前にのって」

「ええ…」

中にのったのを確認し、両サイド溶接。

「ちょっとなにを」

「説明あと、助かりたいんだろ？」

「は、はい」

「アルミサエル…！」

彼女を睡眠状態にし虚数空間にほつり込む…

(時間くつた…そろそろ核か…流石に生き埋めは勘弁だな)

滑走路へ急いだ…

滑走路へつくと…

(あと30秒ないな)

アウドムラ、スードリーが飛びだち、

アウドムラに内部からガンダムが、

飛んでる百式に向かって、手を伸ばしてる瞬間だった。

つかんだようだ。

ハイザックが2機滑走路上に着地、

ハイザックがお互いによつた…

振動が…

(時間か…)

全力ATフィールド!!

俺は踏ん張ったが、地面から空中に打ち上げられ…

(うおおおーやばったあゝ爆風等考えてなかったああああ!)

……
カオル報告

一時的保護シエルターを作りました

ジムカスタム

ジムキャノン2

百式、

フライングアーマー

グフ飛行試験型

ネモ

マラサイ

カントク2

ガンキャノン重装型

ジムスナイパーカスタム

作業用ジム

ザクタンク

アツゲガイ

シャトル

アウドムラ

摺座品多数

資材大量に確保

作者「ヒルダさん」

ここは、虚数空間のシェルター内部

ヒルダ「あら、作者さんいらっしやい」……美味しそうね……どうわ
たしと？」

作者「……遠慮しておきます」

ヒルダ「あらそう??」

作者「ヒルダさん自重して下さいよ……」

ヒルダ「い・や・よ」

作者「はあ……R18に今から移れと??」

ヒルダ「あら、あたしとの場面は修正擬音入れれば、良いじゃない」

作者「はあ…そんなにカオル君食いたいの??」

ヒルダ「そうねえ、わたしの息子とさほど年も違わなそうだし、美味しそうじゃない?」

作者「ま、まさか、原作内でも、カミーユの学校の友人に…」

ヒルダ「うふふ 野暮な事は聞かないの」

作者「昼下がりの団地妻の世界か…」

ヒルダ「あらあ、それより過激かもよ」

作者「だあゝ下ネタにふらんでくれいいい」

ヒルダ「そつちから振ってきたのにいゝ」

作者よりコメントです…

この作品のヒルダさんは、当初登場する予定はありませんでしたがカオルの自重なさで登場し、設定悩んだので、ある実<バキユ>

.....

あ、身近ではなく、リアルのある女優をモデルに考えてしまった事をお知らせします。

第25話 Z編3 ”シャトル”からの廃棄物、有り難く頂きます。

投稿日、

はっ…操作間違えて、消してしまいました…orz

書き直して見直し

ちょいあるもの追加

だいたいの流れはあってるの確認…

以上

第25話 Z編3 ”シャトル”からの廃棄物、有り難く頂きます。

投稿日、

「かあくぺっぺっぺっ…ひでー目にあつたあ…もう核は懲り懲りだ…」

全力ATフィールドで抵抗したカオルだったが、核の爆風で打ち上げられ、良いようにもち遊ばれたのである…扇風機の前に風船を話した状態と一緒だ…

さつきまで緑がいつぱいだったジャングルの密林は…熱風によって薙ぎ倒され、そして燃え、まさに灼熱地獄に陥っていた。

黒煙もかなりの量があがっている…

かなり飛ばされた為に、基地の位置もわからない状態にある。

そんな中放射能を帯びた死の灰が舞い降りる…

もう回りには生きているものはいないだろう…カオル以外は…

そうカオルは使徒そのものである故に…

死の世界を観察したカオルは、早速死体埋葬作業に入る。

「パイル」で穴をあけ一体一体埋める。

ここいらは放射能汚染で100年はもう入れないだろうが、本来彼

等はこの核で塵となるはずであった…

カオル独自の考えだが、死んだ人は死んだ場所近くでの考えからジャブローで埋葬する。

埋葬作業終了したので、

「皆さんの機体は有効活用させていただきます…
迷わず成仏して下さい。ご冥福をお祈り致します」と瞑想した…

カオルは北へ向かう…核の被害は一概にはなんともいえない。

カオルは現代にいった際にガイガーカウンターを5個程仕入れていた。

30 km地点

ガイガーカウンターをだした

カオルは作動させた

振り切れてこわれた

レーザーで消却処分。

60 km地点

ガイガーカウンターをだした

カオルは作動させた

振り切れてこわれた

レーザーで消却処分。

120 km地点

（もう大丈夫だよな？）

ガイガーカウンターをだした
カオルは作動させた
振り切れてこわれた
レーザーで消却処分。

（……………まさか……………）

「バルディエル」

カオルの身体を観察してみる…

（あちゃ〜……………）

ガイガーカウンターが壊れた訳がわかった。

カオルは、放射能発信源になってしまったのだ。

核爆発の中心地にいたのである…

まあ詳しくはチェルノブイリ事故辺りでもご参照して下さい。
中の清掃作業員の過酷さとか……………

カオルは、自分の身体を改造しはじめた。

バルディエルの能力により、身体から放射能を抜き、浄化。
抜いた放射能は体内で新たな力の源に変換。

一回目のクリーニングは終了した。

ガイガーカウンターをだした

スイッチをいれた

針は振り切れたが壊れはしなかった。

(ん?) 「バルディエル!!」また身体を調べてみた…
身体の一部ずつクリーニングしたので、汚染部分から転移したのである。

クリーニング二回目

ガイガーカウンター
カオルは作動させた
振り切れたが壊れなかった。

何処からとおもいきや…足跡からの反応が強かった…

2 km程離れ、
ガイガーカウンター
カオルは作動させた
先程よりかは反応は少ない。

クリーニング三回目

ガイガーカウンター
カオルは作動させた
先程よりかは反応薄い。

(しつこいなあ…)

クリーニング四回目

ガイガーカウンター
カオルは作動させた
反応は先程と一緒だ。

（あ、この辺もなのか…もっと北へいくか…）

250km地点

ガイガーカウンター
カオルは作動させた
わずかながら反応…

（どれかな？）

もういつこのをだす

ガイガーカウンター自体が汚染、俺も若干で、
レーザー消却処分、
ラストクリーニング

ガイガーカウンターを使ってみた。
反応は無い。

でしまった。

（ふう核はしつこいのう…あ、そうだ）

カオルはトラックをだし「アルミサエル」
運転席に座っていた女性看護兵の睡眠状態を解除した。

「ん…………ん…は、ううは？」

レーザーで溶接を焼き切る。

「ああ、とりあえずジャブローの北250Kmか、放射能の反応はないから安心しな」

で後ろに回りコンテナの溶接を焼き切りドアを開ける。

彼女は運転席からおりてきてコンテナの方に回ってきた。

「うん、大丈夫そうだね」

「あ、ありがとうございます」
深々と礼をしてきた。

「さって…と、君は何処行きたいの？俺の事は忘れて貰うから、希望の行き先あれば、送るよ…迷わなければね」

「あ、あの…」

「ん??」

「あなた様について行きたいのですが……」

「は、はい？」

カオルは予想してない言葉に驚いてしまった…

「え、えっと……」

「わたし達3名です。助けると思って……」

「ちょいまち、この後ろの二人の意見は??」

「……… 自白剤で、精神が………」

「は??」

「……私達、スパイ容疑でティターンズに調べられました……」
(つまりスパイの調査で自白剤打たれたのか……)

「ああ、なるほどね、うんじゃあアルミサエル!!」

「え?なにを?」

「ちょっと静かにしててね」

「は、はい……」

彼女らの精神にダイブした……

（あゝバイパスがスタボロになっっている…
繋げ治してつと…うんこれで大丈夫。
色も元気な色をだしてるな…）

「ほいよ…治したよ」

「は？」「ん…」「アリ…」

なにを話してんだの表情の看護兵に、目をさました二人の女性兵士。

「マギー…！ミリー…！」看護兵が、二人に泣き叫びながら抱き着く。

（邪魔しちゃ野暮だな…）

彼女達の脇をよけ、外にでる…

草むらの上に寝転がる。

……

しばらくしてると彼女らがおりてきた。

「あゝ」

「お、落ち着いたか？」

コクンと頷く彼女。

「で何処行きたいん？」

「あなた様に保護を…」

「だあ…なんでよ、エウーゴは??？」

「ティターンズに勝てる見込みないですし」

（勝てるのになあ…）

「あのさあ…第一わかると思っけど俺、人間でないよ？」
首をブンブン縦にふる看護兵、
後ろの二人はやっぱりの顔だ…

「それでもなん？」

「はい、あなた様は、あのジャブローに居ました。
あの時点にいるということは、民間人ではありません。
またあの時間から脱出できるって事は、どっかの勢力の特殊機関、
しかもあなた様はかなりの特殊能力を持ってると見受けました。
是非ともお願いします」
深々と下げる彼女たち…

「あゝ…まあ忘れて貰うからいいか、

俺は、この世界のもんでない、また異能力者でもある。

ようは別の世界で、力を集める為に、この世界にただ単にきてただけ…

で、たまたま君らが倒れてたから、気まぐれで助けただけなんだよ。だ、か、ら、俺について来るっつのは別世界に行く事、それでもいいの？」

「はい…」

「だあゝもう、そりゃ保護したいよ、ヒルダ・ビダンさんの」「」「先生！」「」

「は？」

一斉に詰め寄って…

「先生は無事なんですか？」 「先生にあわせて！！」 「あわせて！！」

押し返しながら、

「だああわかつたわかつた、あわせるあわせる」

泣き崩れる彼女達

虚数空間から、シエルターを出した。

「バルディエル」で扉をつけ、

コンコン「失礼します」

とはいつたら……

キャミソール一枚でくつろいでいるヒルダさんがいた。

「あらもう着いたの？早いねえ……じゃあ始めますか、いらっしや
い」
とベット方向へ……

「え、えつと……？」

「うんもう……女性に……」（やばいやばいYABAI）

「ビダンさん！会いたいわって人達が……！」

「会いたい？わたしに？」

「はい、なので……」

「残念ねえ……いいわ」
羽織りながら答えた。

カオル君、襲われるのを期待してるよ……

(作者てめえR18ネタやりまくるぞ!!)

擬音修正入れまくるさ……さ、続き続き……

ヒルダさんは、そういった人だから、楽しみだねえ

(作者!!……たく)

「おい、入って良いつてさ」

入る彼女達……

「先生!!」「」

一斉に抱き着き泣き叫ぶ

「ビダンさんあの……」

「……え、ええ、彼女達、わたしの娘がわりであり、元部下なのよ

……」

涙目で答えるヒルダ。

(こりやちつとかかりそうかなあ……)

で、

「バルディエル」まずは適当な部材を椅子にし、柔らかく材質変換させた。

それを3脚分追加。

台所チエツク……うん食料は大丈夫そうだな……

タンクは…どっちも大丈夫っと。

「えっと、ヒルダさん」

わんわん抱き着かれた状態で答えてる。

「なに？」

「彼女ら、俺についてきたいっていつてるので、説明よろしくお願いしても良いです？」

「ええ、わかったわ…」

「で、行きたくないってなら、記憶消して残る選択肢もあるので…」

「わたしには無いのにね」

「すみません」

「貸し1ね」

「俺の身体以外でなら」

「うんもう…わかったわ」

「よろしくお願いします」

でシエルター外にで「バルディエル」
扉を消し、虚数空間にいれこむ。

付近はもう暗くなっている…

(さて、野宿だな)
草むらの上に投げ出し寝る…

四日目

「ス、ス、スードリイ スードリイのいえは」

即興の歌を歌いながらカリブ海を北上し、ケネディ空港を目指していた。

ブランの13話のラストの方の言葉、
「エウーゴの機体は捨てる!!」を信じて飛んでいた。

つまり無傷の機体が涵獲できるはずだと思ったからである。

まああと期日までちょい余裕あるし〜からでもあった…

(お、見えた…ありやまだ二機あるぞ…シャトルも二機だ…
戦闘始まってないのか……)

まだティターンスの進行前だった…

(ん〜あ、ドダイ改があるか…)

「”幻影”」

蚊になり、ドダイ改に取り付き、

「バルディエル」

同化、解除

(さつてと…スードリに取り付いて休みますかあ…)

「バルディエル」

で同化したまままどろみに落ちる……

ピイピイピイピイ

サイレンが鳴り響く。

海上から光点が5 合計9機による襲撃だ…

え、カオルがまだ起きない為、作者によるナレーションのみでお伝えします。

つうかまだ起きんのか…

海上からのビームで貨物機に当たり、シャトル爆破、

この時点で、パイロットののったシャトルに当たれば、重要人物満載ので、
ティターンズ勝利になったかもしれない…

アウドムラから百式が迎撃の為に発進。

迎えにいった飛行機が爆破！！

アウドムラビームの飛び交う中緊急発進！！

スードリ見捨てられてる…

ガンダム、バルカンでのけ反らせ、ビルの上に落ちたハイザックを、
ビームライフルで見事爆破！

ガンダムとアッシマーのタイムン。

百式はベースジャバーを追いかけとる。

リックディアスは、ベースジャバーにのったハイザックにちよっか
いかけ、

プロペラントタンクをハイザックに向け投擲、

そこにビームバルカンを射撃し見事に爆破。

更に追い撃ちて、もう一機にビームバズーカーだろうか？を直撃さ
せ、

ちよっかい出してきたベースジャバーをかわして、ビームを直撃！！

けど、落ちた方向が悪かった…シャトルに衝撃波がきてしまっ…

次に百式とアッシマーとのタイムンに発生。

ガンダムはハイザックと…うち一機は足を滑らした為に仕留めた。

百式は目の前で変形しアッシマーに驚き…

油断してしまう、シャア！！いやクワトロか危ない！！

かわしてニュータイプ発動！！

なんとか直撃させるが、アッシマー逃げる。

ガンダムは、ハイザックのあとアッシマーとタイムンになるが、

その横から、リックディアスがちよつかいかけるも……
かわしアツシマーが背後から……

直撃ロベルト…爆破で死亡…

アツシマーとガンダムが力比べしてるすきにシャトル発進！！

それに追い縋るアツシマー、
ガンダムビームライフルを地上から援護するも雲の上……

ガンダム、百式の肩に乗り……

二段ブースターで、追い縋る！！

もう雲の上みえない……

百式は先に地上におり、ビームライフルを射撃！！

アツシマーMS形態に変形した瞬間！！

変形時の弱点部分にビームをあて、アツシマーたまらず離脱。

そこにアウドムラの援護で百式が先に乗り移り、ハイザックを土台にしたガンダムがなんとか乗り移る。

アツシマーとハイザックはケネディ空港を占拠……

「生存者を集めケネディポートを制圧しろ！！スードリに残ったMSを叩きだせ！！スードリを我がブラン隊の指揮下におく」

やっと、おきやがったよ……ねぼすけめ……

(あ、あれ?? シャトルない…アウドムラもない…寝過ごした??)

ああそうさ…いつまで寝てるんだよ……

スードリは運用が間に合わず、見捨てられたが、ジム2が3機、ネモが3機積まれていた…

しかし、アウドムラだけでも、ある意味十分な戦力であったのだ…

エウーゴのMSがハイザックにより乱暴に外に出される…

アッシマーと、ベースジャバーが進入してくる。

(頂き)

一部同化、解除

(とりあえず、ジム2、ネモの行き先だよな)

艦外にで「幻影」
小さい蚊になると…

放棄先が、海中のようである。

6機とも海中に棄てられた…

見届けると、海中に戻り回収。武装はついてはいなかった…

(さてとこんなもんか…)

海中からそのままカリブ海を南下し途中で飛行にうつり、適当な島を探す…

島を見つけ、辺りに人が居ないのを確認すると、シエルターを出す。

「バルディエル」

壁に手をつけながら扉をつけると、中に入った。

中ではヒルダさんと3名が談笑して、かなり良い雰囲気だった…

気がついたようである。

「あらカオル君」

「ビダンさん、そろそろ俺の世界に行くので、身支度お願いします。

最初は副司令に紹介かな？と思いますので…」

「わかったわ…20分程貰える？」

「了解です。で、彼女らは、結局？？」

「」「先生とご一緒についてきます！」「」

「慕われてるんですね…」

「みたいねえ」

「じゃあ、皆さん、最終確認です。BETAを潰しに自分の世界にきてくれますか？」

各々頷く。それを見届け、

「では、20分後に自分の世界に轉移します。

いつ引っ張りだされても良いように準備お願い致します」

とつたえ、外にで、扉を消し虚数空間にいった。

カリブ海…海が綺麗である…

(どうせ渴くし泳いでみるかあ…)

カオルは海に飛び込む…綺麗な海である…

しかし、何者かが、それをみていた…

何者かは、餌だと思うと、グングンと近寄ってきた…

ズンズンズンズンズン
ズンズンズンズンズン

海の綺麗さに、気づいてないカオル

ズンズンズンズンズン
ズンズンズンズンズン
ズンズンズンズンズン

何者かは大きな口を開け……一気に

噛み付いた!!

(ん!!? ……危ない…人間だったら死んでたな…)

獰猛な性格のイタチザメであった。

(チィ……抜け出せねえなあ……しょうがない)
抵抗しても離してくれないのである……

(確か肉食えたんだっけ？なら……)

「パイル」

小さい槍を出すと、脳へ向かってひとつき！

抵抗がなくなった。

カオルは抜け出し、しっぱを掴み地上へ……

死亡を確認すると虚数空間にほつり込む。

「さてと”世界扉”」

……

カオル君報告

鹵獲

ネモ 3

ジム 2 / 3

機体情報

ベースジャバー

ドダイ改

アッシマー

看護兵1名

兵士2名

が、ついてくるみたいです。

第25話 Z編3 ”シャトル”からの廃棄物、有り難く頂きます。

投稿日、

作者「いやあ〜Zガンダム編第3話目無事におわったなあ〜お疲れ
さまあ〜」

カオル「ありがと、作者プレゼント」

作者「ん？なに？この石は……？？」

カオル「ジャブローの」

作者「捨ててこい」

カオル「ちえ〜」

作者「ぶち壊すんでない！！」

カオル「わかったよう……」

作者「ところでお前、ヒルダさん襲うつもりらしいが、どうすんだ

？」

カオル「なんとか逃げまくる！！まあ、白凌基地に戻ればなんとかなるだろ…」

いくら何でも人前で…ではないと思うが…」

作者「いや、彼女そっちの方では横浜の魔女以上の設定にしておくから…」

カオル「いや、勘弁してくれ…まじで…」

作者「中年熟女のハーレム良いじゃん
今の現世では旬だよ」

カオル「う…俺17の設定じゃん…」

作者「あと誰をもつてくるかなあ」

カオル「作者、勘弁してよ」

その頃…

イツシー・オグ・タバタ「あたしらの出番まだ？後書きにも出さない作者ぬっころしていい？」

河田「あんたたちの方がましよ…わたしなんかイツシー、あんたに伝授した技位しか出てないのよ!!」

西坂「わたしは一回…まだましか…」

風間・宗像「0回……」

すみません…本編キャラ中々出せないです…

そこへ更にオリキャラ乱入、

良い味出さないと、出る前に…

みんな「作者ー！とつとこだせえい!!」

はい…努力します…

第26話 Zの世界より帰還 投稿日20101230 修正1(前書き)

これよりM u v - L u vの世界に戻ります

あ、サメ……

第26話 Zの世界より帰還 投稿日20101230 修正1

2001年6月3日夜

〓 〓 副司令執務室 〓 〓

世界扉が開き カオルが降り立った

「ただいまーっす」

「あら期間内ね…何かあったの??」

「はい、優秀な開発技師の協力者を1名、
亡命希望の看護兵1名及び兵士2名、
つれてと、ついてきちゃいました」

「!!!??つ、連れてきたああ??」

「はい」

「はいじゃないわよ!!はいじゃ……同一人物が平行世界で、であ
ったとき、

何が起るかわからないのよ!!

1番可能性あるのは、当人接触によるの対消滅での人物崩壊、勿論
時系列でもそうよ!!」

注釈「自分は洋画タイムコップで、同一人物接触による液体化を、想像してます。」

「あゝ…すみません、次から気をつけます…」

ですが、西暦でいうと2045年に宇宙世紀になったので、西暦2132年の世界になります。

同一人物はありえないですし、またBETAの記録もありませんので、可能性は限りなく低いと思います」

「なら…大丈夫でしょうね…」

まあそういった世界でならスカウト良いわよ…
優秀な衛士や開発技師は必要なものよ…」

(鋼鉄の咆哮は無理かな?、現実世界は1番やばそうだな…)

「わかりました。ではご紹介します」

ビダンさんを引っ張り出す。

「あら…ここ?」頷くカオル

「ご紹介します。ガンダムMK2の装甲開発を手がけ、材料工学を専門としてる、ヒルダ・ビダンさんです」

「ご紹介をありがとうございました、ヒルダ・ビダン。地球連邦軍所属、階級は中尉ですわ。BETA等の説明はカオル君から伺ってます。是非ともご協力をさせて下さい」

「国際連合軍、当横浜白凌基地副司令の香月夕呼ですわ。天才物理学者です。で…」

頷くカオル

「対BETA純軍事力外での代替戦略……オルタネイティブ4計画の最高責任者ですわ」

「よろしくお願いしますね」

「では次に、亡命希望者3名をご紹介致します。といっても…自分はいあまり詳しくありませんが、看護兵1名と兵士の2名です」

「あ、カオル君、看護兵とパイロットよ」

「……………そのようです…」

「あら好都合ね」

3名を出す

「じゃあすみません、ビダンさん紹介の方を…」

「ええ…整列!!」

一気に揃う…さすが軍属…

「ご紹介します。向かって右側から、アリシア・クライツ伍長、ミリーテシア・ビルワイズ軍曹、マギー・J・ミリオン軍曹です」

アリシアが一步前にで、敬礼、ビシッと決まり、下げる。

「地球連邦軍所属、アリシア・クライツ伍長です！」

看護兵としてジャブロー基地に所属してました」

「彼女は看護兵ながら外科及び内科医師免許をもち、難手術の経験者です。」

腕は保障しますわ」

「いえ、まだまだ腕は若輩の為、頑張つて技術習得を目指しています!」アリシア下がって、

ミリーテシアが一步前、敬礼、決めたあと下げる。

「地球連邦軍所属、ミーリイテシア・ビルワイズ軍曹であります！
ジャブロー基地第09テスト中隊に所属してます！！」

「彼女は模擬戦でかなり優秀な成績を納め、わたしの部下としてテストパイロットを勤めてました。」

「こちらも腕は保障しますわ」

ミーリイテシア 一步下がり

マギーが前に、敬礼決めたあと下げる

「地球連邦軍所属、マギー・J・ミリオン軍曹です！！」

ミーリイテシア 軍曹と同じく、

ジャブロー基地第09テスト中隊所属してます！！」

「彼女もミーリイと同様、模擬戦で優秀な成績でわたしの部下になりました。」

パイロットを勤めたあとミーリイや、アリシア同様、ジャブロー基地所属に転属されましたわ。

「以上で紹介を終わります」

「あなた達の世界って、士官でなくともパイロットとして？」

「自分がお答えします。パイロットは専門訓練をうけ、二等兵から始まります。」

後に、上等兵として、現場に配属されます。

また、士官からの配属もありますが一部のエリートのみであります」とマギーが答える。

注釈へ機動戦士ガンダム戦場の絆を、参考にしています」

「つまり軍曹だと叩きあげ…腕は保障できる…って事ね」

「はっ!」

「でも、四名ねえ…ビダンさんは、階級そのままが良いとして…衛士は、士官が条件だし……うん決めた」

「あなたたち3名は、とりあえず国連軍少尉で…ビダンさんは技術大尉で、

3名はカオル君の下について新設部隊としてね。

カオル君はB-01の部隊長として統率よろしくね。

ところで国籍はあるの?」

「?地球連邦ですが…」

「あゝそうねえ…人種は…?」

香港や、アメリカ、チリ、オーストラリア等があがってきた。

「香港は統一中華戦線になって、BETA陥落してるからそのつもりで…台湾在住扱いだね。

あとは国自体はあるからそれでよろしくね」

内線ならしピアティフ中尉がきた。

部屋と、基地案内、後にB55に行くようだ…

「カオル君は、残ってね…話があるから…じゃあピアティフよろしくね」

4名退出…

「ところであなた…これからもっと異世界人を受け入れや、つれてくるつもりなの？」

「ですね…その世界の運命で死が確定しているなら、問題ないと思いますので…」

流石に活躍する運命の人は難しいかな？と……」

「はあ…となると、わたし一人の権限内に、正直おさまりきら無くなってるわ…救世主君、国際連合でぶちまけてみない？」

異世界軍隊作らせてくれと」

「あ…いいっすね」

「そこで承認えれば、いつどの世界からでも、影響がない限りつれてこれるわ。

…さっきはああいったけど、
衛士、科学者、また後方支援の人達、皆がみんな、正直人手が足りないのよ…

製造にしたってそう…整備の人達から精度が下がってきてると、ぼやきが出てるわ…」

「確かに…そうみたいですね…」

「正直、異世界の人達でも優秀な人、
いえそれに及ばなくても即戦力になる人達…歓迎したいのが本音ね…
このスタッフだってそう、ひたすら頭下げとおべっか使って、

やっとこのレベルになった…感じなんですもの…

けど弛みきつているのが実情…

皮肉なものね…

…けど、研究をおろそかにはできないから、これ以上は無理なのよ…
前線ほど、どんどん優秀な人が欲しい、
人手が足りない、回してくれ！なのでね」

「ん…そう考えるとガンダムの世界、すんごく人が死んでるから、
説得できれば優秀な人材確保できそうですからねえ…」

「ああ、一年戦争で一週間で28億人だったのよね？」

「はい、それ以外にも、民間人も多数死んだのが、まあ通称一週間戦争除くと…」

一年戦争のサイド5、Zのサイド1の30バンチ、0088のダブルリン、0093のラサ…別世界に行くときまだありますし、軍人が大量的にしんだのは…今回のジャブローと、コズミック・イラのアラスカ基地自爆か…」

「な、なんか…流入がきたいできそうね………」

「ですね」

「けど、くれぐれも…」

「あ、同一人物となりえる場合に関しては気をつけます」

「あともう一度ジャブローに？」

「確か取り残された軍人の描写あったので…」

「その際にはパラドックスは起こさないよう、注意してね」

「了解です」

(今回は機体、資材だったからきいつけるか…)

「さて、成果報告はしてね…」

「はい、今回のトリップで人材4名の他、完動機体6機、また、多数の機体情報取得し、最大目標であったガルダの情報取得できました」

「B55ハンガーだけで足りる？」

「足りないですね…作るとなると…」

「ん〜そうねえ…」

「拡張しても良いです?」

「は?」

「多分拡張できるので許可いただければ…」

「まあ良いわ、機密性とかまもってもらえるなら…」

「了解です。電気等はこっちでやりますのでご安心を」

「あつたりまえじゃない」

「後は、今の所は整理前ですので結果がでたら報告します。何しろ片っ端から……ビル等含めて…」

「……どの位ビルを？」

「一つの町できちやう？」

「多分都市レベル……」

「……報告楽しみにしてるわね……、わたしからはまだ撃震は戻ってないのよ」

「明日かあさって？」

「みたいよ、でこの間の”お兄ちゃん”の件なんだけど」

「なんかその響き、元の世界の美幸を思いだすんすよねえ…」

「あら、元の世界に家族が？」

「はい。まあ俺は死んじゃったから、今接点もってるのが、妹の美幸なんすよ…」

俺の世界に移したら、何故か何回も俺の部屋で、ばれちまいます…」

「続き」

「まあ神から、元の世界では無理と説明受けてて、2次創作系の話したら理解してくれたんです」

「2次創作？」

「はい。まあ主にストーリーが納得いかない、俺だったらこう介入する！とかで、

元の設定を利用等して新たな物語を作る…事です。

まさか俺自身がそうなるとは思ってませんでしたけどね」

「けど、本当にあるものよ…それが今のあなただし」

「ええ、で世界扉で物語やゲームの世界でも、平行世界として成り立つがわかりましたし」

「まあ、話は戻すわよ、6月9日ね6日後」

「6日後かあ…ちよい中途半端か…しょうがないか…あ、途中やる事なかったら、メタルマックス3の世界か、鋼鉄の咆哮、またはメデューシンの世界に行くかもなので、よろしくお願いします」

「その3つの世界は？」

「まず、メタルマックスは、暴走した超高性能AIノアによる、大破壊された後の人間VS自律制御機械の世界ですね、自律制御機械のハッキングで仲間にしようかなあと…」

「なにを仲間にするのか楽しみね…」

「次が鋼鉄の咆哮2の世界ですが話上は、西暦1939年 ウィル

キア王国の反乱で、全世界に進行した帝国の野望をとめるストーリーです。

物理的に無理な、弾薬を無限に供給する、無限弾薬装填装置をゲツトできればなあ…と」

「そんな馬鹿なのあるわけが…」

「その確かめる為にトリップするんじゃないっすか…」

「それもそうねえ…もってきたら、みせてね。物理的に無理なのが興味あるから…」

「わかりました。最後のメデューシンの世界ですが、これは他の世界よりかは…おとなしい世界ですね。

まあ人間同士で争っていて確か20年かな…

で、強救戦艦が4隻つくられて活躍している世界です」

「なによ、そのきょうきゆう戦艦ってのは…」

「強襲救急飛行戦艦の略だったかな？」

漢字は強襲は強いの方です、救急は救急車の…

サイズはガルダには及びませんが、

全長180m、高さ55m、翼幅215m、不整着飛翔距離150

0m、物があっても雑ぎ倒す為、着地場所を選びません。

内部には620名の乗組員、医療スタッフをようし、手術室をそなえ、医療関係を充実させた、
いわば前線病院の活躍する世界です」

「……………名称と、後半が納得いかないわねえ……………」

「まあそういった世界もあるって事で……………」

「まあわかったわ……………」

ところで気になってただけど、あなた何処でそういった世界わかったの？」

「俺の世界での物語やゲーム等ですね、多分その世界を認識すれば、

俺の世界扉は開いて、行けるんじゃないんですか？

条件はわかりませんが……………」

「なるほどねえ……………帝都図書館から本借りてきてみるから、それで実験してみない？」

「まあ付き合いますよ。」

「で、あなたの世界の、別世界の資料…ガンダムとかのね、は、もつてくれるの？」

「ん〜売り物あれば…」

「金の延べ棒：12・5kgのラージバー」

（ ; ）

「そ、相場たしか1g3000円かな？」

「すみません、詳しくないですが…釣りが沢山です」

「用意するから買ってきなさい」

「はい……………あ、」

「あ???なにかわすれてるの？」

「そろそろ天然物卸したいんですが…」

「ああ、そうね……………冷蔵庫や冷凍庫さほどないわよ……………」

「ん…じゃあ作ります?」

「そうね…まかせるわ」

「了解」

「わたしは以上ね、あんたは?」

「あ、最後にお土産が…」
「なに?」

「イタチザメ釣って来ました」

「サメ?…ああ…」

「食えたんすよね?」

「そうよ…京塚さんに納品してあげて、あ、ヒレ肉欲しいって伝えておいてね」

「うーす」

「おば ちゃん」

「あいよー、カオル君なんだい？」

「イタチザメ納品にきました」

「あれまあ 天然物かい」

「ええ、仕留めたばかりで」

「どれどれ、どこにあるんだい？」

辺り見回し……（広さが欲しいなあ）

「ちよい、その君、ブルーシート、44のを3枚とってきて貰える？」

で、カオルは机と椅子のかしいーの作業し、貰ってきたブルーシートを手伝って貰いしき、

なんだなんだ？で見に来る暇人ちらほら…

頷くカオル、虚数空間から仕留めたイタチザメをいきなり出す。

「ギャー」

丁度屈み込み腰してた兵士から悲鳴があがる…

そりゃそうだ…大きな口をあけた状態で目の前にドンだもん…

パニックになりました…

ヤッバーと思いつながらカオル君、
しっかり言付けは忘れずに…

|| || B55ハンガー || ||

彼女らに基本戦略を説明し始めた。

基本的に兵器の面でビーム兵装は使用不可。

不満がってたが、軍備が整わない内にやると対抗手段が出るという
と、なっとくした。

今は資材、技術を集め軍備を整える等も話した。

彼女らの機体希望きいたら…ガンダムMK-2だとよ…

作れるけどね。どうするか……

確かに一応はZZラストまで活躍はしてたもんなあ……

……

カオル報告

今日は色々あって作業しませんでした……

サメ肉は美味かったです…… ウマウマ

作者「うまうまフカヒレうまうま」

カオル「あ、作者、俺のを食べてん？」

作者「ああ、うまいぞ〜ご馳走さん」

カオル「ところで作者、リアルだと何処で食べたん？」

作者「おま、ここでリアルのをだすんか……18切符で気仙沼目的でいった時だよ」

407

カオル「18切符すきだね〜」

作者「ああ、安旅行で一人のんびり酒のみながらな〜ま、それで酒太ゴホンゴホン」

カオル「で、いついったん？」

作者「スタンプ集めの前の春だから、一昨年の春か…」

カオル「春っていえばなんか18切符春でないって噂が俺がMUV
- LUV行く前にあつたけど……」

作者「お前MUV - LUV知らない設定だろ」

カオル「後書きだけだよ、あ号もきてるじゃん」

作者「まあいいか、ん〜どうなんだろうなあ？今、調べたら…冬が
10日間短くなってるな……」

カオル「じゃあ春は…」

作者「廃止に持ち込むのなあ…orz」

カオル「変わりの切符だと…？」

作者「ん〜大概が会社線内の設定だから使いづらいんだよな…
大阪名古屋方面には使えん…」

それに西日本は土日切符のような、設定が見当たらない…」

カオル「寂しくなるねえ…」

作者「だな、まあ連続した日、使う必要がないのが18切符の売り
だったし…」

カオル「ところで、これ本編関係ある？」

作者「ないな」

何処で脱線したんだあああ…

第27話 帰還後の日常の日々 投稿日20101231

2001年6月4日朝

やることがいっぱいだった……

まずは、チューリップが完成した事…副司令に見せろっては言われてたんだよなあ…

まだ、涵獲を整理をしてない…自重忘れたから、ハンガー内にもだしてない…

あと今までの事も引き続きか…さてと……副司令を呼んでもらうか…

〓〓 B55ハンガー 〓〓

「きたわよ、できたのね？」

副司令と霞ちゃんが来た。

「はい、こちらです」

赤いチューリップを見せた。

「これがワームホール装置なのね？」

「……大きなチューリップ…です」

「ですね。ナデシコの世界では戦艦を通す為にもっとでっかいので

すが、

こいつはそこまでのでっかくする必要なかったんで、この大きさにしました。

霞ちゃんこれでも小さい方だよ」

直径20m、戦術機より若干でかいサイズに設定して作られている。それに操縦ユニットプラス相転移エンジン、反重力推進、核パルスロケット、対空砲火等を組み合わせた。

もちろんステルス機能付きで地球のレーダー網には引っかけられない設計だ。

「もつとでっかく作れるのね…で見せてくれるのね？転移を」

「はい。霞ちゃん面白い光景みれるからね」

木星行く予定のチューリップに11号操縦の作業艇が近寄った。

今回の作業艇は、チューリップ周辺の保守、簡易輸送等を行う目的の露出船であり、

DF発生装置、人工重力、反重力推進、核融合炉、熱核ロケットで、コバッタを100機または、資材を積めるようなプラント製品だ。

操縦席は、コバッタやヤドカリが使用する前提で、省略している。

チューリップは以下チ12と命名の花びらが開く。

それを受け、もう一つ離れたところにおいてある、チューリップ（以下チ１１と命名）も花びらをひらく。

中には、ジャンプフィールドの、エネルギー場が形成されている。

「あれがジャンプフィールドのエネルギー領域ですね」

DFを形成した作業艇が、チ１２に完全に侵入すると…

「消えたです……」

チ１１から作業艇がではじめて、そして完全に出た。

20m程離れると、二つのチューリップとも花びらを、閉じはじめた。

「この世界での初めての超空間移動をみてるのね……」

「さて、このチューリップ2機を打ち上げますんで…Y1号、Y2号、頼むよ」

ヤドカリの製造番号順につけたY番号シリーズ、それぞれ了解の意を返してくれた。

「ヤドカリさんみたいです……」

「あ、彼等外見通り、ヤドカリっていうんさ。
優秀なパイロットだよ」

彼等なら無事に目的の木星周回軌道、アステロイドベルト帯まで行くであろう。

「ちょっと……打ち上げて今??」

「はい、そうっすね、演習場からで良いでしょう」

コバツタ達が、大きな布を、打ち上げ予定のチューリップに被せた。

「……もういいわ、好きにして……」

なっとくいかない表情の副司令、俺、霞、布を被せたチューリップ
2機とともに、

メインシャフト経由で中央集積所まで上る。

「空中を……浮かんでる……です」

「ああ、重力をきって動くんだよ。

それを反重力推進ってよんでるんだ」

「重力を……きるですか……とんで見たい……です」

(個人用の反重力推進のバックパック作るのかな?)

Aゲートから、演習場まで出て、大きい布は空に昇って行く…
途中で布は溶けるので、後はつくのを待っただけだ…

「さて一仕事終了だな」

「一仕事じゃないわよ!!この異世界人!!」
副司令はまだなっとくしてないようだった…

「わたしは…楽しかったです」

霞ちゃんよかったね

ここで霞ちゃんと副司令はわかれた。

昼

|| || P X || ||

なにかが騒がしい……

おや?マギーとミーリイとイッシー??何だろっ???

「おい、どうしたんだ?」

イ「カオル!!なに?この人達は、カオルはわたしの」

マ「あたし達はそれの操縦専門にやってんだよ!！」

カ「あゝ……何を口喧嘩してるのかゆっくりな……」

……どうやら、イッシーがわたしの地位が!と危機感覚えて突っ掛かってたらしい……
何でまた……

カ「あゝ、イッシー、こいつらは、確かにあつちの世界のテストパイロットであり、優秀なモビルスーツ乗りの評価だ。
けどな、イッシー、俺はお前を守りたい為に色々帆走してるんだぞ。
だからそんなに突っ掛かるんじゃないぞ」

イ「うゝゝゝ」

カ「じゃあ、また甘いもの買ってきてやるから……」

イ「うん」

マ「少佐わたしにも……」

カ「わかったわかった。ま、今回の事はな……」

まあどうやら落ち着いたかな？

|| || B55 || ||

俺は悩んでいた……

拡張しないと資材がおけなくなってくる事が判明したからだ……
とりあえずハンガーを空ける為、解体し、核融合炉のストック化に
以下の実機が決まった。

マゼラアタック

陸戦型ジム

陸戦用ジム

デザートザク

グフ

リックドム

ゴック

ズゴック

ジムコマンド宇宙用

量産型ガンタンク

これにより9基分の核融合炉確保

で、とりあえず実機の検証で、

マラサイ

ハイザック

ガンダムmk2
百式
リックディアス
ガンタンク2
グフ飛行試験型
の作成、
ネモ
ジム2
を出し整備を、
ジムカス
ジムキャ2
ガンキャ重装型
の再生、
ウェーブライダー
の修繕を命じた。

拡張工事には高周波ブレード装備によるドリルタンクを作成。
(土台マゼラアタック、主機アンテナ入力で略、反重力推進搭載)
とりあえず四隅から100m掘って、そこから四隅を繋ぐ、四方に
支柱を入れ、あとはMSで掘削する形をとる。
でた土砂はプラントで浄化して梱包し虚数空間におくつもりだ…
残骸は片っ端から鉄に整え、変換前の状態へと整理してゆく。
整理し、すぐに変換しないのは虚数空間にいれこみ、
また残骸を出す作業をひたすら繰り返した。

またコバッタがとうとう3桁いき、102号になった
ヤドカリは20号まで増えている。

6月4日は、そんなこんなで昼からはひたすら拡張、機体整備等だけで終わってしまった…。
100m部分は拡張終了、200m部分とりあえず邪魔にならないように拡張工事中。
核融合炉、新規に16基分確保。

2001年6月5日

朝

B55にてひたすら拡張工事の繰り返し…
残骸整理の繰り返し…

300m終了、400mの中間の所で俺待ちだった模様で、
出た浄化土を虚数空間に取り込む。

また途中の拡張部分の補強は…流石にコバツタ達、ぬかりない…
壁面、天井はルナチタニウム合金を贅沢に使っている…

これなら、あ、コロニー落としにもたえられないよな…ん？

「マスター、耐えられるようにしました」

はあ？何したんだお前ら…

「比重は重くなり、MSにも使えないですが、ナデシコ世界技術を使いました。これにより現有地球技術では壊せません」

か…

まあ作業進めるか…

拡張した部分から真横に広げるように指示した。

これにより1km×1km×45mの、巨大地下施設の確保の目処になる。

区間区切って、今度は反対側に、戦艦用整備ブロックを作ろうと考えた。

高さをあげ、1km×1km×150mで、アーガマクラス戦艦4隻分の整備、発進スペースへまだ作らないけど、確保予定になる…もちろん命じた…

自重を忘れた基地拡張工事は続く…

とりあえず俺が立ち会ってなくとも、拡張工事が続けられるようになり、

一日に一回吸収作業する形、そのうち間隔が空くようにはなるだろう。

ハンガースペースに戻ると、機体が11機程足りない…

聞くと、演習場だとか… A-01とB-01だな…

多分B-01は、百式とガンダムmk2、

A-01は、ネモ、ジム2、マラサイ、ハイザック、グフ飛行試験型、リックディアス、ドム、陸戦強襲型ガンタンク、61式持つて行ったらしい。

で、A-01vsB-01か…

勝負は見えたな…でまた残骸整理作業に入る。

あと、どの位残骸整理するのだろうか？

夜に、副司令に呼び出しくらった…

その前に模擬戦判定…意外にもA-01辛勝
陸戦強襲型ガンタンクとドムのペアが頑張ったと…
武装条件一緒にしてるなら…ある意味そうか…と納得。

〓 〓 副司令室 〓 〓

コンコン「失礼します」

シュン

「来たわね」

夕呼さんは待ちかねていた様だ。

「えつと？何か？」

恐る恐る聞く…

「まずあなたの撃震よ……………」

「ま、まさか死人が??」

「死人は出てないわ…」

「ほつよかった…」

（流石に死人でるとなあ…）

「ただ怪我人続出で、厄介な人までもね…」

「はい？」

「で、そんな機体操縦できるのか？で来て欲しいとの事なの…」

「あ、あちゃーやばいなあ…」

頭をかきながら…

「え？」

「厳密には異能力で同化したので…操縦したのではないんすよ…」

「ああ、前説明つけたあれね」

「ん〜操縦できるもう一機体作れなら、それでA-01仕様で持つ

て行きますが…」

「別の機体だと納得しない人が、怪我しちゃったから…却下だと思
うわ」

「…因みに怪我した人はどなたです？」

「沢山いるけど、その中でも、斑鳩大将や、紅蓮大将が、怪我しち
やっただのがね…」

「大将がねえ……そこまで行くの、なんで回りが止めないんだか…」

「ここも支援して貰っている以上、邪険にできないのよ…
あなたに関する事ぶちまけてもいいから…」

「了解です。先方はいつと？」

「できるだけ早く、じゃないと生体組織弄るぞ…！ですって…」

「あゝ自棄になってるみたいですね…わかりました、
明日朝方にも行きます」

「よろしくね……」

カオル報告…

拡張工事

前方800m×100m×50m

横200×100×50m

戦艦スペース 上方向に縦穴掘削中

残骸整理により核融合炉14基分

合計27基分確保

MS 陸戦強襲型ガンタンク10機完成済み

新規生産 実機検証以外なし

合計確保核融合炉47

2基重力波アンテナ出力増設用を使用

保有戦力 実機検証機、提供予定機以外

陸戦強襲型ガンタンク12

ホバートラック1

保有機材

コバッタ123号

ヤドカリ 10号

チューリップ2セット作業挺1

ドリルタンク20両

作業用ジム重力波アンテナ仕様10機

エステバリス2機

プラント1基

第27話 帰還後の日常の日々 投稿日20101231（後書き）

作者「あなほりあなほり」

カオル「それどっかのサブタイトルに？」

作者「かもね、ところでカオル、横浜白凌基地で工事してるけど…
何処までひろげるん？」

カオル「作者お前の考えだろうが」

作者「まあさすがに虚数空間から、ホイホイじゃ居ない時どうすんの？だからなあ…
奇襲にはもってこいだけど…」

カオル「ああ、佐渡島のか…」

作者「たださ、そうすると、居ない時は、ハンガー内にストックしてあるの終わったら、
製造できないじゃん？」

カオル「うん…」

作者「そうになると、資材置場やらが必要になるわけだ…、
まあこの話の浮かんだのはね」

カオル「けどグリッドか……」

作者「まあよくある作成ゲームから引っ張って…
無理ないだろ？」

カオル「かもなあ、あ、作者、土どうすんの？」

作者「…まあ秘密だ、それ以外の利用方法は…佐渡島後じゃないか
な？植生再生に栄養豊富な浄化土を！って」

カオル「ビルは？」

作者「まあ設定上はばらして、コンクリート前状態なのかな…
中身は引っ越してあんまりないし…」

カオル「そんなところか？」

作者「ところでビルダさんどうすんの？」

カオル「ちょいやめてよ、彼女の話は…」

作者「いや、今回本編に出てないからさ…」

カオル「頼むゲスト扱いにしてくれ!!」

作者「いんや駄目ヒルダさん〜出番ですよ〜」

カオル「ちょ…作者その前で後書き閉めろ!!」

ヒルダさんダツシユしてカオルに飛び掛かり、捕まる!!

カオル「ビ、ビダンさん!!落ち着いて!!」

ヒルダ「さあ〜作者のお許しが出たので、そのベッドに行きましよう〜」

カオル「ギャー〜」

〜

注 本編ではまだ貞操を守ってます。まだね……
しかし、大晦日投稿予定なのに、この後書きで良いんだろうか??

……
づん後悔はしない
……

2001年6月6日

|| || P X || ||

朝、飯食ってゆっくり作業して 11時頃着けばよいかなあと思
っている……

「国連軍、渚力オル少佐でよろしいですか？」

「あ、そうですけど、失礼ですが……？」

「は……！日本帝国斯衛軍所属神代 巽少尉であります……！
本日帝都までの道程ご同行させていただきます……！」

「はい？」

（聞いてないなあ……飛んでくのにまいったなあ……）

「紅蓮大将閣下からの同行命令です。

香月副司令からも乗り物は少佐が用意してください、との事です」

「あ、そうなのか……じゃあ……うんじゃあ、1000にゲート正面で
ね」

「??帝都に戦術機で行くのでありますか!?!」「あゝ、そんな野暮ったい事はしないよ…もっと良いものさ
じゃ、少し作業あるから正面ゲートで忘れずにね
手をひらひらさせながら別れた。」

B55ハンガーにおり また土回収、残骸整理し、ころあいの時間
に正面ゲートにでた。

「少佐!お出かけですか?」
正面ゲートのMPが話しかけてくる。

「ん、帝都までね、斯衛の人見なかった?」

「後ろから来る方ですか?」
振り替えてみると、神代少尉がちかよってきた。

「少佐お待ちせしました…何で帝都まで?」

「ん…ちよいと失礼しますよ」
といきなりお姫様だっこ。(感触いいなあ)

「な、なにを!?!?!?」

いきなりの行動に顔を真っ赤に…カオルおめえ…

「しっかり捕まって下さいね…シヤムシエル!!」
そう叫ぶと空中に飛び出した、啞然とするMP。

「なあ…俺ら夢みてる??」

「さあ…博士直属なんだろ…あの人…なら当たり前じゃない?」

MP頑張れ!!

さて飛んだエロカオルの上では…

「でえええええええええ!!」

うん神代少尉叫んでますね……

「あんまり騒がないで下さいね…、落としちゃっから」

「でえええええええええ」

どっちら体が硬直して、それで声を叫んでいるようだ…

落ちないのは好ましくない…
というか神代退場はいやだ……

叫んでる10分もすると、帝都が見えた…

エロカオルは速度をおとすと、軟着陸する…

「よつと、さ、着きましたよ」

叫び声あげて疲れた神代を下ろす。

まだ固まってる…

「アルミサエル!!」

精神を平静状態に戻した。

「あ、あの…」

「ああ、あとで全部説明するから、お楽しみに〜」

「は、はあ……」

「ほら案内よろしく、あと50分だろ、早く早く」

「は、わかりま……した……」

神代を先導させ帝都の帝都城まで案内させた…

カオル君は、圧倒されてた…

日本の城の建築文化を極めると…こんな様になるのかって…

何しろ姫路城なんか目じゃない…

美しい…

まさにその一言…

始めてみる人よ、

絶対帝都城を見るのをオススメする…

すみません、それしか説明できません…
作者の説明不足で申し訳ないです。

「あゝカオル少佐??」

「少佐!」

「……………どうしよう……………」

つなつても駄目、叩いても駄目、殴つたら…見えない壁で、こつちが痛い…

ゆさぶつたら、勢いそのまま倒れた…

一瞬しまったああで神代は青ざめたが…

カオル君が再起動しないととなると…焦つた…

時間がない…側に様子を見てた人達に頼んで、謁見の間まで即席担架で運んでもらつた…

まさかこんな形で陛下の前に…切腹かと覚悟している神代だった…

……

20分後、謁見の間では、戸惑いの気配がしている。

居並ぶ重鎮や高官たちも、再起動してないカオル君を見、最初は何故殺した！と神代を責めたが、

医師により、生きているが精神で何かのショックを受けて意識がないのでは？

から10分…飽きの出ている人も出始めた…

そんな時である殿下が動き始めた…

「殿下お止め下さい！！」「殿下なにを??？」

「うふふ こついつた時はきまっていますわ、美女の接吻で勇者は生

き返りますの」

「「「殿下!!」「」「やめて」「俺の嫁が!!」「ハーレムが
!」」

後半聞き捨てならならぬなあ…

殿下は屈み込み、居並ぶ高官や重鎮の目の前で…

しかし殿下はつちやけ過ぎてますね…

あ、面白い設定がカオル君にあっただ…

口づけを…当人は軽いフレンチキスですまそうとしてたが…

そこにカオル君の設定で…

無意識のカオル君の口から殿下の口内に舌が侵入

「!?!?!?」

驚きの表情をあげる殿下…

エロカオルの舌は殿下の舌を搦め捕り…あ、くバキュンくバキュ
ン>

…擬音修正いれないと駄目だ…

殿下はキスで逝ってしまい、エロカオルの上に倒れた…

「「「殿下！」「」」

「よし、よし……」

再起動する殿下…口からは糸をエロカオルの口へと、ひいている。

駆け寄る侍従…

居並ぶ高官の中には立てなくなり座るものや、興奮し、よし愛人（妻）と…と決意する者もいた程だ

「無意識の内には…恐ろしい方ですわ…」

それを聞き、大将と思える人物が、

「よし、殿方はみつかったな、後は子をなすべきだな」と作戦をねっていた…

そんな事しらずカオルはやっと再起動し、この世界での1stキスを殿下に奪われた事知らず、回りを見渡し不思議に思っていた…隣からの視線もなんか痛かった…殿下は座席に戻るところだった…

（え〜と…なに??なにをしたんだ??俺は……）
隣の神代に、

「すまん状況を…」

「今、謁見の間で、煌武院殿下の御前です」

と小声で……

カオル君片膝、片拳を地面につけ、

「大変失礼致しました。自分が国連軍、横浜白陵基地所属、渚力才ル少佐、皆様がもとめておりました、魔改造撃震のパイロットです」

ザワザワザワザワ

「だからいった……」 「魔改造……」 「魔女めが」

一通り見渡し落ち着きそうなのでまたしゃべりだす。

「最初にご説明いたします。自分はこの世界の理を外れた、異世界人、及び異能力者です」

ドヨメキ

「ふざけんな……」 居並ぶ高官から……そんな声があがる。

それを消す様に、

「ふざけてはありません……異能力をお店しましょう……！」 幻影”

……！」 副司令の外観を纏う

またもやドヨメキ

「なな、魔女に？」

解除して、

「シヤムシエル……！」

空中に浮かぶ。

先程よりかはどよめきが少ない。

「空中に……」

解除して着地し、

「武器をお見せするの失礼しますパイル!!」
両腕を光の槍に変化させた。

どよめきが先程より小さい。

「光、光の…」

解除し、

「そして、自分がこの世界に提供できる力を探しに、異世界への扉を繋ぐ力…」世界扉」

世界扉を開く。

ザワザワザワザワ

「なんと」「そういつた事か…」「むう…」

先程から黙って聞いてた正面に鎮座している殿下から、
「その繋がっている先は何処です?」

「はい、今は安全な自分の元の世界に繋がってます」

「覗いてみても??」

「殿下!!」「またか……」

頑張れ誰か。

「しばらく解除しませんので、くぐられるなら同行致します」

「わかりましたわ。覗かせて下さい」

「殿下!!!」

「皆のもの!!!このわたしが試したいと言つのです。否か??」

「ならばせめて、同行を…おい、神代!」

「はっ!!!」

力を維持したままでカオル君、神代、殿下の順でくぐる。

カオル君の部屋だ。

「自分の部屋です。窓の外見れば別世界とわかりますよ」

駆け寄る二人。

窓の外には建設中のスカイタワーが見える。

「丁度正面に見えるのが、スカイタワー、現在建設中のテレビ発信塔になります。

では、他の者の心配がありますので、戻りましょう」

「今度個々に来てみても？」

「時系列が近いので、パラドックスの心配もありますが…同行の限りは大丈夫かと思えます。いずれまた」

「約束ですよ」

と指をカオルの口元に…カオル君少し赤く頷く

そのまま殿下、神代、妄想カオルの順で戻ってくる

「殿下ご無事で??？」

「よい、この者の力、面白いものだぞ」

そのまま殿下は、席に戻りすわる。

「して、そなたは、この世界になにを求めてきたのだ？」

「最初はこの世界にくる予定はありませんでした。

しかし、この世界にふれ、A-01の彼女らにふれ、基地、特に子供思いの教官の思いにふれ、

この世界から全BETA駆逐という希望を提供いたします」ザワザワザワザワ

「しかしながら、今は、まだ自分自信の力が足りません。今の力は異世界からの流入に頼ってます。こちらにお貸した撃震、あれは自分自身の異能力でのみしか、制御できません。」

「…………… たった一機だけです……………」

そこで、提供する予定の核融合炉、これは燃料が木星型にしか存在してません。」

その入手の目処が立ち次第、この世界から、BETAを駆逐する為の進軍をお約束致します」

「その言葉、まことか？」

「はい」

「して、そなた、我が国に何か求める事は何かあるか？」

「別世界とはいえ、自分も日本国民でした。ですので、求める事は、子をなし、富める国造りを、

その脅威となるBETAを我々が撃破し、また、できる限り殲滅の為の力を貸しましょう」

「その言葉、ありがたく思うぞ…
我が国の為に力を貸して下され…」

「はい、言葉違わず力をお貸しいたします」

で、謁見終了後、開発室ハンガーへ
撃震の操縦方法をみせて欲しいとの大将からの要望によりだ。

「では、この撃震について、説明します。

これはエヴァの世界における最終戦闘まで、
ただ3機しか稼動しなかった決戦兵器がモデルになっていて、
改造を施した為中身はまったく別物になってるものと思っして下さい。
この世界のもの、外見と、コクピットのみです」

「その決戦兵器が生体組織駆動なのですか？」

「はい、その通りです。
本来ならコクピットも向こうの技術で…と行きたかったのですが、
まあできませんでした。

の為自分が操縦する際も過大なGの為、操縦できませんので取り付
いて同化します」

「『同化？』」

「この様にです…バルディエル!!」
同化した。

機体の口を作り「なので、ある意味、機体の方に関しては装甲材ぐらいしか、

参照にはならないため、武器を貸したと思って下さい」

どよめき…解除おりたつ。

「ですので皆さんには、別の機体貸してくれるなら、この世界用に使用できる様にチューンを致しますので、それを研究材料として下さい」

「やった魔改造」「かつる」「だんなさん万歳」

帝国から 撃震、陽炎、武御雷を借りるようになりました…
撃震はあんまり入手に困らないのと言われた…あつたかなあ？
夜に基地に戻りとりあえず作業して就寝。

拡張工事

グリッドA枠とし、前方A10地点到達

グリッド1枠とし、現在H1地点

B2から、B10及びJ10方面へ掘削開始、共にB4D2地点

B2格納庫100機分として供与開始

A1からA10まで残骸品置場＋通路に決定

MS分放出、ビル放出率30%

戦艦スペース 縦穴150m地点到達

MS作業用に縦穴拡大終了

重力波アンテナ出力基増設

縦穴基準に前方及び横方向掘削中

残骸整理により核融合炉21基分

合計確保核融合炉65基

1基重力波アンテナ増設に提供

保有機材

コバツタ134号

ヤドカリ 15号

作業用ジム重力波アンテナ仕様15機

作業用反重力多目的トラック20両

プラントA10地点増設

作者「新年あけましておめでとうございませ〜」

一同「おめでとうございませ〜〜」

作者「さて、正月番組恒例ながら、その前に作成予約投稿はしているのはおいとして」

一同「……………」

作者「正月企画として、夢を叶えてあげましょう〜」

ヒルダ「はいはいはい」

作者「はい、ヒルダさん」

ヒルダ「カオル君と本編でエックバキユン〜」

作者「伏せ字はいるのはすんません…努力はしますが…」

イッシー「はいはい」

作者「イッシー」

イッシー「もっとでたい!!」

一同「うんうん」

イッシー「博士ばかりだけでずっとこいよう」

作者「……………すまんね…俺の妄想力のたらなさだ……………」

○○○○○○「はいよろちいでちか？」

作者「おう、本編未登場の、後書きで話題になった○○○○○○」

○○○○○○「ぼくの、おはなちは？」

作者「初っ端はかけてるんだが、途中でとまってる…こっちで、一回間違っで消してしまっただ投稿前のがあつてなあ…」

お前の部分は良いんだが別サイドからのが進まないんだよ…すまん
な」

○○○○○「しょぼーん」

作者「なるだけ早くかくから勘弁してな」

○○○○○「はいでち」

作者「あとほかには？」

夕陽「はい」

作者「殿下どござ」

夕陽「夢じゃないんですが、わたくしにあそこまでさせて、
そのあとの展開がないの、おかしくないですか？」

作者「あゝすみません、殿下…止める人の存在がいなかったので、
一気に修正だらけになりそうだったので、
そこは、無しにしました」

夕陽「は？」

作者「プライベートルーム作戦」

夕陽「さ、作者くくく……み、皆のものであえい！不届きものであるぞ切り捨ていー！」

作者「え……殿下、作風がちが……ギャー！」

作者チーン

その後新年会不参加の作者であつた……

すんません、夕陽殿下うまくできてるか心配です……
なにしろハツチャケエロにしか想像できない……

第29話 引き続き拡張中のひとこま… 投稿日20110102

2001年6月7日朝

〓〓 B55ハンガー〓〓〓

工事状況朝の時点で、

A1からJ1までのグリッドが完成したので、溜め込んだ資材を吐き出し、

B1からJ1までを資材置場とした。

100m×1000m×45m…抜けないよね？地盤沈下ないよね？

「ナデシコ技術使ってるので大丈夫！」

信用しました… がまだ溜め込んでるんだよなあ…

B2からののは、B6F2まできたから、C3からやはり外側両方向へ開始。

MS分のから最終的には83基分の核融合炉が確保できる模様。

鋼材に比べて…やはり比重は少ない…

9月まではちよくちよくガンダム世界に行くかな…と思う。

ガンダム原作では、

大気圏近辺の戦いなら地球の重力に引かれ、
回収の暇もないから棄てられる運命の機体が殆ど…

あとは大きな戦いの後なんかはしばらくたってから回収すればウハ
ウハ。

ただ機体情報は、同行しなければならぬと思っていた。

さてと少し落ち着いたので状況整理に…

輸送面は計画上大丈夫、
補給面は予定通り…

あとは???あとは???

「マスター、警戒網と、歩兵達じゃない?」横からみた11号が、
正面にまわってきた…

「うおう、びっくらした」

「マスターの情報読んだけど、無人の早期警戒網必要かもよ」

「ああ、そうか、確か母船級か…」

地中の大深度をグリグリ穴ほって侵攻してくる奴だ。
直径180m…

ハイブの元にもなる事がある嫌な奴だ…

低深度はホバートラックが優秀だが、さすがに高深度は難しい…

「なんかいいのはあるか？」

「マスター、こういったのどう？」

パソコンの画面に表示させてくれた。

半永久使い棄ての監視システム。

地中に向かいドリルで穴をほって地下1000mに到達監視をする。

燃料は、初期は蓄電にて、後、光ファイバーによる太陽光発電、

光ファイバー切断されたら地上に向かい、出たところで回収を待つ。

通信は光ファイバーを通して地上に発信。

深度探知はこれでマントル層までできるらしい。

頒布範囲は半径200km、
つまり100でまけば、二つの反応から何処を通っていると詳しくわかるわけだ…

低コスト、かつ無人、かつ優秀…申し分無し。

「いいんじゃないの？」

「じゃあ作るね〜」

「であと歩兵か…」

「こつちには一応機械化歩兵はあるんだけど、全員が全員着用じゃないんだよ」

「ん〜〜」

つまりだ、生身で対戦しなければならない集団がやっぱりいると…

「あ、」

「なに？マスター」

「このこと世界感にってるので多分いけるかなあ……」

「ど」？」

「ガンパレード・マーチ」

「どんな世界？」

「幻獣と戦って、生存競争している世界さ……」

「へええ」

「まあもつとも、あの世界も、設定が色々あるしなあ……
マーチから、榊ガンパレの流れが、好きなんだよ」

「で、その歩兵強化になるのって？」

「ウォードレス」

「どんなの？」

「人工筋肉、燃料電池で動き、強化プラスチックで纏った、肉体強化装甲」

「プラスチックか…あんまり強そうでないけど…」

「そんなかでも烈火は重装甲で、ゴブリンリーダーのトマホークはきかない、
キメラの生体レーザーもきかん、ミノや、コブリンも倒す、
まあそれ以上の大型種にはだったかな…」

「なんか強そうだね」

「ただやっぱり機動力のなさなんだよな…はっきりいって盾」

「うーん…」

「まあまあ、この世界での特質的なのは、
全歩兵がこういったウォードレスを着用している事」

「え？って事は…」

「ああ、生身で戦う奴は居なかった」

全員が全員必ず着用し戦う…つまりそんだけ生産性も高い、かつ優秀なのである。

「でも、全員が烈火だと後方浸透に対抗できない、で、色々な少し弱めなウオードレスで対抗していると、ミノなどが蹴散らしにくる…っうわけだ

で、ミノに対抗できるのは烈火や重ウオードレスだけだが、足が遅い…なので車両の出番だ」

モコスや、士魂号しまた90式等だ

「だが車両の天敵、スキュラ」
空飛ぶ要塞…

「それに対抗したのが、稼働率の低さで苦労したのだが、人型戦車士魂号…

こいつはブラックボックスに人間の脳3、4人分が使われている」

「生きてるままで？」

「ああ、施設に送られた人間を解体し、副操縦系に使われるのさ…タンパク燃料が使われるのは、その為だ」

「グロ…」

「まあ、その後も色々であるが、栄光……じゃなく、光輝号が、ロボット系で、栄光号が、巨人族のクローンを作り脳をくり抜いて、装甲をくっつけたものなんだよ」

「…その燃料も？」

「タンパク燃料だとさ…
まあ話また広がりまくったが、その世界のウオードレスなら、助けになるんじゃない？つて事だ…
多分行くとしたら榊ガンパレの世界か、オーケストラ辺りかな？」

「その違いは？」

「片方は、九州陥落も、再度攻め入った時に、
幻獣側同盟者が現れ、九州は渡すも、敵対ではなくなった。
でが、やっぱり日本は執拗に襲われ、ジベリアで同盟者を作りなんとか戦争を終結させる。」

オケは、九州は護りきつた後、色々なところから侵攻してきてるな。
多分…榊ガンパレの方が、戦力面では優秀??？」

「ところで、駆動方式は？」

「大体のが人工筋肉だそうだ」

「人工筋肉？」

「ああ、芝村一族が1970年代に開発したそうだが、ちなみに燃料と人工筋肉は、食べるそうだ」

「????」

「プリンにできるらしいな……」

「成る程ね、問題はいつ位に行くかだよね……」

「だな……正直、サイズ的に、機械化歩兵でも難しいサイズでも可、なのはうれしい」

「メタルマックスの前に入れる？」

「うん…だな…メタルマックス短縮で、
帰ってきた辺りで、国連ぶちまけが理想か…」

「じゃあ決まり？」

「ああ、そうするわ」

しかし、ここまで交わしてふともっと最強があったな…
と思ったのではないしょ。

「イエスマイロード」

side〜カオル〜

さてと、あ、宿題が届いてたんだと気がつく…

武御雷と陽炎と撃震か…

要求が撃震が今すぐ生産に困らないの？

陽炎は特になし、

武御雷は特にはか…

…ただ整備費用や製造費用が武御雷はめっちゃ高いらしい…

フム…

陽炎から着手…

A-01仕様をコピー

主機…核融合炉

駆動…フィールドモーターに変更

OS…ornへつまりカオル製

cpu…orcへカオル製

コクピット部…エステのGキャンセラー追加

外装…ルナチタニウム合金

ここまでと後は武装か…

高周波ブレード

M 120A ザクマシンガン

高周波ブレード式のレックブレードを、

下部の外側内側正面に…

外側内側ともに収納式

完成 へ融合炉在庫1減った

さてと…注意点は…

整備等は俺のところ、

9月までは核融合炉の増産不可、で送りだすか…

次に武御雷か…ん？

OS、CPUとりあえずいじって、
装甲主機強化すればいいんじゃない？

整備費用か…フムOS cpuだけ弄って後回し…

先に撃震か…要求通りだと…

CPUと、OSと…ぐ…あと武装しか弄れん…

装甲は最低限弄りたいが…

ビダンさんに、相談しにいくか…

エステの装甲は、

DF頼みだからなあ…

850kgなのはすごいが…

だって6m級ロボットがだよ？

あ、CPUユニットできないか？で、できるらしい…流石プラント。
OSインストール付きで、MOで更新可能だったぞ。

なんかできてたらうれしいなあ…

side〜カオル〜end

〓〓 研究棟ビダン執務室 〓〓

「コンコン」「ビダンさん〜」

「あ、カオル君?... 一分まってね...」

(何故に??)

「お待たせいいわよ〜」

シュン

「しつれい.....」

回れ右!! ドタン

顔面ぶつめた。

ドアはロックされている...

執務室なのにピンク色の照明、奥には何故かWベッドがある.....

(ナゼ、ナゼダアア!!)

説明しよう、ヒルダさんの来てそうそうの、部屋改造部分は、本棚の下の部分がスライドし、隠れてた高性能反発マットが、蓋のように被さって、Wベッドに早変わり、照明は、スイッチで切替られる事である。

きて丸四日たたない内に改造を、施したのである。

そして、彼女の極めつけの特技は、早着替えである…

研究者にとって、時間は命!!

メイクも20秒で済ませる早業を、習得している…

そう……彼女はランジェリー姿だったのだ!!

「あらこつちにいらっしやい…お仕事なんでしょ??」

ガチャガチャ

カオルは必死に開けようとしている…

「そんな格好でお仕事ですか!!」

ガチャガチャ

ドアを力任せに開けようとしている。

「あら、仕事着よん」

ガチャガチャ

引き戸ドアを引っ張ったり押ししたりしている。

「何が仕事着ですか!!」

ガチャガチャ

横に力付くが、ドアは開かない。

「あら、装甲材の話でしょん？」

ガチャ…

一回開けようとしたが、少し動きとまった。

「現用戦術機に使用できる、新型装甲材できたわよん」

カオル、後ろを振り返る…

「それは何処に……？」

「まとめたのは、ここよん」

ヒルダさんは、胸のランジェリーと、素肌の間を指す…
MOがそこから見える。

ガチャガチャ

回れ右でひっしに開けようとしている。

「とにかく出して下さい！…！」

ガチャガチャ

カオルひっしの形相。

「あら、あたしは動かないわ、一切ね」
ガチャガチャ

一回振り返るも、ひっしに開けようとしている。

「嘘ダあああ」

ドンドンガチャ

カオル…叩いたあと開こうとしている。

「あら、お仕事の際は嘘つかないわ」

カチャ

カオル動きとまる…

「ホントに？」

振り返りながら…

「ほんとよ」

「絶対??？」

「絶対よん」

……
（素肌さわったら…絶対襲われる…素肌さわったら襲われる）

「絶対動かないで下さいね!！」

「わかったわ。動かないわ」

恐る恐る、ヒルダさんに近づくカオル…

一歩一歩慎重に…

（素肌さわったら襲われる、素肌さわったら襲われる、素肌さわ
たら襲われる、素肌さわったら襲われる）
そーっとそーっと手を伸ばし

手が届かず、もう一歩前へ……

カチ

瞬間ヒルダさんニヤリッと笑み、カオルのつま先から音……

瞬間天井からアームが出てきて、カオルホールド!!

「な、な、何を！！！」

「んふふふ〜がかつたわねええ」

「ビダンさん！！」

「確かにわ・た・し・は、一切動いてないわ」

「そんな事よりこれを！！」

「あら…物を渡すのに動けないのなら、
こちらから渡すしかないわねえ」

机の上のボタンをポチリ…

クウイイイ

アームがベッドの方に動く。

(ぎゃうがうYabai!!!ha souda
「バルディエル！！」

アームに同化…できない。

「！！な、なんで！！」

「あらあら…あまいわねえ、

わたしの愛のコーティングをしてるのよ」

「ば、馬鹿なあああ!!」

アームがベットに押さえつけにかかった。

「んふふふ…じゃあ体で、わ・た・し・て・あ・げ・る」

押さえこまれてるカオル。

「ビダンさん!ビダンさん!ビダンさん!」

(食われる食われる食われる食われる食われる)

「んふふふ…久しぶりだから…美味しく、いただきますわ」

ヒルダさんの手がベルトにかかり、

カチャリ

ベルトの前ホック部分が外された

顔が青ざめていく、カオル…

対してヒルダさんは…
しとめたした獲物を頂きますと、
一口目を食べようとしているトラ。

まさにそんな光景であった……

その時！！
ズガン！！

鍵がかかっていたドアがひしゃげ、内側に飛んできた！！

ドアは床に倒れる。

ドアがあった場所の、廊下部分には…

フシユルルーフシユルルーフと鼻息荒い…

石橋がたっていた。

ズガツズガツ

メキヨメキヨ

彼女はなかに入ると無言でアームを力付くで、外す。

ヒルダは予想だにしてない事態にフリーズ。

(た、助かったのか?)

がカオルの意識あるのはそこまでだった……

石橋はカオルを、おもいつきり殴って気絶させると、フン!!
と鼻息荒く、

足を掴んで引きずっていった……

あとに残されるヒルダさん……

「ドアの強度考えてなかったわ……もっと……いやガンダリウム合金で……」

そっちですか!!

カオルは、というと……

まず殴って覚醒させ、正座でOHANASHIさせられました……

というか、なぜ、オレガOHANASHIナノダ……

.....

カオル報告...

正座中につき、できません。

作者「あと少しだったのに……」

あ号「……新年そうそう……」

作者「?書いてるのまだ年末だぞ」

あ号「てなおし……してるの……新年だろ……」

作者「まあ後書きも……新年だよなあ……」

あ号「……ところで……作者よ……ヒルダは……どうするのだ?」

作者「……正直、初回プロットに入っていない人物だから、出たところ任せ……というか、彼女次第」

あ号「モデル人物いるのか?」

作者「いたらヤバいじゃん……あ……」

あ号「な…いるのか？」

作者「……ノーコメント」

あ号「きになる…教えてろ」

作者「あ号、後書きにださないよ？」

あ号「な、なにおう？作者…わが触手で、潰してやる…！」

作者「ち、ちよっとまで……はやまるな……ギャー」

作者 チーン

ヒルダさんは、リアルでないのですが、どっかがモデルになっ
たような…

というか、絶対そうするよ…この感じだよ…

第30話 ただ今カオル君は… 投稿日20110103

2001年6月8日朝

ただ今カオルは拍子抜けてとまっていた…

そういえば昨日MO奪ってなかったな…
で、襲われてたまるか!!と、

機械化歩兵で非殺生武装した1個小隊を借りてきて、
向かったのである。

しかし、

「あら、そこにおいでるのに…カオル君？」

まともだったのである…

「カオル君？」

手をフリフリ目の前で…

「うん、もう……」

困っている様子のヒルダさん…

耳元に口をよせ…

「カオル君…動かないとくっっちゃわよ」

瞬間再起動!!

「あ、あの!!」

「うふふっ ……あ、MOね」

「あ、はい…わかりました…ありがとうございます」
礼をしながら退出するカオル…

キィ

椅子をならす、ヒルダさん…

「流石にこれじゃあねえ…」
ポチリ

クウイイイン

アームがおりてくるも、ひしゃげてる。
またドアもハズレて壊れたままだ…

なおってたらまた襲う気だったんですか!!

「あら、当たり前じゃない。カオル君は美味しそうだし」

ヒルダさん、ナレーション反応しないで!!

「いいじゃない、ねえ、あなたどう?」

え?俺?……R18ネタになりますか…

「冗談よ」

………さいですかorz…

あゝ次いきます。

|| || 副司令執務室 || ||

副司令に呼び出し食らっていた…

「で？、この、機械化歩兵部隊の件はどういった事なの？
要人警護の為…で急に連れ出して」

「あ、はい。俺が食われない為の警護をお願いしました」

「あなたが？誰に？」

「ビダンさんにです」

「……………とりあえず、やり過ぎね。機械化歩兵の警護の為の貸出禁
止」

「ええっ？？」

「少なくとも、あなた死なないから、それでいいじゃない」

「ち、ちょっと待ってくださいよ！！」

「はいはい。実力でなんとかしなさいね」

「…実力で…ですか…」

「少なくともこういった色恋沙汰に、他人を借りるのは、無し、以上」

「…はい」

「あ、こんな時にだけど、金塊午後用意できるから、資料お願いね。」

「わかりました」

「で、この件の始末書も忘れずに…」

「了解です」

シュン

「流石に歩兵はやり過ぎたかなあ………」

うん俺も歩兵は…と思う。

「強化装甲だけじゃ操れないし…」

おい…

「T-850か…」

ヒルダさん殺さないよな??

「けど、彼らのセンサーどうかわすか」

頼むから殺さないでくれよ…ヒルダさんはもっと活躍するんだからね…

あ、自重します…

|| || B55ハンガー || ||

(さてと、MO見ますか…)

コンピューターに入れ内容を確認しようとファイルを……

(?何故に、説明ファイルの他に必ずクリックする事ってファイルは…)

…判断なやんだが、クリックする。

ぴよこ

セクシーな手の指サイズの下着姿のヒルダさん画面内に登場…

せいだいにずっこける、カオル君。

(あ、あの人はああ…)

セクシーヒルダさんは、ファイルを早く開けとせかしている。

椅子に座りなおし、クリックするカオル君。

まあ…セクシーヒルダさんは、文ではわからなそうなところを、絵で書いたり、仕種で説明したりと、大忙しなのである。

結構いい味をだしている。

説明しおわったので、次のファイル内容を渡せば良いらしい…
までひと通り案内したら、セクシーヒルダさん、ブラジャーをとりはじめたので、無言で画面off。

11号に命令して、プラントに、試作品を作って貰う事にした…

昨日騒動でできなかつた部分を再開。

B6からB10、F2からJ2C3からC5E3まで完成

D4から両方向へ…

B3、4を整備ハンガー

B5から10まで格納庫

戦艦ブロックの方は、1km x 1kmの部分はくり抜いたから、
上から削つてる状態、

現在30m地点

ビルを60%まで吐き出せた。

核融合炉83基分で確定、

陸戦強襲型ガンタンク48機増産するようにする。

ホバートラックルナチタニウム製を4機増産

コバッタ156号まで、

ヤドカリ20号まで

とりあえず以上

〓〓 移動中 〓〓

試作品ができるまでに、始末書を書きにカオルの執務室へ…

が…

「だあああ」

煮詰まっていた…

カオルは、書類作成が下手くそなのだ…

多分1番効果的な罰であろう…

「クソッ！」

カオルは立ち上がり、廊下にでるとPXに向かった。

気分転換に飯？なのかな？

PXにつくと、見知った顔がいた…
まりもちちゃんである。

「あ、まりもさん」

「カオルさん、珍しいですね」

いつもなら出前を頼んでB55ハンガー直結の、待機室で飯を済ます事が多い…

まあ地下深くで作業していると、地上にでるのが億劫だからだ…

「？浮かない顔してますね…どうしたんですか？」

「ああ、まあ始末書を…書いてたんですが…躓いて…」

「あら、大変そうですね…何があったのです？」

「ええ、まあ要人警護、まあ俺ですが、機械化歩兵小隊駆り出したのが…っす」

「なる程ねえ……」

手を顎にし、考え中のまりもちゃん。

「あ、でしたら午後の教練までの間でしたら、お付き合致します
よ」

渡りに手とばかり、

「本当ですか？是非ご教授をお願いします!!」

「わかりました。では、早く昼食をすませましょう」

早めに食事を済ませ、カオル執務室へ…

〓 〓 カオル執務室 〓 〓

「あのカオルさん…どこの士官学校卒業で？」

とりあえずって事で、見せた始末書みてのいの一番の発言だった

「あゝ士官学校出てませんが…」

「え？訓練校です？」

「いや、違います」

(そついやあ…)

うんまりもちゃん知らないネタであった。

「あゝそついえば、俺が民間人で、異世界人って知りませんでしたよね？」

「え？」

「副司令から聞いてなかったです？」

「夕呼から？…ええ…異世界人って？」

「まあこことは違うBETAのいない世界の出身です。夜お暇あります？」

「…あ、はい」

「ではB55ハンガーに来て下さい。今はこっちの方を仕上げないと、

怒られちゃうので、手伝ってくれたお礼に教えますから。」

「…わかりました」

顔を切替、真面目に指導する…かなり苦労し…

「すみません…時間ギリギリまで、では夜お待ちしてます」

「ええ」

シュン

と、とぶように午後の教練に行く、まりもちゃん。

「まりもさんいなかったら…やばかったなあ………」

と始末書を持ち、副司令執務室へ…

〓 〓 副司令執務室 〓 〓

コンコン「副司令いますか」

「入っていいわよ」

シュン

「始末書持ってきました」

「あら、早いわね」

と始末書を渡す。

「これあなた一人で？」

「すみません、まりもさんに…」

「そうだと思ったわ」

すまなそうな顔のカオル

「まあともかくとして、金塊ね…こっちにいらっしやい」

シユン

部屋の外に出ていく副司令、その後をついてゆく。

「あ、そうそう、国連総会17日に決まったわ。あなたを、オルタネイティブ4の成果の一部として、紹介するから、よろしくね」

「了解です」

本来であれば00ユニットが最大の成果として、紹介されるはずだったが、

オルタネイティブ4の目標は、諜報員の育成によるBETA情報の取得、

この段階での報告もありだった。

かつ、カオル本人の異世界からの即戦力の勧誘、

また独自軍団の作成…

それにより、国連でぶちまける形で、

オルタネイティブ5を牽制し、

異世界の力による、軍団の設立の承認を、えようとしているのだった。

けど、カオルは更に思惑があったのだった……
オルタネイティブ5の完全なるぶつつぶし……

さてさて、うまくいくことやら??

そうこう、しているうちに機械化歩兵が、ドアの警備している、会議室前についた。

「異常ありません!!」

と夕呼さんに報告する歩兵。

中に入りMPが4名詰めている。

「開けて」

MP領きアタツシケースを開ける。

中には、金の延べ棒1本が入っていた……

「純金のラージバーよ、…12.5kg個人に対しての、活動資金
としたら破格だから、そのつもりだね」

「わかりました」

「副司令、カオル少佐サインを」

「えゝあんたがしてよ……」

「いえ…副司令こればかりは……」

「いいじゃない、減るもんじゃないし」

しかし、MPも4000万円相当金塊の警護してたからひっしである。

「副司令お願い致します!!」

かれこれ5分程やり取りをし、

とうとう土下座までして、やっと副司令のサインを貰った…

MP涙目で退出。

金塊アタツシケースを大切もの置場に…

「しかし、あんたのそれ…ふざけてるわよねえ、どの位入るの?」

「さあ?、第一俺自身は、入れないのでわかりませんから…」

「コロニー6個位入るんじゃないですか?」

俺は任意の位置の物を取り出すだけですし…」

「ふ〜ん…入ってみたいわねえ…」

「入って動きまわると、俺が認知できない状態になるので、取り出せませんけど?」

「それってつまり……」

「はい。手探りで探せられなかったら、死んでも放置されて……」

「やめとくわ」

「賢明です」

「じゃあ明日忘れないようにね、後17日も」

「こっちに来るんですよね？」

「ええ、14時よ」

「了解です。では」

「 B 5 5 ハンガー 」

B - 0 1 は、放置してるから、勝手に機体持ち出して、訓練してた

らしい…

(持ち出したのドムと、ハイゴックか…)

メンテナンス費用フリー万歳

確認している内にまりもちゃんがハンガー待機室にきた…

(あゝ資格がとかったな…)

シユン

「おまちござさま」

「カオルさん、説明お願いします」

「自分は、BETAのいない世界からきた異能力者です」

「BETAのいない世界？異能力者？」

「まずは、この力、パイル」

両腕を光の槍に…まりもちゃんほうけてる…でもどし、

「で、BETAのいない世界です、”世界扉”」

「く、空間？」

「少し覗いてみます？」

「え、ええ…」

「じゃあこちらに」

カオル君、まりもちゃんの手をとり、アテンドで、くぐる。

＝ 現実世界 ＝

「こ、ここは…」

「俺のもといた世界の俺の部屋です…窓の外を見れば、違いがわかりますよ」

手を離れ、窓によるまりもちゃん。

まりもちゃんの知っている日本と大分違う光景が広がっている…

「俺は元、この世界の住民でした、が今は縁あって、まりもさんの世界にいます」

「……異世界人……他のところにもいける……」

「ですが、……まりもさん、あなたの言葉で、あなたの世界を救う事を決めました」

「わたしの言葉で？」

「はい。その為に、俺が異世界から持ち帰り、やるうとしていた事を、見せましょう。
戻りますよ」

また、まりもちゃんの手を握りくぐる。

〓〓 B55ハンガー待機室 〓〓

「では、ハンガー内に……」

シユン

「こ、これは……」

前回夕呼さんがみた光景よりも色々あるが略。

「ええ、異世界の力です。ハンガーに並んでるのは、機動戦士ガンダムの世界のMS達」

「ガンダム？」

「宇宙、地球問わず戦争での覇権争いの、絶えない世界…
時には一週間で26億人が死亡しました…」

「一週間で…」

「そんな世界での機動兵器です。実力は折り紙です。
で、動き回ってるのが、機動戦艦ナデシコの世界での作業ロボット
達」

「色々な世界あるのですね」

「はい。これらの力でBETAを駆逐しますので、俺を信じてくだ
さい。」

「はい」

「また、この世界の事で、わからない事は教えてください」

「わかりました、協力いたします。

……カオルさん一つ質問が…」

「なんです?」

「わたしの言葉って?」

「前、まりもさん、ないちゃった時の事覚えてます?」

「……ええ／＼」

「その時の言葉で、

俺にとっては、教え子の大半が死ぬのが常識が赦せないんですよ……

あの感謝の涙……で全力をつくすのを決めました。

……まりもさん……あなたの思いを救う為にね……

あなたが年をとった時、周りには教え子がいっぱいいる……

それが当たり前になります」

「カオ……ルさん……ありがと……ございます」

後半部分を聞いた時、まりもちゃん堪えきれず、涙をながす。

そして、泣き出し…
慰めるカオル…

…
カオル君報告

作業関係は午前中みたと言っことで…

第30話 ただ今カオル君は… 投稿日20110103（後書き）

作者「今回は少し苦勞しました…」

あ号「どこらへんが？」

作者「まりもちゃんを泣かすか、泣かさないか、で……」

あ号「ふむ……」

作者「なので、なきなしにしようかなあと……してたんですが……」

あ号「最後……ないとするが？」

作者「はい、泣きありにしちゃいました……」

あ号「ほっ……」

作者「まあ、まりもちゃん教え子思いですからねえ……
夢なんじゃないでしょうか？」

あ号「だが、殺すよ」

作者「殺させない！！世界扉の力見ておくべし！！」

あ号「この話みて対抗してやる！！」

第31話 お兄ちゃん会いたかったよ…投稿日20110104

2001年6月9日

とりあえず、午前中にひと仕事、

コバツタ経由で、

俺の世界にいき、金塊を換金できる場所を探してきます。
と伝える。

了解との事で、行ってきます。

「世界扉」

|| || 現実世界 || ||

相変わらずの俺の部屋。

「バルティエル…」幻影”シャムシエル」

窓を通りぬけ、フランクリン・ビダンになり軟着陸…

とりあえず、情報集めに質屋に向かおうとおもった…

「お、開いてたか…」

こここの質屋鳳のおおとりは、朝早くから開いているが、休みが知

らなかったから行幸だった。

チリン

「いらっしやい」

店内ところ狭しと色々なものが、並んでいる。

（お、PSPも取り扱ってるんか…ついでに、これ買えば、教えてくれそうだなあ、

型番は……んゝわからない…か）

「すみません、PSP見せてもらえますか？」

「あーいよ」

よっこらせと鍵をとりながら、ショーケースをあける。

（3000か……うん傷なしだな）

「おばちゃん、これ充電器等は？」

「箱つきで、13000じゃよ」

「作動テスト良い？次第で買うよ」

電源作動テスト…良好

「おし、買うよ。領収書よろしく。宛名は香月 夕呼で。香水の香にお月様月で、夕方の夕に、呼ぶで……」とポツケの中から虚数空間にアクセスし、お札を4枚だす。

「はいはい毎度ね」

領収書を取り出そうとしている。

「ところで、金の売買ってどこでやるかわかる？」

「記念コインかい？うちでやるとるよ」

「いやいやもつと量があるの」

「金地金……バーの事かい？」

「うん。そつ」

「鉱山会社、商社、大手貴金属商だねえ………売買なら、ここに問い合わせてみな」

と印刷したコピーを渡してくれる。

菱形商事株式会社

顧客取引部

田中 玲奈

電話番号0000-0000-0000

とかかれてる。

「どこに？」

「ああ、そうじゃよ。あたしも利用させて貰っている、取引先じゃ
よ」

ちよつど包装、領収書等全て渡してくれた。

「ん ありがとう電話してみるわ…とチップね」
と千円札一枚つける。

「あいよ、あんがとさん」

さてこの事で、公衆電話を探す。

最近撤去がすすんで中々見つからない。

結局コンビニから…

ピッポッパ プルルルル

「お電話ありがとうございます。こちら菱形商事、顧客取引部、高

橋です」

「あ、田中玲奈さんお願いできますか？」

「失礼ですが…」

「質屋鳳の店主から紹介されました。ビダンといます」

「わかりました。ビダン様少々お待ち下さい」

保留…解除

「はい、お電話代わりました。ビダン様、田中です」

「鳳の方から紹介がありました。金の売買についてですが…」

「当社は初めてで、いらっしゃいますね？いかほど、お求めでしょうか？」

「いや、売りの方ですが…」

「…買い取りでございますね？…量の方は？」

「ラージバー一本分ですが…」

「は？」

「えっと、ラージバー一本」

「わ、わかりました…す、直ぐには金額はご用意できませんので、
当方で見せて頂き、後日取引の形になりますが…」

「わかりました。けど、できるだけ早めをお願いします」

「は、はい……で、私他、数名がお伺いに行きますが…」

（あ、ホテルもとってないなあ……出先にするか…）

「あ、出先なので…そちらに伺うというのは？」

「と、当社にですか？……わかりました。何時頃になりますでしょうか？」

電話番号から市内と当たりをつけていた。

「詳しい住所は伺ってないので、聞いたら時間わかりますが……」

「あ、はい当社の住所は〇市×1 1 1、菱形商事ビルです。
駅から徒歩1分です」

（あのビルか）

「近いですね…20分後にでも」

「お待ちしております」

カチャリ

………

アタッシュケースを人気がない所で出した後、

「いつみてもでっかいよなあ…しかし、

このビルが菱形商事だったんか……」

入口入り受付へ……

アポ取れてるで受付嬢自身が、商談室まで案内した。

「大変お待たせ致しました。田中玲奈です。この度は当社をご指名
頂き、まことにありがとうございます」

田中嬢が入ってきた。歳は若いがやり手…背は小さいが、胸はG？
グラドルかと思う。

「フランクリン・ビダンです。良い取引を、よろしくお願いします」

「では早速ですが…」

「あ、はい」

とアタツシケースをデスクの上におき開く…

金色の光を放つ、ラージバーだ。

「失礼します」

と白手をキュツとはめ、ラージバーを手に持つ…

鑑定作業にはいる…

が、ロゴの部分を見た瞬間…彼女の目は変わる…

「ビダン様、失礼ですが入手先はどちらで？」

(は?…ん〜あそつだ)

「友人から買い取りましたが…」

「その友人とは？」

(何で突っ込むー！)

「えーと、彼は、海外いつてますので、連絡は直ぐには……」

「ビダン様、このロゴですがどちらで？」

「え…えっと…」

(何処だろう?)

「あと、ビダン様、身分証明書などお持ちですか？取引の際には必要ですけど」

勿論持つてません！！

たらあ…

「すみません…この取引は無しで…」

「いいえ呼ばせて頂きます」

彼女がポケケから携帯電話をだし…

(アウトだ…なむさん)

”世界扉”

「は？」

彼女と金塊を抱えてくぐりました…

とうとうカオル拉致りやがったよ……

〓 〓 副司令執務室 〓 〓

世界扉が現れ、見知らぬ男性へすぐに解除と金塊と見知らぬ女性
が現れ、

副司令は動揺した…

女性は狂乱状態…

「ここは何処？帰して！！」「なに？誘拐？」「あたしの美貌に…
よよよ」

カオルは、とにかく、

「説明するから落ち着け！」の連呼…芸がない…

夕呼さんは、呆れてみていた…

やっと落ち着いてきたようだ…

「まず、この金塊の入手先を説明するから、とにかく叫ぶなね…話
はじまらないから…」

不満顔で頷く田中、

「まず、この金塊は盗品でもなく、

この横浜白凌基地副司令から、

譲り受けた事は納得してくれ」「確かにそうよ。国連軍として活動資金がわりにわたしたの」

「横浜に国連軍？」

「じゃあ、この世界について説明すつから、
というか、田中さん…異世界によっこそ…後で帰れるから安心してな」

田中は黙っていた。

「この世界は、BETAという、宇宙生命体により侵略しつつあるため、
46億人いた人類が、10億人位まで減り、ユーラシア、アジア大陸は宇宙生物の占拠下で、
人類は、そこにはいない世界なんだ」

「だいたいあつてるわね…人類は約30年近く地球上で、BETAと戦つてるの…」

「え？それつつまり…」

「地上見せた方が早い…」

「ええ、そつね…いらつしゃい」

シュン

「正直、あの場で田中さん、洗脳する手段もあった…が俺は嫌いだ…納得して田中さんの中に秘めるなら帰すからね…」

「わかりました…けど本当なんですか？」

「ああ、この世界の事？本当々…」

「じゃなきゃ、まずこんな基地、エリア51位しか思いつかんだろ？」

「ええ…」

〓 〓 地上 〓 〓

基地の外回りは一面廃墟。

そのまま歩き、丘まであんないした…

横浜港が一望…

また廃墟である…

「田中さん、横浜港は？」

「はい…見たことあります…本当なんです…」

「まあね、拉致っちゃった事は正直あやまる…けどあの場だとしてよ
うがないだろ？」

「はい、警察呼ぶ気満々ですし、その前の段階でも…」

「前の段階？」

「電話の最中…」

「そっからか…」

「はい、で、副司令さん…この世界の状態を詳しく、聞きたいので
すが…」

「あゝ…カオル、よろしく、あたしは執務室にもどるわ」

「面倒なんすね…わかりました」

俺の知っている事を説明した…

そしてオルタネイティブ5の事も…

彼女は震えていた…

けど俺が力の介入について説明すると…
ピカリン

「ねえ、カオル様…モビルスーツ見せてくれない？」

「ああ……ガンオタ??」

「うん」

あ、さいね。

田中さんのモビルスーツへの愛着ぶりは凄かった、舐めたり、キスしたり、ほお擦りしたり…

あ、なんでその情景略してんだ?って?

……田中さんが殺すよ作者って……あ、いや、やめて……

田中様は満足しきると、カオル君に今の日本は?と聞いてきた…

「ん〜俺よりかは…あ、11号日本の状態って説明できる?」

「マスター、パソコンの中の、日本の戦力で」

「おう、ありがとう」

パソコン起動させた。

「あれは…ナデシコのよね?」

「ああ、想像通りだな。オリ機能に会話機能つけた」

「会話……題名が思い出せない……からのですよね?」

「そつだよ 後悔はしてない……というかつけたら、優秀すぎる」

「その子達は、つれてこられないのです?」

「あ〜多分可愛すぎて前線での士気が、崩壊しそつです…」

「色々チートあっても、制約あるんですね」

「まあな…これか…そういえば俺も詳しくなかったな…」

日本の現状ファイル…

98年の九州から上陸し西日本、四国蹂躪、取り残された九州放棄

京都侵行、京都絶対防衛戦ひくも、京都陥落

その後北上し、佐渡島ハイブを建設

この一連の行動により、民間人3600万人の命を落とす

「ハイブとはなんですか？」

「BETAの生産拠点、基地と思えばいいよ」

関東ー東北圏で防衛線ひくも、突如として南進

横浜にハイブが建設、多摩川で防衛戦、断続的な間引き作戦が行われる

「間引き作戦？」

「ああ、それ以上の進行を防ぐ、防御的攻撃、ただ行つと半壊から全滅、壊滅になるらしい。弾薬等も勿論のことな」

99年8月明星作戦発動、苦戦するもG弾2発の投入により、人類初のハイブ攻略となる

「G弾？」

「核の酷いやつと思えばいいさ。後遺症に重力異常：人が住めなくなっている…」

明星作戦成功により本州4島の奪還成功、現在国連軍に岩国基地、日本帝国により京都、呉（広島）、佐世保、明野、舞鶴、富士基地の復興すすむ

日本上陸前の戦力に比べての現状

生産力：西日本、中部、関東西を失い、東南アジア諸島に拠点を移設するも、

軍需関係で57%

その他産業35%

まで落ち込む

「これは…酷いわ」

食生活…

難民キャンプに限るが、現状配給制に頼り、合成食料1日2食をなんとか維持している

ただし2食食べれない場合たたり

その他、天然物はなく、民間人は合成食料に頼る

「……よく国を維持できてるのね……」

「……だなぁ……2食は副司令から聞いたけど……」

「質問とかできます?」

「11号HELP」

「マスターなに?」

「質問できるの?だって」

「横のコマンドクリックして、質問したいキーワードいれて、できます」

「これね?」

食材の相場は?…70年代より5倍に高騰
安い食材の仕入れ先は?…無くなってる

「……これなら……カオル様、輸送とかはできます?」

「ああ、できるけど……?」

「あとこちらの偉い方へのツテ、ございます?」

「殿下や大将辺りなら……」

「……ちょっと一回戻していただけませんか?」

あ、金塊は買い取り致します。

キャッシュで4000万円で、買い取らせて頂きます。
こちらに来る際に、お持ち致します」

「あ、ああ……けど扉の場所は、多分固定になるけど……」

「でしたら、また当社に2時間後に、来社していただけますか?」

「ああ……わかった……」

「ではお願いします」

「”世界扉”」

「あ、潜るまえに……」

田中様携帯調べる…電波が入り、センター履歴が入る。

「やはりゼロ魔の世界扉ですか……」

「あ、知っているのか……」

「はい、グラモン様ファンですので
ではお願い致します」

田中様、カオル様世界扉を潜る…

〓〓 現実世界 〓〓

「カオル様ここは……？」

「2次創作で、いわゆる元俺の部屋」

「わかりましたわ」

窓をあけ、

「飛ぶので失礼するよ」

でお姫様抱っこ、田中様も動じてないなあ…

「シヤムシエル」

でふんわりと道路に軟着陸。

「この道まっすぐ5分位で&駅だよ。ここで？」

「大丈夫です。では2時間後、当社にお越し下さいませ」と深々とお辞儀したあと、
駅の方へ携帯かけながら戻ってゆく田中様…

カオル、部屋に戻り鍵を閉めて潜る

〓〓 B55ハンガー 〓〓

(あ、二時間後か…やばいなあ…副司令のとき、相談か…)

〓〓 副司令執務室 〓〓

コンコン「失礼します」

シュン

「あら田中さんは？」

「お金を用意するって事で、俺の世界に戻りました」

「何を見せたの？」

略MSやこの世界の現状等など

「あら…面白い展開になりそうね…いいわ」

「??？」

「あ、お兄ちゃんの件だけど、キャンセル済みだから安心していいわよ。」

「あ、じゃあ大丈夫っすね…うんじゃあ、今からいって資料仕入れ
てきます」

「いってらっしゃい」

「”世界扉”」

|| || 現実世界 || ||

買い物買い物つと…

秋葉原まで幻影で飛んでゆき、

ソフマップでP S 3、D S L、メタルマックス3、鋼鉄の咆哮2P、電気屋さんで液晶テレビ、DVDは…ZのプレミアムBOX、ガンダムは劇場版でいいか。を仕入れて約24万円か…

あとその他を買って約35万円使った。
(そろそろ時間だな…)

〓 〓 菱形商事会議室 〓 〓

受付いくと先程の会議室にあんないされた。

田中様と一緒に、男性二人がアタッシュケース4個運んで、入室してくる。

テーブルの上におき、パカリと開いて現金4000万円を見せられる。

「お確かめ下さい。で、ラージバーは？」

「出したのですが…」
「ちらりと後ろの男性を見る…」

「あ、この者達なら大丈夫です。というか、私どもの部所の者なら…」

「は？」

「実は、私ども菱形商事は、異世界日本に、食料等販売いただきたいと、思っておりますが…
いかがでしょうか？カオル様」

「はあ…」

「カオル様の件や異能力については、私どもの部所の方には説明済みです。お話を通して頂けませんか？」

「俺の一存では……とりあえず」

ラージバーをだす。

「ラージバーをお渡ししたあと…来てもらえます？」

「はい！！喜んで！！…ではこちらはお納め下さいませ。あとカオル様」

「??？」

後ろの男性がケースをあけて渡してくる。

「当方からの贈り物ですわ」

中身を見ると…携帯電話、通帳、実印、パスポート、在住証明書等…

つまりこちらの身元がないと作れない物が多数であった。

「え？これは……」

「カオル様は、この世界では死んで、身分がなさそうでしたので、お使い下さい」

「助かります」

深々と礼

「なにか必要な物ございましたら、私共にご用命下さいませ」

「はい…では、とりあえず行きますが、準備は…？」

「何時でもよろしいです」

トランク用意してるよ……

「では”世界扉”」

〓 〓 副司令執務室 〓 〓

くぐると見慣れない方が……

「田中さん、丁度よかつたわ。
こちらの方は、内務省の事務次官の飯田さんよ
で、財務省の……」以下略」

「……」田中様、我が日本帝国はあなた様を歓迎致します」「」「」

「あの…副司令?」

「あんたがいったあと、呼んで打ち合わせしてたのよ。
田中さん、取引したいんでしょ?」

「はい!!」

副司令、先手打つ。

この後の商談は長くなるので略しますが、とりあえず以下の事が決
まりました。

俺が輸送艦がわりに往復して、日本帝国からは…資材等、
菱形商事からはタイブランド米や、中国産餃子、
ようは日本で安い人気がない国の食料を中心に大量に…
また医療品関係

レートは日本国側に合わせる形での商談がきまりました。

俺の携帯メールでやり取りするらしいです。
できれば毎日、最低でも二週間に1回との事。

田中様ほくほく顔…あと技術情報にも興味持ち始めてる…

現実世界にレイバーでも、作るつもりなのだろうか??
とりあえず本日の商談を終え、

帰る日程を決めたので15日に送る予定になりました…

一回帝都に行くらしい…

斯衛から護衛がでるからまあ安心かな？

副司令には買ってきたのを渡すと…

もう遅いのでお開きになりました。

………
カオル報告

今日もなにもできんかった…

第31話 お兄ちゃん会いたかったよ…投稿日20110104（後書き）

作者「いやぁ…あらたなオリキャラとうとういれちゃった…」

田中「田中玲奈といいます。皆様方おひとつよろしくお願い致します」

作者「一応、彼女は登場予定ありませんでした、
また現実世界をそこまで絡ませる予定ありませんでした」

深々とお詫びする作者。

作者「当初、いない人物でしたので、モー娘。の田中れいなさんを想像して下さい。彼女にGカップを与えた…と思って結構です。バリバリのキャリアウーマン、だけどオタ、コミケ大好き…ですね」

作者「ゲストで終わるかも知れませんし、準レギュになるかも知れないですし…」

田中「で私が生まれたわけは？菱形商事も」

作者「はじまりは、ラージバーでした…で、
現実世界にもっていったって換金しちやえば活動資金になるじゃん…で

…」

作者「しかし、換金できる場所を探したら、あ……となりました…」

作者「日本国内では、身分証明書が必要…ようは盗難対策、古物商の扱いになるからです」

作者「また、必ずロット番号やロゴ等を管理している…
ですので日本国内では手詰まりになりました…」

要はカオル君がいったら絶対に捕まる状態に…」

526

作者「中国や韓国、や裏ルートとの助言もありましたが…
まずは、カオル君諜報部員のように詳しくないのでありえませんでした…」

作者「ですので…田中玲奈様が生まれたわけです。現実世界の協力者です」

作者「本来は、サブタイトル通り、お兄ちゃんと呼ぶ存在出現の話になるはずでしたが…
多分皆様方もそう思ってたでしょう…」

??」で、あたしは何時でるの?」

作者「……………展開次第…近日中……………」

すみません…完全崩壊してました…

先に調べてたらなあ…と思ったこの頃…

2001年6月10日朝

昨日みてなかったから、今日起床ラッパなり響いたと、ともに作業。

うは…俺指示待ちかよ…

つうか終了って…

B55状況

D4から両方向と、D10からとJ4から…
完成したら更に中へ…

浄化土置場に利用で、トリップ分にあてる。

戦艦ブロックは70mまで進行

陸戦強襲型は約50%増産、ホバーは仕上がり

コバッタは201号

ヤドカリは35号

上々

陽炎は出荷済みか…

15日に送る予定なので、それまでをガンパレのトリップ分にあてる計画に。

「なに？マスター」

「医療キットってある？」

「はいはい、マスター」

……

「………なんでカプセル？」

目の前にもってこられたのは、プラント特製のつかいカプセル…
外見は、よく映画などで冷凍カプセルみたいなのを、もってこられた。

「医療キットでしょ？」

「………まあ持ち運びは可能だからいいが………これって、怪我人や、
病人ほうり込めばいいわけ？」

「うん。入れてくれれば、自働診断、治療までやってくれる優れものだよ」

まあ場所がとりそうなのが問題か…

「外部操作でロックも可能、また栄養補給等もしてくれて、
覚醒させなくとも、カプセル入ったまま生きられるよ」

冷凍カプセルそのものかい!!

「……千年とか？」

「無理。中のひとが老衰する」

「基本は治療で……って事が……」

「バルディエル」

解析……あ、プラント同様、作るにはちょい時間かかるか……
解除

「何セットあるん？」

「とりあえず50」

「じゃあ40もってくか……あと……名前、医療カプセルだな……」

「医療キットだって」

「……わかった」

けど、現場での治療に場所とるなあ…と思ったりして…

ホバートトラックの荷台に固定すれば1つ詰めるか…

日本の2tコンテナトラックで1基

11tサイズで2基つめるサイズだなあ…

全部ほうり込んだ。

あとはシェルター清掃か…秋葉のドンキでかった生活必需品を残り
9個のシェルターにいれ…

水と保存食、日本の災害用、もったし…
忘れ物はないかな？

「マスターハンカチ」

「サンキュー、あ、11号くる？」

「マスター本当？」

「今回の行き先は多分必要だと思っからな…どうだ？」

「うん！…いきたい！…！…いくいく！…！」

「おい…11号が」「いいなあ」「あとでしめる」

「みんなーゴメンねー」

「マスターぼくちゃんも」

5号…問題児がきた。

「お前は駄目つてもくるんだろ…機械vsの世界でないから勝手にしろ」

「マスター大好き」

5号が抱き着いてきた。

〓 廊下 〓

まえからヒルダさんがきた。

「あ、カオル君」

「ピダンせん、おはようございます」

5号と、11号がひそひそ通信しあっている。

「襲え襲え」

5号、帰ってきたらohanaashiだな。

「少しお願いある「襲うは不可」うん、そんなんじゃないわよ……」

「…なんです？」

「わたしの部下の、追跡調査お願いしたいんだけど……」

「部下の？」

「ええ、ほら、マギー達の様子からすると……」

「あ……」

(ティターズに自白剤つかわれ、精神再起不能になってたよな……)

「うん、調べてみた方が、良いかも知れませんね……リストとか用意
お願いできますか？」

「ついでに関係者辺りも……」

(そういえばファの両親も……劇中、連れ去られて、そのままフェ

「ドアウトだっけ…」

「わかったわ…早めに」

「あ、時空間移動可能なので、ユックリ目でも大丈夫かと…」

ただし、パラドックスが怖いので、無理な改編はできない…

まあ一回ミスったのを再度助けようとしたり、
本来その時間がない武器等で…

ようは今生産中のを過去に送る…

「よろしくね…部下達の事お願い」

深々頭下げるヒルダさん…

「じゃあ、ちと別世界トリップしますので……後程」

その場を離れる…

(リストでたらキリマンジャロか…グリプスだな…で記録調べて、
助けられるなら…か)

〓 〓 副司令執務室 〓 〓

コンコン「副司令」

「どござ〜」

シユン

「あら？今日はコバッタ連れて？」

「ええ、15日には戻りますので、ガンパレードの世界に…」

「……メタルマックス3の世界でなく？」

「はい、機械化歩兵の強化というか、生身での戦闘がなくせるような、

強化装甲ありそうなので……」

「どんな世界なの？」

「このことになりよったりですね…ただクローン技術というか、人工受精が発達してて、物量には対抗できてる世界です」

「物量…このことどっちが？」

「確か向こうの方がすごいです。が、こっちと違うのが交渉できる対象がいた…ですね」

「成果報告たのしみにしてるわ。いってらっしゃい」

「幻影”…”世界扉”」

姿を蚊にし…扉を潜る

〓 〓 ガンパレードの世界 〓 〓

現地 1月3日午前6時

扉を潜ると…

人の営みの街だ…

ガンパレードの世界の日本は比較的現実世界に、にている。

ただ、想定通り榊ガンパレの世界ならば九州は、同盟幻獣領となつていてる。

同盟になる前は、山口から侵略があり、岩国でなんとか要塞化で抵抗…

まあその要塞も地下モグラ要塞…

奇天烈岩国参謀の発案の基地で、

とにかくモグラで大型種を仕留め、小型種を吸収殲滅…という戦いだった…

その後九州まで再上陸、
しかし、不利になり、兵站が崩壊しかけるも、
ハ政府側のプロパガンダを信じた、軍の出兵により限界点まじかだ
った」

幻獣側の勢力争いで同盟者を見つけだし、見事に一発逆転は成功。
九州は同盟幻獣側に譲り渡す……

しかし、別の幻獣勢力が青森に進行してくる…の状態だ…

そして、ここは青森市…青函連絡船のメモリアル船が見える…

あっ…ていれば…

サイレンが鳴り響いている…そう、津軽強襲の日だ。

「シヤムシエル!!」

カオル達は一路北西に……飛び立つ…

side～ある兵士～

「早くトラックのつて…!!」

彼は焦っていた。

「おばあちゃんはやく!!」

「うんたらこといっても…」

彼は押し上げ荷台に押し込んだ。
コブリンが見えたからだ!

急いで運転席に飛び乗りアクセルを吹かす。

チェーンが雪をかむ。

コブリンどもがトラックを襲おうと手に斧をもち押し寄せて…

トラックは加速し、なんとか逃げだした…

彼は第1045独立混成師団に属し、ここ青森県津軽半島にての後方勤務についていた…

この正月3日は家…独り身だが休んでいたのである。因み彼は、九州戦線にて家族を失った…

また重傷を負い、リハビリをかねて、後方にあたる青森に飛ばされた幸運の身であった。

…爆音が聞こえ、飛び出たら黒煙がみえた…
借りていた軍用幌トラックの無線機を傍受したら、

師団本部から幻獣上陸、五所川原に撤収としきりに流れてる…

彼は独断で、付近の人達ごと青森市へ避難する事に、決めたのだ…

そしてそれは正解である…

彼が避難を決めなければ、ここの人達はコブリンの餌食になっていただろう…

M u v - L u v とガンパレを比較してみよう…

確かに物量という面では幻獣、B E T A は同じである。が…片方は毎日押し寄せてくる。片方はまだ期間があく…

そう、幻獣は半端ない物量で毎日押し寄せてくるのである。

そして代表的なのが今対面したコブリン…

戦線のあいた隙間を通り、後方にいる民間人、

また休憩している兵士、また前線でも後方から不意をうち…

1番人類を殺している幻獣であろう…

とにかく半端なく押し寄せてくるのだ…

武装した者が警戒した状態であうなら、まだ大丈夫だ…

が警戒してなければ、不意をうち…

そう、人間は永遠に警戒し続ける事はできないから、1番の脅威であつた…

トラックは県道2号を青森湾方面に進む…
山道に差し掛かり登り始める…

後方では…牛瀉町は幻獣の海に飲み込まれていた…

金木町では、かろうじて足止めできてるが…
じきに、のまれるだろう…

彼はそのまま県道2号をひたすら、はしらせ…
青森市内に逃げこめた…

そしてわかる事だが、彼のトラックにのった人達…
その地区での唯一の生き延びた民間人であった…

side がある兵士out }

「……………マスター……………」

「ああ、酷いな……………」

小説を読んでいて予想はしたもの…
幻獣に押し寄せられているのである…

カオルは牛瀉町上空にいた…

付近には燃え上がるトラック、避難してたであろう民間人の死骸、
四肢を切断し喜んでるコブリン…

つまりだ… 全くの無警戒状態での、
完全な奇襲の為なすべがなかったのだ…

「マスターいくの？」

「だな… 少しみてみよう…」

「グロ好きなんだね」

「5号黙れ… 見込みあんまりないよ」

「まあ一応な…」

カオルは最大限の警戒しながら町に降り立つ。

幻獣… キメラが側を歩くが気がついてない…

そう、幻獣も視覚による探知が基本なのである。

なを、このような時、コバツタとの会話は、耳にいれた小型無線にて、音声化している。

カオルからは口に仕込んだ無線で、小声をひろっている。

「マスター… あっちにハンガーみたいのあるよ」

「ひよつとしたらあるかもな…」

発見したハンガーに向かう…

第118警備師団車力高等学校と、標札にかかれてある。

やはり不意をうたれたのだろう、死体がちらほら見える…
左手にハンガーらしいのが見えた…

(ひよつとしたらある?)

ハンガーが反開き出動した形跡がない…

中を覗くと、整備士の死体と土魂号の単座型と復座型、栄光号が立
っていた…

整備士でウオードレスを着用しようとしたのか、素っ裸のもいる…

やはり不意をうたれ、出動準備も間に合わずコブリンに蹂躪された
のだろう…

大型種の進路にあたらなかった為ハンガーは無事だったようだ…

「マスターこれが？」

「ああ、巨人族…だったもの…殺され兵器として投入されるものだ…

士魂号は、機関に送られた人間が、副操縦系に使われている……

しかし、あるって事は、ここは芝村閥か？」

「マスターコピーしないの？」

「いや…流石に……製造方法きいたろ？」

「多分プラントでは作れないかもしれないけど、データとるべきじゃ？」

「う……やだなあ……」

嫌々ながら栄光号にちかよる……

「バルディエル」

~~~~~

俺は戦いたいんだ！！早く戦わせろ！！

奴らを奴らを踏み潰させる！！

~~~~~

「気持ち…わるい……」

同化した瞬間、機体が夢を見せてきた…

そう、俗にグリフというやつだ…

「土魂号のほうは…いいや…」

「なんで〜?」

「なんでつても…わかるだろ?生きながらこついった、機械にされちゃうんだぞ…」

そんな奴の夢なんか見たくないよ…」

「わかったよう…マスター」

「さてと、ワードレス倉庫はつと…」

ワードレスは専用施設で着用しないと、着れない制限がある。

アーリイFOX

スノーFOX

FOXキッド

テンダーFOX

可憐

武尊

があつた…

武器は…

零式ロケット

99式熱線砲

くらいかな…

可動式ウォードレス着用車両もあつた。

「マスター！！生体反応5体あり！！」

(…取り残されたか…)

つまりこのままだと死亡確実。

ここ車力町が人間勢力の手に戻るのは…青森戦終結後の事である。

(交渉してみるか…)

「ちつと行ってこよう」

「あい、マスター」

校舎内に入る。

建物内で至る所にコブリンがいる。

物を壊して遊んでいるようだ…

階段をのぼり、廊下にある一室で11号はとまった。

「ここだよ」

「中の様子は？」

「隅に固まって、息を潜めているみたい…」

けどね…」

そう、部屋を臨検している様なコブリンもいたのだ。
発見は時間の問題だろう。

「11号、5号シエルターに入ってたな」

「はい」「やだ」

で虚数空間のシエルターに入れる。

「バルディエル」

壁に同化し、中にはいる。

室内には5名の女性が隅に固まっている。

ここは共同寝室なんだろう…女性らしい物が沢山おいてある…

幻影解除し姿を現す。

「ひっ！！」「な…」「？」「…」「誰？」

「初めまして皆さん、あなた方に、別世界へのご招待にきました」

「別世界？」

リーダーらしい娘が聞いてきた…

「まあ、君らがおかれている状況はわかるよね…

因みにこの地域は、約20日位幻獣支配下になるんだ…」

「……………生きて帰れないのね…」

「まあそうだね…部屋漁り係のコブリンもいたし…」

「あなたは何故無事なの？」

「ああ、俺？」 幻影」

で蚊にかえ、元に戻す。

「まあこういった異能力をもつ、異世界人だからだ」

「私たちのところにきたの何故？」

「取り残された反応あったから…まあ最初にもいった通り、スカウトだけだね」

「で、私たちのいく世界って？」

「お、飲み込み早いね」と…」

ポータブルDVDをだしたところで

ガンガンガンバキ！！

ドアが破かれた！！

「パイル！」

光の槍を一気に

ザシユ

串刺しにする…抜くと…

絶命したコブリンは薄くなり…消えてゆく…

「あ、あなた…」

「ああ、これも俺の能力の一つさ…と、早くそれみて決断してね。ここに残るか、別世界についてくか…

ちなみに此処から助け出すは、異世界からの接触の影響あるから…無理だよ」

食い入る様にDVDを見はじめる。

その間、現れては串刺しにし…6匹目を倒したころ…

「終わりました…私たち4322小隊、そちらの世界に行かせてもらいます」

「みんなの総意？」

「……はい……」

「わかった…じゃあ荷造りしてね。こっちは戻れないからと荷造りし始める…」

12匹目を串刺しにした後…

「準備できました」

「うっし、じゃあシエルター内で、5日間程生活して貰うから、そのつもりだね。あと資料もあるから目を通しておくように」

「……はい……」

学兵小隊をシエルターに送る。

で、11号、5号を出す。

「マスター終わった？」

「ああ、スカウト成功…学兵だけどな…：…もうここら辺はいいだろ
う…休んだら、次の時間に渡るぞ”世界扉”」

潜ったあと…世界扉を見つけたコブリン。
好奇心いっぱいに向かうも…消えた世界扉…

不思議がるコブリン…

…

カオル報告

学兵小隊加入

アーリーFOX

スノーFOX

FOXキット

テンダーFOX

可憐

武尊

零式ロケット

99式熱線砲

栄光号（通常型）

可動式ウォードレス着用車両

作者「.....」

〇〇〇〇〇〇「どうちたでちか？」

作者「うん...まあ.....医療カプセルというかポットご都合かなあ...
とふと考えなおしてるんだが...
あと〇〇〇〇〇〇よ〇に変更で後書き準レギュね」

〇「ワイ」

あ号「むう...わしの立場が...殺す!!」

触手で潰そうとするが...

〇「なにちてるんでちか？」

あ号「な...なに??」

作者「あゝいったら、地球上の戦力だと核3発で、なんとか活動停

止できる、程度だと…

あと、あ号退場w」

あ号「え……さく……」

世界扉に引き込まれるあ号…

作者「さて…邪魔者はいなくなっただし…」

○「プラントたんいきいたら、あってもおかしくないかも」

作者「まあそういう事にしておくか…

まあ問題は訓練分隊だよなあ…

未設定……w」

どうなる？

多分ゲスト扱いか、活躍するかは後程…

そして○よ準レギュおめでどう

「ガンパレ世界」

現地1月7日午後2時

世界扉が開かれる…出てくる蚊3匹。

この場所はまたもや青森だ。

しかし、前回来た時とは環境がだいぶ変わっている…

そう前線が近いのだ。

部隊の集結地は青森や東青森で、
そこで集結した部隊はここ青森から、奥羽本線沿いの前線へと送られる。

553

奥羽本線の青森〜弘前は、コブやきたかぜゾンビの浸透で度々とまる。

機能してるのは、東北自動車道という状態、

津軽半島は幻獣の手におち、北海道との連絡する、青函連絡線は分断、

トンネル入口をコンクリで塞いで、北海道側への進入を阻止してるのである。

この青森駅周辺は弾薬、物資の基地として稼動してるが、

時たまコブリンが浸透してくる為、
至る所に警備の為の警察、憲兵、学兵が警戒している。

「異常なし」

と声を出して確認しあつ…

「ゴブリン！！」

バラバラ

コブリンの浸透を見つけたのだろう、掃射音が聞こえた…

(さてと…前線いくか…)

「シャムシエル」

さて、現在の状況だが、
戦線は突貫工事による、要塞化された陣地により形成され、
そこまで押し寄せる幻獣に対し、ハリネズミ陣地群が効率的に敵を
削っている。

このハリネズミ陣地群も複数あり、
主に中型から大型種へ、積極的に留弾砲、迫撃砲を打ち込む、高台
等に居座る陣地。心臓破りの階段等で大型種の進入がなく、時たま
のぼるコブリン等小型種にさえ気をつければよかった。補給さえ続
けば…

他には、建物内に潜み、ひたすら小型種削り専門、

中型大型に対しては隠蔽し、最後尾の一匹だけを始末する陣地。車両等で小型種の侵入をバリケードで防いでる。

これが1番多いだろう。

これもまた弾薬次第…

また、堅牢な建物は要塞化され、ある程度の誘引を引き受ける陣地等がある。

…やはり弾薬次第だが…

まあようするに、幻獣はしきりなしに押し寄せてくる。

はつきり無理だというのが、前線へまたは先の方へガンパレードの主人公達による突破補給が続いていた。

比較的后方のコブの浸透はあるが…は別の車両陣が補給にあたる。

網の目戦術による、幻獣勢力への削り作戦は比較的うまくいっている。

あとは反撃の狼煙を…になるだろう…

だいたいこのあたりの時間にカオル達は降り立った…

side がある兵士かなり前から

「撤収！撤収だ！！」

岩手川において、救援に駆け付けてたが、対大型、中型幻獣に対し

ての武器がなくなり、
大隊所属の、戦車も大破してしまった。

五所川原市死守…が第1045独立混成旅団に命じられた任務だっ
た…

彼の属する大隊は、粘りに粘ったが、
とうとう30名をきり…

五所川原市内で残りとともに潜んでいた。

…が、撤退命令がきた…

後方の戦線が形になったそうだ…

合図とともに 携帯できない武装等は放棄、
決めてあった輸送車の場所に…がない。

大隊に割り当てられた分の車両が、無事だった兵員輸送車が…無く
なってるのだ…

「持ってかれた!!」

「ちっ、グズグズしてられん走り抜けるぞ!! 周囲警戒だ!」

最初のうちはまだ弾薬があったから、正面のコブをうち、突っ切っ
た、

しかし、一人、二人と弾切れをおこし…

カトラスに頼らざるえなくなっただけからが…

ゴブリンに接近戦を挑まなくては、ならなくなり…

奴らは斧を投げてくるのだ、

かわすものの、投げてくる本数が違う、

十本単位だ…

かわしきれずに負傷し、負傷した者をかばい、また後ろからも襲われ、

「後少しで広田陣地だー!!」

しかし、その頃になると、一人、二人と……

「グワー!!」

左見ると、木原が頭にトマホークの直撃を横からうけ……

脱落してゆく……

広田がみえた…

団地を陣地にしている。

バラバラ

3階、4階部分から援護射撃がくる。

ありがたい…

団地の鉄扉はコプリンの斧は弾く。

団地に入り階段を駆け登り、鍵のかかってない部屋に入る…

やっと一息つけた…

「そういえば残りは？」

「先任も……」

大隊だった俺らは、撤退時には30名程…

しかし、もう、3人になってしまっていた……

side)ある兵士end)

〓〓 五所川原市広田団地上空 〓〓

現地1月7日午後4時

「ちてついたか……」

「JJJJ?」

「うん」

下には灰色にくすんだ団地が見える。

(来栖の可憐か…ほしいかもなあ……………)

降りて、同化、状況把握…解除し、少し休憩をする…

銃声が聞こえ始めた…5号棟からだ…

(そろそろかな?)

程なくして栄光号3号機、装甲戦闘車3両が見えてきた…

「こちら芝村支隊。そなたたちを救援にきた……………！責任者はどこか？」

装甲戦闘車が円陣を組み周囲を警戒、

好奇心旺盛なコブリンが車両を取り囲んでいるが、発砲は控えているようだ…

3号棟のサッシ窓が開き、ウオードレス姿の兵士が姿を現した。

「吾妻少佐は5号棟にいます。けど、ここ1時間、通信がありません。」

銃声やたらに聞こえてくるんで、無線連絡してるんですが」

「銃声だと？…ここにいる兵は何人ほどだ？」

「さあ……皆ばらばらに撤収してきたんで。この棟には百名ほどです。」

弾薬も尽きてきたんで、隠れているしかないんですけど」

「1時間後に救出部隊が来る。それまで辛抱せよ」

(が…半数近くは命落とすんだよなあ…)

装甲戦闘車が、5号棟の玄関に突っ込んでいった。それをケアするもう一両…

別の車両は警戒にあたっているようだ。

暫く建物ないで色々やっていたら…

突如銃声！！ミサイルが発射音とともに見当違いの方向に発射された。

(始まったか…)

「全員、すぐに建物をでて走れっ……！我々が援護する！」

各棟の玄関から兵士が、飛び出しはじめた。

装甲戦闘車のハッチから誘導してるのがいる。

三号機が後ずさった瞬間！！

グオオオオウウウン

大爆発がおこった。

あたり一面建物崩壊の埃、爆発による炎及び黒煙でたちまち見えなくなる。

強風が吹き流すと……

雪原には、崩壊した建物、爆風や、瓦礫の直撃を受けただろう…兵士が折重なって倒れていた…

コプリンは最初の爆風には驚きさがったが、獲物 獲物 とばかり殺到する。

装甲戦闘車の機銃が唸る。

またハッチからウォードレスに、身をつつんだ歩兵が飛び出し、近寄せられないように、

弾幕をはりながら、安否を確かめにはしり、息のあるものは車内に入れ始めてる。

そこに戦車砲の音がきこえ、

また栄光号1号機がみえた。

あたりの安全は確保され、引き連れていた20両程の輸送車に死体、
負傷者は収容され…
立ち去っていった…

(さてと…)

瓦礫の山となった団地群におりたち…

「11号、5号全力サーチ」

「イエスマイロード」

「
すぐに」

「生体反応微弱1発見」

(やっぱり…)

「どこだ？」

「こつちも反応微弱1」

「このト」

瓦礫を持ち、ほつりなげると…
足が潰れた女性兵士…カプセルを出し、急いで担ぎあげ、カプセル

に入れる。

「別の反応あり」

幻影で見えないが、腕は血だらけだ…

カプセルをロックし収納する。

5号のところいき、「下で良いんだな？」

「うん」

で瓦礫をほうりなげ、もうひとつなげ、もういっちょか…

(見つけた…四枝は満足に見えるが…)

カプセルをだし、抱き上げ入れ…収納する。

11号の側にいき下の瓦礫を無言でほうりなげる。
もう一人…発見。

右腕が潰れている女性兵士…

カプセルをだし抱き上げ入れ収納…

「あとは？」

「ここも！」

……
合計4人…いずれも女性だが、瓦礫のなかから救出し…

「……サーチ中……」

「あとは、死体なら何個か反応ありだけ……」

「死体は無理だろ？」

「確かに、時間経ちすぎてるから無理だと…体が無事なら、直後に限って可能性はあり」

「……サーチ終了…以上だね」

「じゃあ……」

無事な建物の屋上にでる。

カプセルを出し、日時を確かめた後、収納した。

(あとは、明日の朝方なんだよな……)

「とりあえず……休むか……」

虚数空間からシエルターをだし 同化、建物自体をルナチタニウム合金にかえ、中で就寝……

現地1月8日午前6時

まだ夜の闇が残っているころ、外にでて建物を収納。

弘前方面に飛びたつ。

個々からが人類の戦法を学んだ、敵知生体の指揮による反撃だった……

ゴルゴーン種、オウルベア種、重砲幻獣によるスクウェア……密集体型による、

砲撃の開始であった……

それまでは基本、ミノタウルスやデーモンによる強引な蹂躪突破、で思い出したようにミサイルを後ろからうってくる……だけであった……

そこに王によるペンタへの指示、ペンタへからの統率により……

人類はより一步崩壊への道をたどる……という事になる。

そこで俺は、生体ミサイルに襲われて混乱している場所からの、ス

カウトを目論でいた…

しかし…甘かったようだ…

「そっちはどうだ？」

「生体反応なし」

「ここも駄目か…」

生体ミサイルは降り注ぐと爆風と強酸の嵐を降り注ぐ…

「マスターまだ回る？」

「ああ………」

カオルは14箇所目に行くのを決めた。

（しかし…諦めて、次の時間に行くかな…）
最終目的の烈火が必ずある場所だ。

が、弘前岩木川南岸の砲兵陣地で…

「マスター生体反応微弱3！生きてる！」

駆け寄ると…強酸にやられたのだろう…

火傷でただれた状態で…顔もただれている人や、

髪の毛が抜けている状態や、

手もとけきつた

…女性兵士達がいる…

虫の息だ…

急いでカプセルを3つだし、それぞれ抱きかかえ…

カプセルに入れる。

彼女達を下ろした時ベリッと皮膚がつく…

カプセルを閉じ、ロックして、虚数空間に収納した…

カオルは人の皮膚がつき、体液だらけになっていた…

「11号、5号、もういいだろう…次の時間へ行くぞ」世界扉」

………

カオル報告

特に無し

○「たすかるでち？」

作者「助かるだろう……」

○「またオリキャラでち？」

作者「うんオリキャラだなあ」

○「せつていは？」

作者「ある程度は考えてる…が性格つけとかが…
だからごく一部がメインにくる程度」

○「にげまちた？」

作者「もちろん逃げたよ」

○「ところでなちて、ひるをきぼつえい？」

作者「んゝあの爆破で、
倒壊建物の下にいてもおかしくないし、と思ったから…さ…」

○「ひょっとしてなんごう、ちてました？」

作者「1番この回がしてたなあ…

次回はどう削るかで…というか、次回の結構時間とんでおかしい
だろが、原作にあるんだよ…まあ…んゝとおもったけどな…」

○「つまらないあとがきでちゆみまてんでちた」

第34話 ガンパレ編3 "・極東終戦"・に取得しに行きま

〓 〓 ガンパレ世界青森駅前 〓 〓

現地1月19日午前6時

世界扉を開くと世界は一変していた。

すぐに世界扉を閉じる。

辺りいっぱい、幻獣の海だったからだ…

万が一くぐられると厄介である…

青森駅周辺は、幻獣側に陥落し、

あたり一面焦土となっていた…

夜の闇ではあるが、

建物がないのだ…

もちろん青空市場等も…

地下にあった市場街は、瓦礫に埋もれている…

「シャムシエル」

カオルは一路八戸へと飛んでいく…

〓 〓 八戸 〓 〓

八戸近郊に差し掛かると、朝のまだ闇の中、
フォーンというホイッスルのような風切り音をたてて、
スキュラによる特攻が始まっていた…

この特攻は、操られ、自由の効かないスキュラによる質量兵器としての特攻だ…

西の王の得意技…

数にして百を下らないスキュラ…
対空砲火が上がり曳光弾が火線を形成し、次々と打ち込まれるが…

高空から勢いに乗って、突進していった。
中には進路をそれたのもいるが…

次々と市内で火の手があがってる。

質量で特攻し、衝撃、爆砕…

恐ろしいものである…

スキュラ特攻終わったあと…

市内各所では展開済みの陣地群が、壊滅的に陥っていた…

各所で悲鳴等がきこえる…

地上におりると衝撃の凄まじさがわかる……
ビルは倒壊し、直撃を受けた陣地では人は五体満足ではない……
手は飛び散り、内臓もみえ……首は転がっている……
それに殆どが炭化しているのだ……
また強酸を浴びただろう、者も外側にはいて死んでしている……
苦悶の表情の状態だ……

「マスター、生態反応微弱1、瓦礫の下」

「スカウト対象だな……」

瓦礫の山を一つずつのけると……

若い女性兵士が見つかった……

（四肢は無事か……内臓系かな？）

カプセルをだしながら思つて、カプセルにいれ、虚数空間に置いた。

「後は？」

「ここら辺近辺だと……表だけかな……後の生態反応は……」

つまり、救助される可能性がある……

案の定、救援部隊がきはじめて、救助活動をした……
が、瓦礫のほうは搜索活動をせずに走りさつていった……

市内各所がこんな状態である。瓦礫の下を時間かけて搜索するより、
より多く回ったほうが助けられるのである……

またウオードレスを脱いで瓦礫を除去や重機を持ち込まないと…
…だから危険極まりもない…

原作の一之瀬小隊は恵まれていた…

「次、回るぞ」

しかし、市内各所回り始めたが、中々瓦礫の下の生態反応は見つか
らない…
殆どが絶命していた…

そんな中、

「マスター反応微弱あり！」

11号がいった瓦礫をのけはじめる…

またもや女子兵士…やはり若い…を見つける。

カプセルをだし、これも内臓にだろう…いれ、虚数空間にイレ込む。

「次行くぞ」

しばらく回ったが、市内各所の被害箇所も落ち着き、
壊滅状態に陥った陣地は、
生き残りは別の陣地に混ざる等をし始めた…

が、回ってみたが、市内配置陣地はほぼ壊滅的…
司令部にワイトが侵入したのも頷ける話だった…

これいじょう、見捨てられた生態反応がなさそうなので、
市役所を目指した…
隣の補給センター内の烈火が目的であった…

潜り込み…

「バルディエル」

同化、解除

最大目的は取得し…

で、この世界の戦いに集中しようとした…

此処からは意地とプライドの戦いになる…

104号線及び45号線をめぐつての戦いであった…

市内の至るところにミサイルネズミが潜み、デーモンを狙いミサイルを放つ。

七十四式戦車の105mmが火をふく。

六十一式戦車の90mmも火をふく。

装甲戦車車の35mmもフルオートで放たれる。

上空では迫撃砲から放たれた留弾が、空をおおいつくす。

そんな中、火線をかき潜ったデーモンが肉薄し、パンチで戦車を潰す…

そのデーモンは他の車両にしとめられる。

しかし、物量にまさる幻獣は、次々現れる。

そのデーモンを一筋の風がないでゆく…

穴があき、崩れ…消滅してゆく…

前線より突出する為の栄光号による射撃だ…

栄光号が前に出ると圧力が弱まる為、その合間に弾の補給をする…
が、

栄光号が補給の為に下がると、また圧力が強まり…

人類にとっての消耗戦がまた始まる…

幻獣はいつきれるのだろうか…

「ねえ…マスター…」

「ん？」

「これ…本当に人類が勝つ話なの？」

「ああ」

「そうは思えないなあ……」

「どうしてだ？」

「だって、人類側の戦力って、生産しなきゃならないんでしょ？あと育成……」

「だなあ」

「有限じゃない、対して幻獣は制限なさそうだし……正直、人類が負けると判断しちゃうよ……」

「結論からいうとなんとか破綻点前に、ギャンブルに勝てた……というべきか……あとは、気力でだな」

「気力が……」

そう、11号の通り、人類は正直この場面を見ると押されている……

まだ砲撃種が市街地内に来てない分まだよいほうだ…

岩国のような、歩兵有利な防御施設もなし、

発見や逃げ遅れた歩兵に対し迫るデーモン…

また極めつけは新種のワイト…

遠目には味方と思え、招き入れて殲滅させられた陣地もある…

隠蔽を好む歩兵にとってもかなり危険な戦場であった。

が唯一の希望が、人型戦車でかける5121の属する芝村支隊、また司令部の荒波及び直下部隊である…

エース・オブ・エース…

驚異的な撃破数をたたき出している。

しかし、彼らは人である…人である限り…疲労は蓄積する…

補給の為に後方に下がったりしてうちに、圧力が加わる為、まだローテーションを組んでいる芝村支隊はともかく、

荒波司令及び直下部隊、が補給に下がると…

圧力がまし被害が増える…

つまり人型戦車による局所的な勝利、

それ以外はじり貧…の状態だ…

気力が持たないだろう……

が、それを支えるのが後方のロジテック……

熱々のカレーの仕出し等で兵士の士気を支えるものもいる。

ストーブをガンガン炊いて寝床をしき、疲労を回復させる。

俺は現場である兵士の気迫に圧倒されていた……

その兵士は足を負傷し、動けない状態にいた。いや負傷は甘い表現だ……足を失ってなんとか生きていたのだ……
ももから下が……
彼はももの切断部分に紐で血止めをしたのであろう、紐から先が壊死しかかっている……

その者は腹に爆弾を抱えて、ビルの中に隠れていた……

「マスターあの人……」

「ああ、彼は、自分の意思で……」

デーモンの集団が30程、その回りをワイト、コブリンが固まって、

ぬつと現れた…
彼のいるビルに近寄る…

ズシンズシン

モールのように縦隊を組む癖のあるデーモン、

先頭はやり過ぎして……

彼は目をつむって感覚で感じているのである…

ズシンズシン

縦隊の中程に差し掛かるうとした時、

彼の表情はニヤリとした瞬間

光を放ち彼は細切れになり、ビルは弾となり、縦隊に襲い掛かる。

近くにいたデーモンは爆発の餌食になり、その先にいるデーモンは、
瓦礫弾に貫かれる。

瓦礫弾は貫くと強酸を纏い飛び散らせる。

小型種は味方が盾となったが、デーモンからの体液がかかり、死滅
してゆく…

そう、彼は自分の身でもって、デーモン半数以上、小型種半数以上を死滅に追いやった。

また残ったのも体液がかかり、少なからず損傷を受けている状態だ…

「人の最後の気力…」

海の方では、同盟幻獣であろう、スキュラ集団が、レーザーを戦場に打ち込んでいる。

また、護衛艦集団からも砲撃がくわえられている…

海岸沿いの方は市街地内よりかは、マシな戦況であった。

砲撃種はそこで消滅している。

しかし、人類は追加戦力もない、そのような状態で、48時間を戦いぬき、大損害を与えたものの、

消耗に消耗を重ね、とうとう市街地内に砲撃種も浸透しはじめた…力負けしたのである…

その48時間の間、カオルは記録映像を残すのみだった…

スカウト条件にあうのが、いなかったのだ…

死ぬまで戦いぬき、

それでも人類は力負けしたのだった…

残った市内戦力は新井田川の対岸で…

逃げ遅れたミサイル歩兵が市内の至るところに潜む状態になる。息を潜め、時には待ち伏せ攻撃し、時にはやり過ごし

豊洲が人類側の出島の形になっていた…

市内にかかる橋は遠隔でとうとう爆破され、押し寄せる大群は豊洲に渡ろうと頑張っていた…

……撤退が遅れたのであろう、市役所がデーモンに目をつけられ…市役所ビルが殴られた！！

ビルが揺れる…

護衛してたであろう歩兵から、ミサイルが浴びせられる。

デーモンはいくらかは死滅したが、

ワイトやコプリンの集団が中に入ろうとして、入口入ったところで戦闘がおこった。

生き残っているデーモンの殴りの衝撃は凄まじく、倒壊の危機に陥る。

そんな中、栄光号1号機、3号機が戦車、装甲戦闘車を引き連れ…デーモンを殲滅。

「こちら芝村支隊である」

入口にいた小型幻獣を殲滅し、司令部要員を豊洲へと移送していった…

芝村支隊についてゆく…

豊洲の芝村支隊の拠点では、

凄惨な戦いを何とか生き延び、拠点にたどり着いたのである…

ミサイル歩兵の姿が沢山みえた…

が殆どが気力尽きたのだらう…

精神崩壊の兆候がみられる人もいる…

歩兵もこの状態、出っ放しの人型戦車のパイロットも疲労がかなり溜まって…案の定、

救助活動を行った一号機から壬生屋が担ぎ出されていった…

多分、ここに今共生派がきたら…探知はもつできない状態だと思う…
かなり限界まで来ているのだ…

「マスター、戦力的にそろそろというか、超えてるんでしょ？」

「ああ、また後方に下がるんだよな…」

夕刻…その豊洲でも戦いに戦いの疲労、損害の為、

戦線縮小、撤退すると同時に幻獣側の手に落ちる…

そして、人型戦車は出撃しては局地的な大勝利を繰り返す…の形で夜の闇の中になる…

現地 1月22午前2時

「マスター…本当に本当に勝つの？」

「た…ぶん」

「戦力として残ってるの、あそこだけじゃん。しかも、疲労の極み？」

「が…吹雪がやんで…からなんだよ…」

突如として、地上攻撃機の編隊が爆装でもって飛来する。

「ほらな…これからだよ」

「なんで、今までださなかったのかなあ…」

「ジェット燃料がないから…これがラストの大盤振る舞いだそうだ

…」

炎の絨毯は業火となり、なめつくす。

30分後市内西側から火の手があがる、

八戸自動車道路、340号線、11号線から、反撃の狼煙があがる。人類側最後の増援部隊、第三戦車師団、十四師団、二十一旅団が攻撃を仕掛けたのだ。

また、川の東側にいる芝村支隊も川を渡り始める…

市内は一気に乱戦模様になる…

弱いところは押され、強いところは蹴散らす…

デーモンも逃げに入る集団もいる…

そんな中…

「マスター西から…」

「西？」

「4号線南下中の幻獣、中型種、砲撃種編成、数1500相当、104号線に入ると思われるよ」

物語内にはない記述である……

「ちょっとまで、それなかったぞ……側面から、そんな数襲い掛かれると……」

「負けるね……」

そう、側面から攻撃をくらい、増援部隊は壊滅、芝村支隊だけになり……

芝村支隊は、八戸が支えられてたこそ、パンツァーカイルを仕掛けたのである。

神の悪戯だろうか……

(どっか影響あたえたんか??……)

与えました……

初日ね……あのゴブちゃん達……

またラストに視認してたし……

(……物語完結の為にしかけるか???)
幸い幻獣からは視認できてない……

はつきりいって、この集団が邪魔なのである……

「多分殲滅しなきゃ……駄目だな……仕掛ける!!」
カオルは4号線を南下してきている幻獣の集団へと……突入する。

「ブレード!!」

カオルは蚊の姿のまま飛行し、
高周波ブレードを道幅いっぱい展開する。
で、低空飛行に入る。

苦労して山道を進んできた幻獣には悪いが、長い隊列のまま……
1番機のように四肢とはいかないが、
足を刈り取るつもりだ……

幻獣にとっては見えない刃が襲ってくる……悪夢であろう。

精神波を感じた……

(ペンタか……)

「アルミサエル」

精神波を逆走し掌握。

そして…先頭にいたデーモンから…順にすねから下部分を、刈取られ…

前がなんか変だと認識する前に刈り取られ…

1500の幻獣の集団は、動けぬ運命となった…

デーモンはまだ前に行こうと両手を使うが、
オウルベア、ゴルゴーンは、足を失い、転倒し、もがいている。

カオルはとどめとばかり来た道を引き返す。

見えないブレードを縦にして…

真つ二つにさかれ、死滅する幻獣達…

そして、縦のラインをそれてなを生きている幻獣に、一匹一匹切り、
ペンタも切り…

4号線の戦いは終わる…

卑怯だと思うが、ペンタだけは厄介だった…

西の王への連絡である…

「卑怯王」

「……5号あとでohanasshiしてあげるから…」

そして、

「マスター海岸の方から…」

「始まったか…」

パンツァーカイルによる芝村支隊の北上…

物語の終着点への道のりの開始である…

「うっし、見に行くぞ」

「はい、マスター」

下田百石IC付近 現地1月22午前5時20分

星空の元激戦が展開しあっていた…

先祖返りしたかのような殴り合い…

またデーモンは四肢を切り落とされ無力化放置され…

嘆いているのであろう…で消滅してく…

が一号機が、倒れあわやというところで、矢吹大隊の戦車が援護にはいり、衛生兵がかけよったのみえた…

再起動…

気力の限界までまた戦う修羅になっていく…

しばらくすると……

幻獣側が気力尽きたのだろう…

耐え切れずに…一斉に背をむけ退却し始める…

追撃してゆく芝村支隊……

「マスター……」

「ああ、勝ったな…市街地へともどるぞ」

「はい」

八戸市街地 現地1月22午前6時半

夜が明けようとしている…

それまで市内各地で砲撃音があがっていたが…静寂が訪れた……

市内各所に隠れ戦っていた兵士が…敵の姿を探して一人また一人と瓦礫の中からはい出てくる…

そして途方にくれ味方の兵士の姿を見つけ、話あってる姿がそこらかしこで見える。

生き残っていた戦車からもハッチから索敵し…発見できてないようだ…

そして…大量の足音がこだまし、次いでエンジン音と銃声がこだま
する…

小型幻獣の大群がそれまで襲い掛かったのに、わき目もふらず通過
してゆく…

戦闘車両の機銃が火をふき、戦車も我に返ったように追撃し始める。

「終わったか……」

「ですねマスター」

「記録映像もとれた事だし…帰るぞ」

「イエスマイロード」

「世界扉」

ん？なんか忘れてるって？
まだ登場は無理です…
もう少しおまちを…

第34話 ガンパレ編3 "・極東終戦"・に取得しに行きま

作者「ガンパレ編おわったあああ」

○「おつかれさまでち」

作者「さて、この後が…国連総会へか……」
プロットをみる。

○「さくしゃたん、ふくせんかいしゅう」

作者「お、ああ………これか」

石橋「あたしもはやく出せ!」

作者「イッシー、呼んでないぞ今回は」

石橋「作者が別世界行きさせるから、あたしの出番がないじゃないの!」

作者「むう………お前A-01所属だしなあ……」

石橋「ねえ〇、〇からも頼んでよ」

〇「さくしゃ、いつしーさんをだしてあげてください」

作者「……次回でる予定ないぞ」

〇「だめ??」

作者「……」

〇「おねがい」

作者「………わかった！だぁ可愛いなぁ〇は」

と一気に抱き着きほお擦りする作者。

こわれました…

第35話 ガンパレ世界より帰還後 投稿日20110108

2001年6月15日

〓 〓 副司令執務室 〓 〓

世界扉が開かれ、カオルが出てくる。

「あらお帰り…田中さんが待ってたわよ」

「カオル様、お帰りなさいませ」

かなりホクホク顔…どんな取引になったのやら…

「と、じゃあ元の世界に？」

「お願いします」

「ねえ…田中さんがいるんだから、なんか名称つけ必要でない？」

「あ……なんか良い名称つけないっすか？副司令」

「そうね……この世界は天才香月の」

「却下」

「なによーいいじゃない……」

「真面目にお願いします」

「そうね……オルタネイティブ4完遂する世界、オルタ4の世界でど
う？」

「まあ……安直ですが、それにしますか……」

「田中さんの世界は、平和日本でどう？」

「どっかの政党みたいですが……意味は通じますね」

「じゃあ、決定ね」

「それでは”世界扉”」

で、アテンドし帰ってきた。

「報告ですが、目標の烈火ほか、訓練生が5名加入ほか、希望を認認してませんが、負傷者を9名確保しました。」

「あゝ紹介はいいわ、そつちでやって頂戴」

「それで大丈夫です？」

「ええ、ただし、部屋等はそつちで用意することね」

悩んで…

「なんとかなるでしょう」

「ところでパラドックスは大丈夫なんでしょうねえ？」

「今回の世界は大丈夫ですね、オリジナルヒューマンは一人だけですの…」

「一人だけ？」

「みんな作られた人の世界なんですよ…なので、DNA上、大丈夫です」

「…そのようね…あとでその世界の資料を」

「あ、映像なら今、渡せますが…」

「……頂戴」

「11号、22号に「クーパー」を、で22号に「ビジョン」再生してもらって下さい。

まるまる再生は90時間かかりますので、
高速をオススメします」

「わかったわ」

「自分からは以上です」

「帝国開発局から陽炎ありがと、とそれ以外のは？だって」

「あゝ了解」

「あとは、ないわね…お兄ちゃんの件は国連総会がおわってからね」

「了解です、じゃあハンガー行ってきます」

「B55ハンガー」

「イッシーと、B-01がいる…」

「カオルくお帰り」「少佐!!」

敬礼のB-01

「あゝいいよ…敬礼は…ただいま」

「ただいまです」

「あ、誰か5号にohanaashiよろしく」

「ひいひい」「イエスマイロード」

連行される5号

「さてと、まずは加入者だな…」

「あ、やっぱり?…女性?」

なんか、不機嫌顔な石橋

「まあなつと」

シエルターごただし、扉をつけ、

コンコン「着いたぞ〜準備できたらでてきてな〜」

「……………つくづくカオルの能力って便利ね」「どのくらいはいるかなあ」「地球？」

なんか後ろで喋ってる…

「あとは瀕死の人たちか…」

「え？瀕死？」

「ああ、プラント製の医療カプセルが、うまくいってればいいが…」

石橋は少し青ざめ、マギーは呼びにいった…

カプセルを並べて…

（うん、作動できてるみたいだな…）

潰れてた四肢は再生、火傷を負ってた人も再生。

髪の毛抜けてた人も生えそろっている。

顔がただれてた人も再生…あ、上半身素肌が…<バキュン>ピンク…

「11号、衣服!！」

「あいあい」

石橋横から覗き込んで…

「カ・オ・ルちゃん…これって…」

「強酸で火傷負ってた部分を再生したんだ……」

「え?強酸……素肌見えてるとこ全部?」

「ああ、酷かったよ……」

「そう……」

カプセルの状態…回復作業終了
覚醒可

石橋とB-01は訓練にもどっていった…

何か放置してるから伊隅さんが一緒にやってるらしい……

そのころシエルターから出てきた訓練生はMSに圧倒されてた…

カプセル覚醒モードに切替、半透明の蓋が開くと、

プシュー

と煙が下に流れる…

呻き声や、ここは？の音が聞こえ…

11号は、強酸の子に衣服（白衣）を置きにいった…

「隊長！！」

あ、広田団地のは知り合い？？

「ようこそ異世界へ…俺がB-01、異世界部隊の責任者である、
国連軍横浜白凌基地所属、渚カオル少佐です」

「幻獣は？」「ここはどこ？」「異世界かあ…」「人型戦車？」
「バンダム？」等等…

「え〜と…1番上は隊長さんです？」

「ええ、わたしが1番上のようです」

「あ、じゃあに、質問纏めて下さい…聖徳大使じゃないので…あと、この世界説明は」

ビジョンにDVDをながす

「こちらの映像をまず見て下さい。

自分は、彼女らを案内しますが、映像終わるまでには戻ってきます。また何か途中で質問ありましたら、この者に聞いて下さい」

「僕に聞いてね」

「は、はあ…わかりました…」

で、…とりあえず格納庫のC2に作っておくか……

「学兵さんいくよ」

学兵さんがついてくる。

「あ、ところで君達は…何になる予定だったの？」

「あたし達は人型戦車のパイロットになる予定でした」

「ん、人型戦車か……こっちでは作る予定ないから…どうしようか

……」

「目の前にあった人型戦車は？」

「ああ、モビルスーツの事ね」

「はい」

「……操縦方法違うけど……あれにのる？」

「……はい!」「……」

「ん〜まあ考えとくよ」

C2にシエルターまきまき、扉をつけて、仮設住宅にして……
学兵さん呆然中。

「じゃあとりあえず仮設住宅って事でここにいてね。

もう一組に説明してくるから」
返事がないなあ……

で兵隊さんへ……見終わったみたいですね……

「おわりましたね。何かわからない点ありました？」

「我々がスカウトされた……経緯をお願いしたいのですが……」

「広田団地の件は何処まで覚えてます？」

ザワザワ

別の兵士さんが、

「隊長、爆破があり生き埋めになった…までは記憶あります」

「うん、その通りですね。で俺は、芝村支隊が救出活動終え撤退後、爆破された建物の下からあなたの方4名、及び、翌日砲撃つけた陣地から3名を、その後、八戸戦線でスキュラの特攻で瓦礫の下敷きから2名救出し、瀕死から回復させたのですよ」

「つまり我々は…あのままだと…」

「ええ、死んでいましたね」

で医療ログを渡す。

みる中尉、またみんなにも渡す。

「ですので、あなたがたの世界での死という運命に影響しないよう、異世界にて、お願いできればと思っております」

「あなたが、我々を助けた…で間違いないですか？」

「はい」

「これでただ帰っても恩は返せない……一つ質問が…日本は幻獣に」
「ええ、あなた方の緒戦の踏ん張りが、時間を稼ぎ見事終戦し、青森は取り戻しましたよ」

八戸戦線の子たちから、

「あの状態で勝てたのですか??」

「ええ、記録映像も取れたので後で見せる事も可能です。
最後に芝村支隊がやってくれましたよ」
喜んでいる八戸戦線の人達…

「わかりました…私は、この異世界で頑張りたいと思います」

「隊長」「わたしも」「はい!」「砲兵隊も同意します」

「元の世界に戻りたい方は…いますか?」

……

「わたしは隊長についてきます!!」「同じく」「右に同じ」

「おまえら……1045独立混成旅団、桜井歩兵小隊は渚力オル少佐の指揮下に入る事を宣言します!!」

「八師団32連隊砲兵3名も、渚力オル少佐の指揮下に入ります!!」

「118警備師団佐藤千翼長も同じく」

「118警備師団石井千翼長も同じく指揮下に入ります！」

「よろしくお願いします」

「では宿舎なのですが、流石に所帯や機密情報などありますので、後ほど引越し等ありますが、格納庫の方に用意してます。11号案内よろしく」

ついてく、6名…？

桜井隊長、佐藤、石井が…

「死んだ者も…死ぬ前なら…なんですよね？」

「ですね、ただし条件が…いくつかはありますが…」

「陣地が生体ミサイルで爆散等やデーモンに潰されたは…？」

「そこから生き延びた人がいなければ、

直前にほうり込んで逃げれば…可能ですね…

そこにいた人全滅なんです？」

「ええ…」

「私たちの方も…」

(ふむ…体制整えたらいくかな?)

「ちなみに場所は…?」

「五所川原市内のビル陣地です」

「私の方は、指揮をとる前に…木造で…」

正月に友達の家に遊びにいったら…」

「私の方は、五所川原への移動中、小休止で離れたら、きたかぜソ
ンビに…」

(あゝ1月3から4日か…)

「わかりました…こちらの準備が整い次第…にでも…」

「わかりました…是非ともよろしくお願いします」

「お願いします」

「あの子達をお願いします」

隊長さん、佐藤さん、石井さん、去っていった…」

さて、格納庫状況は…と…

優秀優秀、工事終わっていた

これで戦艦の整備解体スペースも確保できた

で：MSハンガーのあるブロックの上下に、

1km×1km×45でまた空間を作るように命じた…

A1部の端側にループ状の移動経路及び、そのループの真ん中に反重力エレベーターをつけて…

上は居住区画、下は資材区画の予定…

とりあえず平和日本にいき、レオパレス系ワンルームマンション必要だな…と思い始めた…

先に作業つと

ホバートラック4両完成

陸戦強襲型ガンタンク20両完成

残り28機

コバッタは254号

ヤドカリは52号

つてとここで作業終了

試作品テストは明日だな…

ふと思いはじめて、11号に

「11号、ひょっとして…プラントって…ゴミを資源に変えられる？」

「うん。変えられるよ。あたり前じゃない」

…プラントまさにチートだ…

「テレビとか入れると？」

「基本、有毒気化する物以外は、それぞれの資源に分解される。有毒物質は適当なに変化されて出てくるよ」

(あ、産廃業できるじゃん…で、資源化して平和日本に卸せば……)

「生ゴミとかは？」

「発酵が進んで堆肥となって出てくるよ」

「人が…とかは？」

「前事故があったみたいだけど、ミイラ化して出た例もあったよ」

……立ち入り禁止区画化決定……

冷蔵庫等は戦艦に使われてる、アナハイム製が優秀だから、大型倉庫化すればよいか…

水循環や、空気システムは戦艦のを流用するか…

11号経由で 寮をコピーしてきます〜で伝えて…

「”世界扉”」

〓〓 現実世界 〓〓

「バルディエル、”幻影”、シャムシエル」

レオパレスをコピーに探しに飛び出しました。

(確か、3階建のが……あった)

「バルディエル」

同化、解除

で、お隣りの36階建のタワーマンションも…

「バルディエル」

同化……解除

そのタワーマンション施設の中にスパも入ってたか…

あとは、駅前のコージコーナーで買い物してくか…

コインロッカー裏に着地し、「幻影」「フランクリン・ピタンの
登場…

「いらっしやいませ〜」

「と、生シユーを…（何人だっけ??…）100個」

「は、はい…100個でよろしい…ですね?」

「はい」

「お持ち帰り時間は…?」

「2時間程で…」

「少々お待ち下さい」

裏に入っていた…

「会計よろしいでしょうか?11600円になります」

ポツケ内から虚数空間にアクセスし…

3枚だす。

「はい」

「12000円お預かりします……お釣り400円となります。……ただ今ご用意してますので少々お待ち下さい」
少し時間がかかってる……

「お待たせしました……持てますでしょうか？」
紙袋4個になったなあ……次は誰か連れてこなきゃな……

「うん……大丈夫ですね」

「ありがとうございます」

コインロッカー裏に入り虚数空間にいれて……

「”世界扉”」

シーン

「あ、あれ？”世界扉”」

シーン

(……？何故？……あ、消してなかった？？やば……)

「”幻影”シャムシエル!!」

誰かが潜ったら……になる……焦った

「バルディエル!!」
同化し、俺の部屋…

(あゝ消してなかった……)

「バルディエル」

一回家と同化し…

(内鍵しまってるか…なら、こっちから出たのは居ないなあ)
解除

で潜る…

|| || B55ハンガー || ||

「11号ただいまあゝ」
世界扉を消す。

「マスター、お客様ですが」

「ん??誰よ?」

「お兄ちゃん!!」

来ちゃたよ……

カオル報告

できにゃ
い
い
い
い
い
い
い

作者「さあ来ちゃいましたねえ……」

美幸「美幸です。皆さんよろしくう
年齢は14才、衛士やってます」

作者「うお……ちやうだろ！！ほれ設定書」

見る美幸……

美幸「あ、間違えましたあ、中学生です」

作者「まったく……お前の設定変えるぞ？」

美幸「え？どんなふうにく？」

作者「実は、男性だったとか……」

美幸「ん？むずむずする………／＼／＼な……キヤーー！！！」

股下を触った美幸。おさっし下さい。

美幸「な、…な………ついてるういいうい〜」

作者「ほれ、戻したぞ」

恐る恐る股下したを触って…ほっとする美幸…

作者「まあ、このまま男性でいったら、カオルとのが面白くはなるなあ………」

美幸…ゆらゆら構えて。

美幸「作者の馬鹿ー 純夏ちゃん直伝ドリルミルクーパーンチ!!」
打ち上げられる作者……

作者「純夏は…ま……ま……だ………」

作者チーン

第36話 来やがった……

投稿日20110109

|| || B55ハンガー || ||

「み、美幸……」

「ここ、凄いねえ……ガンダムのモビルスーツ沢山あるのね」

「世界扉」……いいからかえれ」

「え、なんでよ」

「あのなあ……」

「だいたいお兄ちゃん、たびたびこっちにきてるじゃない、別れを悲しんだの馬鹿みたいだよ……」

「う……」

「それにごまかす身にもなってよ、騒がしいっただらありゃしない」

「……何もいえねえ……」

「言ってるじ」

「うっせ」

「だから、今日はここにいさせてね、別世界のって興味あるじ」

「……………明日には帰れよ」

「わかったよ、お兄ちゃん大好き」
抱き着いてくる美幸。

カランカラン…

(ん……………イッシー…)

ズンズンズンムギユ

「カオルOHANASHIよ」

「ちょっとまってよ、おばさんだれ？」

「な、お、お、おば…さん?…な、なにこの糞餓鬼があ」

「ちょっとまったあ！二人とも落ち着け！！」

「ロリコン」

タバタ……

「お兄ちゃん、小学生に手をだしたの??」 「カオルさん、あなた
ロリコン???」

「ちょっとまったああああ」

カオスになる……

「え〜とつまり、カオルの、元いた世界の、生きていた時の妹さん
…でいいの?」

「お兄ちゃんと同僚でいいの?」

「ああ、二人ともわかってくれたか…」

「ところでお兄ちゃんって、ここでの何なの?」

「ん…… (そろそろ消灯時間か…) もう夜遅いから明日で良いかい

「？」

「……わかった、明日ね」

「あ、じゃあ、カオルお休みね。美幸ちゃんも」

「あ、まった！あぶないあぶない……」
虚数空間から4袋出す。

「イッシー、タバタ悪いがお土産で配っておいてくれ」
で、袋から学兵、兵士分の4パックはだして後を渡す。

「中身何？銀座コージコーナー??」

「洋菓子屋さん。ようはケーキやさんで、お土産はジャンボシュー
クリーム」

「え?……うんうん いただきます」

「全部は駄目だからなあ。60入ってるから、
副司令、霞ちゃんの分含めてちゃんとわけて配ってな」

「ありがとうね」

「さて、美幸は3つな」

(シエルターあいてたよな…)

「あ、美幸、お前はどつするん？シエルターは一応あいてるが」

「じゃあそこで、おねがい」

「こつちだよ」

シエルターに案内し、ガンパレ組にシユーをわたす。

で就寝。

2001年6月16日

美幸は夜かえるってききやしない…しょうがない…

「”世界扉”」

携帯メールが入ってた…第1便が午後には整います…か…

返信、

コンテナでおねがいします。

……

帝国側への連絡ルート聞いてねえorz…
11号、副司令経由で引き取りと、連絡先よろしく…と伝えておいた。

格納庫：ジオフロントに命名状況。

上下層ともA2までできたから、

下層は中層の資材置場を移動。

で上層はA1を寮、A2を維持環境系にあてる。

まずは寮の建設か…

データーのあるレオパレスを参考に…

1階層片面16部屋、両面で32部屋

10F建1階層400mm内装310mm

エレベーターを中央に反重力

サイドには階段

1SLKシャワートイレ付き、KはIHに変更

内装は、フローリング

テレビ、デマンド放送局Tuner、ベット、テーブル、ワークデスク、イス、ケトル

水、お湯か…屋上での湯沸かしに変更、

屋上タンクで、上下水道は建物の床下はわす。

「バルディエル」

実際に建ててみる…

通路はTの字で確保して… B55ハンガーから見ると逆Tか…

通路と建物間の空間確保すると… 3棟か…

1ブロックに960人…

十分か

建てたあと、鯖に寮の基本形で書き写す。

A2ブロックか… 下水再生処理施設をアレキサンドリアの利用して…

試しに汚水処理したしつこを飲んでみた…

いたって普通…

味しないなあ…

水循環システム完備と…

空気清浄化システムも設置と…

核融合発電所と…

その上の空間部分に共同浴場を作るか…

やっぱりでっかいお風呂だろ

男女ともに、50m x 25m

なんやかんやで風呂が100m100mきっちり埋まってしまった…

A3できたら 専用PXと食材倉庫つくるか…

「お兄ちゃん…コロツク?というか、やっぱり人外ね」

「コロツクだなあ……」

「ところでお兄ちゃん、風呂入りたいんだけど…どういけばいいの?」

「ん?……あ、」

スパ施設への進入路つけ忘れてました…

階段と反重力エレベーター2基設置。

「ありがとう 入ってくるね」
スパ施設要員として101号から105号までをつけました。
106号から110号までを維持環境メンテナンス要員につけました。

(さてつとシェルターから引っ越ししてもらいますか)

でC2にきて、あ、学兵さん荷解きしてた……

もういつかい荷造りして上層に寮できたから移動してね
で伝えて、

ガンパレ兵士さん達に移動して貰おう。

「隊長さん〜」

「あ、カオルさん」

「寮できたから、みんなに移動するよ〜って伝えて〜」

「わかりました」

きのみきのままだったから、早いなあ…

「あ、そういえば衣類……でしたね」

「はい…」

「後で調達してきます」

(美幸と…イッシーか？伊隅隊長にかりるか…？)

「ではこのエレベーターで上層に移動します」
フイイ

「つきました。で、この建物ですが、1棟320名住めますので、1番手前の棟の1階部分を使用して下さい」

「わかりました」

「各部屋ともDNA認証です。部屋のロックパネル部分に手をタッチして下さい。」

隊長パネルにタッチ。

『認証しますか?』

「新規として認証」

『居住登録済みでした』

「こんな感じですね。あと部屋に入って頂いて足りないものありませんしたら、

まあ衣類以外ですが、…

でこの後、衣類も用意しますので身長、股下、スリーサイズ、あと女性ですので胸のブラサイズの申告もおねがいします」

「わかりました」

「あ、隊長さんこの後学兵さんもくるので、彼女達も同様に案内おねがいできます?」

「了解です」

”世界扉”

田中さんの携帯コール中

『カオル様?ご用件は何でしょうか?』

「ちよいつと質問なんです、衣類等も揃えられます?」

『あ、はい可能ですが…それ以外の生活必需品も格安で揃えられます』

「もう少ししたら詳細でするので、メールでリスト送ります。何時間程で可能です?」

『そうですね……ブランドや、特別サイズなければ1時間程で可能です』

「わかりました、キャッシュで支払いを……じゃあ、後ほど……」

「ひろかったあゝ」

美幸が出てきた。

「少佐リストができました」

隊長がきた。

「このおねーさま……どなた？」

美幸、人によってかえるやつ……

「少佐、この民間人は……？」

「ガンパレから来た桜井……下を伺ってなかったなあ……歩兵さん。こっちは俺の元の世界の妹……開けっ放しにしてたら来たんだ……」

「桜井 真理です。よろしくね」
手を差し出す、桜井隊長

「堺 美幸です…あ、あの…握力沢山あるんですよ？」

「大丈夫ですよ」

恐る恐る手を出す美幸。

「ん？握力あるって??？」

「おや、少佐知りませんでしたか？私どもは幻獣に対抗するために、遺伝子的に改造された世代です」

「あゝなんかあつたな…」

「私ども第六世代は、握力平均400kg、骨格も強化されていますから…妹さんは潰されるんじゃないか？と思ったのよね？」
「うんうん頷く美幸。」

「ですが第四や第三世代もいますので…
そんな中で、手加減できないとゆう事は、ありませんから
リストを渡してくれながら喋ってる。

「だよなあ…リモコンとか押そうとして壊れたら…」

「ですよ」

「じゃあ、美幸、メール送って1時間後に向こうにいくから、そんな時送るからな」

「ん〜わかった」

「隊長さん後ほど〜」

(フムフムスタイルやっぱり良いんだなあ…)
メール作成しながら…ある意味役得？

「"世界扉"…ブラックメール…送信…スギューン」
「マスター壊れた？」

「や、やりたかったただだよ…」
(見られた…)

(さて、時間あるし…
烈火作ってみますか…)

可動式ウォードレス着用車両と烈火作成

（付け方は、まず素っ裸になり、トイレパックをつけて、ゴムを吹き付け？）

誘導ゴムがつき、乾く。

（次に人工筋肉パックをつけて）

11号に手伝って貰い中…

（で装甲着用か…）

つけて貰いました。

（さてつと初稼動）

パンチ

「うお……予想外だなあ…俺の体でこれだと…ガンパレ人以外、現状ムリ??」

パンチをだした時に予想外の力が腕にかかった。強化してなかったら…粉碎してた筈…

「烈火???誰が??」

「あ、隊長さん、俺です」

「少佐??だ、大丈夫なんですか?」

「ああ、まあ人外ですから」

(とりあえず…脱いで、また後実践かな…あと問題点は他の世界の
人でも使えるようにか…)

あとは着用時間の短縮か…)
脱ぐの手伝って貰いました。

最後のゴムは切るのね…

烈火の60km/h 700kgの意味わかりました。

(そういえば…エステバリス並の重量なんだよな……)

「ところで少佐、この烈火は…」

「あゝとりあえずテスト用に作ってみた、欲しい?」

「あ、はい!!是非とも!!」

「了解、後でつくつとくよ」

「ありがとうございます…！」

「じゃあ、少し出かけるから…美幸…！」
タッタッタ

「いくの？」

「ああ、じゃあ行ってきますね。11号、副司令にもつたえといena!”世界扉”」

” 現実世界 ”

潜ったあと 忘れずに消して…

「うんじゃあ、もう勝手に潜るんじゃないぞ」

「お兄ちゃん、メアド教えないと…また潜るよ」

教えました…

「じゃあな〜バルディエル」
同化、解除

「”幻影”シヤムシエル」
道におりると…
ブーン

メール着信。

『お兄ちゃん、人外だね』

返信はしないでおう…

田中さんの携帯に…

『カオル様？リストの分も用意できました』

「で何処に行けば良い？」

『当社の倉庫に用意しています。場所は住所が………になります。そ
ちらの携帯のe-zナビにポイント登録はしていますので』

「あ、じゃあ探してみます」

『はい、お待ちしています』

e z ナビ起動…

(MY地点かな？あ、フォルダに入ってるか…
住所の倉庫はこれか……うん徒歩20分か)

……

「 菱形商事第8倉庫 」

「カオル様、お待ちしました」

田中さんが、待つてましたとばかり、深々とお辞儀をしてくる。

「田中さん、で、いくらになりました？」

130,000円

虚数空間からお金をだし支払い。

「ありがとうございます」

「物は…」

「こちらのトラックにあります」

段ボール4箱

「で、帝国様あてがあちらのコンテナです」

海上型コンテナ22個がトレーラー積載でトラックに繋がれている。

(ん〜トラックは持ってくと…か…)

「海上コンテナのみ持ってきますね」

「は？」

コンテナを引き込もうとすると…トラックごとになった…
また出す。

「……コンテナだけ運びたいんですが……」

「……わかりました……輸送方法ってそれだったんですね…
てっきり、世界扉を大きくするのかと思ってましたが……」

「四次元ポケット〜もどきっすね」
ロック外れたのから順に虚数空間に引き込む。段ボールも忘れずに…

「じゃあ、あとはないです？」

「はい、以上です」

「あ、そうだ……産業廃棄物処理出来そうなんだけど……」

プラントの資源化を説明した。

「是非とも、プリント売ってほしいですね」

「あ、ミイラになるから危ないよ」

「……わかりました……そうですね……かなりお得、下手したらこちらから納金するかもですが……」

「まあ後で一回精度みてよ」

「わかりました」

「うんじゃあ”世界扉”」

「 副司令執務室 」

「ただいまっす」

「あら、早いわね、帝国への連絡は、無線か電話よ」

「あ、じゃあ…帝国宛先の持ってきたんですが…何処に持って行けば良いんですか？」

「ちょっと待つてね……………03-101-*****へ繋げて頂戴」

交換台経由らしい…

「あ、鳩畑さん？彼が、話たいらしいわ」

「変わりました、渚力オルですが…」

……………こっちに取りにくるらしい。

連絡先窓口確定しました。

先にガンパレ組に荷物わたすべくB55ハンガーへ…

荷物わたした後、呼び出しくらって1Fへ…

トラックがきたらしい…

コンテナをだすと 入れ替え作業…

各地の避難所に直行便とか…

しばらく移し替えにかかるので、MP1分隊に、空になったコンテナの管理を頼む。

〓〓ジオフロント〓〓

A3ブロックが完成したので、

PXと大型冷蔵庫と大型冷凍庫、医療区間を作成、

カプセルを20程セットし、

111号から120号までつけておきましょう。

……

カオル報告

今日は細々とした作業等いっぱいだった…

第36話 来やがった…… 投稿日20110109（後書き）

作者「皆様が期待してた事故フラグこれで一つ折れました」

美幸「初期プロットにあったの〜？」

作者「ないけど……多分動かすかな？と……」

美幸「まったく、誰かいれなきゃ」

作者「ん………というか入りそうなキャラがないんだよな……ガン
パレ組以外……」

機械化歩兵は貸出禁止令がだしたし……」

美幸「つまんないの〜」

作者「お前が入ったらよかつたんじゃない？」

美幸「設定知ってるから入らないよーだ」

作者「かわいくないなあ…まあしばらく本編でないからいいか…」

美幸「え???あたし衛士でしょ?」

作者「この国じゃ16才からなんだよ、お前は14」

美幸「ガーン……orz」

作者「だからお前に魔法かけて本編に……」

美幸「へ???あ、まさか…前回の後書きの?」

作者「でも年齢がだぞ」

美幸「なんだろ??」

作者「ヒント…阿部 高和化かも…」

美幸「\ \ \ ……いやああああ」

さて、無事に登場できるか？

注：ガンパレ編で難航し、初期プロットキャラ面に関しては崩壊
しかかっています…

第37話 国連総会 投稿日20110110 修正1

2001年6月17日

俺はH S S Tの機上の人となっていた…

国連本部で開かれる国連総会に出席する為だった…

また、副司令とビダンさんが搭乗している。

「しかし…物語の登場人物だったのね…」

「ええ…ですのでその世界での運命が決まっていたのですよ」

「でも、カオル君が救ってくれたから、こうして自由に恋愛が…」

「つつてなにシートベルト外してこっちにくるんすか!！」

「あらあら暑いのねえ」

「副司令、笑ってないで止めて下さいよ」

「恋路を邪魔して蹴られたくないわ」

「あの〜そろそろ突入なのでお座席に……」

「ね、ビダンさんもどっ……ちよ、何故俺の上に、シートベルト何故はずー!」

「突入しますよ!」

ギャアアアア

そんなこんなで、

「当機はまもなくジョン・F・ケネディ空港に着陸します」

「あ、ワールドトレードセンターがある……」

「あら?あなたの世界にはないの?」

「ええ、9・11というハイジャックテロで、トレードセンターのノースタワー、サウスタワー、それぞれにジャンボジェットが突っ込んで…崩落しました。確かそのテロで2700人近くが亡くなりましたね」

「……この世界で、おこる可能性は？」

「ん〜多分ないですね…アメリカの中東政策の失敗からひきおこった…ハイジャックテロですから、
そもそも中東にそんな余裕のテロ組織がこの世界にないですし…」

「余裕ないか…ある世界も考えものなのね…」

ビダンさんは蚊帳の外の話題のようだった…

H S S Tは着陸し、カオル達は国連本部ビルへ…
ビダンさんは町並み珍しいがっていた…

〓〓総会会議場〓〓

議長「お集まりの皆様方、オルタネイティブ4の最高責任者香月夕呼博士による動議に応じて頂きありがとうございます。では香月博士より、提議をお願いします」

「当オルタネイティブ4は、多大な成果をあげ、B E T Aの全情報及び、大反抗の目処がたちました事を報告致します」

「ばかな!!!00ユニット等!!!」「諜報では」「本当か?」「ざわざわざわざわ

ガンガン！！

「静粛に静粛に！」

ガンガンガンガン！！

おさまる議会

「香月博士…詳しく報告お願いします」

「まずわたしの理論をどうぞ」

「むづ、」「でまかせだろ？」「ざわざわざわざわ

議長に合図する香月

「発言を続けたまえ」

「はい、詳しくは5月上旬に…」

まあ要は、はしょってるが、

俺は 異世界理論による最大の能力者として説明をされている

さて俺の番か…

「俺がただ今の報告にありました、現在横浜白凌基地に居候している、異世界人の渚力オールドです。」

現在、香月 夕呼副司令の直属の部下として、少佐となっています」

「副司令権限で地位を与えました」

「それでは、自分について説明します。本来でしたらこの世界に来訪する予定はありませんでした…

けれど今は、この世界にてBETA駆逐する為に努力を惜しまない…事を念頭に入ってますのでご了承を」

「わが国の案いがい……」

アメリカのぼやき…

「自分は、元の世界において、神と呼ばれる存在に間違っで殺され、新たな肉体及び異能力を与えられ、別の世界に行く予定でした」

「神？出まかせだろ」「神様かぁ」

「では異能力についてまずは…パイル！！」

光の槍に変化させる…

オオウウ

ザワザワ

「ひ、ひかりだ…」

「この光の槍みたいなのは、自分の世界の話、エヴァンゲリオンでの敵となる、使徒と呼ばれる存在の力でした…
またこれ以外にも…ブレード」

高周波ブレードを発生させる…

ザワザワザワザワ

「等のちからもありますが、
……こちらからが重要です。自分の能力、物質変化及びコンピュータ操作：まあハッキングで、
オルタネイティブ4の諜報員として、地球上の全ハイブ内部データ
ー及び、
全BETAの情報、
あ号とよばれる地球上における指揮官の確認、BETA内では上位
存在とよばれます…
また、この世界には他惑星に10の37乗にも及ぶ上位存在が
いる事等を報告し、
レポートとして纏めていますので、お読み下さい。」

苦虫を噛んだ表情のアメリカ、
各国へ配られるレポート…

「なお、自分の能力として、あ号に定期的なスパイ行為を行っている…とも付け加えておきます」

少し間をおき…

「さて、他にも重要な事があります。

実はこの後承認を頂きたいと思っておりますが、異世界を渡り、そこでの技術情報、及び異世界人のスカウト、及び異世界の力による軍の作成が可能となっております」

「異世界？」「馬鹿な!!」
大きなどよめきがおこる。

場内が落ち着いたのを見計らって…

「ではまず、異世界を渡る力世界扉について説明します。

香月夕呼博士の論文、因果率量子論にも記載しておりますが、平行世界にいける力…がこの”世界扉”…です」
世界扉を出し、しばらくして消す。

「今のところ、自分が世界として認識している…所に限ってますが、それらの世界の力で作成したのが、これです」

B55ハンガー内MSの映像を流す…

また、演習実弾武器限定のを流す。

「これらは、自分の世界では機動戦士ガンダムという、テレビアニメシリーズとして流されていました…」

ガンダムの映像を流す…劇場版ガンダムのア・バオアクーのシーン等…

次の映像…ヒルダ・ビタンさんの第三話の回

「また異世界人のスカウトになります、この回で死亡する運命になるはずの、ヒルダ・ビタンさんをスカウト成功した事を報告、またご紹介いたします」

隣に招く…

「ご紹介に預かりました、元地球連邦軍所属、ヒルダ・ビタン技術中尉ともうします。わたしは、物語の中の一員として些かショックを受けましたが、

今は渚力オル少佐の元、この世界の為に、わたしの知能をお貸しい

たします事を、お約束いたしますわ」

もう一度ヒルダ・ビタンさんの登場シーンを流す。

「ありがとうございます。ヒルダ・ビタンさん」

アメリカから発言の許可を求める発言が上がる。
議長はカオルに判断求め、頷いて同意した…

「渚カオルさん、あなたは認識している世界に、渡れる能力があるんですよね？」

「はい」

「その中に、過去の我が国のアニメ等でもある、超空間移動技術…
いわゆるワープ技術がある世界はありますか？」

きた…ここからがオルタ5潰しだ…

「はい、ありますね」

トップを狙え最後のバスターマシン3号のスレイブ作動、艦隊が
ワープ撤退するシーン、
マクロス7がフォールドに入るシーン、
宇宙戦艦ヤマトのワープシーン等を流す。

「こ、これらの技術も……」

「はい、習得し、持ち帰り、再生する事が可能です」

「議長！！今すぐに渚カオルさんの協力をえた、オルタネイティブ5の発動を求めます！！」

「アメリカ大使さん、オルタネイティブ5についてですが、自分は参加しませんよ」

「何故ですか！！人類が生き延びる為には我が国の案しかない！協力するのは当たり前だ！！」

「自分の考えてる、前提条件から違いますね……何故1000万人だけです？」

「……人類種が生き延びれ、かつできるだけ乗せられる人数だからだ」

「残りの人を残して、BETAに全滅覚悟で挑み、また住めなくなる土地を更にふやして？」

「しょうがないだろ！！それ程BETAは脅威だ！！」

「大使さん……今までの他の世界の映像をみて何にも感じないので？」

「は？だから我が国の案が！！」

「どうせなら全人類脱出計画なら、まあそちらに協力してもよかったです…」

「そんなのできるわけが」

コロニーの映像を流す…

「このコロニーは宇宙空間にある島です、長さ30km直径6km…アメリカさんの案の1000万人すむ事が可能です」
マクロス7船団

「この超マクロス級移民船は、同じく1000万人もの人が済み、また7番目の移民船団です」

「お分かりかと思いますが、たった一千万だけ…はナンセンスです。ですのでオルタネイティブ5には協力いたしません。が、強行採決されたいんですよね？」

けど…可決したさいには、反対票を投じた国家の方々すべての皆様をのせ、地球脱出しましょう」
ザワザワザワザワ

「勿論、安全を考え、偵察部隊で長距離ワープ、探索後安全な星に…です」

アメリカ大使力無く座る…

そう、移住目的地の星からは、その後連絡が途絶えてたからだ…

「さて、ではオルタネイティブ4の発展による、

異世界軍団による各ハイブ攻略の承認、また即応部隊としての、独立統帥権の承認を頂ければと思っています。

なを、こちらの案には先程でした、スペースコロニーによる難民受け入れもかねての案になります。

難民の住むスペースコロニーの安全を確保も含まれていますので…」

そう、世界各地では難民の居住地の問題点が頻発している…

勿論日本でもそうだ…

発言を求める挙手がきた…大東亜連合からだ。

「渚カオルさん、そのスペースコロニーの建設や、そこまでの輸送は……」

「勿論、独立統帥権を頂ければ、異世界軍で受け持ちます」

「地球上の難民キャンプから、そのスペースコロニーまで？」

「はい、またスペースコロニー間や地球との交通の確保まで行います」

大東亜連合の方座る…

別の方、中華統一連合…

「その、スペースコロニー内の衣食住は…」

「食に関しては、農業用…というのが存在しますし、ある程度一つのコロニー内で独立できるようになります。」
住はコロニーで用意します。

衣は…最初だけですが、民間工場の確保も視野にいれています」
中華統一連合すわる…

アメリカから…
「国の中枢を先に…」

「いえ、まずは衣食住に困っている難民の方々からが先です」
アメリカさんすわる…
国をつつしたらオルタラだる…

後は、発言なさそうなので…

「ですが現在、技術は再生可能ですが、作成には資源を異世界に収集しにいかなければ…という制限があります。」

なお、今年の9月頃を目処にこの世界で作成可能との事で先に動いています。

一応早ければ8月を目処に農業用ですがコロニーを完成させる事が可能です」

「あと二ヶ月後か…」

トヨトヨ

「さらに、資源の確保が目処たちしだい、大量生産体制に入りますので、

まずは12月を目処に自分のいる横浜基地の隣、佐渡島ハイブ、甲21号を攻略したいと思います」

オオオ

「できるわけが…」

アメリカさんごうざい。

「議長」

副司令が発言を求める。

「香月博士」

「当オルタネイティブ4としましては、オルタネイティブ5の凍結を求めますわ」

「な、な、なにを…！」

ザワザワザワザワ

「静粛に静粛に…！」

ガンガンガンガン

「博士、どうぞ」

「このように、渚カオル君の協力があれば、地球から人類が死滅する事なく、

また住めなくなる環境にならず、BETAを叩き出す事が可能…といえますわ。

また引き続き、00ユニットの作成も続行し、更なる諜報員の作成に鋭意推進します。

よって、オルタネイティブ5の凍結を求めますわ」

「議長！！オルタネイティブ4こそ凍結、即時オルタネイティブ5発動を！！」

「だからオルタネイティブ5には協力しないって……」

ザワザワザワザワ

ガンガンガンガン

「え〜では、凍結決議及び発動決議ができましたので、まずは発動決議から入りたいと思います」

「議長」

「渚カオルさん」

「自分の条件の中に、反対国の救済がありますので、挙手での決議を求めます」

ザワザワザワザワ

「わかりました…よろしいですか？アメリカ大使」

「良いわけがないだろ…！」

「何故でしょうか？」

「公平でない…！」

「何故公平でないのです？」

「衆人監視の元での挙手投票なぞ…！」

「一国の大使であるなら、責任を負ってほしいですね…！」

「……………」

「議長いかがでしょうか？」

「では、投票に入ります…まずはオルタネイティブ5の発動決議からです。」

「発動を求める方は挙手で願います」

アメリカ…だけ、
かなり狼狽している。

今までアメリカ側だった国々も難民受け入れ等でこっち側にきたよ
うだ…

「発動は見送ります。次にオルタネイティブ5凍結決議を行います。
凍結を求める国の方は拳手を願います」

結構手があがる……
が、半数にたらない…

アメリカ、ほっとするが、

「議長！！」

「渚カオルさんどうぞ」

「期限つき凍結でいかがでしょうか？」

「ほっ？」

「12月末までの佐渡島ハイブ攻略、その成果がでるまでの凍結。
ハイブ攻略をもって、オルタネイティブ5計画の完全破棄で…」
ザワザワザワザワ

「わかりました。再度今の提案賛成の方々は挙手をお願いします」
アメリカ以外満場一致となった…

結果、異世界軍を率いるとの事で国連軍大将に就任することとなっ
た…

作者「まだまだイクヨー!!! ミコミコナス ミコミコナス かえる
…」

カオル「作者が壊れてる……」

石橋「ねえどうなるのこの物語?」

カオル「さあ?」

作者「お、ごりょうにん」

カオル「復帰した?」

石橋「……駄目かな?」

作者「いやあ… 国連総会ネタおわったからねえ
制限かかったたのドンドンやれるからさ
あ、ターミ○○○○ー連れてくるよ」

カオル「ネタバラし始めた…殺る？」

石橋「やっちゃんえやっちゃんえ」

カオル「ラミエル！！狙い撃つぜ！デッドエンドシュート！！」

大きい十字架…作者チーン

って解説しろよ…

作者「解説ね…っと今回のネタバラか…」

カオル「復活しやがった…」

作者「まあまあ、国連総会かだろ？

安保理かなあと思ってたんだけど、

やっぱり調べると国連総会ほかったんだよね…

まあそんなわけで通常総会で提議をする形になりました…

今回の話のネタバラはそんなもんです。あとは飛行機か、HSSSTか、どつちかなあと悩みましたが、HSSSTにしました」

ネタバラこんなもん？

作者「だね」

以上でした

2001年6月19日

「B55ハンガー」

「11号、L5は空いてたよな？」

「空いてたよ」

「じゃあ、そこにむけてチューリップーセットよろしく。

」コロニー群を建設しよう」

「そこまでの輸送はチューリップ？」

「いや、さすがにDFは…だから人はマストライバーかな…」

「この基地に？」

「だな」

マストライバー…確かVガンダムでジブラルタルに確認はされている。

コロニー引越会社のだ…

多分宇宙開発期からあると思うから、ガンダムの時代にもあるはず…

Vガンダムで、

「人類共通の宝なんだ!!」

の台詞を思い出していた。

それと、ビダンさんの依頼を消化しようと思った。

キリマンジャロ潜入 ジブラルタル サイド3の流れだ…

というか、俺自身が迷わずに行けるのサイド3や、サイド7、サイド4位しかないだろ…の話だった…

L2、L3、L1だから、

月にむかって直線上にL1、

月の裏っかわにL2、

地球と月の直線上の月と反対側にL3。

だから多分それしか2航法システムがないと…

L4L5は多分迷うはず…

また、サイド4に放置してあるコロニー何個か掻っ払うつもりだった。

でサイド3で開放型のコロニーの機種情報取得。

「あとは、コロニーのデータ取得と、月のグリップスでの放棄品の
涵獲か…な」

Z23話24話辺り…

「で帰ってきてガンパレ組の依頼こなして…か、メタルマックスいく暇ないなあ……………」

「マスター頑張れ、暇なし」

行く前に…

学兵さんには、桜井隊長とB-01、座学へのこつちの世界観、法律等々は、

副司令に文官を一名回して貰うようお願いした…

旧世代機の操縦席の変更及びシステムの統一で、リニアシート及び全天候モニター、イジェクションポットの採用、コクピットの無理な陸戦強襲型ガンタンクは、非球体型全天候モニターを。

また新旧問わず、衛士強化服への宇宙空間対応や及び網膜投射システムへの計器類等々、エステバリスのGキャンセラー採用。

撃震は、テスト待ちの状態で装甲をビルダさんに変更しておいた。

ジオフロント、資源庫はA列が仕上がったのでB列に…今のところ、追加予定なし。

なところで…昨日の帰りのHSS Tの場面思いだした…

== 帰りのHSS T ==

「あんだ最高！！アメリカのあの表情！！」
副司令酔ってます…ビダンさんドン引き…

期限付きながら、凍結に追い込めたのが、よっぽど嬉しかったのだろっ…

香月夕呼は久々に酒に酔っていた…

何しろ、帰りの便が決定次第、現地のトレーダージョーズ、で酒を買い込んだ程だ…

〓〓 回想終了 〓〓

とにかくばれてどうなるの、制限がなくなったが最高だ…

が危ないのもまだあるけど…

…なわけで、スペースコロニー及びマスドライバーの取得に、旅立つ前準備中だった…

「じゃあ、11号…Zガンダムの世界に出かけるから、副司令に言っついてな」

「イエスマイロード」

「世界扉」

〓 〓 Zガンダムの世界 〓 〓

世界扉からだと…

寒い冬山の真っ只中だった…

（キリマンジャロかな？

多分あつてる筈だけど…）

凍ってない湖がみえた…

ビンゴか…

「幻影」

蚊になり基地に潜入し始めた…

このキリマンジャロへは、リストを貰った人の経過を見る為に…なので、

今のところ戦闘自体がない…

(フォウが居るはずだからきいつけないと…)

気配は最小限、人事課を目指していた…

地下排水路から、なんかの施設に入り…
通路にでる。

前に、ティターンズ士官か？が角をまがってきた…

「なあ…フォンブラウン進行作戦にマミヤ・トウゴウ大尉いってんだぜ、俺なんか留守番なのによ…」

(無駄話してるから歩くスピードおそいなあ…)

「それよか地上の反乱軍殲滅作戦、あんまりうまくいってないんじゃないか…」追いついてしまった…しかも通路に広がりながら…手にあたるなあ…

「あいつら蜥蜴だからなあ」

「違いねえ、尻尾きりってか？」

(早く曲がれよ……………
ん？ここか？)

プレートがはってある…

「バルディエル」

同化、解除

中は職員がつめている……

さすがにこれで能力を使うとばれちゃうので……
しばらく時間を潰す事にした……

後ろの棚には誰も近づいてない……
棚をみていると……

愛人部隊…… 変人部隊…… 男食部隊…… 女食部隊……

(前はわかるが……後ろ3つは……)

開発課はファイルが多い……

懲罰部隊もまあ……多い……

等見ると……職員が一人二人とたち……

ラストの者が電気を消し……退出していった……

(さてと、やりますか……)

「イロウル」

リストに載っている245名を検索し始めた…

パイロット22名ジャブローにて死亡…

(セキュリティレベルが高いな)

命令書発見、

基地撤退時に、閉じ込めでの処刑命令。

(バスク大佐かよ…)

ん？しかし何故に女性だけだ？…

う、バスク最低、自分の愛人部隊創設に誘って断られたから、証拠

隠滅に送りこんだ？

カミーユの件はついでかよ…)

整備士二人も同様な処刑命令…

開発技師六名…

(あとは…処刑は免れてるか…)

ジャブローで処刑が30名ね…

そういえばファの両親は…?)

銃殺刑

(反ティターンズ活動により??)

おかしいなあ……

はあ?勝手に付け足してか…

好き勝手に人の命決めてんだなあ…)

ご愁傷様です……

(さてと…)

解除し

「バルディエル」

そのまま、フォウに探知されないようにさりげなく……

「フォウ!!フォウ!!どこ行つたの?」

(なんか…1番聞きたくない名前が……)

角を曲がると……

何故か見てるんですが…… フォウ・ムラサメが……

(何故に立ち止まって…こっちをみてる…)
横にずれると… フォウも横にずれる…

元に戻るとフォウも戻る。

(な、何故だああ)

一步後ろに下がり、フォウは一步前にでて…二歩下がるとフォウは二歩前にでる…

(見えてない!!見えてない!!)

フォウは物語のキーマンである為、仲間にする事もできないのだ…Zの最後にカミーユを守るキーマンなのだ…

カオルは180度まわると、駆け出そうとした。フォウのタツクルで捕まる。

(ななな……なんでだああ)

「うふふ。面白い 人がいると感じるのに、見えない、けど触ったら肌があるのね」

ぺたぺた触りまくっている…

本来身体がある場所なのにその奥の景色が見えるのを楽しんでるよ
うだ…

(やばいやばいやバイばれとるがな!!)

「フォウ!!どこなの!!!?」

探す声が近づいてきた…

なむさん!!

「アルミサエル」

精神を掌握

コマンド

立ち上げれ

俺を認識しない

今あつた記憶を消去

解除

（はぁ…とうとうやっちゃったかな…）
人生初洗脳であつた…

フォウは再起動すると…
回りを見渡し…
不思議がる。

「フォウ!!」

探している研究員の人の方へいった…

そついった騒動あるも、

脱出成功し、一路ジブラルタルへ…

「シャムシエル」

旅立つた…

辺りは闇夜だつたが一路北に行き…

地中海にで、そのまま西へ…

右手は美しい地中海であったが…観光は断念した。

一回北進し、西にいくと…

見えた…アーティ・ジブラルタル。

宇宙引越公社の所持する、マスドライバー施設兼飛行場だ。

そのままレールに着地し…

「バルディエル」

施設と同化し始めた…

客用シャトル

貨物型シャトル

貨物コンテナ

追加ロケットブースター

が見つかった…

客用シャトルはテンプレーションと同型タイプ

貨物コンテナは使い捨てタイプで打ち上げのみ

ロケットブースターは、MS用かな？と思う…

また、目新しくないが飛行場に2階だてジャンボと貨物輸送機があ

つたので、
それも取得…

解除し、
「シャムシエル」

空にむけて、加速する…

大気圏離脱…

月に向かってそのまま宇宙空間をすすむ…

二日目…

途中、大破し放棄されてるMSや戦艦を回収しながら進む…

結構あるもんだなあ…と

が、航法システムがないと迷いそうだった…

まだ月を目指して進んでるから、よいもの…

宇宙は広い、すぐに戦艦等も豆粒になり見えなくなる筈だ…

キラキラきらめきが見えてきた…

旧サイド5、現サイド4のコロニー群及びブルウム暗礁空域が見えて

きた…

現在はテキサス以外気密を保ってない破棄コロニー群の集まりだ。また、重力的に釣り合い、大破したMSや戦艦がいつぱいたまっている。

勿論小惑星等もだ…

過去にはここで茨の園とティターンズが拠点をおいていた。

ここが再開されるのは遙か未来F90の時代あたりだった…

コロニーは、ビームで打ち抜かれ、中から吸い出されたり…約40近くある…

しかし、ここで10億人位か…？

(外見上無事なのがテキサスだよな…)

開放型ミラーの観光コロニーを取得できれば…

(これが…)

「バルディエル」

少し時間がかかる…内部は、気密を保っているが荒れている…

解除

(あとは…6個程貰うか…)

開放型の自立コロニー4

農業コロニー1

密閉型工業用

拝借した

…27バンチじゃないよな？…

残骸は、核融合炉が生きてそうなのを探し、
回収しはじめた。

…

(そろそろ行かないとな…)

まだ心残りあるが…そのまま月を目指した…

…

カオル報告

マストライバー施設

客用シャトル

貨物型シャトル

貨物コンテナ

追加ロケットブースター

旅客飛行機

貨物輸送機

開放型観光コロニー

取得

壊れてる開放型の自立コロニー 4

壊れてる農業コロニー 1

壊れてる密閉型工業用

大破戦艦 28隻

大破MS152 内核融合炉燃料あり確認 140

作者「あーあ、初洗脳だね……」

カオル「作者なんであの場面でフォウを登場させるのさ……
絶対にばれるの決まってるじゃん!」

作者「まあ多分1番強い感性あるの、あの子とラリアだろうしね、
プルやらと比べてもフォウの方が上かなあ?と……」

カオル「しかし、彼女いいにほいしたなあ……お持ち帰りしたかったよ……」

作者「ん〜多分本人は無理だけど持ち帰れたかもね」

カオル「え??……あ!!そうか!!あれだね」

作者「そうあれだよ」

カオル「……けど魂の問題とかあるんじゃない?」

作者「だろうなあ……となるとだいたいテレビでたニュータイプは特にNGなんだよね……」

カオル「女性のキャラは死亡しても最後に何故かでてくるし……」

作者「だよなあ……野郎のニュータイプはZでは特に少ないしね……」

持ち帰りできるニュータイプ談議は続く……

第39話 Z編5 "ムーン・アタック"が迷って??

3日目

宇宙歴0087 8月10日…

月にたどりつき…

(こっちの世界の月は、開発で別世界だよなあ…)

月面にいたるところにエアカー用のガイドウェイが見える。

月面都市群

アナハイム

アンマン

エアーズ

フォンブラウン

グラダナ

等などがある…

多分それ以外もあるだろうが、作りが地下都市になりやすい為、正直わかりにくいものである…

注…多分あるだろうけど…

小説にでない都市は作っていいかな?と…悩みました。

ここかな?…

同化して、都市部へ進入…違いましたorz
(グラダナだああ)

「すみません、フォンブラウンへは…？」
近くの人に尋ねた。

「あああつち…？あれ？？誰が質問したのかな？」

うん蚊の状態へ不可視ね…だったから…さ。

さされた方向に行くと…
グラダナ方面の看板が出た。

ありがたい…こっちな…

同化し、上昇エアロックを同化して抜け、一路フォンブラウンへ…
グラダナからだとちょうど真裏、反対方向にある都市だ…

急いでガイドウェイ沿いに進む。

すると…月面近くを並走するアーガマとラーディッシュが見えた…

(お…まにあつたか???)

ランチがラーディッシュから出はじめた…

(間に合ったようだな…となると…この後、百式が出るんだよな…)

百式がカタパルト装着状態でデッキにスライドしてきた。

そのまま…若干屈み込み腰になり、

ラーディッシュから百式が射出される…

フルブーストで前方の方へ…

ラーディッシュでは続いてネモが射出されて行く…

宇宙空間専用だが、アーガマに比べ、MS運用能力は高い。次々と射出されるネモ…

682

そして、ランチがアーガマに近づいたその時、上空をビームが通り過ぎる…

長距離ミサイルがフォンブラウンの外側に命中し、大爆発がおきた！
つづいてビームが周辺に…

(アポロ作戦発動だな…)

アーガマにランチが着艦するとともに、リックディアス3機が次々射出される…

次に、ガンダムMK2が…続いてメタスが出て、変形した。

最後に大人のお約束のZ…

射出されるとすぐに変形した…

(全員あっちの方向か…追いかければ、戦場か)
カオルは追いかけて、抜かしてゆくと…

先にラーディッシュのMS隊が、ティターンズの艦隊に踊りかかろうとしている…

各戦艦から対空砲火があがっている…

(ド派手だなあ…んゝ12隻??.となると約120機はいるか…)

動きがとまったネモが爆破…大きな塊が落下していく…

ムサイ改からハイザックが接近してきた…

(そろそろ月面美味しそうだなあ…)

月面には大破や放棄されたMSが転がり始めた…

カオルは月面におりると、回収作業に入る…

(結構脱出してる機体もあるな…)

撃墜されてる機体の約3割程が…
爆散は脱出はできてるのが珍しかった…

上空をみるとアーガマMS隊が乱入していた。

(お、リックディアス、mk2…Zもきたか…)

ティターンズ艦隊へZが襲い掛かる。

(Z頑張れ!!)

結末を知ってはいるが、その間に、
サラミスやムサイ改を何隻落としてくれるか…
をかなり期待してた。

(…2隻…ムサイ改とサラミス改1隻か…)

Zは、背面になり…ハイザックを撃墜すると変形し、一回離脱した。
メタス救援に向かい始めた。

(戦艦はまだ早いなあ…捜索にくるかもしれない…)

リックディアスが、アレキサンドリアに、向かって行くのが見えた。
…背面ビームバルカンでハイザックを撃墜…

もちろん落下地点で回収しに

テイターンス艦隊から突出したドゴスギアからMS隊がではじめた。
ガブスレイやマラサイが見える…

（確か、ドゴスギアはこの後、一番乗りで制圧する筈…で次回の話
の途中で離脱だったよな？
だから制圧したあと同化で情報回収か…）

Zがサラミス改を撃沈させ…

（これで5隻目）

ドゴスギアのMS隊にむかった。

フォンブラウンから防衛隊のジム2があがりはじめた…
が、次々おちる…

（さすがにガブスレイ相手はなあ…）

もちろん、パイロット生存機体以外は回収…

Zと百式がビームうちながら接近、
先に百式がジェリド機に襲い掛かる…
Zはサラと…印象薄いやつとの巴戦にはいった…

その最中、ドゴスギアが上空を通過するかしらないかの時、

……Zが動きをとめた…

（確かプレッシャーでだよな…けど、そこまで感じるのか？
ヒルダさんが撃たれた時と比べ感じが…）
そのまま、ドゴスギアが通過し…フォンブラウンへ…

マラサイが動きをとめたZをさそうとするが…やめた。

ジェリドの命令がはいったからだ。

（でもさ、ここでさしちやえば…物語おわってたよなあ…）
現実的にみterると馬鹿らしいものがある。

掴みあいしてた百式とジェリド機…

ガブスレイの隠し腕を作動させ、百式を押しつけ、

動きを止めてるZの元へ、ガブスレイが襲い掛かろうとし、百式
が追撃にかかる…が、

下方向からビームで百式の腕が飛ぶ！！

（げっ！！）

ダッシュで下がり…煙があがる…

動きをとめて実況観測してたら、墜落してきた機体があった…
危うくATフィールドが展開し、ばれるところだった…

煙がはれると…

（あ、あれ??）

見失っていた…

(えーと確か百式とガブスレイ2機だったよな…月面に押し付けられてるんだっけ??)

月面から浮かび…

(どこだあ?)

キョロキョロ…

完全に百式見失っていた…

月面に下がり、回収作業に戻り始めた…

さっき墜落してきたハイザック…パイロット死亡…回収、

(あとは…あ、)

マウアー機につらされた百式、百式に捕まれてつるされているジェリド機をみつけた…

マウアー機がビームサーベルを突き立てようとした時、Zのビームがすぎる。

百式、マウアー機が怯んだ隙に、プロペラントタンクを外し、離脱し…手にもっていたジェリド機を放して、落とす。

Z、百式の元に駆け寄り、離脱しはじめた…

(確かそろそろドゴスギア着陸したんだっけ??)

回りをみると、後退し始めてる感じにみえた…

さて回収回収…

街の施設が戦闘の被害で爆発してるのだろう…

そんななか、

墜落しているMSを次々調べて、回収作業の続きにはいった…

墜落している戦艦は…そろそろ大丈夫かな?で回収…

あらかたおわったあと…

死体を抜きだす…

(皆さん方の機体大切にに使わせて頂きます。ご冥福をお祈り致します)

そして、港の方へ赴く、

ドゴスギア及びガブスレイのデータが目的だ…

(ただシロツコがなあ…フォウの二の舞はゴメンさ…)

そう、奴だけが異様に勘がいいから慎重に慎重に……

まずは港のシエルターに同化、離脱……

(ドゴスギアは、っと……)

みつけた……

なるだけ何も考えず……

「バルディエル」

同化……艦全体にひろげる……

掌握

格納庫にガブスレイがあったので、勿論、機体情報取得。

シロツコは行為に夢中になってたから、気づいていない模様でした。

あんまり観察するとなればそれなので早々離脱……

あとは……ムサイ改とチベ改を見つけ、

同化、解除

(なものかな?)

「世界扉」

.....

カオル報告

機体情報

ドゴスギア

カブスレイ

ムサイ改

チベ改

取得

大破戦艦6隻

MS多数

第39話 Z編5 "ムーン・アタック"が迷って??

作者「月面都市にきましたああ」

香月「なんで月面なのよ！こんな非常識ゆるさない！！」

作者「あ、博士、後書き初主演ありがとうございます。まあ別世界のお話ですから……」

香月「はあはあはあ……まあいいわ……」

作者「別世界はなんでもありませんよ……あ、自分の世界でも東芝エレベーターさんが、月面都市について実際にプロジェクトを立ち上げたり……」

まあどうやったら再現できるのか？ですね」

香月「へえ……面白そうねえ……それ見せなさいよ」

作者「<http://www.toshiba-elevator.co.jp/new/technology/c003.jsp> 多分携帯の方はググった方が早いですね。

月面都市 東芝エレベーターで検索すると出ます」

面白いページがたまたまヒットしたので後書きに

第40話 Z編6 "反撃"にて……

投稿日20110

ユニーク250000…

ありがとうございます(´▽｀) 3

四日目

〃〃 グラダナ市内の何処か 〃〃

世界扉から、6日後の世界に降り立つ…

同化……………掌握

流石に市内施設レベルだと1時間かかる…

アーガマ、ラーディッシュはもう出撃した模様だ。

(さてと、急がないとな…)

今日の目標は吸い出される市民のスカウト及び、いつも通りの回収、及びZガンダム、メタス、Gディフェンサーの機体情報の回収である。

694

ついでに、月面走行車両も取得。

一路まうらのフォンブラウン市へ飛び立つ。

(道路というガイドラインがあると、助かるなあ…
迷わずにすむし)

流石にアーガマは道路沿いには進んでない…

そのままフォンブラウン市についたので、月面で待機した…

ハイザックの落下まちである…

しばらくすると遠くでビームの痕跡がみえた…

(始まったな…)

ウウウー

空襲警報が流れた。

一斉に灯火管制、また即応部隊だろう…ハイザック、マラサイが出る。

メタスがひっしにメッサーラから逃げてきた…

メッサーラのビーム…都市部にあたる…

(見境ないなあ…)

これで、まだ吸い出されてない。穴が開いてないからだ…

mk2がハイザック追撃してきた…

(こいつか)

ハイザックが撃たれて制御不能!!

落下してきた…

（この採光窓だな！！）

ヒューンバリーン

強化ガラスが割れ市内にハイザックが落下…

一斉に空気が吹き出す。

吸い出される市民や施設等…

黒髪ピンクのミニワンピースの女性

茶髪のスーツの男性

ブロンドのミニスカ女性

紫髪のスーツのビジネスマン

（間に合わない…）

できるだけ虚数空間のシエルターに引き込んだが、

それ以上に宇宙空間に人、物が吸い出されていく…

助けるのが間に合わず、カオルの引き込みの射程圏外にはきだされた人は…

苦悶の表情を浮かべ…死んでゆく…

またある女性は、肺が破裂しただろう…

シャッターがないのがおかしいのである…

まだ救助の途中にマラサイが、ガラス破れた箇所、リックディアスを押し込んできた。

人がベチャツとこびりついたぞ……

続いてひっしに逃げてるメタス、追跡してるメツサーラが……

あのメツサーラ……尖端部分で人を真つ二つにするのやめなよ……

市内からの空気流出がやんだ……

助けられたの30人程か……

けど、それ以上に助けられなかった人がいる……およそ正確な数わからんが200名程……

中には赤子を連れてた人もいた……

外壁に事故で穴が空く……宇宙空間では大事故である。

と同時にネモが落下し爆発……

別の箇所にも穴が空く……

ハイザック2機がガラスから市内にはいる……

別の破穴から、ネモ、ハイザック……

ネモ3が……市内へとはいる……

(追ってはないのに……?……あ!!あの部隊か……)

そう最後の方に発電施設を押さえられた……がある。

多分その押さえる為に破穴から市内に入った部隊であろう……

流石もとエウーゴ拠点。

しかし…内部、都市上空とも乱戦模様である…

これ別の箇所でなんかあってもおかしくないなあ…

一応市民はシエルター内にもう入りきった筈だった…

市内では戦闘の気配なくなった…

内部にはいったハイザックはでるか、鎮圧されたのだろう。

メッサーラはとっくに獲物を求めて上空でネモに襲い掛かる。

墜落するネモ…爆発でまた外壁に穴があく…

もう空気がないため吸い出しはなかった…

別の獲物へメッサーラが襲い掛かろうとした時、

ウェーブライダーがみえたため、そっちに目標を変えたようだ…

逃げるウェーブライダー…追うメッサーラ…

破穴を見つけ市内へ進入するウェーブライダー、勿論追って市内へ
進入メッサーラ、見かけたろう…mk2が援護の為市内についてゆ
く…

(確か、この後カミーユが搭乗すんだよな…)

メッサーラが外に逃げて…

戦闘空域へ向かう…

すこし間が開いて、アーガマの方へΖガンダムが向かう。

(確か、メタス援護とハイザックを3機を撃破するんだよな…)

都市部ではほぼ大勢が決まり、エウーゴがかなり優勢にみえた…

港のゲートがあき、アレキサンドリアや、サラミス改等が姿を見せる。

それをひっしに守るティターンズ…

アレキサンドリアから撤退信号が打ち出された。

(さてつとお邪魔しまーす)

アレキサンドリアと同化して、メッサーラをまつ…

一隻のムサイ改がエウーゴの襲撃に耐え切れず爆散…

またチベ改も爆散…

ムサイ改、サラミス改……

撤収できたのは、このアレキサンドリア含む3隻だけ…になった…

メツサーラが着艦してきた…

(いただきマース)

一部同化、解除

離脱し、「幻影」かけると、一路フォンブラウンに戻る…

月面で着地しているアーガマを指す為だ…

アーガマを見つけた…同化……

ブリッジではファが泣いている……

(最後のあのシーンか…)

格納庫には、Gディフェンサー、メタス、Zガンダムがある…

一部同化し、解除

機体情報取得した。

(さて、この後は説明とサイド3について完成情報取得と、もう一度ジャブローか??)

シエルターを出し、同化して中にはいる。

「皆さん始めまして」

キヤー化け物ーお化けー等すごい騒ぎになってしまった…

考えようよ…

いきなり此処は何処?と迷ってる人がいて、
ぼんぼん人が増えて…確か私は…?だったんだし…

「えゝ落ちつきましたね?」

「皆さんにご説明します。本来は死んでいた運命だったのですが、異世界を助けて頂きたいと思い、皆さまがたをスカウトしにきました」

ざわざわドヨドヨドヨ

人数が多く纏まってないので沢山の人が説明求めたり、なんで?とかの状態だ…

テンプレ神の状態がわかる…

「皆さま方、落ち着いてください。バルディエル」

で立つてる方の後ろに椅子をだす。

床に座ってる方にも椅子を出し持ち上げる。

キヤなど所々で軽い悲鳴があがるが、椅子が出たのでとわかったらしく…落ち着く。

「立つてる方々、椅子を作りましたので座ってください」

皆さんが座ったので…

横からドリンクテーブルを作って…

「とりあえず、これからその世界についてのビデオを流しますので…

あ、飲み物いるかたは手あげてくださいね」

で、映像を流し始める。

702

虚数空間からいろはす北海道版、やバリアースやまあ日本系のジュース類と、カートを出す。

手が上がった人がいたので、

「何が良いですか？」

「あ、じゃあ…水で」

「自分の世界の日本の北海道産のミネラルウォーターです。美味しいと思いますよ」

トクトクトク、コックン

「あ、本当」

そっからちらほら手が上がり忙しくなる……

そんなこんなで約45分の放映が終わり

「以上が、そのいつて貰いたい世界です。次に現在自分が作っている戦力等の映像を流します」

こっちはまだ短い……

自分の異能力で再現している技術等の説明だ……20分程……

「最後に、何故この世界で私達が？とおおもいになるでしょう……

実はこの吸い出される運命は決まっていたのです……

あなたがたは私の世界という、物語の話ですが、実在している人物です……

詳しくはこちらのアニメをご覧ください……」

Zガンダムの反撃を流す。

あ、カミーユさんだ……等の声もあがる……

「皆様がたの運命は……本来は死ぬ運命でしたが、あの吸い出しから助けられたのがあなた達です。

できればその命、最初の映像の世界を、救って頂きたいと思っています」

ザワザワ

「勿論お願いであって強制ではありません。

嫌だというなら全てを忘れてもらい戻す事も可能です。

ですが、世界を救って頂くために力を貸していただけないでしょうか？

よろしくお願いします」

ちらほら「わかりました」「協力します」

等あがりはじめた…

半数以上の方が同意…

順次にシエルターにうつしておく…

残りは「力になれそうもないので…」「恋人が…」等で拒否…が1番厄介なのが…

「わしは本来は死ぬ運命だったんだろ？死なせてくれい!!」

「助かった命粗末にしないで下さいよ」

「いんや死なせろ!!」

とりあえず、拒否の方々は忘却処理を済ませたあと、

与庄のある区画においていきました…

が、この人…ほんと問題だよな…

「ですから、忘却して都市に帰しますから、生きて下さいよ。せっかく助かった命なんですから…」

「運命には逆らいたくないわい!!」

「あなたはそんな世界に影響与える運命でなさそうなので、大丈夫だと思いますよ……ですから……」

「いんや、納得しない運命通り死なせろ!!」

「おじいさん……」

「頼む……」

(え???涙???)

「え……どうしたんですか?」

「お前さんが助けた人……あれで全てなんじゃろ?」

「はい……」

「なら……死なせてくれ……」

「拉致あかない……少し記憶を覗くか……」

「アルミサエル」

(……おじいさん……あの助けられなかった中に家族、しかも娘、
娘婿、孫がいて、おじいさんの誕生日を祝って……)

「頼む……」

「おじいさん……娘さんやお孫さんの為にも……」

「わしにとつて最愛のなんじゃ……吸い出されそうになった時にもう
少し手が届けば……」

吸い出されなかったと思う……
が、手が届かなかったんじゃ……

わしは、自分を固定したのを外して一緒に飛びだそうとした……がお
前さんが邪魔をしたんだ……

最初は家族が助かったと期待したが……
頼む……運命をまっとうさせてくれ!!」

(ここで、ただ単に……記憶を抹消しても……後に……か……)

「わかりました……最後に何か要望ありますか？」

「できればもう一度家族に逢いたかったのう……」

「わかりました…少しお待ちを”幻影””世界扉”」

〓 〓 別世界を経由して、フォンブラウン戦闘前 〓 〓

「こ、ここは？」

「戦闘の始まる前です…生きているご家族を見る事ができます。パラボックスがあるので助けられませんのですみませんが……」

「おお……」

「さ、ご家族はどちらに？」

「あ、ああ、こっちじゃ……」

案内されてくと…

店内でパーティー中であろう…幸せそうな一家がいた…

「おお……」

どうやらおじいさん泣いている…

そうであろう、ある意味残酷でもあるかもしれない…が、正直、俺

にはこの方法しか思いつかない……

空襲警報がなる……

「そうじゃ、この警報がなり、一応避難の為シェルターにいこうとしたんじゃ……」

「じゃがわしを思ってゆっくり……だったのが間違いだったんじゃな……」
店内からであるおじいさん一家……

「おじいさん？」

「ありがとう……もうこれで満足じゃ……いやこれ以上は辛くなる……戻ってくれないか？」

「わかりました”世界扉”」

〓 〓 別世界経由でZにおいてあるシェルター内 〓 〓

「もう、おもいのこしはない……さっさと死なせてくれ」

「おじいさん……本当によろしいのですね??」

「くどい……早くやってくれ……」

「わかりました……」ご家族の方を救えなく……本当にすみませんでした……バルディエル」

内装の物を固定……天井に穴を作る…

一気に空気が吸い出され…おじいさんも真空に…

あ・り・が・と・う………

(………きついなあ………ありがとう………か)

しばらく…カオルは動けなかった………

………

五日目

一気にサイド3を目指す………

サイド3のコロニーを取得する為だ…

ついて、

開放型の自立コロニー…

及び開放型の農業コロニー、

密閉型の工業型コロニーを取得し…

(駄目だ………)

「世界扉」

………

カオス報告

駄目です

作者「いつかは起きると思ったけどね……」

石橋「……こんな事が……」

まりもちゃん「……」

石橋「……で作者、あたし達なんで後書きに？」

作者「かいてて、俺もヘビーだなあとおもったんさ……多分たち直せられる候補筆頭組」

711

ヒルダ「さくしゃ、わたしは？」

作者「ん……多分好き勝手になりそうから自重かも」

ヒルダ「多分適任私だと思うけど？」

作者「むう」

石橋・まりも「そんなことさせない!!」

ヒルダ「まあわかったわ…ここは公平にいきましょう?…けどよくパラドックス起こさせなかったわよね…」

作者「まあな…もし過去に飛んで助けたら、重大なパラドックスが起きてたろうなあ…」

石橋・まりも「重大な?」

作者「ああ、基本的に現時点での運命を変えるのがカオルのやり方…あとは証拠が残らない状態とかね…」

マギー「あたしらの事ね?」

カオル「ああ、でおじいさんを助けて助かった人の中で助かったのは一人だけという認識があった…」

石橋・まりも「確かに…」

作者「それで短時間の内に同一世界の過去に戻り助けると???」

石橋「わけわからなくなる!!」

作者「よく言い切った…ようはそれがパラドックスの発生だ…」

まりも「でもカオル君が助けた時点に戻って、助けられなかった人を助けたら？」

作者「つまりやり直しね…は多分パラドックスが起きるから…なので禁忌…」

別の場所にて助ける事はできるけど…ね」

石橋「そうか…」

作者「あの時点では助けられなかった…ね…どう考えても…」

まりも「忘却は？」

作者「あの事件のみ消しても、おじいさんの中で家族はかなり重要にしめていて、

破綻点はみつきり…いつかは矛盾から崩壊する…

かといって家族の事をけすと…廃人確定…まあだからあのおじいさ

んがでてきた時点で…だね」

ヤバイ重い話になってきた…カオル君の心立ち直るのか？

第41話 帰還処理… 投稿日20110114

2001年6月23日昼

「B55ハンガー」

世界扉が開く……

カオルがでると、待ってましたかのように11号が…

「マスターお帰りなさい。いきなりで悪いけど大変な事態が、発生したんだ」

無言のカオル

「マスター??？」

……

「なんか…ヤバイ??」

「ちょっとみんなー緊急事態ー!」

「なになに?」「どうした?」「11号やらないか」

「マスターが無反応なんだけど……」

「どれどれ?」「本当だ?」「んー馬鹿!」「へのかっぱ!」

「どうしたんだろ?」

「こんな事もあるつかと!!」
とウリバタケさん…いや5号

「マスターに記録装置を仕込ませてたから大丈夫だ」

「うお5号偉い!!」「流石変人」「ohana shiが成功したのね?」

「本当はマスターの性行為を観察しようとしたんだけどさ」

「5号ohana shiね」「後でコピー汁」「やっぱ変人」

「とにかく!!なんかわかるかもしれないなら……5号どこなの!」
?

「ここだよ」

ポロポロの5号が、マスターの制服の襟元から装置を取り出す…

o h a n a s h i 済みなのね…

「共有化できるぞ…」

「再生ね…最後の方で良いと思う」

「だね」「うん」「生活全部みたーい」

再生中

「このスペースコロニーは…普通みたいね…もっと前…月？動いてないわね？……」

もうちよつと前？これ？」

ちよつどおじいさんのを探しあてたようだ……

「うわぁ…これじゃマスター……」

「あ、虚数空間内に人がいる状態じゃない…マスター再起動させないとかばいわ……」

「5号…！突撃なさい…！」

「いつきまーす」

ATフィールドに阻まれ自爆する5号

「…………た、たすけ」

「ATフィールドがこんなに忌ま忌ましいなんて…………」

「どっしょっしょ…………」

「あらっどっしょしたの?」

「ヒルダさん!」

「おいあの人なら」「ああ」「確かに」

「ヒルダさん大変です!」

カクカクシカジカ

「ぶっん…………で心の中から閉じ籠っちゃったの?」

「みたいです…………どっしょっしょっしょ…………」

「…………いいわ…………たち直らさせてあげる……………というか直らないとね…………」

心細いし…」

「ありがとうございます」

「でカオル君のベットのある部屋までは運べそう？」

「ですね…ATフィールドで阻まれてもみんなで運べば怖くないですし」

「わかったわ運んで寝かしてあげてね…準備あるから…」

「はい…」

「…た…す…けて…よ…」

忘れさられる変態5号…

「ち…く…じゃ？」

だから話かけない…すつかり皆忘れただけなんだからさ…
そのうち再登場できるから…ね。

5号…光なくなつたね…

〓 〓 カオル私室 〓 〓

運ばれて無反応のカオル… A Tフィールドは強い力等なければ発生せず、運べるようだった…

カチャリ

入ってきたヒルダさん…

ガウンを脱ぐとランジェリー姿になる……

「さあカオル君…再起動させてあ・げ・る・からね…」

ヒルダさん、ベットの横に座る。

手を胸元に這わせて……

反応ないのをちょっと不満げな顔する…

「うん、もう……まあいいわ」

制服の上着ボタンを一つ一つ外す…

シャツが見える…

上着を片腕ずつ脱がし…シャツをめくる…

ウフフ

ヒルダさんから妖艶な笑みがでる。

「美味しいそうね……」

ヒルダさん、舌舐めずり…顔をはだけた胸に近づけ…

ピチャリピチャピチャ

舐め始める。

「うふ……おいしい」

ヒルダさん恍惚の表情。

「こっちは……前、くわえられなかったのよね……」

下半身の方をみる…

「ん…でも唇奪っちゃた方が良いかな??」

今だに反応しないカオル…ヒルダさんの目的かわって…

左手は、舐めた胸板を這わせて…、右手がベルトにかかる。

決めたようだ…

両手がベルトのバックルにかかる…

カチャリ

外すと……ますますヒルダさん笑みが……

シュル

ベルトの帯をバックルからぬいて…手がズボンのホックにかかる……

その時!!

バン!! ドアがヒルダさんを襲う!!

ドアの外には二人の人影……

石橋とまりもちゃんだ…

二人の息は荒い……

ドアの下敷きで、気絶しているヒルダさんは無視して、
ベット上のはだけているカオルを見つけだすと…

「カオル!! なんなの?? あたしを守るっていったの嘘なの??」

「カオルさん！！私の思いを救ってくれと言いましたよね？？戻ってきて下さい！！」わずかながら…光が

「カオル！！あたしを守ってよ！！一生守ってよ！！」

「カオルさん！！あなたが語った夢、見させてください！！」

「好きなんだから！！戻ってきてよ！！」

「好きになりました！！戻って来て下さい！！」

「戻ってこなきゃ、あたしどうなるの!？」

「うそじゃないんですよね？カオルさん！」

「あたしを一生護って！」

「わたしに夢を下さい！！」

「ああ、どなるな…」

「カオル」さん!!」

「うんで一生護ったるし、夢与える約束なんだが……俺どうなってた??」

「へ?」 「カオルさん?」

「戻ってから……記憶がないんだが……」

真っ赤になる二人とも……

「カ・オ・ル o h a n a s h i しよ」 「あら同意見ですね石橋少尉……」

「え??ち……ちとまで……状況を……」

「問答無用!!」

カオル君再び再起動まで……1時間……ハンガーで伸びてました……

「マスター??」

「お、おう……11号……状況が掴めてなかったんだが……」

「マスター??まだohanaashi足りませんか？」

「い、いやあ…大丈夫だ…」

「それよか虚数空間シエルターに人居ますよね？」

「あ、ああそうだったな…」

戦艦ドックにいきシエルターをだし…扉をつける。

それぞれのシエルターに

『つきましたので宿舎に案内します。ご準備出来次第、できるように
お願い致します』

で、手の空いているコバツタに案内させる。

「マスター…ちょっと注射打たせてね」

「ん？なんのだ？」

「今日みたく殻に入ってだとね…あの人たち…どうなってた？」

「……………だな……………それ用のか？」

「うん…」

「ああ、わかったやっつけてくれ」

「逝くよ」

「漢字違つぞ」

「わざとだよ……………終わったよ」

「こんなもんか??」

あんまり痛みを感じなかった……………

(……………あ……………)

「わりい忘れもんしてた……………」

「あ、マスター報告あるんだけど……………」

「んんん2時間までるか？」

「……なら大丈夫かな？ただ重大な事だからね……早めにね」

「わかった……”幻影””世界扉”」

””カオルの私室””””

「いったあ……あらやだ……たんこぶ……」
さすりさすり

「全く……ねえ作者」

は……はい？

「あたしの出番、もう今回はないの？」

予定なしです……

「酷い目にあつたわあ……次回は食わせてよね」

そんな約束できかねません……で、俺にあんまり呼びかけないでくれない？

「あら……いいことし・て・あ・げ・た・の・に……ねえ」

ほ、本当ですか?!?!?

「約束しなかったから駄目よ」

……orz……

あゝヒルダさん、アリシアさんにみて貰って下さい……

〓 〓 Zの世界 〓 〓

宇宙歴0087 5月11日

ジャブロー内

ウィーンウィーンウィーンウィーン

「エウーゴの襲撃だああ」

「防空隊パイロットは至急発進せよ！！アウドムラの発進の時間稼げ！！」

「キリマンジャロでな！！」

「ああ！！死ぬなよ！！」

（何人逝くんだけ……）

とりあえず情報通りの場所を目指した……

（この建物か……確認するか……）

「バルディエル」

（いたいた……一部屋に集められてか……人数若干多いなあ……けど丁度

よい…)

建物の入口の中から、
足音をたてて、部屋の前に向かって進める。

「おお〜いティターンズさん〜どうなってるの〜?」

「誰かきてる?」

「あ、本当…釈放かしら?」

「あたしらも戦わせて〜」

扉前で足をとめ…

「こんにちわ、時間がありませんので簡潔に…一番偉い方…いえま
とめ役の方いますか?」

ザワザワ…カツカツ

「わたしだが」

「まず最初にいいます…このジャブロー基地は核により60分後に
消滅します…」

「それって…」

「はい…あなたがた皆さんは、この部屋に閉じ込められたまま……核によって処刑される運命です」

「ばかな!」「うそ!」「どうして!」

「覚えがありませんか?早くいえば口封じです……」

「バスクか……」「ハゲ爺め」「エロハゲ」

「まあ……こちらがその命令書ですね……」
と隙間から渡す。

「むじ……」

「あらあたしが?」

「今渡した人分以外は、ここにきてわかったの、ないですが……もう周辺は無人です……意味わかりますよね?」

「そうね……」

「さて、実はこちらも用意してます」と、人事ファイルを渡す。

「死亡か……え？」

「わかりですか？本来はまだ生存となっているはずですが……」

「な……え？…先の間？」

「ええ、キリマンジャロ基地が、ティターズの本拠地となってるので、拝借してきました」

「ば……ばかな……」

「あと、どなたかヒルダ・ビタンさんご存知ですか？」

「先生？」「上司だった方だ」「恩人だ」

「知ってる方が殆どですね。実はビタンさんは生きていて、依頼を受けて調査後ここに来た次第

です」

「な……」

「まあ、こういった異能力をもっていて、いろんな世界を渡りスカウトしてきますからね…バルディエル」

鉄棒と同化、解除

「むう……」

「おや、1番落ち着いてますね」

「まあ死ぬとわかったからなあ…で、スカウトとは？」

「こちらを…」

DVDを流す。

「30分映像ですが、爆発までは時間あります。で行く希望者の方は名乗りで…へ？」

話していたまとめ役の方があげると、全員手をあげた。

「あ〜みてからで…」

「まあ…だなあ…が希望者は全員だ」

「見てからでも間に合うので大丈夫ですよ…といつつもりだったんですが…」

「まああなたがいうならそうかもしれない…」

…30分後…

「ではシエルターに一回はいつてもらいます」

で虚数空間のシエルターに一人ずつ引き込む。

「”世界扉”」

== B55戦艦ドック ==

扉からでると…

「マスターシエルターの清掃終了したよ」

と25号が近づいてきた…

「おう、あんがとさん…でもう一組分案内と清掃頼むわ」

シエルターを扉消してイレ込み、出して扉つける。

「つきました。出てきてください。案内するものをつけてます」

「で11号？」

「マスター…で報告やつとできる」

「どうした？」

「諜報活動なのかな？」

誘拐未遂が7件、破壊未遂が25件、進入禁止箇所への潜入が41件」

「はあ？……で、どうしたんだ？」

「桜井隊長とかと協力で、牢屋をつくって確保はしてる。

あとは副司令からも問い合わせ多数きてる」

「え〜と……まずは牢屋に連れていってくれ……」

あと副司令も問い合わせこの件だろ？取り調べ終わるの時間かかるから、

急ぎならこっちに…で伝えておいてくれ」

ガンパレ歩兵組お疲れ様でした…
牢屋はとりあえずA5に設置したらしい…あとで移動だな…

まずは誘拐未遂7件から…
精神のぞきながらだから楽だ…
嘘についても、家族構成等ただもれ…ついでに機密情報も…
楽といっちゃ楽

5件は可愛さから…アメリカ3と、EU、オーストラリア
充分国際問題になるとEUとオーストラリアの方は…謝ってる…
とりあえずスカウトでどうか？
で本国に伺うとの事で釈放…

アメリカさんはコバツタ誘拐してこい！！だったが可愛さが余ったらしい…
スカウトさそつたらもれなく移るとの事

あとの2名は仕事というか、国家に忠実…
有能部類か…

洗脳して、スカウトしますか…

コマンド

最優先事項

忠誠先変更渚カオル

よしつと…

破壊工作は重大だな…

あんまり有能なのはいない…男性だけだし、アメリカだけか…

ドラム缶、コンクリートつめで頭出して…

栄養チューブと尿道にカテーテルさして…

あ、もちろん糞の空間分は空けて、

アメリカ大使館宛てに。

進入禁止か…

潜入41件

多いなあ…

アメリカは…20件

EUは…3件 先の子搜索込みね。

ソ連は…5件

大東亜連合…2件

アフリカ連合…2件

中東連合…3件

中華統一連合5件

……アメリカ以外は釈放で、

正式ルートで来て下さいと親書付きで帰す。

アメリカはなあ…男性職員は、両手両足をわんわんスタイルでコ

ンクリートつけにして…

アメリカ大使館へ…

女性職員は…可哀相だから両手両足手錠で…

以上

(MPと、諜報面も強化しないと駄目かな？
…次は、ターミネーター確保だな…)

「マスター…本当にやるの？」

「ああ、やってくれ」

「うん…わかった…」

顔青ざめているアメリカ工作員達…
うんわかるよ…

「ねえ…薬間違えた？」「いや、間違えてないよ…」「変な方向に
いってない？」「効き過ぎた…かなあ…」
等等…

「と、副司令が…だったよな？」

「え？…は、はい」

「何戸惑ってんだ？しっかりしろよな…」

あ、そうそうアメリカ工作員さん、罪が重い！…と思ってるだろ？」「
ウンウン頷きまくる。

「けどなあ、BETAの味方になって、破壊工作してるから容赦しないよ…だ」

「BETAの味方？とんでもない国益の為に！！」

「でも結果は結果だ…そういった事さ、特に破壊工作が多かったからみせしめさ…
うらむならお上をうらみな」

立ち去るカオル。

「助けてくれ！！」「こんな人道的でない！！」「ああ……」

「ごめんね…マスターの命令は絶対だから…」

〓 〓 副司令執務室 〓 〓

コンコン「副司令」

「あらまってたわ…いらっしやい」

シユン

「と、スパイの事で？」

「ええ……まったく頭、いたいわよ……被害もでてるし……」

「おや？未遂だけでなく？」

「……そつちの事上がつてないんだけど……」

「あ、そうっすか……特にアメリカが多く、CIA、DIAも送りこんでましたね……」

「進入禁止以外は未遂に抑えましたが……」

「内訳は？」

「誘拐未遂7件、破壊未遂25件、進入禁止41件」

「こつちと合わせると150件くらいね……」

「逮捕できたの尋問しましょうか？」

「精神のぞきながらなので、真実を告白してると一緒ですし……」

「……良いわね、それ… 次は、任せてみようかしら…
こちらは自決しちゃった、ようね…」

「……そうすか……」

「で、対処はどうしたの？」

「破壊工作等件数が多かったアメリカ工員には、重大な処置を…
他のところはただの調査との事だったので、親書付きで開放しまし
た」

「ふう……わかったわ……」

「諜報、MP強化にターミネーター入れます？」

「何それ……」

「こいつですが……」

ターミネーター2のDVDを渡す。

「対全人類の潜入殺人口ロボットが、ターミネーターです。
まあ物語に、支障のない未来世界にとんで、拉致ちやおつかなあゝ」

とも思います」

「あら、それって……」

「ええ、未来はその時点から変わる……本来はそうですからね。が物語は、かえると未来がわからなくなる……ですから……
まあ未来世界もかかれていますので、飛べないわけでもない……です」

「まあいいわ……でいつ行くの？」

「そつすね……明日か明後日……処理もあるので……」

「わかったわ……あとはこちらからはないわね……強化の件よろしくね」

「はい」

シユン

「ふうん……ターミネーターか……まあ後で見ましよう」

副司令……やばいと思いますが……

⋮

カオス報告

次回に持ち越し⋮

第41話 帰還処理… 投稿日20110114（後書き）

ヒルダ「ねえ作者…いい加減本編で食わせて貰ってもいいんじゃない？」

作者「ん？ん？俺は介入してないぞ、お前らが一人歩きしてるんだし……」

ヒルダ「ねえ……さくしゃあゝあ・た・し・を、好きにしているのよ……」

作者「……懐柔は駄目」

ヒルダ「そ・ん・な・こ・と・い・わ・ず・に」
ヒルダさんの手が作者の手ひらを、人差し指でなぞる……

作者「駄目つたら駄目!!」

ヒルダ「うんもう…じゃあ…これでどう？」
作者の手を掴むとヒルダさんの胸にタッチ…
もにゅもにゅ

作者「ハアハアハア……本編で食わせあげよう……だから今ここで」

ヒルダ「いいわよ……」

グワツシャン！！

作者……ハンマーの下敷きに……

フーフーフーフー 石橋「さくしゃあ~~~~駄目じゃないの~~~~」

作者「な……何故……お……れ……が……」

石橋「ヒルダさんもヒルダさんです！！

後書きは本編と別なんだから、介入させようとしない！」

ヒルダ「あら、そういった手段もとらないと、大人の世界は生きてけないわよ」

石橋「ぐぬぬぬ……不知火君懲らしめてあげなさい！！」
ガシヤガシヤ

ヒルダ「あら？うけてたつわよmk2君カモーン」
フューンカシユン

石橋「やれー！！」

ヒルダ「いつけえ！！」

不知火君、mk2君に先制パンチ、吹っ飛んで盛大に転がる…
立ち上がってお返しとばかりブーストダッシュで殴る！
盛大に吹っ飛んで転がり……

作者「この締め…どうしよう？」

○「おあとがよろしいようで」

第42話 次の日 投稿日20110115 修正1

2001年6月24日

昨日は遅かったのでまず処理全般を……

核融合の燃料が沢山手に入ったのがうれしい

と整理からか……

破棄資源化

ザクトレーナー

ジム2 4機

ジムカス

ジムキャノン2

グフ飛行試験型

ハイザック

8基分確保

作るのはMSは……

Zとメタスか……

ウォードレスは烈火2機

とりあえず作成

残骸整理で吐き出して……

何機分燃料確保できるか？だよなあ……

で、情報を鯖に入れた後、マストライバーの建設と、
チューリップがL5に着いたので、サイド5の建設だね…

多目的作業艇に乗って…「作業艇でgo」

「マスターが、また壊れてる…」

「この間11号うつたのが…」「変な薬まぜた」「壊れたマスター
いい！」

チューリップを潜ると…

公転に同期しているらしい…流石

まず、

サラミス、サラミス後期型、マゼラン、ムサイを出す。
ついて来たヤドカリ11号12号13号14号をつけ…

そのまま命名、11号艦から14号艦

セイバーフィッシュと、ザク2改、ネモ2機をつけて…

防空隊設立

パイロット15号から18号

整備士にコバッタ31、32号を専属

密閉型農業コロニーを設置…稼動…

破棄コロニー全てを出す。

修繕だな…

「11号…完動できるのどんなもんになる？」

無線で聞いた…

「そうだね〜…：…：…：空気が抜けてるから、気密確保して、1つか月だね」

「そうか…：とりあえず補修かな…：」

一個一個同化し、資材を変化させて…：情報元に気密を確保させた…：
位置修正用に核融合及び熱核ロケットを設営…：

これで大丈夫な筈だ…：

精製した資材の在庫の70%使って修繕した。

「11号どうだ？」

「うん良いみたいだね…：あとは、大気組成したのを持ち込むだね」

11号の説明だと、土から成分変更で、圧縮チップを作るらしい…：
テラフォーミング技術の一つだとさ…：…：

本来は月から建設資材をマスドライバーで打ち上げ、
大気は地球から輸送して充填する…：なので時間がかなりかかるらし

い…

まあこれで、4500万人分の土地は確保できる…とのわけか…

けど、内部のソフト面とか…どうするかなあ…

「とりあえず戻るぞ…あとよろしくなL5防宙隊」

〃〃 B55ハンガー 〃〃

(え〜と…次がジオフロントと、格納庫エリアか…)

格納庫エリア

B3も増えた形で格納庫(100機分)で…

ジオフロントは…

牢屋をC3に移して…

MPつてもなれる要員がガンパレ組しかないなあ…けど、

詰所をB2に、

あ、男性諜報部員2名もつけておこう。

A4を操縦訓練施設に、

A8から10、B8から10、C8から10、を歩兵訓練所に、

あと情報網はやっぱり必要だな…B2に衛星ハッキング施設作るか…

ヤドカリ20機つけたら…オモイカネ+ルリ嬢にまけ…ないよな？
でスカウト組の女性諜報部員3名もつけて…

施設に関しては終了。

6月24日午後3時

(あとは、スカウト組と…後方資材か??)
民間人含めて56名スカウトしました。

民間人の方は一人一人面接をして…

コロニー公社勤務だった方が6名、
アイナハム傘下コロニー開発会社の方が2名。

アイナハムの方は実際に作った事あるそうで…

この世界には俺が持ってきたコロニー以外ない、9月になったら好きなだけ資材が入る…ったら、
ワクワクしはじめ、オフィスを！
との事だったので…B3に作成しました。

コックの方が3名、和洋中…
PXに入って貰います

アイナハムの開発部所属の方が2名B4に研究棟つくりますか…

後でビダンさんにも来てもらいますかな？

企業スパイの方が1名… 情報課へ…

あとの方が経理部か…

オフィスに入って貰って…経理等担当して貰いましょう…

民間人はおわった！！ 次！！

軍人40名の方々が…

22名のパイロットはそのままB-01に編入…

けど搭乗機がないなあ…後で。

開発技師の方々は研究棟に入って貰いましょう…

整備士はそのまま…

さて残り10名の方々は…

整備士3 看護師3パイロット4名か…

それぞれに入ってもらいました。

けど男女比率1:29か…

バスクの口封じの肅清のおかげさま…かな？

あとなんか有りそうな気がするから、再調査してみよう…

さて、搭乗機の問題か…

俺としたら、ドムが良いんじゃないかな？とも思っけど…

ジオンの機体は流体パルスで、第一世代の外骨格なんだよなあ…

…モノコック構造に変化したら良いんじゃない？

魔改造始めました。

骨格はマラサイを参考に…MCつけて…

装甲はガンダリウム

自重が約12t減か…

あと背面ブラスターと、脛の前、外側に高周波ブレードをくっつけて…

あ、サンドフィルター忘れずに。

ジュネレーター出力上げて…

拡散ビームは撤去、
のかわり外装式バルカンポットか…

表面は百式のビームコーティング塗装で…

武器の高周波ブレードは主機から供給タイプに変更…

できました。

命名、魔改造ドム、略して魔ドム。

地上の有人機にしましょうか…

金色のドムによる、よりスピードアップした、ジェットストリーム
アタック…

しかも26機での…アムロでも勝てない…等。

魔ドムの作成を25機分頼みました…

核融合炉が残り16基分か…

あと多目的作業艇も増やさないと、効率悪いか…

6基使って、作成を依頼…

残り10基分…

（どれだけ確保できたのかな？……そういえばA-01分の作って
……？）

ないですね1機しか…

「作者マジ？」

カオル、反応しない…うんマジ…見直した。

顔青ざめるカオル。

「11号」

…設定ってこんなに大変なんだよなあ…

見直して齟齬がないかどうか…

まだ多分プラントでの変換があるから良いものの…

資材成分まで…ったら…恐ろしい…

以上作者のぼやきでした。

「11号!!」

「何？マスター」

「残骸から確保できた燃料は？」

「……………今の所40基分…まだ整理中」

「ふう……よかったあ……あ、じゃあA-01分頼むわ」

「魔改造仕様で？」

「だな…あ、高周波ブレードだけ主機からエネルギーで」

「了解」

「今の人数+上がって来る人数分で…14機新造で良いな、で整備マニュアルは？」

「はい」

「こっちからも、アドバイザーつけた方がいいかな…」

「次のトリップ終わった頃には仕上がってる筈」

「うし、それで行くか」

「あ、ライセンス費用どうするの?」

……………考えてない

「ひっかかるのが、頭部と、跳躍ユニット内部と、管制ユニット部分だけだね…」

そう、殆ど新造…

「…跳躍ユニットかえるか?」

「じゃあ頭部と管制ユニット部分だけ」

「頭部も変えるか?」

「管制ユニットのみ」

(ん~~~~)管制ユニットはなあ

そう、この世界では脱出装置もかねるし、機体が入らない場所での屋外作業ユニットをかねているのだ…
またなんにしる衛士強化装備とセットにもなっている…

「管制ユニットのみライセンスだな…ちっとモデルの不知火弄るから、でコピー作成だね」

魔改造不知火…

跳躍ユニット 反重力ユニットへ変更

頭部センサーユニット 外観に合うのがない!!……………Zガンダムの頭部のつけちゃえ

空力が…だけど、跳躍ユニットを、反重力ユニットに変えたから、そっちで方向制御になる。
問題は飛行最高速度が600km/hになってしまった事…
追加セットが必要かな?

「…………とりあえずライセンスの話してくる…
あとA-01の全員に乗って貰い、高評価なら作成かな?」

「了解、マスター」

〓 〓 副司令執務室 〓 〓

「コンコン」副司令「」

「いるわよ」

シユン

「失礼します」

「どうしたの？」

「えっとA-01分の不知火を俺の所で、
魔改造不知火作って変えようかなあ？
と思ってたんですが、ライセンスが…」

「あらそうねえ…かなり高くつくわね…」

「あ、管制ユニットのみになりましたので…デザインは半々でひっ
かかるか微妙なラインです」

「……殆ど新造じゃないの……本当に管制ユニットのみなの？」

「はい」

「じゃあ、こっちで持つわよ…」

「関係各所に連絡しておくから…審査どうするの？」

「11号に任せますので、何時でも」

「わかったわ」

「俺は以上っすね」

「所で、地上で何してるの？報告が上がってきてるんだけど…」

「あゝマストドライバーですよ」

「あれね……わかったわ」

「あ、あと、地上戦艦の出入口も新たに作るつもりですので」

「管理はよろしくね」

「了解です。俺からは以上です」

「ところで見たけど…殺人ロボットを入れるの？」

「あゝT-850を非殺傷設定で、回らせようかなと…あのジョンコナー側についてシユワちゃんです」

「あの筋肉質のね……ところであれば、実写映画なのよね？」

「ですね。俳優が演じてますよ」

「成る程ねえ……落ち着いたら、あなたの世界も見てみたいわね」

「いいつすよ。あ、俺の世界はナンパされやすいので、一応……」

「平和ね……早く世界を取り戻さないかね」

「ですね」

「わたしからは以上よ」

「失礼しました」

シュン

シュン

シュン

「あら？霞？何泣いてるの？」

「可哀相です」

はてなと思うが泣いている霞をあやす副司令。

泣いていた原因はターミネータ 2のラスト…
熔鉱炉に溶けるシーンであった…

|| || B55ハンガー || ||

(あと忘れはないかな?)

無いはず……

(明日行くか…)

side) アメリカ大使館)

「馬鹿な!! 殆ど全滅だと?」

「うちの局員ならありえない、おたくの方じゃ?」

「まあ……みていただければ……」

ドアが開く……

中にはドラム缶につまった者が多数……

またワンワンスタイルのオブジェになったもの多数……

一人ずつコンクリートの解体作業をしてるらしい……

手の指……隙間に向けドリルを……

顔が青く……

ギヤアアア!

指にいったようだ……鮮血が混ざる。

入ってきた片方は見知った顔が居ない…のかほっとしていた…

「ば…ばかな…これは…人間のする事が…？」

「あとメッセージが付いてましたので…アメリカさんへ、破壊工
作が多かったので、こういった形になりました。

「同じ事、してあげましょうか？」

「いやだつたら、引き上げて下さいね。」

「だそつです」

「くぬぬぬ…」

「今、アメリカ国民として、コンクリート部分の解体作業をしてま
すので…あちらに」

「ボタン…扉がしまる。」

………
カオル報告

コバツタは規定数まで増えました。

ヤドカリは今は115号まで増えました。

情報収集能力が増えた模様です。
各種衛星通信傍受解析しているようです。

第42話 次の日 投稿日20110115 修正1(後書き)

デッデッデッ デッデッデッ
チャララーラーラー チャララーチャーチャー

石橋「あ、作者映画見てるの？」

作者「ターミネーター4ね」

石橋「ふん…あたしも見せて」

作者「ああ、いいよ」

……見終わりました…

作者「どうだ？」

石橋「………んというか………心臓提供……か……」

作者「……まあ…な…そういえば他のシリーズでも、毎回毎回居なくなるからなあ……」

石橋「そうなの？」

作者「1は別として2は熔鉱炉に…3はパワーセルで相打ち」

石橋「なるほどね……」

作者「そういった意味では普通の小説とかと違ったら違っね…通常は生き残るか大人の事情の為とか…」

石橋「大人の事情？」

作者「キャストのスケジュールや、お金の問題、まあ健康上の理由等もある。あとはドラマ中に亡くなったりとかね…連続シリーズなんかは特に…
これじゃないけど、踊る大捜査線の、いかりや長介さんとかさ…2004年に亡くなって、シリーズの…と…ちゅう…でさ」

石橋「あら？作者どうしたの急に…」

やばいかいてたら…ほんに涙が…なくなった当時の事思いだして…
大好きだったんだよなあ…
おじいちゃんににてて…

すみません…纏められそうにないので、後書はこのへんで…

第43話 ターミネーター？の未来世界へ 投稿日20110116

2001年6月25日

ターミネーターの審判の日の設定はいくつかある…

1997年8月29日…ターミネーター2での審判の日…なくなっ
た。

2004年7月25日…ターミネーター3での審判の日…実行され
た。

2011年4月11日…ターミネーター4及び、サラクロニクルで
の審判の日…

好きかってできるのは、なくなった、ターミネーター2の世界であ
る。

いや、極めて近い平行世界になった世界といった方が良いだろう…

まあようはスカイネットは、不利になったから、すかしっぺを送っ
て、よりよい世界を…なのだ…

なのでまずは、審判の日が何時かを知る、それによって撤退しもう
一度飛ぶ必要がある…

って事だ…

「うっし、じゃあ行ってくる」

「いつていつじゃ〜」

「世界扉」

「ターミネーター？の未来世界へ」

興廃した未来……

けど、できれば設定的には打ち切った3や、
無くなった2の未来世界であってほしい……気持ちである。

まずは、スカイネット側に見つからないように、徒歩で現在地確認
しようとしている……

作注……なんか利権がどうたらで……ターミネーターシリーズが発表し
ながら、制作頓挫orzなので、続編期待してたんすが……
あとで修正は……ねえ……

歩いて一日目…人が見つからない…

確か、T4で夜歩くとスカイネット側に見つかる…

のがあった、赤外線での探知によりだ…

先にこの世界でスカイネットと接触はヤバイ…

なので、徒歩で探したが見つからない…

廃墟で就寝…

ベットが恋しい………

二日目

道や廃墟は見つけるんだけど…人は居ないんだよね…

現在地が載ってる看板すら見つからない………

(はぁ…)

しばらくすると…黒い点がみえる…

(ん……やばー！)

カオルは廃墟に向かって走り始めた。
黒い点が近づいてくる……

偵察用エアロスタットに見つかったようだ。

カオルはなんとか廃墟内に飛び込み、

「バルディエル」

同化した。

フィンフィンフィン

エアロスタットが廃墟内部に入ってきた…

エアロスタットは被害を考えずに、
まず索敵目的で投入される機械軍の偵察機だ…

もう1機エアロスタットがきた…

(やっぱり捕捉されたか……となると……)

フイイイ

案の定、ハンターキラー エリアルがきた…

最初の時点で発見の報告で送られてきたのだ…

ターミネーター等は二足歩行等で機動力はしれたもの…
基本的には飛行タイプによる搜索、殲滅が重視されるのだ…

(乗っ取っちゃおうかなあ…でも、確定してないし…介入はなあ…
……)

考えていると、エアロスタットは、端から端まで、
搜索していたが、廃墟内に居ない…と報告したのか…

離れていった…

けど搜索20分一人の人間に費やす…大抵のは見つかって…
処刑されるのだろう。

20分ほどして廃墟から離れた…

またみちぞいに歩いて行く…

三日目…今だ人が見つからない…

またもやエアロスタットと追いかけて発生！！

廃墟に逃げ込み同化。

(まったくしつこいんだよ!!)

離れていったので離脱…再び歩く…

四日目

どうやら俺は、ネバダ州のラスベガスに向かっている事が判明…

が……

(早く世界が確定してほしいなあ…)

正直、ターミネーター2の未来世界に入れたか微妙…とカオルは感じていた…

消滅する未来というか、不安定な世界だから…のがある。

一般的には過去にとんで何か変えて未来に変えたら、世界は変わっていた…

つまりシフトし、元の世界には戻れなくなる…

まあ正直、その元の世界に入れたか微妙〜とカオルは思った為、介入はまだ控えているのだ…

カオル日記

今日はエアロスタットに見つかりませんでした…
人が恋しいよう…帰ろっかなあ…

カオル壊れ始めました…日記つけ始めてるし…

五日目

またもやエアロスタットに見つかり、何時もながらの手段で廃墟に飛び込む。

「バルディエル」

同化し、やり過ごそうとすると……

(人!?!?)

問答無用でシエルターに引き込みました。

エアロスタットがやはり偵察にきて…

(俺がここに飛び込まなければこの人見つからなかったよなあ……
うん介入でない!!)
エアロスタットもかなり来はじめ、T-600もきた……

(はよう帰れ!!こっちは聞きたいんだよ!!)

かなりしつこい…が1時間程搜索したら…どっかに離れていった…
様子みて30分程……

(うっし)

解除し、先程引きずりこんだ人をだ……

カオル…思わず…とまった。

その人バスターオブ姿でしかもグラマラスなパイパイ…

「すみません戻しますので服をきて下さい!」

すぐに戻しました……

5分後…もう一回、出すと…

女性兵士が完全武装でたっていた…

「ちょっと、あんた…さっきの場所どこなのよ??」

「えつとご説明しますから、…にさん質問を…いいです?」

「良いわよ!」「審判の日の日付と、今日は何時ですか?」

「はあ…?…あんた何いつてるの?」

「すみません、お願いします。答えて下さい!」

「1997年8月29日…忌ま忌ましい日よ…で、2030年6月
29日よ」

(うつしー!)

ガッツポーズを決めるカオル。

「で？あんな何なの？」

「あ、はい、渚カオルです。異世界人にて異能力者です」

「はあ？？」

「まあ……「こいつった事ですよ……ラミエル……」

「え?!」

「狙い撃つぜ……デットエンドシュート……」

久々の全力射撃…… 加粒子砲が光の粒子を集め……火を放つ!!

大きな十字架がで……また通り過ぎていった所に空気の流入が起こる……

「あ、あ……あ、あんな……なにもん？」

「いやあすから異世界人にて異能力者ですよ」

フイイイ

エアロスタットが何事か？とよつてきた……

(丁度いいや…)

「”加速” シャムシエル」

音速突破で、衝撃波なしの、物理法則無視の速さ近づくと…

「イロウル」

掌握

ネットワークから切断…

(物理的にもかえるか…)

「バルディエル」

変換完了

ライフル銃を構えて… フリーズしてた、兵士さん…

「あ、あんた… なにした？」

「ああ、こいつを配下にしましたよ」「はあ?? スカイネットから？」

「ええ、物理的に変えて、プログラムも完全変更しました
俺の忠実なるともになりましたから」

と話して、エアロスタットを虚数空間に入れる。

「……そういえばいまの……」

「あ、ちょっとまって下さいね…パイル!」

光の槍で串刺しにした…さっきのT - 600を……

流石にT - 600は持ち帰る気もない…弱いし。

「はは…はは……夢見てるのかな??」

心中お察しします。

「お、来たな…”加速” シャムシエル」

一気にハンターキラー エリアルに飛び掛かる。

「イロウル」

掌握

「バルディエル」

ネットワーク切断

エリアルを一時停止命令をだして、体育館サイズのシエルター内に
しまい、
兵士の元に戻る。

「お待たせしました…名前なんて言うんです？」

「……あ、ああ、人類抵抗軍、ミシエル・クラインだ…」

「よろしくお願ひしますね」

「ああ…よろしく…で、君、異世界人って？」

「ああ、まあ別世界で、滅び行く運命に抵抗しようとして、
色んな世界から技術を乱入させようとしてんすよ」

「ほお………「うちとどっちがましなの？」」

「ん〜現時点ではまだあつちかな？
けどほつといたら間違はなく全滅しますね」

「そつちで戦ってるのは？」

「宇宙外創造生命体BETAです。まあ…とてつもなく強力なね…」

「……………そつちの世界で機械は？」

「まあこつちみたく暴走はないですね。というかいたら…先にBETAをじゃないでしょうか？」

「それ程なんだ……………けどさっきの部屋みたいな生活…できるの？」

「あゝ難民にならなければ…ね」

「……………ねえ…そつちの世界いつてみていい？」

「ん~~~~まあ…MPやってくれるなら良いかもですね。補充はターミネーターの人擬態型をいれるのですけど…」

「あいつらを？」

「ええ、勿論配下にしますから」

「う…ん…わかったわ…ひょっとして？」

「ええ、ターミネーターを入手しにこっちに来たんですよ。MP強化や諜報強化が必要なので」

「あの殺人マシンだと…」

「まあ無理っすかね…なので基本非武装のT-800って知ってます？」

「ああ、潜伏型ね」

「あれ捕まえたいなあ…ってね」

「なかなか居ないわよ…」

「ん…スカイネットの生産拠点何処にあります？」

「この辺ならあっちだけど？」

「じゃあそこいきますか…」

「はあ？あんだ……ああ、そうねえ……あたしは道案内だけになり
そうね」

「お察しいただいて……助かります」

「じゃあ道案内するから……さっきみたく飛ぶの？」

「はい……じゃあ失礼しますね」お姫様だっこ

(あ、筋肉質だけどなんかセクシーだなあ……)

「この態勢じゃないと飛べないの？」

「ですね…」

「昔のアニメ等で手を握ってとかは？」

「あなたの方には力働かない筈なので、
吊すようになりますけど？」

「……いいわ……案内するから……あっちよ」

「はい、シャムシエル」

空に飛びだしました…

ATフィールド展開して、音速…突破！！

「……これもあなたの??」

「はい　ところで、どの位離れてるんです?」

「んゝもう少しあ!!あゝゝ行き過ぎ行き過ぎ!!」

通り越しました。

Gがかからない程度に減速し…

「……じゃあ戻りますので、シエルターに入ってて下さいね」
シエルターにいれる。

スカイネットターミナルからどんどん黒い粒が沸いて来る。

(殲滅戦か…)

とりあえず空中の捕獲対象は…トランスポーターだ…最後に残すつもりだった。

「アムロ！…いつきまーす！」

…

カオル報告

戦闘前なのに忙しい…

ミッシェルさん加入

あと、

偵察機と、飛行型確保。

以上

石橋「ねえ作者……」

作者「ん？」

石橋「前半の……出会う前の部分何だけど……何か前投稿したの……」

作者「……どうせ描写下手ですよ……」

石橋「……いじけちゃった？」

作者「ふん……だ」

石橋「けど5日か……T4みたら徒歩だとか都合主義？」

作者「……だろうなあ……けど見つからなかったら、
一回帰って様子見させようかな?と思つてたんだよ……
カオルが人間オブジェにしちゃったし」

石橋「ああ、あれね……ね、諜報員つてあんなに帰せるものなの？」

作者「ふふふ…こんな事もあるのかと…！が炸裂したのさ…まあ詳しくは、帰ってきた辺りの回でね…オマージュが沸いて来た」

石橋「……………」

作者「ゲフフフフ」

石橋「え〜作者が壊れ始めたので、この辺で…次回…！カオル無双、何処までやるか？ どうぞお楽しみに〜」

五日目再開

「アムロ！いつきまーす！」

カオル、踊りかかる。

ハンターの先制攻撃が始まった。

プラズマ砲の集中砲火、ATフィールドで防ぐ。

目からビーム、命中、命中、命中、命中、命中…と書く間に、

一瞬間一発の出力でビームをうち、

ハンターは命中すると、爆散し落ちてゆく。

ミサイルの集中砲火！！

もATフィールドに阻まれる。

「ブレード！」

接近してきた機体には一刀両断：墜落してき爆散。

その間にも目からビームで次々と落とす。

エアロスタットもたかりにくる。

突撃しようとして、よこからきたハンターはATフィールドに阻まれる。

そのまま上から一刀両断、黒煙あげながら落ちてゆく。

ハーヴェスターのショルダーキャノン、撃ってくるがATフィールドに阻まれる。

その間も目からビーム、250機目撃破。

地上からも対空砲火が上がる。

最初はある程度制限してた見たいだが、対空砲火の密度が上がると味方の砲火に当たり墜落してくるのまで出てきた…

目からビーム！350機目墜落。

大型のトランスポートはいまのところ無視はしている。

ハーヴェスター搭載のポーターが十数機上がってきてるのを確認した…

（厳密な数わからん…目が眩しいし…）

慣れてきてるが、単純にライトが出ている感じと思えば良いかも…

まだまだ空中機は上がってきてる…

目からビーム500機目墜落！

（きりねえなあ…）

何しろ、生産拠点兼基地だ数は多くいるだろう…

が、空中型の密度が薄くなってきた…

目からビーム750機目墜落。

地上の方をみると墜落した機体が燃え上がり、ある程度駆逐できて
いるようだ…

対空砲火の密度が薄くなっている。

目からビーム800機目？

エリアルやエアロスタットがついにきれた…

トランスポートの数を減らそうと

「パイル！！」

次々と落とす。地上は、うん地上施設だめだな……地下に期待しよ
う…

ラスト1機を、

「バルディエル」

まずは行動奪って、

「イロウル」

内部のモトターミネーターから書き換え、ネットワークから切断。

次に乗っているハーヴェスターの内部の、モトターミネーターから
書き換え、ネット切断、

次にハーヴェスター、最後にトランスポート…

…離脱、全員に待機でシェルターに送る。

制空権は抑えたようだ…

（次は地上か…）

微かに対空砲火は上がってきている…

火線の前に行く…

(お、四足?)

勿論配下にしたてあげ、待機でシェルター行き。

T-600…「パイル」

串刺し

T-600…串刺し

あんまり居ない…

(ん〜…やり過ぎた?)

基地上空で戦い過ぎたみたいで、基地地上に対空迎撃にでてたマシンが、

墜落してきたのに次々と巻き込まれる事態になった模様だ…

(さてつと…まあいいや…基地掌握しに行くか)

中央に見える半壊したタワーへと進む…

その頃…

「はあ?どっかの馬鹿がしかけてるだど?本当か?」

『はい、本当です。しかも仕掛けている方が優勢の模様です。スカイネットターミナルから黒煙が次々上がってます』

「……………わかつたしかけるぞ！！貴様は引き続き偵察にあたれ。……………コナーに連絡をとれ！」

当基地は、いまからラスベガスターミナルに仕掛けると「
ウオオオオー

命令を聞いた者たちが唸りあげ、基地は騒然とし始めた。
武器が次々と渡され、バギーのエンジンがかかる。

人類抵抗軍の出撃だった。

場面は戻る…

施設内部にはいると……………

あんまりというか、仕掛けるターミネーターいなくなったのか…おとなしくなった…

まあ…施設内部に入られる前に、殺戮するのが普通だからだ…

「さてと…内部構造把握からだな…バルディエル」

(ほうほうほう……………お、当たりだ！！)

居たのだ。T-850とみられるのや、T-8xx…型番わからずや、T-1000やT-1100等が…しかも起動前…

まずはターミナルを掌握…

「イロウル」

掌握、物理的切断、また今生産中のターミネーターの停止…

あ、人間処理場…

離脱するとすぐさま目からビーム…監視役のを撃破。

「えつと皆さん無事ですか？」

「え…あ、はい…」

処理される寸前の10名程を助けました…

「と、助けるの遅れてすみません…

この基地は自分の掌握下に抑えました…

が、まだ稼動しているマシンいるので、

シエルターに引き込みます。しばらくお待ちを」

で次々とシエルターに引き込む。

「バルディエル」

同化し、稼動中のT-600やハンタータンクを次々沈める…

あ、あ…T-1000が稼動しやがったか…3体ね…

うんあとは起動できなさそう…

まずは一体目…

「”加速”イロウル」

掌握

「バルディエル」

ネット切断

離脱

「…マスター、ご命令を…」

「あ、今のところないから待機、シエルターにいれるから」

「イエスマスター」

次いくよ〜二体目…

同上略w

最後の三体目は…遊ぶか…

今度は不意打ちせず…堂々と目の前にでる…

「貴様！！何者だ？」

「ほう、人間らしい対応できるんだね…流石、流石」
パンパンパン
拍手するカオル。

「何者だと聞いている!」

「ああ、ただの人間さ…」

「人間だと? 貴様ふざけてるのか? 人間ごときに、このスカイネットターミナルが、無力化できるわけないだろう!!」

「できたんじゃない」

「それに貴様、何故人間が、床から出てくるのだ? できることないだろ!」

「できたからできたんだよ」

「ぐ……」

(さあ…どうでるかな?…多分好戦的だと思ったけど…)

「ここで滅っしてやる!」

手を剣状にし襲い掛かってくる。

ATフィールドで防ぎ、そのまま殴る…

貫通はするが液体変換で、搦め捕られ…力が加わる…
普通なら折れるが、ザルエルの力で折れない。

「むう貴様、やはり」

振り払い、

「さあ？」

「……………決着はつきそうにないな…人でないものとは……………」

「決着つけようと思えばつけれるけどね」

「ふっ……………遊ばれたか……………何が目的だ？」

「いやさ、スカイネットに聞いてみたくてさ」

「何をだ？」

「何故、人を殺す？」

「人間は害だからだ」

「……宇宙外のものが地球を滅ぼすとしたらどうする？」

「宇宙外の者？今の所観測されてないから答えにならん」

「んゝまあ別世界の話だからなあ」

「別世界なら関係ない」

「いやさ、例え話だとして付き合ってよ…」

40mサイズや20mサイズの宇宙生物が一つの基地に、4万匹以上いたとして、世界中に24個、

地球環境を搾取するため邪魔者は薙ぎ倒す…

数を減らしても驚異的な生産力…どうする？」

「………排除する方向だな………が難しいな」

「人と宇宙生物どっち？」

「両方」

「さっき難しいといったよね？」

「ああ」

「それでも両方？」

「……………滅びるまで」

「そっか…わかった…じゃあ用はないから、とどめねイロウル」
掌握

「バルディエル」
ネット切断

「さて、君は？」

「あなたに忠誠を、マスター」上出来、待機させてシェルターに…

（しかしまあこいつらの動力面白いなあ…
液体金属の中にパワーを貯めているんか…）

そのまま、把握してたターミネータ-の待機場へ…

（おおっ）

シユワちゃんが10体あと誰だ？が40体…

あ、少女型…T-1100もいた…

これがTOK715になるんだよな

101型とテレビでみた事ないなあ……

勿論両方とも書き換え切断で取得……

(うしうし、数は揃ったなあ)

……ん？振動？？

「バルディエル」

同化し……基地地上へ……

(ありや？軍隊？あ、人類抵抗軍か！！……保護した人、頼のもう)

彼らに会うことを決めました。

side～司令官～

「じ、これは……」

偵察から仕掛けている側が優勢と聞き、
準備して攻撃を仕掛けてみると……

そこは機械の廃墟とっていいだろう…

機械どもがほぼ全滅していた……

所々半壊でいるのを排除するだけで、ターミナルタワーまで足を進める…

まだ燻っている所から黒煙があがるが、部下どももふくめ、拍子ぬけていた…

そこに彼が現れたのである…

「ちわくっす、責任者います?」

side)司令官end)

タワーの中から外にでる…兵隊さん達だ、

「ちわくっす、責任者います?」

「貴様誰だ!?!」

一斉に銃口を向けられる。まあ潜入型かもしれないからね…

「この基地をおとした異世界人です…で、民間人の方を保護お願いしたいのですが…」

「……………いいだろう、何処にいるんだ？」

キヨロキヨロ

(適当な広場がない…なあ…)

「ブレード!!」

燻っている建物を払い切りし、戻して押しつける。
数本さがってその場にシエルターを出す。

「た、ターミネーターか？」

「違いますよ。こういった力のある異世界人ですよ……バルディエル」

扉をつけ…

「人類抵抗軍の方と合流しました。保護を頼みましたので出てきて下さい」

疑ってる兵士が磁石を持ってきた。

「あ、磁石っすね…ほい」

勿論くつつかない。

「どうです？」

「あ、ああ悪かったな……」

「ところで君、この基地は？
責任者っぽい人。」

「ああ、俺一人で落としました。あ、このコンピューター、スカイネットから切断したので利用可能ですよ？」

「なぬ？本当かね？」

「ええ……元から書き換えましたから」

「おお……君、抵抗軍に入らないかね？」

「ごめんなさい、元の世界もやばいので戻らないと……」

「むう……」

「のかわり、後一日位なら、落としてほしい所落としますよ。質量兵器でなら」

「質量兵器？」

「適当な隕石引っ張って、そこに落とします…1000mサイズでやつてもいいかなあ」20km圏内火の海ね…

「あとは衛星を燃え尽きないように集めて落としてもいいかなあって…乗っ取られてるでしょ？」

「わかった…コナーの判断を伺う…」

数十分後…

「カナダ中部にある、スカイネットの最大の軍事基地を攻撃してほしい」

「わかりました…捕われてる人は？」

「いや完全な軍事基地だから居ないとの情報だ」

「わかりました地図等お願いします」

打ち合わせ中…

「了解です。じゃあ潰したら俺の世界に戻りますね」

「ああ、よろしく頼む」

「シヤムシエル」

空中に飛び出しそのまま見えなくなる。

「司令……」

「何も言っな…奇跡なのだ……」

「はあ……」

大気圏外離脱

宇宙につくと…レーザー攻撃される…

片っ端から潰していく…

六日目

（あらかた潰せたかな？）

有毒な燃料や、原子炉搭載型は抜き出し無力化し、潰した衛星を圧縮して…100mの鉄球を作った…残りは回収

（さて行きますか…）

ATフィールドで包む…

加速…

大気圏突入！！

（座標よし…）

ATフィールドの外が真っ赤になる…

普通なら燃え尽きるであろっ…

いやこのサイズなら…燃えないか…

（見えた！！）ATフィールド解除、離脱…

大きな固まりの鉄球は、もののみごとスカイネットの基地に……

命中！！

爆風が広がる…噴煙が空高く舞い上がる……

基地周辺は全滅だろう…

「世界扉」

後にその世界で語られる…

機械は、人間を殺しすぎた為に、神のいかずちがおちた。神のいかずちにより、機械どもは一瞬に衝撃で崩れ落ち周囲は機械どもの地獄と化した。奇跡は起きたのだ！人よ立ち上がれ、機械どもに天誅を！

……

カオル報告

すつきりしました。

ターミネーター

T - 850 - 101 10体

T - 850 - 110	40体
T - 1000	3体
T - 1100 - 101	102
ハンターキラ	各1体
エリアル1 四足	1
モーターミネーター	4体
ハーヴェスト	1体
トランスポート	1体

作者「とうとうやりやがったなあ……が被害状況こんなものであつてたかな？」

一応参照したのが、ツングースカ隕石です。

ただ落下途中で大爆発したのがかなり影響あつたそうで……

なので、途中で爆発しない質量兵器でなら……で行いました。

カオル「すつきりしたからいいでしょう 予行練習にもなつたし」

作者「おまえなあ……」

カオル「まあ……あの場合周囲に人が居ない……だつたんだし……」

作者「むう……」

カオル「カシユガルに同様なのを、見事に縦坑にぶち込めれば……」

作者「やるなよ……一瞬で終わるからさ……」

カオル「うん。いざっという時の切り札かな基本はあれでしょ？」

作者「だな」

あれってなんだああ

第45話 ターミネーターの世界から帰還 投稿日200010118 (前書き)

寒いつす！！雪やこんこん

第45話 ターミネーターの世界から帰還 投稿日20010118

2001年7月1日

「ただいまあ〜つと」

「マスターお帰りなさい」

シエルターをだし扉をつけて、

「ミシエルさん〜つきましたよ〜」

「マスター、スカウト？」

「ああ、MPか、歩兵要員かな？」

「わかった25号呼んでおく〜」

「よろしくな……さてと」

シエルターからターミネーター達をだした。

ついて来るようにして…

ジオフロントのMPルームに、人事データ用鯖に接続するようにした。

「じゃあ、T-1000は情報室に」

「イエスマスター」

「シュワ01とターキー01と、アリソンと、キャメロンはついて来て」

「……イエスマスター……」

プログラムし直したばかりだから、固いなあ……

アリソンは101型　キャメロンは102型、

シュワちゃんはT-850の101型、

ターキーはT-850の110型。

学習能力はopenにしたからその内、学んでくるでしょ……

「副司令執務室」

コンコン「副司令いますかあ」

「いるわよ」

シュン

「失礼しま……おや霞ちゃん
ペコリ

霞ちゃんお辞儀をする。

「と、とりあえずMP用として彼らを連れてきたので……入ってきた」

シュン

ターミネーターが入室。

霞ちゃんがパタパタよつてくると、シュワちゃんに抱き着く。

「え？霞ちゃん？」

「……あ、そうそう、あなたの買ってきた、ターミネーターで嵌まったみたいよ。」

霞ちゃん赤くなる……

「そういえば、霞ちゃんも重要人物なんですよね……ん？そうだ、霞ちゃん、シュワちゃんを専属でつけてあげようか？」

「?!?!……はい」

驚いて……喜んでいる表情。

「シュワ01、最上級命令、目の前にいる霞ちゃんをまもるように。また命令も聞くように」

「最上級命令受領しました。マスター」

「うし、じゃあ霞ちゃん、何か命令してみて」

「なんでも……ですか？」

「まあしねとか以外なら、大抵大丈夫だから」

「……肩に乗せてほしいです」

ひよいと肩に霞ちゃんを乗せるシユワ01。

霞ちゃん……気に入ったようで

「で、副司令、外見上は男性の2つのタイプがつきます。そちらでは何体必要になります？」

「7体かしら？」

「わかりました。武装は、非殺傷のスタンスティックで、装備させます。

あと人事データを、俺のこのMPルームに彼らの鯖があるので頂ければいいんですが……」

「そうね……あと一体つければリンク可能？」

「ですね……わかりましたつけます……」

「そういえばアメリカの様子は？」

「あなたのおかげさまで、おとなしくなっただわ」

「了解です。じゃあ、いじょうなんで失礼します」

シユン

〓 〓 ジオフロント情報室 〓 〓

(さまになってきたなあ…)

「マスターいらっしやい」

「どんな調子だ？」

「有線ケーブルにも侵入したよ。これで通信に関しては、全世界的に傍受してる。」

あと、CIAの極東支部の建物にも侵入したよ」

「これで後は手紙だけか…」

「流石に手紙は無理だよ…とりあえず、CIAは人的被害で、一時中断になってるね」

「なるほど…あ、人事情報は？」

「リンクできるの一週間程の見込み」

「できたらMPの鯖に回しといてな」

「了解。」

あと、以前11号の話してた地下探知君、ここの管轄になって、かなりの範囲に広まってるよ。

あと一週間すれば本土に関しては網羅可能」

「おっし、引き続き頼むわ…あ、T-1000」

「ここにマスター」

「アメリカ本土にいつて潜伏しておくように…ばれないようにね」

「イエス、マスター」

「 B55ハンガー」

「11号」

「なに？マスター」

「不知火の件どうなった？」

「発注元がライセンス料を支払う…という形におさまったよ。で、A - 01からは高評価」

「じゃあ…とつとこつくりますか…あ、S - 11はオミットね…
変わりに、S - 11でドリル爆弾つけといて」

自爆装置は外し、変わりに内蔵バッテリーによる高周波ドリル…
接着して作動時間2分程度のをつけた。

投擲等で爪がひっかかると、ドリルの角度を訂正する為、4つの爪
がBETAの皮に襲いかかる。

ここでタイマー作動。
ドリルミサイル本体が体内に掘り進んで行き、内部から15秒後に
爆発…

無いと思うが、目標物でない場合、投擲機または上位機から遠隔停
止操作可能。

「了解マスター」

(自爆はナンセンスだしな…)

記録等を見たら、
囲まれて自爆等でBETAを足止めしている……そんな凄惨な戦場
がいくつもあった……

A-01にはそれは禁止、が同様な大規模破壊どうするの？が答だ……

（数すくない母艦級だと、M120A1打ち込むよりか、これが早
そうだし……）

「あと貯まってる案件は……ないのかな？」

「改造以外ではね」

「烈火の対応型か……」

原因はわかっている……

つける人工筋肉パックに骨が耐え切れずに、持ってかれるのだ……

だから700kgのエステバリス並の自重で、
時速60kmの歩行速度を出す事が出来ている……それも人がだ……
しかも長時間の戦闘に対応……

（人工筋肉パックの増幅力低下すれば、現代人でもきれいな事ない
んだよな……

が機動力か…

外的要因による補助で底上げできれば……でも大概が一回限りなんだよなあ……）正直ガンパレ人、異常、というかサイボーグでしょ……

（ん？サイボーグ？）

「なあ１１号」

「なに？マスター」

「ひょっとしたら、現代人をガンパレ人というか、骨格強化等可能？」

「……………データあるから可能だね……一週間ポット生活で仕上がるよ」

生体改造フラグたちました。

「聞いたってなんだけど……可能か……」

「ただ、やっぱり本人の意思が必要だね」

「となると逆は？」

「……………一応可能だけど一ヶ月のポット内生活は必要」

「因みに俺は？」

「マスターは改造というか弄れない程だから無理」

「……………あいよ……………となると、ガンパレ第六世代以外用は、ある程度の劣化はしょうがないか……………」

「かもね……………けどマスター、この烈火だけあれば、ガンパレ人類負けなかったんじゃない？の性能だけど」

「ん〜コストの問題だったと思う。
こいつは余計な装甲がついてるしなあ……………」

単純にアーリFOX系統は人工筋肉を装着する為の外骨格と思えば良いだろう……………
つまりウォードレスは、基本人工筋肉パックによるパワーの増加がメイン。
そこにシールドつけたりまた、装甲をつけたり、ハンマーパンチつけたり等をしている……………

という訳だ……………

つまり烈火は本当に歩く盾になりかねない…のがこの問題だ…

「ん〜反重力つければ、機動力は問題ないだろうが、部隊内運用しか難しいだろうなあ…」

カオルの頭の中は、浮遊し戦線まで移動、戦線で重たい動きしながら、異様にハンマーパンチだけは早い烈火が思い浮かんだ。

作注・メンテナンスの面で

「広める…という点だと…失敗かな？
とにかく機動力…」

とりあえず重い劣化版烈火を作りました…

現行の烈火にも反重力推進組み込み、浮遊移動可能にしました。

ただし、反重力使用の際は、内蔵アンテナによる供給が必要、の制限付き…にはなりました。
もしくは内蔵バッテリーで10分だけ…

「あ…ポン太君やPSPはどうだろうかなあ…」

フルメタルフモツフのパワードスーツ…人型サイズのポン太君。20mmライフル銃をも跳ね返す高性能パワードスーツだが外見上の問題から売れなかった…のだった。

PSP…ザ・サードのパワード・シンクロ・プロテクター。ただし数が少ない記憶がある…

(……………広めるには……………ポン太君か??叩き売り状態だったし……………)
ふもふも確定みたいです。

「11号、あとフルメタル・パニックの世界も追加で」

「予定、かなりつまるよ?」

「……………ん……………鋼鉄の咆哮を、短縮するか……………」

「なら大丈夫だね?」

「あとは現行撃震強化版の試験と、武御雷の整備費用の低下だよな……………」

「だね」

「正直…整備費用の低下って…何すりゃ良いのかわからない…んだよなあ…何が原因が微妙だし」

「あの全身刃になってるのが原因じゃ？」

「なんで？」

「そこが劣化したりかけたりすると、装甲自体を変えなきゃいけないでしょ？」

高周波ブレードと違って…」

「ああ……」

「それに基本的に軽く、機動力を更に増すのが戦術機の基本的概念だから、
どうしてもフレームに負担がいく…結局その部分ごと変えるようになる…」

そこからが原因じゃないのかな？」

「ん〜設計思想からの問題？」

「かもね……だから整備費用高騰は必然的」

「となると別方向の改造で考えなきゃ……こいつの場合は堂々巡りなのか……」

「うん……例えばビーム兵器解禁後とか、あとは……やっぱり魔改造化しかないかなあ……と」

「魔改造したら、ここの整備士なら、直接教えられるから良いとして、帝都だからなあ……」

「11号、連絡とってみて、整備費用低下は無理、魔改造でいいのか？」

「または現行強化か？と伝えといて」

「整備の件含めて？」

「ああ、よろしく」

さてと……拡張、その他か……

ハーヴェスト君は格納庫にってもらい休止状態に……

戦艦ハッチができればその警護に回って貰おう。

エアロスタット君は……休止状態に……

後でね

トランスポート君は… 凶体の関係上虚数空間で休止状態に…
まあ… ガンペリーサイズなら必然的にね。

モトターミネーター君は… 不整地の問題あるからなあ… まあ連絡要員にか…

エリアル君は… 落とされそうだから格納庫で休止状態に…

四足ハンターキラー君は…

「ねえ、君さ… 実弾にも換装可能なんだよね？」

了解の意をかえしてきた。

(このこ、使えるか?)

性能テストしてみた…

プラズマ砲装備バージョンで、時速45km、
避けの反応はプログラム次第…

(歩兵強化にいいんじゃないの? ガトリングタイプに変更でかな?)

改造を受けて貰いました。

M61A1を搭載して…

(まだ余裕あるみたい…)

戦車砲搭載してみた。

(なに長いつて?)

やめた…

（短く威力があるのね…パンツァーファストか…使い捨てだよなあ

…

あ、ガンパレのレールガン！）

戦車砲を単純に半分の長さにし、機関部を付け加えたもの。

「おっし、改造もうちつとまってなあ」

喜んでと意をかえしてきた。

さてと格納庫関係か…

拡張工事自体は終了してるね…

特にはだし、後でいいか…

戦艦ブロックまた1つ作るか…

在庫は…

核融合炉が264基分で確定。

ザメル（もちろんルナチタニウム）で…30機作るか…

あとは、陸戦強襲型ガンタンクを追加で132機、

ホバートトラックを追加で14、A-01用にさらに1機追加。

格納エリアはB3B4を格納庫に…

マストライバー戦艦用のも追加制作。

あと最後にヤドカリくんか…162号まで増えました。

……カオル報告

今日はちまちましたので終わりました。

夕呼先生「ねえさくしゃ…霞×シユワちゃんって元ネタ…？」

作者「……まあいたるところにありますね〜
というか霞ちゃんを肩に乗せたいので……」

夕呼先生「あんたまさかその為にターミネーターの世界に？」

作者「はい!!」

夕呼先生「まさかそれまでの諜報は…伏線？」

作者「いえ、本流でしたが、諜報見破る「ターミネーター」しかない
だろでした。」

夕呼先生「確かにね……けどあのマイクロプロセッサって…どの位の性能なの？」

作者「あ、先生がもめているのと同様ですよ」

夕呼先生「……………本編でだしなさいよ」

作者「しりませーん」

夕呼先生「あんだ…」

カチャリ…

銃をかまえる…

作者「詳しくは本編おたのしみにいいうー」

逃げ出した作者

第46話 強救戦艦メデューシンの世界へ…投稿日20010119

2001年7月2日

今日からメデューシンの世界に飛ぶつもりだったが…

「毎回迷うのもなあ…地球上だと、宇宙で迷わない方法ない？」

「四次元ポケットからだすよ〜」

「ドラえもんかい…あ…いや無理かな？」

「マスター行くつもり？」

「いや、良いや…何かあるの？」

「地球型別世界なら、携帯用の座標取得機が、
それ以外の惑星なら、使い捨ての打ち上げ衛星での取得が、できる
よ」

地磁気、天体等で場所を測定し場所表示するらしい…
地球以外なら、適当なコンピューターにアクセスできれば、ハッキ
ング…だそつだ。

衛星は、この端末にアクセス出来なくなると、
大気圏に突入し、燃え尽きる設計との事。

「これなら…もう迷わないなあ…あ、衛星何個、在庫ある？」

「5本」

「持っていくたびに補充でよろしくな…じゃあ行ってくるって伝えておいてくれ…」世界扉」

＝＝ メデューシンの世界 ＝＝

世界扉からだと…辺り一面鬱蒼としたジャングルだった……

(あちゃ〜…ココン共和国っぱいなあ……まあいいか……)

11号に教わった通り、虚数空間から衛星ロケットを出し、セツテ
イング……

(で、ポチツと押して…10秒までばいいんだよな……)

ポチツとな

で少し離れると……

パシューシューシュー

といった音で上がって行く…そして見えなくなる…

（端末を起動させるんだよな…）

起動させると…

まだ画面は真っ暗だ…測定中なのだろう…

『地球以外の惑星と確認、衛星とのリンクを確立します。

しばらくお待ち下さい。』

と音声と画面表示が流れた。

（まだかなまだかな…）

少し間がある…

（でたな……現在地は…諸島部か、やはりココン共和国だね……となる…

最悪2500km以上北にいかなきやならないのかもな……問題は原作のどの時期に出たかだ…）

最近世界扉になれたせい、時間軸がわかってれば安定していける…

が、時間すらない場合だと…正直どの辺りかが難しくなるし、場所

も安定しない場合がある…

(あれ?説明受けてないアイコンが、でてきた…これは…おお、ズームか)

ぐんぐん画像が地上まででかくなる…

拡大してみると、俺が真上から映ってる…

(うへえ…高性能だなあ…)

手を振ってみると、振って映ってる…

画像を元の大きさに戻すと、他のを試しはじめた…

(検索ワード?)

『所在地の国は?』

A『情報取得してないのでわかりません。

身近の情報機器端末に接続して下さい』

(だろうな…使えないのになんでワードが?……ん?)
カオルは閃くと、

『身近の村は?』

とうちこんだ。

A 『方位30分の方角距離7kmに人口400人規模の村があります。ナビしますか？Y/N』

(ほづ……)

『N その村は情報取得できそうか？』

A 『詳細偵察中………Nです』

(結構いいもの作ってんじゃない)
移動せずとも文化レベルがわかる……っうわけた。

『メデューシンは何処にいる？』

A 『メデューシンとは？………』
端末が答をもとめてる。

『全長180m 翼長215m12基のエンジンの大型飛行機』

(これでどうかな？)

A 『当該検索中』

(おっし、いけそつだ……)

A 『当該スペック4機確認』

(うしうし……)

A 『同型機は、周辺に1あとは、約500km離れた地点に1ずつ計2。また遙か北に1います』

(となるとまだ上巻辺りかその前か……)

『当該スペックの場所』

A 『4時12分方向14km地点ナビしますか?Y/N』

『Y』

ルートがでた……

『シヤムシエル!!』

(案外、今回楽かもなあ……)

……2分後

A 『目標停止中もう間もなく到着です……ナビを終了します。お疲れ様でした』

衛星センサーだけ取り外して制服のポケットにしまい、

端末本体は大事な物おきにおく。

「”幻影”」

かなりでかいとの印象の機体が飛行場…いや基地で羽を休めている…

(メデューシンかなあ???)

外見は鯨を思わせる白い巨大な飛行機が駐機している。

口と思える箇所から滑走路に向かってランプウェイがおりていた…

基地施設には当たってないが、周辺に迫撃砲が撃ち込まれてる…

国際条約で医療船には当てちゃいけないそうだ。

(さてと…)

軟着陸し、

「バルティエル!!」

艦と同化し始めた…

(うおっ…)

艦には620名近くの医療スタッフが乗ってるらしい…が、まさに女性の園といってよかった…

いや、白衣の園か…

渚カオルは元の人生の時、

小さい頃、交通事故で入院したさい白衣のお姉さんに恋をした、
ませ餓鬼だった…

なのでこの状況から動けない…というか至福だったようなので、
観察に徹底していた。

まずは1番上層部、第8層は、スタッフ居住区、艦橋がある。
スタッフ〃この艦の大多数を占める看護婦の居住区だ…
一部艦橋スタッフの居住区だが…

カオルは鼻だけ廊下に出すと…
スーハアースーハアア

なんといったらよいか…女性達特有の甘い匂いが廊下を包んでいた…
カオルはそのにほいを堪能してた…

カオル目的違ってるぞ…おい…

カオルはこの階層の居住区は無人というか、働いているみたいなの
で、
もう一つ下の第7層に意識を移した…

因みにこの第8層、及び第7層は翼の中に通路や居住区ができてい
る。

分厚い翼は燃料タンクだけでなく、居住区にもなっているのだ。
またエロカオルになってるみたいなので、8層には、艦橋、翼端部
は倉庫になってる事も書き加えますが、
スルーしやがるんだよな…

第7層では、人がいる…

看護婦は病院でもわかるが、三勤制をとっているところが多い…
つまり、深く寝に入っているグループと、これから寝に入るグループがいる訳だ…

ある一室に意気を向けてみると…

部屋の中は寝静まっていた…

壁には白衣が掛かって、3段ベットが向かい合わせになっている。

彼女達はスヤスヤ寝ているようだ…

寝相が悪い人もいて、布団を片足の膝で抱え込んでいて

…生尻がみえる…しかも何もつけてない。

(ノーパン!!)

裸で寝る習慣の人らしい…いる人はいるもんだ。

エロカオルは意識を集中し、そのベットの壁面に移動する。

歳若いお姉様、金髪で髪は長めの白人…かなり美人だ…

当該の場所は足でキュツと挟んでいる状態…

エロエロ興奮カオルは手を出現させると…布団を掴み引つ張る…

「うっん…」

(やばー!)

手を離し実体化を解除した…

(おきちやうか……しゃあまい…)

他のベットに意識むけると、布団めくれている人は薄着のキャミソールだけ…

この部屋には5名の女性が深い眠りに入っていた。

(あ、そうか…緊急呼出しに備えてがあったなあ)

彼女らは、最前線の野戦病院スタッフなので、何時でも呼出しに備えて、すぐに白衣を着れる格好ですごしてるのだ。

(習慣かあ 眼福眼福)

カオルは別の部屋に意識を向けた…

ギシギシギシ

「あ、…そこ…」

ギシギシギシ

「JJJJ?」

ギシギシギシ

「い…い…」

ギシギシギシ

(……………ま、まさか!!噂のくバキュン>)

三段ベットが音をたてていて、下段にいるものが揺らしているらしい…

カオルは意識を部屋に集中させ、視線を部屋の横から移動した…

ギシギシギシ

半裸姿の女性2名が絡みあっている。

ギシギシギシ

一方はピンクのキャミソール姿、もう一方は黒のブラジャーとパンツだけを身につけてた。

「そ……そこお」

ピンクが黒に跨がって激しく動いている。

「じじっ?」

「ああん!!!そこう!!!」

肩や背中を激しく押している……
(あれじゃなかった…整体か…)

「はあ…はあ…疲れた…交代よ…私の方もよろしく
キャミソール姿の人が音をあげたようだ…」

「え…もつと…」

「あたしもこつてんだから、交代でつたる…」

「う……わかったわ」

「早く早く」

「さて、お客さん何処こつてますかあ？」

「お約束だとおもっけど、聞かなくてもわかるじゃん。わたしらは
「さ」

「違うないね…職業病だし」

「おおっ、そっそっ」

「ねえ…もうちよっとしずかにできないの？」

(あ…こっちにも人がいたのか…)

「じゅん」

「まったく…落ち着いて本も見れないじゃない」

「ごくおとなしい白いキャミソール姿の女性だった…」

カチャキイ

「あら？終わったの？」

「ええやっとな」

白衣の看護婦が入ってきて、奥のチェストに向かっている。

「つかれたあ。…よつと…シャワー浴びてきますね」

替えの下着とスウェットをだし、部屋から出ていく。

エロエロエロエロカオルの意識、彼女について行く。

そのまま居住区内にあるシャワー室に彼女は入っていき…

カオルは作者に止められていた…

「頼む！！R18になるからこれ以上は踏み込むな！！」

「どけい！！作者！！男の、透明人間になったら願望だ！！」

「やめろ！！やめてくれえ！！」

「いや！！行く！！」

「本編で書いてある描写中には踏み込むな！！」

「うつせえ！！いかせる！！」

「ダメだ！！」

「力づくでも！！この先に桃源郷が！！」

「なる…こつなったら…作者の介入力<バキュン>」

カオルは寝ているようだ…

1時間後

カオルは目をさました……

(は！！桃源郷~~~~)

カオルの意識はシャワー室に突入！！

(…………orz…………作者、後でぶちのめす！！)

にほいはするが既に事後だった……

シャワー室は、手前に脱衣所があり、貸したオルが積んであった。その奥には両側に、板と戸で仕切られたシャワーが40程並んでいる。

あきらめてカオルは艦全体に意識を広げる……………第6層に意識をむけた。

そこは戦場だった……

心臓マッサージをしながらストレッチャーが緊急オペ室に入る。カオルはついてゆく……

「移すぞ！ワン・ツー・ファイア！」

看護婦達が手際よく処置を進めている…

「レントゲン！私が輸液をやる！…ミーシャは血液と交差適合、生化学、マリーはバイタル監視を！…アドレナリン！パゾプレシン！！」

レントゲンがとられると…チェストチューブが入れられた…注意深く慎重に…

吸引ポンプが動くとき鮮血が流れ出す…

そのシリンダーをみてた看護婦から、

「肺動脈やられたみたいね…」

と顔をしかめながらの発言があつた。

別の看護婦がレントゲン写真をみながら…

「右肺野が真っ黒ね…」

「エコーやってるひまないわ…開胸で止血ね」

「でも…」

「この人の体格なら耐えられるはず…バイタルも安定だし」

「うん、わかったわいきましよう!」

看護婦達が外科手術の領域に踏み込む…

医師は確かにいる…がこの前線野戦病院では、いるだけなのだ…
絶対数が足りない…

確かに発足当時は足りてた…が、一人二人とかけ…
条約に守られてても、当てようとした誤射はある…
また結果的な誤射もある…
その為殉職者もでてるのだ。

その為、今では経験を積んだ看護婦達が施術を行うのが日常であっ
た…

解説してる間にどんどん手術は進む…

「あばらも折れてるか…くそ! ……あ、クランプ!」
開胸部の血の海でまさぐってた手が見つけたようだ。

「あとでいじくる暇なさそうだから縫うわ」

手際よい……

「吸引!!」

……ピー

「細動!!インターナルパドル!!」

「5ジュール!!」

長いスプーンのような器具で直接心臓を掴み……
ドン!!

乱れたあと、規則正しいパルス音を吐き出し始めた。

「ふう…戻ったね…」

……心臓に直接電撃……はたでみると、恐ろしいものだ……

そうこうしていると、出血部の縫合がおわり、開大器が外された……

やまは越したようだ……

(こんな状態でないと見れないよな……)

意識を別の手術室に向けると、そこでも手術の真っ最中だった……看護婦達が開腹手術の真っ最中であつた……

「ははは、今…俺きられてんだよな?」

「そうよ〜まあ虫垂炎なんか、練習のようなものよ〜
この艦にとっちゃね…あなたも運が良いかもね」

「まあ……だが看護婦さん達が手術するのを聞いた時は驚いたが……」

「まあねえ……けどあたし達の腕は確かよ ……あ、そろそろ終わっ
たみたいね」

「本当か？」

「ええ」

「つつし、18分21秒班ベスト更新だな」
手術用の手袋、血だらけにした看護婦さんだ…

「目指せ婦長つてね」

サポートしてたらしい看護婦さんだ

「12分かあ……」

同じくサポートしてた看護婦さん

「さあかたずけよ。キャリー患者さんよろしくね」
リーダーらしい看護婦さん。

「らしいな……ま、美人ぞろいの看護婦さん達に、見られて切られて満足かもなあ」

「お上手ね……準備できたら病室に、半日入院ね」

カオルは手術室から意識を下の階層にむける……と第5層……処置室とかかれた部屋では、

看護婦が縫合処理してる真っ最中であつた……

下の第4層は入院区画だろう……沢山のベットが並び看護婦達が忙しく回ってる。

更に下の第3層では、入院区画の他に食堂で、入院患者達が看護婦達に介助され食べてる横で、

看護婦達や艦乗組員だろう、が食べている。

また、この層には教会や風呂がある。

下の第2層には入院区画以外に酒保がある。

最下層には武装がついてない白い装甲車が8両。

……横には、でかかかとハートを貫いてる稲妻が包帯で、巻かれているマークが描かれて、

また、ゴシックでこうかかかっている……

A M B O A T 1 M E D U C I N E 9 1 1 t h M B

(あ、メデューシンか)

はらかずも、メデューシンに取り付いたようだ…

(となると、クリオ君いるのかなあ？アルテはいるだろうし)

『艦内放送、明日1000当メデューシンは、ガスカル基地においての定期巡回を終了し、マドリック基地への定期巡回に向かう。繰り返す……』

(明日か…離陸してからでもいいかな…まだ一日目だし…)

と思うと引き続き艦内のウォッチにはいった……

二日目…

(いやあ堪能したなあ 桃源郷良かったし…)

エロエロエロエロエロカオルは、

本編にかかれてない場面で、色々ハツチャケて覗きをしてたらしい…

メデューシンの両翼のエンジンの動作音が高まり、

右翼は前方に、左翼は後方にそれぞれ熱されたジェット流を吐き出す。

するとじわじわとメデューシンの巨体が方向を替えはじめる。

メデューシンの巨体を、動かすものが無いための超接地旋回だ…

やがて滑走路進路上への旋回が終了すると、一旦エンジン出力が弱まり、またじわじわと今度は後方へジェット流を吐き出し始めた…
メデューシンは4列56輪のタイヤを回し始め、前方へと加速し始めた…
偏向フラップが翼面に吸着させ、揚力を生み出す。

わずか1500メートルの滑走でメデューシンの巨体は空に舞い上がった…

力強く、鯨のような巨体はぐんぐん加速する。

(さてといいかな…)

彼は館内の右翼端の倉庫に姿を出すと…
元の世界へと…

グン！機体が左ターンに入る…
カオルは不意にきた下に押し付けるGと、その後の逆Gで、転倒してた…

「イチチチ…」
そうカオルは翼長200m超の旋回警報を聞き逃していたのだ…
その位の長さになると、翼端部は旋回時の高低差最大60mにもなる。

「ひでえ目に…」世界扉」

カオルはくぐろうとし、今度はいきなり逆Gがかかり、つんのめった状態で世界扉をくぐった…

……カオル報告

つんのめり中!!

カオル「二日で終了かあ…もつと覗きたかったなあ……………」

作者「お前なあ…頼むからR18ネタはやめれよ……………」

カオル「え〜いつも通り<バキユン>ですませばいいじゃん。」

作者「あのなあ、女性がシャワー浴びてるところに、突っ込んだら<バキユン>だらけになるだろ?。」

カオル「むう……………」

作者「まあ、そんなにR18ネタにしたいなら…ヒルダさん〜出番ですよ〜」

カオル「ちょ…作者!！」

ヒルダ「は〜い さあカオル君食べさせてね〜」

カオル「シャムシエル!！あ、あれ?。」

作者「ああ、ちょっと封じておいた」

カオル「あれえええ〜」
ズルズルズルズル

まあエロカオルぶりの回でしたが……

男性読者の方、

あなたなら透明人間になり、物質を通過できる状態で、
看護師の女性独身寮があつたら、どうしますか？

でしたねw

853

女性読者の方には、同様の能力で、

自分の好きなアイドルの部屋の中にいるシチュエーション……かな？

まあ置いといて、

今回トリップの強救戦艦メデューシン、

自分的には大好きな小説です。

けどカオル、一日で見つけちゃうから、引つ張れないんすよね……

2001年7月3日

「マスター、大丈夫？」

地面に転がっているカオル。

「あ、ああ……」

カオルは立ち上がると手で払う。

「今回早いね〜スカウトは？」
25号が寄ってきた。

「今回はしてないな…まあもう一回いく時かなあ？」

彼女らは基本は死ぬ描写はない…

が撤退時の誤射で看護婦を含む18名、
またメデューシン撃沈で、重要人物含む多分少ない数が死ぬ…
との事だった。

「早めにもどったから、こっちの事すますつもりだ」

「マスター、明日A-01用の9機は納品予定、明後日には可能です。
でB-01隊員用のドム…2機足らないんだけど…」

「ん？……追加で」

「イエスマイロード」

「機体関係はもう？」

「だね……………マスター緊急！！」
突如緊急の文字がでかく表示される。

「ん？緊急？」

「H21に向け、2師団規模、総計約4万体のBETAの増援が、
H20から出発の様相…到着予定約3日後」

「……………まずいな…帝国は？」

「とりあえず情報室へ」

「ああ……」

（2個師団規模とは厄介だな…旅団規模でも奇襲で半壊してるのに……）

ハッキングした各国の衛星から、データが入ってきている…
また、自前の衛星も上げていた…
映像は海中を進みはじめたBETA群を写している。

「佐渡島増援は間違いないだろうなあ…」地下のスパイからの情報だ…

通常、飽和すると旅団から軍団規模のBETA群を出す。

つまり、間引きでは飽和する前に、旅団から軍団規模のBETAを間引けば良いわけだ。

が、間引きで弾薬装備等使い、攻撃側が備蓄面で半壊する…だった…

この場合、佐渡島ハイブにきたBETAは、そのまま日本を襲う事が確実…と思われた。

ただこれを撃破すれば、H20はフェイズ4、20ヶ月は増援が来ない限り、飽和の見込みはないのだ。

「帝国さんは…？」

「この間の第13師団、小国は5月に8割損失で補充中…1月頃と見ているね…」

第15師団、長野も4割損失補充中こっちは10月目処…情報渡したら大慌て中みたい。

現状当たれるのが第12師団及び、間に合いそうなのが第14師団、第21師団、第1師団」スクリーンに次々表示される…

「こっちの戦力って…」

「現状異世界軍に限っては、陸戦強襲型ガンタンク90機、ザメル3機、ドム3機完成…防衛戦だときついね…」

「弾薬は？」

「240時間フルバースト分揃えてる」

「……………討つてでるか？」

「1:444ね……………」

「現状ヤドカリと、燃料さえ確保すればなんとか再生可能だろうし……………」
コバツタ増やして、陸戦強襲型ガンタンクの生産速度上げるか…」

現状1号だけだったのを41号から50号までつけました。

「出撃予定は…4日後？」

(BETA到着、補給済ませでの状態か…)

「ああ…だな…」

一個機甲連隊弱対2個師団…常識的に考えれば…駄目だろう…

が、カオルはやるつもりだった…

「とりあえず、帝国さんに通達しといてくれ、独自の間引き作戦行
うよ」

「イエスマイロード」

そこからは、ひたすら仕上がってくる、コバッタを調整しての繰り
返しをおこなう。

2001年7月4日

「帝国からの問い合わせがきたけど…いつ間引き作戦するのか？っ
て…」

「今回は、いつもと違う戦法で、共同作戦はとりにくいので、こちらが全滅したらにして下さいと、伝えといてくれ。もっともその気はないけどな」

「イエスマイロード」

「マスター不知火仕上がったよ」
25号だ

「よし、じゃあ納品に行くか。と、マニュアルと」

「A-01ハンガー」

「ちわあ、納品にきましたあ」

コバッタ取り付きの魔改造不知火を連れてハンガーにきました。

「ほう…これですか」

「で、これマニュアルです。特に核融合のところはお願いしますね。あとこちらからコバッタをつけますので、わからない点ありましたら質問して下さい」

「よろしくお願いします」

「わかりました。おい！！機体入れ替えるぞ！！」

入れ替え作業中シュワワがいたので聞いてみた。
異常はなく、ここ専属らしい。

入れ替え作業終わったら、取り付いてるコバツタ達に戻るように命令を伝えると…

整備士待機室の方に何気なく歩いていく…

ボードには色々かいてある…

新型不知火萌え

未知の領域！！

管制ユニットシート部分オークション予定明日！！

イツ〇は俺の嫁！

ふざけんな俺のだ！

シートビニールは剥ぐな。はいだやつ副司令逝き。

(……………そういえばシートビニールつけてないなあ……………)

新車等は汚れを防ぐ為につけるが、操縦しない理由でつけてない…

「ちょっと誰がはいだのよ!?!」

(ありゃ……………)

見ると副司令が騒いでた。

「副司令、ここで作ったのでつけてないんすよ」とカオルは呼びかける。

「……………あ、あたしの楽しみを……………」

(無限プチプチや無限枝豆好きな人いたなあ…同類か…)

「……………なんだつたら無制限にビニール剥ぎます?」

「ほんとなの?」

「ええ、できますよ」

「今すぐ!?!」

「わかりました、B55におこしを……………」

それからというもの、定期的にビニールを剥ぎに来て、新品のシー

トを、20個並ばせる副司令がくるようになった…

もちろん再生してます。資源は大切にね。

〓〓 B55ハンガー 〓〓

「ふーすつきりした」

黙々と増産している横で、累計100席剥ぎしてすつきり顔の副司令がいた…

「あ、そうそう、あんた今度の間引き単独で大丈夫なの？」

「あゝまあ大丈夫ですよ」

「A-01連れていきなさいよ」

「いや、今度の間引きは反対に連れてくとかやばいので…」

「？なにする気なの？」

「まあお楽しみ…って事で……」

「……まあいいわ……A - 01は本当にいいのね？」

「ええ、慣熟でもさせといて下さい」

「わかったわ。じゃあね」

3時間後あたり……

石橋がきた。

「ねえカオル」

コバツタの調整作業してる横から声かけてくる。

「ん？」

「カオル、一個連隊で2個師団規模とやり合っの？」

「ああ、耳にはいったん？」

「大丈夫なの？」

「多分な」

「多分じゃ駄目よ……絶対じゃなきゃ」

「絶対は、ないもんだよ……」

「駄目、絶対に帰ってくるじゃなきゃ駄目」

「帰ってくる事は、帰ってくるからさ……心配すんな」

「本当に？」

「ああ、大丈夫。約束な」

「うん。約束ね」

そのまま作業を見続ける石橋……

柱からは……

「石橋ちゃんかあ……あの子苦手なのよね……」

ヒルダさんが覗いていた……

2001年7月5日

徹夜で、黙々とコバッタや、ヤドカリを増産する日々だった…

弾も次回に向け、フルバースト60時間分増やしている。

資材は、廃戦艦がまだたんまりある…

ドックで次々解体されている…

「カオルさん」

「あ、まりもさん」

「明日出撃なんですね…」

「ええ、まあ」

「無事に帰ってくるのをお待ちしています」

「ありがとうございます」

「本当は…この…ま…」

「ん？本当は？」

「あ、いえ……ではこれから教練ありますので……」

「頑張つて訓練分隊を鍛えて下さいね」

「はい」

夜……

昼間にタバタやら河田さんが来襲してきたが……

ひっしこいてコバツタを増やしたかいがあつたようだ……

この三日間で1.1倍の増産……330号増やして、
陸戦強襲型ガンタンクが96機増産された。

合計186機

ザメルも増産予定数完成してた。

「さつてといよいよ明日か……」

「だね……アメリカも注目してるし」

「あ、そうなん？」

「スパイ衛星が佐渡島ラインに集中してるんだよね」

「ふうん……まあ明日は頑張るか……」

2001年7月6日

いよいよ出撃だ…

今回は特殊戦の為、カオルは、虚数空間に軍団各機を搭乗状態で引き込んでいた…

「じゃあ、11号留守よろしくな…計画通りに」

「イエスマイロード」

地上にでるエレベーターにのる…

途中で石橋が乗り込んできた。

「カオル出撃なの？」

「ああ」

「単独で？」

「あ、今回は虚数空間に入れて強襲するつもり…だから単独でないよ」

「あ、そうなんだ……絶対に帰ってきてよ」

「ああ、俺の力、わかってるだろ？」

「……………うん」

地上エリアに着いた…

カオルは外にでる通過に向かう。
ついてくる石橋…

外にでると…

「じゃあちよくら行ってくるわ…シャムシエル！」

飛び出すカオル。

石橋、無言でカオルを目で追う……

カオルが見えなくなった先を見つづける。

〓 〓 司令部 〓 〓

異世界軍の出撃との為に、結構な数の要員が司令部につめていた。報告では、いつのまにか1個連隊強になってるから、出撃管制等必要だからだ……

が……

「はあ?? 出撃したあ??」

11号がどうやら内線で連絡を入れてるらしい……

「あゝ皆、なんか特殊能力で運ぶから、今回は出撃管制は無しだつて……」

お疲れ……通常勤務体制に戻って……」

ご愁傷様です……

……

カオル報告

出撃中なのでまとめられません。

作者「久々にマブラブでの戦闘パートになるなあ……」

伊隅「……………むう……見送ろうと、隊員達と待ってたのに、こっぴつたわけか……」

作者「あ、隊長……後書き初出演すね」

伊隅「まあな……けど作者、私達の出番が……」

作者「……………すみません……………」

伊隅「絡みにいかないと駄目なのか……………」

作者「多分そうですね……………」

伊隅「して、作者。勝算はあるのか？」

作者「それは次回、佐渡島間引き作戦20010706をお楽しみに……………」

けどね…カオル君あんまり活躍しないから…次回…

〓〓 新潟県浦浜 〓〓
ある兵士

(俺…夢をみているのかなあ??)

浦浜の監視ポストで哨戒任務についてたが、

男…が、空から飛来してきた……

その男は国連軍大将閣下だそうだ…わかった時にはびっくりしたが…

大将閣下は着陸すると、瞬きするたびに戦術機らしいのが増えてきた…

数えて、30機出現すると、トーチカらしいのを作りあげ、

上半身裸の人を出すと、佐渡島の方へと飛んでいった…

俺は…その上半身裸の人に、話かける事にした…

「なあ…あんたらは？」

「国連軍所属、異世界軍だ、作戦行動中。部外者は立ち入らないよ
うに」

「ああ、わかった……」

上半身裸の兵士達は皆同じ顔つきで、
鉢巻きをし、肩から襷をかけている…

装備は俺らと同じく89式5.56mmだった…

(しかし…でえなあ…)

新型戦術機らしいのに目を移すと、
30機の戦術機は背後にでっかい折りたたみの大砲を備えてる…

(何cm砲なんだろう?)

彼は大和の主砲を見たことあったが、それよりも大きいんじゃないかと
思っていた…

side)ある兵士)end

カオルは長浜につくと、
ザメルを30機をだし、
浄化土を積み上げ同化し、コンクリートのトーチカを作成、
また警護用に実弾武装した、T-850 4体を出す。

トーチカ内部にチューリップを設置…

そして、佐渡島に向かいはじめた…

通常、対ハイブ上陸作戦時には、軌道爆撃または長距離射撃により、AL弾を発射、

光線級による迎撃でもって重金属雲を発生。

その後実弾による長距離飽和攻撃でもって、個体数を削減。

大体ここら辺で膨大な弾薬が消費される…

その時点であんまり効果なければ、

再度上記の事を行い、戦術機が投入される。

佐渡島など海を渡るような場所は上陸が行われる…

そして上陸支援をおこないつつ、海神による強襲上陸で、橋頭堡の作成、

確保のち、NOEしてきた陸上機へと橋頭堡を引き継ぐ…

それをすべてキャンセルし、上陸作戦を実行しようとしていた…

佐渡島は、火山以外の山がもうない…

沢崎鼻が見えてくると、嗅ぎ付けた小型BETA群が早速見えてき

た…

ちなみに鶴ヶ峰は削られて、まったいらになっていた…

(100か…さっさと出して駆逐してもらおうか…)

宿根木に釣れた小型種がひしめきあっている…

小型種の上に陸戦強襲型ガンタンクを次々に出す。

グチャ　ミチャ

陸ガンタの自重に潰されるBETA…

作注…以下陸ガンダと陸戦強襲型ガンタンクを略しています。

『地点確保!!広がれ!』

すぐに火炎放射が放たれ、また履帯で踏み潰され、蹂躪される。

各陸ガンタはどんどん広がり、小型種を駆逐してゆく…

『半円に進軍せよ!!』

犬神平、小木、小木町まで広がり始めた…

60機ばかりだしたところで、

浄化土を積み上げ、変換させドームを建築した。

300m級のドームタイプ 厚さ20m、中にはチューリップをおき、T-850を武装させ、
3ヶ所ある出入口での小型種の浸透にそなえさす。

整備用のコバツタを100体程まく…

ドーム上部が光線級のレーザー照射浴び始めた…
がさすがに厚みのあるコンクリート製…
照射部分は赤く融解するが、そうそう貫通するものではない。

のこりの陸ガンタとホバートラックをだし始め、

『ザメル威嚇射撃』

命令を出す。
出した陸ガンタや、ホバートラックは、すぐにドーム内から出撃し
はじめる…

西にいった機体から沢崎を制圧、そのまま北東進との報告がはいった。

北に進んだ機体から田野浦を制圧と報告がきて、
東西に別れはじめたとの報告がきた。

(うしうし)

琴浦から西の突き出た部分は、もう少して、地中進行がないかぎり安全地帯となる。

チューリップが開き始め、弾薬満載の多目的作業艇が見えはじめた。

作業艇から弾薬が、コバッタ達によって降ろされてく…

その時、3発照射をうけた陸ガンタがドーム内に入ってきた。

コバッタが直ぐに修理にたかり始める。

光線級の3発程度なら、装甲材調整で済むので、3分で前線に戻っていくだろう…

そのついでに弾薬が補充されてゆく…

全機出し切ったので、カオルは魔改造撃震を出す。

「バルディエル」

同化し前線へ…

戦線は羽茂港 素浜海水浴場になっている…

陸ガンタは約6kmを一行に並び

バルルルルルルルルルルルルルルルル

両腕のポップガンや30mm機銃が火を放ちまた大型種などには20mmキャノンが火を放つ。

脇を通り抜けようとした小型種にはゴウウと、
火炎放射機から放たれた火炎が襲いかかる…

その列の後ろには交替機が待機している。

光線級のレーザーの照射を受けた機体下がって、その抜けた穴に
交代機が入る。

直ぐにレーザー照射地点に過剰な程BETAの頭ごしに、220m
m弾が打ち込まれる…

照射を受けた機体は、タンク形態に変形し、ドームに向かって爆走、
修理弾薬補充をつけて交替機列に並ぶ。

ザメルの高距離射撃もきた… こっちは曲線を描いているため、かなり落とされている…
…
が次々と長距離曲射が打ち込まれてくる。
光線級のインターバルは12秒、重光線級のインターバルは36秒、
はたBETAは体の向きを変えなければ撃てない…
…
時たま着弾でき、抹殺できてるだろう。

戦線構築して、60分たった…というところか？

殺戮数は1万を越えていた…

(順調だな…)

戦線は動かしてない…

6kmのラインが重要だった…

これ以上戦線のラインが長くなると、
機体中心からの、50m間隔が広くなり、

戦線維持の為、そこに機体を投入するので、
交替機が確保できなくなる。

そのための停滞だった…

今回は、ハイブを落とす必要はない。

また砂浜より先には対岸、七浦海岸からの照射の可能性もある。

だから前進しないでひたすら陸ガンタの砲が火を放っている。

カオルはその列の後方の隙間からちまちまうち、抜けそうになった小型種をプチっとしている。
ドウ!!

220mm砲が火を噴き、要塞級に穴があいて、爆散…
残った部分が崩れはじめた。

前線とドーム間は弾ぎれしたや、時たま照射をつけた陸ガンタが往復している。

(チューリップ最強)

チューリップの相方はもちろん横浜基地内…
たとえ、飛び込んでも生物であるBETAは、一瞬で凍り付く為、
一時的に活動不能になる筈…
その間に待機している烈火が始末する予定だ。

また、小型種がドームに接近できてもT-850の10体が、ドーム入口を実弾で警戒している。

こっちはCIWSの銃、弾薬槽、機関部などを、個人携帯できるよ

う改造し、
優秀な彼等に持たせている。

烈火で取り回しのできる重さだが、
彼等には余裕だった…

ドウ!!

重光線級がいたのかな？
水平に近い曲射が10発程BETAの頭こえで打ち込まれた。

ザメルの長距離射撃もいまだ続いている…が、だいたい迎撃される
ため、まだまだ光線級はいるのだろう…

(このままなら、あと、4時間でノルマか)

今のところ狭い戦線の部分にBETAが押し寄せるだけで、地下進
行の気配はない…
とホバートラックからは上がっている。

||| アメリカ統合軍情報司令部 |||

「な、なんだねこれは…」

スパイ衛星からの映像がメインスクリーンに写しだされてる。

(ありえない…)

わずかな機体でもって、BETAに対して前線を構築しているのが映し出されてる…

「なんだね？あの戦術機らしいのが、しきりに出入りしているドームは…」

「さあ？いつのまにか建てられました…前回の映像には、うつつてませんでしたから、60分間の内にでしょう。」

同様なのが規模は違いますが、長浜にも建てられています。

長浜にはCIAのネズミから、向かっているとの情報が入ってます」

「……現地情報をまとめよう……」

〓 〓 佐渡島 〓 〓

スパイ衛星がここらを覗いていると、情報室から上がってきた…

約30分前の情報だと…

BETA殺戮数は15000を数えていた。

……
2時間後

長浜からCIA局員を捕まえた…との情報が入った…
作戦行動中にも関わらずドーム内に入ろうとしたらしい……

(なにやってんだか…)

今のところ損失機は出てない、
重光線級の照射受けすぎた機体があったが、
装甲交換の対応をとったのがいたが…

補給さえ続けば、過剰な実弾火力装備のガンタンクは優秀であった…

地下進行の気配もない…

戦線は崩れず、35000匹を始末していた…

〃〃 長浜少し前 〃〃

「おいチャック、あの上半身裸やろう、うざいな……声かけて注意を引き付けてこい」

「イエッサー」

彼等はドームの内部構造を偵察の為に、ここ長浜に来ていた。

ドームの出入口からは、巨大な大砲を積んだ戦術機らしいのに、補給する『コバッタ』これは以前の潜入成果からの情報だが、

そのコバッタが補給給弾作業をしているのが見える。

チャックが上半身裸の変人に声かけ、注意を引いたのを確認し、

内部に潜入しようとした……

ビシャー

「ギヤアー!!」

いきなり前をスニーキングしてた部下が足を撃たれ、声を出してしまった。

「ちっ!!! オールウエポンフリー! 変態を倒せ!」

彼等はH&K MP5を携帯し歩哨に向け打ち出してた。

しかし……

「クソツ化け物か?」

確かに命中はしている筈……が効いてない……

一人二人と無力され……

「ヴツ!!」

右腕に歩哨のライフルから放たれた弾が命中し……
チームは戦闘能力を失った……

(クソツ!畜生いてえ!!)

身体を下がらせようとするが…

変態が来て…

バンバンバン

「ギャ!!畜生さつさところせえ!!」

「それはできない。生きて無力化捕獲する」

「はなせえ!!」

ズルズル引きずられ一箇所に集められ、止血…

ライターであぶかれかれてだ…

全員四肢を打ち抜かれ動けない状態になっていた……

|| || 佐渡島 || ||

(50000 越えたか……)

まだまだBETAは押し寄せてくる…

(そろそろ撤退かな……)

『戦線後退!』

幅が4kmラインまで下げるように命じた。

また宿根木のドーム整理も始めた…

ドーム内のコバツタ達、T-850達を虚数空間に、チューリップも引き込み…

ての空いている機体を引き込み始めた。

ドームを浄化土状態にし崩し引き込む。

殺戮は54000匹数えていた…

そして、真野湾側の端っこの機体わきにたつ…

「シヤムシエル」

浮かぶと、端の機体が火を噴くのやめ、素早く引き込む。

次の機体…素早くうまく同調させ引き込む…

次々引き込み、最後の機体を引き込むと、そのまま小木漁港から、水しぶき浴びながら低空飛行で、新潟県へとぬける…

情報室からBETAが引き上げ始めた…と情報が入った。

（間引き作戦成功だな 損失機もなさそうだし）

〃〃 長浜 〃〃

ザメル陣地に降り立つ…

ザメルは結局数がそろってないので、あんまり戦果はあがってなかった…

100匹程度だった…

（もう少し数揃えなきゃ…さて捕まえた諜報局員って??）

……orz

T-850が、手足を撃ち抜いてた…

止血は一応して生かしてる状態で、

現状何処にも行けない状態で転がってた。

しかも7名程…

「えっと、06 状況説明」

「05 が立入禁止と説明中、侵入試みた為、行動不能にした」

「いきなり撃つてきやがったんだよこいつ!!」

「ん〜ちつと黙ってね……アルミサエル!」

(ほうほう、ドームの調査か…ザメルや、T-850 は見てるけど…まあいいか…CIA ね)

次の人…

「アルミサエル」

(だいたい一緒か……可愛い妹さんいるなあ…

けどまだ一緒に風呂入ってるのかよシスコン…妹14 だったのに!
!)

次の女性…

「手足撃ち抜いちゃってごめんね…先に頭見させてね…アルミサエル」

(大体一緒か……移民なのか…両親はフランスで BETA に、妹の市民権獲得に CIA に雇われたか……

妹さんの生活の為か……ん…ちと可哀相だなあ…名前は、フラッチ

エ・アンスワルか…)

次「アルミサエル」

(……こいつ最悪だな…なに？力に任せて強姦って…)

「05、こいつのぶつ使えないように」

「イエスマスター」

むんずと掴むとズリズリ引っ張っていった…

次「アルミサエル」

(こいつは…2重スパイねえ……帝国か…フム今回は巻き込まれね)
ギャー！

叫び声が聞こえた…

次「アルミサエル」

(……最低鬼畜、人殺しまくりか……)

「06、こいつ達磨に」

「イエスマスター」

ズリズリ引っ張ってゆく……

次「アルミサエル」

(……ほお…覗き趣味ねえ……まあそれ以外はないからいいか
けど…こいつのコレクション興味あるなあ……)

調査終了…

(とりあえず横浜基地だな…二人だけ助けてもなあ…)

犯罪者二人を残して睡眠状態にし、シエルターに入れました。

ザメルとチューリップ、T-850も虚数空間行き…

「あんたら二人は放置するから、運が良かったら助かるんじゃない？」

達磨にした殺人者と、あれが切断された強姦魔を残して……

「シラムシエル」

一路横浜へ……

……

カオル君報告

損失機無し

カオル「いやあ圧勝だったなあ」

作者「だね、地下進行もなかったし」

カオル「けど、あつてもおかしくなかったけど？」

作者「あ、まあ掘っている最中に撤退された…ということにしておいてくれ」

カオル「ということですか」

作者「けどまあ今回は陸戦強襲型ガンタンク無双と、チューリップ最強だなあ」

カオル「だね」

作者「大概、補給どうするの??の問題になるから、まあそれが答といっちゃあ…ね」

カオル「あと戦線引きこもりだね」

作者「ああ、機体の中心から50m間隔、機体の幅は約7m程、隙間は43mだから、

20m級のMSや戦術機にとつたら手の届く範囲。

まあそれを構築できるだけの火力があった…との事だね。

地下進行があつたらやばかつたかもしれないが……」

カオル「その為のホバートラックによる監視だし」

作者「だね」

カオル「けどザメルもうちつと活躍して欲しかったなあ……」

作者「2個連隊揃わないときついんじゃない??」

カオル「たしかに弾数が…だね」

作者「そこのところ強化と課題だな」

カオル「さてと次回は？」

作者「残務処理あるだろうかw」

第49話 間引き作戦終了後…

投稿日2011年1月22日

2001年7月6日のまま

アメリカCIA極東支部

「なに？また失敗だと！！」

「申し訳ございません…」

「まあいい…でどうなってる？」

「は！！…再起不能2名だして、残りの者は行方不明…目下捜査中です」

「行方不明？？」

「はい……」

コンコン

「はいれ」

カチャ……ボソボソ

「支部長、対象者からですが、五人は治療して帰す。また残した二

人は強姦魔と殺人鬼…との伝言がはまりました…」

「クソツ…早くなんとかしろ！」

「はっ！！」

「 〓 〓 アメリカ統合軍情報司令室 〓 〓 」

「全機損失無しだと？」

「はっ！！映像分析した結果で、間違いないかと」

「間引き作戦では撤退する瞬間が難しい…」

戦線を海岸沿いまで持って行き、一気にNOEで脱出…なのだが、光線級が残ってたら脱出する機体に損失がでて、かといって重金屬雲をたくと、跳躍ユニットが破損や、互い同士が接触などで…損失が出るのが通例であった…

「間違いないのか？」

「はい、金屬反応らしきもの、ありませんでしたので」

「むう…」

「 B 5 5 ハンガー 」

「ただいまあつと」

「お帰りなさい、マスター」

片っ端から陸戦強襲型ガンタンクを出すと、格納エリアに行っ
て貰う。出しながら…

「弾薬はどうだった？」

「機体数増えたから、消費量増加してたね。けど増産分で、今の機
体数なら 1 4 2 時間分はある」

「成る程ね…あ、そうそう…」
5 人の諜報員を出した。

「この人ら医療カプセルにいれといて」

「ポットね… 2 5 号」
作業挺に彼等のはせられ医局に向かった。

T - 8 5 0 は武装変更し、元の M P へ…

「さて、残務処理したら、早く行かないとなあ……とりあえずメデューシン作るか…」

元のメデューシン

医療航空艦

全長180m

翼幅215m

尾翼高さ55m

胴体幅箱型38m

全装備重量3050t

12基のターボファン

滑走路距離STOL性能で1500mで離陸できる。

パイロード3500tを誇る。

メデューシン設計変更点

医療区画 座席区画に変更。

病室区画 座席区画に…

3層2層の余計な部屋も潰して座席区画に…

装甲ルナチタニウムに…

主機、核融合炉

12基の、

熱ジェット+スクラムジェットへ…

これによりパイロード強化

内部構造30m×160m…内20m程はトイレや通路等に使つて
して…

ちなみに俺の世界の1層式B777-300ERの仕様は
全長73.9 m
全幅62.8 m
内部幅5.86 m
燃料乗客満載時離陸重量350 t
着陸重量234 t
滑走路距離3430 m
乗客550名
との事だ…

メデューシンが…非常識な仕様になる

2 m間隔でスペースを考えると…1050名…
それが4.5層…

1機で、約5200人近く運べるモンスターの登場になる…

シャトルが追いつかないなあ……

テンプテーションも200人クラスだし…

こればかりはしょうがない…

戦艦ドックにて作成しはじめた。

さて、今回の間引き作戦の反省点が…

「戦線構築し、ライン維持…まあこれでいいんじゃない？
が、3kmごとに1個連隊がベスト…というべきか…
幸い怖い事態にはならなかったな」

ルナチタニウムでも、弾ぎれで、
前後左右を中型種以上に囲まれ、身動きできない状態で照射される
と……なのだ…

また地下進行されると……だったが幸いなかった。

まああくまでも補給、修理はチューリップ任せ…ということだが…

ただまあ、こういった狭い部分を占拠し、一気に広める…

そこにBETAが殺到し、ただ抹殺するだけ…

（もう少し広いところはいかな…）と思う

「引き続き増産、強化だなあ…」

（今の戦法だと攻略できて、鉄原までか…あとはだたっぴろいから、
拠点維持になるな…

オリジナル制圧まで鉄原からは3つか…）

そう考えてると夜はふけてゆく…

2001年7月7日 七夕

残務処理は続く…

戦艦用ハッチはあと一週間程で完成…

もう一つの戦艦ドックは80%まで来ている。

B-01用の魔改造ドムは全機明日仕上がる予定と上がってきてる。

ザメルを50機追加を命じた…

これにより残り54基分となる。

解体処理している戦艦から抽出できた分だ…

解体作業している横で、

L5艦艇用にサラミス改を1隻修復作業にあたらせる。

戦艦用マストライバーできたら、修復中のサラミス改が打ち上げられる予定になる。

地上部分ではマストライバーが建築できているが、

テンプレーション用の整備や、避難民の移乗施設も必要の為、

帝国に打診のうえ、

本牧南、山下町辺りに、第三、第四滑走路、

空港宿泊貨物施設を作るようにした。

基地施設とは別にするため、防犯上も都合がよい。

またこのままだと、戦艦ハッチが桜木町辺りにできる予定で、戦艦用マストライバーにそのまま接続し、

三溪園跡地を貫き、八景島手前で浮上できるルートになる。

シャトルは三溪園貫き、新鳥浜町辺りで空に飛び出す。

先日の戦果を帝国さんに伝えたと、感謝の意が帰ってきたと、11号からくる。

医療カプセルに入った人は、まだ完治してない…二日程かかるこの事…

(帰ってきてからだな…)

帰ってくるまでロックと命ずる。帰ってくる？つまりまた別の世界に行く予定だった…

「あと、残務処理は…ないかなあ??」

「撃震のテストは？」

「あゝ…忘れてた…となると、単独で絡みにいく必要があるか…」

帝国から依頼されている撃震改だった。

装甲の対BETA戦テストがまだできていない…

「鋼鉄の咆哮からかえったら、かな…あとガンパレも一回行きたいし…俺がたりねえなあ…」

そっいえば烈火も対BETA戦してないねえ……

「作者…忘れてた事を…怖くて前に出せないよ…貴重な人材だし…」

「作者ってだれ？」

流石11号空気読むね。

……石橋がきた。

「カオル!?!」

「おう、イッシー約束通り帰ってきたぞ」

「うんうん。よかったあ〜」

「信用しろったろ」

「ところでどういった戦い方したの？」

「あゝまあ引きこもり戦だな…火力に任せて駆逐するけど前進せず」

「あの1番多い陸戦強襲型ガンタンク？」

「ああ、あいつらね」

「補給はどうしたの？」

「ここで蓄えてる弾薬をチューリップで運ばせた」

「へえ〜…でもかなり弾薬使ったでしょ？」

「ん〜在庫がむしろ増えたから、そうでもなかったなあ…」

「ところで損失機でた？」

「いんやの」

「嘘!？」

「ほんと」

「0って……」

「まあ装甲材が装甲材だしなあ〜おまえらの機体に使ってるのも、おんなじ材質だから、期待して良いぞ」

「あ、そうだお礼忘れてたんだ……ありがとうねカ・オ・ル」

「……なんかお礼言われるとこそばゆい……」

「……ところでカオル何してたの？」

「ああ、残務処理して、これからまた飛ばさうかなあ……っ」と

「寂しいなあ……」

「まあそういっな」

「うん」

「さて11号後は頼むな」

「了解、マスター」

「うんじゃあ行ってくるわ…留守よろしく”世界扉”」

「いってらっしゃい」

……

カオル報告

先日メデューシンの機体情報取得しました…

やっと報告できた…

第49話 間引き作戦終了後： 投稿日2011年1月22日（後書き）

作者「休む間もなく、次の世界か…えつと鋼鉄の咆哮2pの世界ね
…」

カオル「作者…1じゃないの？」

作者「ソフト無くしたwあと確かPC用だから高いし…まあ面白い
記憶はあったなあ〜あひる爆撃機とかさ…」

カオル「縦横無尽に駆け巡るアヒル達だね〜」

作者「そつから2Pは空母メインにして戦ってたけど…あんまり
強くないよなあ…」

カオル「うん……」

作者「空母弱体化泣けたよ……けどまあミサイルに関しては1番積
めたけどね」

カオル「あの平たさでね」

作者「さて……次の鋼鉄の咆哮の設定どうするか……」

カオル「まさか……？」

作者「こればかりはストーリーはまだ浮かんでないんだよ……まあ別にゲームストーリーに混ぜてもだかな」

カオル「作者……ガンパレ」

クワックワックワックワックワックワックワック
バシュービーン

「ビームがきて、ATフィールド展開し防いだ音」
クワックワックワックワックワックワックワックワック
バシュービーン

(どひゃーやばいやばい)
クワックワックワックワックワックワックワックワック

カオルはアヒル攻撃機に襲われてた。
クワックワックワックワックワックワックワックワック
バシュービーン
クワックワックワックワックワックワックワックワック

何故こうなったか?というと……

〓〓 昨日 〓〓

世界扉をくぐり…消し虚数空間からナビ端末をだす。

(お、日本か……)

場所は小笠原諸島、父島…との事だ。小笠原諸島は独自の生態系をもつ動植物が多い…
何しろ東京から1000km、周りには小笠原諸島以外の島が殆どない…

ちなみに元の世界の時に、小笠原丸にのって25時間半かけてきた記憶がある。

飛行機？…それがないんですよ…

硫黄島にはあるんですが、自衛隊関係者及びアメリカ軍関係者以外基本的に立入禁止。

ときたまツアーがあるんですが、グアムからのしか出てない…
軍用地ツアーっすね。

で母島にできるできないで、今のところ計画段階にしかかってない
201012月末の時点。

まあ環境問題もあるみたいですが、
島民の方は早くできて欲しい……ようでした。

で、小笠原丸にのってをはるばる行くしかない、東京都にあって東京でない南の楽園…
というわけです。

ハイシーズン以外は、いったらいったで、一週間かかる土地。

確か竹芝を、日曜日出発の翌月曜日出発父島着、

その後3日間ホテルシップとして停泊し、金曜日出発で土曜日竹芝着のスケジュールです。

ハイシーズンでも25時半行き、2時間停泊、帰りも25時間半…
最低2日船内泊になります。

前、小笠原汽船が高速船を造船し、東京ー小笠原間を17時間で結
ぼう…

の計画がありました。造船したのはしたんですが、
おりからの燃料費高騰により、支援してた東京都や国交省が撤退…

計画ぼしゃんとなったわけです。

まあそんな小笠原諸島の父島についてなのですが…

辺りは要塞化してた…

至るところに砲台やレーダー施設が見える。

(となるとステージ615の前なのか?)

検索を起動させる…

『ドック艦は何処だ?』

A 『衛星を打ち上げて下さい』

(そうなのか……)

虚数空間から衛星をだす。

セツトし、
ポチツとな

衛星は空高くのびてゆく……

しばらくすると……

A 『ただいま詳細検索中』

(まだかな、まだかなあ)

A 『現在ドック艦はイギリスのスカパフロー近海にいます。ナビしますか？ Y/N』

『Y』

「シヤムシエル」

カオルは飛び立った…一路ドック艦に向かい……

「 解放軍戦艦『はりまおつ』の艦橋 」「

「艦長、少々よろしいでしょうか？」

敬礼し、話かけてくる、ドイツ系の眼鏡萌え美人な博士だ…
名前はエルネステイーネ・ブラウン、技術将校だ。

「どうしました、博士？」

彼はライナルト・シュワルツ。ウィルキア解放軍少佐…
この艦の艦長だ…

「ドイツ共和国軍からの情報なのですが、
最近ヴィルヘルムスハーフェン方面に大規模な物資の動きがあるそ
うです」

「物資輸送？」

「諜報を進めたところ、相当量の弾薬類が一箇所に集められてるよ
うなのです」

「しかし、先日の北海会戦で敵艦隊も相当な損害を受けたはずですが。帝国としても、そう迂闊な動きはできないと思えますが……」

「それはそうなのですが……
警戒しておくに越したことはないと思います」

「ふむ……」

「艦長、司令部より入電です!!」
通信席から大きな声上がる…緊急入電だろう…

「北海上空に巨大航空機を発見!!
レーダー反応から超兵器と推定されます!!
針路からみて、目標はロンドンと思われます!!」
彼女はナギ少尉、このグループの通信長だ。
ヒロイン候補の一人…

「言った矢先……ですね」

「申し訳ありません。
もっと早くに情報入手できていれば……」

「博士のせいではないでしょう。」

とにかく出撃準備を進めさせつつ、状況を確認しましょう！」
艦橋が慌ただしくなる…

「針路ドック艦にとれ！！全速前進！！」

戦艦はりまおうが急速に前進する…
ものの10秒もしないうちに80kノットに加速し緩やかにスピードがおちる。

そしてはりまおうの異様さ…巨大な双胴戦艦、主砲は160cm単装砲4門、また対空パルスレーザー等装備されている…

しばらく進むとドック艦が見えてきた…

このドック艦も異様だ…
海の上にながら、地上の基地と同様な設備を持つ…弾薬や兵装製造工場、兵器研究等が行える…

戦艦はりまおうは岸壁に接岸し…
艦スタッフはドック艦のブリーフィングルームへと急ぐ…

「ブリーフィングルーム内」

「ナギ少尉、接近中の敵は確認できたか？」

「偵察情報の分析から、接近中の航空機は、太平洋戦で使用された航空超兵器と同定！」

「ロンドンを狙い西進中です！」

「あの、巨大爆撃機か……」

「超兵器は北海上空を低空で飛行中！」

最終防空ライン到達まであとわずかです！

太平洋戦でのデータでは、通常爆弾の他、艦砲やミサイル等を装備している模様です。

なお、同海域にて哨戒任務中であつた部隊が消息を絶っています」

「この超兵器は、まるで巨大な空中要塞だな、弱点はあるのか？」

「多くの兵装を搭載しているのです。

超兵器といえども、他の航空機より、高度、速度は大幅に低下するはずです。

艦砲の予測射撃でも、充分対応できると考えられます」

「こいつを逃せば、ロンドンには火の海にのみこまれるだろう……
それだけはなんとしても防がねばならん」

「これまで超兵器を何隻も撃沈してきた艦長になら、きっとやれるでしょう。

さあ、出撃のご命令を！」

周りとは違う服装の人物だ……

名は筑波貴繁、日本海軍特務大尉、57歳のよき日本親父さんだ。

「敵は速射砲を多数装備している模様！」

「爆弾やミサイルの直撃は致命的です！
敵の正面をさけ、側面や背面から攻撃を」

「超兵器爆撃機射撃開始しました！」

「各砲座、応戦準備！引き付けて撃て！」

アヒル達が敵艦隊に襲い掛かる…

クワックワックワックワックワックワックワックワック

アヒルの口から荷電粒子砲がうちだされ、当たると爆散する。

超兵器爆撃機は、『あなただけよん』を爆撃しようとする針路をとる…

「対空砲火！」

艦の至るところに設置してある、対空パルスレーザー、
CIWS、が火線を放ち、
対空ミサイルが射出される。

連続して、尋常なほど射出される…

一発1000万円だとしたら…既に5億円…6億円…

超兵器の爆弾槽が開くと、爆弾が幾つもおちてくる。数にして100発程、どれも10tサイズ爆弾に見える…

「急速転回!!」

Gを無視した転回により一気に90度転回され、爆弾から艦をとおさける。

その頃、敵艦隊を殲滅したアヒル達は、

クワックワックワックワックワックワックワックワックワック

空母から出たレーザーポインタに誘導され、一気に超兵器爆撃機に襲い掛かる…

対空パルスレーザーだが、速度が違う…

アヒル達はマツハ5を越えていた…

ダメージがだんだんと蓄積され…火を噴き初め…

とうとう耐え切れず、至るところで爆発をあげる超兵器……

「超兵器爆撃機、墜落していきます!!」

「艦長お見事です」

「敵の特性見抜いた秀逸な戦闘指揮でした」

「敵墜落地点を確認後、基地に帰投する」

「まって下さい!!」

「なんだどうした??」

「未確認飛行物体がいます!今、航空機隊が追撃しています!」

「あれは!?!?敵の超兵器!?!、いやあんな小型の超兵器等……」
艦橋の双眼鏡から覗いてた博士が答えた…

「超兵器だと?まさか2機目か……」

「ええ、可能性があります。何しろ、あのシールドの様なもの、未知の領域ですから……」

「なんとしてでも、撃ち落とせ！…ロンドンを守るんだ！…」

「…少し前…」

ナビ通りに進んできたカオル…

すると、

（おんや？あの巨大飛行機は…）

巨大なエイを思わせる機体、そう超兵器爆撃機、『アルケオプテリクス』だった…

（となると、310か…）

その爆撃機は一路ロンドンに向かって…

ついて行くと…アヒル達が戦艦や巡洋艦に襲い掛かっている光景がみえた…

（うー一方的だなあ…）

まさに瞬殺…圧倒的だった…

そのうち、アヒルにたかられて、火をあげる爆撃機…

(8週目ならいいなあ……)

と見ていたら……

クワックワックワックワックワックワックワックワック

襲い掛かってきやがった!!

これで冒頭のシーンに戻ります。

逃げようにしても機動力ありすぎのアヒル達……

(だあああ!!)

空母から、対空ミサイルが襲い掛かってくる……

当たる度にATフィールドが展開される……

対空パルスレーザー、実弾も当たり始める……

(うぜえええ)

まさに用途の気持ちが変わるようだった……

カオルはたまらず……急降下する。

クワックワックワックワックワックワックワックワック
それを追いかけるアヒル達……

クワックワックワックワックワックワックワックワックワック
クワックワックワックワックワックワックワックワックワック

(しつけえええ!!)

横からはパルスレーザーが15門当たっている…

そのまま、海中に!

ドーン!!

盛大な水しぶきをあげる

空母『あなただけよん』艦内では……

「艦長!! 敵超兵器、水中に潜りました!!」

「クッ!! 水空両用というのか!! 対潜攻撃に切り替える!! AS
ROCてえ!! 対潜へり出撃せよ!!」

シーリンクスMK88が、エレベーターから上がってくると、飛び
立つ…

飛び立つ間にもASROCは次々と撃ちだされる。

一方カオルは、

水中にて、しつこいASROCの追撃をかわしていた…

水中ではスピードが上がらない……

(クツ、ハイゴックでも持ってくるべきだったか……)

カオルはかわしながら、一路ドック艦の方へ……

空母艦内

「敵超兵器、今だ健在!!…あ、まって下さい…針路ドック艦の方向に進んでいます」

「なに!?!?!至急通信をとれ!!ドック艦に控えている、全艦を
出撃させよと!!」

「駆逐艦ほんぷきん、フリーゲート艦長ラブ、戦艦はりまおう、潜
水艦うおっしゅれつと、至急迎撃発進して下さい!!」

カオルは…

(やっと巻いたか??)

………と思つてた矢先に…

ポフウポフウ

爆雷の洗礼を浴びていた…
爆雷は深度に到達すると、いてもいなくとも爆発する…

(クウオウ)

翻弄されていた…

そこに、対潜ロケット弾が撃ち込まれ、ATフィールドが展開される…

また、水上艦から、水中用のレーザーが撃ち込まれまたもやATフィールドが展開される…

(やめてくれいい！)

まだこの間のが、かわいすぎた…が落とせないから…どうしようもない…

攻撃に翻弄されると…

(うおお！)

かなりというか物理無視の速度で漁雷が撃ち込まれてくる…

見ると…すごいスピードで潜水艦が迫ってくる…

カオルたまらず浮上……

そこには…160cm単装砲で狙いをつけた『はりまおつ』
406mmガトリング砲3門で狙いつけた『艦長ラブ』
超怪力線つんだ『ぼんぷきん』がいて、

ファイヤーの掛け声が聞こえたかのように…
一斉に火を放つ!!

ものの20秒ぐらい乱射状態になってた……

そして…カオルは……

第50話 鋼鉄の咆哮の世界へ 投稿日20110123（後書き）

作者「ここで主人公がかわってつと……………」

あ号「わたしが……………主人公に……………なるのだな？」

作者「うお……………あ号呼び出す前に出てくるなよ…

まだ執筆中だからさ……………」

あ号「……………まあ……………ほかの……………もの……………だせない……………だろ？」

作者「うゝん……………確かになあ……………他の人がでるとシバかれそうだ……………だせてゲストのナギ少尉??」

ナギ少尉「はゝい!!呼ばれて飛び出てじゃじゃじゃゝん……………」

作者「……………いった先からくるのか……………」

ナギ少尉「まあ、鋼鉄の咆哮編だけでしょ?あたしの出番は……………いいじゃないの……………」

作者「……まあいいか…あ号、さよならああ
」

あ号「……ひ…ひどい……」

時空間に吸い込まれるあ号

作者「して、ナギ少尉」

ナギ少尉「なにに？」

作者「なんと戦ってるかわかってる？」

ナギ少尉「…本編では超兵器と戦ってます…！絶対しとめます…！」

カオル「……リタイアか？？」

前回までのあら筋…

160cm単装砲4門に狙われ、406mmガトリング砲3門に狙われ、超怪力線に狙われ、

ファイヤーの掛け声が聞こえたかのように…
一斉に火を放たれた！！

ものの20秒ぐらい乱射状態になってた……

はたしてカオルは……？？

〓〓 空母『あなただけよん』艦橋 〓〓

「艦長！…ドックから迎撃した艦が超兵器を補足できた模様です」

「よし！なんとでもドック艦にいかすな！！」

「はい！そのように通信を送ります」

「まだ撃沈できないのか……」

「あの艦長……」

「博士作戦行動中です」

「いえ……ですが……」

「艦長……！敵超兵器浮上、浮上と同時に各艦の主砲が火を放ってます……！」

「いよっし……これで決まったるう……！……が航空隊を再出撃準備をさせておけ」

「艦長……」

「博士……作戦行動中となんだ」

「重要かも知れないので……」

「わかりました…、重要かもしれない事項を」

「あれは超兵器でないかもしれませんが…」

「……超兵器でなければ、何故あそこまで我が艦の攻撃を、耐え切れてるのです？」

「…人かと思いますが…」

「人?!?!…博士、おふざけは…」

「艦長!!」

「なんだ？」

「超兵器が…白旗…あげてます……………」

「はああああ?!?!?!?」

「あの艦長……………」

「投降宣言でなく白旗だと？」

「ええ……しかも……空中に浮かんでいる人……だそうです」

「人！?!？」

……艦長フリーズ。

「あの艦長??」

……

「はあ……しょうがないわね……」
ゴソゴソ

鞭を取り出すと……
バシィ

ギャン!!
悲鳴をあげる艦長。

急いでしまっナギ少尉。

「いてて……あれ？ナギ少尉……俺なにがあった？」

「艦長、で…白旗どうします?」

「ああ……」

艦橋スタッフは見なかった事になっているようだ…

「………投降するなら捕獲しよう……」

「わかりました!!」

その頃白旗あげてたカオル君……

(ぶち壊さなきゃ逃げねえよなあ………)

あきらめて白旗あげてました…

耐えきつた事は耐えきつただけど…
心があきらめてたんだよなあ…

(まあ…いざとなれば洗脳するしかないか………)

白旗を掲げ続けるカオル。

(どのくらいまつんだ?)

…… 1番小さい艦がよってきた……

甲板に歩兵だろう、40人程見える……

(ちっ… 40人同時はできないなあ…)

その中の一人が、

「貴様！！我がウィルキア解放軍に投降する意思ありなんだな！！」

「……ああ、そのつもりだ… あんたらには参ったよ…」
と大声でカオルはかえす。

「ゆっくりとおりてこい！！妙なそぶりはするんじゃないぞ！！」

ゆっくりと甲板におりてゆく……着地……

「おい！！」

と隊長らしいのが叫ぶと中の一人の歩兵が寄ってきた。

「保安上により身体検索します。両手を横に伸ばして、足を肩幅に
広げて下さい」

「……」

「それで結構です」

「ウヒヤヒヤヒヤ」

全身まさぐられてくすぐつたい…

「もう少しですから我慢して下さい」

「ハアハアハア…」

ウホッにはならないが、笑い疲れた…

「大丈夫です。所持品等いつさいありません」

隊長らしき人がよってきて…

「貴官の所属、氏名等を教えていただきたい」

「ぶちまけなきやか…あゝすみません、俺、異世界人なので、ここに戸籍ありません…」

「……………もう一度お願いできますか？」

「異世界人なので戸籍ありません」

「空母『あんただけよ』艦橋」

「艦長！！、投降者が異世界人となのつています！！どつとれますか？」

「もしかすると超兵器の出所わかるかもしれませんね……」

「博士……わかったその者と面談しよう……博士もご一緒に」

そのころカオル……

40人に監視されて……身動きがとれなくなっていた……

（まいったなあ……）

通信していた隊長らしき人が、

「貴官の取り調べをシュワルツ少佐が行うそうだ……」

（あちゃ〜悪のり提督か……）

と思ったが態度にださず……

「わかりました……でこのままです？」

「うんむ……今日はかなり遅い……我が家にて取り調べをおこなうそう

だ……」

「我が家？」

「うむ、ドック艦にてだ」

（あ、ラッキー）

「あと、貴官の監視と身の回りはこのものが行つ……」

「ジャンナ伍長ですよろしくお願いします」

（うお、食いたい!!）

自重汁カオル！

まあ……ロシア人って日本人男性からみたら食いたくなる人いっぱいだからねえ……

わからない気もしないが……

とな感じのジャンナ伍長です。

「ではこちらに……ドック艦に着くまではこちら案内します」

ついていった……

「ねえ…ジャンナ伍長…」

「あ、はい？」

「君に俺が任された…つう事は万が一俺が逃走したら…」

いきなり立ち止まり……

「……責任……とらされ……切腹……になるかと……やですので、やめてください」

「……はい……」

(くうわ……最高責任者を納得させないと、駄目になったか…面倒な事になったなあ……)

だねカオル。逃走したらその子、確実に責任取らされるっばいよ…

「こちらになります」

……個室…しかも上等な士官用みたいだ…

「あ〜……待遇かわつたみたいかな??」

「そこまでは……わたしも上官命令で動いてますので……」

「だよなあ……まあ、じゃおとなしくしてますか……」

「はい、お願いしますね」

(……そういえばどうなるのかな? ループとか……聞いてみるか)
「あ、そうだ今回何周目なの?」

「は? 何周目??」

(ん? 認知してはないのか……)

「あ〜いいや、今の忘れて……」

「あ、はい……」

(けど、アヒル達は確か3週目が条件だと思っただけだなあ……)

「まあ今日は疲れたから……寝ちゃっうね……用件あったら起こして」

「はい、お休みなさい」

カチャリ…カチャ

外側から鍵がかかる…

カオルつかれて寝に入った…

3日目

翌日…カオルは起こされると、ドック艦のある一室につれてかれた…

そこにはゲームで見知った顔の4名がいた…

筑波教官、ナギ少尉、ブラウン博士、シュワルツ少佐…

(となるとジャパルルートね…)

「お連れしました…」

ナ「朝早くすみません。朝食用意したので話ながらもどうぞ」

「わかりました…」

と席に着く…

「まずは自分からかな？自分はウィルキア解放軍シュワルツ少佐です」

「わしが、シュワルツ少佐の副官を勤めている、筑波特務大尉じゃ。よろしくのう坊主」

「わたくしが、ブラウン技術大尉です」

「わたしは、ナギ少尉といいます」

「えつと俺は…まあいいか、別世界からきました、国連軍所属、異世界軍統括している渚カオル大将です」

ナ「大将??」シュ「ありえん」ブ「……」

筑「ほっ恐れ入ったわい、その若さで大将とはのう……」

朝飯食べながらだ、

因みに今回朝食は筑波教官の希望で日本の朝飯の定番シャケ等。

「ほっ、このシャケ脂のつててよいのう」

しかし、日本食をナイフとフォークで食べる3名には恐れ入った。

シユールだ…

俺？もちろん箸を希望。

「おぬし、日本人か？」

「ええ」

「しかし、見えん顔立ちだのう」

「貰いもんの身体ですしねえ」

「それはどういった事じゃ？」

「まあ異世界を渡る力等貰う際に、再生させてもらったんすよ」

「で、異世界渡って、超兵器をこの世界に持ち込んだの？」

「へ？」

ナイフを突き付けてくるブラウン博士。

「どこの世界から持ち込んでるのか答えなさい!」

「いや、持ち込んでないっすよ。むしろ欲しいくらいかな？
あれは、確かこの世界特有の兵器だと思いましたが…」

「……………」

「まあ、もう少しすればわかるんじゃないですかねえ…答えが…」

「え?」

「俺は皆さんの努力による、この世界の運命を知ってる存在なんすよ…」

「そ、それって…」

「ええ、博士。傍観者や観測者…と言えますかね…
ですので余計な知識や運命については、できれば入れ知恵はしたくないです。
でないと実る運命が変わりますから…」

俺の独白が続く…

「ただ、予想外だったのが猛烈な攻撃を受けた事…これでまいっちやって、おとなしく捕まる道を選びました…
壊さないと…つまり介入しないと駄目だったので…」

「つまり我々の攻撃がなければ…?」

「まあ普通に傍観者でしたね」

「えっとこの世界には？」

「技術のコピーにきました…異能力での…」

しずかになる…

「まあ…都合がよいかもかもしれませんが、皆さんの同意のもと見逃してければ、うれしいです。

なかった事にして…

できるんすが、無理に逃げようとしたら、
なんかアテンドでついてる方が切腹になる…って言われたので…」

「ほっほっほっ…わしは見逃してもよいとおもっぞい」

「そうですね…自分も」

「駄目よ」

「博士？」

「条件が幾つか……技術の収集の仕方を見て見たいのと、異世界少しみてみたいわ。平和な世界もあるんでしょ？」

「収集の仕方は今ここでも…まあ平和な世界もありますね」

「その世界遊べそうなところない？」

「あ、ん、知ってるるところだとディズニワールドから大江戸温泉コースかな……」

「そこに連れてってくれるなら良いわよ…どう？少佐、次の作戦まで間があるんでしょ？」

「おもしろそうです。艦長！！」

「温泉のう……してでいずにいわあるど…というのは？」

「ウォルトディズニーによる、ディズニーの世界のキャラクター達
がおりなす、遊園地のでっかいものと思っただければ」

「遊園地のう…浅草のはなやしきの様なもんかい？」

「あれの…百倍以上かなあ？…俺もはつきりと敷地面積はわからない
のですが…」

作注 カオルは現代の花やしきを想像してます。

筑波教官は、動物売却前の戦前のはなやしきを話してます。

「ほう…百倍とな？…おもしろそうじゃのう…わしもついて行
きたいのう」

「博士、それでいきますか。よろしいですか？渚カオル殿」

「ええ、ご理解頂き、ありがとうございます」

深々と礼をする。

「じゃあ、朝食もすんだようですよ、技術の収集の仕方を見せましょう……バルディエル」

カオルは席たつたあと、唱えた…

カオルは顔だけのこして壁と同化する。

「なんと、面妖な」「非常識」「壁から顔」「どう同化してるのかしら？」

「まあこうやって、同化し、機種情報を取得、持ち帰って再現してるんすよ…時間あるので質問すが、アヒル達の製造情報何処で？」

「ああ、飛行機の？」

「ええ」

「あれはこのドック艦にあった技術情報ですね」

「なるほど…」

カオルがドック艦掌握…

「これでドック艦すべてをの情報がわかります。で、イロウル」

ドック艦の研究施設および整備製造施設から情報を抜き出す。

(ラッキー 8周目……ほほう、データがループして蓄積する扱
いなんだなあ…通りで…)

「この力で、コンピュータにアクセスし、情報を取得しました…」

「この部屋から？」

「ええ、今ではドック艦が自分の身体ですから…後ろを見てくださ
い」

「ほっ」「え？なんで」

手を生やしてる。

「こんな感じですよ」

解除した…

「これでこちらの情報取得は終了しました…後は何時でもお連れ出
来ますが……？」

「1時間後でどうかしら？」

「わしは構わんぞ」「自分は大丈夫ですね」「あたしも」

「1時間後に」

「あ、一言…これから行く世界は私服でと、銃刀剣の所持は禁じられてます」

「なんと!?!」

「禁じられてるからこそ、治安が安定されてますので、よろしくお願ひします。あと行程は一泊丸二日で構いません?」

「艦長?」

「…それでいきましょう」

「わかりました、では1時間後に」

……

カオル報告

鋼鉄の咆哮2Pのプレイヤー側の技術情報取得できました。

作者「さて、次は現代トリップか……」

あ号「作者……現代トリップは、プロットに？」

作者「ないな」

あ号「いいきるか……」

作者「そもそも鋼鉄の咆哮2pは入ってたが……ストーリーどうするかなあ……だったし、この鋼鉄の咆哮編はいきあたりばったり……があの場合なら明らかに襲われるからさ……一応自動制御扱いだろうし……アヒル」

あ号「……前回のメデューシンは？……」

作者「……俺だっただらの想像w」

あ号「その前のガンパレは？」

作者「そこらへんは、介入するならここだの場面が、できてたね」

あ号「Zは？」

作者「ある人物以外はプロット内…人物関連したのはプロット外」

あ号「ガンダムは？」

作者「まだ本編に介入状況いれてないが、プロット内」

あ号「ターミネーターは？」

作者「プロット内」

あ号「メタルマックスは？」

作者「プロット内だが……変更なるかも……」

あ号「他には……」

作者「もうネタばらしやめいwあ号はおちる運命なんだからな……」

あ号「……作者、わしにも、チートを……」

作者「……無理？」

あ号「orz……あ、だが対抗手段できれば……いいんだよね？」

作者「……現状対抗手段フラグたつと思う？
ただ火力で押ししてるだけだぞ……今までの人類とかわらんぞ……」

あ号「…………」

さて今回は、現代での珍道中！！

デカルチャー

本編でも書きましたが…観光ガイド編を飛ばしました…

原因はリアルでディズニーワールド最近行ってないので、
と忘れ部分が多かったのです…

ご了承下さい

現実世界トリップは略させて下さい…

実はデイズニワールドが最近行ってねえなあが…昨日書いてて気がつきました…

なので後日外伝の形で…という事で…

大江戸温泉は好きでいってますが…

本編上にてお知らせいたしました。

四日目…

2001年7月10日深夜

世界扉からでてくるカオル。

丸二日間使ってしまったガイドだった…

「だだいまあゝ11号」

「お帰りなさい。マスター」

「風呂入って寝るわ…明日朝ね」

「イエスマイロード」

翌日

2001年7月11日

「11号状況は？」

「陸戦強襲型ガンタンク全機完成で202機、
ザメル全機完成で80機、

魔ドムもB-01分完成済み、慣熟している。

核融合炉の燃料在庫52基分。

メデューシンはもう少しで完成、内装段階。

もう一つの戦艦ブロックも完成し、ハッチもできたから、とりあえず陸戦強襲型ガンタンク1個少隊と、随伴でT-850が警備中、サラミス改も出来上がったよ」

マストライバーはシャトル用は予定より繰り上がりで完成。

戦艦用は40%、

空港滑走路は70%、

施設に関しては40%ってとこ」

「と…核融合炉の残りも、ハッチの警備の問題と、施設の40%が

か……
陸戦強襲型ガンタンクは、佐渡島の形から考えると、
最低8個連隊は必要だからなあ……
あ、シャトルマスドライバー試運転は？」

「まだ」

「シャトル製造してなかったよな……内装抜きだと……どのくらい
でできる？」

「テンプレーション同型機なら、内装抜きで、明日午前6時前には」

「なら試運転明日入れといて」

「イエスマイロード」

「施設が遅いのは？」

「モデルがないから難航中、管制や整備場、ターミナル等はできた
けどね」

「あゝモデルか………確かに………入ってないね」

「なんかあれば短縮はできるよ」

「……考えとく」

「できれば早めに」

「で、核融合炉はまた行かなきゃか…まあ後で、で警備か…」

格納庫のハーヴェスト君を改造し、配置する事にした…

シオルダーキャノンの代わりに127mmガトリング、

35mmCIWSが8

照明弾を取り付け、

陸戦強襲型ガンタンの代わりに、警備にあたらす。

T-850は1人だけにした…

ハッチの近くででーんと佇むハーヴェストが、これから名物と…になる…

「戦艦ブロック」

継ぎ接ぎビッグトレーを出し、
バルディエルで同化し、改造タイム。
主砲を排除、
艦橋を前の方へ移動し、
変わりにMK41SL-VLSを210基、
無限装填装置を組み込む…
仕上げにミサイルの誘導面でGPS/INF複合誘導…
一応35mmCIWS4門つけ、ミサイル陸上戦艦に仕上げた。
ビッグトレーミサイルバージョンの誕生だ。

「ねえ、マスター」

「ん？」

「この無限装填装置、マスターじゃないと作れないよ。イマイチ理解不能」

「プラントでも無理なん？」

「物理を無視した異能の力だから生産できない」

「じゃあ、ミサイルバージョン作るさいは、無限の部分の仕上げが

必要なわけだ…」

「うん。それでお願い」

(そういえば無限装填装置も見たかったけ……)

副司令に明日のマスドライバー試運転の際の、シャトル受け入れも含め、お願いしようとした。

(そういえば…)

「なあ11号、航空管制って、どうなってる？」

「航空管制？……話通ってないよ。単独でするんじゃない？」

「……………作るだけ作ってか……………話してこよう…」

「 副司令執務室 」

「コンコン」副司令いますか？」

「いるわよ、じじい」

シユン

「失礼します」

「なによつ?」

「実は、新しい滑走路や空港の管制等諸々と、無限装填装置についてなのですが…」

「ああ、そうね…航空管制は司令部にいつて頂戴。無限装填装置? 手に入れたの?」

「ええ、昨日帰ってきましたから」

「早速見せて…と言いたいんだけど…
やっぱり撃たないと始まらないかしら?」

「だと思いません」

「思いつてなによ……使える演習場はつと……」

「設計するのではなく、感覚で作れたり弄ったりするだけっすから……」

「ほんと異常ね……明日しかあいてないわね……明日の朝で、大丈夫かしら？」

「入れといて下さい。……けど埋まる程少ないのです？」

「あんたのこのB・01よ……連日連夜金色が見かけない日は、ないわね……」

「あゝすみません……」

「しかもこつちの所属の戦術機じゃ、武装や当たり判定同様条件にしても、
歯がたたないって話じゃないの」

（ドムの特性生かしてるのか？……彼女らももう、前線連れていくなかな？）

「なる スカウト冥利につきますね」
ところでA・01とB・01のは対戦は？」

「そういえば…まだ入ってないわね……」

「確か今だと、09対28だから変則編成での対戦になるんですよね…？だから対戦やらないのかな？」

「新任が、後期カリキュラム中だけど…5人のぼって来ればね…しかし、少し使い潰しすぎたからねえ……機密上他のと対戦できないし」

(あの乳くバキュン>達か…)

「ん…まあ近々入れるようにします…とりあえず明日っすね」

「明日ね…あとは？」

「俺からは以上ですね」

「あたしからは…」

アメリカさんとなんかあったの？

妙に違反行為でアメリカ系とみられる、諜報部員がMPに捕まって

きてると報告がきてるけど…」

「あゝ……処理しときます」

（多分5人の関係かな？）

「あとは？」

「ないわね」

「じゃあ失礼しました」

＝＝ 横浜白陵基地司令部 ＝＝

（と、航空管制って誰にききゃあ？……ピアティフ中尉がいた）

「ピアティフ中尉」

「あ！カオル大将閣下！！」

「ちよい、それ止めてくださいよ……こそばゆい……」

「閣下は大将ですので……」

「階級無しでカオルでね…でないとなんかやりづらしい……」

「ですが、閣下……」

「…上官命令」

「はっ！！…ではカオルさんでよろしいですか？」

「…まあそれでいいよ…」

と、新滑走路と、新しいシャトル打ち上げ施設についての、航空管制について話にきたんだけど……」

「航空管制は、この者が統括しております」

リン・ミン準尉が紹介された…

「あ、リンが航空管制統括？」

「はい！…そうですね…」
「昇進おめでとございますカオル大将閣下
！！」

「階級は止めてください…年齢相応の付き合いにしましょう 上官
命令つすよ」

「は、はあ…」

「と早速つすが、航空管制の打ち合わせについてなんですが…
俺の方で、シャトル移乗や着陸等に2本建設中と、
マストライバー施設建設中は聞いてます？」

「はい、こちらでも管制どうなるのか？
で、部署内では話題に上がったので…」

「俺としたら、そのまま管制お任せしたいかなあ…なんすが…
駄目なら駄目で、こちらでも持つようにはします。」

「……………わかりました。こちらで管制持ちます」

「よろしくお願いします。あ、あといつてると思います、明日の
シャトルの件お願いしますね」

「はい、わかりました」

「じゃあ、明日ね」

「 ジオフロント 医局 」

「なあ11号、こっちのエリアには諜報部員来てないの？」

「B55関連で…は報告上がってないよ」

(地表だけか…さてと…)

まずは、2重スパイの人から…起こして…

「帝国さん、すみませんでした」

「ばれてらっしゃるんですね…あの任務を言い渡された時、放棄したかったのですが……」

「まあ今回は作戦行動中に実弾装備させてたので、責任もって治療した…って事にしておいて下さい」

「わかりました」

次に…スカウト対象者の方を起こす。

「こんにちは、フラッチェ・アンスワルさん」

「!!!え……」

「ご両親は避難の際に死別、今はただ一人の肉親である、妹さんの市民権獲得の為に、CIAとして働いてますね」

「あ、あの……」

「さて、何故わかったの？は置いといて、もし、妹さんが、安全な土地での望まれた生活ができる………どうします？」

「………あるのですか??」

「ええ……空に」

スペースコロニーの画像を出す。

「全長30km直径6km、宇宙に浮かぶ島、スペースコロニーです。一つのコロニーに約1000万人が自立して生活可能になります」

「自立つて……」

「ええ、衣は避難された方々次第ですが、食住は、このコロニー内で可能になります。」

この周囲を浮かぶわっかに、農業プラントが設置されていますので、最初はこちらから提供しますが、三ヶ月もすれば自立可能になりますね」

「……………」

「いずれは、全世界の避難民の方を受け入れる予定ですが、ここにあなたの妹さんが、約2週間後に住める様に手配できますよ」と、したらどうします?」

「!?!……………条件は……?」

「あなたをスカウトしたいかなあ……………なんですが……」

「……………わかりました。よろしく願いします」

「いちらじぞ」

帝国さんの二重スパイさんは…ボー然してた…

「帝国さん」

「は、はい!!」

「多分上からくるとは思いますが、あなたからも情報提供しても、いいですよ」

「わかりました!!」

「じゃあ、残りの3名起こしますか……………あ、アンスワルさんは、早速、妹さんの件手配しちゃいますね」

こっちの基地からT-1000がHSS T操縦し、アメリカにいるT-1000が妹さん確保するようにした。

「はい」

「アンズワルさんは25号!!……彼についてって下さい」

ついてくアンズワルさん。

残りの3名を起こす。

があまり情報は与えない……

そうしてるうちに妹さん確保の報告が入った……

「ではあなた方4名は釈放します……が上に、少しよってからで願
いします」

〓 〓 ある諜報部員 〓 〓

俺は、横浜白陵基地に捕われている同僚の調査、
という事で潜入しようとしていた……

幸い国連軍だからIDさえ手に入れりゃあ、どうって事もない……
……… だっ たんだが………

いつもの様に基地のIDを手に入れ、ゲートに近寄った……

「IDと所属を言ってくれ」

MPが話かけてきた。

カードを見せ、所属をいい、

許可もらって入ろうと、一歩足を踏み入れると……

ビリビリビリビリ

「ギャン!!」

俺はのされていた……

「おい!!」

「不正IDと確認、不法侵入により、貴様を逮捕する」

「……そうなのか？」

「そのIDカード持ち主と身体的特徴が違う、よって同一人物と認められない」

「わかった………待機室!!また逮捕者だ!!人をまわしてくれ!!」

俺は逮捕された……

40名程が不法行為で逮捕されてるらしい…

うち、不法侵入が39名との事でこつちを担当する事になった…

一斉に文句を言うが、

「アルミサエル」

一人一人本名、どこ所属か？家族、大切にしている物を言う…おとなしくなる…

前回のようなかawaiiそうな身の上の、スカウト対象者は今回はいなかったから、その内の一人の取り調べを紹介しよう。

「次ね」

「や、やめてくれ…大声でいわないでくれ…！」

「だゝめ…アルミサエル」

「ヤダー…！」

「本名、マイケル・クリント、所属CIA極東支部ね。家族構成は、母方のお爺さん、両親、兄、弟の6人構成か……うっさいね」

喚いて妨害しようとしてたので、ガムテープを口にはる。

「え〜と、エッチなもの隠しはしょは、職場のロッカー内、鍵の番号は84125、クレジットの暗証番号もわかったけど流石に内緒にしとくね。

で、大切にしているものは…1/1のダッチワイフ…

寮のベットの隙間に隠してるか…

ほお、一週間に一回楽しむのが趣味ねえ…

よ！このスケベ君」

ガムテープ貼ったあとの顔の表情、驚愕、言わないで、涙ダ〜となつたのは…
言うまでもない。

とこんな感じで取り調べはすすんだ…

あ、潜入した同僚の彼女を寝とつたや、妻とやってる人もいたし、
勿論暴露しましたよ。

ロリコン趣味もいたし、
その時、同僚の一人がお前、俺の娘に近づいたのは？と聞いてきたから、
うん。エッチな事したい為だよ〜と、もちろん変わりに答えてあげました。

裏工作で同僚をおとした人もいたし、

とにかく当人の秘密を同僚の前でぶちまけまくりましたね。

その後解放……

皆、今回保護した諜報部員の調査だったからね。

そこまでにしときましたよ。

……

カオル報告

頭を覗きまくって、

二人程、ナンパしまくってた人がいたので、少し洗脳……

ウホッにしました

ナギ少尉「作者なんで〜」

作者「すまん、本当すまん……お詫びに後書き準レギュラーでいいか？」

ナギ少尉「それよりか、M u v - L u vの世界でドンパチやりたい！！」

副長決戦の時あたしも戦力もってれば、あのおばさん倒せたのにいー！！」

作者「おいおい、まだ310らへんだろ？」

ナギ少尉「あたしは、エクストラ世界からきたナギ様なのだあああ〜」

作者「……………」

ナギ少尉「あと、コンピュータって無理矢理こじつけ〜w」

作者「……………イジイジ」

ナギ少尉「作者いじけてんの〜」

作者「だってさ、だってさ、8週目の武装をさ、ストーリーどおりに進めるのはさ、それしかないって思ったんだもん……」

ナギ少尉「良くあるループで良いじゃん」

作者「それだと、いい加減ループ世界から抜け出すネタになるよ？」

ナギ少尉「で、M u v - L u vの世界に一緒についてって〜」

作者「ドック艦ごとか……けどウィルキア帝国はどうすんの？」

ナギ少尉「そりゃあ、カオル君がバツサリとあんさちゅやってくれれば……」

作者「……ナギ少尉、おぬしもわるよのう……」

ナギ少尉「いやあ代官様程ではあ……」

二人の密談は続く……

エクストラでのナギ少尉はこんな感じではっちゃけてます。

ビッグトレーのサイズダブデ並と思ってましたが、

戦艦を4隻横に繋げたサイズとわかりましたので、

修正バージョンでかなり変更しました。

ちなみにVLSは4セルで1基、1基あたり約6m x 約6mになります。

2001年7月11日

朝……

「おっはよう〜」

「マスターおはようございます」

「さてと、こいつの試験か…」

ビッグトレーミサイルバージョン

ビッグトレーは元々格納庫がなく、MSは搭載できない、移動砲艦兼、前線司令部の役割をはたしています。

数少ないビッグトレーを何故魔改造したかというところ……
海上も走れるホバークラフト機能、
何処までも平地である限り進む、陸上砲艦の部分が重要なわけだった……

MSを搭載する際は、

甲板の上に乗るか、カーゴを連結する必要にはなる。

カーゴ連結機能は勿論つけた。

最高速度、熱ジェットを使い、
300km/hで平坦である限り爆走する巨大砲艦である。

が……

(しまったああああ)

新潟ー関東地方を結ぶ山脈の問題……わすれてたようである……

(BETAが使った長野県ルート通るしかないのかな？
か、海か琵琶湖ルートか虚数空間輸送か……)

ユーラシア大陸にいけば、
何処までもBETAによって、平坦に削られた大地が広がってる為
の話だが……

さて、このビッグトレー、全長213m、全幅134mの巨体を誇
る……
ちなみに、鋼鉄の砲鋼2Pの160cm砲なら計8門は積める事が
わかった。

(そのバージョンもありかな……
が、甲板上に乗れなくなるか……)

作注……翁さんありがとございました。

「きたわよ」

副司令が見えたようだ…

「この……でかぶつとって良いかしら…が、例のを組み込んでるの？」

「ええ、そうっすね、地球連邦軍の陸上戦艦ビッグトレーです。けど、武装とか外見もかなり弄りましたが…」

「弄るねえ…まあいいわ、早速見せて頂戴」

「こちらに…」

ハッチから入る。

本来は階段のみだったが、エレベーターを1基のみ設置、そのまわりを螺旋階段がの仕様に変更してある。

流石に全高85mを階段で…はねえ……

また居住区画、休憩室、シャワールーム等も備えつけのがあるが、拡大させてある。

セル甲板にでるフロアにもあるがそのまま、艦橋へ……

ただっ広い艦橋ながらヤドカリが、二体それぞれのブースにいる。

「彼等だけ？」

「ええ、片方はミサイル担当、
片方は操艦、通信、火器、艦内環境を担当します」

「……………つくづくチートね……………」

「じゃあ、発進させますか」

駆動音が高まり、艦が浮き、戦艦ゲートまで前進する。

昇降エレベーターまで進んで一時停止、エレベーターがのぼり始める……

のぼり始めると戦艦頭上の地表ゲートが開き始める。
地表出入口は……勿論、250m x 250mのプールにしているのは
お約束。

水が凄い勢いで吸い取られ、底面が横にずれ、縦穴が見え始める。

ハーヴェストが見守るなか、縦穴から姿を現すビッグトレー……

のぼりきつたところで、

「微速前進」

前方に滑りだす…

「と、ターゲットは第一演習場北端ですか？」

「ええ、そうよ」

「距離12kmか…：…近いけどいいか…」

自軍衛星からターゲットが写しだされる…：…廃棄トラックだ…

「ターゲット目標にむけ、斉射！！」

「マスター斉射すると横浜基地こわれるよ」
と空中ホログラムがうく。

「斉射中止…：…まじで？」

「まじもまじ…：…210本を何回うつつの？」

「最低1順以上…」

「1050本ね…トマホークはTNT火薬を何kg？」

「454kgだっけ…うん壊れるね…1基だけ使おう。」

「何百メートル掘るつもりだったんだが…」

「いいよ！！はい発射！！」

トマホークを今回積んでいる…

続いて、2セル目が発射される

更に続いて3セル目射出、

続いて4セル目が射出…

(さて、後ろはどうなってんのかなあ???)

VLSは、4セルで1基のセットになっている…のでこの段階で空
になってる筈だが…

蓋が閉まっていた…

つまり…

2巡1セル目が射出された…

「……物理無視してるわね」

「作っておきながら…同感です…」

「VLSの蓋が開いてる時には空なのよね？」

「ですね…」

「閉まると、ミサイルが装填してるわけ？」

「……みたいですね……」

ミサイルの射出はどんどん続いてる…

「もういいわ…蓋が閉まって充填する瞬間みたいけど、
なんか弄られるかもだから…」

「射撃中止!!」

映像は目標地点を映しだしている…

クレーターとなり、20mクラスの穴が空いていた…

艦を戻すと…次はマストライバーのテストだった…

「」 「アメリカ軍情報司令室」 「」

「この横浜にあるのがそうか？」

「はい、マストライバーというものです」

「ループ式なのか…」

「のようですね」

「まだ彼等のシャトルの諸仕様はあがってきてないんだな？」

「はい…今日が初披露目だそうで…」

「なんとしても我が国が1番でなければ困る、とにかくあの技術は手に入れなければ…」

「なんとしてでも!!」 〓 〓 横浜白陵基地 〓 〓

戦艦用マストライバーと違い、シャトル用は民間人が乗るため、Gがかけれない…なのでループ式で加速をつけ、射出の形になっている。

射出後、熱核ロケットで途中で大気圏脱出速度を得る…計算となっている。

「それではマストライバー試運転に入ります。よろしく願いします」
カオルは高らかに発言する…

シャトルが前進し始め、加速ループ路線に進入する…

ここでマツハ5まで加速し、射出路線に切り替わり、一気に熱核ロケットと、ともに静止衛星速度まで大気圏中に加速する。

重力が弱まるとともに加速はまし、

コロニーへ向かう際はそのまま加速続け、衛星軌道脱出速度を越すようになる。

（反重力している見にとっちゃあ…膨大なエネルギーの無駄使いだがなあ……）

司令部のマスドライバーでの仕事は管制と、監視のみになる。

加速路線、射出路線の切替はシャトル側での操作となる……

「テンプレーション01より一分前と入りました」

パイロットは勿論ヤドカリだ…

「進路オールクリア、いつでもどうぞ」

制空権を奪われてから、民間航空は成り立たなくなっている。過去に墜落させられた事もあったからだ…

また密航者等の問題により、現在は時間がかかるが、大航海時代へ

と最突入している。

あとはHSS Tによる移動…これはごく一部のものに限られていた。

なので、実際的には航空管制は軍用のみで、かなり暇だったから、仕事が増えたと喜んでいた。

「射出路線に切り替わりました！」

次の瞬間、射出口に設置してあるカメラが衝撃波で揺れ、シャトルがそのまま天高く登っていくのが見えた……

加速路線から射出路線に切り替わる前段階で熱核ロケットに火が入れられ、火を噴きながら空高くあがって行く…

今回の試運転は、周回し、再突入までになる。

なので約1時間半後までジオフロントの宇宙司令室へと移動した…

〓 〓 宇宙司令室 〓 〓

C2グリッドに新設した、コロニー、宇宙に関しての処理室だ…

現在L3 L4 L5にあるチューリップ、及びL5宙域隊、L5の各コロニー、

またアステロイドベルトや木星に向かっているチューリップの状況

を、
またテンプレーションの様子を映し出している。

「マスターいらっしやい」

「どう？テンプレーション01は？」

「周回軌道まわってるね」

「ここの裏側あたりかな？」

「うん。あ、マスター…木星の衛星にもBETAの存在確認できた
って通信が入ってる」

「とうとう…ガニメデ？」

「いや、4つとも…」

「ありやあ……となるとセレスもやばそうかなあ……」

「そっちの方は報告が上がってないね」

セレスはアステロイドベルト帯に属する、直径950kmの小惑星だ…

木星の4つ、いずれも月か同等またはでかい衛星である。

「となると…やっぱりその外側の惑星や、衛星も既に占拠されてるとみた方がよさ気かな…」

月と同等以上だと土星の衛星でタイタンがある。

少し小さいが海王星のトリトン、もう一回り小さいが1400kmで土星衛星のイアペトゥス…

「かもね…」

「ほんと、この世界に俺が来なかったら、どうなってたんだか…」

多分2周目の桜花作戦のあと、地球は取り戻せ…るかせないかが、宇宙については絶望的でしょう…

300年で木星まで行けるかどうか…

第一月のハイブが、えんらい事になっているかと…

「となると宇宙軍も本格的に目処いれないと駄目か……」

あれの投入かな??

「まあどっちにしる地球の生存圏の確保、余力でたらか……」

そうこう話しているうちに、そろそろテンプテーション01が着陸
シークエンスに入る為、
また基地司令部に行く事になった…

〓 〓 横浜基地司令部 〓 〓

「テンプテーション01、大気圏突入着陸シークエンスフェイズ1
に入ります」

……

「テンプテーション01大気圏突入しました!!」

「予定航路確保よし」

シャトルは大気圏突入時に耐熱パネルが破損等をして…の事故があるが、

テンプレーション01は耐熱パネル自体がない…

よってその事故の確率はかなり減る筈である…

突入でマッハ2.5を超え、シャトル下部は1500度を超えている。

大気圏突入による空力抵抗でだんだんと減速してきた…

「シークエンスフェイズ3に入りました」

シャトルがマッハ3まで減速し滑空し始める…

「フェイズ4間もなくです、進路オールクリア」

なお、テンプレーションは、飛行機としての機能の、フラップ等も備わっている…

の為パラシュートはいらず、262km/hまで減速し、空力が損なわず着陸体制にはいれる…

「視認できました。着陸ギア降りてます」

テンプレーションは無事着陸した。

「テンプレーション01より、機体温度が下がった為ゲートへの進入よろしいか？ですが…」

着陸停止し、ものの20秒…

「え？もう？サーモに切替て…あ、本当…okよ」

テンプレーション01は自力で移動し始める…

「試運転ご協力ありがとうございましたあ〜」
カオルはお礼をいうと退出した…

「アメリカCIA」

「この情報は間違いないんだな？」

「は…！」

彼等は情報室から上がってきた横浜基地マストドライバーによって打ち出されるシャトル、及び着陸したシャトルを見ている……

「……ならば計画急がねば……」

「しかし、肝心の方が、まだ力足りなく踊らされるのに、気がつくかと……」

「むづ……これ以上作業員も増やせないし……」

「そこですが、この方法だと、一ヶ月で見込めるかと思いますが予算が足りないの……」

「なに??構わん追加しよう」

「は!!ありがとうございます」

夜はふけてく……

……

カオル報告

とくには……ないかな?

作者「とりあえず、フラグ消化して……」

「ねーお兄ちゃんにいつあわせてくれるの?」

「私の夫の最後を見とつてくれた方にはいつ?」

「お父さんの最後教えて」

「いつになったらリサイクルさせて貰えるんでしょうか?」

「俺の腹の中にはいつくんだよ」

「私をいつ助けにきてくれるの?」

作者「フラグどもが……リサイクルは明日だ明日!!」

お兄ちゃんは、まだ未定、

奥さん、死んだんでしょ?

娘さん…もうちつとまで…

腹の中は、まだ貯まってねーじゃん…

とりあえず次の次トリップでだ!!

あとは未消化フラグないよな?？」

ただ今フラグ整理中のひとこまをおおくりしました…

第54話 7月13日 投稿日20110127 (前書き)

サブタイトル悩みましたが…思い付きません…

時事の一言

霧島の噴煙すごいですね…

ありゃあ…確かに鉄道動けないです

第54話 7月13日 投稿日20110127

2001年7月13日朝…

「世界扉」

開くとメールが受信される……

『カオル様、食料、リサイクル用の物資を用意できました、受け取りをお願いします。 田中玲奈』

(早速打ち合わせの電話するか…)

プルルルプルルルカチャ

「カオル様?…丁度よいところで…助かりました…ありがとうございます」

「助かったって?なに?」

「はい、実は痴漢されてまして…」

「はあ?捕まえれば良いじゃん」

「いえ、複数人いる見たいなんですよ…」

先週と先々週のおんなじ曜日に…も…」

(お世話になってるし…しめるか…痴漢だけは赦せないからなあ…)

「じゃあ、来週そっちにいくよ退治しにね…多分一週間ありや資材も仕上がるしさ」

「本当ですか?…是非お願いします…」

「で、食料、物資の受け取りは?」

「あ、はい。先日の倉庫にございますので…」

「了解、じゃあ今からいくから…とりあえずもう気配はないん?」

「あ、はい。わたくし降りたのもう大丈夫です」

「了解…じゃあ来週通勤前ね」

「はい、前日夜あたりに、お電話下さいまし」

「あいよ…じゃあね」
カチャ

「11号、田中玲奈さんの肉質再現できない？ポテイスーツみた
いので…」

「できるけど、なんで？」

「ああ、痴漢退治さ」

「……なら色々機能付けていい？」

「ああ、自重せよにな…」

「イエスマイロード」

「さて、廃材回収してくるか………」

世界扉を潜る…

〓〓現実世界〓〓

相変わらずの俺の部屋

(廃材回収つと)

扉を消し、同化し、幻影をかけ、
物資を回収しにいった…

粗大ごみの山だった…

(……確かに試してみる？つたけど一回めからか……)

あと食料のコンテナ回収し、前回分の空コンテナを返却した。

挨拶後、全部回収し、世界扉で戻る…

粗大ごみをだし、別枠でもってくから、資源化しといてくれ…と命令しておいた…

また食料コンテナを集積所においたので、回収来るように伝言。警備にはT - 850を数名つけた。
承認用に24号つと…

「あとは、ガンダムの世界って燃料ちよっぱるのと…
ガンパレの件かたずけるのと…
で、メタルマックスか…
つつか、いくら燃料ちよっぱりにいっても足りないなあ…」

「マスターがんばれ！！」

コバツタ達のおかげさまで、日産50機超えしてるから…の状態であつた

コバツタ10体で1機組み上げる事ができる。あとは資材と、燃料の問題だつた…

資材もこの間コロニー補修 陸戦強襲型ガンタンクフル量産、ザメル量産、弾薬生産で心許ない…

(早く小惑星帯や木星着かないかなあ……)と思うこの頃であつた

…

今まで集めた機数は7000機越えていたが、燃料回収できたのはそんなもんである…

「あ、マスター基地MPから連絡、奇妙なおじさん捕まえたつて」

「おじさん？アメリカの？」

「いや、データによると日本帝国情報省外務2課課長、鎧衣左近…

珍しく施設内警邏中のT-850が捕まえたらしいよ」

「へえ、施設内か…」

彼等が配置されてから門を通る諜報員はとことん捕まっている。

偽造IDはデータバンクで見破る…

また塀を乗り越えようとしたのも捕まる…

T-850の探知能力で塀を越える時点で捕捉されるのだ……

つまりだ…100%不法侵入は不可能だった…のだが…

流石、鎧依課長、やってくれて、

堂々と施設内にいた際に、御用となったらしい…

「でもなあ…帝国さんなら、わざわざ諜報員を派遣しなくとも良いのよ…」

「どうするの？」

「……………いやパスあげちゃえ。一般職員レベルで」

ゴリア…いいんかいそれで……

「わかった…娘さんに会いに来たのかな？」

「ん？娘？」

「うん、5月に訓練評定落ちた、207小隊のB分隊にいるね」

「ほ」

「しかもそのB分隊、面白い顔ぶれ」

「ほ」

「殿下の双子の妹さんとか」

「殿下の？」

「記録みるとまたまた面白い…影武者みたいだね」

「ふむふむ」

「あとは、現首相の娘さんとか、あゝ投獄…人身御供か…された
中將の娘さんとか」

「人身御供？物騒だなあ…なにがあったんだ？」

「避難民を守る為に命令に背いて、
国連だけど、主にアメリカが引き渡し要求、証言強要させる気満々
だったみたいね。」

で、国内処分になんとかして、

それでもアメリカがいちゃもんつけ、結局敵前逃亡罪で投獄された…

その当時はアメリカとの同盟頼みだったからね〜

けど結局は、京都強襲後アメリカは同盟解消、

後に、明星作戦でG弾の実戦試し撃ち

全ては、G弾の為に丁度よかった人だったね」

「G弾の為に利用されたか…」

「みたいね〜…であとは国連事務次官の娘さんと」

「なんか身分だけ見ると…大層な人達の関係者が…」

「合格させたくない意図はあるみたいだね」

「成る程…」

「日本が落ちても大丈夫なように…もしもの為の人達のグループね」

「ふむふむ…じゃあB分隊分のは」

「必要ないね」

「だな…来年度まではA・01は、14機って事か」

「14機?…ああ、10月ころに上がってくる新任のね」
石橋が唐突に……

「おう」

「よっす」

「やけにご機嫌だなあ」

「まあねえ」

「そうそう、機体にはもうなれた?」

「ええ、1番乗ってるんだもん」

「だよなあ〜けどイッシーと出会って約2ヶ月か…」

「ほんと、あの時はありがとっね…錯乱もしちゃったけど…」

「いや、いいよ」

「うん…」

……

「ところでイッシー…なんかようあつたん？」

「様子見にきただけ〜」

「ん…わかった…じゃあこっちの方すすめなきゃ…B-01だなあ…」

「そついえば新しい機体になってから、B-01の人達と訓練してないんだけど…人数も増えたのよね？」

「ああ、28人にな」

「あたし達よりが多い……」

「まあスカウト方法が違うからなあ……」

「確か、死ぬ運命の人達だっけ？テストパイロットの二人の腕は認めるけど……強いのか？」

「ああ、リストからは殆どが、テストパイロット達だからな……多分強いぞ」

「今度演習お願いして見ようかしら？」

「機体特質がそもそも違うからなあ……まあ話しくわ」

「部隊内だとね」

そうはなしながらB・01のデーターを開いている。

（確か尉官の人いたと思ったけど……）

あれ？全員少尉か？

「けど…カオル…なんで女性ばかりスカウトなの？」

「……わからないなあ…何故だか？」

「……まあ良いけど」

(？…なんか急に気温下がった？)

「あ！成る程…新隊長選出の為に模擬リーグ戦かあ…」
カオルは報告書を見つけた。

「隊長まだ決まっていなかったの？」

「ん〜少隊長経験者は何人かいる…みたいだけど、
中隊、大隊規模はいないみたいだね…
だからか…」

(ヤザンとかでも少隊長だったしなあ…)

「ふーん…面白すぎるのねえ…隊長の席を模擬戦でか
こっちはそうはいかないよねえ」

「まあ何しろ新設だから勝手が違うと思いなよ」

「うん」

（ん〜大隊〜連隊規模の侵攻なら、連れて行きたいなあ…が展開速度か…ベースジャバー量産かな？）

マツハ０・８３まで、でる二人乗りのホバークラフトだ。

「ん？今度は何みてるの？」

「ああ、SFS、MSのサブフライトシステムさ…こいつはベースジャバー。」

二機乗りながらマツハ０・８３まで出せるホバークラフト。

一応長距離移動の際の休憩所付きだよ」

「マツハ０・８３？機体乗りながら？凄いなじゃない？」

「あとは、音速超えできるSFSか……」

常識的に考えてみよう…全身で音速の衝撃波を受けると……ねえ……

「うんだから、筒状というか、戦術機をソニックブームから守るSFS考えてるよ…かブースター？」

「カオル誰と話してるの？」

「いや地の文と…まあ後回し、先に燃料の問題だな…」

カオルはそういうと、大隊から連隊規模の侵攻監視、それに介入の要望の旨を関係各所に連絡するようにと11号に伝えた…

「じゃあそろそろガンダムの世界にいつてくるよ」

「あ、いつてらっしゃい」

「11号よろしくな……」世界扉」

行き先思い浮かべながら飛ぶ
00791026北米 機動戦士ガンダム、オデッサ攻略の為の陽動作戦が開始された直後である……

……

カオル報告

ミッション痴漢退治請け負いました。

ミッションリサイクル進行中です。

第54話 7月13日 投稿日20110127（後書き）

作者「あらたなフラグだったね…痴漢退治か…」

カオル「作者痴漢された事は？」

作者「あるわけないだろ男だし痴女なんか都市伝説だよ
痴漢捕まえた事はあったなあ〜」

カオル「お、参考に聞かせて」

作者「埼京線って池袋ー赤羽間はかなり混むのしってるよな？」

カオル「うんうん朝は特にね」

作者「で、コンサートの帰りだったから、22時くらいだったんだ
よ…まあまあ空いてる動きとれなくはない…状態」

カオル「うんうん」

作者「で、いやに体押し付けてくんなあ…酔っ払いか？と思って文

匂いうために振り返ったら…
女性の体の前に後ろの男の手がのびてまさぐってたんさ」

カオル「へえ」

作者「で、てめーなにやってんだ！！で怒鳴りちらして、
十条で逃げようとしたとこで後ろからむんずと捕まえた…っうわけ」

カオル「それから？」

作者「まあ赤羽に交番あるの知ってたし、赤羽の交番に突き出すけど、それでいい？と女性に確認とって、
赤羽でそのまま力付くでヘッドロック状態だったな…で引きずりだし、

エスカレーターでそのまま東口交番まで連行。

改札のひとには、痴漢なんで交番に突き出しますからで、通ったね」

カオル「で？」

作者「逮捕者だから、俺も警察署まで付き合って、調書つくるのに、
3時間近くかかったね」

…勿論終電なくなってたよ…

で、何故か、逮捕者でなく、逮捕協力者になって、
捜査協力費3000円貰って、警察の覆面パトカーで、家まで送っ

てもらったわけ」

カオル「で、なんかあった？」

作者「なに、電車男みたいなのを想像してんだよ……そんなつまみ話ないよ。そこでおしまいっうわけだ」

カオル「え〜……」

作者「まあ、覆面パトカー乗れたのと、時間×10000円の捜査協力費、とかいい経験になったさ。

覆面パトカーなんか、そうそのれないしなあ〜

…あ、救急車は2回怪我と2回事故で計4回、消防車は…動いてるのなし、軍用車も動いてるのはない…な

朝霞駐屯地祭では乗れるみたいだが……」

カオル「作者色々な人生あるんだね……」

第55話 再びガンダムへ 北米大陸編 投稿日20110128

さて… 皆様はヘリウム3 木星輸送船団、
は中立で条約により手出しできない…

ガンダムファンなら常識だと思いますが、
各陣営がヘリウム3を木星輸送船団から、買った後ってどうなるん
でしょうね？

まさか、輸送船団が直接相手方の本拠地へ輸送するのを、みすみす
見過ごす…

うんな状況なら木星輸送船団を、条約無視でも乗っ取り独占します
よね？

の独自見解から思いついたある1話です…

side 木星軍MS乗り

北米大陸にて、ヘリウム3輸送妨害任務をこなしている…グレン少
隊の一員だ…

条約により、カナダの木星輸送船団の基地につくまでは、妨害でき
ない…

が、基地から100km以遠については妨害できるようになる。
その100kmの円の外側から各連邦への基地への…
俺らはジャブローへ向かう輸送機を…というわけだ…

もっともサイド6に関して本國側は同様なんだが……

そんな訳で、北米大陸に関してはジオンには、重要地域の一つであった……

(まだ来ないか……)

野営し始めて6日目……

カナダの木星輸送船団基地に、
サイド6からのヘリウム3輸送船がはいつて一週間目だった……

カナダの基地にミデアが沢山向かってる情報が入ってる……

向かう途中を落としたり、また仲間が掃討されたりして、とにかく
攻防が激しかった……

俺ら側から見れば、ヘリウム3を積んだミデアを落とせば勝ち、
連邦側にしたら守りきれれば勝ち……

偵察やら欺瞞やら乱戦模様になっている……

そんな戦場であった……

(当たり前か…?)

そう思えるようになったのは、
頻繁に偵察行為がされるようになってきたからだ…

15分に1回のペースで、偵察機が飛来してくる…

主機を落として尚且つかバーを被せ、寒い中僚機と共に潜んでいた…

「おい！！来たぞ！！」

相棒が声かけてきた…

見るとミデア2機編隊、セイバーフィッシュ2機、フライマンタ2機、
空を飛行している…

(まだまだ……もう少し……)

「行くぞ！！」

愛機のザクキャノンのコクピットに滑りこみ、ジュネレーター起動
スイッチを押す。

ウィー…

唸り始めるジュネレーター…OSがチェックしはじめ、モニターが

シートからの隙間を映しだす。

起動スタンバイ、と同時にザクキャノンはシートを跳ね退け、

「イーヤッハー!!」

彼は打ち合わせ通り、対空弾をうちはなつ!!
180mmキャノン、ビックガンが火をはなつた!!

命中!ミデアが片翼が完全に壊れ、制御不能の錐揉み状態になって
落ちてゆく、

相棒ももう一機を同様に打ち落とす…

彼等の必勝方法だった。MSを搭載しようとして、
中では高Gにより出られず、そのまま輸送機と運命を共にする事
になる…

伊達に、輸送機40機以上落としているエースではなかった。

残りの飛行機楽勝…とかたずけると…

『なあ…爆音上がったか?』

「いや、上がってない…よな」おかしい、あの状態なら、正面から
落下し、

ジェット燃料に引火爆散する筈…

『生き残ったか？』

「かもな……けど飛び立てんだろ……敵MS隊が来る前に撤収だ！」

ザクキャノンはシートを剥ぎ取ると、一路カルフォルニアベースへと、

撤収していった…

side〜ジオン軍MS乗り〜 end

side〜ミデア機長〜

(さて…無事に行けば良いけど)

彼女はミデア隊の分隊長だ…

このカナダの木星輸送船団基地へは、通称…地獄への片道切符…

初期の頃は輸送隊損耗率80%を超えて、

今最近でもジオン側が重視してて、損耗率50%…

つまり2便に1便は帰ってこれない…

そんな任務だった。

けど、何時かはお鉢が回ってくる…
損耗率以上にこの核融合の燃料である、ヘリウム3輸送任務は大切な事…

ジャブローも高空偵察、地上部隊を海を超えて派遣し、
偵察、攻戦をしてくれてはいるけど…

カナダ基地に輸送船がきてから、ジオン側も狡猾にミデアだけを狙ってくる…のが、損耗率50%の訳だった…

「さあ…行くわよ!」

彼女のミデアは飛び立った…

今回の作戦は、カナダ基地に無事についたミデア23機を2機ごとの組にわけ、

11方面からジャブローに向け飛び立つ…

内、ヘリウム3輸送は6機…

残りは即応体制をとったジムや61式タンク隊を搭乗させ、迎撃にあたる。

ジャブローが本気を出してきた作戦だ。

彼女達の隊の2機は、彼女のミデアにはジム隊、相方のミデアにはヘリウム3を…積んで一路ジャブローを目指した。

『そのミデア応答してくれ』

「あ、はいこちら105輸送大隊所属8分隊です」

『お、おねーちゃん達の護衛か、

こちら第1025航空大隊所属、マット・ブラン中尉だよろしくな

』

「こちらこそ、よろしくお願いします。

アンナ・クリント曹長です」

『少隊長!!彼女達べっぴんさんですよ、独り身なんだしデートに誘いましょうよ』

『馬鹿野郎!!オープンで喋るんじゃないやねえ!!てめえ後で突撃隊長だ!!』

『隊長ずっこい…』

(どつやら、任務成功できそうかしら?)

と思い始めてきた…

……… 3時間後

被害のみならず、消息を絶った分隊が出た…

襲撃を撃退できた分隊もでてきている状態だった…

『分隊長さん、固い固い、俺らがついてるんだぜ』

『そつつすよ隊長の持論は狙った獲物は逃さないでしたっけ?』

『つつせえ!』

(偵察をしつくしてくしてるから大丈夫だとは思っけど……)

『前方!』

「え!?! キヤアアアアア」

次の瞬間、機体に急激に引っ張られて…強力なGがかかる…

ひっしに立て直そうとするが、反応が鈍い…

『ちい……ウア……』ボン！！

「ぶ……ぶん……た」

(もう駄目なのね……やりたかったなあ……)

正面には地面が見え………

(あれ???)

急にGが消えた………

それに視界がいきなり暗くなっている……

「う………分隊長……ここは？」

「え???………さあ？」

どこまでも続く暗さ……異様な景色だ……

『こ、コクピット………どうなった？』

「あ、カーゴ状況は？」

『重傷だらけだ……辛い命には大丈夫だがな』

『分隊長……あたし達』

僚機から通信だ……

「マーニャ！そっちは？」

『なにがなんだか……消火装置が働いてはいますが……何処なんでし
よう？ここは？』

「アイナ！動かないよ！」

「え？……なんで？？」

ペイロード200tを誇るミデアが、
フルスロットルふかしているのに動かないのだ…

「マーニャ！そっちの機体は？」

『同じく……』

「カーゴ、誰か動かせない？」

『すまん…無理みたいだ…』

「無理つて…とりあえずは大丈夫なのね？」

『ああ、折れたとかだけみたいね…』

「そう、もうちょっと我慢してね」

彼女は外にでる為のハッチを開こうとした…

「なんで??…マリ、緊急キットの中にバーナーあったでしょ？
持ってきて！」

「は、はい!!」

次の瞬間!!

side～ミデア機長～end

カオルは世界扉をでると、消してナビ端末を出した。

今回の目的はミデアと燃料ちよっぱりと資材だったので、
ヨーロッパ地区でなく、北米大陸にきてたのだ…

宇宙歴0079、10月25日…

この日付はオデッサ反攻作戦の予備段階、陽動部隊を派遣しはじめ
た日だ…

なのでうまくいきやあミデアがゲットできるかなあ？とおもいつつ、
前回廃材を取得したオデッサをさけつつ、
北米大陸にきてた…

北米はジオンの重要拠点の一つで、日夜攻防が繰り返られてたからだ…

（あと取得できそうなのがアフリカ戦線、
地球衛星軌道上、サイド1と4、2と6、ソロモン戦後とア・バオ
アクーか…）

全部行く気？？

「だよ…足らなくなつたし…
まあちよくちよくきて帰るの繰り返しになるかなあ…
今回のミデア以外は特には…だし、
サイコミュ専用機は使える人いないだろうし…
あ、そういえば、ザクスナか…」

ザクスナ、カルフォルニアベースで現地製造だよね…

「フワジャンして蒸発させる…絆でやったなあ…
…ゲルJも良い
けど…」

マカクは流石に機体数から厳しいかと思うけど…
どここの明確設定がないし…
けど絆引退したからなあ……」

まあ良いからさっさと進行！

「へーい」

『ミデア何処にいる？』

A 『ミデアとは？』

『脱着式の懸垂コンテナをもつ輸送機、機体色イエロー』

『ただ今検索中』

でもさ、マチルダ狙ったほうが？

「マチルダさんは今オデッサ辺りだから…向こうじゃ資材集められないし〜」

だよな。

A 『当該機種この近辺に2機飛行機中です。ナビしますか？Y/N』
『Y』

ルートがでたので、

「シヤムシエル”幻影”」

一路ナビ通りに飛び立つ…

途中残骸があったのでもちろん回収。

しばらく行くと……

(お…あれか……)

ミデア2機、セイバーフィッシュ2機、フライマンタ2機に護衛されながら飛んでいた…

(直線飛行か…さっさと取り付きますか
ミデアに近づくと…)

ドン…!の音とともに…片翼がもぎれ回転しながら落下するミデア…

(ザクキャノンよけーな事すんな!…)

「加速」

重力に引かれながら、揚力を失ったミデアが真っ逆さまに落下していく…

ミデアを追い越すと…落下方向で……

(あゝこれ爆散か…なら)

虚数空間に物質固定で引き込んだ…

もう一機も…同じ運命っぽいので、落下地点で同じく爆散前に引き込む。

空は…護衛4機とも…黒煙のこして跡形もなかった…

(少し離れるか…)

移動し、端末で付近50km以内に熱源反応ないのを確認すると…

ミデアを2機だした…

(んゝハッチは何処だ??)

コクピットをのぞいてみる…

(へえ女性パイロットか…あ、)

乗務員ハッチが開き…

「ちょっと…どうなってるのよ…これ…」
と女性兵士が話しかけてくる…

「とりあえず説明しますので、降りてもらいます？
あと見つかるかと面倒なので隠しますから…」

「え、ええ……マリ、マーニヤにも言つといて…あと緊急キットも…」

マリ「はい！」

彼女はタラップを下ろすと、機体から降りてきた……

するとコンテナの方へ向かう……

向こうの機体から2名降りてきたので、声をかけに……

「そちらの機体はもう人は乗ってませんか？」

「え、ええ……」

「じゃあ、隠しちゃいますね」

虚数空間に引き込んだ。

「え？……あの…なにが？」

機体のあつた場所に駆け寄るが…勿論なく…混乱しているようだ…

「とりあえず後で説明しますよ、ご一緒に」

とコンテナの方へゆく…

コンテナ内部から呻き声が聞こえ…

「マリ！モルヒネ！！あと、止血できるのをなにか！！」

中を見ると…血だらけだった…

「なにが重傷よ！！馬鹿！！」

「は、はは…」

女性兵士3名が、瀕死だろ…うになっていた…

固定を外れたジムピストルが暴れたらしい…

で、コクピット外にいた兵士3名を襲った…ということだった…

カオル「ちょっと見せてもらいます？」

最初の人「なに？邪魔しないで！！」

カオル「……………あなたに助けられそうですか?？」

最初の人「……………モルヒネ位しか…」

カオル「じゃあ自分がしますので…」

と医療カプセルを虚数空間からだす。

「え?何処から?」

「いいから邪魔しない…」

それぞれ3名を医療カプセルに入れ、スイッチ、ロックをかけ、虚数空間に入れる。

カオル「じゃあ機体隠しますので、一回外に出ますか…」

最初の「ええ…」

と外に促した。

外に出たところで虚数空間に引き込んだ…

女性兵士4名が互いに無事を確認しあつて…

「で、すみません、本来なら墜落し、死ぬ運命だった、貴女方を異世界の戦力として、スカウトしたいんですが、どうっすか？」

「はあ？」 「え？」 「……………」 「何いつて？」

「まあ、詳しい事は後程で事実だけ再確認させて下さい。

まず、貴女方は正面から墜落し、死ぬ運命だった…間違いないですよ…ね？」

考えこんでる……が一応は納得したようだ…

「で、貴女方は二つの方法を選べますので、まずはスカウトを受けるか、

または今の辺りの記憶を消去し、近くの町で放流されるか……です。詳しくはシエルター内の案内DVDを見て下さい…

受けるか受けないかは、一日後に聞きます」

「あ、あの…私達の乗ってたミデアは？」

「ああ、俺が爆散する運命助けたので貰うつもりなんですが…」

「な…!」 「貴様!」

「あ、ちなみに異世界からきたので、ジオンとか関係ありません。まあ詳しくはシエルター内で見てください…なので、そこ、弾切れまで撃たない…」

「な、なんなのあんたは？」

ATフィールドが展開し、弾を全て弾いてた……

「DVDを見ればわかりますよ　じゃあ、一日後に…」

で、シエルター内に4名様ご案内する。

(さてと……次)

なあカオル…今のでスカウトできると思う？

「ん？作者、できればラッキーでしょ…」

正直ね…けど目的のミデアは入手したし」

………わかったorz…　設定考えてたのになあ………

「はい、次行く〜」

なんでオメーがせかしてんだよ………まあ話すすめんぞ………

カオルは残骸を集めながら、カルフォルニアベースへと向かう…

（ザクスナ、ザクスナ）

二日目…

カオル、途中で墜落炎上する機体を拾ったり、かなりの量をげつとできた…ので、

日付が変わり、夕方頃にやっと、カルフォルニアベースについた…

そして、

（あれがか……）

カオル、目がキラキラ輝いている。

そこには旧ザクから改装された、

ザクスナイパーが警邏にあたっていたからだ…

趣味に走ったカオルは、

取り付き、同化、解除し勿論ゲットして…

帰る前の準備にかかる……

……

カオル報告

ミデア修繕可能2機

ザクスナ機体情報ゲット

その他残骸多数

カオル「〜」

作者「じょうきげんだなあ……………」

カオル「まあね〜目的のメディアがゲットできたし」

作者「懸垂式コンテナだよな…あれは確かに便利だ」

カオル「あと、ガンダム時代でゲットしたいのはビグロや、モビル
ドライバー、ビグラング、ビグザムか、パブリクかな…?
それ以外はNT専用だし…」

作者「欲張りだなあ…」

カオル「あんかがねw」

作者「まあそれはよいとして…重大な事が…」

カオル「ん？」

作者「メディアの乗務員ハッチって…コクピット横でよかったんだよね??？」

カオル「……………さあ？」

作者「ん~~~~」

悩み続ける作者だった…

第56話 DVDの内容 途中グロあり 投稿日20110129

「わかったわ、スカウト受けます」

「本当ですか、ありがとうございます」

「まあ、あんなの見せられたらどうにかしてやるか…だろ…軍人だつたらなあ…」

「あのDVD反則！」

「……まあ…つすね…」

さて、グロテスクな内容にもなる……
作者がうまく表現できるかわからないDVDの内容、及びそれを見た4人の反応をお見せ致しましょう…

ちなみにこのDVDの出元は、各放送局のマスターテープや、諜報機関等から、ヤドカリがハッキングし拾ったと思って下さい…

一般の人にはとても見せられない映像が含まれています……

作注ですが、今までの話の中で1番グロテスクさを出しています…
苦手な方はこの話の後書きのみを見てください…
要約させてます。

この話のみ、本編との時間は殆ど進んでません。

〓〓シエルター内〓〓

「たく、あのひよひよる！！なんなんだ？？……うわー！！」

いきなり映像が流れ始める…

そうシエルターに網膜投射システムが備わっていて、人数分流れる
ようになっていたのだ……

案内人だろう、執事姿の老人が映ってる…

「この映像はスカウト対象者にご説明するものとなっております。
注意事項を説明しますので必ず守って下さい…

むやみに映像中には動かないで下さい。

気分が悪くなりましたら机の上にあるビニール袋をお使い下さい…

というか、携帯して下さい。途中シヨキングな映像ながれPTSD
になりかねる恐れありますが、大丈夫です。

当シエルターは医療設備もそなわっておりますのでご安心を…

この映像は2001年7月8日作成となっております」

で一回映像が消える…

「な、なんだっただ？」「……さあ？」「このビニール？」「不

思議ね〜」

注意事項通りに体が動いた…

(なんで?)

誘導催眠を入れてるからだ……

しばらくすると映像が再開される。

「では、あなた方に助けて頂きたい、異世界についてご説明します。事の始まりは、

西暦1958年、火星にて宇宙生物発見からでした…この時点では、まだ敵対となる存在とわかってませんが、後に、人類の天敵…通称BETAの確認でした…」

「西暦か…大分過去の話だなあ…けど異世界か…」そう呟いている
マリア…

説明は続く

「そして1967年、月面サクロボスコレーターにおいて、BETAとの初接触、通信をおくと…その後は途絶えました…つまり調査チームは惨殺されたのです。

人類はプラトーン基地を設営していました…そして、BETAとの戦争が始まりました…今も続いています。人類の生き残りをかけて…」

「人類の生き残り?」「まさか…」「…え?」

「さて、その後の歴史を説明いたします…」

1973年4月19日地球の中国のカシユガルにBETAの生産基地となるハイブが到着、作られました…」

西暦をご存知の皆様だと航空戦力で爆撃したら楽勝じゃん…と、思いでしょ…」

「が、後程説明入りますが、光線級の存在により、航空戦力は無力化され、人類は海上、陸上戦力でしか、戦わざるえなくなりました…」

「西暦であの辺りのタンクって紙装甲だよな…」「だと思っ…」

「そして、当時の中国はソ連に助けを求め共同作戦をとりますが、BETAの物量に押し負け、そして、とうとう戦術核を使いますが、すでに時遅く、実質的效果はありえませんでした…」

「核で?」「…その当時なら今よりか弱いかもしれないけど…」「おいおい…」

「そして、地球にハイブが作られた事を受け、月面基地を放棄…月はBETAの完全勢力下におかれるようになりました…」

「1974年7月4日、カナダのアサバスカにハイブユニット到着、アメリカは、即座に戦術核の集中運用により、ハイブは残骸となりましたが、

カナダの半分の核汚染と引き換えになりました…」

「半分と引き換えか…」「でもまだ1974だよ」

映像は球体地球地図にかわり、BETA勢力範囲がうす赤で表示される…

「赤い範囲がBETAの勢力圏となります。

その後は、H6エキバストウズ、

1978年ユーラシア北西部から人類が追い出される、

1981年、フィンランド、ロヴァニエミにH8ハイブ建設、

1983年、ベルリン陥落、

1984年アンバールにH9ハイブ建設、

同年、ノギンスクにH10ハイブ建設、

1985年西ドイツ、フランスが相次いで陥落、以後、イギリス本土攻防戦が始まります」

「11年で…フランスまで人類いなくなるって……」

「1987年、難民の欧州脱出の為、ポルトガルに踏み止まっていたが、

本格的な西進に耐え切れず瓦解、

1989年アラビア半島での戦闘激化、

1990年、ユーラシア北東部、東アジア、東南アジアが主戦場にな

ります。

1993年BETAヨーロッパ大陸を完全制圧、

1994年BETAインド亜大陸制圧、

1997年BETAアラビア半島制圧、

1998年BETA朝鮮半島制圧、

同年日本上陸し、佐渡島にH21ハイブ建設、

続いて、横浜にH22ハイブ建設しました」

「は・は・は…陸上の半分以上かよ……」

「そして、1999年8月、戦略核以上の被害重力偏差をだす、2発G弾により、人類は初のハイブ攻略となり横浜だけは奪回できました。」

しかし、被害により辺りは人のすめない土地となったのです」

「そして2001年7月現在が、有望なあなた方をスカウトしたい、時系列となります…」

また、人類の総人口は1972年の46億人から、BETAに殺され続けて、2001年では10億人となっています」

「さて、BETAとは何か？、人類の対抗手段は？」

またあなた達の所属してほしい異世界軍とは何かに移ります」

「なお、ここからショッキングな映像です、袋の準備はよろしいでしょうか？……」

よろしいですね？ではどうぞ……」

「広島放送、坂木です！！」

昨日より九州を上陸したBETAは猛攻をかけ、西日本各地域を蹂躪しつつあります。

私達もこの放送が終わり次第避難し」

「キャー！！！」

カメラがそっちに向く…

戦車級が一体見えた…

「おいやばいぞ…」

「ああ…」

多分ADとカメラマンだろう

「坂木さん撤収しま…」

カメラがそっち向くと…

メリメリメリ

頭半分がなくなり、

頭下半分から脳みそや目玉付きの筋肉がでるんとのびていて、
口は筋肉がなくなった為かだらし無く開けっ放され、
また血がダラダラと流れ落ちている…

兵士級に捕まれ、咀嚼されている女性アナウンサーがいた…

「ひ…！」

カメラがガチャンと落ちる…

一緒の方向に逃げてくADとカメラマン…

しかし、ADは闘士級の長い鼻に跳ね飛ばされカメラのすぐそばまで飛ばされた…

奥では兵士級に捕まり、必死に逃げようと抵抗しながらも…
生きてたまま正面の顔面からガブリ…

やはり頭半分から食べられ、ピンク色の脳みそが、滑り…ぺちやりとアスファルトに落ちる…

そして、大きな口は、首下まで食べ、首の血管部分から血がダラダラ落ちる…

兵士級は、手を持ち替えると、胸、腹上と続き、腸がだらし無く出はじめる…

画面手前では奇跡的に生きていたのだろう、呻き声がする…

そして、戦車級が大きな口をADにちかづけ、

バリメリグチャグチャ

「ギャー」

悲鳴をあげる。

ADは生きながら下半身を食べられ、痛みにより悶絶している…

なんとか逃げようと手を動かしているが…

人間下半身を失ってもまだいきている事ができている…

が、カメラに映っているADは地獄の思いだろう…

そして、血まみれの大きな口がきて…もうひとかみ…

バリバリ

ADは首切断され、頭を残して食べられる…

彼の顔は、まさに…恐怖や痛みの状態で食べられたのを物語っていた…

まだピクピクとまぶたが反応している…

そして戦車級の大きな血まみれの口があーんとあけられる…

口の中が見え、…髪が何色かみえる…そして歯の奥には、目玉がでるん。

次の瞬間、ADの首は、大きな戦車級の口の中に…

クチャクチャ…

カメラはまだ電波を送り続けている……

付近では大きな悲鳴、助けて〜の叫び声、断末魔……

戦車級は次の獲物を求め……画面から外れていく……

その奥では兵士級が足を食べ終わって、
やはり次の獲物を探して移動する……

以上で中継映像が切り替わる……

その間2人の女性兵士は吐いていた……

「何？なんなの？」「凄惨な……」

「これは、実際に1998年、広島放送がとり、電波にのりながら、放映されず、悲しい出来事となりました……

このように、BETAは小型級は、大きな口でもって人間を食す事が確認できてます。」

さて天敵BETAの紹介となります」

「ちつと休ませてよ……」「まだ気持ち悪い……」

「まずは、兵士級、先程の映像にも流れましたが、全高2.3m、

口が特長です。

この兵士級は捕獲または、捕食した人間を再利用して作られています」

「さっきの元人間なのかよ……」

「つづいて先程の映像で流れた長い鼻が特長的である、闘士級、全高2.5m、特長の長い鼻は跳ね飛ばすだけでなく、人間の首を軽く引き抜きます」

「続きまして先程の映像でもっとも大きな口の戦車級、後程紹介しますが、18mもある戦術機の装甲もかみ砕かれ、パイロットである衛士を1番生きながら咀嚼しています」

「……コクピットの中で生きたまま……」

「続きまして、要撃級…、高さは12mですが、幅28m、長さ19m、特長的としまして、ダイヤモンド以上の高度をもつ前腕が特長的です」

「……なんかこれも生きながら、食われそう……」

「続きまして、突撃級…全長18m全幅17m全高16mダイヤモンドより固い前面装甲が特長で、その固い前面装甲、時速170kmものスピードをもってBETA群の前衛的存在です。またそのスピードでもっての突撃による破壊力は強大です」

「170 kmで跳ね飛ばされるの?……」

「次に、要塞級、全長52 m全幅37 m全高66 mの巨体を誇ります。」

10本の足をもち、また防御もあり、先端がかぎつめになっている触覚もあり死角はありません。

まさに要塞というべきでしょう……

また体内に小型級が潜んでいる場合があります」

「なんか、串刺しされそう……」

「次にこいつらのせいで、制空権がなくなった存在です
まずは、光線級……」

全長1.2 m全幅1.6 m全高3 m

小柄ながら、かなりの命中を誇る生体ビームをはなち、

高度1万mを飛行するものに対して、有効射程距離は30 km……照
射インターバルは12秒、また味方をけして誤射しません」

「次に重光線級……」

全長15 m全幅11 m全高21 m

この瞳から放たれる生体レーザーは出力が高く、高度500 mの飛行体に対しても有効距離100 km以上を誇ります。

理論上は地平線による障害がないかぎり、有効射程は限りない……の
ですが、地表より200 km以上の熱圏層以上の高度には反応しません」

「次にレアモノとって良いのを紹介します…まずは母艦級全長1800m全幅176m全高176m」
映像がないため、イラスト画像になる…

「現物がまだ人類の前に出てない為イラスト画像での紹介で失礼します。」

この巨大なミミズというべき巨体は、はつきりいつてトンネル掘削機です。また体内に多数のBETAがいると思っして下さい」

「最後に頭脳級と重頭脳級です。」
重頭脳級のみイラスト、頭脳級は横浜基地下のやつ…

「各ハイブの地下にいる、BETAのエネルギー源、また司令官たる存在です。」

重頭脳級は、上位存在たるもので、各頭脳級からの情報を吸い上げ、対策を行う司令塔と言えます。その司令塔を倒せば、各BETAは指示が行かなくなるとも言えます」

「次に我が主、渚カオルがこの世界に来るまでの人類の対抗兵器たる戦術機の紹介です…

月面戦争での宇宙服強化装甲が元で発展、開発された、戦術歩行戦闘機になります。」

ハーデイマンから、F-4、F-15、不知火等の動いてたり、射撃…はたまたBETAと実際に戦っている映像とともに…すすむ。

「1980年代にしたら異様な発展みたいね…」

「戦争が発展産むだろ？」

「うん…」

「光線級の登場により、無力化された航空兵力の空洞をうめ、対BETAの最終局面、すなわちハイブ攻略における決戦兵器として開発された人類の刃です。」

現用の対BETAでの通常戦闘での主役を勤めています。

ですが、異世界軍が設立せざるえない状態になったように、この戦術機は、いくたの問題点があります為、押し戻す事ができなくなっています…」

食い破られ無残な姿をさらすF-4やF15…

「まずは、

出力…主機をバッテリーや電池による電力に頼りきっている事…

装甲…そのために重装甲に発展できない点…戦車級にたかられ食い破られる機体が殆どとなっています。」

映像は演習中硬直をさらし、ペイント弾を打ち込まれる撃震。

「機動…その為に避ける事を主眼となり発展していきましたが、OSやCPUが発展できず、硬直等を産む状態となっていました…」

「西暦だから無理があるのね………」

「最後に、皆様がたのスカウトし、BETAを駆逐し、戦力としてなりたきたい、異世界軍の紹介です…」

この世界固有の戦力では、10の37乗にもおよぶBETAの指揮官というべき、上位存在の駆逐は、到底果たせない…と見えます…地球以外でも、月、火星や、それ以外の天体にもいる数です。

ですので、各世界を周り、技術吸収、資源調達等を行い残された人類を救うべく、思い始めたのが最初です…

あなた方の異世界の技術はとても有効であり、効果が望める為、積極的にこれからもいれる予定となっています。

まずは宇宙世紀とよばれる、世界から仕入れた、ルナチタニウム合金の紹介です。」

映像が陸戦型ジムを写す。

「あ、陸ジム…」

画面が、腕の装甲に拡大し、断面図となる。

「こちらの合金は、戦術機に使われている装甲より、遥かに強靱で、光線級のビームを受けたり、戦車級の噛み付き、

また要撃級の殴り等に堪えられるようになっていきます」

映像が、第17話での、魔改造撃震2001年5月21日の間引き作戦中の、

戦車級にたかられたり、要撃級に殴られて耐えている、また光線級のビーム受け耐えるのシーンが流れる…

「またそれ以外の世界にも有用な技術は多数あり、地球人類対木星人類との戦争の世界からは、ワームホール技術」第27話のチューリップを見せているシーンが流れる

「その世界の機動兵器」

コバツタが取り付いて、DFで岩を砕くシーンが流れる…

また、ガンパレードの世界での剣無双をする栄光号1号機が流れる…

「また、現地戦力の強化等もあります」

元の不知火から、魔改造された不知火の映像がながれる。
A-01の演習シーンだ。

「異世界軍の保有戦力ですが…2001年7月8日現在、無人機による陸戦強襲型ガンタンク機202機」

2001年7月5日の、佐渡島間引き作戦の映像がながれる…

「ザメル増強中で、80機になる予定です」同じく佐渡島での30機による一斉砲撃の迫力あるシーンが流れる。

「また有人機については魔改造ドム28機」

スペック、演習シーンが流れる…

金色が眩しい…

「また宇宙空間は安全ですので、スペースコロニーを使った、避難民の保護、宇宙軍の設立」スペースコロニーや、サラミス、ムサイ、マゼラン…

また後期型から発進するネモ、ザク改、セイバーフィッシュが流れる。

「等があります」

カオルの登場。

「最後に改めて、人類の絶望から、この世界を救いたく、俺自身は、異世界軍をつくり、BETAを駆逐したいと思いました…
皆様方の力…少しでも拝借したいと思ってます。

できれば、恥をさらしますが、貸して下さい」と、深々と土下座をするカオル。

「自分の異能力、また最新の異世界の技術を注ぎ込む…っていいいかも知れませんが…
BETAが成長しないよう、自重の範囲内で…
ですので人類絶滅からすくう為、力を貸して下さい…お願いします
！！」

映像は、そこにて終了となる……

「……………どうすんの？」

「あたしは、加わっても良いかな…って」

「マリ!?!……………そうね」

「異世界の力でBETAを駆逐するか…」

「あたしらの世界はさ、人間通しが戦ってたけど、今回の世界はさ、化け物あいてじゃん…ね」

「良いかもね」

「アンナ」

「敵でも直接殺せないから、わたしは輸送機パイロットとなったんだし…」

「ああ、あの時ね…」

「あたしも加わっても良いかなあと思ってる」

「……しょうがないわね…付き合っただげるわ」

「じゃあ、みんな、加わるでいいのね？」

3人が互いになづく

そして……

第56話 DVDの内容 途中グロあり 投稿日20110129 (後書き)

作者「えっと、説明します。これはM u v - L u vの世界に来るための覚悟というか真実を見せる為に、

異世界の人向けに見せる内容の回となっています。

あんまり時間を進めませんので、グロイ描写が苦手な方はこの話は飛ばして下さい。

一応流れる映像の説明は、

まずM u v - L u vのB E T A進行の歴史、で、グロイ描写の中継シーン、B E T Aの説明、

戦術機の説明、異世界軍の説明、ラストに協力の訴えかけ…となっています」

カオル「なあ…中継シーン削除しても…」

作者「真実を説明して、納得させるにはこういった映像が一番だろ…ありえる事だろうし、マスコミならさ…」

カオル「ん……」

作者「それに2周目武ちゃんもこういった場面みて逃げ出したんだし…」

カオル「まりもちゃんね」

作者「まああのアナはR18版の、まりもちゃんの描写を流用した
とっていいね…で、それ以外の二人はオリジナル」

まりも「……あたしこんな事なっただね…」

作者「うわ……安心して、絶対にそんな事させないから……まりもち
ゃん」

まりも「はい、作者さんを信じます」

作者は全年齢版でなくR18版をもってます。

あの描写があつて、何回変えたいか…と思ひ色々選択肢を変えたん
すけどね……

「まあ、あんなの見せられたらどうにかしてやるか…だろ…軍人だつたらなあ…」

「あのDVD反則!」

「……まあ…つすね…」

の、56話の直後の時間より始まります。

「わかりました…歓迎致します。じゃあ、とりあえず自分の基地に戻りましょう…」世界扉」

シエルターをしまう。

「この穴みたいのをくぐると、あなたがいる世界に行くのね?」

「はい」

4人お互いに頷き、世界扉を潜った…俺も続いて潜る…

「B55ハンガー」

2001年7月14日深夜…
でると扉を消す。

「25号」

「マスターお帰りなさい」

「スカウトした4名の案内よろしく……
と、こちらは深夜ですので時間ならず為に、明日朝まで休んでいて
ください。」

詳しい配置等は明日お話ししましょう」

ついていく4名…

2001年7月15日朝

救助した瀕死の3名は順調に回復中だ…
医局の空いてるのと交換しておいた。

回復したら、DVDルームでの説明、意思の確認やっておくように
と25号に頼んでおく。

25号…新人やスカウト案内担当だな…

そのまま加わるならそれでよし、

加わらないなら記憶を消し、送り帰す。
だね。

回収した廃材を放出、

ミディアの修繕作業を戦艦ドックで行う事にした…

完成しているメデューシンの横のドックに出す。

まずは一機目……

（あ、コンテナ内が血だらけか……）

空いているコバツタに清掃作業を頼む…

（この積み荷は…ジム3機か…）

それぞれのコクピットを確認し、私物を回収して、
忘れものなさそうなので、再チェック後、解体に回す。

（コンテナ内は……）

ビームピストルが暴れた跡があるが、直せない事はなさそうなので…
同化し、修繕した…

（固定が甘かったのか…）
固定具を強化…

MS搬送用コンテナを確保した。
機体情報ゲット

コバツタはまだ清掃作業中だ…

(じゃあ、折れた翼かな…)

資材を少し使い、片側と同様に修復。

ついでに魔改造…

ガルダ参考に、熱核ジェット、スクラムジェットエンジンに変更。

主機搭載し、燃料タンクオミット。

推進材タンクはそのまま残す。

材質もルナチタニウム合金に変更

(ん…25号と新人4名か…)

同化解除して機体の上にする。

「おはようございます〜よく寝れました?」

「はい」「ふかふか過ぎてすこし」「シャワーのみでお風呂ないけど?」「気持ちよく」

「あゝお風呂は大浴場をでしたのでオミットしたんすよ…25号説明は？」

「あんな深夜じゃできないよ」

「あとで案内させます…と、自己紹介がまだでしたね…渚カオルです。この異世界軍の責任者であり、大将になってます」

「将官に向かって敬礼！！」

大将に反応した、軍人のさがみたいで敬礼する彼女ら…

「あゝいいっすよ…責任者っう事だけで気楽にいきましょう」

「……つい……わかりました、そういった事でしたら……」

「で自己紹介お願いできます？」

「はい。私はアンナ・クリント曹長です。当輸送分隊の分隊長をとめていました…1号機機長です」

髪は肩までのストレート…綺麗な黒髪であった。

「私は、1号機副機長のマリ・クリント軍曹です。姉のサブをこなしています」

「姉妹で？」

「はい!!」

実は後で知るのだが、養子だったのだ……

「二番機機長をつとめています、マーニヤ・坂本曹長です」

「ハーフ？」

「ええ、父が日本人でした……ですがコロニー落として死亡したので

……」

「……………」

「私も……です、あ、ミキ・インフィニです。副機長をつとめていました！階級は伍長です」

「わかりました……と、とりあえず全員少尉待遇でお願いしましね」

「え？士官に??」

「まあ…パイロットにあわせてになりますけど、こいつでなく、向こうのデカブツの乗組員になってほしいかなあ…っ」と

「……でかいですね……」

「元の名前は、強救戦艦メデュシン…最前線にて医療を行う病院船です…」

改造を施して、乗客5000人越えるものとなっております」

「DVDでみたのですが光線級は？」

「まあ避難民の移送目的ですので、防御は施しました…DFまあ通称バリアですが、やガンダリウム 合金等…ですが、できるだけ低空でお願いしますね」

「…わかりました」

「このメデュシンに乗った乗客が、順次、スペースコロニーへと、移動してもらおう形になります…地球奪回までは…その重要な任務をこなして下さい」

「……はい……」

「でじと……」

もう一機のミデアを出す。

「なので、搭乗機がミデアからメデューシンにかわりますので、私物の整理お願いしますね」

「了解」×4

各機へ走りだす、輸送機パイロット達…

(そいやぁ…もう一機の積み荷みてねえなぁ……)

で、もう一機のコンテナに近寄る…

後部コンテナハッチを開ける。

ウィイイイン

中身はタルタルだらけだ。

(タル???)

金属製のタルが固定されている。

（お酒??）

.....なんかようわからん為、アンナさんに聞く事にした...

「すみません、アンナさん...2番機の積み荷になんですが...」

「あ、はい、ヘリウム3ですけど」

「ヘリウム3??マジですか?」

「本気とかいてマジですね?ええ...」

「あの金属タルタルの中身ヘリウム3?」

「はい、輸送任務でしたので...」

考えてみよう...ペットボトルでMSが半年連続稼動できるヘリウム3である。

重さはともかくとして...ペイロード200Tを超えるミディアに積まれたヘリウム3...

まさにカオルにとっては吉報に違いなかった…

勿論、大喜びでコバツタ達に整理を頼みました

(何機分になるんだろう)

次々運びだされる金属製のタルタルタル。

「ところでアンナさん」

「はい？」

「あのヘリウム3って何処から？」

カナダの木星輸送船団の基地から…

また損耗率50%越えの、過酷な任務である事…

等を聞き出しました…

(かなり美味しいフラグ??)

つまりだ…今回の様に落下地点で構えてれば…美味しい話だ…
という事になる。

(0083にジャブローについて記録調べてか…)

という考えについた。

とりあえずコバッタ達に整理をお願いします…2号機の改造は後程に…

あと一週間程でコロニーの大気が充填目処になるので、
メデューシンの案内を先に…

「じゃあ…コクピットに案内しますんで、慣熟お願いしますね…
11号、滑走路は完成してるよな?」

「マスター完成してるよ」

魔メデューシンの前部ランプウェイから乗り込む…

原作通り、前部及びサイドに第1層に入れるハッチを作成している…

「こちら第一層は、基本的に振り分けホールに使って下さい元の世界では、

アムボートという救急車が使ってた発進デッキです」

「かなり広いですね…これなら多くの人が入りそうです」

「この中央エレベーター16機で各階層に移動となります」

原作より増設はした。

エレベーターシャフトの回りに、

螺旋階段作るのは俺の特性でもある…

「第二、第三、第四、第五層は同じ作り…若干席数は違いますけど…第五層にいきましょう」

五層にでると、前後左右に座席が広がっている。

所々に柱があり状態だ…

「一応収容人数を重視し、

かつ座席にはリラックススタイルできる…のを重視しました。

手荷物程度なら各座席上部の荷物棚及び座席下、

それ以外は第一層及び第7層のロッカールームをつうとこですね」

「かなり席がありますが…」

「第二から第五までで4800名搭乗可能です」

「……責任重大ですね…」

「次は第六層ですね…第六層はベットルームがあり、第七層全体がそうなってます。あと他には、食堂、風呂区画がありますね」

第六層は、ちっと作りがちがった…機体前後に延びる通路が3本伸びている…

中央前部が風呂やシャワーを備えた区画、すぐ後ろに食堂区画や購買自販機区画、

後部がベットルーム区画になる。

「第八層にいきましょう」

第八層にのぼる…

「この階層は、医療区画や乗務員、コクピット区画になります。関係者以外立入禁止で、MPが配置される階層になりますね…」

けど飛ばすだけなら、さほど人員要らないので、殆ど避難民対応員
区画になります」

コクピットに案内する。

「この巨体ですが網膜投射システムと、自動化進めた事により、飛
ばすだけなら一人が可能です。
で艦内環境でもう一人が必要ですね」

「この巨体でも二人で飛ばす事可能なの？」

「はい」

最初はヤドカリで飛ばす事も考えてはいた…その結果だった。

「マニュアル等後で、もってこさせますので、
メデューシンの事、よろしくお願いします」

「……はい……」

カオルは燃料をつんだミデアに向かう。

「28号」どの位ありそう？」

「1000機分はこすかも…」

「うっし」

ペットボトル一本が半年分の燃料：「牛乳パック分一年

ミデアのコンテナは、MSが平で3機余裕でおさまる…

そのコンテナに燃料が入った樽がかなり搭載されてるのだ。

昔の石油は同じ様に樽で運ばれてました…
それと同様です。

「詳しくわかったらよろしくなあ」

「イエスマイロード」

（核融合炉の燃料はこれで余裕できた…
ガンパレ組の件、明日片付けるか…じゃあ？？）

カオル、やりわすれを考えてている……

（あ、鋼鉄の咆哮の兵器の検証と…SFSの件か…）

カオルハンガーに向かう…

SFSにベースジャバー（Z）を少し改造しはじめた。

武装を35mmCIWS4門に変更。

装甲をルナチタニウム合金に変更…

タンク乗れるようにタラップつけて…

（ふむ…まあいいか…）

輸送用のホバークラフト機が完成…

（何機作るか…か…）

搭載できるのは2機のMS…及びタンク2機。

500機製造を命じた。

（あと緊急展開ねえ…）

SFSで…止まってる…

(音速こえると、ショックウェーブ発生だから……)

フライングアーマーを選択…

ホバークラフトだけど…

(衝撃波用カバーつけて、核熱ジェットと、コクピットつけて……)

かなり大きくなりました…

とりあえず試作1機作って貰う事にした…

「いつできる?」

「明日」

明日の予定決まった様です…

(後は鋼鉄の咆哮の兵器ね……)

サイズからいうと、載せられるのがないなあ……検証艦つくるか?
改造か?)

水上兵器ですからねえ…

(ビックトレー改造すれば検証できるかな?)

画面みると、

ビッグトレーの艦橋を…

鋼鉄の謎の戦艦艦橋にし、かなり後ろぎりぎりまでもっていったる。

全面の傾斜を廃止し、前側に迫り出してる。

命名ビッグトレー砲艦テストタイプ

とりあえず一隻注文。

武装は？

「とりついて改造施す。製作にいれると面倒、使えるなら採用かな？……11号これは？」

「ん〜4日後」

「あいよ…」

(あと今日できそつな、やりわすれないよなあ…)

時間を見るとかなり回っていた…

(ガンパレ組、声かけてくるか…)

桜井隊長、佐藤千翼長、石井千翼長に声をかけに行く…

(所在、自室か…)

MPにT-850が立哨してる女子寮にはいる。

(一階だよな…)

今の所ガンダム組が最上階から、ガンパレ組が1階から使用している。

ターミネーターの1人は、一階に部屋をもっている。

(そついやあ…A-01から、寮に入れてって言われてたなあ…)

勿論ハウスキーピング要員で、コバツタがついている。

「あら？カオル君、夜ばいに来たの？」

「ビダンさん…人間きの悪い事言わないで、下さいよ」

入った所でたまたまビダンさんと遭遇した…

「あ、あの子達、ありがとうね」

「あゝまあ良いっすよ」

「お・ね・い・に…食べていいわよ」

「遠慮します」

「うん…即答ねえ……………あ、装甲どうだった？」

「あゝ…対BETAを検証してないので…まだ結果が…」

「一応、超甲スチールとチタンセラミックの間と、報告があがってきている。」

「そう……………」

「あ、この世界の塗料もおもしろそうよ…
近々結果でるかもね」

「耐レーザー蒸散被膜を研究しているらしい。」

「報告まっていますね…けど襲うは不可っすからね」

「何しろ、カオルの同化を妨害できたのだ…結果が楽しみである…」

「はい じゃ、お休みね」

次はなに仕掛けてくるのか、ヒルダさん…久々の本編登場であった。
一応くバキュン>の用意はすんでいます。

(さて…)

ピンポン

桜井隊長の部屋の呼び鈴を押す。

バタバタ「はい？」

「カオルです。良いっすか？」

「あ、5分程まって下さい」

「あ〜じゃあ、インターフォン越しでいいっす。
明日前約束した、救助に行きますので、
佐藤と、石井にも声かけといてもらえます？」

「あ、了解しました」

「じゃあお休みなさい」

カオル寮をでて、自室に戻る……

side↳桜井隊長少し前↳

「ふん！ふん！ふん！ふん！」

彼女は自室で寝る前の運動をしていた。

バーベル重さ1t……

まだこっちの世界に来て、戦闘待機任務だけで、
実践はこなしてないが、備えは必要だ……って事らしい

彼女の汗がキラリと飛ぶ。

服装は…ビキニウェアだった…

黒髪もみずみずしく光っている…

ピンポーン

（誰かな？）

彼女はバーベルをおくとインターフォンにバタバタと駆け寄る。

「はい？」

「カオルです。良いつすか？」

(汗臭いわね…シャワー浴びなきゃ…)

「あ、5分程まって下さい」

「あ〜じゃあ、インターフォン越しでいいつす。

明日前約束した、救助に行きますので、

佐藤と、石井にも声かけといてもらえます？」

(……襲うでないのね……)

「あ、了解しました」

「じゃあお休みなさい」

インターフォンからカオルの声がしなくなった…

(はあ…カオルさん、襲ってこないかなあ…それとも襲おうかしら?)

力才儿報告

整理中

ナギ少尉「作者くあらたなフラグたつたみたいですよ」

作者「ん？何のフラグ？」

ナギ少尉「桜井隊長の事」

作者「……みたいだなあ……」

ナギ少尉「みたいって……いつフラグたてたんですか？」

作者「……何時だろう??？」

ナギ少尉「しつかりして下さいよ……けど、1tバーベル？間違
いじゃ？」

作者「あゝ知らないよな……彼女はガンパレ組の第六世代の戦車随伴
兵だし」

ナギ少尉「第六世代？」

作者「いわゆる生まれながらの生体改造されてる世代ね…
骨格が強化プラスチックとかさ」

ナギ少尉「へえ」

作者「まあだから襲われたら現代人でまずは勝てないね」

ナギ少尉「……カオルさん食われちゃう？」

作者「……いよいよチエリー失うか？、
<バキユン>だらけになるか？」

フラグの処理に翻弄しているカオル君です。

2001年7月16日まだ明け方前

カオルはまだベットのの中だった

(行く前にやるところは、フライングアーマーのテストと、メデューシンは、11号辺りにお願いするか)

もそもそカオル寝返りをうつ

(でもって21日約束だから...いけて輸送隊の記録とりかな?メタルマックスの旨味は正直なくなっただかなあ?あとは22日以降か)もそもそ起き上がり備えつけの洗面台へ

(んあと処理できてないのが、医療カプセル入った人達と、燃料の整理だよなちめてえ)

タオルを探す手が宙にさ迷ってる。

(タオルタオル...とん...まあそんなものか...さて今日も一日がんばりますか)

カオルの知ってる範囲での未処理フラグはそんなもんです。

ジオフロントのPXで飯を食う…

(最近ここも賑わってきてきたなあ…)

注文は、納豆蕎麦の生卵つき、かき揚げ天をトッピングで…

カオルは大の納豆好きである。

ヤマダうどんの納豆ご飯も時たま食べられるよう、PXにいれてある。

「いっただきまーす」

勿論、農業用コロニーからの輸送物で、天然物で生産している。

「カオルさん」

ズルズル

「ん？」

「少しよろしいですか？」

(確か……ああ)

B-01所属メイファ小尉だ、

41話ジャブロー加入組の一人。

ズルズル

「食べながらでよきや」

「MSなんです、水中戦できるのありません？」

ズルズル

「あゝ一応はあるな……」

(ハイゴックとマツトアングラー…ハイゴックはオミット必要か…)

「魔ドムじゃ水中戦できないので、できるのがほしいです」

「あゝ了解、考えとくわ…あとないん？」

「はい それだけなので」

「ん。わかった」

「では失礼しました」

(あゝ水中か……帰ったらで考えよう……)

ズルズル ゴクゴクゴク

プハァー

ふんぷん

食器をかたずけて……B55ハンガーへ……

〃〃 B55ハンガー 〃〃

まずは、副司令あてに、A-01の部屋移動の件打診を11号経由で……送る。

で、メデューシンの試運転兼完熟をしとくようにと11号に頼んでおく。

「了解、マスター、ヤドカリ君増やさないの？」

「……帰ったらかな？、とりあえずガンパレ行く前に、魔フライングアーマーのテストだ」

透明の風防シールドに上半分がなっている、
少し大きめの魔フライングアーマーが格納庫から出てくる。

ジムコマの地上がフライングアーマーに取っ手をにぎっている……

戦艦出入口から、ヤドカリ操縦のもと第三滑走路から飛び立ち、そのまま、太平洋上でのテスト飛行機に入る。

衛星からの映像で、音速突破時、海の上を衝撃波で、波を作りながら疾走するフライングアーマーが映っている。

そしてマツハ3・22を記録……
制動は安定している……

(うっし、作るか)

50機注文した。

ただし、ホバークラフト機能のみだと速度低下……200km/h

燃核ジェット使用だとジェット燃料の水素タンク上距離3000kmまで展開可となる。つまり、何処でも1時間以内の展開可能。

え？もつと水素積みめば？のびるんじゃ？

そっちの方だと大気圏外にでた方が非常に効率良くなるので……

(さて、とやり残しはない……な……ガンパレ組と打ち合わせか……)

ハンガーに戻ると桜井隊長、佐藤千翼長、佐藤千翼長、石井千翼長が待っていた。

「おはようございます」

「おはようございます」x3

「えつと行く前に状況の確認ですが、まずは佐藤千翼長は、木造でしたよね？」

「はい」

「そこで小隊を失つてると……
となると確か3日の8時前後だったかな？木造全滅が……」

「だと思います。ただ私は指揮する小隊が、無くなったとしか……ないので……」

「わかりました。で石井千翼長は？何処で、つつのも聞いてないの
で……」

「わたしの方は、3日の昼0時過ぎだったはずです。」

場所は北津軽郡の鶴泊駅の東のコンビニです。248と839の交差点で……」

「わかりました……桜井隊長は？」

「わたしが1番最後ですね……3日から4日の深夜帯でしたので……」

「了解です。じゃあいきますのでシエルターで待機して下さい。必要に応じて教えてもらいますので……」

シエルターに引き入れ、

「”世界扉”」

“ ” ガンパレの世界 “ ”

1月3日午前6時半

扉を消すと一路木造へ……

side) ある学兵)

時間は少し遡って6時前……

彼女は夢の中なかでまどろんでいた……

空は少し明るくなって来たが、まだ日の出前の中、寮のベットの中にいた…

ウー……

防災のサイレンがなる……

「う、う〜ん」

寝ぼけ眼で、サイレンの音に反応し、身体を起こした…

「V2発令！！V2発令！！各員は所定装備着用急げ！！」
校内放送が流れる。

(V2！！)

彼女は、跳ね起きると、パジャマのままカーデガンを羽織りつつか
けをはくと、自室の扉が出る。

パタパタパタパタ

(うっ、寒い…急がなきゃ)

寮では至るところで扉が開き、次々に人が出てくる。

みんな若い14歳から17歳までの女子学生達だ。
色々とりどりのパジャマが見られる。

そして彼女は、ハンガーへと急ぐと、
ウォードレスドレッシングルームへと入りこむ。

彼女は個人ロッカー開け、手際よくカーデガン、パジャマを脱ぎ、
ブラジャー、パンティーを脱ぎ、纏めてロッカーに入れると、
トイレパックを取り出す。
ロッカーをしめて、綺麗な素肌の上にトイレパックを股下につけ、
入って来たのと別のガラス扉を開け中にはいる。

中央の台座に跨いで裸のまま立ち座り、台座のボタンをおすと、
横からバーが近寄って長い髪をすくいあげる。

そのあいだに彼女は手を横に広げ、指をしっかりと開く。

ブオー

黒い霧状なのが吹き付けられ…固まって行く…

ブー

ブザーがなると、彼女は次の扉を開く。

誘導ゴムに四肢が覆われた状態になった…

そして次の部屋でウォードレスの装着となる。

部屋にはいると、多目的リングを嵌め、
人工筋肉パックをつけはじめ。

背中が届かない場所が入ってきた別の人にくっつけてもらい、
つけわすれがないかを鏡で確認すると、

人工筋肉の拘束具であるウオードレスを着込む。

彼女が着用しようとしているのはアーリーFOX…お下がりだ。

学兵にはご当地のスノーFOXは回って来ないのだ…

ウオードレスを着込むと、次のルーム武器庫へと進む…

彼女がロッカーから武器をだす、アデライト・アサルトライフル重
さ36kg…

訓練マガジンを外し、薬室内の弾を取り出し、
実弾マガジンを装着する。

脇のマガジンスロットに10本着用する。

次に腰のスロットに超硬度カトラスをさす。

次に手榴弾6kgを4個腰のポケットにいれ、

最後にシールドを両肩に装着する。

(よし！)

彼女はハンガーにでる…集まって来はじめる…

色々な装備をアタッチメントにつけたり、背中にはおってる人がい
る…

サブマシンガン16.9kg

を2丁背負った娘…や

へビーマシンガン、

装弾数2000発そなわつたのを背中のアタッチメントにつけてる
人やらだ…

「佐藤小隊、横隊に集まれ!!」

「牧村小……」

ザザザザ

5列横隊で整列し、

1!2!3!4!5!6!7!8!9!

点呼が行われた…

前にいる自衛軍少尉に報告が行われる。

「佐藤小隊、隊長帰省による不在以外欠員なし!!」

「石川小隊、帰省者8名不在以外欠員なし!!」

「香川小隊、帰省による4名不在以外欠員なし!!」

「青山小隊、3名急行中以外欠員なし!!」

「太田小隊、不在欠員なし!!」

「牧村小隊、不在欠員なし!!」

「傾注!!」

「状況説明しよう…本日0600七里長浜海岸より幻獣どもが大挙して上陸してきた。」

当木造駐屯各小隊は、民間人避難の為、各所定陣地にて防衛後、五所川原に移動する！！

いいな！！」

「了解」×260人程

「所定陣地に急げ！解散！」

「佐藤小隊いくよ！！」

雪道の中駆け足行軍で陣地の市役所を目指す。

約1km離れている…

ここ、木造はつがる市の中心部で、人口やく2万人の町だったけど時期が悪く、

帰省で人口が増え、

また慣れない観光客が市内各所で雪にタイヤをとられ、スリップ事故を起こし、避難渋滞を引き起こしていた。

市役所行く途中何人かが駆け寄り、事故車を退かす。

「避難いそいで下さい！！」

西側から発砲音が聞こえてる。

彼女らは市役所にたどり着くと、閉まっている防火扉を開け、最後のものが入口シャッターを降ろし、また防火扉を閉める。

建物陣地でのゴブ対策の為だ。

彼女らは階段を駆け登り、無言で各所に散っていく。

普段からやり慣れてるのだろう…屋上には約20名程が出ればら別れた。

先行し、レーザーライフルで既に射撃してた女の子がいる。

その横に駆け寄りアサルトライフルを構え、射撃体勢になると…
「状況は？」

「やばいわね…うってもうってもきりがない」

アサルトライフルも火を放ち、ゴブリンの頭をつらぬき、体液ださせながら消滅させる。

「みたいね…まだ市内には沢山のこってるわ」

遠方のカメラが消滅する。

「全員は避難できなさそう…けど踏ん張らないとね」

ゴブリン5匹が消滅する。

彼女達は、市役所の屋上、3階、2階から射撃し、市内中心部への侵入を防いでいた。

また別の部隊が環境改善センターや、警察署などの建物陣地に入っ
ていって、
各所から火線があがり、中心部侵入を防いでいる状態だ。

バラバララ

「ゾンビヘリ!!」

注意の掛け声とともに、
パシューパシューと零式ミサイルが2発、キタカゼゾンビに吸い込
まれ…

爆散、大きい破片が落下し、民家が潰れる。

パシュー

また零式ミサイルが白い煙を伸ばしながら、
グレーターデーモンの身体に吸い込まれ爆散する。

「かなり足早かったね…」

「ええ、零式でない…」

ヘビーマシガンが火を放ち、何十発も身体に受けたミノタウルスが、

ゴブリンを巻き込みながら倒れ…死亡後消滅する。

ミノタウルスは雪に捕われ、進行速度が遅くなっているようだった。

その間にも彼女らは射撃を続け、
またサブマシンガンも火を放つ。

パシュー

デーモンに吸い込まれ爆散。

ヒュルルル

不気味な音が鳴り響く…生体ミサイルの音だ。彼女らの目は音源を探す…

「ミサイル!!」

掛け声とともに屋上にいた彼女らは階段室に入ったり、
3Fデッキにとびおり窓から室内に入る。

ドーン ビリビリビリ

屋上に出て強酸で白煙が上がっているとところは避け、また射撃が続く…

パシューまたロケットが放たれる。デーモンが爆散する中…

「北側環境センターが！！」

見ると、崩れ落ちてくセンタービル…

「あそこ香川小队よね…青山小队も付近居たはずだけど…」

何匹かのデーモンがこっちに寄ってきたので零式ロケットが打ち込まれる。

「ちょっと、駅方面にもかなりゴブリン浸透してきてる！！」

パシューパシュー

建物の窓という窓とから火線があがっている…

「キヤーー」

金切り声が上がって…見ると…

デーモンが肉薄しある部屋を殴っている…

パシューパシュー

2体が倒れ、残りのに火線が集中する。

「零式弾ぎれ！」

倒れるデーモンのおくに20体程がこちらに向かってくるのが見え
た…

火線を集中させるも…1体、2体、3体…

ヒュルルル

彼女らはその音を聞き逃していた…

そして…

side～ある学兵～end

カオルは木造に着くと人気のないところで佐藤千翼長をだす。

「佐藤さん、あなたの小隊の場所わかりますか？」

端末を差し出す…

彼女はナビをそうさすると、市役所を出し、

「所定ならこの市役所です」

場所を確認し、虚数空間に端末をしまつとお姫様抱っこし、

「”幻影”」

市役所上空へといく…

上空につくとビームライフルで狙撃している女の子達が見える…

「彼女らです?」

「いえ、狙撃特化の女子で編成の牧村小隊ですね……あ、見えま
した」

階段室からバラけて射撃体勢にはいる女の子達…

「女の子だらけですけど…?」

「女子で編成されてます。あと混合が4個小隊です」

「この市役所につく人数は?」

「定数満たしてるなら100ですが、99人です」

「わかりました。じゃあシェルターをお待ちを…」

「あの娘達をよろしくお願いいたします」

佐藤千翼長をシェルターに引き込む。

とりあえず、コブでやられるんかな〜と思い、
同化してみると、階段は防火扉で固めてあったので、上空に離脱。
「加速」

状況を見まもる事にした…

7時21分 佐藤小隊が射撃し始める。

同24分 ゾンビへり襲来…

少し警戒してたけど、対象者発生せず。

同25分 グレーターデーモン襲来

ミノタウルス撃破

同30分 デーモン10体目撃破確認

同34分 生体ミサイルが打ち込まれる…

警戒して近寄り過ぎた…

ビチャビチャ

強酸が、かかったけどなんともなし…

同38分デーモン57体撃破したところで、
火線上がった陣地に取り付いたデーモンが、
集団パンチで建物崩壊させる。

こっちに向かっていた集団は撃破される。

同40分

(あれは?)

デーモン5体接近、うち1体零式で撃破されるも、それ以上あがらず、もう1体は火線集中で撃破、しかし…

「キヤー」

デーモンが迫っていた部屋に向かう。

見ると97式軽機関銃で集中させてる女の子が4人…

部屋の中にすり抜けて入ると、やはり倒しきれず…

デーモンのパンチが迫る…

4名様ご案内、体育館型シエルターに引き込む。

崩壊する部屋の中をすり抜け上空にでると、零式が2本打ち込まれ、1体が集中で倒されるも…

(零式切れたか…)

奥に18体せまってくる…

屋上にいる女の子達が火線集中し、1体2体3体倒すも…

(ミサイル気がついてないな…)

4体、5体、ミサイルが目の前に…

屋上にいた女の子達33名ご案内し…離れる。

勿論壁側に正面をむけさす。

「加速”」

2重かけ…

各デーモンの動向をみ、

パンチが打ち込まれる各部屋から女の子達を順次ご案内。

合計73名…

建物がデーモン12体のパンチに耐え切れず崩れだす。

「加速””加速”」

4重かけ…

世界の時は止まる…

館内にはいり、3F廊下、及び部屋で12名確保、

所々コンクリート塊が落下停止してる中をくぐりぬけ、2Fへ

同じく廊下及び部屋で10名確保…

(95か…あとは?)

一階へいくと…階段室及び1Fフロアで4名がゴブリンに射撃している…

弾は勿論空中でとまっている…確保。

(これで全員のはず…)

1Fからチェック…

踊りかかろうとジャンプして静止しているゴブリンをぐぐりぬけ…

2Fにあがり、空中に浮いている床材や、柱をかき潜り、

3Fにあがり屋上の構築材が空中に浮いてるなかを探索し…

しわすれが居ないのを確認し…

外にでて解除…

市役所は濛々と白煙をあげて崩れ落ちる……

(眠い…)

急に睡魔が襲ってくる…

フラフラになりながら次の目的地の鶴泊へ…

ウトウトとんでると…ドーン…

地面に突き刺さっていた…

蚊になっていたため、付近からはいきなりクレーターができたように見えたらう…

またフラフラと飛ぶ…

非常に体感時間の長い30分で、

鶴泊駅の看板が見える…

駅には避難民がまだいた…

カオルはコンビニの屋根につくと、

石井千翼長をだし…

「”幻影”…眠いです…目的がきたらおこして下さい…」

寝落ち…

2時間半後…

「カオルさん起きて下さい」

「わたしがトイレに店内に入ったあと、その後あのトラックが燃え盛ってました…絶対救えよ」

「わかりました」

(????なんだ?なんかした?……)

妙に冷酷、高圧的な石井さん…とりあえずシエルターに入ってもらい…

輸送トラックに取り付き同化する。

(燃え盛る前に救出かな?)

運転席も学兵、

コンビ二内に駆け込む助手席に座ってた石井さんが居なくなってる。

「隊長、またなの?」

「トイレだっ〜」

「…まったく自炊したのを食べるから…」

「懲りずによくやるよねえ…」

「いい加減、わかって欲しいというか…理解するでしょ…普通…」

（そろそろかなあ〜）

バラバラララ

西側よりキタカゼゾンビが現れた！！

「ゾンビヘリ！！」

運転してる女学兵がアクセルふかす…

後部荷台では、狭いなか詰め込まれた女学兵達が、

手持ちの武器で対空砲火をあげてる…

しかし、ゾンビヘリは、

ブロロロ

と生体機関銃を放ち、弾が段々トラックに…当たる前に、彼女達をご案内し即離脱！

弾はトラックに吸い込まれ、強酸が荷台内に撒き散らされ…ガソリンタンクに弾が入り…

ドコーン

大爆発をおこす。

ゾンビへりは満足げに次の獲物を目指して飛び立っていく……

「やああああああああああああああああああああ」

コンビニから出た、石井千翼長の叫びだ……

「あああああ………」

カチャ

(うおいー!!)

「アルミサエル!!」

石井千翼長……拳銃を自分で頭に銃口を当てたので、思わず止めちやいましたか……

というか止めないと救助した石井千翼長どうなるの？

の状態であった……

(……………確認するか)

彼女の精神状態はずたずたになって、

廃人になる傾向みたいだった……

異世界軍の方の石井千翼長をだし、聞くと……

「確か、そのあとの記憶がなく、気がついたら仮眠室でした。

……3日の20時頃でしたね……

すぐに表に出て、通った部隊にのせてもらって……転々とし八戸にきました」

石井千翼長をシェルターに引き込むと、

崩壊している石井千翼長を睡眠、精神を繋ぎ合わせ、修復……
コンビニの仮眠室まで運びました。

(多分俺が助けた事により、八戸で救助されるのか……)

一段落して……

「駄目だ……ねみい……使い過ぎたか……」

T-850をだし……

「あと……たのむ……19時頃おこしてくれ」

カオル、仮眠室のベット横でぶっ倒れました……

⋮

カオス報告

睡眠 報告なし

作者「学兵の皆さん…始めまして作者です」

ザワザワザワザワ

学兵「なんか芸して」 「撃ち殺してよい？」 「アスカちゃん」
「しんじくん居る？」

作者「えっと、皆さん130名近くいるので、設定は考えられませ
ん。

です。自己申告でお願いしますね
14歳から17歳までの女性の設定はそのままです

学兵「作者手抜き」 「真面目にやれ」 「ウホッいいおんな」
「いるわよ」 「シンジ君??」

作者「え〜では説明ビデオになります。

皆さんゲロ袋の準備はよろしいですね?ではどうぞ

……途中30分後…

死屍累々……汚物が……散乱…

目つむつても流れる映像……

メディカルアームが忙しく回っている……

さてカオル君はまだ寝てるのであるヒトコマを…

〓 〓 横浜白凌基地正門ゲート 〓 〓

「なあ…」

「ん？どうした？」

「妙に最近ゲストパスの発行多くないか？」

「そういえばそうだなあ…」

彼は記入簿をみる…

帝国軍開発局整備部
帝国軍開発局整備部
帝国軍開発局整備部
帝国軍開発局整備部
帝国軍開発局整備部
帝国軍開発局整備部
帝国軍開発局整備部
帝国軍開発局整備部
帝国軍開発局整備部
帝国軍開発局整備部

もうやめていいよね…
つまり一日に50人近くの、
帝国軍開発局整備部

が出入りしてるのだった…

「すみません、ゲストパスの発行を……」

「あ、はいどうぞ」

カキカキカキカキ

IDを見せられる。

帝国軍開発局整備部所属と……

T-850のセンサーに引っ掛からない為、そのまま通行してく…

(しかし……?)

かならずっというていい程、黒い長方形の鞆を大事に抱えて入ってくる…

(なんでだろうっ???)

「 CIA 極東支部 」

(このカードは切りたくなかったがな…)

机には写真が数十枚おいてある…

その写真を見ると…いずれも美女、中には A - 01 の顔もある…

(まあこれでうまくすれば…)

「 帝国軍開発局整備部 」

「 例の物は手に入ったか? 」

「 いえ、まだ入手できてません 」

「 ……おい、貴様白状したほうがいいぞ… 」

「 手に入ってません!! 」

「……そうか、やれ!」

わーと たかり始める男たち…

ぽーん

ぽーん

ぽーん

と衣類がほつり出される。

「!!あつたぞ!!」

手に掲げられる写真

「貴様!! 結束を忘れたのか!?!?!?!?! 処分だ!」

「イヤダーイヤダ…」

真っ裸、チン○ンブラブラで、両手を引っ張られて、ひきずられて
く男…

先程掲げられた写真がデスクにおかれる。

おおおう

ざわめきが広がる…

「デカルチャー」「ちっばい命!!」

「チッパイ!チッパイ!」

だんだんと唱和が広がる

「チッパイ!チッパイ!」

左手が腰の部分にあてられ、右腕を胸の高さから高く突きあげられ、
また胸の高さへ

「チッパイ!チッパイ!チッパイ!チッパイ!
チッパイ!チッパイ!」

バン!!

「そこまでだチッパイ党!!覚悟しろ!!」

「デカパイ党の襲撃だあ!!」

「かかれ!」

「応戦しろ!」

思い思いにライフルを持ち出し、銃撃戦が始まる…

一応紳士協定でゴム弾使用らしいが…

催涙ガスが投げ込まれ白煙が広がり…

場面は見えなくなる…

side) カオル)

ゆちゆち

ゆちゆち

ゆちゆち……

「う……いちちちち」

「マスター、時間です」

「おお、ありがとな…あ、ああ」

ゴキ

背中を回し、骨を鳴らす。

床の上で寝たので…こったらしい…

「う、うん」

手を後ろに組み、そのまま両手伸ばしながらを頭の方へ…

ゴキゴキ

「T・850ちつと悪い、下から手を押してくれない？」

「いじつですか？」

ゴキゴキバキボキベキ

「おお、いいいい」

カオルの両手に変な具合に、後頭部までついてるんだけど……

「サンキュー」

「いえ、マスター」

カオル何事もないようにT-850をシェルターに入れる。

(痛みとれたし…えっと、とりあえず同化して辺りの監視?)

同化して、20分位すると2台の兵員輸送車が見えたので、石井千翼長を覚醒させる。

彼女は、起きると、表にでた… 兵員輸送車が気がついたようだ…
のせてもらって、弘前方面に去っていった……

(一仕事おわりっと…)

「シヤムシエル」

カオルは北上していく…

side) ある自衛軍工兵)

1月3日午前8時27分

「木造落ちたぞ!!!」

(ここもまもなくか…)

彼は、市内の五所川原駅から西方にかかる、乾橋の破壊仕事を任ざられていた。

旅団司令部は岩木川を防衛線にと考え、

五所川原及び中泊町陣地への撤退、集結を急がせている。

橋の橋脚に爆薬はしかけ、いつでも爆破準備は整っている…が
まだまだ避難民が橋を渡っている為、指示はきてはない…

つがる市の人口4万人及び帰省した人、観光客などが避難をしている…

西津軽郡は、壊滅した一部の地域以外は無事らしい。

海岸まで迫る山々が進路を阻害してる為、

幻獣どもは、ここ、五所川原を目指している…という事なのだ。

鉄道橋も現在、五能線を走らせられない為、避難民が徒歩で渡っている…とも聞いている。

ザワザワザワ

空に不気味な音が響く…

彼は決断の瞬間を迫られる時がくる……

爆破スイッチを持っているのだ…

コンビニの上に機銃座や迫撃砲が備わっている…迫撃砲は幻獣の海原へ、しゅぽーん しゅぽーんと81mm砲弾が撃ち込まれ遅延させている。が……

「いいな…わかってるな…幻獣が、橋のこっち側にかかったら…押すんだぞ…

ぎりぎりまでだ…

避難民を取り残すんじゃないぞ…」

96式装輪装甲車が2両、堤防上に乗り上げ、橋の向こう側に向け、機銃を放っている。

避難民が悲鳴をあげ橋の上でパニックに陥っていた…

橋から押し出され落下し、絶命した男性…

また進まない車の上を渡り歩く人、

まだ橋の上で進めず、ふさいでいる避難民をひき始める車…

また、まだ橋にかからない集団が、幻獣におそいかかれ、海にのまれる…

「ギャー」「グウワ」

絶命の声が聞こえる。

小隊機銃4門が火を放つが……海はどんどん避難民を飲み込み、ゴブリンが斧で頭をかちわるのが見える……

橋の上では、渡りきれない避難民に襲い掛かってくる

パンパンパン、襲い掛かるゴブリンを射殺、
そして、幻獣の海が橋を渡りきろうとした瞬間……

「やれー!!」

ポチ

ドンドンドンドン!!

橋脚に仕掛けられた爆薬が炸裂し、

橋は海にの見込まれ、絶命したと思われる避難民、車、幻獣を載せたまま、

ゴゴゴゴゴ

崩れ落ち……白煙に包まれる。

「お母さ〜ん」

道が残っていた境目で一人の少女が叫んでいた……

彼女はゴブリンに襲い掛からる母親から押し出されて生き残った。

ゴブリンは頭をかちわったあと、自衛軍に射殺され、消滅……

その少女は親との永遠の別れとなった……

小隊機銃はこつち側に取り残されたゴブリンの対応に追われ、

また至るところで自衛軍がサブマシンガンで、ゴブリンを追いかけ
ているのが見える……

1月3日午前8時33分

side～ある自衛軍工兵～end

side～ある砲撃兵～

「急げ～!!」

カチカチ

水平儀：みながら

「設置よし!!」

「設置よし!!」

「設置よし!!」

五所川原の駅から2kmの高校に81mm迫撃砲が並べられる。

2名で運用される迫撃砲は、重さ約40kg
やや長いのと部品がわかれている為、二人で設置、そのまま二人で
運用となる。

「目標、154号のサンクス付近」

（橋渡ったところだから1.4kmか、方位もよし）

「照準よし!!」

「1番装填!!」

ライフリングに翼をかませて中程までうめ、弾を保持する。

「装填よし!!」

無線でやり取りした隊長が、

「1番発射!!」

保持していたのが弾をはなし後方にさがる。

砲を落下した弾が撃針にふれ…

パシユしゅぽーん

とともに弾が打ち出される。

間接射撃の為、落着は直接は見えない…

「効力射！！各自、自由射出！」

しゅぽーんしゅぽーんしゅぽーん

約100門の迫撃砲から弾が放たれる……。

side～ある自衛軍砲兵～end

side～ある学兵～

彼は堤防沿いの機銃座から、打ちっぱなしになっていた。

焼け付く前に付近から雪を集めた仲間が、
雪を銃身にドカツとおく…

シュー

と瞬時に白煙が上がる。

その間も、
ガガガガ

銃が止まる時は、給弾ベルトを変える時だった…

朝から打ちっぱなしで、夕方、夜になってくる深夜ふけて、
日付が変わって2時頃…

北から幻獣どもが押し寄せてきた…

機銃を北にむけ、射撃開始する。

弾をくらい消滅するゴブリン、

消滅するゴブリン、

消滅するゴブリン、

消滅するゴブリン、

じわじわとよってくる…

カチカチカチ

（は！！給弾！！）

彼はベルトを交換した…

ザシュ！！

彼が聞いた最後の音だった…

side～ある学兵～end

1月3日夜10時…Muv-Luv世界は翌日

カオルは五所川原付近につくと…

(人がいないとこ………ないなあ……)

少し探したが諦めた……

何しろこんな狭い町に旅団、師団の中核が集中しているのだ……
片方は学兵で練度はともかくとして……

(多分8000人???)

(さて……空中にいきなりだせるかなあ……)

カオルは引き出して……

案の定落っこちかけたので、はしつと抱き着いた。
ぷにゅ

正面から……

「すみません……陸地でだせなかったの……」

「……………」

「桜井隊長？」

(顔が赤いぞ???)

「でも甘く美味しかった…しファーストキスいきなり奪われましたが……」

先に助ける人達がいいますよね？」

「はい……」

「お願いしますよ」

(でも…美味しかったチくばきゅんくばきゅん……
桜井隊長美人なお姉様だし……
けど逃げなかった……)

カオル悶々し始めたね……

桜井隊長も空気読めつつか…積極的だろ。

作者の愚痴はおいときます。

「とりあえず、桜井隊長、助けたい人達は何処に?？」

「もう少し高度さげて貰えます?」

……町に近づく

「駅舎見えますよね？西側の駅入口信号の角の建物…」

カオル近寄り

「この足元の？」

「ええ…で、北側の信号の病院とになります。先に病院が崩されて…でしたので…」

「わかりました。じゃあシェルターに…」

「あ、待って…」

<ばきゅん><ばきゅん><ばきゅん>

ぶはぁ

「よろしくお願いしますね」

「…………はい」

おまえらしい加減にしろっでいいたいね……

桜井隊長をシェルターに入れ…

しばらく見張る事にした…

「加速」

市内では対岸に向け、迫撃砲、堤防沿いの小隊機銃、川沿いのビルからの機銃などが撃ち込まれている。

川で足が遅くなるので撃ち込んでるのだ…

デーモンも足を取られ、次々消滅してゆく…

「なあ作者…」

あ？解説してるから邪魔すんなよ。

「俺いつ桜井隊長とフラグたつたんだ？」

しらねーよ、こっちがしりたいわ！！

「確か、R15だよな…何処まで良かったんだっけ？」

……………正直、フレンチキスくらいじゃ？

そっちに關しての具体的な擬音表現はアウト、

勘違い擬音はKと見てる……………って解説邪魔すんな！！

「でよ…」

時間進めましょう…

0：30頃 金木陥落 幻獣岩木川防衛線突破

闇の中暗視ゴーグルを使い、まだ五所川原は落ちてはない…

北側に向けての備えも必要になつてくる…

(ん?)

カオル見回ってる内になんかを発見したようだ…

(ありゃあ?)

なんか乗り物?ぼいのを発見した…

台座の上に、砲身と、機関部…

レールガン?と思い、

とりあえず機体情報ゲットしときました。

89式短滑空砲、レールガンゲット

1：00頃、津軽平野を金木からわたり393を北上する大集団…
段々と川を渡れる範囲が広がる…

また南にも…

2：00頃、中泊に大挙して襲い掛かる幻獣たち…そして…

カオルの視界内五所川原では…

幻獣の海が陸地を北側から蹂躪してくる光景が見える。

先頭は足の軽いゴブリン達だ、その後ろにデーモンが見えている。

道路沿いに設営された機銃座が火を放つが、
幻獣の海にのまれ、ついでた学兵は、抜刀し、入ってきたコプリン
に挑む…

10匹20匹と始末するが、疲れたり、

多方向から串刺しにされ……

ビル陣地では学兵を護ろうと、銃撃を被せているが、

その銃撃がグレーターデーモンをおびき寄せ、

早いスピードで陣地に肉薄し、パンチでビル陣地が沈黙してしまう…

そのグレーターデーモンに対して、零式ミサイルが、別の陣地から
白煙が伸びてきて、爆散…

上空では迫撃砲の砲弾によるドームとっていいだろう…

見事な赤い屋根ができていた。

その様な光景が現在の五所川原…だった。

しかし、物量に圧倒され幻獣がどんどん押し寄せてくる……

カオルは、眼下にある女学兵の機銃手をマークしていた。

彼女は、海にのまれながらも、抜刀後生き延び、400体近くのコ

プリンを消していた。

近くにいた女学生は14体目で、背後のゴブに気付かなかった為、頭われかけたのを引き込んだが…

そんな彼女に、グレーターデーモンが目をつけ、よってくる…

(もう駄目だろうな……)

しかし、彼女は、スルツとデーモンの両足の間をすり抜けると…

デーモンのアキレス腱…を、切り付け転倒させる。

彼女は手榴弾をデーモンの背中に投擲させ…次の獲物へと切り掛かる…

(おいおい…彼女デーモンまで倒すかよ…)

しかし、背後からの援護射撃が、彼女の右胸を貫通し、血を吐きながら転倒……

そこに獲物だ！！のごとくわっと群がって襲い掛かるゴブ。

「幻影」

彼女を消し、引っ張りあげ手短なビルの上へ…

「ゲフツ……ゴフツ……ゴフツ」

吐血しながらなんとか喋ろうとしていた…

透明なところから、彼女の血が飛んでくる…

(右肺か…)

医療カプセルだしながら、

「右肺いったみたいね…でも大丈夫たすかるから…」

で、彼女を入れ、カプセルを作動させ、幻影解除…
虚数空間に引き込んだ。

目的の陣地をマークしながら、

だったのでさほどは、引き込めなかったが、着実に引き込み人数を増やしていく…

いよいよグレーターデーモン、ミノタウルスの中型幻獣の大群が押し寄せてきた…

目的の陣地からの火線が18本ほど上がる…

「加速」

二重かけし、建物のなかへ…

デーモン3体が肉薄、内1体は倒れそう…

パンチが撃ち込まれ…

引き込み、この建物陣地は沈黙するが、
デーモンは構わず殴り続け建物は倒壊する…

もう一つマークしてた陣地からの火線が伸び、更にデーモンが3体引き寄せられる…

最初のデーモン2匹は倒されるものの、残りの3体は引き寄せられ…

もう一つの陣地に肉薄、パンチを撃ち込む直前に、ご案内し、沈黙、このビル陣地も崩れ落ちる…

獲物を倒して満足したデーモンだったが、迫撃砲弾が直撃、3体とも崩れおち消滅する……

その後は、各ビル陣地は潜伏し、迫撃砲弾が市内へ直接撃ち込まれるようになる。

つまり、道路脇に陣取っていた学兵は文字通り全滅し、またそれをまもる為のビル陣地もかなり減り…

残った陣地は観測点として、幻獣の海に残される事となったのだ…

1月4日午前6時 五所川原駅周辺は、幻獣勢力下に陥った……

もう闇の中に人間の悲鳴はあがらなくなる……

カオルはほうけていて、やっときさ、世界扉をひらく……

精神力使いきったもようです。

カ
オ
ル
報
告

眠
い
！
！

作者「……………」

あ号「……………」

作者「……………」

あ号触手を作者の顔面に伸ばしフリフリする。

作者「……………」

あ号、何か思い付いたようだ……

誰か連れてきた……400体を切り抜けた女性だ……

あ号なにかつぶやいてる……彼女うなづいてる……

彼女「せーのー!!」

バチーン!!

吹っ飛ぶ作者……100mして落下……

ピクピクピク

あ号「……………この物語は……乗っ取った!!……………さて、死亡フラグを

……「うん、」

作者「な、わけねーだろ!!」

あ号「……残念だ……生き延びて災害除去しようと思ったが」

作者「はあはあはあ……けど、彼女一人あるき……どうすっかなあ……」

あ号「……桜井隊長？」

作者「ああ、ヒロインにもあがらなかったが、完全に一人あるき……」

あ号「おまえさんが書いてるんだよな？」

作者「まあな……けどあの場面は、ああなる結果しか、……はあ……
……どうしよう……」

う~~~~~~~~……おおなやみ中

ヒルダさんとくっつけようとしてた時も、あっただけどなあ……ヒ
ロインプロット崩壊中……

第60話 一気に3桁： 処理できねえぞ！b y作者 ガンパレより帰還 投稿

2001年7月17日夜

カオル世界扉を潜って消して倒れこむ…

ねおちしたようだ…

コバツタが見つけた…

「マスター！！……寝てるか？……運ぶか…」

29号背中にカオルをのせ、浮かびだす…
付き添いで27号もよってきた…

「あら？カオル…寝てるの？」

「イッシーちゃん、そうだよ」

「こんな状態のカオルみだの初めてなんだけど…」

「記録みると…魔法を使いすぎみたいね」

「……魔法をねえ…」

石橋とコバツタ一緒にカオルの部屋へ行く。

「じゃあ、27号ちゃん、あとはいいわ」

「よい夜を〜」「マスター落としてね〜」

石橋、ヒロインフラグ消滅しないように頑張れ!!

「任しといて作者」

石橋はそういうと、眠くなったようだ…
幸いスペースはある…

「」

そのまま、制服を脱ぎすて、下着姿になると、いそいそとカオルの横に入りこむ。

けど、板胸だ「作者!!」

空中にとびげりして俺を蹴飛ばすなよ……頑張れよ……

2001年7月18日

(あ、あれ??・・・なんか・・・いいに・・・ほい・・・)

カオルまだ眠りのぼやけの世界だが…

幸せに感じている……

目が覚めると……ピンク色の髪が目に見える……

(ふえ???)

左腕がなんか感触がいい、左手もだ…ふにふに。

(なんかいい……なんだ???)

「!!!!!!!!!!」

カオル…石橋を抱きまくら状態にしてたのに気がついたようだ。

(な……………なぜ……………イツシーが下着姿???)

……………俺…やっちゃったのか???)

「あ、カオル、おはよ」

「……え、え、えっと、その、」

「ん？どうしたの？」

「な、な、なぜ、…」

「ん？？」

「えっと……イッシー……なんで……下着？」

「え？…カオルが連れ込ん」カオル全力土下座！！

「責任とります！…！」

「…どう責任？」

「言わなくともわかる責任をとります！」

「ん わかった…じゃあ、顔あげて」

顔を恐る恐る上げる。
チユ

「これで許してあげる」

制服を着込み始める石橋…

カオルフリーズ中…

「じゃあね」

……

(イッシーとやっちったのか……俺…記憶がないんだけど…)

気持ちは切り替え、朝がたの騒動のあと、まずは処理を…

空いている奥の戦艦ドックにいき、体育館型シエルターをだす。
佐藤小隊、牧村小隊組のぶんだ…

次に、別の体育館をだす… 石井小隊の分だ…

また別の体育館をだす… 桜井小隊の分。

最後にいくつかのシエルターをだす。
五所川原で拾った人たちの分だ。

もちろん各シエルターに扉をつけた。

戦艦ドックないのスピーカーカーマイクを使う…

「おはようございます。ご準備出来次第、各小隊毎に出てきて集合をおねがいます。

小隊でない方は、シエルター前でおねがいます。

加入の意思の最終確認をとりたいと思います」

……

どやどやどやどやどや

騒がしくなる……

「佐藤小隊横隊にあつまれ」

「牧村小隊横隊にあつまれ」

「桜井小隊、横隊に整列！！」

「あ、ことみ」「ひろえ！！」

手が空いているコバツタ達が沢山山きている。

カオルは佐藤小隊にまずは行った…

「敬礼!!」

「ザー!!と一斉に敬礼するので、返礼をする。」

「はじめまして、渚カオルです。では皆さん意思の最終確認をとりたいと思います……」

「帰りたい方は、遠慮せずに前の方へ出てきて下さい」

「誰も出てこない……」

「手が上がる……」

「なにか?」

「質問よろしいでしょうか?」

「はい、どしぞ」

「あのロボットのパイロットになりたいのですが、可能でしょうか?」

「可能ですね……後ほどになりますが……よろしいですか?」

「はい!ありがとうございます」

「では改めて、帰りたい方はいますか？」

……………誰もでて来ない…

「佐藤小隊、総員50名、異世界軍に移籍し、この世界の剣となります！！」

「ありがとうございます。では宿舎にこのものがご案内します」

石井小隊の前に移動した、

「敬礼！！」敬礼がかかり返礼をする…

「はじめまして、渚カオルです。では皆さん意思の最終確認をとりたいと思います…

帰りたい方は、遠慮せずに前の方へ出てきて下さい。

また歩兵以外にも色々な道がありますので、その話は後程でおねがいします」

誰もでない…

「石井小隊、総員30名、異世界軍に移籍し、この世界の剣となります！！」

「わかりました…ではこの者が宿舍まで案内します」

桜井小隊の前に…

「敬礼！！」返礼すると…

「渚カオル殿、当桜井歩兵小隊、総員27名は異世界軍の、組織内で活躍したい所存です」

「わかりました…よろしくおねがいます」

「は！！」

桜井小隊は移動する。

（あとは牧村小隊と、拾った方々だなあ…）

「と、はじめまして、牧村小隊の皆さん。俺が、映像にも紹介されてた渚カオルです。」

では、加入の意思の最終確認をとりたいと思います。帰りたい方は遠慮なく前の方へ出てきてください。なをパイロット希望等は後程の説明になります」

誰もでてこない……

「小隊長さん、よろしいですか？」

「はい、総員50名、異世界軍に移籍します」

「ではこの者が宿舎等案内します。今日一日は、この基地になれて下さい」

「はい！」

(さてと)

「残りの方々、とりあえず集まって下さい。あ、できれば知り合い、同小隊等でおねがいします」

集まってきた…34名か…

「映像で紹介されました、渚カオルといいます。加入の意思の確認をとりますので、帰りたい方は前にでてきて下さい。

また、職種の変更等は後程にお願いします」

誰もでてこない…

「皆さんよろしいですか？」

「はい」×34名

「ではこの者が宿舎へと案内します」

(……あとMS組だけか…医療カプセルも変えなきゃな…)

シエルター清掃をたのんでおいた…

「『ジオフロント医局』」

「マギーさん」

「あ、カオルさん、おはようございます」

「と…?」

カプセルがから…

「えっとMSパイロット3名は？」

「あ、はいはい、B - 01に加入になりましたので、寮に入ってますよ〜」

「了解〜」

医療カプセルを差し替えた…

カプセルは4名の学兵が入っている状態だった…

「マギーさん手筈通りよろしく願いします」

「はい」

「B55ハンガー」

「さてやる事は？」

「マスター」

「ん？11号どうした？」

「18歳以下の人と恋愛禁止だからね〜」

「……わかってるよ…で？」

「彼女ら学兵なんでしょ？学業はどうすんの？
しかも200名近い人数なんだけど…」

「あ～～～……………」

学兵、14歳から17歳までの徴兵された第六世代強制学徒動員兵である。

40万人動員され、内10万人が熊本に捨駒として配置された…

九州撤退戦後解散になるも、無責任な報道により、多数の志願兵が増加。

400万人の学兵は、

警備師団、山岳師団等二戦級に多数配属される。

親師団の番号をもつ3桁の数字で編成される。
俗に3桁師団、丙種師団とも…

(学校??……そういえば…)

「なあ日本の徴兵年齢何歳だっけ？」

「男女とも16歳からだだし、
京都まででかなりの男性衛士を失ってるよ」

(とうなる??…二つに別ける必要ある???)

軍事訓練校と、学兵校……

「先生は？」

「座学は自分達でもてるね、訓練は桜井小隊さんでいいんじゃない？」

（そうだなあ、現役自衛軍、しかも第六世代だし……あ、まりもさんにも聞くか……）
とりあえずジオフロント内に学校を作る事確定しました。

A7に建設を頼んだ。

「あとマスター、3000程の群、連隊規模の進行が長崎県地方に向かっているのと、
燃料の報告等ね」

「お、きたん？いつ？」

「明日、昼間2時過ぎ予定場所は旧長崎港」

「B-01と桜井歩兵小隊、あとは魔と、撃震帝国仕様と……
検証したいし、俺の分の烈火作るか……
下駄で行けばいいか……できるよね？」

「80機程できてる」

「じゃあ帝国さんにも出るって伝えておいて…であとは？」

「ミディアの件、ヘリウム燃料1200機分のタンクだったよ」

「ほう…とりあえず30分の1揃ったか」

カオル？30分の1？

「陸戦強襲型ガンタンク2万機つくるつもりだよ」

日本帝国保有機数よりも…多いよね？

「だね」

その機数で佐渡島ハイブを？

「勿論」

佐渡島ハイブ落ちるの確定……

格納庫足りなくない？

「増設するよもち」

ちなみにカオル好きな将棋の陣形は？

「穴熊」

シミュレーションで得意な戦法は？

「内政重視、敵より開発、一気攻勢」

だそうです…先に進めましょう。

「マスター最近壊れぎみ？」

「うっせ、で製造するぞ」

烈火桜井小隊27名分+1名分

B-01は3名分注文するけど明日は連れてかない…

(烈火の武装ねえ……)

引き込んだ学兵達の武器を弄ってみたが、異様に重いのだ…

(なんで?)

「なあ11号なんでだと思っ？」

「えーとね……装弾数、威力、耐久性の問題でかな」

とりあえずガンパレ世界から持ち込んだ武器で使えそうなのが、

97式軽機関銃

96式手榴弾

82式煙幕散布器

98式増加機動装甲

超硬度カトラス

零式ミサイル

あたりかな？

97式機関銃は重量16kgながらも、装弾数、80、
烈火なら片手ずつ2門装着可能だし…可憐なら4門…

96式手榴弾……重いね。けど威力はある…はず

でもアデレイトアサルトライフル？

イマイチ意味わからん…何故32kgの重量ありながら、装弾数がたった40なんだよ…

威力か？

弾が問題なのか？？

確かに弾がかなり重い…

まあ明日検証する事にした…

それぞれ適当に製造を頼む。

また、明日は下駄で飛ぶ為、兵員輸送コンテナを作成した。

「マスター、副司令から伝言きたよ。明日A-01連れていけだつて」

「あ、そう？じゃあ下駄搭乗で…といつといて、明日11時に出ると」

「イエスマイロード」

(えつとあとは…学兵達の着るもの…)

UNIQLOみたいな工場つくるか…なあ…かなり多い…)

上がってきたパーソナルデータを入れ、「”世界扉”」

メールを送っておいた。

(えつとあとは…まりもさんと…潜水系は帰ったらでいいや…あ、)

「11号、テンプレーションを…50機と、乗組員に…T・シリーズできる?」

「……………何番台?」

「T・1100まあTOKの子」

「なら可能〜T・850の101と、T・1000は生産不可ね」

「ん…シャトルの添乗員分によるしく」

「ただ最後は、マスターが調整した方が調子が良いよ」

「やっぱそんな制限が?」

「うん」

「あとは…まりもさんに、相談しに行くけど、11号抜けてるとこないよね？」

「配置はまだだから…うん大丈夫」

「じゃあ、あとよろしく」

「まりもちゃん私室」

コンコン「まりもさん〜カオルです」

「あ、はい。どうぞ〜」

シュン

「失礼します〜」

「カオルさん、どうされたのです？」

「と、実は学生が200人以上加入しちゃって、でこっちの方のカリキュラムってどうなってんのかな〜？
って」

「200人もですか…あ、カリキュラムですね？前期では、主に座学で、戦術、各基礎的なもの、また実技で体力作り、武器との取り扱い等を行っています。」

後期では、シミュレーター、実機訓練、対BETA戦術、体力作り等より衛士的なカリキュラムになります」

「学業は？」

「訓練校では必要ないので…前期、後期二つ合わせて10ヶ月では到底足りません…」

(確かガンパレ九州は2週間で実戦に、ほつり込まれたんだっけ？)

「成る程……どおつすかなあ……」

「あの、私のカリキュラムでしたら、そのまま渡せますけど…」

「あ、本当っすか？是非ともお願いします」

「はい」

「じゃあ、ありがとうございます。
またなにかありましたら来ますので」

「わかりました。お待ちしています」

……

カオル報告

ガンパレ世界の新取得…

多目的リング

アデレイトアサルトライフル

97式軽機関銃

94式小隊機銃

96式手榴弾

82式煙幕散布器

98式増加機動装甲

超硬度カトラス

レールガン

イッシーどう責任とろう…

第60話 一気に3桁… 処理できねえぞ！by作者 ガンパレより帰還 投稿

作者「イッシーとつとつやっ たか… మరిもちゃん出遅れてんなあ…」

あ号「うむ」

ナギ少尉「甘い！甘い！」

作者「ナギなにが？」

ナギ少尉「あたしの艦長も、おばさんに靡くから、ひっしのアプロ
ーチも全て無駄になってんのよ!!」

1169

作者「……ああ」

ナギ少尉「だからここは、更なるエツチな事を!!」

作者「R18になるから……」

ナギ少尉「よく他のと同様に本編に書かなきゃいいの!!」

作者「あ〜……………」

ナギ少尉「あとは修正でもなんでもイレ込めばいいのよ!!
なにキスだけで終わらしてるの!!」

作者「……………石橋とカオルのシーンだと?」

ナギ少尉「もちろんスツポンポンにして、あんな事こんな事」

作者「それをバキユン修正で?」

ナギ少尉「そうよ!!」

作者「……………1ページがバキユンだらけになるなあ……………」

ナギ少尉「それでもやれ!!作者!!」

……………恋愛もの苦手なんだけど どうしよっ?..?

2001年7月19日…朝

「世界扉」

とりあえずメールの返信を確認する。

(さすが田中さん仕事が速い…)

そのまま平和日本に行く…

(確か出撃が10時だから早くかえって来よう…)

〓 現実世界 〓

衣類詰まったコンテナを受け取る。

「世界扉」

〓 B55ハンガー 〓

カオルはジオフロントにコンテナを置いたあと、
烈火を着用し

ハンガーに勢揃いした、B-01、桜井小隊の前にでた。

「傾注!!」

「おはようございます。」

「おはようございます」×多数

「今日は、長崎に進行中のBETA連隊規模の迎撃に、向かいます。当方の戦力は、B-01の魔ドム28機、桜井小队烈火装備27名、ヤドカリ付きのホバークラフト、整備補給班、それと、A-01中隊の皆さんが加わります。皆さんは初出撃になりますが、魔ドムの性能は保障できますので、対BETA戦に慣れるようお願いします。

桜井小队の皆さんは、まだ対BETAの検証が出来てませんが、慣れる為ですのでお願いします。

では各自隊長の指示の元、頑張ってください。

各機搭乗！！」

下駄のハッチに乗り込むパイロット達

下駄には2機ずつドムが搭乗している。

烈火は下駄のスロープから上り、兵員輸送コンテナに乗り込む。

カオルも、烈火を着用していたが、CIC兼ねたコンテナにのりこむ。

「各機発進!!」

フイイイー

下駄が前進し、戦艦出入口から上昇する。

海原をすすむ、19機の下駄…

そこに6機の下駄が合流した…

A-01部隊の魔不知火だ…

「カオルさん、A-01全9名合流しました」

「伊隅さん、今日はよろしくお願いしますね。」

と、俺は今回は指揮とらずなので、各隊長と打ち合わせして下さい」

「は!!」

一路海面上を四国南、九州南のルートですすむ。

== 長崎港 ==

偵察衛星から捕らえているBETA群は、一路長崎港を目指しているため、迎撃準備にかかる。

帝国さんはフォローにまわるとの事だ…

「きたぞ！まずは先頭は突撃級だ！落ち着いて処理すれば怖くない」
海面からBETA先頭集団が顔をだす…

「撃てえ！！」

ザクマシンガンが火をはなつ…

ビシビシビシ 動きをとめる突撃級…

その死体に進路を塞がれ更にスピードが落ちる。

桜井小隊はまだ後方待機中…

そんななかカオルは、

暫定隊長達に好きにやらせ、突撃級に挑んでいた。

零式ミサイルをはなつ…が、スルっと装甲を滑って上空へと…

（ありゃ…なら？）

少し浮かび速度をあわせ…装甲殻に直角になるように…

装甲殻にあたった時に、ノイマン効果により貫通、体内をグシャグシャのミンチに仕立てる。

単純にHEAT弾頭による問題だった。

武器を虚数空間で入れ替え、次の突撃級に目をあわせ…
アデレイト・アサルトライフルを発射！

は、貫通はするんだけど、致命傷になるまでが長い…弾薬を1カ
トリッジ使ってしまった…

(ち、使えね〜なあ…)

もう一匹に目を向ける97式は…貫かずきかない。
カトラスに持ち替え、速度同調しながら切り付けると…サクッと装
甲殻をきる。

(しかし…解体しがいがある巨体だなあ…)
近場で見るとでかい…

そのまま、装甲殻に取り付き、カトラスを切り付ける…
サクサクサクで肉が見えた、そこからさらに…
グシユグシユグシユブチュ
…で動きがとまる。
(長さが足りないな…)

単純にカトラスのリーチの問題だった。

(と、すると…)

もう一匹の突撃級に取り付き、
サクサクサク
まで是一緒…
バラバラバラ

97式をその開けた穴から打ち込む。

2秒程で動きがとまる…。
けどこれも体液がかかる。

(まあ突撃級には烈火は力不足…
つつ事ね単純にサイズの問題か…)

もう一匹の後ろに回り後ろから97式を打ち込むと…
6秒程のフルオートで動きがとまった。

(けど、この距離まで近づかないと駄目か…)

side 桜井隊長

打ち合わせ時…
「とりあえず後方待機ですってえ？」

「ええまあ…前衛の突撃級はサイズの問題があるので、
中衛あたりに混ざってくる、小型種をメインに狩ってください」

「わかりました……」

(の事があったのに……カオルさんずっこい……)

「隊長、やはりサイズですかねえ……」

カオル烈火が空中に浮かびながら、

97式機関銃を試しているのが遠目に見える。

戦況は一方的といっても良いだろう……

「けどまずは、装甲殻でしょ……」

わたし達の世界には、あんなシールド的なもつのは、居なかったから……」

「あと確かに正面から当たれば烈火とて無事には、すまなさそうですしね……」

(そうね……オウルベアに踏まれた烈火のようにね……)

「けど、この新装備で速度あわせれば、倒せない敵でもない……って事ね」

「まあ、他のが強いからしようがないでしょ…とりあえず見学よ」

「あゝ暇！！早く中衛きてよ…」

side～桜井隊長～end

突撃級をかなり狩ったあとに中衛が見えはじめた…

光線級はまだみえ…きた！！

受けてみる…1、2、3、4、5、6、7、8、9、10、11、

12、13…

耐えきった。ジーツと見つめる瞳…

きた… 2照射も装甲に被害なし…

(さすがキメラレーザーに対抗できるだけはあるな…)

3照射目… 4照射目…の時に、横から殴られた！！

吹き飛ぶ烈火！

(いつつつつ…なる…)

そりゃ、1分以上いればね…

装甲は若干歪んではいる…

(検証中だったのに……)

修復し、零式ミサイルを構えてかます!!

パシユードーン

要撃級爆散する。

(光線級は??)

潰れてた…

(orz……レアなのに……)

カオル次の獲物を…

(兵士級か……)

右腕を兵士級の歯に噛ませる。

兵士級苦しそうにしている。

(ま、兵士級は雑魚と…歯は問題ないな…)

ハンマーパンチで潰す。メチャ

次は……戦車級か……

ここで帝国仕様の撃震をだした…途端にたかる戦車級…

カジカジカジカジカジカジカジカジカジカ
カジカジカジカジカジカジカジカジカジカ
カジカジカジカジカジカジカジカジカジカ
カジカジカジカジカジカジカジカジカジカ

回りが戦闘しているなか…時間計測中…

(一応、歯はたっているんだな…フム)

装甲かじり始めて3分で突破されたので、
カトラスで切り落とした。

すると、要撃級が撃震を殴りはじめたので、同じ計測する…

(フム、若干ずつ歪み始めるか…

おんなじ箇所10発喰らうと歪んで駄目になってくるか…けどまあ…)

壊しかけたので97式をぶちかます…

3秒程で沈黙。

撃震同化し修復させ虚数空間に…

(ちとっつと…)

アデレイトアサルトライフルをとりだし、
兵士級をターン！
闘士級をターン！

それぞれ顔面からのヘッドショットで沈黙させる。

戦車級をターン！

（こいつもヘッドショットなら有効か…97式だともう少し近寄りなきゃかな？）

試しに戦車級にターンターンターン…

3発で胴体部分は沈黙した…

（あとは…）

戦車級に右腕ハンマーパンチ部分を噛ませてみた…

ギギギギギギバキ！

20秒程でかみ砕かれた…

お返しに左腕ハンマーパンチで潰し、口の中にはいった手を取りだし、
同化して修復する…

(でもまあ…このサイズなら1対1だし、問題ない?)

戦術機はたかれて、それを自分で対応できなくて、装甲を突破されるからだ…

(噛まれたら即パンチ繰り出せば良いだろう…)

カトラスをとりだし、道を切り開く…

ザシュ、ザシュ、ザシュ、ザシュ

要撃級までいくと、殴られにいった…

(おんなじ箇所4発が限度か…)

装甲が人工筋肉に食い込み、動作不良を起こしはじめた…

前腕をくぐり抜け、頭のようなしっぽでなく、中央を切り裂いた…

沈黙する要撃級…

同化し、修復

アサルトライフルをとりだし、別の要撃級にヘッドショットをかます…

2発で沈黙。

別の要撃級に胴体に銃撃をかます…

(10発か……)

中衛も一方的な優勢をかましてると…

海面から……

要塞級の巨体が海面の上にみえてくる…

まだ水面下に胴体があるが…

カオルは零式ミサイルを構えると空中に飛び出した…

(けど、でけえなあ……)

生身でみたらそんな感じにとらわれる…

零式ミサイルをはなつ…

パシュー

……まだ動いてる…

パシュー

(まだかよ…)

体内で爆発し、そこから体液がでてるのは見えるが、
まだ沈黙はしてない…

パシュー、

やっと動きが鈍る…

別の零式ミサイルをだし…

パシュー、パシュー…

動きをとめる要塞級…

(オウルベア並か…)

カオル、

ガンオケでのオウルベアに突撃したスカウトプレイを思いだした…。

(要塞級はB - 01、A - 01に任せるか…)

そして要塞級の巨体があがってくるとともに重光線級が、
空中に受かんでいるカオルに向かい、レーザーを放つ。

カオルは避けずにうけとめる。1、2、3、4、5、6と数え…3
0秒目で融解始めた…ので射線かわし、零式ミサイルをはなつ。

背後からの攻撃に、沈黙する一体目…

別の重光線級がみえたので、煙幕手榴弾を試してみた…

あたりに黒煙が煙りたつ…

(生体レーザーなら…)

煙幕手榴弾は黒煙の中に含まれている塵によりレーザーを激しく減衰、

無効化させるのだ…

少なくとも、重金属雲のような環境被害は気にならない…

試しに〜とおもったら、

かなり効いてるようだ…

レーザー発射はするが、

こっちに届く前にもうなくなる…のが見える。

「重光線級はラスト一匹だけはのこしてくれよ。

あ、要塞級も一匹はな」

「了解!!」

そう、通信するとカオル両手に零式ミサイルを構えて突撃する。

そして……

重光線級ラストの1匹の前に、撃震をおく… 1 / 2 / 3 / 4 / 5 …

40、一照射目終了……

(かなり赤いなあ……)

二照射目… 5秒目で装甲貫通確認、ミサイルで沈黙させる。

撃震をしまつと…

「カオルさん、言われた最後の1匹ですが…」

「おう、サンキュー、要塞級にタイマンするから手をだすなよ…
全隊、撤収準備」

「は、はい…」

カオル烈火が要塞級に挑む!!

要塞級が怖いのは、下から狙うのに、

死角がない触手による鞭撃と、

溶解液の存在だった…

上空に出れば勝てるのはわかってたから今回はしたから挑もうとしてた…

「く!!しつけえ!」
触角が襲い掛かる…

「カオルさーん援護しましょうか?」

「いやいい!!」

けど鞭、めっちゃめっちゃおってくるんですが……

(しょうがねえ……)
ハンマーパンチを潰してでも止めようとする…

(げ!!)

ハンマーパンチが貫かれ……
両方のパンチをクロスしてたところだったのが幸이었다…

(アツブネー)

ポタポタポタポタ

突き刺さった部分から溶けはじめる…

(ちっ!!)

ハンマーパンチを切り離し…

「加速」

カトラスを両手に構え、鞭をかわし…根本を切り付ける…人工筋肉が加速に耐え切れず引き裂かれ…だが、触手を切り落とす。

ブチィ！右腕が装甲材ごときれた。

「パイル!」

カオルは、右腕を光の槍にすると、下から要塞級を貫き、一度引っ込め、また貫いた…

崩れ落ちる要塞級…

カオルは巨体をぬけだし…離れると、崩れ落ちる巨体をみつめた…

「流石に烈火じゃ厳しいか…撃つ暇なかったしなあ…」

「カオル!!」 「カオルさん」 「大将どの!!」

「おう、終わったよ…さ、撤収だ…連絡よろしくな」

カオル素肌が見えてる右腕をふりながら、烈火を待機してた下駄まですすめた…

……

カオル報告

最後が余計？疲れました。

今日の戦闘結果は明日…って事で

作者「さて久々の戦闘だなあ」

カオル「烈火こわれちゃったなあ」

作者「ガンオケのオウルベアより強かったみたいね」

カオル「うん。触手が以外にうざかった……」

作者「あと、1機後退してるぞ」

カオル「え??」

作者「まあそこは明日の話しでな……で生身サイズから見るとどうだった?」

カオル「うん……グロイね」

作者「ところで手榴弾つかってないなあ……」

カオル「あ……やっべー……作者どうしよっ？」

作者「桜井小队さんに聞いたら？」

カオル「あ、…そっか…けどグレネードがないんだよね、ガンパレの世界って…」

作者「ああ、投擲で十分届くっつ話だからね1kmもね」

カオル「チートだのっ…」

作者「おめーがいうな」

第62話 長崎防衛戦後7月20日 投稿日20110204

2001年7月20日

カオルは昨日のレポートを見ていた…

中破1

小破6

パイロット損失なしだった。

内訳が、

中破…… 高速移動中に真横から突撃級の突撃をくらい、横転…

その際に駆動部に極端な負荷がかかり、

動作不良起こし戦闘行動に問題あり、後退…

装甲、パイロットは無事…

レーダー見落としの為…

(ん〜こればっかはなあ………)

小破も要塞級に殴られ、やはり駆動部に支障きたすも…戦闘行動問題なし…か

一機は要塞級の脚による串刺しに抵抗した為、駆動部に負担…となっている。

光線級がすくないので照射被害はなし…と

(むやみに、近接戦闘挑みすぎか…の結論しかないわなあ…あと、突撃級に要注意か…)

あとは特には問題なしの為、洗浄作業を続けさせている…
もうすぐ終了する。

(に、しても…)

大破した烈火…をみ…

(結局昨日は、能力つかわなきゃ、要塞級勝てなかったしなあ…
ザクマシンガンもてるように改造するかな?)

サイズの無理だろ!!

カオル次の項目にも目を通してる…

(お掃除も必要なんだな…)

帝国軍が火炎放射タンクでお掃除しているレポートが上ってきている。

（作る必要あるか…けどネタが結局火炎放射機しかないよなあ…
陸戦強襲型ガンタンクしか…後回し）

A-01レポートをみた。

（特に特記事項はないか…うん。まあ大丈夫そうだな）

とりあえず昨日のレポートは確認済み。

（帝国仕様の撃震は、ほぼよさ気かな？
あとはバルカンポットをつけ送るか…）

帝国仕様撃震

最終改造点

装甲、ヒルダ＝ビダン合金

o s o r n
c p u o r c

追加武装 外装式バルカンポット

高周波ブレード パック式

ザクマシンガン

で送りだした。

(さてと、水中ねえ…マッドアングラーですか…)

戦艦ドックへ……

「よつと……」

orz になっていた…

サイズが出入口よりもでかいのだ…

全長320m…全幅105m高さ100m

巨大な潜水母艦であった……

カオルはしまつて……

「11号、港湾設備よろしく」

となつた… 戦艦出入口のプールの海側のほうに作りはじめた。

カオルはハンガーに戻り、

「なんか報告ある？」

「コロニーの充填早まって22日に完成できるよ。」

空港施設80%だからとりあえずはできそうだね」

「そうか…帝国さんの難民担当へ連絡だな」

「あとよいよ戦艦用マスドライバー完成したよ」

「お、で…あれも組み込んでるん？」

「勿論」

「うっしや、じゃあ早速お披露目といきますか」

「イエスマイロード」

〓〓 横浜基地司令室 〓〓

司令室では急遽決まった戦艦の打ち上げで、大慌てになっていた…

「進路クリアです!!!」

「発進までTマイナス60」

「しかし、こんなのが打ち上がるんですね……」

司令室の映像モニターは、

戦艦用マストドライバーのカタパルトに、セットされているサラミス改が、

映し出されている。

サラミス改の後方には熱風を上空に逃がす、遮蔽板が立ち上がっていた。

「ええ、宇宙の治安をまもる。それがお約束ですしね」

「発進までTマイナス20」

(シャトル発進とは違う迫力だよな……)

「Tマイナス10 / 9 / 8 / 7 / 6 / 5 / 4 / レディ / ステディ /
ゴウ」

カウントとともに、核熱ロケットから、炎がMAXパワーで吹き出す。

カタパルトキャノンがロケットと合わせて10Gの加速度でもって、巨体の戦艦を前に押し出す。17秒後には15kmを約、1.7km/sに到達し、サラミス改を空へと打ち出す…

「た〜まや〜」

サラミス改は白煙をあげながら、大気圏外へと目指す…

残りは反重力推進の力もあり、大気圏外から、L5へと向かう…

そして、20日夜…

「”世界扉”」

開きながら田中さんに電話した…

プルルルプルルル

「カオル様？お待ちしておりました」

「ばんわっす〜で退治の打ち合わせなんですが……………」

打ち合わせ話は続く…

2001年7月21日

打ち合わせ通り、某駅のマックで待ち合わせだった。

ハッシュドポテトは結構好みで、
ソーセージエッグマフィンのセットに、追加の単品追加してた。

因みに香月博士にはばけている。

(あ、田中さんだ…)
手をふり招きよせる。

「おはあ〜」

「おはようございます。今着用されてるんですか？」

「ああ、着用しているよ」

カオルの声が女性の声、つまり香月博士の声で、はっせられている。

「これ…がですか？」

「スイッチは切ってるから安全だよ〜触ってみる？」

「え？……はい……」

プニプニプニ

「本物ですね」

プニプニプニ

「じゃなきゃ、釣れないし撃退できんしね」

ツツツ

「こっちもなんです？」

「勿論」

擬音かいたらやばいので略。

「あ、……本当……」

「こっちは苦労したって話だよ……」

肉体をスーツの中で圧縮させる技術とかさ…
こんなこともあるのかと！！ってたな〜」

端から見ると女の人が隣の女の人を、
朝から全身をマック内で触りまくってるね…
しかもいまは手が変な場所に…

解説しよう！！

カオルがきているスーツはカオルの幻影に合わせ、
肉体を圧縮、表面を表しているものにする、
ナデシコ世界のナノテクノロジーの塊なのだ！！

まさにご都合主義コラボレーション！！

「盛り上がっている人は置いて…
で、電車に乗るから、田中さんはシェルター内にね〜」

「はい。よろしくお願いします」

ただし着用は一回につきり、ぼつきり一億円！！

「作者つぎいくよ」

ひびひびひび……解説さしてよ…

カオルは田中さん引き込み、女子公衆トイレにはいると…
「幻影」

田中さんになった…

「あ、あ〜 よし」

田中さんの声にかわったのを確かめると、
カオルはさっそうと歩みを進める。

改札をモバSuicaで通る。

(この時間の列車か…)

エスカレーターを上りきると、

通勤快速、新木場行きがくる…

ブシュー

扉が開き…列に並びながら、
車内にそのままの押されながら入り混む。

「もう少し中に詰めて下さい!!」

……鞆もって!!押しますよ!!」

扉間際ではアルバイト駅員が、
扉を閉めようとひっしに押し込んでくる。
ボタン

扉が完全にしまり、アルバイト駅員は、
他のしまっていない扉を確認しにいく…

ガタン……ガタン、ガタン…

列車は走りだす。

（かー…久しぶりにのったがきついなあこれ……）

何しろ他人の鞆が前にあるのだ…

また他人の腕が変な方向に伸びているのがわかる。
カオルはしかも宙に浮いていた…

しばらくは何事もなく進む…

赤羽駅手前でスピードが落ちてきて……

「ただいま停止信号です。しばらくお待ち下さい」

（うん、よくとまるよなあ…

過密ダイヤをどうにかしろって言いたいもんだ…）

ガタン…

列車は動き出し…駅ホームに進入する…

プシュー

扉が開こうとするが、人圧でなかなか開かない……

開いた、人が一気に流れ出す。

カオルは田中さんに言われた定位置を目指す。

「でるかたがいます、もう少々お待ち下さい!!」

……降りられる方はいませんね? ……どうぞ!」

ドヤドヤドヤと人が入ってくる……

カオルは、ムギユツと押し込まれてきた……

(こいつか?それともこいつか?いや?)

変な方向に乗ってきた人が何人かいる……
そいつが、カオルを押し込んでいるのだ……

「次の列車をお待ち下さい!!」

プシュー……ガタン

列車は悪意をのせ走りだす……

(きた!!2人が……マーカーはついたな……)

さっそく、揉まれ始める……

網膜投射でマーカーがついて、場所をしめしている……

(ん?増えたぞ……)

プシュー

「十条十条」

試しに降りようとするが、バックが引つ張られまた前を塞がれ、降りられない……

(うは、マジか逃がさねーつもりなのか……)

カオルおとなしくなる……

プシュー……

ガタン、ガタン……

(7か……)

痴漢の魔の手が大胆になってくる……

プシュー

「板橋～板橋」

ドヤドヤドヤ

この駅で入れ替えはある……
マーカーついた内の二つの反応がここで降りていった……

カオルここでも降りようとするが、
押しつけられ降りれない…

ドヤドヤドヤ

人が入ってくる。

プシュー

ガタン、ガタン

(5のはずだろ?…また増えてやがる…)

一つの反応は別の方向にいつてる…

今まで、累計15マーカーがついている…

次は池袋だが、
痴漢の魔の手は下着の下までおよんでくる…

(無抵抗だところなるんだよな…)

池袋につく直前に手はひっこめられた…

多分、田中さんがこの駅で降りるの知っている…常連痴漢だろう、
かなりの手が引っ込められてる。

(15か……後でのお楽しみだな……)

プシュー

「池袋〜池袋〜」

ドヤドヤドヤ

人の入れ替えとともに圧力が弱まった…

カオルは解放され、ホームにおりる。

改札口から公園の方へ向かうと一つの反応がついてくる…

(おいおい……)

公園に差し掛かると…

トイレに押し込まれた……二人にだ…

「うへへ…ねーちゃん、早くいねさせてくれよ〜」

「さっきの痴漢ですね？警察呼びますよ？」

「あん？うつせえ！！」

バチン！

平手で叩かれる…

「てめえ同意してたろう!!」

「なにが同意ですか!!」

「無抵抗はなあ、何されてもいいんだよ!!おとなしくしろ!!」

カチャカチャ…物をだしてきた…

(流石にぶち込まれるのはやだな…抵抗すつか…)

ガツン

「な!!て、てめえ!!」

声紋スイッチオフ

「おめえらさ、いい加減にしるよ…なに勝手な理屈こねてんだよ」

「な、男声??…」

「おたくらみみたいな犯罪者が、軽いからっていつて何回も繰り返す…だから泣く女性が増える一方なんだよ!」

「は？痴漢は現行犯でなきゃ逮捕できねえだろ！！」

「なのでこういったのを用意しました」

「おまえ、どこから？」

右手に見えるのはボタン式スイッチ…

ポチツとな…

片方の男が途端に痛みがり始める…

「ギヤアアアア、手が手がいてええええ」

今ごろ反応がある15は、同様に悶えているだろう…

「な！！お、おい大丈夫か？」

「ギアアアア手が、手があついいい」

「てめえ何した！！」

「あゝこの人の両手使えなくします。
使えなくすれば痴漢はやれないですよね？」

「な！！そんな事していいと思ってるのか？犯罪だろ！！」

「犯罪おかして、自分が被害受ける番に犯罪って可笑しいよね？
それに報いる罪必要だと思わない？」

「ギヤアアアアア」

「や、やめてくれ……」

「や・め・な・い・よ・それに手遅れだし」

「ギヤアアアアアア！！」

両手が肘先から、強酸くらったみたいに溶けだした…
もう使えないだろう…

(うん痴漢どもにはお仕置き完了あとは…)

「さあ、おまえは、婦女暴行犯だよな……」

「ひっ…」

「ちょうどだしている物あるし、ちょん切っちゃえ」

「ヒギヤヤヤヤヤ」

切り落としてあげました…

そのまま切った先はばっちいので流す…

きったハサミはレーザーで焼却処分つと…

記憶を消してつと……

外にでて…田中さんをだす。

「とりあえずお仕置き終了しました…明日からは多分大丈夫かな？
と…」

「えっとありがとうございます。と…るでお仕置きつて？」

「ん？………ひ・み・つ」

「は、はあ………」

「あとさ、田中さん、痴漢にあったとき痴漢！とか叫びました？」

「目で睨んだりしただけです…」

「あゝそりゃ辞めないね…痴漢と叫んで周りに協力を訴えないと…あと、なんらかの抵抗できるも必要だよ…」

例えば女性ならヒールで相手の足を貫くとか、裁縫針で痴漢の手をおもいっきりぶっさすとか…」

「え？でも…」

「そこらへんだったら正当防衛にはいると思うし、ましてや痴漢して、そういった抵抗され怪我しました！なんて恥ずかしい事できると思うわけないでしょ？」

まあ、催涙スプレーやスタンガンは別の周りに被害がでるから駄目だけどね…」

でもさ、無抵抗や恥ずかしいから叫ばない…痴漢が増長する元なんだし………」

「わかりました…今日はありがとうございました」

「ま、じゃあ…仕事に戻ろう…またあったら言ってね…と再生資源納品だけ…」

「あのカオル様？いつまで私に？」

「あ！！じゃあ脱いでくるから後でいい？」

「2時間後にも…」

「ういつす”世界扉”」

カオルは脱ぎに行きました…

もどつて…きて、

納品場所に田中さんがまってました。

再生資源を渡すと…

「………こんなに見事に………これでしたら、
反対に、こちらからお金を払う事になりそうです」

レアメタルとかもの見事に再生できたし〜

「じゃあ、帝国側にもそう話して…?」

「あ、はい構わないと思います。

差額はこちらでの買い付け資金に…との事で」

との事になりました…

〓 〓 都内のテレビチャンネル 〓 〓

「本日9時頃、都内各地にて、突然一斉に苦しみだし、両手がなくなる…という事件がおきました。

警察では原因不明としながらも、なんらかの因果関係を検索中です」

「いやあ、凄惨な事件ですね」

「しかしその中には痴漢の再犯歴ある人がいたそうじゃないですか、神様が天罰を下したんですよきつと…」

「次のニュースです。本日池袋西口の公園内において、傷害事件が発生しました…えっと放送できない部分を切られて、全治1週間だそうです」

「この事件ってニュースで流すネタなの？」

「デレクターがあたしの反応みたいから流せって渡されたので…」

チャチャチャ

ニュースは終わる…

あ号「……作者やり過ぎでは？」

作者「ん？俺的には個々までしないと、この二つの犯罪は再犯を犯す……って思うからなあ、よく被害者に人権はないのか？論者だし」

あ号「……………」

作者「痴漢は正直軽すぎるよ……捕まって、何回再犯おかしているのいる？

強姦だつてそう……

あと死にたいからつて、秋葉原の連続殺傷事件……

あれだつて死刑が望み通りなんだから、正直軽すぎるね……

あとは松戸の女性監禁、放火、殺人事件……

一人の女性をもてあそんで、ころして、証拠を隠そうとして、で多分懲役10年位だよ……正直おかしいと思うよ……」

あ号「……かなりイレ込んでるな……」

作者「残虐刑の禁止だつて……まだ昔は倫理あつたけど、今最近ついてきてないし……つうのが持論だね……

まあせめてアメリカでの性犯罪にたいして、GPSのなんかの一生

着用義務で周囲の監視…や被害者によるやり返しOK位してくれな
いと…ねえ」

という作者の独論のあとがきでした…

けど女性への同意なき暴力による犯罪は反対、
痴漢反対

は崩れません。

なので、まりもちゃん…助けなかったです…

第63話 コロニー計画実行 投稿日20110205

2001年7月22日

コロニー完成したため、カオルは帝都城に来ていた。

難民キャンプへの政権放送を行う為にだ…

(やべーテレビか、緊張すんなあ……)

「カオル殿」

「あ、殿下!!」

「よい、顔をあげよ…して、一つ聞きたいのだが…」

「はっ…なにをですか？」

「カオル殿は…… 伴侶となりそうな決まった者がおられるのか？」

(…… イッシーの顔が浮かぶ… 桜井少尉も)

「あ……まあ……」

「……… そうですね………とここでわたくしの事をどう感じられます？」

「大変美しいです」

「もし、今ここで婚約の儀を行うとしたら？」

「殿下おたわむれを……ですが本気だと仮定してですが、彼女達に悪いので、できないですね……」

「ほう？達とな？複数いるのか？……カオル殿位なら……いるのか……しかし日本では一人しか伴侶選べぬぞ」

「で、泣く女性が増えるんですよ……男性が圧倒的に少ないのに……多重婚あれば悩まずにすむのになぁ……」

「多重婚のう……おぬし、多重婚できればわらわからも？」

「まぁ……ですね、でもできないから無理ですね……」

「殿下、大将閣下間もなくお時間でございます」

スタジオ中央にそなわっている演台へと殿下がすすむ……

「我が親愛なる国民の皆様、長きにわたり多大な苦難を強いている事、

しかしながら、

先日、国連異世界軍の渚カオル殿よりある重大な提案がありました。全世界を動かす話ですが、まずは日本国民の皆様からとの事ですので、紹介を致します」

殿下が画面から消え、カオルが、かわりに出てくる。

「ご紹介に預かりました、国連、異世界軍所属、渚カオル大将です。さて、まずは皆様にある一つの計画のご説明をいたします。

その大元は、地球上ではなく、宇宙にある島：スペースコロニーの完成による、大地の確保です。」

画像がスペースコロニー外観を映す。

「このコロニーは宇宙に浮かぶ島、直径6km、全直30kmに及ぶ円筒形の形になっています。」

内部からの映像になる。

「中には大気が地球上と同様にあり、また大気浄化システム、水ろ過、上水道システム等備わっています」

内部のマンションをうつしだす。

「またこの様に、中では各家庭ごとに一室、用意されていて、一つのコロニーに平均1000万人住む事が可能となっています」
画面が外側のリングへと進む…

「食料にしましては、最初は異世界軍の農業コロニーから提供しますが、
いずれ、この農業プラントにより自立した食生活をおくれるようになります。」

「また安全面に関して…」

内部で爆破実験の映像

「このように爆破されても安全な構造になっていますし、万が一穴が空いても」

ゴムが飛んできてふさがっていく……完全にとまり空気の流出がとまる…

「緊急展開可能な安全処置は施されています」

「また、コロニー自身の安全を守るため、
サラミス等モビルスーツ隊の映像

「異世界軍による防空隊が展開し、日夜安全をまもります」

画面はカオルに戻る…

「さて、このスペースコロニーですが、全世界の難民の皆様、まず

は、日本国の住む場所を失った難民の皆様に入ってもらいたい…と
思っております」

「母なる大地から離れたくない！…と想ってられる方も、確かに
いられるかと思えます。ですが、難民の皆様、その生活に満足でき
てますか？安心できてますか？」

「このBETAの脅威がない島に一時的にでも移って頂き、
地球が安全になった時改めて選択をしてもらう…」

「また、皆様の力を借り、BETAを打ち砕く力を育ててもらおう」

「その為に宇宙に安全な拠点、都市となり、安全、満足、自立した
生活をおくって貰いたい…そういった所存です」

「また、それぞれのスペースコロニーは基本的に国単位となり、皆
様は日本国民のままです。」

「新たな島に移って安全な自立した生活をおくってもらいたい…そう
いった願いです」

「なにとぞ、日本国自身を助ける、また皆様自身の為にもこのスペ
ーコロニー計画、ご協力頂けるようよろしくお願い致します」

「深々と礼をする…」

画面は変わり、移送計画の話になる…

「では、移動方法になりますが、異世界軍の方々が、避難キャンプまで迎えにいきます。」

7月23日、移送

「出発!!」

横浜白凌基地第三滑走路から南方向へ、メデューシンがとびたつ…

向かうは、茨城県難民キャンプ…

シャトル乗客数が240人により、だいたい1日に1便お迎えに行く形となる…

とおもってたら…昨日…

難民数日本だけで約2600万人、…なので、シャトルを追加110の緊急増産中だった…

1日500便を目標に…したいなあ…と思うが…

打ち上げ施設である、マストライバー足りない、

、24時間フル稼働でも3分に一本…

一回の打ち上げで最低10分かかるのに…

加速で約340秒に、冷却で約4分…

搭乗手続き24時間をフル稼働しても、マストライバー、一本だと
144便…

メンテナンスぬきで！！

正直足りません…

マストライバー一本だとどうしても2年はかかる…

という大誤算が発覚した…

(打ち上げ基地増設かな？…あとメデューシンも増強か…)

と機上でおもってた…

飛行ルートは順調に洋上、銚子から進入、霞ヶ関浦から、ライトタワー
ーンし、帝国軍百里基地へと着陸した。

超接地旋回し、北方向への滑走にそなえ、タキシング…

もう一度超接地旋回し、翼を休め、

顎のランプウェイをオープンにする。

飛行時間およそ40分の旅だった…

「おつかれ、今日は午後にもう一回ね」

「はい…」

今日はシャトル41本飛ばすつもりだった…

まず受け入れの日本の役人系、警察、などが朝に1便、その後40便避難民のせたシャトルを飛ばす…

の予定だ。

カオルは中央エレベーターから第1層におり、ランプウェイに行く

…

ザワザワザワザワ

百里基地で待機していた避難民第1陣の方々だ…

「みなさん、腕輪のチケットにかかれた席をお願いします」

チケットはメーカーが仕込んである、腕輪型を利用した。

迷子が怖いのだ…迷子が…

コロニー居住地のしばらくまで世話になる腕輪だ。

勿論耐衝撃、耐水性能は整っている。

「大きな荷物あるかたは、預かりますので、こちらに来て下さい」

「客室はこちら、客室はこちら」

「エレベーターはまっすぐ、エレベーターはまっすぐ」

1層デッキでは、マリさんミキさんや、T・850がでてきて、
客室案内の真つ最中だった…

そんな中…

「おお………」

一人の老婆の方が、列をはなれてよってきた…

「おばあさん、どつさねました？」

「おまえさんかい？昨日の放送にでてたのは？」

「ええ、そうです」

「……住む土地に、戻してくれるのかい？いつかは…」

「ええ、おばあさん、お約束しますよ」

「あたしの生きてるうちにかい？」

「…………それは…正直お約束できません…
が…5年以内には…必ず」

「5年かい…………長いのう」

「おばあさん、生きて長生きして下さいよ。大丈夫、最高の医療設備などありますから…ね」

「…………約束じゃよ？おまえさん」

「ええ、おばあさん、必ず！…………さ、おばあさん席に座って下さい…間もなく出発みたいですから…」

おばあさんエレベーターホールへ向かう…

ちなみにエレベーターホール差し掛かった時点で、自動的に手荷物チェックがはいる。

武器になりそうなのはT・850が没収する形になるのだ。

(今回は無しと)

没収対象は、銃火器、火薬類のみ…
ガス類は、燃料系はコロニーでは使う必要なくなる為没収だが、今回はなさそうだ…

コロニー内には、持ち込み禁止にする形だ。
勿論他国コロニーも同様に……

ランプウェイがひきあがり……

カオルはコクピットへ……

「当メデューシンにの機長、アンナ・クリントです。
当機は間もなく離陸し、約40分後には、横浜白凌基地へと着陸します。」

皆様の安全の為、座席についたらシートベルトボタンを必ずおして下さい。

また、安全の為の急な旋回などあります。40分のフライトですので、着席のままにいるよう、お願い致します。」

フィィー

エンジンがアイドリングになる……

「全員着席、シートベルトサイン点灯、各階層のT-850も準備よし……！」

「百里基地管制、こちらメデューシン、離陸許可を求む」

「メデューシン こちら管制、離陸許可します。国民をよろしく頼む……良い旅を」

「ありがとう」

ミドルパワー 12基ある核熱ジェットからジェット流が吹き出す。

1500mの距離でとびだつ…

帰りは、太平洋側から第三滑走路に進入、空港駐機場に移動し駐機した。

ランプウェイが下ろされるとともに…

「フライトお疲れ様でした。

チケット番号、480番までの方はシャトルがまっています。そのまま乗をお願いします。

240番までは艦向かって右側、241番から480番までは艦向かって側で、

それ以外の番号はターミナルで、案内されるまでお待ち下さい」

艦内放送が流れる。

ドヤドヤドヤドヤ

右側シャトルに行く一群、左側シャトルに行く一群、

正面ターミナルビルに吸い込まれる大集団…

ワーツとランプウェイ上るコバツタ達…

お掃除隊だ。

「艦内チェック、内部に残っている避難民の方はいません」

「お疲れ様、じゃあ夕方まで頑張ってたな」

「はい！」

カオル、メデューシンからおりると、空港ターミナルに向かう。

「シャトル移動します！！中央導線から出ないようにお願いします
！！」

人事移動したMS世界の民間人達だ、補佐にT-850が入っている。

ターミナルビルにはいると、避難民のせた第1便がマストライバーにセットされる光景がみえた。

「チケット番号、481から、720番号までの方は、Cデッキからシャトル搭乗を…間もなく搭乗手続きが終了します…」

チケット番号721番から、960番まではEデッキのシャトル搭乗を…

チケット番号961番から1200番までの方、お待たせしました、Fデッキにお越し下さい」

「おばあちゃん、Cでしょ？」
ひよいと載せ

「荷物は？」

「それ一つですじゃ…」

「わかったあ〜」

フィィイ 反重力台車が頭上越えて移動していった…

ターミナルの様子をみると、カオルは関係者用エアバスに乗ると、
横浜白凌基地に向かう。

正面ゲートから入ると、正面口前に停車、
カオルは下りて、司令室に向かう…

司令室内に入ると…

「テンプ04カタパルト進入どうぞ」

「テンプ03よい旅を」

「お疲れ〜どう?」

「あ、カオルさん 仕事増えてうれしいですよ
これで後方勤務って揶揄なくなりそうです」

「ん…あ、一日500便まで増やすつもりだけど大丈夫?」

「え?500ですか??現状で??」

「あゝ勿論マストライバーと、滑走路は増やすつもりだし」

「……なら大丈夫かな?要員増やして……」

考えこむ…リン・ミン准尉…

「なんとかかなりそうですね〜いつ頃?」

「……すまん、そこはちつと……9月以降かな?とはおもっけど……」

「わかりました…当面は最高出発一日80便まで…なんです?」

「うん。よろしく頼むよ」

「はい」

「じゃあ」

カオルB55ハンガーに下りてゆく…

(とりあえず問題なさそうだなあ…)

「 B55ハンガー 」

現在の状況、核融合燃料残り551基分で確定

ヤドカリ君が増えて、542号

コバツタは、あのは増やしてはない…

下駄は鋭意増産中であつた。

(ふーむ……まだガンタンクの増産はいいか…
何かしら使うかもしれんし…)

とりあえず次回、燃料ちよるまかす時まで、
増産は抑えておく事にした。

(シャトルが足りないのが……orz)

(シャトル用マストライバー、空港を逗子辺りかな?)

マストライバーを後4本、及び空港施設建設を打診しておくことにした…。

……

カオル報告

特には無し?

第63話 コロニー計画実行 投稿日20110205（後書き）

作者「いよいよスペースコロニーかぁ…コロニー落とし？」

カオル「人が住んでるの落とせないよ!!」

作者「ジオン公国みたく…毒ガスで…」

カオル「それ警戒して、外部からの流入を防いだ!!」

作者「だよなあ…少ない人口をこれ以上減らすわけには…」

カオル「それに日本だけじゃないし…
けど難民数聞いたら、予想以上だったから…作者それで正解なの？」

作者「一応95年度の人口統計から計算しました。

西日本、京都以西の約4000万人は400万人に、関東圏の、千葉と栃木をのこして、

北陸、東海、近畿の三重、奈良辺りの人口から算出し、少し減らした数です」

カオル「……よく日本やってけるなあ……とつくづく思ったんだけど……」

作者「多分ゲームの世界だから？は、おいとして……」

西日本くらいは住めるようにしないと、正直やばいと思うよ……
が……押し込んでるから……見えてくるねえ」

カオル「だからシャトルの数も足りなくなってきたんだよう……！」

作者「マストドライバーもね……けどまあ正直、一本じゃ、せいぜい一日3万人、

宇宙移民正直どうやったんだか……何本たてたんだろ？が計算したらでてきた宇宙世紀の謎でした……」

打ち上げシャトルは鍛えないと正直厳しいGがかかるので……」

第64話 翌日やっと重大事項発見及び研究 投稿日20110206

2001年7月24日

〓 B55ハンガーデスク〓

コバツタ達か忙しく動き回り、また桜井少隊が教練しに行くのだから…のなか、

カオルはデスクで考えごとにハマっていた…

(えーとかたずけるのが歩兵装備は、フモツフね…

あとは水中、宇宙軍の問題…か…

んゝ水中、水中、…ゾイドであったなあ…

シンカーか……いってみるかな?)

カオルは立ち上がると、

「"世界扉"」

シーン

「ありや?…開かない?」

(ん???んゝゝゝ……認識度が甘い?)

そういえばゾイドってストーリーどうだっけ???)

次に、ガンダム00の世界思い浮かべて…

「"世界扉"」

開く…

(ん???)

消した。

Gガンダムの世界思い浮かべて…

「世界扉」

開かない…

ゼロの使い魔の世界思い浮かべて…

「世界扉」

開く…消して…

SEEDガンダムの世界思い浮かべて…

「世界扉」

開く…消して…

R-TYPEタクティスの世界思い浮かべて…

「世界扉」

開かない。

(えっとストーリーの認識によって???それともイレ込み度???)
カオルは少し混乱してた…

エアラルの世界思い浮かべて…

「世界扉」

開く…消す。

閃光のハサウェイの世界思い浮かべて…

「世界扉」

開く…消して…

(ふむ??なら...)

ガンダムユニコーンの世界思い浮かべ...

「世界扉」

開かない...

(ほづ...となると...)

マクロスの世界思い浮かべて...

「世界扉」

開く...消した。

クラア

「おっと...」

カオルはふらつき...椅子に腰をどすと落とす...

眠気もきはじめてきた...

(うう精神力つきたかなあ?研究だけで今日はおわるか...

とりあえずわかった事...まとめるか...)

机のメモに書きはじめた...読めないなあ...

(全部読んだやその途中でも、はつきりしている世界なら開く、

つまりガンダム、Zやナデシコ、ターミネーター、

ガンパレ、鋼鉄の咆哮はたまたま知って完読等した世界だったから

...からか...

自信もっていつちゃってたなあ...ん?)

カオルある事を思いついたようだ...

(つまり俺の世界で知識補充してみたらどうだろう?)

…ユニコーンの世界が開かず、ガンダムの世界が開くの違いがそこにあるはず……

フルメタルパニツク行く前に知識吸収試すか？…)

そこまで考えたところで……カオルはイビキをかき、居眠りかきはじめた…

寝落ちたみたいだ…

「マスター居眠り〜」

11号を筆頭として、集まりはじめた…

「あ、本当〜」

「さつきから世界靡唱えてたからつきた？」

5号がマジックをとりだした…

「かもね〜」

カオルの顔に落書きしようとして、8号、7号に押さえ付けられる…

「誰かよんでくる？」

5号はつれてかれた…

「まりもちゃん」

7号が…

「了解〜」

11号、まりもちゃん探しにふわふわと移動する…

あ、見つけたようだ…

「まりもちゃん」

「あら11号君、どうしたの？」

まりもちゃんの正面にふわりと浮かび話かけている。

「あのね、あのね、マスターがおねむしちゃってるの」

「あらあら…まあまあ…珍しいわね…どうして？」

まりもちゃん…手を口元に…可愛すぎるよこんちくしょう。

「多分魔法使い過ぎて…あゝなったら起きないとおもつよ」

「ふん…わかったわ様子見に行きましょう」

「はい」

まりもちゃん、カオルの私室に案内される…

あれ？ハンガーデスクにいたはずだが、私室の床に転がっているカオルがいる。

「あら……よっぼどののね？」

まりもちゃん、カオルをベッドに寝かせると、頭をナデナデしはじめる。

カオル気持ちよさ気にねむっているので、まりもちゃんは……

軽くキスをすると、

「お休みなさいね」

と、私室をでていった……

チャンスだったのになあ……

翌、7月25日

ⅡⅡB55ハンガーデスクⅡⅡ

スターシフトウルーパーズの世界扉を開くと……

アラクニ星に開いたらしく、バグズがきそつになつたので慌てて消す。

（あつぶね〜）

「マスター……いまの虫なに？」

「バグズさ……人食い虫ども……すまん、T-850を4体ほど、C
IWS装備で常駐させよう……
……あーいった世界行くときはきいつけないとな……」

「うん……」

（けどま……仮説は大丈夫か、となると精神力で開いてないけど、
ゼロや、ん……第二次対戦アルファとか、あとは……
けどアルファ行けば楽かな？
……あとは……エヴァは使徒になるから駄目だろ……
ん……ゼーガペイン？そんなものか……
あ、スターゲートや、あと……でたまかもいけそうだなあ……銀英伝……
もか）

「マスター妄想中？」

「ん？ああ、行ける世界を考えてたんだよ……まあ仮説通りなら、今
日少し実験すりゃあわかるっつう事さ……」

「仮説？実験？」

「俺の行ける世界の認識についてだな……」

「教えて〜」

「おまえらも物語の世界つうのは前話したよな？」

「うんうん」

「で、昨日開きまくってたのはみてるよな？」

「うんうん」

「で俺が世界扉開けた世界は、全部元の世界でその物語を見た世界なんだ。例外がここと、俺の元の世界。」

物語は、小説、ゲーム、テレビ、映画、ビデオ問わず」

「……………あ、そうか…平行世界の座標認識という事かも…」

「詳しい話しになりそうだから省くけど、で昨日、ガンダムユニコーンの世界を思い浮かべたんだが、開かなかったんだよ…ガンダムの宇宙世紀の歴史軸上にあるにも関わらず」

「うん」

「ガンダムの世界にいけ、ユニコーンにいけない違い…

俺が元の世界でその物語を見たか、見てないか…しかないんだよね…
ただそれだけ…

で、今日の実験が見たあと世界扉が開くのか？って事だ」

「……なんかそれで開いたらますますマスターチートかもね」

「まああとは時間が許す限りか……ただ多分制限があると思う」

「ん？」

「ゲームの世界はクリアしたかしないか…だろうな。

もってプレイしただけは不可…R-TYPEタクティスの世界はそ
うだった…

FF11はどうか？になるけど…かなりはまってたけどなあ…

あとは記憶の薄さかもね…」

「けどさ、一応は方針変わらないんでしょ？」

「ああ、実弾火力による制圧…学習させないようにね。

けど他の星に関してどうすっかなあ…なんだよなあ……

まあ、とりあえず今日の精神力は実験にあてるよ……」

”世界扉”」

「買い出しいってくるわ」

「いってらっしゃい〜」

一回現実世界にいき、ビデオを買ってきた。

勿論、ビデオ観賞用に、ポップコーン、カップバターは忘れてない。

11号を交えての鑑賞会になった……

(オープニングはミラー操作によるコロニー破壊か……)

「あゝ人が吸い出されてくぅぅ……マスターいくの?」

「ん〜……マスコミとかがメインだと思っしなあ……
正直わからん」

(けど簡易ソーラーシステムねえ……あくどいわ……)

「マスター、あの機体は?」

「ジェガン、あゝスタークジェガンかな?あとは見たことない機体
だが……あ、クシャトリアつうかしいね」

「つおいの？」

「まあ0093辺りだから強いだろ、そりゃ〜ね」

「いかないの？」

「今早急に…はかな？まあいずれな…」

そつえば、コクピットシステム変わってるなあ…更新してるんか

…」

「僕らの使ってるのと違うね〜あ、あれは？」

「パプアかな？ようわからん」

授業シーン…とくには話題なし…

「ところで、今の人が主人公？」

「だと思っけど…どうだったかな？」

「キラーンって見つけるし、あれがユニコーンなの？」

「ガンダムタイプでないけどそうっぽいな…
テストパイロット苦しそうだし…」

「無茶な事やらせてるんでしょ」

「ブライト・ノアかあ…中の人死んでるんだよなあ…
今作はでなさそうだな」

「中の人？」

「声優さんね」

「ふん…別人ででてこない？」

「いや、多分なさそうだね、
わざわざ個々でこの話題でるなら、偉いからでないんだぞ！をいち
つけてると…」

次のハサウェイの閃光の設定があるから、フェードアウトできない
しよ」

「この娘がまりもちゃん？」

「ふえ？何故まりもちゃん？」

「ヒロイン」

「……まあ……ヒロインっぽいな……ん？ミネバかな？」

「ミネバ？」

「ドズル」ザビの忘れ形見。ハマーンが摂政について、ZZの時にメイン出てただけだ」

「ZZって？」

「あゝZの直後ね」

「ミネバちゃん危ない！」

「あ、多分ヒロインなら……ほらなあ」

「顔面いたそう……」

「うん…痛いよなあね」

(やっぱりミネバ＝ザビしかねえだろ)

「建設中なのに人がすんでるんだ…」

「確かに工法ちがうっばいなあ…」

「先に箱つくって充填してるもんね。僕らは」

「だなあ。元会社の人も完成時のヘルメット外す時の緊張感……あつく語ってたからなあ……」

「ねえ自爆しちゃうの？」

「ん…まね事みたいだね」

「この子友達になれそう」

鉄骨のシーン…ポップコーンきれた

(…もうひとつ買ってくればよかったかな?)

「なあ、PXでポップコーンメニューに入れよう」

「了解」

(一瞬イッシーの顔が思いうかんだのなんてた？)

「お屋敷かあ…作る？」

「そんな余裕ないじゃん…あ、ミネバ確定だな」

(う、……………こりゃきついわ……………)

「これ誰かにいわれたらどうする？」

「鬱になりそうだねえ……………」

「この機体は？」

「みた事ね？なあ…キャタピラ付きつて…思い浮かぶのが、
更にあとのF91の時代のタンクになるんだけど…」

「やっぱりタンクだね」

「まあ新作タンクか…」

「コロニー内で戦闘はじまった…」

「うむ……行ける身にとっちゃ、目の前で阿鼻叫喚になるから、あんまりコロニー内戦闘はなあ……」

「ビームうちまくりだね……」

「……行きたくねーなこりゃ……」

「外壁穴があいちゃった…材質脆いの？」

「ん……どうだろ？」

「実験しまくって大丈夫だったんだけどね…核爆発も使ったし」

「おい……」

「勿論洗浄ずみいい」

「ならいいが…」

「でも、このロンドベルが悪者なの？」

「ん〜前回の主役側だからないとは思っが…」

「けど、コロニー内で戦闘しまくってるし〜」

「ん〜まあわからねなあ…時間が進めば見えて来るはず…」

「でこの変形したのは？」

「正直わからん…リ・ガズイの発展系かもしれん」

「ユニコーン」

「個々で主人公と主人公機が…」

「おっしおっし」

「まあある意味宿命か……」

「これで絡むと……」

「多分連邦側になるんだろうな……」

「コクピット変形したね〜」

「……………お、これがガンダムになるんか」

「次回戦闘シーンからかな？」

(ちとど……)

ガンダムユニコーンの世界を思い浮かべて……………(いけるか?)

「”世界扉”」
開く世界扉……

「ははは……………ち、やったぞ……………」

「開いたね……………コロニー内だと思っよ、あ、造成ユニット」

「うん…勉強すれば開くんだね…
うん法則は見つけた」

消す扉…

「まあ後でに…するか…」

フアアアア

「…疲れが残ってるみたいだなあ…明日に備えて飯くったら寝るよ…」

………

カオル報告

世界扉の法則を取得しました「おやすみいマスター」

………

カオル報告

世界扉の法則みつけました

作者「この話は設定ネタっすね」

あ号「むう……チート過ぎるぞ……制限しろ」

作者「やだw……あれを入れたしい」

あ号「あれとはなんだ??」

作者「ひ・み・つ……あ、でもあ号には使えないから大丈夫だよ。
人が住んでいる土地というか星には使えない」

あ号「……………?」

作者「ヒントは、爆弾ではない、星を破壊しない、辺りかな……」

あ号「ほ、星を破壊しない??……何をもって来るつもりだ?」

作者「まああ号には関係ないネタだね」

あ号「むう……ところで作者、このゲームはプレイしクリアしなきゃ駄目ってなんだ？何故？」

作者「リアルマネー＋時間の問題で制限入れました」

あ号「切実だの……」

作者「あ、ユニコーン小説で既に出てたんですが、正直見てません。あと、名前違い等ありますが、見た感想とかになりますので、今回はスルーして下さい」

あ号「ところで మరి もは？」

作者「……正直あのとこの行動が思いつきませんでした……」

あ号「ゾイドは？」

作者「本来はゲームの世界でなら行けたのですが、ソフト紛失、カオルがテレビ版と想像したために行けないと理解して下さい。ウルトラザウルス！！いつか出さぞ！」

あ号「みてからな……」

作者「ああ……」

第65話 フルメタルパニックの世界へ… 投稿日20110207

2001年07月26日

改めてフルメタルパニックの世界へ……

(イメージイメージ…)

”世界扉”

世界扉が開く…

”フルメタルパニックの世界”

1998年4月

ほぼ現世日本と同様…いや途中からかなりかわってるが、歴史を送る日本…

平政の時代だ…

カオルはこの世界へ行くときに仕込んであったのがある。

まずは、これ売らなきゃな…

カオルは地元へと…いった

「おゝあるある…今潰れてなくなったのになあ…」

古きよきファミコンショップだ…

店内では子供達がセガサターン、プレイステーション、

ニンテンドー64をやるうと列に並んでいる…

カオルは店内にはいると、

カウンターにいるおじいさんに声をかける。

「買い取って欲しいんだが…」

「あいよ、何をですかい？」

カオルはセガサターン版サクラ大戦2を出す。

「おお、二日前の新作じゃないか…」

「フムこれなら4000円で買い取らせてもらうよ身分証はあるかい？」

カオル腰にまさぐり

「あ、会社か…あちゃゝすまん、忘れたみたいだ」

「ああ、いい買い取らせてもらうよ」

「すまないねえ」

「いや良いつて常連だろ？」

「ありがとうな」

カオル4000円ゲットした。

作注 本当は、買い取り等は、免許証等身分証明の確認が必要です。

(さて次が……スロットか)

パチスロ屋を見つけ、スロットに上る……

機種はサンダーV

お金を投入し、「イロウル」

BIGボーナスを獲得した。

この日は金稼ぎに集中…換金し、42万円獲得…

「シヤムシエル”幻影”」

一路ソウルへ……

(カジノ)

カオルは1時間半でつく…

東京 ソウル間って、1160kmすもんね…

まだ銀行が開いている時間だったので40万円をウォンに換金、

カジノに行きチップを変え、一路ルーレットへ…

BETで1の一点張り

「加速”加速”」

カオル、微妙に玉を調整してるよ……

ころん 1に見事はいり36倍、になり戻ってくる…

ディーラーさん 少し焦り気味……

もう1ゲーム…

カオル 今度はMAXベット18

ディーラーさん安心の顔をしたけど…

カオル微調整し…18にイン

36倍返し

(あと4回か…)

ディーラーさん意地になってる… カオル9に一点ばりMAXベット
微調整し、win

ディーラーさん更に躍起に、27の一点ばり… 微調整しwin

ディーラーさんキョロキョロしはじめた…

(プロは、自分の玉を調整できるっう話だからなあ…)

0への一点ばりwin

カオルこの頃なつてくると周囲の目がこちらに向いてきはじめた…

33の一点ばり…

(あ、のつてきやがる人もいた…)

勿論調整しwin

(さて…)

カオル 縦の中列にMAXベット… winし、

テーブルを離れる。

(バカラか… 8000万ウオンだよな？

今900万ウオンか… フム…)

別テーブルのルーレットについた…

4連勝し、4500万ウオン

(なんかスタッフが多くなったなあ)

イカサマしてるんじゃないかの監視だろう…してるんだけどね…

多分ディーラーが狙った玉に入れられない…つたみたいだ…

(バカラ)

メインバカラへ…

これは単純、どっちが勝つか？だった…

3回勝負するつもりだった…

このメインバカラは、イカサマ防止の為、箱の中にあるトランプを
順次にだす…

のため、

「バルディエル」

一部同化し、勝敗を確認する。

4500万ウォン2倍…

MAXベット8000万ウォンを5回…

48000万ウォンになった…

2時間ほどで日本円計算で、3200万円まで増やした。

(ま、軍資金はこんなもんか……)

カオルは一路日本へ戻り、ビジネスホテルにチェックインした……

？何故韓国で？って？パスポートないんだもんまだ……
まだね……

4月28日……

翌日チェックアウトし、

「”幻影”」

一路羽田空港へ……

9時、羽田空港と同化し、目的の沖縄行きを調べる……

JAL903便……

(あれか……)

カオル目的の便に取り付くと同化し……

(夜までひまかあゝ寝ちゃおう………)

カオルうたた寝しはじめた……

カオルの体内では修学旅行の神代高校2年生達が、

「はい、そこー！おとなしくすわりなさいー！……」

「センサー、トイレいつていいの？」

「スチュワーデスさん、電話番号教えて〜」

等で盛り上がっていた……

「餓鬼が……」

「ごめんねー職務上教えられないのよ……もっと大きくなって社長さんになったらね」

「お客様なにか？」

等スチュワーデスさんたちが忙しそうに動き回っている……

「はぁ……やっぱりハズレねこのフライト」

「ほんと、今日の高校は特にねえ、飛び立つ前なのになんなのよ……」

とギャレーで愚痴を言い合う程です……

それでも、

「お客様、シートベルトを付けて下さい」

等チエックし、
903便は、ボーディングブリッジを離れ、滑走路へとタキシング
する…

機内では安全の為の説明が入り…
離陸し…沖縄へと向かう。

11時30分

「ほ、本当に大丈夫なのかね？」

「おたくなんべんいつたらわかるん？
話ついているといつてんだろ」

銃を頭に向け、赤いレーザーサイトが額に向けられる…

「ひっ！！た、頼むしまってください…いちいちだされては落ち着かな
い…」

「はい、もうすぐ北朝鮮領内だから、わかるよ」

韓国空軍のF-16が離れていった…

「ほら、はいった…だろ？このまま、順安にいけば、

お前さんたちの命は無事なんだからさ」

副機長は、手を汗ばんで操縦し続けた…
隣の機長席は物言わぬ遺体があるからだ……

やがて機体は、順安空港へと着陸する…

周りには北朝鮮軍、またサベージが飛行機をとりかこみ、警戒にあたっている。

さてっと…カオルは抜け出し、サベージに近づき、同化、解除

サベージの情報をゲットした…

(と、おつぎは…)

カオルは基地内をうろつろし始める…

(これじゃない、これでもない、これか?)

カオルは目的のトレーラーを見つけた。だした。

トレーラーの中は、何かの実験施設を思わせる構造になっている。

(さてっと寝ますか……)

22時40分

「きゃあーっ！ど、どこ触ってんのよ!？」

「だから違うと言ってるだろう」

「あつちいけ！痴漢！変態！レイパーっ！」

「いい加減にしてくれ！」

で眼が覚めた…

「きゃあ！お尻さわんないでよ！」

「しかし、頭あげると弾がくるぞ！」

宗谷はかなめを壁面のほうに押しやり、転がって立ち体制になる。

「ねえ、あんた！なんか服かしてよ！」

「むう、そういわれてもだなあ……」

「詰め襟、それでいいから！じゃないと個々からでない！」

「……………わかった」

宗介が詰め襟を脱ぎ渡すと、
かなめは掻っ攫うように着た。

「これでいいのか？」

「え、ええ…しょうがないけど」

バラバラ

サブマシンガンをうち、牽制すると、

「はやく…！」

とかなめの手を握り、

宗介と、かなめが銃撃のさなかにトレーラーからでていった…

ので実態化し、女医を診てみる。

女医は虫の息だった…

少し気になってたので「アルミサエル」

精神をのぞく…

(ふうん…誘拐、協力強制か…逃げ出せずだったんか…

この任務に失敗したら射殺…だからひっしだったんだね)

彼女を助ける事にした…

銃撃がカンカンとトレーラーのボディにあたる中、

医療カプセルをだし、作動させ、ロック

虚数空間に入れる。

「聞こえないのか、千鳥！……まだ危険だ下がってる！」

少し離れたところから聞こえる……

（さてと…M9、アーバレスト、TDD-1まってるよ）

カオルは再びジャンボへとむかう。

一機のサベージが基地の外へと、かけぬけていったのが遠くに見える……

カオルはジャンボの下に隠れると…しばしの時をまつ…

ヒューー ドドドドドドドーン

多弾装ミサイルが着だん、

ジャンボの周りの基地施設に多大な被害を与えるワルツになる…

（きたな）

バララララ…ボン……ガシーンズズズズ

M9がフリーフォールで戦車を沈黙させ、着地し勢いをころす。

あと4機のM9がパラシュートを切り離し、基地内に分散し、制圧にかかっているのが見えた…

バララララ

輸送ヘリ、攻撃ヘリが大地をローター音を響かせてこちらに向かってくる。

「全員窓から離れる!!」

M9がそう外部スピーカーで叫ぶ…

(マオ姉さんね…取り付くか)

マオ機に取り付いた…

マオ機は、背中から刃渡り6メートルの単分子カッターをすらりと抜く…

マオ機は刀を容赦なく飛行機に突き刺す!!

ギイイイイイイイ

火花をあげ飛行機の外壁をグリグリと切り裂いて、えぐって隔壁をひきちぎると…

「あつた!」

コンテナを取り出すと、そばに控えていた僚機に手渡す。そのまま助走し、コンテナを投擲する。

そのコンテナが500メートル以上はなれた地面に落下すると…ドーーーーー…

強い衝撃とともに爆発音が響く

「こちらウルズ2!! 爆弾の処理は完了、直ちに交戦」

『外部スピーカー!!』

「って、おっと」

カチ

「すまないね…さあ行くよ！」

ガチャガチャ

すぐ脇を黒ずくめの兵士達が、飛行機に突入しようとしているのが見えた。

カオルは外に集中した…

ヒュン 戦車の砲弾が掠めた…

マオ機はジャベリンを構えると…

ボシユー ドーン

敵戦車は爆散した。

後ろでは強行着陸した、2機のC-17に向かって列をなし走っているのが見える…

ガインガイン

マオ機はしばらくすると警戒しながら、輸送機のそばで片膝をつく…
付近は制圧しきって、いたためだ。

「そのセンサー、カナメは別の便で帰るよ」

「べ、別の便？あなた、なんで、わたしの生徒の名前を……」

「いいから、早く飛行機のとて!!」

人質達が飛行機に収容されると、後部ハッチは閉じられ、輸送機はガタガタいいながら飛び立つ。

人質のせた飛行機に向け、敵の援軍の歩兵だろうか？対空ミサイルがはなたれた…

が電磁迷彩により透明化した輸送機はそのまま離れていき、目標を見失ったミサイルは迷走し落着する。

バババババ

大型ヘリが降下してきた…しばらくしたあと、

マオ機は伏せ姿勢になり、大型ヘリが背後から包み込む形でドッキングし、マオ機を固定する。

ババババババ

マオ機は空へと飛び上がった…

2330

ヘリは黄海にでると…洋上に浮かぶ、巨大な潜水艦の飛行甲板に着陸した…

TDD-1、トウアハー・デ・ダナン…ミズリル西太平洋地区所属強襲揚陸型潜水艦だ…

カオルは早速同化しはじめた。

しばらく時間がかかるが、アーバレストも確認した為ついでに取得

した。

取得した時には、TDD-1は既に潜水していたため離脱は不能……
次の時をまつ……

艦内？至るところに人がいて、

実体化する暇が見つからないからだ……

さすが、

長期間実動部隊を艦内で過ごせるように、

いや生活できるようにしただけの事はある……

04:00

TDD-1は全長212mの巨体を海上に急速浮上し、弾道ミサイルを撃ち出す。

その合間をぬって、カオルは艦外に実態化し、

「”世界扉”」

次の時間帯へ……

……

カオル報告

サベージ

M9

アーバレスト

トゥアハー・デ・ダナン

AS用武装

3200万円程、軍資金確保済み

作者「新たな世界の登場っすね」

ナギ少尉「久しぶりのナギです…作者わりや、わしを本編だせや
ゴラァ!!」

「し、しまつて…そんなに怒ると、顔が博士みたくふけてくるか
ら…」

「……………まあいいわ……………本編だしてね 作者」

「正直、ゲーム内で死んで下さい…でないとカオルは出さないつも
りです」

「はあ……………なんでそんな制限入れたのよ!!だからオリキャラがヒ
ロインの座を争うはめになつたんでしょ!」

「むう……………まりもちゃん頑張らせないとなあ……………」

「ここまでみて、本来のA-01のメンツ、あんまりいい場面がな
いっわ…」

「まあ死なさない工夫はしてるし…ね」

「……で、この世界は？」

「ご存じかと思いますが、フルメタルパニックの世界になります。この世界はウイスパードによるブラックテクノロジーで80年代から本来の歴史軸と変わってきてますね…という設定だよな??？」

作者小説見直し中…

「まあ小説版の設定を利用する…と思って下さい」

ナギ少尉「あたしは軽く見たんだけど…何を1番の目的でいつてるの？」

正直、何故軍資金を稼いでいるかわからない…」

作者「まあ後程のお楽しみに…」

ナギ少尉「？あ、ゴン太君は？」

作者「ボン太君！！ゴン太君はNHKのできるかなの出演の着ぐる

みだよ」

ナギ少尉「中の人是谁？」

作者「中の人はいないさw……まあ正直辛いんだよあれは……」

ナギ少尉「やった事あるの？」

作者「ウルトラマンなら、団地のイベントで着たよ」

ナギ少尉「入った感想を」

作者「俺が着たのは、テレビに実際に出たスーツだったんだけど、まず視界が悪い…正直よくあれでアクションできたなと思う。目の下の部分に薄く切り込みがあってそのみしか視界がない。あと呼吸するところが口の中央の切り込みのみ。」

着て注意する事は…

子供を蹴飛ばすな、

必ずしゃがんで対応しろ、

脱水にきをつける…

以上」

ナギ少尉「……何キロ減った？」

作者「俺は3日間、通算9時間着用で、4kgは減ったな……正直良
いサウナスーツさ……」

本人暴露ネタが続くのでまた次回へ

第66話 フルメタルパニック編02 "仁義なきフアンシー"

三日目

東京都調布市

世界扉からでて、けすと…

(さあ〜ってと……陣代高校か…)

カオルは幻影をかけ飛び上がると、高校に向かっていく…

都立神代高校がモデルだからおんなじ場所にあるはずである…

(ビンゴ)

カオルは午前の授業終了後までまった…

生徒達が多数下校し始める…

(いたいた…)

カオルは、目的の生徒をつけるように飛びはじめた。

その生徒二人は、途中、ヤクザらしい人と合流し、歩いている。

かなめ、蓮、組員の柴田だ…

もう少し近寄ってみると…

(お、もうそろか…)

かなめと、蓮達の前方、後方から、
黒塗りの車がちかよってくる。

隠れて襲うつもりだろう…

そして、かなめと蓮、迎いの柴田の正面を覆面した男達が、
いきなり飛び出てきた…

かなめの背後も、既に囲まれている…

車道には黒塗りのベンツ、1BOXが急ブレーキでもってとまる。

「なんだあてめえらは、このお方をど
ズギヤ！」

口上を述べる前に、ナックルで殴られる。

「ぐはあ…おうまで」

「柴田さん!!」

ゲシッ

ガッス!

ドゴッ!

かなめは蓮を背後に…

「て、てめえらあ……」

バコボコバコボコ

柴田は、一方的に殴られ蹴られ、沈黙したようだ……

「はなしなさいよ、あんたたち!!」

「柴田さん……」

黒塗りのベンツに無言で押し込まれ……

カオルはベンツに軟着陸し、同化すると……
ベンツは走りだす。

「ねえあんたたち、龍神会？」

かなめがそういうと、覆面した男が、銃を押し付けてくる……

「……わかったわよ……黙るわ……」

ベンツは街はずれの大きな屋敷にへと入っていく……

玄関前につくと、ドアが開かれ、

「ほら降りる!!」

と覆面の男が、やっとしゃべり促される。

渋々、二人は降り、玄関内にはいつていく…

カオルは同化を解除し、ついていく…

警備は嚴重だった…

屋敷内では堂々とサブマシンガンを下げている…

(……警察はなにやってんだか……)

二人が小突かれ、地下室に押し込まれた。

同化し、地下室内に入る。

ここでまてば、ボン太君と出会えるからだ。

「……こう悪党に捕われる事が多いのかしら」

「まあ……。かなめさんは、こういう経験が豊富なのですか?」

「うん。どこの馬鹿のせいだか見当はついていないけど……」

「大変ですねえ……。どうか、これからもお気をつけて」

「人の心配している場合じゃないでしょ……」

1時間後

「おお……。なるほど。綺麗なお嬢さん達だ」

「あの一。あなたは?」

「龍神会の組長、菅沼です。ちなみに祖父は、なぜか英軍の駆逐艦にのってました。まあ、誰にもわからないネタなただけどね」

手にしたビール瓶をラッパのみにした。

「はあ……。一応聞きますが、あたし達を、どうするおつもりで？」
「決まっています。お約束です。美樹原組の皆さんに、縄張りから手を引いてもらう材料になっていただけこうと。……ふふ」
「材料。それって、もしかして……」

「……………!」

「まずは彼らに、我々が本気だということを、知ってもらう事が必要と思ひましてね。ふふふ……。おい、工藤、清野！」

「ちょ……ちょっと?」

「あの。これは一体……?」

ドーンぱらぱらぱら

「なんだ……?……おい、様子を見てこい」

「へい!」

「まあこちらは、こちらで進めますか」

「いやあ!あんなたち、麗しきピチピチの女子高生に、そんな事していいと思ってるの!？」

「それがしたくって、わざわざ地下室にじゃないですか……」

「あのかなめさん??」

「蓮さん！！ちょっとは抵抗しなさいよ、意味わかってるの？」

「えっと、フォークダンスをしたいという事なんですよね？」
ズコー

と擬音が聞こえそうなずっこけぶりを、
部屋にいる組員やかなめがしている。

「お、お嬢さん？」

「蓮さん！！あのね、この人達はね、わたし達の制服を剥ぎ取って、
真っ裸にして、穴という穴にバ〇ブやチ〇コを突っ込んで、
あたし達の処女を奪うばかりか、三角木馬や、縄で縛りつけ調教う
して、

薬つけにして、海外に売り飛ばすつもりなのよ！！」

「……………お嬢さん、そこまでしたら人質の意味が…………」

「で、売り飛ばされた、海外で、両手両足を切り取られ、
達磨にされ一生ヤクや、セックス奴隷となり、使えなくなったら棄
てられ、命を失うのよ！！」

「あの…お嬢さん??」

工藤、清野は、

「最近の女子高生って妄想激しいんだなあ…………」な感じで見合わせて

いた…

「でもって、命を失うばかりか、野犬に肉体はかまれ、白骨死体になり、家族も捜索願いだされても、一生あえないんだわあ〜」

「お嬢さん!!」

「?組長さん?」

「いや、そこまでやると、さすが人質の意味がなくなりますので…」

「どうまでっ…」

「いや、まあバ○ブツッ」ミビデオまでを

「そこから薬つけて海外に…」

「もういい!!…おい、剥ぎ取っ」

「組長!!…」

「ちっ……なんだ？」

「カチコミです！！戦力が必要です！！」

「……おい、いけ！！」

カチャリ

「お嬢さん達は、少しまってて頂きたい……なあと、すぐにおいしいのが味わえるさ……」

ドーンぱらぱらぱら

バラバラバラ

最初は余裕の表情だった組長、
妄想で、あんなこと、こんな事を考えていたが、銃声が近づくにつ
れ…表情が硬くなる。

ドアの鍵を閉め……

「おい！！こい！！」

部屋の奥へと二人をつれていく……
そして……ドーン！！

ドアが中に吹き飛んで来て…突入してきたものは…!

「少し前、屋敷正面」

ネズミだか、犬だかわからない頭、
らんらんと輝く赤い二つの目、
ライフル、サブマシンガン、ガトリング砲、グレネードランチャー
等で重武装している。

もっさもっさした手…指どこにあるの？
をさつと真ん中のがあげ、

「ふもお……………」
両脇の6体の着ぐるみが各々の武装をさつと構え、やくざに向ける…
指どこにあるの？なんで構えられるの？ねえ…

「ふもつふ…！」
重武装の武器から催涙弾、ゴム弾、電気銃などがやくざへと襲い掛
かる。

「がっ…！」「ぐへえ…！」「グボ…！」「ごほっ…ごほっ…」次々と倒れるやくざたち…

ねえええ！トリガーどう引いてんだよう…!

修羅のごとく次々とやくざを無力化していく…

「死ねやあ！！おんどりやあああああ！！」

パンパンパンパンパンパン！！

やくざがトカレフを着ぐるみに向かって全弾打ち込む…

しかし、

「ふもふも……ふもっふ」

着ぐるみは、笑い、ゴム弾をしこたまそのやくざに打ち込む…

「そんなああああ」

やくざは泣きながら吹き飛んでいった…

「ふもふも、ふも」

さっきの中央の着ぐるみが左を指しながらいうと、

「ふもっ！！」×2

二体の着ぐるみがうなずき左廊下のほうへ…

右を指しながら

「ふもふも、ふも」

「ふもっ！！」×2

2体の着ぐるみが右手の廊下にむかってく…

「ふもふう」

「ふもっ!!」×2

3体の着ぐるみが中央階段を上ってく…

途中とまり、

「ふも、ふも、ふもっふ」

「ふも」×2

敏速に見えてる扉脇に2体が、壁に張り付く、

真ん中の着ぐるみが扉を蹴破り、
催涙弾を中に打ち込む。

「ごほっ、ごほっ」と何人かの咳が部屋内から聞こえ…
着ぐるみは中に突入し、ゴム弾を打ち込み気絶させ無力化する。

「ふも」

「ふもっ!!」

着ぐるみは廊下をすすみ途中でとまる…

一気に角にでると、

ダンドンダン!!バタバタバタ

ゴム弾打ち込まれ、気絶したやくざ三人が倒れた…

「ふも」

着ぐるみは前にすすむ…

両開きのドアが開いて中は広そうな部屋が見える…

「ふもっ」

「ふもっ！！」

セオリー通り催涙弾を打ち込む……が咳の音が聞こえない…

着ぐるみは一気に突入すると、

バリケードの向こうでは…

ガスマスクをつけたやくざ達が重武装していた。

ブロロロ

旧日本陸軍の一式重機関砲が火を放つ、

しかし、

「ふも！！」

機関銃弾をうけても、着ぐるみ達はゴム弾を打ち込み、

うつっていたやくざを沈黙させる…

「ゴン太くんこわい……」

部屋を制圧したあと廊下にでる着ぐるみ…

「おんどりやああ、妖ドス、たぼてんうけてみやがれいいい」

変な名前のドスを構えたやくざが突進、突き刺そうとするが…

「ふもふもふも。ふもっふー!!」

もふもふした手で左右にふり、指があつたら、

「チツチツチツあめーなあ」だろう…

をすると、殴りつけた…

「ば、ばかな…ダイヤモンドさえ…貫通した、妖ドスを……がく」

…勿体ない試しをしたんだね…罰があたったよ…

も〜とにかく、着ぐるみに歯がたたない、やくざ…

鉄砲を撃とうが、貫通すらない、

刀きりつけりや切れない…

あ、こういった場面ありました…

金属バットで着ぐるみ殴打したやくざが、

反対にケツの穴に突っ込まれて、悶絶し…床に転がってます。

屋敷を制圧した着ぐるみ、が正面ホールに集まり、

「ふもふ?」

「ふも」

首をふる…

「ふも?」

うち一体が、はなれてズルズル引っ張ってくる…

どがつ!!

やくざが気絶しようたいから目をさます。

「ふもふ、ふもふ!」「ふもふもふも!」

「ふもふもふも!」「ふっふっふも!」

「やめてくれい、ゴン太君、なにいつてるかわからねえ…」

「ふも」

両手をうちつけなる程な感じで…

「ふもふも?」

キョロキョロし…

「ふもっ!!!」

「ひっ!!!」

と、むんずとヤクザをつかんで、

空中で右手を左右にふる。

「?か、かくもの?」

「ふも
」

「あ、は、はい…正面に……」

着ぐるみにヤクザが吊されながら……

「あ、こ、ここっす」

着ぐるみがカキカキし、

「お、おんなですかい?ししりませ…グボツ」
脇腹をシユールに一発…

「は、はひ、ち地下室です」

本当にか?とかかかてる。

「へ、へい」

ヤクザがおろされる…

「み、見逃して……」
首をフリフリする着ぐるみ……

至近距離からゴム弾一発……

「やっつてられるかあああ………」

崩れおちるヤクザ……

地下室へ……

「ふもつふ、ふも！」
ばぁん！

扉が試行性爆薬により吹き飛ばされ、室内に踏み込んだ。

中では竜神会会長がかなめと蓮を、盾にしてたっていた。
手には拳銃を握っている……

「ば、馬鹿な。ボン太君だと？俺の部下が、ボン太君で全滅………」

(さすがボン太君……)

カオルはボン太君と同化し、情報をゲットした。

突入してきた着ぐるみを見て恐怖の悲鳴をあげる。その額には銃口がむけられて……

「ふうも、ふうも。ふもっふ」

「……多分、降参しろっといってますけど」
妙に淡白にかなめが告げると……

「ふ、ふざけるな！ぬいぐるみ衆に負けたとあっちゃあ、
他の極道になめられる。この渡世、凌いでいけねえんだよ!？」

「ふもっふ………」

Bannon

「ぐはっ……!!」
ゴム弾が組長の顔面に直撃し……倒れた。
その組長をみおろし、

「ふもふも、ふもっふ。ふうも、ふもっ」

「な、なにいつてるか、わかんねえ……」
つぶやいて龍神会組長は悶絶した……

(うむ、同意だな……)

「さ、帰りましょ、ありがとうねボン太君」

「ふもっ!!」

地上へとでていった。

「さて、とりあえず家捜しか…」

同化し、廊下にでると、階段を上っていく…

(ん〜金庫は？つと…)

「バルディエル！」

カオルは屋敷と同化しはじめた…

(お、あったあった)

カオル、金庫をみつけ、前に立つ…

ファンファンファン

遠くからサイレンが聞こえる。

電子ロックキータイプの金庫なので…

「イロウル」

解読、解除し…

開けると…

携帯と、札束があった。

（ ）

札束取得し、

携帯手に取り…

「イロウル」

ほお…取引リストか…

携帯も有効だと思つので取得。

（とりあえずはこんなもんかな？）

「世界扉」

カオルは世界扉をくぐる…

………

カオル報告

量産型ボン太君

裏取引リスト携帯フルメタルパニック

資金5000万円程（平政）

ナギ少尉「…………カオル空き巢してるね」

作者「…………うん」

ナギ少尉「…………いいのかな？」

作者「…………まあ、ヤクや、銃がみつきり、ボン太君に制圧され、
本家から破門されたからいいんでない？」

ナギ少尉「そつか…………で、このボン太君？」

作者「ああ、結構このサイズだと強いよ〜
武器さえありゃ、敵MS位のしちやうし」

ナギ少尉「1番威力あるのってガンパレ世界のだよね？
人サイズが使うのって、今のところ…………」

作者「零式ミサイルだよな。まあ扱えるだろう。人型サイズのAS
だし」

ナギ少尉「けど強いのか？本当に…」

作者「強いよ これ以上だとガンダムファイター??

後は特戦隊やライダーだろうけど、量産型ボン太君の敵ではない！
！」

「ふもー」×1万ボン太君

第67話 フルメタルパニックより帰還 投稿日20110209

2001年7月28日深夜：「ただいまあゝ」

「マスターお帰り〜」

カオルは世界扉をけし、時間確認した：
もうかなり遅い…

「明日か…うんじゃ風呂入って寝るわ」

「お休みなさい〜」

2001年7月29日

カオル起きて、医療カプセルを交換をまずはおいた。

でハンガーにいくと、とりあえず資材から、再現をしはじめた。

4時間後…

M9ガンズバック

全高8.4m

重量9.5t

パラジウムリアクター、常温核融合炉使用で出力3300kw

「マスターまたまた、小さい機体だね…
けど、出力からするとかなり高いか…」

「まあ…けど駆動部分にもってかれるのと、燃料投下が必要なのがなあ…」

作動時間、燃料ペレット投下で150時間…
まあ要するに、燃料が重量を重くする一方で、出力でとるか、継続性でとるかの二択問題になる。

一時的な出力は常温核融合炉が勝る…

大型化すりゃあ、まあわかる話だが、このサイズでの話とって下さい。

アームスレイブの特徴として、人の動きを再現する、マッスルパッケージ、人工筋肉による駆動、及び再現操縦方法があげられる。

第二世代までは、人工筋肉の問題で油圧補佐だったけど、コスト度外視へメンテナンズで人工筋肉を取り入れた第三世代のM9ガーンズバツクは、特殊部隊の格闘専門家の動きを再現できる…といって良いだろう。

いやこれかなり重要だよ。

兵士か、特殊部隊員かは…

でその動きを再現するのに必要なのが、セミ・マスター・スレイブという操縦方法…まあ後述し、進めましょう。

「マスターこのコクピットかなり異様だねえ」

「うん？ああ、そうだよなあ」

1番の特徴的なのが、操縦方法である。

人間の動きを特長的に出すため、人間自体を包み、その動きを機体に反映する。それがセミ・マスター・スレイブという操縦方法であった。セミは、バイラテラル角での補佐や、無用な部分はコンピュータ補佐、等を行う為。

まあ要は、8 m前後では、スペースに余裕がないって事だ……

今までのシート系は操縦スティックで操る。

アームスレイブは体で機体を動かすっつう事の違いでもある。

「うんじゃあ、少し起動してみますか」

「はい」

カオルは、コクピット内の人型スーツ内に、体を上から滑りこみます。

親指レバーを押し込むと、

コクピットが閉まり、起動準備にはいる。

正面スクリーンに文字が浮かび、

スーツがゆっくり締め付けられる。

《初期設定しますか?》

「初期設定キャンセル。テストモードで起動」

《イエス、マスター》

メインジュネレーター起動

コンデンサー電荷上昇

ヴェトロニクスチップ通常起動中

アクチュエーター通常起動中

.....

最終起動チェック中

間接ロック解除中

コンバットマニユーバオープン

カオルは、右足から踏み出す。

通常設定バイライル角2・5倍に設定になっている。

続いて左足…

『マスター、演習場許可とれたけどいく?』

「そうだなあ、いつてみるか」

『了解、第一演習場ね』

カオルはメインシャフトの方へ進める。

シャフトエレベーターに乗り込むと、集積場上がる。

集積場から、第一演習場に向かう間、奇異の視線を送ってくる衛士や、

兵士達がいた。

まあそうでしょう、いつものより小さいし…

カオルは演出場にでると…

準備体操を始めた。

マスタースレイブモードにしているので、そういった動きも可能って訳だ。

(さてと…)

全力疾走をはじめた。

跳躍、前転、後転、倒立、等、

人間にできない動きでアームスレイブに、できない動きはない。

きくと、モビルスーツより強いんじゃないの？と思うだろう…

けど、ファンダジー系で、

ゴーレムと自衛隊の特殊部隊員が1対1であれば…の状態だ。

ゴーレムがしかも、ブースター、ビームライフルを装備したら…

ゴーレムの動きが素早くなったら…

あともう一つ重大な問題が…Gがもろにシートからくるのであった。Gキャンセラーがサイズの的にそなわってない…のがASだった。

まあでもゴーレムでないこの世界の戦術機なら十分、このアームスレイブは脅威になりえる話だった。

とにかく、動きが異常なのである。

カオルは、一通り動作を終え、ハンガーデッキに戻ってくると、

水月中尉や石橋達がいた。

「カオルさん」「カオル」

「おう、ちっとまってなあ」

ハンガースペースに入れ、停止モードを選択、コクピットブロックをオープンし、

シートからでると、飛び降りた。

「カオルさん、この機体あたしに頂戴!!」「あゝ先任ずっこい」「

「あ、でも今の機体の方が強いですよ」

「あんな動きをして？」「え？そうなの」

「ええ、こいつは、駆動部分にほぼもってかれるんすよね…
なので、鎧をきてるロボットか、きてない人間か？
の違いがある…って面白いかもしれません」

「へえ」「ん」

「なので、こいつは重大な問題が、マッスルパッケージ、人工筋肉
の劣化等ありますし、
また燃料ペレットを使用する都合上、最大150時間までしか稼動
できないてすしね…
まあ、とりあえず乗りたいならどうぞ、あ、操縦方法は全く違いま
すからきいつけて下さいね」

ジャンケンしている二人をおいといて、デスクに向かう…

（まあM9使つとしたら、装甲材の強化で、鎧を着た人間になるか
らなあ…

あと、網膜投射か…

けどまああの操縦方法はありか…)

カオルはGガンダムを思い出した…

(ん〜あそこまで自由にうごければなあ…)

「マスター!!」

ドーン

(あ……)

見ると、M9が見事に転倒してた…

マスタースレイブ…

つまり、彼女は、足を大きく踏み出して

…律儀にM9は大きく再現して…

と、いう事だった。

カオルは機体に取り付き、操縦系を奪うと、
立て直し、半自動制御モードにして、改めて離れた。

転倒の衝撃で目を回していた、水月中尉を覚醒させたのも忘れては
いない。

初心者向けモードにしておいた。

カオルは戻ると、

トウアハー・デ・ダナンのデータ呼び出した…

マッドアングラーよりも高性能だなあ…

なので水中専門に仕立てあげる。

パラジウムリアクターから、宇宙世紀時代の核融合炉に変更

飛行甲板オミット

気密チエンバー拡大

格納デッキ拡大

TAROSオミット

推進装置に、熱核水流ジェット

(ん)BETAは、水中じゃあおとなしいからなあ…装甲はまあいいか…)

VLSオミット

無限弾薬装填装置部分組み入れて、

新音速酸素魚雷5連装を格納式にして…2門

(こんなもんか…)

「11号どんなもんでできる?」

「んんん6日」

「じゃあ、よろしく」

(あとは、ハイゴックか)

ハンガーにあるハイゴックを取り付き改造、

Z時代の構造に変えたあと、

メガ粒子砲オミット

ネイルを高周波、ロングに伸縮対応し、

とりあえず完。

(あんまり魔改造できんなあ……)

もともとが完成度かなり高いし、水中戦だとね…

(あとは、ASの操縦方法か…グフに入れようか、ASの強化が早い
いか…

んゝ武装共通化計るならグフのAS化かな?)

グフを、Z時代の換装したあと、

シートをAS式に変更してみた…注文

(マッスルパッケージ式にしてみるかな??)

もう一機作成注文、

こっちは駆動方式をマッスルパッケージ式にしてみた。

後で比較か…

(あと…)

量産型ボン太君のデータ呼び出し、
網膜投射システム、
パラジウムリアクターから、パワーセルに変更し注文した。

2001年7月30日

ボン太君起動…

目の前にはボン太君がいる…

後ろに回りハッチから身体を潜りこみます。

ちなみにこのボン太君、パワーアシストタイプなので、電子装備をものともしない。

電源をスタンバイさせるとハッチが閉まる。

キラーン

「ふもっふ（起動したな）」

「ふも、ふもっふ、ふっふるふもふっも……（けど、このボイスチェンジャー、全ての電源に関係してるとは……）」

ボン太君は軽く身体を動かしてみる。

「ふもふも（快調快調）」

とりあえず一通り動作は終了し、停止

（後は実践テストだな～）

となる。

（そういえば、個人兵装か…）

短滑空砲を携帯できるようにすりゃあいい？ふむ……（

「あ、マスター、帝国から、
マストライバー及び空港施設の承認おりたよ」

「お、そうか…じゃあ藤沢、茅ヶ崎の沿岸沿いに建設だな…」

「イエスマイロード」

「これで、シャトル足せば一日10万人の416便はクリアできるか……」

「500便なら24時間稼働で、3分切るよね」

「定員数240人乗りだからなあ…まあ一日10万人でやっと、一年以内に日本の難民
それ以外の国の難民も考えると頭痛いや…」

「他になんかないの？」

「軌道エレベーターも考えたけど、はっきりいって太平洋と、南極の間にしか今の段階は無理だしな…」

「でも500便か…最低1700機はシャトル必要だね」

「ああ、だな…」

夜はふけてく…

…

カオル報告

世界中の難民どうするか？

第67話 フルメタルパニックより帰還 投稿日20110209（後書き）

作者「横浜基地がどんどんかわつてくなあ……」

カオル「プロット通りじゃないの？」

作者「うむ」

カオル「……………」

作者「スペースコロニーでの、避難民の安全な生活は入ってたんだよ…それ以外は後付け」

カオル「マストドライバーは？」

作者「入ってなかった……………」

カオル「……………」

作者「まあばらしちゃうけど、どうすっかなあ〜で、マストドライバーで良いか…までだったんだよね…でもって、

調べたら…加速Gで百キロ以上必要とかさ…
うはっと思ったよ…

で、実際に構想中のから引っ張りだしーの、加速G計算しーの…
すこし執筆スピードがおちたね」

ヒルダ「だから、あたしが最近でてないんすね…折角仕掛けてるの
に…」

作者「あ、ヒルダさん…カオル食って下さい」

カオル「うおい!!」

ヒルダ「いつただきまゝす」

取り付かれるカオル、手際の良い脱がせっぷり……

作者「さて、次回はある大物をかな…」

2001年7月31日

旨い蜜を吸いにいく事にした…

ア・バオア・クー戦辺りの時間に行き、
ジャブローで情報取得後にア・バオア・クー戦に行き、
資材大量取得しようと考えたのだ…

でもさ、カオル、内政というかB-01すら放置してるよね…

「作者の執筆速度が遅いからじゃん」

それいなよ…努力してんだからさ…

「で作者ついでに確認だけど、恋愛フラグは石橋と桜井でいいんだね？」

おま…まあ…だな（まりもちゃんと殿下は、まだしられてないし）

「さて、11号いつてくるね。帰りは、6日後の予定で」

「いつてらっしや〜い」

”世界扉”」

” ” ガンダムの世界 ” ” ”

宇宙歴0079、12月28日

ジャブロー

世界扉をでて、幻影かけて扉を消すと

…記録を確認しに、作戦記録室に向かう。

場所は以前ティターンズ時代に確認してたから大丈夫かな？
と思ったら……

大丈夫だった…

移動はしてないようだ。

同化し、室内に入る…

人が居ないようなので早速確認。

ヘリウム3輸送任務ミデア…帰還機

5月21日全滅

6月6日1/5

7月15日1/4

8月18日1/4

9月1日3/4

10月25日4/6

…墜落原因と、飛行ルートとか調べて…

確認のちカオルはジャブローを出て、飛び立っていった…

カオルは急いでL5のコンペイ島に…

日付変わる前に潜りこみ、コンペイ島と時間かけて同化、レビル将軍の乗艦のマゼランを確認した。

12月29日

確認できた辺りで日付が変わり、

第1艦隊が出撃し始める…カオルは発進する艦隊に取り付いた。

(このマゼランかな?)

同化した…

(ブンゴ)

「将軍!!」

頷くレビル将軍…

「第一艦隊出陣する!!各艦、微速前進、陣形を編成せよ!!」

ソロモンいや、名前を変えたコンペイ島から、

第一艦隊に属する艦艇が前進し始める。

船の上には、ジムが固定され、前進していく…

終戦を目指して……

12月30日、

カオルは艦内のパブリク、ランチを取得していた。

「將軍、第13独立艦隊が敵艦隊と遭遇しました」

「ふむ…」

「將軍…！報告にありました、トンガリ帽子がいました…！」

「むう…ガンダムはどうなっておる？」

「今のところまだ報告は上がってません」

「密にな…そのMAが残ると、被害が更に増えるからの」

「は…！」

「第二、第三艦隊は？」

「第二からは、順調との報告です。第三艦隊は、接敵、撃破との報告です」

しばらく時間経過すると……

「第十三独立艦隊、敵を壊滅させました」

「例のは？」

「はっ！撃破と報告あがっております」

「ふむ…後背は確保できそうだな」

「將軍、作戦会議のお時間です」

「わかった」

レビル將軍が作戦会議の為、移動した…

「さて、今回の星一号作戦は、防衛ラインにあるア・バオア・クーを強襲、そのままア・バオア・クーに戦力を引き付けながら、ジオン本国に進み、占拠する事となる」

……

「グレートデギンが和平交渉に…」

「ほう」

(そろそろか……)

カオルは加速を二重かけすると他の人も含め、性格調査に乗り出した。

16人程問題のなさそうな人がいたのでマークする。

21:05

「デギン公の様に」

「うむ」

「し、將軍！熱源しょ」

カオルは全力でマーキングしてた人を引き込み…

「うお！！」

帽子が剥ぎ取られたのを確認し、レビル將軍を引き込んだ…
光の奔流の中、艦を離脱し、急いで離れる。

(あちいあちい！)

光の帯からぬけ……一息ついた…

手短な生きている艦に取り付き、空気がある室内にはいる。

レビル將軍をだすと…酷い火傷をおつていた…

医療カプセルをだし、レビル將軍を入れる。

カプセルを作動させロックし、虚数空間においた。

第一艦隊のなれはてを取得しながら……

12月31日

変わった辺りに、ア・バオア・クーに侵入した…

1：17

「我が忠勇なるジオン軍兵士達よ……

今や地球連邦艦隊の半数が我がソーラーレイによって宇宙に消えた。

この輝きこそ我等ジオンの正義のあかしである。

決定的打撃を受けた地球連邦軍に、いかほどの戦力が残っていようと、それは既に形骸である！

あえて言おう…カスであると！！

それら軟弱の集団が、このア・バオア・クーを抜く事は出来ないと私は断言する。

人類は、我等優良種たるジオン国民によって管理運営されて、初めて永久に生き延びる事ができる。

これ以上戦い続けては、人類そのものの危機である。

地球連邦の無能なる者どもに思い知らせてやらねばならん。

今こそ、

人類は明日の未来に向かって立たねばならぬ時である！
ジーク・ジオン！」

「ジーク・ジオン！！
ジーク・ジオン！！
ジーク・ジオン！！
ジーク・ジオン！！
ジーク・ジオン！！」

叫び疲れてしまった……
カオルは勿論生でギレン総帥を見、
演説をきく為にジオン軍兵士に幻影でなり、紛れこんでいた。

わざわざと……

ボソツ「作者も行った癖に……」

ああ行つたよ、録音されたよ

(さてつと…ドロワ〜)

ドロワに同化し、格納庫にある、ジオングとゲルググをコピーした。
離れ、格納庫にあるザンジバルも同化し取得する。

(ビグ・ラング〜いた)
調整中のビグ・ラング、

側にヨーツンヘイムがいたので取得…
オツゴも取得。

(ドラム缶だな…まさに)

そして、戦闘が始まる……

8：10 第1次攻撃隊、パブリクが突入してきた…

ビーム攪乱膜が戦場に展開される。

対空ミサイルがジオン側から打ち出される。

カオルはしばらくア・バオア・クーの外殻部にて観戦している…

(あれにキシリアか…)
グワジンが見えてきた。

8：40 連邦MS隊が出撃してきた…

戦場には命が咲き乱れる……

一つ一つの光の花が命をけている。

そして……ジオングが出撃していった…

(お、指揮が?…ギレン総帥しんだか…)

統制とれていた防衛ラインが、押し込まれているのがわかる。
そして…ドロス撃沈が撃沈した…

連邦のモビルスーツがア・バオア・クーに取り付いてきた

ドロワが撃沈し別方向からも…

(あ、)

WBが被弾し…着艇していくのが見えた。

外は…ほぼ連邦の優先になってきた。(そろそろか…)

残骸を集めに翻弄し始めた…

ア・バオア・クー内外で拾いまくる…

特に最優先が内部及び、外殻部…爆発で焼失しそうな場所のだ。

要塞内では、いたるところで爆発が起きている…

「退避だ!!!」

「爆発が激しくなったぞ。後は周辺空域制圧で良いそうだ!!!」

「犬死にすんな！」

更に激しい振動がおき…

電力が落ちたみたいだ……
要塞の照明がおちる。

(うおっ)

ATフィールドが展開され、壁にたたき付けられた…
(いたたた……そろそろやばいか?)

ア・バオア・クーから離脱すると……

(あ、あれか?)

ザンジバルがサラミスに打ち抜かれて、爆沈していくのが見えた…

カオル、周辺での回収はあきらめて、敗残兵狙いの
Eフィールドに進む。

そこは、退路となり、敗軍が撤退しつつある

(ビッグ・ラングが支えてるんだよな……)

背後では、爆発するア・バオア・クーが見える……

そして、停戦命令を無視し、逆襲する、連邦とビッグ・ラングの戦いがはじまった……

カオルは他のフィールドの回収作業に勤しむ。

1月1日終戦……

カオルは拾い終わると、死者を宇宙空間に浮かべ、黙想をする。

爆発のおさまっている、ゼダンの門に入り、気密があるエリアを探しあてて……

「世界扉」

扉を潜る……

宇宙歴0079 9月1日

カナダ、木星輸送船団基地……

カオルは爆散による墜落する機体に潜りこんだ……
パイロットも救出しようかな？

と思ったが…

「この間よう、村娘美味しく頂こうとしてよ」

「おお、どうだった？」

「抵抗したからさ、ぶん殴ってやったら失神しやがってよ…
興がそれたさ」

「お前は駄目だなあ」

そんな時は失神する前にぶち込めばいいんさ」

「あゝそうかあ」

（無理、嫌いなタイプ）

荷物のヘリウム3タンクだけに集中する事にした。

同化し、空中監視していると……

「ちい、お客さんが着やがったぜ…」

「あちゃ、マジかよ…護衛はなにやってんの!？」

ヒュー

直撃弾きたので…

「加速」

輸送タンクをまるごと頂き、離脱…

ジェット燃料に引火し、爆散、落下していくミデアを背にしながら、アメリカの大地に到着する。

「世界扉」

カオルは世界扉を潜る…

…

カオル報告

ジオング

ドロス級

ゲルググ

ビッグラング

オツゴ

パブリク

ヘリウム3タンクゲット

作者「レビル將軍がきたね」

カオル「初期プロットには…」

作者「ないよ…けど必然に…になっちゃったんだよ」

カオル「……初期プロットから逸脱して…」

作者「あ、そこは大丈夫、ラインに沿ってる。細かいところでプロット脱線だね…」

カオル「マストドライバーとか、ヒルダさんとか？」

作者「ああ、細かいところでだね」

カオル「………ところでレビル將軍の口大丈夫なん？」

作者「………1番出てるのがギレンの野望…でだっけ？…多分大丈夫かなあ」と………」

カオル「まあ…良いけど、
で宣言している日まで後60日近く投稿か…ながいんじゃない？」

作者「まあ…なんとか続けるさ…武ちゃんの驚く顔みたいし」

第69話アバオアクーより帰還 投稿日20110211

2001年8月5日夜

「B55ハンガー」

世界扉からカオルがでてきた…

カオルは、資材置場に行くと、燃料タンクを吐き出す。

(もう一層資材置場が必要かな?)

とすこし思いはじめた…

その後ジオフロントの医局へといき、カプセルの交換をし、

寢床につく…

8月6日

シエルターに引き込んだ16名を案内するので、戦艦ドックにて、シエルターをだし、扉をつけて、25号に案内を頼んだ。

「マスター、できたよ」

「何が？」

「テスト型のビクトレー」

「ああ、だったな…了解…と先にかたつける事やっっちゃおう」

「あのタンクが全部無事なら、1200基分だね」

「じゃあ、まずはシャトルだな…」

「ただシャトルほぼ24時間運行だから、ヘリウム3の消費が激しくなると思うよ…」

「だよなあ…半年後には…か…まあ9月まで持てば良いけどさ…
とりあえずシャトル200機造船してくれ…
あと、燃料くうが、サラミス改を順次造船で10隻分、
後は…陸戦強襲型ガンタンクとを…2個連隊分216機とカバー用
のホバートラック18両で…」

「516基分のヘリウム3つかうね」

「ああ、よろしく…あと約1200か…んゝ後は、製造終わり次

第かな？

あ、そうそう、資材置場用のブロック、もう一層拡張しといて、あ
と戦艦ブロックも」

「了解。ところで、避難民の移送方法メデューシンたのみ？」

「これからの海外も目に入れると…」

それしかないだろうなあ…2番機もつくつとくか…」

「陸上輸送に頼らないの？」

「ん？ああ、新幹線に頼ればいいんじゃない？」

「ないよ」

「は？」

「あつたと言えはいいかもね」

東海道山陽新幹線は破壊等で、なくなった…」

「東北や上越新幹線は？」

「何処の路線？」

「東京から新潟と、東京から盛岡、八戸まで行く新幹線」

「東海道延伸線、北陸新幹線かな？」

東海道延ばして仙台までと、京都から新潟間結ぶ…」

「あ、京都が首都だったんだっけ…」

「北陸新幹線は放棄破壊された、
延伸線は建設中だったけど、大宮通る為中断になったよ」

「あゝそうか…じゃあ今は動いてないって事なんか…」

「今も帝都方面で運行してるのが常磐線、京浜東北は運休になった
し破壊されたって…」

総武線は23区内から東の運行、
東北線は疎開対象地域以外は動いてる」

「あ、俺の世界の路線図データあったな…ちとまってる」

「へえ…JRになったんだ…廃止路線がこつちではまだ動いてるよね」

「ふむ……」

「あと勿論ここまでは、鉄道でなく、道路、しかも荒れたね…整備する能力がなくなっているって」

「つまり交通インフラも手を加えないと？」

「うん」

「む…新幹線か……」

「あ、新幹線は不可だと思うよ。作っても維持する能力が帝国にはなくなってる」

「……………リニアチューブか？」

「なにそれ？」

「いくつかのSF物であるけど、真空にしたチューブの中をリニアモーターが通るっつもんなんだよね。」

これで衝撃波をなくすっつもの」

「……いいんじゃない？……けど速度どのくらい？」

「マッハ越えてたような……」

「マスター……それ大陸間用だよ……通常のリニアでいいと思う」

「か……んゝあ、上海リニアか、JR東海のリニアかな？」

現在、上海では磁気浮上式、日本ではJRマグレブ式山梨試験線がある。

「まあ……取得してからの話かな……とりあえずは、道路の整備が先か……整備できそつなのあつたかな？」

「コロニー用のはあるけど、地球には適さないよ」

「だよなあ…第一MSは重いから、アスファルト荒れるし…」

MSで日本の道路歩くと荒れます。

キヤタピラが道路走行すると……の状態になるので…

宇宙世紀のコロニー道路は重さに強化対応してる為、大丈夫なんです。

「ASは重量は全然大丈夫だけど、軍事用つか、なあ…民生用には強力過ぎだし…」

エステバリスは、動力や操縦方法の問題だな…」

(まあ…民生用というか、工業や農墾用あってもいいな…
軍事用しか作れてないし、余裕でたら増えるだろ……)

「ふむ……次に行くところが決まりかな…あとは…
初のNT専用機作ってみるか…」

「NT？」

「オールレンジやファンネル操作し、いろんな事できる人たち」

「ファンネル？」

「こういったやつさ」

ジオングのデーターを鯖に入れた。

「こういったの？、ヤドカリ君もう一人つけければ操れるよ」

「へえ…パイロットに一人、ファンネル操作一人ですむわけね…」

「うん」

「わかった…と…あとは…ない？」

「特には…ところで学兵さんとかの進路は？」

「う……今、学兵はどうなってるん？」

「今のところは貰ったカリキュラム参考にすすめてる。
けど、歩兵志望とか、パイロット志望とか、
戦車兵志望とか、色々いるみたいだし」

「ふむ…まあとりあえず見に行くのと、志望別にわけの必要あるかな…」

まあ、才能でなく、適性条件がなくなったのがリニアシート+Gキヤンセラーだからなあ」

「あとそろそろB・01の隊長決まりそうだよ」

「ほう…やっとか…」

「途中参戦もあったしね」

「あ……ミテア組か…」

「あと今朝の人達もいるでしょ？」

「うん……まああとでだね…と、演習場は今日あいてる？」

「……あいてない」

「明日は？」

「第二ならあいてる」

「じゃあ、いれといて」

この日はこれ以降特別にはなかった。

8月7日

今日はビクトレーのテスト艦における兵器テスト、魔グフ2種によるテストになる。

目標物は横100m*高さ100m*厚さ50mの強化コンクリート、ダイヤモンド以上の強度、
勿論撃つたあと治すの繰り返しだ

最初の物は、鋼鉄の咆哮の160cm砲

「マスター…このでかぶつなんなの？」

「ん？160cm砲だけど？」

「常識外れ…」

試射に入る。

「マスター…何故上に砲身が向くの？」

「そついった仕様さ、撃てばわかるよ」

ドン！！

テスト艦が大きく揺れる。うちだされた火の玉は、

垂直に目標を捕らえると、コンクリートの塊を文字通り爆散させる。

「た〜まや〜」

「……………何故??100m100m50mのコンクリなんだよね?
?非常識だよ…」

「コーエークオリティなのさ」

「なにそれ…意味不明」

次の武装に変え、

コンクリートを治しにいった…

(コンクリートだけでなくねえ…)

20m程のクレーターができている。

治したあと、艦橋にもどった。

鋼鉄の咆哮製160cm砲の評価…一発の威力絶大、
に時間がかかる。発射時の衝撃大、
の為船を揃える必要あり。

次の武装は鋼鉄の咆哮製レールガン1だ…

「普通の形だねえ」

試射…

爆散はしないもの…

50mのコンクリートの20m近辺まで食い込んでいた…

鋼鉄の咆哮製レールガン1の評価

威力絶大なるも、充電、冷却にわずかながら時間の必要あり、
1秒間に1発の射出速度。

弾速ありの為、レーザー同様の必中性あり。

（あとは、レーザー兵器か…うん…魔グフの評定にうつるか）

プラズマ砲もあったけど、飛ばしますた…

作者的には充電にかかる、射程短い、誤射の危険あり…つすもん。

テスト艦を戻し、

魔グフ2種の評定に入る。

両方とも操縦席はAS式…ながら、片方は駆動方法を変え、マッスルパッケージにしてある。

まずは通常のAS式の魔グフへ…

イジェクションポットを採用しながら、網膜投射を優先してある。

コクピットに余裕があるため、かなりの運動スペースといったらいいのかな？
をとれていた。

評価的にはGキャンセラーも有効的でまあまあか…

次の機種、魔グフマッスルパッケージ仕様につづる…

(ぐ……………Gキャンセラーが効かない程??)

かなりの速度で動き回れるが、Gがかかりすぎる。

乗り手を選ぶ仕様になってしまった……………

評価が終わり……………

(ん〜)……片方は乗り手選ぶか……)

ヤドカリ君達は射撃が好みらしいので、これには乗りたくないと言われてしまった……
ので、近接したがり、適正次第で……の形になる。
金色のビームコーティングは忘れない。

そして夜になると……

「マスター……一応耳に入れた方が良い話が出てきたんだけど」

「どうした？」

「情報室にちょっと着てもらえる？」

「ああ……」
情報室に移動。

「で？」

衛星映像が映し出される。

「カムチャツカ半島で侵攻の気配があつて……」

「ソ連か……こつちには来る事はないだろ？」

「地下のスパイからはないからね〜…
一応現地軍で対応できるレベルなんだけど…ね」

「そっちも戦線あるんだよな…あとは、シンガポールの方は抑えきれてるんだよな？」

「そっちは細いからね〜」

「いざとなればフライングアーマーでか…」

「あ、無理だよ〜」

「ん？」

「東京から、ソ連の要塞都市アナディリまでが、4068km直線でね」

「あ、航続距離か…増槽が必要だな…」

魔フライングアーマーをハンガーに持ってこさせた。

「つけられそうな箇所はっ」と……」

「マスター、ここどう？」

「そこね……うん……よさ気かな？
じゃあ明日テスト入れといてな」

「了解……マスターおねむ？」

「ああ、明日な」

「お休みなさい」

………

カオル報告

特には？

第69話アバオアクーより帰還 投稿日20110211（後書き）

あ号「作者、読者から指摘うけたが、いつわしを攻略しにくるんだ？」

作者「そうっすね…最低1万機でないと、ハイブ内のBETAのお掃除不可能とみてます…」

あとハイブ再利用の拠点化ですかね…

正直、500:1だと、きついとみますから…」

あ号「他のように、反応炉攻略を目指すのでなく？」

作者「ハイブ内の完全制圧、後々の禍根を絶つ…」

当初のハイブ攻略戦に沿っての流れです。

それができなかったのが、今まで、異世界軍はそれを可能にさせる…
というプロットです」

あ号「わしのとこまで…90話くらいあるかなあ…？」

第70話 パトレイバーの世界へ… 投稿日20110212

2001年8月8日

「マスター、アステロイドベルトに、
チューリップが到着したって〜」

「おっそうか」

朝一ハンガーにつくなり11号から報告がいった…
で、心配の…

「セレスはどうなん？」

「セレスにはBETAの拠点なしだっ〜」

アステロイドベルトにある衛星セレス。
直径1000km未満クラスの衛星だ。
それなりに大きいから命名はされている。

「ふう…まあ…一つ懸念はなくなったか…」

「で、これからは残骸集めはしなくっても鉄は精製可能だよ〜」

「ヘリウム3タンクだけに絞ればいいか…」

まああと5、6回分回収すれば精製できるからな……」

「だね…あ、レビルおじさんはどうする…
って25号からきてるけど…」

「映像は見せた後だよね？」

「うん」

「なら、少し話にいくか……」

レビル將軍の元を訪れた。

「はじめまして、レビル將軍」

「おぬしは、映像にでてた…」

「はい、若輩ながら、異世界軍の責任者をしている、渚カオル国連
軍大将です」

「地球連邦軍大将、ヨハン・イブラヒム・レビルだ…よろしくのう」
右手を差し出してくるレビル將軍。

「よろしくお願いします」
握手をする。

「で、レビル將軍、スカウトを受けていただければ、嬉しいのですが……」

「この、侵略生物から、人類を救う為にか」

「はい」

「まあ、よいが……一つ聞きたいのだが、
わしが死んだ後の世界はどうなったのだ？」

「あのタイミングで將軍が死なれたのが痛かったですね……
ジャミトフや、無能高官達の暴走で、
その後もスペースノイドとの関係が改善できなかったの……」

「ふむ……」

「その後軌轢による大きな戦いが、0083、0087から88、
0093ですね。」

後は別問題での戦いですので……」

「ジャブロー陥落された方が良かったのかのう?」

「ですが、將軍の手腕で、地球連邦軍は勝ったので……
できればこの地球でも手腕を発揮して下さい」

「うむ。してわしはどのような仕事を?」

「自分が不在時の指揮や、

主に宇宙における避難民の安全確保の為の、
防宙軍の指揮をお願いします。

まだヘリウム3の自己精製能力がないので、
規模が小さいのですが、9月になればの見込みです。
あと階級は中將でお願いします」

「ふむ……わかった」

「で、今のところなんですか……」

長くなるので略になります。

レビル將軍と別れ、増槽テストの結果を聞くと、
スピードが若干落ちるものの、5000kmまでの高速移動可能と
なった。

「カムチャツカは現地軍で対応可能なんだね？」

「の模様、テスト部隊もいるようだし」

「じゃあ、一応は問題ないか……じゃあとりあえず行ってくる」

「了解、マスター」

「”世界扉”」

「パトレイバーの世界へ」

このパトレイバーの世界は、汎用多足歩行型作業機械、レイバーは急速に発展、普及し、軍事・民用、問わずあらゆる分野で使用されるようになった…

特に首都圏では、95年の東京南沖大地震、及び、土地拡大を兼ねた、国家事業バビロンプロジェクトで一般的になってきた…
という世界である。

また民間人が操作するのに必要な法的手段も整っており、特種車両として扱われ、各車にはナンバープレート、操縦には多脚制御機の免許が必要…

運転免許に欄が増えるっうわけだった。

そんな訳でありたったカオルが見た世界は……

工事現場で、土管運んだり、シャベルで掘ったり、
オプションでシヨベルアームつけたり、

至るところでレイバーが作業していた…

まああと何故レイバーかというと…

民生用の生活にこれ程多目的にレイバーが、
食い込んでいる世界からの発想だった。

(ほほっ …… 多分バビロンプロジェクトの工事現場?)

カオルはナビをだそうとすると…

「ふうらああ、おめ、そんなところにいると危ないだっぺよ…!!
早くどきんしゃい」

(あ、やべ…見つかったか)

「あ、すんません、見学しようとして、迷っちゃって…」

「ほれ、出口はあつちだべ、さつさといな!!」

「へい」

(出た場所が悪かったなあ……)

てくてく歩きながらすこし反省…

(それに人が多いなあ……)

さすがに衆人監視の中いきなり飛んだり、消えたりできない。
すると…

「ちょっと僕、駄目じゃないはいっちゃん」
警備員のお姉さんが声かけてきた。

「あははは… すみません。海が見たくつてきたら、迷っちゃって…」

「どっから入ってきたの？ 立入禁止看板あつたでしょ？」

「ん、あつたかなあ… 見落としたみたいっす」

「ふん… ちょっと所持品だけ確認させてね？」

最近地球防衛軍、テロリスト達が本当うざいからさ」

「なんにも持ってないっすよ、」

「ま、一応ね…詰所に来てね…こっちよ」

「へーい」

逆らわずついてくと…

レイバーが横にたっている詰め所に…

「警備員さんもレイバー操縦できるの？」

「レイバー喧嘩の仲裁等にね…一々警察呼んで、被害だすよりまして判断らしいわ…僕は操縦資格もってるの？」

「運転免許もってないっすからね」

「え？未成年？」

「17っすよ」

「確かに資格とれないわねえ…さ、とりあえず所持品あったら、ここにおいてね」

「ないっすよ」

(全部虚数空間だし)

で、金属探知器とりだして、ボディチェックをやりはじめる。

ペタペタペタ

「あ、ふん…そんなとこ触っちゃ」

「ここから誤解をまねく声あげんじゃないの、ぼーや」

「ちえ…」

「うん。何ももってないわね…近所なの？お金も持たずに」

「そうつすね」

「ふん…じゃあいいわ、次入る時は見学申請してね」

「ういっす」

おとなしく詰め所をでると、ゲートからでた…

(とりあえず活動資金だな…)

近場のパチンコを探そうとしたが…

(ねえなあ…)

まさに陸の孤島だった…

「幻影”シャムシエル”

カオルは都内のターミナル駅を目指した。

カオルは駅そばのパチンコ店に入り、
床に転がっている玉を20玉程集めると、

CRスピンドール3の台に座る…

「イロウル」

cpu操作して…入賞させ、大当り。

その日は10万円換金した。

ビジネスホテルに泊まり…翌日

二日目

今日は真面目に民生用のレイバーを取得しようと考えていた…

農家にいき、豊作君、

消防署にいきレスキューレイバー、

パイロバスター

レスキュークラブマン、

警察にいき、イングラム、ロードモビル、

あと建設現場にいき、ブルドック、

レックス2500、

シードック…辺りを

アタッチメントの道路建設用のも忘れずに…

つてところかな？

(ん〜建設現場が先か…)

端末だして、衛星を打ち上げ…

でもって、

「レイバー、ロボットを使って道路舗装工事している現場は？」

A「1時の方向距離2.1kmナビしますか？」

「Y」

飛んでった…

作注 あの世界にあってもおかしくないレイバーかなと思いましたので、

オリをだしました。

カオルはすこし考えていた… アタッチメントかな？
と思ったら専用レイバーがあったらしい…

通常道路アスファルト設営は、

フィッシャー

プレート、

振動ローラー、

コンパインドローラー、

タイヤローラー等

多数の機械があり、

精々アタッチメントで、ローラーとプッシャーかな？

と思ったら…

斜め上にいっただらしい…

全部を兼ねるレイバー、

しかもレイキマン、スコップマンを兼用するロボットがいる。

（都合1人または2人でチームか…）

勿論取得した…

（さてと次の現場か…工事用なら、
バビロンプロジェクトの建設現場だな）

昨日注意された工事現場にむかった…

（より取り見取りだなあ…）

まさに建築現場では花形、

完全に今までの重機になり変わっている。

土管を運ぶレイバー、

高所の溶接作業をするレイバー、

土をならしているレイバー、

鉄骨を組み合わせているレイバー、

高所作業に鉄骨にひっかけ昇っているレイバー、

高所で鉄骨をうけとり溶接にはいろいろとするレイバー…

至るところでレイバーによる建設作業が行われている。

けどさすがに作業中は近寄って、ATフィールドでもでようなら大騒ぎになる…

からアタツチメントを先に取得しておくか…で、

レイバー置き場を見回る事にした…

杭打ちアーム、

シヨベルアーム、

ブレード（排土板）アーム、

ブレードアタツチメント、

リッパアーム、

散水アーム、

ボーリングアーム、

ローラーアーム、

牽引アーム、

ドリルアーム、

掘削ホイールアーム、

不整地運搬ようアタツチメント

ウォータージェットアタツチメント、

穴掘建柱アーム、

汚泥吸排アタツチメント、

深層混合処理アーム、 高圧噴射攪拌用地盤改良アーム、

薬液注入施工アーム、

ボーリングマシン、

ダウンザホールハンマアーム、

さく岩アーム

タンパアーム、

コンクリートポンプアーム、

アジテータユニット、
圧砕アーム、
コンクリート仕上げアーム兼カッタ、
アスファルトスプレーヤアーム、
ジョイントシーラアーム、
スリップフォームベーパーアタッチメント、
キュアリングアーム

等などありとあらゆる建築、トンネル、土木に使えるようなアーム、アタッチメントが置いてある。

レイバーはアタッチメントや手をかえれば大体共用に使える。というか、特殊化なのをのそけば共用にしないと、建築現場等成り立っていかないからだ…

取得しまくってるなか…

「レイバー同士の喧嘩だあ〜!!」

(お、面白そうだなあ)

野次馬気分で、見に行くとした…:

現場は、まだ殴りあいには発展してないのか、口喧嘩と仲裁に入ってるのだろう…

明らかに作業でないレイバーが仲裁に入ってる。

「止めてくれるな、警備員！」

「その通りだ、今日こそ決着をつけてやる!!」

「そう、頭に血をのぼらせないで、いいから説明しなさい」

「ほっといてくれ第三者には関係ないんだよ」

「プライベートな問題なんだよ」

「おう、口出ししないで貰おうか」

「すっこんでろー!」

「なら、頼むから、レイバーから降りて、生身でやってよ…
回りへ被害でたら百万単位すぐ飛ぶよ、自分で払える?」

「う」「あ…」

動きを止めはじめの作業レイバー

「その後ろ足元のパイプぶち抜いたらいくらだっけ?」

「……」

「生身ならぶち抜くや、被害であるような馬鹿できないよね？
…二人とも降りるまでちゃんとみるから」

「……………」

「ね？」

プシュー片方がカバー上げて降りる。
それを見たもう一方も…

(うむ……………お金だよな現実は……………)

興が覚めたのか、喧嘩してた当人同士は、駆け付けた監督からの説教を受けていた。
後始末に翻弄する警備員達。
レイバーを動かし邪魔にならない場所に移動等をしていた。

夜間作業切り替わる時間までしばらくまち…

その後、作業用や警備用のレイバーを取得しまくった。

……………

カオル報告

色々な建築作業系レイバー、
警備用レイバー

型番不明なレイバーも取得しました。

ナギ少尉「後書きは乗っ取ったああ〜って事で艦長〜かつこハートかつことじ」

艦長「かつこハートかつことじって、わざわざいつもんか？」

ナギ少尉「そんな事気にしない〜ね」

艦長「まあ良いが…作者はどうなってるんだ？」

ナギ少尉「縄でグルグル巻きにして、雪の中に捨てておきましたよ」

艦長「……何時間前？」

ナギ少尉「昨日の夜からです」

作者「なーぎー」

ナギ少尉「きゃあ このお化けめ」

博士「全く出張するなり問題起こさないでくれる？
わたしが縄とかなかったら、明日がなかったわよ」

艦長「博士…ありがとうございます」

ナギ少尉「あゝこんなおばさんと盛り上がっちゃ駄目」

作者「…先進めていい？」

艦長「作者さんどうぞ」

作者「まあ今回は、レビル將軍加入と、
パトレイバーの世界に…ですね」

艦長「軍事的には1番劣っているような世界ですが？」

作者「ですね。けどこんだけ生活に密着している世界なので、多様
性をもって来ようかな？」

艦長「なるほど…」

作者「まああとは他に民間に使われている…のだが、わからないのもあるんですけどね」

艦長「自分も知りませんからねえ」

作者「ところで後ろの二人…どうします?」

艦長「カオル君にあげましょうか?」

…
後ろでは衣服をちぎりながら、取っ組みあいの喧嘩に発展していた

第71話 レイバーの世界2話目 投稿日20110213

3日目

ビジネスホテルをでると、

米の台所、新潟、秋田に向かう。

農作業のレイバー取得目的でだ…

まあそこら辺だったらあるよなあゝの発想からだった…

稲刈り作業中の豊作君が見えた。

動きはそれ程素早くないので、取り付いて取得。

(アタッチメントだよな…:)で、農作業終了までまち、
倉庫に機体が入ったので家捜しした。

トラクターや、田植、防除、コンバイン、除草等のアタッチメント
があったのでコピーした。

山岳作業レイバーのピッケルくんが、レンタルやさん？
においてあったので、覗いてみた…

アタッチメントが、山岳作業に関わる、
林業、
トンネル設営、
高圧電線作業、
等おいてあったので取得：
都内へと戻る。

四日目

目の前をJAFだったか？ロードモバイルっぽいのが通過していったので、

「“幻影”シャムシエル」

で、直ちに追跡にはいる。

(JAF仕様か、なきやおかしいよなあ)
このロードモバイルつうレイバー、
普段は少し長い4輪の車両という状態から、
緊急時には4脚装輪の状態になり、
一般車両の渋滞も何のその、
事故現場に急行するレイバーだった。

警察用にとの情報だったが、それだけで済ますまい。
緊急時に必要：はごまんとある。現実日本では、警察以外でも、消
防、JR、東京ガスまあ、
道路交通法では、色々な所が緊急車両が認められている。

法律適用上でなくとも欲しい所は沢山ある。

機械警備対象物件から発報があり、
警察に電話する前にとりあえず現場確認する、
セコム等…

他にはJAF等渋滞の元になっている事故車への急行したい車両等
だ…

かなり政財界に食い込んだ篠原重工だ。
そうあってほしい…いや顧客を増やすのには最適だろう。

まあ、そんなわけで、渋滞なんのその、
事故渋滞をすいすいとかわすと、
車道真ん中でボンネットを開けた状態で停車している車両があり、
それによって渋滞が発生しているのが一目でわかった。

ロードモビルは車載クレーンを使い、傷つけないように車両を掴む
と、どっかに車両をつれていく。

勿論作業中に取得すると…
消防署に向かう。

消防署に着くと…
車両は出払ってた…

o r z

レイバーを探しに端末を起動させる。

「この付近のレイバーが出てる火災現場は？」

A 「検索中……西南西約10km地点、ナビしますか？」

「y」

カオルは火災現場へと飛び立った。

ポーン！！

現場は工場火災だった…

跳ね上がるドラム缶、

天高く80m程火柱があがる…

濛々と黒煙があがっている…

化成とかかかっている。

門の看板に危険物取扱や、産業廃棄物取扱、石油精製業等が見える。

ヒューグワッシャ

工場から打ち上げられたドラム缶が、付近の駐車場にとめてあった車の屋根に落下し、車のフロントガラスはバリバリに砕けちった…

付近では、住民の避難が行われ、大規模火災になっている。

消防の各レイバーは火元へかなり近寄って放水等してるが、

燃えやすいものが、まだ中にはたんとある…

ボン！！

また50m程火柱があがる…

そんな中、

「要救助者確保！！各員正面広場に放水強化！！」

各レイバーや、消防車もそれに反応して、正面広場にむけ放水を強化する…

ガツシガツシ

レスキューレイバーが救助者を手に隠しながら、出てきた。

レスキューレイバーは門を越えると付近に待機してた、
ロードモバイル救急タイプに要救助者を載せた。

勿論その間に救急タイプは取得済み。

救助者を載せたロードモバイルはサイレンを慣らしながら病院へと向

かう…

レスキューレイバーは、科学消防車よりホースを受け取ると、消化作業に参加しにいった…

消化作業は順調にすすみ、

大きな火柱もあがらなくなり、
生身の消防隊員も中に入り、残り火の消化、確認に入るようになった…

各レイバーは大半がキャリアに搭乗しはじめた為、
取得に回る。

レスキューレイバー、
パイロバスター、
レスキュークラブマン、
消防レイバー
をコピーした。

現場から離れ、首都高速の道路公団によってみると、
道路保守用のレイバーと、
アタッチメントがあったので取得しておいた。

五日目…

ホテルからでると、

水中用のレイバーを取得しようと、横須賀の米軍基地及び海保にむかった…

海保からはのりしお、及び運用艦、

米軍から、特務艦及び潜水レイバーを取得した…

最後に原点の98式AV 篠原重工製のイングラムを取得しようと、台場に向かう…

特車2課には、第1小隊の機体しかなかった…ので、AVS-98をコピーすると、建物の屋上にでて、検索を始めた…

「この現在地の建物からでたトレーラーの現在地は？」

「検索中…：…現在、北東方向に移動中、ナビしますか？」

「Y」

飛翔し追跡にはいった。

現場付近では、車両が踏み潰され、

住宅が倒壊、散々な被害が出ているのがわかる。

98式が丁度リフトアップされ、動きだした。

警察車両が相手のレイバーに潰されないよう、近寄りながら説得交渉は続けている…

「酔っ払い運転やめなさい」
や

「レイバーから降りなさい！」

等等

しかし、相手はガン無視を続け、
また一軒家を潰す…

「あたしの家があああ」

その家の住民だろう…へたりこんだおばさんがいる。

片方のイングラムは白、
(こつちが泉ノア機か…)

主人公機だ。

太田機が、酔っ払い運転の機体の注意をひくように、

「あーその酔っ払い運転の搭乗員、おとなしく降りろ!!」

しかし、酔っ払いレイバーはガン無視

「こら、そのレイバー、聞こえないのか？」

……無視

「じつらあ!!!!聞こえんのかといつとるだろうが!!!!!!」
外部スピーカーから大音量…

やっと酔っ払いレイバーの向きが変わる。

それをみた泉機は背後から近寄ろうとしている…

「その酔っ払い運転手、この太田様がじっくり相手してやるから
覚悟」

泉機が酔っ払いレイバーに背後から飛び掛かり、

ガシィ!!

片側を機体の手を潜りこませてロックする。

それと同時に太田機も機体に飛び掛かり、片側を同様にロック。

うまい具合に重量ありそうなレイバーの動きをとめる。

チュウウウンチュウウウン

酔っ払いレイバーからモーター音が聞こえるが、イングラムに押さえられ、動けない。

太田機が、指をさして指示を出している。

泉機はそれを見て、

人間の手であける乗降ハッチの回転レバー部分を、イングラムの人差し指、親指で器用につまむと、クルツと回転さす。

プシューと、頭にあるハッチがあくと、

中には酔っ払いが酒瓶を口にくわえたまま、レイバーを操縦している姿が見えた。

「よし、そこまでだ、降りろ酔っ払い」

太田機がクシャと左手でコントローラーだけを器用に潰す。

「はいはいはい、お酒のんで運転するもんじゃないんですよ!」

泉機が顔を近づけた。

「泉！！つまんでおろしたれ」

「わかった」

泉機、機体の右手のマニピュレーターで器用に、酔っ払いの両肩を
摘むと、

勿論酔っ払いは抵抗しているが、
席から浮かび上がらせ、

左手は落ちないように添えて、地上まで降ろす。

地上に近寄ってきた警察官に酔っ払いを引き渡した。

太田機は、その間に酔っ払いの回収にきたトレーラーに、
機体の向きを合わせて、クレーンのフックを背後から頭越しに前に
ひっかけていた…

「泉、手伝え」

「わかったあ」

二機で、レイバーの調整、荷台あげたトラックに合わせて、

「運転手さん〜いいですよ〜」

荷台が少しずつつ横になる。

荷台に無事に酔っ払いレイバーを載せた。

「そのレイバーの事、よろしく願いします」

器用にお辞儀をするイングラム。

「よし、撤収だ〜」

拡声器で、篠原だろうっ…声がかかる。

両機はスムーズに荷台からリフトアップしているハンガーの足台に片足をひっかけ、
機体を回転させるとのこりの足も足台におさまる。

「泉さん、倒します」

泉機右腕のサムズアップで答えると、腕をおさめた。
ウイイイ

倒しながら、固定用のフックがかかる。

完全に倒れると、機体前方のハッチが開き、泉巡査が出てきた。

「お疲れ様」

カオルは取り付き、機体のデータを取得、

その場を離れた。

カオルはしばらくいき人気がない公園で、世界扉を唱えた。

……

カオル報告

色々な民間のレイバーを取得しました

第71話 レイバーの世界2話目 投稿日20110213 (後書き)

作者「あん時は凄かったよなあ……」

カオル「どの時？」

作者「いやさ、この火災はモデルがあるんだよ…」

実際は重傷者2名で奇跡的にすんだ工場火災なんだけどね」

カオル「語り始めたなw」

作者「俺が徹夜して、次の日も休みだから、

地元のセブンイレブンに朝飯てがら買いに行ったらさ、
買物して店であら濛々と煙が上がってたんだよ」

作者「で朝6時前だろ？方角的に駅の火災か？ともおもったね…」

で119に電話して火災の通報入ってる？と聞いて、入ってますだ
つたから…」

まあ暇だし見物いっか…で自転車こいでいったんだよね」

作者「あとにしてみれば直線距離1・1kmの廃油等の産業廃棄物
等の再生化学の工場火災だったんだよね…」

廃油からシンナーを取り出す時に床にぶちまけて着火、

なつたとか…

近場にいくと凄まじさが…ドラム缶の中身が燃え、空高く火柱がボ
ンとともに上がり、付近には幹線道路もあって…だつたんだよ。

でまだ消防車が一台も来てない状態だつたから、
また119番に電話して、石油系ドラム缶らしいの中身が爆発し、
火柱が天高く上がってる旨を伝えてたんだよね」

カオル「ドラム缶はふつてきたの？」

作者「あ、それはなかったね…けどその工場の向かいが道路挟んで、
駐車場で、

朝6時の時点だつたから車とまつてたよ。

…ちなみに熱すぎて前にいけなかった…」

カオル「レイバーで救助は？」

作者「んゝあのなかにいたら死亡確実…そこは付け足した」

カオル「なんか画像とかとつた？」

作者「携帯が前の機種の方にあるはずなんだよね…

なので後程…」

とりあえず読売新聞さんからの転載

> i 1 8 2 0 0 | 1 9 0 9 <

もっと火柱が高いのあったんだよなあ…

動画はどつのせるんだらう???

第72話 パトレイバーから帰還 投稿日20110214

2001年8月12日深夜

「ただいま〜と」

「マスターお帰り〜」

「と、状況の変化は？」

「とりあえず情報室へ…」

「情報室」

「まだ戦端は開いてない状態だけど、ソ連軍は迎撃体制を整え、また国連軍のプロミネンス計画の部隊も参加して迎撃にあたるみたいよ」

「規模は？」

「師団規模強けど集中ではなく分散的にね」

「とりあえずは大丈夫なん？」

「ただ先月こっちの体制が整う前に一回侵攻があつて、その回復をソ連軍がちゃんとやってた…らだけどね」

「らつてどついつた事よ…」

「あの国って情報には隠して、本質は違つて往々にあるから…」

「あゝそうなんか…いやそうだったよな…
確か更迭がどうたらこうたらで、
俺の世界でもあつたけど、ここでものこつてるんだね…」

「だから、ソ連情報に関しては、流れている情報鵜呑みにできないから、

他国の対ソ連情報の方が真実味があるくらい…」

「……」

「そんなわけで映像から分析する位しか、
ソ連はわからないの」

「分析したん？」

「入手してないから不可」

「今回は、……リアルタイムで見て判断しかないか……
あとプロミネンス計画か……」

「そうだね。あ、プロミネンス計画説明いる？」

「よろしく」

「先進戦術機技術開発計画……
国連軍がアラスカにあるユーコン基地で進めている、
各国間の情報・技術交換を主目的とした国際共同計画で、
通称プロミネンス計画というもの。」

他の国からの新技術流入によるブレイクスルー、
設計思想の硬化防止、世界的な技術水準の向上などのメリットがあ
るんだけど、
水面下では情報流出・機密漏洩の危険性、
対BETA戦後を睨んだ参加国の政治的介入や、
利益獲得を優先させる企業同士の妨害工作などのデメリットも生じ
ているよ」

「なんかデメリットが……引つ張りあいというか……」

なにやっってるんだか」

「で帝国からも参加してて、XFJ計画だね。説明いる？」

「それもよろしく」

「XFJ計画……」

撃震の耐用年数が迫ってて、次期主力機の完成を待つ時間的余裕もない中、

日本単独で改修を実施した94式「不知火・壱型丙」も、満足できる成果が得られなかつたんだよ。

で、日本帝国軍がプロミネンス計画に参加することで、技術的な行き詰まりの解決を目指した計画の事。

米国のボーニング社を主にしたノウハウの吸収を計り、フェニックス構想と同様の手法で不知火の、

性能向上を図る機体改修計画をメインに進め、

XFJ-01a、不知火・貳型を開発しようとしている計画なんだよね」

画面上には不知火・貳型が表示されている……

「不知火の改修型か……確かに不知火は切り詰めて、

基本、現有技術だと、発展の余地ない設計だもんなあ……」

「まあマスターが魔改造した機体もあるけど、現地生産ができないのがね……」

「現地生産できる技術の発展か……」

「で、その機体達が、実戦検証目的で、

今ペトロパブロフスク・カムチャツキー基地にいるんだよね」

「なるほどね…まあ実験の邪魔しちゃわるいか……明日は待機状態で、BETA接触10分前から、即応体制でよろしく」

「イエス・マイロード」

「じゃあ、あとはないよな？…一眠りするわ」

2001年8月13日

昨日発令した待機状態になってる為、

B-01は訓練行わず、ハンガーに来ていた。

まあレビル將軍は来てないけど…

パトレイバー世界で取得したアタッチメント類を制作している。

レイバーは、適当な作業レイバーをバッテリー式にして色々作った。

「どう？使えそうなのある？」

「結構あるよね〜」

「カオルさんこれは？」

ドリルをさし、最近B・01に加入したミリアさんが聞いてきた。

「トンネル掘り用のアタッチメントかな？」

正直色々なものを取得しまくった為、
どれがどの用途につかうかわからない位な分量になっている。
「ふう…いい仕事した」

「検証だれがやるんだろ？」「これ武器になりそう〜」
「指がきれたああ」「モップ？」「農作？」

「ん〜…11号どうしよう？」

「マスター、僕に聞かれても…」

「だよな…まあいずれもレイバー用なので工事や、保守用のだし…まあすぐに使うそうなのが豊作君か…」

「結構でかいあれ？」

「ああ、あんだだけでかいから農業用コロニーで使えるだろ」
ふよふよよってく11号。

「つかえそう？…効率良くなるかな？多分」

「じゃあ、農業用コロニーには送っておいてくれ」

「了解…あ、マスター、いよいよ始まるよ」

「おう、そうか…」

情報室のモニターは、上空からの全体映像になっている。

艦船が爆雷投下している映像が見えている。

「まずは爆雷で減らすのか…」

「効果的といえば効果的だよね」

（鋼鉄の咆哮で使えそうな対潜武器はっと……）

「もう間もなく、上陸、した瞬間に支援砲撃するみたいだね」

画面上では上陸を指すところとするBETA群、
上陸ポイントにむけ微調整中の戦車、重砲陣地、向かっている爆撃
機が見える。

(そういえば、何故か光線級をあんまり出さないんだよね…)

「きたよ」

画面上では、砲弾の集中豪雨をうけた海岸線になっている。

沢山の火柱、土砂の柱がうめつくす。

爆撃機も進入してきて爆発の列を作った。

「クラスター爆弾か」

……しばらくすると…

「あ、やっぱり…」

「ん？」

「砲撃密度が薄いね…」

「となると？」

「戦車部隊に取り付かれるよ…」

(ん〜)

「戦術機が戦車の援護に入ったみたい…混戦状態になりつつあるね」
画面みると、支援砲撃が打てなくなっているのがわかる。

「でた方がいいか…… B - 01、出るぞ！！11号あと頼む」

「イエスマスター」

(今から1時間後か……)

滑り棒で、一気にハンガースペースまで降りると、

ビービービー

「緊急発進、緊急発進、 B - 01各員は搭乗、各個出撃せよ」

各パイロット達が魔ドムをつんだ、フライングアーマーに乗り込んでいるのが見えた。

カオルも飛翔し、魔グフに乗り込む。

合図を送ると、駆動音を出し、フライングアーマーは浮かび上がる。戦艦ハッチから浮かび上がり、ブスター点火、Gがかかり、一気にマツハを越え、3・0…3・1…3・2…3・3 トップを越えたところで…

「マスター、こちら情報室、カムチャツカ情勢優勢になり、救援の必要無し」

「何があった??こっちは房総半島回ったところだぞ」

「詳しくは、情報室で…」

「わかった…各機、転進、横浜基地に戻るぞ」

「了解」多数「え、空振り?」「もっとG味わいたい」

「誰だ?スピード狂は…生身でロケットバギー乗ってみるか?」

「肌が痛そう」

「まあでたついでだ、慣らしたい者は慣らせ、とりあえず戻るぞ」

各機はスピードを落とし転進、5機程、転進後スピードをあげ小笠原方面に向かった。

1時間後：ハンガーに機体を入れ、情報室に入る。

「何があつた？」

「うん。これね」

映像は、一機の機体にズームされる。

（不知火？）

「不知火弍型なんだけど、この持っている武器をみてね」

重たそうな銃から、レーザーらしきものが見える。

「レーザー？」

「いや、違うよスローモーションにするね」

弾が光ってプラズマ化しているのが見えた。

「レールガンか」

「ご明答」

「けどレーザーに見えたっつうことは……」

「映像からは、毎分800発の弾を射出してるね」

「弾の口径は？」

「120mm弾」

「給弾ベルトで弾を補給か…背後に背負ったのが弾槽だね」

映像は全体に引き戻されると、レールガンによって肉片、体液の霧

になる。
水平方向に銃身を向け、ほんの十数秒で全弾を発射し終わったのだらう。
その十数秒の出来事で、海岸線をつめつくしてたBETAの8割は無力化されていた。

この後は転進した戦術機や、戦車、航空機等で、残的掃討されていた……

残ったBETAも少なからずの被害を受けていたのだ……

「このレールガン射出後に、マスターに通信したんだよ」

「しかし、レールガン実用化されてたとはなあ……」

「いや実用には無理みたい」

「ん？」

「実用化の条件わかる？」

「前線で、整備でき、長時間使いこなせるだけ？」

「その条件をみたしてなさそうなんだよね」

もっていたレールガンが映し出される。

「僕の入手した情報だと、一射毎に完全分解整備と、数多くの損耗部品の交換が必要なんだよ……」

「それって使えないじゃん……」

「それに機関部、構造材にG元素を使っているの」

「数多く揃えられないね……」

ん？あんなオーバーキルの必要ないんじゃない？単発とかさ射出速度を抑えるとかさ」

「バッテリーや機関部が持たないらしいよ長時間運用に……だから、一発で薙ぎ払う使い捨てる運用しかとれないの」

「問題ありありなんだな……」

（鋼鉄の咆哮のに、あの射出速度求めると……やっぱり冷却問題が出てくるな、

冷却剤を強制ぶち込みか……あと弾装ね……

正直CIWSの一銃身の射出速度だすって…ねえ
しかも120mm弾か…)

「うん、問題ありのオーバーキルだね」

「同じく…そう思う、けど今回の戦場ではうまく作用した…ね。
で、なんだけど…」

画面がまたカムチャツカ半島を映す。

「この残っているのがまたきそうなんだよね」

「規模は？」

「今回同様師団規模強…ただやはり拡散するみたい」

「ふむ…いつ頃？」

「18から19辺り」

「………わかった…そんなころにはいるわ…あとはないよな？」

「うん」

「じゃあお休み」

……

カオル報告

からぶった

作者「いよいよレールガン登場すなあ……」

カオル「だねえ……でTE編？」

作者「お前、基本横浜から離れたくないんだろ？」

カオル「勿論！！」

作者「だから、あんまり絡まないよな……」

唯衣姫は、ユウヤにとられるかな？」

カオル「いいんじゃないの？正直腰が持たないよ……何人もだと……」

作者「ヒルダさんだろ、ヒルダさんだろ、ヒルダさんだろ」

カオル「……なぜに……ビダンさん??？」

作者「だって彼女、サッキュバス因子打ち込んだし」

カオル「はあ??? ちょ作者なにしてたよ!!!」

作者「なので本編で犠牲になってくれい」

カオル「……マジに打ち込んだの？」

作者「……次回、カオルチェリー喪失、お楽しみに」

カオル「マジか?!?!?」

第73話 また、ガンダムの世界へ…ソロモン戦 投稿日 20120215

2001年8月14日

翌日朝:

(18から、19にかけてまたくる…か…)

「とりあえず燃料あと3回は取得できそうだから、製造命令出しちゃうよ。

サラミス改はどう?」

「1ドックしか使っていないから、昨日2隻目があがったところ」

「:じゃあ、もう1ドック使って製造ペース上げてくれ。更に10隻追加で」

「100頂きます」

「で、陸戦強襲型ガンタンク2個連隊、ホバートラック18両と、シャトル200機だね」

「416頂きます」

「あとは下駄も必要だから200で」

「200頂きます」

「残量どのくらい？」

「571基分」

「ヘリウム3使うのはそんなものか…」「あ、マスター、帝国さんから、撃震のパーツくれってきてるよ」

「じゃあ、それも製造して送りだそう。

旧装甲は作り変えるから回収って言付けてね」

第62話に長崎戦後出したの返答がやつときた。

（あとは…ガンパレ製煙幕のAL弾頭用の開発してなかったなあ…
一応現地生産含めて考えるか…）

ただガンパレの煙幕は吹き出すタイプだけどね…

AL弾頭は迎撃された時点で展開だけど大丈夫なん？

（時限式に切り替えればなんとかなるんじゃない？弾頭を一つ一つ調整する必要あるけど…ビダンさんに相談かな？

と、あとは…サポートAIを各機に入れるか…
でもって、民間用のか)

「なあ11号、避難民今どのくらいなんだ？」

「約60万人程」

「なんか生産できる余力ある？」

「まだ無理みたい…けど生産したいって」

「農業と、レイバーをコロニーの生産物にしたらどうかな？」

「……うん頂き」

「こっちで生産はあくまでもデモストレーション、広報用や必要な
時のみで」

「レイバー技術なら、現地生産可能だと思うよAV系は難しいかも
だけど」

「手のとじらる?」

「うん」

「まあ、頑張ってもらいますか…フリーで情報提供しておいてね」

「了解…地球への納品はどうするの?」

「ザンジバルを強化して、貨物船化に仕立あげれば良いかもね。マ
スドライバー使えばブースター要らないだろ…で、チューリップ経
由で、鉄資源提供かな」

「了解…チューリップを宇宙港にしたてるの?」

「ついでそうだな、サラミス等の整備用にもね」

「了解」

「あとコロニーも新規そろそろ作るか?新規だと何ヶ月かかる?」

「3ヶ月」

「なら丁度良いか？」

「6ヶ月は空き家のままだけど？」

「調整もかねてな…あ、別口で核パルス付きのも作りはじめてくれ…
…大気は必要ないよ」

「??？了解」

とりあえず、サポートAIをB-01の有人各機に入れた。
A-01は帰ってきたあとでいいか…

あと帝国さんに道路の整備を打診…

ビダンさんに相談しに向かった。

「ジオフロントヒルダさん執務室」

コンコン「ヒルダさん」

反応無し…

(あれいなのかな?)

プシュー

ロックはかからず扉が開く…

中を確認しようと部屋に入った途端…アームで捕まれましたが…

「あの〜ビダンさん?」

「うふふ、若い男性エキス…」

すみの方から…迫ってくるヒルダさん…

「エキスって……」

ガチガチ

やっぱり動かしてもとれない…

「俺一人と若い人4人、どっちをとりますか?」

ワキワキしてた手がとまったな……

「そんなに欲しいなら、連れて来ますよ…見逃してくれるなら…」

「ま、まあ…ちゆれてくる人ちだいかしら…」

「ご期待下さい…とりあえずアーム外して貰えます?」

プシュー

「で、お仕事の話なのですが、よろしいです?」

「え、ええいいわ…約束よ」

「はい…実はこれなんです…」

と、ガンパレ製の煙幕手榴弾現物と、データーの入ったMOを机上に出す。

「噴射機？」

「煙幕手榴弾ですね。これを弾頭にして、ミサイルや砲弾用に時限式にできないかな？」

「ん〜そうね…できない事もないわね」

「あ、じゃあできるだけ早めにお問い合わせできます？」

「わかったわ」

「じゃあとりあえずは…」

「約束破ったら問答無用に食べちゃうからね」

「……はい。早めに…」

ヒルダさんの執務室から退出する。

とりあえず3日間ほどつうことで再びガンダムの世界へ…

〃 〃 ガンダムの世界 〃 〃

宇宙歴0079 12月24日

ソロモンにでて「幻影」世界扉を消す。

脱出口ケットが見える…

「ゼナはいるか？」

「あなた、いけないのですか？」

丁度、永遠の別れの場面にでたようだ…

「馬鹿を言うな、ソロモンは落ちはせて」

(落ちるんだよね…)

「では」

「いや、脱出して姉上のグラナダへでも行ってくれ」

「いけないのですか？」

「大丈夫、案ずるな。ミネバを頼む。強い子に育ててくれ、ゼナ」
キスをするドズル…

(強い子に育ちましたよ…)

「…あなた」

「私は軍人だ。ザビ家の伝統を創る軍人だ。
死にはせん。行け、ゼナ、ミネバと共に」

「モビルスーツ隊の編成を急げ、敵は上陸しつつある。
決戦用リック・ドム、ザク、出動用意。ガトル戦闘隊、ミサイルの
補給のすんだものから発進させい。
ビッグザムの用意はどうか？決戦はこれからである」
ドズル格納庫を進みながら叫んでいた。

「ほう、あれがビッグザムか」(でっかいよなあ……)
閣下についていき、ビッグザムに取り付く。

そしてコクピット内…

「閣下!!!お待ちしてました!!!」

「マイヤー、サブローよろしく頼むぞ」

「「はっ！」」

「起動状況は？」

「主機ともにアイドリング状態です。いつでも出れます」

「よおうし、ビッグザム、始動せよ!!」

ウィィィィブーン

ドーン

「閣下、連邦のMS前方より複数接近です」

「主砲発射」

ジムボールが消える…

「前方に突出してくる敵MS群」

「来るぞ、木っ端ども。このビッグザムがそこらのモビルアーマーや、モビルスーツと違うところを見せてやれ」

「は」

メガ粒子砲で消滅するジム、ボール達…

「たわいもないな」

コクピット画面には、圧倒的な力にのけ反っているジムが映っている。

「このビグザム、無双ではないか？」

「ジオンの結集ですから」

メガ粒子砲うけて溶けるジム…

「兄貴の言った言葉、ハツタリではなさそうだな…確かに師団に相当するな…」

『こちら司令室です、閣下は？』
ラコックより映像通信が入った。

「なんだ？」

『閣下はどちらにっ？』

「ビッグザムで打って出る。モビルスーツにこつも入り込まれたら」

『し、しかし残存艦隊も発進しつつあります、閣下みずから出ることは』

「甘いな、すべての戦力を叩き込まねばならんところまで来ておる」

遠くにいった者を思い浮かべたのだろう…

「ゼナ、ミネバ、無事に逃げおおせたか？」

次々にジム、ボール達にメガ粒子砲を与えてはいる…が…

要塞隔壁等も同時にとけだしているしまつだった……

「うーむ、こいつが強力なのはいいが、このままでは基地の損害も馬鹿にはならん。司令室」

『は、閣下』

「艦艇は何隻残っている？」

『敵の新兵器とモビルスーツの為に四分の三は破壊、または稼働不能であります』

「よし、敵の主力艦隊の中央を突破させる」

』
『は

「私も生き残りのリック・ドムとザクを率いてソロモンを出る」

』は、閣下も御武運を』

「おう、貴様もな」

「外殻部に出る箇所まで前進せい」

「は！」

ズシンズシン

巨体なビグザムは前進す。

途中いたジム達を蒸発させながら…

「よし、ブースター吹かせい」

「は！！！」

ブオオオー

ジムがしたからビームを撃つが、
ブースターに巻き込まれ爆散する。

浮かび上がる時にガンキャノンが頭上で滑らせた…

第二射目のソーラーレイがきた…

「敵新兵器の二射目です!!!」

「むっ…」

「残存艦艇の半数が壊滅です!!!」

「あの新兵器をなんとかしないといかんな…」

「残った艦は敵主力に特攻を掛けます」

「ようし」

「ビッグザムの目標は？」

「後方指揮艦を狙う。雑魚には目もくれるな」

「は!!!最大戦速!!!」

ビッグザムの巨体が敵主力部隊にむけ、体を進める…

「サラミスです」

「構わん。前部ビーム撃て」

サラミスからの主砲は、iフィールドであらぬ方向へ弾きとばした…
メガ粒子砲一発で溶解するサラミス…

「ビッグザムは主力艦隊に特攻する。その前に各自脱出命令の発光信号を上げる」

「は。し、しかし」

「戦力をズタズタにされすぎた。遺憾ながらソロモンを放棄する」

操縦席に座っている二名のジオン兵は顔を見あわせた…

「操縦系を切り替え私の所へまわせ。お前らも各個に脱出しろ」

「し、しかし閣下」

「無駄死にはするな。ドムとザクがいる。
それに引いてもらえば戦場から抜けられるぞ」

「は、はい」

「よし、発光信号上げい。ビッグザムは私が預かる」

「閣下……」
「ご無事を」

「おう、いけい！」

「閣下の指揮の元、機体を操縦できた事を、一族の語りにします」

「貴様も無事にな」

「はっ！」

敬礼後退出する二名……

「フッフ、こつも簡単にソロモンが落ちるとはな」

画面は、MSにひかれ、去っていくパイロット達が見える。

「さて……逝くか……」

コントロールスロットを全速力に入れる。

「わははは、なめるなよ。このビッグザムは長距離ビームなどごとくと

いうことはない。

私の道連れに一人でも多く地獄に引きずり込んでやるわ」

(さてそろそろか……)

コクピットから機体の外にでると、「加速」加速」「二乗かけ
ティアンムの乗艦を指す。

あれか？取り付いてみた…

「巨大モビルスーツ、強力な磁界を発生させています」

「ミサイルだ、ミサイルで迎撃だ」

(ビンゴ)

ミサイルがマゼランから打ち出される。

加速をかけている間に艦内の人員を調査する。

6名か…

どんどん迫ってくるビッグザム、

砲門がこちらを向き、光った瞬間、6名の女性連邦兵を引き込む。
そして…

「うわあーっ」

ティアンム将軍を引き込み、急速離脱した。

(手短な…無事なのビッグザムしかねえか？)

ビッグザムに取り付き、ハッチ内で一回医療カプセルをだし、

瀕死となっているティアンム将軍をいれ、カプセルを作動させる。

カプセルを虚数空間に引き込んだ。

ビッグザムの外にでてみると、

レッグアームがGアーマーを掴んでいた…

Gアーマーのガンダム部分からビームライフルが打ち出される。
ビッグザムの足の根本に亀裂が入り、爆発…
iフィールド発生装置が損傷した模様だ…

圧迫されるコクピット部分…

そして…

バキィ

潰され宇宙にほつり出されるスレッガー中尉…

ガンダムが直接ビームライフルをブースター部に打ち込む。

その間に、空間に医療カプセルをだし、

スレッガー中尉を回収…

(助かるのかな？この状態で)

とりあえず作動させ、虚数空間に急いで引き込む。

ガンダムは正面からビームサーベルで切り付け…

そしてビームサーベルを突き立てる。

もう一降り…

(ビッグザムもう駄目だな)

小爆発が起こっている。

ドズルがハッチからライフルを構えはい出てきた…

「やられはせんで、やられはせんで、貴様ごときに。やられはせん」

「ジオンの栄光、この俺のプライド、やらせはせん、やらせはせん、やらせはせんぞーっ」

大爆発がおきる。ドズルを引き込み急速離脱。

ビグザムが落ちると…戦場は、

光を発する事はなくなつた…

手短な艦の内部に入り、

「世界扉」

一度現実世界へと戻る。

…

カオル報告

ビグザム

大物人物救助

作者「とうとう、ザビ家か…」

ドズル閣下「ぐわっはっはっ気にするな!!」

作者「あ、閣下…早速後書き登場ですね」

ドズル「まあな、このわしがきたからには、連邦なんぞ敵ではないぞ、

ビッグザムを量産せい!!地球進行作戦再びじゃあ!」

プス

「う、ぐ……ZZZZ」

ナギ少尉「あんたうるさい…かつこおりかつことじ」

作者「な……ナギ少尉??」

ナギ少尉「この人のうるささで、

艦長が興さめたで逃げちゃったのよ…だから、あんたも」

プス

作者「ZZZZZ」

ナギ少尉「な、わけで次回、ナギ少尉と艦長のラブラブ旅行お楽しみに〜」

作者が文字を書いている…

そんなわけありません…次回は008……

までしかみえない。

第74話 0080編 投稿日20110216

二日目

宇宙歴0079 12月15日朝

世界扉を消すと幻影をかけ、リボ―内を飛行し探し出す……

(学校そばの森林公園って……あれか?)

森林公園付近に差し掛かると……

(あつた)

行動不能になっているザク改が見えた。

コロニーミラーの外では戦闘のきらめきが見える。

(たしかアルがもう中にいるんだよな……)

しばらくすると……

パシュー

アルフレッド・イズルハがでてきた。

タタタタ

「寝ちゃったよ」

母さんに知れるとやばいなー」

シヤヤヤと手摺りをすべり

タタタタ

プアプアーきいいギギギギギギ

「うわああ、びっくりしたー…」

「バカヤローしにてえのかこのガキ!」

トレーラーの運転席からバーニイが叫び声をあげた。

「あっ」

「うっ」

急いでバーニイは姿勢をなおし、発進させる…

ブロロロ

「やば…あのガキだ」

『バーニイ、何やってんだ注意しなきゃ駄目だろ。

子供ひいて、警察の厄介になるつもりか?』

無線スピーカーから声が流れた。隊長の声だ。

「すみません。おやっさん…しかし、いきなり飛び出してきて…」
本来なら隊長と呼ぶべきだが、民間レンタルトレーラーの無線だ。
傍受されて当たり前の前提で話している。

なので隊長をおやっさんと呼ぶようにとの話だった。

『なあバーニイ、あの餓鬼知り合いなのか？しばらく追ってきたみたいだが…』

最後尾のガルシアの声だ。

「あ、まあ……とりあえず後程」

『事故起こすなよ、安全運転でいけ、法定速度はまもれ。大事な荷物だからな』

カチャリ…無線マイクを置くと…

「はあ…どう説明するかな……けど、本当、ひかなくてよかったよ……」

たしかアルフレッド…イズルハ…だったよな…」

トレーラーの無線機等はどう発達しても、プレストーク式の一方通行はなおらないらしい…

第一…話途中で別の話が紛れこんだら、訳わからなくなるし、同時複数通話程、うざいものはない…

トレーラーは街中をすすみ、工場が見えてきた。

『ここだ、トレーラーとめて先頭車両から荷降ろしをする。誘導に
皆きてくれ』

カチャリ、バン

バーニイはきくと、キーを抜き、外にでて、先頭車両にかけよる。他のサイクロプス隊の面々も…

ガガガガピーピーピー「オーライ、オーライ」

工場のシャッターがあくと、トレーラーがバックで工場内に入り始める。

(ここね…)

カオルは離脱し、手近なビルの屋上にでると、端末に記録し…

「世界扉」

世界扉を潜る…

宇宙歴0079 12月16日夕刻…

世界扉を潜り抜け扉を消すと…

勿論別世界経由出ないと、時系列移動もできない訳だが…

カオルは工場内に侵入をする。

ケンプファーを取得するためだ…

中では、

コンテナ毎に、丁度割り振ったらしい…扉が閉められていた

勿論回収しまくり、…

「世界扉」

カオルは一回現実世界へと離脱する。

精神力回復の為、そうそうリラックスインの部屋のベットにバフィン

と寝込み始めた。

三日目

チエックアウトの前に、
スレッガー中尉のカプセルステータス確認の為にだすと…

(お)

あんなにぶらぶらだった腕が修復し、回復している。
チエックすると、順調に回復中となっている。

カプセルをしまつと、チエックアウトし、路地裏で「世界扉」

「ガンダムの世界」

宇宙歴0079 12月19日夜

幻影をかけ、工場にいくと、面々が、

「いくぞ!!」

「了解!!」*3

で丁度出ていくとこだった…

「隊長!! 気をつけて」

「ミーシャ、酒は程々にな」

隊長達はまずは作業服の状態でバンにのる。

ミラーそばのところに路駐すると、荷物を背負い、
堤防を降りはじめた。

コロニー公社の整備用トンネル前につき、BOXをつけ
カチピピピピ ピーガコン

扉があくと素早く中に入り、…

「よし、着替えるぞ」
もってきた荷物から、連邦軍服を出すと手早く着替えだす。
着てた作業服はバックにひとまとめすると、
脇に隠した。

前にすすむとオレンジ色の扉が見える…

「へっへっへ」

バーナーを取り出すと、ジュユユ

「警戒」

隊長とバーニイは、銃をとりだし、警戒体勢に入る。

ガコン バタン

扉の内側が焼き切れ、少し大きめの音をたて、外れ、床に落ちる。

ハアハアハアハア

バーニイが緊張のあまり銃を構えたまま固まっている。

隊長は軽く肩を叩き、

「いくぞ」

中に歩みを進める。

カツカツカツ

「お疲れ」

「ああ、お疲れ」

カツカツカツ

「バーニイもつと自然体にいけ…」

「は、はい」

「ここだな…扉前に歩哨なし…ガルシア、内部に二名だ…うまくやれ」

ブシュー

ガルシアが中に入っていった…

カツカツカツ「隊長」

「廊下で騒ぎ起こすのはまだ早い…うまくきりかえせ」

「了解」

「あれ？お疲れ、中の巡回だが…」

「中ですか？、見回りましたよ、異常なしです」

「ああ、そうかい…おたくら新入りかい？」

「ああ、1週間前についたばかりで」

「あんたは？」

「俺も着任したばかりだ」

「おたく訛りあるけどどここの出身だ？
オーストラリア辺りの出か？」

「そう、シドニー生まれのシドニー育ちなんだ」

「シドニーねいいところかい？」

「最高だね、今頃街は雪で真っ白だろうな」

「いいな…今度いつてみるとするよ…」
カツカツカツ

「ふう…」
コンコンココン
プシュー

隊長が扉を叩くと中からガルシアがでてきた。
頷くと目で合図し、歩みを進める。

カツカツカツ

見えた：

内部には歩哨が数名、アレックスの周囲についている。カオルはとっと同化し、機体情報を抜き取る。

ガルシアは左の方へ別れてむかっていった。

……たたた

「おいシドニー生まれ！！」
銃を構えられている。

「クッ」

「オーストラリアは今夏だぞ！！」

「なんだ？どうした？」

「不審者だ！！」
カチャカチャカチャ

「銃を床に置き両手を後頭部へつける」

「聞こえないのか！！もう一度いっぞ、銃を床に置き、両手を後頭部につける！！」

「バーニイ大人しく従え……」

「わかりました」

ゆっくりと肩に引っ掛けていた銃を床に置き、腰のピストルもホルスターから取り出し、床に置く。隊長も同様に武器をおいてる。

「他に武器になるようなのないな？」

「ああ」「ええ」

「よし、そのまま後ろに下がれ」

一歩、二歩、三歩、四歩、

兵士は床に追いてある銃を後ろに蹴飛ばし……

「そのままゆっくり後ろを振り向け……」

隊長とバーニイはゆっくり後ろを向く。

「よし、そのまま動くなよ……」

兵士に緊張の緩みが見えた。

武装している不審者との対峙は、ここまでが1番危険だからだ……

フイーイフイーイフイーイ

「おい、この警報はなんだ？」

「ジオンのMSがコロニー内部に侵入したらしい」

「ちっ…さっさとチェックすませろ」

二人が銃を手放し、ボディチェックに入る。

「ジオンの銃だぜ見ろよ」

コンコン

隊長がつま先で床を叩くと…

ピス「うわ」ピス「うわ」バシ「うわああ」バシ「ぐおお」ピスピ
スピス「うわあ」

ガルシアからの銃で、頭射殺3名、手刀や、顔面裏拳で殴られ気絶
が二名でた…

隊長武器ボックスに駆け寄り…

「バーニイ！！」

シヨットガンをほおりなげ…

バーン「ぐわああ」

「あああ…クソー」

カチバン！「うわ」

シヨットガンを放ち、連邦兵を射殺と同時に下がらせる

ガガガガガガ
カカカカカカ

遮蔽物へ隊長ひきつずっていくバーニィ…

ガガガ「うわあくわ」ガガガガガガ

階段からガルシアが両手うちで銃撃している。

あ、喰らっても両手うちつづけて…

管制室で、ロッキングアームを外し、

階段銃を乱射しながら、陣地と化した、制御台の中に飛び込んでくるガルシア。

「隊長の様子は？」

「出血が酷くて、殆ど意識がありません」

バンダナしめなおし…爆弾もって

「バーニィもう奪取は不可能だ。

お前は、隊長連れてこっから脱出しろ。

俺はうっう…

あいつを爆破する。

辿り着くまで援護を頼むぞ」

ガルシア胸を討たれ…

「うっ」

ガルシア…手にもつてた爆弾の手動スイッチを押し

ドカーン

あたり一面黒煙が吹き荒れる。

「中尉まだ危険です!!」

クリスが、コクピットへのリフトへかけより、リフトを上昇させている。

ハッチを手動解放し、乗り込んだ。

その間にバーニイは隊長を肩に担ぎ……離脱……

コクピットハッチが閉まると同時に

ドカーンばらばらウイイイン

格納庫の屋根の上のつたケンプファーのバズーカが、屋根をぶちぬいた。

シヨットガンを構えなおすと…

シャアアアガン

アレックスが、バーニアふかして、

シャッターを頭からぶち抜き脱出した。

(うっし、ぬけられるか…)

「加速」戦闘の最中、抜けだし…
”世界扉”」

宇宙歴0079 12月25日

別世界経由でリボアの大地に降り立つと、

宇宙空間にでて、衛星を打ち上げ…いや置くか正確だね…

そのそばで端末を起動させる…

宇宙空間をさ迷っているジオン兵の死体を検索する為だった…

(おっし、ビンゴ)

ジオン兵士の死体を一体回収できたので、
リボアに戻る途中、衛星を回収し、コロニー内にもどった。

そして…1400頃

シィィィ

コロニーミラーを進むザク改を発見すると…
軟着陸し、うまく取り付く。

右方向からガンダムが見えてきた

「来たな」

バラバラ

アレックスの右腕ガトリングガンが火を放つが…

うまくかわし、

「まだその距離なら……」

実際に向かってこない、横移動の機体に当てるのは難しい……

橋があるのをブースターふかしジャンプしてかわす。

バルカンがやみ……

「どうした、追ってこないのか」

後方カメラ画面を気にしてバーニイがつぶやく……

後方カメラでアレックスも追跡にはいるのが見えた。

「よいしい子だ」

シヤヤブアー

橋のたもとで滑走から、ブースターをふかし、森林地帯へと、着地する。

ガシガシガシ

「しっ、とりあえずはついてきてるな……」

煙幕の中に入った……

ガシガシガシ歩みをすすめる。

ビーロックオン警告がなるとともに、
ガン

機体をしゃがみさせ……敵ガトリングガンをかかわす。

ロックオン警告はなくなり……

ヒートホークを構え、熱を持たせる。

「あと、すこし、あと、すこし……」

カチ　カチ
バルーンに釣られ、ハルーンを撃っているアレックスがちらっと見える。

「今だ!!」

滑走しヒートホークを切り付けようとアレックスの右半身をめがけて…

アレックスの右腕ガトリングガンがこちらに銃口をむけ…
バラバラビシビシ「うっは…」

何発か機体に命中し、コクピットの左上部分を一発突き抜けて、バーニーは流血するが、
ガキイーン

アレックスの右腕カドリングガンを切り付け、破壊、無力化に成功する。

ガシ、ブンキイーン
構え直してきりつけ…
胴体部だが浅いかった。

全力でザクが切り付けた為、体勢をくずしてしまった。

「くう」

必殺の一撃だったのだろう…

そして、ザクはふりかぶり

ガキイイイン「ウグ」

ガンダムのビームサーベルと競り合い、弾き返され…

「なる！」

フアアア…ガイン！！ズサー

ブースターをふかし、アレックスにタツクルをかまし、
両機とも斜面を滑走する。

そして木にしかけてあったワイヤーをはずし…
ドカーン

グレネードが炸裂する。

ガイン

大きなきにとまり、

先にガンダムがバーニアふかし体勢たてなおそうとするが、

ブウンブワズズズカズカ

ヒートサーベルを切り付けられそうになり、ブースターをふかして
かわすが、

斜面の為バランスくずし、後ろに体勢くずれたアレックス。
それを歩いて追うザク

画面には、体勢をたてなおしたアレックスが見えた。

「クハアハアハア」

ビィィィ…

ヒートホークの熱を溜め込んで最高出力になっていく…

ガシイ

ヒートホークを強く握り直すザク改。

「クウ！！」

ウアアアアン

おおきくふりかぶり…ザク改ヒートサーベルで切り付けるが…アレックスのビームサーベルが…コクピットを狙い、当たる瞬間、

カオルは死体と差し替え急速離脱…

「バーニィー！！」

ビシユードカン！ドカーン！

ビームサーベルはコクピットを貫き、背後の燃料推進材タンクを貫いたため、爆発を起こし、

その爆発でアレックスも吹っ飛ばされる…

バチバチバチ

あたりには爆発したザク改の破片から火がでている。

カオルはその場をはなれると、

バーニィをだした。

「う…」

「アルミサエル」

睡眠状態にすると、医療カプセルをだし、中にいれ、カプセルを自動解除の設定にし、シエルターへと引き込む。

これで頭の治療が終わると自動に映像が流れる事となる。

「 ”世界扉” 」

カオルは扉を潜る

四日目

宇宙歴0079 8月18日

カオルは世界扉を消し、幻影をかけると、定番化となった燃料回収にいこうとしてた。

(今回は、女性パイロット達か…)

比較的メディアは女性パイロットが多い…

情報の航路で張っていると、見えたので取り付く。

(ちてと…どうかな？)

「 ねえお姉様、ジャブローに無事ついたらまた、あれして下さいね 」

「 ああ、可愛いミリア、楽しもうな 」

(……ゆ、百合??…救助するぞ)

「加速”加速”」

カオルはその時をまつ…

「キヤアア、お姉様ー」

「くう……駄目か…ミリア…」

「お姉様…」

諦めた二人はシートから乗り出すと、口づけを急いでしめつけ…

「あーはいはい、続きはあとでね」

引き込みました。

燃料タンクも忘れずに、そのまま離脱し、地上に…

ミデアは爆散してた…

(しっかし、ジェット燃料で本当爆散しやすいのになあ…
けど百合か…初遭遇だけど大丈夫かな?)

「世界扉」

カオルは世界扉で潜った

……

カオル報告

ケンプファー

フルーアーマーアレックス

燃料タンク

バーニイ

百合学園パイロット2名

第74話 0080編 投稿日20110216（後書き）

作者「あゝ酷い目にあつた…」

カオル「作者、お疲れ」

作者「おう、カオル…バーニイか…クリスと永遠のわかれか…
ガルシアは無理だったな」

カオル「まあね…ガルシアは、あの状態だとな…
後の他の面々は死体回収されたり、検査されたりで…無理だったし
…」

作者「ミーシャは？あれだったら、差し替え技で助けられたかもよ。

カオル「あ、差し替えれば…だったか…くう惜しい事した。
でも、バーニイは幸せになってほしいし、
これから色々だね…」

作者「…ふふふ…おぬしもわるのよう…」

カオル「代官様こそ……」

さて、大体想像つくとおもいますが……あれです。

次回お楽しみに

第75話 頑張れバーニイ 投稿日20110217(前書き)

題名通り…あの人とあの人が…! ! になります…

カオルあくどい

第75話 頑張れバーニイ 投稿日20110217

トータルイクスプリスに關しまして、
自分は小説版しかおさえてませんので、
5巻からの9月辺りにつきましては、時系列が正確にわかりません。
また独自展開になる事をお詫びします。
というか、一年以上刊行に間隔あくって…orz
ラトロワタン…

2001年8月17日夜
世界扉から帰ってくる…

「ただいまつと…状況は？」

「状況は19日に確定、上陸地点は拡散して、旅団規模になつてる
ね」

「ふむ…あのレールガンは出れないんだよな？」

「うん…今回は積極的に実験部隊、
プロミネンス計画機が主体に戦闘するって」

「となると…一応明後日待機体制にして見学しておくか
とりあえず寝る」

「おやすみいマスター」

2001年8月18日

(さて、勢いでドズル閣下を拉致ったけど……)

「あ、レビルさん」

「カオル殿、おはよう」

「おはようございます……丁度言っておきたいんですが、ドズル・ザビ知ってますよね？」

「あの武人ですな……まさか？」

「ええ、まさかです」

「あの者をですか……ますます面白くなりそうですのう」

「まあ勧誘できるかどうか、これからのので付き合ってもらえますか？」

「いいですね」

レビル將軍ともなつて、戦艦ドックの空きスペースへ…

「あ、ティアンムさんも救助しましたので」

「ほう、ティアンム君もか」

「ええ、まだカプセルの中ですけどね」

「彼が消えた時の喪失感…なんともいえんかったからのう…
またチエスがうてるわい」

「さて、だしますので…」

ティアンムの船に乗つた女性兵士達のシェルター、
ドズル中将のシェルター、
バーニイのシェルター、
ミデア組のシェルターをだし

それぞれに扉をつけ…

「異世界へようこそ。案内しますので、準備できた方から表にお願いします」

真っ先に出てきたのはバーニーだった…

「バーニーが先か……」
ちかよつて…

「バーナード・ワイズマン伍長、異世界へようこそ、異世界軍の渚カオル大将です。加入の意思問いますが、いかがされますか？」

「一つ質問が…ガンダムはどうなりましたか？」

「クリス・マッケンジー操縦のガンダムですね」

「…！ま、まさか…」

「真です」

「か、彼女は？」

「ここにいないですよ…彼女はその後地球へ赴任、その後軍をやめ、アナハイムの技術者になりました」

「そうか…」

「ガンダムは中破、行動不能になりましたね…
もつともリボーコロニーへの核搭載船は連邦軍へ投降した為、アルも戦後健やかに育ってます」

「……なら、いいか。……と、
バーナード・ワイズマン伍長、異世界軍への所属希望いたします！
！」

「喜んで歓迎します。バーナード・ワイズマン中尉」

「いい？中尉？」

「MSパイロットは異世界軍では、国連少尉から始まりますので、
あと、ガンダムを倒した勇者には中尉からってね…
よろしくねバーニィ、あ、カオルでいいから」

「あ、ああ…よろしく……な、カオル」

「と、宿舎はこのことが案内するんでついてって〜ね、あと後程〜」

「ああ……」

ティアンムの船に乗ってた人達は、レビル將軍に驚いたみたいだったが、
加入って事で…そのままご案内。

ドズル中將がでてきた…

「レビルっ！！……むう貴様がそうか…」

「お初にお目にかかります、自分がここの責任者の渚カオル大将です」

「……ところで、ミネバやゼナは…」

「奥様のゼナさんは、0081心労により、
娘さんのミネバは、ニンジン嫌い」

「わしそっくりだのう」

「…に成長し、シャア、ハマーン、シャアに育てられ」

「何故シャアが二回？」

「戦乱がまたおきるんですよ0083、0087から89、0093、

0096と…で96に相思相愛になります」

「相手は？どんなやつだ？」

ガシガシガシ

肩を掴んで前後に…

「落ち 着いて 下さい。…ユニコーンガンダムのパイロット、バナージというものです。」

…まあその後は、0123まで戦乱があき、名前も聞かなくなるんで幸せな生活送ると思いますよ」「手を離させて…普通に喋った…

「いいのうドズルは、わしには……はあ……」

「……そこまで聞ければ十分だ、このドズル、喜んで異世界軍に加えるぞ…！」

ところで兄貴や、ガルマやは？」「

「あ……それなんすけど……ギレンは……やめた方が……」

「なんでだ？」

「ドズルさんが死んだあと、
デギン公王をレビル將軍と一緒にソーラーレイで殺します」

「あれじゃな…」「なに？兄貴が？…」

「ええ、ギレンに相談なしに和平交渉にいったのがでしょう…」

「……」

「そのギレンは、キシリアにア・バオア・クー戦時に頭バーンと討たれます」

「姉貴が……」

「キシリアさんにとっては親父殺しが許せないのでしょう…
でもって、キシリアは、逃げだそうとする時にシャアに討たれます」

「……」

「シヤアはジオン＝ズム＝ダイクンの息子さんでしたので」

「!!」「なに!?!あの人の?」

「まあ…なので、ガルマさんはともかくとして…っすね」

「ふむそうだった事だったら……」

「じゃあ、詳しい現状推移などはレビルさんから伺って下さい」

「ああ、よろしくな、カオル殿」

二人して移動し始めた…

(はて?)

百合組パイロットが出てこない…今だに…

コンコン「すみませ〜ん30分位たってますが…」

あはん…うふん…聞こえる…

コンコン「あと30秒したら入りますよ〜」

ガタンバタン

「10・9・2・1」

カチャリ
突入した。

中では女性特有の甘いかほり…

また、乱れた格好の女性兵が二人いる。

というか…9時間はたってるよな？

「事中すみません…：異世界軍には加入されます？」

「あ、はい！！二人一緒が条件ですが…」

「わかりました…：…ですが程々に…」

で、カオルは、医療カプセルの交換を行い…

ハンガーに行く。

とりあえずフルアーマーアレックスとケンプファーを作り…

（高速スラスタ、姿勢制御ブースターねえ…

なんかとミックスしたらまた面白い事になるかも…）

ある意味、ケンプのは萌えにたつすると、カオルは悶えていた…

(さて、特殊任務をか…)
バーニイの部屋に行く…

「バーニイ？」

「ん？カオル？」

「ちつと来て〜」

「ああ…？」

「来てそうそう悪いんだけど特殊任務あるんだ〜」

「！！拝命いたします」

「ん じゃあ、ついて来て」

「して、大将殿、任務内容は？」

「来ればわかるよ」

「『ヒルダさん執務室』」

コンコン「ビダンさんいる〜？」

「ビダン「入って頂戴」

シュン

ヒルダ「彼が？」

カオル「ん…0079から連れて来た、バーナード・ワイズマン中尉だよ。元ジオン軍特務隊伍長」

バーニイ「はっ！！バーナード・ワイズマンであります！！」

カオル「で、彼女が、0087での技術士官、ヒルダ・ビダンさん。今回の任務は彼女に協力すること」

バーニイ「わかりました！！」

カオル「じゃあ、あとよろしく…」

シュン

(バーニィ…頑張れよ…ファイト)

「バーナード君、何歳なの？」

「はっ！！19……………」

カツカツカツ

「な、なにす……………」

アーーーー！

2001年8月19日

翌日…

ヒルダ「おっはよう〜カオル君」

顔がつやつやして、若返っているヒルダさんがきた。

「おはようございます」

「あ、これ……いわれてたのね」

MOを渡された。

「ん？煙幕弾頭っすか？」

「ええそうよ、あと新型蒸散被膜……これひとぬりで、重光線級のレーザーに更に25秒持つわ」

「おお」

「若い子連れてきたお礼よ。
また彼みたいな子いたらよろしくね。
カオル君でも良いんだけど……」

「あははは……」

「さて、今日も頑張ってエキス吸収しなきゃ……たまってた分頑張るぞ」

「はははくすのふ……」

「カオル……」

「あ、バーニイお疲れ」

蝮ドリンク飲みながら千鳥足でバーニイがきた。

「お前……知ってたな？」

「ん？ナンノコト？」

「……まあ……ああいった人も良いんだが……
カオル！！、新しい人材連れて来い！！
俺一人じゃ、正直もたないよ……」

「う、うん……一人は確保済みなんだけど、まだ治療中……」

「確保してるか……ほんと命は繋がったな……」

ポフ

とソファーにバーニイが腰を落とす。

「バーニイって19なんだよね？そんなに持たないの？」

「ああ、初めてを奪われたばかりか、6時間ずーっと、

相手させられたんだぜ…視界が黄色なつたさ…
しかもさ、うまいんだよ…まさに魔性の女だな。
何回だした事か…
一気にあれやそれも仕込まれたし…」

「どんな事しこまれたん？」

「例えば……」

え、作者よりお知らせです、
しばらくR18ネタが続きますので時間経過したと思って下さい。

「うん、すごいわ…もし、今日MSに乗れたら？」

「特攻してこいと同様だよ、今日明日は役に立たないね……正直……
特に腰がさ……」

(ビダンさん…自重しないなあ……あ、)

「……ところでバーニイ、乗りたい機体あるん？」

「ん？ああ、ザク以外は乗りたくないな」

「外見上？中身？」

「外見上。ザク以外は好きに慣れないよ」

（ふむ…）

「こういった機体もあるけど？」

ハイザックをだす。

バーニイが画面覗きこんできた。

「見たことないザクだなあ…」

「バーニイの後の時代のだからね…これどつ？改造もするよ」

「うん。これにしてくれ」

（あとは…）

「バーニイは、別部隊のC-01所属って事にした方が良さね…」（穴兄弟部隊と…）

「りょうかい…とりあえず今日は休めるのかな？」

「うん良いよ。待機はB・01だから」

「イチチチ」

腰を痛そうにあげる…

「まあこんな調子だから、風呂にいつてくるわ…」

とりあえずバーニー用に、

ハイザックの強化で、

Z仕様に変更…

ジュネレーター強化、

外装式バルカンポット、

レッグブレード…

なもので…

注文。

(そろそろカムチャッカで戦闘始まるかな?)

「マスター情報室に来て」

………

カオル報告

ビダンさんに春がきたみたいですよ。

第75話 頑張れバーニイ 投稿日20110217(後書き)

バーニイ「ねえ作者……俺をどうしたい？」

作者「とりあえずヒルダさん抑えで……」

バーニイ「カオルをあてるよ……」

作者「カオルあてると、戦闘参加が難しくなるからねえ……
バーニイもチエリー脱出したし、うれしいんじゃない？」

バーニイ「作者はどうなんよ」

作者「人妻キラーってR18ネタにはしるからやめい……
で、クリスと会えないけどいいよね？」

バーニイ「……あの味をしつたらしょうがないぞ……」

作者「かもな……」

バーニイ「ところで作者、しばらく作中だと……？」

作者「ヒルダさんのお相手して、死ぬ予定だからよろしく」

バーニー「まじっすか！！次回…殉職バーニー（泣）…」

作者「あ、大丈夫しばらくはならないよ…次回カムチャツカ戦闘編、その後バーニー編ね」

第76話 カムチャツカ動静 投稿日20120218

(そろそろ始まるか、あの武器なしでの、
おてなみ拝見といきますか…)

情報室のモニターにはカムチャツカ半島が映しだされて、
かつ拡大映像で各プロミネンス計画機が映し出されている。

殲撃10型、

Su-37UB

F-15・ACTV

不知火・弍型

等などがそれらの機体が動く前、
迎撃開始して、しばらくすると…

「マスター!!」

「ん？」

「大規模地下侵入探知、規模軍団規模」

「現地軍や国連軍は？」

「探知してないよ」

「対応可能か？」

「現地の規模で無理」

「B-01でるぞ！！あと現地に警戒警報だせ、追軍で陸戦強襲型ガンタンク4個連隊！！」

陸戦強襲型ガンタンクは、フライングアーマーに乗れないのが辛かった。

滑り棒で格納庫エリアに降り
ビービービー

「B-01緊急発進、準備出来次第、出撃せよ」

前回と違い、ハンガーに固定してある状態からの出撃だった…

時間がかかる。

カオルは魔撃震に飛び同化させ、
機体を前進させる事ができるが、

他の機体はジュネレーター起動からになってしまっ…
どうしても、3から6分はかかってしまうのだ…

で武装を受け取り、
フライングアーマーに搭乗するのに4分程…

「マスター、ドズル中將がわしもつれてけ…ってうるさいんだけど」

「操縦系統違うが魔グフか、Z未改造に乗らせる…
予備機つくっておくべきだったかな…」

ガシガシ

前にすすみ、フライングアーマーにのり、合図して、2分で戦艦ハ
ツチからでた…

ブースター点火し、一気にトップへ…

(時間が惜しいな…)

太平洋沿岸を一気にすすみぬける。

『カオルさん』

B-01隊長になったミリーリティシアから…
略してミリー大尉から通信が入った。

「ん？」

『全機発進完了です。カオルさんに遅れて4分って所で編隊を組めてます』

「おう、わかった」

『で、ドズルさん…どうするんですか？一応中将ですし…』

『一応とはなんだ…！』

割り込みっすね…

『あ、すみません』

「まあ階級が上ですし、今回は好きなようにドズルさんやって下さい」

『わかった』 『了解』

「ところで、ドブルさん、その操縦装置どうです？」

『なんか奇妙な感触だ…が操縦できない程には…』

「まあZもあつたんですが…」

『ガンダムやジムにはのりとうない…！』

『マスター』
情報室からだ

『ソ連軍に警告だしてるけど、
対応します…っただけで動かないよ』

「はあ？」

『困にしてるよつに思える』

「現地の軍にはつたわってない？」

『うん、二二30分そう思える』

今機体は、新知島の北緯48度5分を通り過ぎたところだ…

「現地の国連軍及びソ連軍に警告を伝えるようにしろ、失うのは命なんだから…」

『了解：あと、マスターまだ現地でのんきにテストしてるよ…』

「どこで、こっちの警告とまってるんだ？クソッ」

side 戦闘司令部

迎撃開始より約72分

「バオフエン試験小隊の試験項目は現在消化率64%。BETA
A撃破数約475……」

「イーダル試験小隊の試験項目は現在消化率100%。BETA
A撃破数約852……」

「アルゴス試験小隊の試験項目は現在消化率69%。BETA
撃破数約420……」

「司令！！異世界軍から入電、軍団規模の地下侵行ありと情報！！」
無線オペレーターが

「つきましては、このように…」

プロジェクターに表示される

「BETAの狙いがわからない為、退避地点を分散し危険をさけるようにお願いします」

「ふむ」「しかし…」

「我が軍としては、国連遠征部隊の安全には万全を期する所存です。祖国の名誉に懸けて、ひとりも負傷者をだしたくないのです。

残念ながら装備品を運搬する手段がありませんので、放棄になりますか…」

なあにいずれ取り返せますよ」

「致し方ありませんな。むしろ貴重な実証実験機が無事であることを喜ぶべきか…」

「さあ、第二発着情場に数機のMi-26を待機させてます。

全国連部隊に退避を。誘導は我が警備部隊が行います」

「言い切ったと同時に、完全武装の警備兵十数人が戦闘指揮所内に雪崩こんできました。」

「さあ、一刻を争います。全部隊に退避命令を」

「XFJ計画関係者に即時退去命令を出せ。99型付きの連中にも伝える。放棄は斯衛軍の手順に任せる、と」

伝え終わると同時に…

ゴゴゴゴゴゴ

「振動波検知、情報通りの地点の様様!!」

「現地UAVモニター映ります」

「光線級来るなよ…」

これによつては陸路での撤退となりえるから、死活問題だった…

「来ます!!」

大地に穴が空き、そこから湧き出てくるBETA群が画面に映し出された…

「BETA群に光線級の存在認めず。繰り返す光線級の存在認めず。UAVは引き続き穴から出て来るBETA群を映し出している。マグマの噴火のように穴から湧き出てくる…

照射地帯警報が消えると、戦闘指揮所ないに安堵の空気が流れた。

「さあさあ…退避急ぎませんと…はて…ところで篁中尉は？」
周りではソ連軍オペレーター達も退避準備を急いで進めていた…

side 戦闘指揮所内 end

カオルの機体は音速をこえ、マツハを越えていた。

『マスター、ソ連からは、当方で対処可能、救援要らずってきたよ』

「はあ？軍団規模出現なの？…何処から？」

『中央軍司令部』

「国連遠征軍の現地は？」

『それが通信途絶…強力なジャミング入って…』

「何やってんだ？…いいや、現地基地所在の国連軍の確認の為に急行すつといつとけ」

『了解…』

………

『マスター、現地基地、BETAの侵入あり』

「基地要員は？」

『ほぼ撤退』

「ほぼ？」

『現在1名取り残されてる』

「まだ生きているんだな？」

『うん』

「データ転送してくれ…クソッ、取り残されかよ」

『いや、機密保持の為もどつたね』

「何処の馬鹿だ？」

『帝国軍、篁中尉だね』

「……わかった救助に向かう。あと1分」

（格納庫内部か……ボン大君もだすかな）

機体にしがみつ়く形で、ボン太君をだし、アクティブにさせておく。

「見えた!!」

最大戦速で、飛ばしているなか、ぐんぐん補給基地が見えてきた。

戦車級、要撃級が見える。

キイイイイン

バシユグンバシバシ

フライングアーマーから降下両手に装備したザクマシンガンが唸る。
単発的確に当該がいる格納庫周辺のを始末する。

「アル、自立モードでBETAを近づけるな」

「イエス・マスター・ジエネラル」

機体を格納庫出入口に着地させると同時に、体をボン太君に移し、
ぷに!ぷにぷにぷに

機体から離れて着地し、格納庫内に突入する。

左手にはカトラス、右手には97式軽機関銃をもちながら…

side（篁中尉）

唯依は99式にたたき付けられ、その度絶叫を…

「うあああああッ！！！！」

ガガガガガガ

「はあッはあッ……………」

朦朧とする視界…が、その後の衝撃がこなくなった…
意識を集中すると、唯依を襲っていた戦車級が見えない…

バン！

銃声が聞こえる。

（だ、だれ…かきたのか…）

…………ふにふに

「ふもっ！！」

「…はあはあ…ふ、ふも？」

正面に、犬だかネズミだかわからない、蝶ネクタイに、
くりくりとした大きな瞳、なんとも可愛らしいのが、
銃を構えて左手をあげてた。

（ま…まさか…せ、戦場でこんな可愛らしい…）ずきゅーん

「ふもっ！！」バンバン

その愛くるしいのは、手にした銃をうっている

（はあああ…も、もえ）

断っておこう、戦争にひっしなこの世界ではデイズニートランドもないのだ…

ゴン太君もいないのだ…

よって…墮ちた…

どこからともなく…人が入れるサイズのカプセルみたいのをだし…

「ふもつふ。もつふる」

愛くるしい左手が、カプセルを指す。

「この…ハアハア…カプセル…ルに入れと？」

バン「ふもつ」

頷きながら、射撃をしていた。

「だが…あれを破壊しな…くては…」

(99式を破壊しなければ…)

「ふもつふる！！」と、左手で愛くるしい胸を叩く。

「任せろ？か？」

「ふもつ」

(わたしを助けにきたから…)

それくらいはできそうだな…)

「……わかった…よろしく頼む」

side) 篁中尉) end

「しばらく時を戻す」

ぷにぷにぷに

「うあああああッ！！！！」

ガガガガガガ

叫び声が聞こえ、正面でターゲットの篁中尉が、打ち付けられて、整備パレットに戦車級が5匹たかっているのが見えた。正確な射撃で戦車級5匹をミンチにする。

ぷにぷにバン！

近寄りながら、こっちに近づいてきた戦車級を一匹無力化… ぷにぷにぷに

「ふもっ！！」

「…はあはあ…ふ、ふも？」

目の前には国連軍の制服を身に纏った篁中尉がいた。

左腕の金属片がささった刺傷が痛々しい。

「ふもっ！！」バンバン

隅から見えた戦車級を無力化させると、医療カプセルを虚数空間から取り出し、

「ふもっふ。もっふる」

怪我している。治療の為入れ！といいながら医療カプセルを指す。

「この…ハアハア…カプセル…ルに入れと？」

バン「ふもっ」

うなづきながら、戦車級を射殺。

「だが…あれを破壊しな…くては…」

「ふもっふる！！」と、カトラスを腰にさしながら左手で胸を叩く。

「任せるのか？」

「ふもっ」

「……わかった…よろしく頼む」

カプセルの中に篁中尉が入ったのを確認し、作動させ、虚数空間に引き込む。

その間にも10体ばかり射殺、切殺し、パレットから降り、99式電磁投射砲を同化しながら引き込んだ。

(後は…) 大型弾倉、データー類と思えるのも引き込んで…

(後でみてもらうか…)

『マスター、当機へ戦術機が二機接近中』

魔撃震の元に戻るうとした時、フシューーンと言つ音とともに、不知火・弐型、F-15・ACTVが見えた。

外部スピーカーから、『こちら、国連軍アルゴス小隊です。

女性士官が取り残されてたのですが、見かけましたか?』

「ふもっふふも、ふもふっふる!」

当方で保護した、医療カプセルにいられている…
としゃべった。

『ふ、ふもっふ?…?…』

「ふも!」

待てのジェスチャーし、ボン太君から、魔撃震へと身を移した。

「いや、失礼、さっきの強化服は、ふもしかしゃべれない仕様なのでね。篁中尉なら無事に回収した」

ボン太君を虚数空間に回収。

『で、何処に？』

「ああ、今医療カプセルに入ってもらい、虚数空間にいる…それ以上の説明は長くなるから、あとでな」

『わかりました。ところであなたは？』

「異世界軍大将、渚カオルだ…ま、この戦況に救援に来たんだよ」

キイイイイイン

複数の衝撃音が聞こえてきた。

B・01も低空進入で、空挺降下し、補給資材を積んだフライング
アーマーが、
スピードを落として着地してくる。

『陸戦強襲型がくるまでの2時間、戦況を立て直すぞ…!!』

『ガーはっはっはっ敵は何処だあ〜』

「ほら、あれらだ」

『金色?』

「ところでどつする?俺らは戦況を立て直すか…ついてくるか?」

『残弾こころもたないのです』『いや、俺はついてきます』『』
「ウヤ!?!」

『近接戦闘をこの機体経験してないので、残弾はほぼありますし』

「わかったついてこい」

『感謝します』『はあ…わたしもついてくよ』

「よし、準備出来次第行くぞ」

『了解』

（しかし、我が軍の通信は機能しているものの、強力なジャミング
ねえ…

で、G元素か…初めて触ったけど精製できるのかな?）

手近な鋼材を掴み、変換してみる。

(ふむ…質量は重いのか)

『マスター!!』

「なんだ？」

『この半島に上陸している全てのBETAが、その基地に向かいだした!!撤退したほうが』

(……この基地にんの価値が??流石に1000:1は辛いな…)

「わかった、各機聞いたな、BETAの進路が全て此処に来るそう
だ、順次救援しつつ後退するぞ!!」

『了解!!』

『マスター!!』

「次はなんだ？」

『BETAの行動が変…一心不乱に戦術機等無視しているの』

「はあ？」

『正面にいる機体は邪魔だとばかり攻撃されるけど、横にそれた機体には見向きもしない』

「むう……」

丁度向かってきた要撃級がいたので、

「アルミサエル」

精神浸蝕してみると…

ソレガホシイソレガホシイ

(ほっ……)

「あゝすまん…多分原因がわかった…確かめるわ…」

各機、撤退中止、基地4時方向、300mの地点で戦闘待機」

そういうと、俺の機体めがけてくるBETAどもに、

ザシユ、グシャツ、ザシユ、ザシユ、ザシユ、シユラシユラ、ザシユ
ブレードで切る、ナックルで殴る、切る、切る、切る、足のブレードで切断、切るをしばらくして、

右手に持っているG元素を投擲すると…

一斉に向きを変え…そっちの方向へ殺到する。

「11号」

『はい、マスター』

「BETAの進行方向変わったか？」

『若干変わったよ…何したの？』

「精製し、持ってたG元素を投擲してみた」

『それって…』

「ああ、ある意味餌を投擲した…といっても良いかもな…デコイに向かうBETAへ一斉射!!」

『不満だあ！！わしにも斬らせろっ』

ドズル閣下が不満げに一方的射撃をしている…

(けど残弾たりたかな？)

と残弾の心配をすると…Su-37M2の編隊がこちらに向かって
いる…と情報が入る。

ソ連軍、ジャール大隊との事だ…

(ふむ…)

「各機前線を押し戻せ、ここはデコイに集中してるから良いだろう。」

「

『了解』『うおおー』『俺らも行くぞ！！』

前線へ向かう、F-15ACTV、不知火式型、魔ドム、魔グフ及び
接地追従するフライングアーマー。

そして、いれ代わりに、ジャール大隊機が着地してきた。

『見慣れぬ機体ですが…』

通信が入ってきた…ジャミング装置を破壊したらしい。

「ああ、国連、異世界軍の渚カオルだ」

『わかりました。当、ジャール大隊は基地の施設の保護を命じられています』

「撤退したこの基地をか？」

『人命大事で撤退指示をおこなったが、破壊は好ましくない…との事を言われてる』

「ふむ…きみら的大隊だけか？」

『爆撃編隊が向かってきてるので、それまでの繋ぎですね』

喋っていると、爆撃機接近の情報が入る。

TU-22、TU-95のマーキングが表示された。
後数分で基地上空にかかる。

「ほう、ベア…レプシロ重爆撃か……」

『旧式ですがね』

「そうか？俺的には良い機体だと思うぞ」

射撃しながら、通信していると…

『な、なにい！！』

基地の東端から爆炎があがる。

G元素を投擲した辺りもBETA共々吹っ飛んでる。

「おいおい…、守るんじゃないのか？」

『……まさか……奴らは……！？』

『総員退避！！』

爆撃を避ける為、基地の西側へと機体を向けると…

突然空に幾条もの稲妻が空にはしる。

『マスター、光線級！！』

基地破壊に入っていた爆撃編隊が墜落しまくる。

（爆撃機は間に合わないか…）

「ああ…各機光線級を優先に叩け！！」

『了解』『うおおお〜』

光線級の出現により、爆撃機という手段を失ったが、
B-01により、支えきれている状態に見える。

(あと、20分か……)

現在の陸戦強襲型ガンタンの進路状況を確認めると…

『マスター未確認機接近、IFF及びデータリンク切ってるよ』

「怪しいなあ…機体分析できる？」

『Su-47かな？アタックしてみるからまってね』

『ジャーナル1より各機に告ぐ。殿は私が努める。』

ジャーナル19を先頭に各機先行せよ 行け！』

7機のSu-37M2がNOEで飛び立ち、北西にきえていった…

『カオル殿、あなたも…』

「いや、怪しいので付き合いますよ…」

『わかった…』

ラトロワ機は格納庫へ狙撃を、警戒して遮蔽されるように機体を隠しにいった。

『マスター確定S u - 47、ソ連の親衛隊用に使われている機体だね』

「ラトロワさん、S u - 47、親衛隊用に使われている機体だそうですよ」

『なに?…わかった用心しよう…』

『マスター、彼女達このままだと、生き残っても消されそうだね』

「ふむ……ジャール大隊か……戦績はどうなん?」

『うん…極めて優秀』

「引き抜くか…撃墜を欺瞞できる?」

『もちろん』

「あ〜ラトロワさん」
『なんだ？』

「保身の為、消されそうですよね？」
ジャーナル大隊ごと、死んだ事にして、我が異世界軍に入りませんか？」

『……………』

「明らかにあの機体、あなたを狙っている挙動ですよ？やばい事に関わったのでは？」
またジャーナル大隊各機にもログが残ってるんすよね？」

『……………わかった、その申し出を受けよう。その為には……………』

「ええ、無力化ですね。じゃあ、自分が相手しちゃいます」

と通信を送ると、
Bダッシュで未確認機のSu-47に近づくと、
相手のSu-47は気がつきこちらに銃口を向けはじめが、
(遅い遅い)

そのまま、左側面を抜け、全身で踏ん張り相手の機体の足を掴み、
転倒させつつ……
「アルミサエル」

搭乗員の精神を乗っとった。

「ラトロワさん終わりましたが、この機体どうします?」

『なに…なにを??』

「禁則事項です」

『す、すきにして下さい……』

頭弄って、任務の事忘れさせて、帰すことにした。
ふらふらNOEしてくSu-47。

「ラトロワさん、ジャーल大隊各機は、この基地に引き上げさせて下さい。」

こちらで欺瞞情報うつて、戦死扱いにします。
皆さんへの説明お願いしますね。

11号、切り離し、秘匿化できるか?」

『わかった』 『ちっとまってね…ほい、どうぞ』

ラトロワさんがジャール大隊への説明を行っている。

で各機当基地に集合しろ…と

十数分後、ジャール大隊が揃った。勿論前線から後退した辺りで、戦死として欺瞞できている。

「じゃあ、一人一人誘導しますね…アル、自立モードで警戒」

「イエス・マスター・ジェネラル」

で機体の外に飛び出し、機体に取り付き、中の衛士をシエルターに、機体は主機を停止させ引き込むを繰り返した。

最初は驚いてたようだが、ラトロワさんが説得してたみたいで、おとなしく全員を引き込む事ができた。

全員引き込んで機体に戻ると、遅れてきた陸戦強襲型ガンタンク4個連隊が下駄に乗りながら、ホバリング進入してくるのが情報に入ってきた…

(よし…勝ったな…)

陸戦強襲型ガンタンクは下駄から飛び出ると、突撃形態で前線へと殺到する。

均衡だった戦線は突如乱入してきた陸戦強襲型ガンタンクの集中突撃により、

戦車級は曳かれ、
要撃級は、腕部バルカンにより貫かれ、
突撃級はB - 01が狩っていてすくない、
光線級は同じくB - 01により見えない、
要塞級は240mmキャノンに貫かれ、
重光線級はB - 01によってかられ…
駆け抜ける傍から、BETAが消えうせ、まさに蹂躪が相応しいだ
ろっ…

戦線での決着が付きそうだったので、
カオルは空いている下駄に搭乗し、
XFJ計画の退避地点を目指した。

まだ不知火式型は前線で頑張ってるとの事だ…

カオルは、退避地点につくと、
虚数空間から医療カプセルをだす。

ステータスを確認し、ロックを外すと、
篁中尉が目を見ました。

「あれ？ここは？」

「篁中尉！！」

日本人スタッフが駆け寄ってきた…

「感激の再開中悪いんだけど……99式電磁投射砲回収したんだけどどうすればいい？」

「え？回収できたのですか？」

「回収したよ」

現物によきによきとだした。

「それなんだが…日本国内に届けた方が安全かもしれんな」

「そうですね…マスターコードエラーも出てますので、メーカーの方が来ない事には…
わかりました開発局に届けをお願いいたします。」

「じゃあ…異世界軍の、渚カオルが責任持ってお届けしますね」といってしまう。また篁中尉の入っていたカプセルもしまった。

「あのとこるで…」

「ん？」

もじもじしている。

たっ たっ たっ とよってきて…

「あの……ふも……は？」

小声で…以下ヒソヒソMode。

「あゝボン太君ね……かわいかった？」

こくりと頷く篁中尉。

「ぬいぐるみや現物欲しい？」

頷きまくる篁中尉。

「じゃあ後でお届けします」

「秘密でお願いしますね」

「了解……」

ヒソヒソMode終了。

「じゃあ、戦況確認するのでこの辺で……」

機体に戻ると、戦況はほぼ押し戻したとの報告をつけた。

戦闘終了後に、余分にきた下駄に、
フライングアーマー各機を
その隣に、B-01機が乗って帰還、
各下駄に陸戦強襲型ガンタンクがのり、
補給物資も整理して載せ、
約3時間強の道のりを帰りだす。下駄の休憩室で、シャワーを浴び、
ベットに横になった。

……

カオル報告

ジャール大隊まるごと参入

第76話 カムチャツカ動静 投稿日20120218（後書き）

作者「カムチャツカ半島か……かなり動きだすなあ……」

ナギ小尉「みたいですね〜で……原作での事件もですか？」

作者「仕組みまれてたのはそのままだろうな……そっちにいつてないし。ただその後が更に関心が高まるから、近々事がおきそうになるかな？
まあ、あの段階だとソ連はある程度の予定調和だったが……だね」

ナギ小尉「あとみてたんだけど……ドスル閣下うざかったけど戦闘描写は？」

作者「閣下の戦闘描写は次回かな……あんまり期待するなよ駄作者に」

ナギ小尉「で……篁中尉……堕ちたの？」

作者「実物見れば堕ちるだろ……お〜いボン太君〜」

ぶにぶにぶに

「ふもっ!!」

ナギ小尉「あゝあたしも おちる…」

女性キャラキラーだね

ネズミーマウスの中の人はいません。

作者「しかし…結構時間くつたなあ……」

第77話 カムチャツカ事後処理等 投稿日20110219

2001年8月19日夜…

横浜基地に着いた各機体は、
洗浄オーバーホールの為、ハンガーに入る。

カオルは、まずはジャール大隊のシエルターを戦艦ドックでだし、
扉をつけ、
着いた旨を告げた。

「ラトロワさん」

「カオル殿」

「と、ジャール大隊の面々は宇宙歴の世界からきた…
という扱いでお願いしますね。で、はい」

ガンダムDVD・BOXの全巻集、イグル、08小隊を渡す。

「と……これは？」

「このDVDの世界からきた…でお願いします。5日間の休暇で皆
さんで学習して下さい…あと詳しい話は…」

空いてる人…11号、宇宙歴について空いてる人いた？」

「ティアンムの船の人々なら」

「あ、じゃあ専属先生としてつけてくれ」

「了解」

「先生がつくのでお願いしますね」

「わかりました」

「 〓 〓 アメリカ軍情報局 〓 〓 」

「むづ…金色か…」

「あの戦術機、欲しいですな…」

「なんとか引つ張ってこれないか？あの基地から…」

「潜入を試みているわが諜報員は、ことごとく…」

「ふむ……計画は？」

「は……もうしばし……お待ちを」

「急げよ」

「は……」

「ソ連某所」

「ふむ……」

サラサラサラ

サインを書いた。

「さてどうしようかのう？」

別の画像いり報告書が上がってきている。
金色の戦術機……

そしてサインした書類には降格、部隊除名、最前線送り等がかかれていた……

2001年8月20日

昨日の戦闘報告を見ようとしたら…

げっそりとしたバーニイ中尉がハンガーデスクにくる。

「カ…オ…ル」

「バーニイ？どうした？」

「精も根も…っ…きた」
バタリ

「ちょ…11号…！」

「マスター?!…なに人殺してんの？」

「悪いジョークはやめろ…容態は？」

「やばいよ、腎虚をおこしてる…大至急医療ポットに…！」

ウーウーウー

サイレン鳴らしながら、医療ポットに担ぎ込まれたバーニイ…

「バーニイ中尉、本当どうしたの？」

「こころあたりあるから、聞いてくるわ……」

「ヒルダさん執務室」

「コンコン」「ビダンさん」

「どろどろ」

シユン

肌がつやつやと一段と若返ってる。

「バーニイの件なんですが、解放したの何時です？」

「朝だけど？」

「どの位やったんすか…」

「え〜と…」

両手が折り返しにはいったので…

「ヒルダさん…やり過ぎです。彼倒れちゃいましたよ」

「あら……あたしったら……ついつい夫とやった感覚でやっちゃったわね……」

「夫、フランクリンさんと？」

「ええ、あなたに救出された頃、あんまりやってなかったから、持て余して愛人に走ったのよ。
わたしは忙しいかったからねえ……」

（早めに加えないとバーニイ死ぬわこりゃ……）

「わかりました…ちよつと後程……」

カオルは退室すると、医務室にむかった…

ティアナム提督、スレッガー中尉の様子を見に行くためだ…

（やてと……）

「どつすか？」

「あ、カオルさん、ちょうどお二人ともDVDルームにご案内しました……………」

あと…スレッガーさんに口説かれたんですが…」

「早速ですか…なんて？」

「おお、麗しの天使よ、天国なら是非僕と一発でもって」

「ストレートだなあ…まあ、映像見終わって、落ち着いたら俺とレビルさんをよんで下さい」

「はい」

〓〓 B - 5 5 ハンガーディスク〓〓

昨日の戦闘報告書をやっと読みはじめた。

B - 0 1 被害なし…

(キター)

どうやら、サポートAIがうまく機能したらしい。

そりゃそうたる単純に二人のりになるんだし。

しかも片方は優秀な監視員、火器管制補佐等をしてくれる。

ドスル機は…小破
駆動疲労による。

（多分近接戦闘しすぎね。
機体稼動映像…見てみないとわからんな…
時間かかるか…後程）

（あとはボン太君だなあ…
耐久実験できなかったなあ…
それさえすれば…

あ、篁中尉宛てにぬいぐるみ生産しなきゃ…
と、レポートを読んでも…

「マスター、医務室から呼び出しだよ」

「ういつす」

〓 〓 医務室 〓 〓

「カオル殿、ティアナム君が回復したと聞いたが…」

「ええ、行きましょう」

シユン

「ティアンム君」

「レビル」閣下」「將軍」！」「

スレッガー中尉はカチコチに敬礼、
ひしつと抱き合う、ティアンム提督とレビル將軍…

「足付きに殺されたとおもった時、
やりかけだったチエス思い出しましたよ…」

「またうてるのう」

「將軍はこちらの軍に参加で？」

「ああ、そつじゃ」

「ぞ
」では、わたくしめも参加させて下さい。何処までもつきあいます

「おお」

「あ、カオル大将閣下、参加させていただきます」

「歓迎いたします。階級はそのまま、レベルさんが先任扱いで上格ですね」

「わかりました」

「してのう、ドズル・ザビもきとるのだよ」

「なんとー!!」

カオルは、スレッガーの方に向くと…

「えーと、スレッガー・ロウ中尉、あなたは加入されます？」

「そうですねあゝ……わかりました、加入させてください」

「はい。喜んで……ではこのものに部屋を案内させますので、早速ですが、特殊任務があります。

準備出来次第ハンガーデスクにお願いします」

「こっちです」

「わかりました」

敬礼後25号についてくスレッガー中尉。

まだ奥では、二人して談義をしているので…

(まああとはいつか…)

つて事でハンガーデスクにへと戻りはじめた…

生産

「さてと…確か前回持ってきた分はまるまるあるよな？」

「マスター、900基分だよ」

「え？…あ…」

そうだった…ミディアの改修前は、パイロードが160tサイズなのだ。

「あゝそうか…なら仕方ないか…回収回数増やすしかないな…」で
つと」

シャトル200機、

陸戦強襲型ガンタンク2個連隊セット、

(これで?)

「なあ11号、8個連隊になるんだよな？」

「だねえ……あ、整備ハンガー増設しといたよ、格納庫は勝手に増やしてるけど」

「あ、すまん」

(ふむ、レビルさんから、ネモ隊増設か…1個大隊ね)
承認

(あとセイバーフィッシュもか1個連隊)
承認

(でつと…)

ボン太くんぬいぐるみの生産工場をジオフロント内に建設、
ついでに制服等衣料工場を設営した。

(今度衛士強化服の工場見せてもらうか…あとは…?)

娯楽施設たらん！との要望が上がってきている。

(ふむ……)

「なあ…11号、娯楽だと？」

「何処から上がってきている話題？」

「内勤か……」

「スポーツ系もいいんじゃない？」

「ブリッツボールが一番いいよなあ」

「なにそれ？」

「ファイナルファンタジー内でのスポーツ競技の一つさ……あれは燃えた」

「マスター、そのゲームとりにいけばいいじゃん」

「あ、そうか……候補に入れておこう ……と今揃えられるのは……」

（ふむ少ないけど……後で増やすか……）

とりあえずダーツ、ビリヤード、チェス場等設置

あと、コロニーからの、バスケ場、フットサル場も設置。

ゲームは記録してなかった…

「そういえばマスター、宇宙でだったら相転移エンジン使えるけど？」

「あつ……そうだなあ…ドックで付け替えできる？」

「まだ完成してないから無理
今だと部品が浮かびまくっててんわやんわになる」

カオルは光景を想像する。
部品はすす度にふよふよ空間に浮かび、
のかすとそのままなんかにぶつかるまで直進するボルトなど…

その回収に翻弄するコバッタ達…
るくに部品を運べる状態でない。

「ドックできれば、低重力でどっかにふよふよする事はなくなるから、
付け替えできるよー」

「だな…できたら順次付け替え回収してくれ」

「了解」

そうこうしている内に、スレッガー中尉がきた…
(うん生産指示はおしまいと…)

「大将閣下、特殊任務の内容とは？」

「こっちに来て下さい。なに、中尉向きですよ」

……

「コンコン」「ピダンさん」

「どっぞ〜」

シュン

「おお、これはお美しい…こんなところに花がいるとは
入るいなや、早速口説きにかかるスレッガー中尉…」

「スレッガー中尉」

「あ、これは失礼を…」

「中尉、特殊任務の内容は、ヒルダ・ビダンさんに協力する事…以
上」

「こちらのご婦人にですな？…拝命致しました！！」

「じゃあ、ビダンさん」

「ええ、わかりましたわ」

シュン カツカツカツ

うほっうほっうほほ！

(さて、何処までもつかかな??)

2001年8月21日

杖について移動しているスレッガー中尉をみかけた…

しんどい感じだったから…声をかけれなかった…

とりあえずC-01部隊いり。

C-01の隊長はビダンさんにやってもらうとしよう。

「カオル君」

ますます肌に磨きがかかっている、ビダンさんがきた…
ついでだ。

「ビダンさん、C-01、男性部隊の隊長をやってください。
隊員はご自由に…けど程々に…」

「C-01の所属隊員って？」

「ビダンさんが相手した方ですよ」

「わかったわ …けどまだまだ集めてね」

「あと…何人程？」

「そうねえ…18名かしら？」

「……………善処します」

ビダンさん何処までいくつもりなんだろう???

(残っている問題は…レールガンお届けか…)

帝都の開発局にお使い編W

「シャムシエル」

カオルは飛び立つと一路帝都へ……

が、殿下に用がないのに、開発局に届けた後、

殿下の私室に呼ばれてしまった…

「殿下、お久しぶりです」

「おおカオル殿、朕はあいたかつたでございます」

「……して、殿下なにようですか？」

「座って下さいな」

私室にあるソファアをさしたので、おとなしく座る。
けど…

（な、何故殿下が横に…）

ピトッと体を密着させて座ってきてる。

「実は、この書類に承認して貰いたいのです」

「え〜っと？道路整備許可……あ〜承認のサインですね？
結構ありますね〜」

（書く欄が、所属、氏名か…）

「「ちらのペンを…」

「ありがとうございます」

サラサラサラ

一枚、二枚、三枚、四枚、五枚、六枚、七枚、八枚、九枚……

おんなじ様な単純作業が続き……

サラサピタッ

「あゝ殿下……」

「チッ」

「なんか、これだけ違うのですが……」

結婚届け……相手は殿下になっている。

「何故、これが、それにいつのまに？」

「カオル殿おしいもうしあげますわ。結婚して下さいませ」

殿下の手がカオルの太股にそえられる。

(はえええ)

殿下の手が太股を撫で…

(気持ちいい…た、たつ!!)

イツシーの顔がよぎる。

体をのかし…

「すみません殿下!!自分には決めた方が!!」
全力で礼をする

「…………でも心配いりませんわよ」

「へ?」

「議会には根回ししまして、近日中には時限立法で重婚が認められるようになりますわ」

「重婚……あ!!殿下まさか……」

「そう、まさかですの」

再び、身体を寄せてきて…

「なので、早くサインして、契りを結びましょ」
悪魔の誘惑である……

殿下の指先で…カオルの胸を撫で回し…

「……ん？近日中？？…今ここでサインすると？」

「……あゝもう、朕一人だけのものになるはずだったのにいゝ」

「すみません…殿下……」

「わかりましたわ……時限立法制定後ね」

チユ

「それまでは…婚前交渉もできませんので…おあずけで……」

「ははははは……」

カオル…くいそこねた模様だった…

その後殿下からは、許可の説明などに広間に移動して説明された…

その後平和日本にいき、

前回経由したさいにメールが入ってたので、

廃品回収と帝国あての荷物をうけとり、

山梨県にある、リニア実験線に行く…

もちろん、コピーした。

元の世界に戻る前に、セブンイレブンによって新商品みてるよ…

(おっ)

『チーズ香るクロックムツシュ』を発見した。

(なんか…良さそう…)

148円払って食べてみると…

(ほう、いけるじゃん。

もうひとつかってP×メニューに追加しとくか…)

カオルは世界扉をくぐり、元の世界へと戻る。

帰ってくるよ…

もちろん集積所にコンテナをはきだした後だが…

プロミネンス計画の方から機体を研究させてくれ…
と要請が入ってた。

(ふむ…)

魔ドムを2機追加生産し、パイロットにヤドカリをつけ、
改造型ボン太君を研究用に提供

警備員にT・850 6名、担当士官にダイヤモンド提督、
技術士官に4名程

ボン太君ぬいぐるみをお土産に…

作者「ふう〜ちとペース落ちたなあ……」

ナギ少尉「どうしたの作者？」

作者「前回のあたりから、少し執筆スピードがな……」

ナギ少尉「ふうん…スランプ？」

作者「かもなあ〜ま、頑張るさ」

ナギ少尉「ところでカオル君、食わなかったね〜」

作者「……………りちぎなやつだよ……………俺だったら、喜んで〜と食っけ
どさ」

ナギ少尉「えっちい」

作者「それは人間だれでもだろ〜」

ナギ少尉「艦長は違っても〜ん」

作者「いや、わかんね〜ぞ…案外既に博士はてつきだったりして…」

ナギ少尉「違っ〜!!」

作者「だから、艦長は博士に甘いんだよね」

ナギ少尉「!!!」

作者「じゃなかったら、あんな寄り道認める？」

ナギ少尉「ふっふっふっ……」

作者「あれ？ナギ少尉？……何故、そのハンマーは…」

ドカ!!!

作者チーン

どうやら地雷をふんだようだった…

第78話 ニューガンダム編 投稿日20110220

2001年8月22日

今朝はスレッガー中尉が医療カプセルのお世話になっているのを…
さらりと聞いた…

(あの人は……)

頑張れC-01、

(多分、今夜はカプセルからでたバーニイだろうな…)

とりあえず今回は人材確保にいくことにした…

(ガトーはなあ……正直扱いづらい、下手したら、洗脳なんだよね…
オールドタイプでは最強の一角だけど……

もう少し作戦を練ろう…)

少し先の作品群を連想する…

(ブルクローン達だろ、アムロやシャアもだろ…そういえば宇宙世紀は宝庫だなあ…テイターズは基本除外か…

あとM9も動かす人材欲しいな…

あと二人程ビダンさん要員ほしいし…)

(うっし…)

「11号いつてくるわ」

「いつてらっしやーい」

宇宙歴 0093 3月8日

世界扉を潜りぬけ、扉を消すと、幻影をかけ、宇宙空間にでて、衛
星をコロニーにつけた。

端末をだすと検索…

(お、やはり、スイートウォーターか……)

宇宙空間にはムサカ級があふれる程浮かんでいる。
手近なムサカに取り付き、コピー、艦内
にある、

ギラドーガ、シャクルズCCAをコピーする。

艦の外に出ると…

(レウルーラ…どうやって…あ、)

検索をかける。

「周囲にある宇宙艦で、よりいっそう大きい船は？」

「検索完了、ナビしますか？」

「Y」

無事にレウルーラに降り立ち、艦内にあるサザビーをコピーした。

そうすると…

「おい、総帥の演説が始まるぞ！」

「ああ、総帥……」

「はあ… シャア大佐… 抱かれないわあ…」

空間に浮かぶホログラムによる、シャアの演説がはじまった…

「このコロニー、スウィートウォーターは、密閉型とオープン型を繋ぎ合わせて建造された、きわめて不安定な物である。」

それも、過去の宇宙戦争で生まれた難民の為に急遽、建造された物だからだ。

しかも、地球連邦政府が難民に対して行った施策はここまでで、入れ物さえ作ればよしとして、彼らは地球に引きこもり、我々に地球を解放することはしなかったのである。

私の父、ジオン・ダイクンが宇宙移民者、すなわちスペースノイドの自治権を地球に要求した時、

父ジオンはザビ家に暗殺された。

そしてそのザビ家一統はジオン公国を騙り、地球に独立戦争を仕掛けたのである。

その結果は諸君らが知っている通り、ザビ家の敗北に終わった。

それはいい。

しかしその結果、地球連邦政府は増長し、連邦軍の内部は腐敗し、ティターンズのような反連邦政府運動を生み、ザビ家の残党を騙るハマーンの跳梁ともなった。

これが、難民を生んだ歴史である。

ここに至って私は、人類が今後、

絶対に戦争を繰り返さないようにすべきだと確信したのである。

それが、アクシズを地球に落とす作戦の真の目的である。

これによって、地球圏の戦争の源である地球に居続ける人々を肅清する」

「おおーっ」

「大佐ーっ」

「ジーク、ジーク、ジーク、ジーク」

シヤア、両手で歓声を制し、再び…

「諸君、みずからの道を拓く為、難民の為の政治を手に入れる為に、

あと一息、諸君らの力を私に貸していただきたい。

そして私は、父ジオンのもとに召されるであろう」

「おおーっ」「大佐ー」「あたしもー」

重大イベントを生で見てた…。

(さて…次は…)

衛星を回収し…

”世界扉”

宇宙歴0093 3月10日

再び衛星を設置すると…

ルナ2を検索し、回収して、急いで急行する。

ルナ2艦隊、ミサイル、モビルスーツ強襲により壊滅…まあその中で人材いなかなあ〜と思いたったからだっただ…

クラブ級に取り付くと…

「隊長!!」

「お前なあ…新任だからってこの成績はないだろうっ…」

「すみません…」

（ほう…ビダンさん好みの顔つきだなあ…
うまく戦死してくれれば良いが…）

マーク対象を決めた。

（あと他には…っと…）

他の艦もまわり、何人かターゲットを決めたが…

（全滅でないからなあ…あとは運だのみか…
とりあえず最優先候補は死人がでるまえにいけにえを…
だな…）

『ネオジオン艦隊接近、各員監視態勢に入れ』

「きたか…」

「緊張すんな、坊主」

「坊主はやめて下さいよ…僕にはミーシャ・チャイって名前あるんですから…」

（なるほど…ミーシャねえ…）

『偵察機、ジオン艦隊へ接近』

「さーって鬼がでるか……」

待機室内に緊張感のはしる。

が時間経過につれ…安堵感がはじめ、

「どつやら無事にすみそうだぜ、坊主」

「ですからあゝ」

ビービービー

『ミサイル急速接近！！総員対ショック防御！！MSパイロットは緊急発進いぞけ！！』

「う、マジかよー！！」

「ぼやぼやすんな！！搭乗急ぐぞ！！」

待機室からエアロックを抜け、格納庫無重力ブロックにでる壁を
けって乗機へと向かう。

手には無重力マグネットアンカーを使用して、機体のハッチへと潜
りこむ。

そこへ整備士から、

「ジュネレーター起動してるぞ！！チェックは緊急ですませた！」

「すまん。アドルー！！」

「良いつて事よ、帰ったらステーキおごりな」

「たけえぞ！！機体だすぞー」

『カウント省略します、気をつけて！』

「ありがとうございます…ミィシャ・チャイ出ます！！」シャーイーボフ！！

「へ？」

カタパルトから打ち出されたと同時に…
ミサイルを食らって格納庫ないから爆発の炎が上がるクラブ級…

そして爆発は至るところでおき…

「み、みんなあああああ！！！」

大爆発……衝撃波がジエガンを襲う…

「うううっ」

「はあはあはあ……た、隊長！！、タカヤ！！ドゥーンズ！！アデニア！！バスク！！」
通信に呼びかけるも誰も反応ない……

「チクシヨー！！」
手を座席に打ち付ける。

「ハアハア……こちら、タイタニック所属、ミーシャ・チャイ伍長、所属艦を失いました。生存1機……編入を求めます」

『ミーシャ・チャイ伍長、こちらアドラス、我艦へ編入せよ……コード送る』

「了解……、アドラス」

『奇襲で、艦隊の70%近くが失った、敵をとれ！！やり返すぞ！！』

「了解！！」

ミサイル、主砲攻撃がやむと、敵MSによる突撃へと変わった。

彼がのるジェガンは新人の割にはかなり善戦した。

中々死なないのだった…

(回収できないかな……)

『生き残り全機に告ぐ、全面撤退だ!!
ルナ2は完全放棄、090182へ撤退戦闘の上集結せよ』

「クソー」

『旗艦クラップは艦橋直撃の為指揮行動ができない、
よってアドラスが艦隊指揮をとる』

「うおおお〜」

彼の機体は撤退指示を受けたのに、単機で突っ込み始めた。

『ミーシャ!!撤退だ!!聞いてなかったのか?』

「11のやろじー…」

キラ・ドーガのビームライフル直撃をつけ…

爆散する機体…

カオルは直撃寸前にミーシャをシェルターへと引き込んだ。

カオルは一路ロンデニオンへと急行する。

二日目…

宇宙歴0093 3月11日

ロンデニオン出港する Rondobel 艦隊…
さっそく取り付き、艦全体に広げる。

そつすると格納庫では…

まだ作業中で…

(ふむ…取り付け作業はまだか…)

隅では…

(あ、あのイベントか…)

ケーラ「なんだよ?」

チエーン「スウィートウォーターの放送は嘘だって」

アストナージ「ええっ」

アムロ 「これだ。カメラはロングサイズでしか撮影してないし、砲身もないように見える。ダミーだな」

チェーン 「ということは」

ブライト 「シャアはアクシズに着いている」

ケーラ 「となると……戦闘ね」

アムロ 「ああ、そうだな……」

アストナージ 「よし、機体のチェックいそげ」

アストナージが格納庫のMSに向かって：「ケーラはリ・ガズイの調整に向かった。」

ブライトは考えながら通路を進む。

「ふむ」

「あの、アムロ」

「なんだい？チェーン」

「私室にきてもらえます?」

「ん?」

「最近ご無沙汰だから…今の内に……」

「チエーンはえっちな」

「うんもう…相手してくれないと、乗り換えちゃいますよ?」

「はは、冗談だよ…じゃあ、いくか…1時間程良いだろ」

「はい」

(成る程ね…こういったイベントがあったんか…うし…ついてこう)

プシュー

チエーンが部屋に入り、後を追うアムロ…

扉が閉まると…

「ん!!」

キスをし…

作者よりお知らせです。以後はR18内容に抵触しかねる描写が続きます…

ですので期待してた方には申し訳ありませんが、略…になります。

事後…カオルはほてりあがっていた。

(すごかったなあ……特にチェーンさん……あそこまで乱れるとは……)

「チェーン……」

「なに？アムロ」

「この戦いおわったら…籍に入ってくれないかな？」

(う、プロポーズイベント???)

「え?!?!……そ、それって……」

「ああ、言葉通りさ……チェーン、君が僕の人生において必要だと感じたのさ……
受けてくれるかい？」

「アムロ……」

クチュ…長いディープキス。

「これからの人生、一緒に……うれしいです。…入籍します」

「本当かい？」

「ええ…」

「ありがとう」

二人して裸で室内ですーっと抱き合っている。
あたりには、脱いだ衣服が浮遊してた…

チエーンの目にはうれし涙が流れてた…

アムロ、舌で涙をすくい…

「あん」

「さ、チエーン……そろそろ時間だ……」

「ええ……もつと結ばれてたいけど……」

「戦いが終わったら時間とれるさ」

「そうね……」

アムロは自分が脱いだ服を下着から着はじめる。

チエーンは下着制服類を階級章等外してから、ランドリーボックスに入れると、

新しいのをだして着はじめる。

「付けてあげるよ」

「ありがとう、あ・な・た」

ブラジャーのホックをとめるアムロ。

「まだ使うの早いよ…僕の可愛いチエーン」

「ふふゴメンなさいね…子供何人になるかなあ？」

「そうだなあ…3人かな？、男の子2人と女の子1人」

「あら、女の子2人男の子1人がいいわ」

「どうしてだ？」

「やっぱり、あたしみたく可愛い女の子ほしいじゃない」

「で、僕みたいのに貰われるわけか…」

「うふふ…そうねえ」

チェーンは着終わると、部屋の換気スイッチを押す。
無重力内に浮遊している滴、埃などを気流を発生させクリアーにするのだ。

「準備できたわ…いきましたよアムロ」

「ああ」

室内には意識を残させている、カオルが残ってた…

(チェーンさんね…、あそこでサイコフレーム始動イベントなれば……)

はあ……)

結末を知っている身はつらいのであった…

カオルは気を取り直し格納庫へと意識を向けると…

「オーライ、オーライ」リ・ガズイにBWPが取り付けられた。

「よし、これで自分ひとりでシャアを叩き潰せる」
ケーラだ。

(二人の最後のイチャイチャイベントなんだよね……
それとも出撃前にあるかな?)

「そついうのやめてください。中尉に怪我をされるのが心配で」

「アストナージ、言ってくれちゃって」
抱き合ってキスをするアストナージとケーラ……

『艦隊接近、連邦軍の艦隊確認』
格納庫内に、ブリッチからの艦内放送が入る。

「何処のдарろ？今の時期だと……」

「さあ？」

『告げる、接近中の連邦艦隊は、損傷艦多数、
各員作業一時中断、救命活動にあたれ』

「おい、マジかよ……」

「デッキにでるよ……！」

「ジェガン出せるか……？」

『各員ノーマルスーツ着用急げ……これより5分後にハッチ解放す
る。未着用の者は至急エアロック内に退避せよ』

「救護班準備まだかー!!」

格納庫内が騒がしくなってきた……

その間にリ・ガズイ、ファンネル、ニューガンダム、ジエガン情報を回収する。

ジエガンが二回目なのは、取り付いてみてわかったが、アストナージが改造をいれてたのがわかったからだ…

『接近中の艦隊は、所属はルナ2!!繰り返す所属はルナ2!!』

「ルナ2?おちたんか?」

(ふむ、連邦側は…こんなものか…アストナージほしいんだけどなあ……さすがに死体回収されてるようじゃ……すまん…)

目をつけていた小部屋内に入ると…

「”世界扉”」

………

カオル報告

まとめて行います。

第78話 ニューガンダム編 投稿日20110220（後書き）

作者「ふっつあついあつい…」

ナギ少尉「作者お疲れ〜…本編でプロポーズイベント始めて書いたね〜しかも裸とか」

作者「まあ具体的に書かなきゃ大丈夫だろ…途中は自粛したがな」

ナギ少尉「自粛した内容教えて〜」

作者「こらこら、後書きでR18指定にさす気か?…まあ無重力は色々な技ができるって事よ」

ナギ少尉「……はぁ…私も艦長とかっこはぁとかっことじ」

作者「……（無理だなは殺されるから言えないな）ところで、かっこはぁとかっことじって、

やっぱり具体的に言わないと駄目なんか?」

ナギ少尉「じゃないと相手に伝わらないじゃない」

作者「まあそつだなあ……」

ナギ少尉「さて次回、ナギ少尉と艦長のイチヤイチャエツチイベントの巻、お楽しみに」

作者「うおい、ニューガンダム編2だろうが」

ナギ少尉「作者殺して乗っ取る」

SMGを背後から取り出し、撃ちまくる!!

作者「やっぱり……」チーン

第79話 ニューガンダム編2 投稿日20110221

宇宙歴0093 3月12日

日付かわったあたり…扉からでて、アクシズへと目指す。

アクシズにつくと、まず真っ先に稼動まちの ・アジールを…
そして、ギユネイのヤクトドーガに同化し、時を待つ…

『連邦艦隊接近中、総員戦闘配置急げ!!』

整備士が機体に取り付いた。

「ジュネレーター始動」

フィィイ

「ステータスチェック…よし」

指さし確認…

「推進材…よし」

「オーイどうだぁ?」

あけているコクピットの外から聞こえる。

「各部問題なし、次の機体いっていいぞ〜さてと…」

外に整備士がでた。

機体付きなのだろう。機体の側でまっっている。

『モビルスーツ部隊は艦隊の前に展開』

「ギユネイ」

(きたか…獲物君)

「ほら」

ギユネイが乗り込んだ。

「嘘か真か、すぐにわかるさ…」

ギユネイ、パラメータをだしアイドリング状態になつてるのを確認すると。

「機体動かすぞ!」

とスピーカーオンで外部に伝える。

整備士が離れたのを確認し…

ヤクトドーガを出口方向まで歩みを進める。

『ギユネイ准尉、進路クリアです』

「ああ、ありがとう。ギユネイ・ガス、ヤクトドーガでー!!」

ブアアアア

カタパルト使わずにブーストのみで出た。

『 ・アジール発進用意。各員、第一戦闘配置へ』

スクリーンには、戦艦におさまりきらない巨大MAが、アクシズのハッチから出始めるのがみえた。

「 ・アジール？」

ステータスチェックし…

「あれにクエスがか…」

フライパスした後、MAは発進し、

『ふふっ、来る来る』

コクピット内に配下登録しているクエスの声が聞こえる。
「うおっ！…！」

クエスの ・アジールが猛スピードで通過していく

「加速、スピード、ダンチだな…追いつけないか……調子に乗るな、クエス」

『やることはいっぱいあるでしょ』

ミサイル迎撃する ・アジール…

「先手もってかれたか…」

『何？壁になる奴がいる』

・アジールが、加速後ブースターを切り離したのが漂ってかわしながら

「クエス、そいつはニューガンダムだ、手ごわいぞ」
ミサイル迎撃しながら、追跡する。

『なにが』

「ちい…追いつけないな………見えた!!」

『なんでさ?』

「…ガンダムが避けてる?」

スクリーンには拡大映像でガンダムと ・アジールを移している。

『うつつ、邪魔すんじゃない』

「雑魚が絡んできたか…」

『なんなの?』

「チツ、まだまだか…」

・アジールが、ジエガンに絡んでるのを確認しながらつぶやいた…
ガンダムとの距離は、離れていく。
こつちとの相対距離は縮まってはいるが…

『おつちろ、おつちろ、おつちろ』

「クエス、ガンダムはこつちだ」

ニューガンダムをターゲットロック…

「うつつ」

シールドビームを撃つがかわされ…

「そこまでだ、ガンダム」

ファンネルを放出し

「行けーっ」

ファンネルがガンダムに迫るが、
1個、2個、3個爆発する。

「ちい全部駄目か…逃がすか…!!」

逃げるガンダムを追っかける。

「いつまで雑魚を相手にしているんだ」

『雑魚？』

「ガンダムがそっちにいった、ブラボー、止めてくれ頼む！！」

『了解！！はやくきてくれよ！！』

「ああ、…クエス、最大で来てくれ！！」

『そんなこといったって、時間かかるよ』

「わかってる。雑魚は後回し、まずはガンダムだ！
やつを落とせば、作戦は成功する」

「わかった！！」

「よし…おいついた…ありがとうブラボーリーダー」

『ブラボー1はやられました、代わりに13が受けます』

「済まない…」

ガンダムを射程圏内におさめると…

「ぬけられるか」

残りファンネルを放出する

『大佐のところにはいかせないよ』

「クエスファンネルで援護を」

『わかった!!…!!…!! いけえ!!…!!』

ガンダムがファンネルを展開し、
ピラミッドを形成する。

「なんだ？」

ファンネルのビームが弾き返し…

「なにに？iフィールドか…なら…」

ファンネルを突撃させるが…

「チィ…なんだ？あれは…」

『うっうっうっうっうっ』

「内側から射撃可かよ…クエス、メガ粒子砲!!」

『わかった!!』

ファンネルによるビームシールドは突き抜けるが…ガンダムは避け…

「ちい逃げ出したか、だがファンネルは…クエス!!」

『うつつ、ギユネイ』

「くそ、なんなんだあれは…」

画面ではピラミッドを形成したガンダムが…

「わかっている。ファンネルがなんであんなにもつんだ?」

『そんなんで大佐を困らせないでよ』

「いったい何時になったら破けるんだ?
足を止めてる今がチャンスなのに…」

・アジールのメガ粒子砲にビームシールドが再び破けるが、
ファンネルが再形成される。

「クツ戻れファンネル!!」

肩に戻ってきてきてリチャージに入る。

活動限界を超えた　・アジールのファンネルが活動停止…

「クエス、ファンネル交代させる」

『わかった』

戻る瞬間に、チャンスだとばかりピラミッドを解除し、ブースターをふかす。

「クツ…逃すか…！」

ガンダムのファンネルよりビームが照射され、距離が詰まらない…

「なる…！いけえファンネル…！」
リチャージしたファンネルを再放出、

撃ち合うファンネル達、
そこへ　・アジールのファンネルが追いつき、
またピラミッドを形成する。

『なんなのよ…！卑怯じゃない…！』

「クエスおちつけ、相手のファンネルはそろそろ活動限界のはずだ
」！

『うんわかった…！いつけ…』

残りのファンネルを全て放出してるのが見える。

しばらくすると

「チツ、あのファンネルチートだな…」

ファンネルを拡大…

「先にガンダムよりも、ファンネルたたけ!!」

『うん!!』

ピラミッドの頂点を形成するファンネルに攻撃をしかけるが…

『11の11!!』

反対に迎撃されるファンネルたち、

そして…

ギユネイのファンネルは…限界までいくと…活動をとめてしまった…

「ファンネルがもたないから」

クエスの機体がガンダムへと…

「クエス、無茶だ」

ブースター吹かし応援に駆け付けようと…

「なるっ!！」

『あっ』

「クエス!！」

「よしやっ……」

画面にはシールドとバズーカがうつっていた。

「何?……あっ?」

ギユネイをビーム直撃の直前に引き込む。
ヤクトドーガを離脱すると、爆散してるのがみえた……

(さてと次は……)

戦闘機動を行っている アジールを追跡してるが、
衝突時にATフィールドが展開されそうで、うまく接近できない……
しばらくすると……

ガンダムおっていた ・アジールに、ハサウェイのジェガンが取り付いた。

カオルも機動を止めた ・アジールに取り付いた。

「あんたもそんなことを言う。だからあんたみたいのを生んだ地球を壊さなくっちゃ、救われないんだよ」

ハサウエイのモバイルスーツが正面にまわり、ハッチを開く。

「何？」

『クエス、そこにいるんだろ？わかっているよ、ハッチを開いて。顔を見れば、そんなイライラすぐに忘れるよ』

「子供は嫌いだ、ずうずうしいからっ」

『あっ』

ジエガンを振りほどき…

「嫌な女。お前がいなければアムロの所にいられたのに」

『クエス、降りて』

スクリーンにミサイルが発射されたのが映り……

「直撃！？どきなさい、ハサウエイ」

ハサウエイのジエガンに向かうミサイルから、シエガンを庇って押し退けると…

吸い込まれ……

直撃する寸前にクエスをシエルターに引き込み…
もちろん、ギユネイとは別シエルターだが…

直撃、爆散する。

（3人目：いや戦力としたら1人目か…あとはな…）

そしてカオルはアクシズへと向かう。

（ラーカイルラムきたか…）

アクシズに接近中のラーカイルラムがみえた。

（となると…）

ノズル方向へ急ぐと…

ドドーン！！

核搭載艦が爆破、巨大な閃光があがる。

（ほほーたまや〜）

（いた！！）

切り合っているガンダム、サザビーを発見する。

（お〜お〜一方的だなあ…）

アクシズから爆発が起こる……

(あ、動きが鈍く)

ガンダムが背後から襲いかかり……

サザビーはアクシズに打ち付けられ、
機動不能になったサザビーから
スクランブルポットが射出される。

カオルは……戦闘に負けた、

シヤアのスクランブルポットに取り付くと、

同時にニューガンダムからのトリモチ弾がくつついた……

「捕まった？しかし、もう遅い」

外ではロンドベルによって爆破されたアクシズが、
デブリを撒き散らしながら分断されていく……

カオルはニューガンダムに移動し直す……

「シヤア、貴様の負けだ」『まだわからんさ』

「ふっ、負け惜しみを見る、アクシズは分断され、軽くなり地球に
は落下しない、どこが貴様の勝ちだ？」

『フッフ……フハハハ』

「なにを笑っているんだ？」

ニューガンダムの手を持ったサザビーのスクランブルポットから、
シャアの嘲笑とも取れる笑い声が聞こえる

『私の勝ちだな。今計算してみたが、アクシズの後部は、
地球の引力に引かれて落ちる。貴様らの頑張りすぎだ』

「なにい？」

ラーカイラムからのデータを送って貰い…
顔が青ざめる…が、

「ふざけるな。たかが石ころひとつ、
ガンダムで押し出してやる！！」

『馬鹿な事はやめろ』

「やってみなければわからん」

『正気か？』

「貴様ほど急ぎすぎもしなければ、人類に絶望もしちゃいない」

『うわああっ…アクシズの落下は始まっているんだぞ』

アムロは、脱出ポットをアクシズへと押し付け、

ニューガンダムでアクシズを支えようとバーニアを噴かした。

（この位置で固定か…）

ワイヤーが繋がって触れ合い通信状態になつてのを確認すると…

ワイヤーに身体を伸ばし、ポット全体にも身体を引き延ばした。

「ニューガンダムは伊達じゃない」

限界までバーニアを噴出させるニューガンダムだが、
たかが一機……アクシズの落下は止まらない。

『やめる、何やってんだ？』

「ガンダムでブースター最大でふかしてるんだよ！」

『たかがMS一機のか？正気でないな』

「貴様は、黙ってる！！」

『無駄だ、アムロ、君は離脱しろ』

「命がおいしいのか？命ごいか？シャア！！」

そのうち摩擦熱でガンダム、アクシズが赤くそまる。

『命が惜しかったら、貴様にサイコフレームの情報など与えるものか』

「なんだと？」

『情けないモビルスーツと戦って勝つ意味があるのか？
しかし、これはナンセンスだ』

「馬鹿にして。そうやって貴様は、
永遠に他人を見下すことしかないんだ」

サイコフレームの光が機体の外から、のびてくのを感している。

『ふ、サイコフレームの力でもってしても無駄だということだった
な…アムロ』

「いや、無駄じゃないさ、ガンダムならできる、
いや、やってみせるさ…！」

『まだわからんのか！！もう重力の力に引かれている。
いくらガンダムでも推力は限界はあるだろう』

「シャア！！ガンダムにはなあ、奇跡の力があるんだよ！！」

『はっ？奇跡だと？君、とうとういかれたか？君の機体は何処で作られた？アナハイムだろう？所詮人間がつくったものさ』

「人間がつくったってなあ！！………援軍??」

『ふっ援軍か……今更遅いな』

「えっ？まさか…おい…」

『なんだ？アムロ、状況を教えてくれたまえ、
こっちは君のガンダムに機体壊されて状況がわからんのだからな』

援軍にきた、ジエガン・GM？達が、
ネオジオンを見殺し、次々とアクシズに取り付きはじめ…

「なんだ？どういうんだ？」
更に次々アクシズに取り付く。

「やめてくれ、こんな事に付き合う必要はない。
さがれ、来るんじゃない」
降下速度が次々落ちる。

身体で感じるぐらいだ。

『なんだ？何が起こっているんだ？』

『ええい、完全な作戦にはならんとは』

スクランブルポット内部のシャアは、

スクリーンが見えず…いらついているのよね…

『ロンド・ベルだけにいい思いはさせませんよ』

「しかし、その機体じゃあ」

そして……敵であるギラ・ドーガまでもが、

同じようにアクシズに取り付き、バーニアを噴出し始めた。

「ギラ・ドーガまで。無理だよ、みんな下がれ」

『地球が駄目になるかならないかなんだ。』

やってみる価値ありますぜ』

「しかし、爆装している機体だつてある」

「駄目だ、摩擦熱とオーバーロードで自爆するだけだぞ」
だが、アクシズは降下速度を緩めてはいる。

自爆覚悟ですればうまくいくかもしれない…

「もういいんだ。みんなやめろ」

しかし…ニューガンダムに劣る性能の機体は…摩擦熱に耐えられず、

真っ赤に染め上がり、ボン…!

爆散してしまった…

その爆発の光がちらほら見えはじめ…

「爆発する、もういいんだ!! 離れろ!!」

『へっ、ここまでできたら…うわぁ!!』

爆発した機体からだろう…

『ああ、命をとして、やれる…』

また通信が途絶…

しかし、あきらめる機体はいない…

『やれるだけやってみます!!』

『あぁっ!!』

『命がけでな!!』

『そっだそっだ!!』

が、また跳ね飛ばされ、アクシズの岩壁にたたき付けられ爆発…

機体がリタイアする度にアクシズの降下速度の落ちは少しずつなくなる…

『結局、遅かれ早かれこんな悲しみだけが広がって地球を押しつぶすのだ』

「やめてくれーみんなー!!」
また耐え切れず機体がふつとばされる。

『ならば人類は、自分の手で自分を裁いて自然に対し、地球に対して贖罪しなければならん。』

「頼む!!」

また一機爆散、いや三機…

『アムロ、なんでこれがわからん』

「離れる、…ガンダムの力は」

そのとき！光の粒子がニューガンダムから噴出した…

その光は…コクピット内部にもあふれ…

『こ、これは、サイコフレームの共振。人の意思が集中しすぎてオーバーロードしているのか？

なのに、恐怖は感じない。むしろあたたかくて、安心を感じるとは』

アクシズに取り付いていたモビルスーツを優しく保護するように、跳ね飛ばし始めた。

「何もできないで、おあっ」

光のまわはモビルスーツをアクシズから離し、寄せつけない…
また、他の機体からの通信も途絶させてるようだ…

いくつものモビルスーツがアクシズにたかろうとするが…
たかれない

『そうか、しかしこのあたたかさを持った人間が、地球さえ破壊するんだ。』

それをわかるんだよ、アムロ』

サイコフレームが暴走状態になり、コクピット内が赤い粒子が走りだす。

「わかってるよ。だから、世界に人の心の光を見せなけりゃならぬいんだろ」

(そろそろか…)

『ふん、そういう男にしてはクエスに冷たかったな、え？』

「俺はマシンじゃない。クエスの父親代わりなどできない」

「だからか。貴様はクエスをマシンとして扱って」

『ラリア・スンは私の母になってくれるかもしれない女性だ。そのラリアを殺したお前に言えたことか』

「お母さん？ラリアが？うわっ」

機体が耐え切れず、爆発する瞬間、アムロ、また触れ合っていたシヤアを引き抜いた。

シヤアはクエスのシエルターへ…

サイコフレームが…意思の力が地球を包んでいく…

(ふう…)

カオルはサイコフレームの力に包まれているアクシズから離れ…

手近な艦へ…

艦内に入ると、

「やった！！やりやがった！！コンチクショー！！」

「地球は救えたんだ！！」

「英雄どもを迎えるぞ！！」

「ああ!!」

大勝利ムードにあふれる艦内…

手近な倉庫内部に見をだすと…

「世界扉」

カオルは世界扉を潜る

…

カオル報告

ニューガンダム編まとめ

ヤクト・ドーガ

ギラ・ドーガ

サザビー

ニューガンダム

ジエガン

リ・ガズイ

ラーカイラム

クラップ級

ムサカ

レウルーラ

第79話 ニューガンダム編2 投稿日20110221（後書き）

作者「最強のニュータイプ無事に取得できたなあ」

ナギ少尉「ねえ、カオル君狙われなかったの？」

作者「あの状態なら無理…と思う…セーフ…な場面に介入したんだよ」

ナギ少尉「ふん…ずいぶんとギユネイが活躍してるんだ…」

ニューガンダムのDVDを見ているナギ少尉

ナギ少尉「ずいぶん出番が増えたのね」

作者「あくまでも、取り付いている人物に集中してるからなあ…」

ナギ少尉「で、クェスとシャアのフラグたて？」

作者「ギユネイは…決まってるな…帰ったらリタイヤが…」

ナギ少尉「次回、異世界軍初の死者、魂よ逝け…お楽しみにい」

作者「ちよ… 確実なサブタイトルだすなああゝ修正！！ニユーガン
ダムより帰還処理… お楽しみにい」

ナギ少尉「作者… つくづくだけとサブタイトルセンスない」

作者「うっせ… 毎日サブタイトル考えるの大変なんだよ！」

帰ってきて…

ボタンキューは定番…

「マスター、またぶっ倒れてる……」

「次は誰呼ぶ？」

「出遅れてるのまりもちゃんだよね？」

「プロポーズされてるから、それまでに済まさない」というか、モニターしてるんだ君達…

「うん作者！！僕たちなめないでほしいなあ」
えっへんと踏ん返り返るコバツタ達。

「とりあえずチャンスだよ」

「まずは、まりもちゃん、次にイッシーけしかけて…」

「ぼく、発情する眉葉呼吸系しかけてくる」

「さあ…頑張るぞー！」

「おー」「おー」

「えっほえっほ」「おいらはでっかいぞー」「へいへほー」「アイ
デアバツチリよ」「へいへほー」

「ほっしいよほっしいよ」「赤ちゃんがあ」「絶対みるんだ」「か
わいいなあ」

コバツタ達の歌とともに、私室へ運ばれていくカオル…

＝＝まりもちゃん私室＝＝

コンコン

「はっい、どっぞー」

「失礼しますー」

「あら、11号ちゃん、どうしたの？」

「まりもちゃん、マスターの事好きなんだよね？」

「／／／え、ええ……」

「今日決めないと、マスター持ってかれちゃうよ」

「えっ？どつして？」

「実は、マスター、プロポーズされてて、揺れ動いてるんだよ」

「ちょ……誰によ？」

「殿下」

「殿下……？」

「うん」

「……………勝てないわねえ」

「いやマスター責任感あるから、やっっちゃえば勝てるって」

「やっちゃえば……か……え？なに？あなた達応援してくれるの？」

「うんー！」

熟考するまりもちゃん……まつ11号……

「わかったわ…案内して」

「よっしゃあゝじゃあ案内するね」

案内する11号に続く、覚悟を決めた表情のまりもちゃん…

カオル君の部屋に入り

「じゅっくりいこ」

「どっ？11号案内した？」

「うん。眉薬は？」

「ばっちしー！ー！」

「仕上げに…」

扉にセキュリティロック表示が変わる。
これで保安室からの遠隔操作のみになる。

「赤ちゃんがぁ」

夜はふける…

翌日2001年8月25日

(ん~~~~むにゅ?)

カオルは、かなり気持ちよく睡眠状態から覚醒し始め…

(むにゅむにゅむにゅ)

夢心地ながら、右手の感触がいい……

カオルは目を覚ますと…

目の前に、まりもちゃんの寝顔が…

「!?!?!?!」

ビックリして飛び起きるとシーツもはいでしまい…

まりもちゃんの素肌が眩しい…

そう裸だった…

カオルが下に目をうつすと…そそりたつくバキュン…

！)……裸??…やっちゃったの?!?!あ、<バキュン>!

カオルはゴミ箱を急いであさると…

(ない……って事は?)

1……やってない

2……<ばきゅん>

3……<ばきゅん>で赤ちゃん…

(でも…2、3なら……責任とるべき……か…)

「クシユン」

くしゃみとともにまりもちゃんが目をなまこ…「くくくくく」目をなまこして…

「あ、おはようございます…カオルさん」

「あ、おは…よう…まりもさん…」

「ふふ、まりもって呼んで下さい…昨日のよう」

「えっと…その…」

「昨日は気持ちよかったです」

「えっとくバキュン…で？」

「ええ、いっぱいいただいたちゃいました」と、まりもちゃんお腹をさする。

カオルは理解し…

「すみません責任とります！…」

「ふふ…とってね」

「はい！…ただ…」

「ただ？」

「イッシー…石橋とも関係が…」

「マスター、それ大丈夫になるよ」

「キャあ」

「う……11号」

「あ、それ隠してね」

「お…う」

カオル、タオルで下半身をくるむ。

「うんで？」

「重婚の時限立法の話聞いたよね？」

「ああ…」

「成立する見込みだから、安心して二人、いや三人と関係続けてね、マスター」

というだけいったら、さっさと出ていく11号

「ふふ…そうなんですネ」

「はは…とりあえず着ましようか」

「シャワーかしてね」

「はい……どつぞ」

シャワーを浴びにはいるまりもちゃん…

(あゝもう…俺は何人と結婚すんだ??)

そここう考えてる内に、シャワーからあがってきたまりもちゃん…
衣服を着はじめ、

「じゃあ、また…よろしく…ね」

「はい」

でシャワーを浴びにはいる……

(しっかし…二回とも記憶が無いときって……はぁ…orz)

シャワーを浴びたあと、下着をだしPXでご飯を食べたあと…

戦艦ドックに向かう。

シャア大佐とクエスの入ったシエルター、
アムロの入ったシエルター、ギユネイの入ったシエルター、
ミーシャの入ったシエルターをだす。

最初に出てきたのがアムロ・レイだった…

「初めましてアムロさん。異世界へようこそ…是非とも助けたい
だきたいのですが、よろしいですか？」

「ああ、僕のちからでよかったら貸してあげるよ」

「ありがとうございます」

次に出てきたのがギユネイだった

「初めましてギユネイさん、異世界へようこそ。異世界軍へ加入し

てもらいたいのですが、よろしいですか？」

「俺様が力をかすから、大船にのったつもりでな……
ガンダムなんか目じゃないさ!!」

「じゃあ、この者が宿舎に案内します。準備できたら、特殊任務がありますので、ハンガーデスクへお願いします」

「ああ、わかった」

(あと二組かぁ……)

コンコン「シャア大佐くクエス」

無言……

「どうした？カオル君」

「反応なしなんすよ……」

「このシエルターは？」

「と、シャア大佐とクエスが入ってます」

「シャアとクエスが!?!?君、シャアは間違いをおかしてるとおもわなかったのか?？」

「おかすように、仕組みました」
「ちなみにシャアが発情ワインのむようにおいてただけど……」

「しかし、クエスカ…彼女も死んでたんだな……
過去に死んだ人物も既に加入済みなのか?」

「アムロさんが関わってる範囲なら、スレッガー中尉、レビル將軍などですね」

「スレッガーさんが!?!?…レビル將軍までもか……
10年以上前だと……」

「あ、つい最近なので、反対にアムロさんが年上のはずですよ」

「カオル君……つくづく君は異常だな」

「まあよくいわれます……にしても、ここの室内から反応ないと……ど
うしましょ?？」

「シャアは、シスコン、マザコン、ロリコンだから、突入すべきと
進言するが……」

「……すごい言われようですね。じゃあ……30秒後に突入しますよ」

30秒後…

部屋にはいると

シヤアが裸で床に転がっていた…

つんつんピクッ

(生きてるな)

クエスは…っ…

ベットで、すやすやしてたので、

「11号」

とわたされたハリセンで…

パカーン

と叩くと…

「いったあゝい」

とクエスがおきてきた。

「クエスさん、隠して下さいね。…準備できたら表に来て下さい」

で床に転がってるシャア大佐をふんで…

「ぐえー!!」

とりあえず表にでる。

待っていたアムロさんに…

「間違いおきてますね」

「あのロリコンめ……」

(ん…あとはミーシャか…)

ミーシャが表に出てきたので、
加入の意思をとい、特殊任務をとの処置になる。

改めて、クエスが腕にだきついてシャアが出てきた。

「アムロ!!何故貴様が?」

「アムロ?」

「クエスパラヤさん、シャア・アズナブルさん、加入の意思問いますがよろしいですか?力を貸して貰えます?」

「むづ……わかった」

「大佐が加入するならついて行くよ」

「よろしくお願いいたします」

「シヤア、中でどうなってたんだ？」

「……」「アムロには関係ないでしょ」

「貴様、散々能書きたれてたよな？」

「むづ」「能書き？」

「いや……それは……」

「それなのにクエスさんと何でだ？」

「しって」「あたしが大佐襲ったの……！」

「クエスさん?!?!」「クエス!おま」

「大佐つたら逃げてばかりだったから、あたしからよ、なら問題ないでしょ?」

「しかしだな…」

「いーの、大佐はわたしの物!!
近寄ってきたら蹴り飛ばしてやるんだから」「物…」

「……わかった…責任もって娶れよ」

「な!?!」「娶れ……結婚!?!?!?…ねえ大佐いつ結婚するの?」
「赤ちゃん作りましょ」

「で…カオル君、次は?」

「シヤアさん、クエスさん、アムロさんには、
それぞれ別動隊か、単独で…と思ったんですが…クエスさんはシヤ
アさんの下に、ついてもらった方がよさそうですね」

「やったあ」「だろうな」「僕もそう思う」

「アムロさんは、シャアさんと同格に大佐として、
クエスさんは…大尉として…ですね」

「ああ」「うん」

「で専用機案なんです…」

「専用機?? わしも混ぜて貰おうか!」
ドズルさんがきた。

「な!! ドズル?」「え? 僕が…」「ドズルって…ええっ?」

「あゝソロモン戦から引き抜いてきました…シャアさん過去は忘れて下さい…」

「ガハハハ八そうだぞシャア」

「……おい、後で話が…」
とカオルにささやくシャア…

「はい。……で専用機なんですけど……」

ズラーツと取得情報を見せている。

「ほう……」「なっニューガンまで」「あゝザクがある」「ワシはビグザムかなあ」

「ビグザム？……すみません……制約があるので……勘弁を」

「制約」*3「ビグザムじゃ」

「ビーム兵器がBETAの親玉にいられると、対抗手段として発展を促しかねないので……」

まあそれと同様に各エネルギーシールド系統もですね」

「ふむ」「あたし かな？」「ビグザムorz」

「つまり、カオル君、ファンネルとかも禁止、ビームサーベルとかもか？」

「そうですね……あくまでも実弾兵器による、火力でと思って下さい。……ファンネルもその条件なら……と……」

解禁があ号攻略戦から…ですね」

「ね、ねえ大佐これはあ？」

「ん??…カオル君、なんだね？小さいのは…」

「ん？エステバリスですか…これは操縦に条件いるので無理ですね…そいつの技術を使って、
魔ドムをだす…」

「これは強化してますが…」

「ほう…」「あたしこれかなあ…きんきら」「ドムにってるな…
いじったのか…」「わははは我が軍の技術は宇宙…」

「先に共通武装で、ビームサーベルの代わりに高周波ブレード、あとザクマシンガンを使っています」

「で特殊な条件が…」
アーバレストをクリック。

「この注意事項のように表示されますので」

ドライバ…薬剤による強化、

もしくは波形マッチング専用化の上、訓練が必要。
訓練時間目安700時間

ドライバをクリック…力場を形成、火力増強、シールド、等に使える。

「で、利用可能技術が…」

一覧がでる。

「こんな感じですね……標準魔ドムに使ってるのが…」
標準仕様がでる。

「なので…まあ選んでいて下さい」

「ところでカオル君、ガンダリウムとか何処で製造するんだい？」

「ぼくたちいいい」

「可愛い 大佐ほしいな」

「かれらコバッタたちと、ナデシコ技術の詰まったプラントで製造しますので、

その点は気にせずに…っすね」

「そうか……なら」「アムロ、貴様の機体ニューに」「シャア、聞いてなかったのか？ 殆ど使えなくなるぞ、サザビーだって」「ああ…」「ワシはビグ」「しっこい」「

「あ、ギユネイ？」

「クエス!!? ……大佐まで…」

「へへーん、ナナイがないからあたしあげちゃった」

「な!!!大佐」

「ああ…すまんな」

「大佐!!!」

ポンとカオル君肩たたき…

「あきらめが肝心だよ…ギユネイ…」

もっと素晴らしい事がまってるからな…」

「……素晴らしい？」

「うん特殊任務さ…ついて来て…あ、後で聴きにきます。11号ア
ドバイス頼むよ」

「了解」「ああ」

「カオルさん」

ミーシャがきた。

「ミーシャさんも…っすね…じゃあいきましよう」

「『ヒルダさん執務室』」

「失礼します」

「あら、いらっしやい」

舌なめずりするヒルダさん。

「で特殊任務だけどこ - 01部隊に配置のうえ、隊長であるビダン

さんに協力する事…いい？」

「はー!!」「了解しました!」

「じゃあ…あとよろしくお願いします」

「ええ…さて…まずは身体検査ね…全部……」

(これであと16人か?そういえば、
バーニイとスレッガーみてないなあ…医務室か?)

「|| 医務室 ||」

医療カプセルには…想像とおり、二人がおさまっている…

「…この二人の状況は?」

「あ、はい……その…ようはあれでノノノ」

「ああ、それはいいよ…どついったサイクルで?」

「二日でなんとか出たら、すぐに翌日朝イン…ですね…」

正直、このカプセルがなかったら、死んでもおかしく無いです」

(ふむ……完全回復には3日入らなきゃいけないのか…
となると今のC-01でギリギリか…)

ヒルダさん容赦ないね…

「ん…わかった。ありがとう」

ハンガー戻ると……

まだ決めかねてるみたいで…

「シヤアさん〜?」

「ああ、……あれ明日にしてくれ」

「あ、了解」

「ここはここか?」

「アム口余計な事すんな!」

「いいじゃんかよ」

……

カオル報告

いけにえ部隊に2名加入しました。

作者「ふゝこれなら大丈夫か…」

????「大丈夫じゃ無いわようう!!」
ドカツバキツぶっ倒して電気アンマ

「チヨグボオいで…ギヤアアア」

イッシー「あたしのがんばりはどうなるのようう」
ビビビ…離れて脇腹に強烈なトウキック

作者「……………」死亡中の様だ

イッシー「このくそ作者!!」
顔を踏みつけ…………骨が砕け…

11号「まあまあ…落ち着いて」

イッシー「あん?!?!?!…だいたいあんた達もねえ」

11号「けしかけなきや殿下にとられたよ?」

イッシー「?!?!殿下?!何それ?!」

11号「ほらこの話……」

イッシー「……うそ……」

11号「だから今度はイッシーの番だからね……頑張って」

イッシー「うん……」

11号「さて、次回…作者がグロい状態になってるので復活してか
らになります、
時すすむ為には、整理が大切だお楽しみに」

第81話 状況整理 投稿日20110223

2001年8月26日

(そういえば今ってどうなってるんだっけ?)

と思い始めて整理する事にした...

ようは現時点での設定資料.....

っつわけだ...

今更かよ...は勘弁して下さい。

「11号...今日はデスクワークだ...以外は明日ね」

「はい」

(まずは...戦力情報から...か)

作注 多分見落とし無いとは思いますが、80話以前の話についての見落としやらの場合、

追記しておいた方がよい場合は、随時変更あると思って下さい。

人員情報

B-01...女性部隊

隊長ミリーリテシア中尉以下 31名...55時点

C-01...いけにえ部隊

バーニイ専用機有、スレッガー、ギユネイ、その他1

ジャーナル大隊

ラトロワ以下

歩兵部隊

ガンパレ組から

桜井小队27名

ビツクネーム

アムロ、シャア、クエス、ドズル、ティアンム、レビル

航空兵6

学兵

172名

レビル16ティアンム6

後方支援

看護兵6

整備兵9

MP3

情報オペレーター5

コロニー公社8

コック3

開発室5

経理2

直接戦力

地上

ベースジャバー改 700 詳細57

魔フライングアーマー50 詳細57

魔ドムB-01分

魔グフ

魔グフ(MPV)

陸戦強襲型ガンタンク 864

ザメル 80

烈火改 ガンパレ歩兵組分

ビクトレーミサイル仕様 詳細52、53話

ハーベスト改 詳細52トウアハー・デ・ダナン 詳細67

ハイゴック改 詳細67

宇宙

サラミス

サラミス改 21隻

ムサイ

サラミス後期型

マゼラン

セイバーフィッシュ

ザク改

ネモ 2機

補充中ネモ36機

セイバーフィッシュ108機

後方支援

多目的作業挺DF付き操縦席なし 7機

作業用ジム重力波アンテナ仕様15機

作業用反重力多目的トラック20両

テンプレーション 760隻

メデュシン改 2隻 詳細49話 57

魔ミデア2 詳細57

チューリップ

予備1

木星行中

アステロイドベルト

L3 , L4 , L5

施設系

地上

マストライバー5基

追加滑走路2本

新空港施設2

同滑走路2

港湾施設

地下

戦艦ドック3層

資材エリア2層

格納エリア1層

ジオフロント1層

コロニー

L5

密閉型農業コロニー

開放型農業コロニー

開放型自立コロニー4密閉型工業コロニー

建設中開放型自立コロニー 73話

その他入れ物コロニー 73話
補給ドック

資源入手先

鋼材その他系 アステロイド 在庫ほぼ無限
ヘリウム3 無し 在庫 MS1019機 半年連続稼動分へ生産
時入れる量

提供済

撃震帝国仕様 詳細62話

開発済技術情報

次に取得済技術情報：

機体別詳細に関しては後記

技術

18話

プラント

無人兵器製造技術

テラフォーミング技術

重力波エネルギーアンテナ

グラビティブラスト
相転位エンジン

第32話

ガンパレ世界の武器

第38話

マスドライバー関連技術

第40話

グラナダ技術

第44話

ターミネーター生産技術

第51話

鋼鉄の咆哮2pの技術

第70話から71話

レイバーアタッチメント系

第77話

99式

機種一覧

15話取得

MS-05

MS-06C

M S - 0 6 F
M S - 0 6
J
M S - 0 6 F Z
R G M - 7 9 ジム
ザメル
ハイゴック
ホバートラック
量産型ガンタンク
ジムトレーナー
6 1 式戦車
マゼラアタック
ザクトレーナー
アツガイ
陸戦型ジム
陸戦用ジム
ジム・コマンド (宇宙・地上) ビックトレー
ギャロップ カーゴ付き
サラミス、
サラミス後期生産型
マゼラン
ムサイ
ユーク
マッドアングラー
ザンジバル
H L V
ガンキャノン量産型
ザク・デザートタイプ
ザクフリッパ
グフ

ドム

リック・ドム

ゴック

ズゴック

陸戦強襲型ガンタンク

グラブロ

セイバーフィッシュ

18話

エステバリス

陸戦フレーム

空戦フレーム

OGフレーム

重機動フレーム

23話

アレキサンドリア

ハイザック

ガルバディベータ

アーガマ

リックディアス

サラミス改z

ジム2

爆弾カプセル

第24話

ジムカスタム

ジムキャノン2

百式、

フライングアーマー

グフ飛行試験型

ネモ

マラサイ

カントク2

ガンキャノン重装型

ジムスナイパーカスタム

作業用ジム

ザクタンク

アツグガイ

シャトル

アウドムラ

第25話

ベースジャバー

ドダイ改

アツシマー

第32話

アーリーFOX

スノーFOX

FOXキット

テンダーFOX

可憐

武尊

栄光号（通常型）

可動式ウォードレス着用車両

第38話

テンプレーション級シャトル、
同貨物型

第39話

ドゴスギア

ガブスレイ

ムサイ改

チベ改

第40話

Zガンダム

メタス

Gディフェンサー

メツサーラ

第43話

ハンターキラーエリアル

偵察用エアロスタット

第44話

T - 850 - 101

T - 850 - 110

T - 1000

T - 1100 - 101 102

ハンターキラー四足

モトターミネーター

ハーヴェスト

トランスポート

第46話

メデュシン

第51話
ドック艦

第55話
ミデア改修型
ザクスナイパー

第59話
レールガンハ砲台タイプなのでこっちゃん

第65話
サベージ
アーバレスト
M9
トウアハー・デ・ダナン

第66話
量産型ボン太君

第68話
ジオング
ザンジバル
ゲルググ
ドロス級
ビグラング
オツゴ
パブリク

第70話から71話

レイバー

第73話

ビグザム

第74話

ケンプファー

FAアレックス

第78話

ギラドーガ

ジエガン

クラップ級

ラーカイラム級

レウルーラ級

ムサカ級

リ・ガズイ

ニューガンダム

第79話

ヤクト・ドーガ

・アジール

第81話 状況整理 投稿日20110223 (後書き)

カオル「本当に設定資料で終わらせたね…しかも手抜き、詳細は…とかさ」

作者「ふははは後悔はしてない……………してます…はい…」

カオル「ねえどうなん？」

作者「うつせえ！！前と見比べて大変なんだよ！！」

カオル「おおう逆ギレ…で世間では？」

作者「明日の話に多少前後して埋め込む…で明日は、一日進める予定。

今回の設定資料だ！！」

カオル「で？作注のは手抜きと言えない？」

作者「いえるなあ……………まあ……………次の話にいきましょう」

カオル「逃げたな」

第82話 謀略始動 投稿日20110224

2001年8月26日での

他の人の出来事は…

まだ専用機があーでもない、こーでもない。
で決まってるない…って事だった。

シヤアさんからは、すまんな明日…って事らしい。

2001年8月27日未明

〓〓アメリカ情報局〓〓

「例の戦術機はどうだ？」

「は！！研究者からの報告によると、素材、材質、技術共々、
現在の工場設備では開発生産不能の結果がきてます」

「むう………」

「唯一利用可能性があるのがOS…という事でしょうか…
研究者からの話では生産施設に秘密があるとか…」

「やはり横浜を押さえないければか………」

「そつといえます」

「少々早いが計画進行させよ」

「は…！」

2001年8月27日

「B55ハンガー」

昨日仕事放棄してたので、今日はいくつかの懸案を処理する事になる。

まずは、道路整備許可がおりたので……

「11号、道路整備レイバー用意よろしく」

「了解…そのまま？」

「ん？……バッテリー駆動に変えといて」

「了解……ただ途中充電スタンドとかもつくってほしいな……」

「そっか……発電所作っちゃう？」

「リニアいれるなら必要だね」

「ふむ……地上で作れるとしたら、MSジュネレーターの拡大版？」

「が正直燃費がいいかも……必要出力は10GWかな……」

「それつくると、どのくらい燃料くう？」

「えっとね……高性能ジュネレーター技術あるから4000機分」

「たりねーよ」

「もちろん、いきなり10GW必要でないし、9月にはつく予定だから作っておくべきだよ」

「ふむ……わかった……じゃあつくってこいってくれ……
で規模は？」

「100m100m40mあれば、足りるよ…あと制御室用地ね」

「資材エリアにつくる？」

「了解」

とりあえず大規模発電所、
及び道路建設用レイバー改の作成がきまった…

「カオル君いいかね？」

「あ、シャアさん…なんですか？」

「ザビ家の事なんだが…」

「はい…」

「君はギレン、キシリア、ガルマ等も入れるつもりかね？」

「俺としたらガルマだけですね」

「あいつをか……」

「シヤアさんは、どう思ってます？10年近くたってから……」

「ザビ家に対する復讐で、1番真つ先に手をかけたが……
わたしとしては過去のすんだ事だ……
癌の二人がこないなら、この世界に連れてきても良いぞ」

「ありがとうございます」

「あ、ラリアは生き返る事できないかね？」

「すみません、無理です。特にあなたや、別の方も影響受けるので
……」

「……そうか……わかった」

「でも、ラリアさん連れてきたら、クェスさんどうするんすか？」「
ビッグと反応して……」

「ク、クエスはまあなんだその…一方的に襲われてだなあ…」

「ふうん大佐そんな事いうんだ」

「ク、クエス」

「あゝあ、あんなに大佐から求めてきたのになあ昨日も…」

「クエス!!」

うんろりコン決定ですな…

「とりあえず夫婦部屋作りますので…あとはそちらで…」

「君!!」 「やったあゝ大佐、毎日できるよ」

「決定事項です」

「ありがとう カオル」

ため息つく大佐…

「あ、ところで、シャアさん、クエス、専用機の話、決まったんで

す？」

「まあ私はな…」

「まだ〜」

「どんなのになりました？」

「基本百式だが、強化案で、サイコフレーム、ドライバをいれてもらおうかと…」

あと、ローラーダッシュも面白そうだな。」

「ほうほう… ドライバ使いこなせます？」

「使ってみなきゃわからんだろう？わたしにとって未知の力なんだし」

「ですね…わかりました。それで注文してきます。クエスは？」

「やっぱり から離れられない〜」

「う〜ん…じゃあシヤアさんとおんなじ機体にする？」

…で赤みかかったゴールドにして…」

「あつ、それいいかも」

「ふむ、クエスそれにするか？」

「うん 大佐と夫婦の機体だよ」

「じゃあ…お二人の愛の巣つくっておきますので」

所帯者用の寮をつくりにいきました。

一棟120部屋分

あとの二棟は独身寮…って事で

作りおわると、

「バーニイ」

がデスクにきてた。

「カオル、久しぶりに外でれたよ」

「あははは……」

「新しい人がはいつたから何とか回るよ……けど、ギユネイ大丈夫なんかな？とおもつ」

「ギユネイが？」

「ああ、一日で精根尽き果てて、すぐに医療カプセル行き。完全復活まちらしいね」

「……ふん」

「おれらは、まあ回復でカプセルに入る事になるが、半日強入ってればにおさまったからなあ」

「ビダンさん……そんなに凄いだ……」

「ああ、あの人本当に人間か？と思う位だよ……おまけにさ……もう……あの人は生きていけないよ……
本当にさ」

ヒルダさん、クレオパトラ並にレベルアップしました。

「まあ…あとはギユネイのペア探してもらえれば…かな？
ただし、戦闘参加はまだ厳しいものがあるね」

「か…わかったよバーニイ…今日は？」

「俺の番さ…さてお相手してくるよ」

「頑張つてね」

と、虚数空間からハンカチをだして見送りました。

2001年8月28日

「マスター…情報室に…」

「どっかで侵行気配か？」

「いや…もっと厄介なんだけど……」

「情報室」

「で？」

「帝国内でクーデターの気配あり…」

「はあ？……何故に…」

「青年将校達による決起だね…で、CIAによる後押し」

「はあ…何やってんだか…で参加しそうなのは？」

「帝都守備連隊や、富士教導隊等…」

「……人死にでるか？」

「間違いなくでるね…」

「で、いつおこる？」

「検討した結果、アメリカ第7艦隊が、日本近海にきてからが1番可能性が高いよ」

「具体的には？」

「約10日後」

「9月6日頃か……
防げそうには？」

「もうないと思う……第一、外への工作できないから……
あとさ……今この時点で、逮捕等がおけると間違いなく……」

「先走って、未統率のクーデターがおこるか……」

「しかも、全員同時に逮捕等できればいいけど、統率力をかいたら……」

「下手したら民間人にか……」

「だね……だから、クーデター起きる前提で、対策とった方が被害は少ないと思うよ」

「そうだな……」

「そういった事だから未然には…あきらめてね」

「たく…対人戦術考えなきゃいけないのか…
なるべくなら捕縛考えたいな…」

「捕縛でいくの？」

「ああ…そりゃそうだろ…後で利用価値もある。
となると…歩兵用、車両用、戦術機用、あと航空機用か…
航空機は飛び立てさせないしか…無力化できないなあ…」

「歩兵用は？」

「トリモチとか、放水銃だろうね」

「車両は？」

「キヤタピラやタイヤさえなんとかすりゃあ良いだろ。
瞬間接着剤なんかぶち込めば」

「砲が残ってるよ」

「なんか詰めばいいんじゃない？」

「戦術機は？」

「スタンスティック位しかないだろうな…ブレードだと爆発の恐れあるし…」

「トリモチや接着剤じゃ動き鈍らせるしかないだろうな…」

「そこまで接近してスタンスティック打ち込める？」

「ん…M9のECSかなあ…」

「うん…それならいいかも…MSでもあそこまで静粛性ないし」

「M9を生産するか…装鋼はヒルダ合金に変えた方がいいんじゃないかな？」

「うん」

「あとスタンスティックの先端に高周波ブレードつけて、」

装甲の上からでも、ぶち込めるようにしよう」

「了解、機数は？」

「生産制限的なのある？」

「燃料はペレットだからないよ…燃料補給が面倒だけど」

「じゃあ…潜入工作分か…1000?…あと搭乗員の適性見繕って
て」

「イエス・マイ・ロード」

(ヤドカリは射撃タイプなので、ほぼ有人になりそうだな…
隠密行動か…T-1000もつと仕入れておくべきだったな…)

「あと、大至急開発部、ビダンさん等に無力化の武器、
さっきの要望でよろしく…です」

「ん？」

「平行世界でパラドックスがどうのって解決つかないかな？」

「……正直DNAで検査すればかな？」

「それか……」

「案としたら……だけどね」

「膨大だね」

「そのとおり」

えっへんと胸そらす11号。

「でもなんとかしてくれるんだろ？」

「……軍属に関しては調査可能だね……民間はこの世界では正直お手
上げ……」

「コロニーに移動した人は検査しちゃってるけどさ」

「まあ検索マッチできる事はうれしいよ……やってくれる？」

「イエス・マイ・ロード」

…

カオル報告

クーデター勃発確定みたいです。

M9生産中100機

下手したら総員ヤドカリ君…

発電所施設建築中

道路作業レイバーセット作成1機

第82話 謀略始動 投稿日20110224（後書き）

作者「いよいよ対人戦か…」

ナギ少尉「ねえ、カオルのこの諜報技術なら防げなかったの？」

作者「傍受はできるけど、妨害はできないね。
ましてや人と人との話合いとかさ」

ナギ少尉「なる…」

作者「それに血のつながりとかで、人間スパイになるだろ？副長みたくさ…」

ナギ少尉「……そうね……ねえ？宇宙世紀の核融合炉でなく、パラジウムリアクターにかえないの？」

作者「燃料のペレットが貴重、また投入作業が炉を露出してからだから…完全に面倒なんだよね」

ナギ少尉「どうせ精製するんでしょ？」

作者「だろうね……けど連続稼働できるのと、
いちいち炉を開放交換するんじゃ……どっちとる？」

ナギ少尉「……連続稼働ね」

作者「はいはいとです」

2001年8月29日

「マスター、端末かして」

「ああ、集めたん？」

「うん」

端末渡して…インストール中…

「できた…これで相手の人事データあればチェックできるよ」

「インターネット回線あればそれでも？」

「うん!!」

「わかった…ありがとうな…じゃあいつてくるよ」

「いつてらっしやい」

カオルは再び飛び立つ…フルメタルパニックの世界へ…

フルメタル・パニックの世界

1999年1月30日

再びこの世界へ降り立つ…

まあようはM9要員の確保の為に…

はつきりいつてM9はピーキー過ぎる。
というかASの操縦シートのせいだが…

実際のところ、Gキャンセラーを組み込めばの意見もあると思うが…
正直、スペース的余裕ありません。

MSに組み込めば？は…

一般生活している都市部等に、MSサイズが見えなくて潜入しても
壊さないで動けますか？
18mサイズ、重さ50t近いのが…

なので隠密行動とる為には、
M9を利用するしかない…との結論であった…

の愚痴はおいといて…

(さて……まずは検索するか……)

ミスリルでは、4つの戦隊及び基地に別れている

西大西洋戦隊、

地中海戦隊、

南太平洋戦隊、

インド洋戦隊、

その統括に作戦部、

情報部、

研究部、

人事部等があるが…

そう、もうそろそろミスリルが壊滅する!! 大量の雇用が期待できるのだった。

しかもM9を扱うスペシャリスト達が…

端末をだし、手短なインターネットカフェを検索する。

当該あり…

インターネットカフェに入店する。

「いらつしゃいませ」

「初めてなんですが…」

「会員になります？ビジター利用にします？」

「あ、じゃあビジターで…」

「ではセット料金いただきます」

料金を支払い入店する。

ブースに入ると、端末をだし…世界へと接続する。

単語登録 ミスリル 南大西洋戦隊 場所

経過をみると作戦本部に侵入したようだ…

確定…

単語登録 ミスリル 西太平洋戦隊 場所

確定…

単語登録 ミスリル インド洋戦隊

確定

単語登録 ミスリル 地中海戦隊

確定

(うっし…あとは人員パーソナルデータかな)

昨日作っておいたDNA情報での検索を引き続きかけている。

(あちゃ…当該ありか…無作為はできんって事か…)

地中海、インド洋戦隊所属に現軍属がヒットしてしまった。

が南大西洋、西太平洋戦隊にはヒットは現兵士には無し…

の検索結果がでる。

(となると……まずは主人公達のメリダ島要員からか?)

しばらく……熟考……

(うっし……と……)

時間をみると検索で長い時間を使ってしまったようだ……

(ん……かなめちゃんちで接触のある時間だな……)

手短なホテルに入り、チェックインする。

(明日は忙しい……な……)

二日目

1999年1月31日……

カオルは朝6:30にチェックアウトすると、

「幻影”シャムシエル”

一路飛び立つ

場所は調布市にある植物公園……上空……

(あれかな?)

駐車場内にぽつんと一台の車がとまっている…

時刻は8:00……

北東のしげみに何名か……

ビシビシビシ

(始まった!!)

防弾ガラスに銃弾が命中する音が響く……

サイレンサーで発砲音は押さえられても、ガラスに命中した音は防げない。

ギャギャギャギャ

撃たれた車が白煙をあげながら発進している。

ブロロロロ

機関銃の音もし始めた…

車は金網へと向かい…

黒い大男が車の正面に3人だた。

(アストラルだな…)

車はそのまま突進…

アストラル1体は跳ね飛ばされるが、2体が車に取り付き、

ガツシャーんギューー

大きな音をたて、フェンスを突き破って市道にでる。

「アストラルって何だ？は…」

人間サイズの弱いターミネーター”

人間サイズのロボットと理解してもらえば良いでしょう。

勿論この世界での第三世代ASの技術を加えての対人戦闘用ロボットになる。

ただし、頭が弱い…また人間サイズの為、

間接にでも拳銃を撃ち込めば、そこところは動作不良をおこす。

ボン太君程強くない、ターミネーターと対戦なら負ける、

が対人なら特殊部隊員が束で何とか…になる。ㇿ

車は左側面を民家のブロックに押し付け、アストラルを潰し落とそうとするが、

なかなか離れず…

もう一度勢いつけてあたると、

助手席側にいたアストラルは弾かれて、アスファルトに叩きつけられた。

車はボンネットに乗せたアストラルを振り落とそうとするが、

バーンギーューバババババ
銃声が響き、急ブレーキをかけ、また銃声が響き、

車が左右に振られて、片腕を失ったアストラルはバランスを崩し振り落とされた。

アストラルを落とした車は加速するが、新たな追跡車両がくわわり…

「キヤーな、なんなのよ!!」

赤信号無視して、引かれそうになり、それに怒ったOL…の前を追跡車が通りすぎ、泣きわめき始めた。

「おい!!警察を呼べ!!銃撃戦だ!!抗争だぞ!!」

「もしもし、警察ですか?」

「うおおースゲーカースタントだ」

車を上空からそのまま追跡する…

緩やかな坂の頂点で車は宙につき、ガタン

着地する。その後ろの追跡車も頂点で、ブオンガタン

やはり宙につき着地し、追跡。

人々は見かけると様々な反応をしている。
パトカーもいないのに街中での、カーアクションが発生しているの
だ。

平和な日本で……

そして、セダンがやっと横に近づき、

体当たりしてとめようとするが、車からマズルフラッシュが光り、
セダン側からも打ち返すが、

ギャギャギューギャ

車は急ブレーキ、慌てたセダンも急ブレーキかけ、

車から再びマズルフラッシュ、銃撃を受けたセダンはよろめくき、

ドンキユキユ

車の後部に突っ込み、

車は大きくバランスを崩しなんとか立て直そうとするが、

ガッ！！ ガガガガ

対向のトラックに突っ込み、

大きく跳ね飛ばされ……

車体が天地逆にたたき付けられやっとなるとまる。

「お、おい、いまのすごかったけど……」

「もしもし、救急お願いできますか？」

「ねーまーくん今ねえ」

野次馬が遠巻きに集まって来はじめた。

車体からはい出てきた高校生、相良宗介が心配して寄ってきた男を
押しのけ、

銃を追跡車から出てきたやつに3連射命中させる。

「キヤー!!!」「こ、ころしだぁ」「ひっけ、け、」

事故現場にたまたま居合わせ野次馬となっていた人達が、一斉に逃げはじめた。

相良は、車内にいた女性、ちどりを引き出すと、路地内に逃げ込む。

(ここで見失ったらな…)

二人は路地、市道を走り抜け、出会ったアストラルに手榴弾をプレゼントするが、

「あ……ああー！！ わああー！！」

巻き込まれた中学生が泣き叫んでいる。

たまたま居合わせた…通学途中の一般市民だ。

ピーポピーポ

遠くで救急車の音が聞こえる。

二人は自然公園に入り込むと…

(もうそろそろ…おっ)

ローター音が聞こえ始めた。

(ターゲット……まだ見えないか……)

二人と追跡者の戦いは公園内へと続き……

先程の手榴弾喰らったアストラルに向け、宗介が射撃、

ガガガ

アストラルと3人の追跡者がその地点にむけ射撃、その間に2人が前進。

アストラルはぎこちない動きですすんでいる。

追跡者側は見失ったのだろうか？外側方向へと散開する。

カオルも宗介達が、木々に隠れた為見失ってたが……

そして広場では黄色発煙筒が煙を上げ、

また銃撃戦が側ではじまる。

「あゝあゝあゝーば」

腹を打たれた敵にようしやなくとどめをさす。

プシュプシュ プシュ

草木を貫く音が聞こえる……すると……

青白い発光とともに、MH-67がみえた。

早速重たげな旋回中に取り付くと…

機内には6名いた。

「射撃援護！！エンジェル、ソースケまもるよ！」

「ああ！」

扉からつきでたミニガンが唸りをあげる。

分速6000発ものライフル弾をうけ、

アストラルはズタズタになり、

人間の歩兵たちも凄まじい弾膜をあび血煙とかし、
装備品ごとばらばらになった肉片が舞い降りる。

「北側へ周りこめ！後部から收容する！」

機体は発煙筒の位置目掛けて降下し…

「後部ハッチあけるよ！！！」

「了解！」後部ハッチが開放されるとともに、
銃座補佐から離れ、

ハッチについたガンナーが銃撃準備がとる。

「ソースケ、エンジェル発見！こっちに向かっている！」

しかし…

「ミサイル!!」

武装のついてない機首側、

パイロットから叫びに近い声があがる…

「回避!!」

スクランブルポットより、フレアチャフをはきだそうとら、
重い機体が、すこし反応するが…

「うわあああ!」

その瞬間、全員をシエルター内に引き込み離脱する。

ミサイルくらったへりは、尻から墜落、ローターはあらぬ方向へ飛び、

木をまっぴたつにする。

そして、ジェット燃料へ引火し、爆発炎上しはじめた。

(さてと……メリダ島急ぐか!!)

「ファイルX1-01の特別指令……」

カオルは、マスコミへリ、警察へリ、パトカー等が急行している、
調布から離れると、音速を越え…メリダ島へと目指す。

.....

カオル報告

ミスリル人事リストを取得しました

MH - 67 改取得しました

ナギ少尉「ね、宗介達どうなるの?」

作者「秘密です。禁則事項です」

ナギ少尉「え、いじわるう」

作者「まあ助かるよ…ある事と引き返えにね…」

ナギ少尉「ある事?」

作者「さて次回はメリダ島編…お楽しみにい」

ナギ少尉「あ、逃げた!!」

同日目、…

1時間程でメリダ島へと急行すると…

(少し遅かったか…)

ベヘモスが上陸し始めてるのがみえた。

(最初ウルズ8なんだよな戦死は…)

巨大なASが重たい身体を前進させ、少しずつ前進させる。身体からナーパム弾や多目的ミサイルを発射させ、また大口経の大砲を振り回し…

まさにガンポートの名に相応しいだろう。そのベヘモスに絡みにいったM6ブツシュネルから、
シュルルル

対戦車ミサイルが打ち出される。

命中するが、傷一つついてない…

ラムダドライバによる防壁が効いているのだ。

すぐさま重たい身体ににあわない速度で、

大口徑大砲をM6ブッシュユネルに向け、大砲をうちはなつ。

また頭部に設置してある機関砲もうちはなつ。

戦艦クラスの口径をくらったM6ブッシュユネルは…

かわすこと出来ずに、燃料に引火し、爆発する。

一方的：ラムダドライバ搭載機との大きな壁がここにある。

そのベヘモスに絡みにいつているM9がみえた。

(M9とM6の組み合わせだから、マオ機か…)

この頃のマオ機は指揮官機として更新されている。

マオ機は大砲をかわすために跳躍し着地行動に入っているので…

速度を同調し、取り付いた。同化…

急激なGがかかる…着地しようとした体制から木を蹴り飛ばし、若干軌道をずらしてから着地後、横方向への水平ダツシュ。

着地予定地点へ、ベヘモスの大砲が打ち込まれ、クレーターとなっていた。

「フライデー！！ECS作動、XA-5に移行」

機体が物陰に飛び込みながら、周囲と同化する。

「了解、ECS作動。操縦システムをXA-5に接続。」ベヘモス

A”を最優先ターゲットに指定」

(うっしこんなもんか…戦死者救助しなきゃ…)

カオルは離脱し、別の巨体へと向かう。

M9からジャベリンが1体のベヘモスに集中しているのがみえた。

(あれがベヘモスBね)

ジャベリンは音速以上のスピードをあげ、

ベヘモスへと殺到し、頭部へと命中。

白煙と衝撃破が広がる。

その直後に大きくよろめき…しばらく巨体の動きをとめるが…

大口径の大砲を右方向へ向けると、

大砲を放つ。

うった先では、M9が跳躍回避しているのがみえた。

かるうじて回避するも錐揉み状態になっているのが見える。

ラムダドライバは万能だが、意思の力。

集中するとその部分に力が強まり、それ以外が弱くなる…

カオルが見はじめる前に海面で嫌がらせ的攻撃があり、

そっちの方を警戒したため、

受けてしまった攻撃だった。

べへモスから無数の対地ミサイルが放たれ、海岸へと殺到する。

M9達が迎撃、回避しているのがみえた。

大口径大砲はクルツ機をしつこくねらい、その間にも海岸へ向け、ミサイルを射出している。

海の中からM9がロケット弾をうちこみながら、突進しているのがみえた。

(ターゲット発見)

ロケット弾は命中するも四散し、

そこにM9が突貫し、水中行動ユニットを外し身軽になると、左足に飛びついた。

ナイフを突き立てるとべへモスの巨体を駆け上がり、

肩に取り付くと、ライフルを構え、うちはなつ。

が、ことごとくラムダドライバの防壁に弾き飛ばされる。

カオルは取り付くと…

「こつこつこの、柄じゃねえんだよな」

『もついい逃げる…!』

「大佐に謝つといてくれ。別に本気じゃー」

瞬間ベヘモスの攻勢的ラムダドライバの力が襲う。カオルは引き込むと、

攻勢的力にのり、離脱する。

スペック機は、腕はちぎれ、足はひしゃげ、胴体が碎け、すべてがバラバラになりながら落下する。

ベヘモスは、その残骸に向かって、30mm機関銃をうちはなっている。

よっばど頭にきたのだろう…

瞬間…

巨体がふるえ、腕が垂れ下がり、大砲を海面に落とす。

装甲が崩れおち、

4千tもある自重に引きずられ、体がいびつな方向へとまがり…
垂直方向へと崩れ落ちた。

先程の解説通り、意識をスペック機の残骸に集中してしまった為に、
頭部での防壁が薄くなり、

ジャベリンで削られてた薄い装甲を尽きぬけ、
管制ユニットをつかぬいたからだ。

(さて…どの機体だ？あれかな？)

カオルは次のターゲット、キャステロ中尉の機体を探し…
とりあえず取り付くと…

「ウルズ5ウルズ10は帰還しろ、そのダメージでは無理だ」

『し、しかし…』

「命令だ…帰還しろウルズ6行くぞ!!」

『了解!!』 『り、了解』 『すみません…』

「本部、戦況は？」

『ウルズ1の方は余裕あるようだ、
ウルズ2がまずい状況になっている』

「了解、ウルズ3、ウルズ6が救援に向かう。
ウルズ5ウルズ10は、機体ダメージがひど過ぎて帰還命令をだした」

「本部了解」

「ウルズ6は狙撃地点確保」

『了解』

「むっ!!」

前方に行動不能になったのか、M9…もがいているマオ機にむかい、巨大なベヘモスが接近している。

「間に合うか…クルツ！」

『射線確保中!!』

ベヘモスが右足をあげ…テニスコート程ある足から、海水や泥が滴りおち……ゆっくりプレスするように足を下ろす…

「間に合った!!」

潰されそうになっているマオ機を抱え上げると、その巨体の足から離脱する。

「生きてるかマオ」

『だめよ、中尉いますぐ』

ガガガガガ

「グッ!!」

何発もの機関銃弾が命中し、マオ機ごともつれこむ。

追い撃ちかけようとしたベヘモスに対し、クルツの砲撃が命中……
頭きたのか、その大砲をクルツにむけると……

ドーン!!

『へっ、またカマしてやったぜうすのろめ……』

クルツの狙撃銃が、大砲の砲身の中にあつた弾に命中、
手元で大きな爆発をあげる。

フルパワーマオ機を手近な岩かげにほうり込むと……

「困になる。機をすて基地に走れ!!」
反転跳躍した。

『無理です、それにー』

「命令だ!少尉」

キヤステロ機は被害甚大だが……

「うおおおお!!」

ベヘモスへと飛び掛かり……

30ミリ機銃が執拗に狙ってくる。

『おやじ、無理だ!!』

「あと少しだ、あと少し!!」

ベヘモスは、大砲は先程放棄されている。

残りはナーパムやミサイルランチャー、頭部搭載の30mm機銃…
だけだが、残りの30mm機銃だけみたいだった…

「あとやつこの30mmを使い潰せば、こいつはただのデクの棒にな
グウ!!」

『おやじ!!』

足が滑り、滑った箇所へ30ミリが放たれ、食らって機体が悲鳴を
あげる。

「損害報告。当機は、各部に甚大な被害つけ、機動不能になりまし
た。脱出をお勧めします」

「へッ……ヤキが回ったか…」

『おやじにげろ!!』

クルツの射撃援護が続くが、無視され…その巨体から伸びる手が、
キヤステロ中尉のM9を掴む。

『おやじ!!』

ベヘモスのもう片方の手が近づき…包むように…

「クルツすまん…あとはグッ」

力強く押してきて、コクピットがひしゃげてきたので引き込む。

離脱すると…両手で機体を握り潰して…

手足はもうもげ…

両手をはなすと…プレス状態になった胴体部分が、地面におちた。

遠くではASを積んだ強襲揚陸ヘリ、兵員を乗せた兵員輸送ヘリが見えている。

アムルガムのヘリが、まっすぐに地上出口へと向かってくる。

そこへ、PRT隊員達がスティンガーを撃ち込み、追撃せずに地上出口内部へ避難した。

命中被弾したヘリからパラパラ人が落ちてく…
またASも墜落気味だが持ち直したもようだ。

着地したASは、地上出口へと銃を撃ち込む。

AS支援の間に 突撃兵が、中へと突入するが、

ドーン！

「クレイモア！」

対人地雷により、足どめされた…

「うわぁ!」
「うわぁ!」

狙撃され、その方向へ多数の銃撃がはなたれる。

手信号で前進が指示され、

とにかく突入口は複数あるものの、兵士が安心して入れるのは数すくない…

前進狙撃、銃撃を撃ち込む…クレイモアを喰らうの繰り返しだった。

別の方向では…

AS出口の鉄扉をC4爆弾で、爆破し…ASの力でこじ開け中に突入する。

その瞬間やはりクレイモアで爆発をうけ苦しむ突撃兵…

そして…

戦いは地下区画にいき…

「手榴弾!」

ドカーン!

「うてえ！」バラバラ

制圧戦の真っ只中にいた。

カオルは加速の2乗かかっている状態で見回っている。(パイロット少なかったなあ…やっぱりGキャンセラーないと辛いか…)

「絶対止める！！これ以上進入させんな！！」

「何としても突破だ！！制圧しろ！敵司令官を捕縛しろ！！」

の真っ只中になってる。

「グワァ」

右肩を貫かれ…

「衛生兵！！」

後方へ下げられるアムルガル兵…

(捨てて下さいよ……)

「クッ」

撃たれても、動ける限り頑張っているミスリル兵…

そこに アムルガル兵からミスリル兵に対し、手榴弾が投げこまれ…
満足に動ける状態でないミスリル兵は……
カオルにシエルターに引き込まれ、すぐさま移動。

でっかい爆発が後ろで起きる。

煙がおさまり、室内にアムルガル兵が突入。

「クリアー!!」

続けて進入してきた。

「まだいるぞ警戒しながら前へ進め！」

(引き込んだじゃったけどね…)

カオルは、別の戦闘起こっている箇所を探しさ迷う。

『基地内に残っている皆さん、残念ながら当基地は現時点でもって
放棄します。』

所定の処置で退避してください。最優先です、所定の処置で退避し
てください』

ドーン!!

どっかのトラップに引っ掛かったのだろうか…
大爆発のあと悲鳴が響く。

またドドーン！

この振動はかなりでかい。

「なにい？……しょうがない強行突破だ！！」

近くを通ったアムルガル兵の指揮官らしき人が、
無線機に向かって怒鳴り付けてた。

(しかし、中々救助出来そうなのいないなあ…)

だいたいは射殺であるため、不可…

最後の一人となる場所においても…

「ふっふっ…はやくしやがれ」
パン！

捕虜をとらずに射殺している。

カオルは手榴弾投げ込まれた先において、
かわしきれなさそうなのを回収し、
シエルターに避難させている。

「ここを突破しろ！！司令部はもうすぐだ！」

「へっ来やがったなボンクラどもが！！」

「機関銃だ！！手榴弾！」

「無理だ、近寄れねえ！」

「なるっ！！！」

しばらくすると…

「当たった？」

機関銃が止む。

機関銃台座に近寄ると…

「へっ…ぞまあねえな…おらそっちをよっつてや…！」

パン

「いくぞ！あともう一区画だ！」

「いたぞあつちだー！」

(そういえば…カリーニンさん…どう合流したんだろうか?)

気になり探すと…

カリーニンさんが、残って足止めしている。

「優先ターゲット確認、ツバイバル！」

「ツイータ」

「射撃やめい！！お迎えしろー！！」

射撃音は残ってるのにカリーニンが移動してきた。

カリーニン側は、トリガーをロックして、あらぬ方向へ銃を向けている。

そして死体が5体……

「ここは足止め扱いにしてくれ……
今は現れるとまずいからな」

「はっ！！上からもそう承っています。了解しました……おい、C4
もってこい！！」

カチャカチャ

「爆破するぞ！！」

ドーンパラパラパラ

通路は瓦礫で塞がれ……

「これでよろしいでしょうか？」

「うむ……ありがとう」

「ハッ！ミスターK……おい！！地上へと案内するぞ！！」

(成る程ね…一応足止めの仕事はしたんか…さてこんなものかな?)

カオルは地上に出ると…

燃え盛るジャングルをバツクに、

医療カプセルをだし、怪我している一人一人を引き出し、

「アルミサエル」

何か言われる前に睡眠状態にし、体育館型シエルターに入れる。

(ん…やっぱり逃げれたから少ないな…

別の基地を見に行くか…)

「世界扉」

……

カオル報告

特に真新しいのは無し

ナギ少尉「成る程…秘密基地襲撃なんですね…」

作者「だね」

ナギ少尉「ここで、また十数名ゲットして…まだどっかに？」

作者「またいくよ」

ナギ少尉「でも固定基地って…私たちみたいなドック艦なら…！」

作者「発見されるね」

ナギ少尉「えっ？……海底基地…！」

作者「それいいかもな……海底基地あったのどの作品だろ？……」

ナギ少尉「で作者次回は？」

作者「次回……題名でばれるな……南大西洋戦隊お楽しみに」

第85話 フルメタル編5 南大西洋戦隊 20110227

確保人員が少なかったので…再び世界扉で過去へと飛ぶ…

3日目…

1999年1月30日

カオルは出ると一路南大西洋戦隊、ネヴァダの拠点である、島へと向かう。

ミスリルは無人島を必ず戦隊拠点にしている。

カオルが無事密林に囲まれたしまにつき…同化し広げてくと…

「皆さん、このネヴァダに新しい仲間が加わり、初の反抗作戦となります。

壊滅、殲滅させましょう…アムルガルを…！」

潜水艦ドックで演説していた。

「オオッー」

「出港日時は、明日の標準時1000、各員作戦に備えよ…解散！
！」

各員がわかれていった…

(けどテッサもどきか……)(

「フッフッフッ、テッサにはもう負けないわよ……このネヴァダ2がいるなら……」

「超電磁推進、高分子ポリマーですか……」

「ええ、それに短時間なら海面滑走が可能ですよ」

(ふーん……おもしろそうだなあ……)

身体を伸ばし、同化してみた。

(TAROSはないのか……)そして気がついた事だが……

(……基地のいたるところに爆弾が仕掛けられてるんだが……明日つばいな……急ぐか)

性格調査を急いでおこなった。

4日目

南大西洋司令室内

現地時間1999年1月30日

日本時間は1月31日の朝方……

その日の日付変わる前……突如として爆発が鳴り響き、司令室にも振動がはしる……

状況確認してた当直員は青ざめ、現場へと急行する。

そして……

「状況報告！」

司令室にテツサもどきが駆け込んでくる。

「破壊工作です。対空対地レーダーシステム、通信システム、迎撃システムを司る、サーバールームをそれぞれやられました。航空機エレベーター、潜水艦ドック、そしてAS格納庫、武器庫、各地上通路もいたるところで……です。」

A-1地上通路だけは残ってます」

現場確認しおわった当直員達が、白煙被りながらまとめた、現状を報告した。

「ASは無事なの？」

「通路自体が崩れ、中の様子が確認できません。また整備員待機室とも通信隔絶しています」

「そう……」

「基地内部の通信システムも途絶えていますので、直接伝令が走るしかない状況です」

「……………復旧には？」

「相当な時間が予想されます」

「はやくしてね……他の基地に応援たのみたいから……」

「はっ！ー！」

「ぶっ……やられちゃったわね……破壊工作か……」

「とりあえず各サーバーームの修理が必要ですな……目がない事は……」

「そうね……明日の出撃もできなくなったし……作戦本部へと報告したいんだけど……」

「まったくですな……」

しばらく復旧作業の対応などをしてしていると……

ダ……ダ……ダダハアハアハア

「だ、第2観測所から報告！！強襲上陸です」
伝令が青ざめた表情で駆け込んできた。

地上観測所からの報告員が駆け込んできた。

「なんですって!!…何処の誰?数は?」

「し、しよ所属不明です!数は数えきれません!」

「AS出せないの?」

別の復旧担当に聞いてみたが…

「さつき確認したところ、まだ通路が突破できてません。まだしばらくかかるかと…」

「……………総員陸戦用意!!基地内にて迎えつつわ!非戦闘員はC-1エリアに!!
SRT、PRT各員はA-1通路にて迎撃準備。
潜水艦ドックの出口閉鎖してる、瓦礫の除去も急いで!!」

「イエス マム!」

基地内は騒然となる…迎撃発令、また現状復旧…
そして…

「くるわよ…………AS使えないと…こつもね」

「ですな……」

そのころ迎撃陣地を構築中のA-1地上通路では…

(…この爆弾いつ爆発するの??)

カオルの意識がいた…

「あたしらに盾突いたらどうなるか、思い知らせてやりなさい」

「イエス・マム」

「来たぞ!!総員戦闘配置!!」

通路の先端、地上出入口の先には強襲へりが…

途端に爆発の嵐が吹き荒れる。

破壊工作員の残した爆弾が爆発した。

通路で迎撃準備を整えていた各陣地は…爆風が吹き荒れ、

耐えきれなくなった天井は崩れおち通路は崩落した…

カオルは目をつけてた人を回収しまくった。

再び、司令室内に物語の場面がうつる。

「報告!!配置してたSRT要員、PRT要員の大半が生き埋め、生存不明です!!」

状況確認に走らせた伝令が駆け込んできた。

「なっ！！」

「地上出口へとつながぐシャフト自体が爆発まきこまれ…崩落、中への搜索ができません」

「クツ…遭難者搜索！！傷病者救助急いで！」
再び出ていく伝令達…

「しかし、閉じ込められましたな…」

「そうね…けど、これで相手も手が出せないはずよ……
生き埋めになったみんなには悪いけど……
こっちも手も足もでない…脱出すらもできなくなった…」

しばらくすると…

「ほ、報告！！飛行場格納ハッチから敵ASが侵入！ハッチ部分確保されました！」

敵は進入路確保の為、瓦礫除去にかかっています！！」
また再び伝令が…1番走りまわってるね君……

「え！？…飛行場ハッチ通路に、生き残りのPRT要員まわして！！」

「はい!!」

汗かきながらまた伝令に…

「飛行場ハツチからですか…」

「やられたわ……けどね…ハリアー改を瓦礫側にむけ、迎撃準備!!
あと非戦闘員は潜水艦ドックへ待避!!」

「は!!」

別の者が外にでていく…

基地内がさらに騒がしくなる。

「あ!!…基地内通信復旧!!」

司令室にやっと朗報がはいった。

1番走りまわっていた伝令係になった要員が…

「もう……戦闘でないのに疲れた…」

と呟きながら座りこんだのも記載しておこう…

「各部署との通信確認!!他基地に応援頼んで!!」

「駄目です。繋がりません!……商用回線もです!!」

「テレビ局映像も駄目です」

「太陽風の嵐…ね…地球規模の…やられたわ、敵は何だかの方法を予測しその日に攻めてきた。ただ者ではないわね…ASの機種まだわからないの？」

「モニター回復します」

飛行機格納庫内部の画面が映る。

瓦礫が退けられ…

「まずいわ…特定の前なのに…」

退けられた瓦礫の向こうに向けホバリングして機種を向けた航空機から、

30mmガンポット2門が打ち込まれる。

流星のASも計10機の合計20門の砲門を撃ち込まれれば…

しかし爆発がおき、ハリアーの一機が炎上…続いて二機目も…
「な…!!…」

「敵の機映捕らえました！」

「あ、あれは……総員待避!!」

「駄目です！格納庫内へ通信途絶！」

ドーン！

カオルがまた回収しまくってます。

「つつろが……」

ASから撃ち込まれたのだろう、砲弾が通路を直進し、破壊的な威力で突き抜けた。

「生存者の確認いそいで!!敵はアムルガム、コダールタイプよ!!」

「クッ……」

画面では最後の一機が降伏し…キャノピーをあげてたが、ASが近寄って握り潰してるのがみえてる…

「みんな…見た?…捕虜はとらないみたいよ……」

「はい……」 「ええ……」

「防衛線を下げます。通路の封鎖をこことここ」と指をさす。

「コーキング材と投入して…潜水艦ドックの状況は？」

「あと30分!!」

「急いで!」

「は!」

「くっ……長くは持たないわよ……」

彼女は親指の爪を噛みながら……つぶやいた。

……しばらくすると……

「通路封鎖完了!!」

「これで一方からの攻撃で耐えられるわね……」

「かろうじて持ってますが……」

しかしその10分後には……

「突破されました!!」

「まずいです…その先は…」

「あと何分で除去？」

「あと12分です…！」

「5分で済ませなさいと伝えて…！あと、司令室を放棄、潜水艦ドックで迎撃します！」

「イエス・マム…！」

「総員退去急いで…！」

「司令お先に……」

「私はいいから、潜水艦ドックに急いで…！取り残されないようにでないと…クッ」

画面では通路陣地で最後の一人となり、抵抗できなく降伏の白旗を掲げてた者が、容赦なく射殺されたのがみえてる…

「取り残しの無いようにいそいで…！」

……2分後……

「司令！！」

「わかったわ…今行く…ごめんね…マイホーム…」

通路でて確保している道を潜水艦ドックへとすすむが…

「敵兵！！司令をお守りしろ！！」

司令部要員の5名が別方向へと別れる。

「司令こっちです！！」

「けど！！」

「急いで！！」

「ええ…ごめんなさい………」

彼女は、敵兵に向かったら5名に向かってつぶやく…

ハアハアハア

PRT隊員の二名に護られ潜水艦ドック目指して走っている…しかし…

「グワ」「ギヤ」

先回りされた敵兵に護衛がいきなり倒された。

彼女は自分の銃をホルスターから抜くが

「つう!!」

接近してきた敵兵に手を蹴られ銃はおとしてしまった。

「おらぁ!!」

「きゃ!!」

確保されて部屋に引きずりこまれてしまった…

「はぁはぁ……早く撃ちなさいよ……捕虜はとらないんでしょ……
覚悟はできたわ……」

「へっへっへ、いい女だなあ」

「おい、これが敵司令官か？」

「ああ、そうだな」

「そつよ……でなに？」

「散々てこずらせやがって……この南大西洋戦隊も、もうおしまい

「だなぁ」

「へっへっへっ違いだね」

「他の戦隊がいるわ…あんた達アムルガムなんか……」

「おやしらねーの?」

「何をよ?」

「お前らのミスリルに対して同時攻撃おこなってるのをよ……」

「何いってるのよ!」

「ほう…しらねーのか…おい、確かビデオとってたよな?持ってる?」

「ああ…勝ち気なねーちゃん…これみてみなよ」

CNNのニュース映像、オーストラリアの作戦本部となっているビルが、

爆撃を受け崩壊しているのが流れてる。

「!?!?!」

「やっと理解したようだなあ。他にも地中海戦隊、インド洋戦隊、西太平洋戦隊の各基地、他にも沢山のミスリルへの拠点への同時攻撃してるぜええ？
勝ち気なねーちゃんよ」

「あああ……うそっ……」

「へへ……理解したか……ひっひっひっ」

「くっ……早く殺しなさいよ……」

「ところでよう……こんな女……ただで殺すのもなんだな」

「そうだな……頂くか？」

「え？？」

「ああーいいなあ」
「じゅるりと舌なめずるこ」

「おい、まずは見張りだ、誰も近寄らないようにしろよ」

「ええ？」

「心配しんな、ちゃんとまわすからよ」

「ちょっと早くしろしなさいよ！」

「おら抵抗すんじゃねえよ！」

バシィ

「まずはてめえの命は、おれらを楽しませてからだなあ〜イッヒッヒッ」

「な、なあやつぱり」

「あん？」

「証拠が残ったらヤバイだろ……」

犯そうとした隊長……

「証拠のこらないようにしたら大丈夫だろ…事故で身体が吹っ飛んだ…」

「って事で嬢ちゃん、まずは楽しませてな」

「い、いやあぁ」

ズリズリ

「へっ、やっぱり若いっていいなあ…綺麗な素肌してんじゃん」

「ち、ちめて」

「おい、しっかり抑えるよ」

「へっ」

ズリズリ

「いやあぁあぁ」

「ぐだぐだうっせえなあ」

ガスン

「うっ」

「どうせてめえの命はあと少しなんだよ、
女の楽しみしってからでもいいじゃねえの？なあ？」

「うっうっ……」

「あと一枚……へへへ」

「いやあああ」

「ほお綺麗な○○○だなあ……初めてなんか？」

「うっ」

「ほっどねどね？」「隊長俺にも」「てめえは見はってる！」「は
あはあはあ」

「さて…おい、銃もってる」

「へい」

「へっへっへっ」

「い、いやあ」

カチャカチャ
「ピッ」

「ほお、男性のみんなの初めてか？」

「ごりゃ犯しがいがありますね…」

「だなあ………」

「ああ、加入してよかった…」

「じゃあよ…ちよっくら頂くとするか」

「ひついやああ、だ、誰か！助けてえ！」

side カオル少し前

(収穫収穫)

カオルはかなり喜んでいた。

地上へのシャフト崩落によるSRT要員、全12名、及びPRTの目をつけてた約30%を確保できたからだ…

(けどなあ…あのハリヤーがなきゃ…orzまあしょうがないか…)

戦いを監視しながら…引き抜けそうなのをシエルターに避難させ、いない部屋にでて、睡眠状態にし、医療カプセルにいれるのを繰り返ししてると…

戦いが奥の方へと向かってしまったようだ…

(やべやべ…)

意識を奥にむけると…

(あ?)

「こりゃ犯しがいがありますね…」

制服を引き裂かれ、素肌をさらしまくっている少女…

「だなあ………」

(あれは司令官??え?やば、付近にミスリルは...?)

「ああ、加入してよかった...」

サーチしたが：付近には生きてるのがいなく、
救援に駆け付けられそうなのもいない...

「じゃあよ...ちよつくら頂くとするか」

(ここで介入せずに：男はすたる...それに殺されるから...なら!!!)
捕虜をとらずに射殺されるのをみてた。

「ひついやああ、だ、誰か！助けてえ！」

男が身体を前に動かそうとする前に...引き込みました。

「へ??あ、あれ？」

犯そうとした兵士いきなり感触がなくなり...

「おい、何処にいった？」

みてた兵士も不思議そうに...

「え、えーとお.....」

わけわからない...

いきなり人が闇に消えるように...質量ごと消えたからね.....

カオルはアムルガル側の制圧済みの別の部屋に出て...

いま引き抜いた彼女をだす。

「ヒッ!..!」

口を押さえて…

「シー」

頷いたので…手をはなした…

「うん…顔だけだね…あとは…」

虚数空間からナイフを出し

「イヤ！」

「と…大きな声ださない…手の縄きるからさ…」

ブチブチ

「まったく顔を殴らなくっても普通ならあとの二こるじゃん…」

「あの…助けて？」

「ん…まあ…ある意味ね…」

「ある意味？」

「そつようはスカウトなんだけどね…よつと」
医療カプセルを出す。

「顔に傷ついちゃね……と、スカウトつけるならこのカプセルに入
つてくれるかな？」

「あのこれは？どこから？」

「この状況から助かるなら、おいおいわかるさ……つけてくれるかな
？」

しばらく考え……頷く彼女……

「わかった。じゃあよろしく」

「あ、あの部下は？」

「ま……問題なさ気なのはたすけてるから……あとこの服を着て……裸の
ままだよ」

「キャ／／／」

やっと気がついたらしい……

「着たらこのカプセルに入ってね。早くね……助けにもどるからさ」

いそいそと着はじめる…ずるべたーんと引っかけ転ぶ…

(テッサもどきー！)

「みえてるよ……」

更にあかくなり…やっと着てカプセルの中に自分ではいる。

「じゃあ…あとでね」

プシューカプセル作動させ引き込む。

さて…また同化し意識をいどうすると…

潜水艦区画に向かう… もう残っているのはこの区画しかない…

非戦闘女性陣達が艦内の奥、

PRTのいき残りがドック出入口でバリケードをはっている。

整備兵等が崩れた出口を掘り返して…

「やった通れるー！」

の歓声があがった瞬間に…アストラルが突入してきて…

船外は、制圧された…

(うへ…アストラルここで導入かよ……無双…)

そして…艦内に入らずに、潜水艦ハッチに毒ガス…及び船体に爆薬をしかけている。

カオルは潜水艦内部に待避してた人をシェルターに引っ張り、

カオルは離脱し

部屋の中で世界扉を開く…

………

カオル報告

ネヴァダ2 取得

ついでにMH - 60改

リヴァイアサンもどき取得

作者「やってしまった……後悔はしてない……」

ナギ少尉「ん？また三桁？？」

作者「フッフッフッフ……」

ナギ少尉「……一つの戦隊をつくるつもり？特殊部隊を……」

作者「かもなあ……」

ナギ少尉「情報部は？研究部は？」

作者「カオルの方で用意してるじゃん」

ナギ少尉「あ……人事部……！」

作者「……そこがよわいよなあ……」

ナギ少尉「あ、でもティアンムやレビルの人達割り振ってないし…
今だにいるじゃん…で次回は？」

作者「久々のイツ…おほん、帰還編帝国動乱その1お楽しみにい」

ナギ少尉「ねえネタばらしたばらした？
で、そのネーミングセンスないサブタイトルいい加減にしたら？」

2001年9月1日深夜

「ただいまあゝ」

「お帰りなさい」

「状況は？」

「クーデター警告を司令、副司令にまわしずみ…
帝国は明日はなした後の方がいいね」

「で、M9適性は？」

「戦闘機動までだと…B・01から9名程、他にアムロ、ドズル、
シヤア…が適性だしてるって」

「あとは新規加入組次第とヤドカリでか…」

「だね…あ、別の朗報。木星に向かってるチューリップから報告、
あと10日程でつくって〜」

「おお…じゃあ？」

「うん…ただ採掘プラント作る予定だから、やっぱり9月15日から稼働だね」

「となると…月末にはハイブ落とすか…」

「いける…ね」

「ま、先にクーデターの対応だな…さて…寝るわ。明日は加入問わないと…」

「おやすみいいマスター」
私室に向かうカオル。

「ね…しかけたの？」

「勿論」

「じゃあ早速話してくるね」

＝石橋の私室＝

勿論A-01は、ジオフロントに移っていた。

ピンポン「はい…11号？良いわよ」

プシュー

「どうしたの？」

「イッシー、今日決めないと結婚でとられちゃうよ」

「どづいつた事なの？ねえ！！」

「おちついて、おちついて、おちついて
ガクガク11号を揺らしてる…」

「じつはかくかくしかじが」

「そ、そんな……」

「だからかくかくしかじか」

「…なら望みあるのね？」

「うん…んん…」

「初めてが記憶なしになるのはシャクだけど…やるわ…」

「じゃあ案内するね」

石橋をつれていくあぐどい11号…

そして……

2001年9月2日

むにゆ

「あっ」

(あ?)

カオルが目を開けると…

石橋の寝顔が目の前に見える。

(ああ、またやったんか……にしても記憶がないなあ……)

一回、記憶ありでやりたいけど…まっいいか……うっトイレ)

カオルは石橋を起こさないようにそーっとベットから抜け出し……

(起きないでよ…)

抜け出すと…抜き足差し足でそろーっとトイレに向かう。

傍からみると真っ裸でみっともないが…

トイレをすますと…

(まだ4時か…もうひとねむりしよう…)

ベットにそろーっと潜り…

(ん？赤？…まあいいか…)

カオル再び寝に落ちる。

……

起床ラッパ前に…

ピピピピピピピピ

目覚ましが鳴り響く…

「うん」

「あふ…イッシーおは」

「カオル〜エへへッ」

「ん？ん〜」

きずをしてきて受けるカオル…

「じゃあ、起きるぞ…」

「うゝ、うん」

布団を剥ぐと…

シートが赤い…

「へ？」

ペタペタ

(…血か？…)

「いちゃん」

「な…なあ？イッシー……」

「ん？」

「あのさ……これ？」

「初めて……だよ」

「へ？？2回目じゃ？」

「あれは、カ・オ・ルの勘違い」

「……は、初めてか……」

「そう。だから、お嫁さんにしてね」

「あ、ああ……」

「ほんとよ？」

「約束するよ……ただ……」

「ん？ただ？」

「他にも妻になりそうな人もいるんだが…」

「あ、11号ちゃんから聞いた。しょうがないよ…」

「だって、売れ残りの女性の沢山でちゃうからなんですよ？」

「……そのとこ理解してくれればなら……いいよ」

「ん」

「じゃあ先にシャワーでも浴びな…」

「がに股でシャワー室へ向かうイッシー…」

（11号…あとでおはなし…だな…）

「シャワーから、がに股で出てきたイッシー…」

「入れ替わりに入る前に、」

「着替えたら行かないと点呼間に合わないだろ？先に行つてな」

「うん。わかった」

シャワー浴びてる最中にイッシーはでていった。

「B55ハンガー」

「11号…」

「なにマスター」

「昨日、なにしたかじっくり話さない」

「えっと、マスターの赤ちゃんみたいから、イッシーに子作りして!!と頼みこんだよ」

「……………で？」

「イッシーはマスターの部屋に入って行って…あとはしらない」

「……………何人俺にけしかけるんだ？」

「殿下いれて三人確定なの」

「……………まあ……………いいか……………とりあえず新人達だな……………」

戦艦ドックへと向かう。

(えっと…医療カプセルが…沢山だから…)

一回体育館ごとですか…わけわからなくなったよ)

空いているスペースに出し中を確認する…

ついてく25号…

(え〜っと)

「マスター37名だね」

「数えてたのに…orz」

各シエルターを出し…扉をつけてつきましたので準備出来次第お願いします。

……

出てきた…

「サントス？タケオ？シジン？ブリタニカ？」 「スペック！キャステロ！」

(あっちが、西太平洋戦隊グループね)

「アンシエ大佐!!」

「皆さん…生きててくれたんですね…力になれずに…」

「大佐!!」

(こっちが南大西洋戦隊か…)

しばし…まって

「アンシエさん？」

「あ、はい…」

「ここにいない人員で救助できたのもいますので、
体育館、そこにある建物ないですがいますので確認願います?」

「はい!!」

西太平洋戦隊グループの方へ向かっていき…

「え」と…西太平洋戦隊の皆さん初めまして…

映像にでた当異世界軍責任者の渚カオルです」

「西太平洋戦隊ウルズ3、タビンス・キャステロ…中尉です」

「西太平洋戦隊の責任者としてでいいです？」
キヤステロは周り見渡し異論なさ気なので…

「はっ！！」

「まずは…あなた方、トゥーハー・デ・ダナンはあなた達の頑張り
で無事出港でき…後にアムルガムを壊滅する事ができました」

「うっし」「よっしゃ」「テッサたん…」「大佐…」

「その上で確認しますが、異世界軍への加入の意思をといます。
力を貸して貰えますか？」

二人程手が上がる。

「はい？何でしょ？」

「グアムに妻と娘が……なのでその二人がこっちにくるなら…」

「わかりました。後ほど資料を…」

「同じく妻が…」

「同上ですね」

「あとは？」

しばしまち…

「では改めて加入の意思をといます。いかがでしょうか？」

「ミスリル西太平洋戦隊トウハー・デ・ダナン所属キャステロ以下6名、異世界軍に移籍を希望します！！」

「ありがとうございます。25号」

「はいはい」

「空いてる子に宿舎等案内させて…」

「了解」

「では、配属やら詳しい事は後程…あ、キャステロさんだけは、体育館におんなじ戦隊の人いると思いますので、確認お願いしますね」

「はっ！」

(さて…)

戻ってきた南大西洋戦隊の方へ向かっていくと…

「カオル大将！！」

「あゝ大將はやめて下さい。まあ対外的にはしょうがないですが…
でござります？」

「はい…約60名程なんですが…」

「家族問題で帰り？」

「あ、はい…」

(少し多いなあ…)

「SRT要員です？」

「いえ…」

「PRT要員？」

「が、半分以上…」

「フム…」

少し話を聞いてみると…

親一人…迎えいれられれば…

妻、娘、息子をつけいれれば…

兄弟を養うので…

等などだった…

ミスリル壊滅した、追撃ありえるけど、で、迎えいれられればどう
？と聞くと、

全員が参加する…との事だった…

(お仕事増えた…T-1000派遣するか…)

「ということになりました」

「わかりました。では…」

「はっ！…アテンション！…」

「当、ミスリル南大西洋戦隊ネヴァダ総員162名！！異世界軍に所属する事を宣言します」

ザッ！

一斉に各々の軍形式での敬礼を行う。

「ありがとうございます。」

当、異世界軍は、直接火力はありますが、火が燃え上がる前の火消しは正直いって足りませんでした。

皆さんの参加を歓迎いたします…

ではこの者達が宿舎に案内しますので」

「ついてきてね〜」*多数

(あとでか…)

25号にアンシェさん、キャステロさんに来てもらうように話しておいた。

〓 〓 情報室 〓 〓

「で、今回おこるクーデターの起因は？」

「内閣による政治なんだろうね…將軍を差し置いての…」

「あゝ俺の世界の日本見たくなってるのかな？」

「それがこの世界では異常なんだよね……」

「ふむ……首謀者は誰？」

「沙霧 尚哉帝国軍、帝都守備連隊連隊長……で間が悪い事に……魔陽炎が……」

「は??…マジですか？」

「マジネタ」

「ちなみにつおいの？」

「うん…京都防衛戦、横浜ハイブ攻略戦等でかなりの戦績をあげてるね……」

「エースとっていいかも」

「……エースをぶつつけないと駄目かもなあ……
またはウルズ3と8コンビか……あゝでも起動したら……M9だとき
つかいな……」

「まあ…最大級の難関だろうね…」

「とりあえず対策後回し…で、CIAが協力してるの知ってるの？」

「ある程度は知ってるけど…ここまで食い込んでるのは知らないみたいね。」

で、将軍による将軍の政治を求めているみたい」

「は？」

「ようは、CIAによる日本乗っ取り、この基地乗っ取りに、担ぎあげられた…」

「……ちとまって、そのクーデター起こすほうに工作員でもいるの？」

「うん…」の一覧にのってるのが、アメリカの工作員となって動いてるね…

で将軍による将軍への政治…となってるけど、

実質的には内閣抹殺…傀儡政権をたてるつもりみたい…

あとは横浜基地乗っ取りだね」

「ん〜……あ、無力化の武器は？」

「言われたのが上がってきてるよ。とりもち留弾120mm用、瞬間接着材36mm用、通常の戦術機用武装に使えるね。あとスタンバトン改18m級及びAS用に……」

「AS用弾種は？」

「ボクサーのマガジン交換対応、基本は電気銃あるから、接着材マガジンがいいかも」

「か……あ、MH-67改忘れてたよな……それも急ぎ目で作ってくれ……ECS使えるし」

「燃料はそのまま？」

「パラジウムリアクターに変えた方がいいん？それともミノ核？」

「……ミノ核+熱核ジェットにした方がいいかも……」

「じゃあそれで110機か？」

「イエス・マイロード…とろろで具体的には？」

「基本おきた直後の無力化を目指す」

「だからM9か…」

「そついった事」

「起きそつなリストもっと詳しくだね…あとターゲットになってるリストいる？」

「みせて」

ズラズラとリストが流れる…

「結構狙われてる施設あるんだな…あ、やっぱり帝都城が？」

「殿下との対面、言葉を届けるのが目的みたいよ」

「なる…うんじゃああとはよろしく…」

「カオルさん「殿」」

「あ、はいはい…え」と…あなた方の配属になるのですけど…」

「我々がそのまま南大西洋戦隊に入る形が良いですね」

「そうですね～お願いできますか？え」とキャラメルさん」

「キャストロです」

「はい、キャストロさん」

「とりあえずこの後なんですが、隠密作戦等があるので…3日後あたり…」

「あら…」「そうですね…」

「11号」

「あいあい説明ね～」

「あとは、詳しくは11号から…」

「わかりました」

「じゃ、すみません席外しますので…」

「いってら〜」

「副司令執務室」

コンコン「カオルです〜」

「あらいらっしゃい」

シユン

「どつつか？研究は？」

「そつね……先に進まないのよ……」
最近B55にビニールシートを、破きにきている回数が増えているの
を聞いている。

「まあ…なんか提供しましょうか？」

「そうね……半導体150億の並列処理できる、手の平サイズの演算処理ができるのがあればね…」

「ターミネーターのマイクロチップとか？」

「そうよ！それ！！……けどただ真似はシヤクね…
一応分析してみるわ…あとで使えるの調達ね」

「はい。あ、スカイネットは作らないで下さいね」

「ロボットによる反乱か…うふふ」

「あゝで…クーデターの話なんです…」

「あゝあなたに任せるわ」

「と…一応横浜基地に内閣とか、避難させるつもりですが？」

「異世界軍で対応するつもりでしょ？」

「まっすね」

「なら横浜基地としては警備体制だけとる…になるから、別にいいわよ。任せるわ」

「A-01はかりても？」

「ええ。経験積ませてやってちょうだい」

「了解っす」

「あとはないわよ」

「じゃあ失礼しました」

カオルは帝都へと飛び立った…

〓 〓 帝都城 〓 〓

越権の間に通されると…早速

「殿下、お人払いを」

「な…」「ざわざわ」

「わかった…そなたら…」

「は…」

退出する高官たち…

「して…あなた…人払いしましたが？」 「なっ殿下？」

盗聴探知機のスイッチをいれると…

探知箇所が二つ高官達がいた場所と殿下の座ってるイス…

(うへ…)

キーボードをだすと…

「実は…この間の重婚についてですが…」

「盗聴器あり演技続けてください」

と急いで空中ホログラムをだす。

月詠さん驚き、殿下頷きながら、

「なに？とつとつ拳式をあげてくれるのか？」

「はい…なので愛を語りませんか？」

「多分私室なら…とりあえず移動しましょう」

「わかった。急ぐぞ」

と私室へと移動する。

入ったあとに盗聴探知機…ないか…

「さすがに私室ではないですね」

「して人払いや探知器してまでの用件とは？」

「この国で、クーデターが起こります」

「まことか？」「なっ？」

「とりあえず、内閣総理大臣、あと斯衛の信頼のおけるものを…」

「わかった…月詠！！」「はっ！」
呼びに出てく月詠さん

するし

「ねえ…式はイツデスノ？」

「殿下…今は迫らないで下さい…先にクーデターの対応でしょうが…」

「クーデター終わったら？」

「先に、重婚法案通したらです」

「……………はい…」

そんなやり取りしていると、月詠さんにつれられ、

榊首相、紅蓮大将が入室してきた…

二人そろったところでかくかくしかじかと説明する…と

「やはり、権力侵害…がですか…」

「ですね…けど今更行ってもバックのアメリカは実行するつもりですよ…」

「フムム…」

「あのあなた」「ぶお」「ほう」
ゲホゲホ

榊首相むせています。

「殿下、あなたはいいい加減に……」

「はい。榊以下内閣のものたちは、私の為によくしてくれています」

涙目になりながら……

「殿下……」

「なので何とぞ護って下さいますか？」

「ですね……わかりました。とりあえず発生直後に無力化する様にしますが、

万が一の為にボディガードを付けましょう。

対人最強のね……クーデターが起こったら、

早急に家族共々、横浜基地に移動できるように手配しておきます」

「わかりました。ありがとうございます。

この者とかこの者、この者、この者等は、親米国派なので、大丈夫ですね……

しかも外遊の予定があったような……」

「ほぼ確定ですね……殿下の方は……」

「我が精鋭の斯衛が護り抜く所存なので安心せい」

「ですが帝都が戦場になりかねますよね？」

「……確かに」

「いざという時は、当方の救助部隊が駆け付けますので、広場は確保お願いします。」

殿下が海上にいる…となれば戦場にはならないでしょう」

「むづ…ところで海上にとは？」

「史上最強の強襲揚陸潜水艦、トウーハー・デ・ダナンを用意しますので…」

ま、用心の為です」

「わかりました…何とぞ…よろしくお願いいたします。あなた」

「だから殿下…」

「のうカオル殿」

「はい？」

「婚前交渉は厳禁だぞ……」

「それは殿下にいつて下さい……」

帰還して11号よりミスリルに関する報告を受ける。

……

カオル報告

南大西洋戦隊よりアンシエ大佐以下162名

西太平洋戦隊よりキャステロ中尉以下6名

ただし、条件つきで67名加入

医療カプセル37名治療中……

内訳

SRT隊員16名ウルズ38 ネヴァダ側のミスト1から14

PRT隊員109名

内ASM9操縦資格5名

第二世代操縦資格12名

強襲輸送隊24名

兵站グループ所属

16名

支援グループ所属

15名

施設グループ所属

2名

ナギ少尉「さあさあ、いよいよ始まりました、国家転覆に対しての暗躍。

はたして渚カオルはこの陰謀にたいして乗り切る事ができるのか？

次回、カオル死す!?

あ、おゝたのしみにいいいいいい」

パソコン

ナギ少尉「あ、いったあゝ作者、かんかんで殴らないですよ…

ドリフではないし…」

作者「かつてにサブタイトル、しかもやばそうなものつけるな!！」

ナギ少尉「えゝでもう…次回原稿みると…」

作者「あ、てめえ…おいこら返せ!！」

ナギ少尉「やあー」

作者「こら…あつ!！」

ブリッ

ナギ少尉「……しーらない」

作者 白く燃え付きてます…

ナギ少尉「……どうするのかな？」

アンシエ大佐「どうしたんですか？」

ナギ少尉「あ、襲われかけてたすかったその1だ！」

アンシエ大佐「変なネーミング付けないで下さい！！怖かったんですからね…ヒック…それを……」

ナギ少尉「あゝごめんなさい…ほら拭いて」

アンシエ大佐「ヒック……」

ナギ少尉「で、テストロッサさん」

アンシエ大佐「アンシエです！」

ナギ少尉「作者がテストロツサをだしたいからって、アンシエ大佐登場したみたいですけど…実際は？」

アンシエ大佐「そうですね、物語内部でも、全く他の戦隊の事触れてないんですよ…」

だからこういった事あってもいいんじゃないか？らしいんですが……」

ナギ少尉「他の戦隊の特徴は？」

アンシエ大佐「インド洋はかなりの高齢の方と聞いてます…」

地中海は男性の年上の方が…とは聞いてますが…」

ナギ少尉「まあ…あんまりつめると作者が泣きますので…次回…帝
国動乱編その2サブタイトルは不明です…お楽しみにい」

アンシエ大佐「あ、作者ひっしに書き直し中…」

第87話 帝国動乱その2 カオル天敵あらわる？ 投稿日20110301

2001年9月3日

「マスター、機体の場所わかったあ」

「よっしゃでかした！！データーくれ」

「はい」

「いつてくる！！」

カオルは飛び出した

「”幻影” シャムシエル」

〓〓 帝国軍第一師団第一機甲連隊基地〓〓

カオルは降り立つと…データー渡された格納庫を目指す。

「バルディエル」

同化し、扉内部へ潜入…

(う……)

魔陽炎を護つて6人の帝国軍兵士が立哨している。

(多分ばれない…とはいえ…なんか圧されるなあ…)

軽く抜きあし差し足…

ブン…!

「どうした…!」

「いや…なにか心配したんだが…」

「むう…魔物??総員気配を敵にしろ…!」

鼻先を真剣をかすめて…危つくATフィールドが発動しかけました

……

(ちよ……………)

後ずさり、

ブン…!

「やはりなにかただならぬ者がいる…!」

「どこだ!?!?!」

(ニュータイプがここにいるうっ…なら…)

「バルディエル」ボソッ

シュー!!

今まで身体があつた空間を横なぎの真剣が空をきる。

「なにかいるぞ!」

「警戒体制!!」

「待機中の者呼び出せい!!」

(やばい…けどな…)

身体を魔陽炎の元へ床を伝っていくと…

ダッダッダッダッ

「大尉の機体の安全確認しろ!!」

(うお……)

床から足へと浸蝕、すると同時にリフトが動き出しました。

(取り付ければこっちのモンだ)

アイトリング状態なる前に、燃料タンクを虚数空間にまるごともつていき、
ついでに蓄積データも貰いました。

「な!!……起動できません!!」

「馬鹿な!!」

「無理です!!」

(燃料からつけどだし…予備バッテリーつけてないもん)

「整備兵を呼び出せ!!」

「はっ!!」

「それと……大尉に報告しろ!!」

(さて…最大の障害は無力化した…あとは補充されるだろうな……)

床を伝って…

ブンー!!ドゴツ!!

(……これでもばれかねない……急いで離脱!!なんなんだよ!!)

「やはり魔物がいるぞ!!陰陽師をよべい!!」

(やばい!!)

バン

突如逃げてる前方に5人の人物が……

「いらっしやいませいらっしやいませ、ありがとうございます。」

(ぐおおおか、身体が!!)

「本日も何かと忙しい中、娯楽の殿堂憩いのオアシス、当豪血寺会館、豪血寺会館へと、多数様御指名、御来店誠にありがとうございます。」

(金縛りにあつたように動かぬ!)

「出ます出します勝たせますをモットーに、全機種全台煩惱解放、大開放、大出血大サービスとなっておりますので、じゃんじゃんぱりぱりとお取り下さいませ、お出し下さいませ。

はい又又出ました〜矢部野彦摩様ラッキースタート!」

(こ…これが術というものか…)

「幸運招来幸運招来、リーチかかって当てたい時は、じゃんじゃんばりばりじゃんじゃんばりばり、すぐに呼びましょ陰陽師レッツゴ
ー」
「けど…何としても逃げ出せねば…ぐおおお」

「打ちながら怨み憎しみ、つとりしは不運悪運、付き纏うその災いを、断ち切るも陰陽の道」

（ハアハアハア）

「ま〜けす〜ぎ〜て〜、い〜きつ〜く〜は〜て〜に〜、や〜む〜こ〜ころ〜、な〜ぐ〜さ〜め〜よ〜」

（も、萌え…）

「辛い時、悲しい時、人はそんな時、こころの隙間に闇ができる。その心の闇に、ハズレ運は容赦なく入り込んでくるのだ！」

（うおおおお動け俺の身体！！）

「だから外れても、くじけるな！おちこむな！クヨクヨするな！何事にも屈しない強靱なねばりこそが、最強の武器なのだから！」

（俺のソウルよ！燃え上がれ！）

「幸運招来幸運招来、単発地獄で困った時は、じゃんじゃんばりばりじゃんじゃんばりばり、はらってもらおう陰陽師レッツゴー！」

（ぐうううー！）

「やっぱ頼りになる陰陽師レッツゴー！」

むんなのヒーロー陰！ 陽！ 師！ ええんちゃっ？」
「byC Rレッツゴー陰陽師ショートPV」

（な、なぜに動けぬ……）

「ふむご苦労だったな……して下手人は？」

「そこにおる……カアツ」

（う、うお……か、身体が……なろう）

「”幻影””加速””加速””加速””加速””加速”」

化けて逃げようとするカオル。

「甘いわ！！カアツ」

（うお！）

「この魑魅魍魎め……久々の大物……成敗してくれるわ！」

（ヤバイヤバイヤバイヤバイ！！あつ）

「”瞬間移動”」

「ぬう！！」

カオル……視線の先へと転移し、

今まで縛っていた力の鎖が解き放たれるのを感じた……

「幻影」

(つづか……なに？あいつら……)

BETA要塞級縛れるんじゃないの？マジで……

甘くみてたなあ……)

何とか無事に無力化できて、横浜基地に帰ってきた……

「ふも!!」「ふも!!」「マスターお帰りなさい」

「ただ」

正門から入っていく……

|| B55ハンガー ||

「ただいも……えれい目にあっただよ……」

「どうしたん？マスター」

「この時代に陰陽師……まさかいるとは……」

「へえ……」

「ん？ラトロワさん？」

「カオル殿、この機体でお願いできれば…」

「ん？ケンプファーか……これまたどうして？」

「滑走での強襲…まさに我が隊に…」

「というか実は部下からの要望もあったので…」

「元データーは装甲が前面しか受けられない…」

「からなあ…ま強化すれば使えますか…」

「いいでしょ…設計して試してみます」

「ありがとうございます」

元データーを呼び出し…Z時代換装やルナチタニウムに変更等、装甲を全面的に施す。

（増えるとおもったが…まあまああんまり位？）

とりあえず1機注文してみた。

帝国からリストまわってきたので、

T - 850をボディガードとして派遣。

T - 10000が3人戻ってきたので…資金8000万円もたせて、
ミスリルの家族回収に向かわせる。

で精神力は尽きたので就寝。

2001年9月4日

「マスター、クーデター決行時刻わかったよ…」

「よし、じゃあ集めてくれ」

「イエス・マイ・ロード」

………

会議室に、

アムロ、シャア、ドズル、ミーリテイシア、アンシエ、キャステロ、
伊隅、桜井が集まってきてる。

伊「カオルさん……知らない人沢山なんです……」

「了解自己紹介っすね…」

「それではクーデターに対する作戦会議の前に、初顔合わせの方々がいると思うので…」

「まずは、今回の中核となる、ミスリルチームのキャステロ大尉です」

「同じく、B-01隊長のミーンリテシニア大尉」

「また、チームではないですが、火消しとしてM9に乗ってもらおう
アムロ大佐、シャア大佐、ドズル中将です」

「ウオードレス小隊桜井隊長」

「でこちらが今回副司令からお借りしたA-01イスミヴァキュリ
隊長の伊隅大尉です」

互いに挨拶しまくる。

「では…11号情報説明よろしく」

「はい。ほぼ確定的な情報として明日5日深夜2時に、帝都守備連隊を中心として、軍事クーデターが発生します」

スクリーンに表示される。

「またこれに呼応して、富士教導団所属の第一富士基地、木更津、目黒、市ヶ谷、習志野、入間、朝霞、練馬、十条、、三宿、用賀、小平、立川、松戸等でも蜂起が確実です」

「帝都圏の殆どだな…」

「またそれ以外の基地でも可能性はあがっています」

スクリーン変わって

「クーデター側の目標は、帝都にある各行政機関、各大臣邸宅、首相官邸、

主要浄水施設、放送局、発電所…そして、帝都城へ…」

「目的としては、各大臣の抹殺、そして殿下への越権です。以上で状況説明終了です」

「で、こっちの手札はしつての通り…これだけ」
スクリーンに写される…

「なんだけど、今回は全員捕縛を目指しますので、そのところは留意して下さい」

「了解」「おう」「殺しはないのか…つまらんのう」「等等」

「ドズルさん……」

「気にするでない」

「と、捕縛についてですが、無力化の武装としてこれら…」
スクリーンに表示

「を準備しました」

「質問、航空機の無力化は起動前でないと死人がでるが？」

「ええ…ですので最優先ターゲットが、人間、木更津基地への潜入、無力化」

スクリーンに丸が印される…

「次に、歩兵、車両、基地等の無力化」

「最後に、戦術機ですね…」

「優先ターゲット逆じゃないか？」

「対戦術機は、戦闘機動をせざるかもですので介入がばれる可能性があります。」

「なので、基地を襲撃後に、電波妨害をかけ、徐々に減らしていく形をとりたいかと…」

「また戦術機だけなら、施設の占領は脅迫か破壊しかできませんし」

「そつだね…」

「各優先までの移動手段は、ヤドカリ操作のMH-67改が…
また補佐にヤドカリ操作のM9もつきます」

「で、要人保護要領なのですが、起こった時点で各保護対象にはT-850をつけています。MH-67改にて、回収、移送の手段をとります。」

「強襲輸送隊で行って下さい」

「はい。」

「B-01のM9参加以外の隊員及び、A-01は横浜基地にて即応態勢で火消しになります。
多分強襲が予想されますので…」

「了解！」

「繰り返しますが、今回は一人も死人を出さない…その前提での作戦立案になりました。」

そのための我が軍の兵器、兵士です。

そこどころ一つよろしくお願いいたします」

各隊長はそれぞれのチームへとちってゆき…ミーティングへとはいる。

そして夜はふけてゆく……

……

カオル報告

ケンプファーテスト機発注

作者 「サブタイトル後悔しない」

ナギ少尉 「陰陽師ですか…」

作者 「陰陽師を呼びから発展しすぎました」

ナギ少尉 「彼等はゲスト？準レギュ？」

作者 「まだ敵側じゃないか…なぜ準レギュに…」

ナギ少尉 「だって、パチンコ好きなんですよ？」

作者 「ぐっ……」

ナギ少尉 「その世界からだしたなら…ただですますわけがない…よね？」

作者 「ま…まあ今回は、帝都動乱その3 勃発 お楽しみに」

ナギ少尉「こら逃げんな作者、矢部野彦摩With坊主ダンサーズ
どうすんのよ!?!」

第88話 帝国動乱その3 勃発 投稿日20110302

2001年9月5日 未明…

ザッザッザッザッ

彼等は隊の基地から歩ききだすと……

ヒューバシィ ヒューバシィヒューバシィ

「な、なにい？」

トリモチ等に阻まれて…

「くう」「た、たすけてくれえ」「は、はがれん」「まってる」

「じ、銃が」「う、ズボン破けた」「素足にくつついた…いでえ」

まだ隠密行動中で住民にさっせられても困るのに…

大きい声もたてられぬ…

ヒューバシィヒューバシィ

「うわ!」「きたあ」「わしにもか」

次々どこからともなく動けなくなり…

「ぐう……無念」

翌朝……地域の住民により……

「隊長さん……なにやっとするのかや？」

「はっはっはっ……わけわかりませぬorz」

という状態で見つかってしまった……

時間戻り……別の隊に……

ブロロロ

彼等はクーデターに参加の為に駐屯地をでて……しばらくすると……

パシャパシャ

「なんだ？水？雨？……うお」

ギギギシュー

「手が剥がれない」

「く……動かない……」

かかってないものが……車両に手をかけると……

「うー！！接着材？」

「動きません!!……うわぁ」

パシャパシャ

「ギヤーかかったぁ!」

「よるなくつつく!」

「あの一抱き着いたまま?」

接着材で阿鼻叫喚の世界となる…

「はがれん!!無線機で!」

「胴体からとれないっす!」

「ええーいわし……なんの!!……いででで!!誰かトークスイツ
チおせい!!」

周りには動けるものがいなかった…

「隊長…道路の真ん中でどうします?」

「しらん……」

「やべえ…トイレ…」

「おま…！くつついてるのにやめろ…！」

「我慢できない…」

「やめろ…やめろ…！」

「いいよね？」

「う…！…やりやがったな…！」

「あははは…」

「お返しだあ…！」

「濡れてるから関係ないさ…きもいけど…」

彼等は…翌朝、小水のおいがする…とのクレームが帝国軍にはい
った…

付近の住民から…

またまた戻り少し前…

「搭乗…！」

「おう…！」

彼等は自分の愛機のヘリコプターへと駆け出す…

しかし…

「と、扉が!!」

「なんで溶接してるんだああ!!」

「ぎゃあローターが……」

屋外に駐機してあった機体はさんさんたる有様だった…

予備機に変更せねばと格納庫に向かうと

「な、なぜ……」

格納庫の扉が開かないばかりか、
隙間からみえた内部ではやはりずたぼろになっているヘリが見えた。

クーデター側で参加予定だった、ヘリコプター達は…
参加する前に既に無力化されていた……

またまた少し戻り別部隊…

ザッザッザッザッ

彼等は車両に乗らず、行進していた…

なので異世界軍内で優先ランクが下げられてたが…

しかし！

「ふも！！」

「た、隊長！なんか変なのが前にいます！」

「……着ぐるみじゃないか…構わん射殺しろ！大義の為だ！」

「いいんですか？」

「構わん…問答無用だ！！」

バンバン！

「な、なにに！！何故たっている…なに近距離で外してるのだ！帝都守備隊の名がなくぞ！」

バン！

「…ふがない…私がやる！！」

バン

「……むっ……」

近寄って

バン

更に近寄って

バン

密着して…というか…それを試そうとする…

一瞬でスタンガン浴びて伸びている…

「う、うてえ！！」

「ふもう！！」

ボン太君は銃撃の中、ゴム弾を撃ちまくる。

「やってられねえ……………」

「ありえねえ……………」

「ば、ばかなあああ」

結果…

「ふんもう！！！」

手錠をかけて人を山にして旗をたてるボン太君の4人集。

また時間はもどり…

場所は市ヶ谷…

「いよいよ始まりましたな…」

「すべては皇武院殿下の為に！！！」

「すべては煌武院殿下の為に！！！」 *多数

そう…ここはクーデター側の後方司令になっていたが…

「て、敵襲!!」

「なにい？」

「敵は着ぐるみです?」

「はあ?」

「ふんもう!!」「ふも!」「ふも!」「ふも!」「ふも!」*多数

「ば、ばかな...1個歩兵大隊が警備にあたってたんだぞ...」

「ふもっ!」

「降参しろか...無念...」

時間はまたまたさかのり...

ガッシ...ガッシ...ガッシ

NOEせずに隠密にすすむ不知火たち…

不知火には日本帝国軍のマーキングが入っている。

そう不知火はクーデター参加部隊だった…

歩みを進んでいると…

後ろの機体の反応マーカーがいきなり消えた。

「ん！！何事??」

列の先頭にいた機体が振り向くと…

白煙を上げてる機体、また、だらんとだらし無く武器を落としている機体等様々

「！！！」

なんだかの攻撃?と思った瞬間…

「うおお！！！」

いきなり網膜投射が乱れて消えてしまった…

彼の目には…機体内部のコクピットしかうつってない…

「くっ…いきなり何なんだ!」

カチカチ

「再起動不可か?…」

カチカチ

「ムウ……………承った機体破棄せざるえない……………のか?……………無念……………」

プシュー

ハッチを手動オープンで開いてみると…

部下達も外に居るのが見えた…

「おい!!どうなってるか誰かわかるか?」

「強力な電氣的なもので電装系がいかれてますね…攻撃受けたのは確かみたいです」

「誰かその的みたか？」

「いえ」

「……強化装甲起動させるぞ！」

パシヤパシヤ

「うお！な、なんだ？水？」

拭おつとすると……

「ギャーくつついたああ」「は、はなれねえ」「隊長！あたしの胸に」

「ふんむ！」

朝方、オブジエとして固定された彼等がみつかった…

等など帝都に向かった歩兵、車両、戦術機の殆どが無力化されていた。

首相官邸前…ひっそりと闇になっている。

「むう………」

合流予定の別動隊がこなく焦っていた…

「致し方ない…時間はかなり過ぎている……突入」

彼の同士達とともに門に接近…

「やはり警備のものが居ません!」

「都合がよくなっただけだ!」

彼等は官邸の中に突入する…

「むう…嵌められたか?」

官邸内には人の気配がない…

官邸の首相寝室へと目指し…

扉を蹴り上げ…

「われら日本を憂い、逆賊、榊！！覚悟せい！！」

布団はこんもりとまっているのがみえるが反応ないため…

「ええい！！…くっ！！」

布団の中身はからだった…

「うわぁ！！」

廊下より音が聞こえる…

「何事だ！！」

「か、確認してきます！！」

…

「ガスです！！階下はガスで全滅です！」

「なにい！！」

コンコンコロコロ

「！！手榴弾！！」

物影に一齐にとびかかれると…

プシュー

「うっ」

ゴホゴホ

途端に強力な眠気が襲い始める…彼の目には…意識を手放すまえに、
ネズミだか犬だかわからないシルエットが…

さて、肝心の榊目線にも語りは移そう…

ゆっゆっゆっゆ

「むう？？」

「起きろ、クーデターだ5分でしたくしろ」

「！！わかった」

榊首相は急いで着替え始めた…

「準備できたか？」

「頼む…ところで、官邸の者達は？」

「すべて避難してもらった…いくぞ」

裏口にでると、用意してあった車に乗り込んだ…

車はすぐさま発進する…

「しかし…君はつくづく奇妙だね」

「何がだ？」

「いや…本当にロボットかね？と錯覚してしまうんだよ」

「正しくはターミネーターだ」

「そのロボットとターミネーターは違うのかね？」

……

車は日比谷公園につく……

何台がいる……閣僚の何人かだろう……

「おりろ……間もなく迎えがくる」

「うむ」

車両をおり……広場の方へ連れてかれる……

先行してきたのだろう、閣僚とその家族も一緒だ。

「首相……！」

「おお、皆さん」

「いやはや……起きるとは聞いてたものの……実際におきてしまったとは

…」

(風?)

上空から、風がおりてくる。上を見上げてても何も見えない…

「来たぞ迎えだ」「迎えだ」「迎えだ」「迎えだ」「迎えだ」「迎えだ」「迎えだ」「迎えだ」

突如として青白い閃光とともにかなり大きめなへりが姿を現した。

「こちらはミスリ…じゃなかった異世界軍だ…今から着陸します。着陸までは近寄らないで下さい」

へりが着陸してきて…扉があく。

「内閣官僚の皆さん！急いで乗機を…！」

その声とともに機内へと駆け込む。

護衛についてたターミネーター達は乗らず…

「君らは？」

「私達には任務があります…お急ぎを」

「ありがとう」

扉はしまり…

「当機へようこそ、横浜基地への直行便離陸します!!」

の声とともに機体は離陸し始めた。

(ほづ…このへりほしいな…)

揺れや振動など殆ど感じない…

「ECS作動」「チェックECS作動正常」等コクピットから聞こえてくる。

機体は25分後…直接戦艦ハッチから内閣閣僚をのせ…はいつていく…

帝都守備隊第一機甲連隊所属衛士

「む…」

彼は焦っていた…帝都圏に発生した大規模的な電波障害の為にだ…

結局、連隊の内何機かが別れ、状況確認にいく事となり…
また彼の占領している国防省においても、
合流予定の同士達は来ないばかりか、抵抗らしい抵抗も受けてない
のだ…

また最初の時にあつた正体不明の機体も気になっていた…

回想

ガシイガシイ

彼の所属連隊は朝霞から出はじめた…

行進していると、突如として…最後尾のマーカーが消える。

即座に…

『敵襲！警戒せよ！』

しかし、それ以上は何も起こらず…

がしばらくするとやはり最後尾の機体が狙われ…

6度目の時に…『機体の右側うてえ！！』

すると…

闇の中から青白い閃光とともに、機体が浮かびあがり、
レーダーに反応が返ってきた。

機体はかなり小さい……

『あの機体はなんだ!!』

『追撃せよ!!』

『おう!!』

しかし……

『すばしっこいやつ!!』

『なんだこのネバネバは……うざい!!』

『こっちのほうか機数は多いんだ!相手は1機、先行包囲しろ!!
それに相手は近接兵器しかもってない!!』

……

やっと包囲が完成しようとしたとき……

『むう煙幕!!』

『赤外線……ダメです!!』

『なんだこの煙幕は!!』

『各機煙幕より離脱せよ…外周を固める』

『おう！！』

……

『間もなくはれるぞ…』

煙りが晴れると……いなくなっていた…

その後も何度か襲撃があり…

帝都につくころには機数は半減…修正せざるえなくなってしまった

……

その頃…アメリカ軍第66機動大隊…

「横浜国連基地に迎えですと？」

「そうだウォーケン少佐、君の大隊でもって、

原因不明の電波障害がおきている中、横浜国連基地の防衛をとって
貰いたい。

これは仙台臨時政府の要請だ」

「横浜基地は受け入れた承しているのでしょうか？」

「聞いてはおらぬが……なに、日本政府からの要請だ。国連軍に協力するで通してもらいたい」

「了解しました」

……

房総半島上空に差し掛かると……

『少佐、レーダーに感あり、前方から機体がかかります』

『あの距離なら……いえまっすぐこちらに……』

「ばかな」

そつだろう……彼等ののる機体はFA-22最新型のステルス戦術機なのだ……

こっちの機体より向こうが先に感知する事はないのだ。

しかも電波障害中に……でもある。

「総員戦闘準備、正し命令あるまで絶対に発砲するなよ」

『了解』*多数

『あゝその接近中のアメリカ軍第66機動大隊に告ぐ』

「なに?...ばかな...」

『こちらは異世界軍だ、当地域への立ち入りは、

日本帝国の主権において認めない...直ちに領空外へと退出願いたい』

「こちらは第66機動大隊だ...そちらが異世界軍である証拠がわからない...」

よってそれには応じる事ができない」

『ふむ...そうだな...今、そちらの機体にデータを送る』

機体データがきた...確かに異世界軍のマークだ...

「確かに異世界軍所属機は確認した...しかし、我が隊は仙台臨時政府により、協力するように命じられている」

『当、横浜国連基地は、国連軍、及び異世界軍において管制下におかれている。』

また日本の正当なる政府である榊首相以下閣僚を保護し正当な政府が機能している。

また我が異世界軍の独立統帥権に干渉する問題だ...

よって、こちらからの要請がない限り受け入れは認められない。

また先程警告した通り正式な内閣、榊首相以下の日本政府の要請ではない…

貴隊らは帝国主権を侵している…

これは警告だ、領空より退去せよ』

向こうの機体が周りを取り囲んできた。

(撃震？それにあの機体はなんだ？不知火にはにてそうなんだが…)

『繰り返す……』

「わかった…当大隊は帰艦する…総員、轉身！！」

命令を下したとたんに…

『な、テストレフ少尉！』 『ノベコフ！！』 『スローネ！』

『発砲するな！！』

「どうした！」

『戦闘行為と見受けられる…全機、発砲機体を無力化せよ！』

「まった何かの……」

次の瞬間ありえない空力機動によって…
発砲した機体は行動不能にさせられ…
墜落か？とおもいきや捕縛状態で飛行を続けられている…

『当、異世界軍は、ただいまの戦闘行為により、
貴官ら、アメリカ軍第66機動大隊対し、拘束を命じます。
離脱ある場合においては命を保障しません…いいですね？』

「クツ……しょうがない…貴官らの指示を受けよう」

『各機体の武装を解除します。俺が周りますので手渡しをお願いします』

「聞いたか？素直に武装解除に応じるぞ…」

アメリカ軍第66機動大隊は捕縛拘束され、横浜基地の異世界軍工
リアの牢屋にぶち込まれました。

場面は変わり…

「ふう…あとこの帝都守備連隊…
いやもう28機程だから大隊未満か…」

『ですね…』

彼等に情報はリークし、この横浜基地へと向かっている。

勿論電波妨害は解除済みだ…

迎えつつはA-01、ビックネーム達…

B-01やミスリルグループは富士教導隊を無力化し帰還中だった。

「わしも戦わせろくのドズル閣下は、富士の方だったし」

『ふふ…似てるな』

『ああ…』

『ドズルのおじさんの口癖…、うおおお斬りたい斬りたい斬らせろ…!!』

(なにクェスに仕込んでんだよ…)

等と盛り上がった…

『ねえカオル…』

「ん？」

『ばれちゃった…』

「え？」

『カオルとの初めての事』

「……誰に？」

『カオルー！！おめでとう！』 『いやーめでたい』 『不潔です』

『いいなあ…あたしより早いし』 『狙ってたのに』

『今晚押しかける』 『わたしいきおくれに…』 『水月中尉はもうやりまくり』

『ちよつと！！』 『と、河田先任から』 『河田！！』 『わたしいつてないです宗像！！』

『あはははは…』

「うんまあしょうがないさ…」

『でね、アムロさん？ってひと強いのか？』

「ああ、エースオブエースさ」

『速瀬中尉どうかな？』

「ふむ…いいんじゃない？」

『速瀬中尉の想い人…いつちやってさ…
あと、同じく思ってたのが、涼宮中尉…
なので見てられなくて…』

「だな…セッティングしてみるか…」

『よろしくね』

『さあさあじゃれるのはおしまいだ…来たぞー!』

「アムロさん、シャアさん、クエス」

『…』 『なんだ?』 『なーに?』

「要注意なのが、この沙霧尚哉、駒木になります。当たりにいきま
す?」

『僕が沙霧かな?』 『アムロ速いぞ……じゃあ駒木』 『あたしは…
あそんじゃあ』

「わかりましたお願いします。くれぐれも…」

『ああ捕縛するよ』 『うむ』 『えっへへへ、スタンスティックの舞
…なんちゃって』

『その道を塞いでいる異世界軍、国連軍に告げる。

我々は帝都守備第一戦術機甲連隊である

ゆえあつて横浜基地にいる逆賊、榊首相以下数名をもらい受けにき
た…
通して貰いたい』

「こちらは、異世界軍、渚カオル国連大将です。内閣閣僚は当異世界軍の保護下にあります。よって、正当な政府以外からの、その様な要望は受け付けられません。また貴方方、クーデター軍においては日本帝国主権政府より、鎮圧の依頼がきています」

『名乗り遅れた…わたしは沙霧尚哉、日本帝国軍大尉だ…その主権政府自体が売国奴の集団なのだ！』

ゆえに我々は立ち上がった…
我々の大義…貫きさせてもらうぞ…総員抜刀!!』

「わかりました…受けて立ちましょう戦闘準備!!」

『押してまいる!!』

「いけえ!!」

……

カオル報告

ナギ少尉「あ〜ん…いいところなのに…なんで作者この終わり方なの？」

作者「…長くなったからさ…で次回は決着、後始末だし…」

ナギ少尉「しかし、チートね…行動わかってちゃ…後だしジャンケンも良いとこ」

作者「だろうなあ…奇襲や突発的がクーデター成功の元だし…」

ナギ少尉「他の国でもそうよね…外遊中とか…あとは民衆の力でとか…」

作者「最近だと…リビアか…」

ナギ少尉「カザフイね」

作者「しかし…なぜお前がしている」

ナギ少尉「後書きだからきにしない…次回、帝都動乱その4 鎮
庄 お楽しみにい〜」

双方がぶつかりあう…

ウオオオオオ！！

魔撃震より咆哮があがり、スタンスティックを握りしめ…右翼に向かう…

（アムロさん、シャアさん手筈通りだな…）
ウオオオオ！

跳躍し雄叫びをあげながら一気に…

（ちい）
ガアアア！

かわされたので左手で相手の機体の足を掴み、
Gをこらすとともに引き寄せ、突き刺し、電撃を相手の機体にながす。

（まずは一機）
ウオッフ！

すぐさま抜き、横移動し、別の機体へ突き刺し電撃を流しながら…

（二機目）
抜き、相手の身体を軸にしながら別の機体へ跳躍…
ウオオオオオ

（さすが帝都守備連隊第一機甲連隊…）

かわされながら…36mm突撃砲当たる感触がする。
ウオオオオオオオ！

（ATフィールド！！薙げ！！）

うった機体の膝部分を狙う…

切断されバランスを崩しはじめる。

ダッシュしてスタンステイクを突き刺し、電撃を流す。
抜き、周囲を見渡すと…

(次!!…ちととおいしいか)

ガフガフガフ、ウオオオオ!!

(うおりやああ)

誰かの機体と鏝ぜり合いの最中に横から突き刺し電撃を流す。

『ちよつと!!もってくなああ!!』

ガオウ!

「わりい!」

すぐさま抜き、

(次!!…あれか!)

ガフガフガフガフ!

かけるかけるかける…

ウオオオオオオ!!

大跳躍…

遠距離で、撃ち合ってた機体に真上から襲い掛かり…突き刺し電撃
をながし…

(つぎ!!…くう…おしまい??)

……戦場でたってるのは既に味方機だけになっていた……

(パワーバランス悪かったか……な？3分位？)

「各機状況報告」

『こちらアムロ、沙霧大尉捕縛済み』

『シャアだ同じく捕縛』

『クエス、なんであたしが人集めなきゃならないの!!』

「シャアさん、アムロさん」

『わかった』 『ああ』

『伊隅だ…ものたりないな』

『水月よ……あとでカオル覚えてらっしゃい』

『西坂よ…水月中尉の相手よろしくたのむぞ』

『河田です…あとで肩もみましようか？』

『高畑……異常なし』

『風間よ…この機体好きだな』

『宗像…今晚はイッシーと？』

『石橋…宗像さん…無事よ。カオルの機体のおかげね』

『小倉…はあカオルあたしのボディにい』

『オグー!!』

「あははは…よっし、各機、クエスの事手伝ってくれ」

『了解』*多数

行動不能に陥った機体から、
各パイロット達を後方から来た兵員輸送車に載せ…

……クーデター最後の部隊の抵抗は終わってしまった。

クーデターの結果…

機体の損失、ほとんどが電気系統の焼き切れによるもので、

人員の損失は0

という、この規模のクーデターにしては珍しい結果におさまった。

経済的損失は…かなりあったが…

日中……

各所でこんな光景が繰り広げられていた。

「隊長、トイレ……」

「わしも行きたい！…なあお巡りさん…これ削れない？」

「そういわれましても……削ってもなんで、できてるんだか？」

「もれるうう！」

「いつになったら……あ、きたあ！！助けてくれ！」

除去作業部隊とかかれた旗をかけたボン太君、
コバッタ達がオブジェと化したクーデター軍によってきた。

クーデター兵士達は溶剤で接着材をとかされると、収容所へと兵員
輸送車で運ばれていった…

同日夜…

各地で今だクーデターの後処理、特に接着材弾の使用及びトリモチの使用の、
除去に翻弄しているなか…

帝都城謁見の間では、首謀者の沙霧大尉、榊総理、殿下、俺の対面となっていた。

「そなたが沙霧か？」

「は。敗軍の将ながら、拝謁の栄誉を賜り、真に恐悦至極にございます。沙霧尚哉であります」

「面をあげるがよい」

「は」

沙霧大尉の顔が上がる。

「此度、このような形でそなたと顔を合わせねばならぬ事、誠に遺憾です」

「殿下に多大なるご心労をおかけいたしました事、塗炭の苦しみでござります」

「私は、そなた達をかような立場に追い込んでしまった、自らの不甲斐なさが口惜しいのです」

「殿下…この決起は、殿下のご尊名において遂行された軍の作戦の多くが、政府や軍にとつての効率や安全のみが優先され、本来まもるべき国民を蔑ろにしています。しかも国政をほしいままにする奸臣どもは、その事実を殿下にお伝えはしてないのです」

「このままでは、殿下の御心と国民は分断され、遠からず日本が滅びてしまう…の判断により今回の決起に至った経緯です」

「畏れながら、今この場にいるその榊も逆賊に連なる者。殿下がお心を痛める由は微塵もございません！」

「沙霧…榊は私の忠実なる臣下。」

榊を逆賊というならわたしも逆賊というのと同じですよ？」

「殿下…」

「榊達は彼の者なりに、国と民とそして世界を想い、それを救うために力を尽くしてきたのです」

「その想いが純粹であるが故に齟齬や対立が生まれるのは往々にしておこりうる事」

「そして、それを御し切れぬ我が不徳こそが責められるべきなので
す」

「恐れながら殿下、將軍の御尊名において行われるべき政が、殿下
の御意思と違えているという現状こそが許されざる事なのです」

「無論、人のなす事に絶対はございません。ですが、それを正そう
とする心を持たぬ輩は、殿下のそのような言葉ですら都合のよい隠
れ蓑に利用しているのです」

「齟齬が生じたならば、それを正すのは殿下でなく、政府や軍であ
りましょう」

「しかし残念ながら、今の彼らにそのような自浄作用はもはや望む
べくもありません」

「先の戦いのおり、急遽仙台臨時政府が米軍の受け入れを殿下に伺
わず発表したのがその証拠……」

「沙霧……そなたの申す事はわかります。されど今の帝国の有様……
これは將軍である私の責任である由にはなんらかわりはない」

「故にそなた達が私の為に血を流す必要はないのです」

「殿下……畏れながら、殿下の潔く崇高な御心に触れ万感こもこも到り、心洗われる思いにございます。」

しかしながら、かの米軍や、異世界軍の介入は重大な内政干渉であり国家主権を脅かす蛮行である事実は、決して変わる事ではありませんん」

「事ここに到り、潔く賜りましたこの機会……このような事態を招いた不面目を棚に上げても殿下にお伝えせねばならない事があります」

「申すがよい」

「こたびの件は米国の思惑を成就せんが為の謀にございます」

「極東での復権を望む米国政府は、米軍派遣の口実を作るため、帝都での騒乱を望んだのです。帝都の戦闘から、米軍が殿下を救出し保護し、

日本の騒乱を平定する……これが米国の当初描いた筋書です」

「そしてまた米軍をたやすく受け入れようとした、仙台臨時政府のもの達こそが、帝都を戦火にさらそうとした張本人なのです」

「米軍は、わたしの友である異世界軍の手で逮捕できたのですよね？」

「はい。横浜基地に進駐しようとした際に武力行使があり、逮捕した者より、CIAによる占拠等の計画を白状させました……あと、確認しますが、沙霧大尉……榊首相以下内閣閣僚を殺害する計画でしたか？」

「殺害!?!?!?いえ、幽閉の上、殿下に権利を返上させる計画でしたが」

「これも裏がとれてますが、内部におけるCIA工作員が命令を変更させてますね」

「そんな……榊殿……申し訳ない……命までは……」

「沙霧大尉、すんだ事ですし、わたしも無事でしたから……」

「殿下、さりとて、私が決起してしまった罪、ぬぐえるものではない事は重々承知しております」

「血は血をよび、争いは争いを生みます。そのような仕儀をもたらしたそなた達の此度のおこない……それは、私や民の心を汲んだものだと本当に言えるのでしょうか?」

「將軍の意志を民に正しく伝えることが、そなた達の本意であった

としても、それが伝わらぬ者、それを阻む者を排除することが許される道理であろうか」

「そのような行為をするものが、民の意志を語る資格が在ろう筈がない」

「国とは…日本という国は…民の心にあるもの。そして將軍とはそれを民の心にある日本を映す鏡のようなもの…私はそう考えています」

「もし、映すものがない鏡があつたなら、それは何と儂い存在であろうか……」

「日本を守るといふのは即ち、民を守るといふ事…民のない国など、在りはしないのです。そなたがそれを一番わかつていながら道を誤つたのです……」

「されどそなた達に残された道があります。日本の行く末を憂うそなたの想い…志は私がかと受け取りました。これより後は、常に此度の件を戒めとし、民のため、日本のために尽瘁する所存です」

「煌武院悠陽の名にかけて…そなたに誓います」

「殿下ありがたきお言葉の数々我が身には過ぎる榮譽にございます」

……」

「我が同士の処遇……くれぐれも宜しくお願いいたします」

「殿下」

「カオル殿なにか？」

「沙霧大尉についてですが、このままだと死罪に？」

「もとよりは覚悟の上」

「そうなるかと……」

「今回の騒動、幸いな事に死者は出ませんでした。

その上でのお願いですが、除隊に減刑お願いできませんでしょうか？
かの者達とて、殿下を思ってこそその行動…その命役に立てずに散らすには惜しい……」

「しかし……」

「そこで我が軍にスカウトの上、殿下の矛としていえ、世界の矛として活躍させたいと思えますが…」

「そなたの軍にか？しかし…」

「殿下、その根源となった、政治的権限ですが、新内閣設立時に、権利を返上いたしたいと存じ上げます」

「……わかった…沙霧達の事よろしく頼むぞ」

「はっ！」

……

殿下の放送がはじまった…

「我が親愛なる日本国民の皆様。長きにわたり多大な苦難を強いている事、誠に申し訳なく思います。

此度の事件は、若き命が国の過ち、延いては私のいたらなさを正そうとしたが故の決起でありました」

「日本国民の皆様、民と国のため…数多の英霊の遺志を背負い、私は歩み続けます。

どうか、皆様のお力を今暫くおかし下さい。同じ過ちを繰り返さぬよう、各々が為すべきを為せるよう、

共に未来を見据え、歩んで参りましょう」

即日、異世界軍特殊部隊による、仙台臨時政府要員の逮捕、
国家反逆罪として処罰する事になった。

「何も知らない!!」と白々しくいつてるが、
叩けば叩くほどホコリがでるようで…

また、クーデター兵内部のCIA工作員も逮捕監禁でき、
帝国軍内部の工作員も一掃できたのはいうこともなかった…

後日、榊首相以下保護した面々+帝国派による、新内閣が組閣され、
煌武院悠陽殿下に政治的特権を含む権利の返上。

以後内閣は殿下の補佐的役割になり、殿下を助ける役目となる。

(ま、人死はでなかったし…万々歳かな??
…さて、アメリカどうしよう?? CIA癌すぎるよな…)

カオルは基地に帰りながら…思っていた。

…

カオル報告…

速瀬中尉？？……逃げるさ逃げきってやる

作者「クーデター編終了〜〜〜」

ナギ少尉「しかし、本編入る前に起こっちゃたね…」

作者「だなあ…原因は異世界軍のプラントにあるけどな」

ナギ少尉「その技術というかそのものがほしかったの？」

作者「現状、プラントに生産できてないものは殆どない…まあプラント自体は秘密だが、
CIA工作員が多数逮捕され、現状横浜には絶対なんかある…
…がユーコン基地におくった魔ドムでわかつちやつたからね」

ナギ少尉「ところでウォーケン少佐とかどうするの？
またすっぱんぼんの裸にして送り帰すの？」

作者「それは次回…のお楽しみに…サブタイトルは帝都動乱終了…
そして日常へ…」

ナギ少尉「なんか日常って何回でたの〜？」

第90話 帝都動乱後の日常 投稿日20110304 修正1

2001年9月6日

クーデターがあけ…翌日…

(とりあえず沙霧大尉は確実だとして…
あと誰がくるんだろ…?)

と思いつつ、ハンガーに来ると…

水月さんが鬼の様な形相でいた。

回れ…右駆け足…

「カオル!!」
と捕獲されました。

「え…えつと…??」

「シユミレーターの手しなさい!!あんたは未改造撃震だからね
!」

「11号!アムロさん呼んできてええええ」

ドブプラー効果で引きずられてくカオル…

11号アムロを探しにフヨフヨと…

「アムロさん」

「ん？11号か…なんだい？」

「マスターが呼んでます」

「何ようかな？」

「さあ？…引きずられていかれたので、用件聞けなかったのですが…」

「カオル君がかい？…石橋にか？」

「いえ、水月にです」

「……ああ、あの娘ね……と、カオル君の処にいつてくるか」

「よろしくお願いします」

アムロさんをアテンドしてマスターの処にいくと…
シュミレーター室で制限かけられてフルボッコにされた。

管制台に行き、

「マスター、アムロさん連れて来たよ」

『お、サンキュー…さて、どう負ける……??』

暫くすると、マスターが出てきた。

「ちょっとカオル!!まだまだやるよ!!」

「勘弁して下さいよ…アムロさん、彼女を手なずけてもらえます
?」

「ああ、しかしあんなに怒ってなければ…
可愛いのに…もったいない」

「アムロさんが相手してくれるってさ
宇宙世紀におけるエースオブエースだよ」

「!?!?!…相手になるわ!?!」

「後は、よろしくつす」

「ああ」

アムロ大佐と入れ代わり…… 11号の側へよつてきた。

「11号さんきゅ。まあ後はアムロさんが水月の相手してくれるだろう…」

にしても、昨日逃げてたからなあ…俺も…」

その後カオルは、後始末が、まだすんでないアメリカ軍の件をすまそうとしていた…

向こうは夜だろうと関係ない。の強気だったが……

「こんばんは、大統領」

国際衛星電話…

『渚カオル殿、待ってたよ』

「では早速ですが、第66機動大隊についてなのですが…」

『ああ、君のところが不当に拘束している部隊の事だね?』

「は?不当といえますと?」

『わたしは、君のところが、我が軍の機体を勝手に攻撃、武力で脅迫して拘束した…と報告をつけとるんだが』

「は???全く違いますか…」

『よって君のところに』

工場設備の技術提供請求をしようと思っていたところなんだよ』

「大統領!!それ本気で?」

『本気だが?』

「……この通信内容を聞いてもらえます?」

第66機動大隊とであった時の通信内容を流した。

『ほづ……これの出所は？』

「自分の機体からですか？」

『我がアメリカ軍機からでは無いのだね？
音声加工されてるのでは？』

「アメリカ軍機は……」

「マスター……アメリカ軍機はログが残って無い……」

（嵌められたか……）

『よってわたしとしては、
部下からの報告を信じてきみらに工場設備の技術提供請求をしよう
としてるんだよ』

（CIAの密談とかも駄目っばいな……なら）

「11号、ファイルナンバー-1を」

「使っちゃうの?」

「ああ…」

「今から流す内容をよく吟味して下さいね…大統領」

『まった…我がアメリカとしては』

回線を勝手に切り替えた。

「ふう……さてと……どう処分してやるのがフッフッフッ」

「マスター…怖い…」

暫くすると…回線呼び出しが…とると、

『き、きみい…な、なんだねあれは…』

「え?いやなに、選挙戦の不正の数々と、不正献金の数々と、愛人とのやりとりとかですね」

勿論映像媒体、裏つけ証拠付きですよ。
かなりおさかんでしたね〜」

『「これ…これを…どうするのかね？」』

「マスコミに公開したら面白い事になるでしょうねえ〜」

『「や…やめてくれ…それだけは頼む…」』

「言う事聞き続けるなら、いいですよ？」

『「………わかった」』

「えっとじゃあ第66機甲大隊なんですけど彼等をそのまま下さい」

『「ああ…手配する」』

「あとは、彼等の家族難民キャンプに入っているようですが、市民にする事できません？」

『「………多分すぐには無理だろう」』

「…ならこっちで引き受けましょっ」

『わかった手配する…』

「とりあえずは」

「マスターXG-70」

「XG-70?」

「副司令がほしっていった」

「あと、XG-70もトサイ」

『わかった…』

「とりあえずそんな事です…あとはそうですね
その報告書の出所疑ったほうがいいですよ。
でなきゃこの手使わなかったかもしねませんし」

『ああ……』

「では失礼」

大統領との回線をきった。

「11号、あと資料どれ程あつたっけ？」

「愛人とのメイクラブ中と、もう一人の愛人とのメイクラブ、あと企業からの不正献金、脱税、あと14歳に対してのおさかん」

「引き続き情報収集頼むよ」

「イエス・マイ・ロード……ところでマスター第66機甲大隊まるごともらつたの？」

「後催眠とか仕込まれてて、使い捨て、可哀相じゃん」

「まあ……マスターが決めたなら……」

「まあっついで25号に案内させてね」

勿論、捕まえたあとアルミサエルの力でもって後催眠やCIAの計画陰謀、

またその他色々なものを引き出し、また家族環境を考慮した上で、洗脳解除は施した後だった。

テスレフ少尉の発砲は洗脳し、仕組まれていた……事だった。

アルフレッド・ウオーケン少佐は、

陰謀の数々を吹き込んだらうなだれてたので暫く放置中だった…

「カオル殿」

「あ、ラトロワさん」

「機体の話なんです、我が隊にあのケンプファー合いますね」

「あ、じゃああれにしちやいます?」

「お願いします」

ジャーナル大隊、総員24名分の機体が決まりました。

因みに本編にはかかれてませんが、

高周波ブレードを、

足、腕の外側に装備したのはお約束。

「まあ、これで決まった事ですし、やわい戦術機とはおさらばですね」

「ええ…今度の機体の装甲には目をみはるものがありますよ。これが戦術機にあつたなら…」

「基本地上の重力では生産できないっすからね…」

「あつたなら…今までいった部下達も逝かずにすんだのに…」

「ま、これからは死人出ないと思いますので…ジャール大隊の腕ならね」

「はい!…」

ラトロワさんが別れていって…

さて…明日いく予定だから、やり残した事はないかな?とおもつたら、

よれよれになったバーニイが来た。

「バーニイお疲れ」

「カオル……」
ヒヨイツと、ユンケル皇帝液ロイヤル3000を渡す。

「サンキュー」

一気に飲むバーニィ。

「プハー…病み付きになるね…この味」

「で、今解放されたん？」

「ああ、そうさ…本当ヒルダ様は、いつ寝てるんだ？なんだが…」

「俺の聞いた話を合わせると寝てないっつ話だぞ」

「マジ？」

「ああ、C・O1が相手してた時間のあと、執務室はいつているのを確認してるし、
ある程度の時間のあと、また別のC・O1が相手してるっつてね…」

「あの人ならありえるか……」

「なあそんなに凄いの？」

「ん？カオルは相手になってないん？」

「まだね」

「あの人の凄さは味わってみたいとわからねーよ……
まさにグリーングリーンな世界さ」

「……」

「けどなあ」

「けどなあ？」

「俺も戦場に出たかったな……」

「……どして？」

「まあさ、まだ両手で数える位しか出てないんだぜ……」

「あーうん」

「で、たまたま……さ、相打ちでクリスの乗るガンダム撃破したとはいえね……」

「やっぱり経験じゃん……やってけるかなあゝの不安があるわけだ……」

「……」

「でもって昨日戦いにすら呼ばれなかった……
まあ相手がヒルダ様であるからしょうがないけど……」

「……」

「戦いたかったんだよね……俺は……」

「やっぱり4人じゃ対応しきれない？」

「正直、うん……と言わせてもらおうよ……」

「まあわかった……考えとくよ」

「うんじゃあ……医療カプセルいつてくるわあ」
「ひらひら振りながら……うん背中が煤けてみえる……」

（さて、第66機甲大隊の機体は……後でいいか……
まずはシュミレータ訓練からだからな……）
机を叩きながら……

（ふむ……先にいけにえか……となると無駄遣いはできないから……っと……）

シャトルの生産200機、
あと魔ガルダ級の生産のみにとどめた。

魔ガルダ級の改造要点。
メデューシンを参考に、
エンジン構造をかえ、4発 8発に変化

また離陸、着陸距離の短距離化を目指した。

「一週間程、時間頂戴」

「よろしくなあ」

カオル報告

ジャール大隊機体選定、魔ケンプファー24機

人員吸収 第66機甲大隊

魔ガルダ1機注文

シャトル200機追加

作者「さて次の世界は……」

桜井隊長「作者さん、わたしの事忘れてませんか？」

作者「お、桜井さん…活躍しまくったじゃないですか、動乱では」

桜井「ミスリルにお株かなりとられたし…かかれてないし……」

作者「まあまあ……」

桜井「ねえ、カオルといつ結ばせてくれるんです?」

作者「個人行動しないと無理じゃ?」

桜井「……コバツタ達に……」

作者「あゝかれらは赤ちゃんが欲しい!!
という原理だから無理だと思っよ」

桜井「作者…絞めるよ…」

作者「ちょー！ーやめ…おま…グエ」

作者チーン

ダイニングメッセージ SE…

第91話 SEED編 ヘリオポリス 投稿日20110305

2001年9月7日…

(さてと人材確保だなあゝ何処いくか……
とりあえずバーニイの俺も戦場でたかつたな…か…んゝゝ
あ! SEED!! 美形をいけにえにできるな…狙うは……)

「いってくるようゝ」

「いってらっしやい」

「”世界扉”」

〓〓 ヘリオポリス 〓〓

コズミック・イラ0071 1月24日

用心して一日余裕みたのが正解だったようだった…
(あちゃー座標間違えたっばいな…)

衛星を打ち上げて…

ヘリオポリスへと向かう。

二日目

なんとか本編前にはつけるようだった。

幻影をかけ…

ヘリオポリスに到着する。

ヘリオポリス自体と同化してると…

兵装作業中のアークエンジェルを見つけた。

あと、アストレイも…

ヘリオポリス内のその他の重要拠点の場所を確認…

したのちに、意識をアークエンジェルへ…

勿論取り付くと…

艦内では…

「おう、この新造艦、アークエンジェルっつ名前なんだろう？」

(作業員か…完全同化すむまで暇つぶしに聞くとしよう…)

「ああ。で？」

「実はよう二番艦の名前が、ドミニオンっつのが決定してるらしいんだ」

「アークエンジェルって確か天使の階級だったよな？」

「おつよ」

「で次はドミニオン…これも天使の階級だよな？」

「ああ」

「となると三番艦は…やはり天使の階級か…」

「な、賭になりえるだろ？」

「だな…じゃあ、ナタル少尉のシャワー写真」

「うお！…おめえ、良く手に入ってたんだなあ…」

「へへへっ…苦労したぜ…」

「なら…ナタル少尉の使用済み下着、真空パック保存」

「うっ！…あの騒ぎの犯人お前だったんか！」

「ふふふふ…まああのお宝手に入れるの苦労したぜ…」

「賭は成立だな？」

「ああ！！次の三番艦の艦名だな…」

「俺は座天使…スローネやスローンだな…」

「俺は…力天使…ヴァーチユズやデユナメスだな」

「よっしゃ…じゃあ決まったら…」

「ああ、お前のお宝貰ってやるさ」

（ナタルさんの流出ものねえ…）

カオルは同化が完了したので離脱し…

端末にアークエンジェルを覚えこませた。

次にアストレイの配置してあるハンガーに潜入した…

（ふうーん…やっぱり最高機密だから、誰もいねえか…）

無難にレッド、ブルー、ゴールドを取得。

おつぎは…民間船に偽装したマルセイユ三世級に向かう。

(確かドックに入港中だったな……あつた)

艦と同化し、格納庫を目指す。

(メビウスゼロ ガンバレルが有効なんだよな……見つけ)

メビウスゼロを取得し、

(さていくか…)

すぐに離脱し、ヘリオポリス内のモルゲンレーテの工場を目指す。

モルゲンレーテ工場に侵入すると…

まだ敵を察知してない為、まだ工場内にて、調整作業中のG達があつた…

勿論喜んで取得…してると…

「なんですつてえー!!」

とマリユーさんが叫んだ…

途端に空気が変わる工場内……

「はい、はい…わかりました…」

受話器を置くと…表情をかえ…

「みんな！！聞いて！！……」

ザフトがこの中立のヘリオポリスに侵攻してたの……」

ザワザワ

「このヘリオポリスにか……」

「艦長からは、大至急Gを搬入……って事で、搬出作業にかかって！調整作業は打ち切り！！作業開始！！」

「おう！」「やったらあ」「コンテナパケ急げ！」

途端にちりだす作業員達……

いかにこのG達が重要かわかっているのだろう。

マリューさんは表の方向へと駆け出していく……

…

ガガガガガ

「そこー！その武器はこつちだ！間違えんな！」

ピーピーピーピーピッピッピッ

「かかれー！」

たまかけてた、MSサイズの銃にかかる作業員達……

台座にちゃんと載ってるかの確認や、クレーンの玉外しにかかる。

「OKだー！！」「次かかれー！！」

ピーピーピー

「よしっコンテナハッチ閉鎖!!」

その頃、工場表のゲート付近では……

「102 304武装コンテナ搭載完了!!」

「だして頂戴!」

マリユールさんが陣頭指揮をとっていた。

第一陣のトラックが出ていった…

「102コンテナ積み込み完了!」

「102も出して頂戴!! アークエンジェルへ!急いで!」

その時……

ゴゴゴゴ

特殊部隊の仕掛けた爆弾の爆発によりコロニー全体が揺れる

「う、うわぁ!」

「な、なに??」

「中!!無事なの?」

「負傷者一名出ました!!」

「程度は?」

「転落による骨折のみ、医務室へ搬送中!!」

「そう。さあさあ急いで!!」

「おう!!」

「207、103です!!」

「303武装コンテナ車もです!!」

「気をつけて!アークエンジェルへ!!」

「あと残りは...」

「奥にある303、105です!!」

「105は武装コンテナ車が別工場だから…厄介ね」

「ラミアス大尉!艦との交信途絶。状況不明」

その時…ジンが…飛行接近してきて…

「!?!」

バラバララララドドーン!!

「…っわぁ!」

ジンの機関銃を受けた車両等が爆発し…また銃撃を避ける人々…

当たった人は、既に肉片へと化した…

「ザフトの!!X-103と303を起動させて!とにかく工区から出すわ!」

「分かりました!」

「負傷者いるぞー!!担架!!」

無事な者は、負傷者救護また、ガンダムを起動しようと散らばって
いく…

「103起動してきます!?!」

「気をつけて!?!」

「X-105と303は?」

「今初期OSを緊急でインストールしてます!?!」

「テストOSが間に合えば……無いものねだりね……」

「対MS戦用意しますか?」

「ええ……して頂戴、残りの者は、工場内の105、303の起動を
!?!」

ラミアス大尉達が工場内に走りだしてく。

その後ろではミサイルジープのった兵士達が、工場を護るように……

ラミアス大尉が駆け込んでくると……

「作業状況は!?!」

「インストール中!!10分です!!」

「105の各種武装コンテナ出たそうです!!」

「工場内で起動するわ、バッテリー状況!!」

「あと20%!!」

「大丈夫ね……」

「他の作業はないのね?」

「はい!インストールだけです」

暫くすると……

「ラミアス大尉!!102、103、207が敵の手に墜ちました
……」

「くっ奪取が目的なのね……総員陸戦用意!!
モルゲンレーテ関係者は避難して頂戴!!」

工場のゲートを閉じて！
起動できるまで、立て籠もるわよ」

「はっ！！」

「プログラムインストール急いで！！！」

「やってます！！暫く時間下さい！！！」

「OSがないと、ただのデクの棒よ」
カオルは彼等に続いてゲートに向かうと…

「うわぁ！！！」

「ゲートをなんとしても閉鎖しろ！！！」

「なるっ！！！」

「ギャ！！！」

ゲートの閉鎖スイッチに取り付こうとした作業員が撃たれた…

バン！！！！

閉鎖パネルが、壊され…

「パネルやられた！！手動弁へいそげ！！
ゲートから入れるな！！」

バリケードを盾にザフト兵を向かえつつ作業員達…
しかし、所詮は作業員だ……

「ギャ！！」
また一人、

「グオ」
また一人、

カランカラン
手榴弾が投げ込まれドーン！
また二人死亡…
一方的な侵攻になっている。

ゲートから赤服が2人、緑服が5人侵入、
ラストインと、アスランだろう。
緑服が三人程別れていった…
（ん？人数あわないな……）

別れた二人人についてくと…また別方向へと別れてく。
（どっちかな？…こっち！！）

彼についてく事にした。
彼は、キョロキョロ探しものしてたようだが、タンクルームを見つ
けると…

爆弾をだし…セットしはじめた…設置しおわって…立ち上がり
をバーン

作業員が見かけて撃ってきた。緑服は撃たれて倒れたので…
その作業員はすぐに移動しはじめ…

カオルは医療カプセルを出し、作業させ、虚数空間にほづりこんだ。
(うまくすりゃーなあ)

その頃ラミアス大尉周辺では…ちつと時間逝りますが…

「敵ザフトがゲートより侵入…閉鎖間に合いません…!」

ドドーン

「クツ…時間稼いで頂戴…!105、303だけでも起動するわ
…!」

「はい…!」

「ラミアス大尉…!」

「ありがとう」

パラパラララ銃声が聞こえ始めた…

「物陰に隠れて!インストール状況は?」

「あと5分下さい!!」

「急いで、敵はザフトよ、Gがないと持たないわ!!」

ドーン!!

大爆発がおき…

「うわああ」「クツ」「うげえ!」

爆風が105にもかかり、転落した人もいた…

「シエルターが!!」

「クツ…なんて事するのよ…民間人もいたのに…」

見ると…ドアだけになっているシエルターがあった…

「ザフト陸戦隊だ!!」

ババババババ

いよいよ工場区域まで侵入してきたザフト兵がみえた。

「クツ時間稼いで!!」

タケル! ヤマダ! ウオーケン! 前にいってちょうだい!!」

「了解!!」

「うわあ!!」

「手榴弾!!」

「ふせて!!」

ドーン

「ザフトがなんだ!!ギャ!!」

「敵の数は少ないわ!!落ち着いてねらって!!
数は優勢よ!!」

「大尉……ですが……」

「ええ……射撃の腕は……ね……後何分持ちそう?」

「増援がいなければ、ギリギリかと……」

「あなた達動かせる人はできるだけ、後方で援護射撃よ」

「はっ」*4

その、一方的銃撃戦が続くなか3階デッキに……

「あー!？」

キラとカガリがみえた。

「こ、これって…」

「…やっぱり…地球軍の新型機動兵器…うっ…お父様の裏切り者―
!」

大きい声で…きづくよな…そりゃ…

「ちっ!」

背後を振り返りながら射撃するマリューさん。

「あっ…冗談じゃない!」

銃撃をやめたマリューさん…

「…子供!？」

キラとカガリが走ってく…

「泣いてちゃ駄目だよ!ほら走って!」

マリューさん振り返り…

「インストールは?」

「あと2半分下さい!」

「なんとしても起動まで時間稼ぐわよ!」

「はい!」

「あそこの緑うって!」
「ババババババ!」

「今のうちにブライアンダッシュ!」

キュンキュン

「なんとか命びろいしました!」

囲まれかけてたブライアンを包囲から救出した。

「ハマダ!!残弾!!」

「下さい!」

マリユーさん投擲するが、
キュイン

「なっ!」

あさつての方向へ…

「もう一つ!」

もう一回投擲し

「ありがとうございます！」
キャッチできたようだ。

「うわあ！」

「ジョンソン！！」

ババババババ

「なろう！！」

「あそこの赤！！」

「おう！」

ババババ

集中され、遮蔽物に引っ込むアスランかな？

「ハマダ！！こっちに！！」

ハマダがダツシュし…遮蔽物に潜りこみ、再び射撃開始する。

……

カオルはこのころにやっと戻ってきた。

(ふへえ…一気におしこまれてらあ…)

「インストール完了です！！」

(…………キラは?となると上のデッキか…………)

「生き残ってるのはブライアンと誰?」

カオルは壁と同化し、3階のデッキへと這入る。

「ハマダです!」

「ユズル八です!」

「カミーン!!」

手榴弾が投げ込まれ今叫んだカミーンが…
ドカーン

爆死する…

「うおお」

手榴弾が打ち込まれ…
ドカーン!
爆発しまた一人巻き込まれた。

「ラミアス大尉!」

「ハマダ！ブライアン！早く起動させるんだ！」

「あ！？危ない後ろ！」

マリユーさんが3階デッキへうち放つ。

見事に手応えあつて…倒れるザフト兵。

（イツタダキマース）

すぐさま引き込み…

「さっきの子？まだ！」

医療カプセルをだしいれ…

「うわぁー！」

横にいた整備兵が撃たれ倒れた。

すぐさま、マリユーさんが、機体をすべって、ピストルで、
パンパンー！！

「うお！」

2連射！！胸に直撃うけ…倒れる緑ザフト兵…

（あれは無理だな…間に合わんし…）

カプセルを作動させ、虚数空間に引き込んだ。

「来い！」

「左ブロックのシェルターに行きます！お構いなく！」

「あそこはもうドアしかない！」

「え！？……うわぁ」

ドーン！ポフウー

通路から爆風が吹きだし、間髪を容れず髪が飛ばされたようだ……
みえねえんだよ！！この位置じゃ！！

「こつちへ！」

キラが、空中通路から飛び降り、

「あっ！」

それを見上げるマリユーさん……

「はぁっ」

キラが、衝撃をなんとかこらえ、着地したのが見えた……

（そろそろか）

「うわぁ！」

「ラストイー！」

（イッタダキマース）

引き込んだ瞬間物陰にもうダッシュ……

医療カプセルを出し、ラストインを医療カプセルに入れて……

「うおおおおー！！！」

「うおー！」

「ハマダ！うわぁ！」

「あ！……」

作動させ、虚数空間へ……

の一連の作業の間に、アスランは突撃し、一人を射殺、
マリューさんをうち、それに気がついたキラが声あげた……

アスラン 「えーい」

(？)

キラはマリューさんへ

飛び上がりストライクの上を疾走しはじめるアスラン。

「うっう」

「はぁはぁ……アスラン！？」

「！？キラ？」

ナイフで切り掛かるうとしたが……

声のでた時、動きを止めるアスラン……

「くっ！」「あー」

その隙に、ストライクのコクピットへ、ひきづりこまれるキラ……
アスランは、もういつきのイージスへと向かい、飛び渡っていく……

グレネードがうちけまれ、ドゴーン！！
爆発、炎上する

（もう逃げないとな……）

さらに通路から大爆発がおき、さらに炎上

なんとか逃げ出せた。

『ヘリオポリス全土にレベル8の避難命令が発令されました。住民は、すみやかに最寄りの退避シェルターに避難して下さい』

カオルは放送の最中、世界扉を潜る…

……

カオル報告

アークエンジェル級
メビウスゼロ

バスター

ブリッツ

デュエル

ストライク（未武装）

イージス

取得（要OS入れ替え）

アストレイレッド、ブルー、ゴールド

350mmレールバズーカー

作者「という事でラストインは無事に生き返るでしょうか？」

ナギ少尉「でC-01部隊入りであんな事やこんな事を仕込まれるのね……」

ヒルダサツキュバズの毒牙にかかって……」

作者「さすが、道筋わかっているね」

ナギ少尉「あゝもうそろそろしたら……艦長襲ってこよよ……かっことはーとかっことじ」

タッタッタッタ……」

作者「おゝい……後書き中………ううん……えゝ次回は……引き続きSEED編、サブタイトルは 大天使、流星がみゆ お楽しみに」

第92話 SEED編2 大天使、流星がみゆ 投稿日20110306

三日目

コズミック・イラ0071 2月13日

カオルは世界扉からでた…

衛星を打ち上げ、アークエンジェルを検索し、宇宙に飛び出した。

その頃目指す目標の真横についている、

第八機動艦隊、メネラオスのブリッチでは……

「レーダーに感!!」

「ん?照合いそげ……」

「艦船クラス……3」

「合流予定は?」

「なかつた筈……」

「艦船照合!!ナスカ級1、ローラシア級2、グリーン18、距離500。予測、15分後です」

「なにぃ！！こちらへ向かってきているのか？」

「くっそー、こんな時に！」

「全艦につげよ！！」

「はっ！」

「総員、第一戦闘配備！繰り返す！総員、第一戦闘配備。
当艦隊は、敵艦隊と間もなく会敵する！！」

「提督、気密服に……」

「うむ…先に着替えてくる」

「作戦陣形は密集陣形だ、二重に先陣列をとれ！！」

「ブリッチ要員も早く着替えろ」
半分程着替えに席を立つ。

「避難民ランチは？」

「まだアークエンジェルを発進してません」

「発進を急がせろ」

シユン

「遅くなりました!!」

ブリッチに気密服きたオペレーター達が入ってきた。

入れ代わりにまだ着替えてないブリッチ要員が出ていく。

「各武装チェック!!」

「オールグリーン！」

提督が入ってきて、入れ代わりにホフマンが着替えにいく…

「迎撃スタンバイ完了です。弾薬補充率98%」

「ランチ、アークエンジェルを発進しました」

「避難民は、ランチ収容しだい、シャトルへの移乗をすませよ」

ホフマンがもどってきて、戦闘準備が整った。

「格納庫、ランチ収容しだいハッチ閉鎖、避難民は速やかにシャトルへ誘導」

「各艦艇よりメビウス発進します!!」

「全艦、密集陣形にて、迎撃体勢!

アークエンジェルは動くな!そのまま本艦に付け!」

「ワルキューレワン、ワルキューレッツ、

発進!Nジャマー、展開!アンチビーム爆雷、用意!」

「補給艦、離脱!」

「ランチ収容、ハッチ閉鎖!」

カオルはこの頃、アークエンジェルを目指して艦隊が見えてきた。

(え〜と…アークエンジェルの横のでっかいのがメネラオス??)

カオルは大気圏脱出速度の勢いをこらすと、接触して同化しはじめた。

(お、当たり?)

「ママ」

「なに？」

「あのおにいちゃんまたわたしを、まもりにいったの？」

「そうよーエルをまもりにいったのよー」

「すみません！！シャトルへの移動急いで下さい！！」

「やれやれ…ついたらまた移動かい…」

「あ、荷物」

「ほれ」

「ありがとう」

とかのやりとりでそろそろと避難民たちが移動していた。

「シャトルはこっちです…！」

「速やかに乗船して下さい」

「ママー」ねにのるの〜?」

「ええ、そうよ〜。これに乗って地球へ行くのよ」

「なんかちっちゃいね…もっとおっきいおふねにのりたいなあ」

「あのね〜エルちゃん、地球におりるにはこのちっちゃいお船しか駄目なのよ」

「う〜…わかったあ〜のるう」

「うん。いいこね。エルちゃんは」

「乗船しましたら、各座席につめてお座り下さい。」

荷物は荷物棚に、シートベルトはしっかりとおしめ下さい」

またメネラオスブリッチの少し前では……

「敵艦隊より長距離ミサイル!!」

「迎撃せよ!!」

各艦艇よりパルスレーザーが上がる
宇宙に咲く火花……

「迎撃率100%すべて撃ち落とせました!!」

「定石ならこの後、MSどもがくるぞ……
各MA展開状況！」

「MA全機発進済みです!!」

「メビウス隊前進!!敵MSを近づけるな!!」

……

「メビウス隊敵MS隊と接触!!……データー送られてきます……
ジンタイプが9の他に、
敵群にXシリーズ機あり、X-303 X-103 X-207
X-102!!」

「ええいつ……イージス、バスター、ブリッツ、デュエルか……」

「確かに……見事なモビルスーツですな。が、敵ではやっかないだけ
だ。」

あの4機、なんとしても落とせよ!!」

「メビウス隊、各艦はメインターゲットをXナンバーへ!!」
しかし、艦隊でもってしてもキルレシオメビウス：ジン＝1…3になる、

ジンだけでなく、Xナンバーを有したクルーゼ隊には叶う事がなく…

「セレウコス、被弾、戦闘不能!」

「カサンドロス、沈黙!」

「アンティゴнос、プトレマイオス撃沈!」

「なんだと!?! 戦闘開始たった6分で、4艦をか!」

「敵ナスカ級、及びローラシア級接近!」

「セレウコス、カサンドロスに突撃照準!」

「ぬう!?!」

「メビウス隊損耗率15%突破!!」

離脱中の船が、ビームに貫かれ爆沈……

「……ああ！」

「離脱中の艦を……おのれクルーゼ！」

「セレウコス、カサンドロス共に、爆沈です……」

side)あるMA乗り)

はあはあはあはあ

「ぬううううう!!」

強烈なGが襲う……

がこのGに負けた時、後ろについているジンが機関銃を撃ってくるのだ……

はあはあはあはあ

目の前が黒くなりはじめる。

まだジンを振り切れない……

(かあさん……)

その時、追っていたジンが大きな火花となった。

『おい無事か?』

「あ、ああ…なんとかな…サンキュ」

相手のジンは追いかけてここに夢中になったのだろう。
横からの攻撃に気づかなかつた模様だ…

「たく、コーディネーターめ…ざまあみろ…ヴァ」

しかし彼の機体も…バスターが放ったビームで戦場の火花となった

…

side 〽MA乗りend 〽

「駄目です!!メビウス隊損耗率30%突破、敵MS群、特にXナンバーに歯がたちません!!」

「クセルクセス、パリス、前へ出ます!」

「Xナンバー、接近!」

「ビームを使うんだ!落とせ!」

「アークエンジェルより、リアルタイム回線」

「…なんだ？」

上部スクリーンにマリューさんが映しだされた。

『本艦は、艦隊を離脱し、直ちに、降下シークエンスに入りたいと思います。許可を！』

「なんだと!?!」

「自分達だけ逃げ出そうという気が!」

『敵の狙いは本艦です!本艦が離れなければ、このまま艦隊は全滅です!』

「うっ…」

『アラスカは無理ですが、この位置なら、地球軍制空権内へ降りられます!』

突入限界点まで持ち堪えれば、ジンとザフト艦は振り切れます。…
閣下!』

「ぬう……。」

考えてる間に爆沈する戦艦が映った……

「マリユール・ラミアス。」

ふん！相変わらず無茶な奴だな」

『…部下は、上官に習うものですから…』

「いいだろう。アークエンジェルは直ちに降下準備に入れ。

限界点まではきっちり送ってやる。送り狼は、1機も通さんぞ！」

『はい！』

スクリーンからマリユールさんアウト

「クセルクセス爆沈！！」

「ゲオルク、艦内にて誘爆発生！！沈黙です…いえ、豪沈！！」

「Xシリーズによるビームです！！ヘンデル爆沈！！」

一方その頃カオルは…船内の救助予定の要員をさがしていた。

第八艦隊は、全滅しなければ…MSがあればかなり優秀、しかも良識派だったので…まあいるかなあ〜と思っていたのだ。

やはり艦内に何人か女性の後方勤務にあたるべき女性兵士がいた。

一人一人意識をたしかめ…目処をつける。

(ふむ…ターゲットだな…)

カオルは意識を艦内隅々まで延ばし、要員を選定していた。

さてブリッチに戻る…

スクリーンに映しだされてるマリューさん。

『閣下！』

「うむ。アークエンジェル、降下開始！」
スクリーンよりマリューさんアウト

「メネラオスより、各艦コントロール。ハルバートンだ！
本艦隊はこれより、大気圏突入限界点までの、アークエンジェル援
護防衛戦に移行する。

厳しい戦闘であるとは思いますが、彼の艦は、明日の戦局の為に決して
失ってなぬ艦である。

陣形を立て直せ！第8艦隊の意地に懸けて、1機たりとも我らの後
ろに敵を通すな！

地球軍の底力を見せてやれ！」

「マリアナ中破！！戦闘不能！！」

「メビウス隊損耗率60%突破」

「シェフィールド、爆沈！！」

「コモドア、爆沈！！」

「主砲、てえ！」

「敵艦隊より主砲きます！！」

「バスター、デュエル先陣隊列突破してきます！！」

「落とせえ！なんとしても、ここから先へ、通すな！」

「メビウス隊損耗率70%限界です！！」

「カサンドラ爆沈!!」

「ベルグラノー、撃沈!!」

「限界点まで、あと5分!!」

「閣下!これ以上は…これでは本艦も持ちません!!」

「まだだ!!」

「クロツカス爆沈!!」

「フィードル豪沈!!」

「アークエンジェルより、X-105ストライク、メビウスゼロ発進!!」

「なんだとっ!?!」

スクリーンにはストライクが出始めてきた。

「ラミアス大尉につなげ……ラミアス大尉!!」

『申し訳ありません…パイロットが聞かずに…』

「フム彼がか…いや彼ならやってくれよう…正直、敵に渡ったMSの被害大きすぎた…」

盾にもならんとはな………」

スクリーンよりマリユールさんアウト

「陣形確認!!」

「直援本艦含め2隻!先陣隊、残り10隻!」

「先陣隊の様子は?」

「ストライク、ゼロにXナンバーがいき、かろつじて右翼、左翼にいます!」

「ジン及び敵艦を通すな!!」

「はっ!!」

「敵を押し戻せ!!」

「メビウス隊、損耗率おちてきますす!!」

「かろうじて立て直せるか…」

「ですな閣下…」

「やはり、ガンダム…正解だったといえたが……
敵に奪われた機体がいたかったな…」

「閣下…」

「時代はMSにやはりなってるのだよ…MAではな…」

「あの機体がアラスカに届けば………」

「ああ、ストライクダガー…間もなく見える日がくるな………」

「敵艦隊より、ローラシア級進路アークエンジェルへとって、
突出してくる船あります!!」

「ん!!……あの速度……特攻か!!」

「何としてでも止める!!」

「進路上には我が艦と、クロツセウスのみ。他の艦は間に合いません!!」

「ぬうあ!!」

接近してくるローラシア級

「敵ローラシア級引き続きアークエンジェルへ進路とっています。直援クロツセウスより、ワレットツカンス!!」

「バージイ……」

クロツセウスが突っ込んでくるガモフと、撃ち合い、そして爆散してく……敵のガモフは今だ健在だった。

「クロツセウス……爆沈、敵ローラシア級、被害中、突っ込んできます!!」

「むっ」

「ぬっっ!」

「主砲!!何としても当てろ!!」

「……………指揮を先陣隊に渡せ!!当艦は何としても止める!!」

「了解!ベルセウスへ指揮移譲します!」

「敵ローラシア級、進路引き続きアークエンジェルへ!!」

「差し違えるつもりかっ!?!」

「すぐに避難民のシャトルを、脱出させる!!」

「…あゝ…」

「ここまで来て、あれに落とされて、たまるかっ!」

「避難民をのせたシャトルでました!!」
カオルは艦全体に広げ監視をしていた。

「オープンチャンネルで避難民シャトルと警告はしたか？」

「はい!!」

「よし、後は敵艦を撃って撃って撃ちまくれ!!」

ゴゴゴゴ

「被害甚大!!」

敵ローラシア級とのガチの撃ち合いによる振動がブリッチを襲う。

「うちかえせ!! 敵艦を通すな!!」

そして、

「敵ローラシア級爆沈!!」

スクリーン及び艦橋から、撃ち合ってた、ガモフが爆沈する

「うおっし!!」

…が…

「エンジン出力上がりません!!」

ガモフからのビーム射撃により、エンジンブロックからの整備兵の反応がないばかりか、

ブリッチチからの反応も無くなっていた……

「これまでか……皆すまぬ……」

「提督……」「提督」「旦那さん……」

「アークエンジェルにつなげい」

『提督！！』

「ラミアス……後は頼むぞ、アークエンジェル、ストライクをアラスカに……」

『提督！！脱出を！！』

カオルは、監視していた対象を次々と引き込み始めた。

「もう無理だな……それよりラミアス、

わしの最高の部下と話してたほうが有益だわい……」

『ハルバートン提督……』

「くれぐれも、重ねて頼むが、希望の光を……」

爆炎がブリッチを襲う。

その寸前にハルバートン提督をシエルターにいれ、離脱。

メリセウスは、大気圏離脱するに推力が撃ち合いでたりなくなり…
爆沈、となる…

カオルは離脱後、シャトルへと同化する。

「ママ〜火花きれい〜」

「…………ええ、そうねエルちゃん」

「神様仏様…頼みますから地球へ」

「……………」

「あ〜ままあ〜、ガンダム〜光だしあつてる〜」

「エルちゃん…」

デュエルとストライクの射線を通りぬけ…

通りすぎたあとに射撃…が再開する。

(そろそろか…)

「加速””加速””加速””加速””

「ママ…なんか筒をこっちむけてるよ？」

「エルちゃん！！神様助けてくだ…」

エルまま我が子を抱きながら…

そして…ゆっくりとビームライフルの光がちかよってくる。

シャトル、デュエルのビームに撃ち抜かれる手前に…

カオルは乗客のベルトを切り刻み、一人一人をシエルターに引き込む。

加速の4乗をかけているからできる技だった。

乗客89名全員シエルターに引き込んで、荷物棚においてある荷物を蓋を剥がしながら、

シエルターへと…すべての荷物を引き込んで、離脱…

大気圏に引かれかけている爆沈した戦艦から適当な死体を二つ程回

収、

虚数空間内の保冷库に引き込んだ。

そして、カオルは、手短なザフト艦に潜り込むと、世界扉を唱えてまた世界を渡る。

.....

カオル報告

アガムムノン級戦艦

精神力使い、疲れたので富山のリラックスインで

作者「SEED編2話目をお送りしました」

エル「ままあゝあの人だれえ」

エルママ「エルちゃん、知らない人についてっちゃ駄目よ」

エル「はゝいママ」

エルママ「最近もね、エルちゃん位の年がデパートに一人で行って、誘拐、殺されたんですからね、注意してね？」

1873

エル「ゆづかい？ころされ？ちゅっい？なんなの？」

エルママ「ママとずゝと会えなくなっちゃっ事よ…
いやでしょエルちゃん」

エル「いやああ…あの人についてかない」

作者「俺を指ささんでも……orz」

作者、MPダメージ10000越えた…
再起不能におちいった…

エルママ「次回の内容いえる？エルちゃん」

エル「はあ、い、いえるう」

エルママ「あの人が起き上がらないうちにいうのよ」

エル「……ママこれよめない」

エルママ「あ、ひらがなふるわね」
カキカキ

エル「ちかいはあ、くさひいたちきゅるときに」

エルママ「よくいえましたあ」

エル「おちやのちみにい」

四日目

ホテルからチェックアウトの前、
おととい助けたザフトの救命カプセルを、
それぞれ出し作動状態を確かめた。

ラストイン…回復中明日まで

緑1…回復中明日まで

緑2…回復中明日まで

(うつし…いけにえ要員が三人か…けどね…
イケメンシネ!! つう感じだよな…
バーニイの頼みだからしょうがないけど…)

とりあえず彼らを同じシエルターに引き込んでおいた。

チェックアウト後、

世界扉でまた世界を渡る。

コズミック・イラ0071 4月15日

世界扉からだと…早速衛星を打ち上げ端末で、
アークエンジエルの現在地を検索する。

今の時期はオーブにいるからだ…

というよりコズミック・イラ独自の地形で、ソロモン諸島に属して
いるのはわかるが…

だった為だ。

アークエンジエルの現在地へと向かうと…

(へえ…これがオーブか…)

いかにも大都会な大きな島へとたどりつく。

端末にオーブ…ヤラファス島と記録しておいた。

(で、この先がオノゴロ島ね…)

ナビの方向はそっちを指していた。

端末検索に戻り、

周囲、北側、270m、潜水艦

と検索してみたら…

複数の検索結果が戻ってきた…

(ん…搭載MSでわかるかなあ?)

サブフライトシステム多数搭載、ガンダムタイプ

と絞りこむと…当該あり。

端末に案内させて飛び出す。

(あれか…)

艦に着陸すると、同化した。

「おい！アスラン、いい加減いつまでまてばいいんだよ！」

「イザークおちつけて」

「確証があるといつたる？」

「その確証は何なんだ！！」

「……それは言えない……」

「はっ！！その言えない確証の為に俺達は、はっているのかよ……
これでアラスカに足付きがいつたらお笑い草だ！！」

「なあ……賭けしないか？」

「賭けえ？」 「賭け？」

「ああ、そつだなあ……イザーク、お前裸踊りでどつだ？」

「デ……ディイアッカ！！」

「まあおちつけって…でアスラン、お前さんは一週間イザークの命令を聞くってのはどうだ？
軍や、命に関する事以外な」

「のった！！アスラン！一週間メイド服きさせてやる！！」

「いいのか？裸踊りで……」

「ああ、受けてたつてやる！！賭けは勝ちだな！！アツハツハ」
ツカツカとイザークは休憩室をあとにしていた…
肩をすくめてあとに続くディアツカ。

「アスランさんのメイド服ですか…イメージーションが沸きますね」
「」

「おいおい…変な想像しないでくれよ…全く…それよりニコルも俺が負けると？」

「ここまで待たされると、そう思いたくもなりますよ…約15日以上音沙汰もないんですし…」

その時…

『レーダーに感あり、オーブ軍港からのレーダーに感あり、至急アスラン・ザラ隊長はブリッチへ』

「行ってくる」

「当たるといいですね」

アスランがブリッチに歩いて行くので、そのままついていった。

ブリッチに入りしだい…

「演習ですか？」

「スケジュールにはないがな。

北東へ向かっている。艦の特定まだか！」

「戦闘準備入ります。特定、急いで下さい」

「オーブ軍とは事は構えたくはないですから、慎重にお願いします
よ」

「わかってます領空をかなり離れた時点で戦闘をしかけます。
また前回のように逃げ込まれたら面倒ですからね………」

というと格納庫へ進みはじめた…

『総員につぐ… オープ軍港より艦隊が出港した。隊長より戦闘準備がだされた。

総員第二戦闘配備につけ』

カオルは、格納庫に意識をむけると…

グウンと、デュエルアサルトシユラウドに取り付き、取得したあと… 今回のメインターゲットのブリッツへと向かう。

「アスラーン足付きですか？」

「だとおもつな…結果まちだ…搭乗しといて何時でもでられるようにな」

「ふん！どうせ足付きはアラスカさ」

「まあ隊長様の命令には従おうぜ、イザーク」

「早くメイド服きさせてやる…！」

「機体の準備完了です」

「ありがとうございます」

『敵艦隊より、離脱艦あり。艦特定、足つきです!』

『え!?!』

『ひゅ〜』

「当たりましたね、アスラン」

『出撃する! 今日こそ足つきを落とすぞ!』

『は…裸踊り…』

『スマンイザーク…あきらめな』

『…ディアッカ…後で…』

『おれは賭けを提案しただけだぞ』

「はいはい…後で裸踊りスケッチさせてくださいね」

『ニコル！』

『三人ともそこまでだ…行くぞ！』

「バラスト注水確認よろし！ハッチ開放！進路クリア射出始め！」

『イザーク、デュエルいきま…す』

『ディアツカ、バスター　行くぜ！』

「ニコル、ブリッツ出撃します」

シュゴ！！とともに打ち出され…

遅れて打ち出されたグウルに同調し着地する。

『アスラン・ザラ　イージス、出る！』

全機揃って編隊を組み直すと…

『アスランより各機へ…ボズゴロフは何時も通り誘導管制後は潜水
回避し、

また各機は領海から足付きが20km離れた地点で攻撃を仕掛ける。
今日こそ足付きを沈めるぞ！」

『ああ』『…はい』『了解』

『ボズゴロフ、誘導管制たのむ』

『了解しました』

「イザークさん、戦闘ですよシャキツとして」

『裸踊り……』

『フッ、イザーク艦内一周らしいぞ』

『ディアツカ』

『あゝまあなんだその……裸踊りは無しでもいいぞ……』

『アスラン！！ホントか！？』

「え〜」「はあ…面白そうだったのに…」

『そのかわし、メイド服をだな』

『……………』 『ひでえ』 「鬼ですね」

『がいやだったら、足つきを今回で落とす事…だったら無しでいいぞ』

『うおおお足付きめえ！俺は絶対おとしたる！』

「単純」「だな…」

そうじつしているうち…

「アスラン、あれ」

『ああ…』

『煙幕！？』

『チエツ！姑息な真似を！』

アークエンジェルがいると思われる地域に煙幕がもうもつとあり…
艦影が見えない。

その中から、スカイグラスパーが踊りでた。

『2機？』

「逃げた？」

『雑魚にはかまうな、足付き、ストライクの場所がわからないんだぞ！』

『煙幕うざいな…』

その時、煙幕の中からアグニが打ち出され…

『うっ！』『うっ！』『くっ！』『くっ！』

幸い中央を貫いた…

『散開！』

煙幕の中からアグニで各機が狙われて…

『あ！』

『くっ！ストライクっ！！』

バスター、デュエルが別れていった方向へ、ストライクが向かった。

「アスラン」

『ああ、ストライクはイザーク、ディアツカに任せる、足付きを探すぞ』

「はい！」

『こっから先へは行かせねえよ！…』

『うわあ！…あっ！』

グウルに命中し、蹴落とされるバスター…

「ディアツカが…」

『なに？グウルをやられた？ちい…足付きは後だ！』

バスターはグウルが無いと行動が海上ではかなり制限される…
下手したらエネルギー切れで水没もありえるのだ…

『くおのおー！』

ストライクに絡みにいくデュエルだが…

『うわああ!!!』

機関銃でグールのミサイル部分が破壊され…
地上へと黒煙をはきながら墜落してゆく…

「アスランそつちに!!!」

『イザーク!チイ!』

「こいつう!!」

ビームライフルを降下中のストライクに向け射撃をすると…

『ええい!!…!!』

「アスラン足付き!!!」

煙幕の下からアークエンジェルが見えはじめ、

『うっ!!』

ゴットフリートが放たれる。

流星にあのクラスの主砲直撃は辛い…

『距離をとる』

「了解!!!」

ヘルダートからミサイルが打ち出され…

『チイ!!』

全弾迎撃に…

「アスラン!!」

『ああ立て直すぞディアッカ、イザーク!』

『すまん水中に落ちた…』

『同じく、暫く無理だ…』

「……ここは自分らだけでしか…」

『だな…ん?』

スクリーン上ではストライクがアークエンジェル上で、ランチャーをパージして…

「え?PS装甲をきつた?」

『何をする気だ?……キラ』

空中に飛び出すストライク、そこにスカイグラスパーからのエールパックが接続され…
シールド、ビームライフルを装備し、
エールストライクとなった。

「あいつ、空中で換装を!？」

『くうう…』

ブリッツに迫ってくるストライク、

「うおおお」

左腕のグレイプニールを打ち出すが、ビームで一閃され、真っ二つに…

「ちい！」

右腕を振り上げビームサーベルをだすと、迎えうち、鏝ぜり合い状態になる。

『チイ、雑魚は俺がやる!!ニコルはストライクを!』

切り合いになっている中…イージスはスカイグラスパーへ…

「わかりました!!クウ」

上の方から切り掛かってきて受けるが…

「くっそー！」

グウルがストライクの体重のせられた為に不安定になり、

一回制動をかけたところに…

「うわあ!こいつ！」

スカイグラスパーが射撃してきて、右腕被弾してしまった…

「邪魔なんだよ…!!！」

目がスカイグラスパー追ってしまい…

スクリーンには正面より切り掛かってくるストライク…

コントロールスティックを動かすが…右腕を切断され…

「うわあああ!!」

落下して…

『くっそー!ええい!』

『ぐううう』

ブリッツは不時着し、衝撃をころしきれなかった

「ちいハイドロ消失…再起動かかれ!」

『うおおお!!』

「かかれ!…かかれ!…かかれ!!…かかった…ストライクは??」

『くうっ!キラ ああ!』

「バッテリー残量…残りわずかか…」

『くっ!あ!チィ!なに!?!』

「アスラン!?!」

アークエンジェルから撃ち込まれるイージスが見える。

「…武装は…ランサーダートしかないか…」

ぎこちなく左腕から、爆発しないようにランサーダートを出しはじめる。

『何を!』

ランサーダートを結合し…結合部を絞め…

「アスラン待っててください」

『何を今更！討てばいいだろう！』

左手にランサーダートをもって一降り…

「よし！！これなら…」

『お前もそう言ったはずだ！』

ブリッツは走りだし、

「アスラン…」

『お前も俺を討つと！言ったはずだ！』

ミラージュコロイドを作動させ…

『くっ！』

スクリーンでは殴られPS装甲が、
バッテリー切れで解除されたイージスがみえた。

「アスラン！！間に合え！」ブリッツを走らせて、ランサーダートを握りしめ…

『！？』

「アスラン下がって！」

ミラージュコロイドがバッテリー減少の為自動解除になり…

「うああああー！！」

左腕にスピアを構えて串刺しにしようとして繰り返すが…

かわされ…

「ぐわあ あ あ あ ……」

ビームサーベルがコクピット内…ニコルの腹まで達し、
内臓を焼いている…

『!!! ああ…あ…あ…』

「アスラン…えげっ！」

吐血し…

「母さん…僕の…ピアノ…」

爆発する瞬間ニコルを引き抜き、緊急離脱…

医療カプセルにぶち込み…作動させるが…

(今度は駄目かな?)

とりあえず作動させるが、

ニコルの内臓は焼き切られ…

吐血する位になっている。

背骨までいかなかったのが珍しい…

心肺停止の状態にもう既になっていた…

やっと、デュエル、バスターがストライクを射程圏内におさめ、射撃するが、

上空よりアークエンジェルが援護してきて…

イージスはバッテリー切れの為、撤退し、

ストライクもアークエンジェルへ撤退していった。

カオルは世界扉で世界をわたった。

……

カオル報告

ボズゴロフ級潜水母艦

グウル

デュエルアサルトシュラウド

ニコル助かれよ……

ナギ少尉「……助かるの？」
医療カプセルみながら……

作者「といいんだがチートでもこれが限界かもなあ……
吐血までは覚えて無かったし……」

ナギ少尉「ねえ他に方法は無かったの？」

作者「まあ無いことも無いだろうが……下準備が必要だろうだし……
で今回無理だとしたら、次回は無い。パラドックスの関係ね」

ナギ少尉「パラドックスねえ……作者はおこるとどうなるって見てる
？」

作者「映画タイムコップで同一人物が接触、互いの人物形成が崩れて、消滅する。ってね」

ナギ少尉「あと作者はM u v - L u vでの時空間移動については？」

作者「誰かが死んだ、その事実を元に、過去に戻って変えた、元の

時間に戻ろうとすると……
別の自分がある…パラドックス発生!!の考えです」

五日目

ホテルをチェックアウトするまえに、
ニコルの医療カプセルを確認してみた…

カプセルは正常に作動して、順調に回復中だが一週間かかる…との事だった。

(ニコルをどう食うのかなあ??ビダンさんは…)

少し想像をしながら…チェックアウトし、朝飯を食べて世界扉を潜った。

コズミックイラ0071 4月17日

世界扉をでてまだ夜深いなか、アークエンジェルを検索し旅だつ…
まだ夜のうちに、アークエンジェルに着艦すると早速同化しはじめた。

格納庫内でウトウトしているキラの側で、

スカイグラスパーと、ストライクの各ストライカーパックもついでに取得した。

(……今なら肉つてかけるかな??
……か、かき、かきたい……)

がカオルは自重し、ロッカールームへ意識を移動する……

ロッカールーム内部に入ると……

(えーっと……これがトールのか……)

扉を同化し、中のパイロットスーツ一式と同化すると、
死体をだし、死体の着てるパイロットスーツを変化させる。

(仕込み万端。あとは時間まで格納庫でまつか……)

死体を保冷庫に戻し……

時になるまで待つことにした。

そして朝方……場面はブリッチ

「ん？センサーに感！ボズゴロフ級潜水空母です！」

「えっ？」

「総員、第一戦闘配備！総員、第一戦闘配備！」

まずは最初に入ってきたのがノイマン、
ほぼ同時にチャンドラ？世が入ってくる。

「コントロール回してくれ」「渡した」

次にマリユールさんが…

「状況は？」

「例のXナンバーの母艦とみえる、敵ボズゴロフ級潜水空母をキヤ
ツチしましたが反応消失、が小型熱源が3接近中です。」

「ほぼ間違いなく、イージス、バスター、デュエルね…ナタル、こ
のまま寝ずにいける？」

「大丈夫です艦長」

暫くすると…

「……遅くなりました!!」「……」

トール、ミリアリア、サイ、カズイの面々も入ってきた。

「例の敵くるわよ」

「またですか」「しつこいですね」「……」「キラ……」

「さあ戦闘準備ついて頂戴」

「「「はい!!」「」」

……

「敵影3、5時方向、距離3000」

「同方向より熱源接近!」

「回避!取り舵!」

「回避成功」

「艦尾ミサイル発射管、ウォンバット装填、バリエント、イーゲルシュテルン起動!」

「各兵装、起動スタンバイ、弾装装填問題なし!」

「1号機、フラガ少佐、出ます。ストライクは後部デッキへ!」

「ストライク後部デッキで迎撃体制」

「1号機でました」

「敵ビームきます!!…外しました」

「やり返すぞ!!バリエント、てえ!!」

「上空に避けた一機、デュエルです」

「目標デュエル!!コリントス、てえ!!」

「左舷後装甲被弾、排熱20%許容範囲です」

「左舷よりバスター!!」

「ストライクは?」

「イージス、デュエルの牽制してます!!」

「少佐を!」

「うっ」「きゃ」「うわっ」

「左舷プラズマタンブラー部ラミネート装甲損傷……次受けると危険です」

「少佐……！」

『あいよ……！』

「バスター、フラガ機へと向かいました」

「きゃあ！」「うわあ！」「多数

「排熱率60%突破」

「デュエルからです……！」

「イーゲルシュティン回せ……！」

「後方よりイージス……！」

「ストライク、イージスへと向かいます！
ヘルダート発射可能！」

「ストライク、イージスとデュエルの二機と交戦中！」

「所現目標、イージス、デュエル！！、ヘルダート！てえ！」

「全弾バスターに迎撃されました！！！」

「まだまだ、ヘルダートてえ！！、続けてヘルダートてえ！！！コリ
ントスもてえ！！！」

「装弾間に合いません！」

振動！！

「うわぁ」*多数

「排熱率80%突破危険です！！！」

「どっからだ？」

「右舷前方のイーゼスからです!!」

「近寄らせるな、目標イーゼス、コリントス、てえ!」

「駄目です!引き続きちかよってきます!」

「イーゲルシュテルンを回せ!」

一つ、更に大きな爆発振動とともに…

「うわあ!」*多数

電撃がCIC内部を走る。

その後更なる振動…

「ヘルダート弾薬誘爆です!」

「隔壁閉鎖しろ!!」

「はい!」

「イーゲルシュテルン、4番5番、被弾!」

「ヘルダート発射管、隔壁閉鎖!」

「アラスカは？」

「駄目です！応答ありません！」

「ゴットフリート照準、当てろよ！てえ！！！」

「かわされました…がイージスはなれていきます」

「後方よりデュエル！」

「ストライク迎撃にいきます！」

「直上イージス！」

「なに！」

「面舵！」

「くっ！」「ああっ！」「ああっ！」

「被害甚大！！！」

「プラズマタンブラー損傷！レミテイターダウン！」

「揚力が維持できません！」

「姿勢制御を優先して！」

「緊急パワーは補助レミテイターに接続！」

「スカイグラスパーで出ます！」

「「「え！？」「」」

「トール…！」

「危ないですよ、このままじゃあー！」

トールは席から駆け出すと…

「ま、待ちなさい！ケーニヒ二等兵！ああっ！」

マリユールさんが呼びとめようとするが…

ブリッチチから出たトールは、

「はあはあはあ……ぼくが…ぼくがみんなをまもるんだ…はあはあ
はあはあ」

トールはロッカールームに駆け込むと、制服を急いで脱ぎ、

パイロットスーツを着はじめた。

ブーツをはき、グローブをつけると、ロッカーを閉めて、ヘルメットは掴み、
格納庫へと駆け出す。

格納庫内に入ると、

「坊主！！でるんか！？」

（お、きたか…まっつたよう〜ツール君）

「はい！！出ます！機体は！？」

「準備出来てる！！換装は！？」

「時間ないのでそのままです！！！」

「わかった！！坊主がでるぞう！！！」

ツールはスカイグラスパーにタラップから駆け乗ると、
掴んでいたヘルメットを被り、

「スターターまわすぞう！」

（この機体ね…）

カオルは機体に取り付いた。

「どっぞー！」

「コンタック！」

エンジンがまわり始めた。

「エンジン始動確認」

「スカイグラスパーだすぞう！！！」

機体を微速前進させ、カパルトエリアまで進めさせる。

「無茶はすんじゃねえぞお！」

「大丈夫です！」

『トールいいの？』

「ああ、ミリアリア出してくれ！！！」

(ミリアリアごめんな…彼は貰ってくよ………)

『わかった……スカイグラスパー2号機、カウントダウン5 / 4 / 3 / 2 / 1』

リニアカパルトの電圧が高まり……

「つつっ！」

強烈なGとともに射出される。

トールは無意識にスロットルを最大に合わせ、
大空へと舞い上がる。あいにく天候は崩れ雷雨になった……

スカイグラスパーで……

黒煙をあげているアークエンジェルがみえる。

外がらみるとかなりヤバい状況がわかる。

「やはり外からみると……敵のXナンバー落とさない……」

『こちらアークエンジェル…敵デュエルは無力化、繰り返す敵デュエルは無力化』

「ミリアリア……後、敵はイージスとバスターか……」

だんだん海面に近寄るアークエンジェルが見える。

『ほうず！ストライクはイージスと格闘戦に入っている！
この間にバスターを叩くぞ！
そうすれば1対3だ！！』

「はい！！」

トールのスカイグラスパーがバスターに狙いを定め、砲塔ビームを

放つがかわされ、

逆に打ち返してきた。

「うわわわあ！」

スティックを右に倒しすぎ、急激なGがかかる。

『坊主無事か？』

「は、はい！！」

『坊主は正面から打ち込もうとするな、背後や横などから隙を狙え…クツ』

「で、でも少佐…バスターを早く倒さないと、アークエンジェルが…」

『ああ、わかってる！！が、バスターもエースパイロットがのってんだ！』

正面からかましたら、反対に討たれるぞ！』

「は、はい！！」

『いいか、仕掛けるから、隙を狙え！』

フラガ少佐のスカイグラスパーが、バスターに襲いかかる。

トールは上空高く上がると、上のほうから襲いかかり、

「あたれ!!」

しかし、バスターはうまく機動をとり、フラガ少佐の機体へと襲いかかる。

少佐の機体は旋回し、距離をとり、バスターは諦めると…

中々決着がつかないドックファイトになる。

『クツ、MSだったら……やはりスカイグラスパーだときつ!!
なろう!!』

トールは中々、ドックファイトに絡みにいけない。

「隙があったって…みつからないよ…」

すると……

『間もなく当艦は不時着します!!』

「アークエンジェルが!!」

盛大に土を掘り巻き上げながら、不時着する。

「ミリアリア!!」

「トール、ブリッチは全員無事よ…」

そこに、不時着したアークエンジェルを狙うバスターが…

「やらせるかっ!!」

フラガ機がバスターと相打ち状態になるのがみえた。「クッ!」

「大尉!!」

「アークエンジェル!バスターが正面に落ちる!ゴットフリートで狙え!!」

「えっは、はい!!」

「俺は海上に不時着する!!坊主!キラ!後は頼んだぞ!!」

「わかりました!!」

機体を旋回しバスターへと機体を向け…

「グウウウ!!」

強烈なGが襲う…

「大尉!大尉!」

『だいじょ……くううう！』

『大尉！』

『ぶ……じだ……とりあえずリタイアだあとは頼むぜ……クソッ！』

「大尉がやったんだ！あとは！」

機体の主砲をバスターへと向けようとするが……

『敵バスター、投降の模様！コクピット開いてます』

（ディアッカ……後のミリアリアの彼氏に……

トール寝とられちゃうんだよな……）

「えっ？……のこるはイージスだけ？……いけるー！」

（ごめんな……無理なんだ……）

「イージスは何処だ？……あそこかー！」

トールは、遠方で繰り広げられてる、

イージスとストライクの闘いに向け、機首をむける……

「キラ！」

叫び声と共にトールはキャノン砲をうちはなち、キラを援護あわよくば残る1機を損傷させねばの勢이었다。

『ああ！トール！駄目だ！来るな！』

しかし、トールは耳を貸さず…

「当てる！！！」

対艦ミサイルを発射した…

そのミサイルはかわされ…

「ちい……イージスは？……！！！」

視界から見失ったイージスを探すと、正面にうつり、盾を投擲してきた。

回転しながら接近する盾…

「はあっ！！」

彼の表情は、ヤバいという状態だった…

手は、どうしたら良いか動かず…

「加速””加速””加速””加速”」

時が止まり…

盾が串刺しになる瞬間、人を入れ替え…

死体の硬直を力任せに体勢をととのえさせ…

離脱…

加速を解除する。

爆発するスカイグラスパーをバックに飛び出し…かなりの距離をはなれた。

なにしろこの後イージスの自爆があるからだ。

(ここら辺でいいか…)

砂浜に着地し、世界扉を唱えようとしたら…

上空よりイージスとストライクが降ってきたので慌てて、離脱…
背後で、でっかい爆発音が聞こえた……

(もつないよな??)

改めて世界扉をとнаえて…元の世界へと戻る。

……

カオル報告

ストライカーパツク

スカイグラスパー

トール「どこは？」

エル「あゝおにいちゃん〜」

トール「え？エルちゃん？…あの時……」

エルママ「エルちゃん…あらまあ…あなたも？」

トール「あ、エルちゃんのお母様…あなたもって？」

エルママ「まあこれから映像が始まると思いますわ…
エルちゃん…お兄ちゃんね映像みるからこっちきてね」

「はい」

映像途中…

「はあはあはあ……気持ち悪かった……」

映像終了後

「アムロさんか…俺もキラミたくなれるのかな？」

「お兄ちゃん」

「エルちゃん」

「映像終わったようですね？」

「あなたもあの映像を？」

「人によっては違うみたいですけどね……皆さん、あの世界では死んだ…と理解してますわ」

「じゃあ、やっぱり…」

「そして、物語の世界であった事も…ね」

「ですね……あの後どうなったか気になりますか……」

「あ、あそこにDVDありますから見てみては？」

「じゃあ…みてみます」

トールは翌日目にクマができた状態で…

第95話 SEEDの世界から帰還 投稿日20110309

2001年9月11日

「ただいまあゝ」

「マスターお帰りなさい！！報告がいくつかあるんだけど…」

「ん…何？」

「えゝとまずは、難民解放戦線という、
武装組織の交渉役の人と接触して、明日コロニーに見に行くって話
になってる」

「……難民解放戦線…ねえ……まあ文字通りか…」

「次にテロが起こりそうだったんだけど、
ミスリルを派遣して制圧に入るってゝ」

「テロ？…また物騒なネタだな…何処で？」

「ユーコン基地、プロミネンス計画の」

「ティアナム提督いつてるところか……向こうには？」

「勿論うちの部隊には伝えたよ…けど、ユーコン基地には無理」

「内通者？」

「うん」

「…ミスリルの制圧待ちか…」

「であと、木星に無事到着、あと3日程で燃料収集プラントが稼働できる」

「やっと、ヘリウム3については解決か…」

「増産体制をとれるよ」

「内職しなきゃな…まあ…あとは純粹に技術情報取得と、スカウトに絞りこめる…つつわけか…」

「だね〜」

「他には？」

「沙霧大尉以下、48名が加入になったよ〜」

「48名？中途半端な……」

「帝国の方でもクーデター参加者全員丸投げは痛いって話だった。なので配置換え等の措置等ですませたみたいよ。で、今回加入組が中心的存在だったって話〜」

「ふ〜ん…ではとは？」

「ないよ〜」

「わかった……さてシャワー浴びて寝るよ…SEED組の処理は明日だな……」

「おやすみ〜」

カオルを見送る11号。

見送ったあとふよふよ移動し始め、

コンコン

「はい」

シユン

「あら11号ちゃん…カオルさん帰ってきたの？」

「うん 赤ちゃんお願いしますね。まりもちゃん」

「うふふ わかったわ。じゃあ準備するから」

「はい」

夜はこれからだった…

2001年9月12日

「お…じ…ね…す」

ゆゆゆ

「カ……ル……ん………てくだ……い」

「ふぁーおはぁ」

「ふふふ、おはようございます。カオルさん。さあ、シャワー浴びて下さい」

裸のままベットからでると、

シャワー室にだらしなくとぼとぼ歩いてく。

かなり遅くにねたのでまだ少し眠かった。

まりもちゃんは、服を既に着ていてビシツともう決まってる。

「カオルさん、着替え、だしておきますね」

「あ、シャワーは？」

「先に浴びました」

「ん」

シャワーを浴び始め、眠気覚ましにあつい温水を浴びる…

「カオルさん、点呼に行かなきゃいけないので、お先に失礼しますね」

「ん」

「昨日は、はげしかったです…また……」
ポツ

昨日の情事がうかびあがった…

煩惱退散、煩惱退散…

さすがにスボンにでるので…ひたすら…

おちついてきた。

シャワーから、タオルで拭きながらあがってくると、制服、下着等が折り畳んでおいてあった。

着て、PXにて朝飯を食ったあと、戦艦ドックへと向かうと…

「シヤアさん、アムロさんおはようございます」

「カオル君おはよう」

「ああ」

「ん？こちらに」

「いや、新しい人材がくるってきいてな」

「今回のスカウトは、ガンダムSEEDの世界からです」

「それはどういった世界なんだ？」

「コーディネーターとナチュラルとの闘いですね」

「コーディネーター？」

「遺伝子を弄って、優良化する…って事です」

「ふむそれは強化人間と…？」

「早くいつちやええばそうっすね。ただ違つのが日常的に生活に…と
いう事で、
戦闘に…って事ではないんですよ」

「ふむ…」

「でもって、あんまりにも多いから、差別されちゃって、
なら集まって国を作っちゃえ、独立を認めろ、
駄目だ認めない…がSEEEDの戦争ですね」

「ジオンとにてるな…」 「ある意味な」

「で先に、核をコロニーに打ち込んで過激になったのが…まあSEEEDの世界説明ですね」

「ふむ…でコーディネーターからまた話脱線してるんだが、強化人間と…」

「自分のしっている限りでは、肉体的強化、あと才能強化、外見的強化等ですね。主に親が望んで我が子を…だそうです」

「ふむ」

「恒常的に肉体的強化はサービスなのかな？ですね。
やはり我が子が死ぬのは…特に普通の人なんか3歳までの病気等が
怖いですし…」

「確かに…ミライなんか育児ノイローゼになりかけたって聞いた
な」「ミライ…ブライト夫人？」「ああ」「ほうあの人が…」

「外見的強化も恒常的で、やっぱりイケメンシネエ…と作者も思っ
てるみたいです」

「大量にイケメンか…美女もいるんだろ？」

「あ、そうですね…けど女性兵士は少ないですね、どっちも」

「ふむ」

「でザフトの階級制度も特殊で…」

「特殊とは？」

「服しかありません」

「服？」「……軍隊として……」

「緑、赤、白、黒、紫、青緑すね。」

あと義勇軍なので職業軍人の国防軍とは違ってます」

「それなら……」「なんか権限とかどうするんだ？」

「隊長」白服で、赤が士官学校上位20名、

緑がその他士官学校卒、

黒が副官、

紫が国防委員会所属武官、

青緑が文官ですね……」

自分も、階級制度のほづがわかりやすく、いいと思いますよ」

「だろっな……」「ところでその世界の兵器は？」

「えっと……大容量バッテリーで動くので、全体的にみれば、アムロさん達の世界が勝ってます。」

あと、はっきりいってGキャンセラーがないです」

「Gキャンセラー……リニアシート等が？」

「はい」

「機動とかで発生したGは？」

「コーディネーターの肉体で受け止めます」

「……………地球軍側は？」

「えつと物量頼みで、一部強化したの以外は地球2：1ザフト位で
すかね…後でつくりますから、わかるとおもいますよ」

「ふむ」「後でためしてみるか…」

「じゃあ、シエルターをだすんで下がって下さい」

あいているスペースにザフト兵のいるシエルター、
ハルバートン提督、
提督の乗っていたメネラオスクール、
シャトルの民間人の体育館シエルターを出した。
トールは体育館シエルターにいれてた。

「ところで新しい人材はどのシエルターにいるんだい？」

「今回は、C-01用ですね…体育館のは民間人なので…
あとはカプセルに入ってる人かな？」

「カプセル？ああ…じゃあ瀕死だったのか…」

「まあっすね…じゃあ案内しにいけますので」

「ああ」「じゃましたな」

シエルターの方へ25号代表にコバツタ達を引き連れてく。

(確か…全員入ると…残りぎりかな？新しい寮つくっておこう…)

結果だけ略しときます。

デュエイン・ハルバートン准将加入

部下達の艦隊司令部クルー加入23名

トール・ケーニヒ加入C-01入り

で、ザフト兵は、

タカノ・ブリビアント

ノース・バンリ

ラストイ・マツケンジー

3名ともC-01入り。

階級は緑が少尉、ラストイが中尉になった。

民間人は…

「まあ、エルねエルね…このお兄ちゃんと一緒に仕事したい」

「まあ？なんで？」

「エルがひつよって作者が騒いでるから」

……エルちゃん……作者はイエスロリータ、ノータッチの紳士協定だよ……

ってちゃうわ！秘技ちゃぶ台返し！！

「まあ〜作者がジョークなのに本気でこったあ〜」

「まあ作者さん！！PTAに訴えますわ！」

エルちゃんがいたら面白そうだからいてね…

「は〜い作者〜」

というキャラ打ち合わせがありました。が、物語になりますと…

「あ〜」

「はい？あなたは？」

「このこの母親になります、ピアンノ・マデューです。
この度は娘共々、助けて頂きありがとうございます」

「ありがとう〜」

「いえいえ、賢いお嬢さんですね〜」

「えっと、私をこの基地において働きたいのですが、よろしいでしょうか？」

「ご希望にそう形にしますが、何か特技でも？」

「わたくし、秘書課課長を勤めてまして、主に人事部門等を担当しております」

「採用です。是非とも我が軍へ」

「はい。ありがとうございます」

「ままあ〜?」

「このおじさんの名前は?」

「エル・マデューといいます」

「エルですよろしく願います」
エルちゃんぺこりとかわいくお辞儀をした。

「うん。エルちゃん用にまあ監視というか、危なくないようにコバツタをつけますので…」
自由に基地内みていいよ」
ピアンノさんに前半、後半をエルちゃんに向かって、喋った。
「25号」

「はい？マスター」

「エル・マデューちゃん専用にごバツタよろしく」

「わあ〜金属のバツタだあ〜…ラクスさんのハロちゃんみたい〜」

「わかった。マスター28号が専属につくよ〜」

「エルちゃんよろしくね〜ぼく、てつ〇〇28号なんだ」

「てつじん28号、よろしく〜エルです」

そんなやりとりがあり、結果、

救出した民間人は大多数が、コロニーに、
一部が当基地で…

コロニーにいく人の中には、技術的指導にあたる人もちらほら。

かれらの職先には事欠きません。

という結果になりました。

「11号このあとは？」

「難民解放戦線の人に来て、コロニー視察していく…だけであつ？」

「あつ必要あり？」

「今のところ無し」

「じゃレポートだけよろしく」

「あとは、ミスリルの制圧作戦が1時間後」

「じゃあそれは見るわ」

「了解」

そして、ザフト3名と、トールがきた。

「じゃあ、君達なんだけできて早々だけど、特殊任務があるんだよ…ついてきて」

「コンコン」ビダンさん〜」

「ビダンさん〜」

シユン

「えっと、この4名がC-01入りします」

「あらあ〜」

「で君達の任務は、彼女に協力する事」

「はい！」 * 4

「じゃあ早速自己紹介して貰おうかなあ〜」

「あとよろしく〜」

（ヒルダさん…）

あれ、どうみても20代前半だよな???

と思いつつ、

そろそろ時間なので、情報室へと向かう。

ミスリルの作戦推移を見守る事になる。

(でも…見守らなくとも結果が見えるな)

と思ったのもわかるだろう。

まずは敵拠点にECS装備のベイブメアで、M9非殺傷装備で輸送。事前に戦術機が無いのもわかってたので、付近にて、ECS作動のまま、M9が直接侵入。

まずは、車両を接着弾で無力化、

ボン太君装備の歩兵が、睡眠ガス弾による突入となった。

よって完全な不意打ちによる奇襲成功。

ユーコン基地をおそう予定だったキリスト教恭順派の拠点は潰す事ができた。

しかし、問題がやはりおきる。

そう、

「我々はまたユーコン基地を襲う!!」

神の意思に逆らって、戦う等間違いの元だ!!」

ぶっちゃけ、こう思想が固まった形が相手だと、どう処理をしようか悩む。

はっきりいえば殺しちゃえば楽といえは楽なんだが…

(ん〜……)

どう処理するかを指示できない…

「ぶっちゃけ洗脳されてるか？」

またはこっちから洗脳するしかない？」

「そうだねえ………しかないのかな？」

「となると、連れてくるしかないか…」

「うん」

現地へ、兵員輸送コンテナ10個搭載の下駄を、派遣する事になった。

またユーコン基地内部の恭順派も逮捕し、同様に送られてくる。

到着予定日が、約3日後…15日の予定だ。

「ん……じゃあ寝るよ」

「マスターおやすみい」

………

カオル報告

加入 ハルバートン提督、艦隊司令スタッフ23名

C-01入り4名

エルママ他7名

恭順派 482名逮捕拘束、どうするか？

作者「小説発売しろ!!」

コバツタ達「小説発売しろ!!」多数

作者「一年以上完結してるのに長いぞ!!」

コバツタ達「一年以上完結してるのに長いぞ!」

カオル「デモ行進か……」

作者「うん。ね…設定利用しようとしても利用すらできない……」

カオル「まあ今回襲撃グループの基地、
地名等すらでてないもんな」

作者「あははは……もう恭順派関連は、
オリジナルでいいや、つう
こと」

カオル「なる程な……」

作者「で本当なら一緒に襲撃する難民解放戦線は、
見事に接触できたから、ぶっちゃけ視察にご招待したから、
襲撃計画を白紙に戻した。」

で強行するキリスト教恭順派と分離できた…が、この話の段階です
ね

まあ難民解放戦線の人達もオリジナルになりますから…」

カオル「というお知らせでしたあ…作者次回は？」

作者「ヒルダさんからの要求が日に日に強まってきます。

エサを与えるのに…」

次回のサブタイトルはまだ未定です…」

第96話 チート再開まであと二日… 投稿日201110310

2001年9月13日

ハンガーに行くと…

「マスター、おはようございます」

「ああ、おはよう」

「まずは、報告から、難民解放戦線の方達や、
SEED世界の民間人の人達がサイド1の1バンチへと向かったよ
到着が今日の夜の予定」

「了解、引き続きよろしく。と…今どんなもんなんコロニー状況
て？」

「今は、960機あるシャトルで、240便体制をとってる
なので、5500人が一日ごとにおくられてるよ」
で画面に、サイド1群が映る。

本来なら57600人だが…2600席を行き来する分にあててる
そつだ。

「今現在、1バンチコロニーに122万0624人。
1ファクトリーコロニーに20万人、
1ファームコロニーに18万人、合計160万0624人すんでる
」

安直だが、農業用コロニーをファーム、
工業用コロニーをファクトリー、
としている…

まあようはわからなくなる為にわけたのだが…

推移データもついでに表示されている…

2001年7月23日の時点から入植開始…

2001年8月5日の時点で約13万人、シャトル発注の為、50
便翌日から増加。

2001年8月14日の時点で約33万人、翌日よりシャトル発注
の為、50便またまた増加。

2001年8月20日の時点で、約53万人、シャトル発注の為、
またまた50便増加。

2001年の9月に、サイド1人口100万人突破。

2001年9月6日の時点で人口約130万人、またまた発注で5
0便増加。

そして今にいたる…ということだった。

「ん？その3人…つてのは？」

「サイド1で生まれた子達だねえ」

「ものほんのスペースノイドか…新しい命守りたいな…」

「だね…」

「よし、じゃあ、新技術だな」

まずは、鯖にデータを入れ…

現物を資材から創り始めた。

ストライクガンダムエールパックの完成だ。
もちろんOSなどはコーディネーター対応。

「マスター、これって…」

「ああ、だなあ…」

まず、コズミック・イラの特徴、バッテリーによる駆動だ。
その点、戦術機とにている。が遥かに容量は違うが…

なので、バッテリーに関しては、どこにでもつけられるので、

ストライクのストライカーパックというのがつけられるようになる。宇宙世紀製品は、ランドセルもしくは、そのすぐ内側辺りなどに核融合炉がある。だから、ある意味固定武装で、追加つける際には、フルアーマヤ、外装式になる事になる。

なので、コスミック・イラのは、自由性が高いともいえる。

が…

「この世界の戦術機が発展したらこうなるよね」

「かもな」

あとはバッテリーを食うフェイズシフト装甲…

喰らいつづけると、76発のミサイルで、フェイズシフトダウン起こして、

駆動にも影響でるのは…はっきりいって悪手かもしれない。

フェイズシフト装甲を核融合搭載機に採用しちゃえば、実弾系に関しては、ほぼ無敵になるが…

(けどフェイズシフトを採用すると、世界のレーザー化加速し、下手したらオリジナル落とす前に、対応されかねないからなあ…)

まあそういった考えであった。

で、1番の問題点がコクピットとOS、人だろう。

後々の、ナチュラル用のは制限した…
コーデイネーター用のは制限解除した…
と単純に思ってください。

だからジンを奪ってもそのままで操縦すると、
過去に魔撃震を操縦した人達のようになるはずであった。

で製造当初のOSは、何処までやればよいのか？から、
とりあえず動かして移動できるだけ…の糞OSだった、

でナチュラルのパイロット達がのり、ここまで大丈夫を調整しながら
らOSを作っていくが、
当初の計画であったを付け加えておこう。

ようは手探り状態なのであった…

まああとは複雑な操縦系統…
神経接続によって補佐し始めたのが、地球側の機体だった。

G等に関して、ストライクを改造して、スクランブル等搭載しちや
えばいいじゃん!!

と思ったあなた…あなたですよ!!

バッテリー部分をけずらなければ無理です…

またはあの機動を削るか…

どちらにしる機体的余裕が現段階のストライクにはない…のです。

作ってみてわかる事ってあるのですね…

「本当、コーディネーターって、ナチュラルからみたらチートだよなあ…」

「それいうならマスターもチート」

「かもな」

「かもなでなく、モノホンのチート!」

「わかったわかった…とあとは…」

バスターを資材から作成した。

「へえ〜これまたヤドカリ君達が、喜びそうな砲戦使用だねえ〜」

実際つくつたらヤドカリ達がわいのわいのよってきやがった…

「まあこれもオミットするのは、結構あるけどなあ…」

が、この機体は実践済のレールガンが特徴ともいえる。

「そういえばレールガンといえば、

99式はどうするの？強化で…きないか…」

「99式？ああ、あれはな…うんそうだなあ…

制圧兵器としていいかもしれんが、

正直あの仕様による、砲身加熱により、

冷却材パックを何回も変えなきゃいけん、

弾の補充関係、あの弾装パック…

構造材変えても問題は山積みだよ…

正直、仕様が欠陥…だな。

その点バスターの方が実用的だよな」

まあ実際のところ…現代の1砲身分速800発クラスをだす、ガトリングガン。

合計6つの砲身で分速4000発、7200発辺りをだすが、

2秒間以上の射撃は砲身加熱により禁止、

冷却材は？は熱衝撃等で使えない実情である。

ただの実弾銃でさえこんな調子なのに、

レールガンだと…わかりきる話だ。

まあ長々とだが、正直99式は、いくら構造材をいれようとしても、冷却材はきつてもきつても切れない話…になる

アサルトライフルは分速1200発あるぞー！は、マガジンに入っている限りでマガジン交換の時間あるから無問題…
というか、そんな使い方は軍ではしません。

まあそういう問題があった。
なので…

「99式仕様はボツ？」

「うん、ボツ」

という結果になりました。

「へえ…ガンダムににてるなあ」「ああ、そうだな…」

「アムロさん、シャアさん…こいつが、ストライク、バスターです」

「ガンダムではない？」

「ガンダムタイプといって、その世界の主人公、キラ・ヤマトが、地球側のOSをガンダムといって、それがどんどん広まった…っう話です」

「ふむ？となると何機もガンダムが？」

「ええ、出てきますね〜」

「シャアガンダムあったりして」「おいおい」

「シャアさんじゃないっすが、ストライクルージュはありますね〜」

「あつたか…」

「まあ…じゃあ乗ってみます？」

「ああ」「だな」

アムロさんは、ストライク、シャアさんはバスターに乗ってみる事となった。

SEEDのガンダムは、神経接続を端子に頼らず非接触にて行う。
シート、ステイック部分にてだ…
よって…

『新しい世界が見える』『ほうおもしろいな…』

準グリップの状態になるのだ。

だからシートにGキャンセラーをつけられないのもうなづけた。

でもって、アムロさん達は試行錯誤でコントロール方法を学んでい
く…が…

降りたので感想を聞くと…

「やはり、ちつときついな」「ああ、リニアシートの恩恵わかる気
がした」

コーディネーター用OSでの神経接続は…

「少し疲れるな…常時は使いたくはない」「確かに、が使えと言わ
れたら難なく使いこなせる」
「同じく」

との評価でした。

(ナチュラル用の神経接続いれたら良いかもしれんな…
落ちない前提だけど…)

神経接続は正直対応が遅れる。
ニコルが本編であんな事になったのは神経接続による…が起因して
いる。

後は…

(アムロさん達だから異常かもしれんなあ…バーニーに操縦しても
らうか…)

とも考えてた…

そうしてモヤモヤとしてる内に…

「おや？カオル殿、この機体は？」

「あ、沙霧さん…ストライクとバスターっていいます。コズミック・
イラの世界のMSですね」

「コズミック・イラとは？」

カクカクシカジカと説明し…

「ふむ…じゃあ操縦してみたいのだから？」

「沙霧さんでなく、1番できない部下の評価も聞きたいですね…
とあと用件は？」

「ああ、そうだったな…
忘れるところだった…いかんいかん…
我々の隊についてだが…」

まあようはぶつちやけ編成が面倒になるから、
とりあえずの形で、沙霧連隊の形でとりました。
機体はまだ決まってません。の宙ぶらりんの形だった…

勿論第66機甲大隊の話もある。

「他の世界の兵器も操縦してみてだが、私の意見としては、
やはり不知火、陽炎が忘れられないな」

「となると、そっち方面での機体選定の形が良いので？」

「ふむ」

「ん〜……隊全体の意見として纏めてみてくれます?」

「わかった」

(さてと、生産かな?)

「あと残り燃料は?」

「543基分」

「となると…ん…機体はいいが、シャトルのみだな…」

シャトルを200機注文した。

ちなみに本編にかかれては無いが、藤沢方面のマストドライバーは順次稼動状態になっていて、

そっちへと空港も割り振っていた。

「シャトルの便数増やすなら、メデューシンも増やさないとそろそろ…」

「だらうな…2隻よろしく」

メデューシン2隻注文した。

……

カオル報告

シャトル200機

メデューシン2隻

追加注文

作者「サブタイトルに苦労したなあ…」

ナギ少尉「苦労じゃなく思いつかなかったただけでしょ？」

作者「orz…」

ナギ少尉「今回はネタがないのか、

コロニーの話題がでたのね…しかも数字ばかり」

作者「……」

ナギ少尉「けど、もう100万人すんで…いえまだ？」

作者「んゝまだだろうね…」

ナギ少尉「1バンチでなく、天鴉市とかにしたら？」

作者「…地名も考えると？……追いつかないよ…」

まあ…1000万人近くすむ予定だから県市だろうな……普通

は…けど無理だ〜

なので異世界軍では1バンチコロニーで統一します」

ナギ少尉「情弱め…！」

作者「……ところで…ナギ少尉、キャラかわってない？」

ナギ少尉「へっ…こっちだってなあ…ブツブツ」

作者「あ、艦長？」

ナギ少尉「艦長かつこはーとかっことじ、何処どこ？」

作者「猫かぶりか…」

ナギ少尉「……死にたいようね……」

作者「ちょ…な…なに？その手にどこからだしたか…わからない…
100tハン……」

作者チーン

また飛ばされた…

明日までゆっくりしてたかったのに…

いきなりヒルダさん、

「この子が欲しい!!」

だもんなあ……

宇宙歴0079 12月30日ヨーツン Heim…

グラダナ周辺宙域

わあああああああ

出撃の為、搭乗機に向かう3名が声援に送られる。

彼ら学徒兵の名誉ある初出撃に選ばれたのである。

そう、ジオン公国では、戦況悪化の為、正規パイロットが足りず、

まだ養成中であった士官学校等から、急遽、

希望ながら前線へと…の学徒兵達だった。

勿論、通常であれば学徒兵は駄目だろう…がMS操縦パイロット養成には時間がかかる。

戦況悪化で失う事が多くなつたから、
そうそう、補充はきかないのであつた。

勿論それ以外の部分でも養成に時間はかかる。

が、前線で1番損失があつたのが…MSパイロット達であつた…

彼ら、名誉ある出撃に選ばれたのは、

エルヴィン・キャディラック曹長

フランツ・ブランド伍長

フリードリッヒ・カッテル伍長

であつた。

各々の搭乗機、決戦兵器オツゴへと向かう。

オツゴとは、全高7.8m 全長11.6m 全幅14.7mの、
駆逐モビルポッドであつた…

地上の戦線縮小等により不要になつた部品等を使い、開発された…
連邦のボールを彷彿させる兵器であつた。

彼ら三名は、愛機に搭乗すると…

『本船は間もなく戦闘待機にはいる、
右舷格納庫、気密ブロックより、宇宙作業服きてないものは退避せ

よ。
繰り返す、右舷格納庫、気密ブロックより宇宙作業服きてないものは回避せよ。

間もなく、右舷格納庫は……』

エアーが抜かれると、オツゴが、右舷格納庫から、カタパルトデッキへと、

武装を装着されながら運ばれてゆく…

カオルかやっこの頃に、ヨーツン Heim に取り付き始めた…

「第二小隊発進準備完了」

『確認！発進命令まで待機されたし』

「了解」

「すみません、オリバーマイ技術中尉はおられますか？」

（やっと見つけた…この機体か…）

カオルは3機目でエルヴィンを見つけた。だした。

『わたしがオリバーマイだ』

「わあ…やはり」

『なにかトラブルか？』

(やっぱり幼い感じだな…)

「え？いええ…その…何時も姉がお世話になっています。

中尉の事は時折送られてくる姉からの手紙にかかれていて、始めてお話す気がしません」

『 ぼくの事が？ 』

「ええ！本当の技術馬鹿だって。へへっ」

『 ん？ 』

スクリーンに映るオリバーが、変な顔に…

「あ、すみません。よけいな事を」

『 …君がもどつたら、大尉と一緒に食事でもしよう。済まないな、そのような機体で出撃とは 』

「いえ、僕達の訓練機関ではMSは…ですが、中尉…僕はオツゴを

信じます。」

(信じてもMS戦だとつらいだろ…)

「……僕の命をかける兵器ですから……宇宙で1番大切な機体ですから……はっ!!」

衝撃波がヨーツン Heim、搭載されているオツゴを襲う。

『うわあああ』

「な、なんなのでありますか？この衝撃は!？」

『エルヴィン!!早く出してくれるよう頼め!!』

『みんな落ち着け……ちょっと待ってる……確認する……』
衝撃がおさまり……

『なあ……エルヴィン今のってなんだった？』

『なんか、ガタガタ揺れたし……宇宙なのに……隕石じゃないよね？』

「今、中尉が確認してる……」

『ソーラー・レイだそうだ、

敵主力部隊を殲滅させたとの発表だ』

「ソーラー・レイでありますか？」

『ああ、大尉が、連邦のおもちゃ何かに！だって息巻いてたぞ』

「は、はぁ……はっ……！」

ビーゴンビーゴン

『あっ！』『……小隊、アクティブ……！』

オッゴのロケットエンジンが唸りを始める……

『022 正常スタート異常なし……！』

『023 同じ異常なし』

『敵は、サラミス2隻だそうだ……』

『まだか？』『母さん、俺やるぞ……！』

まだハッチが開かない……

「まだでありますか？」

『ブリッチでまだどうするか……』

「なら……」

オッゴのアームで、船内操作パネルの開閉スイッチをおし……

右舷サイドのカタパルトハッチが開かれる。

（やはり器用だよなあ……）

「発進許可を！この遭遇戦では先手をつつた方が……早く……！」

『わかった。第二小隊出撃してくれ！絶対生きて帰ってこい！』

「ありがとうございます！」

カウンtdownが表示され…

簡易カタパルトから、

「クッ！」

射出される。

「敵はどっちだ！！」

『11時方向、光点二つ！！』

「ついて来い！！！」

『了解！』 『わかったあ』

「クウ…ウウ…」

最大加速でオツゴを飛ばすと、サラミスを捕らえられた。

「自分のみ対艦ロケット使用する！！後は温存しろ！

対艦ロケット、制斉射！！！」

ロケットが敵サラミスへ向けて飛び出す。
ロケットがサラミス周辺に爆炎をあげると…

『おい、まだ心の準備が!!』

『こんなところで戦うのか！俺達だけで！』

「誰の声？」 『敵の通信？』

『おい、敵は何処だ敵は!!』

敵のボールからの通信がオープンチャンネルのまま、
ただもれしていた。

『またとないチャンスだ。詳しいのを特定している…』

「ボールが6……か？」

『敵ボール6！近接戦闘型2機を含む!!』
『使いおわったロケット弾をパージし…』
『更に突進する。』

『敵も素人！それならばあ!!』

『ききたくなかった』

「やるだけだあ………体勢整う前に撃ち込め!!」

僚機が、宇宙空間で体勢整う前のボール群へロケット弾を撃ち込み、

『ボール1撃破!!』

「初戦果だ!!突っ込むぞ!!」

体勢整い始めたボール群へ、そのままのトップスピードで、

「うおおおお!!」

マシンガンをうちはなち、クロスをする。が…

「落ちなかったか…」

敵集団とクロスし、爆炎はあげてないのを確認すると…

『なんだあいつらは?』

『データにないぞ?』 『ジオンのモビルポット?』
『助かったぜ!』

「編隊を維持しろー！！！」

『白帯のひよっこ、ちゃんとして来い！』

『はい！』

敵のボールの数を減らす為、背後をとろうと加速すると…

「はっ！」

気がついた時には、逆に、編隊の後ろに敵のボールが迫っていた。

「ブレイク！！」

僚機が、それぞれの方向へ別れるが、敵ボール2機は、エルヴィンの機体へとついてくる…

『くっはっはっはっはあ！後ろをとったぞー！！』

敵からのただもれの通信で挑発の音がきこえ…

「オツゴをなめるなああ！」

右側に装備してある、ザクマシンガンを背後に回転させ、

『えっ！！！！』

「遅い！！！」

射撃し、追跡中のボールへと、弾が当たり…

『うわああああ』

追跡中だったボール二機とも、爆散していった。

「マイ中尉のいった通りです！報告を続けます！」

『エルビン、テストパイロットのまね事は止せ！』

「敵は残り3機！！自分らの機体を信じろ！！敵を追い詰めるぞ！各機追跡！！！」

『了解！』 『ああ！』

目をつけた敵を追跡する。

うまい具合に敵も散開し、追跡をかけるが…

「カッター！！！！！」

ベテランだろう、追跡してたら、

いつの間にか後ろをとられていた…形だった…

『クッ』

背後をとったボールに対し、アームを回転させようとしますが…

『あ、バズーカが動かない！トラブルだあ！』

「いま行くぞ！」

『た、たすけてー！！』『落ち着け！！』『だれか、だれかあー！』
『今向かつてる逃げろ！！』『嫌だ嫌だあ！！』

「とにかく振り切れ！」『だれかあ』『もう少し』『だれ…バガゴ』
「カッテル！！」

スクリーンには爆炎をあげるオツゴが…

「カッテル！！おいカッテル！！」

爆散し…

「くあ…くあ…わあああああ」

コントロールステックも離し…

「カッテル、カッテル、

なんだよ、どうして爆発したんだ？返事をしろよ…

もう一度、一からやり直した」

エルヴィンは…戦友をやられたショックからぼっけてしまった…

『上方から敵機！！』

マシンガン掃射つけボールがクロスする。一発だけかすめた。

「上？上ってどっちだ？」

『ひやはははは！足をとめてる奴をやるぞ』

『エルビン、しっかりしなさい、公国の為、同胞の為、つくづくあなたは口ばかり！』

「はっ！えい！」

両側のブースターを逆噴射し、かわし、
前方へのブースターダッシュ、敵のボールの砲身を右アームで掴みあげた。

『は、離せ！！げすやるう』

「離すもんか！！」

『隊長！』

「こいつの武器を剥ぎ取れば！！」

『うるせえひよっ！』

『エルビン！！』

そこに、フランツ機が、ザクマシンガン掃射し、
自分の側にいたボールへと襲いかかる。

『うわああ！うわあああ！』

マシンガン掃射うけ、ボール1機爆発するが…
が、敵ボールの砲弾の直撃をうけ…バランスくずして…

爆散したボールに突っ込み、そのまま共に宇宙のチリとなった……

「うおおおお！！」

ボールからはぎとった砲身で敵ボールを力強く殴り……

『くおおお』

コクピット内部も変形したろうが、
推進材にショートさせ、爆発した。

「あと一機！どこだああ！！」

その直後！

「は！」

その探していたボールがオツゴの背後をとり……

「殺される！」

『逃げる！すぐにい！』

敵ボールのマシガンが……放たれない、

「くっ！」

オツゴを旋回させ、ザクマシガンをはな……たれない。

「弾ぎれ！？」

互いに弾がなく……しばらく……間があく

「はあはあはあ……白帯？」

機体にかかれてあったペイントを発見したようだ……

『くくくく、くっそううう』

敵ボールが、アームをつかって、殴りにきた。

『ドラム缶の！』

また殴りにくる。

『ばけものめ！』

「くっ」

衝撃がシートにもろにくる。

「やめろう！お前は味方の船に捨てられたんだぞ！何をいまさら！」

ボールが回転し、タックルがましてきた

『なにがああ』

エルヴィン今のタックルの衝撃で、ブチ切れ…

「こんのう〜！！アジアのスイカー！！！」

おもいつきりブースト吹かしながら殴り、

相手はシェイク状態におちいった…

『うわああああ』

「はああああ…降伏しろ、さもないと」

しかし、体勢整えたボールがまた殴りくるが、アームで止めて…鏝ぜり合い状態になる。

『さもないとなんだ！そつちも弾なしの癖に！』

「もう独力で母艦にもどれない、ここに置き去りにされたいのかあ
！」

「はあああ……スぺースノイドめえ……しょせん風前のもしびのジオンがあ」

「無駄死にはよせよ！僕だって死にたくない！！
ややこしい理屈なんか、いらないじゃないかあ」

そして、かかっていた力がなくなり……

「わかった……抵抗……しない」

「はあ……はあ……わかってくれてうれしいよ……母艦まで、曳航する」

「……わかった」

オツゴの右手のアームでボールのアームを掴む。

「おい、気密とか、怪我は大丈夫か？」

「……大丈夫」

オツゴのスラスターを調整し、
ヨーツン Heim へと進路をとる。

『……………なあ、俺…どうなるのかな？』

「……………僕の母艦には、士官に姉がいる、また中尉さんも優しいさ…
大丈夫、ちゃんと条約にのっとった対応はしてくれるさ」

『…うん…』

「あ、見えてきた…もうちょいだよ…今交信するからな」

『……………うん』

「ヨーツン Heim、ボールをつれ帰還する。受け入れ準備を頼む」

『了解、右舷収容ハッチ』

「はあ」

『こちらオリバーマイ技術中尉、駆逐ポット、オツゴの評価試験を
終了する』

「中尉、ぼくは…いえ、わたくしは、公国のお役にたったのでしょ
うか?…この独立戦争の決戦で…」

(そろそろだな…)

『勿論だ』

「加速” 加速” 加速” 加速”」

「…よかった…へ…今頃、手に奮えが…」

エルビンが顔を上げると目の前から光が迫る。

ボールからパイロットを引き入れ、

二発目を受ける寸前に引き入れた。

オツゴから離脱し、グラダナへ降下した。

グラダナ市内にはいると、カオルは世界を跨ぐ…

…

カオル報告

オツゴ

ヨーツン Heim

近接戦闘型ボール

カスペン大佐用ゲルググ

ツダ

1975

ヒルダ「うふふ、楽しみだわあ…早く食べちゃいたい」

作者「……あの〜この間SEEDの人達は？」

ヒルダ「駄目ね…直ぐにへばっちゃう」

作者「は???……肉体強化され」

ヒルダ「みたいなんだけど、あそこは別みたいね…
まあもう一人いるから期待はしてるけど…」

作者「ちなみにハーレムの中で満足度をあげると？」

ヒルダ「そうねえ、教えがいがあるのがバーニィね、
スレッガーは、テクはあるんだけど…歳ね…
あとはそうねえ…
ギユネイは毎回だけどへばるの早過ぎ…
つてところかしら？」

作者「はげしすぎます…ヒルダさん…」

ヒルダ「けど、エルママが、私にもわけて、
つてきてるんだけど……もつと増えないとねえ……
でないところの肌が維持できないのよ。みてえ」

作者「……暴走しすぎです……ハイブ落とすまで何人C-01入りするのやら……」

第98話 ヘリウム解禁 投稿日20110327 (前書き)

大変お待たせ致しました。

東北地方太平洋沖大震災、
被害あわれました方に心よりお悔やみ申し上げます。

第98話 ヘリウム解禁 投稿日20110327

2001年9月15日

日付を回った辺りで帰還してきた。

「マスターお帰り〜はやかっただねえ」

「そりゃそうさ、この日をどんなに、まちにまっただか…グフフフ」

……いよいよまった……

祝、生産制限撤廃！！
の記念日だった。

燃料供給の目処がたつ日であった……

が……

「マスター、まだ出来てないから、おとなしく寝なさい」

「いや、完徹する」

「駄目寝なさい!！」

「寝るの!」

「寝る!」

「マスターと一緒に!」

「眠れよいこよ」

「寝ないと精子が作られない」

「寝ないこは、悪いです」

「寝て!」

「わかったわかった…そんなによつてたかるな…
寝るよ…まったく…」

と根負けしたカオルだった…

「で、今日は回復日だよね?」

「うん、まだね」

「マスターの管理徹底するぞ」

「おー」*多数

だった…

朝方…

完徹しようとしたら、

素直に寝てしまったカオルが起きてきた…

「なあ… 11号？」

「マスター、何？」

「昨日いや、夜か、あのあと部屋入ったら眠気が着たんだが…」

「あゝ回復の為に、眠気を誘因するフレグランスまいてたからね、よくねれた？」

「なる程ね… ああ、バッチリさ… けど」

「木星の件でしょ？夜だから安心してね」

「ああ、そうなのか… わかった」

とコバッタ達のでのひらで踊るカオルだった…

「うんじゃあとりあえず、お供えものをだしますか…」

今日は、ハンガーにて一つのシエルターをだした。

扉をつけて、恒例の呼び出し…

「準備できたら出てきて下さい」

すると、二人とも出てきた。

「カオル大将閣下でありますか？自分は、ジオン公国軍所属、エル
ヴィン・キャディラック曹長であります！」

「僕は、地球連邦軍所属フレンリック・シヨン上等兵であります
！！」

改めてみると、カオルと同年代位なのがわかった。

「えっと、二人とも年齢は？」

「はっ！17歳です！」

「僕は16歳です！」

（あり??）

「フレンリック君って、徴兵？」

「いえ、連邦は志願制です。」

「研修中に今回の戦いにでるはめになっちゃったので…」

（なる程ね…）

「まあいいや、じゃあ…とりあえず君達には特殊任務があるから、準備出来次第、ハンガーにきてね」

「あの…」

「ん？」

「姉上は、自分が戦死したあと…どうなりましたでしょうか？」

「ん……モニク・キャディラックさんね…」

「お姉さんは、ヨーツンヘイムクルー共々最終決戦を生き延び、そこから先は語られてないけど、」

「多分、オリバー・マイさんと一緒になったと思うよ」

「そうですか…よかった…あとジオン公国は？」

「まあ…想像通り負けちゃったね…けど自治権を獲得し、
まあ…あの戦争で地球圏の工業が、かなりズタボロになったからね…
100年まではジオン共和国として自治してたよ」

「そうでありますか…」

「まあ生き証人のアムロさんや、シャアさんもいるし、
あとで話聞いてみるといいよ」

「わかりました。ありがとうございます」

エルヴィンは、25号に案内され宿舎についていった。

さて…少しやる事がなくなったので、
カオルはコバツタ達の増産にかかる事にした。

(オツゴ?…あれは無理でしょ、決戦兵器とかいって……コロニー
作業用にはボールともども使えるかもだが…
今のところは、コバツタ達がやってくれるし…
まあ艦船の有人作業用にはいいかもしれんが…
またはいずれコロニー作業用かもな…)

ポチポチ作られていたボディに、OSとCPUをいれてる…

(そういえばアムロさんとかMSどうすんだろ?…あと沙霧連隊とウォーケン大隊もか…)

夜になったら…機体決めるか…)

と考えながら作業していると…

エルヴィンとフレンリックが来たので、

ヒルダさんへの生贄…ゴホン、いやC-01への入隊手続きノタ
メに、

早速執務室へ案内する事にした。

「ビダンさん」

「入っていいわよ」

シユン

「ご要望の人材連れて来ましたので、C-01に入隊お願いします
ね。」

とこちらの方がわが軍の頭脳、で君達の隊長となるヒルダ・ビダン
さんだ」

「エルヴィン・キャデラック曹長であります!」

「フレンリック・シヨーン上等兵であります!」

「うふふ。よろしくね…じゃあ早速なんだけど…」

「あとの事はよろしくお願ひしますね」

と退出をする。

暫くすると…

スバババババ

(何の音だ??)

……

さて夜になると、

「マスター、完成したよ」

「おお　いよいよか…」

木星行きチューリップが開きはじめた…

チューリップの中から、

ヘリウム3の入った金属樽がつまれた多目的輸送艇が出てきた。

「…どんだけまった事か…」

「マスター…」

柄にもなく、涙が出てきた。

涙を服で拭くと…

「うっし、じゃあ戦力強化だな!!」

まずは生産指示を出すことにした。

(けどコバツタ製造サボってたからなあ…)

今は1日110機MSなら製造できる状態だった…

(とりあえず…)

ミサイルビッグトレー4隻

シャトル…

(シャトルは500便目標だよな?で…良かったんだっけ?)

120000人搭乗可能との結果になる…

(残り860機ね…予備いれて870機っと)

シャトル870機注文

(その二つを最優先で、残りが…)

陸戦強襲型ガンタンク、ホバートラック
の構成比率で無限に余裕ある時

チューリップ20組

と注文した。

そのあと、ウォーケンさんや、沙霧さん、アムロさんに話を聞きながら、

ウォーケン大隊にはB-01同様の魔ドム
沙霧連隊にはA-01同様の魔不知火。

アムロさんには、とりあえず魔グフ…

C-01には魔ハイザック…
という形になった。

2001年9月16日

カオルは起きハンガーにいくと、

まずは世界扉を開く…

〓フルメタル・パニックの世界〓

カオルはフィリピンに設置された、
セーフハウスの扉をあけた。

「マスター!!」

「えーと、何号?」

「1号です」

「ん…状況は?」

「ほぼミッションは終了しました。いつでも移送可能です。後は、5日程いたければ……」

「わかった…じゃあ早速移送にかかろう。世界扉を形成するから、集めて、準備できたらよろしく」

「ハッ!!」 T-1000の1号が、人を集めにいった…

ミスリルの人達の加入条件の殆どが家族をあげたので、交渉の為に派遣してたのだ。

もちろん、接触し、拒否された際の記憶については、1時間以内の出来事なら消去できる、便利な小道具を持たせたのは、お約束だった。

その装置を頭につけ、作動させると、気絶とともに、1時間以内の記憶を全て消し去る……というもの。

あんまり使いすぎると、頭がどうにかなるらしいが……

「マスター、準備できました」

「ご家族の方には説明済み？」

「はい」

と、連れられてセーフハウスのホールへと向かう。

「始めまして、自分は異世界軍の責任者となっております、渚力オルです。

しつての通り、彼、旦那さん、息子さん等は、この世界では、死んでしまいました、

死ぬ前にスカウトできたので別世界にて生きています。

ここにおあつまりの皆様は、別世界にいる大事な人から、是非きてほしい…との事で接触がとられ、

その接触に応じた形…と伺っています。

今から作るゲートを潜りますと、この世界には戻れないのをご承知して下さい」

世界扉を唱え、世界扉が形成される。

「では、異世界へ…ようこそ」

続々と家族の方々が異世界軍の世界へと潜っていく。

ただおつきい荷物ある方達もいるので、
それについては一回虚数空間に引き込む形にした。

無事、43組の方々が潜り終わったので、一回世界扉をけした。

「でもって…1号、そんなに資金持たせたっけ俺？」

「犯罪組織からお金を奪いとり、
ここまでのセーフハウスを作りあげました」

(完全に介入した…なあ…大丈夫なんか？

…まあ…修正きかすようにするしかないか…)

とりあえず1号に、フルメタル・パニックの小説をわたし、
「命令を付け加えるよ。この筋書通りに行くように監視する事」

「はい！マスター」

(まあ…こいつらなら大丈夫か…ただ、生産できないのが痛いなあ…
再び取得かな？)

「さて、とりあえず1週間後にくるわ…」世界扉」

「現実世界」

カオルは潜ると、いつもと変わらない…部屋にでた。

メールの着信が入る。

(そういえばそろそろか…ん?)

ロボット博覧会開催のお知らせ…というメールがきてた。

(一ヶ月後か…)

カオルは、いつもの集積所にいき、提供品、廃材等をつけとり、世界扉を潜る。

「B55ハンガー」

カオルが元の世界に戻ると…

「マスター!!怒」

「ん?」

「いきなり人だけを送らないで下さい!!」

「え…あ…いつてなかったなあ…」

「大変だったんすからね！！まったく…」

「すまんすまん…」

といきなり怒られてた…

カオルは横浜基地の集積所に、
平和日本からの支援物資コンテナを出して、連絡を入れた。

で、B55ハンガーの格納エリアにいくと、
廃材のリサイクルの手続きをとる。

一通りすむと……

「マスター、恭順派捕縛してきたよ」

「さて、どうするかだよな…」

一人一人面談して結果を決める事にした。
はいるなり

「神よ、この者どもに天罰を！！」

アルミサエル…書き換え中

「おお神よ、わたし達はなんと罪深い事をしてしまったのだろうか…
何とぞ慈悲を」

はい次…

「ちょっとなんなのよ！さっさと殺しなさいよ！」

「……何で恭順派に？」

「神に逆らう冒涇よ！！！」

アルミサエル……

（ほう、この子勇ましいなあ……うっし）

カキカキ

「マスター！！忠誠を誓います。神なんかくそくらえですわ！！！」

な感じで、有能かな？と感じたのを精神を書き換えて、18名程強制加入してもらった。

ちょっと厄介だったのが、指導者と呼ばれていた人物……

はいるなり、部下の事は冒涇するわ、本当に指導者？だったので、廃人にしておきました。

キリスト教恭順派は改心した……って事で、加入以外の人達は白稜基地MPに引き渡しておいた。

……

カオル報告

シャトル870機

ミサイルビッグトレー4隻

キリスト教恭順派18名加入

陸戦強襲型ガンタンク及びホバートラック、余裕ある限り生産

チューリップ20組

作者「うーん…16歳か……」

カオル「ん??なに悩んでるの?」

作者「いやヒルダさん捕まらないかなあ〜って…」

カオル「へ?」

作者「いや未成年なんたらに」

カオル「あ〜……今いる世界だと、
法律どうなってるんだっけ??」

殿下「おこたえしますわ。15歳から男女とも成人と認められ、
16歳になった時、男性はほぼすべて、独身の女性は徴兵となりま
す。
ただし、良心的兵役忌避も認められ、清掃、介護、消防、警察、公
務、
企業等従事する事を求められます」

作者「つまり二一トは？」

殿下「認められませんので、
開発者になるのが引きこもりの道ですわね」

作者「で、ヒルダさんは？」

殿下「勿論、成人相手ですので、捕まりませんわ」

という事でヒルダさんは捕まりません。

第99話 流動 投稿日20110329

2001年9月17日

起きてくると…バーニイがいた。
黄昏れてる。

「バーニイおはようござしたん？」

「ヒルダ様が、17の餓鬼に夢中になって、昨日食べてくれなかつた……」

「……食べる……今日は活動できるから良いじゃん」

「いや、食べてもらわないと……」

「戦場に出ると、食べてもらうのどっちが優先？」

「食べてもらうのだろ？勿論」

(ビダンさん…どんな洗脳してんだ?)

「ま、まあ……今日は食べてくれると思うよ……頑張れ」

「ああ……」

「ところでバーニィ、乗ってもらいたい機体あるんだけど……どっつこ？」

「ザク以外のらないよ」

「そんな事言わずにさ……ビダンさんへ、進言するから」

「どの機体だ？何でものるよ」

（はやあ……）

「と、この機体なんだけど……」
と、バスターを紹介した。

「ガンダ؟؟ジム?…どっちの系統だか？」

「別世界のMSだね」

「ふうん…まあ乗って見ればわかるか…」
カオルを伴ってコクピットへ向かう。

コクピットを覗くと…

「…リニアシートでないのか…
どっちかといえば俺らの時代の…に…てるなあ…」

「だね…ま、じゃあ起動してみてよ。それがスターターだよ」

「ああ、わかった」

フィィィィ

OSが起動し始める…

「え？どええええええー！！な、な、な、なんだあああ？」

「ん？どうしたの？」

「じよ、じよっほっつつか…あ、あたまいた…」

「動かせそっつ？」

「無理無理!!」

横からスイッチを切ってあげ…

フイイン

駆動音がさがって…

「はあはあはあ……何なんだ？今の……」

「単方向の分散型神経接続つうの……きつかった？」

「ああ、なんかぶわああって一気に情報がはいつて…俺が俺でなくなるといっつか……」

「ふむ…やっぱりナチュラル用のOSは必要かな？」

「そのナチュラル用って？」

「まあ普通の人用のだね…まだないから今度ね」

「ああ、頭また痛くなる事ないんだよな？」

「多分…ね」

「わかった」

カオルはバーニイとわかれ、
ハンガーディスクに向かい、先程のレポートをあげると…

(さてと…宇宙は楽したいけど…)

「月って、ハイブの数どの位あったっけ？」

「ん〜と…5個ね」

(5か…ぶつちやけ…やってみる価値はある？)

「うし、じゃあ…いつてくる」

「いつてらっしやい〜」

「”世界扉”」

カオルは世界を渡る

宇宙歴 0087 12月6日

カオルはこの世界にやってきた…

グリプス2を取得するために…

ぶっちゃけると、人が住んでいるところには使えない、
で星を壊さない、
連射がきく…

そのクラスを考えて、コロニーレーザーで良くない？

の考えだった。星を壊すならもつと強力な兵器で、楽だけど、
重力変動等絶対ありえるから、太陽圏では使えない話だった…

月を壊したら…

単純に地球の重力がかわり、また…今あるコロニー群も怖い事にな
るのは想像できる話である。

カオルが、世界扉を出ると、

(ここは何処？)

鬱蒼としたジャングルにでた。

(ま、地球には間違いないし……)

カオルは衛星をうちだし、位置を確認すると、
グリプス2のある、ラグランジュ3へと急行する。

2日目

宙域に移動すると…

ア・バオア・クーいや、ゼダンの門もみえてくる。

(…………あれがグリプス2ねえ…………)

巨大なシリンダー…片方に大きな穴が空いている。

カオルは早速取り付くと、同化し始めた。

しばらく時間がかかる…

コロニーの内部のシリンダー底部には、巨大な真空管のようなレーザー発振機が沢山ある。

(これを増幅させて、あの巨大なエネルギーを射出するのか…………)

カオルは広げながらグリプス2を内部観察していたが、おもしろそうなのがないので…………
時間がすぎてった。

カオルは取り付き終わると…………

(まだこの頃は目新しい機体なかつたよなあ……)

空気のある部屋にでて、世界扉を唱え、
元の世界へと戻る……

〓〓 B55ハンガー〓〓

2001年9月19日夜

「ただいまあ〜つと……」

「マスターお帰りなさい!!ちょっと報告があるんだけど……」

「ん?」

「実は佐渡島ハイブ飽和しかけて、このままだと……」

「侵攻の恐れありか……」

「うん」

「ん〜ついでに煙幕弾のテストもするか……
よっし、間引き作戦といきますか……ミサイルビッグトレーは?」

「この間の注文から1隻完成、今1隻建造中明日完成予定」

「帝国に独自の砲撃による間引きを行うって、通達しといて」

「了解」

「ザメル連隊と補給1個小隊で田の浦海岸へ下駄で輸送、展開…ミ
サイルビツグトレーは準備出来次第全力斉射」

ビービービー

『ミサイルビツグトレー、発進準備かかれ、
ザメル連隊、101補給小隊、101施設小隊、出撃準備』

途端に基地内部が騒がしくなる。

戦艦ドックの出入口のエレベーターに、
ミサイルビツグトレーが歩みを進めると、
地上にエレベーターが上り始める。

カオルは情報室にきていた。

「そついえばシャトルには影響は？」

「ないように、演習場の北側、町田に近いところに展開予定。そこまでは既にルートが整ってる」

エレベーターが上下移動してるのがモニターに映っている。

(ん)構造失敗したかなあ…戦艦が出撃するのに時間かかる…で、戦艦出入口を使用しないと、出れないし…)

一応エレベーターは、往復2分で上下移動可能だったが…

「2号艇、地上出入口からでした…射出エリアに向かいます」

「エレベーター下がり、ザメル連隊以下出撃します」

下駄に乗ったザメルや搭載されたチューリップ、兵員輸送コンテナが、

出入口ハッチから浮き上がり、新潟県に向け進んでいく。

「各ミサイルビッグトレー、射撃準備整いました」

「よし、連続全力斉射」

「はっ!!」

スクリーンに映るモニターからは、夜の闇のなか、420本の光が、連なって光の帯がうきあがるのが確認できる。

今回のトマホークは座標での振り分けしている。

「1射目発射完了、弾着予定時刻0028。続いて2射目射出されます」

前のミサイルの噴煙等に影響されないよう、1分後に2セル目が発射される。

「目標座標同一、弾着予定時刻0029。続けて3射目射出されます」

やはり噴煙の影響を受けないように、3セル目が発射する。

「目標座標同一…」

のを…ずっと繰り返してた…
トマホーク弾着予定時刻までに…12600本近くのミサイルが射出される予定だ。

2001年9月20日

やはりBETAはただものではなかった…

「1射目、迎撃されてます…50%突破、60%、70%、2射目も迎撃されてます!!」
…1射目全弾壊滅!」

「やはり届かないか…ザメル連隊は?」

「約30分後到着、それから施設展開予定です」

………30分経過

ミサイルは続けて射出されるが、全弾撃墜されている。

未改造だと噴煙で環境破壊も良いところだろう。

もちろん燃焼時、噴煙等も自然界に影響ないようにしてある。

そして待ちに待った…

「ザメル連隊到着しました!施設小隊展開開始しました」

モニターには、チューリップを中心にコバツタ達が、ドームを作成しはじめて、そのまわりをT-850が警備をしている様子が映し出されていた。資材が次々とチューリップから運ばれてきて、約30分後には組み立て式ドームが形成できた。

「施設設営作業終了!!」
「射撃準備態勢整いました!」

「時間設定T20」

弾頭設定をし終えた煙幕弾が、ザメルに次々と装填されていく…

「煙幕弾、一斉斉射!!」

ザメル80機の680mmキャノンから煙幕弾が一斉に放たれる。

ザメル連隊の放った弾は、約20秒後から煙幕を出しながら佐渡島に撃ち込まれてく…

もちろん、一射目は迎撃はされる。

が、そこまで展開した煙幕の中から次弾が出てきて…

結果的に佐渡島に到達に5射ですんでしまった。

そこにトマホークミサイルが襲い掛かる。

更にザメル達は座標をずらしながら煙幕弾を展開させていく…

しばらくすると…佐渡島全域が煙幕につつまれ…
迎撃の為のレーザーが上がらなくなってきた。

「煙幕弾…いいんでないの？」

「効果抜群だね」

全土を包むと、2分ごとに座標をずらして、煙幕弾を撃ち込まれるようになった。

次々とトマホークミサイルが全弾命中し…

約3時間後には佐渡島ハイブの地上部分にはBETAの反応がなくなってしまった…

「トマホーク蹂躪」

「煙幕弾様々、無限装置様々だな」

「ところでマスター、このままハイブ攻略しない？」

「ん？…ん？」

現状MSの日産がシャトル等とは別口で、110機…で、陸戦強襲

型ガンタンク1294機。
まだ痛い事には痛い…が…

「今、情報からすると、ハイブ内部には光線級すくなく、残り16万匹…」

他のハイブからの増援予定もなし、絶好のチャンスだよ」

「ふむ…：そうだな…佐渡島ハイブをそのまま貰い受けたいし、帝国に打診しておいてくれ」

「了解、マスター」

「ミサイルビッグトレーは津軽海峡から日本海側へ回せ。
佐渡島ハイブ攻略戦、23日を目処に発動する」

「イエス・マイ・ロード!!」

「偵察用エアロスタットを佐渡島ハイブに派遣、
地上部分を監視させておけ」

カオルは必要な指示を飛ばすと、
コバツタ達の増産にかかった。

「アメリカ情報局」

「な、何なのだね……これは……」

「おそらくミサイルによる噴煙かと思われませんが……」

「計測上、何本記録できたのかね？」

「約12万本近くのミサイルです。しかもこの2隻の戦艦からうつたれてます」

「たった2隻で……か？」

「はい……」

「ナンセンスだ……！非常識だ……！」

「確かに……」

……
カオル報告

23 日目処…早過ぎたかな？

第99話 流動 投稿日20110329（後書き）

作者「なし崩しに佐渡島ハイブ攻略になったなあ……」

ナギ少尉「初期プロットは？」

作者「ん〜もう少し機体数が、そろってからだったが……ま、いいか」

ナギ少尉「どっかの部隊は全滅したよね〜、ありえる？」

作者「補給届かず、間に合わずに……だろ？」

まあ異世界軍の突入部隊も、補給届かずなら有り得るね」

ナギ少尉「なるほど……さて次回予告は、佐渡島ハイブ攻略戦……地上戦……お楽しみにい」

第100話 佐渡島ハイブ攻略戦：地上編 投稿日 20110331

2001年9月21日

引き続き増産中…だったのだが、帝都城に呼ばれた。

「異世界軍、渚カオル参上しました。殿下、何事ですか？」

「カオル殿、佐渡島ハイブを攻略するとか…」

「はい、23日より上陸作戦を行います」

「私達、帝国臣民の悲願であります。何とぞ…ハイブ攻略、よろしくお願いいたします」

「はっ！」

「ところでカオル殿、ハイブ攻略後、佐渡島ハイブを異世界軍の基地にしたいとか…真か？」

「ええ、日本を護る拠点にしたいと思います。

またその先別のハイブを落とした時にも同様にするつもりですが…」

「帝国としては異論はありません。
が、軍の方から攻略作戦混ぜて欲しい…
悲願の攻略に…との事です」

「更新した機体の属する部隊でならと、
ご返答お願いします」

「そのように伝えますわ…月詠」

「はっ!!」

「土地権利上の手続き等、あとの事頼みます」

佐渡島のG元素と交換という形で、ハイブ攻略後の佐渡島全土の権利を手に入れるようになる。

佐渡島は…避難できた人が一人もいなかった為、解放できたとしても、無人の島になるからであった。

（あ、そっぴゃあ……）
カオルは帰り際に足りない機体に気がつき、ハンガーに戻ると追加注文に入る。

ザクタンクを作業用として、タンク部分を延長、キャタピラ、モーター強化、荷台を追加、

また各種レイバー用のアタッチメント装着、使用可…

有人機でないため、コクピットは改造せずに、…
作業用ザクタンクとして20機ほど注文した。

2001年9月22日

ひたすら生産しつつもまずは……

会議室の中には、伊隅、沙霧、ウォーケン、ミリーイ、
ラトロワ、バーニイ、桜井、アムロ、シャア、ヒルダが集まってい
た。

「おはようございます。では早速、佐渡島ハイブに対しての攻略会
議を始めます……」

作注ネタバレになるよな…という事で、

場面は略させていただきます。

2001年9月23日

佐渡島作戦当日…

ビービービー

戦艦出入口より次々と下駄にのり、陸戦強襲型ガンタンクが飛び立
っていく。

陸戦強襲型ガンタンクは、1700機を越えた機数となって、

今生産中の機体以外は全部出撃となる。

続いて、141機のホバートラック達、
中隊単位に索敵専用としてつけられている…

続いて、今回のいやこれからも中核となるだろう、チューリップが
5組…

とにかく弾薬供給源の元になるので、最重要守備対象となる。

それを護衛するT-850隊が兵員輸送コンテナに搭乗して続いて
く…

続いて作業用ザクタンク20機…突入時に活躍するであろう。

最後に有人機である、

B-01の魔ドム、

A-01魔不知火、

ウォーケン大隊の魔ドム、

沙霧連隊の魔不知火、

C-01の魔ハイザックと続く…

カオル達異世界軍の大群が新潟に着いた…

そして…

「この戦いにより、人類はまた一步前進するであろう……
オペレーション佐渡島、開始せよ!!!」

秋田県、鼠ヶ関沖にまわされた3隻のビクトレーから、

630本ものトマホークミサイルが放たれる。

トマホークが目指す目標は、ハイブ構造物…

3日前の間引きの際殆どの光線級は死滅した為、迎撃されることなく、一斉に命中、爆発し、構造物は崩れてゆく…

そこに更に次弾が撃ち込まれ次々と崩落していく。

崩落しきると…でっかい主縦坑が映っていた。

そのまま、主縦坑に向け、トマホークミサイルを引き続きぶち込む。縦穴周囲も削る為だった…

100m程削れると…

光線級がでてきたのだろう、

『到達率0.5%!!』

カオルは魔撃震と一体となってる状態で指揮をとってるが、横浜基地からの報告がリアルタイムではいる。

「よし、煙幕弾でえ!!!3斉射後、光線級に向け、トマホークミサイルでえ!」

再び主縦坑周辺地域が途中で迎撃つけるも、煙幕に覆われる…

そこに撃ち込まれるトマホークミサイル…

『到達率100%全弾命中の模様!!』

「様子見だな…」

煙幕がはれると更にえぐられ、
クレーターだらけになっていた…

(もう流石に出尽くしたかな?)

「主縦坑に5発程トマホークぶち込め…ピンポイントでだ…」

射出されるトマホーク……

『着弾まで、1分』

「これが、着弾したら、フェイズ3へ移行する」

『了解しました』

……

『着弾!!到達率100%光線級認められません』

「ようし、フェイズ3移行だ」

『はっ！』

新潟県沿岸で、下駄にのって待機してた異世界軍が、
一斉に佐渡島を目指し最大戦速に加速し始める。

下駄には陸戦強襲型ガンタンクが2機乗っていて、
またそれ以外にもホバートラック、チューリップ、兵員輸送コンテナ等搭載した下駄も見える。

『いつけえええ！！』

『わくわくしますわ』

『カオル！！いよいよね』

「あんまり無理すんなよ」

カオルは、戦乙女達に語りかける…

『大将、この機体の力みせてやりますよ！』

『カオル君、この僕を侮らないでほしいな』

『カオルさん…今までの鬱憤はらしますから、ご心配に及びません』

『佐渡島ハイブ、反応なし』

HQから報告が入る。

「そのまま上陸、陣地展開、作戦行動範囲を広げる！！」

『イヤッハー！！』

指令がとび、

佐渡島からのBETAの反撃を受けずに、クレーターだらけになつて、

BETAの死骸だらけの島に上陸した異世界軍は、

直ぐさま展開し始めると…

BETAの大群が島の各所にある門から沸き上がってきた！

「きやがった！！各機陣地形成を支援、蹂躞せよ！！」

下駄から降りた、陸戦強襲型ガンタンクが、障害物となる死骸を焼きながら、陣地の場所を確保する。

また手のあいてる機体は、戦線をはりはじめる。

兵員輸送コンテナから飛び出したコバツタ達が、
チューリップを中心とする組み立て式コンクリート陣地の形成にと
りかかる。

主縦坑から、南南東9kmの地点に陣地をもつけようとしていた。

ビクトレーから撃ち込まれるミサイル、
ザメルから撃ち込まれる680mm砲、
陸戦強襲型ガンタンクによる砲撃の中、

チューリップから、次々と輸送挺で運びだされる資材。

ドームがまたたくまに形成される。

島に上陸した陸戦強襲型ガンタンク約1700機、
有人機、支援砲撃、ミサイルでBETAの圧力を押し返している。

次々と死骸にかわるBETA、弾切れした陸戦強襲型ガンタンクが、
陣地に戻り抜けた穴を別の機体が埋める。

そして、新潟県沿岸部に待機していた帝国軍を載せた揚陸艦が、
抵抗も受けずに、富岡から、大群の上陸を成功させていた。

『斬りたいけど…我慢我慢』

火力戦では、前にでると射撃ができなくなるから…

十分言い聞かせてあったのだが……

『まだ斬る機会じゃありませんわ……
今は戦線形成ですわよ』

『わかってるわよ!!』

ヴァルキリー02弾切れ、後退する!!』

『ヴァルキリー08入ります!!』

(戦線構築うまくいってるな……)

富岡から上陸してきた、帝国軍3個師団規模も戦線に合流し始めた。

帝国軍にも、火力戦を……とお願いしているので、
結果的に戦線が更に火力が上昇しつつあった……

……

同日21時24分

『地上部焼却除去完了、障害物等認められません。BETAの迎撃もなし』

『うし……フェイズ4へ移行』

ここからまだまだ長丁場であったため、
ウォーケン大隊、ジャール大隊、C-01以外の有人機は横浜基地
で休養をとる為に、既に下駄に乗って帰還していた。

帝国軍も突入部隊込みで半数以上が母艦でメンテや休憩の為に戻っ
ている。

中破や攔座したガンタンク（勿論脱出済み）もザクタンクが回収し
てきて、
陣地では修理中であった。

陸戦強襲型ガンタンク、ホバートトラックが、門や主縦坑周辺に集ま
り始めた。

そしてチューリップから出てきた輸送艇にのっていた、
エアロスタット達が展開し始める。

エアロスタット達は、それぞれの担当する門に突入しはじめた…

しばらくすると、

『A-1ゲート1250!! C-1ゲート2123!! A-8ゲ
ート638!!』

等報告があがると、

突入した門からエアロスタット達が飛び出してきた。

すると……それを追ってきたBETAの大群が湧き出はじめる。
それを待ち構えて幾重にも門を囲んでいた、
陸戦強襲型ガンタンクから大量の砲火があがる……

門によって湧き出たBETAの量は違うが……
ものの1分から15分程で沸きどまり、
弾薬の減った陸戦強襲型ガンタンク達が交代交代で陣地へと補給に
向かう。

そして、戦力が揃った門にまたエアロスタットが突入し、
再びBETAを釣ってくるの繰り返しを行っている光景が、
そこらじゅうで見えていた。

異変は時たま起きる。

『振動探知!!地下よりBETAの侵攻あります!!』
ホバートラックが地下進行を探知したようだ……

「待機部隊を向かわせる!」

警戒エリアに向け、待機していた陸戦強襲型ガンタンク達、B-0
1が急行する。

『警戒エリア到着……門形成エリア狭まります……』

陸戦強襲型ガンタンクが段々狭まる警戒区域に砲身をむけ……
『出現まもなく…5、4、3、2、1』

土砂吹き上げれとともに、湧き出てくるBETA群…

幾重にも包囲した陸戦強襲型ガンタンクによる射撃により、またたくまに勢いは減り…

ただの門となる。

地上は、陸戦強襲型ガンタンクの蹂躪する世界となっていた。

「アメリカ軍情報局」

「むむむ……」

「時間はかかりますが優勢のもようです」

「BETAを引きずりだすか……考えてはなかったな」

「ええ、この画像に写っているこの機体、かなりの重要な役目をもってますね」

「開発局にこの画像を回せ!!
なんとんでも……」

……

カオル報告

ただいま戦闘中……

忙しいっす、後ほど……

第100話佐渡島ハイブ攻略戦…地上編 投稿日20110331(後書き)

オリジナルハイブ最下層

あ号「……………21から救援要請か……………よし送るか……………到達できるまで持たせる……………」

フム…光線級をもっと比率あげないと駄目か…
20、16はまだ足りないな……………」

ただいま対策をねっている模様です。

「14、18、19に命ずる21に救援送れ。
03、04、06、15に命ずる、増産、20、16に援軍を……………」

第二部

作者「いよいよハイブ攻略地上編か……………」

ナギ少尉「あたしも加わりたかったなあ……………」

作者「お前はこっちに拉致されてないじゃん……………」

ナギ少尉「まあそっただけどね……………」

空母からミサイルとアヒルちゃん的生活送っていると、飽きるのよ」

作者「ミサイルっていえば、お前のところの無限弾薬装填装置大活躍だなあ」

ナギ少尉「あゝミサイルビクトレーのね？……3隻で640本つてチートでしょ…」

私のところでさえ、同時ロックオンで8発が限度なのに…」

作者「が、1秒間隔でうつてるだろ？」

ナギ少尉「う……そうね…」

作者「そのてん頭脳はこっちのヤドカリ等が凄いんだって、事さ…」

ナギ少尉「そういった意味ではチートね…」

あとエアロスタット君大活躍してるし…」

作者「見事にBETAを引き寄せせる擬似餌になってるなあ……」

ナギ少尉「みたいね……さて、次回予告！佐渡島ハイブ攻略戦…突入編……お楽しみにい」

第101話 佐渡島ハイブ攻略戦…突入編 投稿日20110402 修正1

2001年9月24日午前11時頃

夜を徹して釣り針でBETAを引きずりだし、地上にて迎撃は、一定の成果をあげていた…が…

『エアロスタットより報告、追跡してきません』

「やっとここまでできたか……長かったな……と残存予想は？」

『約5万體、最下層にて防衛行動をしているとの事です』

「うっし、フェイズ6に移行、突入準備にかかれ」

陸戦強襲型ガンタンクが門付近の、死骸の焼却除去にはいる

『では大将われわれは』

「ああ、お疲れウォーケン・ラトロワ」

徹夜して、即対応してた第66機甲大隊、ジャール大隊、C-01が下駄にのって横浜基地に帰還し始める

入れ替わりに釣り天秤中は、新潟陣地にて休憩してた、
A-01、沙霧連隊、B-01、アム口達がくる予定になっている。

……約2時間後

『地上部分、各門付近とも焼却除去完了…障害除去できました』

「おっし、じゃあ、上層、中層とも確保し、突入部隊準備できるところまでクリアリングを」

『はっ！！』

指令をうけた陸戦強襲型ガンタンク、ザクタンクは門に突入する。

まずは最上層の広間につくと、エアロスタットもいるが、
陸戦強襲型ガンタンクが警戒するなか、
ザクタンクが有線で無線中継機、監視装置等を引っ張ってきて設置し始める。

その間に別動隊がさらに横坑へと突入する。

今のところ抵抗すらない状態だった。

程なく上層に近い広間は、

異世界軍の監視下に落ちた。

一旦地上に戻ってきたザクタンクは、また資材を積み込むとまた門へと突入する。

更に下層の広間へと陸戦強襲型ガンタンク、ザクタンクは進んでいく…

スパイ情報から寄せられた佐渡島ハイブのBETA総数は25万匹、今までの駆逐BETAは約20万匹…

まだ釣り天秤に釣られる事なく、最下層に潜むBETAは約5万匹いる事になる。

程なく各広間を確保してると、帝国軍より、揚陸艦にて休養、補給していた突入部隊が準備整ったとの連絡が入った。

『カオル』

『カオル君準備整ってるぞ』

『はっはっは！！斬るぞ斬るぞー！！』

『この日をどんなに待ち望んだ事か……』

『大将どの、われわれに名誉ある栄光を！！』

「各隊、佐渡島ハイブに突入！！BETAを駆逐せよ！！」

『了解』*多数

午後2時21分佐渡島ハイブ攻略部隊は、各門よりハイブ内部に突入する。

……

突入部隊は、チューリップを中心として、陸戦強襲型ガンタンク及び、
有人機及び帝国軍によって構成されている5部隊によって進んでいた。

『ヴァルキリー08より、マスター1』

「こちらマスター1、どうした？」

『コバッタ達、何やってるのです？』

「通路の強化だね…擬装横坑対策もかねて」

擬装横坑の場所もわかっているが、この先の利用もかねて、メイン通路とし、強化してるのだった。

気が早いもんである。

『しかし、ここまで無抵抗だと……』

『確かに…拍子ぬけしますね』

「まあそんだけ釣れた…って事だよ」

そうしているうちに、どんどん地下深く侵攻し…

途中の下層の広間や横道も既に、監視、連絡網構築が整っていた。

そして、BETAが潜んでいる広間の一つ手前の広間まですすむ。

偵察用エアロスタットがどうしようかと、横坑から先に釣れて来られないので、

反応炉をまもる近衛隊ともいえよう…

この先、反応炉のある大広間、及びBETAが生産される部屋まで最低でも3つの広間を通る事になる、
また周囲を固める3つの広間がある。

まずは、周囲の広間をクリアにする事になる。

「行くぞ！BETAを蹂躞せよ！」

横坑に突入し、広間に入ると、天上までびつちりとBETAどもが待っていた。

「ファイアー!!!」

横坑から進入してきた陸戦強襲型ガンタンクから、一斉射撃が放たれる。

その隙間をぬって有人機がザクマシンガンの火を放つ。

天上からぼとぼと、襲撃してくるBETAには、控えている機体がブレードをなぎ、肉片とがす。

機体に取り付かれようが、きかないが、対応する時間はあるのであった。

弾薬が切れた陸戦強襲型ガンタンクは、後方にさがり、すぐにその隙間を控えの陸戦強襲型ガンタンクがうめる。

『マガジン!!』

控えの機体よりマガジンが渡され、その控えの機体に、補給より戻ってきた陸戦強襲型ガンタンクが、マガジンを積んでるので渡される。

大量の火力の前に、次々と肉片と化すBETA…

段々と、陸戦強襲型ガンタンクの壁は前進して…

突入から45分後この広間は制圧下となった。

「ふう…今ので5000か？」

『みたいですね…』

『けど、弾薬が尽きる事のないのは良いですね』

『そうね』

本当、チューリップ様々であった。

『こちらブラボー01、広間D-4-10制圧、これより進行ルート外の横坑の駆逐に入る』

『こちらアーム01…』

次々と報告がはいり、横坑の駆逐へとうつつる。

「この先、各広間から合流するが、残り30000匹控えてるな…」

『ですよっね…あと二つの広間なんですよね？』

「ああ、合流する広間、主広間を突破すれば…大広間、反応炉のあるな…」

BETAにとつても最重要施設を守っている。

各広間を結んでいる横坑の駆逐が終了したので、

いよいよ合流ルートになる広間へと足を進める。

広間にすすむと、足元びつちり、天上ぎっしり…
レーザーには赤い光点だらけ…

まさにBETAが9分地面が1分であった…

突入と同時に、陸戦強襲型ガンタンの砲身が火を放つ。

見ると、別広間から進入してきた突入隊も同様に火をはなっている。

BETAの絨毯を少しずつ削りとっていく。

陸戦強襲型ガンタンクが補給に戻る回数多くなるが、補給から戻ってきたガンタンクが穴を埋める。

後方組の陸戦強襲型ガンタンクの240mmキャノンから、留弾がほぼ水平で発射され、後ろにいるBETAを数十匹死滅させる。

壁組の陸戦強襲型ガンタンクの腕部ポップガン、30mm機銃が絶えずに唸りをあげ、命中する小型BETAを片っ端から肉片にかえる。中型BETAは倒れ壁になるが、構わず打ち抜きそのうち肉片になる。

それが3方向から総数1600もの、実際に撃ち込んでるのが800位だが、撃ち込まれているからたまらないだろう。

そして陸戦強襲型ガンタンクの壁がじりじりと前進し、開いたスペースに控えが入り火力がますます……

約10000匹いたこの広間もとうとう駆逐された。

(こいつが門級か……)

目のまえには横杭を塞ぐような形でBETAがいる。

もっとも隔壁としているBETAであるので無害ともいえよう。

BETAの死骸を排土板つけた、補給済みの陸戦強襲型ガンタンクが、

除去作業に壁に死骸を寄せ広間のスペースを広げる中、
チューリップを呼び寄せ、

次の広間を目指す為に、隔壁である門級の破壊作業にはいる。

カオルは、撃震の両腕を高周波ブレードに変え、

一気に門級の天井近くの部分に突き刺すと、そのまま円をかくように門級の壁側ふきを360度切り込みをいれ…

また天井まで切り込みが繋なげ…

機体で少しおすと…

門級のくり抜いた部分が奥に倒れていく…

すると、横坑内部にBETAが詰まっていたが、門級の身体に潰されていく……

そこに控えていた陸戦強襲型ガンタンク達が砲火をはなつ。

横坑には大体2000あまりのBETAがつめていたが、程なく駆逐され…

そして主広間入口の門級をまたもやり抜き作業に入る。

「次の広間を突破し、横坑をぬけると、目指す目標の反応炉だ！！
いいか：ここまで来たんだ：凡ミスで死ぬ事は赦されない。
各機、突入、砲撃準備！！」

360度円くり抜いた隔壁をおす……
ゆっくりと隔壁が奥に倒れてく……

主広間に突入した。

そこには地面をうめつくすBETA、約20000匹が詰っていた。
いつせいに突入、ラインを形成し陸戦強襲型ガンタンクが砲火をは
なつ……

そこに襲い掛かるBETAども……

流石に最後の広間だけであって、つめているBETAの数は多い。

対してこちらは門級が倒れたスペースしかない。

ラインを形成できたのが500機、残りは横杭の中から出れない……
というか、補給に戻る通路部分は絶対に空けておかないと……だった。

また頭上から、どんどんBETAが落ちてきて襲撃してくる。

片っ端からブレードで肉片に切り刻む。

(対空車両作っておくべきだったか……)

それ程頭上からの襲撃が多かった。

が幸い、帝国軍機は横杭内対応、横杭内部に処理仕切れず侵入してくるBETAに対しては、対応し処理しきれている。

広間内に突入した有人機はルナチタニウム合金製の機体なのでたかられても機動に支障がでる程度、

それ程心配はしないが、流石に視界が埋まる程降ってくるBETAはうざかった。

各々の機体のブレード、ザクマシンガンで駆逐していく。

壁組の陸戦強襲型ガンタンクは、天井に張り付けない、中型以上のBETAをメインターゲットとして、両腕からの砲火を絶やさずに少しずつ前進している。

1両分のスペースが空き、そこに中列の陸戦強襲型ガンタンクが機体を滑りこませる。

壁組の陸戦強襲型ガンタンクが弾切れになり、高速バックで小型BETAをキャタピラで踏み潰しながら横杭内部に潜りこむ。

すぐに空いたスペースに中列から別の陸戦強襲型ガンタンクが入り

込む。

中列の空いたスペースに後列のがはいりこみ、

その後列のスペースに横杭内に待機してたのが入り込む。

だんだん壁組が前にすすみ、火力が増す。

だんだん頭上からの襲撃してくるBETAの数が減ってくる。

そして、とうとう主広間内のBETAの最後の1匹が死滅した。

すぐさま排土板を装備した陸戦強襲型ガンタンクが除去作業に入る。

陸戦強襲型ガンタンクは殆どBETAの返り血を浴び、

また広間内に突入した有人機も紫色に染め上がっていた。

「ふう……これで2万か…帰ったら少し戦略見直しかな……」
思わずぼやく位だった。

やはり頭上から襲ってくるBETAがウザいすぎた。

（横杭内に、対応機がいなければ、怖いことになったな…）

主広間のBETA除去状況を確認しながら、大広間へ繋がる横杭の
門級のくり抜き作業にはいる。

機体をおし、横杭に突入するがBETAがさほどいない…

「主広間が最後の砦だったようだな……」

『みたいですね』

陸戦強襲型ガンタンクも警戒していたが、
100匹程度、まあ生産したばかりなのだろう……すぐに切られて
駆逐する。

そして、大広間に突入するとそこには反応炉、
いや頭脳級が鎮座していた。

『マスター1』

カオルは機体を反応炉に近寄せ、
機体の同化を解除し、反応炉に対し、

「イロウル」

反応炉を支配下においた。

「バルディエル」反応炉のスパイ作成した……

(うっし……完璧……)

「諸君！！佐渡島ハイブは、勢力下におさめた！！」

ウオオオオオオ

外部スピーカーより勝鬨の咆哮が上がる。

2001年9月24日午後20時35分

甲21号、佐渡島ハイブ異世界軍により制圧

………

カオル報告

佐渡島ハイブを入手しました。

作者「やっと佐渡島ハイブ攻略だなあ…」

あ号「……とられたか…」

作者「あ、あ号、本編ではとられたの知らないからな、注意しろよ」

あ号「……わかって…る…が…すぐに…元に…戻る」

作者「あゝ前回の後書きのか…でも結局間に合わないだろ？」

あ号「……ふ…ふ…ふ…」

作者「まあカオルが救援送られてるのしらないからなあ…」

ナギ少尉「？なに？このきもいやっ」

あ号「……キモイ……orz」

作者「あ、こいつあ号つう地球上のラスボス」

ナギ少尉「ふん…ま、次回予告〱佐渡島ハイブ攻略後。……作者
サブタイトルセンスない！！」

第102話 佐渡島ハイブ攻略後 投稿日20110404

2001年9月24日22時

「親愛なる日本国民の皆様、皇武院 悠陽であります。長きにわた
り多大な苦難を強いている事、誠に申し訳なく思います。
ですが、本日はうれしいお知らせがあります。

長く私たちを苦しめていた佐渡島ハイブが陥落、人類の勢力下には
いりました！！」
放送を聞いていた各所で喜声があがる。

「まだまだ長く苦しい時は続くと思われませんが、この放送でもって、
9月24日をハイブ陥落できた日の国民の祝日といたします。
なをこの時間ですので、明日は臨時的に振替休日とします。
明日は一日お祝い致しましょう。私たちの友に対して……」

日本帝国全土に、お祝いの嵐が吹き荒れた。

普段ではそろそろ店仕舞いをしてた店もシャッターをあげ、
ただ酒を振る舞うしまつ。

夜なのに、街はいきなり徹夜の祭騒ぎになった。
そして眠らない祭はまだまだ続く……

佐渡島ハイブでは撤収作業、また施設設営準備、
ハイブ内から運び出されたBETAの死骸焼却作業が続けられてい
た。

帝国軍機が、海上で待機していた揚陸艦に、

続々と歓迎されながら乗り込んでいく。

異世界軍の方は、

戦闘で使われた機体は一回横浜白稜基地に帰還、

戦闘未参加の1個連隊の陸戦強襲型ガンタンクが、

横浜白稜基地より下駄で飛来してきて、陸上部分の警備にあたる。

またミサイルビクトレー4隻及びザメル連隊、T-850連隊も警備にあたる。

「ではレビル將軍」

「うむ、あとの警備は任しておけ」

「よろしくお願い致します」

カオルは最後の便として横浜基地へと帰還する。

2001年9月25日午前2時過ぎ…

カオル達が横浜白稜基地につくと、

真夜中にも関わらず、数多くの職員や兵士達が歓声をあげ、出迎えてくれた。

何しろ通常兵器による初のハイブ攻略、占拠を成し遂げたのだから

だった…

カオルは戦艦出入口から格納庫に機体をとめ、ハンガーに向かうと、

「カオルさん」「大将」「カオル!!」「やったねえ」「いやああんた偉い!」

等多数の歓声に迎えられて抱き着かれた。

「マスター!!めでたいからとっておきの日本酒でも」

酒が配られ…

「え〜では僭越ながら、佐渡島ハイブ攻略を祝しまして…乾杯ー!」

「乾杯ー!!」*多数

みんな喜び旨そうにコップに配られた日本酒を飲む。中にはちびちびと…

まりもさんも旨そうに…

その後が、戦闘では負傷しなかった人員が負傷し、一転して修羅場となった事になる。勿論全力で押さえ込みにかかり…

(こんなに酒癖わるかったのか…)
と反省するひと幕がありました。

そして日中…

基地内部被害報告書及び戦闘報告書を受け取り、
また佐渡島の基地化を進めようとしていた。

先に、多目的輸送艇で佐渡島ハイブにチューリップで移動し、
作業事務所をたちあげる。

まずは、仮設核融合炉プラス重力波アンテナを設営し、
エステバリスで、
主縦坑を拡張し、戦艦エレベーターを3基600m*400m*4
00mをできるように拡張を命令をする。

作業用ザクタンク、コバツタ等は、不必要な横坑を埋め、また…広
間の戦艦ドック用に、拡張、
警戒用地上設備、飛行場、MS用地下格納庫、地下ハンガー、等な
ど横浜基地を参照にすすめる。

勿論、地上の地面をならす事も忘れてない。

また地下のG元素を約束通り帝国に渡すため採掘作業に、作業用ザ
クタンクをまわしておく。

(けど作業用のがやっぱり足りないかな?…)

一通り命令したあと、輸送艇で戻り、
エステバリスを追加で19機、作業用ザクタンクを20機注文して
おく。

とりあえず手配を終え、
戦闘報告書を確認し始めた。

陸戦強襲型ガンタンクは修復済みだが、擱座、中破が流石に目立つた…

タンク式の宿命だが、駆動部分に真横から突っ込まれると、
BETA自身を巻き込み駆動不能 擱座や、
擱座後に集中攻撃、砲身が曲がる等戦闘不能中破、
等がやはり数十機単位であった。

勿論ヤドカリが脱出後、別の機体が後ろに押し出し、邪魔にならな
いようにし、
暫くしてから作業用ザクタンクにより回収、後方修理、再出撃の流
れになったとの事だ。

なので、機体数の実質的ロスは、今回はなし。

その他弾薬等の在庫が、
煙幕弾残り

陸戦強襲型ガンタンク用セット
ザクマシンガン弾装

また帝国軍からの報告書もあがってきてる。

今回の戦死者0

負傷者はいるものの、陸戦強襲型ガンタンクが庇ったりした為、戦死者0…という数字があがってきたのだった。

また報告書には庇ってくれたパイロットに対してのお礼も…と記載されている…

（とりあえず反省事は、頭上への対応だよな…対空型でなく、垂直方向ねえ…

確かドイツの戦車参照にできそうだなあ…

が急降下爆撃は第二次世界対戦で既に役目おえちゃったからなあ…自作するしか…または、ティエレン対空型かな？

…ま、次のハイブ攻略までに仕上げりゃいいか…）

…ハイブ内頭上対応型は後回しになった模様です。

2001年9月26日

カオルは機上の人になっていた…国連緊急会議に出るために…報告とオルタネイティブ4の続行、またこの後の方針についてだった。

「あ〜っはっはっは こんなにワインが美味しいの始めてだわ」

「副司令…飲み過ぎっすよ…会議でるんすから」

「大丈夫〜〜ヒルダからもらった、アルコール揮発剤飲めば一発よ。」

それに00ユニットも目処がたったしい〜」

「お、半導体の件解決したんです？」

「そうよ〜」

ターミネーターの世界のつて優秀だったわねえ」

「楽しみにしてますよ」

「オルタ5…どうしようかなあ〜」

と鼻歌をだす程かなり上機嫌な副司令だった……

〓〓 国連緊急会議 〓〓

「異世界軍、渚力オル大将」

カオルは呼ばれて壇上にあがる

「既に皆様にはニュースが流れておりますが、

2001年9月24日佐渡島ハイブを攻略、

我が軍の勢力下におきました事を報告致します」

オオオザワザワ

会議場内がどよめきにあふれる。

「議長、つきましては、以前の会議決議通りにオルタネイティブ5の永久凍結、及びオルタネイティブ5施設の接收を提案致します」

「わかりました。決をとりたいと思います。

渚力オル大將からの提案、オルタネイティブ5の凍結、及び施設の接收…賛成の方々は起立お願いいたします」

続々と、席から立ち上がり、アメリカ以外満場一致の結果になる。

「賛成多数の為、オルタネイティブ5関連施設は、異世界軍の管理下になります」

「皆様ありがとうございます」

深々と礼をするカオル…

「この後の我が軍の展開予定ですが、まずは鉄原ハイブ攻略で大陸への足場とし、重慶ハイブ、敦煌ハイブとオリジナルハイブを目指してのばしていきます。

そこで提案なのですが、各ハイブを攻略後、前線基地、中継基地として、使いたいと思っておりますので、ハイブ周囲15kmの土地を攻略後我が軍への委譲を提案いたします」

ザワザワ議場が騒がしくなる。

フランス代表が質問挙手してきた。

「フランス代表」

「カオル大将、ハイブの前線基地化によるメリットは？」

「基本BETAは、各ハイブにある反応炉で、エネルギーをもらい行動をします。」

また、ハイブが生存してるなら、すぐ隣りにハイブを作りません。この事から、各ハイブを破壊せずに、再利用し、BETAを誘引、殲滅する基地化を目指すつもりです」

「成る程わかりました」

統一中華代表が挙手してきた。

「統一中華代表」

「ハイブ内部にあるG元素は…？」

「我が軍には必要ありませんので、それについては…？」

「G元素の権利を放棄するなら、国連軍の管理下におかれます」

「当該国にも渡すように提案いたします」

「それについては後ほどですね」

「はい」

統一中華代表の質問は以上だった。

「議長」

大東亜連合代表が挙手してきた。

（次の鉄原ハイブの所有国だよな）

「大東亜連合代表」

「地球平定できた以降の話もしてもよろしいでしょうか？」

「カオル大将」

「ですね、所有国についての権利ですから、どうぞ」

「地球平定以後、各前線や中継基地はどうされるのです？」

「自分としては、ある程度撤収、数を減らして太陽系戦にシフトするつもりです。」

「ですので、残ってもらいたいなどは、各国間の調整になります。」

ザワザワ会議場内がざわめき始めた。

「まあ基地化移譲を承認いただいたあと、次のハイブ攻略までに決まっていれば問題ないかと。」

「鉄原ハイブですよね？」

「はい。」

「時期は？」

「最短一ヶ月後、長くっても三ヶ月後の目処です。」

大東亜連合の質問は以上だった。

質問は出揃った模様だった。

「各ハイブ攻略後の基地化の為の異世界軍への土地権利移譲、永久使用か戦後撤収かは次回ハイブ攻略までの調整…」

「決議をとりたいと思います賛成の代表は立席にてお願いいたします。」

アメリカも賛成に回り、満場一致となる。

「議長、難民問題について異世界軍に質問ありますが、よろしいですか？」

「どうぞ」

「いつ頃我が国内の難民が……になりますでしょうか？」

「カオル大将」

「現状、毎日500便のシャトルを飛ばして毎日11万人移住しますが、
神奈川の管制は、これ以上は無理ですので、
新規シャトル施設を作らないと駄目です。
コロニー自体はできてますが、輸送面で……ですね」

「新規施設ですか？」

「空港整備関係施設含めて25km*25kmの更地、また高層物件の存在でしょうか……」

「わたしの所に用地がありますか？」

オーストラリア代表が発言してきた。

「我が連合に是非とも」

アフリカ連合代表が…

「我が国にも」

アメリカ代表が…

「とりあえず佐渡島の基地化すんでからの話になりますので、
…後ほどにでも」

いきなり収集つかなくなりそうだったので…カオルの番を終わら
してもらった。

2001年9月27日夜

横浜基地に着陸する再突入駆逐艦より、カオルは降り立ち、

ハンガーに向かうと…

「マスター医務室より、ニコル・アマルフィさんの準備整ったって
」

（お、復活したか）

「うっし、じゃあ…いくわ」

と医務室に向かう。

室内にはいり…

「始めましてニコルさん」

「カオル大将ですね？こちらこそ、よろしくお願いいたします」

いつてる合間に諸々手続きはすんでた模様だった。

「じゃあ早速ですが、特殊任務として協力をお願いしたいのですが…
…ちよつと待って下さいね」

で内線でヒルダさん呼びだすと…

『あん…こらあ駄目じゃない…電話中なんだから…
えつと、新しい子ね？…あっ…明日にして…』
ツーツーツー

（確認してよかったああ）

吸収中だった模様だったので、

ニコル君には悪いが、明日入隊という形になりました。

………

カオル報告

作業用ザクタンク20機追加

作業用エステバリス19機追加

オルタ5 接収

余計な誘致フラグたった模様

絶対にまりもさんには酒のまさない!!

カオル「ふっつかれた」

作者「お疲れ〜とりあえず後始末が大変だね」

カオル「だな…あと酒癖もわかつたし…」

作者「聞いてなかったん？」

カオル「ああ……しかしまあ全力で押さえ込む事になるとは……
結婚したあと晩酌は禁止だな……」

2064

作者「要注意だね〜」

カオル「……………」

作者「でもって、まりもちゃん目の前に一升瓶をおいとくと……」

カオル「やめてくれ!!!まじで」

作者「ん…やめとくわ」

カオル「作者なんかやりそうだなあ…」

作者「ふふふ…」

カオル「と次回は？」

作者「……ちとサブタイトルどうしようかなあ？で悩んでいます。
あるものが、なんかメインになりそうな…」

カオル「つうわけで次回、題名未定！！let's
”世界扉”」

2001年9月28日

朝起きて、ベットに寝てるまりもちゃんを起こさないように抜けだす。

そそりで嫌われた！

と、泣き出したので慰めている内にインした訳だった。

シャワーを浴び汗を流して出ると、

まだスヤスヤかわい寝顔だったので、

軽く顔を髪でくすぐって起こした。

クシユン

むずがりながら起きたので、軽くキスをして部屋を出る。

ハンガーにいき、11号にピックアップの件を質問して早速世界扉を唱える。

〓フルメタル・パニックの世界〓

セーフハウスにいき、

ピックアップ対象の家族の方を世界扉を唱えて送り出した。

「今のところ推移は？」

「まだナムサクで当該人物は現れてません。ASアリーナは開催されてます」
3号と思われるが答えてくれた。正直彼らは見分けがつかないため……」

東南アジア、3国の国境にある町…ナムサク。
フルメタル・パニックの世界でのみ発展した町だ。

カンボシア、ラオス、タイの国境に面するこの町は交通の要所にあり、
国連主導のもと停戦合意したが、出鱈目な停戦条約の為、
今だにこの町はどの国の軍も条約の為入ってこれず、実質的な支配はうけてない。
が交通要所の為、人や金はどんどん入ってくる…
金が支配する…そんな町だった。

「ASアリーナねえ……」

ASアリーナ、軍用から払い下げられたアームズスレイブによる格闘バトル。

火器は一切つかわないガチンコバトルだ。

勿論軍用のアームズスレイブをそんなバトルに使うなど、到底認められない。

あくまでも非合法バトルだが、ナムサクの町の警察も黙認し、一躍町の観光資源となっている。

(ついでだから見てみるかな？参考に……)

「と、じゃあナムサクよってから帰るとするわ……じゃ、引き続き監視よろしく」

「イエス・マイロード」

カオルはフィリピンにあるセーフハウスをでると、
一路ナムサクへと向かう。

ナムサクの町、じわじわとする熱帯の町……

「あぢい〜」

ブワツと汗が出る。

たまらず露天にある服をかって、近くの安宿に休憩ではいり、
シャワーを浴び着替えて、チェックアウトして、ビアバーでシンハ
ーを頼む。

グビッググビッググビッグ

「プハー、やっぱシンハーはうます」

露天で冷やタオルを買い、一路町の中心にある旧サッカースタジア
ムを目指し、歩いていく。

前の方から、民間に払いさげ、武装ではなくクレーンをつけたサベ
ージが接近してきたので、道中からよけた。

そこに……

ムニユ

「はい、お兄さん。よってっつてえ」

「ん？」

「チン○ン○まいよ」

（あ、あれ系か…）

彼女が出てきた店をみると、女性達が手招きをしていた。

「すまんね〜また今度なあ〜」

「え〜そんな事いわず〜」

「すまんね」

その女性は渋々と胸を押し付けていた腕から離れる。

まりもちゃんや、イッシーと経験した事により耐性できてたから良いもの…

耐性なかったら誘われるままに…だったろう。

と、いい臭いがしてきた…

（へえバーガーあるんか…）

看板をみると、ビーフバーガーとかかかっている。

（旨そうだなあ…かってくか…）

「おばちゃん一つ!」

「50セント」

「あいよ」

観光客だったのでアメリカ\$で要求されたので支払った。

屋台の鉄板の上でビーフパテがジューっと焼く。

出来立てを野菜とパンで挟み、

「まいど〜」
と手渡された。

カオルは食べ歩きながら、アリーナに向かう。

市場には、アームズスレイブのパーツが見えはじめた。

世界各地からとりよせた新旧いろいろなパーツ…

チエコ製のマッスルパツケージ、

アメリカ製冷却ユニット、

フランス製コアプロセッサ、

イスラエル製AS操縦シート、

またAS手首等…

まさにお金を出せばオリジナルASつくれまっせ状態の市場だった…

(ほお／＼やっぱり生の市場は迫力が違うなあ……)

よりどりみどり：中には、どっかの軍だろう。
制服姿で店主とひっしに交渉している姿もみえる。

ここに並んでないASパーツは、火器や弾丸位なものだった。
(稼いで、次暇あつたらくるかな?)

まさにASアリーナを中心とした異様な町だった。

そしてお目当てのASアリーナが見えてきた。

カオルは観客席に入ると、そろそろ第二試合が始まるとの事で、賭け屋前では真剣に殺気だっていた。

(オッズは赤：青が1、5：13、6か……)
頻繁にオッズボードが書き直されてるが、
賭けチケットをかうシステムらしい。

(青が新チームか……)

という事で20\$の100枚束を5つを青チームにはると……
オッズが変わり、1、6：10、0になった。
賭けチケットを受け取り、スタンド席に行く。

場内はほぼ満席の状態で、第2試合を今か今かと待ちわびている観客ばかりであった。

「レディースアンドジェントルメン、大変お待たせしました。それでは第二試合、両選手の入場です」

ウオオオオ

割れんばかりの歓声が鳴り響き、観客は立ちはじめた。

アリーナの青に塗られたコーナーから塗装がはげ、ぼろっちいサベージがはいつてくる。

(げっ……)

カオルはお金がパーになるのを感じたろう…

「殺せ！殺せ！殺せ！殺せ！」
のコール、凄まじい歓声とともに、赤コーナーより虎縞のサベージがはいつてくる。

場内スピーカーカーよりアナウンスが流れてくる。

「青コーナー、当競技場初参戦のニューフェイス！」

チーム、ライトニング！パイロット、アキラー・ヒビキ！」

ウオオオオ

「チームは初参戦、パイロットのデータはなし。全くのダークホース！」

何処まで食いつけるか？健闘を祈りましょう！」

そして、赤コーナーの紹介に移る。

「赤コーナー、チーム、タイガー！パイロット、タガー・ジョー！」

ウオオオオ

「殺せ！殺せ！殺せ！」
のコールが盛り上がる。

「お客様方の知つての通り、前は殺人による反則負けがありました。
た。」

対戦成績は5勝2敗。さあ今回はどうなるか？」

両機がアリーナのスタートラインに対峙する。

エンジンの出力があがり、唸るような排気音をあげだす。

両機が排気口からの排気で巻き上げられた砂埃のなか、姿勢を下げ…

サイレンが鳴り響き、街中で使用されてるタイマー式の信号が点灯し、カウントダウンを告げ始めた。

虎縞の機体から、

「初試合で俺とは不運だなっ！！勝ち星は頂くぜベイビー」
と挑発してくる。もう一方の機体は無言だ…

「殺せ！！殺せ！！殺せ！！殺せ！！」

ゼロになり一際大きなサイレンが鳴り響き、

電光掲示板にはスタート！！の文字を表示させた。

二機のサベージが瞬発力使い互いに突っ込んでいく。

ガン！！

虎縞のサベージのタックルが塗装剥がれまみれのサベージのキック
をかわしきまる。

塗装剥がれは後ろに吹っ飛ぶが勢いを殺し、再び突っ込んで八文字キックをかまそうとするが、虎縞にかわされ、体勢を崩されたところに横からハイキックが決まり、盛大な音を立てて倒された。

(チヨットオオオオ!!)

まさに試合は初っ端から一方的、ある意味鉄板のオツズの意味を打ちつけられた。

何しろ、戦闘機動に入ってから動きが違う…

虎縞はかなりの良い状態のパーツを使っているのが一目でわかった。

つまりあて試合…

(オワタ…)

とお金をあきらめていると…

ウワアアアア

「おっ!!」

かなりでかい音がし、マグレあたりだったキックが決まった部分から、白い水蒸気がブワツと大量に吹き出す。

虎縞はラジエーターが損傷し、温度超過に陥り…自動停止モードになったのだらう膝をつく。

それを見た審判が、勝者を告げる試合終了のサイレンを鳴り響かせ、

「勝者、ライトニング!」

審判はつげる。

飛び交う罵声と動揺、

賭けチケットが宙を…大穴だったのでかなり舞う。

（あぶなかったあ…けどもうけもうけ）

換金すると、まだまだ試合が続くスタジアムを後にし…

「世界扉」

「B55ハンガー」

カオルは、元の世界にもどると、ハンガーディスクに戻った。別世界に取得しに行く前に、佐渡島ハイブへの防衛配置プランをやっておいく。

主力の陸戦強襲型ガンタンク2個師団をとりあえず移動し、格納庫拡張次第、随時増援を送る体制にし、常駐2000機にする予定だ。

（コキブリホイホイだと…あと小型種用かな？烈火は…まだ人員が足りない、卒業もしてないし…T-850は通路内警備等に回すから…あつ！）

忘れてました4足ハンターキラール君。すっかり放置してたもよう…

さっそく呼び出して調整作業にはいる。

現状M61A1（ガトリング）から、ガンパレ世界＋SEED技術入れたレールガンに変更。
これにより、装弾数に余裕がでた。弾はブリット為に火薬部分か、
いらなからだ。

（……手というかアームガンつけるか…）

ガトリングガンだと面には心配はなかったのだが…
心配出てきたのでアームレールガンを追加しました。

「どつ？」

大丈夫の意をかえしてきたので、さっそく生産、
とりあえず500匹を送るよう調整します。

仕様…

正式名称ハンターキラーレッグTL-5改

装甲ヒルダ装甲に変更

武装20mmレールガン1門

6mmサイドアームレールガン4門

いずれも1秒間2発

パワーセル、変更なし

OS調教済み、変更なし

（ん……こんなもんかな？）

一通り手続き済んだ後…
ニコル君を呼び出してもらった。

「じゃあ11号、ニコル君を隊長に紹介したら、また別世界いくからよろしくな〜」

「いってらっしゃい〜」

とニコル君をヒルダさんの執務室に案内をする。

「ところで隊長さんって…」

「女性技術士官だね〜ヒルダ・ビダンさんっうんだけど、我が軍の頭脳っう存在だね。
ま、C-01自体も実験中隊っう感じだし」

「は、はあ……」

「おっ、ついた」

「コンコン」

「ヒルダさん〜」

「いいわよ〜はいって頂戴」

シユン

ニコル君を連れてはいつてく。

「こちらが君の隊長にあたる、ヒルダ・ビダンさん。君の任務は隊長さんに協力する事。いい？」

「はいっ！！わかりました。ヒルダ・ビダンさん始めまして。ニコル・アマルフイといいます」

「よろしくねえ。じゃあ早速だけど……」

「じゃああとよろしくお願いしますね」

と…部屋を出る。

(ニコル君Cherry卒業式だな……)

後ろから「あつそんなああー!!」

(もう始まつてる……)

「さてと…」世界扉」

カオルは世界をわたる。

「ガンダムSEEDの世界」

CE0072 3月15日

日付からみてわかる通り…

戦後ユニウス条約が結ばれた後あたりだった。

まずはカオルは戦死者リストをダウンロードしようとしていた。

何しろ、これからいく場所がほぼ全滅…な戦場ばかりで少しでも有能なのを…

と考えてたからだ。

まずはアイルランド島にある地球連合軍本部、ヘブンスベースを指す。

カオルは基地内部に侵入、無事に人事局からデーターをダウンロードする。

そして、地球上からでも見えるプラント群の首都、アプリリウス・ワンを目指した。

二日目

まだ到着はしてない…けど段々とでっかくなっていく砂時計が見える。

三日目

カオルは、L5にある、プラントの首都につく…

地球上からでも目視できる大きさのコロニー群からなる中での首都だった。

勿論、最初に違うコロニーに取り付いたのは内緒だった。

プラントのコロニーは円筒形でなく、砂時計…

中心にある宇宙港を軸として、両端を回転させ重力を発生させる。

（円筒形の方が使う資材すくないんだけどなあ……）

その為両端しか居住できなくなり、コロニーの数に比べ総人口約1

500万人…

約地球75億人…

よく戦争をふっかけたな…とある意味感心はしている。

さて人事局にはいい…データをダウンロードして……

「世界扉」

別世界経由で時間軸を移動する。

C.E.0071 5月7日

カオルは衛星を打ち上げると、ザフトの宇宙艦隊を探し始めた。

ほどなく…総数150隻越えにも及ぶ宇宙艦隊、他降下カプセル輸送艦が10隻同行していたのが見えてきた。

（おゝ壮観だなあゝさて…どれだ？）

片っ端から艦艇に取り付き、目指すターゲットを探しまくる。

さがしているうちに、四日目になってしまった…

CE0071 5月8日

宇宙空間にいるジン、シグーが次々と降下カプセル輸送艦の下部にある、

突入カプセルに乗り込み、カプセルが閉まっていく。

一方、オストヴァルトでは…

『総員、格納庫切り離し準備。メンテナンスクルーは、エアロック内部に退避せよ』

ローラシア級の機能、格納庫の大気圏突入機能を作動しようとしていた。

『オペレーション・スピットブレイク、大気圏突入部隊、突入開始時間まで残り10分』

…

「艦長さん。ここまでありがとうございます」

『貴官らが地上におりるとさみしくなるのう』

「くすつ。お尻さわれなくなるからです?」

『なっ!!--ここで言うことなかるうに!!--!』

「隊のみんなからもセクハラじじいって呼ばれていますよ」

『くうく……間もなく降下だ！健闘をいのる！』

「はい！！」

『格納庫切り離します、貴官らに天の加護を！！』
ガコッ
振動が伝わる。

…
『第一外装剥離、減速マツハ、角度良好、強制冷却停止まで28秒。
空力制御開始』

「アルファワンより、各機、薬室装填を確認」

『ブラボーツー』

『チャーリースリー』

『デルタフォー』

『エコーファイブ』

『フォックトロットシックス』

「第二外装剥離。地べたをはいずる奴等に、思いつきりキツイのか
ましてやるのよ。

暖流層突破。減速、0.9マツハ。冷却停止。姿勢良好。
我らに天の加護を。降下点、座標追尾固定。

さあ、行くよ！」

『ザフトの為に！』『ザフトの為に！』『ザフトの為に！』『ザフトの為に！』『ザフトの為に！』

ガコン

格納庫の扉が跳ね上がり各機空中に踊りでる。

……

カオル報告

ハンターキラーレッグT L - 5 改 5 0 0 機…佐渡島配備予定

カオル「もうけもうけ」

作者「ASアリーナかあ…いいなあ」

カオル「ムエタイがあじゃない」

作者「ムエタイか、あれチケットじゃないんだよね……」

カオル「へっ？」

作者「オッズでやりとりして、口約束…よく覚えてられるな…って…」

カオル「口約束？マジ？」

作者「マジ……」

カオル「どの位はったの？」

作者「……チキンだからガイドさんの説明のみだったさ……」

カオル「なる……」

作者「やっぱりパチンコや競馬が良いね……東京カジノいつになるやら……」

カオル「東京カジノかあ……」

作者「こっちのリアルは今大変だからなあ……」

カオル「俺がリアルにいけたらねえ……」

作者「ザクCが欲しいね、あとベースジャバーも……」

カオル「ま、気を落とすネタはやめといて次回予告？」

作者「作者、投稿で使っている携帯根元から、ポツキリ逝き慣れない携帯借りてます」

カオル「それ説明してたじゃん」

作者「なので、次回タイトルは未定ながら、オペレーションスピットブレイクに参戦8日までに仕上がるか！？
頑張れ作者！の巻」

カオル「自分でいってるし…」

作者「うるせえ！お前のシーン作っててシャワー浴びようと置いたら、ひゅーんパキツとなつたんだぞう！」

カオル「作者が逆ギレ暴走気味なので…再見」

ジョシユア……無人の司令部の観測モニターに、接近する反応が多数映ってる……

そして防空圏内に反応が入り込み、自動的にアラートが鳴り響く。

ザフト軍輸送機ヴァルファウからの空挺で多数のシグー、ジンが舞い降りる。

迎撃せんと、ジョシユアの自動即応砲台群が砲台シャッターより上がる。

揚陸潜水艦より、バクウ、ザウトが踊りでる。

即応体制とっていた連合の水上艦船がゲートから出港し、迎撃にはいった。

そこに、制海空権を握ろうとカーペンタリア基地からでたディンの大群、

グウルにのったジンが襲いかかるうとしている。

そして…カオルがとりついてるザフト軍大気圏突入部隊の大群が、大地を目指して連合地上軍に襲い掛かる。

各種砲台がそれを迎撃せんとす。

また地球連合軍のブルドック、リニアタンクがゲートより飛び出して対空攻撃にはいる。

アークエンジェルでは…

「これで戦えと言うのも酷な話だけど、本部をやらせるわけにはいかないわ。」

「艦長！」

「総員第一戦闘配備。アークエンジェルは防衛任務の為、発進します！」

「そんなあ、キラも少佐も居ないのにどうやって…」

「補給状況は？」

「弾倉、燃料ともに予定量搭載されてます！」

「船外に通告、アークエンジェル発進準備！」

「主動力オンライン、出力上昇問題なし定格まで20秒、生命維持装置問題なし」

「CICオンライン」

「武器システム、オンラインFCS、コンタクト。磁場チエンバー及びペレットディスプレイ、アイドリング、正常」

「外装衝撃ダンパー、最大出力でホールド」

「主動力、コンタクト」

「エンジン、異常なし。アークエンジェル全システム、オンライン。発進準備完了！」

「総員、衝撃及び突発的な艦体の破壊に備えよ」

「前進微速。アークエンジェル、発進！」

船体に繋がってるブリッジがあげられ、アークエンジェルは進み出す。

「メインゲートへ回頭」

少し進むと右旋回し、水路をすすむ。本流にでると左旋回。

このままゲート出口を目指す。

「ゲート外に敵機反応」

「イーゲルシュティン起動準備、ゲートドア交わせ次第射撃開始」

そして、アークエンジェルがイーゲルシュティンを撃ちながら、メ

インゲートから出てくる。

「ウォンバット、バリエントてえ！」

「デイン2撃墜！」

しかし、メインゲートの外では更に敵機が襲いかかってくる。

「ミサイル6接近！」

「イーゲルシュテイン！」

「頼むよう…！」

「ミサイル撃墜しました！」

「他艦は？」

「ゲートより追加でできます。またゲートをまもる対空陣形です
」！」

「対空戦闘メインに！！」

「敵機接近！」

「ウォンバット、てえ！」

「ミサイル、来ます！」

「回避！」

「うわぁ！」*多数
被弾し衝撃がはしる。

「右舷フライトデッキ、被弾！」

「くっ状況！！」

「カタパルト使用不可、装甲剥離以外は大丈夫です」
「アークエンジェルは、ザフト優勢の戦場の中、
持ちこたえようとして奮戦をしている。」

「オレーグ、轟沈！」

「

「取り舵！オレーグの抜けた穴を埋める！」

「正面ジン、ディン！」

「ゴットフリート、てえ！」

「尚もディン接近！数6！」

「この陣容じゃ、対抗し切れませんよ！」

「くっそー！やられたもんだぜ司令部も！」

「主力部隊は全部パナマなんですか！？」

「ああ、そう言うことだね！」

「戻ってきて、くれるんですよね！？」

「こっちが全滅する前に、来てくれりゃあいいけどな！」

「ミサイル接近！」

「くうう！」*多数

一方カオルは、戦場を飛び回っていた。

ターゲットの部隊には発信機を取り付けていた為、見失う事はない。

まずは、アラスカ基地内部に侵入し、まだ出てない自走リニア留弾砲、リニアガン・タンクを発見し、同化していた。

自走リニア留弾砲…：ニュートロンジャマーさえなければ、かなり活躍できたらろうに…

不遇の車両であった。

（次は…っ…と…）

海上ゲートの方へ向かうと、繫留されてる高速潜水艦を見つけた…

（お ラッキー）

何しろ、プラントの包囲網を二度も、切り抜けているのだからさぞかし優秀なんだろう…

とある意味期待していた部分もあったのだ。

まだ繫留してあったのは偶然に等しい…という事で同化。

同化後、ゲートに向かうと、今まさに出航しようとしていたイージス艦ダニロフ級をみつけたので被害を被る前に同化した。

（ふーん）

同化してるとわかるが、一番最新型…水上艦では…と感じた。

まあ宇宙艦船に比べれば…だが…

（確かあとオーブ戦でファントムペイン用の、空母タイプがあったよな？）

とりあえず今現時点での連合はこんなものなので、離脱しようとする…

ゾノが襲いかかってきたのでついでに、何人が取得し撃沈間際に離脱した。

でたゲートはメインゲートで、まだアークエンジェルが奮戦しているのが見える。

(まだ時間あるよな?……うっし)

ゲート内部に突入し、地下深く潜ってゆく…

目の前には、でっかい円筒形のマイクロ波発生装置、サイクロプスがあった。

サイクロプス…原理は西暦1940年代の第二次大戦の殺人光線になる。

当時のレーダーアンテナの前を通ったら沸騰、死亡した事により、馬鹿らしくも研究を開始した訳だ。

結局射程等で失敗、

今ではマイクロ波は電子レンジや、レーダー等で使われ、

飛行場で時たま焼き鳥が発見されることになる。

ちなみに電子レンジに動物達を入れて作動しないで下さい!!

真面目に死にます!!

そのあなた、なに猫を入れようと!!

猫ちゃんの体内の水分が熱をもち破裂する前に死んじやう!!

え?濡れてるから乾かす為?

ドライヤーで乾かせ〜

と作者が解説暴走している内にカオルはサイクロプスを取得、とつとつ地上を目指していた。

お次は、ザフト地上軍をゲットしようとしていた。

(確かこの時期は…水中はいいか、バクウ系かな)

外にでてバクウを探し始めた。

(ゾイド…ゾイド…つと…いた!!)

足を止めてミサイルをゲート防衛隊に撃ち込んでる。

(チャーンズ)

バクウを難なく同化離脱した。

すると、一回り大きな四つ脚がかけていく…

(えっ!?!ラゴウ!!いたんかよ!)

カオルはもちろん取得するために追いかけてゆく…

「アークエンジェル少し前」

「第4ゲートに続いて、第3ゲート突破されました!」

「そっちの防衛隊は?」

「……艦船撃沈、防衛部隊も沈黙、全滅だと思われます」

「吸収できないのね…基地内防衛隊に警告、生きていればね」

「了解」

「ミサイル多数接近！」

「イーゲルシュティン！」

「間に合いません！来ます！」

「うつつ！」*多数

「バリエント、1番2番沈黙！」

ミサイルが被弾し貴重な武装がまた一つ反応なくなる。

「艦の損害率、30%を超えます！」

「イエルマーク、ヤノスラフ、轟沈！」

「司令部とのコンタクトは？」

「取れません！どのチャンネルもずっと同じ電文が返って来るだけ」

ですよ！

各自防衛線を維持しつつ、臨機応変に応戦せよ、って……」

「既に、指揮系統が分断されています！艦長……これでは……」
「うわああ！」*多数閃光がはしる。

「パナマからの救援隊は？」

「全然何にも見えねえよ！」

「ミサイル来ます！」

ダメージアラートが鳴り響く……

そして……

「友軍機接近！被弾している模様！」

「え！？……着艦しようとしているの！？」
スクリーンに被弾した友軍機が映し出される。

「そんな無茶な……」

「整備班！どっかのバカが一機突っ込んで来ようとしているわ！退避！」

「友軍機、カタパルト侵入！！」

「とりあえず大丈夫みたいね？パイキヤあ」

「またもや振動がはしる。」

「後方のディンからです！」

「イーゲルシュティン！」

すると……

「艦長！」

とフラガがブリッジに飛び込んできた。

「う…少佐！あ、貴方一体何を！？転属は…？」

「そんなことはどうだっていい！それより、すぐに撤退だ！」

「え？」「はい？」

ブリッジクルーが一斉にフラガ少佐をみる。

「こいつはとんだ作戦だぜ！守備軍は、一体どついつ命令受けてんだ！」

「ええ…？」

「ミサイル来ます！」

「ちよとまって！イーゲルシュティン！」

「駄目です！」

「うつつつ！」 *多数

「いいか！よく聞けよ！本部の地下に、サイクロプスが仕掛けられている！」

作動したら、基地から半径10kmは溶鉱炉になるってサイズの代物が！」

「ええ！？」

ブラガ少佐のヤバい話が続く…

「この戦力では、防衛は不可能だ！パナマからの救援は間に合わない！」

やがて守備軍は全滅し、ゲートは突破され、

本部は施設の破棄を兼ねて、サイクロプスを作動させる！

それで、ザフトの戦力の大半を奪う気なんだよ！それがお偉いさんの書いた、この戦闘のシナリオだ！」

「…うわあ！」 *多数対ミサイル管制もできないほど…

「そんなんっ！！」

「俺はこの目で見てきたんだ。司令本部は、もう蛻けの殻さ。

残って戦ってるのは、ユーラシアの部隊と、アークエンジェルのように、

あっちの都合で切り捨てられた奴等ばかりさ！」

「えっ！あ…あぁ…」

「俺達はどこで死ねと！？そう言うことですか！？」

「撤退したことを悟られないように、奮戦してな」

「ええええ！」 「くっ…」 「あぁ…」

「…、…ついつのが作戦なの…？」

「え？」

「戦争だから…私達軍人だから…」

「そう言われたら…そうやって死ななきゃいけないの…?」

「…ミリイ…」

「くつう…」

『こちら第14戦車隊！援軍を請う！』

援軍を！あ…うわあ！』

マリユー艦長の顔つきが変わる。

「ザフト軍を誘い込むのが、この戦闘の目的だと言うのなら、本艦は既に、その任を果たしたものと判断致します！」

尚これは、アークエンジェル艦長、マリユー・ラミアスの独断であり、

乗員には、一切この判断に責任はありません！」

「そう気張るなって」

立ち上がると…

「本艦はこれより、現戦闘海域を放棄、離脱します！僚艦に打電！我ニ続ケ。」

機関全速、取り舵、湾部の左翼を突破します！」

「脱出もかなり厳しいが、諦めるな。俺も出る」

「少佐…」

「心配しなさんな、忘れた？俺は不可能を可能にする男だってこと」

フラガ少佐が格納庫に走りだす。

「整備班！フラガ少佐が出る。スカイグラスパー用意して！」

『もうやっていますぜ！』

…
「スカイグラスパー、発進どうぞ！」

左舷カタパルトからスカイグラスパーが空に踊りでる。

「なんとしても突破するわよ！！！」

アークエンジェルがメインゲートから離れ、

またゲートを守備していた艦艇の多数がアークエンジェルに続いた。
その為…

「メインゲート！！陥落です！！！」

「ミサイル接近！！！」

「回避！！！」

「っ！後方より、デュエル！！！」

「ええ！！」「やあ…！！！」

ブリッジ内に天敵デュエル接近に緊張がはしる。

「デュエルからミサイル！！！」

「イーゲルシュティーン！！！」

しかし被弾し

「うつ…！！」 *多数

「艦長！！！」

「取り舵20！回り込んで！」

「10時の方向にモビルスーツ群！」

「クーリク、自走不能！」

「ドロ、轟沈！」

「うわあ…」「あーっ！」

「64から72ブロック閉鎖！艦稼働率、43%に低下！」
深刻なダメージを食らう。

「ううわああもう駄目だああ！！！」

「落ち着け！バカやろう！」

「ウォンバット！てえ！機関最大！振り切れえ！！！」

「推力低下…艦の姿勢、維持できません！」

艦のブリッジを狙い…ジンの突撃砲が…

「あ…！」「い」「うあ！」「あ…ああうう…」「くっ！」

カオルが、ラゴウとの追いかけてこし、なんとか取得したあと、
時間を確認する為にアーケエンジェルを探しにくると…

大天使が、白い巨体から噴煙をあげながら…沈みかけている様子が見えた。（うわあ間に合うんかよ…）

注目してなかった為、今更目についたのだが、その巨体はあと一息
で墜ちるだろう…

そこにとどめををさそうと……

バシューー

上空からビームが打ち込まれ、とどめをさそうとしてた、ザフトのMSの武装を吹き飛ばした。ブリッジを守るように舞い降りるフリーダム。

(間に合ったか…ストーリー変わったかとヒヤヒヤしたよ……さてそろそろか)

カオルはサイクロプスに備え、ターゲットを確認し、取り付く為急いだ。

「アークエンジェルブリッジ」

『こちらキラ・ヤマト！援護します。今のうちに退艦を！』

フリーダムより、アークエンジェルに呼びかけがはいった。

「ああ？」「キラ…」「キラだよ！」「キラ…君…？」

そこにジンが襲いかかってくるが…フリーダムのハイマツトブーストで、次々とザフト側の武装等が吹き飛ばす。

『マリユーさん！早く退艦を！』

威力に呆けてたマリユーさんが…

「あ…いえ…あ…本部の地下に、サイクロプスがあつて、私達は…
囿につ…！」

作戦のなの！知らなかったのよ！

だからここでは退艦出来ないわ！もっと基地から離れなくては！
涙ながしながら…今この場でキラに出会えた事に安心したのだろう。
が必要な事はきっちり伝え…

『分かりました!』

その頃カオルはターゲットのシグーにとりついて今か、今かと備えていた。

『ザフト、連合、両軍に伝えます』

国際用緊急オープンチャンネルチャンネルを使い声が流れる。

「なに?」 『緊急コール?』

『アラスカ基地は、間もなくサイクロプスを作動させ、自爆します
!』

「はい?」 『サイクロプス?』

『両軍とも、直ちに戦闘を停止し、撤退して下さい!』

繰り返します! アラスカ基地は間もなくサイクロプスを作動させ自爆します!

両軍とも直ちに戦闘を停止し、撤退して下さい!』

『隊長!!』 『やばいよ』 『とけちゃうんだよね』 『けど...』

「各員聞け」

一斉に無言になる。

「かなり戦力は掃討できたはずだ……」

我が隊は、緊急コールを信じ、一旦離脱する。各機ついて来い!」

『了解!!』 *多数

侵入したゲートからであるため、ブースターをふかし高速移動を始める。

『隊長前方!!』

地球連合の非武装と思える女性兵士達が、ひっしにゲートを目指し走っている。

外部スピーカースイッチを入れながら

「乗れ!!」

と手を差し出しすぐそばに着地する。

「おまえら見捨てられたんだろ?命惜しいならのれ」

手の平に次々のる。

乗ったのを確認すると、またブースターをふかしゲートを目指す。

目指すゲートが見えてきた。ゲートにつっこみ……

ズン

「っ!!ブースター最大推力!!」

後ろからおってくるピンク色の壁……

『隊長!!』

「あきらめるなああ!!」

そして…カオルは加速の4乗かけで、次々とターゲット兵士を、虚

数空間のシエルターに引き込み始めた。

ターゲットのジュリア隊を引き込み、他にも女性士官を引き込み、全速力で迫ってくるピンクのマイクロ波の壁から離脱し…

次のターゲットの隊にとりつき、引き込み…

また迫ってきたので離脱…

（流石に俺でもマイクロ波は試す気はないな…）

フリーダムを追い越し、アークエンジェルを追い越した。

アークエンジェルがサイクロプスの効果範囲を、なんとか振り切り小島に不時着した。

連合軍は足が遅く壊滅、特に船舶は文字通り全滅し、

ザフト軍も地上部隊や大気圏突入部隊は全滅…離脱できたのが水中部隊、

デイン等足が速い部隊という有り様だった…

カオルは着陸しているフリーダムにそっと近づき…同化し離脱する。

………

カオル報告

ジュリア隊より

シンM

シグー

ジン長距離強行偵察複座型

ラゴウ

バクウ

ジン

ダニロフ級

自走リニア留弾砲

リニアガン・タンク

対空陣地等要塞兵器

フリーダム

高速潜水艦

作者「猫〜猫〜」

カオル「ん？作者何してるん？」

作者「いやね、YouTubeで電子レンジ猫を検索しててさ……」

カオル「ま、まさか！！」

作者「幸い、生きている猫のチンは無かったね…で、何故かまたたび猫が出てきてさ」

カオル「あ〜狂いだすよなあ……」

作者「富岡タマもかわいかったけどね」

カオル「誰よ？それ」

作者「評論家副島さんが、富岡町で拾ってきたネコなんだよね〜」

カオル「ん？ちよつとまで……」

作者「福島第一の二十キ口圏内かな？」

カオル「このページか……未改造でこの放射能受けるって……生身で……」

作者「で、猫レンジは絶対駄目だよあ、卵も穴あけないと危険だよ」

カオル「作者なんか壊れ気味だな……で次回は？」

作者「まだ題名未定ながら、猫レンジが登場……しません。次の回はカオル未登場で話が進みます。お楽しみに」

カオル「俺出ない？……猫検索するか……」

2001年9月29日

物語の筋は主人公不在のマブラヴの世界に戻りまして……

皆様は佐渡島ハイブ攻略戦のおり、佐渡島ハイブの頭脳級からの救援要請に、

あ号が対応したの覚えていますでしょうか？

〓 〓 横浜白凌基地 異世界軍情報室 〓 〓

「偵察衛星より入電、大規模進行あり、目標佐渡島基地の様、全軍第一種警戒体制発令」

「カオル大将不在、レビル中将につなげ」

「レビル中将より入電、地下反応炉より、救援要請が、陥落前にいったとの事」

「カオル大将不在により、次点レビル中将の指揮の元、防衛行動を……」

カオルがSEEDの世界にいつてる間にブラゴエスチェンスクハイブからの、

元佐渡島ハイブへの救援部隊が向かっているとこの報告が入った。

総数5万…1個軍団規模：主人公が不在の防衛作戦になる模様だ。
通常は樺太を目指す軍勢が、一路佐渡島基地へと向かっている。

「佐渡島基地、工事予定30%、侵入されたら迎撃難との事」

「全軍、佐渡島基地防衛に回ります。上陸予定時刻、翌日1200
の模様」

カオルが水軍をさほど強化及び防衛装備を強化してなかったのが痛
かったろう……

一方、佐渡島基地建設中にあるレベル將軍は、
ビクトレーのブリッジが上がっていた。

「水際防衛戦、及び万が一の基地内防衛戦だろうな…」

「將軍どうするの？」

「現状の佐渡島戦力は？」

「え〜と…今佐渡島基地には陸戦強襲型ガンタンク7個連隊と、
ビクトレーミサイル型4隻、ザメル連隊T-850警備連隊だよ」

続いて基地施設建築中の画面が出てくる。

「構造的には、各主要通路とも、元の横坑を埋め、分断して壁材もルナチタニウム合金で作った為、地下からの直接侵入は無し。ただ地上がしつての通りまだ全然仕上がってないから、侵入ルートがメインシャフトおよび5、7、9、10番通路から侵入されるね」

「明日までには？」

「メインシャフト以外は間に合う…けど、メインシャフトの隔壁が間に合わないよ」

「とすると、メインシャフト侵入されると駄目だのう」

「シャフト到達で、壁伝いで反応炉までいけちゃうからね…」

「佐渡島基地の再度バイブ化か…防がねばのう…さて、こっちにまわせる戦力は？」

「横浜白稜基地より、陸戦強襲型ザクタンク13個連隊、有人機各部隊、対小型種用としてハンターキラーレッグ改が3個連隊、T-850が3個連隊くるよ」

「ハンターキラーレッグ改とな？」

「マスターが対小型種用にと増やしておいてくれっといわれてたの。レールガン三門装備で的確な射撃でもって打ち抜く、原型がターミネーターの世界からきた、自動機械戦車だよ」

「なる程、カオル殿が……なら期待してよいかな？」

「あっ！将軍！横浜白稜基地より今入電情報。さらに後方に援軍らしき存在、その数10万。到着予定4日後」

「ほう……」

「更なる援軍の存在も認められるとの事」

「ほっほっほっ。よっほど佐渡島を取り戻したいんじゃない」

「将軍……どじするっ？」

「何にせよ小型種対策じゃのっ……」

異世界軍は、対中型以上には優秀であるが、

小型種は踏み潰すや燃やす、レッグブレードで切り刻む等で、半分無視する形で強化をとってきた。そのツケが出てきた…ともいえよう。

「ハンターキラーレッグ改は増やせないか？」

「増やせて3個連隊なの…無理」

「そうか…現有戦力でやるしかないか…引き続きたのむぞ」

翌日……

BETAの上陸に備えて、陸戦強襲型ガンタンクが、ラインを整えて迎撃体制をとっていた。

「カオルが居ない状態で大丈夫かなあ？」

「あの人、カオルさんが連れてきたどっかの大艦隊の將軍だったらしいよ。信じましょう」

『そうね…』

『はっ！はっ！はっ！切る切る切り刻むぞう』

ビッグトレー艦内……

スクリーンには佐渡島を一心不乱に目指している、水中にいるBETA群が映し出されている。

BETAは長距離移動してきたので、
まずはエネルギーを反応炉から貰わないといけない。

「間もなく敵BETA群上陸…ゼロアワーマイナス60」

一緒に消える運命だったオペレーターが艦内ブリッジにつめていた。

「間もなくか…」

スクリーンは上陸ポイントを映し出している。

「一次防衛ラインオールウェポンフリー」

「ビッグトレー、トマホーク発射まで…Tマイナス3、2、1、ナウ！」

振動が若干はしりブリッジ背後からミサイルが一齐に撃ち出される。
ゼロアワーに合わせミサイルが射出される。

「ゼロアワーマイナス6、5、4、3、2、1、ゼロ！」
巨大な爆炎と土砂の柱が画面を埋め尽くす。

海岸線一帯は灼熱の地獄と化した。

火球の中で無数のBETAが破裂し、その破片が爆煙とともに舞い上がる。

炎と光のスペクトルが画面を映し出す。

2200門もの240mmキャノン水平射および、840ものミサイルの一斉着弾、また680mmキャノンの支援砲撃だ…そうそう無事なものはない。

第一次防衛ラインは総勢2200もの異世界軍の主力である、陸戦強襲型ガンタンク、
また支援砲撃でザメル、ビクトレーが加えている。

しかし、そのような一斉射撃のなかも隙間を縫ってBETAは抜け出してくる。

爆炎で死亡した突撃級の死骸を盾に、小型クラスのBETAが噴煙の中から踊り出してくる。

その群に陸戦強襲型ガンタンクの両腕のポップガンが放たれ肉をえぐられ…死骸となる。

爆炎の中から光が放たれ、到達する前のミサイルが爆発する。光線級が迎撃をし始める。

が、その発射地点には陸戦強襲型ガンタンクの主砲からはなたれた弾が、
的確に命中させる。

しかし、一機二機と補給の為にラインを抜けると、段々と爆炎が薄まり抜け出してくる小型BETAが多くなってくる。生き残っている光線級は迎撃に忙しい為、相変わらず足が遅く抜け出してこれない。

抜け出してきた小型級に陸戦強襲型ガンタンのポップガンが放たれるが、さすがに半分以上補給後退したので弾幕が薄くなり…

ビクトレー艦内では

「敵小型BETA群第一次防衛ライン突破されました！」

「やはり第一次防衛ラインだけだと無理だのう」

「的がちつちやすぎるからねえ…やっぱり踏みつぶしに行く？」

「第二次防衛ラインに期待しよう。」

引き続き、敵中型以上及び光線級を絶対に第二次防衛ラインに行かすな！」

戦車級を主力とした小型BETA群第二防衛ラインに到達し始めた。

第二防衛ラインには、ハンターキラーレッグ改及び有人機部隊が控えていた。

「最終防衛ラインまで行かすなっ！！てえー！」

ハンターキラーレグ改のレールガン、ザクマシンガンがうなりあげる。

ハンターキラーレグ改は的確な精密射撃によるピンポイントショットで戦車級、闘士級、兵士級を打ち抜く。

プラズマ光がひかり、ブリットがBETAの弱点である臓器を貫き貫かれたBETA…戦車級は動きをとめ、地面に倒れる。

ザクマシンガンからはなたれた弾が、えぐるように小型BETAの肉体をもっていく。

ただでさえ個体数を減らしている小型BETA群はじりじりと近寄りながらも、

次々と倒れ、削られ…

死滅して逝った。

その頃、重光線級や要塞級は、容赦なく降り注ぐトマホークミサイル、240mmキャノン等の前に、

光線級、重光線級の迎撃が間に合わず…

第一次防衛ラインで早々死滅して逝った。

的が大きく、障害物もある、足の進みが遅い。

良いのであった…

最後の光線級が死滅する。

「將軍！！敵BETA群反応ありません」

「うむ。諸君戦闘終了だ！！次の軍勢に備えるぞ！」

『切れなかった……』

BETAのまず第1陣約5万の軍勢を迎撃でき、その死骸の焼却除去に各陸戦強襲型ガンタンクが走り回り始めた。

水際は作業用ザクタンクが総出で、水没しながら排土板で死骸を押し上げ、土を整えてる。

時間の開いている次のBETA第2陣に備えて順次洗浄完全オーバーホール受ける為に、佐渡島基地や横浜白稜基地に急いで、帰還し始めてる陸戦強襲型ガンタンク…

佐渡島の戦いはまだまだ続く…

「アメリカ情報局」

「ほっ……」

「圧巻ですなあ……」

「あの4脚の兵器、レーザーか？」

「画像からはなんとも言えないですが、帝国がもっていた、レールガンでないかと……」

「あそこまで破壊力はないようだが？」

「あれは異常です。ですが小型種相手には有効ですし、ましてや人間相手でも、戦車は……どうかと思いますが、軽装甲やへりには天敵といえましょう」

「わが方のレールガンは……？」

「小銃サイズでの高威力はありませんね。軍艦搭載型は鋭意開発中だとは伺ってます」

「是非ともほしいのう……あとマストライバー基地誘致の件頼むぞ」

「はっ！！」

……
カオル報告

別世界にいます。
何が起きているのかわかりません

カオル「さてと…」

作者「お前は今回は出てくるな！！バシルーラ！」

カオル「あつね〜……………」

あ号「お〜…………とんでくのう。」

ナギ少尉「今回はいたらだめなのよね〜」

2122

作者「たく、いる世界が違つたろうが…………であ号、この後の打ち合
わせな…………サイレス！……………」

あ号と作者の密談中…

ナギ少尉「あたしは蚊帳のそとかあ…………なにしよう？」

ピロピロピロ

ナギ少尉「なに？ ……台本？この通りやれって？」

見始めるナギ少尉

「えっへん!! 作者の近況暴露コーナー!!」

さて作者が携帯壊して遅延報告をしたと思いますが、
落とした場所が洗面所にて歯をみがこうとした時でした。

携帯をタオル掛けの上において歯を磨こうとした時…

ヒューと落ち見事に付け根が割れ…

携帯の画面とダイヤル部分のが見事に二分割…ケーブルだけで繋が
ってたそうです。

かなりのシヨックを受けたそうで…

……暴露ネタか…苦しいんすね…作者…

さて次回はまだまだ帰ってこないカオル…佐渡島が落ちちゃっうよ?…
オーブ解放作戦、お楽しみにい〜。

…結局わたし一人で後書きってなんだろ?」

もっ…ゆっさゆっさ勘弁シテクダサイ…

携帯おとしたの地震のせいになれば良かった？

C.E.0071 6月13日

オーブ：ガンダムSEEDの世界において、プラント、地球連合ど
ちらの陣営にも属さない、武装中立の国。

陣営を決めずまた他の国からの避難民：

主にコーディネーターを積極的に受け入れている。

またザフトの侵攻での戦災一時的難民も積極的に受け入れてきた。

それが中立的立場を貫いてきたオーブの理念だったからだ…

しかし…その平和を崩す暗雲がひたひたと迫ってきた…

「間もなく、政府より重大な発表があります。

国民の皆様はどうか、どなたもこの放送をお聞き逃しのないようこ
注意下さい」

街頭テレビでニュースキャスターが告げ、

また今テレビみてない国民にも、スピーカーでテレビをみるように
促してる。

しばらくすると、オーブ国代表がテレビ画面に出てきた。

「オーブ国民の皆様、如何おすごしでしょうか？」

残念ながら大変な重要な事態を告げざるえない事が迫っております。

我が国に対し、大西洋連邦より以下の通告が有りました。

原文のままお伝えいたします。

現在の世界情勢を鑑みず、地球の一国家としての責務を放棄し、

頑なに自国の安寧のみを追求し、あまつさえ、再三の協力要請にも

拒否の姿勢を崩さぬオーブ連合首長国に対し、

地球連合軍はその構成国を代表して、以下の要求を通告する。

一、オーブ首長国現政権の即時退陣、
二、国軍の武装解除、並びに解体、
…… 48時間以内に以上の要求が実行されない場合、地球連合はオーブ首長国をザフト支援国家と見なし、武力を以て対峙するものである。

残念ながら、大西洋連邦は敵か味方かの要求をわが国に告げていません。

そしてオーブは、その理念と法を捨て、命じられるままに、与えられた敵と戦う国となるのが最終的な今回の要求と見受けられます。

連合と組めば、プラントは敵。プラントと組めば、連合は敵。

例え連合に降り、今日の争いを避けられたとしても、明日はパナマの二の舞になりえます。

陣営を定めれば、どのみち戦火は免れません。

よってわが政府の対応としては、オーブの理念に基づき、あくまで中立の立場を貫くいたします。

現在も外交努力を継続中ですが、

しかし残念ながら、現状の地球軍の対応を見る限りにおいて、戦闘回避の可能性は、

非常に低いものと言わざるを得ません。

全国民の皆様、都市部、及び軍関係施設周辺から避難退去を行って下さい。

また不測の事態に備えて、防衛態勢に入ります。

戦闘回避不能となれば、明後日0900、戦闘が開始されます。

繰り返しますが要求は不当なものであり従うことは出来なく、
オーブ連合首長国は今後も中立を貫く意志に変わりはありません。

国民の皆様、各役場職員の指示に従い、
落ち着いて指定避難所へのご移動をお願い致します」

市内各所で緊急放送を聞いた人々が、一斉に行動を起こす。

まずは職場や家族等に公衆電話で連絡、
今の件について確認をとろうとする。

案の定…電話前が並びすぎて渋滞が発生する。

とりあえず職場に戻ろうとする会社員、自宅に帰る主婦？とみられ
る女性。

市内は軽いパニック状態に化す。

街頭に映っているテレビでは急遽特番体制になり、
各公共交通機関の状況等を伝え始めていた。

「メトロは明日いっぱい、明後日は始発から運休となります。
道電は……」

……

翌日、オーブ領海沖に見え始めた地球連合艦隊。

各テレビ局もオーブ艦船にのりその光景を映し出している。

いよいよ国民もただの脅しではないのを実感し、都市部からの避難に加速がかかる。

そんななか、続々と不意打ちに備え防衛準備を行っているオーブ国軍。

街中ではキャリアに載せられ海岸線防衛に向かうリニアガン・タンク…

また、高射砲の設置などがすすめられている。

6月15日未明…

カオルが世界扉から出る。

(ここは……?)
とりあえず手近なコンピューター端末に接続をする。

(オーブ本島か)

しかし、島の住民殆どが避難したのか、明かりが殆どない。

道にはチラシが風をまい…しばらくあるくと道に配置された対空車両が、

上空にミサイルを向け待機していた。

(やはり平和な生活を…いきなり壊されるとね…)

カオルは幻影をかけ、沖に陣を構える地球連合軍艦隊に向かい、でっかい空母…いや強襲揚陸艦複数いるなかで、片っ端からとりついて探していた。

約二時間後…数わからないほど接触して、

やっとお目当てを見つけ出した。

(カラミティ、フォンビイドン、レイダーあいたかったよヴゥゥゥ)
ストライクダガーばかりですこし飽きてきた中だった。

連合3馬鹿の機体をそれぞれ同化し離脱する。

カオルは、連合から離れて、防衛待機しているオーブ国軍に接触同化しはじめた。

まずは、洋上で警戒中のイージス艦を取得し、そのまま陸上に向かい、基地ハンガーに待機しているM1アストレイも取得した。

その後時間があつたので近くに打ち込まれてるニュートロンジャマ
ーを見学しに行く。

(こいつがねえ…)

地中深く同化しながらもぐっていったカオルは現物と対面している。

中性子を阻害、全ての核分裂を抑制する装置だ。

その副産物として電波を阻害、有視界戦闘のみになり、MS有利の元となる。

勿論カオルは同化して取得をする。

そして…午前九時きっかり、

地球連合軍の艦隊群より、先制ミサイル攻撃が開始される。

それに対しオーブ軍艦船は自衛行動をし、反撃のミサイルも撃ち出される。

しかし数が違う。物量に勝る連合艦隊のミサイルは地上にも到達し、地上で迎撃するも追いつかず次々と地上に命中する。

ニュートロンジャマーの効果で対空攻撃も目視で行わざるえない。レーダーが効かないからだ。

となるとひたすら弾を当てるしかない。

が前記のように音速近くで誘導なしに物量に任せ飛んでくるミサイル群。次々と命中する。

大空に鳥が見える。そこから飛び出てくる何か…

そう、上空から空挺で陸地を目指してくるストライクタガー、海上からの接近してたストライクダガーに警戒してたオーブ軍戦車隊は、

次々と脆い上部を撃ち抜かれ沈黙する。

M1アストレイ隊がストライクに襲いかかる。

ハードで勝るオーブ、練度物量で勝る連合のMS…少し連合の物量がまさるの戦いの中、

そこに一騎当千のフリーダムが襲撃してきて、ストライクダガーの武器、手や頭部をハイマツトブーストで吹き飛ばす。

ただやられっぱなしの連合ではない。秘蔵っ子の連合3馬鹿がアークエンジェルに襲いかかる。

それをみたフリーダムが救援に向かい、
物量で押されるオーブ、肝心のフリーダムが連合の3馬鹿の対応に
追われ、

M1アストレイも十分な数は用意してなかった為、
個々ではストライクタガーには増すものの全体的には攻められつつ
あった。

そこにアークエンジェル対応のバスターも加わるが……

カオルはその頃ある一家を追跡していた。

避難所にいたがこのオノゴロ島住民は、全員島外退去の形になった。
オーブ本島には見向きしてない為、連合の目標がオノゴロ島、
カグヤ島の軍事施設、マストライバーとわかったからだ。

山道を避難民を乗せるための港湾施設にむかってひたすら走ってる。

「父さん！」

「あなた！」

「大丈夫だ。目標は軍の施設だろ。急げシン」

その一家の名前は、
シン・アスカ、ミュ・アスカ、ダイゴロウ・アスカ、アヤ・アスカ
だった。

ひっそりに船を目指している。

何故遅れたかというと、この両親がついていた仕事の問題だったの
だ……

上空をレイダーに乗ったカラミティが通り過ぎる。

「うわあああ」

一家はしゃがみこんで風圧に抵抗する。

カラミティが着地し、M1アストレイを撃ち抜いた爆風が襲う。

「キヤー」

近くにカラミティがきたため、更に急ぐが…

マユの携帯電話がポシエットから崖下へ転がり落ちる。

「あつマユの携帯ー！」

「そんなのいいから」

「いやあ！んっん〜！」

らちがあかないとおもいシン・アスカが崖を滑って携帯電話を拾いに向かう。

（そろそろか…）

シンを除くアスカ一家をシェルターにいれ、

爆発で吹き飛んだ現場に「幻影」

死体となったアスカ一家を再現する。

近寄ってきたトダカがシンを助けたし…

シンが、マユの手を見つけ出し…しかし、手がぶちきれて本体が離れて血だらけになっている。

近寄ったトダカも…惨状をみて動きがとまる。

シンは力なく座りこみ、そしてこの惨劇を引き起こしたストライク、カラミティに対して…

「うおおおおお！！！」怨みをこめてほえてた。

ポツポツポ―

輸送船からまもなくの汽笛が流れる。

「さあ…君」

「マユを…家族を」

「残念だが、君…生きている人間だけなんだ…」

「！！…ならここに残ります！！」

「馬鹿やろっ！！君の両親はそんな事望んだか？

ここは戦場になるんだ。あの船に乗らなければ生き延びられない。それはわかるな！」

「……」

「とにかく生き延び何が何でも生き延びて復讐でもすればいい！まずは生き延びなきゃ始まらないだろうが！」

「っ！……分かりました」

「わかってくれたか。さっ…急ぐぞ」

シン・アスカは避難民船に向かう。

上空ではフリーダムと連合3馬鹿の戦いが続いていた。
この戦いを制すると増大な突出戦力が加わる…

そして…アスランのかるジャスティスがキラの救援に駆けつけた。

連合3馬鹿が、突如として動きをとめ…撤退する。

連合3馬鹿がフリーダム、ジャスティスに対抗できたのは、いわゆる強化人間だったからだ…
しかし持続力に薬が必要だった為、その薬が切れた結果……
という事だった。

その撤退に合わせ、地球連合旗艦パウエルから撤退信号が打ち出された。

オーブは貴重な時間が稼げた。

戦闘で美しい街並みはいたる所で瓦礫と化している。

ハードでは勝っていても、経験がないオーブ軍兵士達…
かなりの被害が出て、

また生き残っているものも初の戦闘で疲れ果て、

休息が必要となっていた。

実情あのまま力押ししてたら、オーブ軍は力尽きたかもしれない。三機とアークエンジェルだけになり…

護るものがある…というのはかなり不利なのだった…

ミサイルをかわすだけなら容易だったろう。

しかしかわせば後ろの母国の街並みにあたる。

そのため何としてでもミサイルを撃ち落とす。

で、無理をして迎撃できず、ミサイルをかわす時間がなくなり…いや

こいつらを倒さなければ俺等の国があゝで無理に突出し…

等々…護るべき土地に攻められた時点で、戦力計算は一気に変わってくるものである。

せめて皆などあればまた別であつたらう…

ストライク…この激戦を生き延びた…今は鋭気を養う時だった。

フラガがワイヤーロープでもってコクピットから降りてくる。

勿論近寄り同化する。

夕日がジャステイスを照らしている。

キラとアスランの再会だ。

この止まっている機会を逃すわけではない。

ジャステイスに近寄り同化する。

そしてカオルは離れ「世界扉」

世界を渡る。

……
カオル報告

ジャステイス

フリーダム

オーブ軍イージス艦

ストライクダガー

M1アストレイ

ストライクナチュラル仕様

ニュートロンジャマー

作者「これでカオルもどつて…こなさそうだなあ…」

ナギ少尉「えっ？まだSEEDで遊ぶの？」

作者「で、帰ってきたら佐渡島ハイブ再建築と…」

ナギ少尉「と…になると？」

作者「オルタネイティブ？の再発動…」

ナギ少尉「きゃあ…大変じゃない」

作者「大丈夫さ…レビル將軍がなんとかシテクレルサ…」

ナギ少尉「な…何故にカタカナ…」

作者「ネタばらしするが第三陣は二十万の進行予定だよ」

ナギ少尉「佐渡島ハイブの総戦力じゃないの!!」

作者「さ…カオル戻ってオルタ?フラグ断ち切れい!!」

ナギ少尉「え〜と次回は…: 第一次佐渡島防衛戦 第二戦目…お楽しみにい」

作者「カオル〜メインシャフト突入でハイブ再建築フラグだよ」

第107話 第一次佐渡島防衛戦 第2戦目 投稿日20110414

2001年9月31日

「いよいよ明日だね」

「明日じゃのう…この間の2倍の10万との上陸は…
して状況は？」

「工事がすすんで、メインシャフト侵入は避けれる状態。
ルナチタニウム合金製のエレベータープレートが隔壁代わりになる
よ〜」

「ほっ…そうか最悪の事態だけは避けれるようになったか…」

「で、陸戦強襲型が前回4個連隊増強、ハンターキラーレッグ改も
5個連隊増強」

「ふむふむ」

「ただ基地内部に関して、やはり隔壁突破されると迎撃不能だから、
隔壁防衛をね」

「だの……」

2001年10月1日昼間…

佐渡島にBETAの第二陣、約10万が接近してくる。

それに前回同様に防衛ラインをひき対応しようとする異世界軍。

上陸開始とともに砲撃、ミサイルによる爆発がおき、

中型種以上のである突撃級、要撃級は的が大きいため、
前回同様に第一次防衛ラインから進めなくなっている。

……が第一次防衛防衛ラインから抜け出す小型種の数が多すぎて、
増強した第二防衛ラインで対応するも…

一心不乱に佐渡島基地の反応炉を指す個体が多く突破…

ライン上での射撃が間に合わず、有人機のレッグブレードによる蹂
躪をするも…

かなりの個体数が一路反応炉を指し侵攻をしていた。

それを迎えつつ最終防衛ライン…

最終防衛ラインにはT-850がシャフトを守っていた。

彼らは上半身裸で戦陣をととのえてた。

彼らが声を発してたらこうとなえてたろう…

「やつらはなんだ？」

「ただのチ コチ コチ コ」

「我らのけつの穴を犯すものを切り刻め」

「やらないか、やらないか、やらないか」

「抜刀！！」

現実には無言で抜刀時の抜く音だけが聞こえる。

シユラ

背中に担いでいた1800mmサイズの長剣2対を一斉に両手に持ち始める。

以前門あつたところから侵入できなかつた為、小型種BATAはメインシャフトを指していた。

そこに一斉に襲いかかるT-850達。

忘れてはいないと思うが、ターミネーターだ。

人間では格闘戦ではどうあつても殆ど勝てない。

それが強化され小型種BATAに襲いかかっている。

高周波ブレードの長剣サイズ、戦車級がよこなぎされ…動きを止める。

闘士級が長い鼻でもって横殴りするが、パワーでもって抵抗し、真つ二つに袈裟切りにする。

兵士級がかじろうとするが、その前に真っ二つに袈裟切り…

ターミネーター達はBETAの体液を浴びながらも、くる敵くる敵を片っ端から切り刻んでゆく。

そんな乱戦の中抜け出した小型種BATAが飛び込んだ先は、ルナチタニウム合金製のエレベータープレート。
かじるが歯がたたない…なんとかかじろうとする。

それを切ったばかりで手があいているターミネーターが駆け寄り真っ二つにする。

戦いはエレベーターシャフト上にも及ぶ…

戦車級があるターミネーターに頭からなんとかかじりついた。

ターミネーターは抵抗し、長剣を背後に突き刺した。

顔表面の肉体がもってかれる。が…

内部骨格であるロボット部分がむき出しになる。

そのまま顔むき出しのターミネーターは別のBETAに切りかかりにいく…

そんな中………

〓 〓 横浜白稜基地 B55 ハンガー 〓 〓

世界扉が開きカオルが降り立つ。

(あれ???)

コバツタ達が見えない…いやいたエルちゃん付きのだ。

「あゝお兄ちゃんだあゝ」

「ただいま」

「マスターお帰りなさい」

「お兄ちゃん暇？遊ぼー」

「んゝかえつたばっかりなんだあ…他の人達は？」

と31号に聞こうとすると…

「なんかねゝなんかねゝ戦いがあるゝって乗ってたよゝ
すごかったんだからあゝ」

「マスター 佐渡島基地防衛戦中」

「お兄ちゃんね、少し忙しくなるから、また後であそぼうねゝ」

「うん…うん、わかったあ…後でキスしてね」

「ああ……うえ?!?!え、え、エルちゃん!!ちょっと!」

「あゝマスター…最近キスを意味わからず使い始めて…
多分ギユネイさんの言葉が…」

「とりあえずエルママさんに報告した？」

「うん……何回か注意したみたいけど…」

「一向に…」

「はあ……まりもさんに相談か?まあちつといくから引き続きな」

「あゝエルちゃんそれだめ」

情報室に向かうと…

「マスター!!」「大将閣下!!」

「ただいま。状況は？」

「佐渡島基地襲撃されてて、今メインシャフトのエレベータープレート上まで小型種が進行。」

「中型、光線級以上は第一次でなんとかとめてる状態」

「各通路は？」

「隔壁作動してるから侵入はないよ」

「よっし……今のところ、被害は？」

「まだ入ってないよ」

「おっし……と、援軍いくひつようあるか……」

「送れるとしたら、烈火小隊のみ」

「うむ……まだチューリップ施設が外なんだよね？」

「うん」

「じゃあ警備はT-850警備小隊に任せて……一応魔撃震ももっ

てくか…多目的輸送挺予備あるよな？」

「うんあるよ、じゃあいつてらっしゃい」

格納フロアにいき、虚数空間に魔撃震をいれ、
対小型種用の高周波ブレード及びカートリッジをつかむ。

待機してる多目的輸送挺に飛び乗ると、烈火小隊の何名かが乗って
た。

「大将閣下、生身で？」

「ああ、小型種には魔法で十分だしな」

「………振り返らないで下さいよ」

「了解」

輸送挺が動きだし、DF作動させてチューリップに突っ込んでゆく
…

佐渡島チューリップにでると、あたりは砲音が聞こえてくる。

「大将」桜井少尉の烈火だ。

「よっし！！格闘戦を堪能するぞ！いくぞう！」

「了解！！」*多数

烈火は反重力推進で全速力でシャフトに向かう。

カオルは「加速」の2乗かけすると、空に飛び出した。

程なくシャフトに近づくと高周波ブレードを飛行しながら縦に構えて…

戦車級に近寄り…

すー パカッ

兵士級に近寄り…

すー パカッ

闘士級に近寄り…

すー パカッ

と飛行しながら二枚におろしてゆく。

返り血を浴びる前に加速のスピードで抜けていく…

烈火の参加しているほうではグシャメシャボコツウという音が聞こえる。

物量の圧力に耐えてたT-850連隊は、カオル、烈火の参戦により押し返して程なく、

第二次防衛ラインから漏れてくる小型種も少なくなり、

第三次防衛ライン手前まで駆逐できた。

未だに乱戦模様だが、もう抜け出してシャフトまでいける小型種はいない。

(さて、どんな状況なんだ?)

防衛ラインから抜け出して魔撃震をだし同化する。

戦場データがなだれ込む。

『カオル殿』

「レビルさん、戦況は？」

『もうそろそろ駆逐できそうですじゃ。カオル殿はエレベータープ
レートに?』

「ああ

『あそこさえ片付けば問題ないのっ』

「うんじゃあ……ブリッジにあがるわ」

『わかった、まっとするのっ』

カオルが魔撃震をしまい、ビックトレーブリッジにあがると…

第2戦目は終了し、後片付け部隊が導入されようとしていた。

「レビルさんお疲れ」

「カオル殿、何処にいかれてたので？」

「あれ？聞いてなかったです？ガンダムSEEDという世界に…とその時

「カオル大将！！横浜基地より入電4日後の軍勢総数25万！！」

「25万？」

「はい間違いありません…」

ザワザワ

いつもと違いいっぺんに押し寄せてくる。

流石にビックトレー内部は騒がしくなった。

「カオル殿…どうしますか？」

「なんとかしましょう。放棄はしません」

「……ふむ…勝算は？」

「あります」

「……カオル殿、信じますぞ」

「ええ……ちょうどその候補になりそうなのを取得してて……
運が良かったですね。
じゃあ…後処理で基地に帰りますんで、明後日にでも…」

「わかった。あとの事はまかせてくれい」

カオルは一路輸送艇を使いチューリップで他のより先に、横浜基地へと帰ってく。

佐渡島基地で防衛してた各機体も隔壁があき、地下ハンガーに向かう機体、

また下駄にのり一路横浜基地へと帰ってく機体。

佐渡島ではBETA焼却処分が続いていた……

「」
アメリカ軍情報司令部 「」

「………な、なんだね……この映像は本当の事か？修正はしてないのか？」

「は、はい……我が軍の偵察衛星が捉えた映像です」

「……この人間達が生身で、BETAに勝つたのだと？戦車級に……」

「人間というのは違うと思いますが、この物達が生身で勝つたのは事実です。」

「人間とは違う？」

「まずこれらは同じ容姿してます」

「ふむ……」

「あと、こちらを……」

とT・850とツーショットしている写真が渡された。

「これは……」

「CIAの天敵……通称ガーディアンです。この映像のと同じ容姿です」

「ふむ」

「CIAからの報告をまとめますと、高性能自立ロボットとかわれます」

「ロボットだと？00ユニットなのか？」

「の技術を活用した戦闘用とは思われます」

「……………わが軍の方のロボット開発は？」

「CPUの件および小型化、高出力化で手間取ってます」

「ふむ…手には入れたいが…」

「無理でしょうな…何百人再起不能に追い込まれたか…」

「開発局に開発を急がせる」

……

カオル報告

ヤバイヤバイヤベーどうしようか？

ナギ少尉「作者くどうすんの？このままだと佐渡島おちるんじゃない？」

作者「落ちて、オルタ？再発動か……」

ナギ少尉「25万って自重しなよ!!」

作者「まあこれが最初期1977年にできたフェイズ5で6になりかけが、

一回で出せる数だろうなあ……って事さ……ま、ようするに大規模侵攻。勿論ランチエスコバイブで一回補給後の大規模侵攻……ってわけだ」

2154

ナギ少尉「ねえ……作者このままオルタ？再発動したらどうなるの？」

作者「ん？まあ……一斉投入だろうなあ……」

ナギ少尉「武ちゃんがくる前におわるじゃない!!」

作者「まあ……カオルがなんとかするさ」

ナギ少尉「あつ?!カオル、カオル何処〜」

作者「ありやりや……さて次回は最終回なるか??第一次佐渡島基地防衛戦 第三戦目 お楽しみに」

第108話 第一次佐渡島防衛戦 第3戦目 投稿日20110416

2001年10月2日

朝起き、とりあえずSEED世界の救助者が入ったシェルターを出
す。

定例パターンで広報し、やはり加入。

ユーラシア連邦所属女性士官達は事務方だったので、そっちに回っ
てもらおう。

今回救助したザフトのジュリア隊総勢18名は、数少ない女性パイ
ロットだけを集めた部隊だ。

そして、アスカ一家…

「お兄ちゃんは…?」

「シンは?」「あなた…」

「えっと…すみません。シン・アスカ君とは……一生あえなくなり
ました」

「そんな…!」「…」

「実は彼は、あなた方家族が死んだ事に対し、復讐の為にザフトに
入隊、そして、

エースオブエース…ザフトを象徴するパイロットになり、

この後の戦いも生き延び結婚していきます。

ですすみませんが…」

「お兄ちゃんがエースパイロットに？」

「ああ、種もちでね」

「種？」

「えっと…ダイゴロウさんですよ？マユちゃんもコーディネーターです？」

「ああ、そうだが…」

「マユちゃんの適性みたいのですがよろしいですか？」

マユちゃんが不安そうな顔を浮かべるが…決心して…

「お願い！」

「マユ」「わかったやってくれ」

「アルミサエル」

(……………ほう…これだな…)
種パリーン

「えっえっえ？」

「ダイゴロウさん。マユちゃんもエースパイロット適性ありますね。お兄さん同様に種もちです」

「して…種とは？」

「おもにパイロット適性をさしますが、マユちゃんみたく覚醒すると、認識力や情報処理能力、運動能力やらが大幅にあがりますね」

「…わかった」

「でこの後の事なんですが、できればお二方とも、協力して頂ければ嬉しいのですが…」

「シンとは……」

「先ほどもいいましたが、シン君の運命が変わると…世界そのものが変わる事になる重要人物になるので…すみませんが…でご協力のほうは？」

「わかった」「協力しよう」「マユも」

「えっとマユちゃんは？」

「パイロットやるう」

「やらしてやってくれ。この世界なら一騎当千なんだよな？」

「わかりました。我が軍のエースパイロットに鍛えさせます」

という事でコーディネーターの開発者二人…

ダイゴロウさんおよびマヤさんはモルゲンレーテ社の開発部所属の方と、

種もちパイロット候補の一人をゲットしました。

しばらくはアムロさん、シャアさんの指導の元訓練生としてですが

……

(さて…あとは大量処理兵器の開発か…)

そう、約25万もの軍勢を迎えつつものが必要だったのだ…

(サイクロプスか…?)

ハンガーデスクに座りながら考える。

「マスターなに考えてるの？」

「ん？大量虐殺兵器をな…」

「マスター……」

「ああ、対BETA用のな…でこいつが一番候補にあがってくるんだわ…」

「あゝマイクロ波で水分消滅？」

「ただ元々のが暴走して爆発まで引き起こすから、それまでしないようになあ……」

「ならここをこうして……」

「ふむふむ」

という事で完成しましたサイクロプス改。

ニュートロンジャマーとのセットで半径10kmの限定的範囲内において、水分をもつ生物、

機械などを水分を沸騰させ消失させる兵器となりました。

勿論膨大な電力が必要な為発電施設とセットになりますが……

宇宙世紀の核融合炉はフィールドで保護されてるので、

ニュートロンジャマー作動時でも影響なし……

ただし作動は一回のみで要修理……及び地中埋設、地上だと攻撃される？

ので、大規模工事が必要にはなりますが……

ニュートロンジャマーは勿論効果範囲を狭めた。

作動時には半径50km範囲内、起動及び停止はサイクロプス改とのセットになる。

「大至急1セットよろしく明日までには佐渡島に設置したいからな」

「了解」

「あとはそこまでの誘導か…」

前回までの上陸方向からだ…どうしても基地が10km圏内に入る為、誘導する必要があった。

佐渡島基地を自爆させるなら必要ではないが、現状それはしたくない。

で…

「あっ!!」

思い出したカオルは99式電磁投射砲を引き出した。

そう…そのコアモジュールのG元素を複製したときの食いつきっぷり…誘導できるんじゃないかと…

という事で試作誘導棒…

遮断材はとりあえずコアモジュールの設計を流用。

作動時にはシャッターが開き、G元素が全露出。

食いついてくる…という設計だ。

これも一本テスト用に注文をする。

というか、外側だけで、カオル自身がG元素精製する必要あるが…

2001年10月3日

明日の上陸に備えて佐渡島基地では急ピッチに工事が進む。

勿論サイクロプス改の設置工事だ。

旧湯の峰山…メインシャフトから北北東20km地点に設置…

万が一の暴走時にも基地には被害が及ばないように…の前提に…

作業用ザクタンクのショベルカーアタッチメントで穴を掘っている。カオルは魔撃震にてシャベルを使い穴を掘る。

まずは中央に半径100mの円状に穴をほり、サイクロプス改を入れるスペースを作る。

そこから外側に地下ケーブル用のスペースを掘っていき、約15kmの地点まで掘っていった。

2001年10月4日

上陸前に工事を終わらさべく急ぐ…

掘った地点は片っ端からルナチタニウム合金製の壁、床に変えてく。手のあいてるコバツタ達も総出だ。

変わった地点からサイクロプス改、ケーブルをはわせ、天井をはめ込む。

最後に外側の核融合炉およびニュートロンジャーマースペースが完成し、土の下にうめた時には、上陸予定時刻の1時間前だった。

「まにあったああ…さっ撤収!！」

コバツタ達、作業用ザクタンクが撤収してゆく。

撤収がギリギリ間に合った。

20:46

佐渡島に第3陣総数25万の先鋒、突撃級が上陸してきた。

カオルは最後の仕上げ、誘導棒内部のG元素精製を行っている。

前方の空が明るい…

夜の闇が辺りを覆ってる時間だが、前方の爆炎で明るくなっている。

精製が終わりしばらくすると……

『BETA群中衛、要撃級抑えられません！！第一次防衛ラインより抜け出てきます！！』

やはり物量圧力に対する火力が足りないのだ。

「マスター1より全軍、試作誘導棒を作動させる」

魔撃震の持つ誘導棒のシャッターが落ち精製ホヤホヤの内容物、G元素が露出する。
すると…

『BETA群、勢い落ちてます！！……HQよりマスター1！全BETAの進行方向かわりそちらに向かいます！！
誘導兵器作動成功です』

「こちらマスター1、BETAどもをサイクロプス効果範囲内に誘導する」

魔撃震の持つ誘導棒に導かれるように、
全BETAが一心不乱に進行方向をかえ目指している。

彼らの大好物：G元素がそこにあるからだ。
しかもはらへってる状態で露出してる…

我先に我先にと……
魔撃震の背中に出現させたアタッチメントに誘導棒を装着、固定させる。

『HQよりマスター1、総数23万強がこちら向かってます。
末端が効果範囲内にはいるのに現時刻から30分必要になります』

「マスター1了解」

(なるだけはじめでいき…時間を稼ぐ…が最終的には中心部か…)

両腕を高周波ブレードに変化する。

ワシャワシャBETAが接近してきてる。

(さて… イッツ・ア・シヨータム!!)

敵BETA群の中に切り込んでゆく…約10kmの道のり…

なるだけ兵器効果範囲内に多くのBETAを留める為に奮戦する力
オル操る魔撃震。

G元素食わせる!とばかり飛びかかってくるのを、
片っ端から高周波ブレードで切り落とす。

そして…中心点到達し…

『全BETA効果範囲内に入りました!!』

「離脱する!!カウント5でサイクロプス改始動!!」

カオルは誘導棒のシャッターを閉じ、魔撃震を空へと踊りだした。

それを追っていくつものレーザーが空にあがる。

魔撃震はギリギリの動作でかわしながらまたレーザーがあがりかわ
しながら…

効果範囲外を目指し…

ゾクリ

サイクロプス改が始動する。

途端にレーザーが作動しなくなる。

ニュートロンジャマーが作動したのだ。

同時にデータリンク、通信もダウンする。

まだ交換出力までは時間がある。

レーザーかわしながら効果範囲外へと急ぐ。

一万もの光の筋をギリギリの範囲で時には直撃するがかわしながら、効果範囲外へと離脱するとともに、

サイクロプス改のマイクロ波の出力が効果出力に達つする。

動きを止めるBETA達…体内の体液が沸騰し始め…

パンパンパンパン

次々と破裂し始める。

サイクロプス改は…暴走せずに…最高出力に達し…

効果範囲内には生きているBETAはいなくなり、出力を停止し始める。

(うう効果絶大)

『て、敵BETA群大部分反応消失…残存…5500程…』

(あ、やっぱり生き延びたのいたか…)

誘導棒作動終了し、そこから効果範囲外に逃げ出す間に、効果範囲外へでた数であろう。

「マスター1より、全軍！！残存は少ない…殲滅せよ！！」

程なくして…殲滅しここに第一次佐渡島防衛戦、第三戦目は終了する。

〓 〓 アメリカ軍情報司令部 〓 〓

「な……か、核かね？あんな一掃するとは……」

「……いえ、核では無さそうですが……」

「……問い合わせするしか無さそうだな。
大至急問い合わせしろ」

〓 〓 EU統合本部 〓 〓

「ありえん……」

本部内に討議してた者たちは、呆気にとらわれていた。

当初過去に数度あった20万規模の大規模進行、
その度に人類は大陸から追い出される、陸地で惨殺される。
そのような佐渡島が陥落結果後の話し合い最中に、
偵察衛星のLIVEをみはじめ、
結果…大勝利の模様であったからだった。

しばらくして再開した議論は、何故進行方向が変わったか？
あの秘密兵器はなんだ？
の議論にかわっていった。

.....

カオル報告

きつかった.....

次は困やりたくないなあ.....

サイクロプス改効果的

作者「という最終回フラグをぶち壊した結果になりました」

ナギ少尉「……………レンジでチンねえ……………そんなに効果的なの？」

作者「効果的だよ〜YouTubeでレンジ 猫と検索すると……………」

ナギ少尉「キヤー!?!?!?こ、これ……………」

作者「あ、それは実はヌイグルミだから安心してね」

ナギ少尉「ほ、ほんと?」

作者「真実は闇のなかさ……………まあレンジに生卵をやると……………でわかるよ。」

ただし、命に危険及ぶ可能性大だからやらないように!」

ナギ少尉「え?」

レンジに生卵を入れようとして止まってる…

作者「……………生卵は、わって、爪楊枝で黄身を突き刺して中の水蒸気

がでるようにならないと……で500Wなら45秒で……」

チーン

作者「温泉卵の出来上がり〜…ラップはしないでね」

とナギ少尉に渡す。

作者「まあ…ナギ少尉さあ君んとこの軍艦でレーダーどこにツイてる?」

ナギ少尉「えーと、艦橋の上と、フリーゲートタイプなら艦橋自体にかなあ」

作者「フリーゲートタイプは、レーダー作動中にデッキにでるの禁止でしょ?」

ナギ少尉「あ…そういえば……」

作者「つまりそうだった事……さて次回予告いくか」

ナギ少尉「さて次回は、ひねってないサブタイトルで、第一次佐渡島基地防衛戦終了後。お楽しみにい〜」

2001年10月5日

各国からの問い合わせがかなり昨日多かったので

国連総会に臨時でテレビ回線での説明となった。

「え、昨日問い合わせのありました、殲滅兵器サイクロプスについてご説明します。

まず原理は簡単です。皆様がつかっているレーダーを、高出力化させたマイクロ波による破壊兵器としてみてください」

『あの艦船のですか？』

「ええ、そうです。単純な理屈ですね…人間同様にBETAも水分があります。

それを一気に沸騰させ、破裂させる…単純明快な兵器です」

ザワザワ

「それを昨日は暴走させず、効果を狭めて殲滅できた…といえましょう…」

あんまり多様はできないですが…」

『多様できないとは？環境被害とか？』

「環境被害は現時点ではありません。」

が…効果範囲を抑える部分にニュートロンジャマーという、核分裂を抑制する装置を使います。

これの効果により全ての電波を抑制し、効果範囲をより狭く限定的とする…

つまり人間側の利点であるレーダーを使用不可にし…

電波通信ができなくなりデータリンク使用不可になり…

また原子力発電も使えなくなるので潜水艦などが効果範囲に入ったら……自沈する可能性が…」

ザワザワ

『確かに…』

『不利になるばかりの話だ…』

「まあそれでも地雷と同様に設置、引き込みし一気に殲滅には使えませんし、抑制せずに暴走させ爆発する事もできます。

防衛的兵器としては有能ですので、膨大な電力使いますが、ご希望あれば設計図をお渡しします」

前線国家が一回使ってみたいと希望してきたので…

オーバーテクノロジーでなく、現有技術で製造可能だったので、国連経由で配布する事になった。

「あ、人間に対しては使用不可にお願いします。洒落にはなりませんので…

また必ずニュートロンジャマーとセット使用でお願いします。

単独使用だと計算上ですが180km範囲内におよびますので…

また設置箇所は共有化で…」

などの取り決めも行う。

「次に誘導についてですよ？…これにつきましては、G元素を使用しました」

ザワザワザワザワ

『G元素ですと？』

アメリカ代表が口を出してきた。

「はい。BETAの習性でG元素に殺到する…」

効果は二度程体験しましたので間違いないでしょう」

『…なんたる事だ………』

それはそうだろう。

オルタネイティブ計画3の根本である進行の誘導…

それが図らくも既に人類がもっていた物質に効果があったからだ。

「こちらも単純明快、G元素を全露出するか、遮蔽するか…の誘導する誘導棒…」

こちらもまあ作り方や構成配分などの設計図だけなら、配布する事が可能です。

あとは所有国から買うとかですな…」

こちらも国連経由で設計図が配られる事になる。

「とりあえず自分からの報告は以上になります」

『カオル殿』

「はい？なにか？」

『この総数には間違いないのかね？』

「間違いないと思いますね。どっからきたかは、ブランチエスコハイブを経由した…としかわかりませんが」

ザワザワ

『総数50万か……』

テレビ回線での国連会議が終了した。

あと提出もとめられたのが、魔撃震の戦闘記録だったので、誘導棒作動後の反転突入時からのを、外部記録映像もつけて提出の形にしておいた。

後日談になるが、この記録が衛士シュミレーターに後に使われ、シェイキングダンスとして、吐かずに耐えた衛士は1%にも満たない、
壮絶なシュミレーターになった事になる。

「んん〜と…じゃあ検証と生産かあ…」

とわけでハンガーに向かった。

(今回いったところは…)

M1アストレイ新造、

ストライクナチュラル仕様新造。

フリーダムは核分裂炉が怖いので核融合炉に変更し新造。
ブルーフレームナチュラル仕様。

(さてつとつバーニイきてもらうか…)

とハンガーに放置でバーニイに向かいに行く。

「ん？ガンダムが4機か？」

その際にアムロさんがきた。

「……ん。乗ってみるか…」

アムロさんが乗ろうとしている機体はフリーダム。

「ほう…前のつたバスターだっけ？ににてるなあ…

となると頭痛覚悟か？」

苦笑しながらシートに座る。

イグニッションによりジュネレーターが作動する。

「へえ…8260kwか…なんに使うんだ？」

とコンソールを操作すると…

「大出力ビーム兵器搭載ね…まあいいか…

アムロ、名称不明ガンダム、テストにでる」

フリーダムが動き出す。

「やはり頭が痛くなるか…この系統のコクピットの特徴だな…」
アムロさん違いますよ…」

テストなのでメインエレベーターを使用しゲートをでる。

「単独浮遊可能なのか…」

膨大なるジュネレーター出力で、スラスターに力任せに飛ぶことができるのがわかった。

空中浮遊もできるとの事…

ミノ粉や、ホバーシステム、揚力等使わずにである。

これだけで物凄い無駄な能力使っているのがわかる。

「さて…管制、出てもいいか？標的は用意してある？」

『あ、はいどうぞ。準備できてます。アムロ大佐その機体って…？』

「カオル君が作ったなんかの機体だろう。」

たしかSEEDの世界の系統にってるな…アムロ、いくぞ」

高出力のブースターで浮遊し始め、演習上空を自由自在に飛びま
くる。

そして…

「ふむ……これか？」

ピ、ピ、ピ、ピ、ピ、ピ

マルチロックオン機能を試しだし……

バシユーン

「面白いなあ……」

『アムロさん！何かってにのってんですか！』

「お、カオル君面白いなあこの機体、頭痛するのがいただけないが……」

『コーディネーター向けOSですからね……まったく……後でレポート
お願いしますね』

〓 〓 ジオフロント情報室 〓 〓

「全く……一言ほしかったっすよ……さてバーニイ」

ということでの他の機体の試乗も済ませてもらいました。

バーニイの感想的には半分身体が、

同化的になる感覚がいまいちなれない……との事だった。

（けどなれたら楽かな？

手で掴んだりする、精密操作のマニピレーター必要ないし……）

よう参考との事で…

その他には、

高性能バッテリー

ストライカーパックスシステム、

PS装甲システム、

ラミネート装甲、ナチュラル仕様OS + 特殊操縦システム

アストレイ用のオプションデーター

MSサイズ用レールガン

主な技術的はというところだろうか？

(けどPS装甲システムも難だよなあ…)

核融合炉搭載機なら活用あるが、半年連続稼働で一本が1ヶ月になり、

被弾などすれば更に下がってくる。

(連続稼働には向かないっうわけだ…VPS装甲まちかな？

あと被弾でガリガリバッテリーもってかれるというの…ね

確かミサイル76発当たればフェイズシフトダウンするけど、核融合機でやったらどうなるんだろ？

ただ補給が厄介になるなあ…)

核融合機のヘリウム3は冷却した状態での注入が必要であり、

半分専用施設で注入しなければならぬ。

勿論普通のハンガーでも施設を作れば可能だが…

だから連続稼働が一年近くのタンクをもっているわけだ。

(ま、駆動部分の負荷軽減には使えるか)

PS装甲は衝撃を無効化にする事ができる。
つまり無茶な機動ができるっうわけた。

人間なら関節が粉碎骨折してもおかしくない動き等…

(さてと生産か…)

戦闘報告書を見ながら…

(あゝ対海中戦か…つくってなかったなあ…)

現状対水中に使えるのはトゥーハーデ・ダナン2隻と、ハイゴックのみ…

(となると…爆雷、対水中ミサイル搭載艦か？あと港湾施設か…)

船体はオーブ軍イージス艦の三胴船体
動力源は核融合炉

そこに兵装に噴式爆雷砲、アスロックを詰め込んで、あとCIWS
を8門、

とりあえず無限弾薬自動装填装置、謎の装置等を積む前提の為、
最終調整が必要あり。

とりあえず試作の一隻を注文。

佐渡島基地の海軍港湾施設を旧両津港に設定しておく。
基地工事の邪魔にならない程度に……

(とあとは、現有戦力強化か…あと万が一の侵入対策ね…
侵入対策は工事済んでからで問題ないかな？)
で後回し。

戦力強化はビクトレーミサイル型を15隻追加注文。
最終調整後佐渡島基地に配置予定。
またターミネーターレッグ改をこの間の時点で1000匹だったの
を4000匹に増強。

宇宙においては、
コロニーレーザー四機の生産を注文しておいた。追加で自立型コロ
ニーの注文。

またこの三連戦での被害報告も受け取ってた。
直接戦闘を行ったT-850に被害はでてるものの、
基本中距離砲撃戦を行った為、その他の機体に被害なし。

という結果だった。

T-850の肉はプラントでの修理の形になる。

とすすめた所で……

「お兄ちゃん!!」

「ん？エルちゃん何？」

「キスして〜」「え、エルちゃん!!…キ・キス?…なにかわか
って話してる?」

「え?え〜と気持ちいいことなんだよね?」

(…助けてまりもさん)

「…教えてくれる先生のとこいこ」

「うん」

わかるだろうか…わずか小学生にも満たない可愛い女の子から、
キスして〜ともめられる悲劇を…

(ギユネイ…)

キスを何だかわかってないなら、それはしちやいけない事だと教え
るのが良い大人のマナーだろ…
が、どう教えるべきかを相談しにまりもちゃんのところへ向かって
た。

という事でまりもちゃんのところについた。

「まりもさん…実はカクカクシカジカで…」

「ん〜そうね…エルちゃん、キスは確かに気持ち良いものだけど、好きな人以外にしちゃ駄目なのよ」

「え〜なんで〜?」

「愛を交換する事だから……こんなふうだね」

と、いきなりまりもちゃん俺の顔を手で固定して、唇をうばって舌が入ってきた。

クチュクチュ

みるみるうちにエルちゃんが顔を赤らめていくのが見えた。

なんかしちやいけない事を求めていたのを理解したのだろうか?
プハー

少し息が苦しくなった辺りでまりもちゃんが口を離してくれた。
糸をひいてる……

「ね?だから好きな人と意外はキスしちや駄目なの…わかった」

「うん」

茹で蛸のように真っ赤な顔をしながらエルちゃんが頷いた。

「キスってなんなのかもわかった?」

「はい……」

「エルちゃんあととはな〜い?」

「えっと…あとフェ って気持ち良いことって、
ギユネイにいちちゃんがいつてただけど…今度俺にもしてくれど…」

(ギユネイー!!)

真性ロリータ疑惑発生。

「エルちゃん、それも好きな人以外にはしちや駄目なのよ？
あとまだ早い事…お酒が飲めるようになったらね」

「はい。わかりました」

「他にはない？エルちゃん」

「ないです。ありあとつございました
とお辞儀して急いで出て行った。

「うふふ…可愛い子ね…ちょっと刺激強すぎたかしら？」
(強すぎだと思えます)

「ちっ…続きしましょ」
と、そのまままりもちゃんに襲われて……

……
カオル報告

お察し下さい

明日ギユネイ裁判発生プラグたちました

ナギ少尉「サイクロプスと、ニュートロンジャマーと、誘導棒配布」

作者「まあこれでBETA戦楽にはなるかな？つと…」

ナギ少尉「でもさ、サイクロプスは可能かもしれないけど、ニュートロンジャマーって現有技術で製造可能なの？」

作者「一応調べたんだが、まあそういったご都合主義にしておいてくれ。

でないとその度に400km退避し、退避できなかつたら自爆兵器にしか使えん」

2185

ナギ少尉「元は自爆兵器だからいいんじゃない？」

作者「次はイングランドでやるかもしれないぞ………」

ナギ少尉「ロンドン廃墟ねえ…やだな…」

作者「つうことだ」

ナギ少尉「話変わるけどアムロ大佐、相変わらずのチートぶりねえ…
あとエルちゃん…食われちゃうの？」

作者「エルちゃんというかギユネイの運命は次回にお楽しみかな？」

ナギ少尉「さて、今回は…：まだサブタイトル用意できてないの？
作者…

新しい世界へいきます、お楽しみにい」

第110話 00の世界へ… 投稿日20110420

2001年10月6日

まりもさんの部屋から出てきて…
照明が黄色だ…

(まずはギユネイの件か…)

ほつとくと、エルちゃん5歳が食われるかもしれない…
というのが昨日発覚したので…

(イエスロリータ、ノータッチだろ!)

あ、カオルそれ紳士協定だから、真性には通用しないよ…

(……とりあえず…)

ヒルダさんへとまずは相談で、執務室をノックする。

「ちょっとまっててね」

シユン

4人ばかりC-1の隊員が疲れた顔してでてきた。

ランディ等だ…

かなり着崩れしていて…ランディなんかは上半身裸の状態で、キスマークが目だっている…

ヌポーと廃人のように、多分各々の部屋を目指しているのだろう…

……

「いいわよ」

シユン

入ると、二十才位に見えるビダンさんがいる。

「どおですか？調子は？」

「まあまあね。けどまだもの足りないわ……
ところでわざわざ来た要件は？」

「実はギユネイの事なんです……」

「ギユネイちゃん？どうしたの？」

「エルちゃん5歳にフェ してと……」

「え？……フェ をエルちゃんに？……」

「したがってるみたいですね……なのでご相談なのですが……」

「ん〜そうね…使う事なかったから使おうかしら？」

「はい？」

「例えば…」

机の上にでてくるでてくるデテクル…

鞭、蝋燭、首輪、アナ ホール、

手足枷、ギャグボール、ボディクリップ、

革拘束具、カテーター、浣腸……

「あとあっちの部屋みてみる？アイアンメイデンとかあるわよ」

「……いや…遠慮しておきます」

「調教してロリータ治しておくわ」

「よろしくお願いします」

……カオル青ざめて退出した。

ギユネイの運命はこの瞬間、きまった事はいうまい…。

その後、ハンガーデスクに向かい…

「できてる？」

「うん」

と引き出されたのは培養ポット…と人とみえる物体…

「急増クローン培養装置対照のDNAをいれると、その人自身になる死体…

本来は代替え重要部位の交換に使うんだけどね」

「人そのもののクローンはできないんだろ？」

「魂のコピーはできないからね…もしできても別人になる。ま、一週間かければ、魂の移植ならできて蘇生可能だよ。末期癌で転移しまくりならその治療もありだね〜」

「まあ…これで取得できる選択幅が増えるから…な」

「マスターには適したものだね〜」

「それじゃあいつてくるわ」

「いつてらっしゅ〜」

|| || ガンダム00の世界 || ||

ガンダム00…この世界は化石燃料が枯渇、太陽光発電を大気圏外に設置、宇宙太陽光発電システムとして電力、軌道エレベーターにて宇宙開発を行っていた。

その宇宙太陽光発電システムおよび、軌道エレベーターを所有しているのが、

AEU、ユニオン、人類革新連盟の三大国家連盟になる。

世界は、その所有してる裕福な恩恵を受ける三大国家連盟…とそれに属さない貧しい国にわかれていた。

三大国家連盟は互いに互いを牽制し、熾烈な軍備開発競争による冷戦状態が継続し、
それ以外の国々は紛争、内戦にあけくれていた。

その流れを変えるべく、ソレスタルビーイングが介入している。

タクラマカン地域、長い間砲撃されつつある4機の機体がそこにいた。

ソレスタルビーイングに所属するガンダムだ。

絶え間なく撃ち込まれる砲弾、
繰り返し補給し交代し、また遠距離攻撃を行う。

それをGNフィールドを張りつづけ耐えていた。

カオルはその撃ち続けている機体達に同化した。

(沢山あるなあ…)

まずはユニオンが撃ち込んでいる陣中から、警備のリアルド、
射撃しているリアルドホバータンクとフラッグ陸戦重装甲型。
AEUは爆撃を担当しているヘリオンがいる。

警備のティエレンとティエレン対空型、撃ち込んでるティエレン
長距離射撃型。 また様々なトレーラーベース…

それぞれを同化取得すると…

『第23MS隊は交代せよ。現在作戦経過時刻は14時間半だ。最終捕獲作戦まで約30分…ガンダムのパイロット達を疲れ果てさせる』

(動けないって…つかれるよなあ…)

既に夜の闇が辺りをおおっている…
しかし、この辺りは爆炎で明るい。

そして…突如として砲撃がやむ。

(今だ!)

カオルはガンダムエクシアに向かい急いでとりつく。

エクシア、ヴァーチェ…
ヴァーチェについてくと後ろからパトリックのイナクトが襲いかかる。

『おおっとう……どおした？動きが鈍いぜガンダム!!……やれ!!』
ヘリオンの捕獲型が陣形を組ながら…
動きが鈍く対応できてない。疲れがでてるのだろう…
捕獲されるヴァーチェ。

『ガンダム確保!!』

『よくやったあ！俺のおかげだなあ』

カオルは、ヘリオス捕獲型とイナクト指揮型と同化したあと、キュリオスへと向かうと…

ティエレンがキュリオスをすでに捕獲、移送していた。

ティエレンの高機動型及び指揮官型、超兵型、キュリオスと同化して…離脱。

次にデユナメスに向かう。

オーバーフラッグに捕獲されてたので同化、フラッグカスタム、オーバーフラッグ、デユナメスを同化した。

朝日が見え始める。

ガンダム達は捕獲され、研究され、拷問される運命である…

が、赤いビームがはしり、オーバーフラッグが背後から打ち抜かれる。

また一機…捕獲してた機体も手放して、散会し離脱するオーバーフラッグ。

赤いビームを撃ち込んだ機体が目の前にあらわれ…

カオルはガンダムスローネアインに同化した。

「君の仲間のマイスターの所にも既にわたしの兄弟達が救出に向かえにいつてる」

『どついう事だ?』

『ヨハンにい』

「ネーナか」

『こつちのミッションはクリアしたわ』

「そつか、ネーナ、GN粒子最大領域で散布、現空域より離脱する」

『了解ね』

『GN粒子最大散布?何をやる気だ?』

「ああ、君らの機体にはそういった機能は、ついてなかったんだね。GN粒子にはレーザー無効の効果あるだろう?」

『ああ』

「そのGN粒子が広範囲に散布できれば？このようにね」

ガンダムスローネドライが、GN粒子を広域散布しはじめ、赤い粒子が空を覆う。

「こうする事によって、有視界でしか僕らを発見できなくなる範囲が広くなり、結局は見つからなくなるわけだ」

『なる程……』

「さっ自力脱出できるかい？」

『……問題ないな』

「じゃあこちらも撤退するから」

『まて！！君らは』

「後程会いに行くよ」

『ヨハンにい』

『こつちも問題ないぞ』

「ネーナ、ミハエル帰還するぞ」

しばらくすると合流してきた。カオルは機体から離れると、スロー
ネツヴァイ、ドライにそれぞれ同化し離脱する。
ついでに電磁ナイフも取得しておいた。

「”世界扉”」

世界扉で世界を渡る

2日目：既に半ばだが…

カオルは世界扉から出てくる。

ユニオンのアメリカMSWARD基地…

目指して、幻影かけ飛び立つ。

カオルは基地につくと、ついでに研究技術等々も取得しちやえくと
ばかり、

基地と同化し始める。

結構おもしろげなのも見つかってるようだ。

さてそのころ…

研究施設の塔の最上階の執務室で、

一人の老人がパソコンに向かってる。

そのご老人はエルフマン教授…

MSの開発のユニオンの権威者だ。

「あつ…」

手の動きがとまった。

考えがまとまったようだ。

基地に接続していたパソコンが突如ハッキングされる。

「な、なんだ？」

画面には… You have witnessed too much…

あなたは知りすぎた…と表示された。

「なに？」

突如としてサイレンが鳴り響く。

「あつっ、何事じゃ」

『アラバマシティより通達、ガンダムと思われるMSが三機、EW9877方面から当基地にむけて進行中全MS部隊「なんとスクランブル」』

サイレンが鳴り響くなかパソコンを操作しようとして諦め…

『敵ガンダム主砲らしきものを当基地にむけてる！！総員退避』

「なにい！…まさか狙いはこのわたしか？」

(「」名答です。俺も狙ってます……さてそろそろか……)
カオルはサイレン鳴り響いたと同時に執務室へと同化をしていた……

「はじめまして、エルフマン教授」

「き、君は？」

「残された時間はございません」

「つ、つまり？」

「ええ、あなたの運命を知って異世界へのお誘いに来ました。知識の探求、研究に有能な頭脳をいかしては如何でしょうか？」

「ふむ…名残惜しいが興味あるの…のったぞ」

「わかりました」

とエルフマン教授を引き込む。

「」幻影”」

カオルの一部をのばして伸ばした部分に幻影をかけた。本体は外壁と同化させる。

そして、赤い光が建物を焼き払い、

「うわああああ」

幻影がかかったエルフマン教授が叫びながらとけて……
いや伸ばした部分を吸収し離脱した。

(さて一仕事終了…次はつと…)

外にでると、オーバーフラッグが救援にかけつけてくる瞬間だった。

そこにガンダムスローネツヴァイがファングだしながら迎撃しにく。
そこにガンダムスローネツヴァイがファングだしながら迎撃しにく。

キれているグラハムに交わされ、集中攻撃をうけるツヴァイ。
足がとまった。

そこに切り込んでいくオーバーフラッグ、

罅迫り合い状態に陥いる。

その瞬間同化して、

「これがフラッグのちからだあ!!」

『このままではやられる……わけねえだろう!』

接触回線で聞こえてきた瞬間、

フラッグがいくつもハード、俺が同化している機体につきささる。

「ぐあああ」

コクピットの左側を見事に貫いてる。

(あつ…助かる?)

制御系がこときれ、浮力をつしない……

「隊長……フラッグを……」

瞬間引き抜いて、離脱爆発するフラッグ。

急いで無事な建物に向かい、同化して入り込みハワードをだす。

(うわあああ……)

左半身が肩からがなく、腹も大きくえぐられている。

重要な臓器も焼き切れていて、ほっといたら死亡、いや即死だろう…

ゴッフ

「き…きみ…は？」

吐血しながら聞いてきた。幻影を解除してた為だった。

医療ポットをだしながら、

「とりあえず助かったら全てわかりますよ」

ハワードを医療ポットにいれて作動させる。

(血だらけ…だなあ……一回洗濯、着替えるか…)

「世界扉」

カオルは世界を渡る。

……

カオル報告

ガンダムエクシア

ガンダムデュナメス ガンダムキュリオス ガンダムヴァーチェ

ガンダムスローネ全機種

リアルド

リアルドホバータンク

フラッグカスタム

オーバーフラッグ

フラッグ陸戦重装甲型
ヘリオン
ヘリオン捕獲型
イナクト
イナクト指揮型
ティエレン
ティエレン長距離射撃型
ティエレン対空型
ティエレン高機動B型
ティエレン高機動B指揮官型
ティエレン高機動超兵型
トレーラーベース
オプシヨン
射撃管制
キャリア
輸送

第110話 00の世界へ… 投稿日20110420（後書き）

作者「という事で初登場の00の世界になります」

ナギ少尉「えっとガンダム00だと…美少年が沢山の美味しい世界だっけ？」

作者「はい、腐に入らない…：まあ…確かに…前2年程前かな？ゲームショーで00の2ndシーズンの発表ステージイベントあったんだけど、
声優目的なのか、キャラ目的なのか…女子率がめっちゃ高かったなあ…：」

ナギ少尉「作者は何目的？」

作者「ガンダム目的以外にとらない！！つつかゲーム全般なんだけどね…

アイレムのバンピートロット2まだでないかな？と毎年通ってる」

ナギ少尉「皆勤賞？」

作者「いや、一回だけ交通事故で入院してていけなかった…：あとは通ってるよ」

ナギ少尉「……あきない？」

作者「祭りだからあきない 参加する事に意義あり」

ナギ少尉「脱線したけど…この世界の特徴でGN粒子なのよね…
前のSEEDの世界はニユートロンジャマーだったけど…」

作者「ま、そういった意味では人類が不利になる条件あるから使い
づらかったよな…」

けどそれ以外は化石燃料枯渇したら枯渇したなりに、かなり発展は
してるから、そこにね」

ナギ少尉「みたいね…さて次回予告いつちやいますか！ さて次
回は……引き続き00の世界、題名不明ながらも、
皆さん予測できそうな、あの人が！…お楽しみにい」

3日目…

天極市：ガンダム00の人類革新連盟の軌道エレベーターのある都市の事である。

カオルはその近辺で技術取得に励んでいた。

人類革新連盟は他陣営とは遅れて水素内燃がメインであった。というか、水素を極めているといってもおかしくない。

同時期の他陣営が宇宙太陽光発電の電力利用によるバッテリーに既に移行したのに、

いまだに水素内燃にあるのはそういった意味合いがあるだろう…
なので…

（フォー水素精製プラント！！）
や、

（はうー水素ガソリンスタンド）
とか、

（水素内燃自動車だあ）
等々、電力でなく水素をメインに発展してたので取得しがいがあつた。

あとは一応軌道エレベーターと、
リニアトレイン、

宇宙太陽光発電所も取得し、ついでに他陣営の太陽光発電や、ユニオンの軌道エレベーターにまでいってしまった。

予備で1日とってて正解であつた……

翌日…

リニアトレイン公社会長別宅付近ではつっていた。

門のところにターゲットの絹江・クロスロードさんが来た。

インターフォンに向かい、

「JNN特派員の絹江クロスロードと申します。

リニアトレイン公社総帥のラグナ・ハーヴェイさん御在宅とお聞きしております。

是非とも取材させて頂きたいのですが…」

『総帥に伺ってまいります。しばらくお待ちください』

……

『申し訳ございません。只今ご面会中につき、取材は受けられないとの事です』

「あ、でしたら面会終了後にもお時間取らせて頂ければ…」

『申し訳ございません。総帥はこの後ご多忙ですので…』

「わかりました。ありがとうございました…」

とほとほと離れ黄昏れている…

「はあ…取材は空振り…どうすれば」

フィン

電動車の軌道音が聞こえる。

「あっ」

フィィーン

赤い車が出ていく

「さつき総裁は面会中だっ…」

たたたた

車の前にでて立ちはだかり前に立ちはだかった

(死亡ふらぐううう)

キィイ

車がとまる。

「あの」

「何かごようかな？」

窓をあけながらサーシエスが答える。

「わたし、JNNの特派員なんです、2、3お聞きしたいことがあるのです。

よろしいでしょうか？」

と身分証明に記者パスをだしながら…

「JNNの記者さんねえ…構いませんが、私は急いでまして、車中でよれしければ…」

「あっ…いえそれは…」

「やめておきますか？」

「……ではお言葉にあまえまして」

「助手席にどうぞ」

サーシエス手を席にふりながら…

そう言われると後部座席にはすわりにくいだろう。

「失礼します」

絹江さんが助手席にすわり、ドアを閉め、シートベルトをしたのを軽くみて、

サーシエスは車を発進させる。

もちろんカオルはとりつき済みだ。

「お忙しい中取材お受けしてありがとうございます。」
では、このレコーダー使わせて頂きますので…」

「構いませんよ」

「まずは、お名前お伺いしてもよろしいでしょうか？」

「ゲイリー・ピアッチといいます。記者さんは…？」
「さっき軽く聞き流したので」

「あ、失礼しました。改めまして、JNN特派員の絹江・クロスロードといいます」

「絹江・クロスロードさんですが…いいですね。あなたのような美人の記者さんがいて」

「そんな…」

「で、私にききたい事とは？」

「間違っていたらあやまりますが、ゲイリーさんは先程、トレイン公社総裁ラグナ・ハーデン氏とあわれていませんでしたか？」

「ええ、あいましたよ」

「どのような話を？」

「わたしは流通業を営んでましてねえ…物資の流通確認に総裁に報告にきたんです」

「わざわざ総裁に？」

「ええ」

「それは私用ですか？」

「ええ私用です」

「差し障りなければ、その物資が何か教えて頂けないでしょうか？」

「ふっ…GNドライブ」

「GNドライブ？リニアトレイン関係の機材か何かですか？」

「いえ、MSを動かすエンジンです」

「MS？」

「ガンダムですよ」

「はっ！？」

「知っているでしょう？ソレスタルビーイングの所有する、あのクルジスの少年兵がパイロットをしている、あのガンダムですよ」

「クルジスの…少年兵…」

「その餓鬼をです…誘拐して洗脳して戦闘訓練受けさせゲリラ兵に仕立て上げたのは、何を隠そうこのわたしなんです」

「あつ…あなたは…？」

脅え始めた…やばい話になったと感じたのだろう。

「戦争屋です。戦争が好きで好きでたまらない。人間のプリニティぶな衝動に準じていきる最低最悪の人間ですよ…」

「あ…ああ…」

「さて…あと何か知りたい事ありますか？

あ、あと私の本名はアリーアルサーシエスといいます。

その分野では有名でしてねえ…

…なに、此処まで知ってしまったては、わかりますでしょう？」

「な、何故？」

「世の中には知ってはいけない秘密ってのは沢山あるのですよ。その一線を越えてしまった。ただそれだけですよ…」

「ひっ…」

ガチャガチャ

「無駄ですよ。何の備えもなしにあなたを乗せますか？おっと…と携帯電話を取り上げられた。」

「駄目ですね、連絡をとろうとするなんて…」

フィイン

「さて…つきましたよ」

カチャリ

と銃を構えた。

「さて、ゆっくり降りてもらいましょうか…と降車をうながしたが…」

絹江さんはダッシュで飛び出したが、
ターン…！

銃声が響き渡って、絹江さんが前めに倒れた。

「逃げなければ一瞬で苦しまずにしてあげたものの…」
とサーシエスは撃った痕跡を手袋をはめながら確認し、

「気絶してるが、もう助からんな…さてと…」

携帯電話を壊したあと物取りの犯行にみせる為にあさりはじめ…

「名前は偽ってはいないようだな…あとは…」

取材メモリらしいのを探して処分するためにもらう。

「さて…こんなものか…」

サーシエスは車のつて去っていった。

そのうち夜の闇が訪れ、雨に濡れながら…

「う、あ……と、父さん…サジ…」

写真に伸ばした手が落ちる。

急いで救急ポットにいれ、髪を抜く。

ポットを作動させ同時にポットにコマンドを打ち込み、衣服を脱がし始めて素っ裸にさせ、衣服を回収した。

培養ポットにむかい、衣服を入口に入れる。

髪の毛をDNA投入装置にいれ、医療ポットとリンクさせる。

コマンド…医療ポット投入時の状態…

培養ポットが作動し始めた…

みるみる人体らしきものが形をかえてゆく。

ものの10分…衣服が着せられて、

腹にあなのあいた絹江・クロスロードの死体が出来上がった。

血だまりの中に死体を置き直す。

(よし…絹江・クロスロードさん救出つと…)

「世界扉」

世界を渡る。

カオルは衛星を打ち上げると、ラグランジュ1を目指した。

目指しているうちに5日目になる。

そして、ラグランジュ1で補給しているプトレマイオスを発見。

同化すると格納庫で艦装作業作業している三機を発見、
各種オプションパーツ、テイルブースターとか等も勿論取得した。

『Eセンサーに反応敵部隊を補足しました相對……』

(始まったか…さてと…)

カオルは館内放送をききながらデユナメスにとりついた。

『接近する三隻はユニオンのヴァージニア級と推定』

『有視界戦闘領域まであと4200』

『資源衛星を利用しながらトレミーは後退、キュリオス、ヴァーチ
エ防衛戦用意、デユナメスはトレミーで待機』

『キュリオスをリアフィールドに固定しました』

『敵輸送艦からMSが発進』

『ヴァーチエをリニアフィールドに固定』

『敵MS擬似GN搭載型26機』

『敵MS部隊の中にスローネがいます!』

ロックオンは未だに解除に戸惑っているようだった。

そしてやっと…ロックオンが入ってきてコクピットに乗り込んできた。

『キュリオス、テイルブースター破損。超兵と思われるMSと好戦中』

「急がないと…な…」

GNドライブが起動し始める。

『ヴァーチエ、敵MSの集中攻撃をつけてます』

『ガンダムに後退命令を』

「デユナメス出撃する!」

『ロックオン』

「GNアーマーで対艦攻撃をしかける。あんたの戦術通りにやるって事だ」

『でもその身体で……』

「ハロ、悪いが付き合ってもらっぜ」

「リョウカイリョウカイ」

「アリアル・サーシエス」

『わかったわ…コンテナより直接でて頂戴、GNアーマー射出、ドッキングシークエンス自動制御スタンバイ』

「ありがとうよ」

デユナメスがコンテナより直接宇宙空間にでる。

「ガッタイガッタイ」

GNアーマーとドッキングし…

「GNアーマー、ロックオンいくぜっ！」
一路戦場を目指し始めた。

……

『ヴァーチエ、キュリオス、トランザム起動』

「あの光は……おいおい使いきったんじゃ?…」

進路をヴァーチエの方に向け…

『GNアーマー…ロックオン・ストラトス!』

「悪いが狙い撃てないんでね…圧倒させてもらっぜっ!」

「ホウゲキカイシ・ホウゲキカイシ」

左腕に装備されたGNミサイルの大群がジンクスに襲いかかる。
ほぼ撃墜し…

「このまま対艦攻撃に移行する」

『ロックオンそんな身体で…』

「ふっ気遣い感謝するよ…だがなあ…今は戦っ!」

まもなくデユナメスは敵艦の手前にたどり着き…

「一気に本丸を狙いつつ!」

GNツインライフルが起動し、敵バージニア級を一隻貫く。

「メイチュウメイチュウ」

「次い」

次弾も命中、轟沈させ残るは一隻…

「これで終わりだあ！！」

ガガン

エネルギーチャージャー中のツインライフルに命中弾が貫き…

「なに？」

爆発するライフル。

「クツ、しまったあ」

アーマーが制御不能に陥りさらに敵から…

「グア」

命中弾がGNアーマーに命中。

「くそう」

とGNアーマーから離脱、そこにバージニア級から更なる命中弾で、爆散するアーマー。

「くつ…あれはスローネ…アリアルサーシエスツ！！」

スローネを追跡しはじめた。

「くつ利き目のせいだ」

命中弾が当てられない…

スローネがビームサーベルを出してきたので、

こつちもビームサーベルをだし切りかかるが受け止められ、鏝迫り合いに陥る。

「KPSAのサーシエスだなあ」

「へっクルジスのガキにきいたかあ？」

「アイルランドで自爆テロを指示したのはお前かあ！？何故あんな事を！？」

「俺は傭兵だせ…それになあ！」

押し返えされるがすぐに切りかかり、
「なるっ！」

再び鏢迫り合いの状態におちいり、

「AEUの軌道エレベーター建設計画に、中東が反発するの当たり前じゃないかあ…！」

「関係ない人間までまきこんで」

「てめえだって頃合じゃねえか。紛争根絶を目指すテロリストさんよう…！」

「咎はつけるさあ…お前を倒したあとでなあ…！」

ミサイルを打ち出すがかわされた。

距離が離れた為すぐさま、GNピストル撃ちながら追跡をする。

「絶対許さねえ…！」

追いつき、ビームサーベル切りかかりる。

「みてるお…平和を乱す根源が…！」

再び鏢迫り合いに陥り…

「なめんなよ！同じ穴のむじながあ」

「てめえと一緒にすんじゃねえ…！」

スローネが逃げ出したので再び追いかけるが…

「俺はこの世界を「テッキセッキンテッキセッキン」「遠距離からジंकクスが割り込もうとしていた。」

「邪魔すんじやねえ!!」

GNミサイルを打ち出す。

「なっ!!」

ジンクスがミサイルかわさずに突っ込んできて、右手に回り込んできて…

「しまったあ」

右目が怪我の為視覚がなく反応が遅れて、右腕を肩からもってかれる。

「ぐっ…サーベルもつかれたか…なるっ」

ファングが襲いかかってきた。

それに対してピストルで迎撃するが…

「ロックオンロックオン」みえねえ!ぐわあ」

ファングが連続して突き刺さり…

「ぐわああああ」

「ソンシヨウジンダイソンシヨウジンダイソンシヨウジンダイ、セントウフノウセントウフノウセントウフノウ」

機体最小出力に抑え隕石の影に隠した。

照準マピュレーターを外し、コクピットハッチを解放する。

「ハ口…デユナメスをトレミーに戻せ…」

「ロックオンロックオン」

「命令だあ」

「ロックオンロックオン」

「心配すんな…生きてかえるさ…」

「ロックオンロックオン…」

ロックオンロックオン…
ロックオンロックオン」

外にでるロックオン…

カオルも機体から離脱し少し離れて追跡する……

ロックオンは、GNアーマーのキャノンにたどり着くと、

キャノンの端末からケーブル伸ばして照準マピュレーターに接続した。

ロックオンが狙っている。スローネも気がつき、とどめをさそうと

……

ロックオンの手動操作によりGNキャノンが最後の一発を撃ち放つ。スローネを見事貫き破壊するが……

最後のあがきのビームが、キャノンの砲身を貫き爆風で押し出される。

何かつぶやいてる…が接触してないからわからない…

遠くから刹那ののるエクシアが近づいてくる。

(ソロソロか…)

砲身がスパークしている…

小爆発がおき…

ロックオンが地球に向け指で銃を作り、

「俺はやだね…」

そして爆風が……襲う瞬間引き込み、押し出されるように隕石を

目指す。

隕石につき、医療ポットを出し、ロックオンを引き出し…

「き……きみは……？」

「後程説明しますから……」

医療ポットを作動させ、空気が充満したのを確認すると、
コマンドを入れパイロットスーツを溶かし始めた。

ロックオン、いやニール・ディランデイは強制的に眠らされた。

医療ポットを引き込み…バージニア級の館内に入り、世界扉を唱える。

カオルは世界を渡る……

……

カオル報告

ブトレマイオス

GNアームタイプD

オプシヨンパーツ

水素関連

宇宙太陽光発電システム

軌道エレベーター

作者「主役級がこれで三人目だなあ」

ナギ少尉「ロックオン・ストラトスねえ……
確かロリコンでしょ？フェルト狙ってたから」

作者「へ？ロリコン？」

ナギ少尉「だって他のSSでもそうだけど、フェルト14歳よ」

作者「……ほんとだ…ロリ…つうかあんなバインバインな14いる
かあ？」

グラビアアイドルでもやってけるわ」

ナギ少尉「霞ちゃんなんか狙われそうよね」

作者「あ…ありえそうだな…」

ナギ少尉「で霞ちゃんも大人の階段登っちゃうの」

作者「いやいや…純粋なままでいてほしいさ…」

ナギ少尉「さて、次回は…霞ちゃん危機一発！お楽しみにい

作者「まてゝサブタイトル勝手にきめんなあああ」

次回サブタイトルは普通に 00より帰還です。

ロックオン暴走するか？

第112話 ガンダム00より帰還と207A小队 投稿日20110424

2001年10月11日

深夜未明に帰ってきて、そのまま就寝。

で朝になりハンガーにいかうとすると……

(ギユネイ??)

犬耳としっぽをつけて首輪から鎖で杭に繋がれています……

「なあ…ギユネイ…なにしてん？」

「わん」

「いや…わんじゃなく……そういった趣味？」

「わんわん」

首を振っている…

「誰の命令？ヒルダさん？」

「わん」

首を縦に…

(…………あ、調教か…………)

「ん……じゃあ頑張れよ」
「と、いこうとすると……」

「カオル大将助けて下さいよ……エルちゃんと遊ぼうとしたら……」
「勿論足をとめて、」

「…………どう遊ぼうとしたの？」

「え？えつと……それは……」

「人に言えない遊び？」

「えーと……ウイナーさん遊びを……」

「ウイナーさん遊びってなに？」

「…………ま、まあ……」

「……ギユネイ……」

とヒルダさんが鞭をもって…

「ヒィッ」

「誰が人間の言葉話して良いっていったの??まだ、しつげが足りないようね…」

と嘔きで…

「まだ反省はしてないようです」

「今日の朝飯は抜き、昼間はドックフードよ」

「そんな殺生な！」

「あ、昼飯も抜き？」

「ワンワン…！」

「よろしい。昼飯は抜かさずドックフードよ」

(反省するまでこの調子かな?)

「じゃ、頑張ってください…」

とハンガーデスクにむかって、
ハンガー内にシエルターを一つだけだした。

そう、最高年齢のエイフマン教授72歳だ。
しばらくすると扉を開けて出てくる教授…
開発部へと配属してもらった事となった。

他には、医療室にロックオン、ハワード、絹江さんの医療カプセル
をおいておく。

その後ハンガーにいき、一通り作ってみる事にする。
まずはイナクト……

(あちゃー)

そのままだと動かない事が判明したというか忘れてた。
イナクトは主動力を太陽光発電システムから受信して行動を行って
る。

つまり受信し続けている限り無限動力なのだが、ないと動かないデ
カブツ…

なので基地内核融合炉からの受信に変えました。

ティエレンとフラッグは無事に作成。

スローネは……今回は作製せず。

擬似GN粒子の毒性がまだ解決ついてない為だ。
ガンダムデュナメスを作製してみた……

うごきません

(やっぱりな…)

ようするに燃料というかモノポールがからっけつなのだ…

(ん〜電力だけは代用できるが…)

なんかビームライフルとかすべてGNドライブから直結回路がある
…つまりGN粒子が必要みたいなので、

(中身をかなり作り替えなきゃ無理!)

の結論がでて、とりあえず使用不能の札をかけて、ハンガーに保管
しておきました。

さて他の作製した、ティエレンは水素内燃が主動力、
フラッグはバッテリー+水素ジェットという事だった。

(けど水素エンジン車サイズのがあったのは幸いだな)
取得した中であつた。

バッテリーを主動力にするには電力が必要…つまり大規模施設、
が水素エンジンを主動力にするには、スタンドや、補給施設さえ整
えれば…との形。

リアルの水素エンジンはまだ窒素酸化物が発生する為、
もちろんガソリン車よりかは少ないが…の問題もある。

また燃料タンクの問題もある。

他にはエネルギー率…

まだまだ発展途上の燃料であつた。

が、今回取得しにいった水素関連技術や、施設はそのような問題もクリアしている。

エネルギー効率が自家太陽光発電を使って海水から触媒なしでの取得により、

クリーンエネルギーとして成立、

また水素エンジンに関して窒素酸化物も発生せず、
高圧超低温燃料タンクがあり…

また長い間実績も積み重ねて信頼性も増していた。

その為、現状北海道の人工石油精製に頼りきっている帝国には、朗報の技術であろう。

また世界的にみても中東がBETAの占領下にある今、
海上施設によるサイクル燃料として開発、利用が進んでいる中、
欲しい技術の一つであるのも明白だった。

コロニーは水が貴重なためひろまっても、電動車メインになるが…

(あと宇宙太陽光発電システムねえ)

核融合炉には発電効率負けるものの、この西暦のは、
劣化スピードが遙に現有のよりも遅いのだ。

(あとでスペースコロニーのパネルを変えよう)

と思うくらいUCのと比べて発電効率が違った。

技術的には大きく躍進し、

宇宙太陽光発電システム、

水素エンジン、

水素精製プラント

水素ジェットエンジン、

水素発電、

リニア、

エネルギー送受信システム、

また装甲材浸透システム

なところだった。

GNドライブが載ってない？

確かに半永久的大出力は美味しい。

また浮力が発生できるのも…

が、有害である、生産をとるかワンオフをとるか…

また特性が問題であった。

ニュートロンジャマー同様、レーダー阻害、通信阻害があるのが痛かった…

全戦術機に搭載すると、有視界戦闘のみに陥り、人間不利フラグ発

生の為、
できて一機、または少数だろう…

(まあガンダム00は対人間だから、有視界戦闘にする必要あったんだよなあ…)

けど疑似太陽炉が量産されて…優位が覆された。
リーダー阻害の特性を逆利用で探知に使われた…と)

あと現状は有害である赤いGN粒子が発生する疑似GNドライブか、
生産にえらく時間のかかる真性GNドライブか？の2択になる。

(どちらも現状ではないな…)

真性GNドライブが何故ないな？は燃料製造特性で駄目なのだ。
モスポールを収集し、精製する必要がある。しかもレア物質なので
えらく収集に時間がかかるということだ。

…とやっつてる内に時間になった…

(後回しで明日かな？)

なんの時間かって…？それは…
今日の午前9時、場面は講堂…

「気をつけ!!」

「分隊、整れーつつ！」

「ただ今より、国連大太平洋方面第11軍、横浜基地衛士訓練学校、第207A衛士訓練小隊解体式を行う」

そう、A-01の候補生達が半年間の厳しい実技訓練をおえ、衛士として改めて戦場に出れる日となった。

「本日付けをもって諸君は、人類防衛の前衛たる国連軍衛士の資格を得た。

その榮譽と名譽をかみしめ、必勝の気概をもって、勝利と未来を掴み取る為に、その持てる力を尽くして欲しい」

「引き続き衛士徽章の授与をおこなう」

「涼宮茜訓練兵！」

「はい！」

「ただ今をもって、貴官は国連軍衛士となった。……おめでとう少尉」

「ありがとうございます」

つつがなく徽章授与はすすみ……

「ラダビノッド司令官に対し……敬礼っ！」

「これを以て、国連大太平洋方面第11軍、横浜基地衛士訓練学校、

第207A衛士訓練小隊解体式を終わる」

「207A衛士訓練小隊 解散ッ！」

「「「「「ありがとうございましたっ！！」「」「」

セレモニーが終わり…

予定では、まりもちゃんが、手続き一般、後に伊隅隊長の後に機体関係に関してハンガーに来る予定だった。

部下に任せるといふ手もあるが、石橋達の部下になり、力になるわけだ…

やっぱり手渡ししたい…つうものがある。

なので、彼女らに渡す魔撃震をA-01の専用ハンガーに納品する作業になる。

コバツタに操られ移動する魔撃震、無事にハンガーに収まった。

(さてそろそろかな?)

伊隅に引きつられて、ハンガーに入ってくる新人5名がみえてきた。

「わぁ」「すご」「茜た…」「強そう」「きれい…」

彼女らが魔撃震を始めてみかけた感想だ。

「整れーっ！！大將に対しー敬礼っ」

答礼で答え、

「なおいっ」

「楽にしているよ…改めて、異世界軍の責任者である渚カオル大将だ。」

「まあでも君らに対しては年齢もちがいしぎつくばらんね…」
と彼女らを見渡す。

「さて俺がきたのは、この魔撃震の引き渡し、パーソナルデータの登録と軽く説明なただけど…」
改めて、自己紹介もしてくれるかな？」

「はっ！！涼宮 茜少尉といます。コールサインヴァルキリー10です」

「柏木 晴子少尉。コールサインヴァルキリー11よろしく願いいたします」

「築地 多恵少尉。コールサインヴァルキリー12だど」

「麻倉 美桜（みお）少尉。コールサインヴァルキリー13です」

「高原 由希少尉。コールサインヴァルキリー14です」

「よろしくな。じゃ、パーソナルデータの登録をすましちゃうから、まずは涼宮から…」

シートにすわってくれ…強化服はまだいいよ」

網膜スキャン開始……

生体DNA登録……

「よっし…これで君らの一人一人の専用機となつたわけだ…」

「私達の専用機…」

「さて、こいつが今まで乗っていた吹雪と違う点を、いくつか説明しておく…」

まずは耐久性…戦車級にたかられても安全だから、パニックに陥らないように。

次に出力…今までのと違い核融合炉を使っているから、また燃料も心配なくなってる。

あとは乗って慣れるかな？」

「カオルさん、戦車級にたかられても、大丈夫って本当にですか？」

「俺が身体はって検証してるから大丈夫さ、保証するよ」

等々質問こなして…

最後の締め…」

「君らはこの魔撃震をかって、戦場を駆け抜ける乙女になる。

力となり槍となり、BETAを刈る刃となれ、異世界の力でもってなぎ被うのだ…いいな…！」

「「「「「はいつ…！」「「「「「

ナギ少尉「兄貴まだ出てこないです？」

作者「まだ重体だからね〜一週間後か…」

ナギ少尉「勿論C-01入り？」

作者「ん〜まだ未定……あ、前回のロリコン疑惑なあれ調べたらオールワンダーっぽいね」

ナギ少尉「オールワンダー？」

作者「下は十二歳から上は五十歳まで……」

ナギ少尉「なるほど…なら霞ちゃんの純潔は守られそうね
あ、ギユネイ君は治りそう？」

作者「ありや……無理かもな…クエスにはしっただけど、振られて傷んでさらに幼年に……
ヒルダさんの技では治らなかつたと……」

ナギ少尉「犬型MSつくつたら？調度いいのあるし」

作者「コクピットの操縦シートも犬型か…」

ナギ少尉「それで骨をあたえると、ちっこい工作特殊メカをだすの」

作者「タイムボカンシリーズね」

ナギ少尉「ばれちゃったか…さ、次回は…カオル人生の節目！！
お楽しみにい」

第113話 カオル、人生の節目 投稿日時20110426

2001年10月12日

昨晚、イッシーが最近さみしい…ってすねてたので、
イッシーの部屋で一晩すごしていて…

朝方、……

(……?下が……あっ)

…
モソモソ

「おはよう…ケフ」

布団の中から出てくるイッシー…口もとが白い…

「ああ、おはよ…」

「美味しい…ってきいてたんだけど…なんか…」

「え…?のん…だん？」

「うん」

顔を真っ赤に…

ギュッと抱きしめちゃう程可愛く…
我慢できずに抱きしめ…

「ありがとう…気持ちよかったよ」

「うん……」

しばらく抱きしめていて…

「あ、時間……シャワー浴びるね、カオルはゆっくりしてって」

(まあ…呼ばれてるのが11時だしな…)

今日は帝都城に登城するようにとの事で呼ばれていた。

「ああ、そうするよ」

と、シャワーの音を子守唄にしようー休み……

……

のっそり起きて、服をきたあと、イッシーの部屋を後にする。

スパの朝風呂に入ったあと身嗜みを整え、カオルは飛びたち帝都城
に向かう。

つくと……いきなり殿下の私室に案内された。
(……………何故?)

「殿下、何ようでしょうか？」

「カオル殿、夜の営みを……」

「え？、いや、殿下と結婚したら……」

「結婚、いや婚約したら可能ですね？」

「ええ……まあ……………」

「言質とりましたわ。ききましたね？月詠」

「はっ確かに……」

と、書類を出された。婚姻届けだ。

「いや、まりもさんや、石橋がいるので……」

「よくみて下さいまし」

と言われてみると…重婚届けとかかれてる。

「重婚届け??」

「実はこんな時限律法を作りましたの」

とまたまた書類を出された。

ざっと見、要約してみると…

BEATの侵攻による国難に対し、男性減少による人口増加を目的とした重婚制度。

ただし優良である旨である事。

具体的には戦果をあげる、または表彰を受ける等など…

「……………」

「さ、これで結婚できますわね？」

「え、え〜と……………」

よく重婚時限律法を見直すと…

(あっ…)

重婚できる要因の一つに現時点の妻の承認がある事となっている。

「殿下、この部分ですが…」

「……さあ？どの部分さしてますの？見えません」

（すつとぼける気満々だったな…）

「とりあえず、自分としては今の恋人の二人が一番大切なので呼ばないと…」

との事で渋々、イッシーとまりもちゃんが登城する形になりました。

2242

それまでに重婚制度における財産等々の問題も説明をうけていた。基本この制度を利用する場合、妻の財産は独立したものとし、統合はしない。

そもそもそのような夫に財力がない限り重婚も成立できないだろう…との事だった。生まれた子供に関しては、重婚した人数分を割り、その妻と合計して計算をする。

また夫の収入に関しては基本的に等分が好ましいが、きちんと話し合いを推奨する。
等々

と説明をうけている内に二人が来たので、

殿下とともに…三人と婚約、10月20日に合同結婚…の形になりました。

二人が先に基地に帰えされ…

「さあ…これで初の契りを結べますわね…勉強はしましたけど、初めてです。優しくしてくださいませ」

（まだ午後3時なのに…）
と思いつつ…

殿下の床間に…

（日本式だな…）
薄暗く、布団がひかれていて、ティッシュがおいてある。

そして…

2001年10月13日

赤いシミがある床の間を後にし、一泊し満足させた翌日、
帝都城から帰ってた。

（初めてなのに…勉強しすぎだよ…殿下…
なんで顔〇希望いたしますだよ…
間違った方向に勉強しすぎー！！）

くる途中整備済みの第一京浜をフライパスする。

BETA進行の際に壊され放棄された第一京浜、
高架高速道こそないものの、広い片側5車線、制限速度は100km/hにまで引き上げられ、
電動150人乗り3連節大型バス、電動トラックが行き交う。
乗用車はガソリン規制され、まだ走っていない…
大型バスは移住者をのせたり迎えに行く最中だろう。

横浜白凌基地周辺は訓練等にかかる為地下トンネルに入り、
地下3階部分を通りぬけ、
藤沢の第二空港ターミナルに行くルート、
桜木町第一空港ターミナルに行く方向へと分離する。

付近の瓦礫等は除去され、横浜近辺は、重力偏差の影響をつけ植生等はないものの、
かなり見通しが良くなっている。

(大分整備できたな……あとは大量輸送トレインもかな?)

と考え飛行していると、基地につくので、
ゲート前に着地し、
ポン太衛兵に挨拶し、ハンガーに向かう。

「ハンガーデスク」

昨日途中だった、水素関連施設の製造に関して…考えつく。

(とりあえず一つ作ってあとは広まれば…か?)
この事で、まずは中規模水素燃料精製プラント、貯蔵プラント、水

素ガステーションを、
横浜基地の出島に作る事に…で注文。

(プラント稼動したら、試乗車やテスト車両を走らせ、
車メーカーにライセンス販売かな?)

五日程で稼動まで持ち込めるとの結果があがる。

(あとはそうだな…)

ティエレン対空型を参照にハイブの頭上対策をとる事にする。
ベース機は…ティエレン対空型、そこにコクピット以外をZ技術等
をぶち込んで…

対空速射砲4門は長すぎ、MS用の為小型化及び砲身半分程に…
弾種等も小型種へ戦車級以下へ対策用特化なので、
小口径化…

魔ティエレン対空型の出来上がりだ。

3個連隊分注文した。もちろん操縦はヤドカリが担当。

(あとは…と…)

有人機のバージョン強化を考えていた。

とりあえず変更点バイタル部分をTP装甲+ラミネート装甲化へ…

二重装甲の外側をラミネート装甲、内側をTP装甲。

スクランブルポットとエンジン及びタンクブロック、

反重力コアモジュールがより安全になる。

またジュネレーター出力増加による関節負担に関して、関節部にPS装甲負荷型を導入する事にした。

（操縦系は人のより好みがあるからなあ…）
全体的変更は無しにはしておく。

次に放置してあったジュリア小队についてだ。

ここ放置期間の間に各種操縦方法の、シュミレーターを試して貰ってた。

やはりSEED系の操縦方法が一番あつてると…
しかも要処理能力が必要なコーディネーター用のが…
彼女らにいわせると、ナチュラル連邦用のは、改善前の旧OSに似ているそうで…

検証してみると…

（成る程ね…）
と改めて思ってしまった。

オーブOSがまだ良いけど物足りない…
つつ事で、

彼女らに用意する機体は、異世界軍標準技術に、SEED系操縦方法をミックスした、
魔グフを注文する。

(接近特性が偉い高いからなあ…あ、そういえば…)

次攻撃するのは、鉄原ハイブである。

周囲の陸地はBETA勢力下、安全地帯は海上しかない…

(とするとザメルは使えないから、砲艦が必要か…)

ビクトレーテストバージョンを画面上に引き出し…

(ん…)

直線射でなく、水平線外への自然曲射が必要な為、

61cm3連装を甲板に並べてみる。

計36門*3で、108発の砲弾…

自動装填装置等で、0.5秒で撃ちまくる事ができる。

勿論無限弾薬装填装置も忘れずに…。

c i w s も16門をつける。

最後の調整必要だが、10隻注文しておく。

(こんなもんか…)

直接戦力関係はとりあえず終了した。

(と…時間あるな…)

鉄原ハイブ攻撃しようにも、まだ足りないし…

まだ間引きする必要なさそうだから、

余計な刺激はやらないほうがいいな…

となると…トリップ一回分時間はあるな…)

カオルは鉄原ハイブに佐渡島の防御力の
陸戦強襲型ガンタンク、

及びハンターキラーレックは回さず、
新規補充分で対応するつもりのようなのだ。

なので今絶賛増産中につき、もうちょっとかかる。

（ん〜現状足りないのは……戦力だけであとはないか…

じゃあ人材と更なる技術だな…

あつ、軌道エレベーター……）

考えが軌道エレベーターに行く…

地上から伸びていく軌道エレベーターには、いくつか建設方法があり、

地上から塔を作り始める固定型、

宇宙空間にある固定物を利用するデザートサテライト、

宇宙のネットワークス方式など…

取得できたガンダム00のは先に、低軌道リングを宇宙のネットワークで基盤を作り、

エレベーターは蜘蛛の糸方式で、

アフリカ、

オセアニア、

南アメリカ、

の赤道上に各一基づつ、

劇中登場したというか取得した人革連の軌道エレベータの地上側には、

空港に似た施設が設けられ、
民間人がリニアを利用する形で交通機関が運用されていた。

全長5万kmにも及ぶ軌道エレベーターの構成は、

低軌道ステーション、

低軌道リング

、
高軌道ステーションによって、
構成されている。

そして、エレベーターを通して、地上の各地域へ配電するシステムだ。

低軌道環リングが何故必要かは、
リング内に磁性流体を流して遠心力を作り、ステーション全体を軌道高度に留めている働きをもっているからであった。

本来なら、低軌道リングのあるリングの位置は秒速5kmが必要…
足りないのを磁性流体を流しているわけだ。

つまりORS…オービタルリング。

またに低軌道には、重力ブロックがあり、軌道エレベーターを中心軸にした、

円環型宇宙ステーションのような、回転式の人工重力ブロックが、
低軌道ステーション・真柱に設置されていた。

取得でき、建設はできるもの…

データを入れたあと建設試算の結果みてみると…
(五年規模か…)

かなりの大規模工事におちいると表示された。
五年ですむ技術も凄いが…

ORS、オービタルリングの建設に時間がやっぱりかかる。という
結果がでてる。

静止軌道上にある衛星を数珠繋ぎの後、
段々と高度を落とし、高度一万kmで固定。

その後低軌道リングとして補強しながら、中心ケーブルを建設予定
となる赤道直下の地点に下ろしながら、
反対方向にも伸ばし軌道を安定させる。

地上に固定して、中心ケーブルを伝って資材を地上から送れるよう
にし、
低軌道リング付近から中心ケーブルの補強を始め、
より重い資材を送れるようにする。

を段階的に繰り返して軌道エレベーターが完成をする…って形だっ
た。

(むう…時間かかるなあ…)
と考えたところで、(他の軌道エレベーターはどうだっけ?)
と考えはじめた。

どの物語にでてるか不明だが、一つ面白い軌道エレベーターもあっ

た。

軌道上にフック付きの回転するシャフトがあり、シャトル等を引っ掛けそのまま宇宙に持ち上げるものだ。

ようは巨大な観覧車の発想…スカイフック。

それを改良した極超音速スカイフック。

あとは完全に吊り下げ型で自重中心等は宇宙空間にあるもの…等もある。

怖い方法で宇宙空間で建設した軌道エレベーターを大気圏に突入させ、

強引に縦穴に突っ込んで穴の壁を爆破し、岩雪崩で強引に固定する。つうのもある……

等など考えふけてると…

「マスターもう日付変わるよ〜」

とせかされ、一休みする事にした。

……

カオル報告

人生の節目を迎えそうです…

ジュリア中隊機体確定しました

第113話 カオル、人生の節目 投稿日時20110426（後書き）

作者「婚約おめでとう」

ナギ少尉「おめでとう」

カオル「ありがとう」

作者「まりもちゃんを幸せにしるよ、イッシーからかえよ、殿下とはっちゃんけるよ」

ナギ少尉「イッシーだけ扱いかるい？」

作者「まあ…オリキャラだからなあ…」

ナギ少尉「ところでタケルちゃんは誰と結婚するの？」

作者「するとしたら、今だに本編に登場してないのと…かな？」

ナギ少尉「しかし、本編まで110話かかるって…」

作者「後悔はしてない…いや…大変でした」

ナギ少尉「あ、軌道エレベーターどうするの？」

作者「スカイフックの作品探してもいいかもね…面白そうだしさ」

カオル「時間ある？」

作者「……………ないな」

ナギ少尉「ま、まあ…次回予告で…作者、また新しい世界に行かすのね……………」

次回、新たな世界へ、たゆ〜ん…お楽しみにい」

作者「たゆ〜んはついてないぞー」

第114話 またまた新たなる世界へ 投稿日20110428

2001年10月14日

散々悩んだが…いく世界を決めた。

(まあ安全ちゃあ安全か……)

今度いく世界は争いらしい争いは……

相手にしてないのにちよっかいをかける種族はいる。

一応対策はしているようだが……

「うんじゃあいつてくるよ〜」

「いつてらっじゃい〜」

== あそびにいくヨ！の世界 ==

さてこの世界はどういった世界であるかというところ…

ぶっっちゃけ猫耳人間たゆーんが人間に恋してしまつて、
アハーン、ウフーンな世界である。

「それだけか!？」

…まああんまりSS小説があがらないのが、
ぶつちやけストーリーに不満がでず、サイドストーリー的なものし
かできそうにない…
からなんですよね…

と世界観は…

猫耳人間はキヤーティア人と名乗っていて、
300億光年もかなたから、地球人と友好を結びたいと思い、とり
あえずあそびにきちやいました…
が、実は犬耳人間の三国同盟が先にアメリカに接触していて、
アメリカとしては我が国だけが!の享受がなくなるのが困る!!
ただし三国同盟が表にでると、
銀河知性連盟、特にオルソニア人に三国同盟が処罰つける…等々。

三国同盟は神の様に導く…裏で操るのが問題…
キヤーティア人は、お友達になりましょう
お友達になって私達の星にも来て下さいね。
その為の助力はしたいです。
の違いらしい…

技術的には、地球はリアル現代レベル……が所々犬耳人間達の技術
でアップしている。
犬耳人間はやはり星間光年レベル、
猫耳人間はその上…という感じだ。

外見は、猫耳人間達はぶつちやけハアハアレベル。

…主人公の騎央…かわれやコノヤロウ…

が、その世界の若い男どもの総意でもあった…

猫耳人間のエリスを狙ってや、アシストロイドを狙ってや…

誘拐事件、パパラッチ、ストーカーなど…

表に出てないが、犬耳人間もハアハアレベルがいる。

（人材は誰もあんだけドンパチしてて死んでない…んだよな…）

さてカオルがスネークしに行こうとした時間枠は…

2016年2月14日朝…

「…この軌道エレベーターを巡って現在、各国間の緊張が走っています。」

繰り返します。本日軌道エレベーター近海にて振動が走り、

各国空母より偵察機が飛ぶ事態へと発展しました。

その為、この軌道エレベーターを巡って現在、各国間の緊張が走っています。

………あ、はい…はい。

只今情報が入りました。当方がキヤーティア臨時大使館に問い合わせたところ、

軌道エレベーターの一時保管の為の移設を行う作業を開始したとの事です。

移動先は機密、現在国連も日本も受け取りにこず、
宙にういた存在の為、周辺に悪影響をおよぼしかねないとの解答が
えられました」

（おゝお、始まつてるなあ）

カオルは冬ながらあったかい沖縄から、幻影をかけ、一路国境ギリ
ギリに置かれて、
沖縄からも見える一筋に天空まで伸びるガラスの塔…

赤道直下にはない軌道エレベーターを目指して飛び立っていった。

この見えている軌道エレベーターは、
地球人類が自力で作ったのではなく、

キヤーティアから『地球人類皆さん』への、クリスマス、正月プレ
ゼントとして、
送られてきたものだ。

到底地球人類には手の及ばない…夢のある技術が使われている。

次第にガラスの塔の回りに、米粒のように海上に何かが見えてくる…

それがだんだん大きくなってくると、その上空を沢山の米粒が見え
始めた。

そう、軌道エレベーター周囲には沢山の各国艦艇が、

自国の利権をえようと多数の艦艇を、派遣していたのである。まず一番ちかい国日本を始めアメリカ、中国、韓国、台湾、北朝鮮、ロシア、EU等々…その数大小合わせて千二百隻近く…

約2ヶ月その軌道エレベーターの3km外つまり公海上に駐留し警戒を行っていたのである。

互いに牽制しあわよくば取得する為に…

何しろ、どの政府とかも指定してない。

その言葉を拡大解釈として、我が国が！！という事だった。

また派遣してない国であっても、

国交を結び軌道エレベーター等使わせてくれの打診等あった事も付け加えておく。

2259

が…その日になるまでは、

アシストロイド達による海軍もどきが既に駐留していて、

特定の政府とかではなく、ほのぼのしていた。

現地派遣された軍はアシストロイドの愛くるしい銃を向けるのができず、

そんな状態が続いていたのだ。

上層部とは違って……

何しろ寸詰まりの船で帆船？みたいのもいれば、

寸詰まりの空母みたいのもいる。

その空母には甲板に寸詰まり飛行機が駐機していて、

アシストロイドがわたたと乗ると、

機体から足が見えて、

ててて、

と駆け出し揚力でない力で空中に飛び出すしまった。

甲板をアシストロイド達が海水被りながら掃除をする。

そんな愛くるしいのを誰がうてようか！！

しかし振動のあった日に今までいたアシストロイド達が見えない為、
前述の報道通りの事態に陥ったのである。

……

カオルがついてしばらくすると、
沖縄本島の方から三機の飛行物体が軌道エレベーターに向かって飛んできた。

その三機に対してアメリカ空軍機が無警告で空対空ミサイルを撃ち込む……

みごと着弾、爆発炎上し海に向かって墜落して三機……

着水するとともに爆発がおき、盛大な水柱が上がり海水が付近に降り注いだ。

もちろんアメリカ空軍以外の各国はただぬぼーとしていた訳でない。

制止を聞かずに回収しようとヘリをと向かわす。と…
そこには巨大なアシストロイドの、
愛くるしい顔がみるも無惨に破壊されていたのが見えた……

各国がその墜落した巨大アシストロイドに気をとられてた隙に、
海中からシャンパンゴールドの葉巻が浮上し、空中に制止した。

キヤーティア人のエリスが使う連絡宇宙艇、ルーロス改…
側面が開き大人数のメイドさんが海に飛び込んでいく。

カオルはその隙にとりつき同化すると…
船内では尻尾付き猫耳人間のエリスが、
愛くるしい声で各国艦艇に説明中であつた。

「驚かせてすみません。
移動用クレーンが不幸な行き違いで撃墜されちゃたんで、これから
手で動かします。」

今の飛び込みはその為のものです。驚かないで下さいね」

カオルは同化が終わり離脱すると、
エリスの説明が終わりルーロス改は、さっさと水平線のかなたへ見
えなくなつてしまった。

（衝撃波なしにマッハ10以上超えてるよ……
帰ったらすこし楽しみかもしれないなあ）

カオルは魚に化けると海中に没する。

海の中の軌道エレベーターの基部は派手な電飾に飾られていた…
巨大なネオン看板もとりつけられ…おいでませ、と…
往年の風俗街の一步手前であつた…

周囲ではアシストロイド達の潜水艦がいて、
潜水艦ハッチから水中にも関わらず顔をだし、

「こちらです」

「ゆつと立ちます」

とプラカードを出しながらメイドさんを案内している。

潜っているメイドさんは、キヤーティア謹製パワードスーツ…
顔面球体付き、重りで海中作業可能のスーツをきている。
勿論外見上は冥土服という特殊性。

主人公の騎央が水中に潜ってきた。

「皆さん大丈夫でしたか？」

『大丈夫です。一人も欠けてません』

「では……そろそろ引っ越しを開始します！」

約三百名程の人員が軌道エレベーターの周囲3.14kmを囲む…

『全員配置に着きました』

軌道エレベーターの基部に備え付けた持手を掴む…

「じゃあいきます。いっち、にの、さん」

あっさりと軌道エレベーターの基部は人力で持ち上がった。

この軌道エレベーター、完全な吊り下げ式で、構造物の質量の殆どすべてが、衛星軌道上にある。

あとは基部の重り部分だけ…も本体の方に吸収してる状態なので、人力による移動が可能…というわけだ。

今はあんまり重くないという非常識ぶり……

「皆さんの行き先はヘルメットのHUDに表示されます。その指示に従って下さい」

〔作注…HUD＝ヘッドアップディスプレイの略。〕

この場合はヘルメットに写した透化の情報…

わかりやすくいえば現代空戦ゲームの、ターゲットサイト等の事です
す

『ではテンポをとる。皆の物、音にあわせよ』

どおん、どおん

ティンパニの音が聞こえて、それにあわせて全員の足並みがそろって進み始める。

海面では波しぶきを上げながら50kmまで加速し進んでいく…

そのスピードは、簡易装甲服を兼ねる、キャーティアパワードスーツの力によるもので増幅されていた。

一方カオル…

(さて…あ、あれか)

アメリカ海軍潜水艦、ボーグシップ…

カオルは急いでとりつき同化し離脱した。

この潜水艦は、犬耳人間の手が加えられた人工知能による自立型魚雷発射ステーションというべきものだった。空母から遠隔操作で作戦を行うものである。

カオルが離脱すると…

いきなり犬耳のコマンドを受け自爆し衝撃波が広がる。

内側からいくつも爆発がおき…

海底にしず…いや…突如として巨大なアシストロイド…

撃墜されたのおんなじ大きさのが現れて、

みとん状の手で潜水艦をすくいあげると海面目指していく。

背中には今はなき巨大なマブチモーター、顔には水中メガネ、シュノーケールを装備していた。

海上にお届け物をした巨大アシストロイド、守礼皇5号はアシストロイド潜水艦部隊と合流すると先導するよう泳ぎ始めた。

犬耳の作戦としたら、今の自沈で、

「攻撃を受けた。未確認敵性体がいる！！対潜攻撃！！」

で、軌道エレベーターの移動場所にミサイルを撃ち込みまくって、衝撃でメイドさん排除、

軌道エレベーターバランス崩して落とす…大惨事が、

または大惨事ならずとも退去させ移動を阻止。

もう触らせない!!関係悪化…

を狙っていた。
しかし、守礼皇がかえした為…なんにもできずに…
というわけだった。

カオルはアシストロイド潜水艦にとりつき同化し離脱すると、
本命の移動中である軌道エレベーターにとりついた。

全高38km、直径1km周囲3.14kmの巨大な特殊ガラス
の塔だ。

そして、10キロのカウンターウエイト…質量や慣性をコントロー
ルしているもので構成されている。

二日目……
ガラスの塔動き始めてから約12時間後…

海を割って海岸から陸上にあがってきた。

マスコミがフラッシュや投光機でその光景を映し出している。

三百名程の人達によって持ち運ばれてきたのだ。

興奮気味に中継しているマスコミが騒いでいる。

どの民放各局も報道特番を組み、それに釣られてNHKも特番体制
に、

海外からもキャーティア番が特番要請をし、ほぼ全世界的に注目し
ていた。

砂浜から道路にさしかかり、幸いガードレールや並木林等なく、
持ち運んでいた中から数名が交通整理の為に離れる以外トラブルも

なく、
圧倒的質感を誇る軌道エレベーターは、
キヤーティアの協力者モルフェノス財団が買った、
普天間基地のゲート前の土地に無事につき、

「え〜と、右に一歩、前に二歩進んで下さい。それでどんぴしゃです」

エリスが言うと騎央が、

「じゃあ動くよ〜いち、にの、さん！はい右一歩、前に一、二歩！」

騎央の言葉通りにガラスの塔は動き、
感動とどよめきがおきる中、位置決めは終わり…

「じゃあ降ろします…ゆっくり、ゆっくり、ゆっくり…」

騎央の指示通り腰をかがめ…地面との間が指一本ほどになり…

「じゃあ着停させます…いち、にの、さん！」

その言葉通りに、全世界に放映されるなか、
軌道エレベーターは地面に振動もなく接地し、持手より手が離された。

こうして、人力による軌道エレベーターのお引越しは終了したので
あった…

詰めかけたマスコミ対応に追われる騎央をバックに、
完全同化終了したカオルは離脱し、

「世界扉」

世界を渡る。

.....

カオル報告

ルース改

ボーグシップ

ぬこ艦「アシストロイド潜水艦

キヤーティア製軌道エレベーター

第114話 またまた新たなる世界へ 投稿日20110428 (後書き)

作者「ゲストきゃら、あそびに行くヨ！のエリスたんです」

エリス「キヤーティア大使館上陸員のエリスといます。よろしく
お願いしますね」
ゆさり

ナギ少尉「が、がいこく産……」

作者「あゝ平均乙」

イッシー「むむつつ胸がなんなのよー！！つくりもんじゃないの！
きいー」

エリス「きゃん…あ、そんなに…発情期じゃ…ない…あふ…んで…
すから」

イッシー「それになによ！このネコミミと尻尾はっ！！
世の中の男の願望みたくして…えっ？」
もふもふ

エリス「くすぐったいですう」

もふもふ

イツシー「気持ちいい……」

作者「イツシー……諦めな……すべて本物だよ……」

イツシー「……っ!!」

ナギ少尉「異星人なの？」

エリス「はいっ！あそびにきました!!」

ナギ少尉「ところでその猫耳って？」

エリス「あ、副耳ですか？」

私達猫から進化して人間になりましたので本物ですよ」

ナギ少尉「あと発情期って……？」

エリス「え〜と……まあ……その……種族的習性なもので……
大体、私位の年齢になると……そうなるものです。
本当は初めてのを騎央さんと……だったのですが……」

デュレル「任務上、今回は問題があるから薬でお流れになったのさ」

作者「キャラクターアシップの医師、デュレルさん。薬下さい」

デュレル「国交結べたらな」

エリス「……まあ、お猿さんから進化した人と、私達のように猫から進化した人と、
いつかは子供沢山作りますから」

作者「そこに悪運紅葉がくわわ……」

作者瞬殺される。

ナギ少尉「え、えっと次回予告ね……次回あそびにいくヨ編2 大
使館開設の日……」

このサブタイトルでいい??あ、死んでるか……
じゃあみんな一緒にい」

「「「「お楽しみにい〜」「「「だぜ」

「おはようございます。只今午前7時30分を過ぎました。ごらんください。この大渋滞」

「高橋さん、すごいですね〜普段そこは？」

「はい、普段は渋滞も発生しない一般国道です。では何が目的なのか聞いてみます」

と美人アナウンサーが手近な車に聞きに行く…

「すみませ〜んTBSですが、取材よろしいでしょうか？」

「いいですよ」

「えっとどちらにいかれる予定なんです？」

「キャリアティア大使館の開設記念式典に行くんですよ…」で

「「アシストロイド」」

「を会いに行きたい…って子供達がね〜」

「可愛いですものね〜」

「ええ…けど間に合うか正直心配になって…
何時もはこんなに酷いんです？十分間で100mしか動かなくて…」

「いつもはこんなに酷くはないんですよ〜」

等街頭テレビが流している。

二日目の続き…

カオルは一休みしたあと、

この時間枠の、東京郊外の貸し倉庫のある一室に侵入する。

寝袋からもそもそ出てくる尻尾付き犬耳人間…スキんタイトな服をきていた。

（持ち帰りしたいなあ……なんかふわっというか…耳が萌え上がるんだよね…

まりもちゃんやイツシーに犬耳、猫耳…ん〜）

いけない想像をし始めた……

犬アシストロイドの軍団が起きてきた人物に対し、軍靴をならし陸軍式敬礼をする。

犬耳人間、リユン又は頷きで答え、

「システム起動」

声と同時に倉庫中央に備えられたリング状の門に電源が入る。

二重のリングはそれぞれ違う方向へ回転し、リングの内側が放電し、真っ白い空間になる。

カオルはとりついて取得する。

このリングは一方通行の転送装置…犬の突入作戦に使われる。

「こ……これより作戦行動を開始します。

不慣れな指揮官ですがよろしくお願いいたします」

リユン又は一人一人アシストロイド達を見渡している……

そして進行監視の為テレビをつけ始めた。

カオルはリングの同化が終わったので犬耳アシストロイドに取り付き始めた。

テレビは式典の生中継……

日本政府代表、沖縄県知事の挨拶をこなし粛々と退屈に進行していた。

画面が上空にスパンされ、

と同時にどよめきが始める。

上空からジリジリするほどゆっくり……

それでもかなりの速さで大気圏をゆっくりくぐり、拳大からフライパン、

テーブル、運動場まで広がり、画面からはみ出て辺りは宇宙船の影

に包まれた。

「そろそろよ……」

宇宙船から光の筋が演台まで伸び……

誰もいない演台上に1人の人影を生み出す。

『みなさん、こんにちわ!』

人影はみつしりとした重いふたつの水蜜桃をもったキヤーティア人の美女だった。

地球人類にはシリコンの偽物が矯正下着などの補正がないかぎりありえない、

張りとおきさをもつふたつのふくらみを強調するように堂々と、キヤーティアシップの艦長クーネが挨拶をした。

「とらえた?」

操作してた犬アシストロイドが頷く……

「よし……、突入!」

なだらかな傾斜のついたトラップを駆け上がり犬アシストロイド達がゲートに突入する。

カオルも続いて飛び込む……

カオルは分子に分解され……空間を移動し、大広間に出現し実体化する。

すぐさまキヤーティアシップと同化し始める。

先に突入してた犬アシストロイド達は、手にパルスレーザーガンをもち数体ずつにわかれ散解する。

続いてリユンヌが実体化してきた。

予想してなかった部屋の広さに戸惑いながら、背中にまわしたレーザーガンを手にとっている。

急に広大な部屋の照明が落ちる。

『無駄な抵抗はやめてください』

幼い感じの音が響く…

『艦長の転送波動域から、こちらへの進入ルートを確認する手際、その後の作戦展開共に素晴らしいものがありますが、

我々はすでに対策しています。武装を解除して投降して下さい』

「パターンX！」

次の瞬間犬アシストロイドが腰から物をつかみ投擲する。

周囲の空間が真っ白に光り別の青白い力場が現れてひび割れた。

投擲したのは閃光手榴弾と、

エネルギー障壁を破壊する指向性波動爆弾である。

犬アシストロイドは4体1組で突撃し、背中に背負った簡易塹壕を前にだし、

組み合わせ半球状の巨大な盾を形成する。

そこへ天井から自動防衛システムが降りてきて、攻撃をするが巨大な盾に防がれる。

リユンヌがヘルメットをかぶり、高く跳躍をし自動防衛システムに後ろ回し蹴りを決める。

かかとから刈るように決められた力に対抗できず、自動防衛システムは吹っ飛び横壁にぶつかり大破した。

着地するとともにレーザーライフルのトリガーを絞り、レーザーを扉に向け発射する。

扉に当たって消失するレーザー…貫通はできないが扉から進入はできなくなる。

「許可します」

犬アシストロイドの1隊が銃口に羽根付きロケットを装備し、扉の両脇に向け発射する。

まっすぐ着弾し、羽根がアーム状になり壁から本体を引き剥がす。本体とアームの間に超小型の反応弾による数十万度の熱量が発生し、それが本体奥にある絶対零度物質を展開させ、瞬時に一転してマイナスになる。

本体もアームも霜がはしり…バラバラになる。金属疲労を狙った構造物破壊ロケットだった。

だが…命中した箇所は僅かに破壊されただけであった…

それでもよかったのだろう、

工作部隊が液体ナノマシンを注射型ランチャーで撃ち込む。

『無駄です』

突如として、金属球が光の収束とともに転がっていた。

『この液化配線は順路をかえ壁の外側を走っています。あなた達の装備ではそこまで到達することは不可能です。

またシステムは現在全て区間独立による休眠状態を保持しており、相互関与はできなくなっております……

艦長も完全転送で向こう側にいますから、ここには人質になる情報はありませんよ』

リユンヌは動きをとめた……

『あなた達の計画は、既に手元にきていて、対策は万全に取っています……

事前に判明していなければ、私達のまけでした。

ですが、事前にことは判明し、万全の対策をとっています……
どうか、投降して下さい』

リユンヌは既に攻撃体制をといて考えているようだった……

数秒の躊躇のあと、突如としてその金属球を2本のパルスレーザーが貫く。

「えっ!？」

犬アシストロイドが発砲をしていたのだ……主人であるリユンヌの命令無しに……

あり得ない話であった。

「ニルメア？アシストロイドの全指揮権は私に……」

と奥の方に隠れていた犬アシストロイドが2体進み出てきて…
頭部が四散すると片方はタイマーが表示されてるディスプレイ、
片方は明らかに対艦反応弾の弾頭が見えた。

『この2体はアシストロイドに偽装した爆弾なんだものお』

「ニルメア……あなた！」

悲鳴のような叫び声をあげよるめき、壁に寄りかかる…

『大あい丈夫う、あなたたちの死は無駄にしないわ、

そう、二階級特進、

リユンヌ、あなたの遺影は私が選んであげるわネ！

ああ、そうそう、あなたのお姉さんは死んだわ！

あなたと同じように私を信用してね！きゃあはははははは！

あゝ楽しい、リユンヌ、リユンヌ！

あなたの顔が見えるわ、愕然としているわね。

きゃあはははははは！あ、俯いた？ねえ、悔しい？悔しい？

アヒヤハハハハ！

今からスイッチおすわ、

一微小周期で爆発するから顔をあげてちょうだい……

最後のあなたの顔を見たいのよ！

それじゃあ……いくわよ……せえ……きゃああつ！』

「……え？……！」

覚悟を決めてた表情のリユンヌが疑問の声をだした後…

ニルメアとの通信が途絶えた為状況が掴めなくなった。

今爆弾を抑えにいけば監視されてた場合すぐに爆発するだろう…
じれったい時間が過ぎる。

そして……

『リユンヌ……リユンヌ曹長』

別人からの呼びかけだ……

『起爆装置は無効にした……君は誠に言いにくいが投降しろ。』

キヤーティア側に話をつけてある。生きて虜囚の辱めを受けるのは辛かるうが』

「お姉様」

スピーカーから声がとまる。

「お姉様すね？」

『い、いや、違う、わたしは……』

？『あーら。よくわかつたわねえ』

別人の声 flowed。『ぐ、軍曹！』

軍『なーにつっぱらかってるの中尉。単に私達がこの格好してるのは、襲撃のインパクトを増やすだけでしょうが……それとも何い？……妹さんを放り出すの？』

中『い、いや、だが、しかし……』

軍『いいじゃないの。妹を思って姉が駆けつける。いい話じゃないの』

「やっぱりそうなんですネ、お姉様」

既に涙をながしている。

死んだと聞かされてた姉が駆けつけたのだ……

『そうだ、私だ、リユンヌ。お前の姉だ……すまない』

「いいえ、リユンヌは嬉しいですお姉様」

『では、私のいうことを聞いてくれるか？』

「もちろんです、お姉様」

『よし！撤収だ！』

「キヤーティアの方、投降します！！」

『…投降してくれてうれしいです』

「あと大至急センサーを稼動してください。多分まだ爆弾があるはずです」

『わかりました。部屋内部に入ります』

扉が開き部屋に警備スタッフが突入してきた。
武装解除とともに、
まずは一個の反応弾が廃棄転送される。

「ありました！」

「こつちもです！」

犬アシストロイドを調査しているとやはり見つけ出し…

「廃棄転送！！」

転送すると同時に……

ドゥー……!

「きゃああああ」

「うわあ」

「くっ」

振動とともに多数の悲鳴が流れる……

「なに?どうしたの?」

『廃棄転送処理中に爆発が occurred しました!!システムに重大なエラー

……!!』

エンジンより火災発生!!

緊急措置を行います!!』

「承認する」

『了解!!』

メルウィン、この艦の副長が、艦のモニターを出すと少し険しい表情をしたが、
振動が少なくなり、表情が和らいだ。

リユ「大丈夫なのです?」

メル「かろうじて…かしら…皮肉にも燃料が足りなくなって、最初の計画通りになっちゃうけど……」

武装解除される最中だった犬耳は途中で止まっていたが…

メル「では、少し落ち着くまで個室に軟禁させてもらいます」

リュ「わかりました」

と犬耳アシストロイドとともに転送ルームをでていった。

メルウィン達も続いて出ていく…

艦は着水前に復旧、燃料使いすぎて自力精製、定数確保まで大気圏外にでれなくなってしまった。

四日目：終わりぎわ

カオルはジワジワとキヤーティアシップと同化して、丸2日かけてやっとこさ掌握できた。複雑すぎるからだ。

(しっかし…まあ……)

キヤーティア人の技術はすごいものである。

科学を極め、これ以上発展する要素がなく、衰退していく道を辿る…といった意味もわかる。

再現できれば御の字だろう。とりついたキヤーティアシップの中には独立長距離中規模調査船として、

約三万人のキヤーティア人が町を作って生活している。

カオルはクーネ艦長の居室に進入した。

強化パワードスーツの役割をする鈴をゲットする為だ。

「ふにゃ〜す〜す〜」

二つの水蜜桃が重力に負けずに上に張っている。

触ってみたい…衝動を起きながら、

色々な機能をもつ鈴を同化し、取得した。

銀色に黒いラインがはいつた艦長用の鈴だ…

「ふにい〜」

「!!!」

抱き着かれた。

「にゃ〜」

引き寄せられ抱きまくら状態に…

顔が胸の谷間に…

（く、くるし……）

抵抗しようにも起きたらヤバイ…

カオルはベットに同化して肉体ハグから抜け出した。

(あぶなかつたあ……)

さて、この2日間でキャーティアシップの交流はかなり違ってきた。地球人を抽選で当たった方を毎日2千人ずつ船に招いてキャーティアシップの見学会を行い、大使館のほうでもアシストロイドとの触れ合い広場……というのを開設したからだ。

(まあ……ちょい寄ってくかな?)
五日目……

大使館の触れ合い広場では……

「いらつしやいませ」

「あそひましょう」

とプラカードで来訪者をもてなしている、二頭身のアシストロイド達がいる。

額には大19などとマーキングされている。

プラカードは回転する度に新しい文字、

まあ発言がかかれていて楽しいものがある

子供達、若い女性に人気いっぱいのアシストロイド達、彼らと触れ合う為に沢山の人が訪れ、また大使館とキャーティアシップ、を目的とした取材村、お客狙いの店舗が建ちはじめたからだ。

(いつかは成果のるといいねエリス)
「世界扉」

カオルは世界を渡る

……

カオル報告

キヤーティアシップ

キヤーティアシップ搭載技術全般、

猫アシストロイド

犬アシストロイド+装備

空間転送装置

剛柔スーツ

エリス「また後書きにとっじょうしちやいました」

作者「いらっしやい」

エリス「今回は私でないんですね……」

作者「んゝまあそうだねえ。大使館のシーンでも出てないし」

エリス「でも犬の方は活躍されたみたいですね」

作者「そのあとリリースしちゃうんだよね」

エリス「ええ、かわいそうでしたので……」

作者「で犬耳人間のかたの姉妹で……と」

ナギ少尉「ねゝエリスさん、質問いい？」

エリス「あ、はい。どうぞ〜」

ナギ少尉「艦長さんが抱き引き寄せた…
シーンがあつたよね？そういうもんなの？」

エリス「種族的習性ですね〜男女問わず寝る時には抱き着く等し
ますので」

ナギ少尉「えつと……エッチな事とは別に？」

エリス「あ…は、はい。それとは別ですね。普通の事ですよ〜」

作者「猫鍋とかあるもんね〜」

ナギ少尉「なに？それ」

作者「ああ、これだよ」

YouTubeで猫鍋検索し、それを見せる。

ナギ少尉「きゃわいい〜」

エリス「保育園の昼寝カゴですね〜」

ナギ少尉「ね、ね、あとでみにいっていい？」

エリス「いいですよ」

と女子が盛り上がりはじめたので…

作者「え〜っと……次回予告はあそびに行くヨ！からの帰還です。
お楽しみに」

第116話 あそびにいくヨ！からの帰還 投稿日20110502

2001年10月18日昼頃…

世界扉が開き、カオルが出てくる。

「マスターおかえりなさい」

「ただいま」

「……あれ？今回人材はいないの？」

いつもならハンガーでシエルターだしたり、
医療室に向かうはずがデスクに向かったのに11号が疑問もって問
い掛ける。

2289

「ああ、今回いった世界は派手なドンパチするも人死にがあんまり
なくってさ……」

段ボール積みめとか、無力化はあるんだが…」

（そついえば裏側であったような……
けど非合法職員のほうだしなあ……）

「となると技術なの？」

「ああ、鯖に入れるからちとまってな…」

と鯖に同化し、情報をイレ込む。

途端に挙動不審になり…

「マスター！！凄いよこれ！！研究許可ももらえる？」

「ああ……いいが…」

「いつかはうちらでつくる…！」

「いつかは？ってやっぱり直ぐには？」

「うん…できないね…残念ながら、古代技術をもっても別の進化形態だから、

研究すればいつかは…だけど、

長いスパンがかかるよ」

「ふむ……やはりそうか…」

「現物ができれば加速はできると思っけど…」

「現物ね…」

手近の鉄板をとり、同化、キャーティアシップの外装材を精製する。

ちっこいから一分位ですんだ。

チルソナイト9122と、硬化テクタイトの複合装甲だ。

「ほい」

11号受け取ると検査しまくって…

レーザートーチを取り出した。

ジジジジ

焼き切れない。

「やっぱりマスター、チートだよ…堅すぎ…
研究用で貰っておくね」

キャーティア位までくると技術形態やらなにやらで別の進化をとげ、
要はすぐには作製できない、研究が必要なレベルになる。
という事だった…

カオルはなんとなくで構成できる。
プラントは完全理解しないと不可…

その違いだった。

「ん〜となると…軌道エレベーターは？今回入手した」

「……だい……うん大丈夫だね。

ある程度は作製可能、

けどカウンターウエイト部はマスターの調整必要だね」

「あの10kmのところか…の、どこら辺？」

「利用可能技術だと、この設計で…接地質量がゼロにはできないから…」

その部分のコントロールのところ」

「なる…となると最後のしめね、……作製にはどの位かかりそう？」

「……注文つけて三ヶ月だね」

「〇〇のよりかは早いレベルか……」

「あっちは環リングのおかげで、大規模になるからね…
どうしても時間がかかるの」

「だよな…災害も怖そうだし…
その点キヤーティアのは考えたものだよ…
この特殊ガラス、重大事故がおき、パージすると昇華し気体になる
しさ、
エレベーター部分がドーム形成して軟着陸するし」

「あゝORSリングや、中心ワイヤー保護の為にオートパージ機能
だよな…
燃え尽きず、地上に降り注ぐ鉄板…こわいねゝ」

「だな…パージ鉄板にトレース機能ついて、住宅密集地に落ちない
ように計算してても、
空気抵抗で衝突して、進行方向が変わり、
一つでもその現象があるとドミノ形式で連鎖的に…」

「うん。こわいよねゝ
その点キヤーティアのは、重要物体がカウンターウエイトとエレベ
ーター板と基部だけだし、
その部分だけ保護すれば再建可能…
一からでも作れるってのがね」

そんなこんなで、キヤーティア製軌道エレベーターだけは、
キヤーティアでは、はるかに遅れた技術により建築可能。

が、カオルによる要調整が必要との事だ……

ちなみにOOのはORSありなので、それ程天高く作る必要がない…という利点はある。

キヤーティアの軌道エレベーターが、38000kmの高さですんでるのが異常なだけであつた…

「あ、注文するなら先に無重力工場が必要だね」

「あ、そうか…」

地球上では作れず、ラグランジュポイントでの作製後、移動の形になる。

地球上で作るのはカウンターウエイトが質量を司る物である以上、不可能だった。

「ま、後々か…な？後は…俺自身が作るしかないか…」

（キヤーティアシップはどれ程時間がかかるだろう??）

鉄板で一分だから…想像できないな…

キヤーティアシップはしばらく諦めかな？）

取り付き変化期間で諦めたようだ…

（ま、構成技術等おいしいのはたんとあるんだけどね…）

例えば300億光年を三ヶ月でワープ旅行可能とか、

経済活動範囲は基本は20万年範囲、
あとは中継ステーション技術とか…

(あ、……ルースや鈴位なら……早めにできるかな?)

という事で作製してみる。

鉄板をもち……まずは艦長用の鈴を作ってみる……
20分後……どうやらできたようだ。

携帯万能工作機でもある艦長用の鈴である。

次にルース改を作ってみようとする。

同サイズ材料を集めて……

「マスター時間かかってるね……」

「11号、マスター何作ってるの？」

「UFOらしいよ……これ」

「ふえ……ますます魑魅魍魎になるなあ……そのうち宇宙人作りだしたりして……」

「あ、かなり汗かいてる」

「ふくべしふくべし」

「浣腸してみようか？……アレー」
ズルズル

等言われてる位時間がかかっていた。

（こりや難儀だ）

夜遅くなり…ルース改を作るのに8時間かかって…

「できたああああ」

「お疲れ様マスター…難産でしたね」

「ああ、お腹痛めたかいあったよ…」

ルース改が完成する。

（このサイズでこれだけ時間かかるとはなあ……）

「ところで、これ動力とか見かけないけど…どう動くの？」

「……………さあ？」

「動く？」

「現物コピーだから、多分……………動かなかつたら悲しいわ……………さて……………」

カオル乗り込もうとするが……………

「入れないな……………」

ハッチが見当たらないのであつた。

しかたがないので、同化し、船内にはいるけど、起動しない……………

「イロウル……………」

システムに侵入し、起動方法を探す。

（あ、鈴が必要なんだ……………）

起動方法がわかつたので、鈴を装着しようとする……………

鈴からスルツと紐が伸び、カオルの首に巻き付く……………

さながら首輪のように……………

リン……………

と鈴を軽く弾くと…

空中に二等身の熊だか猫だかわからない物があらわれた。

「初期セットアップ」

「はいでし、型番GPGA-1101連絡挺中枢端末起動しますでし。」

名前を付けてくださいでし」

「ルース」

「了解しました。ルース起動しますでし」

葉巻がたのUFO、ルースが若干振るえ、初期セットアップにはいる。

「初期セットアップ終了ちまちたでし。
各種異常なちでし」

(ふむ…夜遅いからなあ……)

「じゃあ、ハンガーで待機。また次回呼び出すよ」

「はいでち。ルース待機しますでち」

と空中投影は消え、すすすと、
待機出来そうなところへゆっくり進んでいく。

(あと水素関係できてたよな?)

という事でまずは水素エンジンコピー車、トヨタG P - 201を作りあげる。

最高速度250kmの5人乗り一般大衆車だ。

一回の給水素で1000kmはし…るか?

とりあえずリッター55kmの性能で、

超低温液体タンク容量が30リットルというところ。

(そういえば…61式戦車に使えないかな?)

バッテリーだと充電に時間かかる。

また補給しに戻る必要がある。

かといって…前線には補給基地をそうそうに作る事もできないだろう。

なので専用トレーラーさえあれば補給できる水素は良いかなあ?とも考えていた。

モンスターマシンに水素エンジン……

61式改を作製した。

(明日試運転たのんでおこ…)

最後に鈴…

艦長クラスの鈴は…

物体の原子構成をいじったり、空気中の元素を固定したり、

武器にもなる携帯万能機…のはず。

(ふ〜んおもしろいな…)

首の鈴を弄り空間に投影した棚を、横に動かしたり縦に動かしたり…

厳密には虚数空間とは違うが、
のような収納機能もある。

ディスクの上においてあるペンに網膜投射のターゲットサイトを合わせ…

(収納) (実行)

と思うと…光とともに空間内の棚に収納された。

(おもしろ〜)

…

「マスター、今…何時？」

(あ、やば…)

網膜投影スクリーンの機能を切替ると、時計が3時を過ぎていた、
寝るために自室へと向かう。

2001年10月19日

OO組が全員医療カプセルからでてきた。

結果からいうと

ハワードはC-01入り、

絹江さんは広報担当官、

ニール・ディランディは……ビックネームに配属になった。

そして…昨日出来上がったばかりの水素自動車を運転し、
帝都城に向かっていた。

ナンバー？異世界軍所有車を示すフラッグを付けてるが、
帝国のナンバーは間に合わなかった。

試運転をかね快調に飛ばしてる。

そして帝都城につき、駐車スペースに車両を回す。

衛兵達がもの珍しそうに見ていたのを後ろ目に、
城内に入り、会議室へと進む。

結婚式の前日につき、
打ち合わせの為に登城した。

(3人とか……)

前世でだと重婚すら考えた事もなかった。
彼女らを幸せにする…よりいつそうちかって部屋の扉をくぐった……

……

帰り道…

カオルは疲れ果て、自動運転で走行させてた……

⋮

カオル報告

疲れました⋮

ナギ少尉「あらためてチートぶりがたわねえ…」

作者「だな…」

ナギ少尉「ところでルーロスの動力ってなに？」

作者「……………」

ナギ少尉「ねえ作者」

作者「理解できない推進装置って事で…」

ナギ少尉「え」

作者「だってさ…地球から土星まで半日以下でいくんだよ…通常推進でさ」

ナギ少尉「え」と……………」

作者「超空間ジャンプなんか10分で…」

ナギ少尉「重引力があるところで？」

作者「そうそう」

ナギ少尉「キヤーティア」

作者「まあだから…自分自身も理解不能だから、コピーは可でもそこから派生は難しい…つつ制限はある…かな。けどまあちまちま技術はもらつつもりだね」

ナギ少尉「が鈴？」

作者「も、あるけどさ」

ナギ少尉「…成る程ね…」

さて次回はいよいよ人生の拘束、結婚式と、何か忘れてるのが登場。

彼女がいないと、タケルちゃんぽいされるから割り込んだと噂…

次回 結婚、そして… お楽しみにい

作者「あはははは……暴露されちったよ……orz」

第117話 結婚、そして……

投稿日20110504

2001年10月20日…

朝から忙しくなった…そう結婚式の為だ。
しかも重婚制度適用1号。

全国的に放送され、民需にやっと力が入った街中の街頭テレビで
は、

4名の合同重婚結婚式が流れる。

そして誓いの接吻…

この日でもって、

石橋屢伊は、渚屢伊に…

神宮寺まりもは渚まりもに…

煌武院は姓は代わらずに…の形になった。

そして初夜4人とともに過ごす…

2001年10月21日朝

帝都城の客間から帰ってきて、

「マスターおめでとう」「おめ〜」「赤ちゃんPLAN」

「早く孕ませ」「おめでとう」「いよ！すけこまじ」「おめでとう
っす」

コバッタ達に迎えられた。

「おう、ありがとうなあ〜」
「さ、みんな仕事にもどる…とマスター部屋なんだけど…こつ移動したから」

俺の部屋の向かい側及び両隣にまりもちゃん、屢伊、殿下の部屋と
なった。

俺の部屋は4Pも可能なようにキングサイズベットなど…
「手回ししすぎだろ…」

「僕も赤ちゃん見たいし〜」

「エルちゃんいるだろ」

「マスターの赤ちゃんが良いの〜」

「……………」

（まあ殿下はこっちに來たらになるか……………）

「あ、そうそう、呼び出し來てるよ副司令から」

「ん？わかった…いつてくるわ」

……………

（執務入るの久々だな……………）
と執務室に入室する。

「結婚おめでとう。とうとう將軍をも動かせる立場になったわね」

「そんな事考えてもないですよ…で用件はなんですか？」

「あなたからもらったCPU利用して00ユニットができたんだけど…ね」

「おめでとうございます」

「めでたくないのよ…肝心の思考回路がうまくいかなくて…ず〜っと難航中のよ」

「どんな感じですか？」

「来ればわかるわ…」

ついていった先には、一人の女性がいた。

「これが00ユニットよ…起動して頂戴」

起動した…とおもつが…

「…殺してやる」

(ん?)

「……皆殺しに、してやる」

「どっつ反応は？」

ふるふる振って…

「……だめです」

「ま、こんな調子なのよね…で…BETA」

「BETAっ！敵だっ！！」

苦しそつに頭を押さえ…

「殺す…殺す…殺してやる！！皆殺しにしてやるっ！！」

(ふむ)

「あああっ！！BETAッ！殺してやるっ！！殺す、殺すっ」

「こんな状態になって落ち着くまで時間がかかるのよ」

「私が、殺す…BETA、殺すっ！！」

「あなたの力でなんとかなる？」

「ま、やってみましよう…」

「とりあえずまずは固定しないと接触すら…」

「ま、そうね…やっていいわよ」

と奥に固定用ベットがあった。

暴れる00ユニットをベットに固定して、手足も固定する。

「さて……イロウル!!」

同化し…身体を調査し始める。

(……ハード面は大丈夫か…だとすると……)

「アルミサエル」

(ああ、やっぱり……)

思考の渦が襲いかかる。

地下にある薄暗いホールの中、

「大丈夫だ、オレが守るから」

と寄り添う人の少年…

顔がよくは見えない。

ホールの中にいた人がまた一人また一人つれてかれ…
帰ってこれない。

そして最後の二人になり……

「うおおー!!純夏を離せー!!」

しかしあっさり捕まり…

「純夏に…げ…ぎ…ぎゃあ………」

肩から真っ二つに引き裂かれ、事切れる少年…

(タケルつうのか……)

それをバリバリ食う兵士級…

(ここいらで精神が壊れちゃったんだな……)

純夏はそれをショックで眺めていた。

食べ終わった兵士級に連れてかれ…

その先には触手の群れがある部屋だった。

触手に捕まり、服が裂かれ、真っ裸になる。

うまれたままの姿で、変な溶液に浸しれ、

拘束され、触手が穴という穴に入ってきて蹂躪され…

「いやだ…いやだ…」

(タケルちゃんと以外エッチしたくない…か…BETAとは、
じゃ無くなっただんだな…)

「やめて…あふ」

触手が体中をしらべあげどこがいいのか反応を調べているようだった。

(身体が勝手に反応する……か…)

そして心は…凌辱を喜んで受けはじめ…

「タケルちゃん助けてえ！」

と叫びながら快樂に悶え始め…

快樂を与えすぎて、ショックで心臓が止まっても、

強制的に生き返らせ、悪魔のような実験は続き…

鑑のこころは自ら望んで、汚辱を受けはじめるとなり…

肉体改造され…人間の身体でなくなり、
そして…

身体から快樂に関係ない箇所は切り取られ、
最終的には脳髄だけになってしまった。

それが目の前のロボットでもある、また少女でもある精神を、崩壊
させていたのだ。

(ふむ……となると、ここはこうしてつと……)
ほつれた糸を繋げ治し…

リアルに戻ってきた。

「終わりましたよ」

目の前にいる00ユニットいや、鑑純夏か…は精神繋げなおし等で、
自閉モードに陥ってた。が安定はしている。

「成る程…一段落ついた…かしら？
次の起動が楽しみね…霞、頼むわ」

「はい」

T・850に抱えられ、純夏は浄化装置のある部屋へと運ばれてゆ
く。

「まあ、明日には結果がわかるとおもいますよ。精神面では安定し
てますから…」

「ところで何が00ユニットを、ああいった事にさせたの？
機能は万全だったのよね？」

「アクセスしてわかったんですが、元は確かシリンダーにいた脳髄
だけの人ですよね？
…鑑純夏という…」

「ええ…そうよ」

「何故脳髄だけで、生きていたかわかります？」

「……実験？」

「ご明答……覗いた結果からすると、
人間をどう生きさせるか？みたいですね……
まあその結果精神が……いくら適性があってもでしたよ。
俺がいなければ……」

「……でもなにがそこまで？」

「副司令、快感じた事ありますか？」

「そうね…いけ好かないやつを擦じ伏せた時や、研究成果がでた時とか快感よ」

「……いや、女としての快感です」

「……」

赤くなりはじめた。

「まあ…想像できたと思いますが、それがずっと……
永遠に…続くとしたら？」

「え？……まさか……」

「ええ…3か月間…従順になるように、ずっとあたえてましたね」

「……それって…死亡するわよ」

「はい。彼女は死にました…が生き返らせ、また……」

顔色が悪くなってくる副司令。

「でそのうちに肉体的でなく、神経に直接快感をおくるようになり……」

「最終的に脳随だけになり生かされた……のね」

「ええ、いきたままそぎおとしですね」

「ふう……聞かなきゃよかったかしら？……ま、わかったわ。ありがとっね」

「じゃ、しつね……」

戻ろうとすると、服を引っ張られとめられた。

「ん？」

霞ちゃんに問い掛ける。

「ロックオンさんに……渡して下さい」「アクセサリーを渡される。」

「これは？」

「ロックオンさんにお返しです」

「ああ、わかった。渡しておくよ」

「おねがいします……」

その日の夜……

「ジオフロント司令室」

作戦地域の拡大により新設された部屋から……指令をくだす。

「第一ミサイル艦隊攻撃開始」

ビクトレーミサイルバージョンの、全2100発のトマホークが、セルより撃ち出される。

目標……鉄原ハイブ周辺地域。

30秒後……

「第二セル射出されました」

そのまた30秒後。

「第三セル射出されました。

間もなく着弾予定、第一射目迎撃されつつあります。

消失率50%……60%……70%……80%……90%……着弾率0 / 1%
です」

(2発だけか……)

「第二射目、迎撃中、消失率80%…90%…着弾率0、15%」

(一発増えたか…)

「第三射目着弾率0、1%…第四射目着弾率0、2%…第五射目着弾率0、15%」

さすがに一射毎に2100発のミサイルの全弾迎撃は難しかったといえる結果に、
わずかながら口は緩んてた。

時間はかかるが、圧倒的物量ならそれを越える物量で対抗する。

(ん…さらに10隻作ればいいかな？

そしたらもうちよい到達率あがりそうだなあ…)

じわじわとあがったり、また下がったり、到達できなかったりの繰り返しを行い…

到達率が一桁にあがったのが攻撃開始から約10時間後、日付が10月22日になって午前中になった時であった。

「お、あがったか。よしよし…このままミサイルどんどん撃ち込め」

この頃には迎撃率も読み上げは行わず。オペレーター達も三交替の通常勤務にもどっていた。

何しろ休む事なくトマホークが撃ちつづけられ、

既に1000射目を越えていて…

ヤドカリ達ならともかく、生身の人間には…疲れが蓄積するので、到達率が激変する場合のみ、報告するように変えてる。

そして、1%の、21発が迎撃をされずに撃ち込まれ…

その綻びは徐々に広がり……

その約3時間後には50発着弾確認…

その約3時間後には100発の着弾確認…

さらに約4時間後…30%の着弾率を越えた。

ハイブ周辺地域に630発のミサイルが到達する事になった。

「グリッド変更、未着弾率の高いところを狙え」

一時的に着弾率は下がるもののじわじわと上がり……

約2時間後には…待望の報告が入った。

「佐渡島反応炉より入電、あ号目標より救援部隊送れとの事」

「二万規模送ると伝える」

程なく、

「増援規模確認、総数38万規模、最終到着日時10月26日の模様」

と待望の情報が寄せられた。

「38万か…すぐに飽和状態になるよな？」

「だね…ほつとくと5日位で15万規模の侵行が予測されるよ」

「となると26日か、27日か…参加部隊に通達しとくか…」

そして、約2時間後…着弾率が50%越え…

更に約2時間後…

「3612射目迎撃率0%…全弾着弾です！！続いて3613射目…迎撃率0%…全弾着弾！！」

「やっとか…うし、エアロスタット飛ばして観測射撃に移行」

ビクトレーミサイルバージョンから飛びたち、

程なく迎撃されずにエアロスタットが鉄原ハイブ周辺地域の観測にはいる。

そのデータをもとに残存BETAの駆逐にトマホークが正確に撃ち込まれ…

約2時間後…

鉄原ハイブ周辺では地上にBETAの姿が無くなっていた……

累計：781246発のトマホークがぶち込まれた。

なお、その間司令室に詰めていたわけではない。

基地の異世界軍エリアから離れられないものの、
戦力強化に勤めてはいた。

戦闘開始の15時間頃……

61戦車改の性能に満足したので、
フレームを流用した対戦車級以下用のをできないかな？とも思いは
じめていた。

(ふむ……)

この世界では対空戦車が対小型BETA用に活躍はしている。

ただやはり展開が遅く予測進路外になると被害が甚大になる等、の
問題が含まれていた。

そこで戦術機が高機動性をいかし……

が、そこで61式戦車改の高機動性、高量産の、基本フレームを流
用した……

装甲の生産は除外しての条件だが……を作ってもいいんではないか？

と思いは始める。

画面上に呼び出した、61式戦車改の砲塔を撤去。

20mm機銃砲塔と20mm機関銃、
車内にてターゲット操作。

の形を整えてみました。

(とりあえず試乗と…テストか…)

61式軽戦車…試作機を注文する。

28時間頃…ビクトレー砲艦仕様の10隻目が最終調整して出来
上がり、

第一打撃艦隊として攻略作戦に参加する為に、
佐渡島基地へと津軽海峡周りで進軍する。

そして…日付は、

2001年10月23日…

気分転換に地上に向かう。

…

カオル報告

鉄原ハイブ攻略準備中です。

ちと試作機つくってみました。

第117話 結婚、そして…… 投稿日20110504（後書き）

ナギ少尉「ね、初夜の様子これですましちゃうの」

作者「……18禁の内容まで発展したから、その部分削除しました」

ナギ少尉「え」

作者「あんな事こんな事……まあ何処までいいか考えはじめて……
あ、やべくなあ……で……」

ナギ少尉「例えば？」

作者「え……後書きで18禁にさしちゃうんかよ！！いわすきか
！」

ナギ少尉「えへへ」

作者「だから初夜の内容は禁止な」

ナギ少尉「……で、鑑ちゃんが出てきたね」

作者「ギリギリな〜」

ナギ少尉「でも本編だと22日スルーしているみたいだけど？」

作者「地下にこもってるからね。地上の事はわからんぞ」

ナギ少尉「という事は？」

作者「やっと武ちゃん登場〜」

ナギ少尉「けど……やっぱり本編関連つけて、ここまででないのって…」

作者「ゼロ魔SSでは当たり前だぞ〜」

ナギ少尉「…そういえば、おり主からみだと…
大概が初回あたりだよな〜」

作者「だなあ…さてどう驚くか？」

ナギ少尉「さて、次回はいよいよ……たけるちゃん登場!! タイトル
はそのまま、お楽しみにい」

第118話 タケルちゃん登場 投稿日20110506 修正1

2001年10月22日

side)タケル)

「つう」

武は薄目を開けて時計を見た……

つもりだったが、そこに時計は存在しなかった。

部屋の配置を思い返して、天井近くの壁掛け時計を見る。

「こ、ここは…戻ってきたのか??」

暫くぶりだが覚えている自分の部屋…

ベッドに机にコンポにポスター何時も通り…

冥夜も……、

(冥夜……?)

「う……いつつ」

記憶の流入といえるのだろうか…本来体験した筈のない記憶も入ってくる。

(……やはり……もどって来たのか?)

タケルは意を決してカーテンを開けた。

「あは……はははは……戻ってきた……戻ってきたぞー!!うおお

おおっ！！」

そこにはお隣りの純夏の家に突っ込んで半壊している撃震がいた。

「はぁ…はぁ…はぁ…今回こそは今回こそはっ！！！」

まりもちゃん、純夏、冥夜、たま、美琴、彩峰、委員長……そして
伊隅隊長、水月先任……

顔がどんだん思い浮かぶ…そして最後も…

「絶対にしなせるものか！！！」

タケルは決意をこめ絶叫した……

30分位叫んでただろうか……

(行動しなきゃな……っと…証拠をまずは持ってかないと…)

3WAYバック、ポストンバックをだし、その中にゲームガイ、M
D等など証拠になりそうな私物を詰め込んでいった。

この部屋は廃墟になる……

なので自重はしない。

「おもいか……」

ポストンバックがビキビキいき始めたので…

(と、カートは……あった)

カートの上に載せる事にする。

「いってきます」

玄関をあけ…外にでていく。
二度と戻れない家に別れを告げて…

10時…国連軍横浜基地正門へと続く坂道の中程に植えられた、1
本の桜の木の前に武の姿があつた。

苦勞して引つ張つてきたカート、バックは傍らにおき、

桜の木に向かつて深々と頭を下げる。

(前の世界の、まりもちゃん、純夏、冥夜、たま、美琴、彩峰、委
員長、伊隅隊長、水月先任…)

そしてこの世界での名前の知らない先任達…
俺は誓います。経験をいかし、皆を幸せにする事を…)

頭を上げると、武は視線を転じて坂を下つた先に見える廃墟と化
した町を見た。

(町の壊れ具合や、この桜の木にまりもちゃんの墓標が並んでない
ことからすると、時間はちゃんと巻き戻つてそうだな。
細かい確認は、夕呼先生と接触を果たしてからだ。
さ、これからが正念場だな…)

武は『前の世界』と呼ばねばならなくなってしまった、残してきた
人達を想い、また逝ってしまった人達を想い、誓いを新たにした。

そして、踵を返して横浜基地正門へと、堂々と歩みを進め……歩

みを……………

(え???)

正門の前に辿り着くと、

2人?の着ぐるみ??が、声かけていや、サインボードに文字をかいてくる。

鼠だか熊だかパンダだかわからないのが……
ただ頭の上においてあるだけ?のハーフヘルメットにMPとはかいてある。」

「ふも、ふもふも?」

「こんなところで何をしてるんだ?」

「ふうもふも?ふもつふ。ふふふもふもふ」

「外出していたのか? 物好きな奴だな。どこまで行っても廃墟だけだろうに。」

書き直してる。

(テンポく、くるつ…)

「ふもふも?ふふつもふも」

「隊に戻るんだろう? 許可証と認識票を提示してくれ」

(かいてある内容だけは前とおんなじか…)
でも、俺は許可証も認識票も持ってはいない。

「ああ、すまない。俺は許可証も認識表も持ってない。」

俺がそう言つと、2人?は一步退がつて銃を構えた。

詰め所からあたらな人物があらわれた。

(なっ…!!)

「動くな。両足を開いて両手を頭の上につける。ゆっくりだ。妙な真似はするな」

即座に指示を出して来る新たな人物。

「…落ち着いて話を聞いてくれ」

「早くしろ」

「…わかった」

それをとりなすようにかけた声もやはり届きはしない。そしてそいつが、俺を拘束しようとする。

「スキャン結果、当該データなし。所属、氏名をいえ」

(ようやくしゃべれるのか。なら、先生に会わなくては何も始まらない)

「とにかく香月博士に会わせてくれ！」

この基地には香月夕呼博士がいるはずだ。博士に会いにきた。」

「香月夕呼博士にか？」

「ああ、そつだ合わせてくれ」

「最初の質問に戻る…名前は？」

「白銀武だ。だが夕呼先…博士は俺のことを知らない。だから俺に連絡をさせてほしい」

俺の要求は普通なら論外のはずだ。

だが、夕呼先生にはその普通というものが意味をなさないことは学習済みだ。

「わかった、電話でのまずは応対となるがとりつごう…」

着ぐるみの方が、

「ふも！！ふも」

「問題ない、異世界軍の方で責任もとう」

「ふ…ふもう」

(異世界軍?)

俺は拘束されたまま、先生の執務室を呼び出した人物から受話器を受け取った。

受話器を受け取り、耳に当てた途端、

『で、あんた誰?』

いきなり不機嫌な声が耳に飛び込んでくる。

(うわっ、これはまずい。先生が不機嫌だといいい展開になったため
しはない。

…いや、多分ない)

「白銀武です。一応、初めましてになりますかね」

『あたしに何の用？』

(ここで興味をひかなきゃならない。そうじゃないといきなり……三度目があつたとしても四度目があるとはかぎりなし………
…先生相手に興味を持たせるには、1発目に強烈なのをお見舞いする必要があるな)

「オルタネイティブ計画について話したいことがあります」

『！！』

「たぶん……空の上では……造っているんでしょうね？」

オルタネイティブ5にて地球を脱出するための宇宙船を指して、言ってみる。

『……………』

「急がないと……手遅れになりますよ？」

今度はオルタネイティブ4に関する情報だ。

『……………あれね……解決ついたらんだけど、今更なに？』

(は?)

「え?か、解決?」

『あと他には？』

「え……あ、か、解剖してシリンダーの中に入れますか？」

『……もういい。電話切る……！！えっ？』
ガチャツーツーツー

電話を切られてしまった……

「終わったか？」

「ちょっとまった！もう一度、もう一度でん……」

ゴゴゴゴウウウ……

突如として少し離れた場所からシャトルらしいのが、轟音をあげ天高く上がって行くのがみえた。

（な……な……）

「貴様を身分査証の嫌疑で拘留する」

「……あ、あ……と……ころであれ……なに？」

「マスドライバーだ」

（は、は、は……別の世界に……？……！！）

建物の方から人物が走ってくるのがみえた。

（ま、ま……まさか……）

見覚えのある黄色のリボン……

「……ル……ん タ……ルち……」

「すみかつ！！すみかあー！！」

あらんかぎりの声で叫びかえした。

「タ……ルちゃ……！！タケ……ちゃん！！」

「すみかあー！！すみかあー！！」

着ぐるみ二体は状況の変化についていけないようだった。

純夏が走ってきて、飛びついてきた。

「タケルちゃん！！」

「純夏！！」

拘束がいつのまにかとかれ、自由になった腕でしっかりと抱きしめ合う。

「タケルちゃん！！タケルちゃん！！」

「純夏！！純夏！！」

そして……長いキスを……

口の中に純夏の舌が入ってくる。

（ああ、純夏、間違いなく純夏の舌だ！！）
貪るように舌にからませ……

「ふう……二人ともいい加減にして説明しなさい」

「あっ……」

「は、はい」

正門に夕呼博士がきてたのだ。

霞ちゃんも……顔を真っ赤にして、

正門にいた衛兵みたいのの肩に座ってきていた。

「とりあえずこの子、あたしのお客さんで登録しておいてね」

「了解しました。博士」

「ついでらっしやい」

聞きたい事は山ほどあったが…おとなしくついて行って検査をこなす。

そして、前回と変わらない検査を受け……

4時間後…

「さて、鑑から聞いたんだけど……あなたがシロガネタケルね？」

「はい、そうです」

「で、この機械、あなた世界を渡ってきたの？」

「？世界を渡る？」

「……違うみたいね……」

「あっ！！いえ俺はやり直しに戻ってきたんです！先生！」

「先生？あたしは生徒をもった覚えはないわ…

ところでやり直して？」

「実は……」
最初BETAのいない平穏な世界の日本にいた事、
一度目：オルタネイティブ5の実行の世界にいた事、
二度目：オルタネイティブ4が成果をあげ、最終目標あ号を倒した事。
しかし、あまりの戦死者の多さ、まりもちゃん、純夏、その仲間達……で、やり直したいと思った事。
とまらず全てを話した。

「なる程ね……私達はそれで幸運を掴んだ可能性もあるわね……」

「へ？幸運？」

「あなた、この基地にきて違和感なかった？」

「あ、正門の衛兵達……着ぐるみみたいなのとか、
霞ちゃんが乗ってた人とか、あとは知らない言葉で、
異世界軍とか、
マストライバーとか」

「……一つ聞いわ。あなたがここに前回きた当日、佐渡島ハイブはBETAの勢力下にあった？」

「当たり前じゃないですか。…えっと前は12月23日に甲21号攻略作戦が発動、25日に落としました」

「……白銀…佐渡島ハイブは、もう人類の勢力下にあつて、次は鉄原ハイブ攻略の段階に入ってるわ」

「はあ??ま、まじですか?」

「まじ?なにそれ……」

「あ、すみません。本当ですか?の意味です」

「異世界語の一種かしら?…まあいいわ……あとこの話を聞いた後は後戻りできないわよ?いい?」

「はい!!そのつもりで俺はきました」

「あなた、渚カオルという人物しってる?」

「いえ。知りません」

「やっぱりね…渚カオルという人物が、」

あなたの知ってる前の世界と大きく違う事になる要因になったのよ」

「先生、その渚力奥尔って…?」

「世界を渡るわ」

「せ、世界を?」

「ええ、異世界にいけるのよ」

「……」

「そのおかげで人類は持ち直し始め、佐渡島ハイブは攻略、私は0ユニットを完成、次は鉄原ハイブ攻略ってところね」

「変わりすぎてる……」

「ま、もどつてきてこれから起こる事の対策をねってても、無駄になっちゃったわね。
ところであんた衛士の腕は確かなの?」

「あ、はっ、はい！！最終階級は小尉。あ号目標を撃破しました！」

「ふうん……ま、いいわ…腕をみてからの判断するわ」

「シュミレーターですね。あとお目かねにかかったら207B訓練小隊に入隊したいんですが」

「あこの話ね」

という事でシュミレーターに行く事になった。

(よし……)

『じゃ、ヴォールク・データ単機突入ね』

「なっ！…無茶ですよ！」

『それくらい証明しなさい、CPは鑑がつくわ…鑑、全能力使わないようにね』

『はい。タケルちゃんがばっ』

「お、おう……」

ヴォールク・データで潜る。

(お???:……XM3?いや、コンボがないか……その前のバージョ
ンか?……けど、これなら……)
八搜飛びの要領でどんどん奥にすすんでいく……
硬直がないから動き易い。

そして……

『タケルちゃんすごい』

『やるじゃないの』

「よっしや〜!〜!」

ヴォールク・データの反応炉まで単機到達していた。

『お疲れ様、降りてきて頂戴』

「で、先生入れてくれるんすよね?」

「そうね……あなた教官しなさい」

「はあ???教官ですか?」

「あなたの腕で訓練小隊にいれるのもったいないじゃないの」

「ですけど……」

「けどそこまでこだわるのは、何か重要なことがあるんでしょ?だから教官よ教官」

「わかりました……」

「あと階級はそうね……中尉でね……所属はA・01よ」

「え?……はっはい!」

「さて……おそくなっちゃったわね……」

詳しい話は明日にして頂戴。夜は鑑とじっくりお話したいんですよ?」

「せ、せんせい……」

「馬にけられたくないしじゃまはしないわ……あ、そうそうIDカードよ。」
セキュリティレベルはかなり高く設定してあるわ……じゃ、おやすみい〜」

……

カオル報告

ただいま攻撃中

ナギ少尉「カオル君一回もでてないよね？」

作者「うん…今回はね…うらで攻撃の指示をしているだけだし…遭遇すらないしさ」

ナギ少尉「けどこれで本編に突入ね〜やっとな…
2次小説で本来の主人公がここまででの遅いって…結構珍しいよね〜」

作者「だなあ…完全にオリか、またはメイン主人公ルートか、またはでも早めが多いしなあ…」

ナギ少尉「なににせよ…これで物語は加速する？」

作者「いや…無理かな？カオルの考えが変わらん限り…
まあ月が先に攻略するかもしれんが…」

ナギ少尉「さて、次回予告は…207B訓練少隊…お楽しみにい」

第119話 207B訓練小隊 投稿日20110508

2001年10月23日

side\タケル\

この世界でも純夏と結ばれた…

「タケルちゃん…痛かった…」

「ごめん」

「でもうれしい…この世界でも結ばれて」

「ところでさ、純夏……この世界っていつと…
前の世界の事も覚えてるのか？」

「うん。で、悲しかったから、カオルって人を呼び込んだじゃったみたいなの」

「そうか……」

「でも呼び込んでよかったあ……タケルちゃんとこんなに早く……」

「純夏…」

キス…舌を絡め……

「あ、純夏」

「なに？」

「207Bの皆についてなんだけど…」

「いいよ」

「何にもいってない…」

確かにリーディングすると読者がわからなくなるような……
ブロックの流れにしますか…

「私だけでなく、皆を救いたいんでしょう？確かに嫉妬はしちゃうけど…」

タケルちゃんと結ばれたから、後は結婚で我慢するね」

朝方…先生の執務室に連れだっていった。

「入ります」

「来たわね…とりあえず午後から教官としてついて頂戴。
A-01の皆は…明日ね」

「了解しました。で先生重要な事なんですが、反応炉から人類兵器の情報が」

「ああ、それ？カオルが対策しちやったみたいよ」

「は？」

「それなんだけど、逆スパイにしたてあげたってお話」

「は…はあ…」

「ま、この世界に来たばかりだから、説明に私の時間を使うんだから感謝しなさいね」

「は、はい…」

この世界で5月以降に起きた出来事を説明してくれてる。

(異世界軍…かあ…)

国連軍の独立統帥権をもった集団として、

独自に動いている事。

宇宙開発、スペースコロニーの開発をして、難民環境改善に取り組んでる事。

そして…

「え???マジですか?先生」

「また異世界語をつかって…本当よ本当」

クーデターは起こったものの、人的損害が0…

そればかりか沙霧さんやウォーケンさんが異世界軍に……

「あら???こら白銀……鑑……」

「は〜い」

グワシヤ

「ヒブウ」

ピクピク…

「なにほつけてんのよ…しっかり聞きなさい」

(だってよだってよ…)

殿下が結婚済みだって事。しかも相手がカオルという人物…

(変わりすぎてるだろ〜!!)

「まあこんなところかしらね……質問は？」

「で異世界軍に関してなんですが…」

「そうね…A-01入隊時に説明うけた方がわかりやすいわ。だからパス」

「はい…」

「そろそろ時間ね…」

じゃ、昼飯とつたら教練に参加しちゃって」

「はいっ!」「はい」

(まりもちゃん……)

「うわ…そうだったんだ…」

「純夏…リーディング？」

「うん…今の消す…きぼちわるくなる…」

「だな…今でも…さ…ところで純夏、お前の仕事は？」

「博士の助手、その内A-01入隊なのかな？」

「成る程な…お互いがんばろうな」

「うん」

PX…

207B訓練小隊は見えない…

「はい、あぐん」

「あ〜」

パク

「おいしい？」

「うんめえええ…しかも天然物かよ」

「そついえばそつね」

京塚のおばちゃんの腕もあり、至福の味…

ほどなく食べおわり、純夏とわかれ、

午後の教練に参加する前に、教官室に立ち寄る事にした。

(まりもちゃん……)

「失礼します」

部屋の中には…

「白銀武中尉、お待ちしておりました」

(まりもちゃん……生きている……)
なみだが…

「私は渚まりも軍曹であります」

「は??……神宮寺軍曹でなく?」

「神宮寺は旧姓ですので、渚まりもであります」

(き、き、旧姓?……)

涙が一瞬でひき……

ウ、ウン

咳ばらいをし…

「じ……渚まりも軍曹、つかぬ事を伺うが…いつ？」

「つい三日程前、式をあげ、変わりました。連絡渡ってなかったでしようか？」

「あ…いや…」

(くくくる前にか…)

「おめでとつ…祝福を………」

「ありがとうじいじいさます」

「と…、まりも…ちゃん年上ですから階級抜きに敬語はやめて下さ
い」

「は…？まりも…ちゃんですか？…あと軍にいる以上は…」

「命令です」

「上官命令ね…わかったわ…
けど、人妻だから、まりもちゃんはちょっと…」

「昔の恩人にまりもちゃんという方がいるんですよ。
だから、言いそうなのでそういつた呼び方に…」

「はあ…わかった…良いわよそれで、けど他の人がいる時には階級
でよんでね」

「はい。まりもちゃん」

「で…白銀君、午後の指導の事？」

「ええ、俺が主にみるのは戦術機の事になるので、
総戦技演習まではまりもちゃんが見てください。
俺はあくまでも補佐的な役割で口だす程度になります」

「わかったわ…じゃあ行きましょ？白銀君」

side〜タケル〜end

(ん…ん…疲れた。やっぱり早いとこ砲撃艦回すべきだなあ…
時間かかってたわ…)

前準備のミサイル攻撃が終わり、BETAの増援の集結まちだった
ので…

(前は増援到着前に制圧して苦勞したからなあ)

久々に地上にでて身体をほぐす事にした。

(やっぱり太陽の下がいいや………っと?)

「まりも」

「あ、あな……カオル大将閣下」

連れだつて歩いてた人物がいたので、

あなたと言いかけたのを訂正したっばかった。

「と、こちらの方は？」

「今日から教官として指導される、白銀武中尉であります」

「ああ、君がA-01に入隊予定のね…私は渚カオル。

異世界軍の責任者にして、まりもの夫さ。よろしく頼むよ」

sideタケル

(おっと……?!?!?)

しばらくほづけていた。

俺がいるのに、目の前でラブラブ光線というか…
新婚ほやほやの雰囲気にあてられ固まって…

(……まりもちゃん……幸せになったんだな…
前の世界でも前々でも、元の世界でも……)

ン、ンン

咳ばらいをし、

「白銀武中尉であります。閣下……よろしくおねがいたします」

「ああ、よろしく頼むよ。あと閣下はやめてくれ。普通にカオルで
いいからな」

「わかりました。俺の事もタケルでよんで下さい」

とあって、別れ207B訓練小隊の方へと向かう。

「はあ………」

「どっしたの白銀君？」

「い、こえ………」

(なんか未練たれるな……知ってる人が結婚するとな)

グラウンドに着き視線を感じながら…

「小隊集合!!」

駆け寄ってくる委員長、彩峰、たま、そして…冥夜……

…

あ号に侵食され…

『頼む……』

「……なんだ…冥夜？」

『撃つてくれ……タケル……』

「……冥……夜……」

『影として生を受けた私が……斯様な死に場所を得ることは……
身に過ぐる栄誉だ』

「冥…夜…」

『今ここで果てるのに、何の迷いがあるだろう……
だが…ひとつだけ…この世に未練があるのだ…』

お願いだ…タケル…いまわの際の我儘…どうか…聴き入れてくれ…
せめて…せめて…最後は…』

「ああ…なんだ、冥夜？」

涙をこぼしながら…

『愛する者の手で…そなたに撃たれていきたいのだ…』

「…冥…夜…」

『私の生涯が…たとえ…影としての生でしかなかったとしても…
そなたが…そなたが生き続け…私という人間が存在したことを…
御剣冥夜がこの世にあった事を…覚えていてくれさえすれば…

私は…幸せなのだ…』

墓まで持って逝く…つもりだったのに…私の…弱さを…ゆるせ…鑑
…』

独白に躊躇していると…

『うああああああ！』

「冥夜！」

『あああああつ 撃つてくれタケルッ…』

私を…奴らの慰みものに…するでない…ッ！…』

「うう…うつう…冥夜…あ！…」

トリガーを引き発射される荷電粒子砲…

そのかがやきは冥夜の乗る武御雷ごとあ号目標を…

「207小隊集合しました」

「よし、紹介しよう。新しく教官に就任された白銀武中尉だ。これよりしばらく貴様らの教練の補佐をして頂く事となっている。…白銀中尉、ご紹介し……どうされました？」

「ああ、すまん目に埃が入ったようだ…」
涙が出てた…ポツケより出したハンドタオルで拭う。

「大丈夫ですか？」

「ああ…中断させてすまんな」

「ではご紹介しま」

「あつ、大丈夫です。せん……副司令より聞いていますから。
こちらから榊 千鶴、御剣 冥夜、珠瀬 壬姫、彩峰 慧ですね？」

「はい」

「あとここにいない、鎧衣 美琴ですよね？」

「はい。ただ今入院中です」

小隊の方に向き直り…

「今紹介にあずかった白銀武中尉だ。俺が直接指導するのは総戦技演習後となる。

それまでは渚教官の補佐をすることとなる。……と仕事の話はこじ
まで……」

「実は、俺は君らと同じ年で、教官というのも今回が初めて。渚教官を手本にするっつのは君らと一緒にだ。だからさ、固くでなく気楽にさ頼むよ」

「中尉…他の者にしめしが…」

「まあ公の場ではなく、訓練やプライベートの場ではそういう態度で接します。でないとチームの信頼感得られませんしね…というわけでよろしくな」

「」「」「はい！」「」「」

「さて、…俺の実力みて見たいと思うかもしれないよな？あと君らの実力もみてみたいしな…挨拶でがら白兵戦といこうじゃないか」

「戦目…たま…」

「ひゃっ…」

「まあ…頑張れよ」

「はい」

二戦目…委員長…

「ふ……負けたわ」

「精進しろよ」

三戦目…冥夜…

「なっ！！くっ！！」

「あの冥夜さんが押されてる……」「これは夢？」「やるね」「すごい…中尉」

「ぐっ」

「勝負ありだな」

刃引きナイフが冥夜の首元に当てられている……
ナイフを引き、

「ありがとうございます」

一礼をし戻っていく冥夜…

列に戻り際に二人が交差するまに…何か会話をしている。
ぼそつとで聴こえはしないが、読唇から…多分、

「彩峰…油断するでないぞ…」

「承知…」

の会話が交わされたらう……

四戦目……

「彩峰は得物つかうより徒手格闘技の方が、得意分野だよな？」
「今までつかっていた刃引きナイフを渚教官に渡しながら、問い掛けると……」

「それでいいの？強いよ」

「ああ、得物はなしでな」

「本気でいく」

「ああ、本気で来い！！」

彩峰、一礼し……

「始め！！」

彩峰との組み手が始まる。

前回のループでも彩峰には中々勝てなかった。
が……それは互いに更に高みを目指して、吸収しあう事。

今回はそのアドバンテージ分がある。

そのため……

(そこ！！癖はこの頃はなおってないなあ！！！)

隙をとり、腕をきめてると…

たまらず彩峰からタップがくる。

「そこまで！！」

「まいった。強すぎ」

「彩峰もな」

「ありがとう。惚れないけど、ぽっ」

「あがつ！」

「シヨックだった？」

「はぁ…彩峰……整列！」
並び始める。

「俺の実力はわかったろ？」

総戦技演習後覚悟しとくよつにな…特に彩峰「

「かんべん」

「俺からは以上だ」

「」「」「ありがとうございます！！」

「」「」

「じゃ、渚教官」

「はい」

と午後の訓練は続く…

……

夜PXにて…

「よう。ここいいか？」

「あ、敬礼！！」

「いい、いい。堅苦しいことするなったる？」

突然現れた上官に驚く皆…

訓練兵は士官とは違う時間帯にPXを利用しているのだから、驚くのは仕方がない。

委員長の号令とともに、立ち上がり敬礼をしてかけてくるのを制止する。

一応は俺も返礼するが、そんな面倒なことはこれからはしたくない。

「これからは、いちいち敬礼とかしなくてもいいぞ」

「は」

「委員長固いぞ」

「は？い……委員長??？」

「ああ、なんかな……前の知り合いの雰囲気にててな……という事で愛称は委員長ということだね。いいだろ」

「委員長か……良い愛称をもらったではないか榊」

「みきは？みきは？」

「球瀬はたまだ」

「たま？……えへへ可愛いのもらっちゃったあ」

「猫みたい」

「ああ、そうだな」

「で、御剣は…冥夜、彩峰のことを彩峰だな」

「おおっ…良いな…」 「僕だけ変わらず…」

「ところで教官、ひ」

「あゝタンマ」

「たんま？」

「あ、までの事だ。教官はやめてくれないか？

紹介の時にいったと思うが…そんな呼び方は禁止。

白銀でも武でもいいからさ。同じ年齢なんだし…な？」

「ふむ。わかった武」

「了解く武さん」

「はあ…さすが博士の部下なのね…白銀は」

「焼きそば」

「俺の事さしてない呼び方があるぞ」

彩峰…俺の事を指さし、

「焼きそば…好きだからそれが1番」

「彩峰」

「冗談、白銀でよぶ」

「で、委員長質問しかけたのなんだ？」

「白銀はここにくる前までどんな感じだったの？」

(…お前らと一緒にだったさ…そして…お前らは…逝った…)
「…前の部隊か…負傷者3名で、動ける衛士5名で望んだ作戦は…」

まだ俺が教えられる事もあった…

俺自身の力が足りない部分もあった…

その為、一人二人と欠落し…

最後は俺の事好きだという人物を俺の手で撃ち抜く事になった…

(冥夜…)

「だが最高の部隊でもあった。…ちょうどきみらのようにな…
まだまだ粗削り、磨けば伸びる…」

最高のチームになるように戦術機面では教えるらな」

「期待してるわ」「ベットの上で手取り足取り」「更なる高みを」「もっと頑張る」

「これからもよろしくな。」

あ、そうそう飯も一緒に食って、質問やらも受け付けるよ」「

「わ〜い」

タケル達によるはふけてく…

…
…
…

カオル報告

今回の出番これだけ??

第119話 207B訓練小隊 投稿日20110508(後書き)

ナギ少尉「また今回もカオルがあんまりでて来ないね」

作者「殆ど武側だしなあ、最初は説明と…あとはまりもちゃん系か…」

ナギ少尉「結婚？が未練たらたら…で君つけしちゃって…もう奥様いや、愛妻っう感じね。
ラブラブシーンは？」

作者「あんまりやり過ぎると18禁やラブノベネタになりそうだから、……
っつかラブノベ系も甘い好きだし…他作者さん宣伝になるかもしれないが、鳶王とかね」

ナギ少尉「もつとkws k」

作者「…そりゃ男だから、色々嗜んでるよ。がSMだけは受けようややるうはなあ

……目の前でやってるのは連れられて見に行っただが、イマイチっう感じ。

勿論海外のものもあるし…まそんなとこでこのネタおしまい」

ナギ少尉「そっいえば海外に行くの？」

作者「……………後書きで聞くか？まあ、一泊三日でちょこっとね。
次回投稿分はなんとか今から仕上げるさ」

ナギ少尉「さ、缶詰ね。頑張って！！次回、タケルA - 01配属 +
未知との遭遇お楽しみい〜」

第120話 タケル A-01配属+未知との遭遇 投稿日20110512

2001年10月24日

side)タケル)

(今日はA-01とか……伊隅隊長、水月中尉、涼宮遙先任、柏木……
やば、涙ださないようにな……)

曲がり角で誰かとぶつかってしまった。

「と、失礼……」

(あっ……)

その顔は……

~~~~回想~~~~

『……さて。長くなってしまったな。皆にもお別れさせてもらおう』

「大尉ッ！お世話になりましたっ！！」

『泣くな……男だろっ』

返礼をする伊隅は、姉のような優しい笑顔を浮かべていた。

「す……すみませ……ッ……俺は……もっと大尉に……」

色んなことを……教えてもらいたかった……の……に……」

『私も多くの先達と同じく、基地に咲く桜となって貴様たちを見守

る。

何かあったら、桜並木にあいに来い』

「…はい!」

『人類をたのんだぞ』

「必ず…俺が必ず守ります!」

『さらばだ…白銀』

「さようなら…大尉…」

くく

「おい大丈夫か?何処か怪我でも?」

「あつ失礼…大丈夫です」

(油断してたああ)

とハンドタオルで涙を拭う。

「そうか…?」

「と、失礼ですが伊隅大尉ですか?」

「あ、そうだが…」

「今度A・01に配属になりました白銀武中尉です」と敬礼を行う。

「おお貴様が副司令から推薦された白銀か…ふむ…歓迎するぞ。ようこそ伊隅ヴァリキユリーズへ」と答礼しながら歓迎された。

そのまま連れ添ってブリーフィングルームへと向かう。

ブリーフィングルーム内にはいると、見知らぬ顔と、思い出の顔が…

(速瀬中尉…)

「中尉！何やってるんですか！？隔壁を開けてください！！！」

「ダメよ！あなたは格納庫に戻って淒乃皇を守りなさい！！！」  
自決装置作動の警告音が聞こえる。

「やめてください中尉！！！」

「バカ！早く離れる！！！」

「まだ他に方法はあるはずです！自決装置を止めてください！！！」

「もう…直接起爆しか方法がないのよ！！！」

「諦めないでください中尉！！！」

ザッ…

「遙や大尉…神宮司軍曹…柏木。」

それだけじゃない…今ここで時間を無駄にして、

人類の未来を信じて逝った人達の命が無駄になるなんて…

絶対に許せない!!」

ザッ…

「速瀬中尉！反応炉を…よろしくお願いします！  
人類の未来は…任せてください！」

『よく言った…白銀。やっと一人前の衛士になったわね』  
速瀬の顔は穏和な表情で微笑んでた…

『白銀。あんた、結構いい指揮官になると思うわ。私なんかよりず  
っと…ね』

「…ありがとうございます!!」

『私のこと、あんたの部下たちに誇らしく語ってちょうだい。  
頼んだわよ?……』

さあ、もう行きなさい！時間を無駄にできないわ…  
伊隅ヴァルキリーズを頼んだわよ。みんなによろしく!」

「速瀬中尉…お世話になりました!」

『じゃあね、白銀』

(涼宮中尉…)

窓ガラスに血がべったりつき、

叩き付けられた涼宮遙中尉…

変な方向に曲がっている…

( 柏木… )

『了解。御剣も大尉の護衛があつた方がいいていってたんだから、納得してよ。ね?』

「大尉の機体：推進剤残量の計算だけは気をつけるよ」

『そうだね。私のがせてもらうつ分、重量がふえるし』

「ああ」

『柏木。必ず戻れ』

「というわけで、本日より入隊する事になった白銀武中尉だ…白銀、自己紹介しろ…白銀?」

「あ、はい!!--」

「ん?きてそうそう、誰ねらつてたの?」

「こらちやかすでない…白銀」

「はい、白銀武中尉です。年齢は17の若輩ですが、前の隊では突撃前衛をこなしてました」

「ほう…水月、高畑…ライバルだなあ」

「突撃前衛のポジションは渡さないわよ!!」

「ライバル」

「とりあえず白銀、この女性だけの特殊部隊、伊隅ヴァルキュリーズへようこそ。  
久々の男性衛士だ、歓迎するぞ。コールサインはヴァルキュリー1だ」

「速瀬 水月。階級は中尉してるわ、コールサイン、ヴァルキュリー2。」

「前の隊じゃどうだったかわからないけどでかい顔させないからね！」

「西坂 舞よ。ヴァルキュリー3、階級は中尉。ポジションは強襲前衛してるわ」

「河田 瞳ていうわ。ヴァルキュリー4、階級は少尉。強襲前衛を担当してますの」

「高畑 貴美、ヴァルキュリー5、突撃前衛……」

「風間 美冴と申します。コールサインは、ヴァルキュリー6制圧支援してますわ」

「宗像 栲子よ、ヴァルキュリー7で担当は迎撃後衛。よろしくね」

「渚 屡伊、「我が隊唯一の人妻」もう…途中で入れない。ヴァルキュリー8で打撃支援担当よ」

「小倉 九琉華、コールサインはヴァルキュリー9、強襲前衛担当しているわ」

「食べられないようにね」

「涼「ここからは新人だ。隊全体で教育してるところだな…続けていいぞ」はっ！

涼宮茜ヴァルキュリー10です強襲掃討を担当してます」

「柏木 晴子、ヴァルキュリー11で砲撃支援ね」

「築地 多恵だど。ヴァルキュリー12、強襲掃討よろしく」

「麻倉 美桜よ。ヴァルキュリー13担当は制圧支援ね」

「高原 由希。ヴァルキュリー14、打撃支援してるわ」



「以上が我が隊の人員すべてだ…  
幸い、今年の五月から脱落者が0の為、  
すべてのポジションにおいて、エレメントが組める状態になっ  
ている。

…だが、当初は連隊規模で発足されたんがな…  
さて、私は白銀に我が隊の機体説明に行く」

(不知火だよな…懐かしいなあ…)

「お前らは、新人に対してのハイブ攻略戦の教導をしとくように」

「了解！」\*多数。

ハンガーに向かいはじめている。

「隊長、新人5人連れてですか？流石に無謀では…？」

「白銀、前の部隊で乗っていた機体は？」

「す…じゃなく、不知火です」

「不知火か…結構良いの乗ってたな」

「ええ。良い機体でした」

「で、我が隊は異世界軍の協力により、魔不知火、魔撃震という二  
機種を運用している」

「は？魔……ですか？」

「ああ、魔がつくな」

破顔する伊隅隊長…

「まあカオルの話だと改造を自重しないと魔になるそうだから魔不知火、魔撃震という話だな」

「は、はあ……」

「現物を見てもらった方が早いだろ……」

「だから無謀という言葉がなくなる……というものだ」

ハンガーに差し掛かり…

(こ、これは……)

「正面に見えるのが魔「Zガンダム」！」

「Zガンダム？」

「あ、いえ……頭だけです…それ以外…うわあ…変わりすぎだよ」

「続けていいか？」

「あ、すみません……」

「魔不知火だ。不知火と違うところは核融合炉で動いてる」

「まさかミノフスキ  
I型核融合炉じゃ」

「白銀…いつ知ったんだ？」

「当たり前なんです？」

「ああ……」

「となると、あれ…ザクマシンガンっすか？」

「あたりだ……」

「……まさかシャアやアムロまでいたりして……」

「白銀…何処まで知ってるんだ？お前は……」

「ちょっと…っすね」

「まあいい続けるぞ」

(おいおいマジかよ〜ガンダムだよガンダム…ザクマシンガンあったりとか、  
Zの頭部とか時代設定ごっちゃだけどさ…)

(ん？あれは…まさか!?!?)

「隊長…あのフワフワ浮いているバッタ見たいなの…コバッタです  
」？」

「ああ、そっだが？よく知ってるな」

「あはははは…」

「おい、白銀？大丈夫か？」

「大丈夫です…」

(なんで機動戦艦のナデシコが？ガンダムに続いてか?)

「で、説明続けたいが…大丈夫か？今までの部隊とかなり違うから、大変だろうが…」

「あ、はい…」

「核融合炉からずれたな…機体のフレームも今までの不知火と全く違うし、ある意味別物ともいえる。詳しくは乗ってみるとしかいえないな…その向こうにあるのが、魔撃震だ。新人に充てたやはり魔改造機だな」

「今までの鈍重な撃震とは…」

「勿論全くの別物。しかも装甲が厚い、また追加武装もある…対B E T A 戦の安全面では上と聞いている」

「隊長、自分の機体は…？」

「多分魔不知火だと思うが…まだ異世界軍エリアで組み立て中と聞いている。見に行ってきたても良いぞ」

「では見えます」

許可をもらい、B55ハンガーの自分の機体を探しに、見学しにきている。

(ん?.....この機体はなんだろう?)

武はM9ガンズバックを見上げながら考えこんでいた。

(ん~~~~.....多分どっかのだろうけどなあ...)

と考えながら移動すると...

「え?パトレイバー??」

目の前にはパトランプが両肩について、白黒のカラーリングの付いた、

桜田門エンブレムが眩しい機体がある。

「.....作品粹飛び越えてるよ.....どうなってんだよ.....  
そのうち宇宙戦艦ヤマトやマクロスがでたりして.....」

「白銀中尉」

「えつと君は?」

「25号です。始めまして...で白銀中尉なにやってるの?」

「ああ、自分の機体見に来たんだけどこころでこれ…パトレイバー??」

「うんそうだよ。」

マスターがその世界からコピーし、作製した機体だよ。勿論僕らもね。」

「マスターというと?」

「渚力オル大将〜ね」

「その世界って…アニメの世界の機体だろ?」

「うん。マスターはそういった世界をわたれるんだよ。」

「あははは…」

(だから隊長、あんなに自信あふれるわけだ…)

「な、なあひよっとして月もおとす」

「月はまだまだよ。準備中だけどね…マスターもえげつない方法考え  
てるけどね〜」

「えげつないって?」

「人が住んでいる場所ではできない、大規模出力レーザーによる殲  
滅」

「はあ?そ、そんなのって…あっ!ガンダムの!!」

「ソーラーレイ・システムね…ねえ白銀中尉…なんで知ってるの?」

「え?知ってるもなにもみ…」

(あっ…そういや…アニメってこの世界…)

「あゝそういえば白銀中尉も元々は異世界人だったよね」

「え?……な、何故それを…」

「大丈夫、副司令からそう入力されてるし、ここには千人以上異世  
界人いるしさ〜」



「あ、アムロさんとかだよな？会いたいけどさ」

「あってみる？」

「マジで？いいの？」

「今の時間ならアムロ大佐はフリーだから大丈夫だよ…こっちい」

「…なあ25号」

「なにい？」

「君らはコバッタだよな？ナデシコの」

「うん。そうだよ」

「沢山いるけど、全員ナデシコの世界から？」

「えっと1号以外はすべてこの世界生まれだよ。マスターに作ら

れたの」

(渚カオルか…純夏すごい人物を引き込んだよな…)

「アムロ大佐」

「ん？なんだい？」

(ア、アムロさん！！)

武は生ではみてはないが、丁度ガンダム20周年で、発売されたばかりのPlayStation2に、DVDを借りて脳裏に焼き付けた人物が目の前にいた。

「新しくA-01に入った元異世界人の白銀武中尉だよ」

「始めまして、白銀武中尉、国連軍第11方面軍A-01中隊所属であります！」

「異世界軍所属、アムロ・レイ大佐だ。よろしくな」

(ニューガンダムの容姿にそっくりだな…)

「あのつかぬ事伺いますが…アクシズの戦いの頃ですか？」

「君は、僕の事を知ってるみたいだね……  
そうさ、シヤアと戦ってた時期だよ。  
彼も一緒にスカウトされた口さ」

「ニューガンダムは作られて…？」

「いや、まだ地上戦メインだからニューガンダムは作ってもらって  
はないな」

「そうですか…」

「これから見る機会はあると思うよ。いや、機会を作るさ…」  
「はい期待してます。ところでアムロ大佐、他に異世界軍には…ど  
んな方が？」

「スレッガーさんや、ドズル中将、  
レビル將軍や、シヤア、クエス君とかもいるな」

「え？ドズル中将ですか？」

「ああ、最近ビグザム解禁してくれと、煩いんだがな…」

話は続いていく……

side out

「アメリカ軍情報司令室」

「ふむ…この船から容量以上のミサイルがでているのか…」

「そこに何かの秘密があるもようです。

また同系の砲撃戦仕様だと思えますが、今現在このような艦が…」

スクリーンにビクトレー砲撃仕様が映しだされる。

「………何インチ砲か？」

「画像分析結果から24インチ砲との結果がでてます」

「砲艦主義か……」

「正直、どこから原材料を仕入れてるのか、  
もうわからない、お手上げと…」

「前任者が失敗したツケがきついな……」

…

カオル報告

また出番なし 主人公外されたの？俺…

作者注

しょうがないよ…作戦準備中だろ 裏で…

ナギ少尉「作者、主人公変わったの？」

作者「……………しょうがないだろ、

この描写はそうだったシーンなんだからさ」

ナギ少尉「カオルは何やってるの？」

作者「ちちくりあってる」

ナギ少尉「え？」

作者「だから、殿下とちちくりあって18禁になってる……かけないよ……」

ナギ少尉「そ、そうね……………確かに……」

作者「最近18禁をかけたって殿下が迫ってくるんさ……」

ナギ少尉「外伝で18禁で投稿しちやえば？ついでに、わたしと艦

長のも〜」

作者「……ふむ……」

ナギ少尉「ついでに作者の海外での体験も〜」

作者「……話変えよう…武メインがもう二話ほど続くかな…鉄原ハイブ攻略含めてね」

ナギ少尉「そういえばそろそろあ号も危険感じないの？」

作者「感じはじめてるなあ…だから対抗種、いやこの場合は模索か…でもおかしくはないな。  
…何しろ物量、遠距離で負けてるから…  
…が、鉄原ハイブ戦には間に合わないな」

ナギ少尉「さて…いよいよ次回は、鉄原ハイブ攻略地上編…お楽しみにい」

第121話 鉄原ハイブ攻略戦 投稿日20110514

2001年10月25日

タケルはシュミレーターの中にいた。

（腕は前回の世界よりか若干あがってる？位なのか…  
けどハードに頼ってるよなこれは…）

OSがあつたとしても、ハードがここまで発達してなければ、  
戦死者でもおかしくないな…と、  
対BETA戦に関しては、タケルは判断していた。

機体に関しては、  
（身体にかかる負担もあんまりないし、機動も思うように動く！！  
ストレス感じね〜！！）

タケルは湯水をえたごとくすぐに新型機体、魔不知火に馴染み、  
実機をテスト始動後、対人シュミレーターに入ってる…とのわけだ。

武の歓迎をかねて、1on1のA-01内対人戦を開いていた…  
勿論、武は勝ち続け…

伊隅隊長にも三次元機動を用いて勝ち、  
速瀬と良い勝負をしていた。



そして……

「よっしゃー!!」

『もつなんなのよ!!この変態機動!!』

見事にコクピットブロックに高周波ブレードを突き刺し、スクランブルポット排出の判定を与えた。

『我が隊が事々くやられるとはな……白銀、しばらく休憩のち別の者と対戦だ』

「了解です」

(けど別の者??A・01の皆とはあたってたよな……)

しばらくすると……

「白銀、出番だぞ」

「ういっす」

シュミレーターに乗り込み、起動する……

市街地戦…1on1…

(相手はまだ反応なしか……)

『ウオオオオン』

外部センサーが音を拾い、咄嗟に音の方向へと機体を向ける。

(な、何？今の狼のような叫び声は…)

機体レーダーに感。

(なっ…!!)

ターゲットは、物凄いスピードで地上を接近してくる。  
隠れようともせずに…

(嘗めやがって!!一斉射で決めてやる)

武の機体は、予測地点にむけ…

(今っ!)

ザクマシンガンを斉射するも…

(ちいっ)

相手の機体はビルを蹴り、影に隠れる。

(なるっ!!)

上空に踊りで三次元機動をかますも…

(なっ!どこだ?)

捕らえたはずの敵機がいなく…

アムロさんも…

シャアさんも…

魔撃震カオル仕様がずっとこいと二人していいはじめたので、  
同一機体にして再戦

負け

カオル仕様に興味もち…

チートを理解し、（なるっ！！）

上空に踊りで三次元機動をかますも…

（なっ！どこ？）

ビー

機体を滑らすか、接近警報がなり響くかどっちが早いか…

滑らしながら牽制しようとマシンガンを向け…

（撃震！いや四足？）

撃ち放つ。

撃震はまたもさけ…

更に接近し大きな口で噛み付いて…

『白銀機コクピットブロック損傷甚大、大破。状況終了』

「なんなんだよ!!あれ!」

思わずこぼれでた…

「四足?いやゴリラか……こっちの反応速度遙かに上回りやがって」

「白銀でも無理だったか…」

「隊長、あれなんすか?」

「魔撃震カオル仕様だそうだ…」

「お疲れ」

(あ、あのまりもちゃんの…)

「カオル殿、ありがとうございます」

「いやいや、結構楽しめたよ」

「カオルさん、一つ質問なのですが、あの機体は…」

「エヴァ仕様…生体駆動だね」

「!!…筋肉ついてるんすか？」

「あ、知ってるか…ま、中身はまるっきり違うね」

「乗せてもらえませんか？」

「コクピット改修とかしてないからGがなあ……ハイブ戦後ならいいよ」

「わかりました。そういえば、OS改修したのカオルと聞いたんですが、マジですか？」

「ああマジだよ」

（なら…先生に頼むよりリスクなさそうだな…）

「実は…」

コンボについて提案してみて、追加実装をお願いし、約束まで取り付けた。

2001年10月26日

日本海洋上……鉄原ハイブから80km遠方……  
ビクトレー砲艦仕様が海の上に浮かんでいる。  
膨大な出力によるエアールで洋上に浮かんでいるのだ……

甲板に設置されている61cm砲が、  
グリーン  
と砲身の向きを変え……  
『グリーン』とまさに1秒もかかってない……  
そして、

「全主砲、勢力射……てえ!!!」

一斉に10隻のビクトレー砲艦仕様から一隻36砲塔の3連装、  
108発の砲弾……  
合計1080発の61cm砲弾が放たれる……。

射程に関しては、衛星によるGPS補助で直視しなくとも、  
弾の届く限り可能……といっておこう。

辺りは0.5秒毎に連続して発射される主砲からの発射炎で、

朝日の様に明るくなる。

0.5秒毎に61cm砲が撃ち出され、エアールの力で浮いてる場合…  
普通膨大な衝撃が襲い掛かり、たちまち艦体が反転するだろう…  
ましてや衝撃で人間はクリームの如く溶けるであろう…

あの大和でさえ主砲発射の衝撃を完全に消すために数秒ほど必要なのであった。

ましてやそれが連続して襲い掛かるのである…

が、鋼鉄の咆哮技術でつくられた61cm及びそれを支える技術…

自動装填装置により、仰角戻し、薬莖排出、

再装填、再度仰角までの主砲発射工程が0.5秒…

…因みに大和型は約35秒から40秒かかる。

また襲い掛かる衝撃については、装備してある、防御重力場の恩恵により、海に逃がしているのである。

よって……毎分129600発もの61cm主砲弾が発射可能となり、

膨大な弾数が、嵐のようにBETAにおそいかかる。

対して、それを迎撃せんとするBETA…

しかし…インターバ

ルが12秒、照射3秒と仮定しよう…  
その数の弾を迎撃するためには最低でも、  
単純計算で、照準照射時間なし、インターバル計算で、  
最低でも25920匹もの膨大な数の光線級、  
及び重光線級の数が必要だった。

しかも生体レーザーは照射し、あつためて高温にして破壊するもの。

照準反応があり、蒸散塗膜の恩恵とはいえ、逃げる時間があるのも  
わかるだろう。

ましてや、薙ぎ払うなど光線級はできないのである。

単一目標に対して僅かに仰角等をずらして追尾する事は可能だが…  
そう狙撃手なのである。

よつてこの襲い掛かる主砲弾を全弾迎撃には破壊照射時間をいれる  
と…

数は膨れ上がり…

最低でも35000匹の光線級は必要になってくる…

現状鉄原ハイブには2万を越える光線級の数はいない模様のうち、  
また迎撃すべきはミサイルもある…

確かに光線級及び重光線級は、狙撃手であり、  
正確無比な遠距離直線攻撃を得意としていた。

しかし、目標定めて破壊し次の目標定めて破壊するのに最低でも1



2秒はかかるのである…

全弾攻撃するのに、最低この弾数及びミサイル群の数には、6万の光線級は必要であろう…

基本、光線級は生産にG元素を要し、数は全体の約1%前後…ハイブ防衛要員がいたとしても…2%位、

鉄原ハイブは現状40万匹のBETAがいる…

主力構成はやはり小型種の戦車級がメインにしている…

鉄原ハイブの光線級がすべて迎撃にでていて、襲い掛かる弾、ミサイルを迎撃せんと光の矢を空にあげる。

しかし、現状数は光線級は光源からしても万を下って、7000位だった…

結果的に光線級が、音速近くで襲い掛かる主砲弾及びミサイル群の、全弾を迎撃出来ずに、光線級自身の回りに着弾し、

命中させる必要はないのである…

その61cm主砲弾は15m範囲のBETAを肉片と化し…  
その弾の破碎威力でもって次々と光線、また釣られて地上に出ている、

絨毯の如く湧き出た他の種も沈黙し…

瞬くまにBETAを示す光点がきえてき、

主砲弾射撃開始後…ミサイルでの正確さも含め、

ものの20分でハイブ周辺は光の矢どころか、赤い光点すらなく、沈黙していった。

地形をかえるが如く撃ち込まれた膨大な数の艦砲射撃…

過去の戦いにおいてもせいぜい数千発、よくて万発…

アメリカ海軍の全戦艦を合わせてやつと毎分1500発を出せるのが精々だった…

それが覆される膨大な砲弾…

まさにBETAにとっての大災害…

それ程異常な弾数が使われ…前哨戦は終わり…

作戦はフェイズ2、上陸に移行する。

side } 武 }

武はまだシュミレーターの中にいた。ハイブ攻略の最終調整の為だった…

(うへえ…)

異世界軍の攻略情報は流され、

A-01が属する突入部隊の出撃は明日となっていた。

「隊長」

『どつした？白銀』

「前回佐渡島ハイブ攻略のときに、このモンスター戦艦いました？」

情報が流され、武は61cmを発射するビクトレー砲艦仕様にマーカーをあててた。

『こいつははじめてみるタイプだな…』

ハリネズミの如く、ミサイルを射出するのは知ってるが…』

「この射撃間隔の0.5秒って…なんなんですかね？  
確か帝国軍の大和で40秒だったと思っただんですが…」

『カオルが導入した異世界の技術でしょ…どうせ…  
一々反応してたら頭がおかしくなっちゃっよ』

『そうそう、私たちの魔不知火に使われてる武器だって…  
入れられた当初にこれ！だったもの』

『という事だ、武…深く考えたら負けだぞ。あの副司令も一回壊れ

た事もあつてなあ……』

「うへえ……先生がつすか……」

『そついつた事だ……さつ、続きをするぞ！』

（そついえばチューリップとか、  
回りを囲んでいるガンタンク??かなあ?とかワケワカメだしなあ……  
これで戦死者が減るなら歓迎だけどな……物足りない……）

……  
カオル報告

コンボねえ……セミオート、ショートカット……

ナギ少尉「作者大丈夫？」

作者「ゲフゲフ」

リアルに風邪ひいてます…いきなり寒かったんすもん…  
12日でしたっけ…関東地方に雨が降って気温が15度以下になっ  
て…

そこまで下がると思ってませんでした。

ナギ少尉「んゝ作者がこれだと…相手は無理そうね」

屢伊「わたしでいいんじゃない？」

ナギ少尉「ルイズちゃん」

屢伊「渚屢伊よ、屢伊」

ナギ少尉「えへへ…ごめんね…で、新しく加入した武について一言」

屢伊「カオルがいなかったら…なびいたかも…が第一印象」

ナギ少尉「成る程ね〜作者とは？」

屡伊「そこで咳して寝込んでるクズよりか武やカオルがいいわ」

ナギ少尉「だそうよ…早く風邪治して次話にとりかかりましょ」

「なんとか…が完全油断した」

ゲフゲフ

チーン

水っぱなをかむ作者

ナギ少尉「作者…この後二日間夜勤なのに…  
16日分仕上がるの？…とりあえず次回予告ね…次回鉄原ハイブ攻  
略戦地上戦及び突入 せーの「おたのしみにいい」「」

第122話 鉄原ハイヴ攻略戦地上編 投稿日20110516(前書き)

当初地下攻略も…でしたが、その部分仕上がりませんでしたので、  
予告では地下と入ってましたが変更となります。

ご了承を

第122話 鉄原ハイヴ攻略戦地上編 投稿日20110516

2001年10月26日、日中

場面は異世界軍以外の軍隊にうつそう…

是非とも大東亜連合が、悲願の朝鮮半島攻略に加わりたいと、特に元韓国、北朝鮮の軍人達の要望があり、

彼らは今回参加する、日本帝国軍と同様に福岡湾に集結した揚陸艦に乗船し、

一路釜山上陸を目指して既に出港していた。

そして…

『HQより各部隊、光線級確認できず！！上陸せよ！！go！go  
！goー！』

既に異世界軍の砲撃や、ミサイルによる遠距離射撃により地上部分に関しては反応なしの為、容易に上陸できる状態だった…

一斉にスーパータンカー改装型揚陸艦から飛び立つ戦術機達…



我先に陸地を目指す大東亜連合軍機…

だれもが1番乗りを目指し…

そして、

『よっしゃ、1番乗り！！サンダー11、上陸したぞ！！』

『くっ負けた…』

『先は長いんだぞ、支援部隊上陸の警戒展開急げ』

本格的上陸の為、警戒ラインを広げ支援車両、及び戦車等の上陸を  
まった。

そこに、今では旧型と言えるビーチローディング式戦車揚陸艦の、  
雲峰級揚陸艦及び高峻峰級揚陸艦等が、  
ぐんぐんと砂浜海岸に接近し、頭から突っ込んできた。

砂浜海岸部分に開口部を開き、橋げたを地面に下ろして、

そこから大量に戦車及び支援車両を吐き出してきた。

日本帝国軍だけは、LCAC-1エアクッション上陸艇が母艦とし  
きりなしに往復している。

数台だが自力生産し始めた61式戦車改も見えはじめた。

本来なら海神が先に橋堡塔になるべく切り込むはずだが…

『隊長俺らは…？』

『待機解除になった…今回は出番無しだな…』

『え…』

海の中で待ちぼうけ、無駄な燃料をくつてた事を付け加えておこう。

1番燃料をくうのが海神とセットされている潜水艇なのに、  
約300隻もの大群を待機させていた…

港湾部分に大規模輸送できる輸送艦の直接接岸上陸は、  
岸壁施設がBETAにより完全に破壊され、  
修復しないと望めない為、今回は見送りとなる。

無抵抗のまま上陸を無事終え、展開を終えた集団は、  
一路鉄原ハイブのある方向、北北西に進路をとり検索ながら進軍し  
てゆく…

海岸部分はまだ残骸…光州作戦での撤退しきれなかった機体、  
建物の崩壊跡等があったが、

内陸部にすすむにつれ、人工物はなくなり、

険しい山は削られなだらかな山となってる……、  
が、ハイブに近づくとつれ…異世界軍の砲撃の後のクレーターが増  
えてくる。

ミサイルの場合なら正確にBETAに直撃はする。  
が…艦砲射撃は正確には直撃できず、  
付近に着弾し爆発による殺戮を目的とされていた。

「おいおい…やり過ぎだろ…」

「これ…cm砲弾の跡なんだ？」

「ブラボー12こっち引き上げてくれ！」

『HQ、これ以上凹凸がひど過ぎて補修なしでは、  
装輪車両ではすすめない。  
拠点構築地点にしたいが良いか？』

『こちらHQ、検討する』

タイヤ付きの弾薬補給トラック、兵員輸送車両等タイヤの足がと  
られ始める。

それにより、支援火器車両等が弾薬トラックが引き離されるとただ  
の一発屋になってしまう…

の為、工作部隊で足場を治さないと進めなくなる車両が出始めたので、この付近を拠点とし、土地をならしながら支援車両部隊は進む事となり、

戦術機部隊及び踏破可能なわずかな61式戦車改部隊と、戦術機随伴のホバートトラックは、支援部隊の護衛を残し、ラインをハイブ方向へと進みはじめる。

一方 異世界軍の上陸部隊はというと…

前回事業、佐渡島ハイブ攻略時の流れ同様に海上からの上陸となった。

上陸待機場所の選定だが、最初対馬も候補にあがったが、過去の日本本土強襲時に壊滅的被害をこおむり、撤退もままならず、民間人全滅の憂き目にあつたため、対馬は軍事としても放棄、無人の島になって荒れ果てていたため、選定漏れしていた。

竹島は小さすぎて勿論除外。

その為佐渡島基地からの出撃となる。

大東亜連合軍の上陸に合わせ…

佐渡島基地待機場所から飛び立つベースジャバー。

それに乗っている陸戦強襲型ガンタンク、チューリップ、兵員輸送トラック、ザメル、  
またB-01等有人部隊の半数が参加している。

異世界軍が海岸からそのままベースジャバーで上陸し、  
ハイブを視認しはじめた辺りで、

大東亜連合軍、日本帝国軍の大群がハイブを遠距離ながら視界に入れた……その時、

ビュクトレーの61cm砲の1080発にも及ぶ主砲弾の一斉射撃により……

直撃をうけ崩れ落ちるハイブモニユメント。

『ウオオオオツツッ!!』

『モニユメントが崩れ落ちたぞ!!』

(やはりこのタイミングだよなあ)

カオルは横浜基地の司令室において、指揮をとっていた。

「各隊は割り振られた門を確保急ぐように」  
オペレーターが指示を飛ばしている。

ベースジャバーから降り立った陸戦強襲型ガンタンクや、魔ドム、  
魔不知火等異世界軍機や、  
日本帝国軍の更新済みの撃震、不知火、

大東亜連合のF - 18、F - 16等が警戒しながら門の確保へとすすむ。

またチューリップを中心とした、支援部隊はドームを作り、仮設前線基地をまたたくまに構築し始める。

仮設前線基地が約15分で完成し、ドーム内部のチューリップからエアロスタットが飛び立ち始めた。

「各機、門より噴出するBETAに備えよ」

釣り天秤が開始された。

エアロスタットを潰そうとひっしにおいかけてくるBETA達、地上の門に差し掛かりブレーキをかけずに地上にでると膨大な火線にさらされ、力つきる…

その作業の繰り返しになる。

前回と同様だが、この殲滅作業は、いかに負担を減らすのが重要だった。

何故突入が失敗するのか……

四方八方からの膨大な物量に潰される。

まさにその一言だから、それを減らすには重要な作業の一つである。

しばらく安定した作業が続いて、1時間程たった時であろう…

異常事態を知らせるコールがいったので、

部屋から外れていたカオルは司令室に急行した。

「現地ホバートラックより入電、大規模地下振動感知、地上へ近い  
てる模様、

警戒警報発令中」

「どのような規模かの情報は？」

「……巨大な筒？…以前報告あつた母艦級と確定！！」

「ほう……いつ見えるか？とおもつたが、  
やっとお目見えか…な？」

「出現予定地の解析急ぎます…範囲でました。  
…出現予定3箇所、内2箇所にドームがあります」

「ドーム近辺に出現だと厄介だな…どれ位後だ？」

「約20分後になります」

「門の辺りではないな？」

「はい」

「出現予測地域に待機中の部隊をむける、  
出現後1分以内に掃討する！！」

…

「むづ……やはり狙ってるか？」

2体の出現予測範囲がどんどん確定してきて、  
ドーム中心部を目指しているようであった……

「まもなく、3体とも地上到達！！」

「まあいい……ドーム外にでる残りの1体の出現位置に集中しろ」

「Tマイナス10、9、8、7、6、5、4、3、2、1」

くく現地くく

段々と高まる振動……

出現予測範囲が急激に狭まり、待機部隊が出現位置にむけ銃口をむける。



『Tマイナス10、9、8、7、6、5、4、3、2、1』

振動が消え、

土煙をあげ、巨大な円筒系の巨大なBETA母艦級が出現した。

その巨大な胴体および開き始めた、開口部にむけ火線が集中される。

開口部から体内にいたBETA達が踊り出ようとするが、集中砲火に阻まれ、開口部から出れずに崩れ落ちる。

胴体部のほうでは投擲されたS-11ドリルミサイルが取り付き、垂直に体内にドリル部分が入っていく……

火線が集中し、30秒後……

体内でS-11が爆発し、

開口部から爆炎があがる……

崩れ落ちる母艦級であった。

さて他の2体の母艦級はというと……

side)母艦級BETA)

異常反応を感知し、そこを突き破ろうと地上を目指していたが…  
地上に敷き詰められた固いものにぶつかつたため、それ以上進めな  
くなくなってしまった。

ひっしに削ろうとするも異常に固い物体に阻まれたため、

体内にいた光線級に指令をだしたのだろう…  
開口部から光を発した。

が……今だ20分たつても溶けず進めずの状態になっていたため、  
逆走し別の箇所から地上にでようと判断したのか、  
動きだそうとした瞬間…

いきなり大爆発をおこして…体内にいたBETA共々死滅していっ  
た。

side\母艦級BETA\end

ドームを形成する際に地下進行を予想し、  
足場もルナチタニウム合金の3mプレートに、  
交換して組み合わせ敷き詰めていた為、  
母艦級は合金のプレートを突き破れずに地上にでれなかった。

で、プレートの一部をコバツタが外し、投下できる穴をあけると、  
S-11ドリルミサイルを穴から入れ、即プレートをはめ込む。

爆発するが、その爆風はプレートに跳ね返り、  
掘っていた穴の方向へ…

との流れであった。

ドームのチューリップに引かれたのかはわからないが、奇襲せんと掘り進んできた母艦級も程なく退治され…

その後殲滅作業は続き…

『ハイブ攻略作戦はフェイズ4へ移行する』

A-01やらの突入部隊が横浜白凌基地から出撃していく。

…

カオル報告

いよいよ出撃

ナギ少尉「まだ作者駄目みたいね」

布団で寝込んでいる作者…

二日間夜勤だったので今日から二日間お休みです。

ナギ少尉「相方がいないと…カオルは忙しそうだし…艦長はきてないし〜」

屢伊「わたしが空いてるよ〜」

ナギ少尉「ダンナさんの相手はいいの？昨日おさかんだっただんでしょ？」

屢伊「豪沈してあげたわ だから元気いっぱいね〜」

ナギ少尉「あたしも艦長とそうになりたい…」

屢伊「既成事実さえ作っちゃえば良いのよ。作っちゃえば…責任感ある男性なら…ね」

ナギ少尉「そうねえ……さて本編の感想に戻らなきゃ…  
61式戦車改初お披露目ね」

屢伊「あ、日本帝国軍が作った車両ね。ホバートトラックも見えてるし」

ナギ少尉「車両としてはやはり優秀といえばこの二車両よね」

屢伊「他は足止め食ってるみたいだから、何かしら開発アクションおこすのかしら？」

ナギ少尉「かもしれないわね……あっ!!」

布団で寝ている作者が唸り始めた。  
熱が上がり始めたようだ……

ナギ少尉「ちょっと……大変になりそうだから……」  
と白衣を纏うナギ少尉。

「とりあえず次回予告ね…鉄原ハイブ攻略戦突入編  
良い子にしてないとお注射しちゃうぞ」

「おせー」

「あゝ血管ずれたああ」

「屢伊！！素人が注射器弄るんじゃないの！！あつ空気おくつちや……」

第123話 鉄原ハイブ突入編 投稿日20110518

2001年10月27日未明…

side)武)

(ベースジャバーの船体内部の休憩室って結構良いよね)

武は奇数となり、エレメントを組む相手がいない為に、  
一機でベースジャバーを利用してた為、  
本来二人用の休憩室を一人で利用していた。

二人用といっても、長距離運用および、  
遠征先での臨時拠点も想定されている作りだ。

仮眠ベット、簡易シャワー、ドリンクバー、トイレ等、  
身体を休める施設がついている。

約2時間後

『各員へつぐ、まもなく作戦空域だ。搭乗し出撃にそなえよ』

武はそれを聞くと、係留中の機体に搭乗すべく、ハッチから甲板に  
でる。

ハッチから機体には移動中でも搭乗できるように、エアシールドの  
役目をはたす、

チューブが直接解放してあるコクピットへと繋がっている。

チューブ通路をへて機体へ搭乗し、ハッチを閉め始動しはじめる。

自動的にベースジャバーとつながってたチューブが収納され、各係  
留用ジョイントが解放…

『武、右前方気になってた艦が見えるぞ』

まもなく陸地に到達する辺りで、海面近く、10m近辺を飛行中  
していたので、

話にでた艦影が朝の薄い光のなか、ぐんぐん大きくなってくるのが  
見えた。

砂浜海岸に上陸済み、増援に警戒中のビッグトレー砲艦仕様がはっ  
きりと見えてきた。

「大和や紀伊よりでっかいんすね…」

『間違いなくな…』

（レビル将軍が乗ってるシーンだけだったかな？、でて来なかった  
んだけど…

こんなに砲をつけたら、かなり無敵じゃ？

しかも10隻か……）



一隻で大和の4倍の広さ…甲板にハリネズミのように61cm砲3連装が備わってるのが視認できた。

(単純に1隻で、大和型の4から6隻分の火力あるんだよな…  
しかも地上に乗り込んでいけるし…  
スゲーよなあ…前の世界でこれあったらかなり楽だったかも…)

通過し、朝日がバックに入った為即座に修正がはいる。

そのまま、突入する門の近くに着陸、機体を降機させた。

突入予定部隊が集結する。

陸戦強襲型ガンタンク、魔ティエレン対空型、チューリップ、  
その他有人部隊のA-01以外にも、魔不知火、魔ドム等もいる。

『各機！これよりハイブ内部に突入する……  
大陸への足掛かりになる重要なハイブだ。陥落させるぞ！！』

『了解』\*多数。

『A-01続け！！』

門より、カオルのる魔撃震に続いてA-01各機が、またチューリップ、陸戦強襲型ガンタンク等が続いて突入する。

武は門に突入すると…違う印象をつけた。  
既に補修作業入って構造物が変更されていたのだ。

（まだ占拠すらしていないのに……  
しかし、こうまでお膳立てされてるとはなあ…）

データリンクが正常なら、ほぼ最深部までのBETAが居ない…  
という事だった。

（まえの世界だとハイブ突入でウジャウジャいたBETAがなあ…  
あんなに釣られて地上で狩られるとは…  
囧…いや危険だよな…）

武は一瞬、釣りを考えたが即座に否定…

（戦術機だと、囧になるにしても大きすぎるだし、  
沙霧大尉位の技量がないと常に成功するとは限らない…よな）  
視界にエアロスタットが入る。ハイブ内部を監視中の模様だ。

（その点あれは優秀だよな…  
かなり小さいくせに素早いし、人的被害もまずはない……  
BETAに対して有効な武装はないとはいえ、もの凄い勢いで釣れ  
てくるし…  
何処の世界のもんだろう？）

武はターミネーター4は勿論知らないため、その派生する兵器は知らなかった。

(ん〜宇宙大戦??)

な考えをできる程、BETAは駆逐されクリアなエリアが続いていたのでしばらくまだ続く。

(けど陸戦強襲型ガンタンクか……見た事ないんだよな……大量にいるこれはさ……)

多分ガンダムの世界の機体なんだろうけど……何時のдарう？  
F91以降？けどビームメインの筈だから……)

陸戦強襲型ガンタンクに視線を武は合わせていた……  
そして魔対空型ティエレンにも……  
最後にチューリップ……

(極めつけはこれだよなあ……)

まさかあのチューリップだったとはさ……

確かに殲滅しながら進む考えもあったらうけど……

補給拠点をもつてくるとはなあ……)

セミオートモードの状態て追従設定だとそんな考えもできる……  
普通は警戒する為のモードなんだが……

『まもなくBETAどものいる一つ手間の広間だ……』

今回も3つの広間を突破すれば…目指す目標の反応炉がある…  
いいな新人ども、無理はせずに殲滅するぞ」

『了解』\*5名。

(いよいよか…この火力重視の編成の力みてみっか)

『突入!!』

編隊をくみながら、陸戦強襲型ガンタンクを先頭に、横坑に突入しはじめた。

横坑ににじみでたBETAを駆逐しながら、約2分後…  
陸戦強襲型ガンタンクがBETAのいる広間に突入し、砲火をあげる。

片っ端から砲撃を浴びさせ、貫通、肉片にさせる。

魔対空型ティエレンが、頭上にぶら下がる小型種に対して弾幕をはり、  
近寄らせずに肉片と化す。

(最初は圧倒的なんだよな……)

弾薬の切れた陸戦強襲型ガンタンクや、魔対空型ティエレンが後方に下がり、  
その空いた穴を待機していた機体が埋める。

有人機のザクマシンガンの空ドラムマガジンが吐き出され、

新たなドラムマガジンが装着され火線が再び火を放つ。

弾薬ストックに、横にきた陸戦強襲型ガンタンクから撃ちながら、ドラムマガジンをうけとり、補充する。

弾を絶やさず、補充する必要がある機体は直ぐに交替し補給地点に後退する。

その際にマガジンを搭載し前線にもどる。

武は、機動する事なく、近寄らせない弾幕のなか……

(俺の囮の必要もないな……)

と少し落ち込みながら着実にキルスコアをあげていた。

広間突入後…約5千のBETAがいる広間は15分たらずで確保された。

確保後排土板付きの陸戦強襲型ガンタンクが除去作業を行い、チューリップが前進をしてきた。

『次は合流する広間、主広間の一つ手前だ…、  
Tマイナス600に突入をする。時間合わせ3、2、1』

他の経路での広間の占拠が落ち着いてきた為に、次の広間突入のタイミングがとられたようだ。

(他の部隊は…アムロさんとか、沙霧大尉とかか…)

データーを呼び出し、確認していた。

『突入！！』

門級の巨体がくり抜かれ、横坑に突入…  
駆逐しながら広間に突入した。

広間を埋めつくすBETA達に弾薬を食らわせ隙間を広げる。

BETA達も突入してきた災害に反応し駆逐せんと接近してくるが、  
仲間の死骸に邪魔され、その間に息絶える弾丸をくらう…

小型種が隙間をぬって接近するが、  
火炎放射器の炎を浴び燃え尽きる、  
レッグブレードに触れ真つ二つにされる。

今回は陸戦強襲型ガンタンのキャタピラに潰されたりは、  
いない模様だった。

『ワツハツハツハツ、食らえ食らえBETAどもお』

誰かがオープンチャンネルで叫んでいる……

(どの部隊の人だ？…これが発信源は…)

見ると魔グフに更に個別に改造を施したのだろう……

14? いや、15丁のザクマシンを増設マニピュレーターでとり扱  
い、  
阿修羅の如く弾幕をはっているのがいた。

(……………)

武の身体は自然とBETAに対して銃口を向け弾を放つが、  
それに対しては思考が停止した模様だ。

からのドラムマガジンが放出され、  
更に空いてるマニピュレーターからドラムマガジンが装着され…  
ものの0.5秒位で再び銃火をあげる。

(阿修羅か…)

やっと思考が再開した模様だった。

(戦いが終わったら聞こう)

武はそう決めた。

門から突入した広間の占拠は…合流した事もあり、20分たらずで、  
約1万2千のBETAは駆逐される。

再び排土板付けた陸戦強襲型ガンタンク等が、  
活躍している間に補充を完了させている。

ものの15分程で完了し…

『次の主広間突破するとラストだ。準備はいいな？……いくぞ』

カオルの乗った魔撃震の右側に、  
光輝く巨大な剣が出現した。

「隊長…あれは？」

『理解不能だ…気にするな、本人に聞け』

『人間じゃないわよ…本当に…』

じゃないと屢伊の胸のサイズがアップするわけじゃないの』

『なっ…中尉！！』

『え？サイズアップしたの？』

『AからBにね…間違いないわ。もんだ感触からね』

『こらこらお前ら、ここに顔真つ赤にするのがいるんだ…自重しろ』

妙な話になりかけたので隊長が自制させた。

『まあ…疑問は、本人に聞くのが1番だな』

門級の巨体がくり抜かれ…

『突入！！』



押し出され向こう側にいたBETAが潰される。

横坑内部に突入し駆逐しながら広間に…

BETAが9地面が1な程しきつまっている主広間にスペースを作りながら突入する。

主広間内部には、約2万匹のBETAが詰めていた。

要塞級が駆逐せんと近寄ろうとするが、

真っ先に中央部に弾をくらい、

その巨体を沈める。

要塞級が叩こうと近寄ようかと試みるが、

近寄る前にザクマシンの弾に撃ち抜かれ身体を横たえる。

突撃級は味方の死骸に邪魔され、

戸惑っているうちに盾となる甲殻が貫かれそのまま鎮座する。

更に後方にいたBETAは、220mmキャノンから放たれた榴弾の破裂により肉片と化す。

天井からは近寄ろうとぶら下がっている小型種がよってくるが、対空砲火により近寄る前に命たたれ、ぼたぼたとおちてくる。

主広間突入後：40分、

火力を集中し…主広間内部最後の一匹を駆逐…

そのまま横坑に侵入し、

『抜刀！！銃器使用禁止！』

近接格闘で、残りすくないBETAを駆逐しながら反応炉の鎮座する大広間に突入…

生まれたばかりのBETAを切り捨て、反応炉を確保した。

A-01の皆が警戒するなか、取り付いてる機体から解除し、生身を反応炉の前にさらしだす。そして右手を反応炉にせっし…

武には何かをしているようには見えた。

「隊長、カオルわざわざ機体の外に生身で出て、何してるんですか？」

「ああいった事をして、頭脳級を支配下におさめ、スパイに仕立てあげると聞いている。カオルが言うにはコンピューターだから可能…との話だな」

「は、はあ…」

（……………使徒の力が…

あゝ…だから渚カオルか…

渚カオル本人ではないよな…）

『諸君、当鉄原ハイブは現時点でもって占領下におさめた。』

鉄原ハイブ改め、鉄原基地とする!!』

『大将閣下バンザイ』

『ウオオオツ!!』

2001年10月27日午後1時02分…

鉄原ハイブは陥落した。

(宣言通りなら…もう反応炉は人類側なのか…  
外見はかわらないけどなあ…  
しかし、この調子なら月も落とすんじゃないかね？  
早く行ってみたいな…)

歓喜にあふれる友軍機をみながら、  
武は前の世界では叶いそうになかった事を思いはじめた…

前の世界でそのままいたとしても生きている間は叶わなかったらう…  
人類の大反抗を…

…

カオル報告

鉄原ハイブ攻略成功しました。

第123話 鉄原ハイブ突入編 投稿日20110518 (後書き)

作者「おはおう…」

ナギ少尉「作者風邪は？」

作者「なんとか治りかけかな？まだ喉がイガイガするが…  
あとリアルネタだがレンタルビデオ返却しなきゃ…」

ナギ少尉「延滞金だもんね」

作者「1000円さ…アハハは…orz」

ナギ少尉「…せ」

作者「ん〜なんとなくこういったのでお金使うのはやじゃん…」

ナギ少尉「で、なんのDVD？」

作者「GAMEつう米映画…まあ面白い??？」

ナギ少尉「何故に疑問形？」

作者「好きな人は好き、嫌いな人は嫌いだからなあ…操られてっうのがね」

ナギ少尉「なる程ねえ…さ、作者リアル近況は無事に復活って事でいきましょ

さ、鉄原ハイブ攻略したわねえ…次は月に攻略武ちゃんつれてくの？」

作者「まだ攻略部隊が作製中…まだ早いよ」

ナギ少尉「じゃトリップを挟むのかしら？」

作者「その前に鉄原ハイブの後処理とかだろっうな…まだ人材は増やすから行くとして…」

ナギ少尉「作者、あと誰つれてくるの？また他の世界にも？」

作者「あれは是非ともほしいし、武の壊れっぷりも見たいし…あとロマンもつれてきたい」

ナギ少尉「ん？なにか聞こえる……どっははるかなり……何の曲？」

作者「……ヒントにつき秘密だ」

ナギ少尉「ちえ……えっと次回予告は……あ号の対策会議……鉄原ハイブ攻略後じゃないの？」

作者「ああ、サブタイトルは間違えてないよ……次回おたのしみに」

ナギ少尉「まったね」

第124話 あ号の対策会議 投稿日20110520

side)あ号)

(ここ最近の災害対策について考察)  
あ号の脳内会議の様だ。

本来ならもう少し単語だけで飛び交っているが、  
わけわからなくなるため、  
フィルターをかけて訳されているのをご了承頂きたい。

(つい先日の 20号ハイブの戦力減少について、  
戦力追加増援するかどうか)

現状救援要請もなし…  
これ以上の増援は不要との判断)  
鉄原ハイブの件についてまとめたようだった。

(が、不安要素増大は事実…  
とくに、長距離飛来して壊してくる物体について…  
なんだかの対策は必要と考えられる)  
大量にトマホークミサイルが飛来してくる中、  
生き延びた個体からの情報が入った模様だ。

(試作型必要か?)

考え中考え中考え中……

必要と思われる)

さすがに…延べ約80万発くらうと対策を考えはじめる。  
少しやり過ぎた模様だった…

(試作候補策定……)

遠距離に投擲できるのが必要。

何かないか？

災害どもは筒をつかってこちらを壊しててくる)  
脳内は、欧州や東アジア進行の際の記録から、  
離れた箇所から撃ち込む自走砲を見ていた。

(それを流用しよう。丸型の試作型を、それを長距離投擲する試作型を選定してみよう)

弾も作るようだった……

その後、各ハイブの個体数の配置調整に入り、  
中心部から少し東側への移動を命じた。

side)あ号)

|| 鉄原基地 ||



鉄原ハイブを占領後直ぐに前線基地化に取り掛かりにはいった。

またもやレビル將軍が佐渡島基地から転任してきて、  
基地司令官として赴任してくる。

高速移動できるルーロス改に乗せてきたので、スタッフが降りるとともに、

そのまま拉致し現地の視察にむかった。

ちなみに今回はBETA迎撃ルート上に余裕があるため、  
従来兵器の発想をそのまま流用しようと考えてた。

旧北朝鮮と中国の国境部分図們江…

川は山が削られ、森林がなくなっていたため、海拔の高いところは  
水の流入がなくなり、干からびていた。

その黄海に流れる河口部分、  
朝鮮側の部分最短部のつけねに、  
今回は建設しようとして現地視察にきていた。

ルーロス改の機体を透化させ、スクリーンに設計図を浮かべている。

「ここになにを設置するのですか?」

「巨大な掘りさ…焼却場のね…」

高さ80×横80の巨大な掘を川沿いに建設し、その先に移動する際は板わたしにはなるが…  
進行をその部分で止められるようにはしておくつもりだった。

「この基地の主な防御兵器は、やっぱりこれにしようと思ってる。まあそれを10層も重なれば飛び込んでくる、焼却場にはなるさ…」

「あるいはBETAの特性をついた兵器ですのう…」

全長約800kmの大工事となるが、この掘りを作る事により朝鮮半島の元韓国側が安全、北朝鮮側は…まだまだが…  
一応鉄原基地より北西側は戦場にもなる為である。

ただし…

機体をそのまま黄海の方にむけた…  
横断経路できた際には…

（浅い水深が問題なんだよなあ…）

平均水深44m…光州作戦時にはBETAは陸路を伝って来たため幸いにも…

であったが、容易に渡ってくる事が懸念される為、

（朝鮮半島自体が安全になるには、重慶ハイブ攻略後になるかな？）

と予想をたてていた。

（要塞級が渡航してくると、頭が出るし…

うまい水上兵器はないよなあ…

一応は専門の防衛設備つくるか…）

視察を終え基地に機体を向ける。

side(武)

(やっぱりあれレベル將軍だよな？ UFOらしいの乗っていったけど…)

撤収、引き継ぎ作業でがら、  
基地内部の駆逐は既にすんで、除去作業はまだまだ進行中であった。

UFOらしい機体がきて新任スタッフらしいのを降ろしていくと、カオルが一回は降りたレベル將軍を乗せ再びどっかに飛んでいった。

「そついえば隊長…さっきの飛行物体は？」

『まだ説明すらない…』

情報は一応きて友軍機登録はされてるようだが…』

(あ、どれどれ？)

友軍機情報から外見を選択し、検索基準を当鉄原基地で探しはじめた。

(あ、これか……ルース改?……)

どうみてもUFOだよなあ…あんな葉巻みたいな形…)

『まあカオルがどっかからもって来たんでしょ。あとで乗らないとね』

『突進中尉には乗せないってましたよ』

『むなかた』

『って白銀がいつてましたあ』

「うえっ？」

『しろがね』

「勘弁してくださいよ」

『ほらほらお前ら、撤収、設営作業の邪魔だ。基地に戻ったら続きをしろ』

「げっ」

『あつ戻ってきた』

『え？もう？…ほんとだぁ…かなりの速度出てるんじゃない？』

『のようね…通過しちゃ…え？とまった…』

「うえ…あんな急制動…あ、でもUFOならありえるな…」

『UFO？なんだそれは？』

『白銀くなにを指してるの？』

「あゝ、ああいったのをUFOっていうんすよ」

(そうだよな…そういえばこの世界ではそんな単語なかったよなあ…)

『なるほど…』

ルース改からレビル將軍とカオルが降りてきたら、  
ルース改は横浜白凌基地へと帰っていった。

「じゃ、レビル將軍」

「ああ、任せられたぞ」

「カオル」

「屢伊」

機体から降りていた渚屢伊少尉が、カオルに抱き着いた。

（へっ？）

『あゝあ……リア充め』

『あとで扱いてやるんだから』

『じらさま』

『ふむ……あゝいった感じで抱き着けば……と……』

「隊長……」

『ん??な、なんだ?』

「屢伊さんの旦那さんって…まさかなんすが…」

『ああ、今抱き合って熱いキスをかましている彼、カオル大将だが、クツ…羨ましい…』

「あれ?まりもちゃんとじゃ?」

『まりもちゃん?…まりも軍曹か?ああそつだが』

「えつとお二人の妻?」

『なにいつてんだ白銀…三人、殿下がいるだろう』

「えつ?えええつ?」

『あんだけ放送されたのに知ってないのか?』

「え…えつと…あ、特殊任務で離れてたので副司令の」

『ああ、博士なので…それはすまなかつたな…  
重大なイベントを伝えなかつた博士が悪い』

「まあしょうがないですよ…ところで、なんで複数名と、結婚できるんすか？」

『時限立法の重婚法というものだ…詳しくは基地に戻って調べたら  
どうだ？』

「……そうですね」

『いいなあ…あんな濃厚なディープキスしたいわ』

『絶対夜が燃え上がるわね…リア充め』

カオルと屢伊が別れてそれぞれの機体に戻ってくる。

『屢伊、あとで機動特訓よ』

『えっ？…勘弁して下さいよ』

『いや許さん。彼氏いない組の前で熱々ぶりを見せた罰ね』



『え〜……』

なんて事をしながら基地に帰還するためベースジャバーに機体を乗せ…帰返していく…

side)武end)

……

基地に帰還して、戦勝パーティーが開かれているが…

まずはハンガーデスクに向かう。

(とりあえずやる事やっとなないと、  
忘れるしなあ…)

まずは鉄原ハイブの防衛部隊について、

現状最前線なので、

今回攻撃部隊の陸戦強襲型ガンタンク部隊6個師団をそのまま配置、  
ビッグトレー砲艦仕様を5隻転属配置、

追加増産でT-850部隊の警備連隊。  
ハンターキラーレック5個連隊。

(と、遠浅の海だよな…)

現状、鋼鉄の咆哮の武器を流用した方が早い為、  
思い浮かべていると…

(あ、そういえば……あつたなあ……)

潜水艦潜入時に魚雷発射基地からのをかわせずに、  
沈没してリプレイしたシーンを思い浮かべていた。

(魚雷発射基地か、サメ型？トウハー・デ・ダナン？)

しばらく考えてたが…

水上走行も可能なトウハー・デ・ダナン級に船体を決め、  
動力を変更後、

そこに鋼鉄の咆哮技術、遊びにいくヨ！の技術もぶち込む。

格納庫は必要無しなのでオミット。

武装は、5連装潜航新音速酸素魚雷の砲塔型を2門、

80cm誘導魚雷の5連装備砲塔型と、船体型の各2門、合計4門。  
小型機雷掃討魚雷を2門、

元々水中60ktを叩き出すトウハー・デ・ダナン級は、補助兵  
装の力をかり、120kt、水上240ktの滑空できる脅威の速  
度をだす、

打撃潜水艦として新たに生まれる。

(ダナン級打撃型かな?)

とりあえずテスト注文で10隻を頼んでおく…

で、転属で減ったビッグトレイ5隻分の増産+10隻分の追加増産…

(今回の地上はこれがよかったし)

(あとは鉄原基地までの交通手段だよなあ…ガルダつくるか)

入手してながらつくってなかった巨大輸送飛行機ガルダを注文する。  
改造面はSTOLの強化、及び防御力の強化、主に対光線級にだ…

(ん…………)

実験的な意味で、

ファンネルを盾として、反重力システムを組み込み、  
ガンダリウム合金 で200枚搭載するように作ってみた。

(ま、四撃耐えれば戻して補修すれば再利用可だろうし…)

勿論ヤドカリ、コバッタ達頑張れ!!にはなるが…

(ま、こんなところか…)

カオルはデスクを離れ戦勝パーティーに向かう

……

カオル報告

とりあえず朝鮮半島と、西日本の安全確保の為、  
重慶ハイブ攻略まち

第124話 あ号の対策会議 投稿日20110520（後書き）

ナギ小尉「で〜でんはなんで出さないんですかっ!!」

作者「…サメ型潜水艦？」

ナギ小尉「そうですっ!!」

作者「…サメが水上を滑空する姿もよかつたけどさ…」

ナギ小尉「あ〜……確かに…」

作者「ま、そんなわけで船体はフルメタル・パニックからの流用さ」

ナギ小尉「わかりました。それについてはもう言いません…けどいよいよ、あ号も対策とって来ましたね…」

作者「だなあ…遅すぎ感もあるが…」

ナギ小尉「まだスパイには情報が？」

作者「行き渡ってない…帰ったらわかってるかな？」

ナギ小尉「え？また更に？」

作者「勿論、更に戦力拡大だ」

ナギ小尉「次は人材？技術？」

作者「次回のお楽しみって事で…ね」

ナギ小尉「ところであとどの位の世界を渡るの？」

作者「……カオルが満足するまでだ…」

が、まだまだ、遊びにいくヨ！！以外は星系内技術レベルだからなあ…」

ナギ小尉「そういえばそうねえ……つとさて次回予告は…サブタイトルは秘密ね……お楽しみにい」

第125話 新たなる世界へ 投稿日20110522

2001年10月28日

「ん……」

カオルは目覚め、屡伊の可愛い寝顔が見えた…

(……赤ちゃんって…いつでき…んかな?)  
ふと考えた。

神様に飛ばされる前は勿論子供もない、彼女もない……

だから赤ちゃんが正直どのタイミングで誕生するか、わからなかった…

(……中に満足させてれば…何時かはかな?)

けど、中にはぶち込んでてもできない夫婦もあるが…

男性側の疾患とか、女性側の疾患とか…

正直生命の誕生は難しい…

今の異世界軍の技術力では、クローンで創ったほうがたやすい状態には、なってるが……

（着床ってどういうシステムなんだろうなあ……  
けど直ぐにわかるわけでもないし……）

妊娠すれば……わかるらしい。

女性の身体はよくわからんで地の文は切り上げで……

（何時かは俺と屢伊、殿下、まりもちゃんの間の子が……  
早いとこBETAを駆逐しないと……さてと……）

カオルは起こさないように抜け出して、脱衣所へと入る。

素っ裸のままだったので、バスタオルをとれる位置にもってきて、  
シャワールームへと……

蛇口を捻り、冷たい水から、温水に変わる。

（そっぴゃあ、昨日気になる事いってたなあ……）

シャワー浴びながら……

……  
回想……

「武は俺と同様BETAのいない世界からきたんか……  
時間はずれてるみたいだがな……」



「そうだよ。  
ところで、ガンダムの人とかMSとか、  
世界を渡って連れて来たり、取得してるのか？」

「ああ。ただし、世界に影響ないように死が確定している人のみだ  
けどな……」

「……ブライトさんがいないのはそのせい？」

「そついう事だ……」

「…ならばバルジャーノンの世界もいける？同じように」

「バルジャーノン？なんだそれ？」

「ゲーセンでの大ヒットロボット格闘ゲームじゃないですか」

「武は2001年だよな？」

「ああ」

「あつたかなあ……？メーカー何処？」

「ヒットメーカー、発売元がセガ」

「セガ？…バーチャファイターとバーチャロンじゃなく？」

「バルジャーファイターでしょ？」

「ん？…なんか微妙に違うな…」

「柘町のゲーセンにあるじゃないですか大型筐体型のぞの」

「ちとまで大型筐体型？」

「ああ、複座型もあるじゃないか…」

「……ん？微妙に平行世界かもなあ……」

「へっ？」



またはいつてみてもいいが…)

と思っではいた。

シャワーからバスタオルで全身を拭きながら洗い、先に屢伊の部屋からでて、自分の部屋に行く。

着替えて朝飯くったあと、B55ハンガーデスクにむかった。

一回声かけてから、平和日本へと世界扉を開く。

俺の部屋にはチヨコが置いてあった…

(お返ししなきゃな……)

向こうはバレンタインデーを過ぎ、二月下旬だった。

作戦の為遅れる旨は既にやり取りをしていた。

何時もの取引場所にて食品、医療品を引取、再生した資源を納品、産業廃棄物をひきとった。

その後帰還し、集積所に食品及び医療品等をおく。

(ん)…そろそろ日本帝国分は、無くても大丈夫な具合にはなってきたな…

別の物に切替ようかな？)

スペースコロニーでの生産拠点稼動が上手くいってる為、帝国内部に関しては自給率も向上している。

(が、他の国の避難民の方にはまだ手が回らないか…)

日本向けの食料品援助、医薬品援助は既に他の国の避難民キャンプに回ってはいるが…

(農業用、食料品コロニーの稼動ももう少し早めるか…)

で産業廃棄物をおき、デスクに戻ると、武と純夏がきていた。

「はよ〜」

「おはよ〜」

「おっはあ〜」

「早速だけど武、ちと記憶見させて貰っていいかな？」

「へっ？記憶？」

「私たちのラブラブの記憶??」

「いくら世界を渡れるって、俺が認識しないとわたれないからな……」

「そういうものなのか……わかった、やってくれ」

「カオルちゃん……ひよっとしてあれもわかるの?」

「ん?あれ?」

「……えっと……奥さんとしてる事……//」

「ああ、まあ……極力みないようにはするよ……じゃ、失礼して……アル  
ミサエル」

武の頭に手をのせながら記憶をのぞきにかかる。

「はええ……面白い覗きかた」

二人が反応無くなってるので、純夏は武を横から抓ったりプニプニ

はしていたが…

「んつと……やっぱり平行世界か…多分これでいけるな…」

「ふが……純夏!!」

「えへへ〜」

「”世界扉”」

二人に背をむけ世界扉を開く。

「ほええ…これが？」

「ああ、武の元の世界に繋げた世界扉だな…」

「……!!」

「いつてみるか？」

「いや……いい、こっちに純夏がいるし…責任は果たす」

「そっか…」

世界扉を消す。

「まあ…じゃ、ちと覗きにいく世界があるんだけど、そっちはどうだ？」

「?どんな世界だ？」

「ま、3時間あれば戻れる一般的な世界だな…  
一つ用事があるんだ」

「いきたいいい…けど仕事…」

「あゝ純夏君、今度武と一緒に休みの日にも…」

「うん…じゃいつてきていいよ」

「あ、じゃあいつてみる」

「了解。3分まってな…」



鈴をつけ、

「ネコ？それともプレイ？」

「そういった趣味はない。結構高性能ツールなんだぞこれは……」

と鈴について説明しながら、  
ルース改を呼び出してきて、虚数空間に引き込む。

「じゃ……」世界扉」

「武ちゃん、カオルちゃんいつてらっしや〜い」

「フルメタル・パニック」

「あちい〜海、目の前にある……何処だあ？」

「この世界のフィリピンにある拠点だな」

ドアをあけ室内にはいる。

「あ〜涼しい〜」

ガンガンにクーラーが聞いている。

「あっマスター」

「よっ経過はどうだ？」

「この人は？」

「ターミネーターだ。まあロボットだな……」

「ターゲット発見間もなく今日ナムサクに入ります」

「無事に進んでるか…変異は？」

「確認できてません」

「わかったもう一ヶ月程たのむぞ。武、いくよっ」

「了解、マスター」

「あとすこしすすみたい……」

「たく…じゃあ…ちっとまてな…」

鈴の物質転換を起動させ、空間倉庫から材料を引き出し…作製し始めた。

「何してるん？」

「簡易空調首輪つくってんの……ほいできた……首につけてみ」

鈴ができたので、武に渡す。さっそく武は首に近づけると巻き付き…

「へえ…これで大丈夫なの？」

「じゃいごっか」

と外にでてルーロス改をだした。

武と一緒に乗り込み、不認識モードにし、一路ナムサクへ…

…

「いやあ早かったなあ…」

「だろ？」

「ああ……であれが闘技場か……」

「ちっ、くじくぜ」

「おにいさん、マッサー？」

「うおっー!!」

武が捕まった。

……何やら話して、

「あ、武……はいマニーね……、  
そののビアバーで摘んでるから、終わったら声かけてな」

と武はピンク色の看板を掲げた、マッサージやさんへとつれてかれ  
た……

「あ、ゴムわたしそびれた……  
まっ、なつても治るからいいか……」

ナデシコ世界ではHIVは既に死滅している病気であった。

(さて……俺は……)

同じマッサーでも男性施術師もいる健全なほうで……

……

「ギャーっ！ギブギブっ！」

「ここが痛いと肩凝ってる証拠…もっとやるね〜」

「ギャーっ！！！」

……

2時間後…

（武おそいなあ……）

少しビールで出来上がっていて、姉ちゃん相手にゲームをしていた。

（おっ！）

「じゃ、チェックビン」

で清算して1000バーツをだし、釣りはチップとした。

「武、どうだった？」

「あははは…天国だった…」

「そりゃ良かったな。ま、ばれんようにその部分カバーしとくよ」

「ああ…頼む」

精神操作し、隠しておきました。

「じゃ、いこうぜソロソロお目当てが始まるし」

「ああ…」

と闘技場内部にはいる。

チームクロスボウVSチームオーガ…

(間に合ったな)

まだ締め切りされてはなかった。

オッズは51・2:1・2…かなりの鉄板試合だが…

オッズレート上のパイロット名が書き換えられた。

チームクロスボウ…ソウスケ・サガラ。

(じゃ)

チームクロスボウに1億ドルを注ぎ込んだ。  
一気にレートが変わる。

「ははは…1億\$…負けたらどうすんだよ…」

「どうせ、あぶく銭だしな…まあみてなって」

スタンドのVIP席に移動となった。

空調及びシートが整った部屋だ。

バニーガール達が飲物を提供している。

まあ…万\$以上のチケット買った人や事前に認められた人が入れるスペースだったが…

そのまま部屋の前のバルコニーにでる。

「ウオオー」

「殺せ殺せ殺せ殺せ」

試合開始には間に合ったようだ…

「あのボロいのが？」

「ああ、クロスボウのサガラだ…」

「あれが勝つのか？」

見た目にもかなり状態が悪く…

一挙動程度が精一杯、ダメージ受けたらそく…だろう。

カウントダウンが開始する。

『よくもまあぬけぬけと出て来やがったもんだな！』

どいつが乗ってるかしらねえが、いまさら命ごいはもう遅いぜ』  
オーガからの挑発の音声流れる。クロスボウからは沈黙。

カウントダウンが5、4、3、2、1プアー一際大きなサイレンが  
鳴り響く。

試合結果は…チームクロスボウが勝つ大荒れとなった。  
取っ組み合いしようとしたところ、  
サガラ機が両手刈からオーガの機体を空中にほうり投げ、  
衝撃によるパイロット気絶との結果だ。

換金後帰還した。

「また連れてつてな」

「ま、安全が確認できた世界はな」

「了解」

と武とわかれて……

デスクで、農業用コロニーを2つ、追加注文をしておく。

(さて…いきますか…)

「じゃ、いつてくるわ」



「いってらあゝ」

〓 〓 銀河鉄道物語の世界 〓 〓

世界扉からでて、早速衛星を打ち上げる。

（長閑な星だな……何処に出たかわからないが……）  
少なくとも目的地であるディスティニーではないだろう……とあたりはつけていた。  
衛星がこの星の情報を検索する。  
駅を見つけた。

（銀河鉄道が知れ渡っている星ならいいが……）

駅まで近いので…幻影かけて飛行していく。

駅近くで解除し、歩いて駅舎に近寄ってく…

文字が読めないので、鈴の翻訳機能を起動させた…文字がみえてくる。

（惑星ヘンゼねえ…ま、駅名に惑星名が使われてるなら、少なくとも銀河鉄道は公認つう事が…  
えーと料金地図はつと…）

切符を買うののっている料金地図を見はじめる。

見やすく平面地図でかかれていた。

（この赤が惑星ヘンゼルか…

ディステニイーは…あつた…直接はいけないか。乗り換えがトレーダーね…

4星で乗り換え、8星目が…10日以上かかるんか？

カオルは999の停車時間は一日の設定を思い出していた。

（聞くのが1番か…）

鈴の口語翻訳機能を起動させながら……

「すみません」

「はい？何でしょう？」

「ディステニイーに行きたいのですが、時間どれくらいかかります？」

「ディステニイーですね？トレーダーのりかえで、3日かかります。トレーダーまで3時間、

トレーダーからディステニイーまでは車内一泊ですが、トレーダーで特急乗車待ちで1日半かかりますので…」

「その位かかるんですか…わかりましたまた今度お願いします」

カオルは離れて……”幻影”をかけて、ホームへと進入する。

(ダイヤは……あった。へえ……1時間に2本、ピークタイムに3本か……通勤路線かな?通過設定は……ないんか)

この路線をみると……約10の駅を結んでいる路線で、終点にまた分岐駅に繋がっていた。

「まもなく、トレーダー行き普通列車がはいります。危ないですので黄色い線の内側にお下がり下さい」

ホームアナウンスが流れた。

ピー

天から光の筋がみえてくる。

段々と接近してきて、

銀河鉄道の普通列車が見え、見えているレールにのり、進入してきた。

静かに止まる。

「惑星ヘンゼル〜惑星ヘンゼル〜。ご乗車ありがとうございます。お乗り過ごしのないようにご注意お願いします。

停車時間は15分となります」

「惑星ヘンゼル名物駅弁いかがでしょうか？  
美味しい美味しいヒヨットコドモ入ってます」

「エネルギータンク」エネルギータンク「いかがですかあ？  
惑星ヘンゼルののは極上の味ですよ」

等売り子達がホームで販売しているなか…  
カオルは機関車と同化し始めた。

(うお…時間かかりそうだなあ…)

そしてトレーダー行き普通列車は発進し…次の目的地へと旅立つ…

…

カオル報告

行ける世界が増えました。  
超技術取得中です

第125話 新たなる世界へ 投稿日20110522 (後書き)

作者「汽車は〱闇をぬ〱けて、ひか〱りのう〱みへえ」

ナギ小尉「何歌ってるの〱?」

作者「初期の999の曲さ」

ナギ小尉「銀河鉄道999ね〱…」

でも厳密には銀河鉄道物語と銀河鉄道999は設定違つんじゃないの?」

作者「だなぁ〱…例えば666とかさ〱…片方はSPGに割り振られてるしさ…」

ナギ小尉「ま、そこら辺は勘弁してほしいって事ね〱

…けどそのまま武装とか使うの?」

作者「惑星が破壊するから使えないよ〱…とつてもさ〱…それに手持銃でも飛行機クラスなら落とせるんだぜ〱…まあビーム系統の銃だから禁止にはなるけどな…」

ナギ小尉「???じゃ、なんでこの世界に?」

作者「まあ惑星間や、星系間交通システムを…だね」

ナギ小尉「月侵攻後の事?」

作者「ま、そういつた事だ。銀河鉄道のは基本的に戦闘には使用ができないな」

ナギ小尉「ハイブ攻略とかでなく?」

作者「だから惑星破壊レベルのビームだって、なんべん…  
まあ出力調整が難しいという設定で…  
でなきゃ列車ハイジャックをわざわざ突入しません」

ナギ小尉「…そうね…とさて次回は…まあ流れが見えてると思うけど、銀河鉄道物語編その2 シリウス小隊 お楽しみにい」

カオルは旅路の間、

トレーダー分岐点の駅舎及び軌道リング、また特急列車等を取得し…

4日目に目的地惑星ディステニーにたどり着いた。

(ここか…)

ディステニーに本部がある空間機動警備隊…

銀河鉄道の安全をまもり、事故や犯罪、場合によっては宇宙海賊の対応をも行う。

色々な小隊があるが全ては運命の始発駅、惑星ディステニーから現場へ出動する。

2478

(さてと…とりあえず1番の目的の…)

幻影をかけ鉄道警備隊本部へと潜入する。

といっても…一般人の入れるところから、建物の材質と同化し、進んでいた。

流星に人間外の潜入方法でないと察知され、相手を支配下におかなければならなくなる。

トレーダーで何体の監視ポットを支配下にした事やら…

とりあえずは、全体にカオル自身を広げないで、地下深くへとすす

む。

そして、途中端末から取得した情報と照らし合わせ、地下専用車両整備場に係留している、目的の銀河鉄道001号、鉄道警備隊シリウス小隊専用車両、通称『ビッグワン』が目の前にあった。

整備は一通りすんであったのだろう…騒がしさはない。

(さてと……)

ビッグワンと同化し始めた。

ビッグワンのオペレータールームには、セクサロイドのユキが何かの作業をしていた。

カオルはビッグワン本体に取り付きながらユキを見ていた。

(メーテルTypeというか…美人なんだよね)

と…見ていると…

ユキの表情が険しくなり、手の動きが一層はげしくなる。

(ん?どうしたんだろ?)

いきなり席を蹴り立ち、銃を抜き構えた。

「誰ですか?姿を現しなさい」



(へ?)

「このビッグワンに何をしようとしてるのですか？」

ユキはまっすぐ銃を、ビッグワンに取り付いているカオルに向けてた。

カオルは移動するとユキの銃口も移動する。

「姿を現しなさい。警告します!!」

(ばれてんか……なんでわかってんの?…ならとるべきは…)

ユキの接している足から…

「イロウル」

「キヤアツ……失礼しましたマスター」

銃を床におきユキが片膝をつき頭を垂れた。

セクサロイドのユキを支配下におく。

ついでなので同化し、ユキ自身の情報取得…

取得終了後、命令で俺を認識しない、無視するようについに…  
を埋め込む。

カオルの支配下から抜けたユキは…

「あら？何をしてたのかしら？」

内部サーチをしたようだ。

「変ね？……あっチエツクの途中だった…」

元いた席に着座し、作業の続きにもどったようだった。

そんな一通騒動がおきたのち…

ビーオンビーオンビーオン

緊急事態発生サイレンが鳴り響く…

『プロキオン本線において走行中の特急390号のシグナルロス、  
緊急事態発令』

デイステニィー全土に設置してある緊急放送用スピーカーより、通  
達が流れる。

『シリウス小队、スピカ小队に出動要請発令。直ちに急行願います』

(ゲツ…まだおわってないよ…)

カンカンカン

ものの5分もしない内に、続々と隊員達が乗り込んでくる。

有紀学、デイビット・ヤング、

キリアン・ブラック、

ルイ・フォート・ドレイク、

続々と各々の席につき、出場準備を整える。

最後に…シュワンヘルト・バルジが乗り込んできて…

「システムチェック！」

「システムチェック、スタンバイ！」

「素粒子ワープ走行発生機関異常なし」

「軌道通信レーダー異常なし」

「重力ブレーキ異常なし」

ギギイギイイイイ

ビッグワンが係留されているレールが上昇しはじめる。

地下のSDF専用整備場から引き上げられ、  
装備車両と連結する形だ。

「全武装システム異常なし」

「ミッションデータダウンロード完了」

「メインボイラー接続点火」

「人工重力発生開始」

「ビッグワン、第6装備で出動」

ゴウウウン

上昇がとまって…

「第6装備にてスタンバイ」

ゴン

レールが延伸し、接続された振動が伝わる。

「上昇フロート固定確認」

ガイン

兵装車両が連結、軽く衝撃が伝わり、車間幌が自動で繋がる。

「コスモセイバークール、搭乗完了」

「微速進行、発進位置へ」

「微速進行」

「磁力シールド発生機関正常値へ」

「エネルギー正常、ボイラー内圧力上昇、  
シリンダーへの閉鎖弁オープン、  
臨界まであと0.2」

『38番線からの発進スタンバイ』

『38番線からの旅客列車、退避確認しました』

『38番線よりの発進を許可します』

「38番線からの発進許可確認」

「ボイラー内圧力120%!!」

デビットが宣言とともに、レバーを押し込む。

「メイン回路接続」

「接続」

「システム、オールグリーン」

「ビッグワン、発進!!!」

ポオオー

汽笛が鳴り、

ガツシユ……ガツシユ…ガツシユガツシユ

ガツシユガシユガシユガシユ

巨大な動輪が動きだし、力強い音をたて、スピードがます。

ディステニー始発駅構内38番線ホームに進入する待機線にスタンバイしてたビッグワンは、

ホームを通過し、構内路線にすすむ。

レールが分岐、合流等をし…力強くすすむ。

そして…外が見え始め、すすみゆくその先にはレールが途切れてるようにみえるが、

不可視のレールが天空向けのび、

ビッグワンはレールに導かれながら、その編成を天空へと向けてい

く……

（事件解決まで戻れなさそう……）

ポォー

警笛をならしながら、瞬く間に惑星ディステニーから離れていくビツグワン…

警報が流れてからここまで約10分間の内に現場へ急行しているのだ…

カオルはビツグワンの取り付きが終了したので、ついでに編成車両側にも触手をのばしはじめた。

「長距離ワープに入る、空間位置座標固定」

機体のボイラー出力が上がりはじめる。

「目標固定よし」

「ワープ開始」

「ワープ」

(おいおい…どこに行くんだよ……)

瞬くまに光が包み空間転移する…

ものの10秒位だろう…通常空間に復帰、レールを噛んでいる感触が伝わる。

「前方5宇宙キロにて当該車両発見」

「シグナルロストの原因は？」

「まだ特定できてません…スピカ小队、待避支線にて接近してきます」

「減速して接近しろ」

(当該車両を見つけ出したか…意外に早めに解決??)

因みに宇宙キロと見慣れない単位が出てきたので、説明しよう。  
銀河超特急である999は最高速3000宇宙キロ/hのスピードで通常空間を出せる機関車だ。

そして地球ーアンドロメダ間は約230万光年、それを宇宙キロで220万宇宙キロの営業距離…ということだった。



つまり1光年＝約1宇宙キロ…  
膨大な速度を銀河鉄道は出す…ということだった。

「スピカ小隊より入電、生体反応あり、活動反応あり、機関車よりの反応が無しの事です」

「了解した引き続きサーチを頼むと送れ」

「了解」

「隊長、どう考えられます?」

「機関車の故障か、何だかの原因で壊されたか…どちらかだろうな…警戒を怠るな」

「了解」

更に減速しつつ近寄り途中に…

「スピカ小隊より入電、搭乗名簿分の人数確認」

「ふむ……よし、横より進入する。デイビットは待機、キリアン、学は、第一分隊を指揮し機関車の状態確認。ルイ、ユキは第二分隊を指揮し乗客の状態確認」

「了解！！」

ビッグワンは近づくと、減速し特急390号に横ならびになる。

ビッグワンより車両連結チューブが繋がれ…

「やはり反応ありませんね…動力、電力ロストしてます」

「バッテリーもか……ビッグワンより供給急げ」

「はい」

「扉、開きました」

「よし…いくぞー！」

バルジ隊長達がビッグワンより離れていく…

……

一人ビッグワンに残り黙々とデータ収集及び監視を行っているデ  
イビット…

「ん〜……」

ガシガシ

何かわからない事があるのか頭をかいていた。

「全動力喪失、全電力喪失、しかも非常用バッテリーもなあ……」

外見上車両には異常はない…が…

「しかも軌道空間シールドの方もか……難儀だな」

通常空間シールドでレール内部の予圧等も保たれていて、  
乗客が窓を開ける事もできる。

しかし、3層のシールドを発生する、軌道空間シールドも機能を口  
ストしていたわけだ……

重大な事故、原因究明が急がなければならなかった。

『ジュリア隊長』

バルジから直接通信が入る。

『なに？』

『乗客、車掌の話だといきなり電気がきれたとの証言でばぼまちがないと思われる。』

機関車のログが出すのが難航している…何人がまわしてくれないか？』

『わかったわ…機関車復旧できそうにないの？』

『ああ、内部のCPU等焼き切れてて連結しないとムリそうだな…外部からのなんだかの要因だと思われる。』

あと死者21名…いずれも機械化人、半機械化人達だ』

『電気が奪われた…』

『ああ、そうだな』

『厄介ね…わかったわ…こちらは要因を探索するわ』

『乗客移乗すみだい、390号を連結する。原因調査よろしく頼む…以上』

所定作業を行い、ビッグワンは手短の星へと乗客、390号を引き連れていく…

…

無事に390号の乗客を送り届け、帰還の途に着いていた。

また、スピカ小隊の調査により、次元断層からのエネルギーを奪う物体が流入した事による、シールドロスト、エネルギーロストの重大事故に繋がった…との報告が入った。

本社は直ちに当該路線の経路変更及び、軌道リングシールド強化、また次元断層監視及び封鎖の措置をとる流れになった。

惑星ディステニーに帰還するビッグワン。

完全同化しカオルを乗せたまま惑星へと進入する…

…

カオル報告

駅舎設備（惑星設置型）

空間軌道リング

一般型車両3種

ビッグワン

監視ポット

セクサロイド

ナギ小尉「カオルばれかけたねえ」

作者「さすがセクサロイドメーテル。愛人にしたい候補……」

ナギ小尉「作者露骨過ぎ」

作者「……自重しないよ」

ナギ小尉「ところで武ちゃんは何やってるの？」

作者「……次回って事で」

ナギ小尉「作者の執筆速度遅すぎだからね」

作者「うるへえ」

ナギ小尉「で次回サブタイトルもまだ決まってるのね？」

作者「うん。まあだいたいのお知らせは決まってるが…ね。まあ無難に日常にするか？つうとこ」

ナギ小尉「で今から書き出すのね？」

作者「そぞ。この話が投稿しおわってからね」

ナギ小尉「ま、次回予告…いけないけど…また次回お楽しみにい」



第127話 カオル不在中 投稿日 20110526

さて本編はカオルが銀河鉄道に飛び立ったあたりの日常に話を戻そう。

2011年10月28日の夜…

武自室…

「武ちゃん…スンスン…何かいい匂い。どこ行ってきたの?」

「ああ、マッサージを受けてきたのさ」

(普通のな……)

「へ〜どれどれ?」

(のぞいてきてるな…)

「うわぁ…うらやましい…まるでお姫様というか、王様みたいね…肌がスベスベになるんだぁ…」

(カオルGJ!!)

「あとが闘技場だなあ…でこれが、お土産」

「あつ石鹸?」

「ああ、これで純夏と洗いっしりよつぜ」

「うん！／＼／」

2001年10月29日..

「先生よろしいでしょうか？」

「なに？」

「実は207B分隊の鎧依の事なんです」

「ああ、入院中のね？」

「退院を早めて、戦術機総合実技演習を前倒ししてもらいたいのです」

「……そうね……わかったわ」

副司令がパソコンに向かって…

「どの位早めればいいのか？」

「できる限り」

「……10月30日には検査省略で、退院できるわねそれでいい？」

「……そうですね。それをお願いします」

「となると……11月2日には可能だけど……  
別の所じゃないと駄目ね……探しておくわ」

「よろしくお願いします。用件は以上ですので失礼します」

武は執務室からでていった。

「そっね……この日だと……」

……

「よし……実弾射撃始めっ！……」

ダダダッダダダッ

(よく目標にあてているが…)

「ちょっといいか？」

「小隊集合！！」

駆け足で実弾訓練を切り上げ整列してくる。

「今見てて気がついたんだが、みんな訓練が間違った意識にむいてるな」

「間違った意識？」

「教官それは？」

「君らはなんだ？」

「衛士を目指す訓練生です！！」

「君らは将来的には何にのる？」

「戦術機でありますっ！！」

「だな…で今のままのタイミングだと自動ロックオンの時間中に無駄弾をうつ事になるんだ。」

「戦術機だと君らの身体でなく、機体の取り回しの時間がある」

「あつ」

「まつ、だから今の時点で変な癖は修正した上で戦術機操縦にはあがつてもらいたい。」

「具体的には戦術機を操縦している感じでの射撃タイミング等だな…」

「と武は銃をもち…」

「命中精度を高めるように一呼吸おき、それでうつと射撃する。」

「このように一呼吸遅らす事により状況判断もでき、戦術機に乗った時に違和感も感じなくなる」

「はいっ！」

「あ、他にも格闘技訓練だと体当たりしていないか？」

「あれも戦術機ではありえない、機体を壊す行為だからやめたほうがいいな」

「あつ…」

委員長があかくなってくる。

(へえ…以外だな)

「いいか、機体のダメージを考えての行動を、格闘技訓練にも心がけるようにな」

「はいっ」

「じゃ、訓練に戻れ…解散!」

射撃訓練にもどっていった…

……

その日の夜。

「はあ〜」

「どづしたの?」

「あなたの旦那が持ち込む技術はすごいんだけどね…  
こっちの生産技術が追いつかないから生かせてないのよ…」

「またとうとう」

「それなのに何とかしろって馬鹿じゃないの？」

解析データは提供できてるんだから、後はそっちの問題なのにね  
」

久々のコーヒータイムを親友の二人がとっている。

勿論天然物のコーヒー。

まだ異世界軍の農業コロニー産のみだが、  
来年頭には帝国農業コロニー産のが出回る予定だった。

結局のところ技術ブレイクスルーが追いついてきてない愚痴だった  
が…

勿論コーヒーの農業コロニーの話題もでる。

「ところで మరి も、コロニーいった事ある？」

「わたしはまだないわね」

「そう…残念…あ、今度カオルに新婚旅行で連れてってもらえば  
？」

「そうね〜頼んじやおつかしら?」

「それいい……あつ、総戦技演習の件頼んじやおつかしら?」

「えっ?」

「そういえばいつてなかったわねえ……実は……」

……

2001年10月30日

人間犬……最近話題になっている話だった。

何やら5才の幼女に手をだした人がいて、その罰らしいの噂が流れていた。

(ま……実物みれば……わかった話だが……)

武はあんな風にはなりたくないな……と思っていた。

「こんにちは〜お兄ちゃん」

「こんにちはは、と……君は?」



武には見慣れない5才位の女の子がコバッタ28号つれてたが、挨拶してきた。

「エル・マデューです。よろしくお願いします」

「白銀武だ…ところでエルちゃん…民間人がここにいちや駄目じゃないか。

怖いお兄さんが食べようと狙ってるよ」

「ママがここで働いてるの」

「ここって、この基地でかい？」

「うんっ…!」

「異世界軍エリア職員です」

「じゃ、エルちゃんも立派な職員だね」

「うん…!だから見回ってるの」

「えらいね」

「お兄ちゃん。エルね、見回りつつけるから、またね」

とことこ歩いていった後を、手足で犬のような格好をしたのが、距離をあけてついていつてる……

…

さて、帝国軍側では…

佐渡島ハイブが人類側に落ちた時にも配置転換は進んでいたが、

鉄原ハイブが人類側に落ちた事により帝国軍では、より一層本土守備隊の配置転換の移動及び、機種更新等進んでいた。

完全に後方に下がったの機種更新である。

西日本も九州地方への集中、

東日本は北海道及び樺太への集中ができるようになり、

機種更新の為の休暇も進み、数少なくなっている男性軍人達も、交代で家に戻り子作りに励む事となる。

また61式戦車改の配備製造もすすみ、

インフラ面では、水素燃料精製プラントの増設がすすんでいる。

他にも異世界軍の協力のもと、常磐線ラインでのリニア新線の新設がきまった。

異世界軍の核融合発電所の建設もすすんでいた。

2001年10月31日

ユサユサ

「ん…ん〜」

ユサユサ

「あと5分…」

「霞ちゃん…12時起きすのよ」

ばああ、

「おきいろうっ」

ド

「いっつっつ…純夏もっと優しく起してくれよ…」

「…おはよう」

「武ちゃんがお寝坊さんなのが悪い!!」

「おはよう霞、純夏うるさいっ、もっと恋人のようにな」

「博士がよんでいます」

「先生が？…わかったありがとうな」

「…またね」

「武ちゃんあとでね」

（何だろ？）

……  
先生との用事が終わり…

射撃訓練に合流した。

パン

「お、相変わらずやるなあ…」

たまの射撃に声かた。

「えへへ…そんな事ないですよ。みんなもあててますよ。」

「…なあ…たま、あれ当てれるか？」

「300mのですか？」

「いや隣の500mのだ」

「うーん、どうでしょう？」

「300ってそいつの有効射程ギリギリだろ？  
なら俺でもあてられるんだ。でもたまは射撃の腕がいいんだろ？」

「えっ？誰から聞いたんですか？」

「おいおい、俺はお前らの臨時教官だぞ」

「あっ、そうですね」

「で、ここで1つ極東最高のスナイパーの腕前をみせてもらおうかな？」

「極東最高！？…み、みきはそんなもんじゃないですよ！  
師匠には追いつきませんもん」

「師匠？」

「へっ…あつ…／＼」  
途端に顔が赤くなる。

「なあ…たま師匠って？」

「えっと…その…凄腕のスナイパーさんです…ここ、これ以上は…」

(たまに師匠って…いたか?)

「珠瀬、あなたの腕みせてあげなさいよ」

「教官になにか一ついいところみせないとな」

「……珠瀬、がんばれ」

「おいおい、何か一つって…  
みんな俺より優れているところあるじゃないか。  
例えばたまの狙撃には勝てないし…」

「えへへ〜」

委員長に向く。

「委員長は絶対俺より冷静にものをみることができる。  
指揮官向きだな」

「えっ……」

冥夜に向き、

「冥夜の居合で、対戦はしたくはないし……」

「そ、そうか……」

彩峰にむき、

「彩峰の格闘能力と思考の瞬発力、発想力は驚くべきものがある」  
「……………」

「勿論まだまだあるさ、でもこれらだけでもすごいじゃん。俺を目  
標にしてもいいが、そんなに自分を卑下するなよ」

「…はいつ!!」 \* 4

「じゃ、たま。狙撃してみてくれよ」

「わかりました。伏射姿勢でも？」

「ああ、構わないよ。好きにしていぞ」

「それじゃ……」

たまが風をはかりながら……

(あれ?? 前の世界とかなり技量違くないか?  
心の使い方というか……)

「狙い撃ちますっ!!」

パァン

「さすがど真ん中かよ……」

パァン……パァン……パァン

「終了しました」

「よろしい。すごいな、たまは……」

「えへへへ」

(しかし……師匠って誰なんだ?……気になるな……)

……



## カオル報告

只今銀河鉄道物語の世界にいてて不在です。

第127話 カオル不在中 投稿日 20110526 (後書き)

作者「という日常を過ごす話なんだな……」

ナギ小尉「本来の主人公がいるわけだしね」

作者「ま、元々武がやるうとしていた事の消化と」

ナギ小尉「ね、重慶ハイブはいついくの？」

作者「一ヶ月に一度のペースみたいだよ。今のところ」

ナギ小尉「オリジナル到達が？」

作者「カオルの考えだと2002年の1月かな？でビーム兵器解禁  
つと……」

ナギ小尉「で、ビグザム投入ね」

作者「大気圏外から真つ赤になりながら……  
ってちゃうわ。あれは宇宙用。」

確かに量産型が地上侵攻用だったけど…アプサラスの方がいいね」

ナギ小尉「そういえばさ、武ちゃんきたんだし、反応炉だけ落とすちゃえばいいんじゃないの？」

作者「あれ？前はなしてなかったかな？…」

まあ横浜基地壊滅フラグを消したんだよね」

ナギ小尉「えつと？」

作者「ほらハイブ消滅後所属していたBETAが大規模侵攻してきた…」

ナギ小尉「あゝ…なるほどね」

作者「お掃除しないと周りに迷惑がかかるから…つつ事なんだ。だからペースが早まらない…ね」

ナギ小尉「成る程ね…さて今回は…帰還後（仮）…サブタイトルきまってないのね」

作者「今からかくんだよ」

ナギ小尉「頑張っ  
てね〜…次回お楽しみ  
にい〜」

第128話(仮)帰還 投稿日20110528

5日目

カオルはディステニーにビッグワンが帰還後、  
すぐさまディステニー駅や、コスモ燃料生産施設、  
空間軌道警備隊本部を取得していた。

なんとか夜には取得がおわり…

世界扉を唱える。

2001年11月1日

「ただいまあゝ」

「おかえりなさい〜」

早速デスクの鯖に落とそうと…

「あれ？今回加入者は？」

「ん？今回はなしだよ」

「前回に引き続いて、死者いない世界？」

「いや、いつぱいしんでるが…列車衝突、爆破、爆破、爆破、事故、事故…あと…」

「な、なんか物騒だねえ…」

「ま、実際宇宙に行く列車だからなあ…」

「へ？宇宙？」

「ああ、これだ…」

と画面にだす。

「……一言、何故列車なの？」

「ロマンだからさ…まあ、利用はしやすいかもな」

「そうだね…これならマストライバーシステムもいらなそうだし…増結もできそうだし」

「軌道レールの敷設は必要だけどな…けどこいつなら…」

と近くの資材を集めて…  
カオルは作り始めた。

「マスター作っている間に…コロニーで総戦技演習したいって、副司令からきたんだけど」

「ん？…いいよ」

「で、内容がこれになったんだけど…」

「どれどれ？」

カオルは資材に取付きながら変化させてるので、  
ろくろ首のごとくによくよると伸ばして、ファイルをのぞきみた。人をまさにやめている……

「……甘くないか？もっと数増やさないと」

「あゝそうだね〜」

「落としても構わないんだよね？ならもっと数増やしてだなあ……」

「じゃ数もつと増やすね。守備隊からも回す？」

「そうだな…佐渡島基地からは回していいかもしれんな」

「了解」

そして約3時間後……

「出来たあゝ時間かかったな…」

「マスター…ビッグワン早速作ったの？」

「ああ、こいつなら軌道敷設しなくっても走れるからな…」

目の前には旧ユニオンパシフィック4000型がモデルとなった、ビッグワン及び客車編成が完成していた。黒光りする車体のなかにボイラー部分が銀色がトレードマークとなっている。

「ねえ武装はどうなってるの？」



「武装客車は今回はつけてないな…  
星一つ破壊するから加減がな…」

「星破壊レベルね…」

「ま、今はおもに無限軌道モードで行き来できるからな」

「ところでマスター、これ量産するの？」

「できるか？」

「無理……一緒にきた旅客タイプのなら主動力以外なら可能だけど…」

「ビッグワンだと、主動力以外のどこらへん？」

「客車を除いて…機関車部分の材質とかね…  
…しばらく研究しないと無理だつて」

「キヤーティアシップとどっちが早くできそつっ？」

「……わからないよ」

「まあ…宇宙全体で30編成位しか活動しなかったからな…」

「30編成も…」

「旅客タイプは宇宙全体で750編成位だったな」

カオルはディステニイのを思いだしてた。  
結構あなあきや、事故欠番再生中等もある。

「そんなにあるんじゃない…端から端までひとつとびだよ」

「だな…」

「…ねえマスター…この軌道リングはエネルギー発生原あれば作れるけど、

自転はどうするの？」

「基本的に伸縮できる物質で接合部はできてるけど、  
レールが一致する時に進入する形だな」

「…一日一回？」

「ああ、けど繁盛路線などは惑星近くで分岐し、いくつかの進入路をもつわけだ」

「公転とかは？」

「軌道リングの方で修正するな。レールは鉄ではないし」

「あゝそうだね」

「さてっと…午前3時か…寝るわ」

「お休み」

2001年11月2日

流星による遅かった為、一人で朝はおき、朝飯をくってハンガーデスクに向かった。

すると嫌な報告が…

「マスター、佐渡島のスパイから報告がはいつてきてるけど…  
新型種うまれるみたいだよ」

「えっ？新型？」

「こいつなんだけど…」  
と画面にだしてくれた。

「こいつは……大砲と弾？」

「うん」

「遠距離に直接BETAを撃ち込んで破壊活動する…ってコンセプトみたいだな…」

「そのとおり…しかも…」

「強酸を撒き散らすか…迂闊に接近戦すると、ルナチタニウムなら問題なさそうだけど…」

「今までの装甲なら問題あるね」

「かぁ…今になって新型BETAか…と…るでどの位打ち出す？」

「ん〜まだスパイもわかってないみたいだよ。とりあえず作って実地で確かめるみたい」

「結局開発でやる事は一緒なんだな……」

「じゃ、こつちも1セット支配下において確かめますか」

「了解、佐渡島基地にいく。ガルダなら運べるから」

「お、出来たかんか」

「テスト場は横浜基地演習場でね。多分はみ出ると思っけど……」

地上の滑走路に向かう。

実はガルダ級に関しては…横浜基地の戦艦エレベーターでは搬入出不可になっていたので、

横浜基地の地上第三滑走路隣接エリアに、建造兼整備ハンガーで2機作れるようにはしていた。

その反省で、佐渡島基地や鉄原基地では、メインシャフトエレベーターの内1基をガルダ級等1kmサイズに拡大、

エレベーター直上ゲートにも、1km級サイズが対応できるようにはしている。

その300m強、翼幅500m強の巨体が姿を現す。

艦内に入りエレベーター10階のコクピットエリアに昇る。

コクピットではシールド操作要員のヤドカリ2名、機体操作・通信・レーダー管制1名、火器艦内管制1名が専属にしている。

「じゃ、よろしく頼むわ」

巨大な機体が振動し始める。

ホバー走行により滑走路上まで進み…

巨大なフラップを下方へ曲げる。

エンジンが全開になり、揚力が生まれ…機体は短距離で空中に浮かびあがる。

進路をとり、一路佐渡島基地へと向かう。

佐渡島基地はほぼ完成していて、対空機能、対BETA戦もこなすようになっていた。

時たま補充目的でくる旅団クラス編成程度のBETAは、

日本海に入った時点で察知され、

まず急行する、佐渡島基地所属の対潜に特化した、

オーブ型イージス艦20隻による、爆雷やアスロック等により徹底

的に駆逐され、  
海岸にも到達できなくなっている。

到達できても…待ち構える陸戦強襲型ガンタンク達…

基地防衛システムの活躍の場もない状態だった。

そんな訳で、陸上主要施設となる、滑走路も完成。日本海側の一大拠点となっている。

もっともあの佐渡島基地防衛戦の後、自力生産可能とスパイがあ号に報告してる為、

大規模侵攻…いや大規模援軍がないのが実情なのだが…

旅団規模程度は補給の為にくる程度だった。

その佐渡島基地の滑走路にガルダが着陸する。

早速直上ゲートに向かい、直接エレベーターに乗り上げ…

エレベーターが下がり始めた。

「さてつと…生産したらガルダに搬入か…」

BETA生産関連施設をそのまま残しているので反応炉に命令して1セット生産するようにした。

出来た直後に洗脳しないと…えらい事にはなるが…

「アルミサエル」

まずは弾となる団子虫みたいな多脚系のBETAを洗脳する。

「まんま団子虫だな…」

「固く大きいけどね…」

ガルダに乗るように命令する。

20脚ある足をせわしなく動かしてガルダに乗っていく…

次に生産…：G元素が少し必要との事で補充し…

改めて生産したのが、大砲みたいなワームみたいな種だ。  
母艦級のようにでかくはないが…

「ミミズ？」

「空洞がなければかな？」

洗脳後感想をのべるが…はっきりいって巨大ミミズだ。

ガルダに乗るように命令すると蠕動運動でガルダの格納庫に乗って



いく。

カオル達もガルダにのり再び飛び立ち、横浜基地へ空路を進む。

その頃横浜基地では武とまりもが、明日の総戦技演習の件に説明していた。

「……というわけで明日からの総戦技演習は、前回とは全く違うものとなる」

「……」「大丈夫かな?」「次は落ちないよ…みんな」「みき、頑張る!」

「因みに……喜べ宇宙にいくぞ」

「宇宙ですか?」「まだいった事ない……」

「ああ、観光用のスペースコロニーを使用するらしいな」

「はあ〜」「いった事は」「ないよ〜」

「まあ…そういったわけで明日0900ブリーフィングルームに集合だ。受かれよお前ら」

「はいつ!..!」

説明しおわったところで、腕輪型コンピューターの通信内容を空間に浮かべ確認する。

これも異世界軍技術で採用されてるとの事だった。

相手先は先生から…

(新型種BETA?)

新型種の調査実験をするとの事で、

14:00に演習場管制室にきなさいとの事だった。

管制室へ行くと…丁度ガルダが着陸しハッチをあけるところだった。

(Zガンダムのガルダ級もあるんだ…あれなら戦術機も、そのまま乗っかれるよなあ)

けど光線級対策どうすんだろ?)

「きたわね、白銀」

「先生、新型BETAですか?」

「ええ、何やらあ号が作成命令だしたみたいよ」

「あれに積まれてるんですか……ところで警備の機体見えないんですけど……？」

「洗脳してるからいらないみたいよ」

「ああ、そうですね」

（反応炉も洗脳するからなあ……カオル……）

ガルダの格納庫から団子虫のようなBETAとミミズのようなBETAが出てくるのが見えた。  
あとほかに突撃級も1匹みえる。

「名称未定ね……最初のは大砲の弾の働きね……  
ミミズみたいのが大砲……と」

「えっ？先生弾と大砲ですか？」

「ええ、間接遠距離攻撃をBETAが取得したみたいね。しかも直接BETAを撃ち込んでくるという……」

「嫌なものが……」

ビー

会話の途中でブザーがなり、実射が開始されるので場の雰囲気がちらに向く……

(仮) 大砲型が前側にある口から(仮) 弾型を吸い込んだ…

(仮) 大砲型が目標にむけ身体を整える…

蠕動運動で勢いよく(仮) 弾型を吐きだし…

ルーロス改が追っかけて画像をおくつていて…

(仮) 弾型は勢いよく20 km先に設置した標的の撃震に命中しば  
らばらに破壊する…

バウンドした(仮) 弾型は身体を広げ着地した。

「正確に命中させるね…かなりの脅威だわ」

「数が揃えば厄介ですね」

ルーロス改からカオルが出て回収し、また射撃の為に戻ってきた。

ビー

再び射撃…次は遠距離限界まで…

再び(仮) 大砲級が(仮) 弾級を飲み込むと、吐き出した。

ルーロス改が追っかけてく…40 kmを越え…44 kmに弾着した。

「大和改の最大射程超えないけど…これかなり…」

「やばいですね…」

その後研究に(仮) 弾級と(仮) 大砲級は提供され…

名称が（仮）がとれそのままつく事となった。

進行スピードは弾級は40km、大砲級は15kmであるものの、突撃級を最大17km飛ばす事も可能であり、大砲級はかなり重要ターゲットとなる。

また弾級の甲殻は突撃級程ではないものの、対空迎撃をせずに、前線うらの非武装支援部隊に向かうと大惨事になる事确实であった。

幸いといえるのは大砲級は、重光線級以下の個体数确实とスパイからの情報だった…

…

カオル報告

団子虫やばいよなあ…

第128話(仮)帰還 投稿日20110528(後書き)

作者「(仮)は間違えてないよ」

ナギ少尉「はいはい」

作者「まあ今回は帰還と、総戦技演習に向けて…の回だね」

ナギ少尉「作者、なにやらカオルが余計な事をしてるけど？」

作者「……知らんカオルに言ってくれ」

ナギ少尉「ねえ…受かるんだよね？」

作者「文官にすすんだ207B小队のみながみえる…外交補佐官、  
総理大臣秘書、諜報局員、参謀、…など」

ナギ少尉「ちょ…」

作者「ま、さておき次話は総戦技演習…前か…」

総戦技演習自体は一話に纏めるつもりなのでその次ですね」

ナギ少尉「引っ張るね〜」

作者「というか長くなりそうだからわけただけさ…まあだからサブタイトルは」

ナギ少尉「207B小隊、宇宙へ!!どっきどっきの総戦技演習前  
お楽しみにい」

作者: orz

11月3日

「準備いいか？」

「はい」\*5

「各員B55ハンガーに移動。そこで用意されてるシャトルに搭乗する。小隊移動！！」

ザッザッザッ

小走りで移動してく。

途中すれ違ったひとから、  
ああ、そんな時期か…で

「頑張れよ〜」  
等声援がくる。

B55ハンガーのソファアで博士及びまりもちゃんが待機してた。

「全体〜とまれ！！……整列…207B訓練小隊、総合戦闘技術評価演習参加いたします」

「せいぜい頑張ってね」



けだるそうに先生が答え…

(ん?)

目の前には前時代的機関車が1編成…

辺りを見回してもシャトルが用意されてない…

「先生ひょつとして戦艦用マストライバーで打ち上げとか?」

「なわけないでしょ…身体がぺしゃんこになるわよ…

あれだって」

先生が指さす先は…

機関車。

「汽車?」「カツコイイです」「どっかのポートまで移動で?」

「せ、先生…あれです?」

「しつこいわねえ…カオルに聞いたら?」

「おはよう〜」

「ちょ、カオル」

聞く前にまりもちゃんが…

「ん?」

「これなの？宇宙いくの…」

「ああ、これだよ。武、999みた事ないか？」

「……ない…な。なんだそれ？」

「じゃあ、わからないな…世代が…ま、みんなのつてのつて」

「は、はあ」「これに？」「レールにのってる…」

とまあがやがやと乗り込んでく。

今回のビッグワン編成は貨車1客車1展望車1の短い編成となっている。

「みんなついた？…うし、ビッグワン、出場位置へ微速前進」

カオルが客車内でいうと…ガシユガシユと前進していく…

戦艦エレベーターにのり、エレベーターが上昇。

ゴウン

エレベーターがとまる。

「ビッグワン発進！！」

ポォーガシユガシユ

「わあゝ動いてる〜」

「？武、線路空中で途切れておるが…」

「あゝその君達、窓を閉めてくれ、  
宇宙にでるから吸い出されるぞ」

「はいっ？」

「ちょ本気でいつてるの？」

「またなのね…」

「とにかく閉めてしばらくすればわかるから…」

ポォー

ビッグワンは上昇フロートが作動し、  
無限軌道モード…レールなしの状態で空をかけぬけだした。

「お〜」

「なっ ……さて一回やってみたかったんだ…」  
とカオル幻影をかけ車掌服になると…

「えゝ皆様、銀河鉄道001号にご搭乗いただきまことにありがとうございます。  
ついでに…」

次の目的地は、観光コロニーメンデル〜メンデル。  
28分後に到着、停車時間は約1週間となっております」

「…あたま大丈夫？」 「あなた……」

「ノノいいじゃん男のロマンだよ、ロマン」

「車掌さん、28分ってマジ？」

「ああ、加速減速でおわるからなく光速いく手前で減速だし」

「はあ？…光速って？」

「あ、これ銀河系や星をわたる銀河鉄道ですから」

「……ところでこれ量産は？」

「今のところ、これはつきつきりでないや生産できないので…あと2  
編成位かな？」

「けど、普通列車クラスなら……」

「と軌道リング…まあレールの敷設も必要ですけどね」

「これレール無しで走ってるじゃない」

「無限軌道モードです」

「……もういいわ……バカンスが頭痛くなりそう」

ポォー

「お、まもなく到着っすね」

「早い〜」

「あ〜トイレは後ろの展望車にもあるよ」

「トイレじゃないもん」

「ちょっとあなた……」

「からかい過ぎたかな？」

「もう」

ビッグワンはコロニーの中心部戦艦ハッチに向かっていた。

減速し、エアロックに進入…

コロニー内ハッチから、空中に踊りだす。

「ほわぁ〜」「やっぱり実物でみると違うな」「地球と違う?」

「あの中央の島が今回の演習場の島だ…よく見ておいたほうがいいぞ」

途端に207の皆が被りつく…

「丘とジャングルが中央にある…」

ビッグワンは演習場と言われた島の上空を2周ほど旋回していた。

207B小隊はその間に頭にたたきこむべく、しんけんに下に広がる島をみている。

旋回しおわるとビッグワンは高度を下げ、海岸沿いに着陸、停車する。

「総員下車」

装備等を装着し、下車していく…

貨物車からホバートラックが下車してき、コバッタ達が残りの装備などを荷台にのせてるなか、総戦技演習の説明がはじまった。

「さて今回の総戦技演習だが、間引き作戦に参加したと想定、生き延び帰還する事を目的とする…全滅は不合格だな」

「間引き作戦……」

「お前らは戦術機自身になり、間引き作戦を生き延び、帰還する。それが任務だ。」

期間は5日間、もちろん実際の間引き作戦同様規定数撃破で、作戦終了時間を早める事も可能だ」

武は一息つき、

「使う装備等についてはカオル大将より説明がはいる」

カオルが説明変わり、

「じゃ、まずは装備等は前にあるのを装着してくれ」

机には人型サイズになっているザクマシンガン等がおかれていた。

「補給物資だが、ホバートラックがチューリップの役割、あとコバッタ達が5名つく」

「よろしくお願いしま〜す」

「で、BETA役がT-850達だ。彼らにはBETAにふんしてもらって、畏とわかっていてもくるように等は伝えている。」

彼らは、死亡判定うけると、銃の障害にならないように匍匐状態になり、

戦場からその状態で移動、戦場外にでると走る事が可能になり、陣地に戻ったら再び攻撃に参加できるわけだ。

膨大な物量を再現しているわけだ」

銃をとりだし、

「今回使う演習専用銃はこれだ…ザクマシンガンを人体に合わせた形、

非殺傷レーザーガン的一种だが、装弾数も合わせている。

人に向けても大丈夫だが、演習中にやると破壊判定くらうから…で、今ちよつと撃ってみるから…」

パシユパシユパシユパシユパシユ

「かるくビリツときたる？」

「はい」\*5

「それをセンサーが拾って破壊判定がでる…って事だ」

地雷や手留弾等だし…

「これも同一な働きをもつ。あとの機材等の説明はホバートラックに積んであるから、演習開始時間までに説明をつけてくれ」



「戦術機のレーダー等は？」

「ああ、このセンサーに内蔵してある。

また反重力フロートも装着する事になるが、光線級がいるとおもってくれよ」

「こちらの破壊判定は？」

武が変わり、

「タッチした種族により破壊度が違ってくる、

またチューリップ役のホバートラックは、もれなく破壊判定が降りるから注意しろよ。

その時点で補給できなくなるから、下手したらサバイバル生活になる」

「積んであるもの全て使用不可との事ですな？」

「ああそうだ。食料は…」

「椰子の実とかもあるから一応大丈夫だよ。毒へびなどの生物はいないが、魚釣りも可能だね」

「だ、そうだが…がそうならないように、ホバートラックは破壊判定

されるなよ」

一通り演習についての説明は終わり…

「以上だ何か質問はあるか？」

武は見渡し……なさそうなのを確認すると、

「では…」

時計を確認し、

「今から約2時間後の11月3日1300から11月8日1300  
まで、

総合戦闘技術評定演習を開始する。

総員、別れ！！」

号令に合わせて敬礼すると、一斉に装備装着すべく机にかけだしてく。

…

「じゃ、移動すつから頑張れよお前ら」

「中尉殿が発破かけてるんだ、合格しろよ」

「はいっ…！」

ビッグワンののりとなりの島へ…

そこには管制室及びホテルガレージが出来ていた。

「けっこういいじゃない……おいしそうなお酒もあるし」

「ところでカオル、気になってんだがあの光はなに？」

「ああ、あれ？人工太陽のチューブだが、実際の太陽同様に紫外線はでてる。

肌を焼きたい時はサンオイルを塗ってくれ」

「へえ…成る程ね」

「通り満足したろう…」

このコロニーは海もある閉鎖型の観光コロニー、気温設定等は亜熱帯に合わせてある。

またスコールも毎日1回は人工的におき、島の植物等に水分を与える事になる。

スコールは毎日13時から30分の設定である。

演習場がある島および今渡った島、他にも3つ程島があり、まだ建築途中で人は住んではないが、身近な観光コロニーとして人の心を癒す事となるだろう…

もちろん海は最大水深20mあり、魚釣りも可能になっている。

他にも高原農業コロニーでも、観光目的や、一年中スキー、スノーボードできる設定の観光コロニーも稼動する予定だ。

「あと足りたいのないっすか？」

「そうね…なさそうね」

「何かあったら、そこにいる21号にいつてください。  
L3宇宙ステーションから資材等きますので」

「わかったわ」

「じゃ俺は一回基地に戻るから五日後あたりにまたきます」

「いつてらっしやい」

ルース改に乗り込みエアロックからだと、一路地球へ……

……  
カオル報告

207B 小队をお届けしました。

落ちるかな？  
…

ナギ少尉「作者：落ちるの彼女達？」

作者「運命は神のみぞしる……ま、カオルは落ちるようにしたみた  
いだがな」

ナギ少尉「…で今回はスペースコロニーまでと、演習で使う武器類  
の設定ね」

作者「一応基本的にビームガンというか、赤い光線ジリオン系統の  
レーザーサバイバルガン？な設定で、  
彼女らには物足りないだろうけどね」

ナギ少尉「このドラムマガジンが電源になってるのね」

作者「ああ、そうだね。でセンサー部分にも電源があると…  
これが相手側のT-850にも装着してる状態だ」

ナギ少尉「それで死亡判定して陣地に戻って再出撃ね…」

作者「膨大な物量としてな」

ナギ少尉「ところでBETA役のT-850はどう判別してるの？」

作者「そこはリアルに人間サイズにした着ぐるみに来てもらってる。ただサイズ制約上戦車級だけが大きくなるかな…」

ナギ少尉「膨大な無駄遣いね…えっと次回は作者？」

作者「…演習が先か、カオルが戻ってトリップか…」

すみませんまだ仕上がってません…orz

なのでまだ題名は未定でお願いします」

ナギ少尉「だそうです。この駄目作者に変わってお詫びしますね。次回も、お楽しみにい〜」

第130話 総戦技演習の間……投稿日20110601

今だ2001年11月3日

往復2時間程の行程で横浜基地にもどってきたカオル…

(やっぱりシャトルよりも早いよな)

恒星間、銀河間レベルの技術である為、早いも当たり前であった。

(けど武装技術は使えないよな…)

実体弾でもって、

一発で星を砕くレベルがある為使わずらいものである。

地球を破壊は……

光線系統も同様だ。

基本的には近未来的な世界に再びトリップする事になる。

カオルは基地につくと、異世界に行く前のやり残しをかたつける為に、

B55ハンガーデスクへと向かう。

デスクにつくと、新型BETAの大砲級や弾級対策の為にレポートの仕上げにかかった。



(対空ミサイルの復活しかないのかな? かもしくは…)

異世界軍に限っていえば、無限弾薬装填装置による対貫通対空ミサイルや、

わざと着弾させ強酸浴びながら切り刻む方法でいくつもりだったの  
で、

それ程脅威には考えてはなかったが、

異世界軍以外の防衛戦に限っては、使われ出すとかなり厄介な存在  
だろう…

大砲級でなく弾級が撃ち込まれた後が厄介…

今では生産が打ち切られて、さほど生産されてない対空ミサイル兵  
器を増やし迎撃するしか、  
被害がでない方法がない…

という結論しかでないのであった。

(結局は、ビッグトレーミサイル型を増産し、対空ミサイルのつ  
けて、急行するしかないのかな…  
かもしくは…大気圏外からの強襲…)

とりあえずビッグトレーミサイル型の増産を注文し、  
また国連に対しての大砲級及び弾級の警告のレポートを纏めあげた。

「ん〜こんなもんかな？」

「マスター、仕上がった？」

「ああ、あとわずらは…」

「今のところマスターが必要な事はないから大丈夫だよ」

「ん…そうか…」

カオルは一通り準備をすませ…

「じゃ、いってくるわ」

「いってらっしゃい〜」

世界扉を潜る。

〜

さて懲罰部隊…は皆さん存じているだろうか？

その起源は第二次大戦と言われる。

懲罰部隊は名誉回復の為、最前線で戦い、名誉回復か死か…

ナチス・ドイツでは、懲罰部隊には999の部隊番号がしばしばふられ、北アフリカ戦線では勇猛果敢に戦果をあげる事となる。

一方武装親衛隊SSでの懲罰部隊は最悪で、通常勤務の遅刻などの微罪でも送られ、

その身分を保障に、民間人処刑任務など…

大量虐殺を拒んだ場合には志願から命令に切り替われ、そして射殺される事となる。

一方対する旧ソ連の懲罰部隊なんて、武器を持たされず弾だけ持たされて、生身で戦場にだされ…

戦場で転がっている味方の死体から武器を奪い、それで攻略しろ。

また撤退も認められず臆病風で下がるものなら、

スパイと見なされ督戦隊に射殺される始末…

ボルガ川攻防戦では、約900名強いた人員が300名程となるしまつ。

一方、地球連邦では…

どちらかといえば名誉回復的なナチス・ドイツに似た懲罰部隊は存在している。

陸戦強襲型ガンタンクは、懲罰部隊に送られた3機だった。

アリーヌ・ネイズンは機密漏洩の罪で終身刑をくらい、仮釈放のち、懲罰部隊としてオデッサ戦線を戦い…天へ召されていった。

さてある懲罰部隊のある兵士のお話をしよう…

「いいのかい？ホイホイ俺に尻をみせちまって」

ひっしに基地の中を逃げていた…

俺はささいな事で上官をなぐってしまい、

懲罰部隊送りとなってしまうのだ…

最初もう人生終わった…と思ったださ…

何しろ最前線送り確定だから…がエースパイロットがいると聞いて、まだ人生助かったとおもってた。

が………

着いた部隊の少隊長に身体を撫でるように触られ、服を脱いで尻を向けると命令された為、危険を感じ、

隊長室から逃げて、自室の部屋のドアを閉じロッカー等をたてかけ塞いだ。

しかし……

「いけないなあ。これ位で、この俺を止められると思ってるのかい？」

ありえない事だ……いとも簡単に扉が開かれ、  
鉛細工のようにロッカーごとわきによせられやつが部屋に侵入してきた。

そして扉が閉められ……

「もし、俺をとめるっていう時は、その時は……  
お前、俺の腹の中に小便しろ」

(わけわからねえ!!)

「俺の事を本気にさせるとは……  
お前中々いい男だな」

部屋の中をひっしに逃げ回ったが捕まれベットに放り投げられた。

「お前のせいでMAXになったシークレットソードを見てくれ。こいつをどう思うっ？」

「す、すごく大きいです」

(何言ってるんだ俺はっ!!)

条件反射的に答えてしまった…

「だろう?けど、このままじゃ収まりつかないんだ……だから」

制服でなく、整備兵の青つなぎを何故かきている上官は…  
ジッパーをおろして、6パツクになった胸元をさらけだし…

「やらないか?」

「えっ?ちよ、まー!」

菊門に……

「アツーーーー!」

……

しばらく時がたち、隊長の様子はといつと…

ブーブー

『敵軍MS発見、構成ドム36機規模、  
当基地目指して進行中、阿部MS小隊は直ちに攻撃しろ』

「やれやれまだまだなのに…あと4、5ラウンドはいけたがしょう

がない」

裸の肉体に青いつなぎを着込む。

「君は……しばらくそこでやすんでろ」

「……はい」

何をしてたかご想像にお任せする。勿論部屋の中は男男だ。

「またあとでラウンド再開しよう」

「はい……お待ちしてます」

前まで逃げていた兵士は、既にシナをつくっている……

エースオブエースのこまった性癖の為の懲罰部隊。

菊門貫通され、何百人の男どもが開発されたるうか……

格納庫に歩みを進めると……

「阿部様！！機体の用意ができてます」

「ありがとう。帰ったら……」

「はいっ！バッチコイです」

と尻を向ける整備兵。

この基地の男達、いや男だけしかいないが、全て目の前の人物、阿部高和の開発済みにつきさっきなつた。

ノンケでも構わない、目の前に男がいれば開発をするあまりにも危険な男…

彼の上官は開発され、更に上が開発されそうだった為、隔離し、しかしエースだった為に恋人達の部隊と基地が設立され、今に至っている次第であった。

軍紀違反者特に女性兵士への違反行為が行われた際の懲罰部隊として機能し、うまく運営されてる次第である。

彼は愛機であるジムストライカーに乗り込む。

「出撃準備完了」

『了解、ブラザー01出撃お願いします』

「ブラザー01出撃する。帰ったら菊門よろしく」



『洗ってまっています』

「可愛いやつめ」

彼は愛機ジムストライカーをかり戦場へと飛び出してく…

…

カオルは日時をどうも間違えたようで…

(やべえな…日数無駄にしちゃったか…)

ついでだから適当にうるついでた。

そんななか…複数のドムと単機で戦っている、

ジムストライカーをたまたま見かけたのは行幸ともいえよう。

辺りには残骸が散らばっている。

(へえ…エースクラスか…)

そういえばジムストライカーは…確かなかったよなあ…)

カオルは機体情報だけでも…この事を取り付いた。

取り付いたら…後悔した。

コクピット内には全裸の男がいて…

「はっ……むん……くはぁ」

（何故に全裸?!?!）

しかもシークレットソードがそそり立ち……何故か嬌声をあげている。

カオルはすぐに逃げたくなった…

しかし、ジムストライカーは貴重な機体であった為に我慢して情報を取得してた。

（うわわわ……）

マイサンなどガチンガチンなど大声だして…

とてもじゃないがドノーマル、妻をもつカオルにとっては耐えられない状態である。

作者も目の前にいたら逃げ出すだろう…

人間の闇にはいきたくない…

カオルは辛抱の時を越え…機体を離脱した。

(だぁぁ…エースだろうと無理なもんは無理だ!！)

隠れだつたらわからなかつたろう…

が流石に変態レベルなので少しの時間でも居たくなかった。

相手になってたドムがかわいそうになってきた…

そこへ…

(ん? 対MS歩兵?)

ジオン側から一人の歩兵が武装もなしに…

途端にジムストライカーが動きをとめ、歩兵を凝視しているようだ。

ジオン歩兵は何故か上半身裸になると、乗ってきたジープをかり移動する。

それを追う変態ジムストライカー。

…

最後は呆気なかった。

畏とわかりつつもその歩兵を求めて、対MS地雷を踏んでしまい…

下半身を失い崩れおちるジムストライカー。

大地に上半身がつくと再度地雷に接触の為爆発。

第64独立懲罰部隊長、阿部高和連邦軍中尉：総撃墜数156機。  
12月3日北米戦線にて戦死する…

（流石に無理だよ…）

「世界扉」

カオルは世界を渡る。

…

カオル報告

ジムストライカー

第130話 総戦技演習の間……投稿日20110601（後書き）

ナギ少尉「阿部：救出しなかったわね……」

作者「彼は……流石に無理だな」

ナギ少尉「ゲスト？」

作者「……懲罰部隊からこの話が……というか何故……なった？」

ナギ少尉「総戦技の方どうなったの？」

作者「そつちが筆進まないんだよな……流れは……決まってるんだけどさ……難しい……」

なのでもう一話本来の人材ネタ挟むかも」

ナギ少尉「まあ……作者頑張ってるね……また次回お楽しみにい」

第131話 ガンダム編

ガルマ入隊す？

投稿日20110603

三日目…

気をとりなおして…

(よけいなのを探しにいつて…えらいもんみなな。  
メジャーところを…)

カオルは改めてガンダムの世界に降り立つ。

宇宙歴0079、10月4日

場所はニューヨーク、カオルは…

(お、みつけ)

ホワイトベースがドーム…いや屋根も建築材でできた球場へ、  
後進ではいつていくのを確認できた。

(もうすこしか…)

この後の爆弾避ける為にホワイトベースの入ったドーム内に進入する。

遙か上空よりルツゲンやドップが偵察の為におりてきた。

街上空から探すが見つからず…

そのうち、

ヒューンズガガガガガ

絨毯爆撃によるローラーでいぶりだしにかかった模様だ。  
辺り一面爆弾が落ち炎があがる。

ホワイトベースのいるドームには…僅かにそれで爆弾が落着する。

さて、ターゲットのいる、ガウ艦橋では……

「爆弾の残り30%となります」

「どうだ？木馬は出てきたか？」

ガルマがオペレーターにといかけてた。

「いえ、まだです」

「ど、どこだ？なぜ出てこない？」

シヤアがガルマに、

「連中も戦いのコツを、呑みこんできているのさ」

苦虫を潰す表情のガルマ…

「こつなったら地上に降りて見つけ出すしかない」

「まあ待て。そういうことなら、私が自分の部下と降りてみる」

「やってくれるか？」

「当たり前だろう、私は君の部下だ」

「今はそうだが、もともと君はドズル兄さんの直属だ。私だって」

「いつになく興奮しているようだが、女性の為に功を焦るのはよくない。落ち着くんだ」

「任せる」

「うん」

シヤアが、モビルスーツへ乗るべくでていった。

「偵察にでるモビルスーツにあたる、爆撃中止だ。

各機主砲攻撃陣形に組み直せ。

偵察部隊より敵発見の報告ありしだい攻撃再開する。

それまで上空待機だ……

私がいセリナの為に焦っているだと？馬鹿な。私は冷静だ」

指摘を受けたが……納得しないながらも、

ガルマは、シヤアを見送るべく、格納庫管制室へと移動した。



「ザク降下機動バランス調整スタンバイ」

「シャア、木馬なりモビルスーツを発見したらすぐにしらせる。ガウで仕留めてみせる」

「わざわざのお見送りには恐縮するよ。今回はそのつもりだ。頼むよ、ガルマ」

「頼んだぞ、シャア」

「勝利の栄光を、君に」  
敬礼ご颯爽とコクピットに乗り込む。

管制室にあるモビルスーツの気密確保告知のランプがつき、  
エントリーデッキが収納される。

「よし、ハッチ開放しろ！！」

ゴウンゴウン

格納庫内部に空気が乱入してきた。  
機械音をあげながらガウの前部ハッチが開放されてく。

ブウウン

ザクのモノアイが光り、ザクが踏みだし、ザクの親指を立て挨拶してくと、

ハッチより自由落下していった。

カオルは爆撃がやんだ為、戦場となる上空にいた…

(きたな…)

ガウからシャア機を含め、3機のザクが降下し地表をめざしていくのがみえた。

ホワイトベースからは、ガンタンク、ガンキャノンが、ホワイトベースの前へ出て待機し、  
アムロののるガンダムが囷になるべく、降下したザクに向かって進んでいく。

ガンダムが囷の役割すべく、ブースターをふかして検索もかねてジャンプをする。

シャアザクが見つげ、部下のザクに合図しガンダムに接近してく。

シャアザクはビルへ取り付き、強度を確かめると…

タイミングみはからってブースターをふかして、音をたてずにビル屋上に着地する。

まさに神業的芸当…

(そのシャアが今は我が軍にいるんだよなあ……………)

部下ザクを狙うガンダムに対しバズーカー発射するが、壁にあたる。

(さてそろそろか…)

カオルは上空のガウへとむかった。

取り付いたガウ艦橋にて…

「シャア少佐からの呼び出しです」

「繋げ…待っていた、シャア」

『モビルスーツが逃げるぞ。その先に木馬がいるはずだ、追えるか？』

「追っさ…ありがとう、恩にきる」

『しとめるよ、ガルマ』

「ビーム砲を開け。全機、攻撃スタンバイ…全機降下!!進路はガンダムの逃走方向だ。見失うなよ!!」

「はっ!!」

メガ粒子砲の格納ハッチが開き砲身にエネルギーが充填される。  
各種砲門も正面、進行方向へとむけ準備はととのう。

「攻撃準備完了!!」

「進路そのまま!!……イセリナ……もう少しだ……木馬を落とせばお  
まえと……」

突如として…

「うわーっ」

「うあっ…」

ガウが被弾し大きくぐらつく、  
連続した爆発振動で艦橋内部では立ってられなくなる。

「…ど、どつした?」

「うしろから攻撃を受けました」

「うしろだと?」

「も、木馬です、木馬がうしろから」

その間にも装甲が薄く、攻撃方法がない後方からの射撃になすすべもなく、次々と落ちてく。

「…上昇だ、上昇しろ」

「無理です」

「180度回頭だ……ガ、ガウを木馬にぶつけてやる」

回頭するも編隊機が既に次々ついらくしていき…

「二番艦音声途絶」

「生き残りの艦は？」

「三番四番六番七番艦既に爆沈、五番艦も操艦不能！！  
残るは当艦のみ！」

「ぐう……」

『フフフフ、ガルマ、聞こえていたら君の生まれの不幸を呪うがい  
い』

「なに？不幸だと？」

『そう、不幸だ』

「シャ、シャア、お前は？」

『君はいい友人であったが、君の父上がいけないのだよ。フフフフ、ハハハハハ』

「…シャア、謀ったな。シャア」

これ以上聞きたくないとばかり、インカムを投げ捨て、  
「くそっ」

操縦しているパイロットを押しつけ操縦桿を取って代わり操る。

「…私とてザビ家の男だ、無駄死にはしない」

炎をあげながらホワイトベースに進路をとるガウ。

右翼はもげ、

「ぐううう、まだだ、まだだ」

操縦桿がとられようとするが、ひっしにガルマは操ってる。

滑空状態でガルマの目は、ホワイトベースを捕らえている。

正面に映るホワイトベースは、上昇しようと艦体をあげるが間に合

いそつもない。

ホワイトベースの主砲が命中振動がはしる。

「だあーっ……」

操縦桿を両腕でひっしに操り、

正面にうつるホワイトベースが広がる。

ホワイトベースから火線がカオルの取り付いてるガウにあたる。

そして……機体は限界に達し、左側主翼も脱落……

「くそっ……ここまでか……ジオン公国に栄光あれーっ」

カオルはガルマを引き込み、爆発し、四散するガウから抜け出した。

ガウはそのまま燃える塊となり、墜落、朝もやの中大炎上する。

「さて……ガルマ、お坊ちやまを手なずけるにはなあ……”世界扉”」  
カオルは世界を渡り、鋭気をやしない翌朝再び世界扉を潜ってく……

#### 四日目

宇宙歴0079、10月5日

カオルは再びニューヨークに降り立つとジオン軍基地へとむかった。

基地内部に幻影をかけ進入する。

「……ガルマ様のお使いになったお部屋でございます」

(あ、いた…)  
ちょうど扉内にはいったところだったので、  
一緒についてはいい。

「さぞ、ご無念でございましょう。」

しかし、このままではすませません、イセリナ様。我々は必ず」

「ダロタ中尉」

「は」

「あたくしをガウに乗せてください」

「イセリナ様」

「ガルマ様を殺した憎い敵、せめて、せめて一矢なりとも報いたいのです」

カオルは近寄って、蚊の如く、イセリナの血液をを抜き出してた……

「いやしかし、それは」

「ダロタ中尉」

「……わかりました。イセリナ様にはまけました」



「ありがとうございます」

「お父上へのご連絡は…」

「しないで下さい。皆様にご迷惑をかける事になります」

「……わかりました。では出撃準備に取り掛かりますのでこちらへ」

「はい」

二人はでていった。

無人になる部屋の中、カオルは擬態カプセルをだした。

さつき吸い取った血液サンプルを投入する。

擬態が変形しはじめたのを確認すると虚数空間にしまい、おって部屋をでる。

カオルは出撃するガウにそのまま乗り込み…

「イセリナ様もうまもなくです。……見えました」

前方に米粒にホワイトベースがみえた。

「来たぞ。目標をモビルスーツに絞れ」

上空から降下してくるガンダムとガンキャノン…

「モビルスーツ、あれがガルマ様を」

「なんとしてもガルマ大佐の恨みを晴らしてご覧にいれますよ、イセリナ様」

しかし、ガンダムとガンキャノンが…前方をゆくガウの上のり…

「ちい……二号機、三号機を援護しろ」

すると、

「あっ」

「ば、馬鹿めが……」

ガンダムが味方の放った主砲をよけ、それをくらい墜落していく！  
機のガウ……

「モ、モビルスーツめ」

ガウの巨体では小回りのきくMSの良的だった……

が、撃墜されないのはガウ同士が、距離が離れているまた高空にいるおかげでもあった。

「戦闘機はないのですか？」

「ぎ、残念ながら。この数回の戦いで実戦に出られるものは……お、あれは」

『こちらシャアだ。手を貸すぞ』

「シャア少佐、私です、ガルマ大佐直属のダロタ中尉です」

「誰でもいい、コクピットを狙え」

「コ、コクピットですか？」

「腹だ。ガンダムは腹が心臓だ」

「わ、わかりました」

「私は木馬を攻撃する。そこを突いて一気にケリをつけるんだ」

そして、シャアのかるルツグンの爆弾攻撃が、  
見事にホワイトベースの左舷エンジンを命中させ、  
白煙をあげながらホワイトベースは、戦線離脱：  
墜落してく。

それに気をとられたろう、ガンキャノンが被弾し、  
バランス崩してガウの翼の上からおち、  
ガンダムも助けるべくガウの上から離脱してく。

「逃がさないください。絶対、絶対に倒してください」

ガンダムをおって低空へとガウは舞い降りる。

低空飛行しているガウに飛び掛かるガンダム。

翼の上に見事にのるとジャベリンを突き刺し…

「今だ、モビルスーツに集中攻撃を掛ける」

狙ったように銃撃が加わり、くぎつけとなるガンダム。

「いいぞ、もう一息だ」

ガンキャノンからの援護射撃が…

「ああっ」

命中し、衝撃がはしる。

「ああっ。ひるむな、一気にモビルスーツを」

ガンタンクからの援護射撃もはいり、

「ぐあっ」

「ああっ」

自由になったガンダムは、ガウを真つ二つに切り裂き尾翼も切り裂き…離脱、爆発するガウ。

「うわっ」さらに被弾でダロタが…

「ダロタ」

「う、腕が、操縦できない…」

「代わります」

「イ、イセリナ様」

「…このままではガルマ様がおかわいそうです」

ガウを操縦し、正面にいるガンダムへ特攻する。

「モビルスーツ、ガルマ様の仇!!」

ガンダムに見事命中するも…

ドゴーン!!!

艦内に衝撃がはしり、人が宙を飛ぶ。

「グワァ」「ぎゃ」

バキボキ

警告なしの衝撃だった為、異様な音が響きわたる。

胴体着陸の衝撃で…沈黙する艦内。

カオルは姿を現し気絶しているイセリナを医療カプセルにいれ、  
偽イセリナに状態をコピーさせる。

偽イセリナの身体に深手をおった傷ができる。

その間十秒…

思考リモコンで偽イセリナを起動させ…  
偽イセリナがカプセルからでてきた。

カプセルを回収し自分自身に幻影をかけきえる…

座席にセットした。

「ダロタ中尉、中尉…」

座席から立ち上がりかけより……

ダロタは衝撃でこときれてるようだ…

(うまく動いてるな)

外にガンダムがみえたので、艦の上にする。

「ガルマ様の仇!!」

…適当なところで…

「…うっ」

ガウからバランスを崩して、一発うち…身を投げ出した。

地上に落下する偽イセリナ…

リモコンを切る。

(これで回収完了…)

この後偽イセリナはホワイトベースクルーにより手厚く埋葬される  
運命となる…

勿論リモコン受信機等はとけ、ただの死体となる。

……

カオル報告

ガウ取得



作者「気を取り直して…ガルマ」

ナギ少尉「ふっ呼んだかい？」

作者「ナギ、なにやってんの？」

ナギ少尉「後書きは私が主役なの」

作者「……まあいいか…次回…ぶつぶつ」

ナギ少尉「変えたら殺すよ」

作者「わ、わかった…」

ナギ少尉「で、今回はカップルさんなのね」

作者「ああ、ジオン軍の身分をすててまで一緒になるつもりだ。  
だ。

イセリナはガルマを追って…」

ナギ少尉「じゃ、ヒルダさんには…」

作者「喰われるかもなあ…あのひと際限ないし…なにしろサツキユバスだしさ」

ナギ少尉「…ま、まあ…幸せになってねお二人さん…ですよ〜」

作者「だな」

ナギ少尉「さていよいよ本編が進みます。

次回132話 どつき！おんなだらけの総戦技演習 寝起きもある  
よお楽しみにい〜」

作者「ちょ…寝起き??…書き直しだあああ…」

ナギ少尉「まったね〜」

第132話 どつき！おんなだらけの総戦技演習 投稿日20110605

タイトルはナギ少尉 131話の後書きで発言したのをそのまま流  
用しました…

少し壊れて気味です…orz

第132話 どつき!!おんなだらけの総戦技演習 投稿日20110605

2001年11月5日未明…

「彩峰、おきてる?」

「……………」

反応がない…屍のようだ。

銃を撃ちながら振り返ると…器用に銃のトリガーを引きながら彩峰は寝落ちしている…

「彩峰に、打ってちょうだい」

気付け剤をコバツタに打ってもらおうというと…

皮膚に接着した注射から薬剤が投入される。

1分もたたない内に彩峰はおき、

「おはよう…」

「よだれでてるわよ」

トリガーから離さずに左腕でかく拭う彩峰…

「彩峰、落ちる前にいつてね」

「ゴメン」

しかし、彩峰が落ちるのも無理もなかった…

休む間もなく押し寄せてくる着ぐるみBETA達。

何万匹の着ぐるみを撃つたのか数えるのも嫌になってきた。

2001年11月3日13時

最初は激しいスコールとともに始まった。

時間きっかりに土砂降りで大地？には川ができる。

事前に聞いてて、スコールの時間前後10分にはBETA役も戦闘中であつても、

引いてく休戦時間と、演習ルールにつけ加わっていた。

「凄いいい」

「え〜なにいい?」

「大雨」

なにしろ会話が成り立たないほど跳ね返り音がする。  
簡易テントに雨が当たりその音がうるさいのだ。

そしてきっかり30分、スコールはやみ、空には虹がかかった。

「はわわわあゝ綺麗ですう」

「本当ね」

「ああ……」

「あれも人工物？」

「武さんもみてるんだよね」

「そつね……さっみんな評定訓練の合格目指すわよ」

「了解っ！！」\*4

勢いよく罨等の武装をもち設置作業に散らばっていった。  
時間とのたたかいだ……

その一方、監視側となる教官サイド……  
いや夕呼さんとはいつと…

「はあ〜極楽極楽〜生き返るわぁ」

雨が上がり、すぐに気温が上がってくる砂浜にいた。  
マイクロビキニに着替えて、早速ビーチチェアで日光浴をする先  
生…

「まったく夕呼……」

「なに？　まりも〜あなたは着替えないの？」

「カオルさんが来るまで着替えません!!」

「浮気しても言い付けないわよ〜」

「いいです!!」

カオルがルーロスに乗って帰ったあと、どっからともなく、  
ビーチチェア等をだしてリゾートまんきつ丸出しだった。

「まったく先生は……」

仮設コテージに設置されてるエアロスタットから送られてくる、演習の映像モニターを見ながらぼやいた。

「まあそついう俺もなあ……」

コテージは、エアシールドがはられてて、外とは気温が違って25度の快適温度に保たれていた。

「注文、コーヒー頼む、ミルク多め、砂糖抜きで」

武は空中に話すと目の前の机にカップが浮かびだす……

ぼやけてたカップが段々と輪郭がはっきりして、あったかい液体、コーヒー、ミルクたっぷり入りが出現した。

「こんな設備みたら使いたく、だらけるも無理もないか……かゆうま……じゃなく美味しいな」

熱々のコーヒー、

(けど……どうやってこれ作られてるんだ??  
後でカオルにきいてみるか……)



「白銀くあんたこっち来て、わたしにサンオイル塗りなさいよ」

「先生!!そんなことできるわけないじゃないですか!!  
純夏に殺されます!!」

「だまつといてあげるからあ」

「黙っても思考よまれたらおしまいです!!」

「……そうね…あ、浮気しても良いように、  
思考ブロックあとで組み込んでくわね」

「先生!!」

どうやら余計なフラグが立ちそうなひとこまだった…

同日夕方…

「美琴、そっちにいったわ!!」

「了解!!通さないよ!!」

ホバートトラックを中心に陣地を形成し、防衛戦の形になっていた。

「マガジンー!!」

コバッタ達が、忙しく電源パックを運ぶ。

撃っている横からタイミングを見計らい装着し直して、そのまま火線？を切らさずに撃ち続けられる。

「通したら負けよ!!火線切らさないで!!」

次々と押し寄せてくる着ぐるみたち…

倒れては匍匐で移動はしてるが、倒される以上の着ぐるみが押し寄せてくる。

「何千人いるの!?!」

「知らないわよ!?!ときかく途切らさないで!?!」

その光景のモニター監視中の武…

「あいつら少しやばいかなあ…」

畏等も突破され、ぎりぎりの線で耐えきってるのが、傍目でも見え

る。

「はあ……カオル余計な事を」

手元の資料には、当初1000人のT-850を要請してだったが…

「それ甘いだろ」

の一言で、

各基地に所属していたのも集まって総数10000人のT-850が参加していると、  
かかれてた。

（こんなことになるなんて……なあ…

先に資料みとけばよかった…）

その資料はおかしいとおもって、用意されてたのを取り出したものだった。

やられてハイブを想定した陣地にもどり、また再攻撃がまさに途切れず、

まさに、物量でのBETAの進攻を再現している。

結果…休憩時間が…

「スコールの時間のみにならないか？これ…」

2001年11月4日早朝…

薄暗い朝もやの中、207小隊は、

武の予想通り…最初から途切れなく攻めてくるBETA役のT-8

50の為に、  
段々と疲労が蓄積していく…

食事も自分たちでとる暇もなく…

「あ〜ん」

パクパクモグモグ

コバツタ達に食べさせてもらっている次第だった。

押し寄せるT-850に対しての火線を絶やす事ができず、  
銃のピストルグリップのトリガー及びフォアグリップから、手が離  
せない為だった。

コバツタ達は、射撃に参加できない…これが演習のルールであった  
ため、

それ以外を手伝ってもらっている次第だった。

「あ〜！ういんな〜があ〜」

「…………え〜拾って食べさせてよ〜」

「美琴あきらめなさい…」

夜間デジタル調整された網膜投射ごしに見なくても、  
なにを頼んでいるかわかったため、そう告げた…

2001年11月4日夜

「あいつら、休みとれてないな…」

睡魔に負け、コバツタ達に監視を頼んで起きたあと、モニターを見てみると…疲労の色が浮かんでいる207の皆が映っている。

「スコールの時間のかすと…36時間はおきてないか？」

照準が甘くなったりしてるのが確認できる…

2001年11月5日13時半過ぎ

「ねえ、みんな！！撤退できるわ！！」

榊は、スコールあけた後すぐに隣の島へと一時避難を提案した。

「ば、ばかな演習放棄だと？正気か？」

「……馬鹿？」

「いい、今回の演習ルールはなに？」

「間引き作戦」

「そう、間引き作戦ね… BETA 役との戦場はこの島、  
私たちは戦術機…  
けどね…制限エリアはあった？戦術機母艦はあった？」

「両方とも…ない」

「そう、本来なら交代休憩できる拠点、戦術機母艦がないのよ」

「……確かに設定されてないな」

「つまり、不利になったら撤退し補給等が普通はできるわけ…  
死守命令はでてないでしょ？」

「確かに…」

「一回立て直すわ…そのための撤退よ」

「どうやら、演習のある島は設定されてたが、  
制限エリアが設定されていないのに気がついたようだ。」

「わかったそなたに従おう」

「同じく」

「みきも〜」

「ぼくも…限界が…あふ」

「じゃあ、急いで撤収よ！着ぐるみがくる前に」

「…もう遅い、見えてきた」

「っ！…！急ぐわよ！！」

押し寄せる着ぐるみを後に、なんとか突破し戦域となる島からぎりぎり離脱できた…

隣の島についた途端安全が確保できた安心感からか…  
パタリ…スースー  
と寝るものもでるしまっ…

「はあはあはあ…」

「も、もうねむ…」

「な、なんとか無事ね…ホバートラックも健全だし…」

『みんな無事なようだな？』

「き、教官っ！…！しょ」

『いや、いい。寝かしてやれ…まる三日程ねてないのだろう？演習のある島からの撤退できるのによく気がついてくれたな』

「は、はい…！」

『が…演習島外での休憩を挟む事により、ある条件が加わる事となる』

ある程度は予想してた模様の答えを聞く。

「……間引き作戦の成功ですか？」

『ああ…まあその通りだな』

榊の中ではやはりと思っている。

それはそうだろう…演習エリア外にでただ単に生き残れば良い…ではすまないからだ。

「まだ間引き作戦のノルマをこなしてないのですね」



『まあ…そうだな。…ノルマを越えたら撤収命令がでる。それまではときかく稼げそれだけだ。』  
『と、最後に一つ、期間中にこなすには今日の状態になるな。とにかく休んで体力回復しろ。以上だ』

「はいっ！」

2001年11月6日午前中

「みんな準備いい？」

「うん！疲れとれたしバッチリ」

「任せよ」

「狩る」

「みき、元気回復う！」

「じゃ、いくわよ…！」

再び戦場へと舞い降りる。

武側：

「この調子なら大丈夫そうだな」

一時はどうなる事やらとおもったが、無事に総戦技をこなせるようになった。

2001年11月7日夕方：

『H Qより207B小隊へ、間引き作戦の規定数に達した。

速やかに方位9時の方向にある島へと撤退せよ』

「了解！！……皆撤収命令でたわ、最後まで気を抜かないようにね  
！！」

珠瀬、光線級潰して！！」

「うん！！」

いまだに押し寄せるBETA達の圧力を流しながら、たまが光線級を潰すと、

ホバートラック、207小隊の順で戦場となる島から離脱する。

安全域に達し、

「榊…撤収命令って事は」

「ノルマクリアしたからでた…」

「…という事は？」

「多分ね……けど教官から通知されるまでは油断しないこと…  
にやけるのもわかるけどね。」

「榊もにやけてる」

「えっえっうそっ」

「ふふふ」

「あはははは」

……

集合地点に到着…

「207B 小隊集まれ!!」

教官の前に整列する207B 小隊のみな達。  
表情はいきいきとしている。

「よくがんばった…さて評定訓練の結果をつたえる…  
合格条件は、白銀中尉からある程度は伝えられたと思うが、  
最終的には、撤退命令をうける事、  
また初期条件として、生き延びる事、  
あと一つチューリップ役のホバートラックを、  
破壊されない事になる」  
まりもの指が一本一本立ち、3本たった。

「もちろん条件というからにはチューリップが落とされると、もれなく不合格、  
きさまらが一人でも戦死しても、不合格になる事になる」

ぎびし過ぎるでしょそれ…という表情が訓練生から見える。

「しかし、きさまらはそのような条件をこなし、  
また見事に間引き作戦の規定数をクリアした…  
よって、よろこべ!!」  
きさまらは評定訓練を見事パスした!!」

「やったあ!!」

「とうとう…クリアしたのね！」

「ああ、これで、これで」

「戦術機だあー!!！」

「さて…きさまら後帰るまで二日はある…」

「ここは南国環境の観光コロニーだ…わかるな？」

「はいっ!!！」

「あゝ水着等はカオル大将が用意してくれた、ドレッシングルームで選べ」

「はい!!！」

「では、バカンスを楽しめ…別れ!!！」

敬礼後、一斉にかけだしてく207小隊のみな達…

……

カオル報告

今おれは何処にいるのかな？

ナギ少尉「207B小隊、突破おめでとう」

作者「やっとここまでこれたなあ……132話目でか  
ま、ともかくおめでとう」

ナギ少尉「リアルじゃ大変なのに、よくがんばったよね  
会社じゃ新システム入れるのにおおわらわなのに…  
ネタがつかばね」といつてたのが昨日のようね」

作者「……ま、プロットにないのが結構はいつたからな」

ナギ少尉「このあとは？」

作者「最終的に太陽系より駆逐までさ…  
ただもう何話になるかは正直わからないね…」

ナギ少尉「がんばってね…じゃ次回題名勝手に決めるよ  
…どきっ!異世界軍初の死者?誰? お楽しみに」

作者「ちよ…その題名だけはだめ〜」



第133話 帰還、シヤアとガルマ 投稿日20110607

2001年11月6日深夜

B55ハンガー

「ただいまあゝ」

「マスターお帰りなさい」

「ふわあ…今23時か…変わった事あった？」

「鉄原基地に旅団規模の増援とみられるBETAきたけど、うまく機能して、撃破したよ…映像みる？」

「ん……そうだな…モニター室でみるか…」

少し眠いなか、コーヒーを入れると全天周モニター室へと向かう。

「基地自体の完成度は35%なんだ」

基地の各設備の完成度合いが立体画像CGで再現されてく…

「けど最優先で防御兵器、今回はBETAホイホイの敷設を急いだから、  
侵行前には完成してたよ」

通称BETAホイホイとなずけられた巨大な掘り、  
それが10層も続く…

10層つづいて、光線級対策のなだらかな土手があり、  
それで初めて基地がみえてくる形だ。

「考えたマスターもBETAにとって悪虐非道だよな、  
正直これだとBETAホイホイを無効化しないと、被害甚大になる  
からさ」

「まあ、飛行形態でなきゃ大丈夫だよな、  
…後は弾級か…ま、鉄原基地での迎撃準備は整ってるし」

「報告続くね。マスターがいつてるあいだ11月5日に旅団規模が  
近寄ってきたから、

基地防衛部隊のみで対応、防衛態勢移行、  
約6時間後、BETAの先陣第1次防衛ライン接触」

第1次防衛ラインはBETAホイホイ、  
第2次防衛ラインが陸戦強襲型ガンタンク、  
以下第3、最終防衛ラインにビッグトレーミサイル型（半分が対空  
ミサイルRIM-66SM-2に変更）  
が配備とつづく。

「作動中のBETAホイホイに旅団規模のBETAたちが来て…突っ込んでくう」

炎の壁をつくるBETAホイホイ。そこに恐れも知らずに突っ込んでくBETA達、

最初に、突撃級が突っ込んでくる…

掘りにおち、死体となって焼けるも、固い甲羅が焼けきれず積み重なっていき、

第二層まで行くが、そこまでだった。

豪快に肉が焼ける。

「とりあえず前衛の突撃級はここまでだったね」

前面装甲殻が燃え尽きる前に積み重なって、橋のようにはなっちゃったけど、

そのうち崩れて焼却処理はできるよ」

中衛が到達、突撃級の死体が崩れないうちにわたる…

「要撃級だけだね…あとの光線級や、戦車級など小型種は…」

小型種はそのまま深い掘りに落ちたり、

壁づたいに降ろうとしたり…

そこに高温の炎が襲い掛かり、瞬くまに焼け炭化していく…

死体の足場にもならない状態だ。

要撃級は前腕触角が残るもそこまでだった…第三層に到達…

「とりあえずは数が足りないよね〜」

後衛の要塞級、重光線級が到達…

要塞級が渡ろうとするも…

「甲羅が耐えられなかったみたいね〜」

突撃級の甲羅をぶち抜き第一層に崩れおちる要塞級…

高温の炎が襲い掛かり動きがとまる。

重光線級はそのまま渡り…第三層にみずからおち…

同じくなんとか渡れた要塞級も第三層から燃え上がる炎に包まれ傷つき、第四層に崩れおちる。

「ま、旅団規模なら…焼却処分でかたついた…って事だね〜。まだ、大砲級や弾級の生産配備間に合ってたよかったようだし、地下進攻の反応もなし、で終わり」

「鉄原基地の護りはこれでほぼ完璧か…  
次の重慶もこの形にするかな〜」

「けど、レビル將軍から熱い！！ってクレームはきたよ〜」

「あは、あは、あははは…確かに…」

11月にもかかわらず、巨大焼却場かわりのBETAホイホイの発する熱気で、

鉄原基地外部では45度まで上昇との記録がでた。

「全包围をかこんでBETAホイホイはできないかもね〜」

「規模を小さくするかか…まあわかった…  
後報告は？」

「ん…あとは…な…あ、

副司令からアムロ大佐呼んでときたよ〜」

「副司令から？わかった…明日つれてくわ。後は？」

「今のところないね〜」

「うん。じゃ…おやすみ」

2001年11月7日

B55ハンガーでシエルターをだす。

「おはようございます。ガルマ少将」

「君が…渚カオル大将か？…  
私をもどしてくれ…イセリナがない世界なぞ…」

「あゝまあ…と思ひまして…」

医療カプセルをだす。

「ん？？……これはなんだね？」

「とりあえず覗いて見てください」

「何をのぞ……イ…イセリナ！！イセリナ」

覗いた途端、カプセルに縋り付き…

「君！！イセリナは！？イセリナは！？」

「あゝ落ち着いて下さい。カプセルで治療中です。  
大丈夫です100%治りますよ……えつとあと2日ですね」

「ああ、すまない……  
イセリナがここにいるという事は……？」

「ええ、ガルマさんを追ってガウに乗って敵討ちにでて、  
見事花をちらしました。ガンダムに体当たりを……」

「そうか……それで、ガンダムは？」

「中破し、一矢報いましたよ」

「ジオンはどうなった？」

「負けましたね……連邦の物量でMSつくられて」

「……兄さん達は？」

「ギレンさんはキシリアさんにうたれました」

「……な、何故……！」

「父親殺しです。コロニーレーザー、後で開発された大出力ビーム

兵器ですが、  
レビル將軍ごとデギン公王を……」

「と、父さんをか……ドズル兄さんは？」

「ドズルさんは、純正に戦場で散って、  
その結果ここに……あ、きましたね」

「ガルマ、ガルマではないか……！」

「ドズル兄さん……う、ウグ……」  
パンパン  
タップしている

「ドズルさん、ガルマさんを絞め殺しますか？  
苦しんでますが……」

「……す、すまない。大丈夫かガルマ！」

「……イセリナがまた見えました……」

「危づく殺すところでしたね……やめて下さいよ〜基地内で」



「ドズル兄さん…戦死したんですか？」

「ガハハハ…ビグザム、お前が死んでから開発された重要塞攻略用  
巨大MAで、

アムロ操るガンダムにやられたわい…

が、結果ここにいる事ができるし、面白いぞ〜此処は」

「…………面白いですか？」

「ああ、レビルやティアンムもきとるし、

わしを撃ったアムロも、ああそつだシヤアもきとるな」

「シヤア！ドズル兄さん聞いて下さい、実は」

「ザビ家復讐の為に騙された…だろ？話聞いとるわ……  
お前の事もな」

「…………そ、そうですか」

「それに驚くなよ…お、きおつたわい…此処だ」

「ドズル中将、何よう……き、君は!!」

「ガルマ少将を連れて来ちゃいました」

「……ドズル兄さん？」

「ああ、シヤアはわしらが死んだ後、  
宇宙歴0093まで生き延び戦死しここにきおったのだ…  
混乱するのもわかるが本人にきけい」

「ガ…ガルマ」

「…シヤア!!」

「すまない」

深々と頭を下げる。

「シヤア？」

「騙しうちというか、正々堂々とすべきだったな……  
ジオン・ズム・ダイクンの息子として、  
お前と対峙すべきだった」

「……」

「よって君にはこのわたしをうつ権利はあると思う。  
煮るなり焼くなり好きにしてくれ」

「……」

「どうした？一思いにやってくれ」

「……やめとくよシャア……馬鹿らしくなった。

……それに君に撃たれた事で此処でイセリナとここで一緒になれそう  
だしね……

けどもう、シャアさんと呼ばなきゃいけないのかな……」

「ガルマ……君がよければシャアのままが良いが」

「わかったよシャア……にしても、年老いたな」

「いづな……とそつだ基地を案内しよう……いいかカオル君」

「いいっすよ〜いってらっしや〜い」

(ふー…どうにかなったかな?)

遠くで瞬間麻酔銃を構えていたT・850が銃を下ろして、通常シフトに戻っていく…

(やっぱりイセリナがキーだったなあ…)

「あ、アムロさん」

「なんだい?」

「この後空いてます?」

「ああ」

「じゃあ二泊程つきあって下さい」

「わかった。今すぐかい?」

「準備出来次第で」

「わかった準備してくるよ。じゃあ、あとで」

イセリナさんはいった医療カプセルは既に医務室行きとなったので、

空き時間の間に…

新しい艦の注文をしておく。

(とりあえず基地間はチューリップで対応するも、

次はさらに内陸だからなあ…陸上輸送兵器がほしいか…)

モニターにギャロップを出した。

(ま、一般的にこれだろうな…ギャロップは…

装甲と主動力と、エンジンだけ弄ればいいか)

核融合エンジンを強化、

装甲をルナチタニウム合金に変更、

外装式ジェットエンジンを内部からの熱ジェットに変更、

内部補助ジェットも熱ジェットに変更する。

カーゴは、トレイン式にしたため、後部にも連結機を追加、  
各カーゴにも補助制動水素ジェットエンジンをつけ、

ギャロップのエンジン変更で、10連結可能になる。

(ま、陸上、海上輸送用だからこんなもんか…)

1編成、カーゴ10両注文しておく。

「カオル君おまたせ」

「じゃあいきますか…」

ルーロス改を出し、

「つくづくおもうんだが…人間かい？」

「やめてます…さ、乗って下さい」

「ああ」

内部に入り鈴を一なで…

「マスター、何処いくでちか？」

「ハッチからコロニーメンデルへ」

「了解でち」

微速前進し、戦艦ハッチから浮かび上がり、メンデルへ目指す。

「ビッグワンにはまけないでち」

とって大気圏にでるとものの2分程度でメンデルについた。

「えっへん!!どうでちか」

「早過ぎだよ…安全運転でな」

「了解でち」

と反省のポーズをする。

メンデルのエアロックにはいり、ビッグワンの側に着陸すと…

「まっけたわ…さ、アムロ大佐」

「あゝ」

わざわざ出迎えにきてた副司令が腕を絡ませる親密ぶり。

(いつの間...)・

まああうと思つてたけどさ)

片方はいい男でよい開発技術屋でもある。彼女は死別・

もう片方も00ユニット開発に捧げてて、

男の噂も聞いた事がなかった。

(開発できた事により余裕が生まれたのかな?)

と思い、カオルはまりものもとへと向かう...

...

カオル報告

無事フラグがたたずになによりでした。



ナギ少尉「……なんで殺さないの〜?」

作者「シヤアが更に大人になったのさ…

というか、あのあと色々あつてしまいいには、総帥の地位までいくわけだし…

第一ドズルとも既に和解済みだし」

ナギ少尉「ドズル中將が仲裁に入ってるからね…」

作者「だからガルマとしたらまだ坊やだから、ドズルさんに諭された…

第一これから望んだ恋人とのイチヤイチャ生活…  
壊したくないが1番に来たんだろうね」

ナギ少尉「残念〜」

作者「カオルの方針で、基本的に死人はだしたくないしさ」

ナギ少尉「そういえば、まだ異世界軍は死人がでてないよね〜…  
他の戦線では日々死者が出てるのに、応援行かないの?」

作者「拠点と最優先でオリジナルハイブ攻略目指してるからな…  
生産が追いついてないのもあるが、  
まあ銀河鉄道が手にはいったから、資材に関しては、増えると思う  
よ」

ナギ少尉「もっと増やしなさいよ!..!」

作者「次回に横浜基地以外の様子をつけるとするよ」

ナギ少尉「ということで、また次回くタイトルはまた決めてないの  
?」

作者「お前が決めるの禁止!!クレームきたぞ」

ナギ少尉「え〜….:….: わかった。次回のサブタイトルは未定で….: お  
楽しみにい〜」

さてカオル達がリゾートでいちゃついでる間に、各拠点の状況を説明しておこう。

まずは搾原地となる木星及びアステロイドベルト帯の様子だが…  
まず木星にはチューリップに隣接した、  
ヘリウム貯蔵用宇宙ステーションがあった。

そこから採取作業用シャトルが離れ、加速しながら木星に向かう。  
突入角度をとりながら木星大気圏に突入するシャトル…

大気圏に突入すると採取用ハッチを開け圧縮収集しはじめる。  
高温、高G、雷、嵐等が機体に襲い掛かるが、ものともせず採取  
しおわり、  
ハッチを閉め、上昇にはいる。

シャトルは大気圏を離脱し、無事に貯蔵宇宙ステーションにドッキングした…

そこから採取した圧縮大気の分離作業にはいる。

分離しおわり、液化した重水素及びヘリウム3等をタンクに注入作業にはいる。

注入しおわったタンクは多目的輸送艇につみこまれ…  
チューリップを潜り横浜白稜基地へと運ばれる。

という日常が木星では見られた。

衛星ではハイブが確認できるが、  
向こうも全く無関心の為、ある意味共存している環境だった。

アステロイドベルト帯は…チューリップにやはり採掘基地が作られ  
隣接している。

採掘基地に小惑星が運ばれドッキングすると、ガリガリと小惑星ごと  
と削られ始める。

削られた部分が次々とコンテナにつめられ、多目的輸送艇で運ばれ  
ていく。

アステロイドベルト帯はBETAのBもなく、  
ある意味安全に採掘できる環境ともいえよう。

次に地球ラグランジュポイントのコロニー群だが、

L5では、現在絶賛移民中の日本帝国領土のコロニーが自立型3つ

農業工業各1の他に、

観光コロニーメンデル、

異世界軍の工業コロニー、農業コロニー、

チューリップ内蔵の宇宙ステーションが健在している。

また建設中のコロニーもちらほらみれる。

コロニー内部の様子の様子は…

1番最初に移住してきた1バンチコロニー、愛称鳥栖では…

人々が活気あふれて新しい生活を過ごしているのがみえる。

移住してきて一ヶ月、新たな安全な土地に慣れてきたのだろう。

都市部では経済活動が活発に行われて、

また店舗もかなりの数がみえる。

コロニーの外側はリニアトレインが走って、人々を隅々まで運んでいる。

2バンチコロニー、愛称高知では…

まだ住民が70%程しかだが、移住してきた住民は積極的に立ち上がろうとしていた。

L3は一応コロニー予定群として、確保しており、

チューリップ内蔵宇宙ステーション他に、

L5から回航してきたコロニーレーザー4基が建造調整中であった。

L4においては、まだ余裕あるため、

チューリップ内蔵の宇宙ステーションのみの状態、コロニーは建設されていない。

地球…拠点としては現状3箇所のみ、

まずは、佐渡島基地…

地下工事が終わり、今現在規模では1番でかく、  
異世界地上軍の大規模駐留基地になっていた。

おもに陸戦強襲型ガンタンクや、無人兵器群が駐留、  
整備補給基地として稼動して、  
防衛部隊の他に、進攻部隊の集結地にもなっている。

また現状唯一のガルダが地下に収納可能な施設でもあった。

横浜白稜基地…

異世界軍においては、有人部隊の拠点、訓練施設、生産基地として  
稼動中であり、  
日々生産される機体が各基地へと配備される為に旅立っていく。

また、今だ宇宙コロニーとの唯一の宇宙港が存在しており、  
日本各地から移住の為、  
またコロニーからビジネスで来た人々が帝都に行く等、  
交通面では賑わっていた。

宇宙港からは日々500便ものシャトルが打ち上げ、着陸が繰り返し  
えされ、

今では移住以外にもビジネス、観光等でも行き来する人々もみえる  
次第だ。

これから移住する人々は、コロニー内部の様子が日々映像として流

れ、  
期待に満ちた表情の人が多い。

けど一部には未練の表情もみえるが、西日本が解放されるまで我慢と、

心の中で思う人もいる。

鉄原基地は前話でも話題にはなつたが、  
今だ基地施設は建設中、  
直接防衛設備だけは体裁を整えた形だった。

駐留部隊半数以上は、基地後方地上にて整備を臨時に受ける状態であり、  
早いところ地下施設の完成を望む状態であるが、  
今月20日には施設が仕上がり、重慶ハイブ攻略戦の重要な役割を果たす基地となる。

以上、各拠点の現時点での状況だった。

さて場面はご褒美の期間をすごした207B小隊が、  
帰還の為にビッグワンに乗り込んだあたりになる。

2001年11月9日

「さてと…全員乗った？」

「大丈夫だね」

「楽しかった」

「また来たいわね」

「師匠と絶対くる」

「僕も……と」

「満足した」

207B小隊の皆は爆睡したり、おもいおもいにご褒美を満喫したようだ。

「じゃ……ビッグワン発進」

ポー！！ガシユ…ガシユ

「と、副司令…イチヤイチヤしてなく…」

「ん〜やっぱり呼んで良かったわぁ……なに？」

「月、火星遊覧してきます？」

途端に顔が引き締まり…

「そつね…時間どのくらいかかるの？」



「機関車」

『月経由火星周回1時間15分、地球60分行程です』

「だそうです」

「わかったわ。いってちょうだい」

「機関車、経路変更、月、火星上空経由へ」

ポーーーー！！

ビッグワンは汽笛で答え、無限軌道の向きを変える。

「ところで前無限軌道でと言いつられたけど、無限軌道ってなんなの？」

「ん〜と…何処まで説明しましたっけ？」

「軌道リングだっけ？」

常識に押し潰されそうに打ち切ったのよ…」

「とまず軌道リングですが、リング間をシールドと、エネルギーでレールを形成して固定してます」

「エネルギーとなると常時電力かなにか必要なの？」

「シールド部分のみですね。

で、一回形成しちやえば伸びたり縮んだりできる、ガイドウェイと  
思っただけです」

「軌道は、鉄等でないのね？」

「そうですね。なので公転には対応できません。

自転には対応出来にくいので、接続時に進入の形をとります」

「で、無限軌道モードって？」

「このビッグワン等特殊車両は、

無限軌道モードという、機関車自身がガイドウェイを形成し、  
最後尾車両の車輪で吸収するモードがあります。

ま、なので軌道という概念にとらわれず何処でもいける…というこ  
とです」

「なるほどね…」

『月周回軌道に入ります』

「お、そろそろっすね」

「人類最悪の戦場…ね」

「ま、任しておいて下さい。とあれが」

「ムーン・ゼロかしら？」

かなり高いハイブ構造物が眼下にみえる。

「あと三つあるからどれかだとは思っけど…  
まさか肉眼で見れる機会くるとは思ってたけどね」

月の地表には米粒のようなBETAがみえる。  
他にも3つのハイブが確認できた。

いずれも地球にあるオリジナルハイブよりでかいのも確認できる。

「ところで、月のハイブに関して情報はあるの？」

「いや、ないっすね…地球のオリジナルハイブ以上のクラスか、

別系統なのか…

とりあえず惑星の指揮官の上司と思って貰えばいいと思います」

「そう…残念ね」

「お、月軌道離れますね」

ビッグワンは火星に向け無限軌道を取り、加速しはじめた。

…

まもなく火星周回軌道にはいる。

「そういえば初偵察も兼ねてるよな…機関車映像記録よろしく」

『了解…前方衛星ダイモス確認できます』

「機関車、ダイモスには生態反応、ハイブ等確認できるか？」

『サーチ結果、無人です』

「…基地には出来そうだな」

「ビッグワン優秀ね」

「っすね…あとはフォボスか…」

機関車フォボスも視認できたらサーチよろしく」

『了解』

「大気圏外だと…ハイブ見えにくいわね…」

「機関車、火星立体映像だせる？」

というと…丁度真下の映像がでてきた。

ハイブが一つ映像範囲内に写ってる。

「マーズ・何番かしら？」

「機関車、他にも確認できるよな？」

『ハイブの存在確認、現状計測中』

「いくつあるか、周回軌道で確認しましょう」

段々と火星の数が増えてくハイクブ…

累計15個のハイクブが確認された。

「ん〜15個か…大気圏も厄介なんだよなあ…」

「なにを考えてたの？」

「月は大規模出力ビームで楽して攻略しようかな？と思ってたんですよ。」

けど火星は大気があるので減衰しちやいそつで…

ん〜質量兵器で攻略かな…？」

「質量兵器でいいんじゃない？」

「っすね。どうせ生物もいないですし…」

火星攻略の手順がきまったようだ…

ビッグワンは二周、周回軌道を回ると進路を地球へととりはじめた。

ボー！！！

程なくして地球の大気圏に突入するビッグワン。

重力に引つ張られずに赤くもならず汽車は進む。

横浜白稜基地が見えてきた。

ビッグワンは地上進入軌道に乗り：戦艦ハッチの上で歩みを止める。

エレベーターが下がり、戦艦ハンガーにおりきり、  
待機位置へ微速前進し、停車する。

「お疲れ」

「207B小隊、各自部屋に1600にブリーフィングルームに集  
合、

明日の適性試験について説明する解散！！」

と別れていった…

……

カオル報告

適性試験？？

まだ彼女らはなんかあるのか…頑張れ



第134話 総戦技演習終了後… 投稿日20010609（後書き）

ナギ少尉「前半が拠点開発、後半が月、火星遊覧ね」

作者「まあ今回はこうなったな…」

ナギ少尉「で、次回は適性試験ね。話が見えてるね」

作者「いんや、またどっかにいくから、  
適性試験はその話の間だな」

ナギ少尉「次は誰引き込むの？デビルガンダム？」

作者「さあ…‥‥‥ヒントは砂漠の虎…」

ナギ少尉「え？あの人死んでないでしょ？」

作者「ふふふ…」

ナギ少尉「あ、あゝなるほどね…美人だもんね」

作者「確かにな…主人公がほれかけたし」

ナギ少尉「…さて次回のサブタイトルいきますか、ってまだ出来て  
ないの？」

作者「執筆中だよ」

ナギ少尉「サブタイトル未定で、次回お楽しみにい〜」

第135話 砂漠に消える命… 投稿日20010611

2001年11月9日のまま話は続く…

基地にビッグワンが到着したとともに207B小隊の引率は終了したとおもったら…

「ヒルダさんから伝言、新しい人材よろしくだって」

「はあ…ま、じゃあいつてくるか…と、次の予定のところは…擬態製造ポットと、あとは…」

医療カプセルをとにかくたくさん虚数空間にしまい込む。

「じゃいつてくるわ」

「いつてらっしゃい〜」

宇宙歴0079 10月27日

再びガンダムの世界にでる…

(さて、確か中央アジアだったよな〜…)

と思いつつ、ルーロス改を虚数空間からだし、中に入り込む。鈴を撫で…

「はい、ごちゆじんたま」

「ルース、ホワイトベースを探してくれ」

「ふえ？ホワイトベース？なんでちかそれは？」

「と、あ、まだ接触してないのか……」

あゝ白い戦艦で四ツ足から敵側から木馬といえる……」

「サーチするでし……ごちゆじんたま、多分みつかったでち、  
特殊な通信に木馬というのが流れたでち、  
場所を特定ちたでち」

「チートだな…ま、いってくれ。不可視モード」

「了解でち」

ものの10分位で…

「あれでちか？」

「おー上出来だな…じゃ虚数空間に引き込むから待機で」

「了解でち」

と幻影をかけ外にでて引き込んで、

ホワイトベースに接触すると同時に同化する。  
広げてくと格納庫に、ガンダム、ガンタンク、ガンキャノン、また  
エアバギー等がある。  
今更ながらMSを取得、あとエアバギーは…  
(なかつたなあ)  
で取得する。

(結構このエアバギーは劇中だと便利に利用されてたよな…)  
通常時はタイヤ走行、  
いざっというときエアカーに変更する。

こういった小型車両にはそれが便利かもしれない。  
ホバークラフトは、風に弱い点があるからだ…  
ビッグトレーサイズなら気にはならないが、  
ホバートラックサイズは唯一それが弱点でもある。

もっともそんな時は視界もかなり悪い為、  
無理に進行せずに防備を固める運用だったらしいが…

さて、他にもついでに取得しながら、艦を掌握してくると…  
ブリッジが少し騒がしいので意識をむける。

「あ、湖が消えちゃったの？」

「確かに湖か何かあった跡らしいけど」  
(なるほど…消える湖ねえ…)

「そ、そんな」

「地図と照合しろ。間違いないのか？」

「はい、間違いありません」

「しかし、おかしいじゃないか」

「だ、駄目だ」

「タムラさん」

「塩がないばかりにホワイトベースをうろろろさせてしまった。もうジオンに見つかっちゃってる」

「マーカー、この湖のデータってないものかしら？」

「探してみます……ロブ・レイク、鹹湖。

五百年ごとに西と東に振り子の様に移動する」

「移動する？データの地図っていつの？」

「戦前でしょう。戦争からこつち、  
地図を作る人工衛星なんてありはしませんから」  
(丁度500年の節目なのかな…?)

「ブライト」

「よし、移動だ。湖を追いかける」

「何か接近します」

「二時の方向、地上を一機で来ます。ただし、機種は不明です」  
(きたな…ギャロップ…)

「相手がわからない？」

「速度とか高度とか質量から割り出せないのか？」

「マゼラアタックにしてはスピードが速すぎます。  
ガウにしては小さすぎます」

「アムロ、行けるか？」

「戦力がわからないと辛いですよ。ガンダムで出ていいものかどうか」

「ホワイトベース、発進させます」

「全員、第一戦闘配置。ガンダム、ガンキャノン、ガンタンクはスタンバっておけ。  
発進はもう少し様子を見てからだ」

了解とリュウとアムロが答えブリッジから格納庫へと向かう。

「さ、みんな、行こ。第一戦闘配備よ」

フラウに三人の小さな子供達が答え、ブリッジから出ていく。

「ガンダムです!!」

ブリッジから発進する、実はセイラ機が見えた。

「いやに早いな…まあいい、不明きに、うっ  
「あっ」



「左舷、応戦しろ。ビーム砲急げ。  
ガンキャノン、ガンタンクはガンダムを援護しろ」

「格納庫からです！アムロがガンキャノンでです」

「はあ？…あのガンダムは誰のってんの！」

「セイラさんです！」

「セイラが？…なにやってんの！！アムロに援護急げと伝えろ、リ  
ユウは？」

「今です！！！」

(…さて、そろそろか…)  
離脱すると、戦場へと向かった。

コズンの乗るザクが、  
セイラ乗るガンダムに接近しているのがみえる。

ガンダムは既に右足が中破してるため、  
オートバランスー不調で、バランスを崩した。

(ガンキャノンは…あつた)  
目立つ赤がみえる。

ガンダムはバルカンで接近させないようにするも、  
体重のかかった蹴りをくらいバランスをさらに崩され、  
ザクにメインカメラを破壊され、後ろに回られ確保された。

ガンタンクはグフを近寄らせないように嫌がらせていた。

ガンキャノンと対戦中のザク…

取り付いた。

『アコース、赤いやつを突破して、コズンに近寄れんか?』

「わかりましたやってみます!」  
と同時にクラッカーをなげ、

「もう一発!!!」  
クラッカーを再度なげる。

「…この赤いやつを突破できれば…三階級は…」

ザクがガンキャノンを狙いうちはなち、  
弾はあたるがガンキャノンの装甲は固い。

「固いな…なる!!!」

あつ!し、しまった、弾がきれた。しまった」

正面からガンキャノンが構え、両肩のキャノンが火を放つ。  
「だぁーっ」

虚数空間にほうり込んで、貫かれ爆発するザクから離脱した。  
虜獲する為にザクマシンガンを手放してたコズンののるザクが、  
撤退しようとする、ガンキャノンに立ち塞がれた。

メインカメラを破壊され、格闘でパイロットを気絶させた。

動力パイプをカットし、動けなくし、  
ザクの頭部に手をかけ、引きずっていく…

カオルは時間短縮の為に世界扉を形成する。

宇宙歴0079 10月28日

再び虚数空間から出したルーロス改にのり、  
ホワイトベースを追っかける。

「見えたでち」

「よし、接触してくれ。乗り込む」

「はいでち、ECM、対可視動作正常、欺瞞軟着陸まで…5、4、  
3、2、1…着陸したでち」

「パーフェクトだね。じゃ出たあと虚数空間引き込むから、待機に」  
「了解でち」

ホワイトベースの甲板におり、ルーロス改を引き込む。

(さてつと……)

ホワイトベースと探索の為に同化しはじめた。

(あ、いたいた丁度逃走か……)

ガンタンクが要塞に挑みに出撃する。

第二通信室にコズンが進入してきた。

扉をパイプでロックすると、

「カメラは……これが、」

防犯カメラのコードを無理矢理ひきちぎる。

あたりを見回し、他にはなさ気なので、逃走経路を確認しながら、通信コンソールに座り調整しはじめる。

「……ええい、なんて合わせにくいんだ、こいつは」

調整になんこうしてたが……

「き、来た」

喜び通信を試みる。

「ムスタング2、ムスタング2、こちらコズン。木馬より発信……  
繰り返すこちらコズン。木馬より発信……」

『ムスタング2、おくれ』  
握り拳をたてる。

「木馬、正式名称ホワイトベースと連邦内部では言われる。浮力はミノフスキー粒子により浮かぶ新造戦艦、他にも随時生産中との事。」

艦内にはガンダム、ガンタンク、ガンキャノンの三つのタイプが存在する。

木馬にはこいつが各一機ずつしかない。戦闘機の存在は不明だが整備用の機材は確認できる。

ガンダムは白いMS、近接格闘戦にだけ、ビームライフルを装備した機体、

先程の戦闘時には何故か素人が操縦した。戦力評価は訂正するが是。

ガンキャノンは赤い中遠距離戦のMS。

先程の戦闘時には本来ガンダムのエースパイロットが搭乗してたとの情報。

ガンタンクは通称タンクモドキ。

こちらは遠距離専用のタンク。

先程の戦闘時にも本来のパイロット、なので戦力評価変更なし…

続いて艦内状況、人材は不足気味、白兵戦による占拠も可能と思われる。

補給状況は劣悪、資材も不足気味、…チツ、この野郎！」

インカムをコンソールに投げつけた。

「気づかれたな…」

ロックを外し、通信室の外にでると、

「ああっ」「おおっ」

セイラと対峙、即座に銃をはたき落とすが、足にあたり遠くに銃がいく。

コズンは逃走、セイラは銃を確保を選択。

「待ちなさい!」

「だれがまつか…こっちか」

コズンはかけてく…

階段はすべるようにおりてく。

大分距離を稼いだが…

ハ口が転がってきて、避けようとするが進路変更し、

「うわああ」

ドテッ

「イツ…チッ」

階段に飛び降り再び駆け出す。

「脱出場所変更した方がいいな…あっちにいくとおもわせて…」

(なるほどね…)

ブリッジでは18番ハッチと思っているが実は…

「!!!12番ハッチです!」

「なに!待ち伏せがばれたのか!」

「いえ、とにかく追跡させます」

とブリッジでやりとりされた。

「ここだ!」

エアロックをあけ、扉の中にはいり、ロックをかける。

(このエアロックね…)

「こいつさえあれば」

ガンガン

体当たりしてる音が聞こえる。

「へッ、エアロックは中からロックすると、開けない構造だって  
説明書にかいてあったろ…」

やはり人材不足気味だな…早く情報全部伝えなければな…」

カオルは離脱し急降下する。

上空みると…

「うっげほっ…うっけえ!!」

落下しながら個人用ジェットを点火しようとしている。  
が、完全にこわれて…

(そろそろか…)

コズンが地面にぶつかる前に、  
衝撃なくやさしく虚数空間に引き込み、離脱する。

しばらくはなれ、コズンを虚数空間から出すと…

「うぶっうぶっうぶっ…はぁ…ここは？」

吐血し、血を吹き出し、息きあらく問い掛けてくる。  
やはり扉に吹っ飛ばされ損傷をえてるみたいだ。

「あんまりしゃべらないで下さいね。助けますから…」

虚数空間から医療カプセルをだし、

「はぁ…き…うぶっ」

「はいはい喋らない…よっ」と

抱き上げカプセルに入れる。

「なおったら説明ありますからね」



カプセルが作動し、コズンは治療の為に強制睡眠状態におちいる。

（虚数空間にいれてっど…このあとは…血で汚れたし、一回休むか…）

「世界扉」

世界扉を形成し、潜る…

カオルは世界をまたわたる。

…

カオル報告

ホワイトベース

ガンタンク

ガンダム

ガンキャノン

エアバキ―系3種

ガンペリ―

ナギ少尉「ね、作者、今回救出した二人が生贄なの？」

作者「ん？……ん？どうだろう？……ヒルダさん次第？」

ナギ少尉「へ？、じゃなんでこのやられ役救助したの？」

作者「アムロ達が異常なんだよアムロ達が……」

ナギ少尉「へえ」

作者「信じてないな……多分アムロ達がいなければ、その後連邦攻略する要となり、でジオン公国軍のドブル中将揮下の中心的部隊となるんだぞ」

ナギ少尉「でもアムロにやられちゃうんだよね」

作者「……ドムがくればアムロを撃退してたさ……MSの性能差だよ……」

ナギ少尉「まあそういう事にしておきますか…  
さて今回は、引き続きガンダム編…サブタイトルは未定で、お楽し  
みにい〜」

第136話 ガンダム編 砂漠に消える命 投稿日20110613

宇宙歴0079 10月30日

「キシリア様到着だ…粗相のないようにな…」

「はっ！！…傾注、5分後にキシリア様が到着する。各員周囲警戒、…以上！！」

夜の闇の中、マ・クベ、キシリア・ザビのいるアッザムが102探掘基地へと到着する。

二日目

ルーロス改にのりホワイトベースを追っかける。  
ホワイトベースから脱走したガンダムを探査して…

「みつけたでち」

「じゃ追跡…」

「もう真下でち」

足元10m下には、  
廃墟となった町に、隠れるように係留しているガンダムが見えた。

(フラウに見つかる前か…)  
朝日が昇り、ガンダムを照らし始める。

「……わかった…でこの先に採掘基地があるよね？」

「……みつけたでち前方30km」

「じゃ、そこに向かってくれ」

「了解でち……もうついたでち」

無音の状態で、10秒位で30kmを加速し減速、  
しかもGを感じさせなかった…

「最近自重してないよな…」

「全開バリバリでち」

猫の技術は恐ろしいものがある。

「まあ…また虚数空間に引き込むから待機で」

「了解でち」

カオルは空中に幻影だしながらでるとルーロス改をしまい、  
第102採掘基地に向かう。

この基地は、マゼラアタック隊全滅、最終的には強制爆破で、  
人員いるにもかかわらず味方もろとも基地であった。

(さて、どんな人材がいるのかな?)

カオルは基地に取り付くと、身体を広げ始めた。

「キシリア様、朝食は如何でしたか？」

「うむ。コックを呼び」

「はっ!!」

キシリアの前に連れられてくるコック…

「お前、名をなんと呼ぶ？」

「だ、大和ナチルと言います。キシリア様」

「腕はよかったぞ、本土にくるか？」

「ありがたきお言葉です。是非ともお願いします」

「おい」

「はっ」

「手続きを進める」

「わかりました。キシリア様」

コックが退出していった。

「よろしいので？キシリア様」

「かまわん…マ・クベ、視察に行くぞ」

「はっ！…かしこまりました…おい」

「はっ…こちらに…」

キシリアはマ・クベのアテンドのもと基地の視察を行い、展望台に案内された。

「こちらの基地で採掘された鉱石からは、トンあたり2グラム。予想通り良質のソリウム鉱床です。」

あと五つもこの程度の鉱床を掘り当てれば我が軍は」

キシリアが言葉で遮り、

「ソリウムには限りません。連邦には貴重な資源を1グラムたりとも渡してはならないのです。」

それがこの戦いを勝利に導き、ひいてはその後の支配の確立にもつながるわけだ」

「心得ております」

マ・クベが最大限の礼で答える。

「ところで、この周辺の未採掘鉱床でわかっているのは？」

「ここより北50キロ辺りにも同じような鉱床があります」

「人員と機材は望み通り与えましょう」

「はっ、ありがとうございます…つきましてはおひとつお願いが」

「なんだ？申してみよ」

「はっ…北米大陸の基地を、指揮下にいられたいただきたいのですが」



「ふむ…よかるう」

「はっありが」

ビームライフルが建設クレーンを貫いた。

「……何事です？」

「キシリア様こちらへ」

危ないとおもったマ・クベが、キシリアを避難させるべく、リニアカーにのせ、出す。

「アツザム、発進準備を急げ」

「マ・クベ、モビルスーツを前もって発見できなかった失敗、許しがたい」

「…キシリア様」

「アツザムの性能テストにはよい機会です。お前がやってみせよ」

「は、キシリア様、必ず」

「直接連邦軍のモビルスーツを相手にするのも、今後の作戦には役に立とう」

カオルはその頃、加速2乗かけで、事前に無難そうな人物を虚数空

間に引つ張りこんでいた。

全員とはいかないが、まあまあな人数、

あ、またマゼラアタックにビームが向かい直撃コースなので、マゼラトップにとりつき…

「うわああ」

虚数空間にほうりこみ離脱した。

また基地施設にビームが狙い定めて、射線先にまわりこみ…

ビームが襲い掛かかり、回りを見渡すと…

(いた)

虚数空間に引き込んだ。

そうしている内に、マゼラアタック隊は全滅、防衛設備も全滅した。あとは非武装の施設のみとなる…

そのうち、

アッザムがビームでガンダムを攻撃、上空をとり、アッザムリーダーでガンダムのエネルギーを吸収するのが見えた。

他機のエネルギー、つまり電力に干渉しゼロにさせる…効果的な対機動兵器だ。

(対BETA戦には使えないけど、面白いよな…)

アツザムリーダーが弱まった隙に…

（これももう少ししっかりすればガンダムを打ち倒せたのにね…）  
磁場照射機を破壊、ビームを発射するアツザムに、ガンダムが飛び掛かり、損傷を与え…

アツザムが背面浮遊しはじめガンダムを振り落とそうとし始める。  
（そろそろか…）

めぼしい人材を取得し、  
離脱直後に大爆発がおきた。

「”世界扉”」

カオルは満足しきって世界扉を潜る。

特殊なのでは軍楽隊がまるごと、騎兵、戦車兵、整備兵等、  
約100名近く虚数空間にほうり込めたからだ…

宇宙歴0079 11月2日

三日目

カオルは精神力を回復し、ルース改に乗り込んで、移動している。

「ガンダムは捕らえて離さないでち」

隠匿しているガンダムがあっさりと見つかる。

「なァルーロス、何故そうすぐに見つかるんだい？」

「聞きたいでちか？聞きたいでちか？」

「うん」

「それは、猫の最新技術の対物質透過レーダーで、惑星を捜査して  
るからでち」

「ほづ…」

「一回捕らえた特徴ある機体等はほくに記憶されるでち」

「となると、量産されると苦手が」

「そうでちね…特定のを探すのはむづかちくなるでち。  
けど方法はあるでちよ」

「通信からパイロットを特定すしかないか？」

「あたりでち」

「なるほどな…流石猫の技術…と、この付近の町は？」

「2時の方向3kmでちね」

「よし、いつてくる」

幻影をかけルーロスをしまうと、町の方向へと向かう。

「食事できますか？」

丁度アムロが食堂に声をかけるところだった。

「ああ、できるよ。席はカウンターでいいかい？」

「はい。構いません」

「オヤジ、休ませてもらうぞ、13人だ」

「へえい、い、いらっしやいませ」

「ハモン様、こちらへ」

「すまん、サグレ、マイルは見張りだ。交代は急がせる」

「は、ランバ・ラル隊長」

「オヤジ、まずはうまい水をくれ。ハモン、すまん。地球にこんな砂漠があるのは驚きだろう」

「自然の脅威です。星を見ているよりずっと面白い」

「ハハハハッ。みんな、座れ座れ。」

何を食ってもいいぞ。作戦前の最後の食事だ」

ランバ・ラルが部下達を促し席にすわらせた。

店主が恐る恐るメニューをもちながら近寄ってきて、

「メ、マニユールでございます…」

あ、あの、このソドンは中立地帯でございますので戦争は

「ほかでやる、心配するな」

「何もないのね。できる物を14人分ね」

「は、はい」

「一人多いぞ、ハモン」

「あの少年にも」

「ん？…フフ、あんな子が欲しいのか？」

「フ、そうね」

店主が厨房に下がり調理しはじめると、アムロがハモンに近寄り、  
「あの、なんていうか、ご好意は嬉しいんですけど、僕にはいただ  
けません」

「なぜ？」

「あなたに物を恵んでもらう理由がありませんので」

「フツ、ハハハハツ。ハモン、一本やられたな、この小僧に」

「君の事をあたしが気に入ったからなんだけど、理由にならないか  
しら？」

「そんな」

「小僧、ハモンに気に入られるなぞ余程の事だぞ」

「まったくだ。遠慮したらバチが当たる」

クランプの声にあわせ、席にいたランバル隊の皆が同意の声をあ  
げ、

アムロを挙げる。が、

「僕、乞食じゃありませんし」

「気に入ったぞ、小僧。」

それだけはつきりものを言うとはな」

「ハモンだけの奢りじゃない、わしからも奢らせてもらおうよ。」

なら食っていけるだろう？ん？」

「ええ、そんなんじゃない」

そんな雰囲気を変えた一言がきた。

「隊長、怪しい奴を捕まえました」

「スパイか？」

「は、行動不審の女が」

捕まったフラウボウが突き出される。

「なんだ、子供じゃないか」

「フラウ・ボウ」

「あなたのお友達ね？」

「え、ええ」

「や、しかし、こいつの着ているのは連邦軍の制服です」

「そうかな？ちよつと違つぞ」

「間違いありません」

「そうなのか？ハモン」

「そつらしいけど。その子、この子のガールフレンドですって」



「ほっ」

「アムロ」

「放してやれ」

「や、しかし」

「いいから」

そう命令するとアムロに正面から近寄り外套を少しめくる。銃を握っているのを確認するラル。

「いい目をしているな…フフフ、それにしてもいい度胸だ。ますます気に入ったよ。ア…アムロとかいったな？」

「はい」

「しかし、戦場で会ったらこうはいかんど。頑張れよ、アムロ君」

「は、はい、ラ、ランバ・ラルさんも、

ハモンさんも、ありがとうございました」

「アムロ」

「行こう」

アムロ達が逃げ出すようにでていった。ハモンはそれをみて微笑む。「あとをつける、ゼイガン。」

この近くにいる連邦軍となれば木馬ぐらいしかおらんはずだ」

「はっ」

「親父、2人分を弁当にしてくれ。すまんが1時間で食べるぞ」

「親父！飯急いでくれ！！」

腹が減っては戦が出来ぬばかりに、腹にたらふく貯めはじめる兵士達…

そして、

「美味かったぞ親父、またくるからな」

「は、はい！ありがとうございます」

釣りは要らぬとばかり多めに支払いをすませ、ランバ・ラル隊はトラックにのり知らせに備える。すると…

「来たか」

「ゼイガンから暗号です。風はすぐ吹く。木馬が発見できたようです」

「よし、出撃準備にかかれ」

グフとザクが起動し…

『調子がいい。ステッチ、そっちはどうだ？』

「はっ、良好であります」

『あなた、御無事で』

『うん、お前達は5キロ前進して待っていてくれ。これで無線を使うのは一時中止する』

『はい』

ブースター吹かし跳躍し砂丘を越えていく。

「隊長、捕らえました」

『ようし…食らわせてやれ!!』

ホワイトベースを狙ったミサイルが見事に命中、ガンタンクがそれを見て迎撃に入る。

「おっ戦車が」

『ステッチ、俺が飛び出す。その間にタンクをやれ』

「は、はい。ラル大尉」

「今だ」

脚部外付けポットからミサイルを飛ばす。

ガンタンクのキャタピラ部に見事命中、破壊する。

「ハハハ、隊長やりました、タンクをやりました。こいつにとどめを」

と、刺しにいこうとするステッチ機を、

『なに寝ぼけておるか、ステツチ。』

木馬だ、木馬を討ち取らねば我々の、我々の戦いは終わらない』

「…そ、そうでありました。木馬は、あっちか」

とタンクを放置して跳躍し、ホワイトベースへと向かう。

途中で動きをとめ、ホワイトベースを観察しつつぶやく…

「後ろから火線が上がってない??」

前を塞ごうとした方向から後ろに進路を変え、

「隊長!、後ろが無防備の様です! 援護お願いします」

『わかった』

つつかりから、浮上し逃げようとするホワイトベース、

「いいぞ、真後ろからミサイルぶちこみやいくら木馬だって」

トドメをさそうと、後方からちかよるが、

「おっ木馬め……」

最大出力にしたエンジンから出る炎が伸びザクを襲撃する。

「ああっー!!」

引き込み、炎の熱に耐えられなくなり、爆発するザクから離脱する。

しばらくすると、一回転してグフを振り落とすホワイトベースがみ

れ、  
ガンダムが救援にかけつけてくる。

互いにきちつけあい、格闘戦にもちこんだが…  
ラルの一降りがかわされ、両断される。  
そしてトドメが背中にはいる。

ラルが、ガンダムに個人携行ワイヤーを巻き付け、爆発寸前のグフから、

「見事だな。しかし小僧、自分の力で勝ったのではないぞ。  
そのモビルスーツの性能のおかげという事をわすれるな」

と、ワイヤーアクションをきめて爆発するグフから脱出する。

カオルは、

「やむえん。夜になってハモンと合流するか」

ブーンと、そろりと近寄り、チューと血液を採取する。

(よし、擬体ようはこれでいいな…)

はなれ、世界扉を唱えた。

……

カオル報告

リニアカー

アツザム

あとは目新しいの無し。

ナギ少尉「…第102採掘基地の人員、救助したはいいもの扱いあらいな…」

作者「あははは…orz」

ナギ少尉「まあどんな人員がくるか楽しみだけど…軍楽隊？」

作者「ああ、今までいなかったなあ〜でちといれてみた。

キシリア様が視察にわざわざくるんだいてもおかしくないだろ？」

ナギ少尉「そうね…」

作者「という事さ」

ナギ少尉「ね、肝心のラバ・ルさんや、ハンさんはいつ？」

作者「おま…!!…ねたばら…まあ…次回だよ次回」

ナギ少尉「けど、あのイベントもあるんでしょ？」

作者「そつちも進めてるからなあ…どつちが先に仕上がるか…」

ナギ「ということ、次回はまだ作者次第…でお楽しみにい」

さて、カオルがTripしている間の事に話をうつす事にしましょう。

2001年11月10日

「あれ？カオルは？」

「マスターでしたら、今別世界いつてますけど、何かありました？」

「いやなに…適性試験だからせっかく作ってもらったから、声かけにきたんだけど、今日は居ないんだね？」

「ですね～。多分一週間位なので、14日には？と思います」

「わかった。ありがとうな」

武はハンガーを後にする。

「シュミレータールーム」

「あ、たけるさ～ん」

「たける、遅い」



「あれ？……すまんすまん」

(恥ずかしかって出てこないと思って、少し遅らしたんだがなあ…)

「委員長や、冥夜、美琴は？」

「恥ずかしかって、まだあの中だよ」

「追い出してくる」

と彩峰が更衣室にむかった。

扉をあけると中から声が聞こえる…

「なあ…たま、訓練生用強化服恥ずかしくないのか？」

「ふえ？ふえええ、そ、そりゃ少しは恥ずかしいですよ！たけるさん」。

でも…もつと…その」

「お、お待たせしま…した！教官！」

更衣室室内に籠っていた榊、御剣が前を隠しながら恥ずかしいがっててきた。

腹がぼっこり膨れて苦しがつてるのは…鎧衣…

見事に伝統の犠牲となったようだった。

鎧衣は羞恥心より、くるしさに耐えるほうがまさってるのだろう。

「小隊集合！！」

武がらちあかないとばかりに号令をかける。

整列するも、もじもじ恥ずかしがってるのは除いて、  
すぐさま口を抑えぎみになる鎧衣…

「美琴、今日の昼飯、どのくらい食べたんだ？」

「うっぷ！！は、はい…うっぷ」

「教官、本人が答えるの無理そうなので、かわってお答えします。  
特盛ともう一人前、あと私達のおかずから一品ずつです」

「……美琴、順番は最後にするから掃除は覚悟しとけよ」

「は、はい、ありが…うっ…とうございます」

「さて、これより戦術機操縦資格適性検査をおこなう。ま、しって  
の通り入学時に行った適性検査との比較だ…  
赤い緊急スイッチも変わらず。が今回は復座型になる」

へ？な顔が浮かんでくる。

「前半は通常の適性検査、  
追加でよろこべ、全力でGを体験させてやろう」

「き、教官!!」

「う…」

死刑宣告を受けた表情の鎧衣…

「まずは最初の搭乗は…出てきた順でいくか…たま!!」

「はわわわ…お、お願い致します」

たまとともに復座型のシュミレーターにのりこむ。

今までののはコンピュータプログラムによる適性検査だが、カオルに話したらそれ採用!!とばかり、

復座型による教習専用シュミレーターを作ってくれた。

カオル曰く、

「訓練でならGをガンガン体験させてやってくれ!」

で、Gキャンセラー等一切載せてない恐怖の代物に仕上がった。

操縦は…もちろん今回は武側設定となっている。

コクピットカバーがしまり…

訓練生、たまの座席の目の前に虹対応の袋及び、横に赤い緊急スイ

ツチがある。

「説明うけてわかってると思うが、横の緊急スイッチを押すとシミュレーターは停止する。」

しかしそれは適性検査に不合格した事になるから注意しろよ」

「は、はい…」

『バイタルモニターオンライン、問題なしです。始めて下さい』

武はあらかじめ組み込まれた適性検査プログラムを起動する。

所定のプログラム終了後、追加として全力機動体験の流れになる。

(ほう…前週と比べて強化されてる？

…これなら適性検査は問題なさげだな)

その通り適性検査は無事にパスし…

「さうってここからはお楽しみ全力機動だ。イヤッホー」

「ひ、ひえわわひ、ひいーん」

何をいつてるのかわからないたま。

…

「ふう。満足した…たまどうだ？」

「ひひやいでふう」  
「べ口をだしながら…」

「あゝ舌かんだか…保険室行ってこい」

「ひゃい」

「次！！彩峰！」

「……やさしくしてね…ポッ」

「擬音をいっても無駄だ覚悟しとけよ」

「ケチ」

……

彩峰は全力機動になんとか…

「おい、終了したぞ」

「……」

「駄目か…たく…御剣、榊手伝ってくれ」

「は、はい」

二人に手伝ってもらいベンチシートに寝かしつける。

「や、やきそば…」

「お、気がついたな…2号介抱よろしくな…」

(榊から手加減するか…)

50%まで手加減したおかげで、

失神まではいかないも…グロッキー状態に陥る御剣、榊…

「さて、最後は美琴だな」

「は、はい…」

「鎧衣…ぶちまけてね」「虹がみたい」「……」「ひゃんばって  
グロッキー状態の御剣以外から声援？がかかる。

さて結果は…適性試験プログラム終了後、

追加の全力機動したら…見事に

「へぶううう」

シミュレーター内にぶちまけた。

それでもやめない全力機動。

「わあっはっはっ」

「きよへぶ……きょうか…ぼぶう」

……

「よし、全員問題なしだ…明日から模擬教習課程にすすむ。

入学時の検査と比べても大丈夫だな…以上解散！！  
あ、そうそう、美琴、ちゃんと掃除しとけよ」

「……はい……おにいい」  
「はっはっは」

2001年11月11日

「よし、今日から教習だな」

(ま、初めては何週やっても一緒だからな…)

まずは実機に乗る前にシュミレーターによる教習の形になる。

「とりあえず今日は歩くだけ、走るだけ、曲がる等の基本の動作教習をおこなう。

射撃操作に関わるC、Dは明日に行く。

実際に操縦するのが初めてだとおもっが、まあようは慣れるだ。  
全員搭乗！！」

シュミレーターに各々が乗り、起動する。

「では教習を開始する…まずは目標ポイントまであるくだな」

スタートからゴールまで、ただまっすぐあるくだけの事。

旧OSからかわった時にはこけた人もいたらしいが…

「よし、歩く事はできたな…じゃ駆け足」

振動を我慢さえすれば問題なく失敗するはずもない。

「よし、動作教習課程Aはクリアだ。続いてBに行くぞ。これは歩く走る以外に曲がる事になる。歩行と走行はBまでだ。しっかりと覚えておけよ」

教習は、きっかり2時間で終了する。  
基本動作教習課程のC、D行く前に跳ねる、跳躍、飛行、持ち上げる等、  
戦闘行為に関わる事以外をおしこんだ。

「まだ着地、飛行に難ありだが…おいおいだろうつな…  
よしお疲れ、十分休めよ」

「は、はい…」  
グロッキー状態になる207B小隊…  
特に着地が堪えたようで…

「や、やき、たべた」

「いっつっ…のば…いっ」

「はふう〜ねるう〜」

「みなさん起きて下さいほら、鎧衣さんもおきてえ」



ただだけが元気だったようだ。  
さすがに初日に2時間は身体に堪えた様子に見える。

2001年11月12日

翌日同じ時間、シュミレーター室に再び集合する207小隊のみな。

「身体の調子はどうだ？」

「はい、あのあとマッサージや、光線治療つけたので良好です」

「お風呂もよかったですし」

「夜寝る時もしっかりで」

「お薬もらって全快です」

「師匠に……」

「みんな快調だな……」。

さて、今日は基本動作教習課程のC、Dを行う。

Cは射撃、まずは動かない目標に対して射撃をおこなう。

Dは、動いている目標に対しての射撃をおこなう。

では全員搭乗！！」

搭乗し、シュミレーター起動…  
そして網膜投射に映ったのは…ビル街でなく、BETA群だった。

『ひい！！』

『き、きょうかん！！あ、あれは』

『BETAか…』

『な、なにあれ』

『……………』

「普通なら今日も街での教習開始となるが、おれはそんな甘い事はしない。

こわいか？お前らがいつか倒す必要になるものだ。  
さ、動かない状態だ。安心して近寄ってみろ」

各機おそる恐る恐る近寄ってみる。

「どつだ？」

『こいつが人類の敵なんですね』

『気持ち悪い外見』

『慣れない』

『食えるの?』

「食えないぞ…と、たまが近寄ってるのは要撃級だな…

こいつは前腕に固い甲殻を持っていて、それで殴りつけてくる。

それをかわせればどおって事もないんだが、

乱戦時に横から殴りつけられ…になる」

『教官、この小さいのは?』

「その少し小さめのは、もっとも衛士を生きながら食い殺した戦車級だ。

昨日の復習だ、そつと掴んで持ち上げてみる」

『あ、はい…』

「下に大きな口があるだろ?

戦術機にたかると、その歯で装甲を食い破り、中の衛士を生きながら…というわけだ」

『取り付かせないようにすれば…』

「が、実際の編成数にあわせてるがどうだ?」

『……数が多いですね』

「その通り、乱戦時にはもっとも気をつけないと、いつの間にかたかられる」

『教官こいつは？』

「それは…」

……  
CとDを終え…

「どうだ簡単だろ？」

『はい！！これならBETAなどおそれる事ありません！！』

『楽勝です』

『戦場でいきのびれます』

「よし、じゃあ次は襲ってくるから生き延びろ」

『はっ』

いままでただ移動してたBETAがいきなり彼女らに襲いかかってくる。

たかりにたかってたまぎれ、抜刀して抵抗したが…  
たかられ戦死した。

武の乗る機体は見本とばかり、切って生き延び、10分後にエリア外へと離脱し、  
シュミレーターを終了する。

「どうだ？死んだ感想は？」

「おにいい」

「よってたかつてきた」

「あそこまで無力とは」

「何にもできなかったです」

「焼きそばやけ食い」

「ま、シュミレーターで何遍も死ぬ。が実践で死ぬとそれまでだ…  
どうなったら死ぬかをきっちり教えてやる」

「はい」

2001年11月13日

「みんなあゝおはよう」

「いい朝だな、おはよう」

「興奮してて眠い」

「珠瀬、おはよう」「おっはよう」

場所はB55ハンガーの207B小隊用に、わりあてられたハンガーに集合してた。

彼女らの練習機が新造されてくるとの事で、今まさに組み立て中で、仕上がってきてる最中だった。

「あの機体かあ」

「お、みんな揃ってるな」

「はいっ!!」\*5

「しかし、実際に組み立て工程をみるとはなあ……」

「たけるさんもはじめてなんです?」

「ああ」「エッチ…優しくして」

「こら彩峰!…まあ俺も工場自体を見に行った事なかったからな…まさかここが工場みたいなものになるとは思わなかったが…」

コバツタ達が作業し、組み立ててる機体が次々仕上がってくる。

そして…

「僕達の機体…」

「お待たせ。練習機吹雪改、完成したよ。」

「ん？改？」

「うん、仕様変更箇所いくつかあるからね…練習時は普通の吹雪と  
思っ方がいいよ」

「ああ、わかった。ありがとな…ところ」

「御剣訓練生、殿下が呼んでるよ」

「！…！…こちらの基地に？」

「うん私室にいるから、白銀中尉、御剣訓練生をかりてくね。」

「あ、ああ…」

御剣がコバツタに連れられてどっかに行く。

（紫の武御雷は今回は…まあいいか…）

「じゃ、お前ら…今日の午後の実習は応用課程にすすむ。  
早いとこ応用課程も終了し、実機に乗れるようにな」

「はい…！」

……

しばらく見ていると…

「白銀中尉…お話よろしいですか？」

「は、はい…」

（月詠中尉）

「私は、帝国斯衛軍の月詠中尉と申します。  
お初にお目にかかれて光栄に存じあげます」

「国連軍、横浜白凌基地所属、白銀武中尉です」

「護衛担当の冥夜さまの事について、一度ご挨拶にまいりました。  
…何とぞ、生きる為のご指導をよろしく願います」

「わかりました。自分の教えられる事すべて教えるつもりです。」  
「安心下さい」

「よろしく願います」

と本当に挨拶だけでいきそうになる…



「あ、あの…」

「何か？」

「自分のような身元が」

「ああ、異世界からの方でも、冥夜様が信頼したなら問いません。殿下の殿方もそうですし、ここの人達もですから。ですので…何とぞ冥夜様の事をよろしくお願いいたします」

「わかりました…」

……

カオル報告

時間からいうと、

行く前にいわれてた機体納品したみたいだね…

あとは帰ったら紫か…

ナギ小尉「適性検査合格ね」

作者「で、見事に犠牲になったのは鎧衣と…」

ナギ小尉「伝統なの？」

作者「ああ、渚まりも軍曹もなつたし…あとは…」

ナギ小尉「なるほどね。でリアルに聞くけど今何時？」

作者「と…15日の15:47だな…仕事の出かける準備だ」

ナギ小尉「早く準備していつてらっしゃい!!」

作者「あいよ…」

ナギ小尉「作者が遅れそうなのでこの辺で…次回、ガンダム編の続きですお楽しみに…」

さっして私も仕事にいかなきや」

第138話 ガンダム編 ランバ・ラル隊全滅す 投稿日20110624(前)

お待たせしました。

今日より再投稿します。

第138話 ガンダム編 ランバ・ラル隊全滅す 投稿日20110624

宇宙歴0079 11月5日未明  
4日目

先にギャロップに進入し、寝静まっている中、ラン・バルル隊総員40名の血液を採取しに潜入する。

ギャロップに同化し、壁から触手をだす…

チクツ…チュー

一人目採取完了、触手を引っ込め、別の人へ…

を隠密で繰り返して40名分の血液採取完了した。

ギャロップから抜け出し、擬体が収まっているカプセルにそれぞれ血液を投入し、

擬体がそれぞれの個人を形成し始めるのを確認し虚数空間にしまった。

形成する時間の間、まったりと過ごしてた。

しばらく後、ギャロップ艦内では作戦会議が開かれていた。

「ギャロップは木馬の前面に出てギーンのザクと共におとりだ。そこをうしるからキュイで木馬に突っ込む。

ハモンにギャロップの指揮を任せる。

そして私とクランプで第一キュイ、第二キュイの隊長を務める。いいいな？」

各々声を上げ同意する。

「よし、ギャロップ発進。木馬をキャッチしたらザク、キュイはギャロップから離れて展開する」

ホバーが起動し、高速走行にはいる。

前方には深い谷があるが、

外部ジェットの問題なく谷をわたる。

しばらくすると…

「木馬です。推定位置より10キロ移動しているだけです」

「良好です。ザク、キュイ、各隊30秒後にギャロップ発進」

「よしハモン、我々が木馬に取りついたら脱出していいぞ」

「あなたこそ、お気をつけて」

艦橋からラル、クラブが出撃準備の為、下に下りてった。

「ザク、ギーン発進。続いてキュイ」

『ギーン、行きます』

ザクがホバー走行しているギャロップの前部ハッチに足をかける。

背中ブースターを全快にし、跳躍でギャロップの進路から外れた。カオルは、ギーンのザクを追って取り付く。

ホワイトベースからギャロップが確認されたのだろう、砲撃戦が始まった。

ホワイトベースは起動し始め、巨大な船体を浮かび上がらせ、移動しはじめる。

そこに…

「よし…くらえ!!」

脚部ミサイルで攻撃し、命中させた。

機銃が狙っていくのでギーン機はさけると…

「が、ガンダム!」ガンダムがでてきた、ザクマシンガンで射撃し、囷を慣行しようとする。

「おっ…当たらなければ…新人パイロットか?」  
メインモニターにガンダムの挙動がぎこちなく映ってた。

「このガンダム、性能持て余しているみたいだな…よし」

ザクがホワイトベースからガンダムを釣ろうとしてたが、やめて近接射撃戦に移行してく。

「ふはは、今日は運がいい、  
このまま本来のパイロットがのる前に落とせば…」

面白いように命中していく、が…

「流石装甲は硬いな、しかし…これなら」

脚部に装備したミサイルを発射する。

かわしきれずに命中させた。

「ふははは、勝てる、勝てるぞ」

続けて発射したミサイルを命中。

しかし、そこに機銃が…

「うわつと…あっ！ちい逃げやがって…」

ホワイトベースからの機銃を避け、その隙に後退し始めたガンダム。

「逃がさねえぞ、あの不慣れなあいてなら」

と追いかけると…

ビームライフルを構えて待ち構えてるのがみえ、

ビームが…

「くう…」

直撃しなんとか頭部だけですんだ…

「ぐう！！…やられたか…モニターだけで…ん？」

ガチャガチャカチカチガンガン

コントロールレバー、スイッチ等操作していた表情がかなり焦って  
くる。

かなり急激に気温が上がってくるコクピット内部。

(あ…リタイアの原因は脱水症状によるか、蒸し焼きなんだ…)

イマイチ頭部を吹っ飛ばされただけで、死亡した原因がわかってなかった。

「隊長！！ハモン様！！通じてくれ！！  
いやだ、助けてくれえ！！誰かあけてくれえ！！」

コクピット内部は一分たらずに45度以上にあがってくる。

頭部を吹っ飛ばされた際にメイン回路が吹っ飛び、  
マーカーが発信されず、また外部と連絡取れず、  
ハッチ手動でも開けられない状態になっているのだ。

空調はとまり、エンジンの熱気は流入……

あんまりほっておくのも可哀相なので、  
死亡確定のギーンを引き込んだ。

(1番死にたくない死にかただよな……)

いくら死を覚悟した戦士であつても、  
じわじわと苦しみが長続きをする方が耐えられない……

1番身近な想像は、サウナで鍵が締まったままドアノブが壊れ、  
開かず閉じ込められた状態そのものと、思っていただければよいだ  
ろ……

さてカオルは、ホワイトベース後方から近寄ってくるキュイへと接近する。

「木馬が逃げにかかるぞ！！、射撃開始！！」



キュイからホワイトベースに対し射撃が始まる。

「おい、右手の山側だ、高さをおさえろ」

「はっ！！」

キュイが崖をのぼっていく。

高度をおさえ、接近しきって…

「掛かれ」

個人用ジェットをふかし飛び立つ戦士達、

が…最後の一人が飛びたとうとした時、

ビームが直撃し、ランバルルが乗ってたキュイが回転し始め、吹き飛ばされ地面につく前に…引き込んだ。

なんとかキュイを制動しようと操縦士は…

しかし爆発し、巻き込ま…引き込む。

(二つ無駄になったな…)

イスラフェルの能力で分裂させ…

(もう一機のキュイとカプセルを頼むわ)

(あいよ)

と二手にわかれる。

「砲撃の少ないところへ突撃しろ！！」

との声がきこえる。

落下してくるジオン兵を虚数空間にほうり込んだ。

分裂体がすぐさま引き出し、カプセルにいれ作動させる。

また落下してくる連邦少年兵引き込み、の流れをとる。

甲板にて、

(2名か…)

幻影をかけ引き込み、

(作業よろしく)

(あいよ)

分裂体が2名引き出した。

その間に落下した人を虚数空間にほうり込み、

用意してあった擬体に弾痕がついたのを確認し、虚数空間にほうり込んで、

また虚数空間から人をだしカプセルにいれ、

先程の2死体を医療カプセルで蘇生作業にはいる。

(生き返るか不明だな…おかつたよ)

(受け取る)

虚数空間から擬体を出し、元の位置におく。

ブリッジにクランプ隊が突入するのが見えた。

(あっちも大体全滅だよな…忙しい…もう一体分裂するか)

再度分裂し、

(クランプの方よろしく、俺はこのままラル隊についてくわ)

(了解)

分裂したカオルCがブリッジの方へと飛んでいく…

そのまま中に入ったラルについていく。  
途中で回収作業を進めながら行くと…

「急げ、サブブリッジを占領するぞ、おおっ」

フラウと遭遇したラル…フラウの銃をはたき落とし、  
隠れてると告げ、そのままいく。

「あの人レストランに…」

(結構連邦側の死者が多いなあ…)

連邦側は擬体を用意してなかったので、  
回収できないのが多数…

(練度はね…確か最終回でも白兵戦で結局は…だしなあ)

と考えながらランバ・ラルを追跡していく。

「しかし、妙だとは思いませんか？

少年兵ばかりというのは、どうも…」

「どこも人手不足だからな。開くぞ」

開くと同時に発煙筒を投げる。

「敵だ、敵だ」

警告した人は撃たれ…

「まっすぐ行け」

どっどん艦内を制圧していく…

がまた一人また一人とランバ・ラル隊の突撃隊員の数がへってく…

「隊長!!」

「突入！！」

サブブリッジを警備してたホワイトベースクルーは射殺され、  
なんとか占拠できた状態だった。

「わしが入口警戒する、クランプはどうだ？」

「……駄目です応答ありません！！」

「そうか…失敗か…ならばメインブリッジのコントロール回路を切るんだぞ」

その時ドアがあき、アルテシアさんが…

「あっ…」

「あっ、ひ、姫、ひ、姫様か？」

問い掛けに反応するセイラさん。

「…間違いない、アルテシア様に違いないな。

私をお忘れか？あなたの父上ジオン・ダイクン様に御仕えした、  
ジンバ・ラルの息子ランバ・ラルですぞ」

「アルテシアと知ってなぜ銃を向けるか」

「はっ、やはり。で、ではなぜ？」

「セイラ、退け。うおーっ」

リュウが乱射しながら突っ込んでくる。

「不覚」

不意をつかれ、銃弾があたり反撃、リュウに命中させる。

「リュウ！…ランバ・ラル、退きなさい」

「ひ、姫様…」更に銃撃を受け、ドアをロックし…

「…ハモンと連絡は？」

「はっ、周波数は合わせました」

「お前達は退け。作戦は失敗だ」

『あなた』

「ハモン、すまぬ。木馬をギャロップで撃破してくれ。

ランバ・ラル、戦いの中で戦いを忘れた…アルテイシア様が」  
『どうなさったのです？』

外部からの攻撃により吹っ飛ばされる。

幻影をかけジオン兵を回収…

「……またモビルスーツのガンダムが。

…わしの戦っていた相手が皆、年端のいかぬ少年達とは皮肉なもんだ…」

再配置…

ガンダムに傷ついた身体で近寄るラン・バラル。

（そろそろだ…）

（虚数空間にあるよ準備k）

（やる事なし。回収済み。艦内で好みそつなの探してる）

ドアロックを外してブリッジ内に侵入してくるブライト達…

「君達は立派に戦ってきた。」

だが、兵士の定命がどういふものかよく見ておくんだな」

手榴弾のピンを口でとり外に駆け出し飛び降りる。

「うおーっ」

幻影かけながら、気絶させ手の手榴弾を抜き取る。

ランバ・ラルを虚数空間にいれ入れ代わりに擬体を出し、手にもたせそのまま飛び降りさせ…

ガンダムの手が擬体に届き、

手榴弾が炸裂しばらばらに四肢が吹っ飛び、

原形をとどめなくなる。

カオルは離脱し…

（お疲れ）

（うんじゃ合体）

ぐにやりと一体にまとまる。

思考が統合する。

（いつつ……お、追加の連邦兵でいいのいるか…）

「世界扉」

精神力回復の為、一回休憩をとりに向かう。

翌日…

ルーロス改でホワイトベース上空に待機し、引き込んだ後、

カオルは、砂嵐の中警戒任務中のガンキャノン、ガンタンク上空にいて、

接近してくる夕子機を発見していた。

（たしか、サムソン、サムソン、取り付いたガンダムに切り掛かるザクに、

マゼラ、ハモンさん、マゼラだよな？…

うん間違いない…まずはどっちのサムソンかか…）  
分裂し、接近してくるサムソンに取り付きに向かう。

ザクが右手後方からマゼラントップ砲で攻撃してきた。

ガンキャノンが接近し攻撃をしかけるが…  
避けられ、追って崖上にでる。

すると…カオルが取り付いたサムソンが…

「うらあああ」

「赤い奴だ！シャアじゃないぞ！」

機銃を食らわせていた。

「掻き回せ！！ハモン様を援護するのだ！」

サムソン内部には7名の兵士がつめていた。

ガンタンクは援護にできるも、不調を起こし、キャタピラが動作不良をおこし、  
動けなくなっていた。

ザクが再びホワイトベースに攻撃をしかける。

「ハモン様が、発見されたもようです」

やっと浮上してくホワイトベース…がエンジン不調で中々浮かびきれない…

「あの赤い奴落とせるぞ！」

「上空より鉄機！！！」

（こつちが先か？）

「かわせえ！！！」

「だ、だめで」

銃撃くらい、サムソンの人員を引き込み、離脱し直後に爆発する。

（そつちが後だねよろしく）



ガンダムが空中ドッキングしている。

(攻撃していい? いいよね?)

誰も合体中のガンダムに攻撃してこない。

合体し終わり、ガンダムが起動し、直後にサムソンをビームライフルで貫いた。

ガンダムがガーゴの爆薬に気づき、特攻してくるカーゴを支えはじめた。

『タチ、ガンダムを後ろから倒しておしまい』

「はっハモン様!!」

ガンダムにむかって切り掛かる。

胴体に一撃、

「むう…ザクなら真っ二つなのに…流石ガンダぐう！」

肘鉄を一発くらい衝撃がくる。

更にもう一撃…

コクピットの装甲が歪んできた。

「ぐう…さすが、だがこの一撃で…! な、なに…!」

持ち上げられて…マゼラトップの主砲の盾に…  
引き込こみ離脱する。

(こっちも引き込んだ)

マゼラトップには分裂体を取り付いてた。

(じゃ、リュウよろしく)

(ああ、丁度ガンタンクでなにかし始めたからチャンスだな)

(こっちはっと…)

接近してくるマゼラトップに取り付く。

「ガ、ガンダム、二人のパイロットを同時に討ち取るとは。さすが、私の見込んだ坊やだけのことはある。しかし」

カーゴに取り付いているガンダムの背後に、  
VOTLで0距離砲撃しようと…

「いくら装甲の厚いガンダムといっても、これだけ近ければ持ちはすまい。そしてガンダムとカーゴの爆発力は木馬をも」  
動けない、援護もこない状態の無抵抗なガンダムに対して…

「ほんと、好きだったよ、坊や」

主砲が放たれ一発でシールドを破壊、  
もう一発でランドセルを破壊し中の火花を放つ機械が見える。

「これでおしまい、…」

横からリュウの乗ったコアファイターが突っ込んできた。

面先がマゼラトップの装甲に突き刺さり、

ハモンさんの身体にせまって…引き込んだ。

(こっちも救助完了)

離脱すると背後でジェット燃料に引火し大爆発がおき、

炎を上げながら地面に崩れおちる両機がみえた。

最後にガンダムに撃ち抜かれるマゼラアタックのコクピットから、  
虚数空間に引き込む…

（リュウ瀕死だから早くいれなければな…）

（ああ）

医療カプセルをだし、リュウを引き出し…  
気絶しているようだった。

（痛みに耐え切れず？）

（だな…このステータスみてみなよ）

（うへ、良く操縦できたなあ…）

カプセルを作動させ引き込んだ。

分裂体と統合し…

「世界扉」

世界を渡る

…

カオル報告

ランバ・ラル隊全員だよな？

作者「大変お待たせしました」

ナギ少尉「まったく…何やってたの？」

作者「えっと、キャリストというコロプラ社のゲームに嵌まって、ランキング目指そうとしたのが間違いだっただよ…」

ナギ少尉「そのキャリストって？」

作者「……ようはネットゲー」

ナギ少尉「わかんないわよ…どういったのが出てくるの？」

作者「たとえば…」

イフリータ「ふん!!べ、別に作者の為にきたんじゃないからね!  
」!

リュカオン「くきゅ?」

ナギ少尉「？妖精さんと…か、かわいいモフモフ〜きゃ〜」

リュカオンに抱き着くナギ少尉…

作者「あゝそいつ狼男なんだけど…まあいいか…」

ナギ少尉が堕ちた模様…

イフリータ「で、作者、近況説明しなさいよ」

作者「まあこいつらに嵌まってて執筆がすみませんでした…一日18時間ランキング維持の為に…

次回イベントはダメーzitoppだけで、ランキングは放棄します」

イフリータ「ナギ少尉がまだ復帰してないわ、作者後書きの続きしなさい」

作者「まあ今回は散々指摘受けてた分裂が初活躍しました。後はそうですね…久々の生贄ゲットですか」

イフリータ「作者、なんか物騒な単語がでたわね…  
まあいいわ。あとこのわたしも後書きに出てきてあげるから感謝しなさい」

作者「あ、デレ子、ゴメン…今回だけ」

イフリータ「そうなの？……まあいいわじゃあね…行くわよリュカオン」

リュカオン「くきゅ」

ナギ少尉「ああんまって、もっともふもふを」

作者「え〜ナギ少尉も崩壊したようで…さて次回は元の世界に、また大量の人数を引き連れて帰ってきます。  
鋭意執筆中です、お楽しみにい」

第139話 砂漠より帰還 投稿日20110626

2001年11月13日夜(5日目)

「んゝただいまっ」と

「マスターお帰りなさい〜」

「なにかかわった事は？」

「至って平和といたいけど…ついさっき、マレー戦線が危ない兆候だったから、

ビッグトレー第一砲艦隊、第一ミサイル艦隊、

61式改200両と簡易水素燃料工場を乗せた、

トレインギャロップを派遣したよ。

だから重慶に砲艦隊が間に合わないから、急いでマスターの調整してね」

一個艦隊は20隻で組んでいる為、  
防衛艦隊以外の全砲撃艦隊だった。

「わかった…ミサイル型のほうは…ベトナム沖で？」

「そこから双方の戦場に狙うからね〜」

「ベトナムのところのハイブも攻略したいな」

「二兎追うものは一兎えずだよ」

「か…まあわかった…早いところ作ってくれ、調整したいからな」

「了解、マスター」

「けどまあ…俺がいなくなっても、もう立ち回りでできるわなあ…」

「え…マスターおいてかないで！」

「責任とってよ」

「あ…うそっそ、ま、もう少し期間あけても大丈夫かな？と思っただけ」

「うん…そうだった意味では…」

ここまで軍備揃ってるならそうそっすんな事じゃ…」

あと、佐渡島でないかぎりは、最悪サイクロプス暴走での手段も」

「おいおい…ひょっとして…」



「鉄原基地にはあるよ」  
「まだ帰還もはじまってないからね」

思わず進行してきたBETAに対して、鉄原基地が巻き込んで大爆発を想像してしまう。

「人が戻ってきたら絶対防衛線基地になるんだから…」

「その前に一回大爆発」

「……駄目だ」

「うっわかった外す指示する」

「そんなに爆発させたいんか？」

「うん」

「月面のハイブで我慢しろ…な…」

「わかったあ」

「他にはないな？」

「うんないよ、マスター」

「じゃおやすみ」

2001年11月14日未明

基地内殿下私室

「カオル様」

「ん？なんだ夕陽」

「冥夜の紫の機体なにを考えてます？」

「正直、何にしようか考え中なんだよな…」

「冥夜が生き延びる為の機体お願いしますね」

「ああ、近接格闘に長け、厚い装甲だな…」

「うふふ……あら？いただ……」

布団の中に再び潜る殿下。

……

朝方

「アムロさん、おはようっ」

「カオル君、なんだい？ここにきて貰いたいようって……」

「まま、……ね」

とシエルターをだし始める。

「数が多いな……かなりの人数連れて来たんだな」

「そつつすね……ん……百何人だろ？」

「おいおい、君は自分が連れて来た人数、はつきりわからないのか？」

「いや、爆発からの救出は忙しかったので…とさて…」  
スピーカー接続をして出てきて貰うように促した。

シエルターの扉から続々と人が出てくる…

「ジオン軍が多いな…あれ？あいつは…」

「ええ、元同僚っすよね」

「懐かしいな〜!!え?…まさか…」

「覚えてますか?ランバ・ラルさんを…」

「ああ、忘れるわけないよ…あ…ハモンさん…」

「じゃ、いきますか…ランバ・ラルさん始めまして」

アムロ大佐をともない、声をかけにいった。

「君は…映像に出ていた…」

「はい、異世界軍責任者の渚カオル大将です」

「ジオン公国軍、ランバ・ラル大尉であります」

「で加入の意思を問いますが…いかがでしょうか？」

「ハモンの生活が楽になるなら、わしは構いません」

「あなた…わたしはあなたについてきますわ」

ランバ・ラル隊今いる人員は、総員隊長についてくとの事で、22名の加入が決定した。

「ねえ、あなた…」

「うむ…なあ…その隣の青年、尋ねるが、アムロ・レイという少年の身内かなにかかね？  
非常ににってるんだが」

「自分ですよ…ラルさん、ハモンさん」

「ほう…これは面白い事だ、立派になったものだ…なあハモン」

「ええ、見違えたわね。坊や…いえ、アムロ君」

「アムロ君はやめて下さいよ…。」

「ふふ…じゃあアムロでいいわね？」

「はい、ハモンさん」

「わしらが死んでからどういった人生を過ごしたか、語って貰おうじゃないか、酒場はあるか？酒場は」

「この区間に作ってますよ。勿論タダ酒です」

「おお、さあ飲むぞ〜」

騒がしくでていった。

（次のグループは…と）

ホワイトベースクルーが隅で固まっていた。

無理もなからう、周りはジオン公国の兵士ばかりの環境だからだ…  
しかも、白兵戦で命を落とす事となった少年達…

ホワイトベースという殻に護られてたのが、  
生身で戦闘を行う事となったのだ。

その命のやり取りの実感は拭えないだろう。

「始めまして」

「あ、この度は命を救っていただき感謝しております!！」

「まあ、人材を探しに救ったんだけどね……」

さて、加入の意思を問いますがどうですか？」

「ジオンとはやり取りしないのでしたら……」

「ぼくも……」「じぶんも……」

と、3名の初々しいばかりの少年兵達が加入してきた。

宿舎に案内するようにして、配属先はC-01になるようにした。

あとは、鉱山基地から救出した沢山のジオン軍兵士達がいた。

(ん〜自重しなかったなあ……)

とりあえず兵種事に別れてもらった……

戦車兵… 11名

通信兵… 4名

歩兵… 12名

騎兵… 3名

航空兵… 3名

輸送兵… 5名

衛生科：2名

経理科：2名

軍楽科：61名

となった。

加入の意思は全員一歩前に出てくれたので無事にすみ、

歩兵と通信兵、輸送兵と経理科と衛生科：一人は歯科医師、もう一人は薬剤師：は、それぞれの部署に…

騎兵の方は、航空兵と一緒にメデューシン級新造艦へ…

コバツタ達が割り振っていつてもらった。

問題は加入は示したものの、  
愛用の楽器と別れる事となった軍楽隊の皆さんだった…

(どんよりしてる…)

「愛用の楽器ですか…」

「そうですね、それぞれ思い入れがありますから…」

(ん…あっ!…!)



「記憶を見せてもらってもよろしいです?」

「あ、はい…」

記憶を見せてもらった。

(ドラム・アンド・ビューグル・コー編成なんだ)

「ん〜……同化」

手短の材料を変換しはじめる。

(難しいなあ…よっと)

フロントコーホニウムがではじめる。

「多分再現できたとおもいますが…」

手にとり、マウスピースの感覚を確かめ、恐る恐るふきはじめる。

一曲ふきおわると…

「ま、まさに自分のです!」

「私にも作って下さい」

「よっし!!第101軍楽隊の再結成だ!」

「ジーク・ジオン!」

となつて、それぞれの愛用のを再現していく…

再現しおわると喜んで地上エリアで練習するって事で、移動してつた。

楽器のオイル等は、コバツタ達が製造して渡したのも付け加えておく。

（さて、一通りおわったか…）

医療カプセルにはいつているの人員総数30人を医療室に運び終わると、

ハンガーデスクで鯖に取得した技術を入れてた…

（目新しいのはエアカーかな？）

モニターに出した。

ホワイトベースに搭載されていた、

オフロードタイプのバギータイプのエアカーだ。

通常時はタイヤで、

高速移動をとまなう非常時にエアカーとして変形する。  
というしるもろだった。

（もとの世界にあったエアカーとどっちがいいかな〜）

元の世界にエアカーはない！！と突っ込んできたあなた、  
実はありました。エアカーの定義は、空気のもつて推進する車  
の事。

燃料にガソリンの代わりに圧縮空気をいれ、

圧縮空気のもつて走行する車両があるのです。

まあ空気のもつて浮上して…ではないですけどね。

インドのタタ社、ワンキヤット…

タンクに満載にした圧縮空気のもつて4時間走行、

馬力は15馬力と非力ながら、

カーボンファイバー製のボディで、

時速100km、ガソリンとのハイブリットなら、  
リッター50kmで800km走行可能という…  
日本円で56万円で販売予定との事です。  
タタ社といえば28万円で販売も話題になりましたね…

で、実際に空気の中で浮いて走行するは、実験車ではありましたが…  
制動に問題ありのため、開発頓挫、量産化にはいたりませんでした。  
何しろ曲がれずに湖に侵入したり、壁に突き刺さったり…  
またタイヤがないと実験させないと横槍もあつたそうです。

(あとはリニアカーは…設備の方が問題だな…ホワイトベースは…  
作れないな…)リニアカーはそこまで設備作らないとの事で却下、  
ホワイトベースはミノフスキークラフトシステム、  
つまりレーダー障害散布ありきの為、  
対人戦でないこの世界では…  
(人類の手段のミサイルやレーダー障害しちゃうしな〜  
レーダー障害ならともかくね)

なので製作はされなそうであつた。

ガンダムやガンキャノン、ガンタンクは…

(…コアブロックがな…)

一応制空権がまだBETA側にあるのに、  
小型飛行機がコクピットなのは…であつた為お流れに…

(まあ、量産型に転用っう事か)

なので、試作品としてエアカーを作製してみる事となる。

(ん…まあこんなもんか…)  
試作品が出来上がったあたりで、

「マスター、頼まれてたの」

「おう、サンキュー」

(さて、お返しもったしもってく再生分もわすれてないよな?)

「世界扉」

「平和日本」

まずはホワイトデーのを妹の部屋においてきた。

で、いつもの廃品回収と、食料、医薬品等と交換に再生資材をおいでくる。

集積所では、

(レイバー?)

らしいのが作業していた…

見てみると稚拙さがまだあるが…

物資を交換して、帰還した。

「ハンガーデスク」

「あ、カオル」

「ん？どうした？」

「あいつらの報告だけだよ」

「ああ、……へえもう実機にあがったのか」

「かなり腕は上がってる実感はするな。で、何処にいったんだ？」

「ガンダムについてランバ・ラル隊のスカウトな」

「ランバ・ラルさん？……まさか本物に出会えるとはなあ……  
なあカオル今度……」

「だーめ。ストーリーの世界は、介入してストーリーが変わったら  
どうすんだよ」

「……そうなのか？」

「だよ。こつちで作るならともかく、実際に生きてる世界に行くんだよ。」

介入は死が確定した人のみ…これは曲げられないんだよ。介入した結果、余計なフラグたって、処理しなきゃいけない結果もあつたんだしさ…」

「難しいねえ…」

「ま、だから実質的に武がいけるのは、俺の元な世界だけだね。あとはルーロスで見学のみ…わかった？」

「ああ……ところでそのバギーは？」

「ああ、エアカーだよ」

「…!!乗らしてくれ!!」

「ん?いいけど運転できた？」

「できるにきまつてるだろ」

「じゃ、こころ」

「おう、サンキューな」

いそいそのりこ…とまった。

「な、なあカオル…これ…」

「ああ、マニュアル車だよ」

「……駄目だ運転できねえわ改造できない？」

「ん…？……わかったちつとまってな」

同化し、ミッション部分を改造した。

「これで大丈夫、エアシフトはこいつだからね」

「サンキュー」

喜んで試乗していった…

……

カオル報告





ナギ少尉「マーチングバンドか？」

作者「ああ、バトン隊はいないけどな」

ナギ少尉「キシリアさんを出迎える設定で、あの基地にいた…って事でいいのね？」

作者「ああ。そうだよ」

ナギ少尉「ところでコックさんは？」

作者「大和君か…爆発に巻き込まれて…未救出」

ナギ少尉「そう、残念…あ、マレー半島ね次は」

作者「まあ…そうなるな…」

ナギ少尉「ところで弾級はいつからBETA側に参加してくるの？」

作者「……………」

ナギ少尉「ねえ作者」

作者「ま、まあ次回って事で……」

ナギ少尉「次回、マレー半島戦線壊滅？お楽しみにい」

第140話 インドシナ戦線壊滅？ 投稿日20110628

2001年11月14日深夜

インドシナ戦線

「HQ、HQ応答してくれ！！」

『こちら、ティーガ03、BETAに阻まれ動きがとれない、指示を！！』

『HQ、HQ！！』

「くそっ！！駄目か…HQが落ちた！退路も絶たれた……覚悟を決めるよ」

『はは、まさかこんな事になるとはね』

『ママ、ごめんなさい…先立つ不幸をお許し下さい』

『くそ、何なんだよ、何発くれば気が済むんだよ、あれはよ』

そう、今までにない新型BETA、弾級が現れた為、戦況が一変してしまったのだ…

インドシナ戦線、  
マレー半島の立地を利用した人類の重要抵抗戦線であった。  
マレー半島の最短部であるクラ地峡に運河が建設され、  
運河を利用した防衛戦線である。

BETAは水に潜る前に何故か立ち止まる、  
それを利用した、60kmという距離を利用した、  
火力集中型の防衛戦線である。

インドシナ戦線の後ろには今や人類にとってなくてはならない、  
マレーシアや始まる東南アジアの諸島国、ミクロネシア、オース  
トラリアに対しての、  
防衛戦線となっている。

運河の人類側に防衛火力砲台陣地、戦術機基地、  
その後方に司令部、補給基地などが集中している。

人類の反抗の砦として、支えていた…が…

〜ある女性オペレーター〜

ハアハアハアハア  
息荒く、土埃まみれの女性制服兵がいた。  
ドドーン

なにかが爆発したのだらう、振動が土および音の衝撃波で伝わって  
くる。

ギチギチギチギチ

「ひっ！！」

ギチギチギチギチ

「ひっ！！」

近くで異様な音がする…

（回想）

彼女は本来司令部につめていた管制オペコであった。

「弾級です。102対空ミサイル部隊迎撃入ります」

「対空ミサイルの残弾は？」

「約10%残り100発です…」

「くっ…間に合わないぞ…大本営に至急補給要請をだしてくれ」

「了解しました…が量産体制が…」

「なけなしのミサイル集めても…足りないか…」

人類は空に対する備えを忘れた…

まさにその通りだったとしかいいようもない。

BETAは地をはって、地を潜って物量にまかせて侵攻してくる。

だから人類は負けていた、

けどここでは、一方方向から、火力が集中できる等、地の利でなんとか押さえ込む事ができてた。

だが今度は空をBETAが支配し、侵攻してきたのだ。

人類の対抗手段としては、地から空への攻撃、対空ミサイル、対空砲等しかない。

切りにいけないのだ。

空を飛んで切りにいくと光線級の餌食となる…

そして、対空ミサイルは生産中止してた…

そのラインを再稼動するのにどれ程時間がかかるだろうか…

上がるミサイルは最初はホークミサイルがあがってたが、

すぐに旧ベトナムのからのS-75、S-125等、

大量保有してた対空ミサイルが打ち上げられていた。

だが、とうとう崩壊の予兆がきてしまった。

「対空ミサイル残弾ゼロです!!」

「対空砲火、火線絶やすな!

後方陣地に着弾すると補給できなくなるぞ!」

「は、はい!!」

しかし…

「駄目です！数が多過ぎます！着弾します！」

着弾の衝撃で司令部内に振動が走り女性制服組の悲鳴が上がる。

「着弾した弾級の迎撃に向かわせろ！被害を増やすな！」

「はっはい、フォト中隊、マリーシア中隊は大至急迎撃に向かって下さい」

了解が入り迎撃にでる基地防衛部隊。

しかし、次々と打ち込まれる弾級に防衛網は…

「高射砲車両群…全滅…」

「くっ…」

その時、建物自体に衝撃がはしる。

悲鳴があがる。

「諸君、現司令部は放棄、105補給基地へ移動する！いそべ」  
天井から崩れてきた部材に頭が潰されてた…

ますます振動が酷くなり、とうとう壁が崩れ落ちると…

「キヤー！！！」

「B、BETA！！！」

壁を突き破ってきたのは、全長12mの弾級であった。

勇猛に小銃で突撃する男性オペレーター、

しかし、小銃の弾では甲羅は貫通せず、

口わきから伸びている触手が巻き付き…

「は、はなせはなせ！！はなせはな…」

ミチャミチャ…

男性オペレーターは血が滴り落ちる下半身だけの存在になってしまった…

既に殆どの人が退出した司令部の建物を中から突き破って…  
しばらくすると崩れ落ちる司令部建屋。

外は阿鼻叫喚の世界となっていた。

弾級が30体以上活躍し、

車両は潰され、オペレーター達は徒歩で逃げ惑うしかなかった…

救援にかけつけ、対戦車ミサイルを射出する改造装甲輸送車、  
甲羅を貫通し、一匹を絶命させ、そのミサイルの照準を別のに向けて  
射出するがそこまでだった…

弾級が上空から飛来着弾し、改造装甲輸送車は爆発する。

直接高火力を持たない別の装甲輸送車には屋根の上にも人をのせ、  
離脱しようとしてたが、弾級に乗っかられ…車体ごと捕縛されていた。

彼女は、足をくじいてしまった為、走れずに廃墟となる建物沿いに  
隠れながら移動していた…

それが命を長引かせたかもしれない。

同僚がまた一人また一人捕捉され、触手に捕まり、



助けてといいなながら絶命していくのが聞こえる…  
恐怖とともになんとしても生き延びねばと…  
汚れるのも気にせずに見つからないよう心がけた。

しかし…

ギチギチギチギチ

「ひっ！！」

近くで異様な音がする…

息を潜め、身を隠し…

(早くいって！！)

と念じたが…

ニヨキ

と、目？を伴う触手が伸びてきた。

それに見つからないように更に身を伏せる。

もう顔はあげられない…

静かに呼吸をし、音をたてずにじっとふせる。

心臓の音が脳に響く…

(静まって！静まって！！心臓！！)

……

どの位たつたろう??

まだ爆発音がする…

(いつまでもここにいたら危ない…10分位たつたよね?)

恐る恐る顔をあげると……

目の前は何もない…

ホツとし、早く司令部跡地をはなれようと、

ガラッ

足から瓦礫が崩れた瞬間、

シュ

「ぎゃあああ  
」

触手に巻き付かれ、

「いつ、離して離して!!いたい!!」  
ががつと引きずられ、地面にあたったところから血がでる。

そのまま弾級の顔面に持ってかれ、

大きな口がくちをひらく…

「ひっ!!」

彼女の脳裡にいきながら咀嚼される光景が浮かぶ…  
彼女が自由な手で触手を叩くがびくともしない。

が、固い物が手にあたる。腰のポシェット内だ。

彼女の右手はポシェットを急いであけ…中身を取り出した。左手でピンを外す。

「これでも喰らって!!」

彼女の手から投げた手榴弾は弾級の口に…入って、

ドウウ!!

弾級の口内で爆発する手榴弾、しかし近かった。爆炎は彼女に…

…

2001年11月15日未明

次々飛来してくる弾級…

また周りはBETAに囲まれて弾幕をはり、  
かろうじて生き延びている部隊がいた。

「きやがった!!」

『くそつ、あれを撃ち落とさないと!!』

彼らの部隊に向かって飛来してくる弾級…

着弾計算結果が瞬時にでる…5時間程の戦闘で得られたものである。

「残弾撃ち込むぞ!!」

『落ちろ落ちろ!!』

『残弾0!!』

『こつちもです!!』

「くっ！」

円の内側の対空攻撃担当していた機体からの報告があがる。  
その時…

『レーダー反応あり!!こ、これって…』

レーダーに出撃したアンノンの数々その数千以上…

「高度がある!!…ミサイルだ!!」

『馬鹿な…この数全てがミサイル?』

レーダーに映ったミサイルは頭上を通り越して飛来中の弾級、に突き刺さり爆発、  
遅れて光線級のレーザーが上がり、迎撃されてくが、  
かなりの数がBETA群に着弾した模様だった。

『シエラ06』

「ああ…」

またもやレーダーに感…同じ位の量のミサイルが降り注ぐ模様だ。

「光線級のレーザーがミサイルにくぎ付けになる、その瞬間後退するぞ！」

二巡目のミサイルが、降り注ぎ、  
幾多もの光が打ち上がる。

「今だ！！！」

跳躍し離脱をはかる僚機達、しかし…

『シエラ06！！』

「へっ、跳躍装置損傷つけてよ……てめえら生き延びろよ！！！」

『シエラ06！！』

「いけ！！！」

程なく彼の機体はBETAの海の中にきえいった…

……

105補給基地を護っている部隊がいる…

海岸沿いだ、もちろん撤退できない。

かれらの後方にはまだ避難できてない民間人もいるのだ。

覚悟を決める整備兵、基地要員達…

そんな中、突如として前線方面に大爆発がおきる。

「どつした？」

『砲撃です！砲撃！！大量の砲撃です！！』

「ばかな…我が軍の艦船のは間に合わないのに…」

『大量にBETAが消滅していきます！！』

光線級のレーザーが上がる線量以上に物量にまかせた砲撃がBETAに加えられる。

次々とBETAを示す赤点が減っていく…

『とにかく援軍がどっかからきたんだ！！踏ん張れ！！』

『派遣隊旗艦トレインギャロップ』

「遅れた分砲撃支援絶やすな！最大戦速」

「出てます!!」

「あと上陸予定地点までは？」

「5kmです!!」

「ハッチ開け!、上陸と同時に射出、援護体制をとる」

「105補給基地」

砲撃が加わり、侵攻していたBETAが次々と消滅してき、  
今相対しているところだけ支えれば…

が、限界をとくに超えてた。

弾はなく、近接格闘に長けてる帝国軍ではないが為、  
友軍マークが一つ一つ消えていく……

そんななか…

「あ、あれはなんだ?海上方向!」

海上から数珠繋ぎ状の物体がみえてくる。

海の上を爆走し、そのまま基地横の砂浜海岸に乗り上げると…

見たこともない戦車を吐き出してきた。

『こちら異世界軍派遣隊、救援しにきた!!』

補給物資たんまりあるぞ!』

上半身裸の兵士がM61らしきガトリングを持っておりて展開して

く…

「た、助かったのか？」

『み、みたいだな…』

救援感謝する。が徐々にだが無線上でながれはじめた。

『とにかく補給物資あるなら補給してもらわんと』

「ああ…」

ポロポロの機体を数珠繋ぎの船らしきのに、  
補給受けに向かった。

「横浜基地情報室」

「なんとか間に合った状態だったのか…？」

「だね」

「……正直遅れてたらやばかったな……」

「特に後方を掻き回す弾級が1番痛いね。撃ち込まれたら…だし」

現地からのリアルタイム状況があがってくる。

既に、砲撃開始時の大東亜連合軍の損失率は甚大なものになってい



た。

救援活動終了後：

残存有効兵力8%の壊滅状態に陥っていた。  
死者は5万人を超えていて、内後方支援担当が約35千人、  
衛士の戦死者が800人を超えていた。

「大東亜連合から、戦力を回すから、  
それまで駐留してほしいって要請きたね」

「まあ…だろうな…今大隊規模でも支えるの地獄だろうし…」

「増援おくるよ〜あと61式戦車改を、500両無料納品しておく  
ね」

「ああ。あ、そうそう…あと他には戦線いくつあったっけ？」

「ソ連、スエズ運河戦線、あとドーバー海峡、ジブラルタル海峡、  
樺太も危険だね。」

「他は距離的に間引き作戦をしないかぎりは大丈夫かと。  
侵攻時には完全に上がらないと駄目だから」

「ビッグトレーミサイル型を各戦線に、  
対空ミサイルに詰め替えて、海上から支援しとかないとやばいか…」

「ここまで生産が落ち込んでたのを、見落としてたからね」

人類は長いBETA戦で、使う必要のなくなりつつあった対空ミサイルの生産を打ち切り、より地上攻撃へシフトしていった結果がでてしまった…との事だった。

また対空ミサイル自体の生産コスト、材料も馬鹿にならないものがある。

まだ対小型BETA攻撃に地上攻撃へシフトした対空車両を、再び対空攻撃に転じた方が早いというものだった…

「とりあえずマレー戦線に派遣した、第一ミサイル艦隊から各戦線に抽出してくれ。補充分はこっちで生産した方がはやいからな」

「了解、マスター」

……

カオル報告

インドシナ戦線に派遣隊を貼付けるようになりました。

用心の為に各戦線に対空ミサイル装備のビッグトレーを手配する事に…



ナギ少尉「うん」

作者「で今回は師団規模総数15000、弾級は兵士級、戦車級、闘士級から10%をもらった編成なんだよな」

ナギ少尉「ねえ作者それでいくの？」

作者「あ号に聞かなきゃな〜あ号どうなんだい？」

あ号「……その……通り……に指示……した」

作者「サンキュー……というわけだ」

ナギ少尉「これ以上BETAの強化はまずくない？早くあ号を……との意見あるけど」

作者「現状あと考えられるのは、物量的砲弾に対しての対策とるかなあ……なんだけど、まず考えても有効にはならないね……考えてもいたんだけどね」

ナギ少尉「作者……」

作者「通称盾級…要塞級の改悪型で、ボデイの上に巨大な傘状の盾をつけてんの。圧倒的砲弾で1分は耐えられるかな…」

その間にしたを中型BETA達が通りぬけるんだよ。ただしおもすぎで時速10km、ウホツいい的。あとは…ミサイルに対抗する型もまたでそうかもね…」

ナギ少尉「人類はどうなるのよ!!」

作者「ま、まあこの次のBETAの改良型が出た時が勝負？カオルはとりあえずの対策をとったから安心して、スパン通りだと2002年1月下旬占拠目指しているみたいだし」

ナギ少尉「本当にハッピーエンドいくのかしら??…さて次回はあ、またいくの?」

頷く作者

ナギ少尉「次回、SEED編にまたいきます。サブタイトルは不明…とうとうあの人達が!!おたのしみにい」

2001年11月16日

前日よる遅くまで各戦線への対弾級に関する、  
対策の打ち合わせを行って眠かった。

(ふわあ〜)

「あがつ」

「>>>>>>」

「じじ」

「大きなあくびが悪いんだぞ〜」

「たく、この…」

屡伊の口を口で塞ぐ…

「……ごちそうさま、ねえカオル、またいくの？」

「ああ、またいつてくるよ」

「気をつけてね」

「ん…ありがとう」

再び口を塞いでわかれハンガーに向かう。

「おはよう…じゃ、いつてくるから打ち合わせ通りよろしくな」

「マスターいつてらっしゃい〜」

打ち合わせでは、各戦線に、  
ビッグトレーミサイル型を対空装備で2隻、  
ビッグトレー砲艦型を2隻、  
増産中のトレインギャロップ、1号車カーゴにチューリップを内蔵し、派遣。

これで弾級を含んだBETA侵攻に耐えられるように…

また、トレインギャロップの護衛に、

陸戦強襲型ガンタンク30機、

T-850を100人つける事が決定していた。

トレインギャロップが間に合わない場合はガルダによる空挺…  
がなるだけはそれはしたくない考えだった。

これで行っている間、増援待ちで持つだろう…の打ち合わせの結果  
だった。



C・E 0071 9月23日

一日目

カオルはルーロスからでて虚数空間へとしまうと、ボアズへとりついていた。

宇宙要塞ボアズ、元は資源採掘用小惑星、新星だったが、ザフトに接收されL5に改造しながら改装され、プラント本国を護るの防衛ラインの要となっている。

カオルは取り付いてボアズの取得を勤しんだ。  
もうまもなくボアズは……

ボアズに侵攻してくる地球連合軍第7、第8艦隊が感知され基地内  
部は慌ただしくなってきた。

ボアズ駐留MS部隊がスクランブル発進、

MS搭載母艦も順次出港し、陣形を整えようとして……

スクランブル発進したMSとの戦端がひらかれた。

『作戦コード、レツジオックワン。』

展開フォーメーションはシシリアン3。以後、指示はゴーマンガスト暗号によって伝達される。

全機、ナチユラル共の細胞を真空にぶちまけてやれ』

（ボアズ司令部）

「敵艦、左翼に展開」

「ムーア隊、チェリー二大尉より支援要請」

「砲火を左翼に展開させい！

支援にはネール隊を！中央はどうなっているか！」

「アイザー隊が防衛しております」

「ネール隊、発進は五番ゲート」

「ふ、このボアズ、抜けるものなら抜いてみる！思い上がったナチユラル共め！」

ボアズ守備隊司令官殿は護りきる自信にあふれている。

ホアズの戦力は、駐留MS100機の他に、  
各独立戦隊所属のMS合計300機の戦力及び、戦艦火力等  
に対する地球連合第6第7艦隊は、  
MS400機確認できていた。

数の上では地球連合に分があるが、練度ともに自信があるのだろう。

「インディゴ13、マーク66、ブラボーに新たな機影」

「モビルスーツです。数3、クルーゼ隊より報告があった例の三機です」

「その後方、アークエンジェル級1、アガムノン級4、距離500」

「あらたな数、総数200機、機種確定メビウス、アガムノン級より発艦」

「今更メビウスだと？……多分、わがボアズの防衛施設破壊ようだな…」

対空火線たやすなよ…  
回せる隊はないか？」

「ジャン隊、イスラ隊が回ります」

「よし、回せ！！」

ここでボアズの命運が絶たれてしまった…  
核搭載と予想してればだったろう…

「敵メビウス対要塞ミサイル射出その数180程」

「全部は無理か…着弾予測地域特定、ダメージコントロール班の準備を急げ！！」

カオルは命中する直前から次々とつばをつけてた人を引き込んだ。

ボアズに吸い込まれる核魚雷、閃光を放ち始めた。

瞬くまに範囲は広がり、命中した箇所は溶け始めていた。

ドウン、光に遅れて振動および爆音が聞こえ…

「こ…この熱量は…核…」

「ん？」

瞬くまに引き込まなかった人は熱量で蒸発し、原形をとどめず崩れていった…

ボアズ内部にあんだけ人がいたのに、光が収まったら無人と化した。

滞在時間が二日目になる。

(うへえ…放射能まみれだわ)

ボアズから離脱したカオルは、ルーロス改を不可視モードのまま虚数空間からだし、船内にはいる。

「ルーロス、除洗よろしく」

「了解でち……ごちゅじんたまよくちなないでちね」

「あと無線のワツチ、機体配置を投影頼む」

「あいあい」

除洗で動けない間、立体投影されている機体しめす、青のマーカー、白のマーカーを眺めてる。

青がザフト、白が連邦…猫の技術により、レーダー阻害等ものともせずに、マーカーが戦場を把握していた。

ボアズを失った青は纏まって戦場の外にいったのが、ごくごく一部、あとは白に突撃特効の如く消えたりしたり、混乱しているのか？動き鈍いのを各個撃破されたり等されている。

「ごちゅじんたま除線終了したでち」

「サンキュー」

終了した2時間後にはもう青いマーカーは6個しか残ってなかった。ただ単に宇宙空間を浮遊しているだけの存在と化しているのだろう。

（確かエアーム持たないし、連合に見つかったら虐殺だしな…ほぼ死亡確定と）

「じゃ、回収しにいくからルース青の場所巡ってくれ」

「あいあい」

マーカーを巡って回収しはじめると…

最後の青マーカ―に白マーカ―が接近してきた。

(あちゃ…)

消えるかな？とおもいきや…

青を白が囲んで移動しはじめた。

「ん？これ…」

「曳航してるみたいでちね」

「捕虜に？」

「コルシカ条約適用されないのに珍しい…と思ってると…」

「ごちゆじんたま、搭乗員データーだちます」

(レナ・ユウキか、これも女性ね…回りの連合は男性パイロットか…)

『ひっひっひっ。極上の便器がてにはいったなあ』

『1番手おれだからな』

『どつだ？おとなしいよな？』

『ああ、ケロツと騙されてやんの』

『やったあと生かしておくかっつーの』

「あ、これって…」

「白の無線ワッチでち」

青と白のマーカーは、  
少し大きめな白のマーカーに吸い込まれていく…

「とりあえず様子見、接近しておけ、まさかと思うが…」

「あい……並走したでち」

マーカー図が動き、中央の横に先程吸い込まれた大きいマーカーが  
うつっている。

『ほら、おりろー!!』

『乱暴に扱わないで！コルシカ条約まもるって』

『あ〜ん？この雌なんていった？』

『コルシカ条約です！』  
笑い声が響く

『そんなのダッチワイフにまもるってかあ』

『え？…きゃあぁ…な、何を』

『へっへっへ、いいことしょくな』

『ひっ…た、きやああ』

『いい肌してんじゃん…あたりだな』

『人として…きやああ…い、いや…いやああ』

『ごちゆじんたま、これひどいでち』

『いやああ!..!』

『へっへっへ、人生最後のお楽しみさ、  
おらあ、さつさとぶち込ませるよ』

『コーディネーターは美女ばかりだから良いダッチワイフだな』

『へっへっへっ』

『いくぞ』

『あいあい、ごちゆじんたま…』

ルース改の外に出、すぐさま駆逐艦に取り付いた。



(いた!!)  
パイロットスーツは剥ぎ取られ、乳房がわしづかみされて赤く充血している。

「腰をそらすな雌豚め!!おい、後ろから支えてくれ」

「しよーがねーなあー」

「いやあああああ…」

彼女を引き込んだ。

「あ?いてえ!!」

「へ?」

「きえた?」

そそりたつた男のものが床に打ち付けられ、痛みで悶えてる。

(赦せないけど…どうもできないか…)

まだ殺すならともかくさ…)

願わくば焼き殺されてる事をと心に願って離脱しルースの艦内にはいる。

「ルース、適当な衣服用意してくれ」

「あい、用意したでち」

彼女を虚数空間から引き出す。

「ひいひいいやああ」

「落ち着いて…君を助けたんだから何もしないよ…」

「近寄らないでええ!!」

「ん…アルミサエル」

精神状態を落ち着かせた…

「へ…?キヤツ」

自分が素っ裸にいる事に気がついたようだ。

「衣服用意したから奥できてきな…その後治療ね」

「は、はい」

衣服とって奥のブースに向かっていく。

「さて、ドミニオンのマーカー記録した？」

「あい」

(ならこっちでやる事はないな…)

「あ、あの…」

「ん?もう着たの?」

「は、はい…えつとあなたは?それにこの小型艇は?」

「ん…まずは君が治ってからね…アルミサエル…よつと」

睡眠状態にし、支える。

医療カプセルを出し横たえ作動させ虚数空間にひきこんだ。

大きな欠伸…

「つかれたな…仮眠とるわ適当にながしててくれ」

「あい」

ベットがでてそのままこてんと寝おちた。

三日目

（ほお…これがジエネシスか…）

「ごちゅじんたま、いつてらっしやいでち」

ルーロスを引き込むとジエネシスと同化しはじめた。

（お次はつと…）

ヤキンドウエと同化しはじめると…

プロヴィデンスや、ゲイツ、火器運用型ゲイツ、

シグーディープアームズが居たため取得もしておく。

取得しおわると……

C・E 0071 9月26日

四日目

翌日となり…

ヤキン・ドゥーエ司令部が騒がしくなる。

いよいよプラント本国を目指し地球連合軍の侵攻が始まるのだ。

ボアズが落とされた事により、ヤキン・ドゥーエの横からの圧力を交わせばプラント本国…

そこに核魚雷を打ち込まれると、実質的なプラントの敗北となる。

『血のバレンタインの折、核で報復しなかった我々の思いを、ナチユラル共は再び裏切ったのだ！もはや、奴等を許すことは出来ない！ナチユラル共の野蛮な核など、もうただの一発として我等の頭上に落とさせてはならない！ザフトの勇敢なる兵士達よ！』

長距離ミサイルの束が襲い掛かり、迎撃されるも、幾つかは命中し、宇宙に光が生まれる。

ザフトのMS先遣隊が連合軍へと襲い掛かる。

『今こそその力を示せ！奴等に思い知らせてやるのだ！この世界の、新たな担い手が誰かということを！』

「ジエネシス稼動までの時間を稼げ、ナチユラルどもは絶対に核をうちこんでくる。

二度と血のバレンタインの悲劇を繰り返させな…！」

「申し訳ありません議長」

「よい…だが二度とはないぞ二度とは…  
プラントの人民の命がかかっているからな」

「はっ！」

ジエネシス起動シークエンスに不具合がみつかり、  
配管の漏れとの事で発射が地球連合の侵攻に遅れてしまったのだ。

離れている戦場はますます激化する。

「核はまだ見つからんのか核は…」

あの忌ま忌ましいアークエンジェル級の側に要るはずだ！」

「まだ発見の報告は…」

「一発でも打ち込まれたら…」

何十万の命が消えるんだぞ！！わかってるのか！」

「インディゴ5、マーク12、ブラボーに多数機影確認、ジュール  
隊より入電、核です！！！」

「みつけたか！最優先ターゲット！！プラントにうちこませるな！！  
ジエネシスは？」

「もうまもなく！最終調整です！！5分かかります！」

「2分ですませろ！全隊、核を迎撃しろ」

「ジュール隊も突撃します！！！」

司令部内に心臓が締め付けられるような空気が流れる。

「頼むぞ………」

「150…140…130…120…110…」

「核搭載メビウス残存数100を切りました…」

「90…8…核魚雷射出確認!!」

「ジェネシスは!」

「駄目です!プラントを巻き込みます!」

「全部隊向かわせる!!」

「プラントまで距離300…250」

コロニーの前で広がる光、次々と発見された核魚雷ばかりか、反応がなかった地点での光が広がる。

「迎撃成功です!!全弾迎撃成功です!!」

司令部内が沸く…

「議長…今のうちに…」

「ああ…じえ」

と声を出そうとした瞬間、全域無線がながれる。

『地球軍は直ちに攻撃を中止して下さい。』

「フリーダム、ジャステス！、反乱軍です」

『あなた方は何を討とうとしているのか本当にお解りですか？  
もう一度言います。地球軍は直ちに攻撃を中止して下さい』

「核を迎撃したのが反乱軍の模様です…」

「あ？ラクス・クライン等が？ふん！小賢しいことを。  
構わぬ、放っておけ！こちらの準備も完了した」

「ジェネシスは最終段階に入る。全艦、射線上から退避！」

「部隊を下がらせるエザリア！我等の真の力、今こそ見せてくれる  
わ！」

「ジェネシス、照準用ミラー展開」

「起動電圧確保。ミラージュコロイド解除」

「フェイズシフト展開」

「Nジャマー・キャンセラー起動。

ニュークリアカートリッジを撃発位置に設定。

全システム接続オールグリーン」

「思い知るがいいナチュラル共。

この一撃が我等コーディネーターの創世の光と成らんことを！発射  
！」

本体より一次ミラーへ光の柱がたつ。

一次ミラーから本体のミラーへレーザーが拡散し…

スペースデブリが燃え尽きる、光の渦が連合艦隊へと向かう。

光の渦は核魚雷ごと、連合艦隊に襲い掛かり…

瞬時に船体をとかしつくし…

光の渦が通ったあとには…なにもなくなっていた…

「ジェネシス、最大出力の60%で照射」

「敵主力艦隊は半数が壊滅状態におちいりました」

「流石ですなザラ議長閣下。ジェネシスの威力、これ程のものとは」

「戦争は勝って終わらねば意味は無かるう」

クルーゼが微笑む。



「追撃をかける！！核をうつたナチュラルどもを生かして帰すな！」

パトリックは追撃を命じ…

「議長、演説のお時間です」

演説台へと向かう。

『我等勇敢なるザフト軍兵士の諸君。

傲慢なるナチュラル共の暴拳を、これ以上許してはならない。

プラントに向かって放たれた核、これはもはや戦争ではない！虐殺だ！

このような行為を平然と行うナチュラル共を、

もはや我等は決して許すことは出来ない！

新たな未来、創世の光は我等と共にある。

この光と共に今日という日を、我等新たな人類のコーディネーターが、輝かしき歴史の始まりの日とするのだ！』

カオルはジェネシスが放たれたあと、離脱し、

撤退、体制を整えてる3隻同盟に接触してた。

（あれがエターナルね…）

ミーティアが着体してるのを確認し、同化し取得…

イザナギへいくと、I・W・S・Pとストライクルージュを取得し…  
離脱する。

世界扉を唱え、精神力回復に一回帰還する。

…

カオル報告

エターナル

ミーティア

I・W・S・P

ストライククルージュ

ボアズ

ヤキンドウエ

ジエネシス

プロヴィデンス

ゲイツ

火器運用型ゲイツ

シグーディープアームズ

取得

その他ボアズ要員、

作者「再び来ましたSEED編」

ナギ少尉「ボアズ陥落、でジェネシス発射ね」

作者「次回は予想ついていると思いますが…あの人を救出します。  
あの娘は残念ながら…」

ナギ少尉「思念体になっちゃうんだもんね…」

作者「残念です」

ナギ少尉「ね…ところで…ボアズ陥落後のシーンなんだけど」

作者「ああ、これですね」

ナギ少尉「こんな事って…」

作者「戦争は命が軽くみまれます。

いくら条約で結ばれてたって、闇は幾つもありますし、結ばれてな

い戦争は悲惨なものです。

現にビクトリア陥落の際にも投降の意思ありのを…射殺ですし」

ナギ少尉「えっとつまり…」

作者「ええ、プラント独立戦争は、コルシカ条約に批准してない戦争ですので、

モラル次第…って話ですね。

コーディネーターを友と知っている人もいれば、ロボットだろ…の人もいる。

典型的なのがキラが離脱後のフレイの態度ですね。

彼女の場合はブルーコスモスですけど」

ナギ少尉「……」

作者「先進国通しは比較的条約条約で、

捕虜に対しては案外守ってるんすけどね…ま、そんなわけで次回です」

ナギ少尉「えっと次回は…終末の光潰える時…お楽しみにい」

C・E 0071 9月27日

五日目

カオルは8つに分裂後統合し、5:1:1:1の構成の分裂体となった。

(オーブ三人娘にそれぞれついてくれ)  
(ういゝ)(マユ嬢)(ジュリゝ)

カオル本体はルーロスをだし乗り込み、  
「月へ」

ルーロスを月へとむかわす。

月上空になると一目でわかった。  
続々とクレーター部分の港湾部分から出港していく地球連合軍艦艇。

「かなりの大規模基地なんでちね」

「そんなにでかいのか？」

「そうでちねゝ地下6km周囲20kmに伸びているでち  
空中に基地全体図が投影された。」

「なる程でかいな…、なら急いで同化しなきゃな…じゃいつてくる」

「あい…虚数空間で寂しく待機ちてるでち」

ルースを引き込み、プロレマイオス基地と同化しはじめる。

「絶対に地球にくそ忌ま忌ましいのを向けさせるな!!」

「国をまもってくるぞ!!」

「いいか、この一戦の事を考えろ、出し惜しみするな!かき集める」

基地内部では今だ出港できてない艦に補給、  
乗り込むパイロット達でこったかえしていた。

「ドゥーバック発進完了、続いてキャンサー出港位置へ…」

「頼むぞ」

(けど最短距離で向かうから……)

(基地を巻き込むんだよな…)

(あ、取り付いた?)

(大丈夫だ) (左に同じ) (同)

(彼女達をよろしくな)

続々と出港していく連合軍の艦艇。  
しばらくすると、

「第6、第7残存艦隊戦闘状態に入りました」  
の報告がオペレーターより入った。

「援軍の先頭は？」

「2時間かかります」

「ふう……やる事はやるだけやったんだ……  
あとは神のみぞ知る……」  
椅子に座り込む。

「司令……」

「君もありがとだな……わたしについて来てくれて」

「いえ……短い間でしたが、良い上司に恵まれました」  
この基地に取り付いてみてわかったが、  
基地に残つての命の保障はないとの説明はなされてた。  
もっとも地球に避難しようが、ジェネシスに狙われたらおしまい……  
との事で、

基地の要員は覚悟を決めている気配がしてた。

そして……

「当基地に向け」

「もういい…きたのだろ」

「はい…ありがとうございます」

「願わくば地球に向くまえに……」

司令官は最後のあのデカブツを潰してくれ…が言えなかった。

援軍の艦隊もろとも、プトレマイオス基地を 線レーザーが焼き払う。

いや焼きは甘いだろう。瞬時に蒸発させている。

救助しなかった人物は、体内の水分を瞬時に気化させて、破裂と同時にその肉片が蒸発してく。

カオルは救助しおわったあと、離脱した。

プトレマイオス基地だった箇所にはクレーターが多分あいてるだろう…

粉塵が噴火のように舞い上がり様子がみえなくなっていた。

虚数空間からルーロス改をだし、乗り込こみ…

「マーカールの位置に」

「除洗しとくでち」



(マユラ救助したよ) (ドミニオンで合流な)

戦闘空域のなか、高速移動しドミニオンに接触する。

「ついたでち」

「じゃ虚数空間に引き込むから」

「了解でち」

外にでて引き込んだあとドミニオンに同化する。

ブリッジへ到達すると…

アズラエルがナタル艦長に向け銃口を向けていた。

「ブルー117、マーク52アルファにアークエンジェル。接近し  
てきます」

「アークエンジェル接近中！距離9000」

「さあ！解つたらあんたもちゃんと自分の仕事しろよ。  
あの裏切り者の艦を今度こそ沈めるんだ！」

『ドミニオン！どうかしたか？  
ピースメーカー隊損失率が上がってるぞ！』

『ドミニオン！！フリーダムだ！フリーダムを落としてくれ！！』

「ドゥーリットルを討たせるな！前へ出る！何をやってる！」

「艦長……」

「くっ……」

「撃て！撃たなければ討たれるぞ！」

覚悟を決め責任に座るナタル艦長。即座に命令をだす。

「推力最大、回頭20、アンチビーム爆雷発射！」

ゴットフリート照準！」

「照準よし！」

「てえ！！！」

アークエンジェルの放ったゴットフリートのビームが艦体にあたり、衝撃がはしる。

「ダメージコントロール！！！」

「33番から43番まで反応途絶、隔壁シャッター閉鎖」

「戦闘行動には問題ありません。いけます!」

「救護班、右舷33番通路に向かって下さい」

「ヘルダートン、てえ」

アークエンジェルとドミニオン…

二つの天使が誰にも邪魔されずに、ガチンコの打ち合いに陥る。

互いに命中弾があたり疲弊していく…

また直撃弾がきて艦に衝撃がはしり…

「へっへっへ…」

アズラエルが変な反応をしはじめる…

(ジュリ救出完了)

(アサギも)

(じゃ、重体いくからルーロス内部でカプセルだして待機しててくれ)

(了解)

互いに命中弾をくらいながらも武はアークエンジェルに上がり…

「ローエン格林2番てえ！」

発射直前の露出している砲身部分にヘルダートンが直撃し、

「ローエン格林2番被弾！！発射不能です！」

すると…

「艦長……ドウトリル、豪沈…ピースメーカー隊全滅です……」  
ジエネシスに対する切り札を失い…

「あつああ……」

ブリッジ内に悲壮感がながれる。

ドミニオンの護衛してた地球軍艦艇は、次々と豪沈残るは…このドミニオン一隻…

しかも満身創痕…とてもではないが、  
アークエンジェルに勝てる見込みがなかった。

トドメをさせるぞとばかり正対して静寂になる

そこに中破したストライクが接近してきて、  
収容作業かかりつきりで無防備に陥る。

「今だ！撃て！」

アズラエルがそれをチャンスとばかりに声を上げる。

「早くあいつを沈めろ！ローエン格林照準！」

火器管制オペレーターがナタル艦長をちらつと見て、それから照準起動作業をすすめ始める。

「駄目！もう止めて！アークエンジェル逃げて！」

フレイがアークエンジェルに対して通信をおくり、

「お前！」

アズラエルが取り上げ、

「こら！なにを！！！」

フレイをシートから叩きだす。

無重力のなか壁にうちつけられるフレイ。

フレイに銃口を向けるが、それにナタル艦長が止めに飛び掛かる。銃弾が発射されブリッジ内を跳弾する。

「何をやっている！」

「貴様こそ何のつもりだ！」

ナタル艦長の首を締め上げるアズラエル。

「総員！退艦しろ！」

「バジルール！！！」

艦長命令に従い、脱出艇に向かうブリッジクルー。

「貴様等！」

足をかけ身体を投げ、

「急げ！アークエンジェルへ行け！」

「え……！！！」

頷き…

「くっそー！お前え！！」

「指揮官だと！？命令する立場だというのなら…っ」  
ナタル艦長、脇腹を銃で撃たれ…流血し苦しみだす。

「僕にこんなことをして！どうなるか解ってるんだろっな！！」

この船はもう駄目だとばかり、脱出艇に向かおうとアズラエルはドアに向かうが、

ナタル艦長が気力絞り、艦長シートの非常用ボタンを押す…  
シャッターがせりあがりドアにロックがかかる。

「あなたはここで死すべき人だ。私と共に！」

「なんだと…！」

身体に銃弾をうけるナタル艦長…

「巫山戯るんじゃないよ、ドアを開ける！！」

動けないナタル艦長に向かい更に撃つぞとばかり、  
銃口を向けるが…脅しは効かず…足に撃ち込む。

「うわああ！！ううう…」

「くっそー！こんなところで！！」

火器管制コンソールにつき、

「アズラエル！何を！」  
ローエン格林を起動し…

「僕は勝つんだ」

照準ターゲット固定、エネルギーチャージ完了。

「そうさ、いつだって…」

「貴様あー！！」

発射されるローエン格林。

ストライク回収作業の為停船していたアークエンジェル、

脱出挺でドミニオンは無力化されたと思い、

無防備だった…

ローエン格林の直撃を避ける事は不可能だった…

が、ストライクがシールドでローエン格林の直撃を抑え…  
爆散するストライクが見える…

「あ…」

勝ったと思って喜びの表情から一転…

「…あなたの負けです」

直ぐにもう一発のエネルギーは足りない…

「お前ええ！！！！」

既に動きがとれないナタル艦長を投げつけ、再び銃をだし、  
銃弾がナタルの身体を貫く…

「撃てえ！！マリュー・ラミアス！！！！」

被弾警報が鳴り響く、正面から光の奔流が…

「うゝわああああ！！！！！」

おそろ瞬間ナタルを引き込み離脱する。

艦橋を吹き飛ばし…それが引き金となり爆沈するドミニオン。

(と…次は脱出挺か…)

アークエンジェルの方へと向かうが…

(あれ???何処いった?)

遠くで火線が上がってるのは見えるが見過ぎたようだった。

ルースを急いでだし、レーダーだよりで向かう。

接触し、同化すると…

「キラ！」

接近するキラのフリーダムが見える。

そこにクルーゼのビームが脱出挺をおそろ…がキラがシールドで防  
ぐ…

「キラあ」

しかし、無情にもドラグーンのビームが貫く…

フレイ以外を十四名程救出…離脱。



(ふう……あとは……)  
ヤキン要員を救出すべく向かう。

(クルーゼ機に取り付いた)

「ジェネシス照準、目標、地球大西洋連邦首都、ワシントン！」

「何をしている！急げ！これで全てが終わるのだぞ！」

「議長！この戦闘、既に我等の勝利です。」

撃てば、地球上の生物の半数が死滅します。もうこれ以上の犠牲は……」

「パアン！」

進言してた側近を銃で煩いとばかり撃つパトリック・ザラ。

「議長……」

「はあ……奴等が敵はまだそこにいるのに、何故それを討つなど言っつ？討たねばならんだ！討たれる前に！敵は滅ぼさねばならん。何故それが解らん！！」

待てないとばかり、ジェネシスコントロールをオペレーターより奪い、入力していく。

「あ！議長！射線にはまだ我が軍の部隊が！」

「勝つために戦っているのだ！皆！覚悟はあろう！」

撃たれたレイ・ユウキが意識を取り戻し、最後の力を絞って……

「議長！」

「11の…」

タン！

「ああ…」

丁度そこにアスラン達が進入してきたが…反撃を受ける事もなく…

オペレーター達が一人、二人と席を立ち、やがて流れとなる。

「撃て……ジエネシス……我等の…世界…奪つ…報い」

最後のパトリックの言葉は呪いに満ちていた…

コンピュータ合成音で総員退去命令が伝えられる。

(さて、ここでも十数名取得できたし…)

手短なコロニーに進入し、眺めながらまつ…

ヤキンの自爆とともにジエネシスの崩壊が始まった。

本来は発射し、地球を滅ぼすはずだったが、内部で核爆発が起こり、2次ミラーが崩壊し、そこに自身が発射したレーザーがあたり、崩壊していくのだ。

分裂体がクルーゼ回収しおわり、痛みを伴いながら合流し、

世界を渡る。

……

カオル報告

ガンバレルダガー見なかったなあ……

ナギ少尉「SEED編はこれで終了かぁ…」

作者「あまい、あまいよナギ少尉、まだ歌姫を救ってない!!」

ナギ少尉「歌姫?…」

作者「まぁ…あと一日行くらしいねカオルは…」

ナギ少尉「指摘つけたけどM u v - L u vの世界は?」

作者「んゝ次のハイブ攻略準備中、武達の日常以外はないぞ…  
まだ実戦も早いし侵攻がないかぎりあんまり動きはないな…」

ナギ少尉「そういえば大体この時期って、  
実験で武の平和な世界にいつてる期間なのよね…」

作者「そう、今回はそれが無いから、鬼教官ぶりを発揮してるな。  
彼女らは今回はでないから武もみっちり鍛えられると、安心もして  
るよっだし」

ナギ少尉「それ書かないの〜？」

作者「話数が増える……ただでさえ話が遅いと指摘もきてる……この調子だと今年に終わるかどうか……だから構成見直し中〜」

ナギ少尉「太陽系奪還までは？」

作者「続くかなあ……完結まではもっていく!!  
けど、地球以外が早くなるかもな……火星だけが問題だけどね……」

ナギ少尉「さて……次回は……Dが付く編に突入なのね……お楽しみにい」

第143話 SEED D編 戦いを呼ぶもの 投稿日20110704

六日目

C・E・0073 10月2日

少し時間あったので新たな時間枠に…

「?前と若干違うでちね」

と不思議がっていた。

「どんなふうに違うんだ?」

「いつの間にか巨大建設物、コロニーが増えてるでち、あとはなんか色々なのが…」

2797

「まあ…2年後のおんなじ世界だからなあ…」

「!!異常でち、理解できないでち!!」

「俺は、そういったもんだよ」

「う〜〜わかりましたでち……ごちゅじんたま。  
ところで目標はなんでちか?」

「アーモリーワンというコロニー内部にあるミネルバなんだよ。オールインワンの新造艦なんだ」

「……これでちかね？たぶんさわがちいでち」

『軍楽隊最終リハーサルは、一四〇〇より第三ヘリポートにて行っ』  
船内に音声がながれる。

「ああ…軍楽隊か…新造戦艦は確認できるか？形状が違う」

「ん〜と…確認できるでち」

「製造工場とかも？」

「確認できるでち」

「ほぼ間違いないな…じゃ、そのコロニーで…」

「了解でち…コロニー解析完了、マップ投影するでち」

空中投影されるコロニー。

『ガトー大尉以下第二整備班は第六ハンガーへ集合せよ』

マップ移動してくと、ミネルバが確認できた。

「うん。間違いなし…」

「着いたでち」

「じゃ、引き込むから」

「何処に差し込んでもいいでち」

船外にてルーロスを引き込み、コロニーアーモリーワンに接触、内部に浸透してく…

コロニーのMS格納庫がある部分に広がってくと…

カオス、ガイヤ、アビス、ザクウォーリアー、ザクファントム、カズウート、バビ、ゲイツR、等を取得していく。

またウィザードシステムの数々…

ホスピタル、ライブ等。

(基本システムは成る程ね…こりゃ面白いや)

等取得してると…



（お、カガリ、アスランカップルか…）

身体の浸食範囲に、引っ掛かるものが反応した。

会談にのぞみ、移動中のカガリ達だ。

カガリ達はデュランダルがまつ執務室へと案内され、入室してく。

「やあ、これは姫、遠路お越し頂き申し訳ありません」

「やあ。議長にもご多忙の所お時間を頂き、有り難く思う」

握手をしながら前挨拶をし…

座席に促し、会談が始まってく。

「御国の方は如何ですか？

姫が代表となられてからは実に多くの問題も解決されて、

私も盟友として大変嬉しく、また羨ましく思っておりますが」

「まだまだ至らぬことばかりだ」

「で、この情勢下、代表はお忍びでそれも火急な御用件とは？

一体どうしたことでしょうか？

我が方の大使の伝えるところでは、だいぶ複雑な案件の御相談、と  
いうことですが…」

「…私にはそう複雑とも思えぬのだがな。

だが、未だにこの案件に対する貴国の明確な御返答が得られない…

ということとは、

やはり複雑な問題なのか？

我が国は再三再四、彼のオーブ戦の折に流出した我が国の技術と人

的資源の、  
そちらでの軍事利用を即座に止めて頂きたいと申し入れている。  
どれ程貴国の大使へとお伝えしたしたか…  
その度に本国へ問い合わせると言われはぐらかして、その場は終了。

大使は職務に従い、実際に貴国に問い合わせしてるだろう…  
なのに何故、未だに何らかの御回答さえ頂けない？  
どれくらい私はまてばよろしいのか?!」

「姫、我がく…」

「議長申し訳ございません…お時間が…」

「ああ…そうだったな…姫、すまないが歩きながらも構わないだろうか？」

「このあとの予定がずらせなくて」

「私は話を続けてくれるなら構わない」

「感謝いたします、姫。ではいきましょうか」

会談は歩きながら進んでいく…  
執務室からでて、格納庫ブロックへと進む。

「姫は先の戦争でも自らモビルスーツに乗って戦われた勇敢な御方だ。」

また最後まで圧力に屈せず、

自国の理念を貫かれたオーブの獅子、ウズミ様の後継者でもいらっしやる。

ならば今のこの世界情勢の中、我々はどうあるべきか…」

アスランがハンガー内部で整備されてるザクウォーリアーに反応する。

「よくお解りのことと思いますが？」

「我等は自国の理念を守り抜く。それだけだ」

「他国を侵略せず、他国の侵略を許さず、他国の争いに介入しない？」

「そうだ」

「それは我々も無論同じです。そうであれたら一番良い。

だが、力無くばそれは叶わない。それは姫とて、いや姫の方がよくお解りでしょう？」

だからこそオーブも軍備は整えていらっしやるのでしょ…？」

「…その姫というのは止めて頂けないか？」

「これは失礼しました、アスハ代表。

しかしならば何故、何を怖がってらっしやるのです？あなたは…大西洋連邦の圧力ですか？オーブが我々に条約違反の軍事供与をしていると？」

だがそんな事実は無論ない。

彼のオーブ防衛戦の折、難民となったオーブの同胞達を、

我等が温かく迎え入れたことはありましたが。

その彼らが、此処で暮らしていくためにその持てる技術を活かそうとするのは、

仕方のないことではありませんか？」

「だが！強すぎる力はまた争いを呼ぶ！」

「いいえ、姫。争いが無くならぬから力が必要なのです。争いをおさめる為の力、不必要だと思いに？」

「だが強すぎる力ではないか？」

「争う力を抑えるのに強すぎはありません。新たな力を作らねば衰えていく…」

非常警報が鳴り響く。

付近にいた基地MPが確認に向かいはじめる。

「なんだ？」

爆発が起こり、爆風が議長達にいる方向へと襲い掛かる。

「議長！」「カガリ！」

二人がかばわれて…

「周囲の安全確認しろー！」

「お身体大丈夫ですか？」

「カガリ、大丈夫だな…」

「ああ…」

爆風がひき…

「議長お手を…」

「アス八代表、申し訳ない…会談は後程で…」

「ああ…わかった…何事が…」

「六番ハンガーだ！」

「新型機が奪われたぞ！」

「大至急向かえ！」

「なんだと!?!」

「新型？」

目の前の視界にアビスが入る。

「あれは!」

「ガンダム!」

アビスがハンガーの破壊活動を続けていく…

「姫をシエルターへ。エヴァンスは!？」

「こちらへ」

警備兵がカガリへ声かけ、

「カガリ!」

走って誘導にしたがってシエルターに向かつてく。

「なんとしても抑えるんだ!ミネルバにも応援を頼め!」

その頃、カオルの意識はミネルバにあった。

『インパルス、発進スタンバイ。パイロットはコアスプレnderへ。モジュールはソードを選択。シルエットハンガー2号を解放します』  
インパルスの緊急発進の準備が進んでいた。

『シルエットフライヤー射出スタンバイ。』

プラットホームのセットを完了。中央カタパルトオンライン。  
気密シャッターを閉鎖します。発進区画、非常要員は待機して下さい。

中央カタパルト発進位置にリフトオフします。コアスプレイヤー全システムオンライン。

発進シークエンスを開始します。

ハッチ開放。

射出システムのエンゲージを確認。カタパルト推力正常。進路クリアー。

コアスプレイダー、発進、どうぞ！』

中央カタパルトから轟音をたて、コアスプレイダーが発進していく…

『カタパルトエンゲージ。』

シルエットフライヤー、射出、どうぞ！

続いてチェストフライヤー射出、どうぞ！

レッグフライヤー射出、どうぞ！』

カオルは、ミネルバから離脱し、コロニー外にでると、ガディ・ルーを探して…

（あ、こいつは？）

黒塗装のMS、ダガーLが接近してくるのが確認できた。

（確か港湾内部での戦艦攻撃用か…）  
もちろん軽く取り付いて、再び探しに…

（ミラージュコロイド…か…見つからないなあ）

ナスカ級は確認できたが…

突如として目前のナスカ級が爆沈する。

ガディ・ルーが姿をあらわし、もう一隻のナスカ級に向かって、攻撃を仕掛け始めてきた。

(完璧にわからなかったわ)

カオルは、急いでとりつきにかかる。

カタパルトから、ウイングダムが出撃してく…

(あつたあ)

予備機のウイングダムがあつたのでついでの取得。

エグザスも見つけ取得した。

ガディ・ルー取得に時間がかかる。

艦橋に意識をむけると、

(ムウ…じゃなくネオなんだよな)

「彼らは？」

「まだです」

「失敗ですかねえ？港をつぶしたとはいえ、あれは軍事工廠です。長引けばこっちが持ちませんよ」

「わかってるよ。だが失敗するような連中なら、俺だってこんな作戦最初っからやらせはせんしな…  
でて時間を稼ぐ。船を頼むぞ」

「格納庫、エグザスでるぞ。いいか！」

ネオが格納庫に向かいます。

(さて、とりあえずこの後は長くなるな…とるもんはとったし、救出する人はしたし…)



かなりの死者がこの作戦ででてた。

いきなりフル武装の味方機にまさか襲われるとは思ってなかったら  
う…

しかも明日が式典で控えていたのだ…

カオルはガディ・ルーの取得を終え一人の身体になると、  
世界扉を唱え世界をわたる。

…

カオル報告

カオス

ガイヤ

アビス

ザクウォーリアー

ザクファントム

カズウート

バビ

ゲイツR

ウィザードシステム各種

ミネルバ

インパルス

各アタッチメント

作者「ふう…あらたな時代か…」

ナギ少尉「なに黄昏てんの？」

作者「いやさ…おれ携帯で投稿してるの、  
わかってるだろ？」

ナギ少尉「そうねえ。携帯投稿ってでてるわね」

作者「まあPCで投稿してる人もいるし、  
人それぞれなんだよな」

ナギ少尉「確かにね」

作者「で、これなんだけどさ」

ナギ少尉「あ、スマートフォン買ったの？」

作者「ああ…けどさ…入力しづらい。

何回後書きもなおしてるかわかりやしない」

ナギ少尉「変えて失敗したのね…」

作者「完結まで、まてばよかったかなあと思いつきり反省ぎみ」

ナギ少尉「後書きが愚痴になってるわね」

作者「ペース守るには差し替えてメール投稿しかないなあ…とね」

ナギ少尉「ま、次回までなれるように頑張ってね」

作者「あいよ」

ナギ少尉「次回、サブタイトルは未定ながら帰還編でおたのしみ  
い」

第144話 SEEDの世界より3度目の帰還 投稿日20110706

2001年11月21日

〔横浜白凌基地B55ハンガー〕

世界扉が開き、カオルがでてきて、

「ただいま」

とコバツタ達に声をかけてきた。

「マスターお帰りなさい」

「なんかあった？」

ハンガーテスクの椅子に座りながら居なかつた間の事を聞きはじめる。

「侵攻も無しに順調、内部は…あ、この記録みたほうが早いね」

記録映像が投影されはじめた。

「リュウとアムロの対面」

アムロがリュウをみて、一步一步近寄り、身体を触り…  
泣き崩れた。

初めての心の許した人物の死者…それが生き返ってきたのだ。年月がたっても、リュウの事を忘れなかったのだろう。

リュウのほうは、最初10年の月日の差が埋められず、困惑気味にしていたが…

すぐに埋めたのだろう。  
アムロを抱きしめてた。

リュウさんリュウさん〜といつまでも泣き抱き着いている。

(マチルダさん、ウツディさん回収してきたら、  
どうなるか?)

暫く泣き崩れたのち、リュウに介抱され酒場に向かってった…

「成る程ね〜…でその後は？」

「リュウさんは適性みて、配属する事になるね〜。  
まだ調子が優れないみたいだから回復後ね」

「そうか…わかった…あとは？」

「とくには…ないかな？」

「ところで生産の方はどうなってる？」

「マスターの調整待ちで、8隻新造艦、ビッグトレー砲艦型が明日1隻、

明後日1隻仕上がる予定だよ」

「なんとか前回分には出来上がるか…」

「60cm砲あるとないとじゃ違う？」

「そりゃそうだよ…火力が違うよ火力が…」

第二次大戦当時でも、3ヶ月間アメリカ軍の艦砲射撃により沖縄の地形は変わり、

硫黄島でもたった40cm砲4000発程度でも地形が変わる。

たった4000発だけであつてもだ。

ましてや異世界軍では鋼鉄の咆哮から持ってきた、無限装填装置という、チートの技術をもちいて、弾薬は無限に供給…

10隻あれば60cm砲から放たれた弾数は10万発も楽に越える。爆薬も第二次大戦当時とは比較にもならない。

広い戦場の中、どんだけ撃ち落とされようが関係なく、狭いピンポイント攻撃のビーム兵器用いるよりも、

爆風等による破壊力がある実弾兵器の効率がよく、主力兵器にのし上がっていた。

例え、ビーム兵器が解禁になっても変わらないだろう…

大出力メガ粒子砲等もよいが、支える船体等も必要、ある程度ばらまく＝散布界（通常は狭い方がよい）が、あつたほうがよいからだ。

「まあ、基本的な作戦変わらずにできるよつだしな…、他には？」

「あと、いよいよちゅどーんが楽しみな、コロニーレーザー4基が出来上がるよ〜」

L4にて建設中だったコロニーレーザー…

「月侵攻の目処がたったな」

それを用いて、ハイブを潰すつもりだった。

「いつにする？いつにする？」

「いまのコロニー現在地から、月上空の予定発射ポイントまでの移動時間、どのくらいかかる？」

「えつとねえ…座標固定、軸固定で…来月の5日だね」

「じゃ、それで攻略できるように進めておくか…あとは？」

「いまのところないよ」

「ん、じゃあ明日処理してと…明後日からか…」

「いよいよ内陸部侵攻だね」

「海の上と違うからな…ある意味じゃ、お休み」

2001年11月22日

まずは朝…定番化した救出した人達の加入確認等を行う。

(にしても自重しなかったな…)

今回は、

ボアズ基地要員、ヤキンドウ工要員、アーモリーワンの基地要員

…人数は百人以上…



(後で数えなきゃ…正直何人引き込んだ?)

地球連合からはプロトレマイオス基地、ドミニオンクルー、  
こちらは百人以下だが

(何人だろう?数えなきゃ…)

そしてネームがでてる、クルーゼ、オーブ三姉妹、ナタル艦長達だ  
った。

とりあえず、今まで敵同士、

戦闘になると死者がでる恐れあったのでMPのT-850が1個中  
隊つめていた。

(条約まもってない同士の戦争だしなあ…)

戦艦ドックにシエルターをだす。

シエルターにスピーカー端子を接続し、出てくるように伝える。

外に出はじめる人がでてきた。

連合、ザフトとも心配した初っ端乱闘等は起こらずとも、  
それぞれの所属に固まり始めた。

1番人数が少ない、肩身の狭そうにしている、オーブ三人娘達に声  
をかけた。

「どうも」

「あ、はじめまして」

「ねえ…映像にでてた人だよな？」

「みたいね」

「と、とりあえず加入して貰いたいんですがよろしいですか？」

三人娘加入してくれるとの事…

開発室及びテストパイロットとして、所属してくれる事となる。

次にプロレマイオス基地要員に声をかけに行く…

プロレマイオス基地要員、総員52名加入する事となる。

(MSパイロットはいなかったなあ…)

後方支援要員が主に…な形だった。

次にヤキンドウ工要員…MSパイロット含め、  
総員43名加入が決まる。

(白兵戦要員が多かったなあ…)

一番多いボアズ基地要員に声をかけにいった。

(そういえばレナは…いた)

違う服をきて見つけやすかった。

ボアズ基地要員、MS別動隊含め、172名の加入が加わる。

(MSパイロット多いな)

「あ、あの」

「レナさん？話あるなら後で…時間とれたら呼びにいかせるよ」

「は、はい」

次にドミニオンクルーに…

そして、

「ナタル・バジルール以下、総員21名。  
異世界軍へと加入致します！！」

「歓迎致します…」

同系艦は建造予定はありませんが、  
なんだかかの艦隊を率いて貰うつもりですので、  
よろしくお願いします」

「はっ！！」

宿舎にコバッタが案内してく…

(さて、クルーゼだよな…)

最後のシエルターをだす…

「ラウ・ル・クルーゼさん準備できましたら出てきてもらえますっ？」

「ふっ…寿命が短い私を助けてなんになる？」

「その事を含めてちょっと…まあどうにかできるんで…」

「聞こうではないか…」

「えつとまずは…」

擬体いり医療カプセルをだす。

「ほう…わたしがはいつてたのに近いが、これは？」

「擬体入りカプセルですね。」

重体に陥り、身体に甚大なる欠損を陥った時に、

この擬体に遺伝子情報をいれ、そのもの本人となり、魂を移植します」

「魂を移植する？遺伝子情報から作るならクローンではないか？」

「クルーゼさん、クローンとはなんだと考えます？」

「出来損ないだろ…このわたしみたいな」

「クローンは新たな命をつくる事、にてるかもしれませんが、一つの命です。それぞれがにてるかもしれないですが、別の考えをもち、別の行動結果をもちます。だからあなたが、コピーにすぎない…と知った時には、衝撃を受けたんですよね？」

「あ、ああ…」

「その衝撃を受けた…まさに新たな命の考えです。で世界を憎み、コピー元をころした…」

「そうだな…そこまでしってるなら、何か解決さくはあるのかね？」

「テロメア遺伝子の欠陥で老化がすすんだ…で間違いないですよね？」

「ああ」

「なら、この擬体に移植で解決つきます…だよな？」  
老化した部分はもう既に治せない為、新たな身体を用意し、  
欠陥部分を治し、歳相応の身体となり、移植手順になる。

「そうです。ぼくらにまかせて下さい」

「……ふむ、いいだろう。どうせ死ぬ運命だったんだ…  
永遠の苦痛から解放されるなら、任せようではないか…」

「その後は？」

「解放してくれるなら好きに使ってくれ。豊かさを求めた歪んだ世  
界とは違うんだろ？」

「ありがとうございます…じゃ、移植任せたよ」

「了解しました。マスター、クルーゼさんこっちに…」  
医務室へとすすんでいく。

その後、ハンガーデスクで、鯖にデータを入れ込んでた。  
終戦前の機体の、ゲイツ、火器運用型ゲイツ、シグーディーブアー

ムズ、

と条約批准後の総量規制された、ニューミレミアムシリーズの  
カオス、ガイヤ、アビス、インパルス、  
ザクウォーリアー、ザクファントム、  
及び戦前の後継である、  
カズウート、バビ、ゲイツR。

またプロヴィデンス…

戦艦ではカディ・ルー、エターナル、ミネルバ。

施設ではボアズ、ヤキンドウエ、プトレマイオス、そしてジエネ  
シス…

等が取得できてた。

（特別なのは、やっぱり技術的な面の躍進か？）

試作機をとりあえず作ってみようと、

（シンプルにザクウォーリアーがいいかな…）

部材を集め取り付こうとすると…

「カオル」

「ん？武どうした？」

「重慶ハイブ攻略作戦てまじか？」

「マジだよ」

とかけてきたので中断する…

「前回から一ヶ月もたつてないんだぞ」

「一ヶ月近くたったから十分準備まにあつただよ」

「…そんなに余力あるんか？」

「いや…余力はないな」

「なら」

「生産力があるから準備に間に合つて事さ」

「生産力？」

「武にはいってなかったっけ？プラントの事」

「いや…」



「俺がわざわざつきつきりで生産しなくとも、やってけるのはプレントのおかげだからなあ。  
あとコバッタ達も…」

「そうなのか…」

「あと攻略作戦自体に人的被害は未だないぞ。  
それで一ヶ月で続けて無理なく攻略作戦できるんだよ」

「へっ？死者0？、機体も？」

「あゝ機体は……回収修理して再利用はしているな。  
破棄はない…よな？」

「もったいない神様がでちゃうからね」

「だそうだ」

「ははは……本当、前回の時にカオルがいたら、どんだけ良かったか…」

「前回の世界ねえ…俺的にはそれがイマイチ実感が…」

「いやいやそれいふなら、カオルの方だろ」

「かあ」

と苦笑するカオル。

「ま、規格外の話は置いといて…武、重慶攻略に参加頼むな」

「ああ、わかった。懸念事項もなくなったしな」

「じゃ、明日から重慶攻略頑張れるな？」

「ああ、悪かったな手間をとらせて…」

よるは遅くなった…

（明日から作戦までこっちにいるし…  
技術の続きは明日以降だな…）

……  
カオル報告

ん？

あれ？加入以外あんま仕事してないぞ？

作者「とりあえずこうしてあーして…」

ナギ少尉「作者なにしてん」

作者「ギャーSIMカードがおちたああ……そこ踏むな!!」

ナギ少尉「ひう!!」

作者「ふー…このカードがなくなったら大変な事になってんぞ」

ナギ少尉「えっと……そうなのね?」

作者「そつだよ…物語が未完成のまま終わるところだったさ…」

ナギ少尉「あははは…ゴメンねえ」

作者「SIMカード入れ替え中には声かけない事!」

ナギ少尉「はい…けどスマホやりづらい？」

作者「そうだなあ…画面に文字入力がとくにな…ガラケーのほうが、  
へタルかもしれんが入力はしやすい」

ナギ少尉「成る程ね」

作者「だからネットはスマホ、携帯小説作成専門にメール作成で、  
ガラケーから送信といれかえてるわけさ…」

ナギ少尉「PCは？」

作者「入力早いが、つきっきりのまま、  
ノートはバッテリーもたない、落としたら悲惨だし…  
いや、落として悲惨は携帯も一緒か…」

ナギ少尉「だね…あ、と…内容の方は…明日から重慶攻略にシフト  
？」

作者「の流れだな…内陸部にあるし…」

ナギ少尉「では次回お楽しみにい」

作者「う…まだ真つさら執筆急ぐぞ…」

第145話 重慶攻略戦 投稿日20110708

内陸部、海岸から最短1500kmの距離にある重慶ハイブ…

この重慶ハイブを落とし、日本帝国を防衛する防衛線を構築するとともに、

敦煌、カシュガルへの道のりへと続く…

2001年11月23日

鐵原基地臨時待機所にはトレーンギャロップ40編成及び、ビッグトレー砲撃型10隻、

ビッグトレーミサイル型対空ミサイル換装、

魔ドム122機、ホバートラック6両、ホバートラック重火力型100両が、

出陣の時を待っていた。

物語上後だしジャンケンとおもわれるかもしれないが、

ホバートラック重火力型は、鉄原ハイブの西に広がる黄海上の防衛担当し、

ホバー走行で、遠浅の海上から中、小型種に対し過剰火力を食らわす為に改造された、

現地武装改造型になる。

JM61RFSを索敵装置の変わりにつき毎分800発の20mm弾を食らわし、

継続射出時間52分の性能となる。

あくまでも遠浅な黄海を担当するだけに生まれた、苦肉の機種といえよう。

防衛部隊から、今回は、まわしたかたちだ。本来なら61式重機関型で対応すべきだが、ホバー走行はできなかった為だった。

「壮观壮观」

横浜基地の司令室でカオルは映像でみていた。

「じゃ、行くか…進軍せよ!!」

各艦が一斉に動きだし、魔ドム、ホバートラック等が艦隊を護衛すべく先行しすすみ始める。

編成された一群は、黄海に突入する。

穏やかな海上を疾走する一群、

「作戦群前方に中、小型種BETA約1000、光線級確認できず、敵BETA群、ボギー1と認定」

「プチッと蹂躪せよ」



ホバートトラック重火力型がスピードをまし海上疾走する。

やがて沿岸部にみえるボギー1、  
ホバートトラック重火力型のスピードがおち、  
備えつけられたJM61RFSが、砲身の向きを変え、一斉に火を  
放つ。

100門のバルカン砲から出た弾は、沿岸につめていたボギー1に  
吸い込まれ、  
肉を削りとり、破裂させ肉片と化す。

体液が散らばり、どんどん数を減らしてくボギー1、  
突撃種が残るも、正面から銃撃を受け動けず、  
手のあいた車両が上陸、背後に回り弱点を貫かれ、沈黙をする。

やがて、

「殲滅を確認、周辺部他反応なし、上陸可能です」

カオルは頷きかえし、艦隊は砂浜より続々と上陸、  
突撃級の死骸を跳ね飛ばし、上陸しおわると、周囲警戒にはいる。

ホバートトラック重火力型は周囲を警戒してたが、  
やがて交替機がトレインギャロップから出てきた為、  
海原を鉄原基地へと帰還していく。

トレインギャロップから出てきたのは陸戦強襲型ガンタンクや、6  
1式改、61式重機関型達だった。

彼らは作戦艦隊を護衛すべく魔ドムと合流し、進軍していく…

「と、無事に展開はできたか…  
これからはらく俺の出番はないんだよな…」

「トレーニングヤロップにつまれた、中型チューリップがハイブ周辺  
到達まで出番ないしね〜」

「で、到達予想時刻は？」

「三日かかるね〜」

「そんなもんか」

「高速移動で一点突破でもいいけど、今回は殲滅なんですよ？」

「ああ、予測不能の動きがこわいからな…」

「このボギー3、5、12の集団殲滅に時間かかりそうなんだよね  
…」

映像が縮小し、重慶ハイブのアイコンの他、ボギー2から18までの  
アイコンがうつる。

進路上に関わる、または近寄りつつあるのが10個ほど、あとは急には向かえない距離にある。

各アイコンの高さはその集団の戦力の高さを表してる。

その中でも3、5、12のアイコンが一際高く表示されていた。

「まずは250kmの距離の時点で、ボギー3が接触する予定で、3万の軍団規模だね…」

「プチッとは行かないか…?」

「光線級が確認できてるから、少し時間がかかるね…  
…でボギー4と11がその間に接触する可能性があるし」

「まあそうだな…」

「安全進行速度60kmでいくから、戦闘開始は2時間後だね」

「ふむ…」

「一応殲滅後、100km行軍、そこで警戒夜営の予定」

「ハイブ後方の帝国防衛線警戒基地になる予定箇所だな？」

「うん…で、翌朝進軍開始して、ボギー5と接触予測だね」

「夜営後はあくまでも予測だからな…」

「ハイブ到達までにボギー全滅が望ましいが…」

「進軍方向先にいっちゃうとね…くるように祈るしかないよね」

「だな…と、じゃああとは頼むぞ」

「了解マスター」

カオルは司令室からハンガーデスクに向かう。

（さて、昨日は中途半端だったからなあ……取得一覧はいいとして…）

1番見所は2年の月日がたった数々の技術だろう。

ザクウォーリア、

ジンなどに比べ、基本機体性能もあがり、

更に高性能化したバッテリーにより稼動時間も上がっている。  
また、ウィザードシステムの面でも面白いものがある。

(あゝ戦術機もそうだった面では更に向上できるよなあ……)

アタッチメントの共通化、それによる多様化。

一つの道でもある。

今の戦術機は機体機体ごとに専用装備ホルダーを装着するような形であり、

別機種との共有化はされてない。

(こういった道もあるか……と提言するだけにするか……)

今のところ、異世界軍機では、空中戦に持ち込むわけではないし、  
ビーム砲撃戦に持ち込むわけでもない。

(民生用に……がひかれてるが……)

ま、後々の機種に関してかな?)

画面を切り替え、ミネルバ、インパルスからの技術は、  
デュートリオンビーム送電システム。

からつけつ状態から大出力のビームをうけ、ものの数十秒でチャ  
ージ、

戦線復帰できる。

多いに魅力的である。

通常、着脱交換式もしくは固定直結し、充電時間をおく。

試しに作ってみた。

(あ、人死にできるなこれ…)

整備しながらだと、サイクロプス同様にビーム周囲に、高マイクロ波長がでる為危険であった。

なので、デュートリオン作動中は10m範囲に立入禁止区域が発生する。

(とりあえずこの三点かな?)

と決定したところで…

「あの…」

「あ、レンさん。あ…話あるってたね…ゴメンな」

「いえ、忙しそうならいいです。

助けてくれたお礼を改めて言いたかったので…」

「ん…まああの世界では死んだ事にはなるんだけどね」

「それでもあんな死に方よりかは、はるかにましですよ。好きでもない人たちにレイプされ、こわされるよりも…」

「そうだな。あ、そうそう、あいつらは焼かれたからね」

「いい気味です。無理矢理なんてサイテーです。」

「……それをカオルさんが助けてくれたんですよね？」

「まあな」

「カオルさんってフリ……」

「あ、妻が三人いるぞ」

「は？三人？」

「ああ、この世界はなあ……」

（司令室）

カオルがレイと話している間にもは進んでいく……

予測時間より若干早めに……

ビッグトレー砲艦型の61cm砲が口火を開き、ボギー3のBETA集団へと砲弾を降り注ぐべく、連続的に砲火を

あげる。

光線級が察知して迎撃の生体レーザーをあげる。空中で爆発し、周囲の弾を巻き込もうとするが、誘爆はさほどおきずに、別の光線級の迎撃にあい、爆発をする。が、たかが火線は600本あまり、インターバル込みで、毎分3射、1800位しか集団からあがらない。

それ以上に合計毎分約13万発と連続的に撃ち込まれる砲弾…  
BETAの集団に着弾し、盛大な命の散華の花火が上がる。

BETAは突撃をしかけてくるが、空中に爆風で死にながら打ち上げられる、兵士級もいれば、数を減らしていく…

が、爆風の嵐をくぐり抜けた先には…別の爆風の嵐が待ち受けていた。

1500位まで数を減らしていたBETAは散らばりながら突撃をしかけると、

待ち構えていたのが陸戦強襲型ガンタンク、61式改の混成集団だった。

一斉に火を放つ火門、くぐり抜けた先は地獄であり、みるみるうちに数をへらし、61式重機関型が火をチロツと放つだけで、ボギー3の集団は殲滅してしまった。

上空では別の集団に対する砲撃を食らわす為に弾がとんでいた…



司令室オペレーター達は、忙しく指令を回しながら、状況報告しあっていた。

「ボギー3消滅確認、残存0」

「ボギー4に砲撃中、殲滅度87%、ボギー11射程圏内まもなく」

「第5大隊、ボギー4の殲滅行動へ移行」

「第1大隊トレインギャロップへ入庫、第6大隊が担当引き継ぎ」

「地下透過レーダーも異常なし、周囲近時接触集団なし、ボギー11殲滅後予定行動可能」

今のところすべて予定範囲内で推移してある模様だった…

……  
カオル報告

陸路遥なりか……

第145話 重慶攻略戦 投稿日20110708(後書き)

ナギ少尉「いよいよ重慶ハイブ攻略戦ですね」

作者「しばらくの間続きます」

ナギ少尉「ねえ、サクッと空挺降下で攻略できないの？」

作者「防衛線がまだ構築できてないのに、大進行フラグ巻き起こすつもりか？」

ナギ少尉「え〜だつてえ〜」

作者「基本、殲滅、大進行フラグを叩き潰しておいて占拠が異世界軍のモットー。

BETAに不可解な動きされるよりかましさ」

ナギ少尉「そんなものかなあ？」

作者「トップを潰せば終わりの人間同士の戦いではないんだぞ」

ナギ少尉「そうなのか」

作者「ま、確かにハイブだけを潰すには、反応炉を襲撃すればいいんだけどね」

ナギ少尉「むっ……と次回予告ね、次回重慶ハイブ攻略戦その2、何処まで引つ張るのかお楽しみに」

作者「引つ張るかは余計だ余計…確かにすすみおそいけどさあ……」

第146話 重慶ハイブ攻略戦 その2 投稿日20110710(前書き)

ギリギリセーフです。

リアルがシステム入れ替えの為、  
忙しいです。

次回作13日に投稿する予定です。

12日は、間に合いません。orz

第146話 重慶ハイブ攻略戦 その2 投稿日20110710

2001年11月24日

朝方、ハンガーデスクにおいて、

「ん〜やっぱりミサイル必要だよな…」

昨日の戦闘結果をみながらぼやいていた。

被害はゼロのものの、護衛の混成部隊の活躍がめだったからだ。

確かに数を削るといふのは戦艦の主砲の弾の破砕力以上だと、  
広範囲大規模ビーム兵器以外にはない。

大口径実弾による爆発力で着弾範囲に爆風を巻き起こして、  
周囲を巻き込み、生命を削る事となる。

砲弾はビーム兵器と違い、5m横にずれたからといって着弾爆風で、  
安全ではないのだ…

なので実弾兵器とすると、最適なのだ…が、  
何分精密命中率の問題がある。

はっきり言おう、40km程離れた距離での戦艦同士の命中率は1  
%以下位なものである。

どんなに精度をあげたとしてもだ…

まず互いに移動し、  
進路を予測し、

予測した進路へ主砲を放つ。

…が弾道は、飛距離、初速を延ばす為の施条痕の影響で、着弾近辺  
てはずれ、

まずは40km先の戦艦予測位置に着弾命中率が5%位なのである。  
その為数多く主砲弾を放つ…が弾道は一つ一つずれ、  
広がり着弾するのだ。

その広がりが散布界というものである。

その為、ある程度は集約するもの、ムラができる為、  
その瞬間生き延びる個体が出てくる結果となる。

108発の散布具合は、最大有効射程である70kmにおいて、散  
布界は実に2kmに広がる。

BETAは恐れを知らず突撃してくるので、  
障害物がなにかぎりスピードは落としてこない。

その結果生き延びて到達する個体がでてくるのだ。

なので、どんだけ門数を増やしたとしても、  
その精密命中の部分においては誘導される、  
または瞬時に時間差なく命中しない限り解決はない…といえる。

誘導兵器であるミサイルがなにかぎり、  
艦砲射撃だけで殲滅はできないといえよう。

結果、より近距離での対応する部隊が最後の締めを担当する事になるのだ…

そっちは門数を増やせば増やすだけで解決はつくのだが…

当初ベトナム沖にてビッグトレーミサイル艦は対応する予定だったが、その艦も回してしまった為、

今日、この横浜基地から佐渡島へまわった2隻以外、自由に動けるビッグトレーミサイル艦、トマホーク換装型はいなかった。

「悩んでも、間に合わないか…来月の攻略時には、ミサイル艦がないこと無いようにすんべ…」

一応タクティカルトマホークは、射程は3000kmをほこるが、速度は880km…  
佐渡島からミサイルを発射しても、  
着弾まで3時間現在の戦場までにはかかる。

3時間後には別の戦闘をおこなってる為、実質的には200km圏内からの射出でないと間に合わないのだった…

報告を見終わった後作戦の進行状態を確かめるべく、司令室に向かった。

司令室にはいると…

(2回戦闘終えたあとか?)

ボギーの数が減っていた。

「状況は？」

「ボギー13が戦闘で殲滅、ボギー17がハイブ内に入って吸収消滅、

現在60kmの速度で進行中、次回戦闘ボギー5の予定」

「際高いアイコンの色が変わる。」

「規模は？」

「8万規模、大砲級が確認できてるよ」

「大砲級か…進行作戦であうのは初めてだな…」

「進みが遅く、大規模集団になりやすいから、厄介なだけだね」



「トマホークがないから先行は向こうか…」

「有効射程外から射撃命令だす??」

「いや、速度が落ちるからやめとくわ」

「了解、先に向こうの先制攻撃が30分後の予測ね」

「その後こつちの主砲攻撃が10分後か…」

「うん。大砲級を潰さないかね」

「ボギー5との開戦中に予測される事は？」

「ボギー6、7、8の接触だね」

「各ボギー群は…」

「ボギー6は戦力6500程、光線確認済み。  
ボギー7は戦力12500程、同じく光線級確認済み。」

ボギー8は戦力5000程、光線級は確認できないよ」

「ボギー8が個体数多いか…」

「ちょっと厄介だね」

等と話していると…

「ボギー5に動きあり、大砲級が射撃態勢になります」

「はじまったか」「始まったね」

「そのまま主砲有効射程まで進軍、ビッグトレーミサイル艦、迎撃態勢にはいります」

「ビッグトレーミサイル艦、VLSハッチ開放、  
全スタンダードミサイル、全RIM-166ESSMアクティブ、  
RIM-166RAMアクティブ。いつでも迎撃可能です」

「迎撃エリア15km設定」

迎撃ミサイルが光線級に撃ち落とされる事になるので、  
なるだけ引き付ける必要がある。

「弾級が射出確認！迎撃緒元入力、1から12射出準備、  
発射まで10、9、8、7、6、5、4、3、2、1発射！」

それでも光線級に迎撃されてもいいように、  
ESSM12本が1個の弾級に向かい撃ち出される。

やはり、

「5番、8番、12番レーザー受けてます！…消滅確認、弾級に着  
弾！」

爆破撃沈確認しました！」

1発でも弾級を撃ち落とす事はできるが、用心には用心をかさねる。

「引き続き弾級が打ち出されます！」

大砲級の射出速度は1分間に2回ほど、個体数がボギー5に80体  
ほど確認できてた。

次々打ち出される対空ミサイル、対空ミサイルを迎撃する光線級の  
火線、

毎分160体の飛来する弾級、光線級のレーザーにより、ESSM

の迎撃網も突破され、  
RAMも次々と射出される。

が、CIWSは稼動はせずにとぅとぅ…

「ボギー5B有効射程圏内に納めました！」

「031のみ目標ボギー5B、032から040はボギー5A本体  
！！」

このころになると、大砲級の回りに弾級、光線級がたかり、  
それ以外のが前進し始めてボギー5は、二つに分離していた

ボギー5Aが艦隊に向かってくる個体群、  
ボギー5Bが大砲級を中心とした個体群に振り分けられていた。

「一斉斉射入ります！！」

艦隊は足を止め、一斉に主砲の口火が開く。

次々と目標BETA群に砲撃が加わる。

「ボギー5A着弾率98%個体数減らしていきます、  
最短射程まで残り120000、

ボギー5B現在着弾率52%、着弾率上昇中です」

光線級が狙いをかえ、主砲弾に目標を変えた。

が嵐のように降り注ぐ61cm弾、  
着実に光線級の命を奪っていく。

他のボギーからの迎撃もくるが、到底全弾迎撃は不可能でありおいてない。

そして…

「距離10000主砲最短射程圏内です！  
ボギー5、残り個体数約2000！」

「混成部隊群砲撃開始します！」

護衛の陸戦強襲型ガンタンク、61式改の主砲が火を放つ

「目標変更、031から038ボギー7Aに射撃開始します。  
約5分後036から038はボギー6A、  
039及び040は引き続きボギー8に砲撃続行します」

わかりやすくいえば…そろそろボギー6から8まで接触しますよです  
すね。

61式、陸戦強襲型ガンタンクの混成部隊は、傷ついたボギー5を  
難無く受け止め、駆逐していく。

それでも果敢に突撃してくるBETA群…  
魔ドムのザクマシンガンが唸り始めた。

そして、

「ボギー5消滅！！第2、6大隊補給に入ります！」

「第1、3大隊ボギー6Aに砲撃開始します！」

「第5、7、9大隊砲撃準備態勢に入ります！」

「第11大隊まもなくボギー8を駆逐完了！」

戦闘の推移は足を止めた異世界軍に分があった。

嵐のような主砲弾で接触までにどうしても数を減らすはめに陥るBETA群…

そして…

「駆逐完了か…」

「ところでマスター、今は居なくともよかったのに…」

「……何かあったらさ」

「その時には引きずってくるよ」

「だろ？だからいた方がよいと……」

「でもレベル将軍が率いて異世界軍の艦隊を指示してるのに、マスターがいつてなんになる？」

「ん……そうだなあ……どうにもならないか？  
精々五百位を相手にする程度だもんな……」

「マスターのいる箇所は勝つけど、それ以外の箇所が瓦解するし……」

「だから、強化しまくったし、優秀な人材を連れてきたし……  
それで崩れる様ならどうにもならないか……」

「かもね……今日はこれまでかな？」

現地はそろそろ闇が覆ってきた。

接近してきそうなボギーは居ない為、  
そのため補給洗浄をかねて、夜営の準備が進められていた……

2001年11月25日

本来ならボギー12と接触しておきたかったが……

「マスター、ボギー12は重慶ハイブに進入し、消滅したよ」

「…確か大砲級が居たんだよな？」

「うん。そう」

「1番戦力数が高かったんだよな？」

「うん。そう」

はぁーとため息をつく…

「ハイブ周辺が激戦になりそうだな…」

「けど準備したから大丈夫」

この日は250Kmの距離でボギー15、16と戦闘、  
再び前進し始める重慶攻略部隊…

距離は125kmに接近した時…



「攻略部隊から報告！！重慶ハイブに異常あり、こちらを目指してBETAが湧き出ています！」

「艦隊停止、戦闘態勢に移行します。ジャール大隊、スタンバイ、射出態……」

司令室が騒がしくなってくる。

推定30万が一気に襲い掛かってくるのだ……

「来たか……じゃあ、いつてくる」

「頑張つて〜マスター」

カオルは格納庫に待機していた多目的輸送艇に乗り込みに行く……

……

カオル報告

行ってきます！！

第146話 重慶ハイブ攻略戦 その2 投稿日20110710(後書き)

作者「いよいよ重慶ハイブまで到達したか…」

ナギ少尉「ねえ作者、文だけでBETA戦力把握してるの？」

作者「ああ、勿論だとも!!」

ナギ少尉「言いきつたね？では現在残存BETAはボギー何？」

作者「と…えつとボギー3、5、12がなくなって、1、4、11  
が初日、二日目6から8、と13、17がなくなって、  
三日目が15、16…だから2、9、14、18地上総数4万弱」

2857

ナギ少尉「作者、その片手にもっている端末はなに？」

と奪うナギ少尉。

作者「ああん…それがないとそれがないと…」

ナギ少尉「次の回でわかりやすく説明してね？」

作者「は、はい…」

ナギ少尉「よろしい。じゃあかえすわ」

作者「お前え、ほとんどの人にとって命より大切なものを…」

ナギ少尉「素直にしないからよ!！」

作者「…わかったよう」

ナギ少尉「さて、今回は…いよいよ1500kmの道のりを越えて、ハイブ本体との攻略です。次回、重慶ハイブ攻略編その3、お楽しみにい」

第147話 重慶ハイブ攻略戦その3 投稿日20110714(前書き)

第147話 重慶ハイブ攻略戦その3 投稿日20110714

ハイブ本体から湧き出てくる前に状況を説明しよう…

《 作注、ここらで入れないと、  
残存兵力がわけわかめになります》

現状、重慶ハイブ周辺にはボギー2、9、14、18地上総数4万弱が残っている。

それだけならよかったが…

「マンダレーハイブ方面増援とおぼしき、  
2万規模の新たなBETA群出現。  
ボギー19と認定します。到達予測時刻26日午後18時」

「今のところ他ハイブに動きなし」

……本格的な増援は始まってはないようだ…  
合計約6万のBETAが、周囲にはのこっていた。

また周辺環境は、核焦土作戦の影響により、  
放射能汚染100SVという高い濃度の汚染地帯が広がっている。

なので異世界軍側としては基本ヤドカリ操縦機、  
有人は、対NBC防護を標準で備わっている魔改造MSによる進行、  
及び防護設備の整っている戦艦群による進行となっていた。

戦術機は改造をほどこした機体のみ参加、  
割合はすくなくかった。

カオルがチューリップを潜って、カーゴ内部に設置されたチューリップからでる。

『エアロック先、核汚染区域、NBC防護確認して下さい』

のアナウンスが流れる。

カーゴの外が核汚染区域の為、エアロックにて除洗を行える設備になっている。

カオルは生身で表にでると魔撃震を出し、同化し戦線に加わっていき…

既に戦闘は始まっていた。

対空ミサイルが打ち上がり、

ビッグトレーの主砲弾がBETAの進撃集団に対して撃ち込まれる。

効果的に最前線に撃ち込まれ、BETAの突撃級の死体生まれ、  
BETAの進軍速度が鈍る。

「敵BETA群先頭距離6万!」

「今だに門から噴き出ています。現在総数8万越えました。内、3万駆逐！」

司令室のスクリーンは、重慶ハイブ周辺の様子が映し出されている。

大砲級はハイブ周辺での61cm砲の射程外から、弾級を打ち出して、

それをビッグトレーミサイル艦がスタンダード、スパロー、RAMを射出し、撃ち落としている。

が、数が多過ぎの為、ビッグトレー砲艦のCIWSが稼働している状態になっていた。

艦隊は、停止し陣形をビッグトレー砲撃艦が前にでて、

61cm砲を2方向から接近してくる重慶ハイブ群に雨嵐の如く、撃ち込んでいる間に、

トレインギャロップのカーゴから出撃してきた、

陸戦強襲型ガンタンク、61式改が迎撃陣形を整える。

「現在門より湧き出て数、推定15万！！まだ止まりません！」

「ねえ…大丈夫なのかしら？」

「確か当初プランだと18万のはずよね？」

「こら作戦中だぞ！！！」

「は、はい！」

スクリーンではあふれるばかりに広がってくBETA群、

「先頭集団距離3万、敵BETA群残存10万！」

61cmでどんどん削れてくが、それでも数は膨れあがっていくが、まだ先頭に全ての数がないのが幸いしているかもしれない……

「各大隊、迎撃準備整いました！」

「T-850陸戦隊も展開完了！」

迎撃陣形をととのえ、後は突き抜けてきた敵との相対まちであった。

「敵BETA先頭距離15000、残存13万です！！！」

「まだ門から湧き出ています！累計20万！」

重慶ハイブ、どの位のBETAがハイブ内にいたのだから……



「敵戦闘集団、距離10000、61cm砲最短射程圏内です！  
各大隊砲撃開始します！！」

61cmを抜けてきたBETAに対して、  
陸戦強襲型ガンタンの220mmキャノン砲、61式改の155  
mm滑空砲が火を放ち、  
一斉に5000の砲弾が襲い掛かってく。

陸戦強襲型ガンタンク1000機、61式改2000両から放たれ  
る砲撃…

10km先だと戦車弾の命中率は落ちてくるが、  
それをカバーするが如く接近してくる集団に向け射撃をおこなう。

傷ついたBETAが、圧倒的砲弾に堪えられるわけがなく…  
数を減らしていく…

砲弾をうちつくした61式改が下がっていき、待機してた別の61  
式がその穴にはいる。

うちつくした61式改は、艦隊中央後部にいるトレインギャロップ  
のカーゴに、除洗を受けながら進入してく…  
その間5分…

除洗が終了し、カーゴ内部に進入すると、  
すぐさまコバツタが砲弾補給口をあけ、  
155mm砲弾をガイドウェイを通して補給していく…

砲弾補給中の間、各部異常ないかをチェックしてまわり、

バッテリーも積み替えられた。

5分で砲弾を補給しおわり、  
再びエアロックスペースを通り出撃していく…

それが、各カーゴ、総数500両にて行われていた。

また、無くなってきた補給物資は、随時チューリップを搭載したカーゴから補給されてくる。

さて戦闘状況は…

「門からの出現終了した模様、総数26万!」

「残存BETA約14万!迎撃ライン保たれてます!」

異常がなければ勝てる勢いでBETAの数は減らしていく…が…

「マンダレーハイブより、更なる増援と思われる群出現!、数増やしていきます」

「敦煌ハイブから同じく増援と思われる群出現、進行方向重慶ハイブ方面!」

「ウランバートルハイブからも同様です!」

「鉄原基地地下スパイより入電、重慶ハイブへの増援送れとの事、15万規模送ったと返信」

「各増援の数集計、到達時間を計算しろ、ボギー21、22、23をあてる！」

やはりそうそう簡単には攻略させて貰えそうにはなかった。そして…

「艦隊より入電、地下進行を感知、約30分後、予測範囲に艦隊が含まれています！！」

「レビル將軍より、艦隊を後方20kmに移動すると入電」

すぐさま前線で指揮をとっている、レビル將軍からの指示が司令部にはいる。

予測範囲円は、現状半径15kmの膨大な円となっている為の指示であろう。

まずは、トレーニングヤロップが、護衛の機体とともに一斉に動きだす。

T-850達も外装の取手に取り付き、共に行動をする。

続いてビッグトレーが一斉にうちながら後進しだす。

多少弾道がずれても関係ないほど、BETAの集団は広がっている  
のでできる事だった…

最後に迎撃ライン上に残っていた陸戦強襲型ガンタンク、61式改、  
魔ドム達がタイミングあわせて一斉にラインを後退させてく。

「各機後退完了！異常なし」

「各ハイブの増援到達予想でした。

第1派マンダレーハイブからのボギー21、日本時間28日午後2  
3時。

総数8万規模、大砲級確認できます。

第2波敦煌ハイブからのボギー22、日本時間29日午前4時。

総数18万規模同じく大砲級確認できます。

第3波ウランバートルハイブからのボギー23、日本時間29日午  
前6時。

総数12万規模同じく大砲級が確認できます」

「攻略中に到達はしないの？」

「はい、大丈夫です」

「あとはカオル殿やレビル將軍の判断次第か……」

「各迎撃ライン後退完了しました。敵大砲級も移動開始しました」

艦隊が下がった為、それにあわせて大砲級も移動開始する…

「約3分後地下進行出現します」

「ピンポイントで狙ってた模様ですね」

最初のトレインギャロップ達の中心点を狙って進行してた模様だった。

「残存6万！、地下進行合わせると8万！です！」

「レビル將軍より入電、地下進行出現、殲滅後進軍せよ！」

現地では、トレインギャロップがいた箇所に湧き出てきたBETAに対して、砲撃が加わっていた。

度重なる砲撃にクレーターが至る所にでき、死骸の塊が出来上がりそれがまた吹き飛ばされる。

母艦級が61cm砲弾の直撃をくらい、身体が保てずに崩れ落ちてく…

20kmの距離なら命中率は20%、108発の弾の内、10発位ならあの巨体に直撃し、爆発でもって削り取る。

10分後あたりには

地下進行含めて残存5万になっていた。

直接襲撃する圧力は弱まってきた。

戦場にバラけてきたので、艦隊は前進し始める。

現状大砲級や光線級、重光線級、弾級のいる辺りの2万が1番固まっている。

射程圏内かつ、光線級の直線に入らない40kmの距離まで、残存BETAの襲撃を蹴散らし、対空ミサイルは雨槍の様に打ち出し、ひたすら堪えて艦隊は前進する。

40kmにはいると…

ビッグトレー砲艦型の1080門に及ぶ主砲弾が、連続的に打ち出され、

10分後：約100万発に及ぶ確認弾含めた砲撃により、戦場から大砲級、光線級、重光線級は巨大なクレーターと引き換えに消滅していた：

2001年11月26日午前6時21分

（なんとかなるもんなんだな）

地上での戦闘を行い、  
今までの三次元機動での突撃以外にも、  
解決策があったのに武は気がつかされた。

（圧倒的物量には、圧倒的火力と絶やさない補給か…）

武は、地下深くハイブ突入部隊にも参加していて、  
まもなく反応炉到達前の主広間攻略までのカウントダウンを、思い  
ふけていた。

三次元機動を披露する事はなかった…

圧倒的火力の中では、反対に味方の弾に当たる可能性が大きいとの  
事で、

陸戦強襲型ガンタンク達の穴を埋める射撃戦または、接近してきた  
BETAの対応に徹していた。

そして今も…

『突入！！』

隔壁が崩れ落ち、主広間に突入する陸戦強襲型ガンタンク、それに続いて武の乗る魔不知火も突入する。

目の前に広がるBETA群へ向け射撃トリガーを引く。

(と…)

しばらくうつとIFFが反応し始める。

うっていた隙間を陸戦強襲型ガンタンクがうめてきた。

その為IFFが反応し、ザクマシンガンの射撃をとめる。

すぐさま天井方向へと攻撃を切り替える。

水平方向はIFF反応しない隙間を探すのが無いくらい詰め寄って、ラインを形成し始めてきたからだ。

天井に張り付き、こちらの確保した陣地へと無数の小型種が向かってくる。

対空型も接近させないように銃弾を浴びさせる。

程なく無心に撃つてると、生きているBETAの数が減り…

陣地が広まり…主広間が異世界軍の手に落ちた。



(あははは…楽過ぎるなあ…)

程なく、反応炉が落ちたとの情報が入り、駆逐作業へと移行する…

…

カオル報告

重慶ハイブ攻略、重慶基地へと変わります。

ナギ少尉「重慶ハイブ攻略おめでとぅ〜」

作者「けどまだ楽にはならないのがきてるね」

ナギ少尉「あと周辺地域環境？」

作者「だな」

ナギ少尉「放射能汚染酷いもんでしょ？」

作者「防護服無しでは生きてられない環境、  
ヤドカリ達は除洗受ければ良いとして、人間にはきつい環境だね〜」

ナギ少尉「けど機体は動かせるんでしょ？」

作者「作中には書いてないが、約6時間毎の補給つきでな」

ナギ少尉「へ…？」

作者「酸素の交換だよ」

ナギ少尉「ああ、… ってそんなもん？」

作者「万が一の脱出後何時間分の非常用酸素確保すべきかわかるだろう…」

その分の比率が高いんだよ。あと疲労回復もかねてな」

ナギ少尉「なる程ね〜なら、

作中に書いてないけど釣り天秤で出したあと突入のパターン？」

作者「こそ、ハイブ内部では4時間も戦闘は行ってないわけさ」

ナギ少尉「毎回おんなじパターンのは飽きちゃうから略？」

作者「……………ま、まあさて…三方向からの進軍をどう凌ぐかだな」

ナギ少尉「次回、ハイブ再び復活か？重慶基地防衛戦、お楽しみに  
い」

作者「おい、まだそこまでいかんぞ……………前準備編ね」

第148話 重慶ハイブ改め重慶基地防衛準備 投稿日20110716

2001年11月26日16時

重慶ハイブ攻略後、ビッグトレー艦内にて、  
すぐさまレビル將軍と防衛作戦を協議していた。

司令室より届いた情報、三箇所よりの増援に関しての件についてだ  
った。

「カオル殿、放棄は考えておらんのか？」

「ですね…なんとか護ってほしいものです」

「フムム…三方向からですか…」

重慶ハイブ改め、重慶基地（仮）予定は、西南北の方向からの進軍  
に晒されようとしていた。

すぐさま大群到達までに作業に入らねば…だが…

「BETA側に有利過ぎる地形ですな」

重慶はハイブが建設されて…約8年の年月が経った。

元々重慶は、二つの川の合流地点にある400万人を越える人口を  
ようした都市であった。

第二次大戦のおり、国民党は、北京を落とされると、ここ重慶を政  
府拠点とし、  
大日本帝国との戦いで戦いぬいた。

そう、元の中国では重要な都市の一つであった。

長江が都市部を流れ、河口からの船便が重慶の港につき、貨物を陸  
揚げする。

その貨物は都市部だけではなく、周囲を含めて2500万人、  
いやそれどころか、内陸部の各地に重慶から陸路ではこばれ、  
約1億人近くの生活をつむぐ、内陸部にありながらの港湾都市にな  
っていた。

ところが今はどうであろうか……

廃墟といふかなんにもなくなるのは想像がつくと思うが、  
進軍のときに長江の説明がなかったように……

重慶には長江が無くなっていた……勿論、嘉陵江もだ……

ハイブ建設時にBETAは邪魔な地形は削り埋めたりしている。  
勿論川であつてもだ。

長江も92年に敦煌にハイブが建設されてから、  
上流にあたる金沙江からの流量が減り、  
枯渇気味になる。

そして93年重慶陥落…

重慶陥落後も、中国は大量の核による迎撃、間引きなどをおこなった。

そしてBETAが占拠した土地は地形が変わる…

大地を削り、森林もなくなり、生物も居なくなり、死の世界が広がるのだ。

いやはてや人が核兵器を使い過ぎ変えたかもしれない…

重慶の人々は、80年代に防衛政策により移動、元々激減していたが残っていた人々、比較的軍属や、それにかかわる民間人が多かったが、

92年に放射能汚染が酷くなると退去していき、

93年の重慶撤退時には民間人の死者は皆無であった…

92年前の放射能汚染による死者の方がうわまっていた。

勿論、中国の代表ともいえるパンダ…

野生種は絶滅し、今やアメリカ、オーストラリアに居る個体のみ。

あれ？日本は？だが…

日本帝国では、西日本進行まではまだ各地の動物園にいたが、上野動物園の個体が京都陥落後、

第二帝都移動の際に薬殺処分させられてしまったのを最後に居なくなっていた。

そんな訳で…

重慶基地周辺は、まったくいな平地、それに砲撃によるクレーターだらけの地形が、何処までも続いていた。

長江跡地すら見当たらない…  
元重慶ハイブさえも主縦穴と、付近に駐留しているトレインギャロップ群や、ビッグトレーが居ないと、上空から見ない限りわからないものとなっていた。

いつまでもまっただけに続く、山さえも地平線の先に見えない…  
放射能に汚染された不毛な地、それが今の重慶であった。

自然の要害はまったくなし、レビル将軍の言葉とおり攻めやすく守りにくい地形…

それが現在の重慶である。

増援は、中型チューリップによる輸送により陸戦強襲型ガンタンク300機、61式改が600両が決まっていた。

また佐渡島より、28日にビッグトレーミサイル艦が2隻のみ回ってくる。

「ふむ……カオル殿、この群のみなんとかしてくれれば対応できなくともないが」

レビル將軍の指したのはボギー22、  
敦煌ハイブからの18万の集団だった。

「それを持つとして…？」

「南北からくるボギー21、23を、あらかじめ門、横道を封鎖して対応、  
主力でもってボギー21を殲滅後、とつてかえしてボギー23に…  
の形だがどうかのう？」

「敦煌からの18万ですか…」

（サイクロプスか？やれない事もないな…）

「流石に2時間で18万の殲滅はきついものじゃよ…  
どっちか時間稼ぐ事できれば別じゃが…」

ボギー21は南方向から日本時間28日の23時、  
ボギー22は日本時間の29日午前4時、  
ボギー23は、日本時間の29日午前6時。



特にボギー22と23は時間的に2時間、方向的にも西と北から…  
おまけに両方合わせると30万の大軍勢となる。  
おまけに、クレーターだけのなんも自然の要害がない、  
まっただけの地形である。

「ん…時間稼ぎでなく、ボギー22を殲滅しましょう…  
となると、サイクロプス暴走してかな？  
一箇所だけなら設営間に合うか…」

サイクロプス、佐渡島で使用した大規模殲滅型の自滅兵器だ。

佐渡島にはまだ設置しており、予備が1セットある。

カオルは今回は予備の1セットを使用するつもりなのだろうか？  
協議してたスクリーンに、効果範囲を表示させる。

ハイブ西、70kmの地点で半径40kmの円がでる。

しばらく、レビル將軍はみてたが…

「ふむ…では、今ボギー19対応艦隊をそのまま、ボギー21殲滅  
後転身。」

ボギー23にあたるでよろしいかな？」

「それでいきましょ…11号！！」

作業部隊に南北横道の充填、門の閉鎖、

西側70km地点にサイクロプス設営作業を急いでくれ」

「了解、マスター」

基本防衛方針はきまつた模様だ…

指示が飛び、作業部隊が展開していく…

一息ついたところで、

「ところでカオル殿、

この後、重慶ハイブを再利用本当にするのかね？」

「大変ですけどね…けどまさかここまで酷いとは、誤算でした」

カオルが見ながら話した方向には、ビッグトレーの外部放射能計測器…値は500SVを越している。

調査結果、地上ではかなり強い値をさしてるが、

地下ではさほど放射能汚染は深刻ではなく、

地下1.2kmにある反応炉においては60 $\mu$ SVの値、通常の環境下位にとどまっていた。

因みにSVとは人体に直接影響を与える放射能の値であり、bpygyとは違った意味の放射能の値である。

つまり、外出には完全な遮蔽機能をもつ防護服が必要だが、現状人間サイズでは異世界軍でも取扱いがない…  
MSが放射能防護服の扱いになっている環境下だ…

「この汚染の軽減なんかならんかのう？」

せめて人間が防護服ありで生体に影響なしな位に活動できるとか…」

「どうなん？」

「とりあえずクリーニング作業は開始したいけど安全にならないと始まらないよ…」

大規模すぎるから…」

「となると…周辺地域の安全確保しないと現有技術での放射能除去は…」

「難しいね〜」

「……………密閉型都市というか基地には？」

「なら内部の完全除去は可能」

「…の形しかないか……………でどうです？レビル將軍」

「それしかないのう…」

「周囲の強い放射性物質を分解すれば、そのうちに下がってくるよ」

「あとはどっかからかもってくるか…」

「気長にまつよ〜」

「早めにもってくるさ…あとはパワーローダータイプの完全遮断の作成と…」

「できるだけ小型ね…中継防衛基地か…」

「重慶基地はどうすんの？」

「地下型の密閉低層基地しかないんじゃない？」

「………そうかもね」

「防衛してからになるけど…一番外側が分厚いコンクリート製、地下に潜る過程で除洗が基地としたら無難かな？」

「地下Lv1を150m程とって除洗施設ね…それから主縦穴に進入、完全に放射能遮断する形ね」

「ま、だな…中継基地も同様な形だろ」

「了解、マスターその形で建設準備を整えるよ」

「ん…重慶の地上部分はハリネズミみたいに、砲撃陣地になるかな？」

協議していた頃…

17時頃に戦端を開いた2万のボギー19との戦闘は、さしたる被害もなくつつがなく終わった。

情報ではボギー19は途中二つにわかれ、片方がボギー21に吸収される動きにある。

連戦が終わり、トレインギャロップに帰還し、疲れを癒す有人機にのる102名の兵士達…

2001年11月27日

重慶基地での防衛戦での作業は進んでいる…  
一回横浜基地にチューリップ使用で、転移する。

重慶基地防衛後についてからだ…

まず現状進行中なのが、  
月面ハイブ攻略…

アイランド1から4と名付けられたコロニーレーザーが異常なく移動中…

その他護衛の宇宙戦艦が各コロニーに20隻ついている状態だ。

艦隊司令にはティアンム提督がついて移動している。

(今のところは支障なしか…)

やはり全基移動まで、時間がかかり12月5日を目処に…とのレポートがあがってきてる。

(あとは…)

次の案件、天元山の噴火について。

武からもたらされた情報により正確な噴火時間がわかっていった。

また観測機器もその兆候をしめしていた。

マグマは良い資源であり、  
残さず回収する様に指示は出している。

(と、次は…)

放射能、放射線完全遮蔽の防護服について…

(ん〜……)

完全防護するには…間接が駄目だった。

間接部にまずは分厚い鉛が直線で入らず、  
どうやっても被曝が避けれない状態だったのだ…

現状異世界軍の機体においては、間接がない部分⇨胴体および、  
脱出ポットにおいて完全遮蔽している段階だ。  
実際のところ、脱出ポットにおいても2t近くの重量がある。  
腐食等にもつよいガンダリウム合金も使用している状態だ。

なので間接部分を防護できる素材を頭かじって探していたが……

(いつその事ボール作るか??)

脱出ポット自体は完全遮蔽できている。  
それに駆動部分、作業用マニピレーター、  
外部カメラをくつつければ良いだけの話になってくる。

(戦闘参加は無いんだし、あっても細かい作業用だし、コバツタ達もいるんだし…)

というので対核完全遮蔽防護服??  
ボールの誕生となります。

基本脱出ポットに多脚、マニピレーター、モノアイをくっつけたもの。  
移動にはマゼラアタックのタンク部を流用した土台の上のり移動の形になる。

(これしかないか…作業は基本はコバツタ達だからな…)

放射能は怖いです。

……

カオル報告

対核完全遮蔽防護服を作成しました。



ナギ少尉「ねえ作者…これ服なの？」

作者「何もいうな…」

ナギ少尉「明らかに機体に思えるだけど…」

作者「…突っ込まないでくれ」

ナギ少尉「しかも、重力下で活動させるのに多脚構造、  
タンクつきつて機体でしょ？」

作者「だあああ…え〜え〜わるうございましたよ…。新素材ご都合  
主義つけばいいいでしょ？つけば…  
こんな事もあるうかと！」

ナギ少尉「いよっシゲさん！」

作者「…ま、放射能や放射線は本当に怖いですね。  
放射能防護服、今原発で作業されてる片は、放射線を浴びながら作  
業している訳です。

完全遮蔽するには作中のように、服では難しい問題がでてきます。  
重量はもちろんです、間接に鉛2mの厚さを現有技術ですと入れ

なければなりません。

そうなる間接曲げれますか？になってしまつんですよね…」

ナギ少尉「見えない恐怖ですよね…」

作者「核融合が試験で打ち切られず、実用化されてれば…あんな事故も…」

事故がおこつた事自体、東電の経営陣の責任ですけどね…  
せめて東北電力が管理してればもっと対策いえ、防護を増設改築してたろうに…」

まあ一日も早い収束、放射能問題収まってといつか、つきあわなければならぬんですよ…」

コスモクリーナーD本当にはしいです」

ナギ少尉「さて、今回は重慶防衛戦の回でいいのね？作者」

作者「はい、11月28日に突入ですからね」

ナギ少尉「お楽しみにい〜」

第149話 重慶基地防衛戦 投稿日20110718

2001年11月28日

BETAの大規模進行に対して準備に追われる重慶基地。

異世界軍のみでの対応となる。

統一中華連合が参加させると煩かったが、  
「放射能がひどくて、おたくの衛士の命無駄にはできません。  
攻略作戦時に途中帰した部隊いましたよね？あんな放射能防護状態  
でどうすんですか！」

せめて完全放射能防護する機体にするまで立入禁止です！！」

で追いついて今はない。

はっきりいつて衛士の命なんだと思ってるのか？と思いたい。

100SVどころか、1SVあたりで衛士に影響がでて、活動限界  
にくるような機体なのだ。

宇宙活動も考え、NBC環境下での気密性は一応確保されているの  
がわかる。

これにより放射能内部被曝は防げることはなる。  
が、放射線は別だった…

( 線防護も考えてないとはなあ… )

線は現有技術では鉛板で遮蔽をするものであり…

が鉛は非常に重いもので、

空を飛ぶ機体には到底使用素材として使われてなかった。

そのために外側に増設するか、内部に増設するしかないのだが、その改造気配がなく、お帰り願った次第であった。

揚力で飛ぶ戦術機には重くする発想は、到底受け入れられないものである。

もつとも、改造できるとしたら、

コクピット内部だけの限定改造なら操縦ができなくなる事になるだろう。

外側に改造するとしたら10tは自重が増える事は明白であった。

核戦争下を考えて発達した陸上兵器とは到底違うものである。

因みに、陸上を走る戦車は核汚染下を想定している車両が殆どである。

日本帝国軍では74式から核戦争下での活動を想定した装備となっていた。

いわゆる第二世代と呼ばれる戦車である。

その為殆どの戦車は、第一世代に比べ自重が重くなっている。

さて、異世界軍の作業車両が基地周辺で急げや急げとばかり、地下や地上で穴埋め、穴ほり、充填など、ところせまし活動をしている。

勿論作業用車両の操縦席は露天等で遮蔽は考えられてなく、操縦者は被曝するが……

操縦しているのはコバツタ達である。

彼らは高濃度核汚染下でも関係なく、重機を扱い、横道をうめ、門を封鎖し、内壁の材質変化を行っている。

彼らのおかげでいきなり穴が空き、陥没等はなくなるであろう。作業はかなりの速度ですすんでいた。

同日22時…

南北の門の閉鎖、スタブの充填、基地の材質変化がそろそろ進んでまにあった。

あとは西70kmで設置進めている作業終了次第、迎撃準備はとりあえずは完了する。

西の設営作業を進めている中、南の方向よりBETA群が接近してきた。

ボギー21、約9万の大砲級を含むの勢力だ。数が増えたのはボギー19からの合流があったからだ。

「ボギー21、7時の報告、距離120kmまで接近」

「迎撃第一艦隊前進しました」

ビッグトレーミサイル型1隻のみ遠距離攻撃できる為、  
主縦穴及び東西近接護衛の陸戦強襲型ガンタンク100機、61式  
改100両、  
T-850が200人を残して進軍する迎撃艦隊。

内容は、

ビッグトレー砲艦型10隻、  
ビッグトレーミサイル艦対空換装2隻、  
トレインギャロップ5編成、  
陸戦強襲型ガンタンク2200機、  
61式改4500両、  
61式重機関砲1000両、  
魔ドム216機、  
戦術機108機による迎撃となる。

「ボギー21に動きあり、AB群にわかれます、  
ボギー21B、弾級射撃体制にはいる模様、  
……弾級射出確認」

戦端を開いたのは、やはり大砲級による遠距離射撃から始まる。

弾級が飛来し、対空ミサイルで迎撃を行う。  
前回の2倍の対空ミサイルによる迎撃を行える事により、難無く  
迎撃がすすむ。

艦隊はそのまま進軍、ボギーAとの距離が80kmに差し掛かり…  
「艦隊停止、最大射程から砲撃を行います」

最大射程、文字通り弾が届きますの距離だ。

精密に目標命中は到底望めないが、1080発一回の射撃に打ち出され、一分間で約13万発打ち出されるのだ。かなりずれても問題なかつた。

「諸元入力完了、目標ボギー21A距離80km」  
因みに80kmの距離での散布界は6kmとなる。

「射撃開始！」

カオルはその頃…

サイクロプスの設営調整作業を行っていた。

今回も暴走はさせずに、再利用の形になった。  
その為の最終変更を行って居たため、天板は被せられてない。

（お、明るいなあ…）  
南の空が一部だけ、  
真昼間のように明るくなっているのがみえた。

爆炎による明るさであろう。  
その明るさの下ではいくつものBETAの命が消えている。

（ちとど…）

最終調整は終了し、

「終了だ、天板被せてくれ！」

サイクロプスを納めた通路に天板が被さっていく。

あとは20m程土を被せれば西のボギー22に対しての迎撃準備は完了する。

翌日午前2時30頃、

ボギー21は、その後、大規模地下進行の軍勢4万とあわさったが、数は減らしていった。

数は減らしていったはいいが…

「5時12分の方角距離8052個体数10、26分隊向かいます」

「7時34分の方角、距離10250個体数21発見……206分隊が向かいます」

「1253分隊対応終了、4時02分の個体への対応に向かいます」

このボギー21が、大規模集団で戦闘は行わず、



少集団にバラけた為、対応が難しいものになってしまった。

こっちも陸戦強襲型ガンタンク2両、61式改4両を基本とした分隊を編成、  
個々の集団の対応を行う事になる。

わかれた事により、大砲級が固まっていたボギー21Bだけは殲滅するも、

この時点で約3万強がまだ生き残っていた。

レビル將軍は砲艦1隻のみボギー21が再び集団になった時の対応、あとはボギー23対応の為に転進する。

そして…

「ボギー22確認、10時の方向、  
距離130km、個体数20万確認しました！！」

残敵掃討中ながら、ボギー22が接近していた。

カオルはデコイを握り待ち受ける。

『ボギー22、サイクロプス効果範囲に入りました』

カオルは引き付け、殺到するBETAを待ち構えた。  
十分引き付け突貫する。

先頭はカオルが通り過ぎると反転、食わせるばかりに追いかける。

約30分後…

『間もなく効果範囲外にでます』

(……もう少し広げればよかったか……)

カオルはスクリーンを感じながら機体をあやつり、単機で持ってBETA集団の中心部を駆けぬけていった。

よつあしでもって、土台になりそうな要撃級、突撃級の頭上へのり、ATフィールドでもって光線級のビームを防ぎ、正面に立ち塞がり、邪魔な要塞級は袈裟切りにし、沈黙させていった。

中央部を突き抜けてボギー22をより多く効果範囲内におさめるべく、突貫した。

が、20万の数が効果範囲外部にも広がっていて、全部が入りきるまであと2往復位が必要に思えた。

タイムリミットも迫っている。

ボギー23、総数15万に増えたが戦闘エリア内に進入し始め砲撃を受けはじめていた。

しかも、デコイに引かれ進路を修正している模様だ。

またボギー21の残敵もカオルのデコイに引かれているとの報告もある。

『カオル殿、残敵は陸戦強襲型ガンタンク達に対応するしかないと思っが？』

「ですね…ボギー22の残敵予想は？」

『現状1万です』

『何とかなるのう』

「何とかなるか…わかりました。では起動します」

『総員、サイクロプス起動、衝撃に注意！！』

カオルはより集める為、デコイを天高く中心部に向かってなげ、効果範囲内から離脱すべく、空に駆け上がる。

光線級もデコイに引かれ、見向きもしなくなった。

サイクロプスを起動させる。

ゾク

まだ効果範囲内部にいる為、重力に異常を感じる。

機体を走らす。BETAの向きとは逆に…

『出力50、60、70、80、90、100効果臨界越えました』

効果範囲内にいるBETA達が動きを止め、体内の水分が一気に沸騰し爆ぜる。

まさに地獄の黙示録、死のカーテンが広がる。

『出力150……カオル大将!!効果範囲が!!』

(っ!!)

が……作動効果範囲が当初設定よりも狭かった。付設範囲は間違っではない。

『……デコイのG元素に重力変位確認、そのため設定より20%効果範囲が狭まっています』

「推定残存は？」

『約5万5千……サイクロプスセーフティーストップかかりました』

端子を交換しなければ起動できない状態に……

二発目はない。

『総員突撃、残敵を掃討せよ!!』

レビル將軍の命令がすぐさま下りる。

ボギー22の残敵に陸戦強襲型ガンタンク、61式改が襲いかかる。

カオルも反転し、よりおおく殲滅すべく再び突貫する。

『あと20分でボギー23が最短射程距離に到達します!!』

(放棄か?……いや放棄はまずい、破壊か……)

残敵数の推移を見守り、近くのBETAを切り付けながらそう判断しかけた。

効果範囲の外周部からBETAは、  
またもやあざ笑うかの様に、おもいおもいに拡散してく。

『最短射程距離まで残り10分!!ボギー22残存3万5千、ボギー23A残存6万』

カオルは決断を下す。

「マスター1よりぜ」

『マスター1、T-850より出陣要請がきてます!』

(T-850が?……6000…いつの間……)

数を確認すると、配備した数より遥かに多かった。

(チューリップか!!)

T - 850 達なら確かに小型チューリップでの移動は可能だった。

『俺達にまかせな』

( やっってくれるか… )

『ボギー23A最短射程距離まで残り8分』

「 わかった…頼む 」

リテルゴルロケットもどきを背中に背負い、個々に武器を担ぐT - 850 達、

M61ガトリング、零式ロケット、カトラス、高周波突撃槍等々を手に持ち、

いまかいまかと待ち構えている。

『ボギー23A最短射程距離まで残り1分、残存5万2千!』

『G O G O G O G O ! ! !』

一斉にロケット点火させ、最短射程距離圏内に突入せんとする、ボギー23Aへ向かい突撃する。

この戦いの行方はT - 850 達に委ねられた。

……

## カオル報告

基地放棄でなく破壊するか迷いました。

破壊するとゴキブリホイホイができなくなり、  
できるだけ破壊はしたくないです。

第149話 重慶基地防衛戦 投稿日20110718 (後書き)

ナギ少尉「……」

何故こうなったの？なんで人間サイズのターミネーター達が相手する羽目になったの？

援軍は？」

作者「えつとまあチューリップの設定に起因しますね。

チューリップは20m級のを小型、50m級のを中型と設定してます。

基本MSや戦術機は横浜基地で生産すると、ベースジャバーではこばれる事になります」

ナギ少尉「うんうん」

作者「今回重慶にはトレーンギヤロップで中型を運んでいるので、横浜基地で新造したMSが迎撃増援で出現した事になります」

ナギ少尉「うんうん」

作者「が、基本的に各基地間は小型チューリップで結んでいて、ばらした状態なら多目的輸送艇で運べるようになってます」



ナギ少尉「…小型でも20mあるなら運べるじゃないの」

作者「外周が…なんで運べません」

ナギ少尉「そういう事なのね…」

さて次回は重慶基地防衛戦その2、ターミネーター対BETA5万、勝てるのか？お楽しみに！

第150話 重慶基地防衛戦その2 投稿日 20110720

日本時間2001年11月29日午前5時30分

ビッグトレーの主砲の最短射程圏内に進入した、

ウランバートルハイブからの残存4万9千のBETA、ボギー23。

対するは、背中に背負ったロケットから排煙をだし突貫しているターミネーターT-850達。

その数6000人。

ターミネーター達の背後には、主砲が最短射程に入ったら使えなくなる、巨体の甲板のCIWS4門のみ…

いや相対できるのは1門のみだろうのビッグトレー砲艦9隻と、

今も遠距離にはミサイルをうち出しているビッグトレーミサイル艦1隻と、

対空ミサイルをうち出しているビッグトレーミサイル艦対空換装2隻、

各門及び主縦穴、各艦を護衛している、

陸戦強襲型ガンタンク100機、

61式改100両…

しかない。

文字通り抜けられたら、その数では個々では勝も、間違いなく反応

炉まで到達してしまうだろう。

この戦いの命運は人間サイズのアンドロイド、ターミネーター達が握る。

間もなく接敵というところで、ターミネーター達は背負っているロケットを切り離した。

衝撃を殺し着地、

ロケットはそのまま先頭にいる突撃級めがけて突っ込み、盛大な爆炎を数6000をあげる。

おもいおもいの武装を手にもち、走り出す。不整地なのに時速50km近くまで加速し、

あるものは零式ミサイルを構え、突撃級に向かって発射。

命中させノイマン効果により肉体を奪い、その命を貰う。

あるものは高周波突撃槍を130kmの速度で突撃してきた突撃級に突き刺し、衝撃をこらして命を奪い抜き体液を浴びながら別のBETAに向かう。

あるものは、両手に構えたカトラスでもって、突撃級の脇を通過してた戦車級を一旋、

胴体をずらして命を奪う。

また別のものは、手に構えたM61でもって小型級を狙い、通り抜けようとした突撃級を方向転換し、背後から弾を食らわせその命を奪う。

あるものは、戦士級の長い鼻で殴りつけられたが素手でとめ、反対に空いてる逆手で殴り、鼻をちぎりながら吹き飛ばしその命を奪う。

しかしターミネーター達も無傷では居られなかった。

突撃級めがけて槍を突き刺し、衝撃を殺している間に、真横から唸る空気が…  
要撃級の腕に吹き飛ばされ、槍をはなしてしまうもの。

真横から戦車級に食いつかれ…上半身の肉をもってかれるもの。

ターミネーターの足はサイズの問題で、他の機動兵器にくらべ遅い為、  
弾をうちつくしたあとは補給にもどらず、カトラスに持ち替え接近戦に挑む。

その為不意に被害を被ることがあるのだ…

ターミネーター達は、命を惜しまずになるだけ被害受けないように

闘う。

BETAは命惜まずに被害無視で前に突き進もうとする。

その差がじわじわと出てきはじめた。

ターミネーター達は結構タフだ。  
中々しぶとい。

吹き飛ばされ、地面にたたき付けられる前に体重移動で、体制を立て直し、

地面着地後殴りつけた要撃級に向かう。

高周波ナイフを出し、腰のポシェットから手榴弾を取り出すと、殴りかかってくる腕をジャンプでかわし、更にジャンプし、背中にナイフを突き刺し穴を空ける。すぐさま抜き逆手にもった手榴弾を体内にぶち込んだ。

暴れる勢いで自ら振り落とされ着地する。

要撃級が殴りかかろうとするが…

体内に入った手榴弾が炸裂、

その身体を支え切れず横たえる。

戦車級に上半身の肉をもつてかれ、内部の金属部が露出したのが、肉をもつてった戦車級を掴み、両手を力いっぱい広げると、  
ミリメリメリ

戦車級の肉体が裂け、広げた箇所から真っ二つに体液をだしながら割れていく。

『ボギー22残り2万、ボギー23A残り3万』

数を減らしていくBETA。

キノコ雲があがる。

ターミネーター達のパワーセルが損傷等で不安定になり、一つを投擲したのだろう。

小型の核爆発がおきる。

彼らは吹き飛ばされた位ならまだ大丈夫だ。

少しばかり損傷おつても自己修復プログラムが働き、最適化を行う。

が、さすがに腕をもがれたり、構造体を曲げられる等すると、行動に支障がでてくる事態にはなる。

行動不能になる…といえば首であろう。

パワーセルの入った胴体と、コアプロセッサの入った頭、

どちらかの接続が断たれる、損失等でないかぎり活動停止はない。

今も片腕を切断されたターミネーターが、切断された片腕を拾い、両足を潰されたターミネーターを担ぎあげ、戦線から下がっていく。

修理再接合され、第二次戦線に参加するだろう。

さて、弾を使い切った後の零式ミサイルは再装填されるが、ミサイルの大きさの関係で1回分のみ、合計8発しか撃てない。

なのでその後は、突き刺したり、殴りつけたりなどの金属製のこん棒と化する。

こん棒といえば、要撃級の前腕だろう。

これはよい武器だとばかりに、殺した要撃級から引きちぎり再利用はかなりされている。

彼らの活躍で後方に抜けてくるBETAは今のところいない…

『ボギー22残り1万切りました、ボギー23A残り2万!!』

間もなく手のあいた陸戦強襲型ガンタンクが、装備弾薬等をのせ駆け付けよう。

今も要塞級に向かって高周波突撃槍で、突き刺さんとばかりに突撃している。

ターミネーターの体格よりもでかい触角による鞭撻をかわしながら近寄る。

20m程度の距離までちかよると、

その頭上20mに、突撃槍の使い切り爆薬を使い突き刺さり体内に入る…

エネルギー解放、爆発する。

身体を支え切れなくなった要塞級が崩れおち、盛大な音をたて横たわる。

武器を使い切ったターミネーターは柄の部分ですてると要撃級を探しに行く…

別のターミネーターは、カトラスで要塞級に挑みかかっている。

要塞級はその自重を支える脚が10本ある。

その内二本が先の部分がなくなり、バランスが少しとりずらく感じた。

三本目に切り掛かった際に鞭撃をかわしきれず、下半身と別れてしまった。

地面に打ち付けられ、ターミネーターに襲い掛かる踏撃。生き残った上半身が、動きをとれずに踏み砕かれた…

が…その前にパワーセルが体外に投擲された。臨界を向かえ真下から要塞級に襲い掛かる核爆発…

キノコ雲があがる…

三人で要塞級に挑みかかっている。



一人が囷として対峙注意を引き付ける。

もう一人が土台、そこに向かって走り乗り、ターミネーター自身が投擲される。

勢いよく80m近くまであがると、対空ミサイル等の対応に追われてた光線級の光線はこず、見事に要塞級の背中にとりついた。

二本あるカトラスを使い、穴をあけ体内に進入…  
ドリル的一方的攻撃により1分後には要塞級は、命が奪われ横たわっていた…

要塞級の死体からくり抜き体外にでてくるターミネーター。  
身体は臓器、体液で彩られていた。

戦車級の群れに襲い掛かり、旋風の如く命を奪っていく……

『ボギー22残り1000未満、ボギー23残り1000』

この頃になると61式改や、陸戦強襲型ガンタンク達が武器をのせながら、ボギー23の対応に駆け付けてくる。

もちろん武やカオル達もだ。

武は要撃級に切り掛かりその命を奪う。

少し前には、陸戦強襲型と戦場交代した、ターミネーター達が色とりどりの格好で、

ホバートラックからの補給をしていたのをチラッとみかけた。

（生身で戦うか…すげえや、ターミネーター…）

武は前周回の横浜基地襲撃を思い出していた。

（ターミネーター達がいれば、あんな大惨事にはならなかったかな…  
シャフトや集積所で踏ん張ってくれてたかも…）

実際のところ、歩兵でBETAに遭遇すると全滅もいいところだった…

武は残敵掃討に向かう。

同日、12時12分

戦闘は終了し、破損したターミネーター達が続々と回収されてきた。タンカではこばれてくるターミネーター  
ガーガー

右手にあたる部分がサムズアップをつくる。  
両足はすでに破損、頭もかなり破損していた。

カオルは無言の敬礼で答える。

彼らの突撃がなければ、まだ近接防御が整っていない重慶基地は落ちていただろう。

「必ず治せ」

「わかった、マスター」

欠員4、大破12、中破297、小破1256…  
全てのターミネーター達の回収が終わり、損害がでた…

突撃した6000人の内、実に25%近くの損害がでた事になる。

その他の機体の損害は、  
陸戦強襲型ガンタンク、中破19機、小破83機、  
61式改大破2両、中破83両、小破27両、

有人機では、  
魔ドム中破1機小破3機、  
魔不知火中破2機小破1機、  
の内訳で負傷者0となっていた。

同日15時 第一次重慶基地防衛戦は終了する……

除洗を終え、ビッグトレー艦内……

「よく勝てましたのう……」

「ターミネーター達のおかげですね」

「このわしも駄目かと思ひ撤退プラン考えておりましたわい」

「まあ……デコイがあんな作用したただなんて……  
思ってもいなかったですね」

「ふむ……それにのう……増援要請するとしても、この放射能下だとこ  
れるのは限られてる訳ですしのう……」

ボン太君、烈火、AS等に対応外になる。  
また戦術機も改造を施さないと……の結果に……

「とりあえず各基地間のチューリップを、いざという時の為に中型に…」  
またN環境下対応改造と、放射能除去です…  
まあ二週間は大規模進行はなさそうですし…」  
失った分はBETAも生産せざるえない。

「で、とりあえず重慶基地の設備ですが……」

同日午後8時、  
重慶基地の防衛設備配置等建設計画をおえ、  
横浜基地に戻ると、

カオルはこのあとのプラン及び、  
再び戦力増強すべく考えていた。

(とりあえず、ハイブ攻略は、来月にまた1500km行軍で敦煌、  
月面が来月頭、  
あとは重慶含めた放射能対応と万が一の月面への戦力か…)

放射能はヤマト、アップルシード…

(あ、遊びに行くよのキャラクターア本星もだよな?)

ルースを虚数空間からだして、鈴を撫で呼び出した。

「ごちゅちんたま、なんでちか?」

「ルーロス、確かキヤーティア星って核戦争おきたんだよね？」

「はい。全滅しかかったでち」

「放射能汚染等どうしたんだ？」

「ナノテラフォーミング技術で乗り切ったでち」

「その技術出せるか？」

とたんにシユンとなるルーロス…

「マザーシップでないと出せないでち」

「あゝ……わかったありがとうよ。じゃ待機で」

「了解でち」

（マザーシップか…作るの何日かかるんだっけ？……どっかいった方が早そうだな）

カオルは巨大なもの程作るのに時間かかるし、技術レベルでも時間かかる…

(まあ…これはこれと…あとは…月面か…)

MSは陸上ではかなり強いが、真空である宇宙空間では強制推進剤を使わざるえなく、

また月でも同様の為、戦力が落ちると考えていた。

実質的戦闘時間〓強制推進剤残量の為である。

(宇宙空間と閉鎖空間適したのねえ…今だとエステバリス?)

高機動紙装甲になるが、そこはそれ材質変えれば…

因みに、

遊びにいくヨの技術及び銀河鉄道の無限軌道に関しては、オーバーテクノロジーでプラントでは生産に至ってない。

(操縦系か…やっぱりもってくるか…となると…)

来月中旬までにもつてくればだから…先にいくか…

あとは敦煌制圧時だよな…)

敦煌ハイブ制圧時にはもれなく5方向からの援軍が、容易に予想が考えられた。

(ん……敦煌は潰してもいいか…の前提で動かないとな…  
さてと)

「11号いつてくるわ」

「へ？マスター、今から？」

「ああ、なるだけ急いでもってきた方がよさ気だしな…  
ピンポンで行き来するかもね。今回は「

「わかった、マスター…いってらっしゃい」

世界扉を開き世界を渡る。

…

カオル報告

戦力増強に行きます。



ナギ少尉「やりきったのね」

作者「とりあえずはな…損害も出たけど」

ナギ少尉「欠損4ね…これって…？」

作者「文字通り、頭のチップが破壊、損失等で再起不能。原因は自爆的核爆発や、破壊等ね」

ナギ少尉「で大破は？」

作者「全体の75%損傷、映画等でいうと、パワーセルが破壊され予備電力で動いている状態みたいな感じ。首ちよんぱもこれに該当。

修理は通常は不可と定義されるけど、プラントがあるし、コバツタ達がいるから可能だね」

ナギ少尉「中破が、サムズアップしたような状態？」

作者「そうだね」

ナギ少尉「文字通り踏ん張ったのねかれら…」

作者「まさに人型サイズでは最強の部類にはいるからな」

ナギ少尉「烈火やボン太君は？」

作者「さすがに要塞級や中型以上を、

あの規模で相手すると損害がでる可能性あるから、遠距離からだな…  
ボン太君のもふもふから次々でてくる銃火器の数々…」

ナギ少尉「…そうね…ね、マスターアジアが1000人だとう  
？」

作者「マスターアジアが圧勝…人外だろ…

ターミネーターVSマスターアジアで25人でかかれればか？  
いやサイズのむりか…」

ナギ少尉「さて、次回は…またしても新たな世界、次は何処にい  
くのか？」

ヤマトはまだか？コスモクリーナーはまだか？」

作者「焦らずに焦らずに…忘れたところに忘れたところに…」

第151話 新たなる世界へ 投稿日20110722

「マクロスの世界」

カオルは世界扉をくぐり抜けたあと、早速ルーロスをだし乗り込む。

「ルーロス」

「なんでちか？ごちゅじんたま」

「マクロスという船を探して貰いたいんだができる？」

「詳しい形状教えてください」

「全長1210m、全幅465m、全高335mの宇宙戦艦だな」

「サーチするでち……地球にはいないでちね、星系探索遠距離サーチに切り替えるでち……」

「……でかいのが、いるでちね」

「ゼントラーディ軍ね。  
で、見つかった？」

「……指定サイズは…見つからないでち似たようなのはみつけたで  
ちが…」

「ん？ん？…宇宙戦艦なのに、空母と強襲揚陸艦をくっつけてるの  
は？」

「……？指定サイズと違うでちね…  
似たようなのが土星に向かって航行中でちが…」

「どんな風に違う？」

「高さ1210m」

「あ、そいつだ。トランスフォーマーメーションした形態か…」

「マークしたでち…2時間で近接するでち」

「よし、ステルスモードでいってくれ、見つかるなよ？」

「あいあい」

スクリーンから地上が遠さかり、みるみるまに高度があがり、大気圏外へと離脱する。

その間10分…

そしてグングン地球は小さくなり…

「ところでルーロス、今かなりの数ってたよな？どのくらいなんだ？」

「72隻、同一形態技術と思われる宇宙戦艦がいるでち」

「72隻か…」

「かなりの戦力でちね、1番でつかいのが4km級、次に3km級とかいろいろいるでち」

（ん〜作るとしたらどの位かかるんだか……ミニコロニーサイズだな…）

巨大なものはコピー作成には時間がかかる。

なのでプラントでできて欲しいが、

こればかりは持ち帰らないとわからないだろう。

「ごちゅじんたま、そろそろ目標のマクロスでち」

スクリーンに米粒から段々広がってみえてくる。

土星のリングにちかよってくマクロス。

接近するとその巨大さがわかる。

「全高1210m、マザーシップよりかはちっちゃいでしょ」

「ああ、そうだったな…キヤーティアシップもあったか…じゃ、とりつくから待機な」

「あいあい」

ルーロスを引き込み、マクロスにとりつく。

地球統合軍所属、SDF-1マクロス。

元々はゼントラーディに敵対する観察軍の砲艦であった。

西暦1999年、ノストラダムスの予言通りに地球に墜落してきた。甚大なる被害をもたらしたこの艦は、接收研究のち、巨人族の存在を認められ、地球の技術で修復し、SDF-1マクロスとして10年後に蘇った。

が、ブービートラップが働き、ゼントラーディと開戦。

フォールドの失敗により冥王星まで飛ばされる。

フォールドシステムは消失、

通常航行によりゼントラーディのちよっかいをしりぞけ、やっと土星までこれた次第だった。

(やっぱり…時間かかりそうだ…)

その巨大な艦内には空きスペースを利用して、街が広がっていた。

地上フォールドによる事故で巻き込まれた南アタリア島にいた民間人が、

その生活を立て直すべく街を作って生活している。

約56000人の人々、今現時点で艦内部で生活している民間人の数だった。

艦内の強行型の右脚にあたる部分に、

400mクラスの街がある。

それが何層重なっていて、色々な区画が広がっているのだ。

映画館、ボーリング場、ディスコや、

スーパ―、ブティック等いろいろある。

またまた公園等も……

そして夜の公園では、新米ほやほやの青白いヒヨッコの一条輝がいる。

(お、見てくか…)

「ごめん、はあ。待った？」

息をきらせながらリン・ミンメイがきた。

「べつに」

「ねえ、急用っていつたいなに？」

「明日の朝、出撃することになった」

「へえ、ほんと！ 軍人になつてはじめてのお仕事ね」

「ミンメイ……」

「あなたは優秀なパイロットだもん。きっと立派にやれるって、みんなで噂してんだから！……どうしたの？」

「いや、べつに……」

噴水の水が吹き上がる…幻想的だ。

「うわあ」

「ねえ輝、これ？」

「へえ、女の子みたいだ」

「ふ〜んだ。せっかく一緒に買った服、着てきたのに！」

「ん、ごめんごめん。よく似あつたよ」

「ほんとじつ？」



「ああ」

「あはっ、よかった！」

「記念写真、撮ったところか？」

「ん、わたし、写真うつり悪いから……」

「そんなことないさ。さあ、こっちへ来て」

「カメラ！」

草むらからカメラロボットが出てきて、輝の前に来る。

「さあ、ならんで」

「ええ」

シャッターが落ちて、ロボットから写真が出てくる。

「まあまあね」

「よく撮れてるよ」

時間を気にしはじめたミンメイ。

「わたし、そろそろ帰らなくちゃ。

男の人とふたりきりであんまり長くいると、叔父さんたちが心配するのよ」

「そう」

「ええ。じゃ、気をつけてね。もっとお話したいけど、明日はがんばってね」

「またね、バイバイ！」

「バクイ。俺、明日になったら、もういないかもしれないんだよ、ミンメイ」  
そう呟くのを聞き逃しはしなかった…

輝は公園をあとにし、宿舎方面へと足をすすめる…

(さてもうちょいか…明日はいつぱいゲット出来そうだな…)

二日目

夜を徹して艦の把握に勤しむカオル。

格納庫は結構宝の山だった。

(フオー)

まずはデストロイド達、  
トマホーク、ディフェンダー、モンスター…  
オクトスもあった。

そしてバルキリー、  
VF-1のS、D、A、Jの各バージョン。

また巨大な艦の中には、

そのバルキリー達を生産する工場等も……  
でなければ帰還までに戦力がつき、ろかくされたろう。

また、右腕は強襲揚陸艦ダイダロスが…  
左腕は空母プロメテウスがドッキングされている。

ダイダロスは半潜水型強襲揚陸艦、水密区画で覆われており、  
まあ真空においても運用できるのはその為だった。

プロメテウスは半舷潜水型だが、格納庫等は水密区画ではない…  
そのためフォールドに巻き込まれた際には多数の死者がでたという…  
が、色々な改造を施し、無重力においても運用できるようにはなっ  
ていた。

半舷潜水型や半潜水型…聞き慣れないのがでたと思うが、  
自らの力で潜水し、魚雷等を横で受ける事をいう…

水上をはしる船にとって、強化しても弱点といえる箇所が船底、  
その部分をまもる筈が半潜水や半舷潜水という事になる。

丈夫な箇所を受け止め、万が一浸水したとしても潜水をやめ排水し、  
修理ができるからだ。

船底だと、流れこむ水圧により中々修理が進まない…為、  
他の箇所にも流れるのを防ぐのが水密隔壁等になる。

また二重底など…

またそれ以外にもレーダーに発見されずらい、  
ミサイルに対する防御に水の壁が使える。  
なども上げられる。

さて話をもとに戻すが、

そんな巨大な艦全体を取得し終わった頃には朝？

…艦内時間でだが…、になっていた。

『バルキリー隊に告ぐ。奇襲作戦は、カッシーニ空域において遂行する。』

各部隊を7班に編成し、氷塊のなかで待機せよ。

繰り返かえす。奇襲作戦はカッシーニ空域において遂行する。』

艦内放送が入り、各バルキリーパイロット達が続々と自分の愛機へ搭乗せんと向かい始める。

カオルも分裂し…能力はかなりおちるが…グリーン、ブラウン、ローズ中隊の機体にとりつく…

『バルキリー隊各隊は、空母プロメテウス艦内で人員点呼、確認を急げ』

「バルキリー・スカル大隊2番機、タケシ・エンドウ。出る！！」

機体にGを感じる。プロメテウスのカタパルトしようし、発進して  
く…

(へえ…タケシ・エンドウっうんだこの人…しかもスカル2か)  
カオル本体もとりについてた。

『オレンジ、パープル、ローズのバルキリー各中隊は、前方のリン

グをぬけ、

カッシーニ空域 R - 18 ポイントに移動。  
敵艦を主砲軸線上に誘いだせ』

『スカル2、スカル23番機ですが…』

「ん？…ありや早瀬さんに怒られるぞ…新人の機体が…  
あゝあんのじょうな…」

個別通信が入っている信号がでてる。  
しばらくすると、スカル23番機もリング内部に入った。

『スカルリーダーより各機へ、これより惑星の影のゾーンに突入する。  
氷に気をつける。計器に気をくばれ』

途端に回りは何にも見えなくなる。  
夜間バイザーをだした模様で、難無く氷の塊をさけてく。

『スカルリーダーより各機へ、  
今接近中の艦の砲撃と共に奇襲をかける。  
腹を決めろよ』

敵艦が土星のリングに近寄ってきた。

『きたぞ』

敵艦の砲撃が始まる。

氷塊に辺り、派手な爆発をあげる。

『攻撃開始!!』

影のゾーンから抜けミサイルをしかける。

カオルは離脱し、そのまま先行しているゼントラーディ艦にとりつくと、艦に軽くひろげる。

(沈むまで時間がないしな...)

戦況はというと、主砲がトラブルにより撃てなくなったマクロスに、攻撃が加わる。

しかし、ピンポイントバリアという、マクロスに発生した時限断層をりようした、異次元へエネルギーを逃がすクローディア曰く、セコいバリアシステムにより、

マクロスへの直撃弾をピンポイントバリアにより受け、エネルギー転換、無傷な状態になる。

それを見たゼリル艦長が…怒って全軍突撃を命じた。

段々とマクロスに襲い掛かりピンポイントバリア…セコいバリアは3つしか無いため、対応しきれず被害がはじめた。

バルキリー隊は、どんどんカオル本体に合流してくるのがわかるように、ただ受けの時間が過ぎてくと、総戦力に劣るマクロスは不利になってくる。

バルキリーとリガードは宇宙空間戦闘ではいい勝負になるからだ…

バルキリー1機がカオルの取り付いている船に不時着、バトロイドになり軟着陸する。

輝のかるバルキリーだ。

後方のエアロックに入り、ゼントラーディ兵と対峙する。

その頃、艦の外では…

マクロスがゼリル艦にビームを受けながらも無視し接近、

右腕を引き、ピンポイントバリアをドッキングしているダイダロス艦首に集中。

ゼリル艦にダイダロスアタック敢行、ダイダロス艦首から突っ込ませた。

ピンポイントバリアに守られた艦首、

ゼリル艦の構造物を難無く突き破っていく…

そのまま右腕は伸びきって、艦中央部までダイダロス艦首は突き破っていく、

ダイダロスの艦首ハッチがあいた。  
艦首ハッチ内部にはデストロイド達がミサイル発射体勢を整えている。  
一斉に数百発のミサイルがゼリル艦内部に向け発射される。

ミサイルがゼリル艦内部の至るところで一斉に爆発…

外装部なら耐えられるかもしれないが外にくらべ脆い内部だ…  
耐え切れず、マクロスがダイダロスを進退で抜いたところで…  
ゼリル艦は大爆発。

ここに対艦戦で近接攻撃により撃破するという、  
非常識な必殺攻撃が決まった。

元来船は外に対しては防御等行うが、内側から対しては加工しやすい等の理由でそこまで耐え切れない。

バリアで艦内部に入られた時点で勝負はきまった…

カオルは何人がゼントランを引き込み離脱。

そのまま、ゼントラーディ軍艦隊へと向かう…

…

カオル報告



SDF - 1 マクロス

ダイダロス

プロメテウス

トマホーク

ディフェンダー

モンスター

オクトス

バルキリー VF - 1 各種

取得

第151話 新たなる世界へ 投稿日20110722（後書き）

ナギ少尉「ねえ、ヤマトは？コスモクリーナーは？  
重慶基地はどうすんのよ！放射能汚染酷くしてえ！」

作者「戦力増強を選択したんだから、多分次の攻略までにはじゃ？  
12月末なんだろうし」

ナギ少尉「……まあいいわ…で今度の世界は超時空要塞マクロス？」

作者「そうそう」

ナギ少尉「今まで地球人通しの戦いの話なのに、異星人レベルねえ  
…」

作者「あ、遊びにいくよをぬいてるぞ…あと銀河鉄道物語」

ナギ少尉「えっと、巨大な船の中に生活する避難民船でもあるのね  
」

作者「まあこの後の移民船団のシリーズに繋がるしな」

ナギ少尉「でもオルタ5促進しない？」

作者「忘れてるかと思うが、永久凍結できたから、  
反対に進行作戦の基地として…あ…ネタバラチャック」

ナギ少尉「…作者何処まで話広げるの？」

作者「まあ一応、太陽系制圧までたよ…うん」

ナギ少尉「…本当かね？さて次回は、ゼントラーディ軍の回ね？  
…」

作者「もうちょい進めるよ…対応もね…」

ナギ少尉「じゃ、次回お楽しみにい」

作者「ヤック！デカルチャー」

四日目…

本当ならちゃっちゃんと取得はしたかったが…

二日目から、丸一日かけてもブリタイ分岐艦隊の全ての、ゼントラーデイの取得は無理だった。

いや系統が一緒に加速は感じるが、

何しろゼントラーデイ軍の船は巨大だ…

今まで運用している船のサイズが最大3000m級…戦艦大和も2500mクラス。

なのでわかる通り、常識外れでつかいものだ。

確かに艦内に地球人が街をつくり、生活し、住む発想するのもわかる気がする。

の為に四日目に突入してやっと全艦取得できた状態になった。

さてまずは経過からになるが、

4000m級中型艦隊指揮用戦艦ノプティ・バガニス。

3000m級大型輸送艦キルトラ・ケルエール。

2000m級標準戦艦スヴァール・サラン。

5000m級斥候艦トウ・レディア。

リガードの小型ミサイル装備型、  
大型ミサイル搭載型、偵察型、

また空戦ポットジナル、  
大型降下ポット、  
ケルカリア、  
回収ポット、  
等…

またマイクロン装置…  
感応翻訳装置。

これがないとゼントラーディ勧誘が始まらない…

精神では感覚で話せるも言葉では通じないからだ…

艦隊を取得しおわったところで、一回帰還の為、  
世界扉を開く…

2001年12月2日未明

「よつと…」

「マスター？あれ早いね」

「まあちつとね…大至急やって欲しいのがあるんだが、

まずは医療カプセルの巨人族用を作ってくれ」

「巨人族？具体的には？」

「12mクラスだな」

「…わかった…明日試作品ができるよ。あとは？」

「その巨人族4名連れてきたから、戦艦ドックに警備用MS30機程スタンバイしておいてくれ…鎮圧用のスタンバトンもな」

「へ？」

「まだ言語通じてないんだよ……」

「あゝ了解、それ以外は？」

「まあ問題ないかな？と…」

まずは統合軍パイロットの全45名加入は無事にすんだ。

そして魔撃震と同化し、感応翻訳装置を再生し、機体に組み込んだ。

準備が整ったのでゼントラーディ兵の入ったシェルターをだす。

扉をつけ、

ゼントラーディ語で、出てきて来るように…と語りかけた。

扉が開かれ、兵士が外に出てくる。

(暴れないよな?)

注、以下ゼントラーディ語での会話を【】で表します。

【ここは何処だ?】

【ようこそ戦いのある地球へ、わが異世界軍はマイクロオン主体の軍ですが、

あなた方ゼントランの加入を希望します】

【戦いのある世界だと?】

それこそ我等の生きがいだ、相手はなんだ? 監察軍か?】

【何処かの人ではありません。異種生命体との戦いです。生存をかけた】

【ほう…異種生命体とな? どういったのだ?】

BETAを紹介すると…

【面白い！！是非とも同胞をどんどん誘ってくれ！】  
無事に参加がきまりました。

とりあえず入った体育館サイズのを巨人族用に修復し直した。

が…

「マスター、大事な事忘れてるよ…あの人達の生活どうするの？」

「あつ……」

確かにとorzの格好になった。

ゼントラーディ兵士達はとりあえずコンテナに座ってもらっているが…

……しばし考え…

「とりあえずマイクロン化してもらって、生活環境ととのつたら、巨人に戻ってもらうか…」

マイクロン化装置を設置し、

お願いしマイクロン化してもらった。

プライドが等言ってたが…生活環境がで、渋々同意してくれた。

「じゃ、いつてくるわ」

「また？…まあいつてらっしやい…天元山の対応で忙しいのに…」



「明日なんだよな？」

「うん明日。準備は万端にととのってるよ。マスターいない前提で動いてるけどね」

「……まあ……じゃ……」

世界扉を開き潜る。

カオルは再び地球に降り立ち、ルーロスをだして、マクロス艦を探して運んでもらう。

「地球にいるでつよ……みえたでち」

戦闘終了直後であろう……

接触し、艦内に侵入した。

マクロス艦内プロメテウスの格納庫では、新装備のアーマードパック、スーパーパック等があったのでついでに取得しておく。

「ひゃー、今回は派手に撃ち込まれたなあ……」

「こっちもだ、みてみるよ」

スカル1、フォッカー機を点検している整備兵達だ……

コクピットを覗きこみ…

(さて急ぐか…)

カオルはクローディアの宿舎へと急ぐ…

クローディアの部屋の中では、  
フォッカーがソファでくつろいで、ギターをつま弾いている。  
クローディアはうしろを向いてパイン・サラダをつくっていた。

「輝も幸せなやつだ。腕のたつ部下を持って」

「なんかいった？」

「ふっふふふ。なんでもない」

「パイン・サラダ、もうすこしでできあがるわ。  
それまでちょっと飲んでて」

「もう、飲んでるよ…」

「はい、できたわ。お待たせ。あら、…もう酔ったの？」

フォッカーがゆっくりと前に倒れてゆく…

倒れたフォッカーの背中に3箇所銃創。血が染みだしていた…

「はっ、ああ…!!…ロイ! ロイ!!」

最初は取り乱してたが軍人でもある…

「ロイ! しっかりして!!」

フォッカーを肩に担ぎ、表の軍用車に乗せ、  
パトライトをボンネットに装着させ鳴らせながら走りだす。

車中から携帯で連絡し…

「ロイ、もうすぐよしっかり」

病院玄関に車を滑りこませると、連絡を受けてたスタッフがタンカ  
にフォッカーをのせる。

「ロイ！しっかり！頑張つて！」

「中尉、ここまでです。あとは私達に…」

「ロイを、ロイを、よろしくお願いします！」

手術室に運ばれてく、しばらく時が流れ…ライトが消える。

「先生」

「できる限りの処置はしました。

あとは本人の体力次第です…

しばらくはICUにて経過をみます」

「……」

そして1時間後…

「駄目か…」

心電図はフラット、電気ショック等全て試したが…

「19時18分死亡を確認、呼びにいくか…」

「はい…エンゼルメイクの準備をします」

ICUが無人になる。

カオルが医療カプセルをだし、フォッカー少佐入れ…作動、変わりに擬態をとりだし設置、管をさす。

看護師が入ってきて…見られたので、精神乗っ取り、10分間ぼーっとしてるように…と命令をしておいた。

こっちの処理が完了後運ばれて、

病院の死体安置室のベットに横たえられたフォッカー。

かたわらに医師と看護婦。

クローディアが信じられないといった顔つきで呆然と立っている。

医師と看護婦、一礼して立ちさる。クローディア、フォッカーの亡骸にすがりついて泣く。

（クローディアさん、

フォッカー少佐はこちらで活躍されると思います…）

カオルはその場を離れ、強襲揚陸艦ダイダロスに向かう。

すると前はなかった、デストロイドのフランクス、スパルタンを取得し、

世界扉を唱えた。

5日目

カオルは世界扉を使い時を跨ぐ…

勿論休憩を挟んだ為に時間は経過したが…

さほどマクロスは移動してなかった為に、マクロス艦内に出た。

そのころ艦内部では…

「柿崎、いいところって何処なんだ？」

「隊長、柿崎の案内に任せましょうよ。男が楽しめる場所ですよ」

「そそ、いいとこいいとこ」

「たくう…現金だなあ…」

「けど…こっちにあつたかな？」

しばらく車を進めると…

「ささ、隊長つきましたよ」

「ほお、いいにおいだ」

「あ……か、柿崎君……いいとこってこっつ」

「そうですね、ささ入っておいて下さい。駐車場にとめますから降りてほうけてるマックス。

「ん？どうしたマックス？」

「あは……はは……いや隊長、普通男がいいとこって、こっついったのじや……」

「ん？なにいつてんだ？」

「はあ……まあ次は隊長も含めて経験値アップさせますよ……駄目だこりゃ……」

諦めてステーキハウスの中に入ってく……

カウンターに座る三人、

「うほ〜 隊長の奢りだし、マスター、サーロインステーキの特大、ミディアムのガーリックソースで」

「か、柿崎くん……」

「いいっていいって……さ、マックスたのみな……」

「ATMあつたよな？」

「ATMからはボソボソとつぶやいてた…」

「じゃ…お言葉に甘えまして……」

「俵ハンバーグステーキのセット…、あ、野菜バーつきで」

「お飲みものは？」

「ブラックコーヒーをお願いします」

「マックスそれでいいん？隊長の奢りなのに」

「それでいいんですよ」

「じゃ、俺は3/4ポンドハンバーグいってみるかな？」

「畏まりました」

「隊長？…へえこれも旨そうですね」

「ちょっと表にでるから、すぐ戻るからな」

「わかりました隊長！」

輝、表にでてATMへと…

「ステーキ、ステーキ」

「たく柿崎君、大人だとおもつたら…」

「ん？隊長の奢りだしここはステーキだろ」

「大人のいいところはもっとあるだろ？」

「例えば？」

「美人な女性があれしてくれるとことか…」

「あれ？つて…」

「ん？なに話してたんだ？」



「い、いえ隊長…早い戻りで」

「クレジットにしようかまよったが、現金おろすだけだしな…」

「柿崎君続きはあとでな…」

すると、

「ミディアムでサーロイン特大のお客さま」

ぶ厚いステーキが柿崎の前におかれた。

「来たきた！ うっ、うまそう！」

確かに美味しそうだ。

2ポンド900グラムは越えてそうなステーキ。  
ジュージューと湯気があがってる。

「柿崎君、ほんとうにそれぜんぶ食べるの？」

「食えなかったら包んでもらうさ！ はっははは…」

『バルキリー隊、ドリンク少尉、注文の品がとどいている。至急もどるよう。』

繰り返さず。バルキリー隊、ドリンク少尉、注文の品がとどいている。至急もどるよう。』

「この放送は！」

「全機発進だ。柿崎、行くぞ！」

「あゝあ、俺のステーキが…」

柿崎、名残惜しげにステーキをひと切れだけ食べて席を立つ

続にいう、死亡フラグ…

完食すれば立たなかつたらうに…

カオルが取り付いていたスカル3番機、柿崎機にパイロットが乗ってきた。

『スカル小队1番機、発進します』

『了解』

『柿崎先いくぞ』

「了解であります」

スカル1が機体を滑らしてリフトデッキへと向かい始める。

追って整備兵に合図し、

スカル3、柿崎の機体もリフトデッキへと進ませる。

甲板にあがり、カタパルトが装着された。

「スカル3、柿崎出ます！！」

カタパルトに押し出され空に舞うバルキリー。

『スカル・リーダーより、2番機、3番機へ。  
戦闘中はくれぐれも油断するな。死んじまったらおしまいだからな』

「了解了解」

『わかってます』

バルキリー隊が敵戦闘ポット群におそいかかる。

輝機敵空戦ポッド3機を背後に引きつけて、

スカル1がガウォークへ変形、急速反転し敵機3機を撃墜するのが  
見えた。

「さつすが隊長。これで少佐もつかばれますよ。

……うわー!!」

横から至近距離にあらわれた敵機にねらわれるが、マックス機がこ  
れを撃墜すれ。

『油断するなっていわれたばかりだろう!』

「すまんすまん」

『バルキリー隊各機は、敵第二波に注意するよう』

『バリアシステム、スタンバイ』

『スカルリーダーより各機へ、

マクロス近辺は他のに任せて周囲の警戒にまわる』

『「了解」』

『いくぞ!』

「ん?なんだ?」

『隊長...』

山間から姿をあらわしたカムジン艦隊を発見する。

『スカル1よりデルタ1、地上近くに敵の大型戦艦を発見。  
至急他の隊も回してくれ』

『了解、パープル、シルバー、ブランピットはスカルの援護にまわれ。』

これより本艦はバリアシステムを作動させる。  
援護射撃できなくなるので注意せよ』

『バリア・システム、急速展開。全方位バリア、作動』

マクロス全艦が、緑色の球体につつまれ始める。  
そこにカムジン艦隊から、砲撃がくる。

「ああ、マクロスが...」

『大丈夫さ...』

爆発のなかからマクロスが無傷であらわれる。

「ははは、すげえや、あれだけの攻撃をはねかえしたぜ」

『これであきらめてくれればいいけどな』

しかし、カムジン艦隊の砲撃がつづく…

『敵艦隊、イエロー・ゾーンに侵入。なおも接近中』

「諦めてくれないかよ…ステーキが…」

『まだ気にしてるのか？』

そんな事いつてたらステーキに食い殺されるぞ』

『隊長、ステーキに食い殺されるってどんな生物なんですか？』

『……ん…左手敵機たたくぞー!!』

『逃げましたね…』

空戦ポットを12機程撃墜…

しかし、今だに撤退しない敵戦艦。

そのうちに通信がはいつてくる。

『こんどこそ敵は、本気かもしれないわ。』

バリアが破られないうちに、すこしでも戦艦をたたいて!』

『やつらが本気なら、勝ち目ないかもしれませんが』

『一条中尉！！フォッカー少佐ならそんな弱音は吐かなかったわよ  
』！』

『了解。マックス、柿崎、聞いてのとおりだ。ポイントA R - 1  
181の戦艦をたたく、いいな！』

『いいも悪いも、マクロスがやられたらおしまいでしょ』

「そうですね、隊長！」

『ようし、ふたりとも死なないでいどにがんばれよ！  
…つつけ！』

敵艦甲板にとりついて砲門を攻撃を加える。

その間にもマクロスはバリアに負荷がかかり赤くなつてく…

『バルキリー・ウインザー中隊全滅』

『敵艦隊、レッド・ゾーンに侵入。なおも攻撃続行中！』

カムジン艦隊の砲撃がつづき…バリアがピンクになる。

『全バルキリー隊に告ぐ！ 至急遠方に待避せよ。』

繰り返さず、至急遠方に待避せよ！」

「待避だって!?!」

「バリアが爆発するわ。あなたたちだけでも逃げて！」

「それじゃマクロスは!?!」

バリアのエネルギーが膨張しはじめる。

「逃げて…!?!」

「た、隊長！」

「急速退避!!」

バトロイドからファイターに変形し、行動に移る。

膨張したエネルギー波がカムジン艦隊とオントリオ自治区を飲み込んでゆく…

「柿崎、遅れるな、柿崎！」

「ダメです、隊長、間にあいません！」

柿崎機、エネルギー波に飲まれて分解しかかる。

「ぐわあああ…!?!」

カオルは柿崎を引き込み離脱した。

…

戦闘が終了する。その後にはマクロスを中心とした巨大なクレーターが出来上がっている。

敵味方全てを巻き込み、直径50キロ以上にわたって壊滅状態に陥っていた…

バリアがささえていたエネルギーがいちどに爆発し全てを薙ぎ払った…  
いや溶かしてしまったのだ。

カオルは廃墟をあとに合流して…世界扉を唱え世界を渡る。

…

カオル報告

ゼントラーディ軍各種

フアランクス

スパルタン

アーマードパック

スーパーパーパック



ナギ少尉「……なる程ね」

作者「今回はサブタイトルは、有名な死亡フラグをつけてみました  
が、  
内容が予想できましたね」

ナギ少尉「そんなに有名なの？」

作者「戦闘でる前にはサーロインステーキをくうな…とか、  
オペレーターといちやつくなとか…  
妊娠発覚とか、かな？  
あとは、背後をふらかえると…とか」

ナギ少尉「一つジャンルちがうのがあるけど…  
ん…よしじゃあ、おばさんにステーキ食わせてナキものに…」

作者「あ、一切れだぞ一切れ…」

ナギ少尉「う…難しいかも…がめついから、あのおばさんは…」

作者「あははは……まあ、今回は主要メンツが二人はいったしな」

ナギ少尉「でもでかいのね…4km級かあ…と、あ次回予告の時間  
ね。

駆け足するマクロス編、次回血戦…お楽しみにい」

第153話 マクロス編 血戦 投稿日20110726

六日目

カオルが世界をでると…地球に出た。

(と、まずは…)  
分裂し…

(アームドとグランドキヤニオンよろしく)

(焼かれないように頑張るわ)

と別れたあとルーロスを出し、一路マクロスへと向かう。

マクロスにつくと…戦艦が、正対近距離で停止されていた。

ここで更にわかれ…

(ラプラミス艦よろしく)

(了解)

マクロス艦内では…

「なんですと！ それはまことで？ はあ、はあ、  
…するとわが艦隊は…、わかりました」

丁度エキセドルとマクロス主要メンバーとの会談が行われてた。

「マクロスだけでも地球を脱出しませんかな」

「マクロスに地球を見すてると?」

「さよう」「それは受けいれられん。」

マクロスは地球統合軍に所属する戦艦である以上「

「いや、とうぜんの返答ですな。」

ならばわが艦隊の脱出がむずかしい以上、共通の敵に立ちむかうことになりますな」

「なに、それは!?!」

「基幹艦隊がこの星系に向かったとの情報が、いま入りましたわい」

「……基幹艦隊が!」

「479万122隻の戦闘艦を擁するポドル基幹艦隊。とうとう動きおつた」

「覚悟を決めねばならんようだな。地球が生きのこるかどうかは、運を天にまかせるしかないが……」

「できるかぎりのことは!」

「うむ」

「冗談じゃない。500万の敵なんて、もう終わりだ。こんなことになるなんて……」

ミリアとマックスがイチヤイチャはじめ……

「最後ではない」

「えっ!」「なに!?!」

「マクロスはたった1隻で、われわれと戦ってきたではないか。勝つ保証はないが、戦いかたはある……  
なにか図を出せるものはあるかね?」

「おい」

「はっ!」

会談の場から一気に作戦会議の場へとなくなっていく……

……  
PCに入力しおわったポドル基幹艦隊の構成図をスクリーンに表示させながら、  
エキセドルが戦略を説明している。

「まず分岐艦隊では旗艦が沈められた場合、  
自動的に撤退措置をとる命令が出されていることが多い……  
そしてもうひとつ」

「もうひとつ!?!」

「もうひとつはベルナル級、すなわち上位3ランクまでの分岐艦隊  
旗艦にのみしか、  
べつの基幹艦隊のポジションを知らされていない」  
「なるほど。つまり蛇の頭をつぶすのか!」

「それだけでも重戦闘艦が2000隻を超えますがな。  
480万を相手に地球と1000隻でやってみますかな?」

「エキセドル記録参謀」

「プロトカルチャーに毒されたわが艦隊の総意がこうなってしまう」

エキセドル、グローバル艦長に手をさしだす。グローバル艦長、手をにぎりかえず。

「ミンメイさん、あなたの歌でわれわれは根底からかえられてしまいましたわい」

「えっ、あの…。あたし…」

「もはや避けることのできぬ基幹艦隊との戦いは、激烈なものになるでありますよ。」

ふたたびあなたの歌を聴いて感動することができなくなるかもしれない。

ミンメイさん、いまここで歌って聴かせてはもらえませんか」

「はい」

ミンメイ、私の彼はパイロットを歌い始める。

歌い終わる頃…ボドル基幹艦隊、ぞくぞくとデフォールドしてきはじめた。

『デフォールド反応多数…計測はいります』

「きたのか？」

「きましたかな？」

地球周辺に、基幹艦隊の緑色の艦影がひろがってゆく…

クローディアが艦長に報告を入れる。

『デフォールド反応、計測限界を突破!』

モニタにボドル基幹艦隊が映る。

「おお、基幹艦隊が!」

マクロスの空襲警報が鳴りひびく。

『全艦、第一級戦闘配置』

「イエッサー。全艦、第一級戦闘配置。繰り返さず、全艦、第一級戦闘配置」

「各作業員は反応弾頭への換装作業いそげ!」

「トマホーク第4中隊は、センチネル外へ展開の上、待機」

マクロス・ブリッジにグローバル艦長とエキセドルが入室してきた。

「反応弾頭への換装作業は?」

「現在、70パーセントまで完了しています」

「そっちは?」

「バルキリーへの装備が20パーセントほど残っています」

「いそがせる!」

「了解」

「反応兵器か」

「そちらの艦隊との決戦にと温存しておいた反応兵器を、  
このようなかたちで使うことになろうとは……」

「まったくですな」

カオルはそのころ……  
更に分裂していた。

( 中型砲艦よろしく )

( 了解 )

艦の外に出てく分裂体……

そしていよいよ目の前に1400km級のポドル基幹艦隊旗艦、  
フルブス・バレンスがデフォールド……姿を表した。

「ふえ〜でかいでちね〜ごちゅじんたま……1400kmくらいあり  
まちゅよ」

「だろうな……4kmの船をその内部で運ぶ事もできるしな……」

「まーかーしたでち……ついたでち」

「ん……ありがとうな……記録とっといてくれ。

あとで回収よろしく」



「あいあい」

ルーロスの外にでると旗艦にとりつく。

ルーロスは安全圏へととつとこ離脱してく。

何しろ距離感が違う…

そうその構造は月をも飲み込む大きさなのだ。

カオルが取り付きはじめると…

ポドル基幹艦隊、砲撃準備が進みはじめる。

地球の命運は既に決まっていた。

地球上の全天を覆う形で現れたポドル基幹艦隊そのかず約480万隻、しかも全てがkmクラス…

地球に一斉射撃を開始する…

幾億ものビームが地球に降り注ぐ。

地表が真っ赤になり…

「全滅だど！」

「そんな…うそつでしょう…」

マクロスでは、各都市、各基地とも一斉に連絡途絶された結果による、

騒ぎとなっていた。

スクリーンに映る紅く染め上がった地球…  
グローバル艦長は黙って見つめていた。

「地球上の各都市ともやはり…」

「地球人類はもはやマクロスにのる人々だけになったのか…」  
「いまや目の前にいる基幹艦隊を退けなければ」

「滅びる…という事ですか…」  
「なんとしても…」

そんな中、

「ん？…ふむ…成る程…良い案かもしれんな…」  
「エキセドル記録参謀お話が…」  
「クローディアから耳打ちされた艦長が…」

「なんですか？」

「1番始めに歌を聞いた時如何でした？」

「…ふむ…デ・カルチャー！でしたなあ」

「…いや、…聞き方がわるかったですか…何か行動は起こせましたか？」

「…何もしばらく起こせなかったですな…」

「……ふむ…勝率があがるかも知れませんね」

「グローバル艦長、勝率あがるとは？」

「はい、実は一条輝からの提案が上がってきて…」

……

「ブリタイ司令、そちらの艦隊でリン・ミンメイの歌を同時翻訳して、

全軍用周波数を使って発信していただきたい」

『それはかまわぬが、いつたいなにを？』

「ボドル基幹艦隊の兵士たちは、プロトカルチャーの実態を知りません。

そこで彼女の歌をながせば、かれらはカルチャー・ショックをうけて一時的にせよ、

指揮系統を混乱させることができますはずです」

『その混乱に乗じて、ボドルの旗艦をたたくわけか』

「正面から戦って勝てる相手ではありません」

『よろしい。歌をながせば、わが兵士の士気もあがりましよう』

「うむ！」

ミンメイ、ブリッジに案内されて入ってきた。

「グローバル艦長」

「おお、ミンメイさん。連絡は一条中尉から聞きました。かれのアイデアをもとにして、作戦準備をすすめています」

「歌ってくれるのですな、われわれのために」

「ええ。わたしでお役にたてるなら」

「うむ」

「それともうひとつお願いがあるのだが、あの映画のなかに出ていた男と、

例のキスというものをやってもらえませぬか？」

「ええ！？？」

「ええ！？？」

「す、すみません。でも、どうしてキスを？」

「われわれゼントラーディ人に心理的ショックをあたえるには、あれがいちばん効果的なのです」

「わたしからもお願いします」

「わかりました」

そんななか…全滅したと思われる地上より巨大なビームが発射され、ポドル基幹艦隊を飲みこんでゆく。

「地球北極上空に、高エネルギー反応。敵艦隊の一部が消滅していきます」

「消滅!？」

「最大望遠です」

「これは、グラント・キャノン!」

「グラント・キャノン!？」

「アラスカ基地が生きているんだ!」

「わあ! やったあ! うふふふ」

グラント・キャノンより発射されたビームは、ゼントラーディ80万の艦艇を飲み込んで消滅させた。

「マクロスならびにブリタイ・アドクラス艦隊全戦闘員に告げる。我われはこれよりグラント・キャノンのあけた空域をとって侵攻する。」

リン・ミンメイの歌が中継発信されている艦、および戦闘機以外はすべて敵だ!

…諸君らの検討に期待する」

私の彼はパイロットのイントロがながれ、ミンメイが歌いはじめる。歌に合わせ全バルキリー隊発進、続いてマクロス・ブリタイ艦隊が発進する。

ポドル基幹艦隊では、混乱の坩堝にあつた。

【なんだ、この映像は！】

【わかりません。

われわれの使用周波数全域にわたってながされています】

「射程圏内突入。反撃ありません」

「成功だ！」「全艦撃てっ！」

マクロス・ブリタイ艦隊一斉砲撃開始。

私の彼はパイロットを歌いおわると、カイフンがあらわれ、ミンメイに近づく。

お互いに手を取りあう…そしてキス…

【おおお…！】 【これは…！】 【男と女が！】 【うわあああ…！】

キスをしているミンメイとカイフンが離れ、小白竜のイントロがはじまった。

このチャンスに全バルキリー及び全艦艇が突撃敢行をしかける。

血路が更に開け、その道をマクロスブリタイ艦隊は突き進む。

マクロスやブリタイ艦隊よりミサイル、ビームが艦に対して撃ち込まれ集中してうけ、轟沈してく…

また各バルキリー等から反応弾が船クラスには撃ち込まれ、純粹水爆により、巨大な火花があがり、爆沈してく。

それに対して動きが鈍いボトル基幹艦隊…  
少しは抵抗あるも、なすがままにされてく…

シルバームーン・レッドムーンが流れる。

だが数の差はいかんともしがたい、

4000：1…

段々数が減るブリタイ艦隊、

愛は流れるが流れている…やっとカムジン艦隊も参戦、突撃敢行する。

勢いが増した。

この機を逃さず、ブリタイ艦隊、ラブ・ラミス艦隊による果敢な砲撃…

マクロスから前包囲に弾薬を惜しまず次々と反応弾やミサイルが発射される。

(ああ、やっぱり間に合わないか……)  
カオルはマクロスの接近をみてた。

「目標接近！」

「全反応兵器、スタンバイOK」

「護衛機各隊はただちに散開」

「ピンポイント・バリア、艦首へ収束」

「いよいよですな」

「うむ。マクロス・アタック！」

マクロス、ボドル旗艦に突撃してく。

ピンポイントバリアで、外壁を突きやぶり内部に侵攻。  
構造物が次々紙のように破られる。

そして、ボドル・ザーのいる中枢部に到達。

【プロトカルチャーめ！】

マクロス、デストロイドから全反応兵器発射…

それと同時に全方位バリア展開される。

【どわあああ！！】

ボドル・ザー、閃光につつまれる。

ボドル旗艦が爆発によって内部から変形し、  
やがて大爆発を起こす。

1400kmに及ぶ構造物の大爆発、周りを巻き込み広がる…

旗艦を失ったボトル基幹艦隊、  
また上位を失った艦隊は、



生き残った分岐艦隊クラスはフォールド敢行、

損傷をおった艦は地球の重力にひかれてく…

そして…マイ・ビューティフル・プレイスが流れるなか、  
損傷をおったマクロスが地球に降下していく…

(はあ……)

ルーロスを出し船内に入つてため息をついていた。  
分裂体を回収する為だったが…

「ごちゆじんたま、どうちたでちか？」

「いやさあ…機動要塞取得に間に合わなくつてさ…

二日あれば確実だったんだけどな…

あとは10日程フォールドしなきゃならないから…」

「フォールド？」

「ワープの一種なものさ…」

「ごちゆじんたま、10日間もワープするでちか…  
キャーティア星より遠いんでちね」

「あ、技術形態違うしなあ…主観時間と客観時間のズレはある？」

「ないでち」

「な、キヤーティアの技術だとワープ距離どれくらいかかるん？」

「しちゆりょうと、しつりよくに比例するでちが、3000光万年は小型挺くらちゆならかのうでち、記録されたでち」

「ふむ…」

(あとで組み込むか？)

「ま、いいか…今は回収して帰還が先だな」

「あいあい」

……

カオル報告

分裂体Aにより

アームド級空母

駆逐艦等

分裂体Bにより

ラプラミズ艦

反応弾

リガード

クアドラン・ロー

ヌージャデル・ガー

等

分裂体Cにより

中型砲艦等

本体：

取得失敗

ナギ少尉「始めて取得失敗したね」

作者「流石に1400km級はあの短時間では無理あるだろ…の回という事で」

ナギ少尉「けど月よりでかい機動要塞か…」

作者「こつちの世界にもつてきたら間違いなく、  
落着ユニットを打ち込んでくるね」

ナギ少尉「ねえ作者このサイズの機動要塞って、他にある？」

作者「ん〜…サイズが小さいが、イゼルローン要塞がある意味有名  
だろうな…」

あとはデススターか…  
けど1400kmというふざけたサイズではないしなあ…」

ナギ少尉「つまり、馬鹿みたいにでっかい要塞なのね」

作者「巨人、いわゆる人間の5倍サイズの人が運用するからそのサイズになる…」

というのがあるよな。

まあ…そこまできかなきゃでかくする必要は…

イゼルローンはあるか…

んんん」

ナギ少尉「作者が悩み始めたから…次回予告で…天元山はどうなった？、次回、マクロスより帰還…お楽しみにい」

話は少し遡り、

2001年12月3日天元山午前3時

やはり天元山は噴火しようとしていた…  
しようとしていたが…

噴火が未然に塞がれてしまった。

何故か？というと…

勢いよくマグマが上昇する傍ら、吸い取られているからだった。

異世界軍の作業により、天元山にできた溶岩ドームは破られ、  
パイプが更に内側の火口にぶち込まれ、

パイプはマグマが内部で冷えてつまらないように、  
温められて滞留所に導いてく、滞留所からマグマは冷やされて、  
岩石資材として処理搬入されている。

武は…

(こんな楽でいいのかな?)

と最大望遠で作業を見つめながら、老婆のいる村を見つめていた。

一応は疎開注意をだされたが、もちろん老婆は従わなかった。

なので万が一を考え2007B訓練小隊の実機行軍訓練、屋外野営訓練を兼ねて、派遣はされてきたのだ…

だが、前述の通り噴火は未然に防がれ、何事も今まで通りの生活を老婆は今後もおくる事ができるだろう。何事も今まで通りが1番であろう…

(うん…これでいいんだよな?)

老婆達の村は鉄原ハイブ陥落後、地域調査されBETAの影響無しとの事で、合法地域に指定された事も付け加えておこう。

2001年12月5日未明

「ただいまっ」と…

「マスターお帰りなさい〜」

「さてかわった事は？」

「天元山の資源回収済み、」

あとは月面攻略作戦が7日午前0時に発動可能になるよ」

「お、そうか、いよいよだな…」

1番準備が長かったかもな…月面攻略作戦」

「だね、軌道上からの高出力レーザーによる一斉射撃だもん。しかもピンポイントに向けての…」

「ま、480万隻による地球壊滅はみてきたけどな」

「はい？地球壊滅？」

「今回いった世界だね。」

まあ地球自身が崩壊しなかったのが、信じられんが……」

「マスターみせて〜」

「ん…」

ルースをだし、記録データを転送させる。

「うわぁ…えげつない過剰戦力だなぁ…」



「だろうな…普通そのサイズなら、  
5万隻くらいで十分地球は滅びるのにさ…」

と、鯖にデーターを出力してくと…

「はい？マスター、マジですか？」

「マジだよ」

「あ、……巨人族の運用する船なのか…にしても指揮艦のでかいな  
あ…」

4km、人間の約5倍の大きさ10m前後の巨人族、  
ゼントラーデイが操る戦艦にしてもでかいほうだ。  
単純に5倍の比率があるとおもってよい。

それでも800m級の通常世界でも巨大戦艦に匹敵する。

「なあ…これらを作るのに時間どれ程かかる？」

「サイズからすると、4000m級で最低2ヶ月はかかるよ」

「やはりそんなにかかるか…」

「そのサイズの建造に対応してなかったから、無重力での建造になるからね」

「ん…か…」

「プラットフォームができて、重力制御できてるならまだしも、何も無い空間での作業だから、あっちいたりこっちいたり…だしい」

「だろうなあ。」

あ、もしこのクラスを建設するなら？」

「……コロニー型建造ドック造ったほうが、後々量産体制とるなら早いよ」

「そうか……まあ…ん………  
とりあえず研究開発ようにマクロスと、4km級を1隻ずつ造ってみてから考えるか」

「了解、量産体制は？」

「あとで考えよう。短縮方法はプラットフォームくらいしかないん

だろ？」

「そうだね、プラントを増設しても多分短縮はしないし…」

「となると…持つてくる必要があるか…な？」

「ルース改造が先か…ま、とりあえずもうねるよ」

「おやすみい、マスター」

ということで、L5の基地の側での建設作業が決定した事になる。

時間は経過し…

朝9時起きると、

マクロス組の人員をシエルターからだす事になる。

まずは、

フォッカー少佐、柿崎は治療中の為そのまま医務室送りに、

(治ったら柿崎君はC-01入りか…)

その他統合軍は、

グランドキャニオン基地要員、後方支援の女性が比較的多かったが…

あとはウィンザー中隊、オプシロン中隊が柿崎加入時に。

その他ボトル艦隊との決戦時にも、

バルキリーパイロット23名回収できた事を付け加え、

これによりバルキリー航空集団が結成できる事になる。

デストロイド、陸軍パイロット達は6名程入隊する形になった。

だが…

「マスター、統合軍パイロットの安田猛さんなだけで…  
帝国の斯衛に在籍認められたよ」

「あちゃ…じゃあ統合軍というか地球側はこれ以上は無理か…」

マクロスは2011の話、この世界は2001年…十分ありえる事  
だった。

ゼントランに関してはまずはないが…

条件解除できるのが混血等が進むFやFの時代であろう。

さて…警備につく陸戦強襲型ガンタンクがつかけてくる。

また研究用につくっていた、様々なMSが戦艦ハッチに詰めかけて  
きた。

カオルも魔撃震に同化する。

こっからゼントラーディ勧誘の時間だった。

パワーでは通常警備につくターミネーター達が勝つであろう。  
が、取り押さえられる？というのは別だった。  
重量もないし、間接をキメるにもたらない…  
殺すなら別だったか…：

ゼントラーディ用に改造された、シエルターがをだしはじめる。  
改造つても中の調度品とか食事とかを5倍に調整、また固定等を施  
したものだ…

警備につくMS達がスタンボタンを握る。

シエルターに扉をつけ、

【ご準備できたか…】

バン！！

【うらああああ】

1番近いシエルターから女性ゼントラン達が襲い掛かってきた。

咄嗟にかわして、スタンボタンを打ち付ける。

その横からもゼントラーディが襲い掛かってきて、  
戦艦ドック内部は大乱闘に陥った。

生身で約2倍の近くのモビルスーツに挑み掛かってくる。

がヤドカリ達が操るモビルスーツは的確に射出型スタンガンや、スタンバトンでもって鎮圧していく。

やがて10分後…

数は多いものの、武器を持たない生身のゼントラーディ達は、鉄鎧のモビルスーツ達に鎮圧されてしまった。

(前回がうまく行き過ぎたんだよな…)

【殺せ！！生きて辱めは受けぬ！】

【隊長、諦めましょうよ…それに監察軍とは違ったバトルスーツみたいですし、地球とかいう相手でもなさそうですし】

【直衛艦隊所属なのに、なによわねを！】

【え〜よろしいっすか？】  
と同化解除して話だす。

【！！マイクローン！……ここは地球か？】

【ま、そうですね…別の世界ですが】

【別の世界だと？】

【はい。是非とも戦闘にあふれるこの世界を救ってもらいたいで、死が確定していた世界より引っ張ってきたわけです】

【ほう…戦闘にあふれるとな？それこそ生きがいだ！

してその相手とは？監察軍か？】

【今から流れる異種生命体との生存競争です】

映像が流れる…

【ふむ、面白い…このミリア・ガード協力しようではないか】

【隊長が協力するならわたし達もね】

【ありがとうございます…で、すみませんこんなに大勢の美しい方々を、

勧誘するつもりはなかったの…

施設が整ってません。

今拡張工事中なので、今しばらくマイクローンになって頂きたいん

ですが…】

【期間はどれくらいだ？】

「11号？」

「2週間程で出来上がるよ」

【2週間程です】

【ふむ…まあ良いだろう】

マイクロン化してもらいました。すると…

【か、可愛すぎる】

【ちびっこになったああアアア】

【隊長、おちびさんですねえ】

【マイクロンなんかきらいだあああああ】



【あと、翻訳装置つくっておきましたので、つけて下さい】

とネコミミ型との口語翻訳装置、ブレスネット型網膜投射型翻訳装置を、

キヤーティア謹製でつくっておいたので一人ずつにわたしていった。

「ふ〜」

「おつかれさま〜」

「早めにゼントラーディ用の勧誘ビデオをつくってな」

「了解…戦術機観点からのがいいかなあ……………」  
と11号が思考の渦に入っていた模様なので…

取得技術の具現化にはいる。

戦艦は今朝方作製を命じたので…

(まずはモンスターだな)

デストロイド HWR-00-Mk2モンスターの具現化にはいる。

10分後…

その巨体を表したモンスター…

40cm液体推薬キャノン砲4門、

両腕の3連対地ミサイルランチャーを備えている。

そのフル装備重量は285t、

実に二足歩行の機体としたらもの凄く重いものとなる。

(ん〜だから甲板をぶち抜いたのか…)

都市部に配備されたら、その足で道路をぶち抜き、

下水道までいく重さと思えた。

(火力は満点なんだけどね…)

だが二足歩行にこだわった為機動力が劣悪過ぎ、

ホバー移動でも最大時速15kmの移動速度しかない。

(改修すべきでしょ で次回攻略の……)

下半身の脚部をタンク式に変える…

装甲もさほど重さ変わらないため、ルナチタニウム合金製に…

自重がその巨体を支える為28tに増えたが、

モンスター改がここにうまれる。

6輪の無限軌道でその巨体を支え、

テストしてみないとわからないが、時速100kmまでは出せるか

な？と…

勿論沼地等対応のホバークラフトも装備済みであった。

ホバークラフトの場合対接地面積が増えれば増える程安定する。

なので車両型のほうが都合がよかった。

「誰かテスト頼むわ」

「マスター了解」

テスト場に引き出されていく…

(で次は…)

デトロイトシリーズではスパルタン、ファランクス、  
ディフェンダー、トマホーク、を取得していた。

(肉弾格闘戦、対空ミサイルランチャー、対空戦車、主力戦車ねえ…  
肉弾格闘は興味あるけど…)

あ、あとファランクスとディフェンダーか…)

今運用している対空直上系は別として、  
対空が不足しているのは事実だった。

なのでとりあえず各1機ずつ生産を命じて、後ほど改修をつけるよ  
うな形に…

(あとはバルキリーやゼントラーディ用のか…)

とりあえず実機、VF-1Sを精製し始めた。

バルキリーは宇宙空間戦闘強化を補う為に…  
でいったが、実際のところ、

ゼントラーディの方が宇宙空間における機体性能は優れてる。

グラージ、ヌージャデル・ガーヤ、クアドラン・ローに限るが…

VF-1Sを精製し終えたので、リガードの精製にとりかかった…  
限るが…の原因は…

(ん……いいのこれ?)

できたりガードを、ゼントラーディの方をお願いして乗ってもらったが、

確かに環境というか操縦席が劣悪だった。

下手したら腹に膝があたる。

なので苦勞して操縦する…というものだったのだ。

やはり別の機体が良いって事で言われてしまった。

20mの大きさを誇るがもったいないない…

☆作注 wikiでは16mとでてますが、どうかんがえても無理です！

操縦性能の悪さにつきる…って事であった。

戦闘ポットでは、グラージ、  
バトルスーツでは、  
ヌージャデル・ガー、  
それぞれの機体を精製すると、

クアドラン・ローの方が好評とは言えよう。

グラージは25mを誇る戦闘ポットではある。

（作注 同じくwikiでは16mとでてますが、  
どうかんがえても無理です）

が、クアドラン・ローの方が好評であった…

メルトランデイが多数しめるから、  
しようがないといえばそうかもしれんが…

あと技術とすると、イナーシャル・キャンセラー、  
純粹水爆による核反応弾といったところが目新しい。  
純粹水爆による為、残留放射能がほぼ0になる。

（重慶で使われてたら、μSVクラスだったろうにな…  
ま、しようがないか…）

勿論その他OTMと呼ばれるフォールドや熱核エンジン等の技術も  
ある。

（一通り検証したか…

とこんな時間だし明日の用意とりかからないと…だな…ん…）

月攻略作戦に対し、反応弾を、共通規格のミサイルとしてもっていかうとしよう...

今日明日の移動までに精製しておくことにした。

.....

カオル報告

ノプティ・バガニス

SDF-1マクロスアームド仕様

モンスター改テスト開始

その他機体は作製のみで後程...

ナギ少尉「ミリア・ジーナスさんの登場です！」

作者「いや…ミリア・ガードさん…全くの別人だよ!!」

ナギ少尉「えゝ別人？」

作者「……オリの名前がその印象が強かったんだよ…  
ま、それだけだ…」

ナギ少尉「作者のネタきれだね」

作者「……はいそうです」

ナギ少尉「作者が苦しくなったので…  
別の話にふってあげるわ…、  
と…この話では、マクロスからは、モンスターをおしているみたい  
ね」

「重砲撃タイプ、カオルの運用方法だと使わないわけがないので、  
改造を施す形になりました。」

移動さえなんとかすれば…美味しい子です」

ナギ少尉「それで二足歩行から重量が分散できる、車両タイプに下半身を変更したわけね…」

作者「モンスターの有効性はケーニツヒ・モンスターへと、発展して行きましたのでわかると思います」

ナギ少尉「さて物語は、次は月に場面がいきますので…次回、オペレーション・ムーンストライク、お楽しみに」



2001年12月6日

### 月面周回軌道

月を回る周回軌道近辺では、巨大な物体が所定位置に向け、ブースターを吹かし微調整をおこなっていた。

コロニーレーザー…

異世界軍ではアイランド1、2、3、4とつけられたこの巨大な構造物である高出力レーザー装置は、月面のハイヴ直上において、月の自転に合わせて同調作業に終わっていた。

3000

ラグランジュポイントでない箇所は、重力に若干引つ張られるが、反重力装置によりその引力は消され、完全に同調作業のみになる。

月面にはフェイス7、8のハイヴが4つあり、それぞれをコロニーレーザーが狙っていた。

その周りを宇宙軍艦艇が護衛の為ついている状態になる。

もっとも軌道上に対する攻撃手段が落着ユニットでの突撃しかない

BETAだから、  
その迎撃用とも言えよう。

もうまもなく、この世界の人類が夢見た一幕があがる…

同日約6時間後…

国連NY本部の総会議場は騒がしくなっている。

人類の夢である月攻略作戦、  
オペレーション・ムーンストライクの解説付き実況中継がおこなわ  
れている最中であつた。

異世界軍から解説者としてヒルダ女史が出席、  
護衛にC-01がついていた。

「まずは一射目で、ハイヴ構造物を破壊、主縦穴1km近くまで貫  
通いたします。再チャージを行い2時間後に第2射目、繰り返し再  
チャージを行い、  
第3射目で月のオリジナルハイヴ、サクロボスコ以外の反応炉を破  
壊、  
第4射目でサクロボスコの反応炉を破壊、  
月の攻略作戦を終了いたします」

「ハイヴを破壊して作戦終了というが、残ったBETAはどうする  
のかね？」

「反応炉とそこにあるG元素を消滅させれば、後は断食になりますので餓死をまちますわ」

「それ地球のハイヴにできないのかね？」

「残念ながら大気による減衰がありますので、軌道上からはさほど地下にたいしての効果が認められませんわ。また生態系にどんな多大な影響与えるか計算できません。地球人類を滅ぼしてよい…なら使えるかもしれませんが…なのでこのコロニーレーザーによる攻撃は、大気がない、人類がないのが条件になってますの」

「つまり火星は大気があるから…」

「はい、カオル大将から火星はコロニーレーザーでの攻略は行わず、次の第五惑星、木星の衛星攻略へと移動するとの言付けを承ってます」

ザワザワ

「むう火星は戦術機が必要って事か」

「今回の実況中継は、あくまでも月攻略作戦についてのになりますので、

後日火星についてはご説明があるとおもわれます。

そろそろお時間になりますのでよろしいでしょうか？」

時間は日本時間の、まもなく7日の0時をさそうとしていた。

「それでは皆様、お待たせ致しました。オペレーション・ムーンズ  
トライクの、  
カウントダウン入ります」

スクリーン上にコロニーレーザーが映し出され、2分前からのカウ  
ントダウンが始まる。

「リアルタイムで流れてきてます」

コロニーレーザーの開口部から光がもれてきて、カウントダウンが  
0をさしたとき……

「おおおお！」

画面が明るくなり、コロニーから光の筋がでる。

中継カメラがスパンし、ハイヴ構造物が崩れていき……

光の筋が消えてくと……

その跡地には主縦穴があった……

主縦穴はコロニーレーザーにより更に広がっていた。

画面はしばらく写したあと、

他のハイヴにも切り替わり、同様に主縦穴を曝しているのが見える。

「それでは一射目について結果ができましたので、ご説明いたします  
わ。

予定通りの出力で各ハイヴを直撃、構造物を崩壊させ、

ムーンハイヴ1の地下1・3kmまで到達、  
ムーンハイヴ2の地下1・5kmまで到達、  
ムーンハイヴ3の地下1・7kmまで到達、  
ムーンハイヴ4の地下1・8kmまで到達いたしましたわ

「いいかね？」

「はいどうぞ」

「すぐさまG弾の追加大量投入を提案するんだが」

「そんなに焦らずとも8時間後には月攻略の結果がでますわ。  
また異世界軍ではそんなに、  
後々影響が残るのは使いたくないですもの」

「……主縦穴広げてるくせに……」

「あら、後ほど恒久都市に使う等色々使い道ございますわ」

「……ふん」

「他にはございませぬわね？約2時間後に第2射の発射の中継を行

います。

まだ先は長いですから、ひと時の休憩をとってください」

休憩を告げると、ヒルダ女史によってくる各国大使、  
ご要望等だろう……

ルース改

船内部では、月のほぼ断面図を投影していた。

月の内部の様子はルース改、キャーティアの力によりまるわかり  
で、  
各方面に情報を伝達していた。

カオルはルース改から、ティアンム提督の指示を聞いている。

『アイランド1、第1射目問題なし、エネルギーチャージ10%』  
『アイランド2、第1射目問題なし……』

「とりあえず問題なしと……」

「ごちゆじんたま、居なくっても大丈夫でちよ」

「ま、まあとりあえずな……それにいざって時には反応弾を使うか

らさ…」

と後方に停車しているのビッグワンを見た。

貨物車両には反応弾がところせましと詰め込まれている。

15両に積めるだけ同化して作ってきたので、510発積載されていた。

勿論共通規格はセイバーフィッシュからも発射可だ。

「まあ…そうでちね…ならごちゅちんたま、

空いている時間でワープドライブつくってみないでちか？」

「ん…そうだなあ」

さて、ワープドライブの作製のがたので説明いれろと…

まず常用的に使われているチューリップ…

ワームホールの種類で、

これは門と門を結ぶもので、本来はでる座標門を決める、ジャンパーという演算装置の役割をする人が必要だった。

または純古代文明作品。

が、門を固定する事により演算ユニットは必要なくなり、デストーションフィールドを形成し空間保護する事により、門があるところならどんなに距離がはなれてもタイムラグ無しに…になる。

次にワープ。ワープアウトに事故が発生する確率があるが、主観時間及び客観時間が差がなく長距離移動できるものだった。ワープドライブの性能じたいに困りけりともいえよう。事故になるケースは、出現した場所になにか物体があるときに対消滅がおこる事になる。

なのでワープフィールド内部で、出現場所の探査可能なら、探査し、緻密な計算をし、ワープアウトをしなければならぬ。または座標をずらす事にもなる。

次にフィールド航法…

これは周りの空間ごと移動し等価交換で入れ替える為、ワープに比べて緻密な計算はいらない。

ただ座標を決めるのに演算能力は必要であり、重力の影響を受けやすいので惑星近くは好ましくはない…という事である。

今回提案してきたのがワープのメインエンジンである、キヤーティア製のワープドライブの作製であった。

「ん…じゃなんかあったらよんでな」

「がんばれ〜ごちゅじんさま」

船外に出て、虚数空間より資材をだした。同化して、ワープドライブを形成しはじめる。



(ん?)

ルーロス船内に入り、

「なあルーロス、大きさ等はどんなもん？」

「ごちゆじんたま、るーろすクラスあたりのワープドライブの、設計図みる？」

「多分みた方がはやいな、出してくれ」

設計図がでてきた。

「若干ボディを延ばさなきゃいけない…で性能はどんなもん？」

「ぼくにつけるなら、一回のリチャージで、星図ありで100万年まで1時間の跳躍で可能でち。リチャージ時間は24時間でち」

「100万年か……」

「ごちゆじんたま、星図ありでちよ、ありで」

「?一緒だろ？」

「センサー内なら一緒と断言できるでちが、センサー外は断言できないでち」

「…そうか…センサー有効距離はどのくらいだ？」

「10光年でちね」

「10光年か……ん？10光年??」

「そうでちよ…けど詳細まではわからないでちがね、調査外でもワープ可能範囲とおもってください」

「…わかった……とりあえずワープドライブ作るか…」

再び船外へでてワープドライブを作製し始めた。

（あれ？バーナード星系って…何光年だっけ？）

…

コロニーレーザーから2射目がハイブの主縦穴にそれぞれ突き刺さり、

穴を拡張させつつ更に奥へと入っていく…

月のBETAには反撃手段がなかった…

光線級はいない。

人類の航空爆撃に対する防衛反応として進化したものであり、原種はいるものの、まだ対応進化に追われているだろう…

しかし、1射目発射から3時間半経過する時BETAの行動に異変が起こりはじめる。

主縦穴を塞ぐように集まってきたのだ。  
種族防衛犠牲的な予定外の行動をとってきた。

異世界軍では感知してたが、撃つてみない事にはわからず、3射目が各ハイヴに突き刺さる。

すると…3射目には到達予定だったムーンハイヴ2が、BETAの肉厚に阻害され、突き進むも残り500mの地点で到達できなかった。

国連の総会議場は騒然となる…

「落ち着いて下さい…計測結果がでたでましたわ。」

…プランに変更が入りました。アイランド2は再チャージ後4射目を発射いたします。

アイランド1は引き続き4射目以後、6射目まで行う予定になりましたわ」

「G弾の追加投入を!!」

「コロニーレーザーの出力なら問題ございません。

ただ、予想外の防衛反応がございました事は事実ではあります。けど、それだけですわ」

予定外のアイランド2の4射目にてムーンハイヴ2の反応炉は破壊できた。

あとは、ムーンハイヴ1がのこっている。

ひっしに盾になる為に主縦穴に詰めてくるBETA。

だが、その肉盾を焼き付くし溶かしながら、

5射目にて残り200m地点に到達…

そして6射目にてムーンハイヴ1、サクロバスコハイヴの重頭脳級を溶かしきった。

「これにて、月面はハイヴが存在しなくなりました。

後はBETAの活動停止を待つだけになりますの」

約500万のBETAを残して月攻略作戦は終了する。

国連総会議は閉会し、以後月面の経過報告がもとめられる事になる…  
異世界軍は月面は監視体制に移行する。

ワープドライブを作製し終わり、ルース改を残して、

ビッグワンに乗車し帰還するカオル…

ルードス改は月の内部まで監視できる唯一の機体の為、  
今回は残していくことになった。

カオルは次のハイヴ攻略作戦に向け準備に動き出す。

…

カオル報告

月のハイヴの破壊を確認

月監視体制に移行

ルードス改にワイプドライブ搭載改造

作者「オペレーション・ムーンストライクにより、  
やっと月のハイヴは破壊できた状態ですね」

ナギ少尉「で、残ったBETAがコアを持っていてハイヴを再建する…」

作者「……多分大丈夫…ルースがすぐにみつけてくれるさ…」

ナギ少尉「けど、マクロスの世界に行かなくとも、  
今回はよかった結果みたいね  
反応弾も使わなかったし」

作者「いざという時のメルトラン達だったけどな…  
彼女らは別の機会に…」

ナギ少尉「あゝ…火星ね！」

作者「……え、えつとそうそう…次回のお知らせ」

ナギ少尉「作者にげないで。ネタ変えるから…」

オルタ5フラグは消えてるけどバーナード星フラグ解禁みたいね」

作者「調べてみたら10光年以内だったからびっくりしたわ…  
まあ…良いけどさ」

ナギ少尉「作者は他星系まで物語を広げるのか？

さて次回…やっとなあるフラグを消化よてい…お楽しみにい」

第156話 月面監視の間に… 投稿日20110801

2001年12月7日夕方、

カオルのつたビッグワンが横浜基地へと帰還する。

ビッグワンが戦艦ドックへと停車すると、貨物車両との連結は解除され、待機所へと進んでく。

貨物車両から核反応弾がリフトによって、弾薬貯蔵庫まで運ばれていく。

勿論起爆信管は抜かれている状態である。

またミサイル自体も工夫はしており、万が一の撃墜爆発時においても、

ミサイル発射時に信管が発動位置に装着される為、核反応は起こらず、

核燃料自体が反応おこるまでは自然界にあるものである為で出来ており、

暴発しても放射能はださずに、ミサイル燃料も開放露出で消えるようにはなる…

そのような防護策はとらなければ、横浜基地にとても搬入できたものではない。またマクロスにおいても詰め込めたものではなかった。



もし安全策がとらずに暴発誘爆したとしたら……  
マクロス艦内部で誘爆と仮定すると、周囲50kmごと消滅する可能性もある。

そんなこわさもあるが…基本的に信管が接続されない限り、即応性にはかけるが、反応弾は反応弾ではないから安心して基地内で保管する事ができる。

(さて…)

少しレポートを見てからいくことになる。

二日前にテストを頼んだモンスター改において、

旋回能力は7度/1Sなるも、行軍能力が80km/hで一般的速度を有するのが確認とれた。

勿論……キャタピラによるものであり、道路はほじくられるものではあるが…

少なくとも甲板をぶち抜く等はない。

(おっし良いんじゃないの?)

モンスター改、生産ラインにのる事が決定する。

(そういえば…)

統合軍パイロット達の存在がある。けどバルキリー隊編成には…

(ん〜……)

と少し考えこみだした。

まずはマクロス世界のうりの、エネルギー転換装甲がバトロイド形態のみ…ということであった。

バルキリーの紙装甲をガンダムでいえばフェイズシフトさせ、

ある程度の装甲、チタンセラミック合金並に引き上げる技術なのだ。戦術機と比べても、紙装甲である。

もつとも、バルキリーV.F-1は戦闘機の進化した形態であり、遠距離レーダー範囲から叩く、

バトロイド形態は、巨人族に対抗するためのあくまでも進化中であった。

MSは中距離〃視界内から叩くでコンセプトもちがうので問題は無いとはいえたが…

あと最大の難点、宇宙空間における熱核エンジンの燃費の悪さだ…MS以上の機動力稼ぐのに強制推進剤をかなり消費する事になる事になる。

ファストパックをつけてもその分稼ぐ事になるが…

結局は、(熱核バーストまちか…)とのことになった。

反対にクアドラン・ローは…

(結構完成度が高いな…オリジナルハイブ攻略あたりで使うか?)

レーザーが付いているので、敦煌ハイブ攻略には使えないが…  
装甲素材をルナチタニウム合金に変更、耐久性をあげ、生産する事にした。

イナーシャルキャンセラーの整備稼働率を100%にもっててく事はたやすかった…

(ま、そんなところか…あとは課題のだな…)  
重慶基地の放射能と機動要塞取得失敗がある。

(……放射能汚染かたずけるか…となると…)

「じゃ、また取得いつてくるわ」

「いつてらっしやい…月は？」

「多分2、3日で帰ってくるよ。欲張りは今回しないし」

「はい」

世界扉を形成し、わたる…

～～宇宙戦艦ヤマトの世界～～

ここは地球、  
が……地面が露出し遊星爆弾の直撃で大地が焼けただれている。

地表は10月だというのに気温5度をさしていて、  
氷河期並の温度におちいつて、海水は緯度が高いところで凍っていた。

ガラミスのはなつ遊星爆弾の影響でチリがまい、地球は今だ分厚い雲に覆われていた。

その為に太陽光線は遮れ、気温は上がりずどんどん下がり、  
海水は緯度が高いところで固まり、大地は水がなくなり干上がっている。

宇宙から見れば赤く染め上がった地球が見えているだろう…

地表は遊星爆弾が来なくなつたとはいえ、  
高い残留放射能に覆われ、その放射能が地下へと浸透しつつあった。  
刻一刻と地球人類は滅亡に向かいつつあり、  
エクソダスしようにも、宇宙艦艇はことごとくガラミス帝国に破壊されていた。

そんな状態だったが、ヤマトの冥王星攻略により、遊星爆弾が去年の11月以降こなくなり、  
地球人類の命は若干延長された。

が放射能汚染は既に手遅れの領域にもなっていた。

汚染スピートの拡大は無くなったが、  
地下都市にすむ人々は自分の命の期限が刻一刻とわかるようになり、  
他の地下都市にすむ友人へ最後の通信をおくり…  
途絶える日々を過ごしていた。

5月頃から地球にはガラミス帝国の偵察、襲撃はなくなりかろうじて延長された地下都市もある。

が、まだヤマトは帰還してない…

人々は地下深く、エクソダスしようにも宇宙船ドックにすら入れず、  
刻一刻と…地球人類滅亡まであと…

カオルが降り立ったのはそんな地球であった…

時に西暦2200年、宇宙より待ちに待った希望の光が舞い降りる。

ここは放射能防護服をきても1時間程しか持たない、  
放射能汚染された沖縄近くの地下秘密ドック…

ヤマト発進後の遊星爆弾の集中投下により汚染された区域であった。

ドック内部は放射能汚染濃度高を表す緑のサイレンが自動で回っている。

カオルがたどりつき侵入してまつと…

(お…人がきたか…)

そこに、ガチガチの放射能高度防護服をきた人がドック内部に入ってきた。

ドック内部の管制室に向かうと、室内灯を点灯し、操作パネルを弄りはじめる。

ゴウン、ズズズズ…

地殻が割れはじめ放射能汚染大気の流入が始まる。

管制室の放射計の数値が10メガSVを一瞬で振り切ったが…

直ぐに数字がありえない速度でおちてくる。

ドック内部の放射能警告サイレンの光がとまった。

ゴゴゴゴ

波動エンジンの音が鳴り響く…

「ヤマトだ！ヤマトがやりやがったぞ！！」

それまで放射能防護服に身を包んでいた人が、被っていた面を投げ捨てマイクに向かって怒鳴っていた。

ヤマトが完全にオープンした隔壁からドックへとゆっくりと入ってくる。

コスモクリーナーDを作動させ、周りの放射能汚染を除去しながら

…

ヤマトはゆっくり固定ブロックに接地し波動エンジンが停止する。すぐにロックの外れた隔壁扉から、人々がまぢきれないとばかりに走って進入してきた。

「ヤマト！ヤマト！ヤマト！ヤマト！」

「救世主！メサイヤ！」

「おかえり！！ありがとう！！」

「ヤマト！ヤマト！ヤマト！」

まだ艦体が冷えきってないにも関わらず、おわず艦体に抱き着き、余計な火傷をおう人々もいたぐらいだ。ヤマトの進入したドックはお祭り騒ぎになる。

地球に残っていた人々の希望の船、宇宙戦艦ヤマト…9月6日、日本秘密ドックに帰還した…

ヤマトの艦体の熱が覚めると艦のハッチが開く…

「ヤマト！！ヤマト！！」

艦のハッチから古代進を始めとして、乗組員達が歓迎に答えておりてきた。

「雪!」

「お父さま、お母さま!」

「おお…ゆき…」

「島にいちちゃん!」

「無事だったか!」

「にいちちゃん会いたかったよ〜」

「ヤマト乗組員諸君!! やってくれたようだな」

「はっ! 総司令官閣下!」

「して…このコスモクリーナーの効果の程は…?」

「閣下、わたしめからご説明いたします…」

さて、ヤマト帰還後なんにおいても最優先されたのは、コスモクリーナーDの量産になる。

コスモクリーナーDは有効範囲内の放射能完全除去を行える。が有効範囲内の話。



その為帰還時のプロトタイプ作成には生産の簡略化及び改良点が見  
つかつており、  
地下ドックの隣には艦載機生産工場があり、すぐさまその使われて  
なかった工場機械でもってコスモクリーナーDの量産にはいる。

確かにコスモクリーナーDは複雑なシステムであったが、  
作り方さえわかれば量産に向くたやすい装置であった。  
勿論、ヤマトを作りあげた技術でもってだが：

なんにおいても設置稼動が急がれたのが、放射能が到達し、連絡が  
途絶えた地下都市群、またはギリギリで耐えている都市である。

今だ地上には防護服や宇宙船を用いても、近寄れない地域が多数い  
や殆どであった。

コスモクリーナーDの量産1号が1時間後には出来上がり、  
(はいー！)

すぐさま稼動させる為に輸送機につまれて飛びたつていった。

それからは、20分1装置の割合でコスモクリーナーDが生産され  
てく…

まさに時間との戦いであった。

ここの秘密ドック地下にある地下都市の人々は放射能がまだ除去し  
きれてはないとはいえ、

被害が広まるのが収まった訳だが…

生き残りはたった1000万人…

まさに時間との戦いだった。

しばらくするとまずは日本の地下都市が除洗された…

そしてアメリカの4都市、イギリス、フランス、ドイツ続々と各地下都市群から感謝の連絡がはいる。

手遅れ全滅の地下都市もわかってくる。

遊星爆弾が集中して狙われた地下都市もあったのだ…

二日目

カオルが取り付いて取得に翌日になる…

放射能除去以外にもコスモクリーナーDの本領は発揮する。

天空に舞い上がるチリも吸収し始めたのだ。

それにより太陽が大地へと届き始め、気温があがりはじめてきたのだ。

地球は復興への第一歩を踏み出しているのだ…

放射能汚染区域にある各工作機器等も使いはじめられる様になる…

元々地球人類は300億近くまでいたが、確認が続々とれ生存者は10億人まで落ち込んでいた。

が、残された彼らには膨大な利用可能な土地、資材、機械等が残さ

れたのだ…

また…ヤマト乗組員の戦死者、殉職者の国葬が行われた。

沖田艦長を始め、尊い犠牲者のもとヤマトの航海は成功したのだ…

そんな中、カオルは技術を取得し終わり世界を渡る

…

カオル報告

宇宙戦艦ヤマト

コスモクリーナーD

イスカンドル技術

作者「という事でヤマトフラグを消化しました」

ナギ少尉「…ガラミスは？デスラー総統どうしたのよ！」

作者「…多分というか距離感が1番長い戦闘にもなるしさ…」

ナギ少尉「ドリルミサイルで波動砲を突撃してくるじゃないの！」

作者「……楽な方法で取得できるならそれにこした事はない」

ナギ少尉「沖田艦長は？病死するじゃない！」

作者「ああ、あの人復活するし。国葬した後でな…」

脳死にいたってないとかでさ」

ナギ少尉「え…？」

作者「まあそういったワールドなんだよ。

放射能汚染あるのに、波動砲の砲門で大地の風をつけるとかさ…」

ナギ少尉「えっ……SVの数値が低かったとか……」

作者「見えないんだよ？」

放射能は……さ……住めない数値さしてるのにわざわざ生身でたつか？  
普通」

ナギ少尉「カオルはたつよ」

作者「人外だからな」

ナギ少尉「沖田艦長も、古代君も島さんも人外だから……ね」

作者「……クッ」

ナギ少尉「さて、次回は……いよいよコスモクリーナーフラグ消化で  
す。お楽しみにい」

作者「ふむ人外だとすると……ぶつぶつ」

第157話 ヤマトの世界より帰還 投稿日20110803

2001年12月9日未明

「ただいまあ」

「マスター、お帰りなさい」

ハンガーデスクに向かい、データをいれ込み始める。  
様子を見てた11号から、

「マスター、とんでも技術手に入れたんだね」

「コスモクリーナーDの事?...結構すげえよな...」

ヤマトの波動エンジンもすごいが、コスモクリーナーDの方がすごかった...

その実力も目の前でみた...

有効範囲内の放射能除去、及び有害と思える条件設定で除去が可能なのだ。

その距離半径50kmにも及ぶ。

たった50km?だと思っただろう…

いや50kmはすごい。

横は普通だが上下左右とわずの球形が効果範囲なのだ。

遮断や、遮蔽などとしてあつてもだ。

その効能は、カオル自身が目にやきつけてきた。

また有効範囲内に流入してきた大気も浄化可能となっている。

浄化した空気が外にながれ、

効果範囲外においても流入流出により大気の浄化は可能だった。

そして… BETAの汚染によるものも除去できる可能性が大。

ここ重要ですね…

また、

重力が変になった場所も可能?

といった話になる。

さてはおき、

基本BETAの体液等に汚染された大地等は焼却…

つまり高熱による殺菌する必要がある。

黒ずむまで大地を焼く必要があるため、その焼却に使う燃料の代替も開発された位だった。

また焼却による二酸化炭素増加及び、気温上昇も問題になっていた。異世界軍では土を運びプラントを使った浄化を行ってはいたが、コスモクリーナーDを導入すると、有効範囲内の浄化が可になると思われる為、その必要がなくなる事にもなる。

ついでに、BETAの汚染の話題になったので、死骸についてだが、その大量の死骸の有効利用の研究も進んでいて、

食用肉等に利用等も進んでいた。突撃級はワニ肉に似た味がしておいしい。流石に兵士級は処分されることにはなるが…

話をコスモクリーナーDに戻すが…やはりとんでも技術と思えよう。なにはともあれ…

「とりあえず実機つくるよ…月はなんも進展なしだよね？」

「まだハイヴ破壊してから丸二日にならない位だからね」  
「そんなに動きはないってきてるよ」

材料の元になる鋼材と同化し始めた。

「そろそろ餓死してもよさ気なんだけどな…」



「人間も二、三日絶食しても餓死しないし、最後に反応炉で補給したのもいるだろうし…」

形を形成する。

「まあ、そうだな…気長にまつか…その間にやる事をやるとして…」

「まずは放射能汚染をだよね？」

内部機構を形作る。

「このコスモクリーナーDでだな…とあとちよい」

「つくづく思うけどマスター人外だよ…」

「それは認めるさ…と…できたてはやほやコスモクリーナーD量産型の完成！」

「おお〜」

ヤマト本編にでた猛毒性のガスが出る点を改良、生産性の向上をおこなったタイプになる。

本編終了後にいち早く全世界へと生産しばらまかれたタイプだ。

「マスター、実動検証は？」

「朝になったら重慶基地だな……」

「了解、お休み」

翌日……

重慶基地内部にチューリップで直接転移し、エアロックの外の地下一回汚染エリアにでて、コスモクリーナーDを虚数空間からだし、電源を繋げ設置作業を終わらした。

「じゃ11号、稼動してくれ」

「了解、マスター」

動作音をあげコスモクリーナーDが作動しはじめる。

するとガイガーカウンターの値がみるみる内に減ってくる。

380SV/毎時をさした数値がぐんぐんと下がっていき……

1SV/毎時を瞬くまに下回り、強度ガイガーカウンターでは計測不能になる。

低度ガイガーカウンターを変えると…

数値は自然界の数値辺りの0・03μSV/毎時に一気におちてた。

「改めてみると……凄いやな…」

「マスター、これどうゆう風に運用するの?」

「ん…そうだなあ…」

ザメル並の大きさのコスモクリーナーDをみて…

(ギャロップか?)

「とりあえず、ここにそのままと…あと中継基地に二ヶ所だろ?でその間の区間は移動できる艦船で放射能浄化してまわる形だろうな…」

「ギャロップ?」

「そそ…カーゴにのっけて、いざという時は逃げれば良いし…重慶基地のここでもいいよな?」

「うん」

「じゃ…あとはBETA汚染のほうをみないと…まだ浄化作業してなかったよな？」

「建築中の場所以外はね」

で、表にでてくると…以前はクレーターだらけだったハイヴ跡地の、平野部に作られた重慶基地の周りは、クレーター部は整地してあった。

「11号、戦闘直後で汚染が酷い箇所は？  
整地されてない部分がいいな」

「記録からみるね……こつち」

基地から8Km辺り離れた部分まできた。

この部分はまだクレーターが補修されてなく……

「うん…浄化されてるな」

土を掘って確かめていた。

BETAは死亡しその体液が外にでると、土に染み込んで、生物が育たなくなる死の大地になる。

その有毒な体液は量によって違うが、突撃級1体の死体からでも、むこう30年分の量が大地にしみこむことになる。

その体液30年分がコスモクリーナーDの力で浄化されたのだ。

「重金属類は残ってるよ〜」

光線級封じの重金属雲…その影響はやはり重金属中毒となっている。

が…コスモクリーナーDでは資源として回収はされていない。

「ま、こればかりは地道に回収、ろ過、分離するしかないよな」

「だね…幸いシステム自体はできてるから、  
現地で作業する形にもってけるし」

プラント以外で、  
単独で土壌中の重金属を分離回収するプラントもどきが出来上がったので、

あとは現地での作業まちとなっていた。

システムは簡単である。  
土をプラントもどきの中にほつり込み浄化された土を戻すだけである。

また作業用MSには重金属センサーが付いていて、汚染度が視覚で判断できるようになっている。

なので単純に色が濃くなっている土壌を、プラントもどきに大型シ

ヨベルでほつり込む形になる。

すると重金属が土から分離され資材となり、有毒性がとれた土が出てくるわけだった。

また作業の補佐として、衛星画面でも重金属汚染濃度の、大まかなのがわかるようになっていたため、作業地域の選定の効率化にも役立つだろう。

「とりあえずカーゴに載せてお掃除タイムか…」

B55ハンガーの戦艦ドックに移動し、早速ギャロップのカーゴに搭載の形を整える。

また関東以西いや、横浜ー新潟ライン以西の復旧についても、重慶基地完成後には、避難地域からの指定解除の為の、手助けしなくてはならない。

現在帝国臣民の難民2600万人は、5基のコロニーにすべて移動し新たな生活を行い始めた。  
自立型コロニー2基、工業用、農業用、観光用、これらがすべて帝国の新たな領土となっている。

その何割かは元の生活に戻りたいだろう…  
その為に汚染等は除去しておかなければならない。

「明日には3隻できるよ」

「じゃ、中継基地設営に合流と、  
中国浄化担当と、西日本浄化担当か…」

「了解、マスター」

「その次のから、重金属分解隊だな」

「了解マスター、西日本のBETA汚染除去すんだらそのまま大陸  
派遣？」

「朝鮮半島からだな…」

と浄化の話は進んでゆく…

コロニーの話題がでたのでついでに現在の状況をいれと…

現在メデューシン級を10隻に増やし帝国海外の難民を、  
コロニーに送り届けている形になっている。

現在統一中華戦線の約3100万人の難民及び、  
大東亜連合の約8400万人の難民の受け入れている形になっ  
ている。

あの元中国では約6000万人の難民が発生し、今は減って約3100万人の難民になっている。

しかし、あの元中国には73年当時には8億人を越える国内人口がいたのである。

しかしその1割にもみたない人口しか、難民が発生できなかったのである…

その撤退戦の凄惨さはおしてしるべきであろう。

またアフリカにマストライバー施設及び駐留基地の建設が決まり、現在建設作業グループのせたトレインギャロップ群が、インド洋沖を行軍中だった。

ヒルダさんによると、アフリカ連合担当者は涙を流して、歓迎したという…

一通りコスモクリーナーDを代表する浄化作業がきまった…

後は…

「ヤマトの建造か」

「ん〜……1月位だね」

「波動エンジンは問題ない？」



「ちょっとてこずる程度かな？とりあえずは問題なさだよ」

「じゃ…頼むわ」

「了解、L5で建造するね」

「ん？そっちの方がいいのか？」

「建造プラットフォームを作ったから、作業効率上がり始めたよ」

「なるほどな…了解」

ヤマトの建造も始まる。

……

カオル報告

コスモクリーナーD始まりました

ヤマトはじ……？

ナギ少尉「コスモクリーナーDの性能説明の回になっちゃいましたね〜」

作者「…まあある意味しょうがないか…とおもってます」

ナギ少尉「月も進行鈍いし…って事？」

作者「あの残りの数が一辺に押し寄せてくるなら、さすがに無事ではない…って事です」

ナギ少尉「ところで残りのハイヴ3箇所、何処にできてるの？」

作者「……………」

ナギ少尉「ねえ、占拠し再利用するんでしょ？都市にするんでしょ？」

作者「……………」

ナギ少尉「さて、作者は本当に考えてたのでしょうか？  
…次回いよいよ月面にはい…るよね？お楽しみにい」

第158話 ある人達… 投稿日20110805

2001年12月10日

(ん〜……)

やっと月面において活動停止し始めたBETAを確認し始めた…  
との報告が昼過ぎにはいつてきた。

午前中はコスモクリーナーDの搭載及び送り出し等で過ごしてた。

(ちつと予想より遅めか?…)

幸いコアを持ち出しできた個体はいないようだとルーロスから報告はあった。

新たなハイヴは作られる様子もなし…

だが月面の安全確認には、強行偵察の必要があった。  
いや強襲だろう。

(ん〜……)

現状強行偵察に使えるのが、MS系、魔改造戦術機、ゼントラーデイのバトルスーツである。  
通常の戦術機は外気を利用するため、またさほど気密性がよくない。  
使えてA-06海神だろう。

異世界軍のMSの主力である陸戦強襲型ガンタンクおよび魔ドムは、1G下での戦闘機動を想定している為0・18G下の月面では使えず、

ましてや大気を利用するホバーはもつての他だ。火星の大気は利用できても月には大気がない…

魔改造戦術機は反重力システムを利用している為、わずかでも重力があれば問題ない。

が完全に0になる宇宙空間ではなんらかの推進システムが必要だった。

（低重力下と低大気または大気無しの想定だな…

ナデシコ技術による重力波発生推進もありかな？）

忘れていたろうが、反重力や重力波、コバツタ等はナデシコ技術である…

（コスモタイガーもありかな？）

多分現状宇宙空間戦闘で遠距離だと…

1番強いといえるのがコスモタイガーだが…

そんな時、フォッカー少佐と柿崎速雄少尉が、

医療システムがらでて研修にあたってると一報がはいる。

(あ、歴戦のバルキリー乗りフォッカー少佐か…)

「SDF-1、マクロス護衛航空隊、スカル大隊隊長ロイフォッカー少佐だ。」

これからはよろしくたのむ」

「同じSDF-1マクロス護衛航空隊、スカル小隊所属柿崎速雄少尉であります!!!」

「柿崎、スカル小隊といったな?」

「はい、小佐死亡後のスカルの席に一条隊長がつかまして、バーミリオンからスカルになりました。」

自分は、その初戦闘で全包围バリアの暴走?「あってるよ」で死亡した模様です。」

心残りはステーキも食いかけでした」

「正確には死亡する直前においてなんですけどね……  
とりあえず加入確認ですがお願いできます?」

「ちからをかそうではないか。よろしくたのむぞう」

「大船にのったつもりでいて下さい!」

「よろしく願いしますね」

「ところで、いくつか質問だが」

「はい？」

「マクロスは…あの後どうなったんだ？」

「敵対してたゼントラーデイの一部が、リン・ミンメイの歌の力によりマクロス側になりました。

「ほう、あのミンメイちゃんがあ…」

…それに危惧したゼントラーデイの一軍司令官にあたる、ボドルザーにより、

地球は動けない分…全滅です。

「むっ」「なっ！」

が、マクロスは敵対してた司令官にあたる、480万の艦を有する1400km級の機動要塞を撃破し、見事地球人類は生き延びました。

ゼントラーデイ人やそのたの異星人との友好混血化が進み、2060年代にはマクロスをモデルとした100万人規模の移民船団が、

銀河方々にいつてる形ですね」

「地球全滅時には…何人生き延びたんだ？」

「確か：マクロス艦内で4万人強。

あと見逃し見落としの月面アポロ基地と、  
グランドキャニオンは存じてます？」

「ああ：あれか」「なんです？」

「大地に大きな穴をあけた大規模高出力レーザーの一種ですね。  
で、建設中のは存じてます？」

「ああ：確かいくつかあったと聞いてたな」

「そこをシエルターとして避難してた人達含めて約100万人…  
プラス地球についたゼントラーディ約800万人ですね」

「たったそんだけか…」

「はい。そんだけになりました。

なのでマクロス船団による移民事業が、  
地球の命題になった形です。

またクローンで増やしたんですが、  
遺伝子異常もでて禁止にもなりましたし…」

「輝とミンメイはどうした？」

「えっと…あのあと早瀬さんと輝がくつついて」

「あのおばさんよばわりとか!？」

「はい」



「かあ〜輝もやるなあ」

「で2012年のマクロス改級メガロード1、移民船第1号ですね  
…に早瀬さんと輝さん、  
ミンメイさんがのり銀河中央方面へと探索移民にできました。  
2016年、消息不明に…」

「…！原因は？」

「自分も行かないとわかりませんが、  
別世界へと転移という筋が有力ですね」

「…死亡ではないんだな？」

「多分…ときたまミンメイの歌が電波にのってというので…」

「わかった。ありがとうよ」

「いえいえ」

「ところで、俺がのるバルキリーはS型か？」  
「あ、自分の機体は  
？」

「ん〜それなんすけど……」

紙装甲ぶり等今までの異世界軍の考察を…

「だがバルキリーはいい機体だぞ」

「大気圏内においてはですね…が光線級という天敵がいて、それで後継機にあたるVF-11かVF-171、VF-19が適当かなあ…と」

「ほう…何年後の機体だ？」

「確か、VF-11サンダーボルトが2030年代から40年代です  
ね。」

VF-19はその後で、VF-171はリファインですが2055  
年頃の主力機になります」

「乗って評価してみようじゃないか…何処にあるその機体は」

「あ、これからです」

「……そ、そうか……」

「ま、他の統合軍パイロット達も機体決まってるので」

「……何人つれてきた？」

「11号リストお願い」

とリストをもってこさせ見せてる。

「ゼントラーディ人の加入者は期待きまって生産してますね」

「二つ大隊ができるな……で、俺らのがきまってないと……」

「はい。MSや戦術機等なら用意できますが……」

「ファイター乗りには……ファイターだろ？」

「戦術機が1番にってるんですが、苦労していると聞いてますね……  
なんでまあ、用意しますので……」

「話はそれからだな」

「11号、ちゃっちゃといってくるから」

「できれば2日以内ね」

「月次第だしな…わかった…  
フォッカーさん達のことよろしく」

「了解」

世界扉を形成しカオル再びマクロスの世界へ…

〳〳マクロスFの世界〳〳

カオルはマクロスFの世界を狙ったが…

(ここは何処？わたしは……やめよ  
……けど船団内にこんなところあったか？?)

辺りは密林に覆われていた。

(でるとこ間違えたかな？…空飛べばぶちあたるはずだから……)  
幻影をかけ空高く目指す…

が…  
(星だなあ……ん〜)

考えてもらちあかないので、久々に衛星キットを出し、測定からしている。

(地球?…でる時代間違えたか、世界間違えたか…)

と…近くの街にあるという事で、飛び端末に同化、情報を入手すると…

(物語や時代は間違えてないか…けど地球ね…何故?)  
物語中心のマクロスフロンティア船団…  
今は地球から遠く離れわいて座腕のビオス星系あたり、  
約3200光年先にいるはずである。

(ま、考えてもしゃ〜まい…情報情報)

約3200光年…いけない事もない。ルーロス改にとってなら…  
が今回はつれて来なかったなので、まずは星図等の情報を入手に勤しんだ。

が…

(ん〜民間だどこまでか…基地にいくほうが早いな…)

と言うことで近くの統合軍基地へと飛ぶ…

結構距離はあった…地球からは巨大な惑星が夜になるとみえた。

(あれが自動生産惑星だっけ?)

月よりでっかく見える天体が見えてる。

軌道衛星に設置された工業衛星だ。

(…ま、あれは次回でいいか…制作に1年かな?  
か…どっかから拾ってくるか…)

と考えながら基地つき…

二日目…

基地に稼働待機してたVF-11C、D、AIF-7S、VF-171C、VF-19Fがいたので順序取得にかかる。

(流石にVF-25あたりはいないか…)

VB-6も見つけだしたので取得にかかる。

(…ん〜)

次回来た時ように詳細星図情報をいれこみ…  
各種パックがあったので取得し…

ここでタイムリミットのようだ。

世界扉をとなえ帰還する…

2001年12月12日未明…

「ただいまっ」と

「マスター、約束通り早かったね〜」

「ま…ね…と月の様子は？」

と鯖に落としながら…

「今のところ、ほぼ半数が行動をやめてるって…  
タヌキ眠りかは不明」

「ん〜…衛星軌道上からは生体反応わからないか…」

「そりゃ体の中についてはね〜」

「ま、今の時点で半数なら、  
明後日には強行偵察、また上陸準備してても問題なさそうかな？」

おとしたので素材を集め始めた。

「…………かもね」

「万が一生きてたとしても、  
50万も一気に相手するわけでもないか…」

材料に同化し取得したバルキリーを早速作り始めていた。

(作りおわったら寝るか…)

side(???)

「え、?……………」

涙が目からこぼれ落ちてくる。

彼女はトイレの中である機械を手にもっていた。

その機械は反応するところが赤くなっていた。

「と……………とうとう……………やったのね?」  
歓喜の声をあげ、泣き崩れていた……………



取得

V  
B  
-  
6

V  
F  
-  
1  
9  
F

V  
F  
-  
1  
7  
1  
C

A  
I  
F  
-  
7  
S

V  
F  
-  
1  
1  
D

V  
F  
-  
1  
1  
C

力  
才  
儿  
報  
告

⋮  
⋮  
⋮

第158話 ある人達… 投稿日20110805（後書き）

ナギ少尉「作者…なんか最近また短くなってない？」

作者「そ、そう?？」

ナギ少尉「今回の転移のシーンも、

何?基地にいつてちゃっちゃと取得しちゃって、

ここはバジユラの襲撃でミシールをゲットするんじゃないの?」

作者「……何故?」

ナギ少尉「何故って物語の本流からはそうじゃないの」

作者「ま、まあしたら短期で戻ってこれないしさ…ねっ?」

ナギ少尉「うゝ……あつ、月面のクレーター!!ねえ考えたの?」

作者「次回のネタになるんすが…まあいいか…

とまずサクロボスコクレーターは月の表側の南西の方角にありますよね?」

ナギ少尉「私たちからみたら右下ね？」

作者「プラトーが月の表面の北側の方向」

ナギ少尉「うんうん」

作者「さて次回後書きに残りの二カ所がです。お楽しみにい」

ナギ少尉「作者〜〜!!」

第159話 ムーンスパイプライン 投稿日20110807

2001年12月12日 昼間

「バルキリーできたか!？」

「へえ…こいつがか…」

「航空機なの？」

「自分ののるのはどれですか？」

途端にハンガーが騒がしくなる。

アムロさんを始めとしたガンダムのエースパイロット達や、

A-01の面々も見えたからだ。

「とりあえずフォッカー少佐、柿崎少尉どれでも乗って評定して下さい。  
さい。」

量産に入りたいので…」

「俺はこれかな？」 「自分は…こいつで」

フォッカー少佐がVF-171、柿崎少尉がVF-111を選択した。

「自分はいいのかな？」

「アムロさん、戦闘機操縦は…？」

「コアファイターぐらいか…戦闘機操縦形態なのか？」  
戦艦ハッチへ移動してく二機。

「ですね、モビルスーツとはコンセプトが違いますし」

「ふむ…」

「ま、陸上戦限定についてはモビルスーツが有利すけどね。  
空対地攻撃でなくロボット形態でのに限定してますが…」

「可変戦闘機なのか？」

「はい、巨人のゼントラーディ人と戦う為でしたから…」

司令室に向かいながら…

「コールサイン、スカル1、テスト空域は小笠原近海および、  
A-01宙域にてお願いします」

『スカル1了解、』

『スカル2了解であります』

ア「単独大気圏脱出能力あるんだな…」

「スカル1、00Rクリア進入どうぞ。スカル2、00R待機位置へ」

カ「ありますね。スペック通りならマツハ21を越えますから」

『ゲーボ、発進位置へついたぞ』

「スカル1、進路クリア、発進どうぞ」

『柿崎い、一足さきにいくぞーっ！！』

いきなりアフターバーナーを吹かせて…

『イヤッホホー』

「スカル1、民間空域では！」

『一足さきにぬけるぜー』

ア「カオル君…」

「ううん…もう…スカル2、発進位置へ」

カ「まあああいった人です…」

『了解であります』

カ「腕はいいですよ」

柿崎機は何事もなく発進してく…

「カオル君、空対空だと…」

「下駄だと良いですね…」

基本的に視界外で、また高速でアウトレンジ攻撃をな機体ですし…  
ましてや宇宙空間だと推進材の関係で」

「バルキリーか…」

「ですねあの世代の機体だと…」

MSは重装甲、高火力の道に行くか、別の道をしかなくなります。  
もつともアムロさんクラスならファンネル等でもありますが…」

「あれで量産機か？」

「です」

「ふむ…」

テスト稼動でその日フォッカー少佐は繰り返し繰り返しのり、  
一般機はVF-171Cに決まり量産に入る事となる。

side???)

「おめでと〜ございます。三週目ですね」

「本当にですか？」

「お子さんみますか？」

「はい!~!」

先生が、エコーの画像を取り出してきた。

「この部分が、あなたのお子さんですよ」

「……あ、あ」

涙をながす???…よほど待ち望んだろう…

「軍規では、母体保護の為……」

……

「次の作戦後でお願いできますか？」

「……わかりました。」

ですが、それ以降は流産の危険性がありますので、相談の上でお願いします」

「はい、わかりました。ありがとうございました」

(カオル……わたしにとつとつ……)

side???end~



2001年12月13日

フォッカー少佐機、および柿崎機について考えていた。

(フォッカー少佐はベースはVF-19Fとして…柿崎少尉はVF-171Cか…)

柿崎少尉は、パワーをあげてくれ…との要望があった。

(となると…)

VF-19Fはステージ2のエンジンを搭載しているタイプであり…

VF-171のエンジンを同系に換装を行った。

VF-171柿という安直な機体ナンバーをつけ…

(あとはVF-19Fの改良か…)

とおもったが…

(機体的要領もないから入れる要素が……)  
なさそうだったのでそのまま機体を選定する。

(と…上陸設営部隊か…)

今のところバルキリーのスピードについてける艦船はない。

チューリップも既に発進させラグランジュ1に待機するようになる

が、  
明日には間に合わないだろう…

今から間に合う艦船はない…

艦船はないが……

銀河鉄道はある。

よって明日バルキリー部隊と一緒に上陸設営部隊の運搬に、  
銀河鉄道のビッグワン、ビッグツー、ビッグスリーが使われる事に…

銀河鉄道はバルキリー以上のスピードをだすが…

(流石に戦術機やMSサイズはきついな…)

貨車にそのまま積めるのがレイバー等8mサイズまでであり、  
それ以上は車両限界に達する…  
いやバランスが悪くなるのだ。  
銀河鉄道のスピードで横転事故があっちゃ日には、  
えらい惨状になるので、どうするかをなやんでる。

マゼラドリル等は積めるサイズにより、  
バッテリータイプの作業車両は、  
核融合発電機を貨車に積み充電する形になる。

あとはMSサイズの作業MSをどうするか？になった。

(ん〜)

「マスター何してるの？」

「ああ、作業用ザク改低重力仕様をどう貨車に積むかをなやんでるだよ」

「へっばらせばいいじゃん」

「はっばらすっ？」

「こじはこじして、こじなって、こじすねば…」

見事に胴体部も外され分割になり、タンク部分も問題なくおさまった。

「作業用だから急造組み立ての名残があるの。マスターしらなかった？」

「あははは…わすれてた」

(まあ…これで大丈夫だな)

1編成20両に及ぶ貨車および客車の編成を終え、  
上陸部隊の積み込みは終わった。

2001年12月14日

地球を飛び立ったバルキリー編隊は、  
ビッグワンに遅れる事1時間後、  
月面軌道上にいるサラミス改に着艦、強制推進材を補給後…

「いいか野郎ども、これから月面偵察にはいる。  
500万の内、どれが生きてるかわからん…用心しろよ！」

『了解』\*多数

「プラネットダンス!!!」

V F - 171を主とするバルキリー編隊が月面に舞い降りてく。

『こちらスカル1、月面は夥しいBETAどもに埋めつくされてる…  
動きはないが、BETAが3月面は7だ。繰り返すBETAが3月  
面が7だ』

「月面調べられそつ?」

『ガウオーク形態だと引つ掛ける柿崎がいそつだな』

『なつー！隊長ー！！』

『ははは、すまんすまん。バトロイド形態なら問題ないだろ』

ガウオークで滑空着地すると引つ掛ける可能性がある位、  
BETAがそこらじゅうにとまっていた…

『スカル4、5、6ついて来い、スカル2後のを引き連れで別の箇所偵察してこい』

『了解』\*多数

バトロイド形態で月面に着陸するフォッカー機。

そばには活動停止した突撃級がいた。

続けてスカル4番、5番、6番機が降り立ってくる。

『多分…死んでいるはずだな…』

フォッカー機が用心の為にガンポットを突撃級に撃ち込んだ。  
反応なし…

『よっし、じゃそこら辺偵察といきますか…ロツテを崩すなよ』

ガウォークに変形、滑走し始める。

死骸を見つける度に弾をうつや、殴る等をして反応をみるのを繰り返し…

『こちらスカル12、サクロボスコクレーター、ムーンハイヴ1近辺では生体反応見つからず』

『こちらスカル24、プラトールクレーター、ムーンハイヴ4近辺では同じ生体反応見つからず、内部も同様です』

『こちらスカル35、ベイアリンククレーター、ムーンハイヴ2近辺生体反応見つからず、これより内部調査にいきます』

月の裏側プラトールのほぼ反対側に位置するクレーターにできたハイヴだった。

『こちらアポロ04、クリューガークレーター、ムーンハイヴ3の調査完了、生体反応見つからず』

月の東側に位置するクレーターだ…

次々と生体反応無しの報告が入ってくる。

「ん…ほぼ大丈夫かな？」

「だしゅ？」

「ああ、上陸設営隊にg oサインだ。  
引き続きバルキリー隊は偵察任務を続行」

「あいでち」

ほぼ大丈夫だろう…って事で、  
ビッグワン、ビッグツー、ビッグスリーが月面に向かって煙りをな  
びかせながら、サクロボスコクレーターを目指してきた。

着陸場所の確保が難しかった為、ビッグワンは月面に接地後、  
B E T Aの死骸を前面シールド展開し、跳ね飛ばしながら停車する。  
まさに谷間が出来るように跳ね飛ばされる死骸…

停車後客車からはコバツタ、T - 8 5 0達がでてきた。  
0 . 2 G以下にも関わらず快活な行動をとるターミネーター達、  
これらのO Sによって低重力でも修正して行動している。

宇宙服もきずにB E T A同様生身で戦闘行為も可能だ。

ターミネーター達のもっている武器は、  
地上同様カトラス、M 6 1等を装備している。

反動も大丈夫だと彼等はいつていたからだ。

ターミネーター達が警戒に展開し終えた頃、貨車のロックが外れ、中には月面作業用に改造されたクレーン等小型作業機器が積まれてた。

早速貨車にばらさずに積めるサイズの機器は降ろされ、ブルドーザー等が死骸除去作業を行い始めた。

作業スペースを確保されて、貨車から降ろされてきたのは、ばらして積んであった作業用ザクタンク低重力仕様の部材だった。コバツタ達の操縦する小型クレーンによって組み立てられてく。

空になった貨車が連結し直され、汽笛をあげビッグツリー、スリーが、死骸を跳ね飛ばし宇宙空間に昇っていく。

作業用ザクタンクが組み上がると作業効率はあがってきた。

どんどん死骸が運ばれて月面が確保され、サクロボスコの門のほうもザクタンクが中にはいり、死骸が運びだされ整理されてくるようになる。

約4時間後にはビッグツリー、スリーが帰ってきて更に機材が搬入され効率があがってくるだろう…



…

## カオル報告

月面のハイヴ跡地を利用し、  
基地建設作業にはいります

ナギ少尉「やっとここで場所がたわね」

「どこまで引張るのよ!!」

作者「まあまあ……」

ナギ少尉「で？ほぼ反対側っていつと？

」

作者「ベイアリンククレーターの事か？

ベイアリンクとも表記されてて、どっちともとれるんだよな。

ま、プラトールとサクロボスコを結ぶとあとは、

必然的に裏側と月の表の東側…かな？ということだね」

ナギ少尉「で、あとが……」

作者「ああ、月の表側の東側にあるクリューガークレーターに…と  
いうことで、

合計4つのハイヴ全部の紹介が終わったわけだ」

ナギ少尉「あつ、ターミネーター達はそのまま生身で活動してるけど…大丈夫なの？」

作者「まあ通常のなら皮膚が凍る可能性あるが、強化された皮膚が使われてるから、絶対零度付近及び500度までなら皮膚は大丈夫だぞ」

ナギ少尉「…液体窒素とか熔鉱炉内部とか？」

作者「ま、そついう事だな」

ナギ少尉「ところでサクツと占領しちゃったみたいけど…」

作者「本当は新種が…だったんだが無理だああになつてな…」

ナギ少尉「？新種？」

作者「まあある意味な…が、生物もない、大気もないんじゃない…無理だったんだよ…なのでまあ…また今度登場まちつて事で…」

ナギ少尉「じゃ、次回予告ね…敦煌攻略発動までの7日間…どうすごすの？カオル君…お楽しみにい」

第160話 更なる新たな世界へ… 投稿日20110809

2001年12月15日

月面サクロボスコレーター…

長い間BETAの月面オリジナルハイヴ、サクロボスコハイヴとして、利用されていた。

しかし、今では…

ガウォークが地下偵察を行い、生体反応なし完全無力化の安全確認がすべてとれると…

サクロボスコ基地と改名し、アイランド1のあけた直径6kmクラスの大きな穴を利用し、4km級戦艦対応ドック基地として、サクロボスコ基地建設計画はスタートする。

まず穴の周囲の部分に底までの螺旋状直通通路を作り、戦艦格納庫および、その他基地に必要な設備を整えるつもりだった。

また、明後日17日にはチューリップがサクロボスコ基地に到着し、地下深く入りこみ、本格的稼動する事になる。

しかしそのような巨大基地建造には、いくら穴が掘削されても、

完全稼働までには約3ヶ月かかるだろうの見込みであった。

それまでは、月での対到着ユニットに対する防衛を、仮設対空設備及び軌道上の戦艦で行う事になる。

プラトックレーターはまだ利用目的はきまっていなものの大きな穴が空いている。

クリューガークレーターは月面都市としての建設予定だが、まだ防衛システムが構築できる前につき、

工事は始まってはなかった。

さて、月面を狙っていたアイランド1から4はブースターをふかせ、

一路月面軌道上から離れていく。

一回ラグランジュ4ポイントに回航後フォールド設備の改修をこれから受ける事になる。

そしてこの後木星の衛星侵攻作戦へと向かう事になる。

また護衛船団もフォールド装置が搭載改修される事となり、月防衛部隊と入れ替わりにドックにはいる事となる。

なを…キヤーティア技術のワープライブに関しては、まだプラント設備では実現できずに搭載される見込みはたっていないかった。

また忘れていると思うが…

ラグランジュポイントで建設中だった地球脱出船、エンデミオンは異世界軍に接収された後大改装を受け、更にワールド装置等も積まれるようになり、

3km級大気圏突入可の、  
強襲空母として生まれ変わろうとしていた。

エンデミオンは木星侵攻時に旗艦となる予定だ。

さて、カオルは昼過ぎには、ルーロスをとまって横浜基地に帰還していた。

(改修で来月には木星侵攻できるし…  
22日開始で25日辺りには敦煌…っと…)

ギシギシ

椅子を揺らしながら考えてた。

(ん)機動要塞…あれデーターだけでも欲しいなあ…

あとは新マクロス級をもつくる工業衛星か…

つくるとなったら時間かかるだろうけど欲しいなあ…

あの艦船建造能力はいいよな…

…人員はマクロスの7辺りやF辺りでも沢山いるし…まだまだガンダムの世界もねえ…

あとあのあたりも行きたいし…

あ…と、わすれてた)

ルーロスを虚数空間より出し…

「ルーロス、マクロスでの星図情報」

「あいでち、ごちゅじんたま」

と記録してあった端末をロードしてもらった。

「フォールドだんちよう??……」

「ああ、フォールドで突破しようとする事故がおき、  
100万人規模でしぬことになるらしいな…」

マクロス船団移民初期には事故あったらしいぞ」

マクロス移民船団があんまりフォールドを行わず、  
通常空間を長い年月かけて航行する理由の一つである。

フォールド断層を探し、航路を開拓すると重大な役目も含まれてい  
る。

ゼントラーデイの一部艦隊分のデータだけでは、  
活動範囲だけであり、大航海時代としては、とても足りないのであ  
る。

「じわいでちねえ」

「なあ… キヤータイヤではワープ禁止な場所とかはあったん？」

「えっと…聞いた事ないでち」

「ブラックホールとかは？」

「今のドライブならあっても別に関係ないでち。  
200長周期前のなら駄目でちたけどね」

「ならルーロス心配なさそうだな…」

「大丈夫でち、影響あつたら地球にこれなかったでちよ」

「だらうな…」

「ところでごちゅじんさま、なにを考えてるでちか？」

「ん？ああ、このあとというか、  
月も軌道に乗るし、ハイヴ攻略に関わるまでの7日間どうしようか  
な…ってな」



「またどっかにお出かけでちか？」

「ああ、今、急にもなさ気だしな」

とりあえず地球上では、関東以西のBETAクリーニングに後一週間かかる見込みで、とりあえず北陸東海地方は終わったとの報告がきてる。

重金属の除去に関してはまだまだ時間のかかる事業：気長に行ってる状態だ。  
なにしろ現場でプラントもどきでろ過する必要ある為、分離は面倒な作業の一つである。

中国大陆では中継地点の随州において基地建設が始まった。

重慶基地においても放射能除去された事により、  
防衛力が高まってそうそうはおちなくなるだろう。

宇宙は前に記述した通り…

こっち特にやる事がない。

「どこに行こうかなあで悩んでるんだよな…」

「そういえばごちゅじんたま」

「ん？」

「一騎当千の…ってないでちね」

「一騎当千か…スーパーロボットかな」

「スーパーロボット？」

「あ、まあ一対一でもものすごい力をだすロボット達だな。  
…例えば…マジンガーZとか、グレートマジンガー等な」

「ちゅれてこないの？」

「マジンガー系はコクピットが頭にあって、直接視認での操縦だ…」

「光線級にやかれちようでちね」

「ゲッターロボは…ゲッター線暴走が…とかだし、  
イデオンは暴走が怖い…宇宙が滅びる…  
そう考えてくると………」

「……と？」

「地球防衛企業ダイ・ガードかな？」

「……なんか弱そう……」

「いや、結構……弱いか…まあ、武装は使えそうだがな」

「武装？」

「ノットパニッシャーは、  
作薬式でないパイルバンカーだし、  
アームで固定してるからパワーさえいければ、  
貫けないのほぼないだろうな」

「面白そうでちね」

「が、1対1でないときつい武装だな…ドリルアームは定番か…  
ん」

「あとは？」

「ん…他のだと、エヴァンゲリオンか…」

「それはどんなのがいるでち？」

「おれのパワーの元ネタの世界。あとエヴァンゲリオン、決戦兵器  
がいるしなあ」

「それに決めるでち」

「が、俺がいったら使徒認定されて駆除されそう…」

「使徒？」

「まあいわゆる敵側のね…発見されるらしいよ。

神の使いというか…まあサードインパクト起こす為に、  
あの手この手の能力がついた使徒でね。

俺がいったら間違はなくエヴァが出てきそうって事さ」

「そういえばごちゅじんたま、少し他の人と波動が違うもんね」

「ん？波動」

「他の人はびいいいなのに、ごちゅじんたまはぶいいいんなんだもん」

「……………例えがわからん……………」

「鈴の機能ちゆかえば、波動欺瞞はできるよ」

「ん？そんなのあるんか？」

「あるでちね。ここをこつするでち……………」

「ほつ……………」

(エヴァ、生き残るのシンジ一人だけだしいいかもな……………あつ、そういえばごつそり貰えそうなのがあった)

「ルース、いく世界決まった。11号あとよろしくな」

「準備万端でち引き込んでくだちい」

「いつてらっしやい〜」

世界扉で世界をわたる……

〜ガオガイガーの世界〜

「ようこそGアイランドシティへ、ようこそ宇宙開発公団へ!!」

カオルは見学者となり東京湾に浮かぶ人工島、  
Gアイランドシティに降り立ち、見学コースでもって中に入っ  
た。

ここGアイランドシティは宇宙開発公団の本拠地である。

シャトル打ち上げなどをかね……るが…

カオルは一人列を離れ開発公団の建物と同化し、その侵食を地下へ  
もひろげていった。

地下はGGG秘密基地ベイタワー基地になっていた。

中央にはヘキサゴンがあり、  
巨大ロボットが入るビッグオーダーームを始めとした中心施設が  
ある。

そこから六方向に広がりさながら珊瑚礁の形にたとえられ、バリアリーフと呼ばれていた。

ヘキサゴンからは各種船が接続されていて、

三段飛行甲板空母、

強襲揚陸補給船、

弾丸X、

水陸両用整備装甲車、

多次元諜報潜水艦、

三式空中研究所、

等が繋がっている。

まだこの頃是对ゾンダー戦の真っ只中であり、

欠落している船等はなかった…

侵食をひろげ二日目にはいったところで…

「ハアハアハア護隊員殿、クンカクンカスーハースーハースンスン」

（みちやいけないものを、見たんだろうか？）

体操着らしい服を一生懸命に嗅ぐ紫色のロボットがいた。

そもそも嗅ぐ事ができるのだろうか？の疑問があるが……

（嗅ぐ機能をわざわざつけたのかな…？）

紫色の変態忍者ロボット…ボルフォッグのある一幕を見てしまった  
のも追記しておこう。

それ以外は特に特筆なく…取得は進む…

…

カオル報告

Gアイランドシティ

ベイタワー基地全般



ナギ少尉「あたらしいジャンルにいきましたね〜」

作者「スーパーロボットの世界にだな…」

ナギ少尉「うまくカオルが理解して解説できるかが、  
帰ってきてからのお楽しみね〜」

作者「……………まあ…なんだその…」

ナギ少尉「でもボルフォッグって…」

臭いセンサーついてないんじゃないかなかった？」

作者「彼等の超AIには不可能がないのさ。

まあようするに鼻炎でつまっている人がそうすると、  
気分よくなつてく…まあ一種の病気と…」

ナギ少尉「作者は体操着臭がないの？」

作者「俺は男だから嗅がないが？」

ナギ少尉「いや、女性の体操着をね」

作者「ん……汗臭いんだろ？…イマイチなあ…」

ナギ少尉「じゃあ…どこを嗅ぎたいの？」

作者「そうだなあ……やっぱりポニーテールの髪の毛かなあ…」

ナギ少尉「スンスンするわけ？」

作者「まあ…ってなにいわせんだ！バリカンで刈るぞ！！」

ナギ少尉「きゃあ…怒ったあ…と、次回は変態ボルフォッグの最後  
…お楽しみにい」

作者「あ、そんなサブタイトルつけんなあああ」

第161話 ボルフォッグの最後？ 投稿日20110811

第三日目

世界を渡ってきたカオルは天空を見上げた。

そこには肉眼でも見える人工建築物が見える。

カオルは空にাগり、その人工建築物を目指した。

目指す目標物は、起動防衛艦繫留軌道衛星基地、オービットベース…

新生GGGの本部となり、ガオガイガー、いやガオファイガーのサポート本部でもある。

時期的には機械原種戦を終え、

国際犯罪シンジケートバイオネットと争っている時期であった。

カオルはオービットベースと同化し侵食し始めた。

このオービットベースは機械原種との戦いにおいて破壊されたベイタワー基地に変わり、

新生GGGの本部として機能している。

旧ベイタワー基地から脱出し、オービットベースに接続されている

ヘキサゴン、

他にも、デビジョン2、万能力作工作艦カヤナゴ、

デビジョン7超翼射出司令艦ツクヨミ、

デビジョン8多撃多元燃導艦タケハヤ、

デビジョン9極輝覚醒複胴艦ヒルメが接続されていた。

もちろんカオルは最終的には消失する運命の各デビジョン艦、デビジョン2のカヤナゴはのぞくが…

の復元を目指しているのだらう。

じっくりと同化していく…

ガオガイガーの世界の凄いとこは勇者ロボ達だけでなく、各サポートマシン及びバックアップがしっかりしているところだった。

例えばカヤナゴ…

これは艦内部に修復マシンであるプレイヤーズの量産型、

カーペンターズが3000機近く搭載されており、

破壊活動や戦闘被害の後に速やかに出勤し、

破壊された街を修復する。

機械原種との戦いで破壊された世界文化遺産である、

万里の長城や、ピラミッド、スフィンクス、モアイ像を見事に再生した。

物質の破壊を空間修復ツールを用いて速やかに短時間で修復するの

だ…

再生でなく模倣だ…との否定的な意見もあるが、  
バイオネットの破壊テロ活動が増えるなか、カーペンターズ  
の役割は大きくなっている。

また、ヒルメ…

各種ツールを搭載している。

代表的なのがディバイングドライバー…

主な使用目的は、戦闘被害を防ぐ為の人工的な空間湾曲空間を作りだすものである。

これにより、わずか80センチの空間をひろげ、  
半径数十キロに及ぶ無人のバトルフィールドを作りだす事ができ、  
その中での膨大な威力の力を使用しても周囲に被害を及ぼす事の無いツールである。

このような各サポート類をカオルは喜んで同化し、情報を取得していった…

さて、ここはカオルが取得している同時刻の地上ある地点…

一台のパトカーが疾走していく…

「システムチェンジ」

白いパトカーが變形していき…

「ボルフォッグ!!」

人型のロボットが現れる。

side↳ボルフォッグ

「さて…ここですね？バイオネットが潜伏しているビルというのは…」

外見上はまともなビルに見える。

「さて…ルネ捜査官準備はよろしいですか？」

『ああ、いつでも害虫駆除の準備はととのってるぞ』

「ルネ捜査官、今回は逮捕して情報吐き出させるのが目的であります。

けして殺さないで下さい」

『わかってる!!口だすなら先に駆除するよ!』

「はあ……サポートの準備はととのいました…突入お願いします」  
ボルフォッグはいつバイオネットのATが出てきても良いように、

身構えた。

ルネが建物の入口に張り付き、銃を構え…  
ドアを蹴飛ばし内部に侵入する…

ガガガン

ガガガン

銃声が響く…

ルネが建物の入口から出てきた。

「ルネ捜査官？バイオネット作業員はどうされました？」

「ボルフォッグ…おとなしく的になりな…」

「はっ？」

ルネの両手に構えた銃がこっちへ向き…

（ま、まさか…）

「ぬおおおっ」

ボルフォッグは銃撃から飛びのいた。

「ルネ捜査官…！」

「うるさい…！空振りだよ…！この怒りどうしてくれるんだ！」

「ぐわあああ」

銃があたり、ボルフォッグにダメージがくらう…

（馬鹿な、ただの小銃なのに…いけない！）

「ルネ捜査官！」

「うるさい！この使えないポンコツシヨタコン！」

「ひいひいひい」

（わ、わたしの身が持たない！）

『あー、あー聞こえるかね？』

「長官！」

『現地捜査ご苦労だったね、当該情報員は、』

「ぬおおおー！」

『獅子の女王とボルフォッグ君がきたといっつので』

「どわあああ」



『みずから、警察署にいき自首してくれたんだよ。これにてルクセンブルクでのD・057の件は終了したよ』

「痛い痛い!!…長官、捜査は終了したんですね!」

『ああ、そうだねボルフォッグ君』

「ひいいいい……は、早くルネ捜査官に引き上げ命令を!!」

『あゝその事だがね…ボルフォッグ君』

「だああああ」

『ルネ捜査官の通信機が壊れてる模様で、君から本人に伝えて欲しい』

「はあああ?」

『カーペンターズの出動は命じた…以上だ』



光の奔流がボルフォッグを襲う…

跡地には盛大なキノコ雲がたち…

カーペンターズが修復しにきた。

「ふん！！害虫駆除完了！」

…

超AIが再起動する…

（護隊員、今回もなんとか生き延びました。  
ルネ捜査官の鎌から逃げれたもようです！！

…はっ自己チェックを！）

ボルフォッグは身体を起こして、  
外見からと内面のシステムチェックを行い始めた。

（…ここもダメ、ああ、ここもですか…うわぁ…ここも…  
はぁぁ…護隊員のパンツなめなければ、やってられませんね…）

あんだけの事されても性癖はなおらないもようだった…  
そもそも、舐める機能はついてないのに…

side〜ボルフォッグend〜

## 五日目

カオルは世界扉をくぐりぬげると、再びオービットベースに…取り付いた。

その頃オービットベースでは…

『ステルスガオーまもなくドックにはいりまーす』

ステルスガオーがドックに入ってく…

護がコクピットから降りてきた。

「護!」

「ガイ兄ちゃん!命お姉ちゃん!」

「護君……話を聞かせて」

「うん…あ、火馬長官…説明する人はこれだけでいいの?」

「ああ、この六人だな…」

「わかった…あ、ちょっとまってね…」

護がガオーマシンにもどって、Qパーツを持ち出してきた。

「護、そのQパーツ………」

「今宇宙では大変な事が起こっています。その為にどうしてもこれが必要なんだ」

「いったいQパーツを何に使うんだい？」

「あと二つあるはずだけど…それはどこ？」

「それなら研究モジュールで調査中だがあ………」

「そう…研究モジュールね…」

護が光ががやき…

困んでいた人達を吹き飛ばした。

「護っ！！」

（（

「くるっ…」

パピヨンが待ち構えていた…  
護が侵入してきた。

「それもらっていきます」

「バスキューマシン！」

バスキューマシンが光り、衝撃が走った。  
爆風があたりを巻き込む…パピヨンは飛ばされていた…

「これさえあれば救われる」

護はパピヨンを見向きもせず、Qパーツを持ち出し、  
光りで隔壁を破壊し突き進んでいった。

「護っ！…っパピヨン！！」

「救急隊！！大至急研究…」

「凱は護追って！パピヨンはわたしが診るから」

「っ……わかった…」

「パピヨンさん…しっっ！…」

「おい、パピヨン隊員の様子は…」

命の顔が横に交互に…  
猿頭寺が入ってきて…

「パピヨン！、パピヨン、しっかり！！…容態は？」

命の首が横に動く…

「パピ…ヨン…」

「うつつ…」

「パピヨンー！」

「わかった事があります…世界規模でおこっている異常気象…  
Qパーツにも同じ磁場の流れを感じます」

「わかった…あとでゆっくり聞かせてくれ」

「いいえ…もう…私は…一足先に精霊の元へ帰ります」

「パピヨン？…パピヨン？…うつつ」

「参謀、遅くなりました…要き…」

「うつつうつつ…」

「猿頭寺…、おまえの変わりはいねえ…いくぞ…  
いつまでもないでちゃパピヨンも」

「うっうっ…」

「猿頭寺さん…さあ…」

「パピ…ヨンを…よろ…しくお願い…しま…す」

救急隊員に事きれたパピヨンをまかせ、  
彼等は凱のサポートの為にでていった。

パピヨンは診断を受けた後遺体安置室へと運ばれた…

救急隊員がでていった後に姿を現したカオル。

（早くすまさなきゃな…）

医療カプセルをだし、  
擬体にDNAをプログラムし、変化確認後、  
安置台に擬体、医療カプセルに本体をいれ…  
（これで、魂は向こうにいつてるんだよな）

カプセルの作業パネルが、擬体同様の反応をみせる。

虚数空間にいれ、世界扉を唱え、世界を渡る。

第六日目…

カオルは再び世界にでてくる。



(さて次が問題だよな…ここを突破できるかどうか……)

ギャレオリア彗星の軌跡…

既に彗星は消滅し、次元ゲートは閉じている…

世界扉を唱えた…

世界扉をくぐると…

再び地球が…見えた。

(成功かな?)

カオルはルーロスをだし…移動し始めた

しばらくすると、Jアークにドッキングしている、

クシナダにのりこみ、レプリ人パピヨンを探し始めた。

程なくみつけた。

「パピヨン」

「これでいいのです。物質に永遠はありませんから…」

「精霊達の元へいくのかい？」

「いいえ、こうすけ、あなたの中に……」

「パピヨン」

「永遠に…」

魂が……

（魂は健全なる肉体に宿る…同一な肉体であり、器に値するなら…

入ってくればいいが…）

カオルは同化した壁の後ろにだしている、

パピヨンの修復中の身体を見ながらそう考えてた。

「アークでは、勇者ロボの回収作業が急がれてた。

この地球は崩壊する。

その前に仲間として、友と共に運命をすごすべく…

……

そして回収しおわってしばらくたった艦内。

「まもる、気がついたですね？」

「ぼく…?」

「あまみ」

「今この次元宇宙はES空間ごと、消滅しようとしている」

「ギャレオリア彗星はもう存在しないからね」

「俺達は帰れねえって事だ」

「この次元が消滅」

「戻れないんだね？やっぱり」

「しかし、わずかながら希望は残っておる」

「ザパワーを利用するだ。計算上JアークのESSミサイルで、木星軌道の上に、直径1mの次元ゲートを二秒間つくる事ができる」

「直径1m……」

「二秒間……」

「だが残ったESSミサイルは二発だけだな」

「だから我々は君達二人に未来をたくす」

「えっ？僕達に？」

「でも……」

「これは君達に与えられた君達にしかできない重要な任務なんだ。この宇宙でおこった出来事を報告してほしい」

「帰ったらただいまっていうのをわすれるなよ？」

「間もなく時間です！」

「ミサイル装填準備！！！」

「頼んだぞ」

「あつま………」

「カプセル固定！ロック確認！生命維持装置正常作動確認」

「ミサイル射出位置へ！」

二人の載せたミサイルが発射装置の中に吸い込まれてく……

「ESミサイル射出！！！」

「護、かいどう………」

二人の載せたESミサイルが、時空ウィンドウを開き、姿が見えなくなっていった……

「さて、我々のほうもなんとかしなければな」

「まだまだぼくちゃん諦めないもんね」

しかし……

「ノン！次元宇宙、収縮してきます！！！」

「くっ、予想より早すぎる…打つ手はないのか！」

「諦めるな！」

「駄目です！空間が圧壊し……」  
唐突に真つ暗闇の中に突入した。

「なっ！！何が起こった？」

「わかりません！！レーダー、超空間センサー反応できません！」

『強大なパワーがわたしを固定している』

「なんなんだ？ここは……」

……  
カオル報告

final時代のオービットベース

勇者ロボ達

ジエイアーク

各種ツール



第161話 ボルフォッグの最後？ 投稿日20110811（後書き）

ナギ少尉「……勇者軍団まるごと……」

作者「そぞ、いただきました」

ナギ少尉「続編作られないの？彼等の……」

作者「んゝみたいなんだよね……大人の事情で……」

ナギ少尉「大人の事情？」

作者「ガオガイガーは勇者ロボシリーズの8作目で、シリーズラストなんだよ。  
実は打ち切りね」

ナギ少尉「えゝなんで？面白いのに……」

作者「今みるとねゝ……けど当時は裏番組に視聴者がとられて、勇者ロボシリーズをやめないと全国ネットから外すぞ！と警告されて……」

ナギ少尉「それでその後聞かないのね？」

作者「2005年にリバイバルのような形で、

ガオガイガーFinalGGGが東京ローカルで、あったのみ…

まああとは時代はポケモンとか…

になっていくんだよね」

で大人も熱中できるガンダムシリーズとかさ…」

ナギ少尉「…そう…残念…勇者ロボシリーズ復活して欲しいね」

作者「まあ…当時は自分もガオガイガーは知らなくて、

スパロボからなにこれ…熱いじゃんではいりこんだ口ね」

ナギ少尉「あ、そういえばパチンコでてるよね？今の時点で」

作者「あ〜でてるね〜打ちたいけど、書いたり、キャリアしたりしてるとなかなか…」

ナギ少尉「早くうちなさいよ。で貯金してくるの」

作者「貯金はやめてくれ…」



ナギ少尉「さて予告ね…我等の勇者ロボは復活するのか？  
次回、ガオガイガーの世界より帰還…  
たて、たつんだ勇者ロボ達、我等のガオガイガー…ファイナルフー  
ジョン！！」

作者「ナギ…」

第162話 ガオガイガーの世界より帰還 投稿日20110813

2001年12月21日未明

（B55ハンガー）

世界扉が開き転げるようにカオルが出てきた。

「ただ!!」

「マスター…??なに慌ててんの」

「あとあと、またもどる…ルーロス!!」

虚数空間からルーロスだしながら乗り込むと、戦艦ハッチから緊急射出で飛び出していった。

「……マスターになあわててた？」

「さあ??」

side（カオル）

（くううう…暴れんなあ…）

虚数空間でJアークをおさえつけてて…脂汗がでてくる。

ガオガイガーの世界の次元宇宙でJアークを引き込んだカオルは、まずはガオガイガーの世界の通常宇宙にでて、そこで世界扉をも突破する時空吸引力を体験した。

なんとか世界扉を閉め、更に世界扉を開きカオルの世界へと戻って  
きたわけだ。

その間3分、

更にここまで12分：

カオルは限界に近かった。

「ついたでちよ」

「さ、さんきゅ」

艦の外に飛び出し…悪いものを吐き出すように……

side「Jアーク艦内」

「！！レーダー、センサー復旧しました！！」

「どうなってる？」

「あ、あれを！！」

「月か??」

『太陽系に酷似しているが…我々の太陽系ではない』

「トモロ？」

『まず…我々の太陽系にない建造物が、いくつか確認できる』

「これは……？」

『中に人が沢山すんでいるようなステーション』

「人が生きてるのか…」

『あとこれもだ』

「見たことない艦船だな…」

「砲塔があるって事は…宇宙戦艦のようね？」

『あと月の表面だが…』

「っ！！」

「な…気色悪…」

『また、月には超高压光線などで、直径7kmあたりの穴が、確認できる』

「……ええ…そうね…」

「流石トモロですね」

『未承諾の人物が出現…不可解…シールド突破反応なし』

「き、君は？」

「どこからはいったのだね？」

「始めまして…皆さんをこの世界に招きました、  
国連異世界軍責任者、渚カオルともうします」

「この世界？」

「実は、この世界は皆さんのような異世界の力を借りないと、太刀打ちできない事態に陥ってるのです」

「その事態とは？」

「異星生物による人類絶滅」

「人類絶滅……」

「先程映像で見られたと思いますが、あの死骸が、BETAというものです。

月は異世界軍の手で取り戻しましたが、まだまだ地球にもいますし、また太陽系の各惑星、太陽系以外にも多数……120億をこえる司令塔がいる状態です」

「……」

「正直、この世界の人は約30年近く戦い続け、総人口が46億から10数億にまで減り、ヨーロッパ、アジア大陸からは人がいません……」

正直皆さんの様な力がないと、希望も持てないのが実情です」

「1/4に……」

「ですので、連れてきた後になつてしまうのですが……  
GGGの皆さん、人類救済に力をかけて下さい」

「いくつか聞いていいかね？」

「はい」

「我々は元の世界には…」

「戻れません」

「戻れないとは？」

「運命的にだと思いますが、その後あなた方の世界に遊星主みたいな危機は訪れず、

ESウィンドウと共に消滅する形でした」

「…」

「その後地球に護君と、かいどう君がたどりつき、  
復興とともに、あなたがたの石碑がたつた…流れです」

「我々の世界には平和が…」

「はい。訪れました」

「そうか……よし、では我々GGは君に協力しよう。いいな？みんな」

「まかせとんしゃい！」

「別の世界も救ってミマスネー」

「パピヨン……」

「ありがとうございます。では補修も致しますのでトモロさん、ラグランジュ4に向かって下さい」

『了解』

ラグランジュに進路変更するのを感じた……

(とそういえば……)

「ルネさん……達ダメージは……？」

艦内部で」と寄り添うように休めているルネさんの事を思い出した。

「ああ、彼等は……機械部分、生体部分に深刻なダメージはきてるが……」

「とりあえず医療カプセルで、ダメージ回復ですね」



「医療カプセル？機械があっても大丈夫なのかね？」

「た、多分……キヤーティア技術とナデシコ技術でなんとか……」

「我々以外にも、何だかの世界から？」

「はい……色々な世界から死の運命になる人を連れてきちゃって……」

「参考に聞くが、技術？人？」

「技術は色々な世界から勝手に学んでですね。  
人は、あくまでもその世界で死の運命の人達です。  
つまり長官達のように……」

「ふむ……おいおい教えてもらおうとするか……」

「あ、命さんもいましたね……わすれてた……  
医療カプセルをだし……」

「重体の方や、ルネさんを医療カプセルに……」

「おい、命隊員を!!」

……

「ではお預かりします」

「勇者達を頼んだぞ」

「はい……勇者達といえば……」

「ああ、彼等もな……」

視線はボロボロになり起動すらできてない炎龍、氷龍等に注がれる……

「彼等は……」

「デビジョン艦を失った今だと修理が不可能だが……

修理できれば……の話になるが、地球にもっていけばとりあえずは、再起動する可能性がある筈だったんだが……」

「そうですね……とりあえずプラットフォームに着舷した後に、自分らの修理できる施設に移送します」

「ああ……頼む」

「と……見えてきましたね……」

「ほう…これはまた…」

ラグランジュ4に浮かぶプラットフォーム…

そこには改修作業をうけているマゼラン級やサラミス級が接舷している。

コロニーレーザーは接舷はしてないものの側で改修作業に入っていた。

『マスター、8番ドックが空いてますのでそちらに』  
通信が鈴から聞こえる。

「了解、トモロ左手からかぞえて3番目のドック確認できる？」

『確認した』

「そこにつけてな」

『了解』

ドックに接舷すると、ワイヤーで固定してあった勇者ロボにコバツタ達がたかり、移送作業にはいる。

またDF輸送艇がJアークのハッチについた。

「では、皆さんは横浜基地へご案内しますので、輸送艇にのりひとまず逗留して下さい」

移乗中に…

「カオル君、横浜基地とは…宇宙にある基地かね？」

「あ、地球にありますよ」

「この形状で大気圏突入するのかな？」

「あ、いえしません。チューリップ…ワームホールを通ります」

「ワームホール技術？興味深いもんね」

「なるほどワームホールか…」

先発輸送艇は「アーク」の船体から離れ、  
後発がドッキング作業しているなか…  
チューリップを潜りぬけ横浜基地に到着する。

「ほう…これはまた…」

「未知の技術、燃えてきたもんね」

「じゃ、皆さんお疲れでしょうなので、今日一日はお休み下さい。  
彼等コバツタ達が宿舎へとご案内いたします」

「GGG一行様歓迎いたします」

「おいでやす」

GGGの人達は宿舎棟へと案内されていった…

「ただいまあ」

「マスター…また多数連れてきたね」

「まあっね…と…明日からの前に、ちっと平和日本にいつてくる」

「はいはい…いつてら〜、新人はこっちがやっど〜」

〜現実日本〜

（よっど…ん？見慣れない本だな…）

題名…奇想天外兵器という本がベットの上においてあった。

（プレゼントかな？もらっどくか…）

そしていつも通りの納品と廃材の受け取り、食材等日用品をつけと  
り帰還する。

B55ハンガー

いつも通り集積所へ荷物置き…医務室へ…

パピヨン、凱、命、ルネ、ゾルダート」達が入っている医療カプセルを虚数空間からだし、

空いているカプセルと交換する。

「カオルさん、この人達…」

「この4人はエヴォリユダーと、サイボーグと生体サイボーグだね。あと一人は…：うんうまくいってそうだな」

「エヴォリユダーですか？」

「機械との完全融合した、超人的能力をもった人間だね。サイボーグとは違い完全融合一体化といえがいいか…」

「未知の分野ですね…」

完全融合ですか…：…

あ、容態回復しましたらお知らせします…

けど…サイボーグもですよね？」

「まあエヴォリユダーもサイボーグも、生体部分が回復しない事は…：だしな」

「ですね……」

「よろしく頼むわ」

B55ハンガーにいき、一息つき、データをいれこみながら……

「この七日間どうだった？」

「と……まず宇宙で改修工事の為プラットフォームを拡張、  
現在改修中……来月上旬にはそろっね」

「とりあえず木星だな」

「だね、惑星の詳細データ上がってるし……  
あと、西日本のBETA汚染のクリーニングは完了」

「お……重金属取り除けば人が住めるようになるか……」

「……あと自然とかもね」

「あ……ま、地道にかやっぱ……」

「あとは重慶基地完成度72%…飛行場はまだだよね？」

「まあ…な随州は？」

「ん…飛行場は先に完成、基地完成率50%ってところ。防衛施設は後回しにしてるよ」

「あと他には変わった動きあった？」

「月面の死骸収集率82%ね」

（あの死骸山か…）

「あれどうする？腐敗もしないから保存可能だけど」

「……食料にしてもあれだけの量なあ…肥料にできない？」

「…難しいかもね…いつそマストライバーで太陽に撃ち込む？」

「一番現実的か…まあ…寝て考えるわ…」

正直処分以外の方法も考えたいし…」



「腐らないから期限はないからね」

「これが地上だったならえらい腐敗臭が漂ってくるよな……」  
その為、地上では火炎放射車両が大忙し……

「おまけに病原菌が発生して怖い事に……」

「真空でよかったよなあ……」

「けど火星はどうするのもあるよ、腐敗するし」

「……酸素剤ないと火炎放射車使えないしな……」  
まあシュミレーションと思えばいいか。じゃ、お休み」

「お休みなさい」

……  
カオル報告

GGGメンバー加入

ナギ少尉「最新情報をお届けしよう…」

我等の勇者王を異世界につれてきたカオル、

しかし、勇者達は遊星主との戦いに傷つき、深い眠りについていた。

勇者達を治し復活させる事ができるのか？

勇者達は敦煌ハイヴ攻略にまにあうことができるのか？

次回、敦煌ハイヴへ…進撃開始

…立て、立つんだ我等の勇者王!!…

ん〜快感、やりたかったのよね〜こういったナレーション「

作者「なあ…ナギ、男性の方がそのナレーションしてるんだぞ…」

ナギ少尉「え〜いいじゃない。たまには女性のわたしがやってもさ

」

作者「まあ…いいけど…あ、ある兵器ネタが、次回大部分しめます。

お楽しみにい」

第163話 敦煌ハイヴへ…進撃開始 投稿日20110815

2001年12月22日未明、  
場所は重慶基地…

続々と敦煌ハイヴ攻略の為に部隊があつまってきた。

昼過ぎ発動予定の敦煌ハイヴ攻略の為に、艦船では、  
ビッグトレー砲艦型40隻、  
ビッグトレーミサイル艦20隻、  
ビッグトレー対空ミサイル換装艦5隻、  
トレインギャロップ100隻が集結しつつあり、  
また同行にギャロップコスモクリーナー搭載艦を伴っている。

搭載機等…ヤドカリ操縦は、  
対陸戦力機が、  
モンスター改500機、  
陸戦強襲型ガンタンク4000機、  
61式改10000両、  
61式重機関銃型2000両、  
対空戦力機が、  
魔対空型ティエレン500機、  
有人機は、魔ドム、魔不知火、魔撃震等を始めとした各部隊…  
勿論A-01やB-01も参加となる。  
機体をトレインギャロップに載せて、  
搭載小型チューリップで帰還してきた。

またもう活躍する場がさすがにないとは思うが…  
ボン太君、ターミネーターの歩兵部隊も伴っていた。

明らかにフェイズ4強規模のハイヴ進行作戦といえは過剰戦力とも  
いえるが、

攻略時または攻略後に5方向からの増援が予想される為、  
それに対応できるだけの戦力を…との用意で行っている。

本来であれば陸戦強襲型ガンタンクは約2400機が限界だったが、  
足りない分を、各基地防衛部隊より抽出している。

side(???)

『いやに丁寧ね』

「あ、さっきの着陸？」

『そうそう。 なにかあったの？』

「うふふ…なんでもないわ」

???.の左手はお腹をさすっている。

新しい命を…

『そう…トラブルかとおもったけど杞憂だったね』

「心配してありがと…さ、カーゴにおさめない」と

『わかったわ。あとでね』  
個人通信が閉じられた。

もっとも丁寧に着陸しなくても、殆どこの機体は衝撃がこないのだが、  
操縦にでてしまったようだ。

機体をハッチに歩行で乗り上げ、カーゴ内部のハンガーにおさめた。  
???はこの後、先頭カーゴのチューリップで、コロニー経由、横浜基地へと帰還する。

side)???)end)

さて…時は少し遡り、  
カオルが就寝してた頃…

B55ハンガーデスクの上におかれた本は、一コバツタ達によって  
読まれていた。

奇想天外兵器…という本である。

「ふうう…読み終わった」

「内容中々おもしろかったよね」

「けど開発成功しなかったのか…」

開けているページには第二次大戦時代に開発失敗した兵器、パンジャンドラムの紹介がかかれていた。

1943年イギリスではある兵器が開発されていた。

第二次世界大戦当時、ドイツは連合軍に対する備えとして、大西洋の壁と呼ばれる抵抗拠点となる分厚い銃座コンクリートトーチカ、対戦車対人地雷原、対上陸阻害用機雷杭などを構築していた。

それらを破壊する為に考えられた奇想天外兵器がパンジャンドラム…である。

構想上は自走する大型爆弾兵器、ロケット推進で96kmで爆走し、2tの爆薬をもち、自らコンクリートトーチカ等に突貫して爆発し、トーチカを無力化する…という構想でもって練られ、開発実行されました。

そして出来上がったのが1.83t炸薬入りの車軸に、二つの高さ3mの車輪にロケットが9本ずつつけられた魔兵器パンジャンドラム。

早速実験となり上陸艇からイギリスの実験海岸にむけ、爆音をあげながら発射されました。

しかし…  
ロケットの取り付け部の強度不足により浅瀬で擱座。

翌日、倍の36本のロケットを取り付けた姿で現したパンジャンド

ラム…

再び上陸艇から発射するもまたもや浅瀬で擱座。

その次は三輪にして更にロケット増やし実験するも…

ロケット点火せずに調べている内に水没。

ここで諦めないロイヤルネイビー魂。

四度目にはロケットを当初の4倍72本に増やし実験開始…

見事浅瀬を疾走し目標物へ到達するかとおもいきや…

砂浜上陸したところで方向を変え海に戻ってロケット暴発で爆散…

今度は誘導しようと考えケーブル式にして発射…

しばらくするとコースから外れたので軌道修正を試みますが、  
ケーブルがプチプチに断線しており…失敗…

その後いくたびと実験んし、

ロケット増やしたりケーブルを強化したり車輪を調整したり…  
しかし失敗続き。

そして第二戦線となる5月1日発動予定の上陸に間に合わす為の最  
終期日…

時に1944年1月…

国家の威信がかかっていた超兵器パンジャンドラム…

その最終評定試験が開かれた。

軍の高官、科学者、技術者達がみまもるなか、  
試験開始…

パンジャンドラムは発射され浅瀬から砂浜上陸、  
最高速度160kmをマークし、これは合格か？とおもいきや…

スポーンスポーン

車輪から外れてあさつての方向へ飛ぶロケット…

推進力が片寄ったためバランスを崩すパンジャンドラム。

小さな穴に片輪がはまり、方向を変え海へと再侵入…

更に方向を変え再度砂浜に上陸するも、穴にツツコミ大爆発。

ものの見事に計画は打ち切りになりました。

その後トーチカに対する有効な攻撃手段を持たずに連合軍の攻撃は  
開始され…

浜辺に到達、盾になっていたビギンズボートのバウランプが降ろさ  
れた途端に銃撃をくらい、

公式記録の記述に、トラップがおりた瞬間、先導の中隊は活動不能、  
指揮官不在、任務遂行不能となった。

指揮をとる全ての士官、下士官はほぼ死亡、または負傷した。  
部隊は、生存と救出の為にもがいていた。

の記述の通り、壮絶な戦いに陥る事となる…



「僕らがつくったらどうなるのかな？」

「そうだね、ここをこうしたら使えるんじゃない？」

「それだと巨大ゴリアテだよ」

これも奇想天外兵器にのつてあった。

ゴリアテ、第二次大戦時にドイツで開発運用された、遠隔自走破壊兵器である。

有線式のバッテリーまたはガソリン駆動の、爆薬満載の80cmサイズの無限軌道車とおもえばいいだろうか…

コンセプトは安全にトーチカや戦車、陣地を遠隔操作で破壊する。といった兵器であった。

元はフランスの工業デザイナーが試作してたのをドイツが発見、それを研究開発して兵器となしたのが元となる。

当時は無線は高く、使い捨ての為、有線式誘導になっていた。

最初は陣地にくる9kmで迫ってくる爆薬満載の小型兵器、到達するまえに重兵器にて、兵器の装甲を貫き爆破…

まあ到達されたら恐いものだから、そりゃ集中して狙うだろう。

その内、装甲とエンジン強化した改良型が投入…  
こんどは有線の部分が徹底的に狙われた。

スコップ等でケーブルを切断する等の逸話もある。

結局多いに活躍できたのが、地雷原に突入し、  
その爆薬自体で連鎖誘爆を引き起こす処理兵器としての使い道とな  
った。

あと捕獲したアメリカ兵が、遊んでいて爆発、  
死者がでるといふ逸話もあった。

「あゝそれもいいかもね…」

けどパンジャンドラムをなのれないよ」

「なら、こっして…」

さて、第二次世界大戦の奇天烈兵器達は、  
BETA戦において、どう生まれ変わる事になるやら……

時間は元に戻り…昼間、

「とりあえず集結は問題ないね」

「新造艦も問題なく集結中…明日の作戦開始時刻には問題ないよ」

「ん…ならいいか…と…」

あとは…勇者ロボ達か…」

今朝方移送されてきた勇者ロボ達…未知なる技術の為、  
取得情報と照らし合わせて修理計画をねっていた。

「あたらしく作り治したボディに移植の方が早いね。これは…」  
赤の星の純粹技術で作られた、ジェイアーク、ジェイダーに関して  
は、  
自動修理装甲が働いているのでほっといても問題はなかった。

だが、他の地球製勇者ロボはそうはいかなかった。

「よくここまでダメージくらって動けたね」

…だよ。駆動系がひっちゃかめっちゃか…」

人間で例えるなら間接の骨が粉碎してるのに動いた状態」

「う…」

「あと、ボディ自体がもう破壊？な状態のもいるし…」

「ん………正直修理見込みは？」

「2から8週間ってと〜」

「AIの機能回復の目処は？」

「それなら…全機2週間以内〜」

「…とりあえずAI回復優先で、ボディ修復でよろしく」

「で…いいの？」

「ま、彼等もいきなり別の身体じゃ嫌だろうし、

修復できるならできるだけだけしたいし…あとは希望を聞いてからだね」

「了解〜…けどゴルディオンさんはどうするの？」

3つの船の合体AIとなっているゴルディオン…

「彼か…彼は前の身体再現さしてあげたいね…」

「前の…？ああ、これね？」

「うん。そうそう」

「了解」

「で、あとボルフォッグは…」

ボルフォッグに関してはボルフォッグのみは回収されてるものの、  
パルバレイバーに操られた合体マシンは爆破により、  
粉々となっていた…

「本体のみなんだよな…まあガンクルーとかは新造かな？」

「了解」

「で、ジェネシックは…自動修復中と」

凱を外にだすと、ギャレオンは合体を解き、  
純粹緑の星製の各ガーマシンは、備わっている機能の自動修復モ  
ードになって修復中であった。

「ファイガーを建造すべきかな？」

「マスター、そろそろ」

「ん？あ…わかった」

時計をみると作戦開始時刻前…

司令室へと向かう…

『諸君、我々は次なるハイヴ攻略の為にここ重慶基地に集った。

次なる目標は重慶から北西1500km程の距離にある敦煌ハイヴ。敦煌を落とせば我々人類はカシユガルへの道が開ける…

物量には物量でかえす…我々の力を再び見せようではないか…』

スクリーンが、カオルを映し出す。

「進軍せよ」

「第一打撃艦隊発進」

「第二打撃艦隊発進」

「第三…」

司令室が騒がしくなる…

これより丸3日間移動、25日朝には敦煌ハイヴ砲撃予定で作戦は開始された…

…

カオル報告



ナギ少尉「とうとうここまでできたのね…」

作者「とうとうな…長かったなあ…」

ナギ少尉「オリジナルハイヴまで…次の敦煌ハイヴを落とせば障壁はないのね」

作者「まあ、この次のオリジナルハイヴおとしたとしても、まだ少し続くけどね。あと問題の火星もあるし」

ナギ少尉「ところで、今年中に終わりそう？  
太陽系完全攻略がこの物語のEND目標でしょ？」

作者「ん〜た、多分？…で再構築するだろ…う〜…  
まあ加入予定のも、まだまだ入れたいけど…ね」

ナギ少尉「さて、次回予告は戻して…」

次回、敦煌ハイヴへの道程…  
モンスター改の活躍もあるよ。お楽しみにい〜」



第164話 敦煌ハイヴへの道程 投稿日20110817

2001年12月22日

モニターには進軍しつつある陸上艦隊が衛星映像でもって映しだされている。

大規模艦隊になった為、コスモクリーナー搭載艦を中心とした、艦隊が2個できていた。

50km範囲外はまだ死の世界の為ともいえた為である…

艦隊の先頭部分には、弓形陣に2重のラインでビッグトレー砲艦型が20隻すすんでい

その後方にコスモクリーナー搭載艦を挟んで、ビッグトレー対空ミサイル換装艦が並び、その両側にビッグトレーミサイル艦が単縦陣、その外側にトレインギャロップが並ぶ…

先頭のビッグトレー砲艦型から、最後方のトレインギャロップまで約10kmに及ぶ、大規模艦隊となっていた。

「これで敦煌ハイヴは落とせるとして…その後の増援対応だよな…」

「だね…敦煌ハイヴは最大戦力の7割弱、今の時期を逃さないで…だね」

デスクのモニターに映像を出す。

ルーロスからのハイヴ内個体数調査情報が映し出された。

現在敦煌ハイヴは度重なる増援供出等の為、  
来年にはフェイズ5に成長しようとしてたが、  
現在フェイズ4強の飽和推定数の約75万を下回り、約52万とな  
っていた。

「で、地上の集団は？」

「今のところ脅威になる数はでてないけど敵集団、ボギー数は8」

「まあそんなものか…」

「いずれも大砲級を含まず、旅団規模以下ね」

「モンスター改のテストも兼ねたいな…」

「となると…明日遭遇予測のボギー7が最初になりそうだね」

「明日何時頃？」

「昼過ぎ30% + - 3時間40%程、遭遇出来ず27%…まだまだ予測範囲からでてないよ」

「……誘導しちやえば楽かな」

「G元素棒？あれは誘引力強すぎだよ、エアロスタットは落ちちやうよ」

「バルキリー小隊で誘引は？」

「あ、ガウオークで？」

「こそ」

「トラブルがないかぎり大丈夫かな？」

「いつてるよね？」

「え〜と…いつてない…ね」

「あ…じゃあ…スカル大隊回して」

「了解」

「…あとは特に試したい機体はないよな…」

「今回攻略後が問題になりそうだから過剰戦力になったしね…  
そうそう問題は起きなさそうだよ」

「じゃあ…」

時計を見上げ…

（まだ作業できるか…）

「技術の続きでもしますか…」

司令室を後にし、ハンガーデクスで続き作業を…

「マスター、今度は何？勇者ロボは修理計画きまったよね？」

「ああ、まだ技術をね…例えばカーペンターズとかさ」

「へえ…面白い技術で物質を修復するんだね」

「空間修復技術な」

(空間修復ツールね…いいじゃん)

カーペンターズ搭載の空間修復ツールをみていた。

戦闘被害により、破壊された物質を元の状態に戻せる加工ツール。

まあ要するに爆弾等で飛び散った部材をかき集め、

もとの結合した状態に戻すツールと思っていれば大丈夫だった。

またある程度の物質変換もこなす万能修復ツールであった。

ただし、複雑な構造は修復できない為、  
建築物等の修復に向いている。

カーペンターズにはこの空間修復ツールを3機一組で搭載していた。

カナゴに3000機ものカーペンターズ搭載され、

被害発生後急行して、現場到着後一斉にとびだし、

修復作業にあたる…というものだ。

他のロボット物でも、

特に現場の後始末をするロボットが出てくるのは珍しい…

「とりあえず改造後…か…」

カーペンターズを再結成する方向でいくらしい…

「カーペンターズつくるの？」

「ああ、そのつもりだ。大仏とかつくるの苦手だろ？」

「うん……」

原作でも、カーペンターズは空間修復ツールを使い、文化財を修復する作業にもあたる。

この世界においても文化財を再生してもらおう考えたつた。

街に関しては、一からつくる為、住む人々の考えがあるだろう。

なので文化財を現物の記録、映像や設計図等あり、材料があれば修復できる彼等が必要でもあった。

「とりあえず…っ…」

カーペンターズは簡易AI、壊れても変えがきくというコンセプトで設計されてた。

一組を同化で作り、  
直接同化にて装甲材質変換、AI強化、言語表示能力等も施す。

「始め」「まして」「マスター」

「よろしくな 早速実践で作ってもらいたいんだが…これをな…どれくらいでつくれる？」

鎌倉の大仏を引っ張ってきた。

「場所は」「ここで」「造るの？」

「そうだな…もとの場所は11号」

「更地になってるよ〜」

「じゃそこで作ってほしい」

「わかった」「けど」「移動方法は？」

「ふむ…」

下駄をだしてきて…搭載できるように施した。

「どじっ?」

「ありがと」「作業見込み」「5日程」

「ならもう少し作るようにしておくよ」

生産ラインに改造後で29組注文する。

「30組で1チームかな?」

「兄弟増える」「ワイ」「4時間で仕上げる」

(とりあえず文化財復興チームか…)

「あとは…デイベイディングドライバーか…」

「空間湾曲技術ねえ…正直チートじみてきた」

「とりあえず作っておこう…危険すぎで、あんまり使う機会なさそうだけど…」



1セットの注文をする。

「とりあえずこんなもんかな？」

で、会敵もしないしなあ……一回仮眠とるよ」

「なんかあつたらお越しにいく」

「お休み」

2001年12月23日

8時頃

朝食をかるくとりそろそろかなと司令部へ…

しかし…

「会敵しないね…」

画面上でボギー7の集団はあさつての方向へといき、

ハイヴへ直進する艦隊にあたるBETAの集団はいなく、

モンスター改のテストが兼ねられなくなってしまふ事態になっていた。

「じゃあ誘引するしかないか…スカル大隊はついてるよね？」

「うん」

「じゃ、偵察誘引命令を……」

「承認！！」

「……長官の真似？」

「えへへ、熱いんだもん あの人達」

スカル大隊の一部がガウォーク形態で発進していく……

「接敵は……何時頃に？」

「3時間後」

「じゃあ……それまでに、GGGの方々の割り振りだね」

「うん。加入の承認は貰ってるしさ」

救助したGGGのメンツは艦の運用や整備、技術要員が殆どであり、艦の防空を取り扱う戦闘要員等は殆どいなかった。

ので大河長官、火麻参謀は司令参謀部へ、  
スワンさん、猿頭寺さん、雷牙博士は開発部へ、  
牛山さんは整備部への配属となる。

また他にも色々な部所への配属が決まってく…

side)バルキリースカル21)

『へっへっへっ…見えたっすね』

前方にはこちらに向きを変えようとしているBETA群がいた。

盛大な土埃をあげ…顔がこちらをとらえる。

「よし、お客さんをアテンドするぞ、あんまり離すなよ」

『了解』『おいさ』『腹減った』

……

『友軍まだですか？腹減りましたよ。食べかけだったのに…』

「もうちょっとだ、頑張れ、あと出るのわかってたんだから、お前  
が悪い」

『まさかこんなに低速度で、  
長距離接地飛行するとは… 思いませんでしたよ』

「そういつな」

（オリジナルハイヴ落とすまでは、バリアの存在を秘密にしておきたい…か）

ブリーフィング時の説明を思い出していた。

V F - 171はピンポイントバリアにより、  
光線級の生体レーザーは無効にできる。

だが、それにより発展を促すのが怖い…  
のが異世界軍における総意である。

後方にはバルキリーを潰そうと、必死に追いかけているBETAの  
集団がいる。

「スカル22前出過ぎだ、スロットル絞れ」

『とと…』

150kmから200kmの低速で後ろについてきている突撃級との  
間隔を調整しながら、  
彼等バルキリー小隊はガウオークで進んでいた。

あと少しだ…

『デーポママよりスカル21へ』

「こちらスカル21」

『ご苦労様、スピードあげて振り切って良いわよ』

その通信入ったとともにスロットルをMaxに入れ、アフターバーナーふかしながらガウオーク加速していく。

700kmあたりまで加速すると、前方にモンスター改の戦列が段々と見えてきた。

軽く浮上してモンスター改の列をかわすと……

sideバルキリースカル21end

〈司令部〉

「モンスター改の射程まで、あと2分!!」

本来はOTM技術を使った砲身により、160kmの脅威の射程距離を誇るモンスター改…

今回は殲滅戦テストの為、水平発射距離である12km設定にて発射される事となった。

「間もなくはいります!!10、9、8、7、6、5、4、3、2、1」

画面に映し出されたモンスター改の液冷式40cm液体推薬キャノン砲から砲弾が放たれる。

その数2000発…

その衝撃は、モンスター改の接地してある土砂に減り込む程になる。

その弾丸はほぼ水平に飛び瞬くまに突撃級の身体に吸い込まれ、

一瞬でその爆炎により身体が爆散する。

先頭を走っていた突撃級は身体を散らし、

その後ろの突撃級に認識される事がなくなっていた。

その位の爆散であった…

続けて衝撃を殺し、照準をロックし次弾を撃ち放ち次の目標が爆散する。

高い威力なのに連射可能なのは、OTM技術によりるものといえよう。

一斉射ごとに、500以上のBETAの華が散り、ものの10斉射、2分足らずで、誘引してきた旅団規模のBETA群は、

要塞級を含めて体液と肉片をのこし消えていった…

「モンスター良いんじゃない？」

「確かにね〜けど……」

「けど？」

「補給に時間がかかるよ……」

モンスター改の40cmの弾は25斉射できれば、弾を補充し再びでるのだが、補充に戻るのに時間がかかる状態となっていた。

地面に減り込んだタンク部…  
抜け出して旋回戻る形となる。

「あ〜…まあ…モンスター改の側に補給部隊が展開するか…  
4部隊に分けるかなあ……」

「それしかないだろうね〜」

突撃級は淘汰され、しばらくすると、中衛、後衛グループに入るB  
ETA群も淘汰された。

モンスター改のデーターが上がってくる。

OTM技術による砲身により、バロツティングと呼ばれる砲身内部  
振動は起きず、

また熱による砲身の歪みも、

現行の陸戦強襲型ガンタンの240mmキャノン砲よりも発生率  
がかなり低くなる…

またライフリングを施さない砲身であり、摩擦係数も少なく、  
そのため長距離射程においてジャイロによる、  
弾の軌道ズレが起きない等もある。

ただし、やはりその巨体からの長砲身、約50mによる長い砲身、  
巨体の為、  
閉鎖空間内部ではまとまった運用が少し難しく思っていた。

2001年12月24日

クリスマススイブ

要望があつたが…現在進行中の部隊があつたため、ミサは開かれな  
かつた。

進行艦隊は特に遭遇する事もなく…ひたすら砂漠となる道程を進む。

本来であるなら青海湖のあたりであるが…



BETAに山々を削りとられ、平らにされ…砂漠化がすすむ事となり、  
あたり一面砂漠の海となっていた。

自然がなくなると瞬くまに砂漠化が広がり…  
青海湖も枯れ、砂漠の海となってしまった…

2001年12月25日未明…

艦隊は敦煌ハイヴ130kmに接近すると…

「敦煌ハイヴに動きあり！！大規模BETA群出現してます！！」

モニター映像は敦煌ハイヴからマグマの如くBETAが湧き出てきている。

「対攻略戦準備命令を発動せよ！！」

「今回は、おとなしく見学とくるか」

司令室配備となった長官、参謀がみえていた。

……

カオル報告

カーペンターズ  
デイベイディングドライバー

作製

ナギ少尉「モンスター、良いじゃないですか」

作者「だろ？」

ナギ少尉「けど160kmの射程って本当です？」

作者「……正直疑いたいんだが公式でもだし……」

公式設定からかかんがえると、滑空砲しかないんだよなあ……」

ナギ少尉「あく神の目による160km先でも10mの誤差で着弾  
ってやつですよな」

作者「そぞ、地平線越えて目視不可能な射撃ね」

ナギ少尉「現代では……可能？」

作者「単純に火薬などの推進力での砲身では不可能……といっておく  
ね。

弾に加工を施すなら可能だけど」

ナギ少尉「AGSとかですね」

作者「そうそう…で戦車90式等は3kmあたりが有効射程距離だし」

ナギ少尉「3km!!えつと突撃級にとつたら2分で…」

作者「きちやうね」

ナギ少尉「むむむ…あ、次回ですね…  
次回、敦煌ハイヴ攻略、そしてBETAの逆「ぎゃーぎゃー」お楽しみにい」

作者「はあはあ…敦煌ハイヴ攻略だけです!その後はつきません!  
」

第165話 敦煌ハイヴ攻略戦 投稿日20110819

2001年12月25日未明

衛星からの映像で、

敦煌ハイヴにある門より、

BETAが近寄ってくる異世界軍の艦隊へと、撃退せんと溢れ出してきた。

その数予測数は今までの最大規模で40万…

対する異世界軍艦隊は動きを止め、

迎撃体制をとるべくトレインギャロップから搭載機を放出し始めた。

迎撃ラインにはいるのが、

モンスター改250機、

陸戦強襲型ガンタンク2000機、

その戦線交代要員に同数が控えている。

そして最大戦力である…

ビッグトレー砲艦型、

ビッグトレーミサイル艦も戦列を整え始めた。

艦載機をだしたトレインギャロップは方向転換し、不足の事態に備える。

補給チーム搭載のトレインギャロップのみ戦線に合流する形になる。

（司令室）

「煙幕弾頭弾射撃開始します！」

モンスター改から勢いよく煙幕弾が放たれる。

こちらの砲艦型の最大有効距離までの間の空間に、

煙幕を張り巡らせ、光線級に対してのミサイルのアドバンテージを作る為に撃ち出される。

モンスター改は控えも含め、

砲弾庫に入っている砲弾をすべて煙幕弾に積載変更を行っていた。

10秒間に1000発ずつ射出される煙幕弾頭は撃ち落とされながらも、

着実に目的空間を煙幕で埋めていき、

敵の大砲級が自身の射程圏内に到達する頃には、

既に艦隊からハイヴまでの空間は煙幕弾頭の煙りに染まりあがった。

「衛星からの種族判別情報送られてきます！！」

続々と湧き出てくるBETAを観測している衛星猫の目…

猫の目はキャーティア技術をいれた戦場観測衛星で、

煙幕越しでも戦場の中の1000万兵士中の特定の一人を、

顔まで判別できる性能をもっていて、まさにチートの技術がはいつている。

別に宇宙から露天風呂を覗き見や、庭の中でトップレスで日光浴してる金髪美女を覗くのに、作った衛星ではない。

猫の目情報により、現在地上に出ているBETA群の中での重要ターゲットである、大砲級、重光線級、光線級に続々とターゲット番号がふられ……

「緒元入力」

「トマホークミサイル！！、全セル発射ああっ！！」

ビッグトレーミサイル艦より4200発ものミサイルが射出される。

ミサイルは800kmまで加速し、50mの低空をとび、目標の5km手前で空高く高度をとり、衛星からの誘導により、設定された目標に100%命中する。

迎撃される事なく……

この一撃で予測BETA総数の1%が華となる。

光線級はミサイルを感知して、迎撃の為に生体レーザーを照射するが……

煙幕により拡散され有効熱量を持たずにそのまま受けて爆散する。

煙幕により、でてきた大砲級、重光線級、光線級にミサイルが次々と突き刺さり爆炎をあげる。

4射目にて、現状表にでている重要ターゲットはいなくなり、まだ湧く中だけにいる状態になった。

そこからはちまちまと周辺部及び、湧いてくる重要ターゲットを狙いつつトマホーク…

トマホークがその推進力で要撃級に突き刺さり、その爆発力で要撃級の肉体を肉片に変えるばかりでなく、構成物質である鉄板で周囲に襲い掛かり、小型種族である兵士級、戦士級、戦車級はえぐりとられる。

また要塞級に突き刺さったトマホークは、爆発し、要塞級の肉体の40%近くをえぐりとり、体力を奪われ死んだ要塞級はその身体を支え切れず横に倒れ、肉体に小型種族がつぶされ体液をだす…

いたるところでBETAに対する災害がおきて…突撃級がビッグトレー砲撃艦の射程圏に入る頃には、予測数の実に20%強、約8万強のBETAが死滅したり、肉片に姿を変えていた。

レーザー無効の煙幕弾及び、正確無比に着弾する、トマホークミサイル、



及びその誘導をサポートする猫の目で一方的攻撃は続く。

ある程度は沸きつづける中に光線級、重光線級、大砲級がいるものの、

地上にでて5分もしない内にミサイルにて消滅するなか…

「砲艦型の射程圏に突撃級が侵入！」

突撃級がビッグトレー砲撃艦の射程圏内に到達する…

「砲艦隊!!!61cm砲3連装、一斉せいしゃああ開始せよおお!!」

衛星モニターにうつるビッグトレー砲艦型40隻、  
61cm砲3連36基、1隻あたり108門の主砲、合計4320  
門が一斉に火を放つ。

その大量の砲弾が射程圏内に侵入してきた突撃級に襲い掛かり、  
必中とはいかないものの、豪快な爆炎をあげる。

その0.5秒後にさらに4320発の砲弾が、次々と生き残ったま  
たは既に死んだBETAに襲い掛かる。

BETAに直撃しなかった砲弾は地面で爆炎をあげ、破壊力でもつ  
てクレーターをうみ、

また破砕力で、周りのBETAの体力を一気に刈り取ったり、奪つ  
たり…

射程圏内に踏み込んだBETAは、まずできた砲弾クレーターにすすみこむ。

そこから砲弾がきて至近距離にて爆発が起き、上半身に爆風が襲い掛かり、肉がもげていく…

生き残ったBETAはさらに前にいこうとするも、  
またもや砲弾がきて、爆炎を浴び、いきたえる…

小型種においては砲弾がきて爆発するたびに、  
その爆風威力により吹っ飛びたたき付けられる…

砲弾至近距離にいるのは、砲弾が爆発するとその砲弾構成物が破砕し、

瞬時に襲い掛かり、肉を削りとりBETAは肉片とかす…

その為小型種は、まともにする事もない状態に陥っていた。

「BETA、門より出現、終わりました！総数約38万！」

「現在残存15万です！」

時間が経過し、朝日がでて日がのぼる頃には…

61cmの砲弾の嵐を抜けてくるBETAはいなかった…

第一次防衛ラインにつめてた陸戦強襲型ガンタンクは帰還してく…

実に約1億9千発の砲弾の嵐…  
クレーターを作りすぎてまともに進めなさそうな地形を作ってしまった。

着弾エリアの砂漠の砂は既になくなり、地下層にあたる岩盤がみえてかつ、  
えぐられてクレーターができていた。

異世界軍艦隊は大きく迂回し、敦煌ハイヴの門を目指して進む…

2001年12月25日深夜

攻略作戦はもはや定番化した釣り天秤に入ってきた…  
昼過ぎから始まった釣り天秤は、深夜に入っても引き続き行われている。

予測数をわずかに下回る38万のBETAが地上で命を散らし、  
残るはハイヴ内部にいる約14万のBETAがのこっている。

その地下に籠っているBETAを引きずり出すべく、  
エアロスタットが門に突入し…深層部あたりから釣られたBETA  
群を連れてきて、  
殲滅する作業が進む。

至近距離では過剰な破壊力をうみ、  
門を構成している構造物すら壊しかねないモンスター改は今は整備

をうけ、休息中。

門から湧き出るBETAを陸戦強襲型ガンタンク、61式改、61式重機関型、207B小隊、B-01、及びビッグトレーミサイル艦が殲滅を担当していた。

「現在残り6万5300」

釣り天秤は、確実にかつ安全にハイヴを攻略する戦法として、異世界軍では鉄板となりつつある。

なにしろ今の状態で反応炉へと突入は、真横や後方に隠道からの出現がありえ、危険性が高くなる。

反応炉防衛しているBETAのみにする為の、大事な大事な戦法であった…

(翌日3時あたりには突入できそうだな…しかし…)

心配する事項があった。

未だ…オリジナルハイヴ及びポパール、エキバストウズ、クラスノヤスクからの増援気配がなかったのだ。

増援がウランバートル及びマンダレーからしか出てない…

ポパール、エキバストウズ、クラスノヤスク、各ハイヴからは、オリジナルハイヴへの中規模移動しか確認されてない状態であった。

ウランバトルからの4万はボギー11、マンダレーからの9万はボギー12と割り振られていた…

ボギー11到達予定は27日午後9時頃、

ボギー12到達予定は27日午後11時頃…

いづれも釣り天秤に移行するあたりでの移動を確認していた。

side(千鶴)

「ターゲットロックしてうつ、ターゲットロックしてうつ、ターゲットロックしてうつ、ターゲットロックしてうつ」

つぶやきながら網膜投射にうつる、門から出てくるBETAを、絶え間なくザクマシンガンで命中させ、殺す射撃行動をおこなっている。

最初いきなり、

「実戦にいくぞー!」

と言われた時にはびっくりしたが…

まだ訓練生の身でありながら、

BETAとの実戦を経験させてもらえてよかったと思う…

それというもの…

今はすこしなれたが、始めてBETAを見た時、固まってしまったからだ…

通常戦場で固まると、

そのまま戦車級にたかられ食われる話を講義で聞いてたが…

この場は違った。

すぐに他機、多分陸戦強襲型ガンタンクにより前方のBETAは破裂した。

なんどか見かけて慣れてからは、他機に取られまいと射撃行動をおこなっている。

side)千鶴end)

釣り天秤により残り3万に減らされた敦煌ハイヴ残存BETA。

突入してきた異世界軍を阻む事はできなかつた。

同日午前7時24分

陸戦強襲型ガンタンク、A-01、沙霧大隊を始めとする突入部隊が、地下深く2km地点にある反応炉に到達した。

生産施設から次々と生まれたてのBETAが出てくるが、出口を制  
圧した為、  
出た途端なます切りにされてく…

207B小隊を始めとした部隊がその処理を担当していた。

side) 珠瀬)

「はうう…えい!!」

生まれたての要撃級が行動にうつる前に、  
珠瀬機の高周波ブレードにより、一刀両断にされた。

「はう…きれましたです」

『よし…約30秒後にまた生まれてくるぞ…いけるな』

「はいっ!!」

接近戦は苦手な珠瀬であっても、切る事に慣れてはおかなくてはな  
らない…

側にはフォローとして、沙霧大隊の魔不知火がスタンバイしていた。

side) 珠瀬end)

しばらくすると、カオルの魔撃震が乗り込んできて、反応炉…頭脳

級に同化しハッキング…

敦煌ハイヴは異世界軍の手に落ちた。

が…

『カオル大将、大至急司令室におもどりを！！  
ほぼ全ハイヴから大規模移動感知しましたっ！！』

そう、地球上にはまだ21のハイヴがある…

…

カオル報告

敦煌ハイヴ攻略



第165話 敦煌ハイヴ攻略戦 投稿日20110819 (後書き)

ナギ少尉「呆気なくハイヴ攻略されちゃいましたね」

作者「まあそうだろ。おもにビッグトレー砲艦型のおかげでもな……執筆してて計算してたんだが……  
1億9千発をぶち込める無限弾薬装填装置チート過ぎる……とおもったね」

ナギ少尉「えへへへ」

作者「通常なら……1門50発から300発だからなあ……  
1分2発で、回航補給してか、補給船から給弾してから、再射撃だからな」

ナギ少尉「もし無限弾薬装填装置がなかったら？」

作者「ん〜給弾作業でコバツタ達が大変になるだろうが……  
4320門だから……普通に勝つたろ。  
ただその後が微妙だったかな」

ナギ少尉「あ、最後の大規模侵……だああああ……けちい」

作者「ネタばらすな次々」

ナギ少尉「ちえ…で、ハイヴについてなんだけど…」

作者「ん〜こればっかは正直独自というか…

計算が面倒だから2倍計算でだしてる。

フェイズ4が40万規模、

フェイズ5が80万、

フェイズ6が160万、

その後フェイズ7が250万…ってね」

ナギ少尉「じゃ、今まで異世界軍が相手してたのが…」

作者「そ、つまり40万から80万以下のフェイズ4ってわけ…

次が160万以上のフェイズ6オリジナルハイヴだけどね」

ナギ少尉「さて…今回は、BETAの逆襲の足音…

カオル大丈夫？、勇者はまだたたないのか？」

命「ゴオルウディオンハンマアアア…!!!」

長官「しよおおうにいん!!!」

166話 大規模移動発生 投稿日20110825(前書き)

再開します。

予告編消せない…どうすんだろっ？

side)あ号)

(何故?)

(何故?)

(どうして、ここに?)

あ号は悩んでいた。

拠点のすぐ横の下位存在から、災害により生産物が減少していると…

(ありえない)

災害に対する除去は順調なはずだった。

東の島まで進出し、その拠点を災害研究用として稼働させた。

もうまもなく、寒い土地からも災害を追い出そうとしていた。

それなのに…

(何故？ありえない)

自身の隣から援助要請がきた。

それに呼応し、二つの拠点から援助をまわした。

そして…おんなじように…

(災害は去った？…前とおんなじ…)

あ号は悩んだが脅威が迫っているのは同様だった。

(確かめるか…)

あ号は、地球上すべてのものに対し、我の元へ集結せよ…と指令をだす。

集まり次第、あ号は指示をだすつもりだ。

蹂躪せよ…と

side～あ号終了～

～今の時間～

カオルは魔撃震をしまつと、主広間にきていた小型チューリップを使い、

横浜基地司令部へと中継コロンーを經由して入る。

「大規模移動ってどうした？」

「カオル殿！……あれを……」

モニターには世界地図がでている。

世界モニターには、中央アジア方面への大規模移動を表示する、矢印が示されていた。その数16……

「っ！！」

ヨーロッパ等直接到達できない距離にあるハイヴからの移動群は、途中中継をするのだろう……若干角が違っているが、間違いなく中央アジア方面への移動ルートをとっていた。

「……ヤバいな……予測される事象は？」

聞きたくないが、確認の意味もこめて……

「大々規模侵攻の可能性がります。その数1000万規模」

「1000万……」

「はい」

ソ連の西側、及びヨーロッパに分布しているハイヴはフェイズ5規

模、

来年あたりにもフェイズ6へ成長するハイヴもある。

フェイズ5規模の構成要因に、80万以上のBETA飽和定数個体数：があるのがスパイからの情報でわかっていた。

フェイズ6は160万以上…

フェイズ7は250万以上になるが…

その12に及ぶフェイズ5規模のハイヴからの一斉大規模移動、フェイズ4からもでている。

それも大規模移動群は最近なったボパールにしても50万、ヨーロッパ、ソ連方面は最低で60万の移動群を放出している…

それだけの移動が中央アジアオリジナルハイヴを目指し、移動をしていた。

そして…

「佐渡スパイからの入電！！

オリジナルハイヴからの指令、切断されました。

鉄原、重慶も同様です」

「スパイ行為がばれて、敵対と認められたようだな…」

「カオル殿スパイとは？」

「横浜白凌基地の地下にもあるんですが、頭脳級とよばれるエネルギー発生させる事のできるBETAがいるんですよ、それを自分がハッキングしてスパイに仕立て上げて、誘引で各個BETAを殲滅してました。まだ改良種がきたらテストできたんですが…」

「なるほどな…となると誘引はもう使えないと、考えた方がよろしいな」

「ですね…積極的防衛をとる形になると思います。佐渡、鉄原に関しては…」

「ふむ…と、この移動群は…いつ頃くるのかな？」

「予想される侵攻日時は？」

「はい…1000万規模に達する進行予測はリヨンハイヴからの移動群到着以降、来年1月15日以降と考えられ、一番可能性があるのが元敦煌ハイヴを経由しての侵攻。目的地が重慶基地だと思われれます」

「重慶がおちると再度九州に侵攻可能だからな…」



「その後に鉄原か佐渡島ですね」

「自分らが侵攻した逆のルートか」

「1000万か」けど乗り切れば「あとはオリジナル落とすまでだな」

少なくとも「1000万規模を生産するには物量に優れたBETAであつても、

1年はかかる」

大規模侵攻を乗り切れば「勝利の道筋がみえてくると思える。

だが1000万である」

「どんだけ優秀な機体、どんだけチートな機体をそろえても1000万を迎えつつ事ができるか？」

答えはノンである。

その機体自体が目標であるなら「イエスとはいえるが」

戦場の面でせめてくるBETAにたいし、戦場の点で勝つとしても、それ以外が突破され後方にいかれる。

その点は勝ち続けるのに移動できず」

負けになるのである。

例え、その機体から発する広域殲滅兵器があつたとしよう。

だが、光線級と同様、地平線の問題もある。

地平線より下は地球を破壊しないかぎり無理である。

今までは誘引素材として各基地の反応炉があった、  
侵攻作戦な時は艦隊そのものが誘引素材だった…  
だから数十倍の単純数にも勝てたのだった。

1000万にも及ぶ数をいっぺんに処理したのが月での餓死だった  
が、  
地球上では到底無理な作戦でもある。

「……ん…とりあえず作戦としては…」

なので今回カオルがやるうとしている事は、  
その膨大な数を時間をかけ、いかに効率よく減らす…  
この一点にすぎないって事であった。

戦場になると予測されるのは、膨大な無人地域の広がる中国、  
この膨大な広さを誇る中国において迎撃作戦を構築しようとしてい  
た。

ウランバトルや北側への侵攻はない前提での作戦会議が続けるら  
れる。

何故ないか？は極東方面からの中央アジアへの移動群の存在だ…

これがなかったら異世界軍は極東方面侵攻も疑ったかもしれない。

万が一そうなつたら…その移動の間にオリジナルハイヴ強襲の考えもとれるが、今回はオリジナルハイヴにBETAが集中している…からの予測である。

……しばらく時間が経ち

「マスター」

「ん？」

「各国大使から問い合わせがきてるけど…」

「事態が事態だから…説明しなきゃ駄目か…  
2時間後に通信による国連会議をと、国連に要請しておいてくれる？」

「了解」

カオルは再び防衛プランの組み立ての協議に戻る。

……

「と、まあ敦煌基地に関しては、

27日の防衛戦終了後にこいつを敷設開始、  
防衛ライン施設は敷設開始だね」

「問題はオリジナルハイヴ側がどれ程とれるかでしょうな」

「今までのケースからみると、1000kmまでは反応しなかったからだけどなあ…」

「多分750kmまでは大丈夫じゃないかな？」

「根拠は？」

「領域、1500kmあたりごとにつくるからね」

「……じゃ、その地点での敷設も行うとするか…」

「わかりました」「了解」

大まかな作戦きまつたところで、  
通信による国連緊急総会が開かれる…

「さて、皆様方の方でも情報は行き届いていると思われませんが、  
本日、日本時間12時47分頃、ほぼ全ハイヴより大規模移動を確  
認、

移動先はオリジナルハイヴ、カシユガル…

考えられる予測行動としては、1000万規模での重慶、鉄原、佐渡島侵攻です」

「1000万！！人類史上ありえない規模なのだが大丈夫なのかね？」

確かにそのような盛大な規模の侵攻はなかった…

精々5万から6万の侵攻で、異世界軍がくるまではその旅に勢力圏が後退してたのだ…

異世界軍ができるまでは、民間人が逃げる土地がない為、そのような軍団規模の侵攻を受けると民間人を守る為に…  
にっちもさっちも行かず…結局撤退…

民間人にも多大な被害を受ける事となる。

民間人がいなければ…

民間人がいなければ、軍団規模の侵攻があっても耐えきる事ができる。

京都防衛戦のように約20万にも及ぶ大規模侵攻にも一ヶ月たえきる事ができたのだ…

「我々異世界軍としましては、幸いな事にまだ侵攻予測地域は、無  
人地帯の為、

重慶基地を最終防衛ラインとして、迎えうつ予定です」

『重慶とすると敦煌はどくなるのだね?』

「敦煌は最終的には消滅する可能性が大きいです。ですが再ハイヴ化にしません。

オリジナルハイヴ侵攻の際には移動距離は2倍になりますが、なんとかなります」

『G弾使えば敦煌を失わずにすむぞ』

「またG弾ですか…万能でもないですけど…」

『我が国のG弾は世界一いいいい』

「で、そのG弾何発使う予定なのですか?」

『1発で十分だ』

「効果範囲は?」

『半径20km』

「じゃ、1発ですみませんね…」

「……三発でも四発でも!!」

「で、解決つかない重力偏差を残すわけですね。統一中華さんに…」

「偉大なる大陸にそのような爪痕を残すのは赦せない」

「放射能汚染残したろうが」

「わが親愛なる友人が、我々の爪痕を除去してくれている…感謝している。だから重力偏差は赦せない」

「なら…核を大量に!!」

「あゝ有効範囲50kmなので…また除去しに回らなきゃいけないので、

勘弁して下さい。

わが異世界軍では通常兵器やサイクロプス等で作戦を行いますのでご了承を」

その後、国連軍及び統一中華戦線の後詰め派兵がきまり緊急総会は終了する。

緊急臨時総会が終わり…

「さてと…防衛設備敷設と明日の防衛戦だな…この規模なら…まあ  
まかせ…」

「マスター」

「ん？どうした？」

「明日の防衛戦なんだけど、僕らの考えた兵器使ってくれないかな  
？」

「どんなのだい？」

「それはね〜これなんだけど…」

「ん？…ん？…これは…ドラム缶？」

「絶大な威力を誇るよ〜」



「まあ…いいが…」

「じゃあ、明日のボギー11の防衛戦に投入するね」

「ああ…」

カオルは再び思考を戻す。

（まあ今敦煌にいる部隊で楽勝だな…問題はその後と…）

今現在敦煌にはビッグトレー砲艦型40隻がいる。

なので基本的には現地にかかせて、  
防衛施設の建設にかかる。

無限弾薬装填装置が入る器をつくらなければ、どうにもならない…

（破棄を考えると…）

近接戦闘も充実したものを、作らなければならないだろう。

（とりあえずはコンクリ土台のCIWSは外せないよな）

タングステン弾を無限に吐き出す30mm自動迎撃機関砲…を基本  
とした設計を施すべく、

チューリップで敦煌基地へ再び移動する。

side 命

プシュー

(ここ…ここは?)

見慣れない天井が見える…

(わたしは…確か…あつ凱!!)

「が…がいつ」

掠れた声がでる。

まだ力が入らないようだ…

身体が固まっていうことがきかない。

「が、がい…」

「あ、気づかれましたね?無理をしないで下さい。

目覚めたばかりは力が入らないはずです」

白衣をきたナースが近寄ってきた。

「あ…あな…たは？」

「わたしは、異世界軍の一ナースです。ようこそ異世界へ…  
えっと凱さんは、

あちらで現在機械部分の治療に入ってますよ」

「が…がい…」

「無理をせずに…」

起こすのを助けてもらい凱の入ったと、  
言われたカプセルを見させてもらった。

「凱っ!!」

綺麗な顔で眠っている凱をみて思わず涙がでる。

「かなり酷い状態でしたが、順調に回復してます。  
恋人なんですよね？もう少しお待ち下さいね」

「は…はい…」

カプセルに抱きついたまま泣きじゃくる命…

(凱…触れたい…早く触れたい…)

……

## カオル報告

命さんが目覚めたようです。

敦煌基地周辺部含めて迎撃態勢をとる形になりました。



ナギ少尉「作者、何してたのよ？」

作者「リアルトラブルさ…まああとイベントごととかさ」

ナギ少尉「キャリアスト？」

作者「ん…それはたまたま。24Hテレビで駆り出されただけさ」

ナギ少尉「徳光さんね…けど島田紳助が引退は驚いたけど…」

作者「だなあ…どうするんだろ？行列とかさ」

ナギ少尉「時期的には24Hの生放送前だったらやばかったよね？」

作者「いえるな…」

ナギ少尉「リアルネタはここまでね。えっと関ヶ原の戦いねえ…

大袈裟と思うけどね…

どうせすぐ駆逐するでしょ？」

作者「あまいな…数の面では脅威無いかもしれんかが、その数そろつとべつの事を心配する事になるぞ」

ナギ少尉「別のこと？」

作者「そう」

ナギ少尉「わかんない〜」

作者「広さだよ広さ。広がると命中率さがるばかりか、  
後方突破されやすいだろうが…」

ナギ少尉「あっ」

作者「ということさ…さて次回ドラム缶が活躍します。  
お楽しみに」

第167話 第一次敦煌防衛拠点防衛戦 投稿日20110827

2001年12月27日午前5時

「いっけ〜」

「僕達の考えた〜」

「パンジャンドラム〜」

整地しある程度平らにしてある砂漠の中を砂をまい上げながら、  
ホバー走行により加速し始めるドラムのお化け。

1000両のパンジャンドラムは、トップスピード150kmにの  
りBETAを目指した。

建設中である基地モニターからは、  
遠くへ遠くへと疾走していくパンジャンドラムが見える…

「約1時間後に戦果がわかるね〜」

「あとでこよ〜、マスターつれて来なきや」

「だね〜」

どぞどぞと司令室からでていくコバツタ達。

「つくづく色々なのが出てくるんですね…」

「そうね〜…わたしも連れて来られてびっくりしたけど…」

……約1時間後

パンジャンドラムが180kmの砂上を走行し、  
今まさに約4万のBETA群に接敵しようとしていた。

パンジャンドラム…

第二次世界大戦にイギリスで開発、失敗した兵器は、  
コバツタ達の手で形を大きくかえ甦った。

まず、ボビン状だった形は、  
車輪をやめ、ホバークラフトに形を変える。

「砂漠対応となるとそれしかないよね〜」

「タイヤもとられるし、海岸沿いだったら、  
ボビンでもよかったけど」

「登場が遅すぎた」



ホバークラフトの上に爆薬のつまったドラム缶が、  
縦に寝かされ固定されている。

進行方向、間隔等の調整は、猫の目が誘導をおこなっている。

「さすがに最大1000km進行するのに誘導無しじゃ」

「ジャイロは必須！」

パンジャンドラム達は、猫の目の誘導にしたがい、  
長い間を4列になりながら走行してたが、

接敵前に突撃隊形に形を作り直す。

等間隔に広がり、また前列との距離をあけ、スピードを調整してる。

まずは50両がロケットも点火し加速し始めた。

BETAは脅威と感じたろう、手短なパンジャンドラムへと少し向  
きをかえる。

突撃級がパンジャンドラムと正面から衝突、

途端に5tの爆薬が点火し、周囲に光の弾と爆風がふきあふれる。

その数50、

「突撃級、約2000死滅!!」

爆炎が止むと、硬い甲殻も粉碎され、跡地にはクレーターののみ、周囲に体液や甲殻がばらばらになった状態のがのこる。

まだうごめいている突撃級もいてそこに更に50両が突っ込み、光の弾がまた生まれる。

「前列にいた突撃級、殲滅確認!」

約3000の突撃級が消滅した。

中衛にロケット点火し突入し始める100両のパンジャンドラム。

パンジャンドラムにわらわら進路を変更するBETA、ある一両の正面に兵士級がみえた。

パンジャンドラムはロケットで突撃すると…

ホバー基礎部分のトリプルホーンに刺さり…もがく兵士級、

少しスピードが落ちるもそのまま突撃し、戦車級に体当たりし盛大に爆ぜる。

内部にあるベアリング、ドラム缶外部が爆発とともに凶器となり周囲のBETAに襲い掛かる。

近距離のBETAは爆発力により肉片とかす。

パンジャンドラムが爆発した跡には、直径約200mくらいのクレ  
ーターができ、  
半径400m位の空間が  
爆風により小型級ばかりか中型級もふき飛ばされあく。

そこに更に100両のパンジャンドラムが突っ込んでくる。

要撃級に体当たりしましたもや爆ぜ…

更に数を減らすBETA…

次の100両がきて、射程に仲間がいなくなった光線級から、  
身体をふるわせレーザーが照射される。

パンジャンドラムのドラム部分の前面にあたる。

蒸発する対レーザー新型塗膜。

何層にも前面には塗られ二層分が蒸発する。残り六層。

パンジャンドラムの進路が若干かわり、光線級の元へ、  
光線級の二射目が照射されながら突っ込み、  
盛大に爆ぜる。

途中で横からレーザーを浴び、爆ぜるのもいるが、凶器が周囲に襲  
い掛かる。

更にまた100両が突っ込んできて、

また100両…

600両が爆ぜた頃には、重光線級からの射線が通るようになる。が、BETAの残りは既に5000以下に…

重光線のレーザーを正面に受けながら重光線に突っ込み爆ぜる。

二、三匹重光線級を巻き込みながら光の弾が生まれ、

更に100両が突っ込んできて、要塞級に突っ込んでく。

触角がパンジャンドラムにつきささり、爆発し、要塞級に襲い掛かる。

身体の構成物質をずたずたにされ、

要塞級だったものは大きくても3m位の肉片に姿をかえる。

そして、最後のパンジャンドラム100両が突っ込んできて残りの要塞級に…

4万の構成だったボギー11は、

特攻自爆するパンジャンドラム1000両に襲われ、  
残存815、無事な個体少ない状態になる。

「ほづ…、良いじゃないか」

「でしょ」

「で生産ペースはどんなもん？」

「えっと日に1500両可能だよ。単純な爆弾だからね。陸戦強襲型等の生産に影響なし」

「じゃあ作って大規模進行に備えてな」

「うん あ、あともう一つ作ったんだ」

「それはどういったの？」

「これえ」

スクリーンに映しだされたのが、巨大なスパイクボール。直径15mにもなる。

「いつは？」

「ローリングボム!!」

「まんまだな…」

「転がって転がって、小型級は踏み潰す、  
中型級にぶちあたり50tの炸薬で爆ぜるって兵器なの」

「ほう…」

「最高速度100kmで突っ込んでくよ〜勿論誘導可」

「射程は？」

「それ自身が転がるから20km位だよ」

「ん〜近接主砲圏到達前か…」

陸戦強襲型や61式改などの主砲圏が10kmに設定されている。  
その外側で使う兵器といえよう。

「こいつは何処で投入するつもりだ？」

「まだ個数がすくないから、約2週間後にね」

「大規模侵攻にあわせてか…」

「うん」

「まあ…使えそうならやってみてくれ」

「了解、マスター」

「あとは…秘密兵器などある？」

「今のところはなし」

「ん、ありがとうな」

司令室で盛り上がっているコバツタ達を後に、ハンガーデスクへと向かう。

(さて…あと俺自身がやれる事は…?)

ハンガーデスクについて進行状況を確認する。

防衛ライン設営部隊は出発、  
護衛をともなつて750km地点での迎撃兵器の付設予定、…二日  
後。

また敦煌〜重慶間にも迎撃施設を付設に展開し始めている。

（間に合うな…）

敦煌防衛拠点にも無限弾薬装填装置はつけ、ただ今鋭意建造中。  
カーペンターズも作業加わっている。

またそろそろオリジナルハイヴ後を目指しビーム兵器の生産開始。  
なるだけ早めに地球上よりハイヴ駆逐を…

ビッグトレー砲艦型の主砲へのOTM技術注入は進んでいる…  
改造後には射程が100kmへのびる結果となる。

勇者ロボットは…間に合わない…  
かギリギリというところだろう。

宇宙は普通に改装作業が進行中…

（あとやる事はないか…）

そういえば…格闘戦闘で耐えられる機体がないんだよな）

現在異世界軍は、物量によるな射撃戦のスタイルをとっているのは、



存じているとは思う。

が、今回はそれを上回る恐れのある侵攻の為、  
BETAの有効範囲である格闘範囲に囲まれる可能性がある。

囲まれ弾ぎれになった機体は移動できない為、  
特に陸戦強襲型が無力化する姿が浮かぶ。

（格闘戦で耐えられ離脱する時間を…

その盾に勇者ロボを期待したのだが、難しいとなると…  
あれ引っ張ってくるか…）

何処か行くのを決めたようだ。

「じゃ、またいつてくるよ」

「今回は、早めに帰ってきてね」

「あいよ」

カオル、世界扉を形成し、世界を渡っていく。

「マスターいつちやった…」

「ま、早いとこ帰ってきてもいいように準備すすめなきや」

「あとボギー12に対する防衛戦だね」

「負ける気しないけどさ」

午前10時頃

ボギー11の残存271匹が重機関型に消滅させられると、

35隻からなるビッグトレー主砲型の一斉斉射、

500機のモンスター改からも主砲がはなたれ、

そこに更に20隻のビッグトレーミサイル艦からのトマホークが襲い掛かる。

5方向からの同時進行、100万強を想定して集められた戦力。

10万にみたないボギー12にとっては耐えられないだろう。

事実、光線級が生体レーザーを迎撃にあげるも、たかが900本程度。

直撃すると判断した砲弾に照射している最中に、

わずか50cmズレたところに61cm砲弾が着弾し、

その身体が肉片にかわる。

瞬間間に生体レーザーはあがらなくなり、その間にも砲弾が嵐のごとく降り注ぐ。

一分間に279800発もの砲弾がボギー12に降り注ぎ、更に猫の目に誘導された、分あたり8400発ものトマホークミサイルが、はぐれたBETAに正確に襲い掛かる。

戦闘開始から15分後には、最後の1匹が消滅…

迎撃ラインに展開してた陸戦強襲型ガンタンクは砲火をはなつことなく、警戒体制に移行する。

「終わったね〜」

「とりあえず、進行艦隊は解散して、陸戦強襲型を帰さないと…」

「えっとビッグトレイ砲艦隊は張り付けで…  
今だったら重慶間は安全だね」

「中型は敦煌には回さないんだよね？」

「うん」

敦煌ハイヴ攻略作戦は終了し、  
大規模侵攻に対する準備期間となる。

……

カオル報告

またいつてきます

ナギ少尉「またあらたな世界に行くのね」

作者「その通り、基本素手で無双できんし、  
魔改造不知火でも、ナツクルガードで保護をして殴るだな。  
流石に真つ二つに残心で切るのはできないし…」

ナギ少尉「リアルでやると？」

作者「空振りする戦術機、そこによってたかってBETAが…だろ  
う」

ナギ少尉「あははは…」

作者「手の部分は本当に脆いから、人間と同様にな…  
だから人を殴るスポーツでも手を保護する意味でのグローブ等があ  
るんさ。  
人間で例えれば…瓦を素手で殴ったり、割ったり切ったり…なもん  
か」

ナギ少尉「いつかはこわれるね…」

作者「とくに間接部分がな…だからナツクルガードは外せないが、殴るだけしかできん…というジレンマがあるんさ…」

ナギ少尉「格闘技のロボットの世界というと…?」

作者「格闘技とはいつてないぞw」

ナギ少尉「…ま、で…今回の話の、パンジャンドラムね」

作者「まあ…周りが砂漠だから、ホバーじゃないと無理ポと思ったんだよな…」

ナギ少尉「だったらパンジャンドラムにこだわらなくても…」

作者「ドラム缶はロマンさ、ただ押す事に意義ある!」

ナギ少尉「作者…」

作者「さあ、君もドラム缶押しじゃないか!」

ナギ少尉「作者…」…駄目ね、スイッチはいつたみたい…

え、ドイツ・フランス製のゴリアテは登場は難しいとのコメントでした。

次回、サブタイトル不明な世界へ…妊婦さんどうするの？…  
お楽しみにい」

第168話 エヴァンゲリオンの世界へ 投稿日20110829

〈エヴァの世界〉

第三新東京市…

この都市は2003年着工、2010年に一応の形を整えた。

中央にはビル群が並ぶ。

しかし、ほぼそのビル群は、兵装ビル、電源ビル、集光ビルなどであり、人が入るビルが新市街にはすくない。

この都市は対使徒迎撃戦に特化した要塞都市であった。

この新市街は、地下にあるジオフロントを護る天井都市群であり、分厚い最大28層もの装甲を重ね、560mの厚さを誇る。

その分厚い560mの装甲を使い、上下稼動式になっているビル群。

まずは数の多い攻撃型兵装ビル、  
ミサイルサイロ、大口径自動砲塔、対空砲塔、  
垂直発射型ミサイル、戦車等の発射支援駐車場、



地下のジオフロントに光を届ける為の集光ビル、  
エヴァへの電源供給する為の電源ビル、  
エヴァへの兵装を提供する武装搬出ビル、  
等などがある。

地上施設への電気は地下区画で提供しており、エヴァの行動の妨げにはならぬ電線はない。

数少ない人の住居するビル等も高層、稼働式になっている。

(とりあえず波動を変えたから、探知はされないか…さて、侵入侵入)

第三新東京市に降り立ったカオルは、  
他人と違う波動を指摘され、修練で人間の波動を会得、  
それにより、使徒と探知されずに、地下へと同化していった。

天井都市群の22層もの装甲、その間には約300M程の施設群がある。

作戦2課、保安1課、2課、広報課、商務課等が詰めていて、  
また訓練施設、

地下ハイウェイ、リニアトレイン等  
またジオフロントとの交通を結ぶインクライン、外周道路、ケーブルカー、カーゴトレイン等もある。

もちろん、食堂、銭湯等リラクゼーション施設等もある。

分厚い装甲を潜つてくと…

黒い月の内部ジオフロントが見えてきた。

元は前史時代人の待避壕として建設されたノアの方舟、それをネルフの前身組織が見つけ、利用し始めたものだった。

直径6 km、高さ0.9 kmの露出空間内部にピラミッド型のネルフ本部施設、

地底湖、また広大な緑が広がっている…

（やっときたああん）

ピラミッド、本部建物に取り付くと、建物に同化し、その身を沈める。

（さてっと…LCLは…これか）

LCL、リリスの体液である。

が非常に有能な成分であり、ガス交換神経接続も可能、精神防壁、物理障壁もかねるものである。

（開発したくつても無理だったからなあ）

ODLではLCLの変わりにはならない…

生命のスープ化にはならないように研究は必要だが、必要な技術の一つを取得できた。

（とエントリープラグは…っと…）

人造人間たるエヴァと人とを結ぶインターフェイス…  
コクピットブロックである。

現在異世界軍では神経操縦を標準導入してない。

何故か？技術的に人間を改造しなければならないからであった。

ナデシコ技術、ガンパレード技術ともに、  
人間にインターフェイスを埋め込み操縦するという技術がとられて、  
それによりより人間的な動きがとれるという流れである。

戦術機やMSはプログラム等により、人間の動きを再現しているに  
すぎないのだ。

より人間的な動きはフルメタルパニック技術による、モーション操  
縦もある。

が身体的体力が必要、でありドレン中将等鍛えている人でない限り、  
ぽっと出の中学生に操縦できるわけでもない。

という事だった…

エントリープラグ及びLCL、インターフェイスユニットが、エヴァ  
ア世界によるロボット操縦による革命的技術である。

そのエントリープラグが目の前にあり…喜んで同化し、取得した。

プラグ内部にインターフェイスユニットもありもちろん取得する。

(あとは…プラグスーツとエヴァか…)

更衣室を探し身体を広げる。

(ここか?)

ロッカーがならんでいるが…  
とりあえず物色し始める。

(ブラ、ブラ、ブラ、パンツ、ブラ)

女子ロッカーを内部に顔をだしているようだった。

そりゃ…男子ロッカーは覗きたくはない。

男子ロッカー内部には仕事での帰宅難民者の、  
使用済靴下、パンツ、シャツ等が一ヶ月分溜まっていて、  
醸すにほいがしている…  
使徒の攻撃で破壊された男子ロッカーの掃除には勇気がいる…  
との話をどっかで聞いた事がある。

その点女子職員は、赤木リツコ博士を筆頭としてデモを起し、  
毎日帰宅する勤務条件になっている。  
よってロッカー内部には洗濯後の良いにほいしかない…

女性はロッカー内部に使用済を、一日でもほつり込む事がゆるせな  
い…  
寝る時間以外でも色々と用事があるのだ…  
という話を聞いたこともある。

と点々といくつもの更衣室を物色してると…

勿論、人がいないのをわかってたので自重はしてない。

（あ、ここか？）

空のロッカーが結構ある更衣室にでた。

案の定、赤いプラグスーツがある。  
アスカのだ。

プラグスーツは身体を包み込むものである。  
まあでっかいといえはでっかい。

身体にフィットさせ、神経接続の補助、生命維持等を行う。

（おっし…次は…）  
エヴァンゲリオン…

使徒に対抗する為の人のつくりしアダムの模造の決戦兵器…

目の前にあると…

（でけえなあああ…）  
全長80Mをほこる巨人である。

単純に今まで取り扱ったMSの4から5倍…  
でっかすぎである。

とりあえずとりつく…

重力1000t…

その身体を支える人工筋肉の質は高い。

使徒を模したエヴァンゲリオン…その効能は高い。

（ただ、今のままだと俺以外はやばいからな…）

暴走があるとおり、制御しての兵器である。

今のままコピーしたものを作ると、  
もれなく個体を維持できなく消滅する人物が出てしまつのが明白である。

（ごちそうさま）

カオルは初号機から離脱すると、  
零号機、弐号機と次々と同化し取得する。

（N2爆弾はつと…あつたこれね）

まわりの武装にもとりつく…

（あ、純粹水爆か…なるほど）

汚染がでない核≡純粹水爆であった。

(……マクロスの反応弾の方が効率いいか?)

とりあえず取得して離脱…

(あとは…MAGIか…)

地上のインフラをすべてに引き受ける民主主義的コンピューターマ  
ギシステム。

結構有能ながら、その他研究内容の情報が蓄えられている。

勿論同化し取得した。

三日目…

カオルは再びエヴァの世界にでる。

時期的にはゼルエル戦の後…

そう目標の人物は…

崩れ落ちる冬月副司令…

その背後に立つのは加持だ。

ゼーレとネルフの二重スパイである加持は、

今回はゼーレの命令によりターミナルドグマ近くの西第八管区にて、  
一人行動中だった冬月副司令を眠らせた。

「おい…」

加持が合図するとゼーレ構成員が4人程ストレッチャーを持って駆け付け、

冬月副司令をのせ顔にシートらしきののをのせる。

顔に張り付き、別人が火傷をおったような顔になる。

構成員が合図すると5人はいかにも重傷者を運んでいるかのごとく、エレベーターを目指し、途中あったスタッフには

「どいてくれ！火傷だ！」

と叫びどかしてエレベーターに駆け込んだ。

駐車場にでると構成員の車の後部ドアがあき、カーペット式の床に寝かすと、隣に構成員が一人はいり、蓋がしまる。

その上に通常の座席があり、二重底の改造車だった。

徒歩組と別れた車はゲートでチェックされて、異常が見つからずでていった。

加持も時間をおいてネルフからでていった。

……

『はい、ただいま留守にしています。発信音のあとにメッセージをぶっぞぞ』

「葛城、俺だ。多分この話を聞いている時は多大な迷惑をかけてると思う。」



すまない。りっちゃんにもすまないと謝っといてくれ。  
後、迷惑ついでに俺の育てていた花がある。俺のかわりに水をやってくれれば嬉しい。

場所はシンジ君が知っている。

葛城、真実は君と共にある。迷わず進んでくれ。

もし、もう一度会えるような事があつたら、

8年前にいえなかった言葉をいうよ…じゃ

受話器をおき、カードを取り出す。

「最後の仕事か…まるで血の雨だな」

しばらくすると、電話BOXにコール音になる。  
受話器をとり…

「俺だ…ああ、そうかわかった。ありがとう」

フックをかけ、そのまま別の電話にかけはじめた…

「わたしです」

『何のようだ？』

「副司令ですが、今から3時間後にここのBOXにあらわれます」  
『本当か？』

「はい」

『わかった信用しよう』

「では…」

カチャ ピューピュー

「さていきますか…」

加持は冬月副司令の捕まっているゼーレ支部へと向かう。

「君か…」

「ご無沙汰です。外の見張りには暫く眠ってもらいました」  
手錠を外しにかかる加持さん。

「この行動は君の命とりになるぞ」

「真実に近寄りたいただけなんです。僕の中のね。

それにアダムのサンプルを碇司令に横流ししたのがばれそうなん  
でね…

自己保身もかねてね、色々やばいんですよ」

通路に異常ないのを確認し、冬月副司令を連れ出す。

そして合流場所の電話BOX…

「では冬月先生、おたっしやで」

「ありがとう…この後、何処へいくのかね？」

「そうですね…とりあえずは隠れますよ」

「…元気だな」

「はい、先生も」

電話BOXに副司令をおいて離れる加持、

「さて…」

市街の銀行にはいり逃走資金を隠し口座から…

『ピーピーこのカードは故障されています。係員がきますので』

「チッ！」

「あ、お客様」

対応している間にゼーレ工員がくるだろう。

車で第三新東京市から乗ろうとインターに向かうと…

「いるな…」

Uターンし駅駐車場に車をいれ、駅へ…

改札で、オレンジカードをいれたら…

『ピーピーピー』

「ここもまわったか…」

何処にも逃げ場がなくなった…

さっき止めた車にも人が…

加持はそれを見ると旧市街の工場街へと歩みをすすめる。

廃工場に入ると…

「死に場所には丁度いいか…」

「まだ死ぬのは早いと思いますよ」

つけてた影からでてくるカオル。

「き、君は？」

「他の世界の理…見てみたいと思いませんか？」

「……………」

「自分について来ればまだまだ面白い事わかりますよ」

「…ふっ…死に行く身だ…のろっじゃないか」

「わかりました。じゃまずは血液下さい」

と擬体入りのカプセルをだす。

「ほう…何処に渡せば？」

「あ、採取しますので…であとは少しシエルターでやすんでくださいね」

採取したあと引き込むと擬体の血液いれに投入する。

瞬くまに加持が作られてく…

擬体に同化し、加持の抜け殻を操り始めた。

カプセルをしまつて5分後くらい…

カッーンカッーンカッーン

音が聞こえる…

（たしか…）

「よう、遅かったじゃないか」

パーン

声かけたらいきなり男性に撃たれた。

擬体から抜け出した。

「裏切り者は始末した。掃除人を頼む」

無線機に声をとばすと、加持だった顔を見下ろす男性。

「馬鹿な事を…しやがって…お前は何なんだよ…」  
振り返り殺害現場から離れていった。

すぐさま人が来て擬体を遺体袋にいれと、  
おおきなゼリーを手でかき集め遺体袋の中に流し込む。

別の者が飛び散った細かいゼリーや肉片、血の後に薬品をかけてる  
作業にはいった。

ゼリーや肉片、血等のみが溶けはじめ、床材を絆つけてはないよう  
だ。

掃除人はかけわすれが無いかをチェックしはじめ、  
その間に溶けたあとの液を掃除機で回収しはじめる。

そして…手際よく殺人のあとは…10分足らずで殺人の痕跡を残さ  
ずに撤収された…

(ふん…人を殺しても10分で証拠を処理か…  
恐いね…謀報機関はさ…)

カオルは世界扉を唱えると世界を渡る。

…

カオル報告

エヴァンゲリオン各機

MAGI等

作者「と、言う事で、エヴァンゲリオンの世界にきました」

ナギ少尉「ひょっとしてセカンドインパクトの再現を起こすの?」

作者「オリジナルハイヴでか…が被害おおきすぎるよ…」

ナギ少尉「そうね…確かに大きすぎるわね」

作者「まあ、要は使徒そのものをつくらなきゃ良いわけだし…  
作ったとしてもカオルも使徒そのものと同様だからな…」

ナギ少尉「ところで、旧新どっち?」

作者「次回おたのしみにね…まあパラレルワールドありって、  
公式でもコメントしてるからなあ…」

ナギ少尉「だから鋼鉄のガールフレンドとかも新しいチルドレンが  
出てるのね?」

作者「そうそう。その点二次はやりやすいよな」

ナギ少尉「謎が多いのに?」

作者「今回のだと、加持さんの殺した相手は?か…  
ゼーレ作業員にね…」

ナギ少尉「さて次回、カオルは?…おたのしみにい」





湖と化した第三新東京市…

もはや人の気配はせずに蝉の音しかない。

カオルは大量に死に行く人員を受けるべく分体とわかれ、ネルフ全体へと身体を浸食しはじめた。

〈病室〉

「アスカ…アスカ…アスカッ！」

助けて…助けてよ…助けてよ…助けてよ…助けてよ…  
またいつものように僕を馬鹿にしてよっ！ねえ！！！」

仰向けに引っ張られる。バイタルモニターをだす吸盤がアスカの素肌についていたため、

アスカの胸が大きく露出しピンク色の突起シンジの目に入る。

シンジの喉がなり…

病室のドアに行く鍵をかけ、ベットに向きなおり、スポンのチャックを下げ、自身をとりだすと…

「ハアッ…ハアッ…アスカ、アスカッ！！」

気づく事のないアスカをおかずに自慰を始め…

るのをカオルは感じてた。

(青春だな…最低だけど…)

翌日朝6時…

ビービービー

(始まったな)

MAGIに対し外部MAGIタイプ5基によるハッキングが始まる。

「先輩!!」

「マヤ、わたしは罪に問われた身、先輩と呼ばないでね」

「先輩は先輩です」

「ふう…時間がおしいわ、作業に入るわね」

「え？先輩…説明は…？」

「外部MAGIタイプによる同時進行ハッキングでしょ？B-7形  
防壁を作るわ」

「さすが先輩！」

……  
暫くするとプロテクトが間に合いビープ音がなりやむ。

そして…

低空飛行してきた攻撃ヘリにより、  
レーダーサイトが破壊され、外部モニターも遮断、  
数少なく生き残っていた自動防衛装置も作動するが、  
無力化される。

「やはり最後の敵は同じ人間だったな」

「総員第一種戦闘配置」

ビーブービー

『総員第一種戦闘配置、総員第一種戦闘配置、  
保安1課、2課は対車両装備着用、1課2課は作戦1課支援、  
保安3課対人装備で天井都市への増援せよ、  
コードD-1にそって行動せよ』

「コードD-1…?」

「不特定軍事組織強襲だろっが急げ！」

ネルフ基地内が騒がしくなる。

ゲートの警戒にあたる保安1課当直守衛：

シャッター内部にいる為警戒が少し薄いようだ。

交替部隊到着をきにしている。

そこに後ろに黒い服の兵士が迫り：

ズリ

猛毒の刃を刺され、口を塞がれ悲鳴あげる間もなく絶命する。

シャッターが次々と上がり、完全武装を施した、戦略自衛隊員が侵入してきた。

3235

彼等は迅速に発見増派される前に、  
警報解除し無力化する為に天井都市群及び階層構造群へと進む。

天井都市施設群及びジオフロントの階層構造へは、完全に奇襲から  
始まった。

不意をつき次々と沈黙する歩哨：

対人監視施設はあつて無いようなものだった。

ゼルエル来襲時に天井都市群はほぼ破壊された。

維持施設である集光ビル、兵装ビル等を優先した為、

対人戦闘設備自体も復旧すらしてない。

侵入警報がなった時には…各種ゲートからは車両群の流入も始まった。

侵入警報ブザーが鳴り響く時には多くの人員がゲートを突破、各部所制圧に向かいはじめた。

『侵入部隊多数、非戦闘員は下層に待避、対人有資格者は対人装備の上対応せよ』

当初非戦闘員は戦闘をさげ地上への避難の予定だったが、戦略自衛隊は容赦はしない。その為カオルは、次々救助できていた。

ネルフ本部の人員は通常より大きく下回り、1万4千名程だった。

天井都市群に保安1課、2課が約3000名はつめていたが、奇襲から強襲と認知される時期が遅かったため、瞬く間に戦略自衛隊の制圧下におかれる。基地の利用等も考えて無いため、容赦はない。

自衛隊員が通路を自動小銃で制圧していく、部屋が見えると、隊員に合図すると、警告なしに対人手榴弾を部屋に投擲する。

「ギヤア」

爆発音とともに部屋に立て籠もっていた人の悲鳴が聞こえた。

部屋内部に突入、

「た…たす」

小銃を撃ち無力化、

クリアの合図をおくり次の制圧へと向かう。

火炎放射器をもった隊員が無線で呼ばれた部屋前にくる。

「投降する！！殺さないでくぎやああああ」

部屋の扉をあけ火炎放射、

「ああ……………」

部屋内部は炎に包まれている。

扉が閉まり次の部屋へと目指す。

組織的な抵抗がとれてない、一方的な虐殺状態におちいつてる。

戦略自衛隊員は突入前のミーティングで、

人類すべて消し去る、サードインパクトを起こそうと企むネルフを生かすなど…

サードインパクトは絶対に防がなくてはならない。

その為非戦闘員含み、全職員射殺せよと…

の命令が下っている。

所属がわからなくとも容赦はしない。

彼等は軍人であり、スイッチ入ると非情である。

自衛隊員以外には無差別に殺害、捕虜はとらなかつた。

今も死亡した男性職員の恋人だろう…

引きずってる女性職員を躊躇なく射殺する。

手を上げて投降の意思のあるものを容赦なく射殺する。

部屋の片隅に震えていたものに対しても…  
勿論託児所にいる少年達にたいしても…

『警告、第三層まで破棄、戦闘員は第四層まで待避、  
繰り返す。第三層まで破棄、戦闘員は第四まで待避。  
20秒後にベークライト注入する』

たまらず、発令所から、ベークライトで通路封鎖に踏み切った。  
通路に流し込まれるベークライトが死体を包み込んでいく…

ベークライトにうまった通路は固化しはじめ、  
セラミック並の強度の壁になる。

待避が遅れた自衛隊員が片足が嵌まった。

すぐさまドリルをもった工兵隊が足の周りを削り始めた。  
一時間位で救出できるだろう…

しばらくすると、主要通路がベークライトで封鎖された為に、  
分断された部隊を救出すべく、N2爆雷が投入された。  
N2兵器の衝撃とともに天井都市を中心とした部分が熱により融解  
していく。

都市が崩落し、爆発エネルギーが内部へと浸透する。

そこに更に豪雨の如くジオフロントにミサイルが降り注ぐ。

外周道路部分が地上より見えるようになった。

外周道路に向かい、地上からのショートカットの道が確保される。

次々と車両部隊が外周道路へと乗り込んでいく。

……

その後外周道路に展開した部隊から地底湖に鎮座している、

式号機に攻撃を加えるべく展開しはじめる。

その間約一時間程、ネルフ本部は次々と新たな進入路から陥落して  
いく…が、

ベークライトで生き埋めになった人員は少なくないため、  
物理的封鎖の方針をとり始めていた。

攻撃していた地底湖より突如赤い光の柱が上がる。

戦艦をもちあげ浮上するエヴァ式号機がうごきだす。

その頃…やっと緊急用エレベーター前にミサトさんが、シンジを連  
れ到着する。

「ううね…」

自動小銃の斉射、弾着の火花が散る

「クッ」

ゲートに逃げようとするが…

背面から右腹に被弾するもなんとか身体を押し込み、ゲートが閉じ、  
間一髪でバズーカの着弾…ゲートドアが破壊されない。



「目標射殺出来ず。追跡の是非を問う」

『追跡不要。そこは爆破予定だ。至急戻れ』

「これで…時間、稼げるわね…大丈夫たいしたこと、ないわ…」  
ゲート内部に逃げ込めたミサトさん達…

身体を起こしスイッチに触れると、  
ブザーとともにエレベーターが姿を現す。

「電源は生きてる、行けるわね…」

いいシンジ君。ここから先はあなた一人よ。  
全て一人で決めなさい、誰の助けもなく」

「僕は…駄目だ…駄目なんですよ。人を傷つけてまで…」

殺してまでエヴァに乗るなんて、そんな資格は無いんだ。

僕は、エヴァにのるし無いと思つてた。でもそんなのがまかした。  
何も解つてない僕には、エヴァに乗る価値もない、

僕には人の為に来る事なんて、なんにめ無いんだ！

…アスカにひどいことしたんだ、カヲル君も殺してしまったんだ。  
優しさなんかかけらもない、ずるくて臆病なだけだ、

僕には人を傷つけることしか出来ないんだ。

だったら何もしない方がいい！」

「同情なんかしないわよ。自分が傷つくのがイヤだったら、何もせ  
ずに死になさい。」

…今ないたってどうにもならないわ。

…自分がきらいなのね。だから人も傷つける。

自分が傷つくより、人を傷つけた方が心が痛いことを知っているから。

でも、どんな思いが待っていても、それはあなたが自分一人できめた事だわ、

価値のあることなのよシンジ君。

あなた自身のことなのよ、ごまかさずに…

自分出来ることを考え、償いは自分でやりなさい」

「ミサトさんだって、他人のくせに、何も解ってないくせに！」

「他人だからどうだって言うのよ！

あんたこのままやめるつもり？

今、ここで何もしなかったら…

私許さないからね、一生あんたを許さないからね…

今の自分が絶対じゃないわ。後で間違いに気付き、後悔する。

私はその繰り返しだった…ぬか喜びと自己嫌悪を重ねるだけ、

でも、そのたびに前に進めた気がする…

いいシンジ君…もう一度エヴァに乗ってけりを付けなさい。

エヴァに乗っていた自分に…何のためにここに来たのか、

何のためにここにいるのか、今の自分の答をみつけなさい。

そして、けりをつけたら、必ず戻ってくるのよ」

十字のペンダントを手渡す。

「約束よ………いつてらっしやい」

シンジの唇を奪い、舌を入れ…濃厚なディープキス…糸をひいてる。

「大人のキスよ。帰ったら続きをしましょ」

シンジをエレベーターに突き飛ばす。

ゲートが閉まり…その場に崩れ落ちる。

「こんな事なら…アスカの言う通り…カーペット、変えておきゃあよかった…」

ねえ…ペンペン……加持君、アタシ、これで良かったわよね…」

レイの幻影が現れ、爆発がその身体に襲い掛かる寸前に虚数空間に…

(救助完了、カプセルに入れた)

(次は赤木博士だな…)

意識をドグマ最下層に…

丁度そのころは、

「作動しない…何故？」

コントローラーに一つ点滅する否決な文字…

「あ…カスパーが裏切った…？母さん…娘より自分の男を選ぶの…？」

碇から、銃をリッコに狙いつけ…

「赤木リッコ君…本当に愛してる」

「嘘つき…」

パーン

撃たれ背面に吹っ飛び、着水する間際に幻影をかけ擬体と入れ替える。

(…やはりレイが見てるなあ…)

(救助完了)

(次だな…)

式号機が暴れ始めたところから撤退気味になり、ゼーレエヴァがくるころには物理的制圧をかけた事により、戦略自衛隊は安全の為に一時撤退してたのだ。

使徒に勝ったエヴァ、それが10体…

使徒に歯がたたない自衛隊にとってはエヴァと戦う事自体自殺行為であり、

アンビリカルケーブルを切断、

他のケーブルはペークライトで無力化、

初号機も同様に無力化した以上、

再度突入すれば占拠できる見解であり、

車両部隊及び航空部隊の被害が甚大になった為、

一時撤退していた。

(おい、そろそろ…)

(ん？あ、了解)

エヴァ初号機が覚醒した…

サードインパクトの前兆で、第三新東京市を中心とした50km半径は、

えぐりとられ何もなくなる爆発が起きる為、異世界への待避を行う。

またその後人類補完計画始動による、個体崩壊も起きるから…

合流し、一回異世界に待避すると…

大爆発がその場を襲い掛かる。

………

再びカオルはエヴァの世界に出てきた…

エヴァ量産型が大地に突き刺さっている…

赤いLCLの海に医療カプセルの端末のはじをいれ、サルベージを試みはじめた。

(ふむ…やっぱりね)

前兆の爆発で死滅した人は無理だったが、

補完計画で一体化した人間ならず、生物は可能との表示が現れた。

呼び出しにはDNAで探す形にはなる。  
の為MAGIデータの流用の形になる。

人類はアスカとシンジをのこしATフィールドが崩れて全員LCL  
の海の中に溶け込み、  
この後導き手がないかぎり…LCLの中で過ごす事となる。

永遠に……

自力では人いや生物としては形成する事は出来ないのだ。

(じゃまず一号いつてみよう…ペンペン！)  
MAGIは第三新東京市民含めての健康管理の記録もとっていたの  
で、

ペンペンも呼び出す事も可能だった。

医療カプセルないにLCLが吸い上げられ、  
カプセル内部で固体が形成される…

排水が行われペンペンが姿を現した。

まだ意識は目覚めない…5日間程必要との表示がでた。

医療カプセルを交換し……

……

## カオル報告

サードインパクト引き起こされた後の世界で、  
自重しません。

作者「という事で旧劇場版の世界にいったカオルは、自重はしないで…だったと」

ナギ少尉「自重はしないでって…えつと作者、サイドインパクトでLCL化したネルフ職員は何人なの？」

作者「200人に満たないんじゃないかな…?」

ナギ少尉「たった200?…14000人近くいたのが?」

作者「ああ、LCLになった人ね。その前にサイドインパクトの前兆爆発があつたでしょ…  
それでもかなりを持ってかれたと…」

ナギ少尉「前兆爆発の前は?」

作者「多分1000満たないかな…」

ナギ少尉「1000ね…でも確かにそうね。  
あれは凄かったというより一方的な蹂躪だもん」



作者「だろっね…」

ナギ少尉「ねえ作者他の二次みたく改編しないの？」

作者「まあ考えてみたけどさ…カオルが巨大化してどったんばったんするか、

式号機にとりついて早めに動かすか…

位しか思い付かん。

がそんな事はしないしなあ…」

ナギ少尉「だからストーリー通りか…」

作者「前に前兆等わかってたら、

例えば少ない予算でも迎撃体制を整える事も可能だったろうにね」

ナギ少尉「例えば？」

作者「あらかじめペークライトを投入して通路封鎖、

数少ない通れる場所に兵力集中、

通路は三、四人位しか通れないしさ…

また通路を爆破して埋める等、トラップネタなら結構思い浮かぶね」

ナギ少尉「そのもってるソフトは影牢？」

作者「無限連鎖で稼いで、設置コンボかなり楽しめました」

ナギ少尉「……まあ……トラップねえ……」

作者「でN2爆雷は天井都市でシンジか、アスカが復活してないと難しいなあ……」

でATフィールドで迎撃すると……」

でもエヴァ量産型はシンジでダミープラグ抜いて、コアをとる位しか、再起動防ぐ手段がないなあ……」

ナギ少尉「なるほどね……さて、作者次回は帰還ね？」

作者「帰還が正月になるので新年会描写予定……うまくかけるかな？ お楽しみにい」

第170話 エヴァより帰還 投稿日20110902(前書き)

台風なんか予想進路ずれてさいたまは良かったかな?と…

でも風が強いな…

第170話 エヴァより帰還 投稿日20110902

2002年1月1日未明

「ただいま」

「マスターおかえり〜、新年あけましておめでと〜いぞいませす」

「おう、おめでと〜。どう？様子は」

「カシュガルは相変わらず集中中、  
コロニーレーザー艦隊は明後日換装完了」

「じゃ、先に木星攻略か…」

「うん。ルーロスかしてね〜」

「ビッグワン型にレーザーシステム改装して、  
搭載しといた方がいいかな…あとは？」

「内緒〜」

「ふえ？」

「当人からきいてね」

「ん??ん？」

「じゃ、マスター…もうおそいから…」

「……お休みな」

朝方…

「新年あけましておめでとございます」

「新年あけましておめでとございます!!!」 \*多数

観光コロニーメンデルでの新年会をかねての挨拶となった。

「もうまもなく、木星に攻略艦隊が出発する予定で、地上ではオリジナルハイヴからの大規模侵攻を迎撃いたします。今年度中には太陽系からBETAを追い出し、

来年度には良い年を世界中の皆さんが、過ごせるようにしたいと思っております。

何とぞこの若輩に引き続き力をかしてくるよう、よろしくお願い致します」

挨拶がおわり、新年会となる…

色々な世界から人員が集まってる為交流会も兼ねていた。

明日には木星攻略部隊が出発する為、

こういつた時間でないと、全員が集まる機会もない。

非戦闘員含めて約2000あたりの人員で運用している為、

また年末近くに入隊した、ガオガイガーの世界の人達の交流も兼ねている。

それで6箇所の基地、防衛拠点及び宇宙や地上艦隊をまわしている。つくづくコバツタやヤドカリ、ターミネーター達に依存しているのがわかる人数の少なさだろう。

「カオル殿」

「レビルさん、楽しんでますか？」

「ああ、ところでティアンム君探してるんだが見かけたかの？」

「ティアンムさん…？見てないですね」

「はて？」

「宇宙と地上ではなかなかあわないですからね。」

「がっはっは！大将」

「ドズルさん、あ、ティアンムさんみました？」

「あつちで女子学兵に囲まれてたぞ」

「なぬ？つらや……んっん……けしからん、話にいつてくるの」

「いつてらっしやい……そういえばドズルさん明日攻略艦隊指揮なんですから、  
飲み過ぎないくださいね」

「がっはっは、これぐらい飲んだうちには入らないわ、  
わしを潰すならタンクローリーもってこい！！」

「中将閣下、タンクローリーなみとは、是非とも飲み比べいたしまし  
しょう」

「フォッカー、良いぞ」

「あの〜フォッカーさんも…」

「大将閣下、自分めはアルコールで飛ぶのであります。  
心配いりませんよ!」

カオルの話も聞かずに飲み比べをはじめドル中将とフォッカー  
少佐…

(…まあ酔っ払い運転でもよいか…  
フォッカー少佐は多分明後日以降、ドル中将は多分指揮するだけ  
だし…)

ブチュー

横から頬にいきなりキスを誰かがしてきた。

「アンシエさん？」

少し離れてみると、元南大西洋艦隊司令のアンシエさんだ。

「さいきん…でばん…ヒック…がないの…」

(あ〜潜水艦艦長だからな…)

「宇宙か陸上艦の指揮します?」



「ヒック…きゃんぎゃえとく…ヒック…一緒にねてえ」

「大佐…カオル大将失礼しました。ほら帰りますよ」

「ネムリラさん、アンシエさんって…」

未成年で15歳でしたよね？なぜに酔って？」

「この子が間違えてワイン、いき飲みしちゃったらしいのよ…  
そしたら一発でこんなふうによっちゃってね…  
寝かしつけてくるから」

千鳥足のアンシエさん…

酔っ払いを部屋に寝かしつけるだろう…連れてかれた。

「ママ…お酒頂戴」

「エルちゃんにはまだまだ早いのよ」

「え…どの位までばいいの？」

「そうね…大人の階段登ったらかしらね」

「大人の階段??」

(エルママさん……)

視線を変えるとシャアさんとガルマさんが、  
利き酒をしている様子だった。

向こうでは沙霧さんと訓練生が良い感じに話している。

別の場所では極東一のスナイパーと推されている訓練生とロックオンが…

二人揃って会場を後にした。

(武は…純夏と3人の訓練生と話してるか…  
たしか双子の妹がいるってなあ…)

「カオル…」

「ん? イッシーどうした?」

「うん。……できたの」

「へ?…」

「できたの」

(できたって…えくと……)

「だから、貴方の赤ちゃんが…」

「え?……お、俺の赤ちゃんが?…」

「うん」

「俺の赤ちゃんか…やった」

「えへへ…」

新年会の時に報告されるとは思わなかったようだが、この世界にカオルの新たな家族がの芽吹きがでた。

カオルはよりいっそう世界をまもる決意を固める。

ちなみにその夜、まだできてないまりもちちゃんと殿下に、激しく求められたの言うこともなかるう…

2002年1月2日

午前9時…

虚数空間からエヴァの世界の人達が入ったシエルターを出した。

（万が一拒否されたら、戻すじゃなく民間にか…な？）

彼らには元の地球は既に滅んだと同等だった…

例えもどつたとしても…

日本国内だとサードインパクトの前兆の破壊衝撃で自然等がもつてかれ、LCLを飲むしがなく、

他の国だとしても自然があるかどうかの問題もある。

年月が経てば緑だけは復興するだろう。

が、生物に関してはほぼ絶滅した。

魚を釣れるかどうか？も疑わしい…

なので、元の世界に戻す事ができないと思う。

扉を作り、放送する。

「お疲れ様です。準備できた方から表にできて下さい」

そろそろと表にでてくる人達、シエルターで救助できた人は、非戦闘員だらけで、ドグマに逃げ遅れた人達だった。

部屋で表にでられず火炎放射を受ける運命だったり、  
手榴弾が投げ込まれたり…

撃たれたり等の重傷者や蘇生者、LCLから分離者は後ろで医療力  
プセルで運ばれている…

「カオル君」

「加持さん？どうされました？」

「その…こんなにネルフの人員が…死ぬ運命だったのか…？」

「えっと…いいにくいんですが、  
サイドインパクトいわゆる人類補完計画が遂行されました」

「ゼーレによってか？」

「はい。で、今いる人達はその前段階、  
ゼーレによって踊らされた戦略自衛隊の犠牲となる運命の人達です」

「リツちゃんやミサトは…？」

「後ろのカプセル群の中に居ますね。  
リッコ博士は碇ゲンドウに、葛城さんは戦略自衛隊に殺されました。  
勿論救助済みですけどね」

「チルドレン達は…?」

「今回は救助してませんが、唯一サイドインパクトに抵抗して実体化を保つてますね。

シンジとアスカは…あとは補完計画通りLCLの中です。  
何人かLCLの中からサルベージしました人物が、カプセル群にいますよ」

「ある意味世界は滅びたか…」

「ええ、ですね…ゼーレのシナリオ通りに…」

「こつちの世界はそんな事ならないんだよな?」

「させませんししません。エヴァもどきは作りますが」

「鍵となるものをか?」

「サイボーグの形になりますから大丈夫ですよ。自分自身が使徒のようなもんですから…」

「力によってか……ミサトのところに行くよ」

「はい」

(やて…)

「皆さんはじめまして、異世界軍最高責任者、渚カオルです。ここにいる人達は全員戦略自衛隊に、殺される運命だったのはわかっておりますが、加入の意思確認の前におひとつ、DVDの内容と違う点がありますのでお伝えします」

ザワザワ

「戦略自衛隊を操ってた組織、皆さんの上位にあったゼーレにより、人類補完計画が遂行されそれによるサードインパクトが発生し、皆さんのいた世界には地球人類が、個体として存在しなくなりました。」

……10億いた地球人類は一つのLCLとなってしまうたので、帰還を希望されても、何もない世界です。ある意味自殺行為となりますので、救助した以上帰す事が出来なくなりましたのでご了承を」

「あ、あのっ！サイドインパクトおきたのは本当ですか?!?!?」

「はい、証拠映像がこちらになります」

スクリーンに投影された…爆心地近く量産型エヴァが突き刺さり、赤い海、黒い空を何処までも映している…

泣き崩れ、くそつと喚いたり…する人が大半だった…

それはそうだろう彼らは、

万が一のサイドインパクトが起きても、

待避せず防ぐ覚悟のもとネルフにはいったのだ…

それを人の手で起こされたとなると…

ただ事実は事実…いずれわかる事だ。

「とりあえずすぐに加入確認はとりません。一ヶ月程猶予期間をとります。」

拒否者にはこちらのスペースコロニー関係等の民間等の道もありますので、  
よろしくお願いいたします」

「加入したい意思変わらない人は？」



「こちらのコバツタが受付しますので…」

といたら半数以上が移動してきた。

「ありがとうございます…では後はコバツタ達が案内します」

……

ネルフ戦略自衛隊犠牲者の内救助した1954名、  
内1014名程が即日入隊希望者になる。

木星攻略艦隊は、既に出発済みの午後…

戦艦デツキを拡大し、

何日かかけてエヴァンゲリオンの製造にはいる。

勿論そのままだと、

誰かの魂を犠牲にする形となるので…できないが…

零号機と初号機がリリスから作られ、

弐号機以降がアダムから作られた。

製造工程は、人間のクローンと同様な方法、  
純粹培養された卵から作られる。

培養による高速増殖で約5年の月日をかけそのコア及び身体を形成  
する

よって通常なら膨大な予算が製造にはかかる…  
軽く世界が傾く位の…

勿論維持や、戦闘行動に関しても、かなりの予算がかかるが、

1番予算のとり、電力費用に関しては…

(核融合炉を内蔵かな？

またはこっちの余剰電力を…)

2番目に予算のかかる生体部分は、

同化でメンテナンス費用をうかし、リフレッシュさせるようだった。

3番目か4番目の装甲素材、弾薬等はプラントで作る考え…

これによりエヴァの予算はクリアになる。

カオルが居ないと…1戦闘ごとに1億は軽く飛ぶが…

カオルが製造するのは、いつも通り素材同化により、  
エヴァもどきを作りあげようとしていた。

「生体系はプラントで無理だつてば…」

「じゃ、作れるところだな…拘束具とかね」

「了解」

これによりエヴァに関しては、カオルの従事が確定…

(数多くは作れないか…  
頭脳に当たる部分のコアだけはCPU重視だな)

とにかく取り込まれるや、暴走が恐い為…コピーだけはやめとこつ。  
の気持ちだった。

エヴァの特徴として、精神同化による思考での操縦があげられるだ  
ろう。

ピース等の操作もエヴァは思考でできるのに、  
モビルスーツ等は複雑なプログラム、  
またはアームマニピレーター等の操縦技術が必要だ。

よって格闘技術に秀でるのが神経接続であるガンパレード、エヴァ、  
ナデシコ、サブ神経接続のSEED、  
モーション操縦によるまだ取得してないGガンダム、  
サブモーション操縦のフルメタルパニク…  
と言えよう。

体力消耗度でいえばモーションより神経接続の方が優れている。  
精神はともかくとして…

神経接続で、どんだけ思った通りに動けるか？またポイントの一つ  
でもある。

そういった意味では人造人間…ガンパレードと、エヴァが他の世界  
より秀でている。

まずはエントリープラグ周りから…

コネクタから脊髓にかけて作り、コア周りを作る。

この部分が出来ると、起動する事ができるので最優先に作成する…

(ん…ちつと半日がかかりか…)

エントリープラグ、コネクタ、コア作ったところでこの日は終了した。

…

カオル報告

新年会で赤ちゃん報告されました

ナギ少尉「本来なら桜花作戦結構日時だね」

作者「だな」

ナギ少尉「で、この物語、リアルで年内には…？」

作者「完結できればいいな」

ナギ少尉「目標は太陽系制覇なんだよね？」

作者「まあ…その通りと」

ナギ少尉「その間に私達の東京遊覧はできるのかなあ？」

作者「ぐっ……」

〇〇「お兄ちゃんに会いたい」

作者「ぐっ……ま、デイズニワールドは…一般人視点から遊んでいる描写ならセーフかな？  
と思うが…ま、別のに変えてもよいか」

ナギ少尉「……大人の都合ね」

作者「まあな…」

ナギ少尉「で新年会でおめでた報告で、ますますこの世界に縛り付けられたカオル…」

エヴァを作りファーストインパクトを起こすのか？

次回…あ、木星攻略艦隊…？…お楽しみにい」

作者「そのものでないからインパクトは起きないよ……」

第171話 木星攻略艦隊始動 投稿日20110904(前書き)

まだまだ台風の影響で大雨警戒ですね…

第171話 木星攻略艦隊始動 投稿日20110904

2001年1月2日 午前11時

L4宇宙艦隊プラットフォーム

少し時間は巻き戻り、この時間にプラットフォームから船が一隻ずつ離れていく。

サラミス改級、マゼラン改級、エンデミオン、

が一足先にL4から離脱したアイランド級コロニーレーザーを目標としてすすむ。

総数41隻からなる護衛艦隊…

アイランド級4基のコロニーレーザーと合流した。

「これより当艦隊はフォールドを行う。目標地点…木星近海…各艦最終調整入れ」

『各艦フォールド準備、各艦フォールド準備…

フォールド開始までTマイナス60、目標地点木星近海』

警告アナウンスが流れる。



「フォールド開始!!」

艦から白いエネルギー場が広がる。

フォールドフィールド内部にあるすべてを転移先にある空間と入れ替える。

これがフォールド航行である。

例えばデブリ内部でも、出現位置に物質があっても問題なく置き換わる為、

かなり安全な長距離移動手段である。

しかし、ゼントラーディ技術のフォールドは時間がズレが生じる。

1：10の比率でずれ、例えるならフォールド航行に1日かかると、表時間では10日かかってしまうのだ。

また一回のフォールドでは300光年までとなる。

エネルギーチャージの容量の問題で…の事だ。

大体100光年で1日フォールド航行にかかると思っただけならば良い。

銀河鉄道の方がフォールド航行よりも、はるかにスピードがあるが、あくまでもフィールド内部のデブリが無い安全な空間における速度、また速さに比重をおいて、船等の大きさに制限がある。

とっておこう…

シールドなしに正面から、10m位の隕石に銀河鉄道の毎時300

0光年の速度で衝突したものなら…

大惨事になる事は確実…

なのでシールド外の通常航行の速度は毎時1光年あたりまでしか、  
出せはしない…

さて、外側からみると…司令室の監視モニターでは、  
おおきなエネルギー場が4つ、そのまわりに41あるエネルギー場  
が見え…

エネルギー場が一瞬輝き、その後急激に小さくなり…  
後にはなんにもなくなつた。

すぐにとりの木星採掘基地の映像に遠くにエネルギー場が発生、  
エネルギー場が収束していくと小さいながらもコロニーレーザーが  
見える。

艦隊は映像からは確認できないが、問題なく転移できたらう。

星系内部の短距離フォールドではさほど時間のかかる事なく、  
無事にデフォールドした。

「デフォールド確認、各艦異常なしです。座標も誤差無し」

「各艦、加速開始…アイランド級に速度あわせえ」

「了解」

スペースコロニー及び護衛艦隊は加速に入る。

ガリレオ衛星群の中では1番外側を16日間で木星を一周する。現在公転軌道からみて、後方に位置する場所にカリストがある。

そしてカリストの2箇所ハイヴヘコロニーレーザーを撃ち込む為、加速して、衛星の公転速度近辺まで速度をもつてき、最終加速で位置を合わせて射撃準備にはいる…約36時間後には射撃体制に移れる予定だ。

木星の4大衛星の一つカリスト、直径約5000kmあるこの衛星は、本来ならもう少しハイヴの数があってもよかったかもしれない…

が、このカリストには2つのハイヴしかない。

考えられる理由として天王星型惑星、巨大な氷に閉ざされたと理由が考えられる。

厚さ200kmに及ぶ巨大な氷の大地、太陽の光がもつと届けば豊かな水の惑星にもなつたらう。

しかし光が届きにくく、永久氷土の衛星として存在していた。

BETA的には大きさは条件を満たし到着したものの、資源的には旨味がなく、活動限界近くに1箇所をつくり、それでこの衛星カリストから手を引いたとの見解だ。

ほってもほっても氷しか資源が見つからない衛星…

勿論200kmより地下に資源が探査で、あるのは確認できるが…

さて、先に出発したビッグワンは既に衛星の輪に到達しており、この二つのハイヴ状況及び他の衛星のハイヴの観察にはいていた。

ビッグワンにはキャーティア製の透過レーダーが、改装で積まれておりその威力を発揮して惑星の内部まで覗けていた。

後で、話を聞いたカオルは、

「木星にも到着ユニットが投入されてたのか…」

「はい。ですが、高重力に耐え切れず粉碎した形跡がとれます」

「対応してたら…今の機体では攻撃をかける事ができなかったな…」

同じ衛星の輪の中にある採掘プラントの、

宇宙世紀技術リーダーでは、重力の底の様子はわからなかった事実だ。

木星攻略艦隊はこの後ひたすら速度あわせるに36時間程経過する

……

2001年1月3日

木星攻略艦隊から場面は横浜基地にうつそう。

カオルはエヴァに今だにつきっきりとなっている。

る過循環装置をプラントに作って貰い、LCLはカオル自身が同化で作ったり、

プールを作っていた。

この中に非活性化させた生体部分を入れ、最後に繋ぎ合わせ作る工程になる。

早く言えば、人間の間接ごとにあらかじめつくり、同化で手術のように繋ぎあわせ、活性化する…

さすがに80mもある人造人間…作るに苦労する話だった。

カオルはコア周りの完成とともに、起動テストに入る。

ロッカー室で、プラグスーツに着替えてきたカオル、エントリープラグにはいり、シートに身体を固定する。

エントリープラグをコネク트에挿入…座席ごと一回転する。

LCLの注水コマンドを打ち込むと、LCLがはいってきた。

(ガボガボ…血の味だ…)

わかっているが体液である…

(味だけは変えるべきかな?)

エントリープラグ内部にLCLが浸り、コンタクトを開始…

無事に神経接続が繋がった。

まだ入力情報がないのでプラグ内部は明るいまま、  
身体も動かせない状態にあってもどかしい思いになる。

起動テストを終了し、

「マスター、凱さん、ルネさん、ソルダート」さんが目覚めたよ」

「やっとか…長かったなあ…」

「機械同化部分かね…ルネさんは廃熱処理の部分ついでに直したし、  
ソルダート」さんは意外に長引いたね」

「今DVD中?」

「うん。あと報告だけ…」

ルネさん目覚めたときターミネーターが3人小破判定くらったよ」

「……なんとなくわかる気がする。  
確かにターミネーター達身内には甘い設定だしな……」

一応人間に対しては不殺不大傷と設定させ判断させている。

作業員の取り押さえの際にも、全身の骨を折ったり等で無力化せず、投げつけたり、捕縛術で捕まえ、

捕まえたあとは、猫の様に垂らすや、全身ガムテープで拘束する……  
また緊縛術でロープを使い見事に縛りあげる……という流れだが……  
多分ルネが暴れた為に大怪我を負わす事を恐れた為だと思われる。  
過剰な力を発揮する相手を押さえ付けるのは、壊す恐れがある……  
なので捕まえきれず小破くらったのだろう。

見終わったとの事で、カオルはミーティングルームに……

「みなさん身体の調子はいかがですか？」

「きみが渚カオル君か……獅子王凱だよろしく。身体の調子はいいな」

「シャッセールのルネだ」

「」だ……感謝する」

「ルネさん、回復中に間に廃熱処理の不具合は修正はしておきまし

た。

一応お聞きしますが、人間に戻れますがいかがですか？」

「人間に？生身の身体にか？」

「ええ」

「……興味ある話だねえ……何時でもできるんかい？」

「はい可能です」

「……考えとくよ……」は可能かい？」

「Jさんも凱さんも可能ですね」

「俺はこのままでいい」「……わたしは戦士だからこのままだな」

「わかりました……と改めてよろしくお願いいたしますね」

「よろしくな」「フン」「ああ」

1月4日……

約36時間かけ、加速及び衛星カリストの速度に同調したアイラン



ド1及びアイランド2は、  
ハイヴ狙撃位置へとその砲身を固定した。

衛星カリストにある二つのハイヴは共にフェイズ5…

必要最低限の発展で打ち切ったのだろう…

そのフェイズ5規模のハイヴに対して、

人類の科学の力がいま振り下ろされようとしていた。

「カリストのハイヴに対してコロニーレーザー照射する」

「エネルギー充填率100%いつでも発射できます」

「ジオンの威力をうける！！はっしゃああ」

コロニーレーザーから照射されたレーザーが、  
カリスト01及び02に突き刺さる。

ハイヴに直撃し、その周りの氷を溶かし一気に蒸発させる。

氷の大地がとけるが…まだハイヴの土台がしっかりしている為、照射に耐えていた…

「エネルギー再チャージ第二射目急げ！」

もう一度撃てばカリストのハイヴは、二つとも反応炉を消失する。

あとは飢え死にをまつだけであつた……

……

カオル報告

引き続きエヴァ建造中……

第171話 木星攻略艦隊始動 投稿日20110904(後書き)

ナギ少尉「とりあえずこの回は、カリストまでなのね」

作者「ああ…まあね」

ナギ少尉「で、あと3つつあるんでしょ？ガニメデ、エウロパ、イオ」

作者「それぞれに一応星の大きさが達しているから、  
到着ユニットがうちこまれてるからね」

ナギ少尉「で、木星にもね…」

作者「そうだった事。ただ、高重力に到着ユニットが粉碎された…  
のは本編の通りな」

ナギ少尉「でも、木星攻略一気にいかないの？」

作者「地球オリジナルハイヴの集結からんでるから、  
あつちに飛んだりこつちに飛んだりする羽目になって…  
まあ…一気にはいかないんだよね」

ナギ少尉「木星の後は土星？」

作者「の前に、エンデミオン以外が推進剤を補充しに一回帰還するから」

ナギ少尉「エンデミオン以外？」

作者「エンデミオンは大改造で推進剤に余裕あり、ビッグワンも残るけどね」

ナギ少尉「で、次回はオリジナルハイヴ周辺の様子も？」

作者「ということだ…さて次回題名未定っすが…お楽しみにい」

2001年1月4日

カリストへ2射目が撃ち込まれた後辺りの、  
横浜白陵基地の異世界軍司令部。

モニターにはオリジナルハイヴ周辺の映像がでている。

続々とその数を増やしていき、

今だ集結前なのに既にオリジナルハイヴには、  
1000万を超えるBETAが集まっていた。

その数により、ハイヴ内部におさまりきらず、  
周囲100km四方に溢れかえっている。

通常溢れると大規模侵攻が発生するが、

あ号の命令だろう…まだ周囲に留まっていた。

いつ何時動き出してもいいように24時間体制で監視が続けられ、  
それに対応すべく改装済みのビッグトレー砲艦型40隻と新造艦4  
隻が、

敦煌防衛拠点にて待機していた。

…

B55ハンガー奥、格納エリア内部に作られた、ビッグオーダーーム。

勇者ロボット達のサイズに合わせてつくられた、オーダールームであつた。

「隊長！」

「凱隊長殿」

「凱隊長！」

「おつみんな！元気みたいだな」

「早くボディが治ってほしいですけど…」

「わたしのは明日治ると伺ってます」

「はぁ…なぜ兄弟機なのに何故まだなんだ？」

「私たちもまだだつて〜」

「のわりには…なんか謳歌しているみたいだが？」

「人間サイズっていいよね〜こんな可愛い服とか着れるし〜」

「ケーキ美味しい」

「将棋というのを手で打つ…というものは、いいですな…王手!!」  
パチン

「む…ならば…これでどうです?」

彼ら勇者ロボ達には、人間サイズで活動可能なように、ターミネーター技術を流用したボディにAIの分体がインストールされていた。

本体は勇者ロボにはあるが、いざという時に退避可能なように…また人間サイズと交互に活動可能なように改造されつつあった。

もちろん外見上はアイデンティティーを保つ為、同一的な外見をしている。

が、「人間サイズなら服を着てオシャレしたい!」という要望に応え、

シリコン性の外枠の形となった。

金属で服を引っ掛けられない配慮だった。

誰の要望かは…わかるだろう…

また同時に、人間の食事にも興味ある!  
でエネルギー轉換炉をつけていた。

……エネルギー転換炉をつけないと、トイレに並ぶ勇者ロボ達…  
そっちの方がおいしかったかもしれないが、  
処理の問題の必然から飲食機能と同時に組み込まれた、  
勇者ロボ達だけの人間サイズボディだった。

「おっ…そこ…」

「あっ!」「隊長おうっ」

「王手!これで摘みです!」

「隊長っ!酷いです!」

「ごめんごめん…とギャレオンは起動してないのか…?」

凱は見回していると…

「にゃーん」

「にゃーん?」

振り向くと膝位までの高さのライオンの子供…  
いや失礼、ミニギャレオンらしいのが声をあげていた。

凱は…固まっていた。

「にゃーん」



「ギ、ギ、ギ、ギャレオン?」

「にゃーん」

肯定の意味だろう…首を上下に。

「……フュージョンできるのか?」

ミニギャレオンが口を開ける。

フュージョンできたら…物理的に不可能とおもっが…  
甘い誘惑から凱は眩く。

「……フュージョン」

ミニギャレオンが飛び掛かってきた。

ミニギャレオンは甘噛んできた。

「ギャレオン、くすぐったい舐めるな」

「にゃーん」

勇者王、ひと時の日常であった…

2001年1月5日

前日のカリストでの2発目のコロニーレーザーの様子だが、反応炉を貫き約50kmの深さまで到達した。

グズグズと茹だり液化がすすみ、また水蒸気を濛々とあげる。

が、カリストは-150度の世界、

水蒸気もかなり早めに冷やされ凝固し、大穴に到着する。

また回りからも溶けた氷が穴をふさぎ、

次々と内部からうまつていく……

次第に大穴は再び氷で塞がっていき……今では深さ8kmの穴として存在していた。

足りない分は回りに飛び散り、

若干盛り上がって氷となり、宇宙に拡散せずにカリスト自体の質量はさほど変わらない……

を付け加えておこう。

カリストで無事2発目の照射を終え、

次なる衛星ガニメデをターゲットに捕らえて、

攻略艦隊は、減加速を終えて最終発射位置にアイランド01及び02、03は、

その巨体をハイヴに向けていた。

ガリレオ衛星の内の一つであるこのガニメデは、やはり太陽の力が届かずに、地表は固い薄い氷の層で覆われている。

その下には軟弱な氷の層が170kmあまり、中心部に行くほど水になるが…続いている。

直径約5200km、太陽系1大きい衛星にはやはり到着ユニットが到達していたが…  
好みではなかったのだろう、ハイヴは3箇所のみしか作られてなかった。

活動距離限界で作られたハイヴであり、  
またカリスト同様、発展は最小限にとどめられてた。

フェイズ5規模が3つ…  
たったそれだけしかこの衛星にはない。

見捨てられた衛星である……

「はっしやあああ!!」

コロニーレーザーがガニメデの各ハイヴに突き刺さる。

「っ!!!中将!!!ハイヴが沈降していきます!!」

「なにい?」

ハイヴを支えていた薄い氷の大地がとけ、  
ハイヴの重みに耐え切れず衛星の氷の地の中に沈下していく…

固い氷の層の下は軟弱な氷の層、ハイヴ自体の重みに耐え切れな  
かったようだ。

「エネルギーチャージ急げ！！逃すな！」

「中将、ビッグワンからです！！沈下停止しました。  
また同時にハイヴ内部に大規模浸水発生！」

「浸水だと…？」

「主縦穴ほぼ2/3以上浸水するようです」

「……エネルギーチャージ中止、02、03においてもか？」

「はい」

「勝ったな…」

主縦穴自体は重みに耐え切れず沈下するも、  
繋がっている横道の存在が、しつかりと主縦穴を支えた。  
門辺りの土台は溶けてなく、その構造物を支える。

そこに沈み込んだ及び主縦穴が消滅した分、  
回りからの溶けた水が次々と流入してく…

ハイヴ内部に浸透しきつた温水は急激にその温度を奪われてく…

次第に…

ハイヴ反応炉近辺にいたBETA達は、  
今までなかった水に襲われ対応すべく身の動きを止めた。

しかしそれが彼らの命とりだった。

回りの水が固まってくる。

ここは氷点下150度の世界…

数mの氷の壁なら問題なかるう…しかしハイヴに流れこんだ水が全  
て氷と化した。

次第に身動きがとりにくくなり…

気がついた時には身体の自由もかなり奪われてた。

シャリシャリな内に移動できた個体もいたが、すぐに壁にぶちあた

る。

今までなかった壁とおもった次の瞬間。

BETAの氷漬けが完成した。

ハイヴ内部に浸水した溶かされた水は…

横道、広間、主縦穴をうめつくし、  
そして、凍らせ壁となる。

門付近や地表に出ていたBETAが、ひっしになって氷を掘りはじめてきた。

しかし反応炉まで分厚い氷の洞窟に阻まれている…

「地表から600m以下の部分が全て凍りつきました」

「残存6万が現在氷結部分を掘削してますが、  
試算によると2週間かかる見込みです」

土なら掘りやすいが、氷である。

固い岩と同様なかなか掘りにくいものだった。

地球においても、母艦級は硬い岩は避ける傾向がある。

光線原種は確かにいるが、氷の大地…いや氷点下の世界では、溶かすかたわらずに固まる為、あんまり光線原種は使われない。

要撃原種による掘削が重宝されているようだった。

が、反応炉までの道のりは5km以上…いくら掘削のプロでも…

「餓死まつのみ……か。次の衛星攻略に移行するぞ。ガニメデは監視体制に」

「はっ!!」

次の衛星はエウロパ…

エウロパに向け、ガニメデ衛星軌道より離脱すると、減速し始めた。

2001年1月7日

この日はエウロパのハイヴにコロニーレーザーが撃ち込まれた。

衛星エウロパ…

木星の第二衛星で、約3日で木星を周回している。直径は約3100kmの月よりやや小さめの衛星であった。

エウロパは、表面を薄い氷の層で囲まれた海洋惑星である…

そして更にビッグワンからの情報で、エウロパの深海の熱発生原には、

原生物の存在が確認できていた。

太陽による光合成でなく、熱による化学合成でエネルギーを発生する生物であった。

「……やはり居たんだな」

カオルはその報告を後日聞き、そう呟いた。

元の世界でも、太陽系で唯一地球以外で可能性がある…  
として議論されていたのを覚えてたからだ。

さて…発射描写がかかれてないのは…

結果とてガニメデと同様、

水没し氷結…という結果になったからだ。

このエウロパはやはりBETA的には見捨てた星である。

なので月とほぼおんなじ大きさながらハイヴ数は2、フェイス5でとどまっていた。

そこにコロニーレーザーが撃ち込まれると…

エウロパの大地は厚さ平均5kmの氷の層で覆われている。



コロニーレーザーがハイヴに直撃、土台が溶けはじめその重みを支え切れず沈下、  
門からの横道が主縦穴を支え受け止める…  
そこに溶けた水が侵入、氷結し…  
の流れは変わっていない。

「次の最内の衛星イオに向かうぞ…フェイズ9規模のが4つだな？」

「はい」

「木星の重力に捕われるな」

「はっ!!」

2001年1月8日

横浜基地演習場

「どうだ炎龍、風龍、雷龍、光龍、身体の調子は？」

『好調であります、隊長殿』

『問題なし、すごぶる快調だ』

『雷龍と同様。腕が良い』

『凱お兄ちゃん、快調だよ』

「はああ…ルネ隊員何故……？」

修理ができた勇者ロボット達が身体の調子をみるべく、演習場で動かしたり、かるく模擬をおこなっていた。

修理状況で難航しているのが、氷龍とギャレオン及びジエネシックマシン各種…

なので、ガオファイガーを新造している最中であつた。

また再び修理する羽目になったのがボルフォック…

何があつたかは…想像にお任せする。

2001年1月9日

この日は木星のイオの4箇所ハイヴに撃ち込む予定だが…

『総員第二種戦闘待機、繰り返す。総員第二種戦闘待機、

本日1129オリジナルハイヴより大規模侵攻発生。  
各戦闘部隊所属人員はミーティングルームへ集合せよ』

異世界軍の各基地に警報が流れる。

また国連軍エリアでも警報流れているはずだった。

(きたか…)

カオルはエヴァの作成を途中で切り上げ、情報司令室に向かう…

…

カオル報告

いよいよ大規模侵攻発生です

ナギ少尉「いよいよね」

作者「いよいよ山場だな」

ナギ少尉「ねえ…1000万越えって…どの位なの？」

作者「まあそれは秘密って事で…」

ナギ少尉「でも…今まで5から6万の進行で生存圏後退してるのよ？」

作者「それいつたらハイヴ増援の10万台受け止めてるしさ…」

ナギ少尉「……う？」

作者「それに後方浸透が1番怖いんさ…」

戦術機だけならまだ耐えたかもしれない。

が…補給部隊や司令部、民間人など護るものは沢山あった…  
そこにいきなり小型級が出現したら？

音もなくいきなり兵士級がぱっくんちよしたら？

全てを通さないって殆ど不可能：  
だからたった2から3万の規模でも戦線瓦解する事もある…」

ナギ少尉「そういえば…異世界軍って、  
後方にもターミネーター達が警戒してるよね」

作者「基本、整備兵は前線には行かないしな。  
第一コバツタ達が活躍しまくってるから」

ナギ少尉「えつとあとは…氷漬けか…」

作者「エウロパとガニメデね？」

まあ表面温度氷点下150度の世界だからなあ」

ナギ少尉「けどエウロパは、薄い氷の下に豊かな海があるのね」

作者「荒波らしいよ。あと海だから塩がある。

また循環も木星の引力にひかれてある。

だから全てが凍らず海が存在しているって学説だね」

ナギ少尉「実際にいつてみないと…」

作者「その頃には生きてないよ俺らは…」

なので、この物語上の設定ですので惑星描写についてはご勘弁を…  
なるだけは学説に似せますが…」

ナギ少尉「精々月、までだもんね〜今のところは…  
火星は着陸はしてるけどね。さて次回はイオと大規模侵攻の話題に  
なるの？」

作者「ま、その通りだな」

ナギ少尉「あとエヴァ今回描写ないね〜」

作者「……………」

ナギ少尉「次回、大規模侵攻編 敦煌防衛拠点防衛戦その1…お楽  
しみにい」

大規模侵攻編 敦煌防衛拠点まで…1500km}

2001年1月9日

横浜白陵基地異世界軍エリア司令部…

モニターでは衛星軌道上からの大規模侵攻群をとらえていた。

横幅がおよそ50km、30km程しかまだ移動してないが、300kmの長さになると予測される。

オリジナルハイヴに集結時から異常だった。

ハイヴ内部におさまりきらずに200km四方にあふれだしていた。その中から突撃級があふれだし、進行方向を敦煌防衛拠点に向けていた。

「予測される規模は？」

「1300万から1500万の間です」

「かなり多いな…砲艦隊には出撃命令は？」

「だしました、第一、第二、第三砲艦隊が、

最大戦速で急行中です」

定数20隻の砲艦隊、第三は定数満たさず8隻にて稼働していた。

「迎撃施設関係は？」

「迎撃ライン上は敷設率100%、敦煌防衛拠点はもうまもなく完成、

重慶は基地設備ともに100%です」

「各守備担当は？」

「滞りなく移動中、またミーティング中、欠員無しです」

「会敵まで3時間か…パンジャンドラムも？」

「はい、順次発進してます」

ビッグトレー砲艦型が、その巨体に似合わない速度350kmを出して急行している。

「桜井小队ミーティングルーム」

ガンパレードから引っ張ってきた、烈火…



その改造型を操る第六世代人で構成される桜井小隊がミーティングしてた。

「いいか、今回の目的は遅滞行動にある。できるだけ多くのBETAを引き付ける事にある。」

盤面の敦煌防衛拠点を指した。

「われわれの担当するところはこの部分、この部分において遅滞守勢し…

最後にはチューリップでもって撤退する。HUDに表示される撤退指示を見逃すな」

「はいつ！」\*多数

その頃地球では慌ただしくなっていたが…

木星では…

「やっとフェイズ9クラスですな」

「やっとだわい、がははは」

衛星イオに存在する4つのハイヴに向け、射撃準備に入っていた。

衛星イオ：木星の4大衛星の中で1番最内を回っている。

地表は大地に覆われていた。

また火山活動も頻繁に起きていて、

大気は極めて薄いながらも二酸化硫素が存在している。

この星はBETAにとっては好物だったのだろう…

ハイヴ数が4、いづれもフェイズ9まで育っている。

なを木星の衛星にはカリスト、ガリレオ、エウロパ、イオ以外にも、

BETAが到着する可能性として直径約180kmのアマルテア、

直径170kmヒマリアがあるが…

その二つの衛星には地表には到着ユニットは到達してなかった。

木星がより魅力的だったのだろうか…

このイオのハイヴを潰すと、木星の攻略は完了する事となる。

「エネルギーチャージ完了しました」

「コロニールレーザー発射ああ」

イオに向かい楔が撃ち込まれる…

侵攻感知から約4時間後、場所は敦煌防衛拠点より1000km地点

48隻からなるビッグトレー砲艦型は移動をやめ、大地にしっかりと巨体を固定していた。

その狙う先は：まもなく有効射程100km範囲に到達する敵BETA群の先頭突撃級。

BETAの移動速度は突撃級であっても約50kmの速度でハイヴ間を移動する。

要塞級等が引き離されすぎる為、ある程度は調整していると見られるのだ。

要塞級は最大速度が50km、通常移動であっても35km…

その歩みは巨体にあつとおり遅いものである。

迎撃できる地点が敦煌防衛拠点よりオリジナルハイヴ側に食い込んだ、

この1000km地点においてビッグトレー砲艦型は既に展開しなかった。

「各艦、砲撃開始！！」

一斉に60cm3連装から主砲弾が放たれる…

その数5184発…続けて次発。

一分間に62万2080発が放たれる…

光線級の迎撃が地平線に阻まれてBETA群の先頭には届かなかった。

BETAは一撃を受けた後、その速度をあげ、密集隊形から若干広がり気味に、  
一斉に敦煌へと目指し始めた。

BETAはその砲弾の雨の中も恐れずに走る速度をあげる。

突撃級の最大速度170kmを目指して…

はつきりいつて運の世界。

BETAにとつたら、災害駆除すべくその出しているもとへと一斉に駆け付ける。

俺が逝つても他がいるさ…

の如くだった。

実際人間の兵士ならこんな砲弾の雨嵐の中行きたくない！  
で躊躇し、それが損害を更に生むだろう。

がBETAにはそんな感情はない。  
速度をあげ耐えるのみ…

実際のところそれが損害を減らすコツといえはそういえる。

ビッグトレーの砲弾の多くは、突撃級の最前列に集中させる。

突撃級の速度を落とさないと、100kmの距離は、  
約40分程で到達してしまうからだ…

更にその幅が80kmにも及ぶ…

いくら一分間に60万近くの砲弾を撃てても、突破されて後方にいかれては…遅滞行動にもならない。

より多くの突撃級の死体をこさえて、最大速度を出させない…まさに物量と物量のぶつかり合いだった。

砲弾が地面にあたり爆発する…

地面がえぐれクレーターとなる。

そのクレーターに曲がりきれずに突撃級が突っ込み若干速度がおちる。

更に上空から砲弾が突撃級の硬い甲羅にあたった瞬間に爆発。

爆発力が3m位の穴を甲羅にあけ、中身を粉碎し、

突撃級のあいてる後ろに肉体を押し出す。

甲羅は真つ二つにわれ空中に浮かび上がり、そして地面におちる。

その甲羅を避けるべく速度を落として避ける。

そこに60cm砲弾が直撃する…

突撃級にとって地獄絵図そのものだった…

1時間5分後…

ビッグトレー砲艦型から40km圏内とどこうとしてきた突撃級がいた為、

砲撃中止しその巨体のホバーを起動、転回し移動しはじめる。

接敵されると、艦体は初撃に耐えられるも、ホバークラフト部分が耐えられなく固定砲台と化す羽目になるからだ。

砲撃中止し、移動し始めたビッグトレイの脇を、トレインギャロップから展開した、パンジャンドラム1000両がBETA群に向かい駆け抜けていった。

突撃級は60kmに及ぶの死の世界をくぐり抜けると…

災害の嵐がやみその歩みを遅らす要素が、

クレーターと仲間の死体のみになった突撃級…

避けながら忌ま忌ましい災害に向かって、突撃をしかけようとした時…

こちらに向かってくる物がある。

蹴散らそうと身体の向きを若干かえその物に突撃をしかけると、若干進路がずらされ更に後ろへといく…

仲間がその物に突撃しかけた…

すると後ろから熱風が襲い掛かって…

パンジャンドラム達はまずは100両、穴だらけになった戦線に広がらつつ特攻した。

先頭にはあたらずすぐに後ろの…突撃級に特攻し、その爆発でもってより多くの突撃級を地獄へと誘う…

猫の目によりその進路はうまく誘導され、2から5体を巻き込み華を咲かす。

更に100両が突っ込んでいき…

先頭部分が死により揃いつつあったと判断した猫の目は、800両を一斉に動かした。

一両が半径50mを担当し、死骸という障害物をつくるべく特攻していくパンジヤンドラム…

上空からみるともののみごとに列となり800の華がみえる。

その華の後にはのたうちまわり重体となった突撃級もいれば、死骸となり後方の突撃級を阻害する事となったのもいた…

そのころ…

〈医務室〉

「よっ！葛城、リッチャン」

「あら加持君」「あ…あ…」

加持の姿をみて涙を見せるミサトさん。

「わあああああゝあんたあ」

ミサトさんが加持さんに飛び掛かり…それを加持さんが受け止めて…

「あらあら……子供ね……」

リッコさんは長くなるな…とコーヒーのお変わりをとりにいった。

場面は敦煌周辺に戻る。

現在敦煌防衛拠点から810km地点…

まずは増産されたモンスター改、その数2000機が、  
最大射程160kmの距離で歓迎の砲火をあげた。

4門の長距離砲から一斉射撃が開始され、  
6000発の砲弾がパンジャンドラムの特攻を受け、  
傷ついた突撃級やその後ろの無傷な突撃級に襲い掛かる。

最初のビッグトレーの射撃ポイントで射撃はしなかったのは、  
その鈍重さにある。

80km近くのをだすも、  
トレインギャロップからの展開及び搭載に時間かかると判断された  
為だ…

何しろその巨体である。



なのでこの次の砲撃地点は300km地点と設定されていた。

モンスター改の受け持ち射撃範囲は160kmから80kmの間、それをすぎると射撃中止し、トレインギャロップに搭載、移動の形となる。

そしてモンスター改から90kmに突撃級がかかると…

800km地点に展開し終えたビッグトレー砲艦隊より、砲撃開始された。

しかし…異様な数の大規模進行群はなかなか勢いが止まらず、まずはモンスター改が射撃中止し、トレインギャロップへ搭載、後方へ移動開始する。

そしてまたもや40km圏内へ到達、  
次なる射撃地点へとビッグトレー砲艦型も転進する事になる。

移動し始める脇を追従していたパンジャンドラム1000両が、B  
ETA集団に向かいはじめ。

広い戦場を使い、削り削り殲滅できる戦力まで減らす…

それが1500万に膨れあがった大規模侵攻群を、  
打ち負かす方法であった。

パンジヤンドラムが効率よく先頭集団に突っ込み、その歩みを遅らせている間に、ビッグトレーが750km地点を敦煌防衛拠点へと疾走していく。

そこにはG元素がおかれていた…

パンジヤンドラムの被害にあつた傷つい突撃級…  
その感覚はエネルギー源を捉らえていた。

腹減つた…まわりの仲間もその進路をエネルギー源にかえ…  
押し合いへしあいの状態になってくる。

ああ…美味しそうなエネルギー源…  
とどく…いただきまあ…

「サイクロプス始動!!!」

BETAが引き付けられている、G元素がおかれている地下には、サイクロプスが設置してあつた。

電圧がかかり…超強力マイクロ派が、地上にいる範囲内の全てに襲い掛かる。

エネルギーカーテン内部は次々と破裂する。

そして…カーテンはさらに広がり地下のサイクロプスの電圧が更に  
あがり…

構造限界を越え、耐え切れなくなり…

その瞬間、サイクロプスは…大爆発を引き起こす。

横浜白陵基地異世界軍司令部

「先程のサイクロプスで、約12万消失!!」

「現在突撃級約73万撃破」

あれだけの砲弾幕の中でも意外と突撃級は残り、敦煌を目指して殺到している。

突撃級は大型種、他の小型種とは違い直撃弾または至近弾でない限り、

分厚い甲羅に身を護られ、その命を散らす事はすくないからだ。

意外と守備力は高い…

かつ、今回の大規模侵攻では数も多くなっていた…

そして、流石に80kmに広がると弾も疎らにはなる…

敦煌防衛拠点まで残り700km…

（医務室）

「……サードインパクトが起こっちゃったのね……」

「ああ、サルベージされたマヤちゃんの話だから間違いない」

「あら、マヤもきてるの？」

「ああ」

「エヴァによるエヴァでのサードインパクト……」

「結局はゼーレのシナリオ通りになってはしまった……」

ネルフの力がたからなかった……

いや、碇司令がいたから負けた……」

「そうよ」

「……シンジ君は？」

「……この責任者カオルの話だと、あの使徒おんなじ顔のね」

ああ、あの世界で個体として生存できたそうだ。アスカと一緒に」

「そっ…」

「で、ここからが重要だ……エヴァンゲリオンがこの世界でも作られてる」

「うそっ！」「えっ！！」

「この世界でもおこるかもしれんぞ」

……

カオル報告

現在大規模侵攻中…急いで建造してます

大規模侵攻編 敦煌防衛拠点まで…1500km（後書き）

ナギ少尉「今日ちよつと遅れたね」

作者「……まあリアルの都合と遅筆だな…」

ナギ少尉「遅筆の原因は？」

作者「新ギレンの野望と…単純に言えば山場だから、もうちよつと完成度あげたいかなあ…なんだけど」

ナギ少尉「でも仕事の都合上で…」

寝て起きたら執筆するヒマがない…ということ？」

作者「はい…サーセン」

ナギ少尉「ということですね」

作者「次回10日投稿分ができるだけ仕上げたいけど…」

微妙なかんじです」

ナギ少尉「さて、本編だけど…イオ攻略中と大規模侵攻の受けが、今進行中ね…で現在750km地点でサイクロプスによる駆除と…」

作者「その通り」

ナギ少尉「そういえばトマホークはどうなったの？」

作者「今急行中だね。」

敦煌には、張り付いてなかっただけの事」

ナギ少尉「張り付いてたのが…」

作者「ビッグトレー砲艦隊とモンスター改の部隊だね」

ナギ少尉「で…750kmでサイクロプス作動させて、更に遅滞させて…なのね？」

作者「そういう事さ…」

ナギ少尉「さて…次回は、大規模侵攻編 敦煌防衛拠点まで…70

0km」

ね。お楽しみにい」

第174話 大規模侵攻編 敦煌防衛拠点まで…700km

投稿日2011

〔横浜白陵基地異世界軍司令部〕

現在モニターには猫の目よりの、  
敦煌防衛拠点に向かっていて大規模侵攻群の映像がうつっていた…

その数約…

「総数でたか？」

「はい、大規模侵攻群その数15、129、714…繰り返します  
15、129、714です」

「総数約1500万か…」

「構成数は、

大砲級が1、525、

弾級855、945、

要塞級280、095、

重光線級251、001、

光線級282、924、

突撃級1、963、203、

要撃級2、265、035、

戦車級6、040、142、

闘士級1、701、655、

兵士級1、319、189…以上です」



「意外に大砲級が少ないな…」

「速度が問題ですから…」

「ああ…」

「この内現在死滅確認が、  
突撃級749、125がおもですが、  
光線級532、  
要撃級4732、  
闘士級8543、  
兵士級10251、  
になります」

約1500万の群勢…

内70万近くを750km地点のサイクロプスまでで消滅できたが、

まだまだBETAにとっては5%の消失なだけであった…

その長さ実に約300kmのBETA群の流れ…

間隔はあくものの、確実に敦煌、重慶へと迫っている…

現在、重慶とオリジナルハイヴ間の25%あたりの地点をBETA群は侵攻している…

750kmでのサイクロプスの混乱から持ち直した突撃級を先頭とするBETA群は、  
侵攻を続けると500km地点からの砲撃をうけることとなった。  
突撃級が、再び戦列を整えたビッグトレー砲艦型の、  
射程圏内に入りこみ射撃が始まる…

そしてその頃の異世界軍エリア医務室となりの談話室…

「建造スピードが違う?」

「ああ、リッチャン、エヴァンゲリオンが建造するとして、  
どの位で完成できる?」

「そうね…卵からだとして…最短3年かしら」

「…だが、このままだと後5日以内には完成するみたいだ」

「ちょ…それ本当の事なの?」

ミサトが加持に問い掛け、それに肯定する加持。

「5日以内…擬装の段階ね」

「……いやそれがなあ……なんていえばいいか……」

「ちよつとなんなのよ!」

はつきりしない加持にくつてかかるミサト。

「……見にいつて、現物みればわかるよ……擬装段階でもないし」

「擬装段階でもない?」「見れるの……」

「まあな……じゃあいこうか」

「ありえないわねえ」「機密高いのを……なんなのよこの組織……」

加持が二人を連れて部屋を出ようとする……

「あつ、軽く検査させて下さいね」

と看護兵に呼びとめられ……しばし時間をくうはめになる。

……

突撃級が40km圏内に到達すると……つまり敦煌防衛拠点から540kmに到達すると、砲火がやみ、

拠点からの増援パンジャンドラムの特攻が始まる流れは一緒だった。

その間にビッグトレーは展開し最大戦速で次の砲撃地点へと目指す。

パンジャンドラムの特攻がやみ…  
再び500km地点のサイクロプスの有効範囲に残存突撃級が入り込み、  
また電子レンジによりその身体を破裂させる流れであった。

戦艦建造ドック内特設エリアへと続く…

「あれが紹介映像に出てたMSとかいう戦闘兵器なのね…」

ミサトが呟いた視線の先には、  
B55ハンガーエリアにおさまっている撃震がうつっていた。

「分厚い装甲に護られた陸上兵器のはずよね？  
なにか説明と違うような気がするけど…」

「で、あれが戦術機かしら？」

ミサトの視線の先には……Zガンダムが駐機されていた。

「そうね…確かに空から発展した兵器のようね…」

「あゝ葛城、リツチャン…逆だぞ…あのMSだけが特別なんだ…」

「あらそうなの？」

「無骨なデザインなのは？」

「あれはF-4、撃震だな…確か…まあ装甲が厚いが、未改造のままだと生きて食われるらしいから、

その次の世代から機動力をもとめて発展していったらしいぞ」

「生きて食われるねえ…」 「せめて食われる前に自決したいわね」

「でつと…このエリアだ…」

と加持が階段をのぼってくのをついていく二人…

「へえ…あれ宇宙空間をいく戦艦でしょ？」

「映像にあった型のような」

「ここで建造してるんだ…どうやってあげるのかしら？」

「確かに興味あるわね。あの質量あげるの膨大なエネルギー必要ですし」

「見えたな…」

階段をのぼりきると、眼下にみえるのは…

LLLの底に建造中のエヴァとみえるパーツが沈んでいた。

四肢がみえ、胴体の半分もみえる。頭部はみえてない。

「なっっ！なんなのよ」 「へえなるほどね」

「ちよつとリッコ！これがエヴァの建造方法なの！？」

拘束具がなく、肉体があらわになっていた。

「まさか違うわよ…エヴァは卵からかえして大きく育てるの…

これはエヴァの建造方法ではないわ…

けど半年で一からつくるにはこれしかないわね…

あと五日ではなく…一ヶ月かかるでしょ？」

「リッチャン…半年もたってないよ…作られてから約1週間程だよ」

「はあああ？一週間ふっざけてんじゃないわよお！」「ちよつ」「加持  
！！！！に沈められたい？」

「リッコおちついて」「リッコ…グウ」

加持の襟元をつかみあげプールに全体重をかけた落とそうとしてい  
る…

「一週間でこんな生体構造作れるとおもってんのっ！？」

ザパアア

空気よまずに、ＬＣＬのプールのそこからカオルが顔をだしてきた。

「ふ〜」

顔を振って髪についたLCLの雫をとばす。

「ん？…潜りたいんですか？…と葛城ミサトさんに赤木リツコさん…始めまして」

「は…はじめまして」「ネルフェ計画責任者、赤木リツコと申します。始めまして」

醜態の切替が早い人であった…

「カオル君自身がこれを作りあげてるそうだよ」  
助かった表情の加持。

「渚カオルさん、お聞きしますが…エヴァンゲリオンを作り始めて一週間で、

このような形になったと聞いてますが」

「モドキですねモドキ…流石にそのままは作ると危険ですから、改良はしてます。

第一人の魂を必要としませんし…

あと一週間目あたりですね…

まあエヴァ組ならわかりやすく説明するなら、

自分は、使徒の力をもってるので、いや使徒そのものかもしれないませんが、

製造方法が特殊なんですよ」

「特殊？」

「このように……同化で材質を変化させたり情報を取得させたり……」  
手近な資材を生物、へと変化させた。

「第13使徒ね」

「ええ、彼の能力です」

「エヴァンゲリオンでサードインパクトを起こすつもりなの？」

「自分はこの世界の生存を望んでいますし、赤子もできるんで……」

「使徒と人間の？……いえ、使徒とは断定できませんよね。  
失礼をお詫びしますわ」

「いえ、人外と自覚してますから……」

「エヴァは単純に戦力として？」

「まあそうですね……守護の力として……とおもってます」

「……わかりました。わたしにもご協力させて下さい」



「ありがとうございます」

「ちょっとリッ」

「ミサト、命助けられたんでしょ？あきらめて協力してあげなさいよ」

「……まあわかったわ……加持君もね」

「はいはい」

「ありがとうございます」

その頃：再び250km近辺に陣取った異世界からの砲撃が始まる……  
口火を開くのはモンスター改だが：更にトマホークミサイルが、  
僅かに迎撃されながらも撃ち込まれてくる。

現在の突撃級最前列と後方の光線級との隔たりは、その数によりかなり大きい……

通常なら煙幕弾を撃ち込んでからでないに到底届かないが、

迎撃レーザーの数がすくなく40%あたりが到達する。

モンスター改に変わりビッグトレーの砲撃が始まる。

モンスター改：次は、敦煌防衛拠点の後方130kmからの砲撃の  
為、

トレインギャロップに乗りはじめた。

そして：ビッグトレー砲艦型も移動し始め：

パンジャンドラムの特攻が終わり：

カシユガル - 敦煌道程に仕掛けられた最後の3番目のサイクロプス  
が発動する。

いよいよ大規模侵攻が3発目のサイクロプスを抜け、敦煌防衛拠点  
の200kmへと進む：

敦煌防衛拠点にはある大砲と呼ばれる兵器が備わっていた：

200cm臼砲型レールガン：

鋼鉄の咆哮の世界より入手した160cm臼砲にOTM技術を使い、  
発展開発したこの馬鹿でかい大砲：

その砲身が天高く仰角をとっていた。

ほぼ垂直と思える角度で砲身がBETA群を狙っていた。

「まもなくBETA群、有効射程圏内です」

「超巨大口径砲は男の浪漫…200cm砲、トールハンマー…発射  
！」

ドオオン

盛大な空気をわる音をだしてその砲弾が打ち出される。

レールガンの要領で打ち出された弾体…

いやコーティングされた岩といった方がいいだろう。

音速は最初の時点て突破しており…天高く舞い上がる…

その岩は重力にひかれ…再び音速を越えて熱せられ…火の弾となり、狙ったBETA群を目標して地上へとちかづく。

光線級は迷っていた…学習していたものと違う…火の弾が降ってきたのだ。

その火の弾の進路は仲間に向けられていた…

迷っているながらも暫定脅威度をあげ、レーザーをあげる。

一匹の光線級がレーザーをあげると、続いてあげるが…

既に200cm質量弾は、高度3000を切っていて、その衝撃とともに突撃級のど真ん中に到着し…

位置エネルギーを十分に吸収した火の弾は爆発し、衝撃破が大気を震わし大型の火球がうまれる…

下手な火力兵器より威力が生まれた質量兵器…

本来であつたら空中にて自身が生み出す衝撃に耐え切れず、空中爆発するはずの大きさが生み出した衝撃破…

その衝撃破は爆心地点付近では、突撃級が音の壁と激突し、甲羅も粉碎され跡形もなくなる。

打ち出した200km手前の発射元においてもその音は聞こえる…

到着地点では…

半径1kmのクレーターができ、

吹き飛ばされたり等で半径6kmの空間が、ぼつかりと突撃級の残存集団の中にあいた。

「約8万は逝つたか？」

「ただ今計測中です…ただ、突撃級はほぼ残存が壊滅状態だと思われます」

「第二射、目標地点中衛先頭…」  
計測され角度微調整がはいるようだ…

砲身の温度が冷却装置により下がり…

「第二射、射出よし!」

「はなてえええ!」

再び衝撃波とともに打ち出される200cm質量弾…

その間にも重傷をおい、行動に支障の出ている突撃級にミサイルが襲い掛かる。

当初ミサイルに迎撃レーザーが打ち出されていたが、200cm質量弾が火の弾となると、光線級、重光線が、全力でもって迎撃火線をあげる。

仲間を狙うミサイルよりも脅威度をたかく設定し、全力でもって迎撃レーザーを放つ。

そのかいあって…地上6000mにて、質量弾は亀裂が入り空中爆発をおこす。

が、粉碎した細かい破片が、位置エネルギーを失うことなくBETA群へと襲い掛かる。

その破片は要撃級の全腕部の甲羅を貫き…光線級をもつらぬく…

「迎撃されました!」

「煙幕弾頭要請だせ、第三射射出用意！」

敦煌防衛拠点の後方150km地点にたどりついてたビッグトレー  
ミサイル艦より、

煙幕弾頭搭載のトマホーク2が射出された。

トマホーク2は巡航ミサイルの利点、低空ステルス性をすて、

超音速にて迎撃される為のミサイルである。

加速して音速を突破マツハ5を越えたところで次々と撃破され、  
上空を煙幕で染めてく…

しまいには着弾し、地上で煙幕をだし、  
要撃級などにミサイル本体を倒されてく…

ちよつと染まった煙幕の中に火の弾が落着し…

衝撃波が煙幕を押し出して20km程の空間があき、  
瞬時にまわりから空気がその空間に雪崩こんできた。

200cm砲による質量兵器の攻撃は、110km到達まで続き、  
計20射続いた。

その後ビッグトレー砲艦型の射撃が引き継ぎ、200cm砲は解体  
作業にはいる。

40分後…砲身、基部それぞれに解体された200cm砲は後方へ  
と運ばれていった…

ビッグトレー砲艦型に対するは今だ、1150万近くのを保つ大規模侵攻群…

それを抜けられると…敦煌防衛拠点であった…

…

カオル報告

質量弾LOVE

ナギ少尉「大口径砲は男の浪漫ね」

作者「だろだろ」

ナギ少尉「ところで装填ってどうやってるの？」

作者「あれ？敦煌防衛拠点にそなえつけられた、鋼鉄の咆哮の無限弾薬装填装置で供給してるから、装填作業いらんだよ」

ナギ少尉「あ、そうね…」

作者「まあ200cm臼型レールガンは、ビッグトレーをつかっても撃てないから…  
次の活躍場所はどこだろ？」

ナギ少尉「案外第二次大規模侵攻？」

作者「ないない…さて次回が…」



ナギ少尉「大規模侵攻編、敦煌防衛拠点まであと50km」  
…  
いよいよ敦煌防衛拠点が落ちちゃいます。お楽しみにい

「残存1142万、突撃級残存0」

主に200cmの20射がきき、更に迎撃されないミサイルが突き刺さり、突撃級は姿をけした。

しかし、BETA群の中衛の勢いは留まらず、砲艦型から40km圏内に届く距離に来たため、再び後方へと移動するビッグトレー砲艦型…

その砲火の後を引き継ぐのは…

「いっけえ」

「僕らの考えた」

「ローリングボム！！」

トレインギャロップより一斉に吐き出された球体…  
BETA群へ向け一斉に転がりはじめていった。

直径18m、戦術機と同等の大きさの球体、  
その球体からスパイクがでている…

ゴロゴロゴロゴロ

とにかくスピードが落ちる事なく転がっていく。

いやむしろあがってく…

内部に推進ギアがついてて、猫の目の誘導で進む…  
より効率よく串刺しにする為に…

ローリングボムはそのスピード、進路を調整し、  
こちらに向かつてくるBETA群へと向かう…  
突撃級がないので遮るのがいない。

スパイクが…

めきよ

兵士級を押し潰した。

闘士級を押し潰した。

向かってくるローリングボムを災害脅威と認定、  
その行動を阻害しようと各BETAは動くが、小型種は任が重そう  
だ。

戦車級が向かうが…18m…スパイクにたかれたが、かじりついて  
たら…

めきよ

一回転して串刺しになった。

そりゃそうだろう…火薬量含め自重100tはある。下敷きになれば串刺しに…

仲間の死骸はかじれないため空いている部分にかじりつくが…串刺しになり、その歩みは止められない…

要撃級がとめようと踏ん張った…次の瞬間…

ローリングボムは大爆発を起こし、

そのスパイクやら構成物を周囲にぶちかまし、串刺しにする。

パンジャンドラム同様特効兵器であった。

いやより凶悪だろう。

巻き込む量が違う…

ローリングボムは500球、1球につき、50から80辺りのBETAをもつてゆく…

BETA群は、進撃の合間に敦煌ハイヴ時代の門に取り付いたが、充填により閉鎖されていた為、主縦穴を目指していた。

確かに主縦穴は空いていた。目指す反応炉はその奥にある…

が、主縦穴のあった箇所には特殊コンクリート製のトーチカができしており、

針ねずみのようなCIWSから、絶え間無く30mm弾が打ち出さ

れる。

段階構造をとられた構造により、その砲門数は正対する数が多くなっていた。

穴に突入するにはこの砲火を耐え、無力化しなければならなかった。

光線級が仲間の影から照射し一門、また一門と無力化していく…

しかし他の砲門が狙いをつけ光線級を撃ち抜き、

その間に大破した機銃座は外れると、台座が下がり新たな機銃座をだしてくる。

予備機銃は3セット程各銃座にあった。

直接叩こうにも、つるつるな油のつたコンクリート壁に、

取っ掛かれずに登れない…

接近しているBETAに対して150km離れた距離からモンスター  
1改の射撃が続いていた。

BETA群は被害無視で、コンクリートトーチカの地下行きのメイ  
ンゲートに入り込み、  
中へとすすんでいく。

突入から1時間後、最後の予備機銃が光線級に撃ち抜かれ沈黙した。

モンスター改の砲撃は引き続き続いている……

『敵BETA群、メインゲートより侵入、

総員戦闘態勢整えよ！

繰り返す敵BETA群、メインゲートより侵入、総員戦闘態勢整えよ！』

メインゲートを突破してきた個体が居たため、拠点内部にアナウンスが流れる。

各防衛地点に配置ついていた烈火、ターミネーターが戦闘配置に備える。

『いい？せつかく助かった命なんだ…

こんなところで死ぬマヌケな馬鹿は、

地獄の底まで追いかけてくよ？』

『隊長がいうと冗談じゃ済まされませんね』 やんちゃんちゃ

『私たちは何？』

『泣く子も黙る桜井中隊！』

『烈火はなに？』

『我等のウォードレスであり、最強の盾であり剣』

『敵が目の前に』

『撲殺！撲殺！撲殺！』

『目の前にー』

『撲殺！撲殺！撲殺！』

『我等の戦果を示せ！』

『ウオウ！』

『各員戦闘配備！！』

烈火各体が戦闘準備を整えた…

烈火が布陣している通路は幅4m、高さ4m、  
烈火が通路を通せんぼしている形だ…

その通路の先には、メイン通路の中空ブリッジに繋がっていて、  
そこを銃火に曝されながら要撃級や光線級、戦車級等が進軍してい  
る。

その通路からガトリングマシンガンを、要塞級も通れる通路にばら  
まいていると、

戦車級や兵士級等が襲い掛かろうときたので、  
ハンマーパンチで吹き飛ばしたり、  
脳髄を貫いてぶちかましたりした。

2、3匹が登ってきた時は余裕で対応できるが、それ以上登ってく  
ると、

烈火は通路に引っ込むと…正対するのは、人用通路では1匹、2匹  
程度になる。

かじり付かれようと小型種2匹程度や戦車級程度、烈火の敵ではな  
い。

落ちていて頭を握り潰して無力化し、その死骸を放り投げる。  
ハンマーパンチが唸り潰す。

潰しに潰していると…BETAの死骸で通路が塞がってしまった。

塞がると仲間の死骸を越える事もなく、  
これ以上押し寄せてこなくなる為、



その間にガトリングの弾装を整える。

体液まみれの第二右腕でボタンおすと…

ぽっかり穴があき死骸が通路地下に落下する。

また嫌がらせの為に烈火は通路からガトリングばらまくべく前にすすんでいった。

メイン通路をすすむBETA群は次々と仲間の死骸をよけながら、長い長い道程をいく…

横道のある箇所は封鎖され戦車級が掘るべく取り付いているが、セラミック製の充填素材の为中々進まない…

後ろからどんどん押しってくるから、開いている通路にすすむ…

すると自動機銃が前方や天井から弾を吐き出してきて、

次々とBETAの死骸が生まれる。

その災害元を無力化すべく突進し、死骸が生まれながらも無力化する…

のデスロードを20km近く続いている…

本来であれば5km位で反応炉に到達するが、

横道という横道が充填封鎖され、その道程しか移動できない…

ショートカットが人用通路だけ、となっていた。

ある程度戦ったウォードレス兵は、  
人用通路封鎖の任務も言い渡された。

弾がきれるか、時間経過で通路の隔壁扉を下ろす。

降ろされた隔壁内部にベークライトが注入される。

これによりメイン通路からは入れなくなり、  
ウォードレス兵は集合地点へと撤退してく…

カオルはチューリップを使い、

敦煌防衛拠点の地下深く…

反応炉手前の広間にて烈火を着込んで、  
中型チューリップを管理していた。

人用小型通路は撤退がうまくいっており、

通路充填閉鎖が次々とすすみ、

人員が欠員なく撤退してきて、残り僅かとなっている。

撤退してきた人員は多目的輸送艇にのり、小型チューリップを潜っ  
てく…

要撃級が見えてきた。こちらに向かって…次々とメイン通路に鎮座  
した中型チューリップを潜ってく…

チューリップの転移先は…

地球衛星軌道上に中型チューリップが、  
その開口部を地球に向けたのだよっていた。

開口部から次々と凍りついたBETAが出てきて、  
その凍りの塊はほおりだされた勢いのまま、地球へとすすむ。

やがて重力に捕われた塊は、その身を地球の大気圏へと突入する。

摩擦と圧縮熱により凍りが溶けたBETAはその身も赤くそまり…  
やがて熱に耐え切れなくなりその身を分解させる…

生身ではBETAは大気圏突入できなかった為、  
チューリップ潜ったのは次々とその身を重力の井戸にやかれた。

カオルは、通路いっぱい広がっている中型チューリップの、脇を  
通りぬける小型種を、  
次々と両手を变化させた光の槍で、串刺しにして殲滅していった。

やがて、  
『ターミネーター、ウォードレス兵、ボン太君、全員撤退完了しま  
した。』

欠員0、充填封鎖100%です』

「わかりました…こちらでも撤収します。先にいって下さい」

『お気をつけて』

カオルは中型チューリップを虚数空間にしまい…  
途端に襲い掛かってくるBETA群から避けるように、  
後方へと下がる。

封鎖ドアが見えたのでハンマーパンチでうちぬき、  
ドアを退かし通路内部へとはいった。

途中小型チューリップと多目的挺を虚数空間に回収し、ある区画へ  
歩みをすすめる。

その区画は地下にある自爆装置サイクロプスの起爆を司る独立区画…

その手前のシエルタードア部分でウオードレスを着脱し、生体筋肉  
も外しはじめた。

虚数空間へとしまい込むと…

カオルを追ってきた兵士級が追いついてきたので、光の槍でつらぬ  
く…

そして、後方にあるシエルタードアに同化し、  
戦場から離脱し通路内部に実態化した。

シエルタードアをガンガンたたき付ける音がするが、

2 mの厚みがあるドアはそうそう破けるものではない…

通路のおくにいき、部屋内部に入り、プラスチックケースを叩きわり赤いボタンを押す…

『自爆シーケンス開始します。』

基地要員は20分以内に待避して下さい』

この自爆システムは、地下のサイクロプス始動の為の制御室であり、一旦始動してしまうと地下深く潜り、サイクロプス脇の制御室で停止しなくてはならない…

そこまでの通路も充填封鎖済みである…

カオルは更に奥に進むと…カプセルがあり、その座席に座る。

青いボタンを押すとカプセルがしまり…

『脱出用リニアカタパルト射出します』

座席がゲル化しG吸収体型になる…

『カウント5、4、3、2、1』

ハイヴ射出体放出穴あとに作られた脱出装置。

直径1.5 mの周囲は封鎖用のコンクリートで固められてた。

その穴を急加速し天高く打ち出される。

向かう先は加速誘導用静止衛星カプセルキャッチャー…

脱出カプセルがカプセルキャッチャーの膜に包まれると、  
Gが加わり加速する。

次なる衛星が臨時避難ステーションになる。

同時刻敦煌防衛拠点…

地下深く潜ったBETA群は反応炉に到達、  
反応炉からだされるエネルギーをもらい腹を満たしていた。

そこでBETAを洗脳する者がいる重大情報をつけとり、  
通信が遮断されあ号に届けなければならぬ個体がでてきた。  
彼は地上を目指し逆流していた迂回に迂回させられた40kmの道  
程を…

『警告、サイクロプス始動まで残り1分』

災害の音がする…仲間がその音の方向へたかつてた…

『サイクロプス始動まで10、9、8、7、6、5、4、3、2、  
1、サイクロプス始動』

なにか身体が熱くなって…次の瞬間そのBETAは意識がなくなっ  
てた。

通路という通路でBETAが次々と爆ぜてく…  
反応炉もエネルギー供給できずに爆ぜて通路は真っ暗になっていた。  
地上でも赤いカーテンは広がり、  
敦煌の反応炉を楽しみにしていたBETAが、次々と爆ぜる。

まだ到着してない群の列にいたBETAは赤いカーテンをかんじ危険と判断、  
停止転回後進と提案する。

列は転回後進するが巻き込まれてく…  
その赤いカーテンが途中でとまり…

地下から振動がおこり…土砂を巻き上げ、  
盛大な大規模爆発がおきる。

かなりのBETAを巻き込み…

この日、異世界軍から敦煌防衛拠点の名称が消えた。

…

カオル報告

敦煌防衛拠点サイクロプス始動により自爆です

ナギ少尉「敦煌防衛拠点消滅しましたよね」

作者「シナリオ通りだ…問題ない」

ナギ少尉「…なに碇司令やってるんですか」

作者「やりたかっただけさ」

ナギ少尉「ところで母艦級でてこないですね」

3351

作者「撤退スピードに追いついてないからね。ほら今までは絶対防衛戦じゃない？」

だから地下進行が嫌なタイミングで出てきちゃうんだよ」

ナギ少尉「そうですね」

作者「基本、突撃級のを遅滞させての撤退戦だったから、地下進行も間に合わない…ってかんじさ…」

そりゃ100kmの速度ではほれんし、精々40から50km位でしよ…」



詳しいスピードもメカでなかったしさ…

まあ一応嫌なタイミングっつうから中衛より若干遅めで考えてます」

ナギ少尉「となると長い戦域が…中々出す事なく…」

作者「今回の自爆で巻き込まれた可能性大と…」

ナギ少尉「…なる程ね…あと一つ、これで終わりではないの？」

作者「10%でも150万、20%でも300万、30%でも450万の7桁台の大規模侵攻中、1500万時に列は300kmに伸びていたから、全部は消滅しないよ」

ナギ少尉「わかりました。

さて次回は…大規模侵攻編、敦煌自爆後残存BETA数は??…お楽しみにい」

作者（カオル重慶護りきれるかな？）

第176話 大規模侵攻編 敦煌爆発後 投稿日20110914(前書き)

く休載のお知らせ

明日9月15日から毎年恒例の東京ゲームショウの為、  
しばらく執筆投稿ができません。

ゲームショウ開催期間は18日ですが、  
一応一週間ほど22日まで、23日から再投稿をします。

ただし早まるかもしれませんが…  
開催期間中は絶対ないと思って下さい。

第176話 大規模侵攻編 敦煌爆発後 投稿日20110914

2002年1月11日午後11時25分

横浜基地異世界軍エリア司令室

「おお…」

「敦煌が…」

「たまやー」

「サイクロプス最高」

敦煌のあった箇所には盛大なキノコ雲が舞い上がり…跡形もなくなっている。

それはそうだろう…フェイズ5ハイヴとして、地下至るところに張り巡らされた横道、

それらも爆発の勢いに生じ仕込まれた火薬ごと吹っ飛んでしまったからだ…

その地下がまるごと吹っ飛び、盛大な土砂が空中に舞い上がる。

「BETA群の残存でたか？」

「もう少々お待ち下さい…でした。BETA大規模侵攻群約27%421万まで消失です」

「かなりへりましたな」

敦煌防衛拠点にそなえつけられたC I W Sが作動する前には、1100万をまだ越えてた。

それがやっと420万、この敦煌防衛拠点の防衛戦及び自爆で700万近くをもつていくことができたのだ。

「敵BETA群に混乱がみられますが、引き続き砲撃を加えます」

食事にいこうとしていた反応炉がいきなり消失したのだ…

命令は敦煌にて食事後重慶へというのだったろう…

混乱している残存BETA群にモンスター改が引き続き砲撃をくわえてた。

敦煌元ハイヴごとの自爆と引き換えに700万のBETA…

自爆無しでももう少し頑張れたのでは？の考えもあるだろう。

…いや限界にちかかった。

まずBETAホイホイに使っていた中型チューリップ自体のエネルギーが1/4まで低下、

またチューリップ脇からの小型級を、全部削除できずに何十匹か後逸していた。

敦煌再ハイヴ化はあの兵力だと時間の問題であり、避けられなかった…

ハイヴ化すると、また攻略に時間かかる…

再ハイヴ化だけは絶対に阻止すべき問題だった…

「カオル殿は……」

「まもなくステーション到着です」

「この後の設置サイクロプスは…」

「1250km、1000km、750km地点の3箇所です」

「なんとか重慶までに200万台にもってけそうですね…」

「それでも絶対防衛戦には膨大な戦力が相対すると…  
早く勇者ロボやエヴァが稼動しなければ…ですな」

「最終防衛地点が重慶基地…ここは譲れませんのう…」

重慶は地下にサイクロプスは仕掛けられてない、防衛ライン上の死  
守基地の一つであった…

Side～あ号～

(敦煌……消滅……)

敦煌からの信号が途絶えた。

信号の最後は、地下より高エネルギー反応の警告が流れてた。

自身を溶かしつくす高エネルギー反応…あるだろう。

よって敦煌消滅と判断した。

(敦煌…跡地に…コア…精製)

あ号はハイヴの元となるコアの精製にかかった。

これを運ばせて孵化すればハイヴの反応炉が生まれる。

あとは自身の子達がうまくやってくれるだろう…

そう確信していた。

side～あ号code～

「敵BETA群、再移動開始しました…進行方向重慶変わらず!!」

「……もう少し混乱してくれれば嬉しかったですのう…」

「ですな」

モンスター改が撤退設定エリアに踏み込まれたので、ビックトレー砲艦型と変わり撤退準備をし始めた。

敦煌が消滅してから2時間後、

敦煌跡地に漂ってる感じだったBETA群は、残存が纏まり再び移動し始めた。

混乱のままだったら300万台にいったかもしれなかった…

BETA群の移動速度は、全体的として、後衛の通常時速30km程で進む…

戦闘機動をおこなっても40kmに及ぶかどうかだ…

要塞級はそのかわり俊敏な触手もち攻撃をする。

重光線級は、光線の威力をもつ…

大砲級は…弾級を打ち出す能力だろう…

大砲級が弾級を撃ちだし初め、ビクトレー砲艦型に帯同してた、ビクトレー対空ミサイル艦が迎撃し始めた頃…

「マスターお帰り〜」

「お疲れ様〜」

衛星軌道上のステーションからカオルがチューリップ経由で戻ってきた。

ある程度の進行は脱出力プセル内部で聞いていた。

「にしても敦煌一つと引き換えに700万近くか…案外けずれなかつたな…」

「けずれたほうでしょ」

「そもそも1500万近くをどうにかするのが、想定外なんだから…きいてませんの話だよお」

「今までの史上最高なんだしい」



「…聞いてません。知りませんでしたじやすまいよ…  
BETA群の侵攻は人の命にかかわる話だしさ…  
幸いまだ重慶周辺も無人地帯だから良いもの…  
まあともかく早くエヴァ仕上げないと、重慶基地まで失うはめにな  
るかもな…」

「エヴァってそんなにすごいのか？」

「走れば音速越すし、護ればATフィールドだしな」

「あ、拘束具着用したよ」

「…なら、明日には起動でなんとか間に合いそうだな…」

そして、約20時間後…

敦煌 - 重慶間にしかけられた1000km地点、2箇所目のサイク  
ロプスが作動した頃…

重慶防衛に間に合わすべく、  
エヴァの最終稼動テストが行われる。

「カオル君、話聞いたんだけど、

「このエヴァってパイロット誰でもいいの？」

「ミサトさん？…ええ、汎用決戦兵器を目標してますから…名の通りだね…」

ミサトさんと赤木博士がきた。

「ならわたしに乗らせてちょうだい」

「ミサト？」

「わたしが操縦するわ」

「わかりました。良いですよ」

「カオル君？」

まさか即答するとは思わなかったろう…

赤木博士が本気なの？なかんじで問い掛けてきた。

「ありがとう…」

「ミサト、正気？…ああ、本気なのね…」

「ええ、リツコ…これは譲れないわ」

「カオル君、絶対に事故はないのね？魂をすわれないのね？」

「理論上は…ですね。一応同化して監視はしていますが…」

「ミサト、やめるなら今のいちよ」

「いいえ、やらさせて頂戴」

「…ふう…カオル君、ミサトの事よろしくね」

「はい」

「じゃあプラグスーツおきがえですね」

「ロッカールームにご案内します」

「ミサトさんがロッカールームへと案内されてく…」

side～葛城ミサト～

(過去にできなかった事が、こんな形で実現するとはね…)

まだエヴァンゲリオンのパイロットが公式に選定されてない時期に、  
(私自身の手で父の敵をとる)と意気込んでゲヒルン入所時期に、  
パイロット適性検査を受けた事があった…

しかしものの見事に不適合、自身の手で敵をとれなくなったミサト  
は、  
自身の指揮で使徒を倒す道を目指した…

けど…今は彼女の見事な裸体の上にプラグスーツが着用された。  
ミサトの左手のスイッチを押す。

キスマークがついていたのは置いてこう。

プラグスーツがミサトの身体にフィットした。

準備が整いロッカーを閉め、最終除菌室へ歩みを進め、  
エントリープラグのエントリー室へと歩みを進める。

エヴァに乗るには1番の問題が感染症の問題がある。

普段肺の奥深く、血管内に侵入しない空気中にある雑菌がLCLに  
溶け込み、  
パイロットに感染するからだ…

いくら医療カプセルで治せるといってもわざわざ入る原因を作る事もなからう。

のため、エヴァのエントリー手続き通りの形を、専用ハンガーと共に整えてた。

まずはエアシャワーを潜って、脱衣室で衣服を脱ぐ。

併設されたシャワーブースで雑菌を落とし、向かい側の出口からエアシャワーを潜り、

10cmほどの消毒液の廊下を消毒液のシャワーを浴びながら進み、その廊下の最後で純水シャワーを浴びる。

二重扉をぬけエアシャワーを浴びながら着衣室にはいると、気圧を高めに設定しており、外気の侵入を防いでた。

パスボックスの扉からビニールパックされたプラグスーツを受け取り、初めてここできれる。

その後、5メートルの通路で紫外線とLCLを浴びさせて、エントリー室にはいる。

壁に設置されたパネルを操作すると、

床の格納庫にエントリープラグがあった。

という流れであった。

さてミサトは、エントリープラグ内に潜りこみ、シートに座りこむ。

(あら?)

緊張してて気がついてなかったがレバーがない。

「レバーがないけど？」

『直接制御になりますので、レバーはありませんよ』

エントリープラグに同化しているカオルが答えてくれた。

まわりから反響している感じだった…

「直接制御？」

『ええ、完全に手足となるんですよ』

「手足となる…」

『はい。そのかわり自分の身体ががら空きになるので、エントリープラグ内で固定する形にはなりますけどね』

「体験しないとわからないものね…いいわコンタクトして頂戴」

『シート固定…エントリープラグ挿入』

シート裏から身体固定用のバーが出てきて、身体を固定する。

一回転してエントリープラグはコネクタに挿入された。

『LCL注入開始』

エントリープラグ内部にLCLが注水されてく。

しつても…

(良い感じはしないわね)

血の味は慣れなきゃしょうがない…

『それではコンタクト入ります。準備はよろしいですね?』

うなづくミサト…

『コンタ…』

途端に視界がぐらぐらになり…明るくなる…

『ミサトさん…如何ですか?』

「これが直接制御?」

エヴァの口からはっせられる。

『ああ、思考するだけで大丈夫ですよ』

( 1111? )

『ええ……良好のようですね、足は固定されていますが、頭と手は軽く動かせると思います』

右手、左手を下から掬い上げるようにゆっくりと…

( エヴァの手ね… )

そしてゆっくり回りを見渡し…

( 大きさが変わると視点がかなり違うのね… )

『では、稼動テストいきましょう。足のロックを外します』

コバッタ達が足の固定具を作動させ、外してくれた。

『ではこの指示通りに…』

HMDのように視界上にマーカーが浮かび上がる…

( これは? )

『網膜投射システムを流用してます』

( 網膜投射か…なんでもありなのね )



戦艦ハッチからエレベーターが上昇し、地上に80mに及ぶ巨人、エヴァンゲリオンが出現す…

Side 葛城ミサトend

さて…その後エヴァの稼動テスト中になるが、  
とうとう最後のサイクロプス、750km地点のが作動する…

この後の地点には、サイクロプスは設置されてない…

残り…

「残存でした、約300万!!」

重慶までいかに減らすか…300万でこられたら間違いなく重慶は落ちるであろう…

…

カオル報告

エヴァ最終稼動テスト中



ナギ少尉「ミサトさんが…エヴァンゲリオンのパイロットに??」

作者「まあなるかもね…」

ナギ少尉「スーパーロボットの曰くつきを堂々と破壊してるわね…」

作者「ああ、チルドレンでない限り操縦不可…って事だろ？」

ナギ少尉「そこの一言一言」

作者「何故チルドレンか?になるんだが、  
まずはエヴァと同じ歳…つつのがあるな」

ナギ少尉「えつと2015年で14才でしたよね？」

作者「そうそう…で、チルドレンは全員両親がいないか片親だけ…」

ナギ少尉「セカンドインパクト以後の混乱した時期でしょ？」

作者「2 - A組全員がチルドレン候補者だぞ」

ナギ少尉「あつ……………」

作者「全員、母親なり、父親なりを喰われた為、チルドレン候補者になったんだよ」

ナギ少尉「……………意図的に……………」

作者「そうそう、で親の保護欲、んゝまあ親に訴えてエヴァを操る、間接神経接続という操縦方法になったと…  
唯一の例外が使徒でもあるレイだね」

ナギ少尉「なるほど…」

作者「ま、そういう事です。まあ今回のエヴァは作り物、紛い物なので、  
エヴァを動かす魂がないから、喰われない、また勝手に動かない…  
から直接操縦って事です。擬体のように」

ナギ少尉「…さて…あとはサイクロプスがしかけられてない状態で、  
残り300万だけど…勝てるの？」

作者「さあ？…まあ後2回程で重慶に到着しますので…お楽しみに」

ナギ少尉「次回、大規模侵攻編、重慶まで700km、お楽しみに」

第177話 大規模侵攻編 重慶基地手前700km (前書き)

台風直撃しそうですね…

お待たせしました。再開します

第177話 大規模侵攻編 重慶基地手前700km

残り300万、  
いかにサイクロプス頼らず減らすかが、ここからの戦いになる。

残る重慶まで…あと700km…

繰り返される、砲艦型及びモンスター改の砲撃が交互にくりかえされ  
続々と敵BETA群の数は減っていくが、このままだと削減スピ  
ドが、重慶基地到達時点でも、  
100万をうわまわっている予想がたてられていた。

(なんてものを、このエヴァンゲリオンの世界の人は作ったのよ…)

報告香月副司令は新兵器エヴァンゲリオンに関しての報告書を手に  
持っていた。

彼女はいかに異世界軍の技術のフィードバックできるか…の、  
研究も着手しはじめた。

何しろわからないでは研究者的に気持ち悪い…

高さ80m…

(ふざけんじゃないわよ…重力制御かなにかやってるの?)

エヴァに関しては正解です…、

基本その位の高さになると、

その自重を支える力及び、土台が必要となる。

MSや戦術機が80mサイズになって、自重が4倍ってわけですまないし、

特にその自重を支える下半身が重要となってくる。

またその自重を支える大地…

1000tが一気に二カ所にかかるわけである。

100t未満クラスのMSで、道路埋設の地下施設をぶち抜くだの、ギヤーギヤー騒いでいるのに…

ましてや…その爆発的な力は…

(走れば音速突破の衝撃波で建物を薙ぎ倒す…  
ふざけんじやないわよ…どんだけの脚力よ)

今カーペンターズが復旧作業に従事してるが、  
衝撃波で市街地演習場が半壊してしまった。

ソニックブームは音速突破時、ちょうどマッハ1越えた時に起こる  
衝撃波、

それを脚力だけの力で起こす。

桁外れのパワーを内臓している証拠でもある。



で…だ先ほどの自重1000tのパワーで、脚力が音速こえる力で大地に踏み込むと…

瞬間加重がどれくらいものになる…

を軽減してるのが重力制御であった。またATフィールド事も報告書にはあがってきてた…

（唯一の救いってのが、カオル付き添いでないと国家予算超える話…だね…  
勝てる要素がみつきりやしないわ…）

「はあ…はあ…」

5時間に及ぶ連続稼働後ハンガーに戻ってきたエヴァンゲリオン。

エントリープラグ内から、動けなくなっているミサトをコバツタ達が助けだし、ベンチに寝かしつけた。

直接制御の反動で、自分の肉体の神経同調がまだ戻らないのだ…  
麻痺していると同様といえよう…

数分なら肉体がまだ動いてる感触を覚えているから、問題ない…筈…  
が、長時間にわたり動いていない状態により、  
精神が元の肉体の動かし方を忘れてしまったのだ。

寝ている時にも人間の筋肉は常日頃動いている。夢見の中でも同様だ。

だが、精神もその肉体をはなれた為に自動的に動く、不随意筋肉以外がうまくはたらかないのだった。

「ミサトさん、まだお加減わるいようですね？」

「こ……な……は……うきい……な……わよ」

「こんな反動きいてないわよ？ですか？……確かにここまでは……思っ  
つてなかったですね……」

時間が経てば治りますが、アルミサエル」

精神に潜りこみ離れている箇所を繋げなおす。

「どっつすか？」

「……えびちゅ飲みたいわね」

「一声がそれですか……」

「おかずなのよ」

「…まあ、あとで提供しますよ。」

さて、これで初号機はミサトさん専用機になりましたね」

「私専用？」

「はい、パーソナルデータ等がコアに書き込まれるので…」

「そついえは何故間接制御じゃないの？」

「あのエヴァは魂やAIがないから、間接制御では無理なんですよ…魂がある元のままなら反対に取り込まれる危険があるので…  
のかわりにパイロットが、  
エヴァ自身になり、その肉体を使う…という事になります」

「けど痛みとかあんまり感じなかったわね？」

「その部分は20%に抑えています。また、肉体へのフィードバックは極力カットしてますから、  
例え左腕がもがれたとしても、  
同様な事がミサトさん自身の身体にはおきませんからご安心を」

「あれはね…正直どうにかならないの？…  
ってちょっとおもってたけどね」

けどシンクロ率がそのまま操縦につながったし…  
あと、正直慣れるまで動かすの疲れるわね…」

「厳密には人間の身体比と違いますしね…」

さすがに人間の身体をそのままでつかくした…というわけではない。  
というかその状態だと足が潰れる。

なので足の筋肉などのも大分違う…

その人間と違う箇所は慣れてもらうしかない。

「さて、ミサトさん…明日にでも出撃、BETAを迎えうちますが、  
できそうですか？

できなそうなら自分が操りますが…」

「いきなり戦場にだされた民間人だったシンジ君にできて、  
軍人の私にできないっていうのもね…いくわ」

「わかりました。明日重慶基地周辺区域にて、防衛戦となります。  
今から12時間後、空輸となりますので休んでいて下さい」

ミサトさんはLCLを流すべくシャワールームへと向かう。

現在、BETA群の進行速度が後衛中心になってきたため、  
時速30kmあたり、つまり20時間は余裕がある…

その間にある出来事が…

「究極新型生物兵器？」

「帝国軍技術開発局がだしてきたんだけど…  
実証実験に付き合ってくれてきたよ  
対BETAへの究極兵器だって」

(ふむ…ちつと時間あるしな…)

「わかった…生物兵器か…確か実験区画があつたよな？NBC用の」

「うん」

3時間後…トラックのコンテナがNBC兵器実験区画に搬入された。

「それでは、我が新しい対BETA兵器、G兵器のお披露目です！  
！」

(G兵器?)

コンテナのロックボルトが爆薬により外された。前面の一角が重力に引かれて地面に落ちる。

その中から現れたのが大量の黒いゴキブリだった。

「ゴキブリ…」

「はい！！対BETA用に新たに開発された生物兵器、通称、G兵器です」

コンテナから大量に…数は一万はくだらないだろう…はい出てくる。

ゴキブリは一斉にBETAに接近すると、足元からたかりはじめ、数にものをいわせBETAの全身をおおい始めた。

兵士級は抵抗してた。闘士級も抵抗した。戦車級も抵抗した。

しかし小型種は人間サイズにならともかく、ゴキブリのような小さいサイズに対抗する手段がなかった。

光線級はレーザーをだし焼いたがすぐさまたかられた。

要撃級はその両腕を使い抵抗してたが、うまく機能せずたかられた。

突撃級は抵抗できずたかられた。

要塞級は触手ではらっていたもののたかられた。

「たかるだけなの？」

「本領はここからです」

身体にまといついたゴキブリは、その身を肉体の中に入り込んだ。

「うわぁ……」

BETAの肉体から体液が出るが構わずにその肉を食べどんどん中へと突き進む。

やがて兵士級や闘士級は耐え切れず横に倒れてしまった。

カオルは思わず自分の肉体に入り込む姿を想像してしまった。

戦車級も暴れてたが、やがて勢いをなくし始める。

光線級も横たわった。

倒れ絶命した兵士級はその肉片がG兵器により、最後の一欠けらが喰われてしまう…

突撃級は甲羅と肉体の間がどんどん喰われて、甲羅が重力に支えきれずにすり落ちはじめた。

要塞級はさすがにまだ動きは鈍ってはない。

「マスターあれ」

「ん？……分裂？」

「くつて栄養が行き渡った為、個体数が増加します。じきに要塞級も喰われますよ」

その発言通り、分裂増殖したG兵器は、増えた個体数分だけ要塞級にたかり始める。

やがて、最後まで抵抗してた要塞級が、足をくわれ、体重をささえきる事ができずに、その身を横たえてしまった。

それにご馳走とばかりたかるG兵器…

「確かに、究極の生物兵器ですね…」

「でしょでしょ？どうです？我が軍の兵器は」



「いいですね…ではコンテナに収納して」

「あ、できません」

「は？」

「コンテナ収納することができません。  
あれはコンテナ内部で培養してたので…」

「えっと…展開したGは？」

「BETAを食べば、また分裂し増えますよ」

「いや…人間も…」

「迂闊に近づくとくわれますね」

「……破棄します、焼却準備!!」

「あ、焼却しようとしても」

「焼却開始!!」

実験室内部が800度の高温の炎に包まれる。

生物兵器や、ウイルス系統等の焼却処分手続きで室内が1分間炎が吹き荒れた。

『焼却終了』

無慈悲な電子音とともに炎が消える……が……

「G兵器は高温にびくともしません」

動きまくって、要塞級の栄養で分裂し始めていた……

「あ……まじかよ……あの高温たえきる生物って……なら冷却処分!  
!」

ウイルス等冷却処分で氷点下マイナス200度に達する、冷却ガスが室内に吹き付けられる。

「あ、閣下、冷却もたえきりますので……」

「は……?」

『冷却ガス散布終了』

言葉通り電子音がながれたあとも室内ではG兵器が、うごめいてい

た。

「ちよっ…なんてもの作るんですか…」

「いかがです？閣下」

「真空ももちろんたえき…」

「宇宙活動も考慮されてます」

「どう殺すんですか？あれを」

「物理的にしかありませんね」

「……………」

監視カメラの視点を動かすと…確かにレーザーに焼かれて死んだG  
や、

兵士級の足に潰されたのもいる。

「物理的か…：…：…ならしょうがない…：…ベークライト注入」

実験施設にベークライトが注入され、次第にかたまっていく…

セラミック状に固まったり、G兵器の動きがなくなる。

流石にこの集団の中に物理的に殺す事のできる兵器を投入するのに、開口する事になる……

つまり一匹が逃げると……大災害が予想される為……

「破棄するはめになるなんて……そもそもどうするつもりだったんですか？」

BETA駆逐した後……」

「BETAを駆逐した後餓死させるつもりです」

「餓死するのに……」

「約1月程度です」

「……人のいる地球じゃ使えませんね……資料だけ頂きます。破棄される事をお勧めしますよ」

「そうですか……」

(けどなあ…ん…)

ほぼ同時刻頃、木星攻略艦隊が帰還し、その身をメンテナンス及び推進材補充しはじめた。

イオのオリジナルハイヴの反応炉はコロニーレーザーにより貫ぬき、貫通したレーザーは大地をとかし、火山造成を誘発し、マグマに埋まった…

現在木星の衛星は監視体制になり、艦隊は推進材補給の為に帰還してきた。

つぎなる惑星、土星の攻略までしばらく時間がある。

『野郎ども、パーティーに遅れるぞ!!』

V F - 2 2 F を先頭とする V F - 1 7 1 編隊が地球へと飛び立っていった。

またほぼ同時刻頃…

「出来上がったか…」

「いいな隊長：俺なんかまだだぜ」

「隊長、ついてくもんね」

「ああ…人類を護るため、今一度力を貸してくれ、みんな！！」

翌日…

ようやく防衛戦に投入の目処がたった、兵器の積み込みがされている。

ガルダにつまれてくのはエヴァ初号機…

重慶 - 横浜間は中型チューリップによる移動が可能だが、MSノーマルサイズまでと限定されている。

そこで白羽の矢がたったのがペイロード約1万tの巨大輸送機、ガルダ。

他の輸送機では標準自重1000tのエヴァは積めないか、またはぎりぎりの為、

エントリー室一式を改造して積みこみ、

ガルダはエヴァ専用運用艦となり、

その巨体で3機まで運用可能な船となった。

『横浜ベース、こちらガルダ01、積み込み終了し離陸準備完了』

『横浜ベース了解、10Wでの離陸許可します、滑走路クリア進入  
どうぞ』

『10W進入了解』

ガルダの巨体が滑走路に進入してき…

その大出力を誇る熱ジェットエンジンにより、空中に舞い上がった。

……

カオル報告

いよいよ重慶基地にエヴァが投入されます

第177話 大規模侵攻編 重慶基地手前700km（後書き）

作者「いよいよ…世界の運命がきまるね…」

ナギ少尉「100万くらいなんか、ちゃっちやと消しなさいよ」

作者「あの…さ100万だよ？100万…そうちゃっちやと消えな  
いさ…」

ナギ少尉「え」

作者「前もかいたと思うが、今までの10万単位でさえ異常なんだ  
よ…  
それを受け止める身にもなりなよ」

ナギ少尉「う」

作者「まあ、でもここまで引張ってきた大規模侵攻編も、  
次回で重慶は決着…といいたいけど…」

ナギ少尉「執筆が間に合うか？ね」



作者「……………とりあえず間に合わします」

ナギ少尉「じゃ、サブタイトルは…大規模侵攻編、重慶基地決戦決着へ…ね」

作者「まあ…ね、間に合ったようだし…」

ナギ少尉「次回、お楽しみにいい」

第178話 大規模侵攻編 重慶基地まであと220km

2001年1月14日午前9時

重慶基地より220km地点…

朝日を浴びながら地平線より、盛大な砂煙をあげBETAの異様な姿があらわれてきた。

時速約30kmながらも、その列は80kmの幅にも及ぶ…  
列の長さは40km…

総数約200万のBETA群は重慶を目指していた。

対するは異世界軍は布陣を整え待ち構えていたが、  
長い戦闘行動のおかげで要整備等に陥る機体もでてきた。

パンジャンドラムは既に使いきり、モンスター改も要整備と殆どの機体が降格した。

無限弾薬装填装置の恩恵で降格を免れたビッグトレー砲艦型とは違  
った。

大日本帝国軍、大東亜連合軍、統一中華連合も援軍として駆け付け  
てきた。

特に61式戦車改はありがたい…

共通規格の砲弾ならたんまりと山積みとなっている。

後詰めの形で戦線を整えてもらう事としてもらった。

「繰り返す、我々のターゲットは光線級、重光線級、大砲級だ！それ以外は第二以降にまかせろ」

中継基地に補給拠点を置いたバルキリー編隊は、マイクロミサイルによる光線級、重光線級、大砲級への打撃任務へと着いていた。

『隊長！！』

「野郎ども、見えたぞ！女神の髪の毛の中に飛び込め！各機、レーダーで間隔確認をおこたるなよ」

煙幕の中に突入したVF-171編隊とゴースト編隊、

煙幕により光線級のレーザーが届かず、250kmの道程を護られた。

厚く展開された煙幕、その中を突き進むVF-171及びゴースト、ものの10分程で、

「各機、宅配の時間だ、闇の中からだ、配達先ミスるなよ…さあパ―ティーだ！！」

その声とともにVF-171編隊及び追従ゴースト編隊より、大量のマイクロミサイルが一斉に打ち出された。

その数25万発…

ゴースト約2000機から大量にマイクロミサイル放たれた。

煙幕を抜け出したマイクロミサイル群が面でもってBETA群に襲い掛かる。

重光線級、光線級も迎撃の火線をあげるが、マイクロミサイルへの命中率が悪い。

敵対生物の正確な迎撃を考え、

ランダム機動で直進せずに機動行動しながら目標に接近していくマイクロミサイル。

Gをもともしない行動により…

幾千もの花が咲く…

数少なくなっている光線級及び重光線級が更に少なくなる。

「イーヤッホッ」

煙幕の中からゴースト及びバルキリーが踊りてきた。

光線級はバルキリーに正確に照射し撃墜しようとするが…

自動化されたピンポイントバリアでレーザーが防がれた。

そこに他機のガンポットが撃ち込まれ沈黙する。

ゴーストに照射しようとする光線級は有り得ない機動に翻弄され、うまく当てられない状態が続いていた。

20Gくらいの機動がかかっている、インターバルの時間にガンポットが撃ち込まれ沈められた。

そうゴーストは無人AI機である為、人の限界を超えた機動が可能であった……

また、たとえあたって帰還が不能になると、ゴーストはその身を暴走させて突っ込んで爆ぜてく……

『全部隊に告ぐ、200cm質量弾発射体制に入った。至急影響エリア圏外に離脱せよ』

『聞いたな！全機離脱だ！ピザをとりにかえるぞ！』

再び煙幕の中に突入するバルキリー及びゴースト編隊……

上空より200cm砲から発射された質量弾が大気圏外より迫ってくる。

side（白銀）

（発射の衝撃波すげえなあ…）

白銀の後方には天にむけそそり立つ200cm砲が、  
重慶基地に設置され射撃をはじめた。

発射時にはすでに音速を突破している為、空気をわる衝撃波が発生する。

その為最終防衛線にいる機体は、簡易遮蔽トーチカで衝撃波を受け止めていた。

そして…

『200cm質量弾着弾警告、総員衝撃波に注意せよ！！』

天から赤くなつた隕石が降ってくるのを網膜投射が映し出していた。

幾分かその隕石に光線が上がってるのか、煌めきがみえるが…

地面に着弾し、赤い空気の輪が出来上がり広がって…

ある意味隕石そのものとなる質量弾は巨大な衝撃をおこし、  
遠くはなれた白銀の機体にも、振動が届いていた。

(……100m級隕石が地上に落ちたら、こんなもんじゃすまないんだよな……)

擬似隕石だからこそ、戦術的につかえる状態であった……

地上に落下するには100mは必要であり、  
そうなってくると戦術で使えなくなってくる問題もある……

10発うちおえると……

『200cm砲射撃終了、解体作業へ移行。

ビッグトレー砲艦隊射撃位置へ』

待避していたビッグトレー砲艦隊が戦列を整え始めた。

これ以上近づいてくるのに200cm質量弾は被害が被るし、

また生き残りの光線級の良的になる為解体作業にはいった。

『ビッグトレー砲艦隊、主砲一斉射開始!……』

50隻にもなるビッグトレー砲艦型から主砲弾が放たれる。

(それでも物量まかせのBETAはくるんだらうな……)

Side～白銀end～

しばらく主砲斉射が続く…

『そろそろ見える頃だ。大丈夫、落ち着いて狙ってけよ』

「はい、師匠」『了解』\*多数

重慶基地の地上上層部にある狙撃台では、  
ロックオン率いる狙撃部隊達、

ザクスナイパーが、狙撃用レールガンを構えていた。

ザクスナイパーの外見をしているが、中身は魔改造済みの別物。  
狙撃のスペシャリストを目指して自重はしてなかった。

核融合炉の出力上昇やZ時代の構造は勿論の事、  
狙撃に特化した改造を施され、  
コクピットにはライフル型コントローラーが備えつけられていた。

そして、特筆すべきは狙撃用レールガン。  
有り余る大出力電力を利用した狙撃銃で、  
その射程は100km…実際は水平線あるから相応の高度をとる必要  
があるが、  
を水平弾道で射撃可能であり、

50mmブリッドを毎分120発発射可能、その貫通力は絶大なものである。



また取り回しのきかない長さの砲身だが、その長さにより熱がうまく逃げてき、たとえ連射しても冷却材を必要としてなかった。

長さの問題は解決しないものの、フワジャンすればするほど射線がのびるが…

光線級がいるこの世界ではフワジャンはできないだろう…

彼等ののっている狙撃台は、光線級対策をとっていた。

分厚い強化コンクリート製の遮断壁、

そこに窪んだ台座にレールガンの銃身の先が水平線を狙っていた。

また狙われた際に遮蔽シールドがでる至れり尽くせりの設計であった。

60km先のBETAの頭が見えはじめた…

『いいかぁ？小猫ちゃんを扱うように丁寧にならって、撃ち抜くんだぞ』

『はい！！』

(落ち着いて…みきを扱ってくれてるように構えて…撃つー！)

レールガンから弾が発射し…

見事、60 km程先の要塞級を貫いた。

貫かれた要塞級はスコープから見えなくなり、猫の目からの情報で沈黙を確認する。

その10分後あたりに、  
重慶上空3万mガルダが到達する…

残存光線級のレーザーがチマチマと照射されるが、ファンネルシールドにより防がれ、ガルダ本体には被害がとまわなかった。

『ミサト準備はいい?』

『何時でもいいわ』

『投下10秒前: 5、4、3、2、1、now』

ガコン

開かれたハッチからエヴァが押し出されるように投下される。

地上に向かい重力に引かれ自由落下し始めた…

戦場付近を高速で飛来する飛行機がいた。

凱が操縦するファントムガオー…が変形してガオファーになり…

side 異世界軍情報司令室

「凱よりファイナルフュージョン要請！」

「ファイナルフュージョン…！承認…！」

「了解、ファイナルフュージョン、プログラムドラァァァイ  
ブツ…！」

パキーン

プログラムがプラスチックケース叩き割られボタンがおされ起動する。

side 異世界軍情報司令室 end

「ファイナルフュージョン…！」

ナノマシンがガオファーを中心に竜巻のようなを形成する。  
本当に数すくない重光線級や光線級が脅威度をあげ、  
生体レーザーを撃ち込むが、ナノマシンの嵐で防がれる。

ガオーマシンが各所からナノマシンの嵐を突っ切って、  
変形しはじめる。

そして…

「ガオ ファイ ガー!!」

今ここに地球製勇者王が復活降臨する…

「ドリルニー!!!」

側にいた重光線級をおりざまにドリルでだまらした。

またはるか上空から降下してきたエヴァがパラシュート無しに、ATフィールドで軽減させ着地する。

その勢いのまま、背中に背負った鉄こん棒をつかみ、その80mの長さを地面にふりぬきたたき付ける。

持ち上げると、100匹以上の小型級が潰れていた…

今ここに2大のスーパーロボットが…

「私たちがわすれては」

「困ります!!!」

遠くから風龍、雷龍が小型級をけちらし走ってきた…

「シンメトリカルドッキング!!!」

二体のビーグルロボが合体し…

「撃龍神！」

ここに復活し、3大スーパーロボットがこの戦線で無双となる。

なにしろエヴァは80m、要塞級と同等の大きさをほこり、

今も要塞級の触手をATフィールドで防ぎ、反対に触手をつかみひきちぎった。

そして、鉄こん棒をうちつけ両断する。

BETAが、その後ろのラインに行くには、避けていくしかない状態となり、  
もともと減っていた個体数が更に激減する。

『大規模地下侵攻群発見!!! 地下約3km地点』

BETAの切り札の一つ、地下侵攻が引っ掛かった。

『デイバイディングドライバー射出せよ!!』

『了解!!デイバイディングドライバー射出!!』

後方待機していたガルダ2番艦からデイバイディングドライバーと調整されたカートリッジが射出された。

「よっしやーああああ!!」

ガオファイガーの両腕部に装着され…

『凱、座標送るわ!!』

「かなりピンポイントで難しいな…」

デイバイディングドライバーの湾曲部が、地下に向かって調整されるが、

調度そのタイミングでないと、トンネルや母艦級に作用せずに押し退ける形になってしまうのだ。

『もっそろそろ…今よ!!』

「いつけえええー、デイバイディングドライバーああああ!!」

地面に撃ち込まれたデイバイディング・コアが作用し始めた。

レプリシオンフィールドが周りの土を押し退ける。

調整された力は地下にむけ延ばされ、地下侵攻中だった母艦級を巻き込んだ。

地下深く約5kmの地点まで到達したレプリシオンフィールドは横にひろがり、円筒形のフィールドを湾曲拡大させる…

するとデイバイディングフィールド内にはいきなり大気中にほつぱりだされ、とまどっている母艦級が…

『凱!!』

「よっしやーああ…ふんっ!!」

ガイファイガーが母艦級をつかみ…

「どおりやああああ」

大出力にものをいわせ巨大な母艦級を抱き上げ空中に飛び上がった。

声がでたなら、「離せ」か「キシャー」だろう。

母艦級は暴れるが、押さえ付け地上から高度をとるガオファイガー。

「はあああああつ」

母艦級を空中に放り出すと…構え、

「ブロウクンマグナアムウ!!」

ガオファイガーの右腕が回転をもって飛び出し……見事に母艦級を貫いた…

『凱、あと5つよ』

「了解!!」

散々に減らされつつBETA群は前進する…

待ち受けるは陸戦強襲型ガンタンク、61式改、戦術機、MS群…

残存の弾級、兵士級、戦車級、闘士級、要撃級がすすんできた。

『小型級は後ろにくれてやれ。』

我々は中型級以上の殲滅が任務だ。



数はさほど多くはない、わかったか？』

『了解！！』 ＊多数

このラインまでくるのに… BETAは多大な被害をだしていた。特にこの前のラインのガオ無双、エヴァ無双で… その密度はかなりうすれ、全体的にも数はかなり減っていた…

異世界軍のビッグトレーの射撃は停止するも、  
今だに狙撃、スーパーロボット無双は続いている、

残存が10万を下回り、更に後ろ側から無双、前から狙撃が続いていた。

そんなBETAが防衛ライン到達し…

『攻撃開始！！』

更に陸戦強襲型ガンタンク、魔不知火を始めとした部隊から、  
射撃開始された…

最後の突破してきた小型級を掃討するのは、  
ボン太君やターミネーター、烈火を始めとした機動歩兵だった。

「ふうもっ！」  
パン

ボン太君がアサルトライフルで視界に入った闘士級を撃ち抜いた。

BETA側は、もう数少なく、兵士級、闘士級以外は駆逐され…

5千規模の機動歩兵隊を突破するのは容易ではなく……

カオルは更に内側、メインゲートで待ち構えたが…

(来ないな…というかいる必要なし?)

基地自体のCIWSすら作動せずの状態だった。

そして…

『カオル大将、最後のBETA駆逐されました!!!我々の勝利ですぞ!!!』

「お疲れ様…各隊、帰還せよ」

大規模侵攻群を受け止め重慶基地も無事に残った。

⋮

カオル報告

反撃しなきゃね…

第178話 大規模侵攻編 重慶基地まであと220km (後書き)

作者「大変遅くなりました」

ナギ少尉「なりましたああああ」

作者「と…遅筆により…でした」

ナギ少尉「でも遅筆って…」

作者「戦闘シーンがうまくかけなくて…orz」

ナギ少尉「先に投稿してあとで修正でよかったんじゃない?」

作者「かもなあ……」

ナギ少尉「で今回見直した?」

作者「してない…時間ギリギリ今23:57」

ナギ少尉「あと3分で日付かわるじゃない!」

作者「本編ネタやりたかったけど…時間が…なんだよ…  
なので投稿してから見直しになるか…orz」

ナギ少尉「いつも作者はギリギリだからね」

作者「と、あと次回予告ですが、とりあえずいつも通り未定でお願いします!」

第179話 大規模侵攻編 防衛戦後 投稿日20111001

2001年1月15日午前8時

なんとか大規模侵攻を抑え、撃退する事ができた異世界軍…

カオルはとり急ぎ横浜基地に帰ってきて、

次々あがってくる今侵攻におけるダメージレポ及び、メンテナンス  
予定を流し読みしていた。

直ぐにでも反撃をおこないたいが…

「モンスター改は、殆ど砲身交換で、定数満たすのが10日程かかるよ」

陸戦強襲型ガンタンクは守備隊と配置転換すればなんとかだね」

という事であり直ぐにはうって出る事ができなかった。

大規模侵攻での被害報告で特に目立ったのが、虎の子面制圧に活躍が期待されたAIF-7Sゴースト、  
バルキリー世界の無人戦闘機が、

「帰還率13%か…」

原因は独自A Iモードにあった。

「調べてなかったからなあ…」

艦が沈没または本拠地と連絡がとれない独自モード、

取得しコピーした元設定が…帰還優先でなく殲滅優先で設定してあった為だった。

(まあそりゃマクロス世界の生産力なら些細な事だけど…さ)

わずかでもダメージくらうと特攻する設定を残りの機体分から修正、増産分からも修正する事となる。

そこさえ修正できればG限界を考える事なく、防御力無視で、限界までマイクロミサイルを搭載できる優秀な機体であった。

(まあ、光線級射程圏を飛んでる以上当たらないってのはないんだけどね…)

有人機体であるバルキリーはピンポイントバリアで光線級を受けて、その防御力をいかしていた。

が、そのピンポイントバリア対応以上の集中攻撃をくらった機体もあつたが、

エネルギー転換装甲の作用内ですんでいた為、すぐに煙幕内に突入し、帰還修理となる。

そのため人的損害は皆無であった。

光線級の射線がゴーストを落とそうと躍起になっていたのもあるよ  
うだが…

報告をみると…

「マスター、大至急情報司令室にきて」

と呼ばれて移動する…

呼ばれた原因が、敦煌基地跡地に向かっているBETA群がいると  
の報告であった。

「何をするんだ？このBETA群は…」

「さあ？」

「とりあえず対応できそうなのが…」

即応リストを呼びだす。

重慶基地周辺で待機中や、チューリップ使用による二次即応可能な  
部隊リストが映し出された。

メンテナンスに入った部隊は映し出されていない。



無限弾薬装填装置の恩恵をえた砲撃艦やミサイル艦以外だと…

「バルキリースカル大隊、アポロ大隊と、モビルスーツ、戦術機かあとが機動歩兵隊ね…

とりあえず疲労度高そうな部隊は下げると…」

画面上の部隊マーカーを移動する…

「ふむ…」

敦煌にむかっているのが、2個師団規模に対抗…

ビッグトレー砲艦隊とミサイル艦隊、

烈火大隊及びターミネーター大隊を派遣する事となった。

対応を決めあとは問題なしとの事で、引き続き報告の検証にはいる。

今回初実戦のAIF-7Sゴースト以外の機体、

エヴァンゲリオン及びガオガイガーら勇者ロボットらの方は…

エヴァンゲリオンはパイロット制限が外れて、しかも驚異的な性能をだしていた。

単純に80mの巨体からの重力も加えた巨大な力を奮い、

80mに似合わない抜群の機動性能をだしあげた。

(まさにLCL様々だな…)

そのような巨体があつた機動を行つとなるとGの問題がかかってくる。単純にいうと0からものの3秒程でマツハを超える脚力をもつ機体で、

それだけで12Gの力がかかっている。

単純に言えばミサトさんに600kg近くかかっているのだ。

そこにさらに横機動等加わり…

パイロットには18G近くが単純にかかっていると云えた。

さて、航空機パイロットでも18Gがかつたとして耐えられるだろうか？

答えはもちろんNO。

連続的に7Gかかるとして、レッドアウトまたはブラックアウトにかかるのがおち。

が、このエヴァンゲリオンは、パイロットの身体に重力加重が全くかかってなかった。

すべて重力操作及びエントリープラグ及びLCLで吸収しきっていた。

そうでなければその巨体が第四使徒に捕まれたたき付けられて、パイロットがその衝撃で潰される事になる…

三段階の構えでGを吸収する。

確かに最後の戦いでミサトさん曰く、ネルフ本部にいるよりか、エントリープラグ内にいたほうが安全といえた。

すべてはLCL、体液によるもの…

また初戦闘なのにミサトさんがBETAの醜態に怯んだ様子もなかったのも、

その巨体による恩恵と直接接続によるものと推測できた。

人間がBETAと対峙し、恐怖に感じてしまうのが、まずはその巨体及び物量、また醜態さであった。

捕食される…やはり恐怖である。

戦術機にのつても、その最終目線は人間であり…  
結局のところ巨大さに感じるそこであった。  
勿論、MS等も同様である。

が、今回の直接接続は巨人自身になる為、

兵士級等は単純に少しかいゴキブリの印象…

戦車級は子供用の靴サイズ、

要撃級で長靴、

突撃級で女性用のブーツ、

要塞級でやつと人間サイズ…

と見えると聞いていいだろう。

さて、そんな小さいものに先入観ない人が恐怖を感じるだろうか？

少なくとも恐怖は感じず気持ち悪い程度にしか見えないだろう。

また、シンジ君が来るまではゴキブリと同居していたミサトさんであり、

そんなちいさき虫に恐怖する、か弱い女性でもない。

むしろ掴んで包んでごみ箱に捨てられる人であった。

そのようにゴキブリと同居する人物が虫に恐怖するか？

まあ蜘蛛等種族嫌悪等は除いて…

否である。

まさに対BETA戦に最適な組み合わせ…意図してなかったが…

更にATフィールドの恩恵もあり、まさに一機当千といえた。

(まあこれで量産できればなあ……)

つくづく思うところだったが…

生産方法及び補修にカオルがないと駄目、  
維持保守はいなくても起動までは問題はない。

(後々の課題だな…)

あとは、ガオガイガーら勇者ロボ達…

彼らもまさに一機当千。

ガオファイガーは一応有人？まあ直接接続及び同化の類だが、  
エボリューダーはまさに超進化人類といえ、Gをもともせず耐  
えきつてた。

撃龍神はコバツタ操縦機以上、Gをやはりものともせず、その力  
を發揮していた。

(うん…被害なし、稼働疲労位か…)

機体にかかるGがやはり近接戦闘、特に格闘を主眼とした機体はか  
なり蓄積する為、

特に問題はなかったが100%のコンディションを維持する為に、

数時間ばかりメンテナンス行きとなった。

（オリジナルで更に増やしたいけど…）

勇者ロボのコピーはAIのアイデンティティーの問題でできないので、新規につくる方向になるだろう…

特殊タイプのAIが基本使われて育成に時間がかかる為に…  
これもまた難しい事となっていた。

（まあおいおいだな…）

報告書をおき…

（とりあえずこの後だな…）

異世界軍の方針を考え始めた。  
すべては大規模侵攻対応に注入していた…

（敦煌は今向かった部隊で対応可能だよな）

対応せずに再びハイヴを作られると、少し面倒な事にはなる。  
その上での予防措置であった。

（オリジナルハイヴ攻略部隊は…）

まだ大規模侵攻時守備に加わった部隊のメンテナンスがすんでない為、  
見積もったところ最短6日は必要だった。  
その反対に太陽系攻略艦隊は…

(メンテナンス中、あと最短三日か…)

コロニーレーザーの出力発信器の交換中との事だった。

70%台まで連続発射による低下がおきてたので、  
一応50%までは出力が保障されるが、バルキリー護衛部隊が外れた事により、  
ついでの事で交換作業に入ってた…

が予定通りで予定が崩れる程でもなかった。

(メンテナンス終了後に…攻略艦隊出陣だな)

太陽系攻略艦隊はこのあとにもまだまだ攻略して貰う惑星及び準惑星の部類がある。

太陽系だけでも、未調査の惑星、準惑星、衛星等は、  
土星の衛星、海王星の衛星、天王星の衛星及び、冥王星及びカロンの他、  
太陽系外縁天体に属する、セドナ、ハウメア、マケマケ、エリス、  
カイパーベルトの、クワオアア、ヴァルオナ、等など居る可能性あげるときりがない。

BETAの性質として1000km以上の星にはいる可能性があるからには調査も必要となる。

キヤーティア製のレーダーで調査もやはり、調査対象惑星の近くまで行かなければならない。

(とりあえず増強と、調査専門にあと1編成かな?)

ジェネシス及びコロニーレーザー、またビッグワンの増産がきまりました。

(とりあえずこんなところか…じゃ新しい人材を…強化されたのがいいな…となると、あそこかな?)

「じゃ、オリジナルハイヴ攻略させるような人材ひろってくるわ」

「いってらっしゃい…あとは任せておいて」

世界扉を唱えて世界を渡ってく…

…

カオル報告



事後処理終了、あとは放置で人材のみ？補給

第179話 大規模侵攻編 防衛戦後 投稿日20111001(後書き)

作者「またもや、ギリギリ…」

ナギ少尉「最近遅れ気味ね」

作者「……まあもう大丈夫かな？日本国内にいるし……」

ナギ少尉「まあいいわ。今回は戦後処理で、また新しい世界？」

作者「いや、以前の世界って事で…次回お楽しみに」

第180話 再びC・Eの世界へ 投稿日201111003

C・Eの世界

＝ロドニア＝

「被験581号は駄目だな…破棄と」

ズリズリズリと、少女が両脇から支えられながらも引きずられていく…

小水垂れ流しながら、あとを引いていく…

「薬物抵抗失敗か…」

「だな…次の被験体にはもう少し数量おとしてみよう」

少女は目がかんびらきのままキャスターに乱暴に寝かされた。

男たちはそのキャスターを押ししてしばらく進むと、ある一室において入ってく…

途端に血の臭いが漂ってくる。

「チツいつもこの部屋の臭い、どうにかしろってんのに…」

「しょうがないさ…なんせじじは」

解体室…と部屋のプレートにはかかれていた。

「せーのっ…」

台の上に少女は移された。

「いるんだろ！？破棄品もってきたぞ」

「ひっひっひっ…お〜お〜今日は二つ目だ…大量だ」

「薬物で拒否反応によりだ…いつも通りホルマリンつけ脳のみで頼むぞ」

「い〜っひっひ、わかりました。さあ解体ショーですなあ…  
見てきますっ？」

「いや、後は任せた」

と男達は部屋からキャスターを押してでていった…

「ちてと、まずは血抜きせんと…意識は」

ほほを叩き…瞳孔の反応をみて

「ないな…なら」

後ろの台からレーザーナイフをつかみ…

作動させ、少女の太股から下を一気に切り落とした。

途端にブシャーと血が吹き出し、

「イーッヒッヒッヒッヒッ」

そして…時間は流れ…

その少女は脳がホルマリンの瓶詰の形となり、  
解体室から送られてきた。

瓶にはラベルが張られ…被験体581号破棄とかかれていた…

ここはロドニアのラボ…

人を人と思わず兵器として生産する為に

エクステンテッドを作りあげる研究所だった。  
主に精神面での強化を主眼としていて、純粹、無垢である事は精神

的安定にも繋がる。

ブーステッドは肉体的強化を目的としてるがやはり投薬が定期的必要、

副作用に起因する不安定さやタイムリミット等がある。

なので今では主にエクステンデイドを生産していた。

『戦って貰おう』

先日入所したばかりの少年少女達が15人、ある一室の中に集められてそう告げられた。

「何とですか？」

『君らの目の前にいるものとだ。武器は置いてあるだろう』

ショートソード、サバイバルナイフ、鉄パイプ、

さながら剣戦士のような近接格闘武器ばかりが置いてあった。

ここに入所する人材にはこと欠かなかった。

先のプラントとの戦争で戦災孤児となった人は大量にいた。

そういつた戦災孤児を孤児院経由等で大量に仕入れていたからだ。

先の大戦で活躍したブーデットマン生産の頃は犯罪者を仕入れてい

だが、  
軽犯罪でも偽装する等しなければ人材が不足していた。

しかし、先の戦乱がこの施設の運命及び入ってくる幼い子供達の運命を決め付けた。

「ぐわああ」「た、たすけ…ぎゃあ」

武器をいち早くとったものから、近くの者へと戦いへと入り、  
直前まで話し合っていた者は敵となった。

先の戦乱において、エイプリルクライシスにより、各国の電力が大  
幅に減少すると、

加工食品はもとより、食の流通がストップし、  
都市部において大規模な餓死等発生、

またその後の戦乱において強制徴兵、強制労働等生き別れや、  
またデータが飛び戸籍確認がとれずに生き別れ等発生、

戦乱終了後には大量の戦災孤児が発生した。

それに悲鳴をあげたのが民間や各国の孤児院。

必然的にスポンサーを探し、大量に受け入れてくれるラボへと辿り  
ついたわけになる。

『そこまで!!』

部屋の中には立ってたのが3人だけとなっていた。  
部屋に武装したMPがはいり、横たわったのをチェック、  
2人程生きていたので救助された。

残りの10名は強化される前に死んでしまってた…

というふるい分けも可能な程になっていた。

そして、改造室…

カプセルの中に液体が充滿されており、  
その中に素体となる子供達が漬け込まれていた。

子供達はチューブをいたるところに付けられ、  
薬剤を投与され、生体兵器へと改造されてく。

この子供達は入所時の選抜にたえ、改造されてく…

そんななか、カオルは再びガンダムSEEDの世界にでてきた。  
時系列的にはガルナハン攻略される前あたりであった…

ナビにロドニアのラボを案内させ、ラボにつくと、分体とわかれ、  
施設に同化してく…

そしてD-day…



「ガルナハンが陥落した！！、施設の処分命令が下ったぞ」

「本当だな？」

「ああ、まもなく確認が…」

「施設の処分命令が下った。大至急作業開始せよ」

施設の処分…完全な破壊の為、二人の別々な命令系統の確認作業をとる決まりだった。

『全職員に通達、当ラボは閉鎖する事となった。緊急マニュアルA-01にそって行動せよ』

（守衛室）

「おい、A-01って…」

「ああ、検体の処分、移動なしだな…」

「勿体ない…あんな美少女が…食いたかったな…」

「やめとけ、情がうつると辛くなる…やつらには人権はなく実験体

「なんだから」

「そうか…」

「とりあえず撤退準備だ、私物は最低限にしとけよ」

「ああ、わかってるよ」

「ある部屋」

『入れ』

ある一室に実験体といわれている子供達がいれられた。

「ねえ…マリ…どうなるの？」

「大丈夫だ、移動の為の避難だよ」

「後ろの扉がしまつて密室になったようなんだけど…」

「すぐに終わるぞ…」

シュー

白い煙が四方より吹き出してきた。

「な、なに？」

「ガ、ガスだ！！」

「う、うわあたすけ……」

バタリ

「にゃー！！」

次々とガスに包まれると倒れてく子供達、

そして「吸うな！」

と一言はっし、口を塞いでたが、息苦しくなり、  
とうとうガスを吸い込んで……

目がとろんとなり床に倒れこんでしまった。

胸はまだ上下に動いていた……

完全防音の操作室には処置室内部の音は聞こえてこない。

処置室内部は完全に動かなくなった10人の子供達が横たわっていた。  
た。

「実験体10体処置完了、溶剤処分室へ投下」

壁がせり出してきてものも言わなくなった子供達を押し出してきた。横が狭まり、次に縦が壁にあいた穴へ押し込もうとしている。

次々と壁にあいた穴に投下される子供達、

重力に引かれ階下の設備である溶解液プールにむかって落下していくが、  
次々とネットに引っ掛かり虚数空間に引き込まれてく。

(10名様ご案内)

足から脱げた靴が溶解液プールに落下すると…

ジュ

と白煙をあげてとけていった…

「処分完了、次のグループを部屋にいれる」

押し出した壁が元に戻り処置室内部のセボフルランガスの回収が行われた。

この処置室で麻酔導入は処分室である、硫酸プールからの万が一の脱出を防いでいたのと、

万が一のガスの室外流出の重大事故予防をかねていたのだろう。

麻酔ガス程度なら、スタッフが死んだ等の大騒ぎもない。

また個々で麻酔導入し、そのまま解体室へといく事も可能だった。  
そして次のグループが入室してくる……

子供らに教導していた軍人らは、施設の研究資料等を護衛し、先に脱出するスタッフと共に護衛の任務となり、ラボからは既に移動開始していた。

現在施設にはスタッフ及び最低限の警備要員しかいなかった。

なぜなら前記のように実験体は、処分が確定していたからである。

動かない実験体に対しては、ガスを使う事なく、楽に処分する流れとなる。

パチ

「1号機から25号機の酸素供給スイッチをoff、…モニターは…全素体に対し呼吸停止確認……  
よし、処分終了。次の部屋いくぞ」

改造カプセルに供給していた酸素をカットするだけで、

人間、いやエクステンデイドになりかけたのは生体の命をけす事となる…

カプセルの中の素体にはカプセルやチューブ保護の為、また素体に悪影響を及ぼさないように、麻酔が常時投与されて、その苦しんでく様子も見られずに死んでく…  
モニターからはそうだった。

が… 実はカプセルの中には酸素が続けて供給されていた。  
施設のシステムを掌握していたカオルにとっては、  
モニターに写る生体反応を偽装する事はたやすかった。

カットしたと思われた電源はバイパスにより、供給されていた状態  
になっている。

カオルの分体は幻影をかけ、次々と中の子供達を擬体と交換して  
いった。

一番問題だったのが投与中の薬剤の問題だったが、  
救急カプセルの能力で生体維持できるだろうとの事で、交換して  
いった。

交換しおわった擬体のカプセルへの酸素はカットしてき、  
また魂ももとも入ってない為、  
その身は液体腐敗していく……

くエクステンディドリクエーションルームく

「あなた達、早く逃げなさい!!」

「お母さん?どうしたの?」

「いいから早く!!何処でもいいから遠くに行きなさい!!」

「お母さんと一緒じゃなきゃだよ」

「一緒」

「あなた達……わかったわ、ついてらっしゃい」

リクエーションルームにいた20名の子供達は、お母さんと呼ばれたスタッフに連れられ、いつもは通れない職員用エリアへと入ってく……しかし……

「おいっマリアンヌ!実験体連れて何処に行くんだ!」  
MPに発見されてしまった……

「お願い見逃してあげて」

「気が狂ったのか?やつらが世間にはれたら銃殺だぞ!」

「それでもいいの、この子達を閉鎖だから処分っておかしいわ……」  
マリアン又はMPに見えないよう手で子供達に、  
遠くにゆっくりいくようにハンドサインを送る。

「俺らがこまる。大人しく処置室につれてくんだ」

「お願い……」

「おいっ！何処へいく止まれ！」

「やめて！」

パン

放たれた銃弾は銃口の前に踊りでたマリアン又を貫いた。

「お母さん……！」

「マリアン又！」

遠くに下がっていた子供達が一斉に戻ってきて、  
倒れたマリアン又にかけよった。

「おいっ……どう責任をとるんだ？」

「あ、あなた達……」

「お母さん……」「いやだ死んじやいやだ！」



「事故で大丈夫だとおもうが……」

「……ごめんね……生きてほしい……い……カハッ」  
「お母さん……！」

「本当に大丈夫だな？」

「……い……き……」  
手がパタリとおちる。

「ああ」

「うっ……わああああ」「あ……あ……あ……」

「と、止まれ……！」

途端に襲い掛かってきたエクステンデイド達に対して発砲をするが、職員を撃つてしまい責任問題で動揺したMPの銃口に正確さはなく、

「じ、こいつら」

「応援をよべ！」

「あ、ああ…グッ、カハア…」「おい！ガア」  
奪ったナイフで胸をひとつき肺まで到達させ呼吸を奪う。  
もう一方もナイフを奪い首をかつきつた。

「はあはあはあ」

「お母さん〜」「あああああああ」

「聞けっ！！お母さんを助ける装置がこの施設の何処かにあるはずだ」

「本当？」「見たことある」

「別人のように生き返ってきたのがある！」

「お母さんをいきかえそう」「悪い大人をやっつけよう」

「大人をやっつけるんだ！お母さんを生き返らすんだ！！」

M Pの持っていたアサルトライフルを奪い構える……

「と、止まれっ！ガア」

「撃てえ！」

ラボ内部にいたM Pや研究員が銃でもって応戦してくる。  
研究員も一応軍人の端くれ、銃の訓練を行っていた。

それに外にかつてに彼らの産物が統制されなくでてしまった事が怖い事になるため、  
なんとしても制止する、また処分するの方向性だった…

「仲間を解放だあ!!」

と当初は意気込んでたが、さほど仲間は増えずに殆ど処分されていた。

まだガス室送りになる前のグループもいたが、  
暴動がおきた事を無線でうけ、その場で銃殺処分とグループもあった。

増えた人数含め、総数25名による反乱である。

半分以上は組織だった抵抗、スタッフ、MP含め500人以上の反撃に倒れるも、

「お、お前らなにをしてるのかわかってるのか?」

「お母さんを生き返えらして、外で一緒に暮らすんだ!!」

とほぼ施設ないを掌握し、所長室で所長と対峙していた。

「馬鹿か?死んだ人間は生き返らない、  
第一外に出たとしても手配が回るぞ」

「嘘つくな！生き返ってきた」「そつだ生き返ってきたぞ」

「……ああ、クローン実験の事か？あれは破棄されたぞ」

「破棄…？」

「実験中止、クローン施設はなくなってる。第一死んだやつそのものにならなかったからな…」

「お母さん生き返らないの？」「嘘だ…」

「わかつたる…早く部屋にもど」「嘘だああ  
ターン

ラボの所長が銃弾に撃たれ眉間から血ながし、後頭部が破裂し倒れた…

「みんな、くまなく探そう！」

……約1時間後…

施設をくまなく探したが、

「..び」

「駄目、それっぽいのない」

「お母さん...」

「生き返らないの？」

「どつするアルフィ？」

「どつするっ たつて...」

ポリポリ頭をかきながら...

「俺らを保護してくれそうなところを探すか、  
自分達で暮らすかしかないだろうな...」

「.....薬持ってきて暮らすしかないよね？」

「ああ」

「ねえ？爆弾は解除しなくっていいの？」

「そんな時間ないだろ？」

「そうだな…とにかく急いでたほうがいい」

「だね…必要なものをかき集めたらすぐにでるぞ！」

こうして少年少女達10人は人知れず東欧の森の中へとでていった。

後に残されたラボには大量の擬体の死体、スタッフやMPの死体、子供達の死体が残された事になる。

(大量だな…さて…)

世界扉を唱えカオルは世界を渡る。

先にラボから移動したグループが、移動先で連絡がとれずに、しばらくして命令をうけ、ザフト勢力下の中様子を見に戻ったら、施設は無事でザフトがラボに突入した…と発覚したのが2週間程たった後…

人間は2週間死んだまま放置されると腐敗し、かなりの異臭を放つ。しかもラボは性質上他の生物等が入らず、…自然界ならまだ掃除屋がいるものの、

突入したザフト兵士がその惨状にPTSDをおこすのも無理はなか

つた……

……  
カオル報告

3  
桁

作者「オリジナルネタだともったら…」

ナギ少尉「おもったら?」

作者「wikiの生体CPUでガンダムSEEDアストレイで、  
エクステンデイドによる反乱だっけって見つけてしまった…」

ナギ少尉「あらら…」

作者「流石に反乱動機がお母さん射殺ではないよな?  
と思うけど…」

ナギ少尉「オリジナルネタだと思ってそれがあるところへこむよね」

作者「まあ…ね…80%以上完成していて、  
設定の更に固める段階で…それだね」

ナギ少尉「まあ…しょうがないよ…あのシーンは印象できじゃない  
の」



作者「だよな…軍人が気持ち悪くなるってのはさ…」

ナギ少尉「だよな…とこの後は？」

作者「今から（午前5時）かくけど、2話か1話か…  
多分2話になりそうな…SEED編がね」

ナギ少尉「ここまできたらあの…」

作者「ストップ!!」

ナギ少尉「…じゃ次回、アドリア海に散る…お楽しみにい」

前回の後書きの際に勘違いしていました…

2日目、

カオルは再びでくると、黒海及びエーゲ海の間海峡、  
ダーダネルス海峡を目指した。

そこはアジアとヨーロッパ文化をわける海峡である。

付近にはガルポリ、軍事的に重要な都市もある。

(絨毯でお世話になったなあ…)

大航海時代シリーズで毎回よっていた箇所…とふと思いついていた。

(お、よかった…)

海峡出口エーゲ海側に連合オーブ軍艦隊があり、  
カオルはかなり多数に分体して、艦隊へと取り付く。

カオル自身は一際でかいタケミカズチへと…

ブリッジでは…

「ダーダネルス海峡接近中の艦捕捉。ミネルバです！」

「きましたね」

「単艦で突破しようとしてくるとは…」

「よし始めようか。ダルダノスの暁作戦開始！」

「は?」

「なんだ知らないの?ゼウスとエレクトラの子でこの海峡の名前の由来の。」

ギリシャ神話だよ。ちよつとかつこいい作戦名だろ?」

「……モビルスーツ発進開始!」

このぼんぼんが…な顔をして…軍人として命令を下す。

「モビルスーツ隊発進開始!第一第二第四小队、発進せよ!  
イーゲルシュテルン起動、オールウェポンズフリー」

「まもなくモビルスーツ隊、到達します。敵艦モビルスーツ発艦、  
数2」

「よしよし、勝った!」

「は?」

「20対2だから勝てるじゃん。楽勝だよ」

「は、はあ……」

「2、8、11、シグナルロスト!」

「はああ?」

「敵艦射程圏内！」

「一斉斉射あ！」

「続いてシグナルロスト9、14」

「何をしている！敵のモビルスーツはたったの二機だ！  
どどん追い込め！モビルスーツ隊全機発進！」

「いやそれは……」

「一機ずつ取り囲んで落とすんだよ！そうすればいくらあれだって  
落ちる。」

「これは命令だぞ！」

「……待機中MS全機発艦準備、進路風上にとれ！」

「進路固定！」

「それでいいんだよ、それで。これで敵MSさえ落とせば、カガ……」

「敵艦陽電子砲発射態勢！」

「へあ？」

「回避！面舵20！発艦中のは緊急離艦せよ！！！」

「駄目です間に合いません！！！」

「いやだああ」

何処からともなく放たれたビームがタンホイザーの砲身を貫き、盛大な爆発をあげる。黒煙をあげ…

「敵艦、砲身大破、ダメージ甚大の模様、落下してきます！！！」

「助かったのか…」

「あ、あれは…フリーダム！！！」

「な、なにが？」

「敵艦、着水！！！」

『私は、オーブ連合首長国代表、カガリ・ユラ・アスハ！』

「え！？」「カガリ様？」

『オーブ軍、直ちに戦闘を停止せよ！軍を退け！』

現在、訳あって国もとを離れてはいるが、

このウズミ・ナラ・アスハの子、カガリ・ユラ・アスハが、オーブ連合首長国の代表首長であることに変わりない！

その名において命ずる！オーブ軍はその理念にそぐわぬこの戦闘を直ちに停止し、軍を退け！』

「ううーく……」

オーブ軍はカガリの演説で動かなくなっていた。

『ユウナ・ロマ・セイラン』

ネオから通信が入った。

『これはどういうことですか？』

「あ……あ……いやこれは……」

『あれは何ですか？本当に貴国の代表ですか？』

ならば、それが何故今頃、あんなものに乗って現れて軍を退けと言うんですかね？』

「うう……」

『これは今すぐきつちりお答えいただかないと、お国もとをも含めていろいろと面倒なことになりそうですが？』

「こ……これは……いやだからあれは……ええい！』

あんなもの私は知らない！』

といいきりインカムを置き通信終了する。

「ユウナ様！何を仰いますか！？」

「あれはストライク・ルージュ。あの紋章も、カガリ様のものですよ！？」

「…だ、だからといって何でカガリが乗ってるってことになる！？  
そんなの判らないじゃないか！」

「しかしあのお声は…！」

「偽物だあんなのは！僕には判る！僕には判る！」

夫なんだぞ！僕は！」

「ユウナ様！」

「で、でなければ…操られてるんだ！」

本当の、ちゃんとした僕のカガリなら、こんな馬鹿げた、  
僕に恥をかかせるようなことをするはずがないだろ！！」

「ユウナ様！！！」

「何をしている！早く撃て馬鹿者！」

あの疫病神の船を撃つんだよ！合戦用意！」

「…貴方という方は…！」

「でないきゃ！こつちが地球軍に撃たれる！国も！」

僕等はオーブのためにここまで来たんだぞ！それを今更、はいやめ  
ますで済むか！」

「……ミサイル照準、アンノウンモビルスーツ」

苦渋の表情で命令を下す。仮にでも最高司令官だ…

「トダカ一佐！」

「我等を惑わす賊軍を討つ！」



「早く撃て！」

「てえ！」

対空ミサイル群がルージユにむかって放たれ…  
いち早くフリーダムが反応し、全弾撃墜する。

「ああ…」

呆然とするユウナの横で安堵するトダカ…

『オーブ軍！何をする！私はオーブ連合首長国代表、カガリ・ユラ・アスハであるぞ！

何故軍を退かぬばかりか、敵対行動をとる？  
オーブの理念を忘れたか？…』

「地球軍、ミネルバに攻撃しかけます！！」

「な、何やってるの！うちもさっさと攻撃させて！」

「はあ？」

「モビルスーツ隊！ほら！」

「あいえ…しかし！」

「ミネルバを討つんだよ！また言われちゃうじゃないか！…うちは地球軍なんだよ！」

「…それから！あの船！アークエンジェルも！」  
「なんですと！？」

「あれがそもそも、我が国混乱の最大の原因でしょ？  
いつつもいつつもいつつもいつつも……」

「だから一緒に片付けて！あの仮面男にちよつとはいいところ見せなき  
やまずいでしょ？」

「く……全軍、攻撃再開せよ」

「トダカ一佐！」

「くどい！これは最高司令官であるユウナ様の決定事項だ！

またあの機体はカガリ様でない……」

「……わかりました。全軍攻撃再開……」

「オーブ軍、モビルスーツ各隊は地球軍と共にミネルバへの攻撃を  
再開せよ。」

「あれはカガリ様ではない。あれはカガリ様ではない」

「各機攻撃を行動にはいります……」

『オーブ軍！私の声が聞こえないのか！言葉が解らないのか！オー  
ブ軍！戦闘をやめろ！』

「クラミとイワサコを前に出せ！二隻一気に追い込むんだ！」

「兵装破壊機体多数……！帰艦してきます……」

「あのフリーダム、なんとかしろ……」

「なんとかしろと言われましても……この時点では……」

「タイテントロンガ自走不能!! 舵をやられました!」  
波により持ってかれたのだろう…

「曳航させよ!…手のうちようがありません」

「何なんだあれは! 一体どっちの味方なの!？」

(ハイネを救助完了したよ)

(幻影は?)

(勿論かけて両断されたよ)

『残念ながら戦況立て直す。全軍撤退する。』

「クツ……わかりました。損害大きいですしね…撤退信号うて!!」

『なに…相手もかなりの被害がでたさ…次は頼むよ。ユウナ・ロマ・セイラン』

カオルは離脱し、合流する。

(セイバーと、グフユナイテッドハイネ機もか…  
M1とムラサメも取得したし…うし)

次の時間へ世界扉を唱える。

…

カオルは世界を渡ってきて、

(ありや…場所ずれたっばいな…)

あたり一面氷の世界だった…

(なら…)

虚数空間よりルーロス改を出して乗り込む。

「久しぶりでち〜」

乗り込むいなやカオルに飛び込んでくるルーロス人形…

「おいおい…」

「ごちゅじんたま、ず〜っと、しまったままで、寂しかったでち」

「あ〜…ゴメンな…で早速いってもらいたい場所なんだが」

「どこでちか？」

「アドリア海ね」

「あいあい〜」

ルーロスが高速移動して〜

「ごちゅじんたま、リピア海に水上艦母艦ほか、水上打撃艦を発見したでち」

「それが、今回取得対象者が沢山いるオーブ軍だな…ってリピア海？」

「ごちゅじんたま、場所間違えてるでちか？」

アドリア海は、イタリアとバルカン半島に囲まれた部分でちよ」

「あ……じゃあ完全な勘違いか……リピア海でよろしく」

（となるとクレタ湾に沈んだのかなタケミカズチは……？）

「じゃ、分体を沢山わかれて……」

ほぼ全滅模様になる為、無限にわかれてく……

（俺達よ、よろしくな）

カオル本体はタケミカズチにとりついた。

ブリッジでは……

「艦影捕捉！」

「距離60、11時の方向です！」

「総員合戦用意。繰り返す、総員合戦用意」

艦内が途端に騒がしくなる……

「第二、第四小队発進待機位置へ」

「第一、第三、第五小队発進完了」

「目標、主砲射程まであと40!」

「ミネルバからのモバイルスーツの発進は？」

「まだです!」

「よし勝った!八式弾のシャワーをたっぷりとお見舞いしてやれ!」

「砲術!八式弾一斉射!てえ!」

一斉に対艦ミサイルが放たれた。

八式弾は迎撃してくれる事前提のミサイルであり…

「効力射!!敵艦ダメージあり!」

迎撃する事により自己鍛造弾のシャワーが浴びせられる。

「よっしよっし」

これにより表にでている兵器には、かなりのダメージが加わった事を期待されてた。

「第二艦隊敵艦に接近、間もなく主砲射程圏です!!」

「第二、第四小隊、接敵!!」

「連合特殊部隊発艦!」

「敵艦よりMS数1!及び分離体群1」

「いい加減に分離体群と呼ぶの变えようよ」

「それは連合さんについて下さい…」

「でもお我が軍だけでも変えてもいいんじゃない？」

「第一、第三、第五小队、敵MS群と接触します」

「敵MSは連合軍に任せてミネルバをおとせ!!」

「第二艦群、対艦ミサイル射程圈内、発射します!!」

「ソコワダツミ、ミサイル発射口被弾」

「クラミズハ、前へ出ます」

「目標、針路を2・4・0に転進」

「ほら!第二群をもっと前へ出して!どんどん追い込むんだよ!」

「ミネルバの火器はまだ健在です。迂闊には出せません」

「ムラサメ隊は何をしてるの!何でさっさと落とさない…」

「実践はお得意のゲームとはわけが違います!そう簡単にはいきま

せんよ」

「ミネルバに対してムラサメ2個が突入敢行します!!」

「よし…落としてくれよ…」

「ダメージ与えるも、健在」

「ちっ…」

「敵MS、地球軍機から離れられません」

「チャンスだ!いつけ!」

「ムラサメ2個隊、再突入します!!」

「敵艦直前に!」

「勝った」

「あっ……」



『オーブ軍！ただちに戦闘を停止して軍を退け！』

「フリーダム…またか…」

『オーブはこんな戦いをしてはいけない！…』

これでは何も守れはしない！地球軍の言いなりになるな！

オーブの理念を思い出せ！それなくして何のための軍か！』

『何をぼんやりしている！ユウナ・ロマ！』

「ん！？」

『先の言葉を忘れたか？二艦とも叩き落とすんだ！』

「トダカ一佐！」

「…我等に…指揮権はない…」

「わ、分かってミネルバを！だから早くミネルバを！あれさえ落とせばいいんだから俺達は！」

「カオス被弾撤退してきます」

（救助完了）

（幻影は？）

（勿論大丈夫）

「連合特殊部隊アビス墜落！！」

「はあああ!?!?!?」

「撤退の時期ですかね……」

「なぐに馬鹿な事いつてんの、ちやっちやとミネルバ落とせばいいんだよ落とせば」

「敵MS空中換装する模様!!」

「ほら早く全軍に命令を!」

「く…目標ミネルバ!」

「オーブ全軍はミネルバを攻撃せよ。繰り返す、オーブ全軍はミネルバを攻撃せよ」

『やめろー!!…あの船を討つ理由がオーブのどこにある!…討つてはならない!自身の敵ではないものを!オーブは討つてはならない!…』

「カガリ様!やはり…」

「偽物だ!!無視しろとめい」

『そこをどけ……』

これは命令なのだ。今の我が国の指導者、ユウナ・ロマ・セイランの!』

「わかってんじゃない…誰の機体?」

「馬場一尉です」

『ならばそれが国の意志。なれば我等オーブの軍人はそれに従うのが務め!』

『お前!』

『その道、いかに違おうとも難くとも、我等それだけは守らねばらなぬ!お解りか!』

『だが…!』

『お下がりにください!』

国を出た折より我等ここが死に場所と、とくに覚悟は出来ております!』

『それは…』

『下からぬと言うなら力を以て排除させていただく!』

……我等の涙と意地、とくとご覧あれ!』

『お前たちー!』

残存機体が果敢にミネルバに突っ込んでいく…

フリーダム等にやられムラサメでそうそう無事な機体が、少なくなっていくなか…

「1番機…と、特攻です!!」

「あ……」

馬場機がミネルバに体当たり攻撃し、自らの命と引き換えにミネルバの復旧中で露天してた兵装を奪い、また多大なダメージを与える…

その覚悟めいた攻撃にタケミカズチのブリッジ一同ユウナも含め、言葉を発する事ができなかった…

『あと一息だ！落とすぞ！』

「そ、そうだよ！それでいいんだよ僕等は！ミネルバさえ落とせば」

『やめろー！！』

「よし。本艦も前に出る」

「機関最大！」

「はい！機関最大！」 「機関最！大！」

「いや…だけど…」

「ミネルバを落とすのでしょ？ならば行かねば」

「第二艦隊全滅！」

「敵インパルス来ます！」

「と、とめるー！！」

「ミサイル一斉斉射！残弾のこすなー！！」

近寄り過ぎて…

「ダメージコントロールー！！」

ミネルバの主砲があたり、艦に次々と振動がはしる。  
『やめる！やめるんだタケミカツチ！』

「うわうわああ！おま、お前！何をやっているんだトダカ！これで  
は……」

「ユウナ様はどうか脱出を！」

「ええ？」

「総員退艦！」

「……は！」

「総員退艦。繰り返す、総員退艦」

『タケミカツチやめるー！』

「ミネルバを落とせとのご命令は最期まで私が守ります！」

「ええ……」

「艦及び将兵を失った責任も全て私が！」

「え……ええ……」

「これでオーブの勇猛も世界中に轟くことでありましょう！くっぬ  
う！」

「うわうわあ！う……」

「総司令官殿をお送りしろ！貴様等も総員退艦！」

「これは命令だ！ユウナ・ロマではない。国を守るために！」

「はい！」

「私は残らせていただきます」

「駄目だ」

「聞きません！」

「うわあああ」

大規模な振動がはしる。ブリッジにいるものはバランスを崩す。

「駄目だ！！これまでの責めは私が負う。貴様はこのあとだ」

「く…いえ！」

「既に無い命と思うのなら、想いを同じくする者を集めてアーケエ  
ンジェルへ行け！」

「あ…」

「ええい！それがいつかきつと道を開く！」

「あ…トダカー佐…」

「頼む！私と、今日無念に散った者達のためにも！」

「くく…」

「行け！」

護衛艦隊は全滅し、速力が大幅に低下したタケミカズチの艦橋にい  
るトダカ…

自爆特攻する速力すらすでになかった…

そこにソードインパルスが近寄り…両断！！

虚数空間に引き込み離脱する…

（かなりの人数引き込んだなあ…）

オーブ軍黒海派遣隊タケミカズチ及び護衛艦群…

整備兵含めて四桁を越えていた。

…

カオル報告

次回にまとめて…

作者「と、いうわけでオーブ軍黒海派遣隊壊滅しましたね…」

ナギ少尉「……千人以上ね」

作者「まあ主にタケミカズチからだけどさ」

ナギ少尉「ふん」

作者「そつちも海上艦なら詳しいんじゃない？整備兵沢山必要だし」

ナギ少尉「あ、わたし達の船整備兵いららないから」

作者「オブツ…」

ナギ少尉「どんなに傷ついた機体でも数秒でリフレッシュしてあげる」

作者「……ま、まあ…さて次回は…」

ナギ少尉「ステラね…お楽しみにい」

ザフト守備隊の描写

3日目…

カオルは再びC・Eの世界にでて、ルーロスを出し乗り込む。

「ベルリンあたりにむかっている大型のMA含む一群、いると思うけど探知できる?」

「ベルリンに接近中の大型なのは探知できまっね…  
そこにいけばいいんでちか?」

「蹂躪される前か…ついでに救助するかな…間に合いそう?」

「間に合わせるでち」

というまにベルリンにつく…

ウ~~~~ウ~~~~

サイレンが鳴り響く…

都市に住む住民が、戦火を避けようと避難していた。

「このままだと5分後にくるでち」



「じゃ、待機で…いつてくるわ」

ルースからでて、分体を沢山作り上げ、都市中にちらばらせる。

（避難民も積極的にお願いな）

（あいよ〜）

ここベルリンに住むゲルマン民族を始祖にもつ旧ドイツ国民は、カオルの住む世界においても撤退戦でかなり激減していた。なのでその補填にできれば…とも思っていた。

勿論コロニーにおいて住む形にはなるだろう…

「ママーママー」

カオル本体が降り立った付近には迷子になった女の子が母親を泣き呼んでいた…

だが、周りの避難民達は自分の事でもいいっぱいの為、気の毒に…と表情ですが、誰も手を差し延べなかった…

「ママー、ママー」

「敵軍は西側から来ます！！都市の南方向へ避難してください」  
拡声器で避難方向の広報が流れる…

『見えたよ…エネルギーチャージしてる…くるよ！！』

地平線にデストロイが見えると、

アフプラールドライツェーンの一撃がベルリンの都市を襲う。

ブランデンブルグ門が直撃を受け溶け、またザフト軍の都市守備隊

の軍人がMSごと認識できずに命を絶つ…

ベルリンを一撃で焼き払った…

(あちち…救助はできたよ)

(まにあわねー)

(おい!!炭化したのを送ってきたの誰だ?)

流石に無理だとカプセルからメッセージでたぞ!!)

1番下のが救助した人を、シエルターかカプセルかを振り分ける担当の叫び声だろう…

「キヤー!!!」

避難統制とれてた避難民が、今の一撃で固まってて、

叫び声で一気に恐慌状態におちいる。

前がつまっていたのを自分が行かせるや、

後ろから更におしてくる等、ドミノ倒しも発生しかかっていた。

「ママー」「どけえ」「キヤ」

迷子の女の子が突き飛ばされ転がる。

そこに前を見てない避難民の足が迫り…

虚数空間に引き込んだ。

(死亡確定だしな…)

都市守備隊が攻撃しかけようとするが、まだ射程外…

さらに射程外よりデストロイがもう一撃放ってきた!!

(あぢあぢあぢあぢ!)

その一撃は避難民を直撃し、叫び声をあげる事なく、炭化する前に一気に肉体が蒸発、

骨ものこさなかった…

またその直撃を受けたカイザーヴィルヘルム教会が跡形もなくなる。

付近にいた避難民は跡形もなくなっていた。

（確かに直撃くらったら間に合わないなあ…）

虚数空間に引き込めたのがほんの数人程度であった…

二発都市に大出力ビームをぶち込んだデストロイは更に接近してきて、

ベルリンを廃墟とすべく暴れ回りはじめる。

残存守備隊はデストロイを止めるべく、果敢に攻撃をしかけるが…

デストロイの前には攻撃が通じず反撃をうけ、

一方的蹂躪になり…

そして…都市守備隊や増援の主要MSや陸上戦艦が壊滅し…

もはや止めるものがいなくなった…

（結構救助はできたね〜）

（何人ほどだ？）

（避難民が4千人超えてたなあ…大体が無傷でシエルター行き、詳しい数は途中で数えるのやめた。

ザフト兵は百超えたあたりだと思う。

それに救助力プセルも結構しようしたよ）（成る程なあ）

デストロイが更に暴れようとする時、

フリーダムガンダムが駆け付けた…

アークエンジェルからゴットフリートが放たれ直撃するも、弾かれる。

遠くにアークエンジェルが見える。

デストロイがMS形態へと変形してく…

カオルはその間に取り付いた。

(足が壊滅的に遅いから取り付くのは楽々なんだよな…)

コクピットでは重要ターゲットのステラが血ばしった目をはしらせ  
ていた。

「ヴアアアア!!」

カオルが取り出したのは無痛吹付型注射器…  
中身は液体型特殊ナノマシンであった。

吹きかけるとパイロットスーツに侵食していく。

(よし、離脱っと…)

ゴットフリートが放たれるが、デストロイが弾き返す。

ハイマツトブーストをも弾き返し、カオスがからんできてフリーダ  
ム押されてたが…

ルージュ、ムラサメ隊が応援にでてきて、  
フリーダムにからんでくるカオスに挑みかかった。

自由になったフリーダムは再びデストロイを止めるべく挑みかかる…

デストロイから離れたカオルは避難民や、ザフト軍が付近にいない  
なった為、

分体と合流しルーロスの中に引き籠った。

ベルリン市民で避難できたのが1割って良いところだろう…

「ごちゆじんたまお帰り…いいの？」

「ああ、これで良いはず…ナノマシンは浸透したし…後は戦後だな」

「あ、浮遊戦艦…ミネルバだね、きちちゃよ」

「やっときたか…」

「まだMSでないでちね」

「確か確執を諭していたんだよな…」

「確執？」

「ほら、敵になったり等…プライドがどうたらみたいにな…」

「やっと出てきたみたいでちよ」

全周スクリーンにデストロイのビームを交わし、  
ビームサーベルで切り付けるインパルスが映っている。

「初ダメージでちね」

「ビーム兵器や実弾兵器じゃダメージ与えられんから、接近して切り掛かる。

接近できる機体でないと辛いな…」

「もち異世界軍がたたかうとちたら？」

「物量的実弾射撃主体だから、  
位置エネルギーによるダメージ与えられる200cm質量弾できめるか…」

スーパードロップによる近接戦しかないなあ…  
勿論殴る蹴るでフルボッコか…」

エヴァがデストロイに対して、  
バックドロップを決めている姿を想像してた。

デストロイのビームが吹き荒れ、周囲の市街地がさらに焼け野原になる。

インパルスにウイングダムが体当たりで止めた。

「ここでステラがパイロットって伝わるんだよな……」

「ステラって？」

「今回のターゲットだね」

両腕部から翼を奪われウイングダムが不時着してく……

そしてさらにカオスも……

連合軍機はデストロイだけになる……

するとデストロイから目標ないような主砲が発射され、さらに市街地を薙ぎはらう。

デストロイにきりかかったフリーダムにインパルスがきりかかった。

「ステラ！ステラ！俺だ！シンだよ！」

外部スピーカーからシンが叫び、

両腕ビームを避けずに……接近するインパルス。

「ステラ！大丈夫だステラ！君は死なない！君は俺が！

俺が守るからー！！！」

デストロイの銃口が下がる…

『ステ…ラ？』

しかし、しばらく動きを止めていたデストロイが、再び動きだし、

スーパースキュラのエネルギーがチャージされてく…

そこにフリーダムのビームサーベルが砲門につきささる。

もうひとふりを突き刺し…

砲門に貯まったエネルギーが暴走し、デストロイを内部から破壊する。

その巨体は支えきれずに背中から崩れおち、断末魔のツォーンが放たれた…

天にむかって伸びる…

「もう少し接近しても、大丈夫だな」

「あたっては痛くないでちが、いばちよばれちやうでち」

インパルスが倒れたデストロイの上へのり、

コクピットハッチを広げ、シンがコクピット内部に飛び込む。

ステラを手にのせるとインパルスはまだ爆発が続くデストロイから離れ、

安全圏に着地する…

ステラにかけよるシン…



ステラから手を合わせてくる。

「声が聞こえない…」

「集音するでち」

『ステラ！』

『シン…好き…』

ちから尽きたろう、手がおちる。

『…ステラ…！』

呆然とし…泣き叫ぶシン。

「『ちゅじんたま生体反応0になったけど？』」

「ナノマシンがうまく働いてるさ…」

出発前に渡されたナノマシンの注射器をみる。

〈回想〉

「マスター、以前いわれてたナノマシンできたよ〜」

「なんのナノマシン？」

「死んでも復活できれば…ての」

「あ、あ〜そついうの話してたよな〜…でそれが？」

「消し炭になったりしたら無理だけど、

五体満足ならナノマシンが働き、本来死ぬはずのを仮死状態に引き止め、救助ポットに入れば復活するよ〜」

「ほ〜どんな状態でも？」

「重体におちいつたり、銃撃で生命維持に必要な部分を損傷等、また病気等の死亡要因で作用するよ。流石に脳等重要部位欠損や、壊死等引き起こす場合に対しては無理だけ〜」

「ありがとうございます。これで行き先きまっただな…」

〈回想end〉

「あ、動きあるでちよ〜」

ステラの遺体に連絡の受けた残存ザフト歩兵隊が近寄るが…シンは近寄せずに抱き抱えた。

インパルスのコクピットにステラごと乗り込み…

「追っかけて」

「あいでち」

インパルスが湖畔に着陸し、そのまま湖の中に歩みをすすめる…

「じゃ…寒いけど湖の中に潜るわ…」

「いつてらっちゃん」

ルーロスから出て虚数空間に引き込み、静かに湖面から潜ってく…

ステラを抱き抱えながら、伸ばしたインパルスの手の上に、シンが出てきた…

ステラの身体を湖面につけ…

しずかに名残惜しげにステラを離す…

湖の底にむかつてステラが沈んでく…

（オーライ、オーライ…）

「…俺守るって言ったのに！…ステラごめん！」

湖底にも声が届いた…

ステラをキャッチし虚数空間にいれ、湖上に静かにでる。

今だ泣き叫んでいるシンを跡目に…陸に上がり森の中にはいる…

虚数空間より医療カプセルを出し、ステラを入れ、作動させると…

（おし、無事に作動したな…ナノマシン効力ありと…）

世界扉を作り時間を渡る…

カオル報告

次回にまとめて

ナギ少尉「作者、まだどこかにいくの？」

作者「あははは……」

ナギ少尉「結局後半が仕上がってなく、二話の形になったのね……」

作者「……orz」

ナギ少尉「しても、今回も3千人以上？」

… 前回は感想でいわれてたけどオーブ軍人共々なんに？」

作者「まあ単純にベルリン市民に関しては補填だね……」

オーブ軍は本編で……

ザフト軍人はベルリン組は、

そのままMS部隊強化と、お供えものだね」

ナギ少尉「そういえば最近ヒルダさん暴れてないよね」

作者「活躍するまえにカオルがあれやこれやこなしてて……フェードアウトにはならないさ……」

ナギ少尉「で次回がSEED編ラスト？」

作者「今回のトリップでのね…さて次回はヘブンズベース壊滅…  
そして…、お楽しみにい」

5日目

再びC・Eの世界に出てきたカオル。

ルーロスを出し、

「次はヘブンスベースだな…場所わかる？」

「わかるでち、いくでちよ〜」

一路、アイスランド島にあるヘブンスベースへと向かう。

ヘブンスベースに近づくと数多くの船が、  
その身をアイスランド島に向けて佇んでいた。  
攻略艦隊のだらう…

「今回のターゲットは今通過中の艦隊でちか？」

「まあ…あん中からもあるな…」

重要ターゲットはこれから向かう基地内部にはいるけどね

「なるほどでちね…」

対する連合艦隊も島に近づくと島を背にして対峙していた。

「じゃ、虚数空間で待機しててな…」

「テンプレでち」

カオルはしまうと分体をばらまき、基地へと向かう…

カオルが同化して基地内部に侵入すると…

ある一室から啜り泣きが聞こえた。

「おふくろ…ごめんよう」

気になったので室内に侵入すると、

一人の年若い兵士が泣いて、紙になにかをかいていた。

(ん……覗いてみるか…)

精神へと侵入する…

ある兵士の記憶

「あんた大丈夫なのかい？」

「お袋、大丈夫だよ。」

なんたつて本拠地だし、そうそうおちる事ないさ。

出世して楽にしてあげるよ」

「本当に大丈夫なんだね？」

辞めて農地をだがやしても、充分に生活できるんだからね。

「

「大丈夫さ、お袋…戦争もおわってこれからは復興の時期なんだし



……  
「じゃあいつてくるよ!!」

時間はズレ…

「ザザザー通信端末は砂嵐のまま…ザ、ザ…」

『マルコ!!』

「お袋!!大丈夫かい?そっちは」

『ああ、大丈夫だよ。いきなり空からコロニーの残骸が落ちてきて、驚いたけど畑共々無事よ。』

「連絡とるにも中々とれず、マルコが無事だから心配したわよ…」

「ごめんよ、災害派遣隊に従事してたからね」

『マルコ、また戦争が始まるって本当かい?』

「そうみたいだよ…けど大丈夫、本拠地の防衛隊だから心配ないよ」

『いつでも辞めても良いんだからね』

「いや…戦争になると任期満了まで徐隊できないよ…  
なにあと二年さ、お袋すぐだよ」

『気をつけてね』

時期は流れ

「先日のザフトの親玉の放送をみた、見てないは問わない……が、これより先わが軍を離反した反逆者と戦う事になる」

「まさかここをせめてくるのですか？」

「ほぼ確実だろう……だが、貴様らの知ってる通りここへブンスベースは、  
強大な守備力をもっている、また貴様らの忠実なる魂がある。おぢはしない。

それでも不安だから除隊したい者は隊の前にでろ……！」

（ま、前にでたいが……）

「……貴様らの忠実さを見せつけてもらった！」

他の隊では離反者がでて、事故として処理してもらったそうだ」

（じ、事故って……？）

「これより当へブンスベースは第2級戦闘待機にはいる……総員解散

……！」

（記憶終了）

かいてあった紙は遺書だ…正式な様式ではないのか、ただノートを切っただけかいていた…

そのままばれないように離脱し分体をおいてくる…

また他の兵士は恋人が東アジア連合に属していて、次の戦闘ではほぼ敵同士になるそうだ…

このように基地内を散歩し、前回取得しなかったデストロイ等もとる時間もあつたが…

『C18から31ゲートはこれより閉鎖されます。各員…急いでください』  
時間がきたようだ…

『全区画、Fクラス施設の地下退避を開始する。防衛体制オメガ発令』

『第七機動軍、配置完了』

『ニーベルングへのパワー供給は30分後に開始する』

（各デストロイは分体がとりついた、沖のほうでも分体はいった…さてどうしよう？）

しばらく考えてたが…防衛等無事に監視できる、基地司令部に足が赴いた…

『デュランダル議長の示した要求への回答期限まであと3時間と少しを残すところとなりました。』

「このチャンネルがいいだろ…ほれそこに東アジアの馬鹿船がいる」

『…合軍側からは何のコメントもありません。このまま刻限を迎えるようなことになれば自ら陣頭指揮に立つデュランダル議長を最高司令官としたザフト、及び、対ロゴス同盟軍によるヘブンスベースへの攻撃が開始されることになるわけですが、』

「ここらへん一掃するんで？デストロイで」

「ああ」

『…一大拠点です。』

開始されればその戦闘はどちらにとっても熾烈なものになることが予想されます』

「全軍、配備完了しました」

「では始めましょう」

「…だが本当に…」

「先手必勝と言うのでしょうか？どうせ戦うのです。向こうは追い込んだつもりかもしれないが、実際そうではないのだから」

「わかりました……全軍攻撃開始！」

ヘブンスベース基地に配備してある艦対艦ミサイル、対艦砲塔、

その他地对艦ミサイル、リニアカノンが一斉に火を放つ。

「先制攻撃は成功です！敵海上艦隊18%消滅確認！！」

（うひゃ〜酷い目にあつたわ…）

（どうした？）

（女子風呂にはいつてたらボン！！だし…）（…）

（こっちも救助完了、完全にふいつかれたみたいよ）

「よし、追撃するぞ、機動部隊出撃！」

「攻撃開始！モビルアーマー隊、モビルスーツ隊発進せよ！第二、第三機動軍発進！オールウェポンズフリー！」

「第七、第十五防衛中隊発進！」

『これは一体どうしたのでしょうか。ヘブンスベースが攻撃を開始し致しました。この未だに何のコメントも宣誓すら発せられておりません。しかし攻撃が…』

「生体CPU、リンケージ同調率87%。システムオールグリーン。」

「X1デストロイ、発進スタンバイ」

「デストロイ、発進」

「まだ敵軍反撃行動にでてません」

「はっはっはっ、いけるではないかわが軍は！さあ斉射で一掃しましょー！ー！」

「DESTROYに敵群艦隊、斉射命令」

おおっ！！と司令部内がどよめく…

「て、敵海上艦隊76%消滅…」

『現地中継カトーさん、どうされました？カトーさん？』

「一方的ではないか！まさにワンサイドゲーム！」

（でもここから覆すのがシンクオリティ）

「敵軍、戦闘行動にはいりました！！

敵MS増援出撃確認！」

「はっ今更か…」

シブリールにとっては勝ったも同然と思ってたろう…

「ふははははは。糾弾もよい、理想もよい。だが、全ては勝たねば意味がない。

古から全ては勝者のものと決まっていますですからね」

「直上にザフト軍降下ポット現出。ルート26から31に展開」

ザフト軍降下部隊が対空レーダーに引っ掛かった。

「ニーベルング発射用意」

「現時点を以てニーベルングシステムの安全装置を解除する。退避命令を発令せよ」

「偽装シャッター開放」

ザクウォーリア展開

「直上にザフト軍降下ポット現出。ルート26から31に展開」

「照射角、20から32。ニーベルング発射準備完了」

「発射！」

アイスランド島より空にむかい、レーザーの嵐がふきあれる。嵐が  
空気中にオーロラを生む。

上空降下していたMS部隊が…

「効力射、降下部隊全部隊消滅！」

（大量大量！）

『別班の映像クルーからのライブ映像です。綺麗なカーテンがみえますが…』

「敵増援MS群、接近してきます！」

「デストロイに迎撃させる！」

デストロイが、変形し切り込んできたザフト軍に対し対空射撃にて  
迎撃し始めた。

「敵機種不明2機およびインパルス、発見！」

「機種不明？新型か…モニターに出せるか？」

モニターにディスプレイとレジェンドが映しだされる。

「性能とかわかるか？」

「不明ですが、ウィングダムが太刀打ちできません…  
片方はしかも近接戦闘機だと思われませぬ」

「厄介な…」

「第二防衛ライン破られました！」

「敵モビルスーツ、湾内に侵攻！」

「ええい！なんだあの三機は！デストロイを回せ！攻撃を集中しろ  
！」

『現在反ロゴス同盟がかなり優勢とみつけますが…』

「二号機、撃沈されました！」

（女の子救助したよ）

「なにっ!?!」

「続いて五号機、撃破されました！」

（こっちは男のこだね）

「なにやってんだ!?!」



「三号機、大破！」

(女の子だよー)

ジブリールが密かに退室してく…

『やはりこの、天使のような羽根を持つ新型の機体のおかげでしょうか…』

「一号機、撃墜！」

(ステイング、幻影プレイ完了、救助済みと…)

「ジブリールこれでは…」

「ジブリール？」

「陸上専用機、上陸してきます！」

「第五、第七カメラ沈黙」

「第三機動軍、通信途絶」

「ここまでできては…もう抵抗は無理だとおもわれます」

「ええい、まだ兵力はあるではないか！！」

「わしらのいのちがかかっているんだぞ！」

「わかりました…」

「MPつれてきて拘束しろ…将兵の命にはかえられんと近くにいた部下にはそぼそと、告げる…」

『これによりロゴスの面々が  
バコン！』

「えーい、忌々しい、わしらはまだこれからだ！」  
放送してたテレビを壊していた…

しばらくすると…

「うわっ！」「なにをする！」  
拘束されてくロゴスの面々とSP…

「白旗だ、白旗をあげろ！当へブンスベースは全面降伏をする。国際緊急チャンネルでも流せ！」

白旗後最後の4号機が…

（女の子だったよ）

（じゃ、全員合流だな…あ、そういえば…アルスだっけ？）

戦闘で戦死確定だったが、記憶を捏造して海岸に転がしておいた。生身の兵士だった分、記憶の捏造は楽だった…

分体と合流後に、世界扉を潜り……

「またもや再びC・Eの世界にでる…」

「ルーロスをだして乗り込み、

「月面都市コペルニクスへ…」

「あいあいでち」

「月へと向かう…」

（最終的にはこのような形にできればな…）眼下には月の直径93 kmの中に建設された都市国家、コペルニクスが広がっていた。

この都市国家は中立に位置して、流通、政治的にも重要な立場となっていた。

「ルーロスを一度虚数空間に引き込み、

ドーム部と同化して、内部へと不法侵入する。

「ルーロスを再びだしてのりこんで…」

「アークエンジェルは確認できる？」

「できるでち」

「えーと確か屋外劇場、ローマ型のは確認できる？」

「3箇所あるでちね」

「ん、分体で張るか、場所は？」

「こことここ、ここでち」

「かなり離れてるな、それぞれ送ってくれ、迷子になりそうた」

2箇所の上空で分体をまき、最後の3箇所目でカオル自身は網をはる。

はつてると、サラと一緒にミリアが野外劇場にきた。観客側の階段をミリアがおりてく…

ミリアに近づき、後髪にナノマシンを吹き付けた。

（おし、ばれてないな…）

銃撃戦でATフィールドがでると困るので上空に避難し、分体にはアークエンジェルで合流すると伝えた…

野外劇場：舞台に一人立つミリア、そこに赤八口が現れる。

『ハロ！ハロ！Thank you very much！』

赤ハロに気づき、座席に座っているミアが…

「アスラン！」

はしってよってくる

「アスラン！貴方生きて…」

「そこで止まれ！」

何かいつてるが生身では聞こえにくい…

劇場建屋からラクスがみえてきた。

「…しよ！あたしだわ！」

「ミア！」

ミアが一本下がり…

「あたしがラクスだわ！だってそうでしょ？」

声も顔も同じなんだもの！あたしがラクスで何が悪いの！」

手に鞆から銃を構え、

「あつ！」

銃をアスランにうたれ落とされる。

ラクスに諭され泣き崩れ…

「トリイ！」

「ラクス！」

劇場の座席からサラが狙撃しようとして狙ったが、衝撃でだろう…弾がはずれ、

ラクスがキラにかばわれ建物の陰に隠れる。

サラがミニアにつれられて建物の陰に…

「キラ！こつち！」

サラが走りだしてきて、

それを契機に作業員が一斉にはしりだしてく…

あたりにはラクス一行をねらうサブマシンガンの音が響く、

アスランが拳銃で二名作業員を無力化する。

作業員は更に接近してきて、手榴弾を持ち出し建屋内部に投げこみ

「走って！」

キラ一行が女性陣とともに避難、キラが射殺する。

更に手榴弾がサラがなげてくるが、射撃によりサラのそばにおち…  
爆発により無力化する。

アカツキが劇場上空に見えてきて、焦った最後の作業員が射殺され、

『大丈夫か坊主共！』

「遅いです、ムウさん」

『あ？』

「ラクス達を早く」

『ああ分かったよ』

キラ一行が警戒しながらアカツキの側によってくる。

『ほらお姫様』

ラクスがアカツキの差し出された手に乗って、

『さあ君も』

「危ない！」

身を投げ出してラクスをかばい、

撃たれ、独楽のように回り崩れる。

「ミーアさん！」

アスランとキラがサラを射殺すると同時だろう…

「ミーアさん！ミーアさん！」

ラクスが駆け寄り抱き上げる。

ポシエットの中から整形する前の写真をラク스에手わたされた。

「ミーア！」

アスランが側にしゃがみこみ…アスランに話かけるミーア…

「ミーア！」

「早くアークエンジェルに！ムウさん！」

力尽き…「ミーアさん！」「ミーア！」

「くっそー！！！」

地面を殴り泣き続けるアスラン…

『ハ口？ハ口？ハ口？』

赤ハ口が戸惑っている…

カオルはアカツキに同化し…様子を伺っていた。

しばらくして、キラに諭され、アカツキの手にキラ一行がミーアの遺体とともに乗り、移動し始めた。

港にはいつてくアカツキ…アーケエンジェルの手前に着陸し、歩行で艦内に入っていく…

いつもなら騒がしいハンガーがこの時だけは静かだった…

アカツキの歩行音がハンガーに響く。

ラクスをかばったミーアに黙祷を捧げる整備士達一同、

アカツキが歩行を辞め、手を床につけると、

ミーアの遺体はアスランに抱えられ、

艦内通路へとはいっていく…

通路では、整備士以外のクルー一同が整列し見送る…

ラクスを庇って身代わりとなったミーアに対して、

艦一同最上の敬意をはらった。

「ラクスさんを庇って？」

「ああ。あの子だけが気付いたんだな。飛び出して…

俺の機体の手の上だったのに…。情けないぜ」

ミーアの遺体は遺体安置室へと向かう…

カオルは合流し艦に同化しながらついていった。

遺体安置室にミーアがそつと寝台に寝かされ、



「ミーア…すまない…本当にすまない…

本来なら自分らがその役目だった、

けど君が身を呈して…本当に…う…う…」

泣き崩れるアスラン…

しばらくして、軍服に着替えたキラが入室してきて…

「着替えてきなよ」

「キラ…ああ」

と入れ代わりにでてく…

「僕らが気がつかない間に…ありがとう…

ラクスを護ってくれて…」

キラは感謝の黙禱を捧げた…

ラクスが入室してきて…

「ミーアさん………」

「ラクス…」

しばらくすると着替えたアスランが入室してきた。

「プラントの子だね？名前の他は？」

「いや、分からない。何も聞かなかったんだ。俺も……」

「これは？」

ラクスの手にはポーチ内にあったディスクを取り出した。

「何もかいてないね、中身は見ないと…」

「拝見いたします。ミアさん」

ラクスが深々とお辞儀し、死体安置室から一同出ていく…

（おし…）

カオルは実態化すると、擬体と交換し、救助カプセルにいれ作動させる。

カプセルが無事に作動するのを確認、

（さて帰るか…）

世界扉を唱え…

…

カオル報告

かなりの人員…

M S M A…まとめてドン！！

DESTROY

ユーグリット

フォビドゥンヴォータスク

セイバー

バビ

ジンワプス改

ガズウート

アッシュ

ディステニー

レジェンド

グフユナイテッド

ムラサメ

オオツキガタ

アカツキ

ストライクフリーダム

インフニットジャスティス

ドムトルーパー

艦船

タケミカズチ

コンプトン級

ナギ少尉「まとめてドン！！がきたわねえ…でもこんだけ取得したの？」

作者「本当は描写もいれる…予定だったが入れたらえんらい長さになって…」

まあどうせ同化してコピーだ、分体にやらせとけ…  
という流れに…」

ナギ少尉「当初は前話のステラ散ると一緒だったのよね？」

作者「まあ…ね…」

ナギ少尉「で、削ってこの長さね…そりゃなかなか終わらないわよ」

作者「今回は見通しが甘かったと…」

ナギ少尉「でこのあと…何千人？」

作者「えっと…オーブが千強、避難民が3千強、ベルリン守備隊が約200、

へブンズベース攻略隊から、ザフト約100強反ロゴス500強、  
守備隊600強か…」

ナギ少尉「大丈夫よね？」

作者「後悔はしてない…というか足らなくなるからね。

の前に完結〓太陽系攻略になるか…ならないかか…

一応冥王星ラインまでいったら攻略でいいとは思っているけど…

土、海、天、冥、とベルトね後火もか…でも火と地がグズグズと長  
引いて、

先に太陽系外に行きそうだけどさ…」

ナギ少尉「生産ライン追いついてるの？人員は？になるのね…」

作者「まあそういうことだ。監視防衛基地だけでもおく方法はある  
けどね…」

ナギ少尉「さて次回、帰還？サブタイトルかわるかもですが、お楽  
しみにい」

第184話 SEEDの世界より帰還 投稿日20111017

2002年1月22日

横浜白凌基地異世界軍エリアB55ハンガー

「ただいまあゝ」

「マスターお帰り〜」

「不在の間は？」

「えっとまず敦煌なんだけど、ハイヴが建築されたよ」

「はあ？向かっていた部隊は？」

「勿論駆逐及びハイヴを破壊したよ〜」

「びっくりさせないでよ…」

「コアが持ち込まれ、ハイヴが根付く、  
フェイズ1未滿っうの？の状態だったよ」

「縦穴が掘られる段階だったよな…？」

「そそそ」

「で、反応炉の卵のコアは？」

「破壊したと思う…：搜索したけど、反応無し」

「一応部隊の被害報告は？」

「疲労度が若干上昇しただけ」

「だろうな……」

ガンパレの第六世代の烈火部隊である…

初参戦した学兵卒もいるが、鍛えに鍛えあげた部隊であり、  
そうそう被害はではと思わなかった。

「と、土星攻略艦隊は？」

「無事に出発したよー一応攻略ルートが土星の衛星と、冥王星だね」

「まあそうだろうな…」

「オルクスにむけてはビッグツイーが向かったよ〜」

「改造はすんだのか？」

「うん、月面との軌道レール敷設も終了したしね。ビッグスリーも間もなく、  
でビッグワンと交代でいいんだよね？」

「ああ」

「ビッグフォーが明後日完成、ファイブとシックスがまだすこしかかるよ〜」

「探索チームは揃いそうだし、探索区域内の軌道レールと、  
長距離ワープ専用地域の確保したら、  
後は打撃艦隊の増設まちな…  
とりあえず3個艦隊分は欲しいしなあ…  
あと木星への軌道レールの敷設も急ぎたいね」

前にも話がでたが、  
ワープには何もない空間が必要であり、



出現位置が星系にちかければ近い程シビアになってくる。

出現位置にデブリがあつたら……

言わなくともわかるだろう…

なので短くとも空間ごと移動できるフォールドシステムを搭載した船の方が安全面は高い。

が、フォールドシステムは時間のズレによる副作用も確かに存在する…

エネルギーチャージの問題点も…

両方搭載すれば解決だが艦の大型化は免れない状態になる…

またメンテナンス面でも…

太陽系内、外殻を含めて攻略したら、両方のシステム搭載型のハイブリットシステムが、

遠征艦には必要であろう…

が、軌道レールがあれば銀河鉄道車両は、光速以上にスピードが出せる。

また無理に重力脱出速度をGをかけて出さなくとも、

大気圏内軌道レールで大気圏外へと車両がすすむ事ができる。

ただ、軌道レールを付設すると、その付近は艦船の航行や、飛行は禁止となる。

特に揚力で飛ぶ飛行機なんか万が一軌道レールと接触すると…

翼がもげる等大惨事にはなるので注意が必要でもある。

それでも輸送力は宇宙船使うより格段にUPする事になるだろう…  
必然的に必要となるものである。

チューリップはあくまでも軍事用用途、  
常用使用できるシステムが銀河鉄道にはある。

「横須賀駅が明後日なくできるね」

「だな…これで輸送力アップするな」

輸送力が頭うちだった横浜マストライバー施設、  
それに変わり銀河鉄道を地球ーL5コロニー中央ステーション、交  
通局をかねているが…と開設の段取りとなっていた。

これにより、20両編成で、1本につき1200名以上輸送可能と  
なる。

自転問題は、軌道上ステーションと、  
宙空間側ステーション間でのガイドレール方式により解決をはかっ  
ていた。

「こけらおとしにはでてね」

「了解」

「その位か？」

「あと昨日なんだけど、嫌な情報が入って来たんだよね…」

「嫌な情報？」

「前、NGだした生物兵器あるでしょ？」

「ああ…制御が効かないゴキブリだよな」

「そのこの研究所で死人が出たんだよ…」

「は？……う、えくとまさか」

「まだあんまり流れてないけど…  
まず間違いなく肉食の何かに食われて…」

「なにかというか…ゴキブリでない？」

「うん…みたいだけど…」

「前資料貰ったよね？」

あれから計算すると、どうなるの？」

「えっと……行動範囲がこう広まって」

10日で半径50km…1日5kmの範囲で広がってく…

「で、範囲内部の住民がこう低下して…」

一ヶ月後には中心部から人がいなくなる凶悪さであった…

「……対抗措置が物理的にしかないんだよね……

蠅たたきで潰せる時もある…か…」

物理的には通常のゴキブリ並であったが、

肉を食い破る歯と口、及び分裂速度が異常であった…

その異常的分裂速度の為、NBC実験室をベークライトで硬化させ、動きを封じる事しか方法がなかった。

「……あと、普通のゴキブリサイズがいたいな…

家具の隙間等に籠られて、寝てる隙に接近されて食い殺されるか…」

研究所の死亡場所リストに仮眠室ベッドの上で、食い殺らされたのもあった。

おちおち寝てられなくなる事は目に見えてる。

さらに薬物や青酸カリ等の劇物にも耐性があり、  
こればかりはBETAの肉を食うに主眼があった為の事だろうが…  
市販のゴキブリ対策薬品は一切効かない…という事だった。

「その研究所から流出してると思う？」

「今のところ情報集めてるけど確定ではないけど…してるかと推測されるよ」

「…なんで処分しなかったんやら…」

「開発主任が死亡リストにあるからわからないね」

「対策としたら？」

「超小型対G兵器、自走式、独自判断型が理想的だね」

ふうむと、唸る…

(ゴキブリ、ゴキブリ、ゴキブリほいほい…ほいほい?…あっ)  
「ほいほいさんだぁ！」

「ほいほいさん？」

「身長10cmの対害虫駆除ロボット」

「へえ…10cmねえ…確かに駆除には最適かも…  
で、どっかの世界にあるの？」

「勿論あるよ。確かコナミのゲーム、アニメとしてね…  
ただなあ…」

「ただ？」

「そこまでプレイしてないのど、手に入るかどうか？  
になっちゃうんだよなあ…現物が…」

「ん…開発部に話もってく？」

「それが早い…期限早めで出来次第量産体制に…ってね。  
市販できるようにも付け加えておいて」

「了解、マスター…今ところはそんなもんだね」

「攻略部隊の準備は？」

「変わらないよ。全力投球中ね」

「ん…じゃあ明日救助した人のか…一日潰れそうだなあ…」

「…何人？」

「6千人近く」

「……わかった、みなにつたえとく…マスター、お休みなさい」

「ああ、お休み」

午前9時、救助した人員総数…6千人？……の人員を何回かに分けてシエルターをだした。

因みに今横浜基地には前の様に大多数の人員はいない。

ほぼ人員は佐渡基地及びL5基地と、月面基地へと移っていた。

警備の為に多数のT-850が立っていた。  
またカプセル収容する医務室がパンクし、急遽増設し始めてた。

まずはオーブ軍の総数、千人以上で正確な数が不明であつたが…

「トダカー佐ですね？自分が、異世界軍責任のカオル大将です」

「オーブ軍黒海派遣隊司令官、トダカー佐であります！！」

「えつと異世界軍に加入を問いますがいかがでしょう？」

「その前にいくつか質問致したいのですが…よろしいでしょうか？」

「はい。どうぞ」

「国は、オーブはどうなりましたか？」

「あのあと、アマギー尉達がアークエンジェルに合流しました。  
で、オーブはユウナの悪手により再び戦火に晒されます」

クツと悔しげに表情になるオーブ兵士達…

「が、カガリ・ユラ・アスハが戻りユウナから実権をとりもどすと、  
軍を掌握し、押し戻し国を護りきりました」



才

「世界はどうなりました？」

「皆さんが死んだあと、世界は戦争を司る連合の後ろ盾、武器商人のロゴスと反ロゴスに別れました。そしてザフトが組みした反ロゴスが勝ち、次にデュランダル議長VS反議長の流れになりました」

は？な表情…

「まあ最終的にはオーブ、アークエンジェルが組みした反議長派が無事に勝ち残り、戦争は終結した…事になりますね」

「そのデュランダル議長の話がわからなかったのですが…」

「ディステニイプラン…人の遺伝子を解析する事でその人の運命がきまり、それ以外の道はない、徹底的な管理社会を全世界的に導入する…を連合を弱体化したあとで提唱したわけです…」

「…カガリ様はそれに反対されましたね」

「はい。まあそういった流れですね」

「わかりました。ありがとうございます。  
ところで我々が参加するとして…どのような役割を？」

「自分としたら、どちらかといえばセルフディフェンスにあった戦い方がメインでしょうから、  
宇宙攻略艦隊の護衛艦隊をお任せする事と考えてます」

「宇宙攻略艦隊？」

「この宇宙はBETAによって支配されてるといっても過言ではありません。

その宇宙に楔をうち、生物のすめる地域を増やして、何時かはBETAを駆逐する…  
一世代ですむわけがないですが、その先陣をお願いしたいと思います  
ます」

「すぐには答が出ませんが…個人的には参加したいと思えます…否  
参加の場合は？」

「元の世界には残念ながら戦力が崩れると思えますので…  
すぐには…はできないと思います。  
最終後に記憶喪失の形か…  
またはこちらの世界で民間人として…でしょうか」

「わかりました。後ほどご報告でよろしいでしょうか？」

「構いませんよ。まだまだ時間はありますから…」

仮宿舎にご案内の形になった。

救助したオーブ軍人は、MSパイロットより遥かにタケミカズチの整備クルー等、準戦闘要員が多かった。

オーブ軍の護衛艦はシステム化が進み、最低限13人で動かす事ができる。そこに諸々含み、60位の警護要員含めたクルーが一隻の船に乗り込んだ。

一方、タケミカズチはMS運用前提の3胴艦で、今回運用していか機数が120機程搭載していた…  
1機あたりの整備士も最低限5人以上必要であり、またそれに伴う警備、衛生等の人員もまた増えまくる…  
という事になったわけだ…

さて、戦艦ドックからオーブ兵が移動し、その入れ代わりに避難民の入ったシエルターを出し、そのままシエルターの中にはいる…

ドイツ語で翻訳しながら、スピーカーで語りかける…

「ベルリン市民の皆さん、振動がきて驚かれたかもしれませんが、避難先の世界につきました。

さて、皆さんも既に自覚あると思いますが、本来でしたらあの世界で死んでました…

身内の方と別れた方もいるでしょう…

ですが、皆さんは生き残りました。

さて皆さんのこれからについてですが、

こちらの世界のドイツ国民として暮らしていただければ幸いなのですが、勿論廃墟となった元の世界に戻る選択もあります。

ですが、その選択は避難先のコロニーで一週間程暮らしてみたら

……でご決断をお願いします。

詳しい事は自分の脇にいるコバツタ達が、10人程のグループ単位でつきますので、

ご質問なり聞きたい事ありましたら聞いてください」

コバツタ達がわーっと入ってくる。

「避難先コロニーまでの期間の仮宿舍へご案内いたします」

で締めくくりシエルターからでる。

次に反ロゴス同盟に加入していた500強、の人員を入ったシエルターをだす。

だいたい、戦闘前の際に艦ごと撃沈され救助された口。

本人らが出たくとも艦長が出撃許可をだしてなく、また更に艦隊司令も出撃許可をだしてなく、

待機命令の状態に奇襲の一斉射撃により爆沈、

各々が出撃しようとしている最中にデストロイによる射撃で艦ごと溶かされた…

運不運か配置による運命と…

（比較的バランスはとれてるが、艦人員が多めだな…）

オーブの方々同様、後ほど新設の宇宙攻略艦隊の護衛艦隊に…

とご案内した。

さて、ヘブンスベース守備隊600人…

彼等は所属している部隊等がヘブンスベースについてしまった為に、軍人として任務を果たし、心の中では間違っている…

が軍に属する以上、その職務を全うし、死亡した人が大多数であった。

救助した人員に関しては…だが。

狂信的なブルーコスモスたしかにだいたいの。

勿論救助しかけたが、リリースした。

あと一部にジレンマ、恋人と敵対や、親等…も救助したが、あの戦いの跡地に帰す目論みだ。

人員とするとタンクや歩兵要員、基地職員等が多かった。比較的モビルスーツパイロットは少なめであった。

配備先が宙ぶらりんになったが、ご案内…

また未練がある等は記憶喪失して跡地に気絶状態でおいてきた。

後は、ベルリン守備隊が約200、とヘブンスベース攻略隊約100強…一くくりにしたのでわかるが、ザフト軍人だ。

ベルリン守備隊はデストロイに機体性能で…いや相性で蹂躪された。

実際のところ彼等は元々ジブラルタル基地所属の守備隊で、優秀であり、デストロイ戦以前にはかなりの戦いをこなし、

その度、連合の進撃をはね返してきた。

その為にベルリン守備隊に選任され進駐してきたわけだったが…  
MSパイロットの比重が多く、配備先はまだ未定となる。

何人が赤卒の新兵をヒルダさんにまわしておくでしょう…

次にヘブンスベース攻略隊…

その中には女性だけで構成された中隊があった…

その他の降下部隊からもかなり救助できた。

まあとりあえずどっかの部隊に入ってもらおう事になるだろう…  
最後に…

エクステンデット達が入っているシエルターを出して、中に入っ  
ていった。

「こんばんは」

一気に警戒の視線が集まる…

「しつての通り…いや皆さんは意識が無くなった後、  
どうなるかわからなかったわけですよ？」

疑問の表情が浮かぶ。

それを受け、ラボの地図をだす。

「君達が入った部屋はここ、でこの部屋の名前がガス処置室、  
麻酔ガスを使って動けなくする部屋…」

そしてその部屋の下にあたるのが処分室…  
君達をこうネットをはってこの部分で次々と救助したわけね」

何人がかえ？それって、と聞きかえす。

「気がついてる人が何人かいるみたいだけど、

君達はガルナハン陥落を受け、

ラボが閉鎖の際に殺害処分が決められてしまった…  
ということなんだ」

ラボの方で入手したマニュアル、命令書等を出し…

「まあそうだった事なんだよね…で、

救助したからといって、別に君達にラボ同様に実験とかどうにかする…というわけではありません。ただ人並に幸せになっただけ…」

「人並に？」

「そう…。人並に…」

あの世界は人一人の命が軽すぎというか、扱いを間違ってる気がしましたから…

ただ、外で人並に暮らすには君達は強化されすぎました。それは自覚して…る人もいればしてほしい人もいます」

互いにみて、やっぱり等の表情がみれる…

「そこで二つの道がありますが、強化した力を失って常人となり市井で暮らすと、

強化した力を失わずにわたし達の軍に協力して貰うか？になります」

「力を失う？できるの？」

「協力？どんな事？」

「力を失う事は異世界軍の生体工学で可能です。カプセルに入って頂くだけ、

協力は対BETA戦へのパイロットや陸戦隊等でしょう。

勿論すぐという結論は求めません。考えが固まったらでお願いし



ます」

コバッタ達がきた。

「まあ今日は約6千人救助加入等で対応に追われてるので…後ほど君達の暮らす場所等の希望を伺います。とりあえずコバッタ達が宿舎に案内するんで…あとよろしく」

「了解、マスター」

エクステンデット達がついてった…

(結局一日つかったか…ステラ達はあすかな?)

…

カオル報告

オリジナルハイヴ攻略後にむけ、  
着々大規模人員加入か…な?

作者「SEED世界より帰還しました」

ナギ少尉「人類滅亡フラグ新たに立ちました」

作者「……………多分ホイホイさんが間に合うさ……」

ナギ少尉「本当?というか何故とりにいかないの?」

作者「ん〜ホイホイさんレベルならこっちで既にできるとおもつか  
ら……な」

3529

ナギ少尉「確かにねえ…害虫駆除の小型ロボットだし……」

作者「重力がある地球では小型になればなるほど、  
重力に対する影響が小さくなるからね〜  
その分、ロボットは作りやすいんだよ」

ナギ少尉「ASIMOなどもそうよね〜」

作者「……まあそうだな。これから夏場にはホイホイさん！絶賛発売中！となるぞ」

ナギ少尉「話かわるけど、今回加入はいないの？」

作者「さすがに当日加入するには規模がおおきすぎた……って事だよ。個々の希望をきいて……だね」

ナギ少尉「で、帰れるかもなのが、ヘブンスベース守備隊と、ベルリン避難民だけ？」

作者「だな……オーブはその後の守備に加わるとまずいし……」

ナギ少尉「馬場一尉は勿論？」

作者「救助済みだけど、上官が対応してるから発言がないだけだね」

ナギ少尉「なる程ね……さて次回は……間開かないよね？」

作者「今のところ60%くらいか……早めにしあげます」

い  
」 ナギ少尉「次回、オリジナルハイヴ攻略作戦始動前：おたのしみに

第185話 オリジナルハイヴ攻略作戦始動前 投稿日20111019

2002年1月24日

昨日は結局救助した人員の説明等で一日が潰れてしまった…

(今日の予定はこけらおとしがあるよな…)

銀河鉄道の開通式…

(あとは…攻略部隊は明後日にか…)

オリジナルハイヴ攻略へと準備は進む。

(にしても、まりにも子供か…)

昨日一週間ぶりに自室に入ろうとすると、屢衣とまりもが揃ってま  
つていた。

屢衣はお腹が若干膨れてきはじめていた。

そして…「カオルさん、私にも…私にも子供ができました!!  
これで夕呼をおばさんと呼ばす事ができるわああ!!」

と涙を流しながらカオルに抱き着いてきた…

(あとは殿下だけどなかなかできないよな…こればっかは)

受胎するかしないかは神のみぞ知る…

中に出してれば何時かは……であろう…

『本日は、銀河鉄道地球ステーション、横須賀駅の開業式、及び銀河鉄道本線開通式にご来場いただき誠にありがとうございます。』

本日銀河鉄道始発の1番列車は午前11時発し5中央ステーション行きです。

発番線は11番線となります』

横須賀駅は混み合っていた。

常磐リニアの延長による始発駅化及び、横浜国際空港への横須賀新線の新設、

そしてコロニーへの銀河鉄道の新設…

地球でのターミナル駅の開業したからだ。

常磐リニアが1番から6番線、横須賀新線が7番から10番線、

銀河鉄道が11番から20番線までのホームをもち、

銀河鉄道は地下ホーム、常磐リニア及び横須賀新線が高架ホームとなっている。

地上レベルは自由通路及びエキキュートとなり、

これから旅立つまたは帰ってきた人を楽しませる事になるだろう…

横須賀新線だが、横浜白凌基地からの引き込み線の役割をもっていた。白凌基地で作られた車両等は横須賀新線を経由して本線へとはいる。また銀河鉄道の貨物列車操車場も兼ねる、横須賀東港駅への接続をしていた。

午前10時、引き込み線から構内へ1番列車となる特急型の111号が入線してきた。

外観は485系を模したデザイン、この世界に1特急がないと知ったカオルが外観変更させて作り上げた車種であった。

ボンネット型または気動車のが今だ主流となっていたからだ。

「ただいま入線してきた車両が、宇宙へといく夢の車両です。今だわたくしも信じられませんが、地上を走る列車が、そのまま空を飛び宇宙へと到達するこの事実を！」  
ホーム上に陣取ったマスコミ各社、内社のレポーターの発言だ。

日本帝国では重慶ハイヴ奪還後、比較的統制等が緩められ、希望がでてきた。

勿論マスコミも同様であり、西日本大侵攻前程とは程遠いが、段々と復活、

日本コロニーでは、全国ネットのフジテレビ、TBSが移籍し復局した。

テレビ朝日は帝都で復局準備にかかっていた。

「この夢の車両はL5中央ステーションまで約2時間で結び、我が国の領土の各コロニーまで乗り換え時間こみで、3時間と大幅に短縮されます」

「いやあ、3日間徹夜してかった買いがありましたよ、この一番列車は200枚しか一般チケットでなかったらしいですよね？」

「L5中央ステーション行き、まもなく発車します。テープカット式がありますので乗車してお待ちください」  
のホームアナウンスが流れる。

「それでは、1番列車のテープカットにご来賓の方々お願いいたします」

のアナウンスとともに、日本帝国首相、渚カオル、帝国国土交通省大臣等の面々、  
またアメリカ国務省大臣、大東亜連合交通省大臣などがテープカットにあらわれる。

「それではご準備よろしいですね？ではテープカットお願いします  
！！」

フラッシュとともにテープが切り落とされた。  
フア~~~~ン

軽い警笛とともに銀河鉄道1番列車が発車する。

「1番列車が動きだしました！！」

これより中継は高架階のテレビカメラを介して放映します！」



銀河鉄道が軌道レールにのり昇ってく……

(さて)

開通式も無事終わり、ハンガーに戻ってきたカオルは、出来上がったばかりのビッグフォーをみていた。

(こいつの行き先はまだ未定だったんだよな……)

基本宇宙攻略艦隊の偵察索敵専門として随伴していた。

また今回の反対側にそうたいするオクラルに、ビッグツーが派遣され、そのまま外宇宙方面への先行偵察にはいる。

あとは攻略艦隊の完成まち……だったが……

(まだまだ宇宙に関して建造能力が足りないよなあ……)

今攻略艦隊は、L5のプラットフォームにてサラミス改等護衛艦隊を、

L4にてコロニーレーザー及びジェネシスを建造している真っ最中である。

プラントから材料から加工した部品がだされ、多目的輸送艇でチューリップ経由でプラットフォームまで運ばれ、組み立て作業にはいる……

組み立て作業もそうだが、輸送もこれ以上ペースをあげられない状態にきてる為、

どうしても頭打ちになってはいた。

(マクロス世界の工業衛星ほしいなあ…)

マクロス世界の古代人の残したゼントラーディや監察軍の工業衛星…  
日産の世界である。

いやそもそも、おおきさが違う…

いっても一日で取得できるわけがない…

(……ほしい)

確かに完成すれば、建造能力が大幅にあがる。  
またプラントを内部に増設でき、チューリップも大量にかこう事が  
できよう。

(……んゝ取得してつくりあげるにも…時間かかるよなあ…)

多分目算で5から10年位はかかると思う…  
が価値はある。

(あつそういえば……)

破棄された工業衛星があるのを思い出した。

ゼントラーディは修理技術がない。

体型のおおきさで古代人が扱ってた部品の修理は不可能、

壊れたユニットの交換だけしかしない。  
壊れたら使い捨ての世界だった。

( 破棄された工業衛星回収しちやえばいいじゃん )

幸いにもキヤーティア技術によるステルス機能及び通信技術が、  
ビッグワンシリーズにはついている。

( じゃあいかすか… )

「ちょっとビッグフォーをマクロス世界に送り込むよ」

「ん？なんで？」

「破棄放棄された工業衛星の回収、修繕してこの世界での造船速度  
の加速させるんさ」

「へえ〜……放棄された工業衛星ね〜…そんな都合よくあるの？」

「ああ、あるさ。

なにせ監察軍が28万年前にも、ゼントラーディ軍のグラージ自動  
製造工場を破壊した事だし」

「その28万年前のが残ってるかな？」

「ま、それはポイントとして…大規模星間戦争のあとだ。記録から抹消されたのはあるはずさ…」

「なるほどね」

「まあ回収できればできたとして、  
できない前提でもコピーはして、建造開始しておくべきだけどな…  
けどコピーに何日かかるやら…がなあ…」

「オリジナルハイブ攻略後だね、建造プランは…」

「まあ…な…っとサクッといつてくるわ」

「いつてらあ…あT-1000最近みてないけど？」

「あつ……後で回収してくる…」

ビッグフォアを虚数空間に入れ、  
世界扉を唱えた。

「マクロスの世界」

マクロスの世界、時代はFの少し前あたりの地球にでたカオルは、ビッグフォーをだし…機関車内部で情報を受け渡していた。

ターゲットはロストし稼動していない全自動生産工場衛星…

また28万年前に破棄されたグレンジ生産工場衛星…

(よしつと…)

「機関車」

『マスターなんですよ?』

「頼むな」

『了解しました』

ビッグフォーの外にでると…

光学迷彩がかかり、見えなくなったビッグフォーが発進していった。

(さてと次か…)

世界扉を唱える。

「フルメタルパニックの世界」

フィリピンにあるセーフハウスだ。

「マスター!!」「マスターだ!」「お会いしたかったです!」

「久しぶり、元気そうだな」

「報告が…この世界に対しての影響はありませんでした。ここにかかっている通りになっています」

千鳥かなめは卒業式に無事に出席し、相良ソウスケと校門で、あついキスをしていた映像がうつっていた。

「おつかれさん…じゃこの世界ではもうないな…撤収作業だ」

「了解!」

現金等はすべて資源にかえ、有能なエージェント3人と共に3時間後に撤収し、

世界扉で元の世界へと戻る。

翌日…

オリジナルハイブ攻略の為参加する人員に、今だ訓練生という身分がいた…

彼女達は攻略作戦参加の為に卒業式を経験し、正式な軍人へと雛だつ…

午後のミーティングルームにて、訓練教官であつたまりもの他に、国連軍士官が説明に同席していた。

「さてきみらの配属先だが…、榊少尉、球瀬少尉、鎧衣少尉、以上3名の者は同一部隊である、横浜基地司令部直轄の特殊任務部隊、A-01連隊への配属がきまつた。おめでとう」

「はっ！拝命いたします！」「はいめいいたち…ます」「拝命いたします」

「御剣少尉、彩峰少尉以上二名の者は、異世界軍、特殊作戦群への編入要請がきている。

これは強制ではない。本人の任意によるものとするが、その返答はいかに？」

「……拝命いたします！」「……拝命いたします」

「では御剣少尉、彩峰少尉以上二名の者は諸手続き等あるので1330人事部へ出頭するように…」

他の者は1330、このミーティングルームに待機、以上解散！！いちどまりもと士官が退室していった…

「……もうあえないのかな？」「彼等は殆どわれらと共に行動して

る…大丈夫だ」「みんなとヤキソバパンまた食べる」

「けどなんで?」「わからないけど前衛的だからかしら?」

「聞いた話、強化実験」「おぬしその話どこで?」「白銀から」「真か?」「うそ」

「……」「でもロケットパンチ生身でうてるらしい」「慧さん」

「まあ所属部隊は違う事になるけど…冥夜、慧…いつまでも私達一緒よ」

「ああ。そなた達と共に…」「うん。わかった」「慧さん」「御剣さん…」

「では行くぞ彩峰」「うん」

ミーティングルームより彩峰と御剣がでていった…

おなじ頃、医務室では…

まだかなりこんでいたが、空になったカプセルが少しずつでてきた。

先のオーブ軍の重体重傷者やベルリン市民、ラボでのカプセル入りが、次々カプセルからでてきはじめたからだ…

そして医務室のある一部屋にはカプセルが7個ならんでいた…

カオルが操作し、カプセルの3つの蓋があく…



「ん……ん」

「あたま……いって……」

「く……っ……」

「おめざめいかがかな？」

「う……っ……だ、誰？……」

「あ、アウル？」

「ス………テラ？」

「おいおい、どうなってんだ？これは？」

「きみらが撃墜されかけた所を救助したり……でこの世界に連れてきたわけなんだよ」

「あのガンダム！」

「シン………」

「記憶ねえなあ……」

「でもって確かこんな設定されてたんだよね、死、お母さん、夢」

「ヒッ!」「クッ!」「!?!」

「あ、あれ?」「しぬ…?」「ん?」

「きみらに課せられてたブロックワードは、このカプセルで解除したよ、

後定期投薬等の必要もなくなったってね」

「……自由になったのか?」

「ああ、自由になったんだよ。きみらはね…  
だけど自由になるには強すぎるでしょ?」

「むう」

「いいじゃん?つよきゃさあ」

「アウル?」

「まあそういったわけにはいかないんだ…なんで選択肢が二つ、常人並に力を落とすか、  
自分らの軍に入って対BETA戦に協力してもらうか?だね」

「BETAってなんだ?」

「食べ物？」

「まあ…これから見てもらう紹介映像でこの世界の事も含めね」  
DVDを流しはじめた。

……

「とまあこんな世界なんだよ」

「力かしたるよ…なんだい？あの気味悪い生物はさあ」

「同じく…生き物ぶち殺す」

「二人に同じだな」

「ありがとう」

「ところで乗る機体はなんだ？」

「まあおいおいと…ね。今はとりあえず学校にいつてみない？」

「学校か…経験ないな…どうだい？アウル、ステラ」

3人とはなしこみ、夜はふけてく…

……

## カオル報告

明日いよいよ攻略作戦始動…

ナギ少尉「あれ？技術検証は？」

作者「SEEDの？」

ナギ少尉「そうよ、デストロイ出さないの？」

作者「あゝ…間に合わないというか別件で動いてるからなあカオル  
…」

ナギ少尉「何別件って？」

作者「ネタばらになるから秘密、  
まあ技術検証はオリジナルハイヴ攻略中か、後だろっな」

ナギ少尉「オリジナルハイヴ攻略後ってチート過ぎると思うんだけ  
ど…  
弱体化するんでしょ？」

作者「あ号がいなくなっただよな…が、  
正直人類は追い詰められてたのをなんとかせき止めてた…」

だから楽しんであげたいんさ……」

ナギ少尉「まあね……」

作者「それに宇宙、太陽系がまだまだあるよ……追いつかないし、そ  
っちは今だね……」

ナギ少尉「バーナード星系もあるもんね。じゃあ、次回、オリジナ  
ルハイヴ攻略、桜花作戦始動おたのしみにい」

2002年1月26日未明…

場所は重慶基地

人類反撃の最前線である異世界軍の基地と化した、  
ここ重慶基地に続々と陸上艦船が入っていく。

また中型チューリップが使えない大型機体群も、空輸にて運ばれていた。  
エヴァンゲリオン、勇者ロボット等…がリフトや自走でメインゲートに入っていた。

元フェイズ5になりかけだったハイヴを再利用した基地では、  
多数の大型艦船を収納できるスペースができてた。

またトレインギャロップがその編成を崩さずとも、  
直接地上に出られる広大なスペースが確保されていた。

チューリップ場では、  
多目的大型輸送艇に乗ってきた陸戦強襲型ガンタンクが、  
接地、タラップが下りるとともに自走し、  
目的のカーゴにおさまりに行く、

空になった輸送艇がチューリップにはいってく…

そんな光景がみられてた。

現在ここ重慶基地にはオリジナルハイヴ、  
カシユガル攻略の為の艦隊が集結中であつた……

土星近海にフォールドを終え、土星に近づく攻略艦隊……

ビッグワンの交換に、土星にきたビッグスリーによる探索の結果6  
4個の衛星の内、  
BETAがハイヴを築いてたのが2つと判明した。

まずはタイタン、  
そして土星の輪の中にある衛星ディオネ……

地球以上に濃い大気をもつ最大の衛星、タイタン。

直径5000km程の大きめの星であり、BETAは、8つのハイ  
ヴをつくりあげ、  
タイタンを埋めつくしていた。

艦隊司令部では……

「タイタンは監視迎撃基地を作り上げるだけでしかないか」



「ですな……相性が悪すぎる」  
ドブル閣下とその副官が話あっていた。

攻略艦隊の攻撃方法はコロニーレーザー主体による軌道上からの大規模出力攻撃。

このままタイタンのハイヴを攻撃すると、  
タイタンの分厚い大気に阻まれ拡散し、  
地表周囲800kmと数十mの岩盤を焼く程度の効果しかのぞめ  
うになかった。

それでは意味がないのである。

一度の一連の攻撃により反応炉を攻略…それがこの宇宙攻略艦隊に  
課せられた使命であった。

監視迎撃基地とは、これ以上設営された範囲、この場合タイタンか  
らのBETA拡散防止による、  
到着ユニットの宇宙空間上での迎撃基地になる。

基地要員は主にターミネーター達で、直接操縦されたVF-171  
の迎撃部隊による、  
反応弾による攻撃となる予定だった。

「当艦隊は、衛星ディオネを攻撃する！、  
衛星タイタンは監視迎撃基地を設営のみにする！」

「地球へ報告」

「了解」

地球の司令室へフォールド通信でもって瞬時に内容が伝えられた。

衛星ディオネは直径1100km…

ギリギリBETAが到着に選定するサイズの衛星である。

薄い大気が存在するながらも、さほどコロニーレーザーに影響しないレベルであった。

表面を氷で覆われており、内部構造に岩盤が存在している。

ディオネにあるただひとつのフェイズ9相当以上のハイヴへ、土星攻略艦隊はコロニーレーザーを撃ち込むべく、軌道修正をしながら進んでいた。

2002年1月26日正午

重慶基地

「われわれはこれより約3000kmの道程を制覇し、目指す目標、オリジナルハイヴを攻略する。」

敵BETAの戦力は激減している。今こそ攻略に最適な時期である

！！

われら異世界軍の力をみせつけよ！

そして、更なる進軍で地球上からBETAを叩きだすのだ！！

これはその為の一步である……

全軍、前進せよ！』

（横浜基地異世界軍司令部）

「第1砲撃艦隊前進！」

重慶基地のメインゲートより、ビッグトレー砲艦型が順次前進して  
いく…

ここ司令部では演説をおえたカオルがスクリーンをみていた。

今回参加する戦力は、

ほぼ地上における攻略艦隊としての戦力すべてであり、

まず艦隊として、

トレインギャロップ150隻、

ビッグトレー砲艦型が60隻、

ミサイルビッグトレー30隻、

及び対空型10隻、

コスモクリーナ搭載ギャロップが4隻。

以上の艦船が投入される。

各基地の護衛隊として残っているのが、  
ミサイル型10隻であり、  
各戦線に貸し出ししている対空換装型、砲艦型以外には、  
トレインギャロップが10隻のこすのみだった。

異世界軍の現存する打撃艦隊戦力をほぼ投入してる。

毎回毎回そうだが……

メインゲートからすべてで終わり艦隊編成を組み、  
進撃し始めた……

先頭を走るグループに砲艦隊、  
その後ろにミサイル艦隊が追従している。  
中心部に対空ミサイル艦、

左右にトレインギャロップがついてきていて、  
トレインギャロップの護衛に61式改、  
全体的にホバートラックがカバーしている。

トレインギャロップに搭載されてるのは、  
モンスター改1000機、  
陸戦強襲型ガンタンク6000機、  
61式改10000両、  
61式重機関型2000両、  
魔対空型ティエレン500機、  
ホバートラック、500両、

有人部隊にB - 01連隊、沙霧連隊、D - 01連隊、SPR群等がいる。

新しい機体は搭載はされてない…が、物量には物量を、補給絶やさず撃ちまくれ！  
が信条の異世界軍らしさの大規模陣容になっていた。

A - 01は凄乃皇と同行の為後程合流予定となる。

また大東亜連合軍から1個機甲師団、  
帝国から1個甲連隊、  
国連軍から1個師団、  
中華統一戦線から3個師団。  
が搭載されている。

攻略艦隊は時速約80kmのスピードで、敦煌まで1日で踏破し、  
進路をかえオリジナルハイヴへ向かう…

司令室からハンガーへ移動したカオル…

Gとタイタンの報告を受け取っていた。

「……初の民間人の死者か…」  
研究所のあるそばの仙台市青葉区西公園にて小学1年の男子の白骨死体が発見された。  
搜索願いがでてから丸1日目の事である。

世間ではまだ殺害方法なんだ？

と騒がれているが、ほぼ間違いなくGの仕業であるのは確定的だった。

BETAでない原因が骨が完全な形で見つかった。  
また完全に勢力圏外である。

他の薬品等でないのは骨に薬品等で変色等ない面、

また他の肉食獣でないのが、  
きつちり綺麗に骨をのこして喰われていた面であった。  
軟骨等は残っている。

「今のところの一件だけが発覚したけど、ほおっておくと…」

「仙台市が一ヶ月後にはか…」

「なる可能性大だね…」

「しかも世間様は冬場だからゴキブリ対策を怠っていると…  
あと東北だし…」

「無人化がすすみそうだね」

実際の所、北に行けば行く程この世界においてもゴキブリ対策はしてなかった。

むしろ難民キャンプでは食料源としてから揚げが、闇市で高値取引されてたくらいだった…

難民キャンプ等は既になく、衛生、治安面でははるかに向上していたが…。

そんななかの不審死であった。

「……でホイホイさんはどうなってる?」

「試作品が一応はできあがってるね」

「さすがヒルダさんの開発部 ……もってこれる?」

「ちょっとまってね」

……早いとこなんとか手を打たないと、日本本土が滅亡するよな  
……)

「もってきたよ」

「ホイホイさんそっくり」

こぼったが115mmの高さのインターセプタドール、ホイホイさんをもってきた。

「今回モデルがあつたからね」

コバツタのアームにはコナミのPS2ソフト、初回盤があつた。

「機能も？」

「えっと、うん、火災消火機能もついてるね」

「…じゃ試してみるか…乱れてそうな場所は…っと…」

……

「夕呼さん、よろしいですか？」

「いいわよ入ってらっしゃい」

「失礼します」

「で、何用？オリジナルハイヴ攻略前の忙しい時期に？」

「用って程じゃあ無いんですが、相変わらず乱れていますね…」



「わかるからいいのよ……ん？何？そのお人形は？オママゴとでも始めるの？」

「ああ、こいつはインターセプタドル、ホイホイさんです。ちよつと実験させてください」

スイッチを入れ置くと早速動き始めた。

「実験？何なのよ？」

「ゴキブリとか居ますよね？この部屋」

「いるんじゃない？」

充電器のをコンセントに差し込んだ。

ホイホイさんがダツシュした。

右腕のブロードソードが唸る。

グチャ

「早速一匹かな？」

「ゴキブリ？」

「の…ようですね」

ホイホイさんが走り回っている。

「害虫駆除のロボットなの？」

「ま、そうです。収穫終了コマンドついてるよね？」

「本当は害虫が当該エリアになくなるまで…だけど、今回ののはついてるよ。送る？」

「キリなさそうだからな。やってくれ」

ゴキをおっかけてたろうホイホイさんが動きを止め、装備を持ち替えると、

ほうきとちり取りをだし、収穫した害虫を一箇所に集め始めた。

中身がデロンデロンにでてるゴキ、等が集められ10cmの山となる。

ホイホイさんは殺害現場に戻り、跡を掃除し、終わると、

山の隣にきて山を指差し主人にアピールする。

純白のメイド服がかえり血で汚れながら…

「うん。いいね」

袋を差し出すと、その中に入れはじめた。

「この部屋にも一つ頂戴」

「用意できる？」

袋に入れ終わったホイホイさんは自分の汚れ掃除を始めた。

「うん、明日には」

プラスチック製のメイド服の汚れはすぐにおち、  
とことこあるくと充電器に自らおさまった。

「では、失礼しました」

「あ、明後日A-01は合流するけど大丈夫なのよね？」

「手配済みです」

「そう、わかったわ…じゃ、いいわ」

退室した…

「とりあえずPRイベントで大々的に仙台に送らないといけないな  
…」

「日産、とりあえず500体はいけるよ」

「すべて駆逐できるとは思わないが、  
仙台市でPRイベントでぶち込んでくれ」

「了解、マスター」

ハンガーに戻りコバッタが手配かけた。

「ところでマスター、タイタンはどうするの？」

「火星共々大気があるのがなあ……」

思考の渦に入っていく……

「あ…：そついえばGって、元々対BETA用だったんだよな？」

「うん。そつだね」

「どうせ火星、タイタンとも無人だし撃ち込んでみるかな？培養して、1万匹単位であたりで」

「BETA 駆逐し、G が餓死するまで立入禁止になると思っけど？」

「まあそれはしょうがないさ……」

「じゃあ、わかったその方針でいくね……」

G 搭載輸送ミサイルの開発がはじまったようだ……

エクステンデット達も続々とカプセルから出てきて、  
一勢力といえる人数になろうとしてる時、

最後のカプセルが動作しはじめる。

ミーア・キャンベル、ザフトにおけるラクス・クラインの変わりとなつた人物だ……

カプセルの蓋があき、ミーアが覚醒しはじめる。

「ん……」

ミーアの目が開き……

「知らない天井……」

しばらくミーアはぼーっとしていたが、

(はっ……ここって……あっ、わたし……死んだのよね？……ラクス様  
庇って)

（回想）

「危ない！！」

ラクスの前に身体をだし、激痛が身体にはしる。

（）

（……じゃあ天国？）

手を動かしカプセルの淵を触る。

（うっうん。天国じゃない……けどなんで？どうして？……あっ弾が……）

ミアアが、撃たれた記憶のある場所をめくつてのぞきこむが……

（傷跡も……ない……けど服は血がついてるし……）

「あ……もう……わけわかんない！！」

「おめざめですか？」

カオルが入室してきた。

「えっと……どちら様？」

「ラクス・クラインさん……」

いいや、ミアア・キャンベルさん始めまして、異世界軍の責任者を  
している渚カオルといます」

（私の本名しってる……異世界軍？）

「失礼ですけど、異世界軍という勢力聞いた事ありません。

ここはプラントですか？それとも地球連合？」

「どちらでもない全くの異世界です…  
あなたは一度死に異世界にて蘇りました」

「異世界？蘇った？」

（あつ…じゃあ別れの記憶も…）

「ええ、詳しくはこちらのDVDにて…」

映像が流れる。

「……ようするにわたしをスカウトしたいってわけね？」

「ですね」

「でも歌う事しかできないわよ？操縦なんてムリムリ」

「歌って文化を広めたい為にスカウトです」

「本気なの？」

「はい。この世界はぎりぎりまで追い詰められました。  
当然文化等も戦争の為、人ならず文化までも…」

そんな中復活に手掛けて欲しいんです。  
異世界から来た歌姫として…ミア・キャンベルさん」

「ラクスよ」

「はい、ラクス・クラインさん」

「この世界にはラクス様はいない…からわたしがやるのね？  
一日も早く平和を勝ち取る為に」

「はい。お願いできますか？」

「わかったわ。協力する」

「ありがとうございます。じゃあ、とりあえずコバッタがご案内しますので」

ミアがコバッタについていった。

カプセルを収納しまくるカオル。

2002年1月27日午前6時



『……それは全身全霊を捧げ絶望に立ち向かうことこそが、生ある者に課せられた責務であり、人類の勝利に殉じた輩への礼儀であれと心得ているからにほかならない』

ラダビノツド准将が、桜花作戦にむけ放送をいれている……  
朝もやのなかから機のHLV、往復大量離昇機が打ち上げをまっていた。

『大地に眠る者たちの声を聞け……  
海に果てた者たちの声を聞け……  
空にちった者たちの声を聞け……』

彼等の悲願に報いる刻が来た。そして今、若者達が飛び立つ……  
鬼籍に入った輩と、我等の悲願を一身に背負い、敵地に赴こうとしているのだ。

歴史が彼等に脚光を浴びせる事がなくとも、我等は刻みつけよう。  
名を明かすことすら許されぬ彼等の高潔を、我等の魂に刻みつけるのだ。

旅立つ若者達よ……諸君に戦う術しか教えられなかった、我等を許すな。

諸君を戦場に送り出す我等の無能を許すな。

願わくば、諸君の挺身が、若者を戦場に送ることなき世の礎となることを……』

ラダビノッド准将の言葉が終わり、5機のHLVロケットエンジンのカウントダウンが1分を切る。

HLVにはA-01所属機及び淩乃皇が搭載されている。

カウントダウンが15秒になりエンジンに火がともり噴煙があがる…

カウントダウンが0をさし、炎が噴き出し、

HLVがその重い自重を重力に逆らい空へとのぼりはじめる。

衛星軌道上へと向かう武、伊隅達の姿をを、  
国連軍所属の多くの人々が敬礼と共に見送った。

その中には渚まりも、身重になった渚屢伊の姿があった…

打ち上がるHLVに搭載されている淩乃皇、コクピットには白銀が座っていた。

復座席には霞が着座、管制席には涼宮遥が着座している

打ち上げのGが白銀にかかる…がシャトル搭載よりかは比重が低い  
と思えた。

HLVは一路宇宙へと飛び立つ…

しばらくすると体感Gがきえてき…

「うわぁ…綺麗…」

「涼宮中尉は…始めてでしたよね？」

「ええ…白銀大尉は？」

「二回目ですね。銀河鉄道で一回」

「わたしも何時かはのりたいです」

「休暇が1日でも取ればコロニー観光はできると思いますけどね…」

あ、霞、作戦終わったらいつてみるか？」

「はい…いつてみたいです。」

「と…見えたか？…A-04より各機、コロンプス確認、軌道修正プランを送ります」

『了解』\*多数

HLVは衛星軌道上に待機していたコロンプス改級に回収接舷され、再突入用時軟着陸用推進剤を補給する手筈となる…

⋮

カオル報告

桜花作戦始動中、  
まだ接敵はしてません。

ナギ少尉「いよいよ司令塔のあ号攻略ね」

作者「地球上はこれが転機にはなるな」

ナギ少尉「確かほつき型の指令システム、情報伝達だから？」

作者「まあそういう事さ」

ナギ少尉「で火星とかタイタン用のフラグ消化も、さりげなくしてるね」

3572

作者「無人なら活用方法はある…って事だな。

大気が本当に邪魔だったか…」

ナギ少尉「でも一方的にBETA最近やられてるよね、それに対してBETA側、どう反応するんだろ？」

作者「まあ…資源採取用の民間人レベルだからなあ…

少なくとも太陽系にいるのはさ…

反応できるかどうか…ま、

ある程度異世界軍が今までのか？  
に対応はしていてもおかしくはないかもな」

ナギ少尉「BETAにとってのベリーハードモードに突入中だもん  
ね…  
と、さて次回、桜花作戦発動中、カシユガルへ…おたのしみにい」

第187話 桜花作戦発動中 カシユガルへ… 投稿日20111026(前書

風邪をひいてますので、投稿スピードが落ちます…

日本時間2002年1月28日 午前10時、

朝もやの中朝日が昇りはじめ、その朝日を背につけ、異世界軍はオリジナルハイヴへ向け前進していた。

そして…

「オリジナルハイヴに動きあり！BETAが湧き出てきました！」

「きたか…総員戦闘配備！！」

砲撃艦隊は最大戦速、30km前進し砲撃体制に移行！

ミサイル艦隊、停止し、射撃準備！！」

ハイヴまで400kmの地点にきたとき、1番敦煌よりの門からBETAが湧き出てきた。

ハイヴ中心部から107km地点の門から続々と湧き出はじめていた。

「煙幕弾頭ミサイル発射せよ！」

艦隊中央に位置するミサイルビクトレーから、煙幕弾頭装備したトマホークが打ち出される。

続いて2射目、3射目……



時速800kmで飛行するトマホークが迎撃範囲にはいるのが、BETA群の30から40kmあたり、そこまでに約15分到達まで時間がかかる。

その間も無限にわいてくる煙幕弾頭ミサイルを休まずうちつつけると…

「戦域、煙幕濃度100%越えました」

「通常弾頭弾、発射あ！」

ミサイルビックトレー15隻から一斉にトマホークミサイルが射出される…

司令室から戦場となるカシュガル、オリジナルハイヴ戦域をみていた。

（遠距離戦に関しては、レーザー、ビーム兵器解禁だろうと変わらないだろうなあ…）

地上では大気減衰の他に地平線というものが存在し、BETAにも新型種族が出た通り、大地とゆう有効な遮蔽物を利用して長距離間接射撃を加える事ができる。

そこにビーム兵器が加わるとすると…大規模出力と射線を確保するための高度をとる、

または大地を地下40km程削って直線射撃を加える…

という非現実的な手段しかない。

または大気圏外からの高出力砲塔によるビームシャワーでも良いが、大気や地球自体に大規模的に悪影響を及ぼす為使えない手段であった。

「まもなくモンスター改の射程圏に入ります」

160kmの射程を誇る実弾兵器は、

BETAの大砲級の射程約80kmをはるかに越える優秀な機体だった。

(マクロスの世界から持ってきた良兵器だよな…この機種のみ唯一発展してるし。

こっちの戦艦の主砲並、いや射程でいえば以上だしなあ…)

「モンスター改射撃開始します！」

BETAの迎撃群に対し、2000機の半分1000機による一斉射撃が開始される。

4000発、分あたり24000発の砲弾は、先頭を走る突撃級に突き刺さり、

着実に個体数をへらしてく。

また味方の死骸の為最高速を保てずに、一方的に撃たれる時間が増えつつあった。

(相手が地上というスピードでくる限りは…  
地球外でももちろん活躍できるよな…)

モンスター改2000機、生産費用というのを度外視できる、異世界軍だからこそだろう…  
普通に発注すると…嫌な費用にはなる。

20射目で弾薬補給の為交代し残りの1000機が撃ちだす間に、後ろ側の足元におりた給弾コンベアにコバツタ達が弾薬を補給する。

BETAにとって一方的に撃ち込まれる60kmの区間を、的確に突撃級の最高速を出せずに約1時間程拘束させていた。

「ビッグトレイ、射程圏内に入ります!!」  
100km圏内にまもなくかかるうとしている。

(この陸上戦艦と、鋼鉄の咆哮の組み合わせが、やっぱりよかったよなあ…)

『砲艦型、主砲塔一斉射ああ!!』

61cm砲、分あたり77万7600発の面制圧の射撃が始まる……

オリジナルハイヴまで攻略の道ができたのも、一重に物量による補給なしの制圧が可能となった、無限弾薬装填装置の恩恵によるものが大きい…

これにより通常50発も撃てば補給の必要が出てくる大口径実体弾も、

補給の必要なく移動砲台としての役目が果たせる。

また通常ではありえない供給速度、発射速度、旋回速度を可能にした、自動装填装置…  
そればかりか、砲身の命数無視できる点や、冷却効果が発生するのがおいしかった。

通常、砲身は弾が発する熱により熱をもち、それにより歪みが発生する。

その歪みが酷くなると弾道が安定しなくなり、砲身を新しいのに交換しなくてはならない、

铸造性能によるが、旧軍大和46cm砲で200発、改大和型で400発での交換となる。

戦車砲になると、90式で800発、  
陸戦強襲型ガンタンの220mmキヤノンで1500発、  
61式改プラント製で1800発、  
三菱製で1200発となる。

もちろん戦闘中にできないのであくまでも基準だが、  
ほっておくと急激に命中率がさがり…  
そのうちに砲身破裂等の重大事故に繋がるわけだ…

実体弾による宿命といっても良いだろう…  
それを自動装填装置は回避してくれた。

また艦内に不調がでないか？と監視しているコバツタ達整備チームもいる。

偵察に出てたルーロス改からの確定情報がはった。

「個体総数約1169万の内約78万が迎撃に出てきました」

（ルーロスも良かったな…）

遊びにいくヨの世界から取得した超技術の一端、ルーロス…

星間経済を確立し、彼女らにとって古い技術ながらも、軌道エレベーターを無償でプレゼントするあたり、高い技術力の一端が見えると思う。

その一部であるルーロスをつくるのさえ時間がかかり、その技術の物質透過リーダー…今ではなくてはならないものになっていた。

「まもなくBETA群先頭、陸戦強襲型ガンタンク射程圏内にはいます。

残像個体数約6万」

（すべては陸戦強襲型ガンタンクからだよな…）

RTX-44 陸戦強襲型ガンタンク…

異世界軍の道はこの機体からはじまった。

タンクにありがちな鈍重さがなく、多少の不整地はなんのその。山を削り森林を薙ぎ倒し整地したBETA占領下の環境では、まさに走る陸の王者とよべる程だった。

その彼等が待ち受ける射程圏内にBETA群の先頭が侵入しようとしてきた。

OTM技術の導入が全機体に浸透し射程が10kmから約2倍の20kmに延びた、

220mm滑空砲がいまかいまかと待ち構える。

「陸戦強襲型ガンタンク射撃開始します！」

20km圏内に踏み込めたBETAはさほど居なかった為、一撃必中を陸戦強襲型ガンタンク操縦するヤドカリ達は選んだようだ。

220mm滑空砲から必中の砲弾が放たれる。

それが地獄の道のりを抜け出した要撃級に突き刺さり、体内で爆発し、四肢が散乱する。

今だ61cmの放火は止まず、直に迎撃の為に出来てきたBETA群は殲滅されるだろう…

「ルーロスより入電、第二次増援が出現しました！」

(おうおう…怖いねえ…)

一次迎撃が不利とされたのか、増援として迎撃に出てきたようだった。

「今迎撃中のを 群、門より出現中を 群と命名。

煙幕ミサイル攻撃から再びしかける。

艦載各機の補給たやすな!!!」

今までの国連軍等の失敗は、規模を見誤って、個体数を把握してなかった事…

一次迎撃をやつとの事で殲滅しかけ緩んだところを、

2次迎撃で絶望までたたき落とされて壊滅…

また補給等も滞り弾薬、武装もなくなり…

生きながら食われていく事となる。

無限ではない。何時かは途切れる時が物質ならありえるのだ…

その時を目指して砲撃は放たれる…

く同行している中華統一戦線の衛士く

殲撃8型から、機体に音の衝撃が届いてくる、  
ビッグトレー砲艦型の方へと視線が行っていた。

迎撃群に対し第二次防衛ラインを任されたのだが…  
BETA群が押し寄せてくる前に殲滅させられ、  
再び砲撃が始まったので必然的に視線がそっちの方へといってしまう。

「砲撃止んでないよなあ…？」

『ああ…かれこれ2時間近くあの一番手前の砲門、砲撃止んでないぞ』

「俺らの突撃砲…2時間もたないよなあ…」

『確かに…弾薬も2時間連射なんて、何回補給しなきゃいけないか…』

「あの砲身一つでも欲しいよなあ…」

『あの砲身を突撃砲につけるってか？』

「いい考えだろ？」

『俺らの機体の手で保てるか？』



「あつ……」

オリジナルハイヴを攻略してるとは、  
おもえない程気がぬけていた。

まだ彼等の本格的な出番は少し先だった……

〈Sideある兵士end〉

〈Side白銀〉

この宇宙空間で待機しているのは、2隻のコロンブス改とHLVしかいなかった。

そのコロンブス改にて推進剤を補給したHLVの5機は、司令部からの突入の合図をまっていた。

HLVの簡易仮眠室等で思い思いにまっている。

前の世界とは違い、多数の再突入艦はいない、A-01部隊単独による大気圏突入であった。

（この数で突入とはな…前の世界…突入でも多大な被害がたよな…）

〈回想〉

大気圏に多数の再突入駆逐艦がオリジナルハイヴに対し、軌道爆雷を慣行しようとしていた。

が、軌道投下された対AL弾を迎撃せず、重金属雲が発生しない…ばかりか、SW115付近に展開していた味方を全滅させるという最悪な事になってしまった…

の為に中間層に突入した駆逐艦に重光線級のレーザーが襲い掛かる。駆逐艦は次々と爆散し大空に残華してく。

未だレーザー照射を浴びずに残存し先行していた駆逐艦が、その機体をレーザー照射を遮る軌道へと移動する。

盾となり、わずかな時間で爆散する……

『人類をツーー頼むぞ……ッ!!』

新たな華が凄乃皇の前で生まれる。

次々と盾となり爆散、凄乃皇の後方に位置していた駆逐艦も、再突入を分離し、凄乃皇の前に出て盾となる。

『貴様らは無傷でオリジナルハイヴに連れて行く事が我等の任務…

…!!』

新たな華が…

『人類反撃の切り札となる決戦部隊を運んだ事は、駆逐艦乗りにとつて最大の名誉だ!!』

『その名誉をけがさせはせんッ！そして貴様達にめ手出しはさせんッ！』

『フランスをーユーラシアを取り戻してくれっ！！』

口々に叫びを残し華となる駆逐艦群…

爆散していく彼方に遂にオリジナルハイヴのモニュメントが視界にはいった。

地上を目指していく無傷の凄乃皇…

再突入殻から強行着陸をとる5機の武御雷がいた…

回想end

ガコン

コロンブス改からHLVのドッキングが解除され、アームをもってHLVが押し出される。

思い出していたら何時の間にかに合図がでたらしい。

『ユーハブコントロール』

『アイハブコントロール』

HLVが地球に向けフリーホール状態になってく…

(やっとか…結構手間取ったみたいだなあ…)  
時刻をみると、日本時間29日翌午前3時…

宇宙にあがってドッキングしてから17時間たっていた事になる。

予定時刻を大幅に上回ったが、司令室より合図が出たため、コロンプス改から離れ、大気圏突入する事となる。

『ヴァルキリー01より各機へ、地上部は既に異世界軍の手に落ちた。』

光線級のレーザーは上がってくる事はない筈だが、  
万が一に備え、パーミアウトに備えよ』

現状、成層圏中の高度15kmあたりでレーザーがあがってくる可能性がある。

白銀の経験では、90km中間層あたりの高度でも迎撃がきたのだが、  
横浜にて情報が漏れた影響によるもの、またML機関臨界運転による誘引によるものとして、  
報告済みの留意事項となった。

万が一…中間層でHLVが迎撃されると、  
機体の非常用を使い単身突入にはなる。  
が…やめといった方が精神的に健全であろう。

一応熱圏では迎撃されず、中間層あたり、90km以下では可能性はある…との事だ。

HLV5機は重力にひかれ大気圏にまもなく突入しようとしている。

H L Vの突入角度は通常よりやや浅め…

外部カメラが、H L V自体が赤くなり始めているのを映しだす。引力に捕われ熱圏に突入したのだ。

大気圏突入能力がない機体などは、この熱圏での強制減速の熱で一気に温度が急上昇し、推進剤に引火するか、先にコクピット内部の高温に耐え切れずに命を絶つことになる。

H L Vは安定して高度落しながら減速していき、中間層の途中あたりで、段々と周りをおおつた輻射熱の幕がなくなってきた。

「一次減速開始」

女性声の電子音が告げ、H L Vの外側にある空力ブレーキが展開し始める。

これにより秒速4 k mのおちた速度を更におとし始める。

「二次減速開始」

空力ブレーキが更に展開し秒速1 k m以下におとししていく。

「着地点ズレなし……」  
「三次減速開始」  
「姿勢制御良好」

対流圏に突入し、高度5 k mに到達したH L Vのブースターから炎が出て急激に速度を落としてく。

着地予定地点のマーカーが近寄ってる。  
移動用ブースターを吹かす程でもない。

眼下には門周辺部で釣り天秤を行っている異世界軍がみえてくる。

〔高度300……200……100〕

50メートルを告げた時よりいつそうブースターが唸りをあげる。

〔10〕

ガイドロットが地面に接地、

着地用脚が伸ばされ、本体の傾きのレベルを合わせてく…

〔着地〕

『ヴァルキリー1から各機へ、HLVは陸上部隊に委ねる。  
201号挺に移乗、出番まで待機だ』

「カーゴハッチ開放、ML機開始動」

凄乃皇の出番は近いだろう。

……

カオル報告

各門まで取り付いて、エアロスタットで釣ってます。

各ハイヴの増派は対応中です

作者「今回は門での釣り作戦中までだね」

ナギ少尉「けど…凄い数よね…を、原作の桜花作戦では6機で突破したのね…」

作者「確かに突破だけならできるかもだが…その後大規模進行もあっただろうけどね」

ナギ少尉「で、今回は誰か死ぬの？」

作者「死なないようにはしたいけど……」

ナギ少尉「でちやいそう？」

作者「まあ次回って事で……」

ナギ少尉「次回、桜花作戦…完遂…おたのしみにい」

第188話 桜花作戦完遂…そして… 投稿日20111030

日本時間2002年1月30日午前6時

「第1砲艦隊は、マシユハドハイヴから、  
第2砲艦隊は、ボバルハイヴから、  
第3砲艦隊はエキバストウズからのBETA群に急行中」

「第101から105連隊及びアム口大隊はSE85より突入して  
下さい。」

第111から115連隊及び沙霧連隊はSW115より突入して下  
さい。

第121から…」

「第1工作部隊はSE72の門を充填封鎖、護衛担当は1001大  
隊。」

第2工作部隊はS92の門を充填封鎖護衛担当は1024大隊。

第3工作部隊はW96の門を…」

桜花作戦発動から、四日目に突入しようとしてた30日の午前6時…

やっと次の段階、ハイヴ内部への突入、  
門や横道の充填封鎖による削減、  
及び周辺からの増援対応等へと進む。

既に地上部及び門周辺は第7次迎撃を退け、また釣り天秤により、



異世界軍の手中にあった。

が今だ約681万個体がハイヴ内部に釣られずに存在している。

釣られずは語弊だった…門の外まで釣れないのである。

フェイズ6規模であるこのオリジナルハイヴは、  
地下4421m横に最大118kmに広がる広大なものとなっている。

広間の数が大小合わせて357、横道が1553、門級が15、門  
の数が32となっている。

この広大なハイヴから、一匹のこらず681万体を殲滅しおいだそ  
うとしていた。

SW115から突入した…

縦横無尽に巡らされるこのフェイズ6のハイヴ…

最初の広間は通過しながら工作部隊が横道を充填閉鎖し、  
次の9層レベルの広間に進み横道を同じく充填閉鎖した後、  
釣り天秤を行うべく広間内部に展開してた。

『右翼：準備はよいな？』

『はっ！！』

『左翼準備はよいな？』

『はっ！！』

『ズイマム、こちら沙霧01、準備は整った』

『ズイマム了解、誘導05を回します。……個体数5098、接敵まで60』

広間では、沙霧連隊の魔不知火108機及び、陸戦強襲型ガンタンク540機が迎撃の布陣を整えていた。

『30』

ハイヴ内部を釣って逃げ回っていたエアロスタットが、沙霧連隊が布陣している広間を目指してきた。逃げ回りながら個体数を調整している。

『10』

エアロスタットが横道より飛び出してそのまま沙霧連隊布陣箇所へ飛んでくる。

『5』

エアロスタットがとおりこした…横道のおくから…

『2、1』

『てえ！！』

BETA群が飛び出てくるとともに648機の機体から射撃が開始される。

次々とザクマシンガン、両腕ポップガン、220mm滑空砲等をうけ、肉片に変わるBETA群…

横道から出てはくるが、弾幕の為に中々進めずに次々と絶命してく。

『ズイマムから残り982』

『抜刀!!』

一斉に高周波ブレードを抜く魔不知火…

『突貫殲滅せよ!!』

陸戦強襲型ガンタンクを追い越し、魔不知火が残存BETA群に襲い掛かる。

無駄弾撃つよりも近接格闘戦でBETA群を殲滅してく…

最後のBETA、要撃級が高周波ブレードで袈裟切りで真っ二つにわかれる。

最後のBETAが絶命すると、魔不知火が下がり、プレート付けた陸戦強襲型ガンタンクが、死骸を排除し始めた…

オリジナルハイヴ中心部より南140km地点

『エコーマムより各機、まもなくポバルハイヴからのBETA群が到達する。』

各機戦闘態勢ととのえよ』

待ち構えるは、大東亜連合1個師団。

機体はF-4、F-5E、F-16、MiG-23、MS-6JY等多彩にとみ、支援戦車は61式改に統一されていた。

第2砲艦隊の後援が布陣する、大東亜連合軍を通り過ぎてから5分後：

先程まで上空を通り撃ち込まれていた砲弾は、味方誤射を防ぐ為に撃ち込まれなくなった。

61cm砲塔は弾道が最短射程距離20kmでも1mはズレてしまっ  
うからだ…

ポバルハイヴからのオリジナルハイヴへの増援約100万強：

それを第2砲艦隊の20隻はオリジナルハイヴ地上戦後、増援100万に対応する為に、

350kmの最大戦速で急行し、約1300kmの距離の区間を部隊を2つに分け、

砲弾を絶やさず撃ち込み続けた。

その結果… 2日程遅滞拘束し、BETA種族の内、  
突撃級、光線級、重光線級、大砲級等は全滅が確認できてた。  
数は…

『射程圏内まで…残り1分、残敵10382』

「準軍団規模か…」

残りが1万強…砲弾の地獄をくぐり抜けた数である。

長距離砲撃においては、精密射撃は難しかった。なので砲弾数で飽和するが、  
うまく隙間等で生き延びる個体がいる…

『10』

視線の先には砲弾の嵐を抜け、傷だらけになっているBETA群が  
みえた。

だが…準軍団規模である…

『5』

トリガーに手をかけた…

『射撃開始!!』

大東亜連合軍1個師団による砲撃が始まった…

「ヴァルキリーマムから各機へ、まもなく交代部隊がきます。  
今日の制圧はここまでとなります」

『今日は26層までね…』

(……結構な数がオリジナルハイヴいたんだなあ……)

白銀は最低限の戦闘であ号までたどり着いた前周のと比較していた。

凄乃皇は武装面でも充実して、前周を遥かに上回っている。

単独突入反応炉破壊は…というと、やれない事でもない…と判断していた。

(前はギリギリすぎたな…だから、あいつらが…)

武の視線は球瀬、鎧依に注がれた。

が今回とつてる殲滅は…

(総弾数からすると、地上に補給部隊がいて89往復か？

…が、純夏に負担かかり過ぎるよな…無理に等しいか…)

「引き継ぎ部隊がきました」

『よし、ヴァルキリー1より各機へ、201号艇にもどるぞ』

『了解!』

途中の移動経路ではルーロス改により、オリジナルハイヴ内部の全BETAの動向を把握している為、安全が確保されていた。

「う…眩しい…」

地下の薄暗い広間から太陽が注いでいる大地へとでて、仮宿舎となっているトレインギャロップへと機体をすすめる……

「トレインギャロップの休憩エリア」

「当部隊は昨日と同様、翌600集合となる。各員遅れるな…解散」  
ザッ

敬礼の後各員がわかれ飯や風呂等にわかれてく…

コバッタ達は整備以外は24時間戦えますか?だが、こう長期にわたる作戦だと、有人部隊は疲労や睡眠の話になる…

3交代制でトレインギャロップにて休養をとり、また戦場に出て貰う事に、この桜花作戦は組み立てられていた。

シフトが、戦闘時間が一日8時間、交代時間等含めて12時間、12時間を休憩時間と組まれている。

まずは後方車両カーゴに戦術機やMSハンガー、  
そこにてコバッタ達が戦場で疲労した機体のメンテナンスを行って  
る。

機体から降りた衛士は前方カーゴの休憩カーゴへと連結通路を移動  
してもらう。

休憩カーゴ内部は……

（食堂）

「ど・れ・に・し・よ・う・か・な？」

「レイ、早くしなよ……好きなので良いじゃん」

「全メニュー制覇するのにい選んでるの」

「全メニュー制覇ってあんた何時までここにいろつもり？  
百種類以上あるのに……」

「うっ」



ここ食堂は様々な人種、国の限定にそつた、多様多彩なメニューが提供できるようになっていた。

もちろん作戦参加者には無料提供しているが、食べ過ぎは自己管理でお願いしています。

「ところで、こんな種類の材料どうしてるんだろつね？」

「仕入れるにしても…」

「材料は合成してますよ〜」

「え？合成なの？にしては美味しくて、ついつい食べ過ぎちゃうんだけど」

「今までのと違う技術が使われてますからね〜」

キヤーティア技術の一つである合成食品技術…それがこの食堂には導入されている。

注文すると調理機の中で料理が精製されるのだ…

ただし、同じ栄養同じ味同じ焼き焦げ等で何時かはあきるのだが…

「じゃあ…私はバッタの唐揚げと、タガメの唐揚げと…」

「う…食べせないでよ…これだからタイ人は…」

「なによ…目の前で牛くわないでよ？」

「スポーツジム」

衛士達が食後？食前？に、汗を流してバーベル等を持ち上げてる。

短時間で効率よく身体を保つ為に、  
休憩カーゴにはスポーツジムが設置されてた。

「浴場」

カコーン

音が響きわたる…

「ふ…いい湯だな…日本式の大浴場もなかなかもんだな」

「ですね、隊長」

「熱、中、小と3種類の温度の風呂か…」

これなら東南アジア系の我らも入れるよな…」

「中だとまだ熱いですから…」

カコーン

勿論シャワーブース、サウナ室も併設してある。

く仮眠カプセル室く

静かだ…だれも起きてはない…そうカプセルはいると…

プシユードヤドヤ

一団が入ってきたようだ。

空いてるカプセルに行くと…

「じゃ、明日」

「ああ！」

カプセルの中に身体を入れ、タイマーを操作、スイッチを入れる。

カプセルが閉まると…  
衛士はもう寝ていた。

この睡眠カプセルは作動すると強制的に精神に作用し、睡眠へと持ち込む…

不眠症を発生させない脅威的なキヤーティア技術が使われていた。

勿論緊急時には外部からの干渉で覚醒する事はできるが…

↳別のトレーニングヤロップの整備場↳

「俺の機体が戻ってる!!」

「あら…あなたの機体中破だったよね？要撃級にフルボッコにされて…」

「ああ、機体交換しなきゃ駄目だったんだけど…」

「修理しておきました。  
調整とバージョンアップもしましたので、前より性能アップしてますよ」

「ありがとう!!」

衛士の休憩の12時間の内に壊れた機体の修理、

または代替え機を手配…は殆どないが、する時間はあった。

2001年2月3日午前1時…

残敵のこすとこ…

『オリジナルハイヴ所属個体数、残り154021、あと主広間残すのみです!!』

長丁場となった攻略作戦もいよいよ終わりが見えてきたようだ…

現在地は主広間手前、地下43層の広間で突入準備を整えていた。

小型チューリップから弾薬が運びだされ、陸戦強襲型ガンタンクに供給される。

また増援の有人機及び陸戦強襲型ガンタンクまちであった。

地上では度重なる他ハイヴからの増援の為、勇者ロボット軍団も地上側にまわっていた。

sideあ号

あ号はあせっていた。

要撃級なら日に15000個体を生産する勢いで増やしていったが、  
どんどん所属個体がへっついていき、

他拠点からの増援も一向に届く気配もない…

(我……破壊……)

あ号は何かを決定したようだ。

(命令……)

命令を下す。

過去の情報を含めて対応の……

side～あ～end～

『くうう～きつついわね…まだなの?』

約3万程を正面からATフィールド展開して受け止めている初号機がいた。

その後ろには、淩乃皇に20機の陸戦強襲型ガンタンクがケーブルを繋げている。

「…90…100」

霞が数値を読み上げていた。

「チャージ完了、ミサトさん、発射します!」

『了解!』

淩乃皇の前で盾となっていた初号機が横にさけ、

「いつけーえ!」

白銀がトリガーを引き、荷電粒子砲が拡散モードで放たれた。

1000ギガワットの出力で放たれた拡散ビームは、

集められたBETA群を一気に消滅し…

「残敵621!!」

程なく主広間は異世界軍の手に落ちた。

「ミサト機、交代きました。下がって下さい」

『5時間の制限なければ…わかったわ』

『白銀、援護にはいるぞ』

『白銀、守る度に焼きそばパン』

エヴァ初号機が交代していき、弐号機、参号機が淒乃皇の傍にきた。

(でもなんで初の後が弐や参なんだ?…わからねえなあ…)

武は、エヴァは軽く再放送で見ても、映画版まではみてなく、そこまではわからない口だった。

『各機、補給後あ号目標がいる主広間に突入する。』

情報では触手による浸蝕、破壊が攻撃手段だ…

触手を切断し、攻撃手段を防いだあと、

俺が洗脳する。

突入は…… 10分後だ』

カオルが突入部隊に向け発してた。

ゴウン

横道に繋がる門級がくり抜かれて向こう側に倒れこんだ。

即座に200個体程のBETAが集中砲火により肉片と化す…

……

カオル機が主広間に繋がる門級へと手をかける。

くり抜かれ向こう側に倒れ…

即座に弐号機がATフィールドを展開し触手攻撃を防いだ。  
参号機が展開に加わり、主広間内部に押し込んでいく…

主広間内部に雪崩込む異世界軍、

触手に集中攻撃を加え、

一つ、二つと無力化してく…

『はあああつ！！』

弐号機がソードで最後の触手を切り裂いた。

カオル機が抵抗できないあ号の前に立つ…



(悔しそうだな…)

今回は霞が浸蝕されてない為わからないが、  
無抵抗になった為対処できないあ号をみてそう思った。

カオルが機体から離れ、一部をあ号に同化させ……

『洗脳終了、オリジナルハイヴはカシュガル基地へと変更する!!』

外部集音マイクが広いあげた。

『作戦終了だあ!!』

ウオオオオ!!

……

カオル報告

カシュガル基地へとかわります

ナギ少尉「やっとあ号を洗脳できたのね」

作者「やっとだなあ…」

ナギ少尉「188話、リアル一年かけて…か…  
何はともあれ、このままラストに向けて…!」

作者「ところがギツチヨン…そうはいかなくなった…のが…」

ナギ少尉「はっ？人類優勢じゃ？」

作者「まあ優勢なんだけどね…次回、桜花作戦終了後…お楽しみに  
い」

第189話

桜花作戦終了後：

投稿日20111103

日本時間2002年2月4日午後8時

「横浜基地異世界軍司令室よりお知らせします。

日本時間4日午後7時52分。桜花作戦は作戦終了し、オリジナルハイヴは、異世界軍カシユガル基地へと名称を変更します。

作戦所用時間：」

横浜基地から全世界に向け、作戦終了を発信する。

……

それと同時に世界各地では…

「我が勇猛なる戦士らよ。汝らの勇戦は遂にアツラーに届けられた！

アツラーの思し召しにより、我らが仇敵である悪魔共の住家は陥落した！！

聖地奪回の日は近い！今こそ奮い立つのだ、我が戦士達よ！

神は偉大なり！！」

帝政イラン皇帝、パフラヴィー3世が、

エジプトにある中東連合軍前線基地において、所属兵士達に演説を行っていた。

歡喜にわく兵士達…彼らが祖国に帰れる希望がでてきたのだ…

『アメリカ国民の皆さん、これより10分後に大統領より重大発表があります。

テレビ、ラジオ、等放送がきけるようお願いします』

再任したアメリカ大統領第42代大統領ジョージ・クリントンの放送が始まった…

『我が親愛なるアメリカ国民の皆さん。

再任早々に喜ばしい報告を皆さんに告げるこの幸運を、神に感謝したいと思います。

十日程前、BETAの司令塔であるオリジナルハイヴを攻略する、桜花作戦が敢行しますという、政権放送をしましたが、

つい先程…作戦成功に終わり、オリジナルハイヴは陥落いたしました。…

これにより弱体化したBETAから、地球全土を取り戻す大きな大きな一歩を踏み出せました…必ずや地球は人類の手に戻るでしょう』

歡喜にわくアメリカ国民。後方支援国で今だ被害はなくとも、年々人類の寿命はあと…を感じていた。

だが、ここ三ヶ月程うまくいけばの風潮だったのが、決定的になっ

ただ。  
人類は生き延びる…と…

世界各地で寝静まつてる者はたたき起こされ歓喜にわく。

人類は生き延びる、やったぞ！と…

元オリジナルハイヴ地下

撤収及びG元素搬出作業の中、

あ号にアクセスしていた。

『と…命令取り消しは？』

『不能……通信…断』

『断絶かな？』

『肯定』

(成る程ね…けど最後にすかしっぺをだしてくれるとは……)

あ号は、配下の全ハイヴに対してある命令を下してた。

個体数が50万辺りで、

配下のハイヴ、横浜含めてだが…甲2号に指揮権をわたして、

甲2号に地球における上位存在になるように…

と、命令をだしていた。

むろんすぐに上位存在にはなれないのだが…

（横浜戻って確認か…

後は、対話等のバージョンアップとかだな…）

レベル將軍にまたまた臨時基地司令をお願いし、  
基地方針、戦力の選定をすますと…

一足先にチューリップ使用し横浜基地へ戻ったカオル。

「マスターお疲れ様」

「ああ、ありがとうな…でこの後だが…

甲2号ハイヴにビッグ…ファイブはできてる？」

「完成してるよ」

「甲2号の監視をよろしく」

「了解…なんで？」

「洗脳前のお号が命令出したんだよ…  
で、何時かは上位存在にはなるけど時期が、  
2週間以上かかる以外はわからないからな…」

横浜反応炉のログを確認したところ…やはりそういった命令がきて  
たが、

今のところ横浜と甲2号の通信も確保されてなく、  
また反応炉自体の出力も少しずつだが上昇中なため、  
研究経過観察してみるか…とカオルは判断した。

「わかったあ。回すね…で、お号を洗脳したんでしょ？」

「ああ」

「なんか上位存在だけの情報は？」

「お号が落着ユニットとして飛ばされる前の、  
上位存在の配置星系図だな」

「おっ、いいじゃない〜」

「といても…2000年程前だが…」

「へ？30年とかでなく？」

「30年前じゃないな…火星からでなかったから…太陽系外からあ号は飛来したんだよ。発射元はオリオン座恒星ベテルギウスの第3惑星」

「あれ？確か…ベテルギウスって、もうそろそろ寿命がつきようとしてる？」

「多分尽きてるんじゃないかな？」

「へ？」

「オリジナルハイヴ、あ号が到着して、到着報告と、人類による攻撃での、

光線級の流用作成の報告ができなかったんだってさ」

「BETAの通信方法イマイチなんだけど光越えるの？」



「ああ、通信等は越えてる。  
で、ここ30年程繋げようと試みたけど繋がらない…  
だから太陽系の他の惑星で光線級という種がまだでてなかったわけ  
さ」

「司令塔がないから？」

「そうだった事…ま、超新星爆発が起きてその衝撃波がいつ太陽系  
に飛来するか？もだが…  
その対策もとる必要あるな」

「正確な時間もだね…ビッグシックスに向かわせる？」

「ああ、向かわせてくれ…」

「けど約2000年前か…」

「予定図だがそれも一応あったぞ…  
けどそれだと既に金星や水星、太陽もBETAの支配下になってる  
けどな」

「…正確じゃないね…けど…その向かった残り3つは？」

「多分金星のが進路変更でカナダ？水星のが撃墜か、絶滅か…  
太陽のは、突入時点で耐えられんだろ」

「確かに…片道切符だね…」

「まあ…な、後は戦闘用の存在も…」

「はい？」

「…俺らがBETAとよんでる存在は、  
資源回収の為の非戦闘用のユニットにすぎない…って事なんだよな」

「あれが戦闘用でないの？」

「地上での資源採掘ユニットなんだってさ…  
突撃級は元来シヨベルカーの役割で険しい大地を平坦にし、活動し  
やすいようにする…  
要撃級は掘削作業用、  
戦車級はその口で大地などを削る。  
闘士級は細かい資源集め、  
光線級などは地中掘削から、  
要塞級は運搬用なんだよな」

「あ……うん。そうだよな……で戦闘用って？」

「創造主は対別宇宙生物を想定して……  
まあ宇宙戦用のBETAを作ったんだって」

「口開いて星破壊する光線発射！とか？」

「そこま……ではないか……で宇宙用のが……」  
モニターに表示させる……

「まずは突貫型」  
鏃のような形をしている。

「名の如く、突貫して宇宙大型宇宙怪物を串刺しにする特攻型だな……  
最大速度が光速の30%に到達するし、大きさが平均200m程だ」

「サラミス級並……」

「そつ……例え貫かなくてもその速さによる運動エネルギー及び質量  
で……」

「耐えられるの殆どないんじゃない？」

「だね…で、その機動性が殆どないというか避けられたら曲がれない弱点を補う小型兵隊型」

「小型の突貫型だね」

「5 m位の大きさと質量や速度エネルギー劣っている分機動力は高いね。

これも特攻が攻撃手段だな…次に」

「まだあるの？」

「要撃級の宇宙型というべきかな…」

「あとは、小型の星間移動ができない種を移動する母艦級…ややこしいから宇宙母艦級か…」

「う…でかいね…」

「30 kmクラスの生物で体内に突貫型以下を飼ってるといえばいいか…」

「これでおしまい？」

「入手した中だとな」

「地上用のがやっぱりないの？」

「地上用は考えてなかったみたいだな。  
戦闘種の区分だと」

「成る程ね…」

で、これらって今の艦隊のだと…」

「宇宙母艦級だけなら、  
先手必勝でコロニーレーザー1発で1隻が御の字だろうが…  
まずむりだよな」

「ん…」

「何千隻による集中砲火による殲滅でない限り、宇宙母艦級が10  
0体とか来たら…」

「あ、そりゃナデシコでもまずムリ」

「だろうな…」

「ま、幸いこの戦闘用が、太陽系周辺にはいない幸運だな…  
殲滅は無理だが、逃げる分はビッグワンシリーズなら可能だし」

「対策は？」

「今は逃げると、強化するしかないだろう…  
現行運用機だとビッグシリーズ以外は逃げ切れんし…  
数が足りん。火力がね」

「ナデシコ1000隻つくらにゃ？」

「だろうな…今は生産能力というか、  
建造能力が足りんさ…建造能力がな…」

「うん…」

「せめて日産で、ナデシコ50隻つくらにゃ…  
正直勝てる見込みがないだろうなあ…」

「資源も足りなくなってくるよね」

「だ〜な…その位だと…太陽系外部も開発着手しないと…」

と、予定だったBETA勢力図をみる。

「まあある程度あの図参照にもなるだろうし…  
うまくいけば1000光年以内に戦闘用いなだろうし…  
ま、…これからだな」

カオルは別の報告書を手にとった。

「で、一週間近くカシュガルにかかりつきりだったけど…その間な  
んかあった？」

「まず冥王星攻略して、ただ今補給中…次はオルクスと海王星のト  
リトンね」

「やっぱりオルクスいた？」

「うん」

「ま、天王星とその衛星だけいなかったから、まさか…で、残るがタイタンと火星とカイパーベルトのキュビワノ族系と…」

「散乱円盤系ね」

「ほんと、太陽系だけでも大変だよな…」

「天体を残しながらだしね。」

あと火星に撃ち込む、G兵器培養体制整ったよ」

「火星の全ハイヴに撃ち込める？」

「マーズハイヴ1から9までの分ね。もちそろったよ」

「これで戦力減らせられれば御の字だよな…」

「だねえ…あと、仙台だけど…一時期行方不明が増加傾向にあったんだけど、

今は減少傾向だね」

「ほづ…」



「公共機関にホイホイさんが大量導入されて、あとドルブーム？みたいなのがでて、売り切れし始めた」

「着せ替え人形みたくな？」

「役に立つお人形さんみたく子供に人気でてね、で、アース製薬がL5の4バンチコロニーで増産中」

「確か日本領工業コロニーだよな？」

「うん。最後に、月面都市の居住区画に移住始まったよ。それにともなつて、路線が月まで延長。地球とL5と月間の専用路線だね」

「後は火星を落として…人口増える待ちだろうな…」

「100億位まで増えないと厳しいよね」

「だな…10倍か…ん、とりあえずそんなもん？」

「うん」

「ま…あとは国連に報告すんでからだな…じゃ、お休み」

一日かけてカシユガルから陸路を敦煌跡地経由で、重慶基地に到着した異世界軍。

警戒監視施設を攻略作戦中から道中に広げていた為、無警戒でも高速移動ができ、トレインギャロップの積載時での最高速度130km/hでの移動ができた。

重慶基地滑走路から次々と帝国、統一中華戦線機が飛び立つ。

大東亜連合機は引き続き陸路、海路でフィリピン本土まで輸送になる。

2時間後…

「私達の、統一中華戦線の英雄達の帰還です！！」

清泉崗基地の滑走路に次々と着陸してくる戦術機を、

一目見ようと台湾在住の人々が基地周辺に詰めかけていた。

マスコミもこぞってこの瞬間を逃さないようにカメラを向けていた。

「我が中華統一戦線同胞、8億5千万の無念をはらしてくれました  
！！！」

「息子よ、弟がやってくれたぞ！！」

「統一中華万歳！！統一中華万歳！！」

1ストップしなければならぬ日本帝国機と違い、  
約2時間のフライトで直接台湾本土に降り立つ中華統一戦線機達。

彼らは英雄となった…

…

カオル報告

国連報告に向け準備中です。

第189話

桜花作戦終了後…

投稿日20111103（後書き）

作者「難産というか…その部分が次話にいつてしまった…」

ナギ少尉「それで遅かったの？…でどの部分？」

作者「中華統一戦線の描写があつて今回の話にないもの」

ナギ少尉「あつ…なる程ね…」

作者「その部分でんぐと、難産中になってるさ…」

ナギ少尉「がんばつてね…で、今回宇宙戦闘用のBETAがでたわね」

作者「やっぱりいると思うし、いなきやおかしいし、いたら人類全滅早まったな…」

ナギ少尉「確かにねえ…衛星監視システムなども出来ないだろうし…あ、で、あ号の上位の話だけ…」

作者「ああ、650光年先の超新星爆発ね。  
2012年頃に観測できるかもって話だよ。  
今はその徴候の話」

ナギ少尉「衝撃波等大丈夫なの？リアルで」

作者「ん：数光年の距離の超新星爆発は人類滅亡フラグらしいけど、  
650光年だと衝撃はこないって宇宙学者はいうね。  
けど光よりかは遅いから…  
まあどうなるかは二百年以降先の話になるしさ」

ナギ少尉「生きてはないね〜」

作者「ま、そうだった事…」

ナギ少尉「さて、今年中に完結が危ぶまれますが、次回、国連報告  
及び今後：お楽しみにい」

日本帝国軍の桜花作戦に参加した兵士達は、  
愛機を所属基地に休めるとすぐさま、帝都に向かった。

急遽きまいった煌武院殿下による拝謁式の名誉を承るために…

帝都に集まる帝国軍人達…

その彼らを祝福せんと、千駄ヶ谷駅から東京体育館前の道は大混雑  
していた

「日本帝国万歳！！」

誰ともなく万歳三唱が始まると沿道の観衆が唱和する。

拝謁式は国立競技場で開かれる事になり、

99年の明星作戦出兵式以来の国立競技場での大規模イベントであ  
った。

出兵式は数多くの参加者が二度と戻ってくる事が叶わなかった…

今回は出兵式は開かれなかったが、数多くの兵士達が戻ってきて、  
ここで再び見る事ができた家族達もいる。

何しろ西日本方面は復興が始まったばかりで、  
まだ立入制限が解除はされてない…

二度と見る事ができないだろうと、

悲壮な覚悟を決めていた家族が戻ってきたのだ。

その喜び合う一面も号外にのる事となる。

さて、国立競技場のスタンドは既に大観衆で満員、最上段でも立見がでている状態である。

『煌武院殿下御来場！！』

スタンドの大観衆が立ち上がり、メインスタンドの将軍家専用席の方をみる。大観衆の声に応え、座る煌武院殿下。

拝謁式が始まった…

アリーナに一人一人所属及び氏名が読み上げられ入場行進してくる。

一人一人殿下、観客に対して敬礼行進でもって入場してくる。

英霊となったものは、  
代わりの者が遺影を掲げ入場行進で入ってきた。

入場行進が終わり、殿下の勅を拝謁する。

『此度の作戦、よくぞ生きて戻られ誠に大義でありました。そなた達は、怨敵の本拠地に挑み陥落させし栄えある勇士達です。政威大將軍として、従軍せし勇士達には、桜花作戦従軍章を…英霊に対しては桜花作戦従軍獅子章の勲功を授与いたします』

殿下の感謝は続く…

『最後に重ねてそなた達の働きに万謝致します。誠に大儀でありました』

『総員、殿下に対しー敬礼!!』

アリーナに居並ぶ91名の勇士達が乱れずに一斉に敬礼し、殿下が退出してく…

ニューヨークにある国連総会議場に立体画像が次々と浮かび上がる…  
バーチャルシステムを用いた緊急総会の始まりである…

「オリジナルハイヴを支配下におさめ、その取得した情報に重大性がありましたので緊急臨時総会を開かせて貰いました」

「なに…このバーチャルシステム利用なら何時でも何処でもだしのう…」

では異世界軍渚カオル、オリジナルハイヴ攻略の巧勲により、元帥の位を授ける事を決定した」

意図せぬ昇進であった…

これにより形上、国連傘下とはいえ、完全な独立指揮系統と異世界軍はなる…

「さて…まずは報告事案の一つですが…

戦闘用BETAが存在します」



「な、なんだと…」

「ばかな！今までののが戦闘用でないのか?!?!?」

「我々はなにと戦ってたんだ?」

「ただの資源採掘ユニットと人類は生存競争をしました…」

「資源採掘ユニット…」

「あははは…人類おしまいだ…」

「今こそ地球脱出を!!」

「して、その戦闘用…というのは…?」

「今のところはっきり存在がわかってるのが、  
宇宙戦闘用の種類です」

「地球脱出無理フラグ」

「宇宙大戦争…映画か…」

「おわた」

「その戦闘用やらは、現在稼働しているの異世界軍艦艇や、  
H S S Tでは対応できないのかね?」

「武装搭載してないH S S Tはもとより、

現在の編成艦艇、コロニーレーザー6基と護衛艦隊40隻では…  
出会えば間違いなく、全滅になりますね」

「全滅だと…?」

ザワザワ感が一層ます。

「それに対応した艦船の建造が必要ですが、  
現在の能力では生産ラインにのるのに最短20年かかる予測です…  
また現行型のマゼラン級が相対するには…  
一會戦やるにも10000隻は必要でしょう」

「マゼラン級という…」

「3000m級の砲艦型宇宙船です」

スペックをモニターに出す。

「これからは星系内型と付けますが…それが相対して、帰還率60  
%で御の字でしょう」

「一回の會戦で4000隻も…かね…」

「人類おわた」

「資源が…」

「本当にそんなのが…」

「その宇宙戦闘用のBETAが、こちらです」  
モニターに出すと食い入るように見出す各国大使。

「200m級の突貫型ですが、これが宇宙母艦級から嫌って程でてきて、

最大光速の30%で突っ込んできます」

「無理だ…終わった…」

「勝てる宇宙艦が思い付かん」

「全滅だな…」

「資源もそうだが…対策は…」

「資源ははつきりいつて太陽系だけで賄えないと思われます。  
なので他星系への進出は必然ですね…  
資源確保及び生産能力向上の為に…」

「異世界の方面でよい機体みたいなものはないかね？  
あの巨人生体兵器みたいなのは？」

「エヴァのような一騎当千なのですか？」

「そう、なにかないかね？」

「前見せてもらった映像にあった」  
「そうだ、巨大ロボット!!」

「一機で一戦闘こなしたとしても、他に進行があればどうなります?」  
例えばハーナード星系で戦ったと同時に、地球や他の場所でもあるとしたら?」

「むう……」

「地球全滅……」

「物量には物量はわかりません。ですので数を揃え、勿論質もですが……必要です」

「地球内は国連軍で総力あげるしかないか……」

「あ、それについてなんです……」

「まだなんかあるのかね?」

「HPが……」

「はい……甲2号が新オリジナルハイヴ化します」  
「なぬ?」「トライデント作戦発動を!!」

「時期は未定です。今のところ監視体制で観察中ですので間隔を計ります」

「……今は弱体化は間違いないかね？」

「今はですね。甲2号がオリジナル化したらすぐに攻略し、その間隔を計って、弱体化を継続させます」

「……私の所は三番目か？」「開発する力ないから……」「大分後ろか……」

「最後の情報は…オリジナルハイヴが発射される2000年程前の、上位存在分布予定図です」

「2000年前!？」

「ええ、2000年程前です……あ号を代表する上位存在は、2000年程かけて地球に到達しました」

「ばかな！月から打ち上げてるだろ！？」  
アメリカ大使の横槍。

「月ですか？…月から何が打ち上げてたかわかりませんが、  
あ号は地球から650光年先の恒星系からやってきました」

「2000年以上前の生物というか資材ユニットとか…」  
「人類は…なにと戦ってたんだか…だなあ…」

「報告は以上です。」

我が異世界軍としては、甲2号観察及び攻略のち、  
対宇宙戦闘にシフトしていく所存になります」

カオルの番が終わり…

「さて皆様方、国連軍としてはエヴェンスクハイヴ攻略を提案した  
いのだが」  
アメリカ大使の発言。

「いやリヨンハイヴを是非とも！！」  
OSのバージョンアップがすんで士気も高い。ヨーロッパ解放作戦  
を！！」  
イギリス等EU諸国らが発言してきた。

アメリカとしては干渉地域があるとは言え、何時本土にくるか？も  
ある。

EU諸国としては悲願のユーラシア大陸帰還を願っての事だ。

発言を求められたので、現状の状況を説明する…

度重なる増援の為、リヨンハイヴは定数を大幅に下回り、30万規模に落ちている。

エヴェンスクハイヴは定数が8万と攻略にはたやすい。

の為二方面作戦と戦力の足りない分は異世界軍から…  
リヨンハイヴの基地化を提案し、

そのまま採決の形になり、臨時総会は締めくくられた。

武の自室…

行為が終わってベットの中に二人はいた。

武にとっては最後の思いで純夏としていたのだ…

そして、純夏に心に秘めていた事を聞く。

「ところで、オレはいつまでこの世界にいられるんだ？

あ号を倒した…いや洗脳したか…だろ？

はつきりしとかないとおまえにも悪いし…」

純夏が凍りついたように動かなくなった。

「どうした？おまえにもわかんねえのか？」

純夏は笑顔を凍りつかせたままで、

ぎこちなく武から顔をそらして

「どうしたんだよ。顔をそらして…返事ぐらいしろって」

凍りついたまま…

「おまえ大丈夫か？」

「武ちゃん…怒らない？」

純夏は顔を元に戻しながら武に…

「何をだよ。言わなくちゃわかんねえよ」

「…だから、怒らない？」

「聞いてみなきゃわかんねえよ」

「じゃあ、嫌だっ！武ちゃん絶くっつ対に怒るもん！」

「わかったよ…怒らねえから言ってみるよ」

「ホントに?!」

「ああ、本当だ」

「ホントにホント?!」

「くどいッ！ 男に二言はない！」

「絶対おこらないでね……」

それじゃあ言うね……武ちゃんはね、もう元の世界に戻ってるの

「バカかおめえは！」



「あいたーっ！」

バシツといい音を立てて、景気の良い一撃が頭部に炸裂した。

「ひどいよ〜！ 怒らないって約束したじゃないのよ〜！  
武ちゃんの嘘つきー！」

「だまれー！それより元の世界に戻ってるとはどういう意味だ？！  
今ここにいるオレはなんなんだ？」

「それはね…元の世界から集められた、この世界の武ちゃんを構成  
していた要素は、  
もうとつくに元の世界に帰っているの。」

「だから今ここにいる武ちゃんは…残りかす？」

「バカやろうー！！」

「あいたーっ！」

バシツといい音を立てて、再び頭に炸裂した。

「なにするんだよう！量子電導脳が壊れてバカになったらどうする  
んだよう〜」

「だまれ！オレにもわかるようにちゃんと説明しろ！」

「それは…前の世界で因果同体から解放されたのは、  
武ちゃんわかってるよね？」

「ああ、わかってる」

「それなのにこの世界に武ちゃんは再び来た」

「ああ」

「この世界に来た武ちゃんの中に、今までループを繰り返した武ちゃんの中になかった新しい要素が、武ちゃんの中に入っていきたの」

「なんだ、その新しい要素って言うのはっ!」

「多分なんだけど……」

「早く言えっ!」

「この世界で私を庇って死んだ武ちゃんの因果情報だと思っの……」

「この世界のオレの因果情報?!」

「……うん……この世界の私が知っている武ちゃんの匂いがしたから」

「たぶんそうだと思うんだ……」

「この世界のオレ……」

「で、武ちゃん、ひよっとして……元の世界のこと……前ほど思い出せないんじゃないかな?」

「……」

「この世界や前の世界等で経験した事しか思い出せないじゃない？」

「だって、おまえ……今までこの世界のオレの記憶なんて、

BETAのトラウマぐらいしかなかったんだぞ！なんで突然……」

「元の世界の武ちゃんの因果情報は、もう全部元の世界に帰っていて、今の武ちゃんの中にはないんだよ。

今の武ちゃんを構成している大部分は、武ちゃんがこの世界でループし続け、経験した出来事の因果情報なの。

後の残りは、この世界に元々存在していた、

私をかばって死んだ武ちゃんの因果情報だけなの。

それに元の世界には…もう既に武ちゃんが存在しちゃってるの……」

「じゃあ、オレは本当に……元の世界には戻れないんだな？」

「ごめんね、武ちゃん……武ちゃんはもう……」

私の力では元の世界に戻ることはできないの」

「今ここにいるこのオレはこの世界にずっといられるのか？」

突然消えたり、別の世界に行っちゃうことはないのか？」

「それは大丈夫だよ。

今の武ちゃんを構成しているのは、この世界等で経験した出来事や記憶の因果情報だけだから、

消えたり、別の世界に行ったりする理由はないよ。

言ってみれば、今の武ちゃんは、この世界で誕生した…本当の武ちゃんなんだよ」

「……そうか」

「……武ちゃんは……この世界にいるのは嫌なの？」

純夏はそう言いながら、不安そうに武を見上げた。

「そんなことはねえよ。

正直、BETAを追い出さずに、みんなを置いてこのまま帰ることに……

気が引けてたしな」

「……せっかく、私と武ちゃんはの赤ちゃんが出来たんだし、このままいてくれるのは嬉しいかな？なんて……あははっ……」

「ああ……そうだ……はあああああ？」

去り際なく爆弾発言がでたのに気がついた武。

「ちょ……おまえ！赤ちゃんって！」

「うん……できたよ」

「○○ユニットなんだろ？何故できるんだよ！」

「だって武ちゃんがあんだけ……出すんだもん……  
できちゃっつよ」

「いや、おまえ……そうじゃなく、赤ちゃんが何故？」

「それは私から説明するわ」

「先生!!」

二人の愛の巢に香月副司令が入ってくる。  
ロックはかかってないも一緒だった……

「佐渡島ハイヴを制圧した際に、生体機能を部分的に復活させたの  
よ。」

そのおかげで純夏は負担がとれて性能UPしたわ。  
その中に生殖機能もね」

「えへへ……」

「それで早速赤ちゃんができたのね……流石恋愛原子核」

「それとこれと違っつすよ!」

「あら関係あるわよ。100発100中じゃない」

「……武ちゃんは……私との間にできた子供……いやなの？……私をすてるの？」

「いやじゃないさ……一緒に一生育てよう」

「武ちゃん!!」

「あ〜どうでもいいけど二人ともいい加減に服着たら？」

「先生が勝手に入って来たんですよ!!」

「はいはい……」ゆっくり〜」

……

## カオル報告

この後の方針きまりました。

地球上と宇宙多方面に及びます。

ナギ少尉「これで武ちゃんにも子供ね」

作者「やつとだな」

ナギ少尉「でもその間、淩乃皇の操縦どうするの？」

作者「…機動しないから、この世界の純夏は安定しまくりだし…  
赤ちゃん抱えたままのるかもね」

ナギ少尉「でも生体反応0が00ユニットなんでしょ？  
いいの？赤ちゃんできて…」

作者「元々はBETAの意識調査等がメインの00ユニットなんだ  
が…  
カオルが出現したから意味は無くなってきたんだよな。  
起動成功したから、今度は安定化をより進めるから、  
半人間化を目指してに変えてきた最中…だね」

ナギ少尉「ふ〜ん…でもこのルートだと…  
瞑夜と、千鶴と鎧衣はいかずの後家？柏木も…」

作者「……………さて今回は」  
ナギ少尉「ごまかしたな」

作者「太陽系外への模索…お楽しみにい」



第190話 太陽系外への模索 投稿日20111110 (前書き)

第190話 太陽系外への模索 投稿日20111110

第190話 太陽系外への模索 投稿日20111110

2002年2月9日

「騒ぎ過ぎたなあ…」

とりあえず対策か…」

前日の国連臨時総会の後や連日の祝賀会等一通り落ち着き、  
やっとハンガーで考えられていた。

「宇宙戦闘用に対してでしょ？」

「ああ、マゼラン級だけじゃ正直お話にもならないからな…」

UCの熱核ロケットなどは光速度に及ばないが、

一応は光速度の4%までは加速し続ければ届く…

4320万km/hまでは…

ただし加速し続ければ及び理論上においてだ。

マゼラン級をみてもわかるが、高速対策のつてない船が、

無理矢理高速度まで加速したとしよう…

その状態でデブリにあたるようなら…

光速度の1%あたりで半壊どこか、撃沈する嵌めになる…

1%でも、3000km/s = 1080万km/hの速度だし…

なのでお話にならないになる。

「改造すればそりゃ使えるようにはなるけど、そこまでのを想定してなかったからね…」

想定してたのが、デブリや落着ユニット、射出体等の迎撃であった。宇宙世紀時代の地球連合の装備は、基本デブリ屋から発展してっただけで準じた状態でしかなかった…

「一から作りなおした方が早いといえば早いし…」

「ヤマトやノプティバガニスもあるから？」

「ああ、そうだな…とヤマト完成したん？」

ヤマトは外宇宙航行艦…30万光年を妨害にあいながらも、1年におよぶ単独航行で踏破した実績がある。

一日で822光年は踏破した実績のあるコピー艦であった。

一方、ノプティバガニス…ゼントラーディの分基幹艦隊の指揮軍艦だが、

こちら外宇宙戦闘艦で、ヤマト同様亜光速戦闘に対応はしてあった。

「完成してるよ、ヤマトは建造に手間取ってたけど…波動エンジンの充填とかさ…」

「ノプティバガニスは単純に大きさからもうちょいだね」

「ヤマトは2ヶ月か…」

ヤマト昨年12月9日より技術習得目的の為に建造開始。波動エンジンの作成に手間取ってたが、とうとう完成したのであった。

ゼントラーディ軍艦である、ノプティバガニスは、単純に4kmという今までの最高の大きさに手間取り、まだ未完成、3月には…との事だった。

「短縮はできそう？」

「ヤマトで使ってる波動エンジンの充填が、どうしても45日は貰わないと無理。

ノプティバガニス級は…短縮無理かな？」

「ん……そうか…」

むしろ4km級を約4ヶ月で見込んでいるあたり、異世界軍建造能力の高さが伺える。

日本帝国の大和級1番艦をみてみよう…

起工から進水まで実に1008日もかかっている。

アメリカのアイオワでも起工から進水まで791日…

実に二年強だ。

しかもノプティバガニスの10分の1にしか満たない艦船で…

「ん〜、月産1隻未満では対宙戦なんか話ならんし…  
まあ…うまくいけば、マクロス世界の廃棄自動工業衛星が、  
持ってこれてなんだけどなあ…」

「それをもつてきて修繕して利用？」

「ああ」

「ところでその自動工業衛星って大きさはどの位なの？  
何故コピーしないの？」

「そりゃ…100kmクラスっていえばコピーに時間かかるぞ…  
だから中々ね」

「コピーに時間かかるなら…ヒルダさん特製のシステムウイルスで、  
自動工業衛星の技術情報取得できるよ〜  
自動工業衛星のノウハウ取得も美味しいし〜  
けど時間かかるけどね」

「ほう？なにそのウイルスって？」

「ヒルダさんが開発してきたんだけど、名前ヒルダ菌でいい？」

「ふふふふ…うんそれでいいわ…で、そのヒルダ菌って？」

「ナノマシンなんだけど、撃ち込まれた機械の機体情報を取得できるよ」

マスター弄った時にできないかな？でできた一品らしいね。

100kmクラスなら、一ヶ月はかかるけどね」

「俺弄った時…？…あゝあの身体検査か…」

なんか時間かけるなあっと思ってたが…」

「この間のドーピングが効いたかもね」

「プラントって美形ばかりだしな…」

で、撃ち込んだらしばらくして回収？」

「その後、解析かけて…って流れだね」

「で、どの位の量を撃ち込めば？」

「え〜とね…2リッターペットボトルの液体を、染み込ませるように巻いて塗って下さい…だって」

「それだけ…いや手間取りそうだなあ…」

「自己増殖型ナノマシンで、回収指示で自滅するだって」

「で、回収は？」

「専用の装置で情報吸い上げる形ね」

「成る程ね……」

「あとヒルダ菌について何かある？」

「実際にやらんと何ともいえないさ……」

「で、ノプティバガニス級作った、建造プラットフォームを増産し、日産20隻造船できるようにするには？」

「フル稼働した前提で造船プラットフォームが2400基必要だよ。あとプラントも50基程追加してくれないと無理、またそんな数のプラットフォームの管理や制御、場所も大変だよ。4使ってなんとかかな？」

「……大変な事になるなあ……」

進宙したそばから、ルート確保等で、  
交通渋滞が発生する光景が目に見えてきた…

「となると…まとめて建造できる大型ドックか…」

「それしかないね」

大型施設なら制御も楽だし」

「けどまあ…時間かかる…よな？」

「それなりにね」

「短縮手段は…」

「多分1番手っ取り早いのが小惑星をくり抜いて、  
外殻や内殻として利用する方法」

「あゝそついやあ…マクロスの自動工業衛星も大概それだなあ…」

地球から見上げた自動工業衛星をおもい浮かべていた…



「もってくる規模や大きさによりけりだけど、器を一からつくらない分だけ、  
早めに建造ドックとして稼働はできるよ」

「くり抜いた分はそのまま資源として流用か…」

「もちろん」

「それもありが…な」

「今なら結構手頃な大きさの小惑星ごろごろしてるからね」

「となると…、プラットフォームを増やしつつ、  
小惑星もってきて、くり抜きつつ、ぶち込む…か？」

「機動制御系使い回せるね」

「じゃあそれでいくか…」

「艦船は…として、対宙戦闘機は…」

V F - 1 は話にならんが、

V F - 171 あたり以降だな」

「地球上だと大気圏がじゃましてるだけだしね」

「だな…」

地球上では大気が衝撃となり機体を襲う。

その衝撃の限界に挑み、ぶち抜くがいかに変か…はわかると思う。実際のところ高度1万メートルのところをマッハ5・0あたりで限界であり、

それ以上の速度は空気の壁による、

機体破壊の危険、及び耐熱限界がくる為、出せないのであった…

また地上に対しての衝撃波もえらい事になる為、

地球上ではマッハ以上は意外と出しにくいものである。

空気がある為地球上では、大気がある限り光速に到達するのはほぼ無理に近く、

宇宙空間にて光速近くいく船であっても、地球上では速度が落ちてしまうものである。

もっともルーロスはその原理が違う為に限界を超えていたが…

「後は生身のパイロット限界まで挑むVF-19か…」

更にパイロットにかかる機動Gの問題も加わってくる。

西暦2000年代製のリアル世界のF-15イーグルは、

戦闘機動で10Gで機体の弱い部分にクラックが入り、

12Gで永久変形がおき始め、

13Gで外板のビスが飛びはじめ、

15Gで羽がもげる加重である。

パイロット、人間がそこまで耐えられないので、機体にそこまでの強度を付けられないのがある。

人間はというと耐Gスーツ着用で、たった2G減の作用しかない。

つまり生身だと9Gしか耐えきれないというか、そんなものである。

9Gの戦闘機動を行うと、腰がいたくなり、酸素マスクの痕がのこり、

足裏、ふくらはぎ、二の腕等柔らかい部分は内出血をしている。

更にその上だと10Gは緩めるとミサイルがくるから必死に逃げる…

11Gで30秒程で本当の限界がくる…

更にその上で瞬間的にはかかる事もあるが即、入院で精密検査行きで、

機体も分解整備になる。

だから機体はF-15イーグルだと12Gが設計上の限界機動であった。

因みにどの位人間が耐えられるかの人体実験が、過去にアメリカでありました。

その人体実験に志願者が参加し…

眼球は飛び出て複雑骨折、辛うじて生きてはいました…

最大Gが20Gを超えたそうです。

さて…バルキリー付属の耐Gスーツは、2050年代製で人体に負荷がかかるが、

戦闘機動で16G等標準的に耐えられるように設計されている…

バルキリー用耐Gスーツは2倍減してくれる優秀な専用スーツであるが、

さらにその限界を追求したのがVF-19であり…

搭乗者のフォッカー少佐は生身換算すると…

肉体にうけるGが、13G超えていた…

「…確かに生身まあバルキリー耐Gパイロットスーツでだが…  
フォッカー少佐は異常だよな」

「うん…あの人は異常」

フォッカー少佐の戦闘記録映像等をみると…

地球上で25G機動を超え、光線級の光の速さで到達する正確無比

なレーザー照射等も、  
かわしているのであった…

ピンポイントバリアを一切使わずに…

あの光線級が首というか眼球を右往左往して…

流石に単機でゼントラーディ基艦艦隊中枢までいき、  
中枢をたたき生還する事が仕様として求められた機体であった。

それを難無くのりこなして、常人の限界を超えている…

この上を越えるとなると高性能無人か、VF-22以降しかなくな  
ってくる……

まさにパイロットを選ぶ機体といえよう。  
入手した時はパトロール隊用のリミッターがついていたが、  
少佐は、早々外した仕様として乗り回していた。

「ブラックタイガーもかなり良い機体だよな」

大気圏高度1万でマツハ7を出す、かなりの耐熱限界をもつ、  
ヤマト世界の航空機で、

機動設計GはVF-19に負ける12Gであるもの…速度はVF  
-19を上回っていた。

「機動力で人間の限界目指すマクロスか、速度で目指すヤマトか…

か…」

確かにヤマトの世界はガラミス帝国戦闘機に一方的にやられたから…だろう。

「とりあえずはマクロス系統と、ヤマト系統の機種で空間戦闘は固めるかな…」

ガンダム系統は、空間戦闘は話にならん…」

「了解」

「さて、ヤマト進宙は？」

「明日にでも」

「じゃあ…明日テスト航海かねて、でるか…  
えつとG兵器…」

G弾と間際らしいからゴキブリ兵器を載せておいてくれ。  
火星とタイタンに実験しに行くから」

「了解」

「あとは…小惑星は…」

「高出力フォールドシステムを表明にくっつけ、  
連動できるようにすれば問題ないよ」

「あ…そうか…」

…  
カオル報告

対策、方針で今日は、一日つかいました。

第190話 太陽系外への模索 投稿日20111110 (後書き)

ナギ少尉「今回は対空間戦闘に関しての方針みたいね」

作者「大気圏内でなく、最大光速の30%で貫いてくる突貫級に対して、

わかつたら対抗するべきだよな…だし」

ナギ少尉「でも、まんまトップをねらえ!!  
の宇宙怪獣って話よ…特に突貫級は…」

作者「それ以外おもいつかんでしょ…生物系の生体兵器って…  
トップをねらえて宇宙怪獣では完成してるしなあ…」

まあでも、BETAの特徴の個体での恐怖心なしから発展するとさ…  
突撃級の宇宙バージョンでもそういった発展なるよ…  
だからレーザー等出さずにただ特攻し貫くだけ…  
けど光速の30%の威力で…ってわけさ」

ナギ少尉「成る程ね…」

で、対するはヤマトとマクロス世界の艦船と…あ、マクロスSDF  
-1はどうなったの？」

作者「…次回おたのしみがいい」



第192話 ヤマト進宙 投稿日20111116 (前書き)

えゝ：副鼻腔にまた風邪菌が入り、  
喉がヤラレマシタ

長引いてます。

第192話 ヤマト進宙 投稿日20111116

2002年2月11日

場所はL4に浮かぶ建造プラットフォーム…

今ここにヤマトがこの世界に誕生しようとしていた。

プラットフォームは重力制御付き宙間施設であり、  
宇宙空間における艦船ドックとして、  
日々艦船を建造していた。

現在プラットフォームは、修理補給専用等も含めると13基L4に  
浮かんでおり、  
拡張建造中のプラットフォームも日々増えていく状態にあった。

中心部にチューリップを添えた、  
鳳仙花状にプラットフォームは広がっている。

DF付きの輸送艇でチューリップからでてきたカオル。

(やっぱりでつかいな…大和よりも…)

大和は263mだが、この恒星系航宙艦である宇宙戦艦ヤマトは…  
全長566m、全幅92mとほぼ2倍強にあたる長さと同幅を誇つて  
いた。

大和サイズでないのは、艦載機の数で航空母艦並の容量が必要であ

り、  
また恒星間を行き交うにあたっての乗員の生活水準をたもつ部分があり、  
乗員の生活、護衛艦載機、人類が生き延びる研究部分をおさめる、  
ノアの方舟として建造された曰くがある。

と思われた。

(公式設定は300m以下なんだったけどなあ…???)

多分、ガラミス星人の目が悪いのでその様な数値がついた…  
と思われる。

公式設定通りだと、とてもでないが、艦載機を50機近く積載し、  
コスモクリーナの研究施設など広大な施設が入るスペースがない。

絶対に無理です。

艦載機にしても、大和の艦載機数と同等の数しか入らない筈で…  
どっかの人の研究では、とりあえず移動スペース無しに敷き詰めれば、  
艦載機24機までは可能、という結果もあつた次第である。

さて、艦のサイズ違いの話は置いて…

波動エンジン等の取得目的で造船されたこの世界でのヤマト…

(確かヤマトの弱点下方からにめっちゃ弱いんだよな…  
大気圏内突入で、水上着陸可能のせいでもあるけど…)

対空戦闘等で下方向への弱点等があるが、

対宙戦闘を建造開始した12月には考えてなく、

よく下部の第三艦橋が破壊、死者が多数でる描写もある。  
そこんところが引つ掛かっていた。

(まあまさか対宙戦闘あるとおもってなかったからなあ…

試験航海おわったら改装しなきゃいけないだろうし…

けど火力の集中もあるから…

ん…複数艦での運用しかやっぱ考えられないな…)

結論的に、恒星戦闘艦の運用は単独では考えない方が無難であると  
考え、

下方については他の艦がカバーし、

弱点をなくす方向でいくことにした。

輸送艇がヤマトの下部ハッチから艦内に入り、エアシールドにより  
与圧区画にはいり着艇した。

輸送艇から艦内へと入る。

格納庫は50機に及ぶバルキリーが積載可能スペースをとっていた  
が、

今回は内火艇を16隻積載している。

艦内通路から艦橋へと向かう。

食堂はキヤーティア技術導入により、合成技術が向上していて、本来の保存スペースから4割減して、また一回の補給で3年間は200人の人員を養う事ができる。

農場スペースにとられてた分はリフレッシュ区画へと変更していた。

また艦内要員の睡眠等に睡眠カプセルを導入、私室スペースをとる分を削減している。

といつても…今回は生身？の人員はカオル一人、あとの要員はヤドカリ、コバッタ達で固められていた。この世界での初めての進宙である。

第一艦橋に上ぼり、既に配置についているヤドカリやコバッタ達。

外部横浜司令部より通信がはいる。

『第14プラットフォーム建造艦、SBB-021へ、艦船名を登録お願ひします』

「ヤマト級1番艦、艦船名ヤマト」

『艦船名ヤマト…登録されました。SBB-21ヤマト離床許可を与えます』

異世界軍における宇宙戦艦クラス21番艦、ヤマトが認証された。

「了解、起動シーケンス」

「補助ジュネレーター点火」

サブ動力炉である、核融合炉に明かりが灯る。  
エネルギーが波動エンジン起動に向け、  
蓄積していく…

「スターターへのエネルギー充填率100%」

「波動エンジン始動」

スターターに貯められた全てのエネルギーが、  
波動エンジン動かす為に…エンジンの唸りが上がる。

「波動エンジン、出力上昇…起動しました」

「よし…プラットフォーム、固定アームをはずせ」

プラットフォームに対し、艦固定アームを外すように通信をおくる。

アームが艦から離れ…

「離床確認」

プラットフォームから離床用アームで艦を軽く前方へ押される。

プラットフォームから押し出された慣性でゆっくりと前へと進む。

「サブスラスタ、点火、構内速度前進」

スラスタに火がとまり、プラットフォームからゆるゆると艦はなれてく…

「回頭左舷90」

プラットフォームにスラスタの排気炎が届かないように艦を回頭させ、慣性でそのまま艦の右方向にながれる形になる。

「波動エンジン接続、メインスラスタ微速前進」

メインスラスタに火がとまり…ヤマトがその巨体を前へと進み始める。

地球のラグランジュ軌道より離れたヤマトは、火星へとショートワープの準備にはいる。

短い区間だが、1G等加減速では、現在1日の距離にあるので試運転にはやりやすかった。

「目標ポイントまでの障害物感知せず」

「座標固定」

「エネルギー充填率…60%」

ヤマトに積まれているワープ機関は、  
進路上に障害物があると…えらい事になる…

例えばガラミス艦隊…がいたとしよう…

ガラミス艦隊を通り越すようにワープ進路をとると、  
運が良くなければガラミス艦上に出現し、  
その時点でヤマトの質量とガラミス艦の質量がかけ合わさった対消  
滅爆発により、  
ガラミス艦隊とヤマトごと周囲1光年あたりにわたり、  
消滅してしまう事故がおきる…

なので進路上に障害物が無いかをサーチし、  
障害物がないかを確認した上でワープを起動させなくてはならない…  
という安全面での制約がある。

今だプラントで制作できないキャーティア技術のワープと、  
違う点がそこだった…



「最終安全確認完了、ワープ始動10秒前」

ヒヤヒヤする瞬間ともいえよう…

ワープ自体は、波動エンジンの出力に応じたワープ距離がとれ、安全が確認できれば1000万年光年でも可能…

しかしそこまできると、正直負が悪く、ほぼ99・9999%なんかしらにぶつかり、

対消滅反応を起こして消えうせる事になる。

彗星でも駄目、小惑星でも駄目、宇宙船でも駄目、サイズのには1mの物体でも駄目…

という際どいものである。

10cm以下の物質であれば対消滅反応起こさずに、上書きできるのがまだ救いであつたらう…

そんな危険極まりないが、長距離可能なのが、ヤマト世界のワープの売りの一つであつた。

「ワープ」

瞬間ワープ空間に突入、光の速さを越えて…

体感2秒位で幕を飛び越えて通常空間へと復帰する。

「ワープアウト、座標確認…目標ポイント誤差コンマゼロ…  
試運転終了します」

艦外窓の正面には、火星が見えていた。

「…ヤマト世界のワープって正直…対消滅反応起こすかもしれんか  
ら、

ヒヤヒヤドキドキだもんな…」

「安全確認とれてる場所意外ではやれないよね…」

「充電さえできれば連続跳躍は可能でもあるし…」

「そういった意味では機関的には複数搭載も可といえるね」

「ショートワープの連続か…敵の背後に直接出現かもね」

「計算がえらく手間取るけどね」

「だなあ…」

「メインスラスター加速、火星軌道へと入ります」

「火星か……」

火星…しつての通りBETAの搾原地になつてるのがわかつて、約35年程…

ハイヴが15個建設されていた。

そのうち親離れし、新たな司令塔になるかもしれない。

その親が連絡とれずにいたこの環境こそが、地球人類の命運を救つたとも…

今となつてはそう判断できるかもしれない。

分厚い大気に阻まれ、地下深くまでビーム兵器が届きにくいこのBETAの天国に…

黒い悪魔を送りこもうとしていた。

「ゴキブリ兵器投入用意」

「了解マスター、ゴキブリ兵器搭載機発進用意」

ヤマトの後部艦載デッキが開き、内火艇が15隻発進してく…

内火艇にはゴキブリ兵器が搭載され、

軟着陸できる着陸ユニットを積載していた。

ゴキブリ兵器が漏れたらホイホイさんで対策とらない限り、

重大事故に繋がる…

そのゴキブリがつかまったカプセルは嚴重な容器に、密封されていた。

容器には腹減った、何か喰わせると、ゴキブリがうじゃうじゃとうごめいている。

火星の大気圏に突入した15隻の内火艇より、  
落着ユニットが地表に向け放出された。

落着ユニットは機体をまもるべく、地表から所定高度になると逆噴射し、  
速度を落とし地表に軟着地したあと、  
カプセルを切断しゴキブリを放出する。

そういった動きをとる筈だったが…

大概の落着ユニットがたどった流れを記載しておく。

落着ユニットの逆噴射を発見した要撃級が、  
威嚇の為に空中にまだある落着ユニットに前腕を早くも伸ばしてた。

過去の学習であろう…  
落着ユニットは地表に接地する前に、前腕部でたたき付けひしゃげた。

ひしゃげたユニットに更に前腕部をたたきつけ、破壊行動をとっていた。

また戦車級が資源として回収すべく歯をたてていた。

そうする事により…カプセルから隙間があき、

そこから衝撃に生き残ったゴキブリが、

一斉にユニットを攻撃していたBETAに餌だ！の如く襲い掛かった。

まさにBETAにとって未知なる生物に襲われる。

その大きい凶体が小さいゴキブリには届かず、

前腕の死角の部分から体内に侵入される。

体内に侵入され組織を咀嚼され、その間に分裂増殖して、

痛みを感じる器官があれば、体内で激痛がはしり苦しみ悶えてるだろう…

なんとか振りほどこうと暴れる要撃級…

しかし、段々と体内組織が喰われて行動が緩慢になっていき…

とうとう命が持たなくなり…

地面に崩れおちた。

しばらく皮の表面近くでゴソゴソとじわじわしているゴキブリ…

その皮を突き破り、数を増殖したゴキブリは、味方である個体の周囲にいた他のBETAに襲い掛かり始める。

「内火艇全15隻帰還、無事に投下済み」

「おうおう……」

スクリーンではBETAに襲い掛かってくゴキブリが映ってた…

「これならこの兵器使えそうだなあ……」

「だね…グロいけど……」

「火星の状態は……」

「監視衛星で横浜基地でモニター中だよ」

「どんだけ変化なるか…かなり個体数へってほしいけどな…」

「だね」

「ほんと火星破壊しないと、攻略できないくらいいるしなあ……」

火星はフェイズ9の規模のハイヴが15個…  
その個体数が10億は越えていた。

「破壊した方が速いよ〜地球に影響でちゃうけどね」

「だな…さて…次はタイタンに投入か…」

「目標座標、土星近海、フォールドシステム作動準備」

ワープは今度は使わない…というより使えない。

アステロイドベルトに引っ掛かってしまうからだ。

サーチしつづけ、タイミングを見計らえばワープは使用可能でもあるが…

障害物あっても跳躍可能なフォールドの方が楽ではあった。  
時間が流れるが短距離なら問題はない。

フォールドの制約の重力の影響をうけてるが…

「重力障害除去、跳躍可能、エネルギー充填中…」

計算さえしつかりすれば地上でもフォールドができる点が、フォールドシステムの売りであった。

まだ跳躍可能距離が短距離すぎると、

時間軸のズレが1：10でであるが…

「充填率100%…フォールドシステム作動」

艦のフォールドシステムからエネルギー空間が周囲へと広がる。

「フォールド空間固定…フォールドイン」

エネルギー空間が艦全体を包み込んだところで、広がりはとまり…瞬間フォールド空間へと入れ代わる…

艦内時間1秒にも満たずに、通常空間へとヤマトは復帰する。途端にエネルギー空間が収縮…システム内部にて消滅する。

「デフォールド…目標ポイントずれなし…土星近海」

艦外窓には土星が見えていた…

「これよりタイタンの衛星軌道へとはいります」

土星の衛星タイタン…

分厚い大気圏に阻まれ、

またも大気圏外からの大出力レーザーを撃ち込ませられずにBET Aの天下をゆるしていた。

「火星とここタイタンを下せば…」

冥王星圏内はとりあえずの目処がたつのに…」



「とはいっても2億を越えてる個体数があるこのタイタンに、降下するつもり？」

「したくはないなあ……」

BETAが完全占拠している星は、個体数が星サイズによるが億を越えてて、  
10億近くに到達する場合もある。

火星等が代表的であろう……  
そんな星に降下で安全地帯となる拠点を構築するのは、  
困難を極める死闘になるのは十分予測される事であり……

なので、対抗生物となるかもで、実験的にゴキブリ兵器がまた投入となる。

「タイタン衛星軌道到達、内火艇発進します」

火星軌道から移動中に再び到着ユニットを搭載した内火艇が、  
下部ハッチからタイタンのハイヴに向けて発進した。

タイタンは約5千キロ、8つのハイヴを構築していて、  
実に個体数5億の数をこたえていた。

内火艇は濃い大気圏に突入し、ハイヴ近辺にくと、搭載している落着ユニットを投下した。

落着ユニットは全基軟着陸に成功し、カプセルを切断作業にはいった。

異物を観察しにきたBETA、この星では初遭遇の為情報が行き渡ってないのだろう…

資源として回収しよう…

カプセルから飛び出たゴキブリが襲い掛かる。

この星でも黒い悪魔は襲い掛かった。

「落着ユニット全基投入成功です」

「火星の情報伝わってなかったか…襲われすらしなかったんだな…」

「火星では過去に度々人類が送ってたからね」

「まあ指揮系統が惑星内部とまり…って事の証明だろうな…」

「だね」

「監視体制を衛星に引き続き、土星軌道圏内から離脱します」

試験航海は、メインイベントを迎える。

「さて、亜光速へか…」

恒星間において、最大光速の30%で襲撃してくる、突貫級を迎撃できるようにしなければならぬ…

「メインエンジン最大加速」

「10G…100G…1000…2000…00…1000…1200…1400…1600…1800…2000G最大加速です」

ヤマトの巨体が亜光速目指し最大加速にはいつる。

本来なら艦内部に2000Gという凄まじい重圧がかかるが…

ヤマト搭載の重力拡散装置により、艦の推進減速作用による前後の動きについてはかなりの低減ができ、Gが艦内にかからずにいた。

銀河鉄道も加速は1000Gを越えていて、同様なシステムを搭載

している。

1時間後には光速の23%に到達…まだまだ加速できるが…

「テスト終了、減速開始します」

流石にこれ以上加速しつづけると、減速に時間がかかる為、テスト終了し減速にはいる。

「本来なら…1日と2時間24分か？ずれば…」

「シールドなしだとそうだね」

恒星間航海船であるヤマトは、光の速さを越す銀河鉄道と同様の空間シールドに包まれ、時間のズレを回避できるシステムを搭載している。

その為、時間のズレなく巡航速が光速の99%になる。また空間シールドの恩恵で光速を突破も可能であった。

先に銀河鉄道をコピーしたからこそ、搭載できたシステムといえよう。

「引き続き、最終目標地点、バーナード星系への中距離フォールドはいります」

今回はついでに地上探索もかねてのワープになる。

(ん？フォールド？)

「あれ？ワープじゃなく？」

「20日近くにわたり、カイパーベルト群が進路上にあたりますの為フォールドに切替ます」

「あ、了解」

空間探索がキヤードティア技術で10光年にわたり可能でも、タイミングがシビアになりすぎるので、フォールドに切替たようだった。

因みに約5.9光年離れているバーナード星系は、空間探索により戦闘用は引っ掛かってなく、恒星に6つの惑星からなっているのを確認できていた。

「目標座標バーナード星系近海」

今回は地上のBETA侵攻状況の確認をかねて直接星系内部に、デフォールドする。

「フォールド時間、艦内部経過時間1時間24分59秒します。艦外時間14時間9分36秒」

ゼントラーディ技術では、10光年で1日経過するフォールド…

「エネルギー充填率100%…フォールドシステム作動します。  
……フォールド空間固定…フォールドイン」

バーナード星系へと超空間転移にはいった。

……

カオル報告

始めて人類？が太陽系外へと進出します

タイタンと火星にゴキブリ兵器投入成功

ヤマト試験航海中

ナギ少尉「とうとう太陽系外へもいくのね…」

作者「まあ…話の流れ的にいってそうだなあ…  
資源搾取を求めてでもあるね」

ナギ少尉「で、ケンタウルスアルファでなく、バーナード星系？」

作者「ケンタウルスアルファは…  
どうしようかなあと考えたんだけど…なんか複雑化してるので、  
惑星なし恒星系として、異世界軍には認知ずみなので探査対象外と  
しました。」

なのでこの後も中継局でできるかもですが…」

ナギ少尉「うんうん」

作者「バーナード星系は、リアルでは惑星がある根拠が無し…とい  
われてます。  
ですがU1でのエンディングがあるいじょう…惑星は存在すると設  
定しました。  
なので惑星内部の探査対象となっております」

ナギ少尉「ほうほう…で？」

作者「詳しくは次回に…」

ナギ少尉「まあ次回お楽しみみて事ね…」

あとヤマトの設定突っ込まれそうだけど？」

作者「まあ…本文とおり艦載機やら、なにやらでとてもじゃないですが、地上艦と同様にはいきません。

設定の矛盾はヤマト原作者も認めてるので、そういった事にしました」

ナギ少尉「263mや293mだとね…」

作者「あとGについては…1G加速で1年でやっと光速近くに到達と考えると…」

とてもでなくイスカンドルへ到達できません。

ワープにたよりつきりになるでしょう…」

なのでそういった艦全体的に加減速Gを、

キャンセルする装置が詰まれているとおもって下さい。

銀河鉄道も同様です」

ナギ少尉「さて作者の苦しい言い訳は個々までで…」

次回、バーナード星系へ…お楽しみにい」



第193話 バーナード星系へ 投稿日20111121

「ほお……」

「ん？何かあつたんか？」

「武、このニュース見てないのか？」

「ん？どれどれ？」

異世界軍ホログラムニュースを覗き込んだ。

横浜基地は、オリジナルハイヴ攻略後、  
太平洋総軍第11軍としては規模を縮小、  
異世界軍の基地と化し、  
またオルタネイティヴ4は異世界軍内部に活動の場を移し、  
A-01に関しては、異世界軍に身分を移していた。

その為冥夜ともこういつてのんびり武もPXでデザートを、  
つつついているようなものだった。

因みに、横浜基地所属の国連軍兵士達は、  
前線により近い鉄原基地または、重慶基地へと移動している。

「バーナード星系への進出中??」

ヤマトがフォールド航行によりバーナード星系へ向かっているニユースが流れている。

「バーナード星系か……前とは違うな」

（（

武はそつと胸を押さえる。

内ポケットの中の異動命令とIDカード。

これがあれば、明日この基地から打ち上げられる駆逐艦に乗る事ができる。

衛星軌道上のステーションを経由して、ラグランジュ点に集結している移民船団までの片道切符……

「オールタネイティヴ5」

人類種の生存を優先目的としたバーナード星系移住プランと、米軍が開発したG弾の大量運用で、地球上のBETAを殲滅する作戦が対になった計画。

だが移民船団に乗れる数はたった十数万人だった……

その最後の便となる駆逐艦、搭乗リストに名を連ねるのは、様々な分野のエリート達であった。

人類という種の希望を、未来へとつなぎうる人々が……

そこに誰かが自分を選んで、このチケットがある。

しかしその誰かには悪いが……

自分に行くつもりはなかった。

このチケットは―

……

地下のシリンダーには霞がしがみついていた。

「ここにいたら死んじゃうんだぞ？」

「いや！私いかない！

自分がいなくなるなら死んじゃう方がいい！」

「そんな事あるわけないだろ！死んだ方がましだというな！」

……

霞をたまに預けた。

霞は黙ったまま泣きそうな顔をしている。

「じゃあ、ここでお別れだ。霞」

黙ったままの霞の頭をなで……

「元気でな。向こういったらちゃんとニンジン食うんだぞ？」

「…はい」

「…じゃあな」

「…ばい…ばい」

「霞、こういった時はまたねって言うんだ」  
霞の前にしゃがみこみ、

「もう一度あいたかったら……またねって言うんだよ」

「……また…ね」

「ああっ！またな」

霞は一度頭をさげ振り向かずに…

……

武は打ち上げられた最後の駆逐艦を見上げた。

（どんなに離れていても、おまえとオレの魂は一つだ。

どんなに離れていても、オレはおまえのものだ。

さようなら…）

この後地球残留組としての任務…

BETA生息域への、G弾による無差別攻撃、

そしてその後続く掃討戦、

勝利をしても半永久的に死滅した大地がのこる…

種を残す為に人類全体の命をベットしての、

終わりのない作戦が開始される。

もう間もなく……

（（

「何だ？前とは…ほうけて…そなた…」

「ん？ああ、いや、小説で読んだだけだよ」

「ああ、図書資料室に入った新作か？  
何か面白いのが？」

「ああ、宇宙開拓物がな」

「ふむ。そなたの薦めだ、後でみてみよう…  
と、武、先に行くぞ」

「ああ、また後でな」

（バーナード星系か…オルタネイティヴ5が凍結したこの世界だと…  
俺の意思で行くことできるんだらうか？  
しっかし…太陽系外進出か…  
人類に余裕ができたって事はいいけど…  
この先どうなるのかな？）

と最後に不安に感じると…  
後ろの席から会話が聞こえてきた。

「太陽系外か…」

「アムロ大佐は行かれた事が？」

「いやないな…僕の世界は太陽系内だけだな…  
フォッカー少佐なら…」

「いや、俺の世界も太陽系内どまりだぞ。  
事故で冥王星軌道にはいったが。  
帰還の道のりが大分かったな」

「どれくらいかかったの？」

「通常航行だから9ヶ月」

「へえ…通常航行でもそつちはそんなもんでか…」

「そちらさんは？」

「木星まで…ヘリウム燃料輸送する船でもあるんだが、  
往復5年だな…」

「マゼラン級とかに使われてるエンジンですよね」

「ああ」

「宇宙人といえば…ゼントランでしたっけ？  
あの人達は？」

「あいつらか？話聞いてなかったなあ…」

ああ、ほれ、基地には居ないな。

交代でカイパーベルトいつてるようだ」

ホログラムを切替で、部隊マーカーから任務内容を表示させてた。

「あ、攻略艦隊にですね」

「そうかんがえると…恒星間を経験したのって、  
この軍でもゼントランの人達だけなんですわね」

「確かにそうだなあ…オーブの世界の人達も地球圏だろうし…」

「あゝあいつらは…あのちっこい達は」

「学兵さん？」

「…そうそう」

「あの人は、地球上のみですね…確か」

「あとは…あゝ…」

「バーナード星系か…私も早くいつてみたいな…」

「ん？何でだ？」

「人類の革新を促す事もできる発見があるかもしれんし」

「発見ねえ…まだそんな事考えてるのか？」

「けど、原生生物とか固有種あるんですよ？」

「だろうね…かじったただけだが、環境が違えば同じ遺伝子構造からでも発展する要素が違うし、ましてや全く形態が違うだろう。調査したら億の発見があるんじゃないかな？」

「バイオテクノロジー面でも発達が見込めそうね」

「確かに…一から組成も違うだろうし」



「問題は…人材がとにかく足りないだけになってくるわね」

「調査や研究面で？」

「それ以外もよ…入植とか、現地インフラとか…、私達だけじゃ、到底やっていくほど数が居ないでしょうし」

「民間人を入れ数を揃えたとしても…」

「いきなりそんな環境下で、鍛えもしない人達が、無事に使えるかどうか？ね」

「確かに…結局は、僕らから回すしかないでしょうね」

「ま、近々派遣任務もあるだろうし」

「バルキリー組は、ですね…  
僕らはどうだろう？」

「地上任務ではMS組にも話かかるんじゃない？」

そろそろ昼食の時間が終わりに近づき片付けながら、  
各々にトレイを返しに行きはじめた。

西暦2002年2月12日

「デフォールド」

フォールド空間が収縮すると…

「目標座標確認、バーナード星系です」

「とうとうきたのか……」

星系探査、地上状況確認しろ」

「横浜基地司令部とのリンク確認、時間軸治します。  
…異常認められません」

『おめでとうございます。カオル元帥殿』

「ティアナム提督」

『ついに太陽系外へと到達しましたな』

「ありがとうございます」

『それでは異世界軍にとっての、人類にとっての吉報を頼みますぞ』

ヤマトの各種探知装置でもって、バーナード星系の地上探査にはいった。その結果…30分後には…

「バーナード星系6つの惑星、及び1000km以上の衛星、小惑星ともにBETAの存在確認できません」

「おお…BETAが未踏か…」

つまり安全な資源がまるごと、また可能性の段階だが、居住可能な環境下の惑星が存在し、人類の手に入るかもしれない…との事だ。

地球にある資源だけでは、宇宙戦行うには継戦能力に支障がでる。その為には搾原地が必要なのは明白だった。

「よし…未踏なら搾原地にも問題ないだろう。資材放出、通路を確保する。」

地球横浜基地司令部にも通信送っておけ」

ヤマトの下部ハッチが開き、資材各種積み込まれた内火艇、輸送艇等が発進した。

それらの各艇は部品を積み込んでいて、

停船しているヤマトの右舷側にて、部品を放出、滞留させる。

宇宙空間でコバツタ達が、放出した部品をえんやこらえんやこらと合わせて、

接合させる。

何にもない宇宙空間での接合作業の為リベットで合わさってく…

そうしてヤマトが放出した部品が形になってくと…

チューリップと、巨大なレーダー、町工場みたいなのが組み上がった。  
チューリップと、

超空間ワームホールである小型チューリップと、

小型ながらの対星系外監視基地、

同じく小型ながらの宙間工場がバーナード星系に付設されたのだ。

その時間、バーナード星系到達後にして、1時間10分後。

チューリップの核融合炉に火がとまり電力が供給される。

監視基地が最終チェック入って、監視体制が整う…

工場に人工重力が発生し、作業環境が整ってきた。

チューリップのワームホールが、地球にあるL4中継コロニーの相方と繋がり、  
多目的輸送艇が時差無く、バーナード星系に資材を運んできた。

バーナード星系の基地化へ一歩踏み出したのだった…

小型チューリップが稼動し始め、  
監視基地が稼動し始めた。  
資材がどんどんと太陽系より運ばれてくる。

監視基地は、キャーティア技術の恩恵で、  
光年の距離を跨いでも、数百mサイズの物体まで検知でき、  
太陽系、バーナード星系ともに25光年の広大なる監視範囲を広げていた。

「超空間レーダーに感あり、何か光速20%の速度にてバーナード星系へ向かっています。  
到着予定93年後から順次：個体数8」

その監視基地が約23光年先に、  
バーナード星系へ到達しようとしているのを探知し、ヤマトに知らせてきた。

流星に光年の距離にわたると、探知もリアルタイムにはできず、若干の遅れは生じるものの…

「まっすぐバーナード星系へ？」

「はい」

「どの方角から？」

「ベテルギウス方面から…個体の大きさが数km級」

「ふむ…到着ユニットかな？」

監視基地のレーダーが、バーナード星系に向かう到着ユニットを捕らえ、

約25光年の距離にわたるの監視範囲に引っ掛かったと判断される。

小惑星や彗星等とは判断はないだろう。

過去にオルタネイティブ5が発動し、地球脱出し目的地となっていたバーナード星系…

到着しても20年後には…到着ユニットだとすると、再びBETAの脅威が襲い掛かってきただろう。

移民人口は1000万人が移住対象だと過程して、赤子が生まれて

も、せいぜい1500万に届くかどうか…

地球人類という種はさしたる手段なく、世界から消滅しただろう…

が、この世界では…

「8か：たたいておけば、ほぼ到着ユニットの追加はなさそうだし…  
永久資源及び基地化には問題なさそうだな…  
砲は問題ないよな？」

「擬装すんでるよ。問題なし〜」

「基地付設作業平行しながら当艦は、射撃テストを行う。  
目標恒星間航行中のアンノン、到着ユニット予想。  
総員第二種戦闘用意！！」

小型チューリップから、資材の再補給していたヤマトのハッチが閉じ、

サブスラスタにて各基地施設に影響でない位置まで移動すると、

メインスラスタにて転移位置まで移動…

「目標、23光年…バーナード星系到達予定のアンノン近海、  
フォーールド展開準備」

「フォールドシステム作動、目標座標固定、  
主観時間5.5時間、客観時間2日と7時間かかります…  
充填率100%」

「フォールド!!」

フォールド空間が展開し、ヤマトは遙か彼方へと旅だった。

……

カオル報告

バーナード星系基地化を行いながら、

ただ今防衛戦闘の為フォールドに入りました。



第193話 バーナード星系へ 投稿日20111121 (後書き)

ナギ少尉「バーナード星系到達と、  
到着ユニット迎撃に向かう回？」

作者「という事ですね」

ナギ少尉「…もうちょっとさくさくと星系だつしゅ、  
いざどつかの世界へ」といかないの？」

作者「すみません次のシーンが完成してないので…」

ナギ少尉「あ、戦闘シーン？」

作者「なんでこの話の区切り方になりました…  
多分次にはどつかの世界へまで…  
行きたいなあまでは思いますが…」

ナギ少尉「で副鼻炎どうなの？」

作者「まあまあっすね…ただ軽い慢性化が右のになっちゃった  
みたいっす」

ナギ少尉「あらら…お大事に…次の方」

作者「さて次回、バーナード星系防衛戦闘…でいいかな？お楽しみに」

ナギ少尉「23日には投稿できるようにしなさいよ！」

第194話 バーナード星系防衛戦 投稿日20111127

横浜基地

「バーナード星系到達、基地化か…」

「カオルさん光年の距離越えちゃったんですね」

「はぁ…」

「更に恒星間戦闘行っていくフォールド中か…」

「どんどん新しい事が起きてるわねえ…」

「ほんと、今まで何だったんだろって思っわよ」

「確かにねえ…」

「BETAにユーラシア大陸から追いやられて、佐渡も奪われて…」

「横浜も一時奪われたけど、先達の多大な犠牲で奪い返した」

「佐渡をとりかえすべく…力を蓄えていたけど、度重なるBETAの上陸、

それを防ぐ為の間引き作戦でままならなかったのよね」

「ヴァルキリー隊もね…」

「けどカオルさんと出会ってから激変し始めたよね…」

「うん…宇宙進出、佐渡島奪還、そしてオリジナルハイヴ攻略…」

「月の奪還、太陽系内の攻略作戦」

「残すは…地球に残る19のハイヴと」

「冥王星圏内だと、火星とタイタンだけになっちゃったね」

「しかも、19の内2つは攻略作戦発動間近ね」

「そして私達の戦死率0化…」

「新任が入って、次には居なくなる事も無くなったわよね…」

「来年度には完全に2個中隊になりそうよ」

「2個中隊化か…大隊規模になるのいつかしら？」

「案外、隊長が結婚する前じゃない？」

「言えてる、あの彼氏さん、優柔不断ぽかったもんね」

「おまえら何を話してるんだ？」

「け、敬礼!!」

先任達と共に打ち合わせしていた、伊隅が入ってきた。

「隠し事か？」

「た、隊長…これ如何です？」

「ん…？これは…？」

「混浴温泉旅館のオープン記念無料招待状です」

「ほう…長野県か」

「ええ、戦場となる機会がなかったので、早めに復興できたみたいです。

それで知り合いから頂いたので…どなたかお誘いできればでしたが、生憎いませので…」

「ありがとうございます。もらっておこう」

「GJ」と囁かれる高畑…

「さて諸君、わがヴァルキリーズは、4日後にエヴェンスクハイヴ攻略作戦に後詰めで参加する事となった」

「いよいよね…」

「ソ連軍主体のですか？」

「ああ、その通りだ…」

その後リヨンハイヴ攻略作戦にも参加となる。

こちらはチューリップによる輸送で現地へ移動との事だ」

「隊長、中型チューリップですが、  
トレインギャップに積まれてました？」

「それが別口に、マクロス級に中型を積んで直接大気圏外から、  
集結地のレーケンヒース基地へ着陸後、  
チューリップ使用となる」

「リヨンの作戦開始日時が出てませんが」

「わが軍の砲艦隊の到着次第ですれるから詳細はでてないが、  
約2週間後の目処と聞いている」

「結構間隔がないわね……」

「エヴェンスク後詰だからじゃない？」

「エヴェンスクは我々がお客さんだから、  
どちらかといえば移動スケジュールに、  
時間がとられる感じになる」

「一通り質問できつたらう……」

「もう質問はないな？……隊規斉唱！」

「死力を尽くして任務にあたれ、  
生ある限り最善を尽くせ、」

決して犬死にするな」\*多数

「解散！」

一斉に敬礼しわかれてく…

西暦2002年2月15日

「テフォールド、目標座標誤差修正なし。  
時間軸修正…」

「総員第一種戦闘配置」

「空間レーダー補足、視認、スクリーン投影します」  
修正された目標物が映し出された。

「落着ユニットか…」

「確認、BETAの落着ユニットです」

遙か約650光年の彼方から、BETAの新たな拠点構築する  
為に、

亜光速で恒星間を旅している落着ユニット、



その数が… 8基デジタル補正され、スクリーンに確認できた。

「まもなく第一標的、主砲射程圏内にはいります」

「まずは、主砲による斉射テストを行う、回頭左舷90！」

「回頭左舷90」

ヤマトの巨体が左に回頭する。

「全主砲、ショックカノン斉射よーいーいー！」

艦首側に備わっている、第一主砲塔から、第三砲塔までと、後方の第四砲塔、第五砲塔が艦の右舷へと砲門を向ける。

「射程圏内へ… 10… 5、4、3、2、1」

「てえー！ー！」

ショックカノンが放たれ…

「弾着まで20」

「副砲及び、対空兵装、破砕デブリに備えよ」

艦首側の第一副砲塔、第二副砲塔、  
後方側の第三副砲塔、第四副砲塔が右舷を向き、  
対空バルスレーザー各基が砲門稼動具合を確かめてた。

「弾着！！今！」

落着ユニットがショックカノンを受けバラバラに破碎された。  
そのまま亜光速でヤマトに迫ってくる。

「破碎デブリを逃すな…全砲門てえー！！」

落着ユニットの破片はヤマトの集中砲火を受け、どんどんと細かく  
なっっていく……

mm以下の無害な空間物質へと変貌していった…

「第一標的、無力化」

「続いて、波動砲テストを行う、目標第二、標的」

艦首に備わる波動砲テスト発射テストに移行。

「波動エンジン圧力上昇、エネルギー弁閉鎖、非常弁全閉鎖」

「波動砲への回路オープン、エネルギー充填開始」

「波動砲、薬室内圧力上昇」

「全エネルギー波動砲へ、強制注入機作動」

「波動砲安全装置解除、セイフティロックゼロ地点へ、  
圧力発射点へ上昇中、セイフティロック解除、圧力限界へ」

「波動砲発射用意、右舷回頭90」

ヤマトの巨体は右方向へと頭を向ける。

軸線上に到着ユニットが入り込み、波動砲発射シーケンスが開始する。

波動エンジンからスラスタに向かってたエネルギーの流れが変わり、  
波動砲へとエネルギーが貯まる。

「ターゲットスコープ、オープン」

「電撃クロスゲージ明度20」

「効果範囲内に目標以外に、第三、第五、第六、第八標的確認」

「エネルギー充填120%」

「艦スクリーン光減モードへ」

「波動砲、発射まで10秒前、  
最終セイフティー解除位置、確認、  
5、4、3、2、1、発射！」

艦首の砲門より放たれた光の奔流、

落着ユニットを複数まきこみ…

「目標含め、射線上5標的消失、デブリ発生なし」  
その構造を融解させ、跡形もなく溶かしきった。

「よし…残りの第四、第七標的に、  
反応弾ミサイルテストを行う」

「艦首ミサイル第一から第六セル反応弾装填開始」

「反応弾セイフティーロック解除」

「反応弾装填完了」

「よし…目標、第四、第七標的、  
発射後回頭180度、機関最大推進…」

回頭180度は、反応弾の効果範囲をまだ把握してない為の措置である。

「回頭180度、機関最大準備よし」

「反応弾、発射！」

「反応弾発射！回頭左舷180度」

艦が180度旋回し、

「最大推力！！」

一気に加速し始め、2000Gの推力で逃げる。

「弾着！」

スクリーンには弾着すると光がユニットを包み、消えうせると跡形もなく消え失せていた。

「デブリも存在なし…」

「発でよかったね」

「みたいだな…さて、減速…他の移動反応さないな？」

減速し始めて…

「レーダー反応なし、

バーナード基地からも追加オーダーありません」

「戦闘及び試射テスト終了、バーナード星系に帰還する。  
フォールド航行準備！」

…

ヤマトは試射終了し光の彼方へとフォールドしていった。

一方そのころ地球では…

エヴェンスクハイヴ攻略作戦が発動していた。

フェイズ2規模で拡張作業中であつたこのハイヴは、  
光線級がまだ存在しない若いハイヴであつた。

ソ連がBETAの物量に耐えていたのも、光線級の存在が殆ど確認  
できず、

航空戦力が使えたからにすぎない。

が、度重なる進行時に光線級がちよくちよく確認され、

去年の大規模進行時には、光線級の奇襲があつた事でかなりの大打  
撃をうけて、

救援がなかったら戦線崩壊していたかもしれない。

そんなギリギリの状態だった：

今年2月の桜花作戦成功により全体的に弱体化された今、

ソ連の異世界軍の力を借りた逆襲がはじまった。

西暦2002年2月16日

エヴェンスクハイヴに、低空より飛来したミサイルが煙幕を出しながら上空をうめつつ、

一回ポップするとハイヴに向かって雨霰の如く、多数の煙幕が突き刺さっていく。

煙幕弾頭ミサイルによる長距離射程距離からの撃ち込みから始まった。

迎撃反応は遅い…

瞬間にハイヴ周辺が煙幕につつまれ、

まだ出てなく、数少なく光線級が、すぐに無力化され、右往左往してる。

しばらくすると煙幕の中ザワザワと、ハイヴ周辺から音がしはじめた。

何がおこっているのか、赤外線スコープで覗くと…

ハイヴの門から迎撃の為にBETAが湧き出てきたのがみえていた。

各国の軍隊は、広まった煙幕弾の為に、少なからずの戦略の変更も強いられてた。

暗視装置の搭載の必須である。

有害であった重金属雲は暗視装置は必要ではなかったが…

OSの積み替えと同時にCPUの積み替えがすすみ、  
余裕できた部分で様々な暗視装置がひろまった。

最新のだと……

ビューー

音が上空より飛来してくる。

赤外線で…赤々とうつる物体が…

ドドドドド

門から湧き出ていたBETAに突き刺さったと同時に爆発、  
炎を撒き散らし、高温により真っ赤にそまる。

次々と飛来する砲弾…

12時間にわたるビッグトレー砲艦型の集中豪雨が始まった。



弱体化する前には周辺ハイヴからの応援がこの段階で既に動きがあったが、

弱体化された今…動きが確認されなかった。

他のハイヴとの通信を司る存在が倒されたからだ。

そして…12時間後…

次々と追加される煙幕弾により、

今だにハイヴ周辺は煙幕に包まれたままだった。

スコープで覗くと…

地表が大きく削れ、地下構造物もかなり露見、崩壊しているのが確認できてた。

約5億にわたる砲弾による集中砲火の結果…

地表から地下深く迄存在する構造物の内、

構造物は、横道や広間にいたBETAごと地下200m近辺まで削りとられた。

土砂はこの集中砲撃により巻き上げられ、

後には大きなクレーターとしてのがこっていた。

残存個体数7151まで大幅に激減した。

迎撃に表にできるも砲火の露となった突撃級…  
1番数多かったのが、崩落した横道に潰される個体だろう。

そこにソ連軍機が祖国を取り戻そうと迫ってくる…

迫るソ連軍機はOSバージョンアップ済みの8個機甲師団に及ぶ…

祖国奪回の一步であった…

西暦2002年2月17日

「お、かなり形になりつつあるなあ？」

ヤマトがバーナード星系外にて到着ユニット迎撃の恒星間戦闘を終え、

バーナード星系に帰還。

フォールド航行の影響で、

今回の戦闘と移動時間が…往復丸5日かかっていた。

中型チューリップが組み上がり、

より大型のワームホールが地球圏と繋がって、

地球より、設営資材が次々と多目的輸送艇で運ばれてきた。

ヤマトがバーナード星系防衛の為に出発したあたりに、  
監視基地内部の人工重力工場ができあがると、

作業効率が上がってきたはじめた。

ある意味ワンセットになる地球との通路が確保できれば、その後の設営資材の搬入は速い。

小型チューリップで運べるサイズに分離された機材が、工場で次々と組み立てられて形となる。

もちろん、中型チューリップを組み立てるべく部品が運ばれて、工場で組み立て作業が始まり組み上がって、中型チューリップが稼動し始めると…

更に基地化への建設速度が上がり始めた。

中型チューリップで運べる範囲1000m以下の機材が、太陽系から運ばれてくるようになったからだ。

対となる小型チューリップが運ばれてきて、第二惑星地上へとコントロールユニットと共に運ばれていった。

そして、中型に続いて星系内艦船用の3000m級が通行可能な、大型チューリップの部品を組み立てるべく、

作業用コロニーの部品が運ばれている段階だった。

更にその上は4km級艦船でも通行可能な特大サイズを計画しているが、

現状太陽系にも作られてない。

「バーナード星系の調査はどうなってる？」

「えっとね…もうだいたい環境調査等はすんでるね。

第一惑星は、人が住むには熱すぎるんだけど、良資源がとれるね。

第二惑星は人が住める大気組成をもってるんだけど…、

まだ地球人類が住んでも問題がないかどうかまでは言ってないよ。  
風土病等の調査は、まだ始まってないよ。

で、第三惑星は大地がある資源型。大気も存在してるけど、  
人が住むには寒すぎてるね」

多分移住に適さないから資源採取かなと…

続く第四惑星はガス星型、

第五惑星は資源型、

第六惑星は…水資源型の惑星ね」

「第四移行はさくさくだな」

「大気や住める大地がないからね」

「で、この後は…」

「計画の通り、このバーナード星系中心基地を起点として、

各惑星、小惑星との通路を確保が第一段階。  
資源採取、プラント建造での最適化及び、  
太陽系への輸送開始が第二段階。  
バーナード星系での造船等開始が第三段階。  
バーナード入植開始が第四段階だね」

「最終的に人が住む保障できるまで約1年はかかるね」

「やっぱそんなもんか」

「ただ単に人をほうり込むだけならすぐにでもだけど、  
各種風土病、未知のウイルスの発見と、それに対してのテストとか  
いっぱいやらなきゃいけないし…  
人種だけでも…ね」

「あゝ白人にかかって日本人にかからないとか？」

「うん。遺伝子構造的な…のになるけどね。  
だから、日本人に対して無害であっても白人に対して有害なウイル  
スもあるし」

「ハーフとかクォーターは？」

「もだど…個人的に遺伝子でみないとね。  
どっちかの特徴は含まれるし」

「一番良いのは悪く作用しない、風土病も無しってならな」

「そんな良物件あればね〜」

勿論地球にも風土病はある。

あのエイズも実はアメリカ奥地の風土病だとの話だった…

「じゃあ、あとの付設はヤマトに任せて

…帰還するか。

ヤドカリD - 8054任せたよ」

「了解っす」

カオルは格納庫の多目的輸送艇へと……

……

カオル報告

バーナード付設は任せて帰還します。

ナギ少尉「ちよつと大分期間あいたじゃない」

作者「う、すまん…キャラリストでのトラブルもあつてなあ…」

ナギ少尉「まあ…しょうがないわね。で本編に戻るわね」

作者「まあこの話でヤマトでの単独探索編は、終了の形となりました」

ナギ少尉「あれ？どっかの世界にいくまで行かなかったの？」

作者「フォールドの時間あるから、その時間に動きがないのも変だし…でなるとこの形になるんだよね」

ナギ少尉「エヴェンスク攻略作戦発動ね」

作者「まあ異世界軍自体が既にカオルいなくとも稼動してるって事だな」

ナギ少尉「で、ヤマトは波動砲発射〜ね」

作者「ロマンだよ」

ナギ少尉「ヤマトなら単艦で戦闘用に勝て…」

作者「あくむりむり。でかぶつは波動砲で一撃でも、突貫級やらが集中して突っ込んできたらな…  
実際の大和同様になるよ」

ナギ少尉「う〜…ならヤマト十隻」

作者「まあ…対空防御の網が作れるよな…  
母艦2から4辺りなら…だがそれ以上だと厳しいだろ。  
ヤマト級が100隻、間の網を戦闘機で埋めるだな」

ナギ少尉「でも…ガラミス帝国戦では単艦でしのいだよ〜」

作者「自爆特攻がどんだけいた？ほぼ全部が全部、特攻隊だぞ」

ナギ少尉「う……………」

作者「命を失う事を恐れないのは…普通よりも怖いもんだ。



別世界ものでもただの人間が狂戦士化すると怖いし…  
ましてやゾンビとかさ…」

ナギ少尉「で、でも…」

作者「それに結構死人でてるぞ単艦で」

ナギ少尉「……」

作者「なので単艦は考えてはないな。

エクセリオンでも無傷はなかったし、

10万隻辺りの殴り込み艦隊も確か80%近くが沈没したしな…」

ナギ少尉「殴り込み艦隊って…」

作者「と字数の問題で次回、バーナード星系より帰還、  
お楽しみ」

第196話 バーナード星系より帰還 投稿日20111130(前書き)

偽予告

地球に迫るベテルギウスからのガンマバーストフラッシュ

一瞬に地上は灰と化す日まであと10年と少し…  
マヤ歴予言通り地球は滅びるのか？

第196話 バーナード星系より帰還 投稿日20111130

2002年2月17日夜…

チューリップによる転移で約6光年の距離を瞬時にもどってきた。

「チューリップ便利だけど不便だよな…」

一緒に戻ったコバツタが、光年先ではデータ更新ができてないの  
で、

基地に戻り通信中と流れてた。

なので一人ぼやきだった。

確かにチューリップは時間のズレなく瞬時に、  
今のところはいけた。

が、元はアドレス不定のワームホール。  
演算ユニットがない為、

チューリップ自体にワームホールアドレスを固定した形になってい  
る。

その為専用中継コロニー内部では、日に日にチューリップの数がふ  
えてき…

「ちよつと整理する必要あつかなあ…

アドレスユニットねえ…

演算ユニットいれるだと…誰でもなる可能性が怖いし」

干渉できる者すべてに跳躍させる演算ユニット。  
間違いないく平和になったあと…銀行窃盗等多発するのが予測できる  
話。

作者自身は女湯に跳躍したい。

勿論看護女子寮の女湯に…

はたまた女子学生寮の女湯でも…

あなたは跳躍できたら何処に跳躍しますか？

男性や女性アイドルの私室ですか？

はたまた金庫室ですか？

はたまた…

そういった事予測される為、個人跳躍システムは危険すぎた。

勿論、しずかちゃんのお風呂に故意にどこでもドアで飛び込むのび  
太君もだ。

「と…データー交換できた？」

しようちもない話を進めると、  
通信中表示が終わった。

「できたよ…結構色々あったみたいね」

「例えば？」

「エヴェンスクハイヴ攻略作戦成功」

「あゝまあ楽勝だろ…あれは…」

まだ地下深く反応炉が届いてない為、

また砲火の嵐で十分に対応できる範囲であった。

「引き続き、ヴェルホヤンスク及びオリョミンスク、ハタンガをフ  
エイズ2の内にして、

少しでも内部に行くって〜」

「で、ソ連の前線基地は…どこにできるかな？」

「今のところ…何処にできるかはわからないけど…」

オリョミンスク跡地には異世界軍の飛び地がほしいよね」

「だな…」

流石にそこまで内部だと戦力を回すのが時間かかる為、  
基地はほしいものがある。

海岸から直進して4500kmあたりだとすると、  
鉄原から最大速度でとばして三日以上…

なため急行できるのが下駄に乗れる部隊のみになる。

「で、乙女達は？」

「出番なかったみたいで、ぶーたれてたみたいね」

「少しバージョンアップしたし…次のリヨンでは活躍するだろな」

「だよ〜」

「ゼントラーディ兵も参加すると息巻いてたしな…」

「実際前の桜花作戦時も凄かったよね」

「他には？」

「火星とタイタンのレポートが上がってるよ」

「どうなってる？」

「個体数の大幅な減少を確認」

「培養してた数が数だし、餌はつきないからなあ」

「で、期待通り対抗種…しかも小型のがではじめたって」

「お、うまくいったか？どんなのだ？」

「画面だすね」

前後ろが逆転した、

八チの羽が無いような形のBETAが写しだされる。

「八チ？」

「みたいの様なんだけど…八チでいうお尻が頭みたいね」

「大きさは？」

「全長10cm程の本当に小型だね」

「かなり本格的な対抗種か…」

今までBETAはその図体のでかさでいいようにされていた。

実在世界でいうと…

殺人蟻に襲われた人間であるに等しい。

群れて襲いかかるではないが、  
タスマニア島では、ある蟻が有名である。

その名をジャック・ジャンパー・アントとして呼ばれる、

*Myrmecia pilosula*

和名トビキバアリです。

ジャック・ジャンパーはブルドックアリの中でも小柄で、体長1cm程、

ジャック・ジャンパー名前以外にも、ジャンピング・ジャック・アントやホツパーアントなど、

跳びはねる系として呼ばれています。

ここまで跳びはねる系として言われて跳ねない訳ありません。

目の前に障害物があるとき…獲物に襲い掛かる時に、  
最高20cm程まで跳ねます。

また非常に視覚が良いと言われています。

さて…何故タスマニア島で有名かというと…  
毒蛇、毒蜘蛛、サメ等これら生物に攻撃され死ぬ死者の数を引く  
るめても…



それ以上の死者を出すのがこのジャック・ジャンパー・アントです。

YouTubeで紹介されているのに、生きた昆虫を食べるの好きな、

アシダカグモVSジャック・ジャンパー

の戦いが紹介されています。

大きさ比率にして実に30：1くらいありそうな…

なのに無謀にも単独で真つ正面から襲い掛かります！！

端からみたら蜘蛛の圧勝になるでしょう。

しかし、ジャックジャンパーアントの攻撃により…

20秒後には抵抗もできなくなり…

哀れ蜘蛛は、更なる増援の3匹目で凶悪な毒により…

餌として6匹にたかられ巣穴に運ばれていきます。

まさに凶悪そのもの…

それが人間にも襲い掛かって、刺されその毒により命を落とすのです。

スズメバチの毒強化型が小型化し、攻戦的だと思えば、日本人にとって恐ろしさがより実感できると思います。

群れで襲うのは南米エクアドルのバーチエルグンタイアリです。

映画インディーズのソ連兵士を巣穴に引き込むアリのモデルになりました。

総勢100万匹が、最大幅20メートルに及び行進し、行く手に潜む昆虫やサソリに手当たり次第襲い掛かり…生態系を全滅させてしまいます。

の為定住はできずに常にさすらい続けるのです。

ただ人間を襲うのは異物と確認された時だけ…

上記のジャック・ジャンパー・アントよりかは、人間に対しておとなしいといえましょう。

さて話を戻して…

とにかくBETAとつての肉食ゴキブリは天敵すぎ、

1番小型の戦士級の長い手でもつても手にあまる状態であった為、対抗できる種が誕生されたと思われた。

「攻撃手段は針で串刺し？」

「みたいね〜確かにゴキブリの身体には1番有効みたいよけど…」

「パワ的には鉄等貫く力はないな」

「うん」

小型化故のパワー不足、硬い甲羅も持てずに最低限対抗できる力だ

ろう。

硬い甲羅はそこまで小型化すると、動きに障害が生まれるので生物としては、実装できないとおもわれた。

貝の様にともいかないのだろう…

「多分、まだ推測段階だけど、毒でなく貫く力を優先してる為、人間にたいしては…筋肉に刺さる程度じゃないかな？宇宙服はやばそうだけどね。けど刺さったら痛そうだね。」

「装甲平均全般にとっちゃ…痛くもなさそうだよな？」

「多分ね、隙間に入られなければ…」

「V S ゴキブリとのキルレシオは…」

「ん〜1：1か、1：2…かもね。攻撃方法からだけど」

片方は針で突き刺す、片方は食らいつく…  
これからだろう。

「で、このハチ級でいいか？」

「だね」

「は…どつちで確認できた？」

「火星、タイタンとも」

「両方が…となると原種か原案が、既に存在してるって事だろうな」  
月面で確認取れなかったのが、機械類を利用した為、  
また災害認定にもされなかった為といえよう…

「まあ…これで割合が変化すれば…うまくいくよな」

「だね」

異世界軍におけるゴキブリ兵器計画の全容は、  
飛行機が邪魔だから光線級が生まれたように、  
BETA自身の適応能力に対して強烈に作用するのを期待した。

小型の肉食ゴキブリ…対抗するには小型化し、

より機動力及び隅々までいける様にするしかない。

ホイホイさんの様に……

そのこの適応能力にかけていた。

無論より装甲化し小型迎撃できるように……

と考えもあったが、生物兵器の範疇において、  
関節がないという事はできなかった。

母艦級のようなを除いてだが……が、母艦級のようなミニミズ型は、  
行動が限られてくる為万能にはできないのも事実である。

小型化する分、装甲を厚くすると……行動に支障がでる。

さて、小型の繁殖というか分裂能力が脅威的な、  
肉食ゴキブリが天敵認定された。

その後はどうなるだろう？

BETA自身が小型のゴキブリに対して適応する為に、  
それにより対抗できる様に種を増やすしかない。

で、今まで大型の種族は良い鴨だから、  
必然的に少なくなると予想されていた。

小型化したBETA、そこにより大型の装甲兵器が投入されたら……  
止められるだろうか？

勿論否。

反応炉破壊まで容易であろう。

ただし…その際チャンスは一回コッキリ。

その為にはまだ時間が必要であろう…

「あ、ベテルギウスの件だけ…」

ビッグシリーズを向かわせてた件であった。

「タイプ2・P型超新星爆発を確認、ニュートリノを検出、地球観測到達日時が…日本時間2012年2月14日午前3時25分ね」

「やっぱり…約640年前にか…」

「観測映像取得後、崩壊地点観測にいくつて連絡がはいたよ」

「映像撮影期間どれぐらいだったけ？」

「えっと…多分100日位じゃないかな？」

リアルタイムで撮影してるからまだわからないけど…」

「…ビッグシリーズにはベテルギウスに直向かわせたいからなあ…マゼラン級に観測機器搭載させて向かわせるか」

「マゼラン級??…多分積みきれないから、  
ヨーツンヘイム級がよいかもよ。  
戦闘ないしペイロード上の問題で」

「あ、じゃあそれで頼む…ところで」

「放射能とかでしょ？」

「ああ…」

「今のところ強烈なガンマバーストフラッシュはないね」

「ならー安心だな…  
それがきたら…」

10年後には地上は一瞬で死の星になるからな…」

「コスモクリーナーでも追いつかないよね」

「ああ、残留放射を除去分解であって、核爆発の直射は直ぐには無理だしな」

ちなみに地軸が地球に向いていてバーストフラッシュが起こった場合…

宇宙空間で300kj/m<sup>2</sup>が観測されるだろう。

「地軸が今回ずれてた為に、バーストフラッシュは別方向にいったと推測はされるね」

強い指向性をもったガンマバーストフラッシュ…  
100keVから1MVの照射ビームであり、地球に到達すると、650光年離れてても地球上で原爆の爆心地を遥かにこえる放射を浴びる事となる。

「で、通常のガンマ量は？」

「今のところ送られてくる観測だと…最大で5kj/m<sup>2</sup>だね」

「あーやっぱりガンマ線等被曝に注意しなきゃな…」

その量だと、60kg分の成人男性の場合、

遮断されるものがない宇宙空間では、

50SVの照射量が導きだされる計算である。



「コロニーや宇宙基地、月面基地等は対策とってるから大丈夫だけど、シャトルや月面走行車レベルだとまず耐えられない量だからね…あと宙間作業者もね…放射レベルにおいて、事前にわかってるし、航行禁止及び飛行禁止を出す話で進めとくよ」

地球にも勿論降り注ぐ、だが大気圏で減衰し、30kmの高さで問題なくなるレベルだろう。

が、当日付近においてより高空を飛ぶ機体は避けた方がよいのも事実である。

「あと衛星類だな」

「今の異世界軍以外の…だね…確かに耐えられずに制御不能になるの沢山ありそうな…」

「そこは国連にて発表、改造してもらうしかないだろうな」

太陽フレアを確実にこえる照射の為、通信衛星、GPS、気象衛星、偵察衛星に被害が生じるのが見え見えであった。

「で、衝撃波の範囲だよな…」

「今回の規模だと25光年にわたっては…かな？  
と思うんだけど流石に現地観測みないとほんとだね」

「最大で…？」

「精々150光年。物理的な衝撃は減衰するのが早いからね」

「ま、そっちは距離があるし、考えなくていいか…」

「けど人類史上初の体験にはなるね」

「シリウスとかだと洒落にはならないからな…」

「あ…8光年…うん。間違いなく、ガンマバーストでなく、通常  
放射能で滅亡レベル…  
けどあそこまで重量ある星なら大丈夫だね」

「ベガは…？」

「重量あるから超新星おきない」

「水瓶座ベータは？」

「……………」

「ちよっ」

「ありえるし、24光年程度だから…あつたら怖いね」

「ありえるんかよ……水瓶座ベータはとりあえず現時点では……」

「今のところ…兆候はないね。ただ24年前の時点だけだね」

「なら…直接現地で観測をすれば…爆発の兆候は随時確認できるよな」

「うん。だね…現地で確認だね。開発は星の状態みないとだけど」

「水瓶座ベータで爆発したら……」

「2型 - Pだと…放射能は…滅亡レベルかわからないけど、」

間違いなく衝撃波で大気圏がだし…  
破碎的衝撃も、壊滅的レベルがくるだろうし」

大気圏を衝撃波が削りとり、太陽光が直接地上を焼くようになる。  
そのご、星のかけらの小惑星群が地球にも到達するのだ…

「おきない事が大切だろうな…超新星対策は？」

「え〜と…直接星のエネルギーをとるなどで延命措置のプランなど  
あるね」

「現地で質量をかるくする…か」

「そうそう」

「…確かあ…あったなあ…まあ後でいくか」

「ん？なんかあったの？」

「天文学的にいかないと駄目だから、キヤーティアシップ復活が先  
か、  
現地のシップを分捕るか…だろうなその後でだ…  
で、話もどすぞ…ベテルギウスが超新星おこしたから…」

BETAの分布が…あ〜と…??」

基本親であるベテルギウスのBETAから到着ユニットが、全て発進していた。

その親である650光年先であるベテルギウス近辺に存在していた上位存在…

ベテルギウスBETAと命名しておこう…が、

ベテルギウス超新星爆発の衝撃波により消滅、

地球のあ号が連絡をつけようにも取れない点から、ほぼ確実だろう。

つまり今から650年前までの航行宙の到着ユニットを駆逐できれば、

ベテルギウスを中心とした約1000光年の宙域における、

BETAのあらたな繁殖を防げるわけ…と言うことだった。

勿論他のBETAがあらたな親化にならなければ…の大前提だったが…

「ふむ…競争だな…」

まごまごしていると、バーナード星系みたく手付かずの星系がBETAに占拠され、

そのBETAの対応で進行がますます遅れる。

BETAに占拠された星を破壊すれば、早いだろうが、重力崩壊による、

恒星の異常がおき、超新星爆発がおきるかもしれない…

おきると他の星系に破壊の余波が飛び火するのは間違いないので、超新星爆発だけは避けなければいかなかった。

「報告は以上だね」

「じゃ…評定か」

今回試験航海で、宙間試射までおこなった宇宙戦艦ヤマト級…

「亜光速戦闘はバージョンアップした事により問題なし、威力面でも問題はないな」

地球帰還時のヤマトである。

散々経験した事による現地改装がきいていた。

また演算処理面についても多数からのミックスの為、処理が向上し、亜光速のデブリに対しても問題なく対応できた。

「武装面は…火力の集中からして下部は難しいな…」

現在ヤマトは回頭による水平プラス40度マイナス10度方向で、最大火力を放てる状態となる。

下部につけると…最大火力をはなてる仰角がへり…

だったら単艦よりかは編隊でカバーの考えだった。

「となると…装甲強化だろうな…」

ピンポイントバリアと…フェイズシフトもいれるか」

これにより武装がついてない船底部の心配事がへる。

「あとテスト型から弄れるところは…」

ないかな…？」

現状思い付くところがない。

ヤマト自体かなり完成した技術でもあったからだ。

「じゃ、これで量産頼む」

「了解…現状2月で2隻だから」

「やっと2隻か…もう少し増やさないとな」

「もってくる予定のルナ1がの設置と工事が終わるまでだね」

小惑星ルナ1、ラグランジュポイント4に、フォールド装置と、ブースターをくつつけてもってくる予定の、

113kmサイズの小惑星である。

小惑星帯にある220個の一つを選択した。

もともとは、小惑星帯において、資源採掘採掘がかなり進んでいた為空洞化がすすんでいて、大きさ的にも手頃。

それで選ばれて現在ブースター調整をしている段階だった。

資源として完全にくり抜いた中に、プラットフォームをぶち込み、造船数を増やしてく形をとる。

「まあ…しょうがないな…」

報告書をひとまとめしてくと…

「ん？マクロスできたん？」

「あ、進宙したよ〜」

「でもまあ技術的にえるものは…」

「あんまりなかったけどね」



ゼントラーディ技術がふんだんに入り、  
より発展した新マクロス級ならともかく…  
VF-19Vが生産できる今では…  
初代マクロスは残念ながら時代遅れになる。

「ブースターとか、巨大化による主砲の影響とか、トランスフォー  
メーションとか、  
建造技術のテストヘッドになった位かな？」

「それぐらいだろうな…」

重力制御はキャーティアやナデシコから既に取得済みであった。

「よし…じゃあ…ちよっくら見つかったかみてくるわ」

「帰還したそうそう…どこか行くの？」

「マクロス世界ね」

マクロス1stからマクロス今はFまでの一連である。

「自動工業衛星？」

「そう、それ」

ビッグシリーズに破棄されたのを探索するように…と頼んでいた。

「明日でいいんじゃない？…フォールドでの時間軸のズレの調子取り戻さないと…」

「ん…そうだな…」

実際眠くはない…が世間一般は深夜1時にあたる。

カオルの体内時計はお昼だった…

「ワープやフォールドの悪影響だよな…

まあわかった調整するよ。

明日いつてくる」

「じゃ仮眠室の強制睡眠カプセルね」

こういった体内時間を世間一般時間に合わせる為の強制睡眠カプセル、

勿論仮眠室にも作られてた。

「あいよ。じゃ」

カオル報告

マクロス世界へは明日となりました。

ナギ少尉「…まだいかないのね」

作者「まあね…」

ナギ少尉「で、前書きでも悪のりしちゃって」

作者「でも実際調べたら…650光年って近いんだなあ…がさ…  
バーストフラッシュって数千光年にわたり強烈な放射線で浄化して  
くつてさ…」

ナギ少尉「でベテルギウスは大丈夫なのね？」

作者「マヤちからで地軸がずれない限り大丈夫だよ。  
20度ずれてるからまずおこつてもこない。  
けどまあほかの天体の方がね…」

ナギ少尉「宇宙のステイルヴァアのかに座ベーターね」

作者「感想でかかれてたけどやるんすか？つてね。  
ちよつと調べたけど太陽より25億年先の年齢らしいよね。  
まあそこで超新星爆発おこつたら、まさに宇宙のステイルヴァアだね」

ナギ少尉「確かにね…」

作者「既に超新星爆発してて襲い掛かる最中だったりして…」

ナギ少尉「ちよつと!!！」

作者「でも観測してる限り、兆候はないっていつてるからまだ大丈夫だよ。」

今1番の関心がベテルギウスだよな…  
人類史上初の近距離超新星爆発だしさ」

ナギ少尉「遠距離ならあるの？」

作者「かるく調べたけど、数千万光年先とか、ガンマバーストフラッシュの生き残りが地球到達した、別銀河のとかね」

ナギ少尉「へえ……あ、あとゴキブリ兵器…そういった思惑だったの？」

作者「そうだった事…全滅は無理だよ無理。  
対抗手段は出てくる、そこを利用するんさ」

ナギ少尉「なる程ね…さて次回、マクロス世界再び…でいいのね？」

作者「でいくつもり」

ナギ少尉「おったのしみにい…  
ところでいつ完結までもっていけるの？」

作者「……来年？」

ナギ少尉「もう200話近いけど…」

作者「…第二部かなあ…？進行おそいよなあ……」

第196話 マクロス世界へ再び 投稿日20111204

2002年2月18日

「じゃあ…いつてくる」

「いつてらっじゃい」

「マクロスの世界へ」

マクロスの世界に降り立ったカオル。

(とりあえず…)

虚数空間からルーロス改をだしのりこむと……

ルーロスが角で背を向けて座り込んでいた。

「ルーロス？」

「いいもんいいもん、ぼくちゃんなんか忘れさられてるぞち」

(え〜っと…虚数空間にほつり込んで…)

指で数え始めた。

(あつ……桜花作戦以降だしてない…)

「すまないな…次はもっと出しとくよ…」

「前回といつちよでちー!!」

「ほんとにほんと…忘れないよ」

「約束してでちね…」

「ああ、…じゃビッグシリーズとリンクを確立してくれ」

「あいでち」

1分後には…

『マスター、お待ちしてました』



「成果の程は？」

『破棄自動工業衛星が2基発見済みです』

「よっしゃー！！…で規模と状態は…？」

『100kmクラスのと20kmクラス、両方とも攻撃と思われるが、

によりかなりの損害をつけ破棄されたようです』

「あゝまあ…それはしょうがないな…

でも100kmクラスか…でかした」

100kmクラス…艦隊のしかも基幹艦隊司令艦を製造するサイズだと思われた。

1番手に入れたがっていた工業衛星の一つだった。

「ありがとうございます」

「で…構造状態は…」

『崩壊レベルまではいかず、補修すれば大気圏へ突入も可能』

「ちょ、惑星破壊爆弾でないんだから…」

『失礼、も可能な状態にもっていきます』

「現状では？」

『片方が内部にデブリがある程酷い状態ですが、強度はとりあえず心配なしです。』

『もう一方は強度のGがなければ問題なしでしょう』

「……回収して太陽系外で放出、どっかの重力圏に捕まる前に補修……でいけそう？」

『微妙ですね』

「……外側から制御し力をかけるなら……」

『構造的に弱い箇所避けるなら可能でしょう』

「なら回収を先に手がけるとするか」

『了解しました、マスター。あとマスター』

「ん？」

『まだ報告前ですが1200kmの工場らしきのも確認でき、  
現在向かっております』

「…………自動工業衛星製造衛星か？」

『まだ、どういったのかは不明なのですが…』

銀河にゼントラーディ軍が広まったには、  
訳がある。

そう…艦隊や軍隊、それらを作る自動工業衛星並びに、  
…工業衛星そのものを作る工業衛星の存在だった。

1000kmクラスの基幹艦隊司令艦を作る工業衛星は存在すると  
言われてるが、  
実際のところ数も少ないだろう。

そして、艦隊製造クラスかなといわれている100kmクラスの工  
業衛星。  
かなりの存在が確認されている。

そのために、たかが一個基幹艦隊に480万隻もの艦を内包してい  
るのだ。

また長年にわたりプロトデビルン側の監察軍とも…戦い続けている。  
未だに…

さて、自動工業衛星を製造する巨大自動工業衛星かもしれない存在は、  
かなりというかレアすぎたものだった。

「わかった。到達まであとどのくらいになる？」

『かなりの浮遊障害がおおく、ワープ使用不可の為シールド外戦速  
中です。』

あと2週間程は…』

「そうか…また詳細わかったらよろしく」

『了解しましたマスター』

通信が切れ…

「さて…とりあえずは…上空に浮かぶあれをかな」

「了解でち」

ラグランジュポイントに浮かぶ自動工業衛星…

現在新統合軍は多数のゼントラーディ軍自動工業衛星を分捕り、  
修繕し、その勢力を増やしていった。

「ほお壮快だなあ……」

「でちね…男の浪漫でち」

「え？ルース男の子？」

「ひつど〜い…こちゅじんたま…性別忘れるなんてえ」

「ごめんごめん」

「ぶ〜〜」

「で、センサーではどうなってる？」

「かなりの艦艇が建造されているね…」

「一番でつかいのが建造中で全容掴めないでちが、  
ドーム型の全長10kmでちかね？」

「ほづ…シティ建造中か…」

地球から多数でてるマクロス移民船団。

過去の第一次星間戦争において全滅の危機に陥ったマクロス世界の地球人類…

第一次星間後には、その数を月やシエルターで、生き延びた人をまとめても100万をしたまわって、地球文明に参加したゼントラーディ含めても1000万を下回っていた。

その数を激減していてクローン技術でわずかながら増やしても、遺伝子疾患が発生し、クローンも禁止された次第であった。

人類が全滅の危機を経験し、この50年近く試行錯誤しながら、勢力をとりもどそうと、

また一個の星系で留めず、銀河に人類の種を広げ始めた。

そう、大航宙時代の始まりだった。

一個の惑星においては、基幹艦隊クラスの襲撃で惑星にいる住民は全滅してしまう。

どんなに戦力を整えたとしても、基幹艦隊の5%の砲撃が地上に降り注いだとしてもだ。

そういった危機を経験したが、惑星での発展は必要…  
そのため地球人類が選択した道…

星間移民による人類種及び文化の拡散、  
生存圏の拡大という手段である。

そうする事により、地球がまた再度壊滅しても、  
基幹艦隊を壊滅させた後に、  
他星系からの移民により迅速に復興ができるからだ。

前回の星間戦争後の復興は、主にマクロス艦内だけの製造能力、  
また遠距離の月の製造能力、  
また少ない人員だけに頼らざるえなかった…  
その為かなりの苦労が復興する人員にかかった。  
また時間も…その際に再び別基幹艦隊が再度襲撃したら…  
間違いなく全滅したであろう。

ならば別星系が指揮をとり復興を支援し、戦力を補充させる。

そう上層部が思想が導くのも考えられる事だった。

さて移民船団の話に戻そう。

初期にはマクロス級のトランスフォーメーションをオミットした、  
大型移民船メガロード級にて銀河へ人々は旅立った。

またそれ以外のメガロード級以外の個々の中小移民船での移住もあ  
った。

そして…25隻のメガロード級をへて、

大規模長距離移民船は、2030年より新マクロス級大型移民船へと発展していく…

当初から都市型宇宙船として設計されるようになった新マクロス級…、

長距離移民に対応した、街をマクロス内部に内包しない形へと…

メガロード級等は艦内部に人が住み、戦闘行動にも影響がでた。

の為被害にあつた移民も少なくはない…

はぐれゼントラーディと交戦時に艦内部の居住区画への流れ弾等…

その点新マクロス級は、居住部分のマクロスシティと、

純粹戦闘艦であるバトル艦とで分離構成され、

これにより戦闘行動に支障たさなくなった新マクロス級は、純粹戦闘能力をよりましていった。

シティの方はより長距離長期間移民に対応できる形へと発展してく。

無補給時間がよりまし、長期間航行が可能なようになる形へと…

シティは、密閉型コロニーの形やドーム型等構造はコンセプトにより多様化していった。

主に主人公がすむドーム型のマクロスシティは、

亀の形の上に都市が存在していて、透明なドームにより宇宙空間という死の宙域から、



都市を護っている。

その透明ドームを護るのが貝殻のような天蓋…防護シエルであり、戦闘時には、透明ドームに、防護シエルが被さるシエルダウン等で住民自体をまもる設計となっている。

最終的にマクロスシティ自体は、水資源に富む大気環境の良い惑星にいった際には、地上に着水し、開拓の中心都市となる。

そついった構造になった。

さて…年代が進んでいくと、2013年に発見された惑星エデンからも、シティの建造能力が整い第6次マクロス移民船団から、出発しはじめた。

2038年地球発の第7次新マクロス級移民船団、マクロス7辺りになると、マクロスシティ以外にも船団総人口が100万人以上を数える事になる。

二桁代のマクロス船団になると、より探査目的の為に自由制になり、目的地に惑星があつてもより良い星を求める事が可能になった。

そしてまたラグランジュポイントでは…新たな長距離移民船団が建

造中のような状態であった。

(しかし…何番目なんだろう?)

「で、どれに取り付くでちか?」

「ん〜…勿論全部技術取得するから…あ、取り付くでなくナノマシンの撃ち込みでね…  
足りたよな…」

「ナノマシン?」

「こいつを撃ち込むと技術情報をおつめてくれる、  
便利なもんだよ」

ナノマシンのカートリッジをみせて…

「のめるでちかね?」

「じゃ、ルーロス…手始めにあれからいこうか」

「こちゅじんたま飲んでみる?」

「飲めるわけないだろ、早くとりつくぞ」

「あいでち」

……

改めて……

(でっかいわなあ……)

何しろ今とりついでるのが、マクロスシティを建造する為の、自動工業衛星とされているものであった。

艦船クラスでなく、今現在は約500万人以上が住める、マクロスシティを作る為に改装された自動工業衛星……

小惑星サイズを誇っていた。

人からみたら遙かにでっかい天体……

(けど材質なはんだろ?)

軽く叩いてはいるがこれは天然惑星資材とは思えなかった。

虚数空間よりナノマシン機材を一式とりだし、射出機にカートリッジをセットした。

銃口を自動工業衛星の表面に接触させ…

ゴボップシュ

カートリッジの液体が撃ち込まれからになる。

(これで回収は一ヶ月後か…な…?)

ナノマシンの状態がわからないので、  
回収マシンのを翳した。

(ナノマシン増殖中ね…次いくか…)

今取り付いてた200kmクラスのをけて次のに向かった。

次に取り付いたのは、艦船建造クラスと思えた。

そうして幾つかの工業衛星を渡りあるいていると……

(あれ?)

見慣れない形状のバルキリーが宙域を横断していくのが目に入った。

(あ、あの形は…VF-22か?)

釣られるように……

だが、この時代のバルキリーはカオルが移動するよりか遙かに早い。  
早速見失い…

「ルーロス」

『あいでち』

「この付近で活動してたバルキリーどこいったかわかる？」

目の前にルーロスがついた。

『案内するでち。乗るでちね』

まもなく、見慣れない形状の船が単艦見えてきた。

「あの船に帰還したん？」

「そつでちよ〜」

VF-22 シュトルムフォーゲル：特殊作戦部隊用の高価な機体で  
あり、レアモノといえていた。

ゼネラル・ギャラクシー社製品のYF-21の2042年採用の正  
式量産機である。

何故レアといえたかというと、形状が変化する複合素材の為であり、  
有機的変形を採用していた為、生産コスト高騰した為であった。

特に特徴的なのが、バトロイド形態の腕の部分であり、  
機体側面を構成していた部位が膨らみをまし腕へと変化しついく。

ファイター形態では、バトロイド形態の腕や脚、胸を収納し、  
機体断面を薄くする等画期的なコンセプトを採用し、  
機体性能をあげていた。

なをYF-21からの変更点はBDIシステムの廃止という変更点  
である。

そして取り付いた艦内部にはVF/B-22A複雑型も存在してい  
た。

それらが沢山艦内部に存在するという事は…

(特殊作戦部隊艦だよな)

現状、

VF-25は評定試験中、VF-171は性能不足。

VF-19Fは継続戦闘能力では…

となると、必然的にVF-22が特殊作戦部隊の、採用機に選ばれ  
る事となる。

またVF - 19A2も見え、一般部隊でない特殊作戦部隊とより確認できた。VF - 19A2はVF - 19の生産体制の整った性能同等型である、VF - 19Aの改修型、地球本国艦隊仕様だった。

元々、A型自体がパイロットの限界を求め、一般兵用にF型がデチューンされた。

機体性能自体がパイロットに対してこれ以上負荷を与えられない為、新規機体性能は頭うちな状態である。

そして年代が立ち…アビオニクス等の改修型として世にでてきた。

VF - 171と違い、

機体性能が高いVF - 19やVF - 22自体が、地球本国の開示許可が必要な機体であり、移民船団によっては備わってないところも…

そんな機体がこの船にはたんまりあった。

(満足満足)

これらの機体や艦船等直接取り付き…

地球圏外から遠ざかり…

「さて…次の場所が」

「破棄衛星でちね…1012光年先と、そこから506光年先でちね」

「…どのくらいでいける？」

「ショートワープの連続でちね。一日で逝くようかんばるでち」

「連続って確か10光年の？」

「そうですち。101回飛ぶでち。帰り道は探査済みでちから、10回で可能でちが。」

帰ったらジュネレーター容量強化してほしいでち」

「あいよ…じゃあ、よろしく頑張ってくれ」

「あいでち。ごちゅじんたま、仮眠しててでち」

ルースはワープの連続にはいった。

……

「ごしゅじんたま、ついででち」

大音量アラームとともに叩き起こされ…



外側には破棄された自動工業衛星が見えていた。船外壁を透過処理しているのだろう。

「ありや…かなり…：…破棄されるのもわかる気がする…：」

「でちね」

見るも無惨に砲撃による貫通箇所が多数あり、内部損傷が多数みえるのが外側からでも確認できてた。

「…：…強度的に本当に大丈夫かなあ…：…と思えるんだけど…：…こっちが強度ある方なんだよね？」

「でちね」

スクリーンに探查データがでた。

「この部分が破壊されてなかったのが幸いでち。ここを破壊されたら、全体に衝撃がいったでち」

衛星全体に衝撃が伝わり、ひびがはいり…：…崩壊してくシユミレート映像がながれた。

「逆にいうと、この部分が壊されてないでちから、全体的強度を保っているでちね」

「成る程ね……ま、とりあえずお持ち帰りは、崩壊の心配なさそうだな」

ルーロスが衛星の周回にはいった。

「ブースターは…駄目か…サブスラスター生き残りはありそうだな…とルーロス内部入れそう？」

「駄目でちね…シールド干渉するほど破碎浮遊物があるでち、退けてくれないと内部破壊しちやいそうでちね」

無重力で浮遊物をおすと、止まるエネルギーが加わらないと…何処までも移動してく。

つまり何かを押すかだ…

連鎖的に広がり余計な破壊活動に繋がりがねない。

「人とかなら」

「そのサイズなら…って感じでちね」

「持ち替えてって掃除してからだろうな、修繕は…ま、じゃ収納してくるわ」

「あいでち」

ルーロス外の宇宙空間にでると…

虚数空間に収納するイメージで自動工業衛星を掴みあげる。

虚数空間入口の輪が自動工業衛星を飲み込んでく…

「はたから見ると不思議でちね〜」

船内にはいるなりルーロスに言われた。

「どうへん？」

「なんかこう…輪切りに空間入口が見えて、  
衛星がなくなる点がでち」

「…あたり前の感覚なんだがなあ…  
じゃあ次にいつてくれ」

「あいでち。半日程跳躍連続するでち」

「ん〜いったあと一回置きに帰るかなあ…」

今向かっている方向は銀河外延部方向の為、  
中心方向に向かっているマクロスフロンティアとは逆方向だ。

なので回収してからだと最低で一日半更にかかり…

「12時間でとりあえず、地球はいける筈でちよ」

訂正1500光年を12時間で踏破できるようだった。

「ん…まあその時間ロスもだけど、世界扉のマーカ-的なのも撃ち込みたいんだよな」

「そつちでちか…」

「で、更に外延部にビ-クシリーズ向かってるだろ」

「でちね」

「だからまあ一回かえってついでにこの世界にマーカ-2箇所目、で、先に回収衛星置いて作業進めながら、身軽になってから改めてフロンティアに…かな？  
この世界の1番の1つはとにかくゲットできたんだしな」

「了解でち」

……

カオ-ル報告

捕獲したら一回置きに帰る方針にきまりました

第196話 マクロス世界へ再び 投稿日20111204（後書き）

ナギ少尉「ねえ作者、フロンティアってまだなの？」

作者「あとちょいだな」

シエリル「わたしの出番まだ？早くしなさい」

作者「は、はひい。じ、次回絶対に」

シエリル「こんな登場サービス、めったにしないんだからね」

ナギ少尉「なに、あの人…」

作者「銀河の妖精、シエリル・ノーム様だ！！頭が高い！

ああ…シエリル様…踏まれたい…」

ナギ少尉「ちょ…作者…そっちの趣向？」

作者「シエリル様だけは特別、生コンサートもいったし、今もいつてるし」

ナギ少尉「あゝぞっこんなだね」

作者「うむ」

ナギ少尉「これだから男つてのは……」

話すすめるわよ。

で、次回やっつとフロンティアに行けるのね」

作者「ああ、約束したからね」

ナギ少尉「で今回は工業衛星やVF-22等を取得よね」

作者「ああ、約束したからね」

ナギ少尉「……駄目ねこいつは……」

駄作者がリリースしたので、次回、フロンティアへ……お楽しみにい」

作者「ああ、約束したからね」

ナギ少尉「しつこい……」





( 結構容量あるよなあ…どの位まで飲み込めるんだ？ )

いざ自分でも…実行してわからなかった。

〔 横浜白凌基地 〕

「ただいま、」

手が空いてるのちよっと集合」

「マスターなに？」

「いよいよ百人おとすの？」

「もげろって伝言」

「いよいよ隕石落とし実行？」

「なんの騒ぎ？」

「こらっ隕石落としはしないっていつてるだろ？」

あともげろって誰がだ？

…と、破棄された自動工業衛星回収したんだけど、  
修理調査つきあって」

「マスター了解」 「仕事だあ仕事」

「一基だよな？ チューリップももっていつて」

「お〜いあと5人来て〜」

「あ〜2基」

空き中型チユールリップを一個と、

多目的輸送挺を虚数空間にいれながら答えると…

「……あと10人きてえ〜」

「忙しくなるぞう」

「マザー、兄弟をとりあえず100増やして〜」

「きたよ〜」

ルーロスをだし、

「じゃ、設置にいくから乗り込んで」

「わーい」

「ルーロスおひさあ」

「お仕事、お仕事」

「おひさでち」

ルーロスの内部に20人のコバツタ達が乗り込み…

「うし…じゃ…カイパーベルトあたりなら問題ないよな？」

「でちね。いつきま〜ち」

横浜基地の戦艦ドックをぬけると…

数十秒で大気圏外にでて…

「ショートレンジワープでち」

一瞬にてキヤーティアワープインシアウトするルーロス、  
ものの数秒でカウパーベルトにでた。

冥王星軌道のラグランジュポイントと言うべきカウパーベルト、

多数の小惑星が太陽の重力につかまり、  
冥王星との均衡をたもちカウパーベルトを形成していた。

「ここいらでいいか？」

船外にでて…

「マスター人間なのかつくづく思うんだよね」

「普通の人ならパーンとなるのに」

「の前に凍ってじゃない？」

確かに水分がなくなり…

「マスター人間やめてたからいいんじゃない？」

「そっか…でも、じゃあなんで子供ができるの？」

「異人種間配合でしょ、米と麦の配合とか」

「あ〜なっ〜とく〜」

「あゝお前ら、チューリップだすぞ、固定作業よろしくな」

「マスター、了解!!」

チューリップを出すと、作業台にコバツタが上り、重力を均衡させていく…

「ブースター挺だすぞ」

まずは出した、外付けブースター挺、

現代日本でいえばタグボートみたいなものに、コバツタが取り付く。

「マスター、1号挺始動」「2号挺」……

「うっし、工業衛星だすぞ」

虚数空間より、100km級の工業衛星をだす。

案の定…

「そっち!!」

「せーの!!」

「もうちょっと」

太陽の重力につかまり、中心方面へと落ち始めたがブースター挺のひっしの作業により、均

衡を保ち始めた。

「マスター、軌道固定できたよ。しばらくは安定」

「じゃ…調査入ってくれ。次20km級だすぞ」

20km級は出したとき押しすぎたようで、  
太陽系から離れそうになる。  
やはり押し止め…軌道固定された。

「固定できたようだね」

「みたいだな…しばらくはブースター挺この二つから動かせないよな？」

「と思います」

「スラスター優先でまずはやってくれ…  
と内部は…」

「酷い状態ですね…  
修繕作業開始するまで暫くは時間がかかります。マスター」

「予測は？」

「この量だと…最低で10日は…かかりそうですね…」

「まずそっからか…」

固定作業で更に内部の破壊がすすんだ為…早めのデブリ除去作業が好ましい。

「とりあえず最優先で頼むわ」

「増援組ともども作業を進めます」

「じゃ、行こう」

「了解でち」

世界扉で再びマクロス世界へと渡る…  
場所は地球。

「で、次は何処に逝くんでちか？」

「1111ね」

空間パネルに表示されたこの世界の宙域を操作した。

銀河中心方向約3400年先に表示されている…  
射手座スパイラルアーム付近のマクロス25を…

「了解でち、なんとか3日で行くでち」

「やっぱり3日かかるか…短縮できない？」

「できるでちよ。ジュネレーター強化で、  
ワープチャージ時間が大幅に短縮できるでち」

「お…それ設計図とかある？」

「これでちね」

さっそく改造にはいった。

暫く改造して…

「あと問題は…この世界がどっちに向かってるか、この時点じゃわ  
からないんだよな…」

「どっち？正史じゃなくてでちか？」

「両方とも正史と言い切ったからなあ…  
あの監督は…可能性はくないな」

片方の世界は主にミシエルが死亡、

もう片方は主にブレラが死亡、グレイスが狂気にならずに死亡、  
ぶらすギャラクシー船団が本当に全滅等だった。

(シエリル様も連れてきたいんだがなあ…)

両方の正史であつても死にはしない…  
植物人間化してもアルトによつて…

(ん〜)

多分解決はつかないだろう…

日本時間2002年2月22日

場面はかわりMuv-Luv世界の地球…

南米周りで回航してた、第二砲撃艦隊をはじめとする、異世界軍の  
到達日時が正式に決定し、

リヨンハイヴ攻略作戦の開始日時が日本時間の24日と正式に決定



され、  
続々と作戦参加機体がここ、イギリス本土にある各基地へと集結していた。

エヴェンスクはソ連が主体だったが、

フェイズの規模が違うリヨンには、  
EUの他、アメリカ、南米諸国連合、アフリカ連合、をはじめ、  
ほぼ裏側の日本帝国も参加している。

勿論国連軍に常時参加戦力以外でもだ…

そしてそこに大気圏外よりマクロスが降下してきた。

「おい、あれ」

「H S S Tか？見慣れないタイプだな…」

……  
「あ…」

「うそ…でかそう…」

……  
「つ潰されるぞー！」

「機体つごかせ」

……

「と、とまった？」

「た、助かった…」

「浮かんでる？」

重力制御による戦艦の為、空いている場所へと移動しはじめた。

SDF-1マクロス、全長1km強の巨大戦艦が、MUV-LUVの世界に初披露となった。

戦艦とは聞いてても、

そんなサイズの船が降下してくると聞いてなかった為に、発生したパニックであった…

場面はカオルにもどそう。

「いぢゆじんたまついたでぢね」

「う、うん…やっとか…」  
背伸びしながら…

ワイブドライブのジュネレーターを1日かけて改修した事により、3000光年を300回のショートジャンプ行ったが、チャージ時間を短縮できた事により、わずか1日でいけたという驚異的な踏破速度にあがっていた。

4分間隔で次のワープに入れたのである。

ショートワープくらいなら、300万光年をわずか3ヶ月で渡れる  
キヤーテア技術の前では、  
主観時間もさほどかからず…

結果的に1日得した事になる。

もつとも、20mサイズの小型艇であるのが一番だが…

「あとはレーダー強化できればなんでちが…」

「そつちの方が難しいよな…」

「でちねえ…船体を拡大するしかないでちからね…」

「更に時間かかるからなあ…」

「ごちゅじんたま。視認可能距離にきたでち。みるでちか？」

「ああ」

ルーロスの外壁が透化してく…

「ほお…」

眼下にはマクロスフロンティア船団が見えていた。

マクロスフロンティア…

従来型の約2.5倍、15kmの大きさになるフロンティアシティは500万人の人口をようし、

その他に環境艦とよばれる円筒型の艦を連結し、

閉鎖系バイオプラントによる、循環型のバイオテクノロジーで、すべて船団内部において、自活できるようになっていた。

水、空気、食料循環…

それによる水の浄化、空気の浄化、人の排泄物の浄化等をこなして、現在では1000万人将来的には1億人まで船団内部で住める容量を保っていた。

このようなシティを核とした群島のようなものを形成するため、アイランド・クラスター級とも称されている。

こうして、長距離移民に対応し、長期間無補給で生活できる環境になっ

ていた。アイランド1、接続している円筒型の環境艦を、アイランド2…  
以後アイランド3…4とすすみ、24艦接続されていた。

この円筒型の環境艦じたいも直結8km幅3kmの大きさを誇り、今までの新マクロス級に比べてもかなりの大きさを誇っていた。

「ここまでデカブツだと…ナノマシンの仕事だろう。どうせ何回もくる事だろうしな…じゃあいつてくるわ」

「いつてらっしやいでち」

とりあえず撃ち込むターゲットは、

アイランド1、

環境艦のアイランド3、

バトルフロンティアの3艦を狙っていた。

環境艦は基本構造が一緒であり、細部が違ってくる形になっていた。の為全部は狙う必要はない…

なにしろ…

『銀河の妖精、ファイナルツアーinフロンティア本日開演!』

(かせがなきや…やばかったなあ…)

『最高のステージにしてあげるわ!』

わたしのステージに来なさい!』

時間がなかったからだ。

時に… 2059年3月2日

天空門ホール前の広場では…

（お、いた）

勿論カオルは一連の作業すまして来て、幻影で見えなく浮かんでい  
る。

「…お礼するね。私ニャンニャンでバイトしてるから来て」  
ランカが、EXギアつけたアルトにお礼をいつてるようだ。

「ニャンニャン？」

猫の様に手をまるめ、お尻を突き出しポーズをとり、  
中華風のリズムにのせそのフレーズを口ずさみながら踊るランカ。

「～でかるちゃあ～」

最後にあいくるしく両手を広げ、センターデイ語のいわゆる信じ  
られないで締めくくる。

「ってCMしない？」

「え？」

（知ってる～買ったぞ～！！）

美味かったよなあ…復刻しないかなあ…）

「うわ、もうこんな時間、必ずきてね～待ってるよ」

「フツ変なおん……」

ランカについていきながら…

「あゝまにあえゝ」

ランカはホールの入口にかけこむ。

「間もなく開演です、お急ぎ下さい」。

正面入口では身体検査を行います。

録音、撮影機器の持ち込み、

ビン缶類はホール規約により持ち込みできません。

携帯にはこちらから制限ソフトを入れさせていただきます」

「ま、まにあつたあ……チケット」

「一名様ですね…続いて身体検査お願いします」

チケットもぎった女性係が検知ゲートに案内し…

「金属類はそちらのカゴをお願いします。

携帯には制限ソフト入れさせていただきます」

女性警備員が機器の操作をしながらはなし、

「はい」

ランカはゲートをくぐった。

館内での毒ガステロ防止などの為、

お客自身の安全確保に必要な措置であり、

また海賊版を防ぐ為にも必要な措置であった。

「くつくすぐつたい…」

「申し訳ございません」

女性警備員による手によるポティチェックを終え、

「間もなく開演です。席番わからない方ご案内いたします」  
係員がホール内部で案内していた。

「まって閉めないで」

ランカはギリギリで滑りこみ、彼女の指定席へとすすむ。

……

館内照明が暗くなり……

『In The beginning was the song  
はじめに歌ありき……』

『Stars singing as if they're playing  
beautiful tune of heaven  
星ぼしは歌う、まるで天界の歌を奏でるように……』

『Lynn Minmay 2009』

初代銀河の歌姫……

『Shaloon Apple 2040』

(彼女は救えるかな……?)

カオルはホールの壁となり、ステージをみていた。

チケット?



譲って下さいというたちゃんぽが出てるのに、  
席が余っている訳がない。

プレミアムチケット化してるツアコンだ。

これを逃すと生シエリルを見るのが、

サヨナラコンしかない…

そうだった二回しかないわけだ。

『Fire Bomber 2045』

(突撃ラブハート！)

『and now』

「あたしの歌をきけえ！！」

〈ユニバーサル・バーニー〉

(え？劇場版の流れか？)

舞台が発条仕掛けのステージにうつり変わる。

ホログラムを駆使した舞台だ。

機械的なロボット達がダンスを踊っている。

ロボット達がダイブし…

『3 2 1』

ステージ上にシエリル様が現れた。

間違いなくユニバーサル・バーニー…

何回も聞いていた曲だから間違いない。

白の純情と黒の小悪魔の共演…

(シエリル様〜歴史なんかいいや！)

生コンサートに夢中になりカオルは考えるのを放棄したようだ。

〜射手座 午後九時 Don't be late

2ndナンバーが射手座が流れ、

軍服をモチーフとした衣装にかわる。

ナンバー開始とともにアクロバット飛行が始まり、

アルト達が空から光の粒子を舞い降らし幻想的に演出する。

曲中によりセクシーに変わり…

アルトの無茶なアクロバットは披露されずに…

〜Welcome To My Funclub's Night

3rdナンバーが始まる。

アルト達が上空を回り、シエリル様がカウガール衣装で狙いをつける。

アクロバット飛行続けていた一人がシエリル様横を飛び去ると…

「キヤー」

「シエリル様」

中央から走りステージの端からダイブしてく…

思わず声をあげてしまったカオル。

アルト姫に抱えられシェリル様が裾から空にあがり歌声を披露する。

思わずほっとしながら…

(アルトしねえ！)

と殺意が目覚めていた。

(シェリル様の肉体を汚しやがってえ！！)

シェリル様の策は、ミハエル達が隊列を整えて、見事に成功した。

観客はより熱中していく。

What about my star

4thナンバーが始まり、

コンサートが最高に盛り上がってきた最中…

突如コンサートの電源が切り替わる。

(あ、ここまでか…)

『マクロスフロンティア行政府よりお知らせします。

全艦に避難警報が発令されました。

市民の皆さんは速やかに最寄のシェルターに避難して下さい。

繰り返します…』

ステージ上のシェリル様が問答の末に、

キャッシーさんに舞台裏へ連れられてく。

客席が突然の事態に騒ぎですが、

『主催者よりお知らせします。』

本コンサートは行政府より中止命令がはいました。  
運営対応等は後日発表いたします。

チケットは必ずお手元にお持ち下さい。  
規制退場行います。

係員の誘導に従い、順次退館後、シエルターへご移動お願いいたします。

では後方ブロック……』

一気に扉へ殺到するとそこで圧縮による死者がでてしまう。

現代日本でいえば、明石花火大会の歩道橋のように…

運営は不満あげてた客を静めて、勤めて冷静に退館を促していた。

(で、と…艦の外側で死亡したバジユラから回収しなきゃな…)

館内にいるお客さんが全員退館し、シエルターへ移動しはじめる頃、

「怪物うー」

「キヤー」

(あれがバジユラね)

メインアイランドに侵入してきたバジユラが、  
街に着地し破壊行動にうつしてきた。

古代プロトカルチャーがバジユラを研究対象として、  
フォーールド航行を生み出した。

そして現在のフォールド技術では頭うちになっている、  
フォール航行でのズレや、時空断層突破能力、等を回避する為のフ  
ォールドクォーツ…  
そのフォールドクォーツを体内に持ち、エネルギー源として、  
各種生産行動をおこなうバジユラ。

（艦内に侵入したのは…回収されるんだよな…）  
赤バジユラが、空中に手から体内で精製したガトリング弾を打ち出  
してる。

おそらくアルトを狙っているのだろう。

カオルは外へと…

（死骸死骸つと…）

戦闘空域を探すが…VF-171の残骸ばかりで…

（一回目の襲撃だからな数すくない筈…  
ギヤラクシー救出作戦についていった方がいいか…）

カオルは諦めルースを呼び回収して、

マクロス艦内に戻ると、戦闘が続く中、  
世界扉で渡った。

カオル報告

マクロスフロンティア船団にマーカー付けました。

シエリル「まあまあね」

作者「は、はひい」

シエリル「で、作者はわたしをどうしたいの？」

作者「え、えっと……い、いち、おう原作通りに」

シエリル「駄目よ駄目。わたしは銀河の妖精シエリル・ノームなのよ。そうね……作者、わたしをM u v - L u vの世界に連れてきなさい」

作者「え？」

シエリル「歌でB E T Aとやらを魅了してあげるわ!」

作者「あ、あのアルトは……」

シエリル「勿論アルトもよ!」

作者「あ、あの…フロンティアは…」

シエリル「それをどうにかするのが作者じゃない？

いいわね、言ったわよ！

わたしを連れていけなんてサービス、めったにないんだからね」

さっっていく…シエリル様

ナギ少尉「作者く大丈夫？

……駄目ね反応なしか…

さてどう解決つけるんでしょうかね？

マクロスフロンティアのメインヒロインからつきつけられた難問を…  
後々のフラグになるのか？

次回 救援…お楽しみにい」



第198話 ギャラクシー救援 投稿日20111210

『番組の途中ですが、大統領の緊急声明を発表いたします』  
フロンティアの公共テレビが一斉に各チャンネルとも切り替わる。  
行政放送だ。

時に2059年5月1日…

『フロンティアの皆さん、ハワード・グラスです。』

今日は皆さんに重大なお知らせがあります。ご覧ください』

バジユラの最初のメインアイランド上陸時の映像が流れる。

『見覚えのある方もいらっしゃるでしょう。』

そう、これは先日、我がフロンティアを襲った生体兵器です。

我々はこの物体をバジユラと呼称することに致しました。

そしてバジユラによって、我が同胞であるマクロス・ギャラクシー  
が、

大規模な攻撃を受けたのです』

画面が切り替わり…

『メーデー、メーデー！』

あのクソ蟲どもがメインランドに取りついた！頼む！あ……』

『この事態に伴い、我々が同胞ギャラクシーを救うため、  
そして我々自身も守るため、

私は大統領権限において非常事態宣言を発令いたします。

救援部隊の派遣は…。』

カオルは会見放送の後辺りで、  
S・M・S民間軍事プロバイダーのクォーターが停泊箇所へとむか  
っていた。

（テレビ版の流れね…）

時代が決定的になったと感じ、また残念にも…

（シェリル様あ…）

狙っていたのも事実のようだった…

さて、話を戻そう…

民間軍事プロバイダー…何だろうと思うものがあるかもしれない。

ようは傭兵…金で雇われるプロである。

ただ傭兵と違うのは会社組織に雇用され、  
クライアントとは直接的に契約交渉はしないという点だ。

あくまでも、契約する相手が会社である点である事。

そういった違いがある。

さて、軍を動かすには色々と手続きをしなければならぬ…

その手続きの手間をかけるよりか、自由に動ける兵士達…

ちょっとした偵察、護衛、はたまた小規模戦闘…

お金がかかるが、素早くうごける。

そうだった為、必然的に高い給料と厚い待遇、

そしてなにより兵器メーカーとの繋がり、先行導入や実験依頼等…

そうすると凝り固まった軍よりか、民間軍事プロバイダーに腕の覚えがあるものが集まり、またスカウトされたり、また先行実験機目的に入隊したり…質が更に高まる。

そしてメーカー側もその腕を見込んで軍よりも、より民間軍事プロバイダーへ依存する。

数や統制では軍だが、人材の質、兵器の質という点では民間軍事プロバイダーに軍配がすでにあがっていた。

『続いて、先ほど行われた、シエリル・ノームさんの会見の様様です』

『私はギャラクシー、私の故郷が無事だと信じます。そしてこのフロンティアが、彼らを助けるために行動を起こしてくれることに感謝を申し上げます』

『ですがフォールド断層のせい、あの映像は5日前のものだと。』  
『それどころか、いたずらに手を出せば、あの化け物、バジユラの注意を引くだけという見方もありますが…』

『つまりこう仰りたいんですか？  
ベッドにもぐって息を殺して、バジユラが見逃してくれるのを待つべきじゃないのか。  
ギャラクシーなんか見殺しにして』

『それは言ってはませんが…』

『そうですね。この艦も、二度もバジユラに襲われているんですから。』

あとS・M・Sさんでしたよね？民間軍事プロバイダーの』

『は、はい？』

『彼らの協力がなければバジユラ撃退できなかったのでは？』

『S・M・Sが？』

『…と、ともかく、こういう事態です。』

今夜のLIVEは中止だと思いますが、ファンに向けて…』

『中止！？誰がそんなことを決めたの？』

『…で、ですが』

『LIVEはやるわ。そして私は、私はギャラクシーに帰る！』  
ちょうどそのころクォーターにたどり着き、さあ……とすると、

「バーミリオン4のVF-19は予備庫に移動だ」

「アポロ4のRVF-19も予備庫行きだ」

（予備庫？）

「オーライオーライ」

カオルが今日の出撃にそなえ、

クォーターに来ると、  
機種転換が終えたのだろう、搭乗機の変更作業の為の入れ替えの様  
だった。

予備庫と呼ばれるSMS内部にある、艦外格納庫についてくと…

SMSで役目終えたのだろう、  
予備機となった様々なフロンティア仕様のVF-19シリーズが置  
かれていた。

片っ端から取得しまわっていた。  
偵察型等も、勿論あるし…

一方艦橋では…

「新統合軍機、先行偵察に出ました」

「艦の状況は？」

「現在、チェックリストEの1620まで消化、残りは15%です」

「レーダーシステムは全面改装された。

慣れる時間を与えられずに心苦しいが、しっかり頼むぞモニカくん」

「ハイ！艦長」

「セクハラだよねえ…アレ」

「本人が喜んでるから良いんじゃないですか？」

「艦長、例の件本当なんですか？」

「猫の鈴さ。この艦について、ビルラー氏と政府の話し合いは、それで手打ちになったらしい」

「失礼します。新統合軍幕僚本部の命で着任いたしました、キャサリン・グラス中尉です」

「お客様1名ごあんない」

カオルはクォーターの格納庫にやっと入り、VF-25やケーニツヒモンスター、クアドラン等を取戻しにまわっていた…

(やはりここいらになると違うか…)

時代を実感していた。

最新鋭の評定にはいつている機体と、実用化されている改造型の違いだろう…

取得し終わり…艦全体へと広げる。

意識が艦橋に到達すると…

「艦長、大統領府より最優先です」

「回してくれ…」

ジェフリーは、一読しながら…

「一級の管制免許をお持ちだそうですね、グラス中尉」

「キャシーと呼んでください。1300時間の実務経験もあります」

「ではキャシー、早速だが働いてもらう事になった。

よろしいかな？」

「はい！」

「総員起こし、コンディション2を発令。

本艦はこれより発進準備を開始する！」

「S・M・S、マクロスクォーター全乗組員に伝達します。

当艦はコンディション2を発令、

発進準備に入ります。

各作業員は作業を行って下さい。

繰り返します。当艦はコンディション2を発令、発進準備に入ります。

各作業員は作業を行って下さい。

残存艦が現在バジユラの大群に襲われています。

バジユラ戦闘が想定されます。

兵装は対バジユラを選択してください。

繰り返します。

残存艦が現在バシユラの大群に襲われています。  
対バジユラ戦闘が想定されます。  
兵装は対バジユラを選択してください」

「チェックリスト消化急ぎます」

「乗組員の搭乗状態は？」

「完全休暇が2名、代替えシフトで問題ありません。  
バルキリー搭乗員のスカル4のみ艦外にいますが、問題なさそうです」

「艦内設備、オールグリーン」

「反応炉、定格出力で安定」

「対バジユラアンチE S A仕様弾装填開始」

「チェックリスト消化、全乗組員乗船確認」

「スカル小队、スタンバイ完了」

「了解しました、オズマ少佐」

「…キャシー！？何でお前が？」

「私語は慎んでください少佐」



『ふ、また親父さんの命令で貧乏くじか』

「大きなお世話よオズマ!!」

…つたく。全小隊スタンバイ完了しました」

「新統合軍司令部より発進許可出ました」

「艦長、発進準備完了!」

そのころサヨナラコン会場では、

〈ダイヤモンドクレパス〉

オープニングナンバーがながれていた。

「総員に告げる。

当艦はこれより同胞ギャラクシー残存艦の救援に駆け付ける。

大統領からのオーダーはただ一つだ。

ギャラクシーの状況が生きたまま確認できる事…

すなわち残存艦を一隻でも多く救助する事だ…

S・M・S全小隊の日頃の訓練の成果に期待する…

フロンティアとの全コンジットをパージ。スタビライザー解除!」

「了解!」

「解除確認!」

「反応炉出力5分の1。微速前進!」

「微速前進」

「離床しました」

艦がドックから離れ前進していく……

「メインブラスターアイランド影響外にできました」

「S・M・S、マクロスクォーター発進！」

ブラスターが艦を前に押し出して……

「告げる。フォールド安全エリアに到達次第、

本艦は直ちに12光年の短距離フォールドを行う。

総員フォールドに備えよ！」

「目標座標確定、フォールドいきます」

「フォールド！」

フォールドエネルギーが艦前方に集中し、フォールドゲートが開く。

艦が超異次元空間へ突入した。

約客観時間8分後に通常空間に復帰した。

「船体各部、異常なし。デフォールド成功です」

「本艦前方02にダルフィム、及びカイトスの反応を確認。映像出

ます」

「…酷い」

「艦長、我々の任務の第一は残存艦の救援ですが、それと同等、あるいはそれ以上にバジユラに関するデータ収集が、重要であることを忘れないでください」

「それは新統合軍ではなく、大統領からのオーダーと受け取るべきかな？」

「そうとって頂いて結構です」

「…微速前進」

「んもっ」

「……心得ておこっ。全艦、戦闘準備」

ぞくぞくとクォーターから飛び立つバルキリー…

カオルの分裂体も勿論スカル1、スカル3に取り付いていた。

サヨナラコンでは…

3rdナンバーが終わり、

『いつも通りマスロススピードで突っ走るよ。だからわたしの歌をきけえ！』

〈射手座 午後九時 Don't be late〉

4thナンバーが流れだした。

「艦長、ダルフィム、カイトスから搭乗データが届きました」

「カイトスが避難民多いですね」

「そして、より損傷をつけていると…」

「幸い、対大型バジユラのビームには抵抗できているようですが、それ程もちません」

「この断層も厄介よね」

「S・M・S全小隊並びに統合軍及び両艦に通達、

ダルフイム周辺にSMSは展開し、

カイトスを先行して逃がす。

迅速に行動せよ。

損傷の少ないダルフイムへ連絡、  
内容は、モンスターの足場として貸して欲しい…以上だ」

「各小隊、出撃完了です」

「ダルフイムより、了承と帰ってきました」

『全機プラネットダンス!!』

「カイトス先行しました。フォールド可能まで約40分」

「スカル小隊交戦宙域にはいりました！続いてピクシー、バーミリオン、アポロ、パープル、ブルー、グリーン、ラビット入ります」

「スカル2の先制射、命中！バジユラ反応きえます」

『カナリア、花道だ！』

『了解ッ！ラビット1よりダルフイムへ。甲板借りるぞ！』

『こちらダルフイム。お手柔らかに頼む！』

ケーニツヒモンスター、B甲板に到達。対ショック防御！』

『ラビット1迎撃開始。死にたくない者は、私の視界から去れ！』

条約で使用制限されている反応弾、

それを除くと最大火力を保持するケーニツヒ・モンスターの火花が咲いた。

「ダルフイム周辺バジュラ反応減少します」

マクロス級の主砲以上の働きをするケーニツヒモンスターが取り付いた事により、

対空迎撃能力が大幅にアップしたダルフイム、これでよっほどの事がない限りだろう。

(カイトスに到達、こりゃひでえわ…)

スカル1に取り付いてた分裂体が離脱しカイトスに取り付いた。

カイトス全体に急速に広げよう展開する。

間もなくこの艦は……

「ママー怖いよー」

「大丈夫よレイちゃん。フロンティアの軍隊さんが、助けにきてるわ」

「ひつくひつく」

「神様…お願いします。」

どうかこの子の命を助けて下さい…」

艦内部は負傷者、避難民でごったかえしていた。気密区画が少なくなっていたために館内部へ、生き残った民間人や負傷者が集められていた。

……

「クォーター艦橋内部」

約20分程たっただろうか…

「敵バジユラ群、ダルフイムから突破できてません」

「優勢だな…」

カイトス周辺部には既になく、ダルフイムに陣取ったケーニツヒ・モンスターやSMS、統合軍機で優勢になっていた。

「バーミリオン2被弾、緊急着艦に備えて下さい。  
予備機の起動準備お願いします」

被弾したが、パイロットの負傷者無しのようなだった。  
だが機動に不安定になってるようで、予備機の要請がはいてた。  
着艦デッキでは緊急放水のワークスがスタンバイに入った。

「バーミリオン2着艦成功です」

『すまない』

「バーミリオン2再出撃してきます」

……

「カイトスは何とか無事に逃げれそうね」

「そうね…フォールド安全圏まで450と……  
えっ！うそっ！艦長カイトス後方に、  
未確認物体がフォールドアウトしてきます……！」

「アンノン高エネルギー反応……！」

「だめえー！」

カオルが忙しく、  
カイトスに乗っている人々を  
虚数空間にほうりこんだ。

勿論インプラント通信を無効にして……  
(うおおお〜ひかりとなれえええ)

「カイトス轟沈…生存者は……」

「そんな…」

「フォールド断層をダイレクトに超えてきたっていうの？」

「なんと…」

（いちいち…何人救助できた…？）

（3914人だね）

救助を担当している分裂体集団から思考がはいる。

（そんなもんか…じゃダルフィムにデータとりで、取り付くわ）

「スカル3から敵艦データー収集きてます」

「開口部にビーム発信機か…」

「スカル3、ロスト！」

「スカル1、何が」

『ルカが敵に食われた！』

「食われた？」

「撃墜されたの？」

『違う。あの船がルカを捕獲して飲み込みやがった』

ーサヨナラコンサートー

『ありがとう、みんな！愛してる！』



「インフィニティ」

まさに戦場に届けこの思い、この歌…  
でラストナンバーが流れだした…

「クォーター艦橋」

「スカル4突貫していきます！」

「スカル4突出しすぎよ！戻りなさい！」

「オーダー追加だ、スカル4を援護せよ」

「か、艦長？」

「了解、手隙の小隊は突出中のスカル4の援護にまわれ」

了解、ルカ君の為に等返答がはいる。

「えっ？えっ？」

「バーミリオン、1、2スカル4の9時方向のカバー入ります」

「スカル4、敵艦まで30、20……15」

「艦長、アンノン反応IFF反応ありません！あっ…反応途絶」

「むう…」

「…スカル4信号も途絶、  
敵艦内部に侵入したと思われます」

「なんて無茶な」

「艦長」

「勝算は？」

「奴はノロマです。でしょ？ラム」

「はい。スカル3が収集したデータからシミュレートしました。  
最大戦速ならこっちの勝ちです」

「ミーナ君」

「各部異常なし。改装後初となりますが、いけると判断します」

「モニカ君」

「砲撃パターンから、回避プログラムを組みました。ナビゲートは  
お任せください」

「ちょっと、待ってください、艦長！出るのは危険過ぎます。  
パイロットが敵艦内にいるとはいえ」

「それだけではない。我々が逃げたらダルフィムの乗員は全滅し、  
恐らくギャラクシーの安否も不明になる」

「ですが…」

「グラス中尉、君が伝えた大統領のオーダーは何だったかね？」  
「え？」

「我々にはまだ、それを満たす手段がある」

「どのような手段ですか？」

「このクォーターでのダイダロスアタック…近接格闘だ」

「あっ」

「やつはノロマだ、そしてこのクォーターは早い…  
いけるだろ、キャシー君」

「で、ですが…」

「クォーターより出撃中の全部隊に告げる。

本艦はこれより、バジュラ空母艦との近接格闘戦に入る。

諸君等は、ダルフィムを全力で守れ。

最大の獲物はこちらで頂く。

全艦、トランスフォーメーション！！」

「本艦は、これよりトランスフォーメーションを開始します。  
各位、強攻型シフトを開始してください」



敵主砲が放たれた。

が、クォーターの機動力で隕石の後ろに回りこむと盾にし、  
また艦全体にはったエネルギーシールドで、  
はなたれた敵主砲は無力化した。

「おっしやああ！殺ったあああ！」

破碎隕石を煙幕とし、敵艦の開口部へとつつこむ。

「うおりやああああ！！！」

敵艦が開口部、弱点を閉じようとする力につつかえ棒の如く…

「スカル3、4、応答して！」

「4の機体信号ロスト『マクロス』3に4の信号確認」

「迎えに来たぜえ、お姫様ああああ！」

「スカル3に要救助者2名いる事が確認しました」

「マクロスキャノン発射用意」

「スカル3、脱出確認！」

「マクロスキャノン、エネルギーチャージ」

「ぶちかませえええ！！！」

「往生しやがれええええええええええ！！！」

マクロスキャノンが近距離で放たれ、  
敵バジユラ艦が無防備な内部構造をつかぬかれ、

耐え切れずに爆散する。

「敵艦爆沈、バジユラ、ダルフィム周辺にも確認できません。オーダー完了です」

「どう？これがS・M・Sの戦いよ」

「戦果は確かに評価します。

ですが、アルト准尉の行動や、

クォーターの強引な運用に関しては後で問題に……うっ……」

「あつら、おめでたあゝ？ おっほほほほほ」

平然としているクルーの方が信じられない。

加速Gなら耐えられたろうが、横G、縦Gとシェイカーをくらい、パイロットならまだしも……

対G訓練受けてない者が吐きにいくのはわかる気がした。

「艦長。ダルフィムから電文です。

貴艦、ならびにS・M・Sの奮闘に感謝する」

カオルはクォーターから離れると、戦場跡を探索しはじめた。

次々とフォールドしてく統合軍……

バジユラの回収業務にあたる船だろう……それと護衛船団をのこしてフォールドしていった。

(全部回収されたらやばいな…)  
ルースを出し、速度をあげて探し始めた。

…  
「これならありそうでちね」

「だな」

空間には赤バジユラの死骸があつた。

赤バジユラの肉体と同化して調べはじめると…

(これが…)

赤バジユラの体内から取り出したのが高純度フォールドクォーツ。

紫色の綺麗な石である。

…

「じゃ、合流して帰るか…元の世界と、どの位たつたっけ？」  
フロンティアについての分裂体が合流して、こっちの本体をまっついている状態だった。

「自動工業衛星わすれてるでちよ」

「あつ…どの位でいける？」

「ロング15回でちので…6時間でち」  
3000光年をジュネレーター強化した結果、20分チャージ、跳躍時間に3分かかるとの事だった。  
勿論、空間データ取得ずみで利用する話だったが…

「なら、休憩にあてるか…ちとつかれた」

「了解でちい…その前にごちゅじんたま」

「ん？」

「細菌除去しないと駄目でちよ…  
やっといたからいいもの」

「あつ」

「あとね〜ビッグ…」

……

カオル報告

V型感染症になりませんでした。



第198話 ギャラクシー救援 投稿日20111210（後書き）

ナギ少尉「今回はカイトス救助のお話なのね？」

作者「そうだね」

ナギ少尉「でも…4000人近く乗るの？」

作者「詰め込めば…10000はいけるだろう？」

…スペックが出てはいないんだが、

巡洋艦いわゆる砲艦クラスだとして300から400辺りかなと。  
普段は周囲に展開している護衛船団の一部だろうね」

ナギ少尉「で3000人？」

作者「まあ救助できなかったとか、SMS来る前に死んだりとか…  
な」

ナギ少尉「なるほどね…で、ダイダロスアタックね」

作者「つつか、マクロスであんなふうに、

こじ開けるとは思ってたよな…

あと隕石を盾にしたりとか…」

ナギ少尉「神回よね〜本編は」

作者「うまく再現できたかな…と思うんだけどね」

ナギ少尉「ところで作者、

前回のシェリルさんの要望どうするの？」

作者「……どうしよう…あれしかおもいつかんよなあ……」

ナギ少尉「あれ？」

作者「もうちつとまってな。とりあえず次回 マクロス世界より帰  
還 お楽しみにい」

第199話 マクロスFより帰還 投稿日20111213

2002年2月27日

今年は閏年ではないので、28日しかないのを記載しておこう。

「ただいまあ」

「マスターおかえりい」

マクロス世界から帰還してきた。

「と、変わった事は…?」

「リオンハイヴ攻略成功したよ」

「お…これで残るは17か…」

「でヴェルホんヤスクハイヴ攻略作戦が3月1日ね」

「で16になると…14まではとりあえずはいけるよな…」

「リオンハイヴ攻略部隊状況どうだったん?」

「34万のフェイズ5規模VS国連軍攻略部隊、」

定番通り、異世界軍のセオリーの飽和攻撃から始まった。

まもなく地上が人類の手に落ち、

そして…

突撃命令がくだった。

この時点で約10万に減らされてたBETA、

巢の中にて迎撃せんとしていた。

人類側にとっては、

ビッグシリーズの監視により、隠れ横道からの奇襲もわかる、  
弾薬等規格があれば地上や中継地点で補充可能。  
切れることのない通信網。

また機体のosも更新されてる、

補給にもどると持ち帰りしたいのがある。

超強力な突出した部隊A-01がいる。

という大甘設定により、被害を出しつつも…

EUIギリス軍所属部隊が反応炉到達し破壊、  
残敵掃討した。

というわけだった。

「乙女達は？」

「暴れまくって満足げだったよ」

で、次ね。ドズルさんから、太陽系外縁天体含めて全て終了、  
現在帰還中。到着は明日だよ」

「ドズル中將にお疲れと伝言よろしく  
(ドックにもどったら改修だらうな…)

「了解。あ、ベテルギウスの件だけど」

「お…」

今現在、ビッグシリーズが放射能測定、  
光学記録に入ってる段階だった。

「ヨークシン級に引き継いで、爆心地への探査へ向かったって、  
到達が2から3週間後の見込み」

「ん〜まあそんなもんか…」  
キヤーティア製のワーブドライブでないから、  
調査しながら航路開拓の旅になる。  
途中障害物あったら…の世界だからだ。

「あと甲2号マシユハドハイヴだけど、  
4月初旬頃に発展しそうだって報告はいつてるよ〜」

「来月か…」

「とりあえず報告は以上だよ」

「じゃ…まずは避難民の方々だよな…」

「避難民？」

「そ」

確かにテレビ版では、ギャラクシーのSOSは偽装だった。

バジュラに襲われたが、逃げ切れる手段及び防御はとっていたのだ。  
VF-27やV9等…

その為ギャラクシー統合軍司令部の命令を素直に聞き入れ、  
付近住民を収納しいち早く避難した、  
カイトス、ダルフィルムはギャラクシー船団から、  
欺瞞工作の囿として見捨てられた形となっていた。

が、劇場版では中々救援要請を受けないフロンティアに、演技で救援を求め続けていると、  
更なる大集団に襲われ逃げる時期を完全に見失い、  
本当にメインアイランド自体が壊滅し…難民船7隻をのこすのみになっってしまった…

勿論カイトスやダルフィルムはバジュラにに捕まり…

ともあれ失う命だった乗員乗客約4000名を、連れてきたわけだ。

幸い横浜基地での戦艦製造は基本的に終了している。

戦艦ドックで避難民の入ったシエルターをだし、

「マスター、カプセル入ったのどれ？」

「あの体育館」

赤色灯をまわしながらコバッタが入っていく…

「救助感謝いたします。」

新統合軍ギャラクシー船団所属、カイトス臨時艦長リン・カーラ大尉であります」

振り向くと若そうな長い髪の女性がいた。

「異世界軍最高責任者渚カオル元帥です。臨時艦長という…」

「はい、先の逃亡戦のおり…メインブリッジに直撃ありまして…  
殉職されました。」

わたしが残っていた士官の中で、最高階級でしたので…引き継ぐ形で…」

「それは残念です」

「それでやはり統合軍司令部とは…」

「それは申し訳ないのですが、

皆さんはあちらの世界では既に死亡されていますので…」

「ですね。わかりました」

「皆さんのご希望にそう形で、この後はなるべく対応していきたいとは思いますが。」

軍属ご希望の方は希望叶うと思いますよ」

「避難民の方々や部下にも伝えます。」

救助ありがとうございます」

リンさんが敬礼をし部下のところへいく…

「マスター、軍に入れないの？」

「それよりか、民間人をとにかく増やさないと…まずは話にならないだろ…」

「あゝだよな〜」

目標100億人突破…

勿論開拓済み他恒星系人口も込みでだが…



少なくとも自力で宇宙船つくれるようにならなきゃ、話にならない。ので、目指せマクロス世界の新統合軍！をスローガンとしていたわけだ。

とりあえず今回の救助者がかたついたので…  
鯖にデータを入れ始めた。

「微妙に違うのもあるんだね」

「まあ今回はフロンティア仕様ってか…VF-25が納入する前の機体もだしな」

さて、今回入手したVF-19系統及びVF-22系統について説明だが…

Eという外輸出型番からすべて始まっている。

正式量産型との違いはアビオニクスを搭載してるかどうかの違いだ。その為、入手した各拠点等は一から開発しなければならず、開発できた型番が、EF マクロスフロンティア仕様となっていた。だが練度の低い統合軍パイロットでは到底取り扱う事ができず、約180機生産の内、156機と多くの機体がSMSに納入されている。

更に操縦方法の変更及び対Gパイロットスーツの役割になる、EXギアを導入した、VF-19EFS・M・S仕様。

そしてその偵察型である、RVF-19EF。

唯一SMSで入手した地球仕様の元チエルシー専用機、VF-19 ACTIVEノートウング。

そして、地球の特殊部隊で拾ったアビオニクス等向上改良型のVF-19A2…となっていた。

ダルフィムの艦積機の中にMG、マクロスギヤラクシー仕様もあつたのも付け加えておこう。

「これ綺麗だね〜」

「だよな…空力できにな…」

VF-19とVF-25の大きな違いとして、パイロットに直接かかる負担の軽減化がまずあげられる。

フォールドクォーツ使用によるISCという、重力慣性吸収装置による恩恵だ。

機体やパイロットにかかる過重なGを異次元に一時的に封じ込め、Gがかかってない時に解放していくという夢の装置でもある。

ただし、フォールドクォーツ自体がバジユラの体内でしか精製されず、

数少なく貴重なものであり、量産一般兵用のいわゆるA型には低純度の人工フォールドカーボンが搭載される事となっている。

しかし、過重なGが吸収しきれなかった時、戦闘行動中であると致命的な事になる。

リミッターの存在だ。

全ての機体は標準で、リミッターがかかっており、かかってないと高速機動で過重なGが機体にかかり空中分解の恐れもでてくる。

また機体が保つても同等のGがパイロットにかかり、負担耐え切れずに、

目玉が飛び出たり潰れたりするのだ…

前にもかいたが、せいぜい鍛えた人間でも、

自分の体重10人分がかかったら…話がわかるだろう。

パイロット保護や機体保護の為のリミッターを、外しているのが信じられない行為である。

フォッカー少佐のリミッター外しは特別。

勿論出撃の度に毎回コバッタが交換修理をしていた。

身体が耐え切れてるのが信じられない話だった。

一応VF、バルキリーの通常の180度ターンは、減速、変形、方向転換、変形、加速の形だ。

高速機動ではターンの半径がどうしてもGの関係上広がりすぎてしまう。

そこを場合によるが…

減速無し変形旋回や、

無理矢理Gに耐え旋回し速度を保つのが、フォッカー少佐の乗り方だった。

普通の人にはできない話だった…

さて話をISC、フォールドクォーツに戻そう。

「このフォールドクォーツって？」

ISCのデータ内部にあるものを指してきた。

「こいつだな…」

手短な資材を手に握り、精製する…

紫色のフォールドクォーツができていた。

「へえ…」

珍しい鉱石に見える為、コバツタもマジマジと観察し、

「もらうね…作れるのかな？」

「純度の低いフォールドクォーツ、  
フォールドカーボンか…なら作れるみたいよ」

「うん。純度が低いのなら…多分大丈夫だね」

その他に熱核バーストエンジンの出力UP型、ステージ2仕様があ

げられる。

大気圏内は…これ以上のスピードアップは望めない。  
耐熱の為に…

あとは如何に早く耐熱限界までたどり着くか？  
に後発の機体もなるだろう。

もう一点、パイロット保護の面でもあるが、ISSの他に、EXギ  
アがある。

これは操縦桿、脱出シートを兼ねた耐Gスーツであり、  
脱出後には宇宙空間兼用のパワードスーツを兼ねている。

また、外部入力でVFにトレース動作させたり、IFFで遠隔操作  
させたり等も可能であった。

「これ面白そうだね」

「だろ？」

走行ローラー、飛行ユニットを備えているのが好感触だろう。

また各種バルキリーパックも更新できた。  
バルキリー用のフォールドブースターが、  
手に入ったのが嬉しい話でもある。

「こいつは珍しいだね」

「インプラントサイボーグ専用だからな…使えて人間なら…第六世代か…？」

まあシユワちゃん専用になりそうだな」

V F - 27 S ブレラ機チエーン。

何処でゲットしたの？はスカル3がバジユラ艦に吸い込まれた後で、側にいたV F - 27 Sに取り付いた形だった。

V F - 27 Sは生身の人間が乗る事を最初っから諦めて、身体強化したサイボーグ兵がのる前提となっている。

ブレラスター少佐の強化部分の身体データも入っているが…  
(ほとんど生身がないな…)

加重Gを考慮する必要がないのもわかるが…

「このこは…モンスターの变形型？」

「ケーニツヒモンスターだね。

デストロイドモンスターの改良発展型だな」

第一次星間戦争において、ダイダロスアタックの決め技の中心的存在だったデストロイドモンスター、

しかし、それ以外においてはモンスターは活躍できなかつた。

何故か？

……そう、移動力の無さ……の一言だ。

マクロスのダイダロスからとにかく離れられない移動力の無さであった……

この世界においては、移動力は改良されたが、それでも大地から離れられない点があった……

そこでデストロイドモンスターに宙間移動ができるように変形機能が付いたのが、

この可変爆撃機ケーニツヒモンスターである。

火力は絶大、戦艦の主砲以上の働きで、ケーニツヒモンスターが展開した地点では、制宙権、制空権、対地でも握られる次第だ。

その変わりその火力を維持するために鈍重さはさけられず、移動力はあるものの機動力はない。

その後の人類同士の戦いにおいては、いかにケーニツヒモンスターを守り抜き現地展開させるかがより重要になってきた……という可変爆撃機である。

「ま、シャトルで自力展開できるから……これからの主役級だろうな」

「確かにモンスターの活躍みてるとね」

ケーニツヒモンスター…

現地展開可能な移動砲台、戦艦の主砲級を異世界軍は手に入れたのである……

スーパーディフェンダーとシャイアン2も手に入れたが…

「有効射程に入られたらおしまいかもね」

「だなあ…デブリ除去や治安維持くらいだろう…」

ミサイルにかんしてはマクロスアタックには使ってたが…」

そしてゼントランの搭乗機のクアドラン・レアも手に入れたのが大きい。

ローの統合軍技術をいれた改良、再生産型だ。

さて艦船では…

マクロスフロンティア、バトルフロンティア、環境艦、マクロスクオーター、

空母ダルフィム、

巡洋艦カイトス、

グアンタナモ級宇宙空母、



ウラガ級護衛宇宙空母、  
ノーザンプテン級ステルスフリーゲート、  
等が鯖に入った。

「…無駄あるような形に思えるんだよね…」

「地上に着水し、開拓都市拠点になるから、  
コロニーの様に全面使うには無理だろ」

「あゝ開拓拠点都市か…」

環境艦及びマクロスフロンティアをさして話していた。

確かにシティは…亀にのる都市といった構造が必要であろう。  
環境艦は…地上につれてく必要があるのかな？  
とおもう点が…あることはあるが…

「ま、環境艦はこれから多数入手できそうだしな」

「ほえ？」

「次々と破棄してるんだよ…確か最終的には1隻爆沈で6隻だった  
かな？」

「な、なぜ…」

「空気の流出が1番の原因だよな」

「そんな規模の船捨てるなんて勿体ない」

「まあこの後は次回辺りにでも回収した環境艦の修復だな。  
ただバジユラスキャンしなきゃいけないけどね」

「バジユラ？」

「ああ…データにまだいれてないか。こういったのなんだよな」

「……生物兵器ですか。BETA製造機なら……でもむりそう」

星間航行は単的にまとめると2種類ある。  
超空間航行を使うか、時間を使うかだ。

BETAは落着ユニットの形で時間を選んだ。  
遙か万年、原種はわからないが億年の世界だろう。

多分無理と判定したのが、フォールドクォーツによるフォールド航  
行の点だろう。

「ま、幼生体からなら可能かもしれんが…思考が違つからなあ…」  
基本単一シナプス思考により集中思考形態をとる。  
個々のバジユラにおいて恐れは存在しない…

「で、後はフォールドシステムの全面更新できるよな」

「今からやるの？」

「……明日だね」

時間も遅い…

最後にまちにまった、

「これが自動工業衛星ですか…」

「ああ、こいつを何度もってきたかったか…」

そこには新統合軍によりレストアされずみの、  
各種自動工業衛星がデータに入っていた。

新統合軍では艦船の製造を地球及びエデンのラグランジュポイントに浮かべた、  
自動工場衛星に頼っていた。

プログラミングされた動作を繰り返し、  
無人で材料さえいれれば衛星内部で全て生産し、艦船等を組み上げてく…

「ぼくらのライバルだなあ」

「けど、生産スピードはこっちが上だとおもつよ」

「ぐっ…」

劇中描写みてわかるが…リガード生産ラインなら20秒で1機、  
1分間で3機、  
1時間で180機、  
1日で4320機、  
1月で約15万機の生産スピードであった。

艦船においても同様…

1日に標準戦艦が、1隻仕上がる自動工業衛星…

常に監察軍と戦闘を繰り返しているゼントラーティ軍の基幹艦隊を、  
生産して支え続けているのだ…

2000もの一つであるボトル基幹艦隊が470万隻、  
それとは別に2037年にスピカ3で遭遇した基幹艦隊が、  
当時の統合軍の総力戦でなんとか追い払う事ができた。

因みにスピカ3で6時間で壊滅した方面軍が、  
巡洋艦16駆逐艦48軽空母9、VF-11が600機反応弾使用。  
地球総力艦隊が、保持反応兵器9割使用した2500機による対艦  
攻撃、  
バトル級マクロスキャノン連続斉射：  
でやっとだ。

新統合軍が運用するにあたっての問題点は、  
総人口からくるパイロット数や艦船運営人員の不足であった。

「ここらへんがゴーストに走ったんだらうね」

「ぼくらみたくね」

「確かに」

あとは残念な事に…

「ゼントラン兵士自動工場衛星はなかったんだよなあ…」

「文化からタブーになるからじゃ？」

「かもな……」

多分入手しても、一から調整し直すのが大変なんだろう。

というより、

(どうやって魂をいれるのかな？)  
に興味をもっていたカオルだった。

……

カオル報告

入手情報

V F - 1 9 全般

V F - 2 2

V F - 2 5

V F - 2 7 S ブレラ機

ケーニツヒ、

シャイアン2

マクロスフロンティア船団各船

ダルフィム、カイトス

注フロンティア情報はアイランド1だけであり、

船内のケーブルカーや都市所施設等は入手できてません。

シエリル「作者！！何帰ってるのよ。わたしを連れて行きなさいの約束は、どうしたの？」

作者「は、はひい…もっか」

ナギ少尉「シエリルさん。少しよろしいですか？」

シエリル「あなた誰よ？」

ナギ少尉「ウォーシップガンナー2鋼鉄の咆哮にて副長を勤めてい  
る、

ウィルキア解放軍所属ナギ少尉です」

シエリル「その少尉さんが、このわたしに口出すのは、  
ちゃんと説明できるからなのよね？」

ナギ少尉「はい」

シエリル「説明してっらんなさい」



ナギ少尉「基本M u v - L u vの世界に連れ帰っている人は、その世界において弾き出された人々…  
つまり死亡した人々だと、  
カオルは考えてるそうです」

シエリル「何よう…いいじゃない。生きている人でも」

ナギ少尉「その物語の結末が変わるとしてもですか？」

シエリル「いいんじゃない」

ナギ少尉「余計な人が死んだりしますよ。

例えばグレイスさんとか、アルトさんとか」

シエリル「それは困るわ」

注釈 今出ているシエリルさんは10話辺りです。

ナギ少尉「で、基本アルトさんとあなた、シエリルさんが死なないと、

M u v - L u vの世界にこれないんですよね」

シエリル「えっ、そうなの…？」

作者「あゝその…ナギ少尉の例もあるから…な。  
あとは完全な並行世界化…フラグが爆発すると…」

ナギ少尉「わたしの例もありましたね〜。  
あと並行世界化ですか…」

作者「あの原作者はそういつてたからね」

シエリル「ねえ作者」

作者「は、はひい」

シエリル「次回予告やるわよ」

顔を縦にシエイクして肯定する作者。

シエリル「次回、マクロスF技術反映、そして再び…  
こないない女連れて来なかったら、ひどいんだからね」

第200話 マクロスF技術反映、そして再び…投稿日20111216

2002年2月28日

「おはよう〜」

「マスターおはです」

2月の最終日、3月に入る前にやっておくべき事はたんとあった。

昨日鯖にいった、マクロスF技術による全面改修や更新である。

まずは…惑星攻略艦隊について、

攻略艦隊の主力、改造対象となるコロニーレーザーが11基にふえていた。

(でフォールドと、ブースターか…)

あとピンポイントバリアも入れとくか…)

現在使用している初代マクロス時代のフォールドシステムでは、周囲の空間を包む事で空間ごと移動する為の質量増加のロスが生じる。

また240倍も主観時間と客観時間のズレが生じてた。

が、Fの時代のフォールドになると技術発展によりズレが7倍に短

縮。

記録としては、VF-19ESというテスト機の分類になるだろう  
…の機体が、  
地球の基地とエデンの基地の間11光年を1時間52分で結び、樹  
立した。

この記録の殆どが、地上停止状態からフォールド規定高度までと、  
大気圏突入から着地停止までであり、

フォールドの時間は、14光年を客観時間にすると十数分までに短  
縮していた。

(あとはフォールド断層があるかどうかだな…)

フォールド断層、文字通り何も無い空間であり、  
その濃度により落ちたり、情報のみ、転移速度が落ちるのみになる。

これに関してはある前提で通常航行能力がTOPである、  
ビッグシリーズを増産して航路開拓探査するしかないだろう。

ブースターに関しては、UCよりマクロスFのが優れていた。  
特に推進剤をほとんど使わない点に関してだ。

(さて、攻略艦隊の護衛艦について…だが)

現在UCのマゼラン級10隻とサラミス改Z級30隻が護衛任務についている。

それにバルキリー隊等が護衛任務にあたっているわけだ。

(入れ替えるとしても…)

航宙戦闘艦の分類だと…

マゼラン級56隻、

サラミス改級203隻、

アームド級5隻、

現在の宇宙軍の守備艦艇一覧である。

この艦艇数で太陽系内及びバーナード星系を守備しているのであり、任務外の予備艦に属するのが

ヤマト級1隻、

マクロス級1隻、

のみである。

ムサイ等は廃艦、

また旧サラミス等は改装された。

ビッグワン系は艦船とは別ジャンル、

ヨークシン級は貨物船に分類されてる。

建造中が、L4プラットフォームで、

ノプティバガニス級1、

ヤマト級2隻、

佐渡島基地にて、

マゼラン級3隻、  
サラミス改級14隻、  
アームド級3隻であった。

（まだまだ基幹艦隊に蹴散らされる戦力だよなあ…）

最低でも基幹艦隊とガチ戦できる戦力を整えないと、

戦闘用BETAとの戦いは厳しい認識である…

（まあ…でも地上攻略艦隊の護衛だからなあ…  
出会う前に逃げる…しかないか…）

サラミス改級では、

バルキリーはファイター形態での発着艦はできない。

緊急展開には難があるが…

生産性能の高さでとりあえず数が1番揃ってはいる。

ヤマト級をいっぱい作れ！

に関しては…確かに火力等はヤマト級が1番だが、  
建造期間が長い為そうそう増産ができないものである。

（まあ…数が揃ったら防空艦にかな…となると）

ヤマト技術による、射撃システム全面改装、対亜光速戦性能向上、  
マクロスF技術による、フォールドシステム更新、重力制御システ

△搭載、  
ブースター及びスラスター改装。

の改造計画に落ち着いた。

ブースターはヤマトの方が技術的にはだが、  
波動エンジンを利用しないといけない為…  
プランに入らなかった。

(とりあえず現状の攻略艦隊は、良いとして…  
これからの新造艦か…)

佐渡島は500m以下の建造ドック多数の為、  
サラミス改級や、マゼラン級等星系守備艦隊に建造枠を振っている。

鉄原基地は地上艦船、  
重慶基地は駐留及びメンテ。

カシユガル基地は現在メンテのみの状態だ。

月面基地は現在建造枠拡張中で4km級対応のドック1だけは確保  
できてた。

(残ってる艦船建造枠が5だから…ヤマト級にもふるのは必然だが  
…)

ウラガ級護衛空母にも引かれる。

マクロスクォーターにも引かれる。

バトルフロンティアにも引かれる。

ウラガ級護衛空母は、新マクロス級船団でバルキリーを70機展開可能な空母であり、  
550m級、主砲、対空レベルもまあまあの様であった。

そして何より自動工業衛星で建造されたもの…  
つまりこれから自動量産体制が整うのも見所だった。

そしてマクロスクォーター及びバトルフロンティア…  
両方とも建造しないわけではない。  
何より自動量産体制を目指して…

「とりあえず、ウラガ級は10日、マクロスクォーターは…3週間、  
マクロスフロンティアは2ヶ月かな？」

「で、ノプティバニガスは？」

「あと4日で完成だよ」

(…とりあえずヤマト2で各1かな?)

テストヘッドをいれ後ほど改造する前提で、建造計画は選択した。

また後々増える地上基地防衛用に、  
鉄原基地でビッグトレー砲艦型及びミサイル型の増産に入った。

「とりあえずいままで通り砲艦型5隻と、



対空ミサイルと長距離ミサイルで各1かな」

「進行おこないんじゃないの？」

「でも留守をからつけつには怖いし…さ」

(でつと…艦載機は次回でいいか…建造施設だな…)

デスク画面の艦船建造枠0の数字をみていた。

前にも話したが、横浜白凌基地ではもう建造はしてない。

理由は幾つかあるが、

建造スペースが1km四方しかとってない。

銀河鉄道や、飛行機の往来に支障きたし始めた。

異世界からきた人の専用受け入れスペースが必要。

以上の点であり、

今現在宇宙艦船生産拠点は佐渡島基地と、

L4プラットフォームに移していた。

月面基地も建造枠拡張中で、この間やっと4km級建造ドックが1つ完成したばかりだった。

とにかく生産能力向上の為…自動工業衛星だ。

材料さえ投入すれば、  
自動工業衛星は艦艇や機械の組み立てをオートでやってくれて、  
整備する必要がない。

まあ20万年も動かすと修理は必要だが…  
まさか修理する人々が全滅するとは当時は思ってたのだろうか…

とのコンセプトで古代プロトカルチャーは、  
知能が制限されたゼントラーティ用に自動工業衛星を与えた。

その数、3億とも5億ともいわれる。

とりあえず、その内の破壊放棄された二つを、  
マクロス世界より持ってきて、現在修繕中の自動工業衛星2基の状  
態だ。

(1200kmの自動工業衛星が取得できなかったのがなあ…)

マクロス世界の1200km級の生産衛星…

調査の結果自動工業衛星を建造する施設だとわかったが、  
構造物がもうもたない為、泣く泣く諦めた一品だ。

その巨体を支える為に押そうものなら、  
その部分から崩壊が始まると…

監察軍か、ゼントラーティ軍かどっち側かわからないが、  
かなり激しく戦闘が行われたらしい…

その報告後また探査の旅にビッグシリーズは出た。

とりあえず持ち込んだ20km級の修繕目処が3週間後、  
100km級がまだわからないの返答はきてた。

「じゃ…新造だと…」

「どのサイズの？」

「100km級の艦船建造タイプ」

「え〜と…6ヶ月かな？作ってみたいとわからないね」

「まあしょうがないか…とりあえず1基よろしく」

（あとは…）  
リヨンハイヴ跡地基地化案をみてた。

ヨーロッパ方面にての異世界軍及び国連軍の拠点となる。

次にヨーロッパ攻略作戦が発動するまでの最前線基地であり、  
また中型チューリップが常設される飛び地でもある。

( 防御計画どうするかだな… )

本来ローヌ川とソーヌ川が流れこみ、  
西側旧市街はサン・ジャン大教会があり、  
またノートルダム大聖堂もある美しい街であった。

フランスの金融機関の本店が多数あり…  
また光の祭典が有名だったという。

その他にも南西にあるピラ自然公園等を始め多数の自然公園が周囲  
にあり、  
豊かな自然環境下にあった。

しかし今はどうだろう…

川はなくなり、

フルヴィエールの丘も削られ…

周囲には真っ赤な土が広がっていた。

( 自然環境回復も考えながらかなあ… )

とりあえず過去の跡を復旧しつつ、

それを利用した防衛構造をとるプランを考えだした。

( こんなもんかな？あと忘れてる事は…ないな )

「おし、じゃあいつてくるわ」

「環境艦を取得した？」

「ああ、よろ」「まって」「え？」

「マスター、サイズが…だから1週間以内だと検査ができないからね」

新造プラットフォームができないと係留すらできない…って事らしい。

「ああわかった。後民間人も多数だと思っからよろしくな」

「多数って？」

「……百万かな？？」

「……居住コロニー直じゃないと対応できないよ」

「だよね……じゃあいつてくるわ」

世界扉を開き、再びマクロスフロンティアへ…

・マクロス世界シティフロンティア内・  
2059年8月2日

さっそく出るとクォーター格納庫目指して分裂体を…

VF-25Gミハエル機を早速発見するが、  
(まだついてないか…)  
まだ新型フォルド装置がついてなかった。  
とりついてしばらくすると…

「オーライオーライ」

「主任、今この機種に使える実働パックこれ一つだけですから」

「わかってます。パイロットには伝えます」

「接続オツケーです。稼動テスト入ります」

「1番ok、…2番ok…」

…

「ルカ」

「あ、先輩…えっとこれが携行型サウンドブースターのマニュアルです」

「ああ、わかった」

「ぶっつけ本番で、すみませんが…」

「ルカのところを信用するよ」  
とコクピットに乗りながら…

「ミシエル、ランカを頼む」

「わかってますよ。隊長…ランカちゃんシートベルトつけてね」

「は、はい」

「スカル2からデルタ1へ発進準備整いました」

『スカル2、進入許可及び発進許可します。ランカさんを頼むわね』

「了解…進入許可がでた。出るぞ」

格納庫誘導員が発進エレベーターまで誘導する。

「スカル2発進します」

ランカちゃんを載せているので、リニアカタパルトは使用せずに発艦した。

「これからフォールドはいるけど、気分悪くなったらいうんだよ」

「うん」

「よし、…じゃ…フォールド」

フォールドに突入した。

「と…15分か…ランカちゃん、マイクのチェックお願い」  
サウンドブースターのマニュアルを広げながら…

「あ〜あ〜…」  
どうやらミハエルはサウンドブースターの取り扱いは、始めのようだった。

終始機器のチェックに追われ…フォールドアウトする。

「わあああ」

ランカが感動の声をあげる。  
目の前には星がひろがってた。

フォールドブースターを着脱し静止衛星軌道上に浮かべると…



「じゃ、大気圏突入するよ。」

スピード落ちたらフォールドブースターをつけるからね」

「うん。ところでミシエルくん…なんで機体起こすの？」

「角度が深いと、燃え付きちゃうからね」

「へええ」

翼から熱が上がり赤く周りがそまる。

熱圏を抜けると赤いのがおさまり、  
ミハエルが操作してサウンドブースターを装着する。

「じゃ、ランカちゃん頼むよ」

「うん!!」

サウンドブースターの再生を押す。

く星間飛行

「アルト！お前にバースデープレゼントの配達だー!!」

「みんな！抱きしめて！銀河のはてまでー!!」

「ブースト…レベル4」

着地してランカちゃんが下りてく…

「スクリーン展開…カメラポット展開…

たく、もうちつと研修受けてればよかつたな」

バルキリー用サウンドブースターを慣れない手つきで操作する。

「アルト無事か？」

「助かった」

「反乱側はどうだ？」

「敵隊長以外は…ランカに聴き入っている」

鼻血を出し失神してしまうのも見えてた。

「アルト！」

「ああ！やらせるかよっ！諦める！貴様の負けだあ！！」

ステージを展開してる為無防備な状態になっているミハエル機に変わって、

敵クアドランにアルト機がつかかかっていく。

「うるせえうるせえ！俺に指図すんじゃねえ！フハハハ文化だ？歌だ？…」

笑わせるね。戦いこそが俺達の命！俺達の血なんだああ！」

くアイモく

『俺達はそう作られたものだ。そう生きて行かずにはいられないんだよ！！』

『えええ…』

「うおっ…通信でどなるなよ…」  
つまみを下げたように聞こえない。

…  
「終わったかな…」

リーダー反応が消失したのを確認してると…

「馬鹿かお前！スーツもけずに生身で戦場に出てくるなんて！」  
アルトが駆け付けた。

「だって、あのくらいしなきゃみんな歌を聴いてくれないかな…っ  
て……」

「おいっ！」

「あれ…なんか気が抜けたら、足…」

「ランカ、お前どうしてここまでして」

「だって、伝えたかったんだもん。ハッピーバースデー、アルトくん！」

「ふっ…ありがとっな…ところでミシエル！」

「なんだ？」

「どうやって7日前に、この状態がわかったんだ？」

「ルカが実家から新装備を無理してかりてきたんだよ」

「ルカが？」

「ああ、礼をいっとけよ。でだ、原理はわからんがフォールド断層を気にせずに、客観時間のズレもない」

「おい、それって…」

「ああ、画期的なゼロタイムフォールドだ。話聞いた時はおどろいたよ」

「ゼロタイムか…」

「ねえアルト君…」

「ん？」

「兵隊さん達が…」  
1列にならんでる。

「サイン会だろうな…」

手というか指先に器用にサイン色紙を摘んでならんでいた。

「ランカ殿、こ度の来訪感謝いたしますぞ。この後の警備は…」  
オゴタイ司令が警備しながらサイン会が始まった。

それを見ながら…

「帰りはお前に任せたぜアルト」

「え？」

「忘れたのか？ランカちゃんの…」

(さて、こつちでは終わりだな…)

ひっそりと離脱し高速航宙船を取得したあと、ルーロスを出し…  
— 路フロンティアへと帰還する。

(流石に33海兵隊や慰問スタッフはなあ…)

救助したかったが、ディメンションイーターには、救助して離脱も  
間に合いそうもない。

ルースなら余裕だが…  
乗船までの移動で、倍速何回かければいいのかも検討できなかった。

「ルース、フロンティアへ」

「了解、ワープ」

……

カオル報告

明日は…

シエリル「ちよつと作者！！ってあれ？どこに行ったのよ？」

ナギ少尉「遠い旅に出ました。えいちゃんとか何とかで…」

シエリル「はあ？このわたし、

シエリルが不満をぶちまけにきたのよ！！」

ナギ少尉「あと作者から…」

引ったくるように読み上げるシエリル様。

シエリル「なにになに？…きつたない字ね」

…幼稚園がかいてんじゃないでしょうね？

え〜と…拝啓シエリル様、今回の話はスーパーワールドパック狙いなので外せません。

次回も狙いがあるので、シエリル様が活躍しない回です。申し訳ありません…

まあ…そついった事ならしょうがないわね」

ナギ少尉「ちよつとシエリルさん人質でベットにでしたからね」

シエリル「そうなのよ…ワースト3位の回ね…

まあ作者がいないんじゃないじゃ次回予告は？」

ナギ少尉「はい、次回…フロンティア奇襲」

シエリル「わたしの活躍ないんだけど、  
見なかったらひどいんだからね」

ナギ少尉「お楽しみにい」



第201話 フロントニア奇襲 投稿日20111219

「ところでビッグシリーズからは情報入ってる？」

「えっと…破棄持ち帰り可能なのを3個見つけたでちっ」

「全部回ると…どんなもん？」

「3日間の行程でちね」

「3日間か…短縮は…」

「これ以上だと、ぼていをいじくり回してくれないと、無理でち」

「だよな…」

2日目

2059年8月3日

『マクロスフロンティア行政府よりお知らせします。全艦に避難警報が発令されました。』

市民の皆様は大至急シェルターに避難して下さい  
艦内にサイレンと共に、避難警報が発令される。

付近歩いていた人達がまたか…と最寄のシェルターへと向きを変え

た。

店も、

「すみませんお客様」

とお客をだし、閉店作業をしはじめた。

『フロンティアシティ及び各アイランドはシエルダウンを行います。繰り返しますフロンティアシティ及び各アイランドはシエルダウンを行います。』

公共交通機関は現時刻でもって軍専用運行となります。

市民の方はご利用できなくなりますのでご了承下さい。

電話回線の使用も制限されます。

安否確認の連絡は最寄のシエルターにてお願いいたします』

更に深刻に…シエルダウン、防護殻を下ろす事となる。

市民の足がよりいつそう早くなった。

『統合軍パイロットはコンディション1が発令されました。

大至急所属艦におもどり下さい』

なりふりかまっていられない放送内容までとなる…

シティ第1連絡軍港では…

「グリプスへの連絡艇はまだか？」

『アーバへの連絡艇です。次の便は10分後の予定です』

各艦艇への連絡艇待ちでごったかえしていた。  
非番や公休でシティや各アイランドにいた統合軍兵士が所属艦へも  
どる為だった。

全員が全員バルキリーで移動しているわけでもない。

『クォーターへの連絡艇はゲート2番より出ます』

「すみません通して下さい!！」

ルカが人を掻き分け2番ゲートへと滑りこんでいった。

ビー プシユー

「出すよ〜席についてシートベルトつけてね」

連絡艇内部には座席40席程あり、着席が5名だった。

「あ、はい」

「おやルカ君か？」

ガコン

固定フックが外れ、連絡艇が押し出され、  
エアロック内部に侵入する。

「ケビンさん」

「ルカ君、状況きいてる？」

「艦隊規模進行しか…」

「艦隊規模か…今までにない規模だよな」

「ええ…」

グン フィーン

エアロックが開き、箱型の連絡艇が宙にリニアの力で押し出され、進路をクォーターにとった。

連絡軍港では多数の連絡艇が出入りしていて、すぐに豆粒のように小さくなり…

そして見えなくなる。

30mサイズの連絡艇だと、そんなもんであろう。

「クォーター、こちら連絡艇151艇、お客さん6名乗車、着艦許可を求む」

『こちらクォーター、着艦許可します。

トラッキングビームいますか?』

「お願いします」

クォーターから誘導ビームがだされ、連絡艇デッキへと吸い込まれてく。

「ありがとうございます！」

「頑張れよ」

「はい！」

ルカが勢いよく艦内へと…

ビー プシュー

連絡艇151はシティ連絡軍港へと向かう。

……

さて分裂体の1つのカオルは…ラミア機に取り付いていた。

『いいか諸君。まさに背水の陣だ。防衛線の内側に一匹たりとも通してはならん。』

全艦、トランスフォーメーション！』

『遅れるな！ネネ、ラミアア！』

『はい！』

『スカルリーダーより各機。攻撃開始！』

戦闘準備整えた各艦から、主砲斉射が始まる。

バジユラ側も布陣を整えていたのだろうか……  
警報発令より30分にて戦端が開始された。

・バトルフロンティアACC・  
もちろん戦況確認の為此にもとりついている。

「クレイオス轟沈！」

「第18中隊、壊滅状態です！」

「エルム7応答してください。エルム7」

「戦況は」

「閣下！」

「現状はほぼ互角。新統合憲章の特例事項を適用し、  
反応兵器の使用を許可頂ければ乗り切れるかと」

「……全面戦争をしろと言うのか」

キノコが大統領に囁いてた。

まだ各船団との数少ない交流があったフロンティア船団。

それが完全に絶たれる道……全面戦争だ。

特例事項を適用すると、民間安全保持の為、

この場合フロンティア広報及び地球本部に対してだが、何と戦闘状態に陥ってるのか、その予測規模など詳細を公表しなければならぬ。

そうなると…人が来たがるわけがなくなり、観光で成り立っている産業どころか、運送業、また航空業界においても安全面からと大手巾着取りが取り扱いは止まりとなり、他船団との航路や運輸がなくなる事となる…あつても法外な値段取引となるなんて屋敷や、フロンティア拠点業者位だろう。

その決断を大統領は迫られていた…

一方、クォーター艦橋から、勿論そつちもとりについてたが…ありえない情報が入っていた。

「艦長！！スカル3撃墜！！」

「なに？」

（は？ルカも？）

スカル2シエリル機を助けに向かったままでは原作通り、しかし、あるう事が撃墜されてしまった。

「……………無事です。パイロットは無事です！」

「スカル4反応！アルト准尉が戻ってきました！」  
（ルカ…この場面で落とされたか？）

「おお…」

「スカル2、3の周囲のバジュラ反応減っていきます」

「スカル3、身体問題なし」

「よし、スカル3のゴーストを遠隔で戻せ、再出撃準備を整えてお  
け」

・バトルフロンティア艦橋・

「大統領」

「くどい、なんとか互角に持ちこたえてるんだろ？  
ならば押し返してみせたまえ」

「し、しかし…」

「なんの為の統合軍なんだ？」



「……わかりました…」

決断が下って司令が指示出そうとすると…

「フロンティア後方、6・4にデフォールド反応多数確認！」

「高エネルギー反応、攻撃来ますッ！！」

「リパルシブフィールド最大！！」

「くうっ…もつてくれ」

シールドへの直撃の振動がバトル艦の艦橋へ伝わる。

しかし祈りは届かず…

「ぎゃああ」

艦橋に振動が伝わり揺らされる。

「どっした！？！？」

「アイランド1に直撃っ！」

「環境維持システム最大！最優先モード！」

・フロンティアアシティ内部・

直撃の被害が及ばなく生き延びた人々が、  
次々と空気がシールド貫通の穴を通り、  
そこに吸い込まれてく…

(ひかりとなれえ)

真空へとほうり出される人々を次々と救出してく。

『メインアイランド内部に空気漏れ発生中です。

市民の皆様は付近のシェルターに避難して下さい。

繰り返します。

現在メインアイランド内に空気漏れが発生中です。

市民の皆様は付近のシェルターに避難して下さい』

おそらく気圧低下での自動放送だろう…

車、戦車なども次々と貫通した穴に空気と共に吸い出される中、虚しく流れていた。

- バトルフロンティア艦橋 -

「陽動作戦!？」

「馬鹿な。脳すら持たないような下等生物の分際で!」

「あの船です。バジュラとは思えないほどの組織だった攻撃。ならば、指令を出している者がいる筈です。違いますか?」

「確証はあるのか?」

頷くキノコ。

「止むを得ん。全軍に反応弾の使用許可を。マクロスクォーターに

回線を繋げ！」

一方、ララミア機では…

『デルタ1より、S・M・S全部隊に告ぐ。プレジデントオーダーだ。』

これより我々は、後方に現れた敵主力部隊に総攻撃を掛ける！  
目標、敵超大型空母！」

『待つてくれ！奴の中にはランカがいる！』

俺に救出の許可を！」

戦隊内回線にアルトが割り込んできた。

「ランカちゃんが…」

『アルト准尉、アーマードパック、並びに反応弾の使用を許可する。ただし、こちらの攻撃の手は緩めん。力を見せろ！」』

『了解！』

「そこなくっちゃね」

さあ〜ってお姉さんも気合いいれますか」

『ネネ、ララミア仕掛けるぞ』

『はい。お姉様』 『了解』

後方に出現したバジユラ群へ攻撃を加える。

『デルタ1より各隊へ。10-12より敵機多数接近』

『アタック!』

反応弾使用合図が表示され、  
後方で反応弾による火弾がひらいた。

『よし、いくぞネネ、ララミア』

「はい」「了解!」

その時だ、正面から赤バジユラのビームが…

「うああう…ッ!」

機体直撃とともにララミアを虚数空間にいれ、  
爆風とともに離脱した。

(さて…あとは…)

今のところ各環境艦に張り付いていた分裂体からも、  
更に直撃したという音沙汰がない。

そうしてると…クオーターからマクロスキャノンが放たれ…  
一撃のもとバジユラ司令艦が爆散した。

バジユラが個々に敗走始め…

(さて…環境艦取得まちかな…)

防衛戦の決着はついたようだ。

……

『フロンティア行政府よりお知らせします。  
市民の皆様のご協力によりバジユラは撃退できました。

現在メインアイランド内部の与圧が0ですので、  
今しばらくシエルター内部でお待ち下さい』

シエルターの外は空気が既に存在しなく、真空……死の空間となっていた。

アイランドに直撃したバジユラ戦艦主砲の規模はでかく、  
被害も甚大だった。

そのため、通常エアフィルターが貫通した際に展開する硬化剤がうまくはたらかなかった。

遺体回収作業と同時進行で、  
レスキュー隊や統合軍のバルキリーがあいた穴を横断するように、  
鉄ワイヤーを仕掛ける。

網目状になって改めて硬化剤が流されてきた。

『フロンティア01、こちらドックリーダー、開口部の仮充填作業  
終了、  
与圧確認してくれ』

『フロンティア01了解。……………与圧確認です。作業続行してください』

『こちらドックリーダー了解』

充填箇所をより強固にしていく作業にうつる…。

- アイランド14 -

ウー—

え〜ん

何発もくらくもかろうじて与圧が確保できてたアイランド14…  
艦内は火災が発生し、次々と建物をおそつた。

アイランド1は空気が抜けた事により火災は鎮火してたが、  
アイランド14は空気が抜けてない為大規模火災が発生中である。

そして…

『フロンティア行政府からお知らせします。現在アイランド14にて鎮火不能な規模の火災が発生しています。』

その為、約10分後に窒息消火をアイランド14にて行います。  
引き続きシエルター内でお待ち頂くようお願いいたします』

空気が別のアイランドに吸い込まれ…

火災は鎮火した。

シエルターに避難できてない人々は窒息する運命だったろう。

(約千人と数十万人の選択だとな…)

再び空気の流入が始まる。

『フロンティア行政府よりお知らせします。火災は鎮火し、バジユラ群も撤退しました。避難警報を解除いたします。ご協力ありがとうございました』

艦内では行方不明等の捜索が始まっていた。

(すみません。回収済みです)

そして住民にとって非情なアナウンスが：

『フロンティア行政府よりお知らせします。

アイランド14、15の被害が甚大および環境低下の為、

アイランド14の放棄、

アイランド15の凍結が決定しました。

各住民の方々の緊急避難先はアイランド1、エメラルドホールにてご案内いたします。

アイランド15は4時間後に凍結作業開始します。

アイランド14の放棄は、2日後の5日午前0時をもちまして行います。

繰り返します。

アイランド15は4時間後に凍結作業開始、

アイランド14の放棄は、2日後の5日午前0時をもちまして行います。

詳しいお問い合わせはお近くの市民の窓口にてお願いいたします』

(2日後か…じゃあ…)

今回のフロンティア船団襲撃で、数多くの人々が死者となっていた。まずは船団直上方向からの主砲直撃により、突き抜けた主砲によるシエルターごと溶解がアイランド含めて33箇所。シエルター破損が108箇所。

またアイランド1の空気流出による行方不明等など…

死者、行方不明者を数えると…全住民の10%にあたる100万人近くの人々が、今回の襲撃でなくなっていた。

そのほとんどを回収したが、救助カプセルの空きが少なくなった為、一回カプセルを交換して、再度帰還、環境艦を取得をまつ事に…

- M u v - L u v 世界アメリカ大統領 -

「ふむ…異世界軍からはなんと？」

「各々の国で独自で作れるように研究発展してほしいと…」

「ふむ…」

報告書には、  
サラミス級1隻、  
それに伴う技術情報提供。  
とかかれていた。



「これは各国にか？」

「はい、わかっている限りEU、ソ連、オーストラリアなどに」

「ふむ。少なくとも、あの巨大戦艦を作れるように、追いつかなければな。」

「研究機関に送れ」

「はっ！」

ヨーロッパ奪回作戦の経過報告書を読んでいた。

ハイヴ攻略時には全体で損害5割、損失1割だった派遣軍だが、入れ替え等で定数補充し、イベリア半島等リヨン西側の掃討作戦に移行していた。

ブタベストハイヴ攻略が、4月初め頃…

「4月初めか…終わったたら復興支援で影響力強めなくてはな…」

4日目

2059年8月25日

『さあ、いよいよこの日がやってまいりました！

我らが希望の歌姫ランカ・リーさんの活躍で、第7次超長距離フォールドは大成を収め、

我が船団はついにあのバジユラたちから解放されました。

その成功を記念し、全会一致で議決された祝日が今日、我々を自由に導いたあの曲「アイモ」にちなんで名づけられたアイモ記念日なのです。

そしてここブロードウェイでは、グラス大統領とランカさんのパレードが行われ、道行く人々に、あ…」

アナウンスしている人が絶句している。肝心の主役のランカが…居ないからだ。

「大変失礼しました。」

現在大統領によるアイモ記念日のパレードが行われてます。

ランカさんは午後の美星学園特設会場でのコンサートには出られないでしょう。

ではスタジオにかえします」

「ありがとうございます。…ではこのパレードによる交通規制の状況ですが…」

(大統領扱いかわいそす)

カオルは祭を楽しみながら…

…

カオル報告

アイモ記念日を楽しんでいます。

シエリル「作者ー!!」

ナギ少尉「あ、シエリルさん。

作者まだえいちゃん行ってるそうで…帰ってきてないですよ」

シエリル「…あんたにいつてもしょうがないわね。

じゃ、帰ってきたらお仕置き手伝ってね」

ナギ少尉「わかりました。けど…何故怒って?」

シエリル「わたしの華麗な飛行シーンがぬかされてるのよ!

そのの文句を言いに来たのよ!」

ナギ少尉「あ、作者からメールきました…

カオルの分裂体がとりついてなかったそうです。

なので書きたくともかけなかったそうで…」

シエリル「…返信だしてね。

次回出さなきゃひどいんだからね」

ナギ少尉「わかりました。えつと次回予告…  
フロンティア崩壊？お楽しみに！」

シエリル「あ、グレイス。えいちゃんってなに？」

グレイス「そうねえ……矢沢永吉じゃないかしら？」

シエリル「誰それ？」

グレイス「有名なのがファンの方々が白いスーツ姿の、えいちゃん  
コスして、えいちゃんコール斉唱ね」

シエリル「へええ面白そうね」

グレイス「ギャラクシーネットワークにコンサート映像あったから  
usbにおこしておくわね」

第202話 フロンティア崩壊？ 投稿日20111222

2059年8月25日

前回の約百万人近く死者行方不明がでた忌ま忌ましいバジユラ襲撃…

その約3週間後…

多くの人々がバジユラの襲撃に怯える必要がなくなった記念日、ランカ記念日のフィナーレを飾るコンサートに集まっていた。

～星間飛行～

アルト達によりRANKAと空にかかれ、会場がよりいっそう沸く。

アルトがハートに矢印が貫いた図を見事にそらに描く。

『みんな抱きしめて、銀河の果てまでー！』

～あなたのおと～

- 屋上 -

アクロバット披露終えたミハエルとアルトが屋上で、ランカのコンサートを聞きながら話あっていた。

（確かシェリルの事と、ランカちゃんの事のけりつけるだったよなあ…）



ラ。

アイランド1についてた分裂体が引き込んだ。

バジユラは不思議がってたが次の目標へと…

次々とバジユラが人に襲い掛かり、

それを直前回収するの繰り返しとなる。

『フロンティア行政府より避難警報です。

船団各艦艦内にバジユラが出現しました。

大至急シエルターに避難して下さい。

大至急シエルターに避難して下さい』

屋上では、

「シエルル下がれ!!」

アルトが軍属らしく一匹始末し、

眼下にひろがるバジユラに発砲してた。

「ランカ!」

と、ランカに頼みにアルトが階段室へと向かう。

その説得の間にも…次々と救出し…

そしてランカの歌が始まる。

「アイモO.C」

普段ならおとなしくなるバジユラ達だが、ランカが悲しみの感情になっていたため…より凶暴に、より数をましてきた。

「武器がないとはじまらない！S・M・Sにいくぞ！」

（さて…ミハエル君回収の為しばらくは…）

学園の校舎沿いで合流したミハエル、ルカ、アルトは、シエリル達を護りながら、

バジユラに襲われ死亡した軍人から、サブマシンガン弾薬等を奪い、坂下のS・M・S目指して進む。

「アルト！マガジンあるか？」

「ラストだ！」

「先輩、また軍人がしんでいます」

「ルカ援護する！頼む」

「はい！」

彼らには、弾がとにかく足らなかった…

携帯護身用のピストルだけではとてもS・M・Sにたどり着く事ができないだろう。

死体をあさりながら、廃墟になりつつある住宅街等を盾にし、



なんとか坂を下りきった。

「あの瓦礫の山を盾に、治安部隊をまつぞ」

「ランカ、シエリル、ナナセもう少しだ」

「いまだ！走れ！」

「クリア、確保したぞ！」

「こつちも確保！」

「僕も大丈夫です」

「はあはあはあ……」

「シエリル達も大丈夫そうだな」

「このサイズには銃が通用するのが救いか」

「だが、こう数が多くては」

「とにかくS・M・Sの基地に行こう。あそこに行けば武器もある」

「大丈夫です。ちょっと調子が悪かっただけですよ。」

ランカさんの歌はみんなの希望なんですから」

「希望……」

「出力不足かもしれません。」

S・M・Sに行けば、カナリアさんのケーニツヒから降ろしたフォールドウェーブアンプもあります。

あれを使えばきつと……」

シャイアンが丘の上に出てきて、

「よし、行くぞ！」

しかし多数のバジユラに襲われ……

「キヤア……！」

「シエリル！」「ナナセさんっ！」

爆発、炎に分断される。

「待ってるよ、すぐ」

「行って。私たちは大丈夫。早く行ってこの騒ぎを止めなさい」

「だが……」

「私を誰だと思ってるの」

「必ず助けにくる」

「行くぞ。ランカ！何を惚けてる」

アルト達がいき、怪我人とシエリル様が残り……

「さて、ナナセちゃんを安全なところに運ばないと……」

「誰かいきてる人いませんか！？救急隊です！」

「あ、こつち怪我人います！」

10人位の軍人に護衛されてきた救急隊員が、声の通るシエリル様に誘われてきた。

「この娘が…」

「かなりの重傷ですね…とりあえず応急処置しに安全な所に…  
近くのシエルターまで行きましょう」

「お願いします」

「ゆっくり、ゆっくり…頭気をつけて…よし、1、2の3」

「ダリス左!!」

「先いけ！」

襲い掛かるバジュラ群に護衛軍人の殆どが残り、  
シエルターになんとか逃げ込んだ。

「道開けてください！重傷者です」

避難した人がスペースをあけ、その部分にマットをしき、  
処置をしていく…

「意識レベルが…悪いですね。応急処置のみになりますので、必ず

専門機関にて診断お願いします」

と表のほうへと救急隊員はでていった…

(ハワード・グラスさん救出)

その頃S・M・S入口前…

「アニー、なんで…なんでだよ」

S・M・Sの入口の一つにたどりついたアルト一行。  
非戦闘員であるアニーの死体にミハエルが泣きついてた。

「なんでこんなことに。戦うのも死ぬのも兵隊だけで十分だろ。  
なんで、なんでだよ…」

「落ち着けバカモノが！こついうときこそ落ち着け。いいな、ミシエル」

「クラン」

「ルカ、使用可能な武器は」

「あ、はい。データによれば、略式EX・ギアとバルキリー用の兵装がいくつか」

「しかし、それだけじゃ奴らには」

「いや、上等だ」

「クラン、お前…」

「私がバルキリーの装備をしよう。まずはお前らだ」

「はい」「わかった」「ああ」

「あ、アイランド3に行きたいんですが」

「アイランド3？」

「ゼントラ艦に？」

「ルカ、何があるんだ？」

「いけばわかります。」

「この混乱をおさめるものがありますので…」

「ランカの歌よりもか？」

「はい」

「わかった…クラン！行き先変更だ、最終的にはアイランド3だ」

「わかった！だが早くしてくれ！」

出口を支えていたクランに変わり、EXギアを装着したアルト達が迎撃に加わった。

「じゃ、私は…」  
銃を置き服を脱ぎはじめる。

本来ならマイクローン装置近くの更衣室でだが、護衛が居ない状態では危険な為…

「アルト、ルカ、もう2、3匹倒したら一気に走るぞ」

「OK」「わかりました」

「クラン、準備は」

「なあミシエル、さっきの答え教えてくれないか？」

「はあ？」

「お前の恋はどこにある！」

「……行方不明で現在搜索中さ。そんなもんあったかどうか、俺自身忘れちゃったがねえ」

「なるほど。確かにお前は臆病者だ!!」

ミハエルのボディにブローをきめかかんだすきに、背の低いクランがキスをする。

「私はお前が好きだ、ミシエル」

「お、お前、こんなときに何を」

「バカ。こんなときだからだ。

いいかミシエル、よく憶えておけ。アルト、ルカ、貴様らもだ！」

「え?」「はい?」

「ミシエル」

「クラン」

「死ぬのが怖くて、恋ができるかあ〜〜!!」  
「ば…」「うへえ」

「すごい」「ほくもあんなふう…」  
告白後ダツシユしてマイクロローン装置室へ…

「キャアーツ！」

「アルト、ルカ、クランの援護を！」

「了解！つかまれ、ランカ」「はい」

「いきます！」

「シエリル様」

「救助はまだなの？軍は？」

「だれかなんとかしてくれよおお」

「ダイヤモンドクレバス」

「シエリル？」

「ああ…シエリルだ」

「銀河の妖精…」

「きれい」

人々の絶望が銀河の妖精の歌声で、落ち着けられてく…

・マイクロン装置室・

マイクロン装置に飛び込んだクラン。

それを援護する様に装置室内にはいったアルト一行。

「なあアルト。人を本気で好きになるのは、命懸けなんだな」

「先輩…」

どうとうん

バジユラが壁を壊して進入してきた。

（そろそろか…）

「まずい！」

「やらせるかよ！」

「ミシエル！くそっ！」

アルトが駆け付けたが、正面からきたバジユラ群の対応に追われた。

「先輩横！！！」

「なにっ！」

横からバジユラが襲い掛かる…

（串刺…あれ？）



アルトが突っ込んで、

「助かった!!」

正面はルカがかわって抑えてた。

「あ、装置が！」

「うおおおっ、この蟲ケラめえ！このおおおおお!!」

装置を破壊しようとしてついたバジュラに突撃したミハエル。

バジュラが抵抗で放った弾が外壁をぶちやぶり…

「ミシエル！」

空気の流出に耐えるミハエル。

「ミシエル！捕まれ」

「先輩！」

「危なかった…助かったぜアルト」

外にほうりだされずに…

(ミシエル……)

「さあって…アイランド3の秘密兵器とやら拝みにいきますか」

「期待して下さい」

「クラン、準備はいいか」

…

「おらあああーくろええーっ！」

「アーマードパックを装着したクラン。

本来ならバルキリーの操縦でだが、セントラン用マニュアル操作により、

ミサイル等が発射される。

「行くぞ！アルト、ルカ」

「おう」

「はい」

機体待機所になんとか到達したアルト達、  
自分の愛機へと搭乗し、アイランド3へと進む。

「これが…」

「リトルガール。半径50キロの空間を切り取って食い尽くす、  
L・A・I が開発したフォールド爆弾です」

「ひゅ〜。豪快だねえ」

「50キロって、船団ごと飲み込んでしまうじゃないか」

「だからバジユラをどこか一箇所に集め爆発させる」

「どっやって」

「ランカちゃんか…」

「なに？おいルカ、貴様！」

「僕は決めたんです、絶対に守るって。なのに……」

「だからってランカを囚にしようなんて」

「この躊躇している間にも死んでる人沢山いるんですよ！！  
船だってボロボロ。生態系だってムチャクチャだ。

これ以上被害を受けたらフロンティアはおしまいなんです！  
これはもう生存を懸けた戦いなんですよ。

僕らか、バジユラかの」

「歌うよ、私。みんなのために……」

「アルト、お前の負けだな。納得はいかないかもしれんが、  
この手段しかない」

「ミシエル！」

「俺らはS・M・S、スカル小队だ！俺らにやれない事はない。  
囚だろうとランカちゃんを絶対に護ってやれよ」

「アルトくん。よろしくね」

・バトルフロンティアACIC・

「本当におやりになるのですか？アイランド3は最も被害が少ない  
島だというのに」

「もともと、セントラーディ用の農業、観光島だからねえ。マイクロン化させれば収容は容易だ。他の島では時間が足りないよ。」

「ランカさんが歌を歌い始めたら、バジュラがすべての艦から集まってくるはずです。」

移動が確認された時点でアイランド3を切り離し、安全圏まで離れたところでこれを爆発させます」

「そのギリギリの瞬間まで、私はここで歌い続ければいいんだね」

「それまで絶対にバジュラには近寄らせない。脱出も必ず成功させる。だから……だから安心して歌え」

「うん。今度はちゃんとできると思う」

「頼む……」

「歌いたくないなら歌わなくていいんだぞ、ランカ」

「酷いよブレラさん、どうしてそんなこと言うの……」

「歌はお前の心だ。それも、お前だけの物だから」  
ランカはたまらず泣きついた…

「ありがとうブレラさん。でもいいの」

「アイモ」

歌いだすとともに、どんどんと、バジユラが集結しはじめてくる。

・バトルフロンティアCIC・

「アイランド1内のバジユラ、アイランド3に移動!!」

「アイランド3をパージ!」

「ランカ・リーの脱出を確認!」

「やりたまえ!」

デイメンションイーターが作動、アイランド3の設置点を中心に、暴走フォールドエネルギーフィールドが広がる。

次々とそのフィールドに捕われてくバジユラ…

やがでそのフィールドは臨界点まで広がると、ここまでほんの10秒程。

一気に収縮し、消滅した。

跡には、アイランド3は吸い込まれ、何も無い空間…  
そうフィールド内部は切り取られた…

「船団内部の活動バジユラ消滅しました!!」

「作戦成功か…」

「被害状況わかり次第報告せよ。

残存バジユラの搜索隊編成。

火炎放射機装備わすれるな！

……閣下、市民の犠牲は二百万を越えると思われます。  
覚悟していて下さい……」

「う、うむ……」

……

・異世界軍司令室・

「司令！コードブルーです！」

コードブルー……宇宙空間でのBETA遭遇、

これより通信制限、潜伏する。の短縮コード……

それが意味する事は……

「規模は！？」

「宇宙母艦級が10……以後は確認できません」

「まだビッグシリーズが遭遇したのが幸いか……」

……

・マクロス世界・

アイランド放棄待ち回収及び、

この期間を利用して破棄自動工業衛星を回収しに向かっていると……

『とても傷ましい厄災でした。我々は敬愛するハワード・グラス大

統領を失い、また、多くの人々が友人を、  
家族を、愛する人を失いました。みなさんは怒りとともに、あるい  
は悲しみとともに問いたいことでしょう』  
合同慰霊祭の中継がはいつた。

『何故と。なぜ我々なのだ、なぜ私の家族が、恋人が、なぜ傷つか  
なければならなかったのか。』

残存兵力を総動員し、生き残っていたバジユラもほぼ掃討され、よ  
うやく事態は沈静化していますが、失った人、失った物は二度と戻  
らず、

みなさんの心も取り返しのつかない傷を負ったことでしょう。

そう、傷は、傷はあまりにも深い。今はただ祈りましょう。失われ  
た命のために。

ミス・ランカ。

あなたのお兄さん、オズマ・リー少佐も行方不明です。お辛いとは思  
いますが歌ってくださいますね？

追悼と明日への希望の歌を。

…我々がバジユラとの戦いに勝利し、生き残るために』

『ごめん…なさい……』

『ランカさん』

『ごめんなさい。もう……歌えません！』

画面外に駆け出してくランカ…

(今日か……)

その日の夜…

・ブレラ機にとりついた分裂体・

『わかった！お前の望みかなえてやる』

『ありがとう。アルトくん』

(は？なんで？)

ミハエル生存からなんか変になった…

最初アルトはバジユラと警戒したが、

ペットとのアイくんと言得され…

ついていくと折れたようだった。

「貴様だけには任せられない。俺がつれてゆく」

『ブレラさん！！』

「それに機体ないだろう」

『用意してみるさー！』

「……2時間時間をやろう。フォールドブースターつけてこい。宙で落ち合つぞ」

『ああー』



……

2時間後…

『ランカ！待たせたな』

「同調合わせる…フォールドするぞ」

……

「ランカ、本当に大丈夫なのか？」

『うん。届くと思う。これまでだってやれたんだから』

おとなしくなるバジユラ達…

しかし、突如として襲い掛かかり…

「ブレラっ！」

『ああっ、逃げるぞ！』

「おう！」

二人の巧みな攻撃により防空網にあながあき、  
逃走ルートがあく…

「どうやら振り切ったようだな…」

『そのようだな…』

「ランカ、絶対に護ってやるさ」

『俺の命にかえてもな』

『でも、でもそれじゃ駄目なの。なんとか止めたいって、戦わないで済むようにしたいって、だから来たのに！』

バジユラ第二形態がみえて、

ブレラ機からランカが飛びだした。

「おいっランカ！」

第二が…突如としてランカをさらって逃走する。

「ランカーっ！！」

「おい、ブレラどうした？」

ブレラ機が急に動きをとめた。

「…おいてくぞ」

反応がないブレラを置いてランカを追跡しようとするど…

ガガガガ

機体に衝撃がはしる。

「な、なに？」

どっからと顔をうごかしてたら…

ブレラ機がこっちを狙いつけてた。

「ブレラ…貴様…」

完全な不意打ちにアルト機は…

『散れ！銀河の果てへ！』

直撃くらい……

『貴様には妹を守るには相応しくない』

爆散しコクピットからほうり出された…

「グフツ…ラ、ラン…カ…た、たい…ちよう…すみ…ま…せ……」

（あ、あの…何があるかわからないで、用心の為にナノマシンうつっていたからよいけど…

退場なの？）

宙に浮かぶ仮死状態のアルトを…

しょうがなく救急カプセルにいれた。

（この世界…どうなるの？）

……

カオル報告

ミシエルの代わりに、

アルト退場の模様です。



第202話 フロンティア崩壊？ 投稿日20111222（後書き）

ナギ少尉「え〜マクロスFの主人公アルトが退場の模様ですが…」

作者「しちゃったね」

ナギ少尉「どうするの？なんでそうなったの？」

作者「まあミハエルが殺されなかったのが最大の原因なんだろうな。だからランカについて…」

で、ミハエルが殺されなかった原因がルカが早々と決断していたわけ、

そのルカが決断した原因が一回撃墜された事により…

と続いているわけだ…」

ナギ少尉「これって完全にifの世界に入っちゃったよね…」

作者「だなあ…」

ナギ少尉「マクロスF編のエンドどうなるの？」

作者「まあ…このままだと完全にバッドエンド目指す可能性が…」

ナギ少尉「え〜と…ギャラクシーがバジユラを先兵として宇宙を支配下に？」

シエリル「そんな事させないわ！あたしの歌をきけえ！」

作者「さて次回マクロスF編完結、ラストフロンティア…お楽しみに」

第203話 ラストフロンティア 20111225

「並行世界になっちったんだろっな…」

回復中のアルトのカプセルを見ながら…

「どうしたんでちか？」

「いやねえ…この場で死ぬ運命じゃなかったんだよ…」

「へ？」

「ランカを洗脳から解き放ち、逆襲の一步となるキーなる主人公なだけで…」

「……それってやばいでちね。結果は…」

「ギャラクシー支配下の世界かな…？」

ランカがフロンティア船団の為に歌わないと、バジユラが味方にならず、圧倒的な戦力のもと、ギャラクシー支配の世界が始まる。

(の場合は、11とフロンティアとまとめてか…)

『フロンティア行政府よりお知らせします。まもなく30光年の短

距離フォールドが行われます』

傍受していた艦内放送をひろう。

「そろそろだね…」

このフォールドが終わると、フロンティアの運命がきまる…

2059年9月1日

- バトルフロンティアCIC -

「敵防空圏まで、あと40000。全艦に告げる。通信コードをシエラ・ブラボーにセット」

「我々は、あの化け物によってさんざん苦汁をなめさせられてきた。そしてフロンティア船団は、今や絶望的な状況にある。だが、ついにあの蟲どもの母星を突き止めた。我々はなんとしても連中を殲滅し、生き延びねばならない。」

現在、敵母星は数万を超えるバジユラたちによって防衛網が敷かれている。

本作戦の最大の目標は、バジユラの防衛網を突破、中枢である女王を倒し、

同時にアイランド1を惑星に降下させ、あの星を我らの新たな故郷とすることだ。



銀河の妖精シエリル・ノームの歌声が、我らの勝利を導きとならんことを！諸君の健闘を祈る！」

「攻撃部隊へのデイメンションカッターの搭載状況、現在98%完了しています」

「非戦闘員、アイランド1への移動が完了しました」

「多重コロニーの惑星への降下作戦。持てる物資とエネルギーのすべてを注ぎ込んで、まさに背水の陣だな」

「もとより負ければ未来はないのです。

あの星は、我々に残された最後のフロンティア。願わくは、宇宙の摂理が我らに微笑まんことを」

フロンティア船団から全兵力が布陣しながら進む。対するバジユラはまだ能動的には動いてない…

「まもなく作戦宙域です」

「作戦開始までG-60」

「閣下」

頷くキノコ。

「私の歌を…聴けえええ！」

（射手座 午後九時Don't be late）

「敵の制空権内に入ります」

「蟲どもの動きは」

「展開速度は通常の3分の1以下。連携と思しき動きは認められませんが」

「効いているんだ、歌が」

「行ける、行けるぞ！」

バジユラが迎撃しようとするが、シエリルの歌声で、攻撃的行動をとらず、そこに一方的に統合軍機により叩かれてく…  
例え数があるうとも…

「おお。バジユラたちが分断されていく」

「このま一気に行くぞ！アイランド1を地上に降下させる！」  
このまま一方的にいけるかと思われた……が…

「愛覚えていますか？」

「な…まさか…」

リンミン・メイの決戦の歌、

愛覚えていますか？が戦場に流れ始めた。

すると…

「敵バジユラ群、連携を取り戻しています」

「フォールドウェーブが干渉しています！」

「バジユラ群、戦力増大！」

それまで積極的行動をとらなかったバジユラが、途端に息をふきかえし、果敢に防衛行動をとる。

「馬鹿な！」

「ランカ・リー！やはり彼女は人類を裏切ったのか」

巨大なランカ・リーが星を護るように浮かび上がっていた。

「つく！」

「シエリルはどうした！」

「歌い続けていますが…」

人々に聞こえるのはランカの歌声のみ…

シエリル様の歌声はフォールドウェーブアンプに繋がれ、

特殊な波動としてバジユラ達にそそがれていた。

それが…

「バジユラのネットワークがランカの歌を増幅している模様です  
打ち消されていた。」

「バジユラの攻撃が……」  
もとより数で劣勢にたっているフロンティア船団……

「馬鹿な馬鹿なッ！ここまで来て」

「何としてでも突破せよ！後がないと思え」

「IFF確認、ブレラ機です！！」

「何故バジユラ側に！！」

クラン機とミハエル機がブレラ機を阻止せんと……  
クラン機が被弾した。  
ミハエル機がカバーする……

劣勢にたたされるフロンティア船団側……

防空網もかなり崩され、  
バジユラ戦艦が、バトルフロンティア目前に……

「主砲、来ます！」

エネルギーが発射寸前、  
横から撃ち抜かれるバジユラ戦艦。

『これ以上貴様らの好きにはさせせん。ランカも、バジユラたちも』

「マクロスクォーター！」

『我々は帰ってきた。ギャラクシーの野望を、

グレイス・オコナーと、それに組する者たちの野望を潰すために』

「ギャラクシーだと!？」

『そうだ。我々は踊らされていたのだよ。

奴らの陰謀と、それに加担する者によって』

「くつ。何を根拠にそんな戯言を！」

『証拠ならあれだ!あの巨大なランカ君…

あれはランカ君ではない!

マクロスキャノン発射!』

マクロスクォーターより放たれたマクロスキャノンが、

巨大ランカを消し去り、バトルギャラクシーが表れた。

同時に歌もとまり…

バジユラも混乱しているのだろう…動きがとまり余裕ができる。

「バトルギャラクシー!？」

「バジユラにやられたはずでは!？」

「くつ」

『三島大統領閣下。後ほど詳しく伺おう、グラス大統領暗殺の件も含めて』

「暗殺!？」

「大統領はバジユラにやられたのでは」

「馬鹿な。私は……」

『覚悟なさいレオン!』

「レオン大統領代行、ただ現時刻を持ちまして統合憲章条約にのっとり、

逮捕監禁させていただきませう。

第2土官室に拘束しろ! つれてけ」

キノコが抵抗をしている。

戦況は、動きをとめたバジユラに変わり、ギャラクシー側が…

「バトルギャラクシーより熱源多数、射出」

「はなせ!」

「ゴーストV9です!」

「ばかな統合条約に違反している!

やつらはやる気なのか!？」

V9ゴーストを投入してきた。

「いくわよみんなあ!」

「ノーザンクロス」

『いくぞ！突撃ラブハート！』

S・M・S、マクロススクォーターの介入により、動きが鈍くなったバジユラと変わって、V9を主体としたギャラクシー側…

人の力による最高の機体を目指したVF-25、制御できるゴーストの最高峰を目指したV9、互いにぶつかりあい、数は劣勢ながらも腕に覚えあるS・M・Sパイロットの力で、戦況が拮抗してきた。

- バトルギャラクシー艦内 -

ランカが捕われていて、洗脳状態のまま放置されている。

『ランカちゃん！聞こえるか？シエリルの歌が！目を覚ませランカちゃん。君の歌を取り戻すんだ！』

…ランカの洗脳はまだとけてない。

(介入しないと駄目かな…)

バジユラ本星でクイーンが…

- バトルフロンティアCIC -

「強烈なフォールド波が！今までとは桁違いです！」

フォールドウェーブが押し寄せ、シェリル様が吹き飛ばされた…

「フォールドウェーブ、急速展開！」

「星系全域にネットワーク構造を構築していきます！」

「バジユラの動きが活発化してきます！」

「くうう…押し返せ！」

「む、無理です！予備兵力ありません！」

『聞くがいい、蟲けらども。我々は今、全宇宙を手に入れた。プロトカルチャーすらその力を恐れ、憧れ、ついには神格化して』  
「バジユラ本星から」

『その姿を模した超時空生命体、バジユラの力によって！』

「悪夢だ…」

「大きさはどの位なんだ…」

「S・M・Sスカル01ダイメンションイーター射出！！」

「敵大型、フィールド展開！」

「な…ダイメンションイーターが…」



「次元断層自力展開可能なのか？」

『フッフ。クイーンとダイレクトに接続した我らに、歌など無意味！  
さあ、ひれ伏しなさい！！運命すら支配する神にも等しき我が力に  
！！』

行きなさいバジユラ。我が目、我が耳、我が手足、その強靱な爪と  
ともに。

思い知れ、我らの力を！！』

積極的攻撃的行動を取り戻したバジユラ艦隊の一斉射撃により…  
次々と轟沈していく、フロンティア艦隊。

「ごめんね…ランカちゃん…アルト」

ステージでは…シェリル様が、生命の力がつきようとしていた…

「もう…だめ…なの？」

クオーターも被弾…

戦況は一気にギャラクシー側が優勢となる。

（しょうがない介入するか…）

ランカちゃんに精神に取り付き洗脳を解除する。

ラ（あ、あなたは？）

（説明はあと…歌はいいね…りりんの力だ…）

（アナタノオト）

『いいぞ、ランカ』  
「お兄ちゃん!？」

『被弾したおかげで、やっと奴らの支配から逃れられた。さあ歌うんだ、ランカ。』

悲しみも、怒りも、喜びも、想いのすべてを歌に乗せて』  
「うん、お兄ちゃん」

・バトルフロンティア・

「ランカ・リーの歌に、バジユラの攻撃が止まっています」

「何!? 敵に回ったのではなかったのか？」

「分かりませんが、バジユラクイーンからのフォールド波にさえ拮抗して広がっていきます」

「誰だ貴様!」

「歌はいいね」

「答ろ!」

「歌は文化の力だ」  
倒れているシエリル様に調合ナノマシンを打ち込む。

「シエリルに何をした!!」

「間もなくわかりますよ……」

「なっ！！消えた……」

・クォーター艦橋・

「スカル4のIFFです！」

『艦長、隊長、帰ってきました』

「アルト君……」

『俺に機体を』

「予備機は……」

首を振るキャシー中尉。

クランが被弾した機体の代わりに、アルト予備機を使用した為だ。

「全部使用中、艦内には空いているVF-25は……」

『まって下さい。先輩、今の居場所は？』

「アイランド1だ」

『なら、L・A・I技研に！！そこに機体がある！』

パスコード流します！』

『ルカ、ありがとう！』

・バトルフロンティアCIC・



「私の彼はパイロット」

「ダイヤモンドクレバス」

「アイランド1に直撃、来ますっ！」

「何！？」

グレイスコナーの放った主砲クラスがフロンティアに襲い掛かる…

しかし、バジュラの大群が集まり…

「うっ！」

盾となりフロンティアを護ってくれた。

「……バジュラが、守ってくれたのか！？」

「ありがとう、みんな」

「ランカちゃん。まさか！？」

「あい君！届いたの、歌が、私とシェリルさんの歌が」

「アルト近くの分裂体」

「これが……この機体が…」

『YF-29デュランダル。調整前の暴馬ですが、アルト先輩なら乗りこなす事ができます』

「よし…いくぞー！」

『みんな抱きしめて、銀河の果てまでー！』  
〈星間飛行〉

アルトのるYF-29が両艦橋前で挨拶する…

〈what about my star〉

「断層フィールド、再度展開！」

「どうやって突破すれば…バジユラ!?」

「ええ!?!」

バジユラが断層フィールドに突っ込み、  
円を描くように干渉する…

するとフィールドに穴があき…

「道が、バジユラたちが断層に道を」

『全軍、バジユラに続けえー!』

マクロスギヤラクシーの主砲が狙いつけて…

「おおっと!」

さげきれず左腕の主砲に損傷をおう。

バトルフロンティアも被弾状況は一緒だ。

「ううっ!」

「主砲損傷、射撃不能です！」

『まだまだーっ!』

鈍重なケーニツヒモンスターがフィールド穴から突っ込み、  
変型しながら、損傷を受けつつギヤラクシーの主砲に強行着陸、

『うおおおおおおおおおおおおおお!!』

ギヤラクシーの艦橋に目掛けて主砲を放つ。

くライオンく

「今だ!マクロスアタック!!!」

「うおっしゃあああああ!!」

損傷をうけてない左腕をギヤラクシーの主砲正面からめりこませる。  
甲板エレベーター内部から待機していた重装パックをつけたシャイ  
アンがせり上がり…

「撃てっ!!」

一斉にミサイルを放つ。

ギヤラクシー艦内部で次々と爆発し、その爆発が艦中央に及んだ。

く愛おぼえていますかく

- アルト機分裂体 -

「うおおおああああ!!」

『行けえ!アルト!!』

『我らの未来を!!』

『僕たちの希望を!!』

『わたし達の愛を!!』

『アルトお、これを使え!!』

「ミシエル!!」

被弾したミハエル機からロングライフルが渡される。

くライオンく

「行つくぜーっ!!」

『なぜ分らないの!これが人類進化の究極の姿よ!』

「何が進化だ。バジユラを犠牲にしてるくせに!!」

「くっ!!」

YF-27に挟まれかけたが…

『貴様を援護する!』

「ブレラ!」

ブレラ機が僚機となった。

『アルト、クイーンの頭を狙え!』

「頭?」

『バジユラの心は、頭ではなく腹にある』

『バジユラはお腹で歌うんだよ』

「そうか!」

『この蟲けらどもが!』

『お前たちにつながれていてよく分かった。どこまで行っても、人は一人だ』

『だから我らは!』

『だけど!』

「一人だからこそ」

グレイス狙いを阻止しようと残存兵力がアルト機、グレイス機へと狙いつけるが…

「誰かを愛せるんだああー!!!!」

オーバーブースト状態になった二人組をとめられず…

マイクロミサイルがクイーンの頭に殺到する。

外殻が破られグレイスコナーが外から伺え…

そこをライフルが貫き…



バジユラクイーンが解放された。

……

バジユラ本星に降下するフロンティア船団、  
クイーンはバジユラ達を集め旅立ちの準備をしていた。

無事着水し…

そんな中イレギュラーがいた…

・クォーター士官応接室・

「…となるとアルトを救助し、ランカの洗脳を解き放ち、  
シエリルさんを治療したのが君なのか」

「はい」

「自分が本来の運命では死んでいたねえ」

「ですね」

「この世界にきたのが自分の世界への技術反映と、人材の流入、廃  
品回収…」

「その君が正体を現して介入したのが、  
ギヤラクシー支配下の世界の回避で一致したからか…」

「あとシエリル様の生ライブ目的ですね。  
まあ介入がうまい事いって本来の歴史に…少し違いますがいってな  
によりです」

「この後の我々の運命等知っているのかね？」

「知らないですね…ですので、  
いつまで来れるかが微妙なんですけどね」

「さっき話してたのと矛盾してないか？」

「ああ、あなたがたは、中心人物として語られてるからです。  
で、ここバジユラ本星に着陸…そこで語りはENDになる…  
あと中心人物以外はもうわからないですね。  
神のみぞ知る…ですか」

「ふむ…ところで君はこの後はどうするのかね？」

「…後は来れない予想で全て引き上げましたので。  
いつも通り自分の世界の軍を強化ですね」

「ねえ…あなたの世界ってどんなの？」

……

「まだ宇宙は未開な世界か…」

「自分らがいくならアドバンテージもありますね…」

「エデンとかか…」

「うむ」

「ただ先程もお話した通りこの後がわからない為、あなた方の世界と決別する覚悟がいます。…自分としたら大歓迎なんですが」

「アルト君」

「ランカについてくよ」  
「うれしいって抱き着く二人…」

「わたしはいくわ…」

「シエリルさん？」

「お幸せにね」

「おいシエリル」

「いゝから、新天地とやらを拝んでみたいのよ。  
それにわたしはシエリルよ。どこにいても活躍できるわ」

「お前……」

「わかりました。大歓迎しますよシエリル様。他にはいらっしやいませんか?」  
「繋がりがあからまらずはこないだろう……」

「では、この辺で……」

「ご協力感謝いたします。また近い内に会える事を……」

「ま、こちらの世界にまたきましたら、必ず顔だします」

「元気でな」「シエリルさん」

「い〜い? 掴まえた魚はでっかいわよ。  
逃しちゃ駄目よランカちゃん」

”世界扉”

ゲートをオープンし、潜り抜けてく……

……

カオル報告

シエリル様が来ちゃいました。

第204話 マクロス世界より再び帰還 投稿日 20111228

2002年3月11日

「ただいま」

「マスターお帰りな……お隣りの方は？」

普段単独でなのに、徐々に他の人があらわれてコバッタは動揺した。

「シエリル・ノーム様……」

マクロス世界の歌姫、銀河の妖精ね」

「マスター珍しい事あるんだね……」

いつもは説明省いて虚数空間で……だが既にばらしたという事だ。

「シエリルよ。よろしくね」

「じゃ、案内誰かまわしてあげて」

シエリル様がつれられていく……

移動したのを確認したコバッタ、

「マスター……緊急大変緊急大変」

「どうした？」

「ビッグシリーズが4日前に1520光年の距離で、戦闘用BETA艦隊と遭遇しちゃったの。現在通信封鎖モードみたいで連絡はない状態だけど、母艦級10隻からなる編成だつて」

「あちゃ…ヤマト100隻揃えないと駄目な規模か…」

母艦級自体はヤマト級の波動砲で対抗できる予想だが、その体内に寄生している突貫級の数が半端ない規模が予想されてる。最大戦闘能力をもつヤマトでさえ、防空網を完璧にし迎撃をするにはその位の数は必要とカオルは考えていた。

少なくとも宇宙母艦級と同等数の10隻だと、砲門数≡手数が必要だ足りない…

それくらいの数をようしてはいると予測されていた。

具体的にだと、宇宙母艦級10匹だと…

体内にいる突貫級は20000の数を下らないだろうの予想で動いている。

全方向から突貫級が襲い掛かる…

これが、100隻なら1:200、50隻なら1:400、10隻なら1:2000である…

1隻だと1:20000…いくらヤマトが優秀であっても、

特攻が身上である200mクラスの突貫型の2万の飽和攻撃の前には、沈むのが目にみえていた。

例えバリアだとしても、初代マクロスのバリアも集中放火で不安定になり、  
自爆して幸運にもマクロスだけは残ったが…  
味方共々…の事もある。

「遭遇時等の手順はとってるよね？」

「うん勿論。通常空間を超光速で逃げ切るだよな」

ビッグシリーズだけは通常航行が、光速を越える事ができるが為にとれる手段だった。

例え相手が超空間航法を追跡できたとしても、通常航行では追跡不能であろう…

もっとも相手がそれ以上の速さを出せる…というのなら別だが…  
その場合は偵察にあたってたビッグシリーズの、撃墜予想信号でわかる形にはなっている。

「しかしまあ…早めの遭遇だよな…  
もう少し後だったらよかったのになあ…」

実際ヤマト級の建造ペースで100隻揃えるのに現状では8年かかるだろう。



のに… たった1520光年先にそれは存在したのだ…

「あとはバジュラじゃないけど超空間航法をもってるかだよな…」

実際… それがある無しだと脅威度が段違いにかわる。

1520年以後に到達か、1520年以前、はたまた明日到達なのか？

勿論地球の存在がばれたらだが…

になってくるからだ…

（うんまあ今更しようがない… 予測はしてたし… やる事をやる。更に強化するだけだな）

「まあわかった。とりあえず追加報告まちだね」

「だね」

うまく情報が取得できるか…

撃墜されるか…

逃走劇になるか…

それは現在対峙しているビッグシリーズのみぞしる…

「あと他には？」

「銀河鉄道のシールド付設状況ね」

「お…何処まで延びた？」

「小惑星帯まで延びたよ」

「火星軌道経由？」

「うん」

「資材の流入が増えるな…」

「貨物専用駅付設したからね」

小惑星帯ベルトが、資源の搾源地なのは何回も記載している。  
今回はそこに銀河鉄道の貨物駅を新設できたのだ。

これにより今までのチューリップ使用より約30倍の輸送量アップ  
が望めた。

いやそれ以上だろう…

「300両編成動かすぞ」

コバツタが喜んでますが、実は：リアル話になりますが、実際にあります。

ユニオンパシフィックの304両編成貨物列車が：しかもトランクが2段積みです。

貨物車両が295両、動力車が9両で合計304両編成：

YouTubeで検索して頂きました。

通過に5分近く、編成の長さが実に5kmに及ぶそうです。

先頭動力車が3、中間1次が2、2次が2、最後尾に2両：

ん〜広大なあ…と思い知った次第です。

話をもどしましょう…

軌道シールド内部ならかなりの速度、超光速を出せる銀河鉄道の貨物機関車。

軌道シールド内部は片方向貨物2、客車2、

特別1の最大10編成が同時に通過できるようにはなっている。

それが小惑星まで延びたので、チューリップでちまちま運ぶよりも効率的になる。

小型チューリップで移動する多目的輸送挺だが、

砂利や形があんまりととのつてない物の、

積載量的には5tだと思って貰えばいいだろう。

ただ平台の上のにつけるだけの挺であり、

移動時に崩れ落ちるからそうは積載できない。

またチューリップ使用時には一方通行となるため、切替え待ちとなる。

さて、コバツタの提示したのが、  
1両120tまで積載可能なホツパ車であり、  
これが50両編成で運行される予定となる。

これで平均4500tが一回の運行で運び込まれ、  
1時間2往復のペースに…

「もってかなきゃね」

現状小惑星帯採掘場の岩石採掘量は必要に応じてだが、3101t  
/1hまでではできない。  
勿論今までは多数のチューリップ、多数の多目的輸送挺を運用し  
て輸送していたが…

「作業に従事する人員とか増やさないとね」

「あと作業用エステも増やさしておくう」

資材貯蔵庫は現在一杯の為、  
減りはじめても増産可能態勢にするらしい…

「で他にはフェイス2全部攻略できたよ」

人類側は、オリョミンスク、ハタンガ、  
ヴァルホヤンスクのフェイズ2全てを攻略し、勢力下におさめた。

「ソ連側のか：これで地球上は残り14か：2002年度中に攻略  
できるか：？だな」

今のところ人類側は3方向からの進撃となっている。

米ソ異世界軍共同のソ連方向、

米EU国連軍異世界軍のヨーロッパ方面、

中国側から切り込んでいる異世界軍。

ソ連方向は中華統一戦線及び日本帝国軍が次回参加で、

甲19ブラゴエスチエンスク攻略予定が、甲2号攻略後：

ヨーロッパ方面は甲11ブタベスト攻略予定：

そして異世界軍主体の、甲2号マシユハド攻略予定が4月の攻略予  
定となっている。

その後、余裕あれば甲13ポパールと甲15マンダレーを連戦で攻  
略し、

大東亜連合の東南アジア大陸地域解放、

中国地域の防衛線形成、

また洗浄作業と、その後：植林にうつりたいと思っていた。

皮肉にもユーラシア大陸の生きる生物や、人間をBETAがすべて  
駆逐した為に、

多くの森林を失ったにも関わらず大気中の酸素濃度は落ちてはなかった。

が、人口を回復する為には酸素もやはり必要であるが為、植林はかせない…

そして水資源回復させ、最終的には自然を回復させる…  
砂漠化した土地の回復にも時間がかかる事は明白だ…

長期的にみる事はいっぱいであり…

因みにカナダの高放射能地域にもコスモクリーナー隊は派遣済みで、土地洗浄の段階にはいつて、生身での侵入も可能になっていた。

かなり山岳等の迂回ルートを取らされ、時間がかかりかかったが…

「落としたあとの、いわれてた前線基地だね。

オリョミンスクハイヴ跡地にただ今建設中ね」

ソ連国内深くに大きく食い込んだ人類側勢力、

戦線維持の為前線基地は必要だった。

そこでまた今回異世界軍が建設する事となる。

オリョミンスクハイヴは集中砲撃の影響で大きくクレーターとなっていた。

そのクレーターから地下は縦穴等が残っていた為、再利用の形で基地の建設に着手していた。

「報告はこんなところ」

「よし…うんじゃ…今回の救助人員とかだな…」

「てっ、マスターまだいるの？今までの最大人数なのにまだ？」

「だから百万人近くつたる？」

マクロスフロンティア船団、  
バジユラ戦役での被害者数は、

死者・行方不明者500万人以上、

負傷者延べ1000万人以上、

という膨大な数に上り、

特に負傷者延べ数はフロンティア船団の襲われる前の住民総数を  
実際に上回っていた。

1番多く死者がでたのが、バジユラがいきなり大量発生し、  
船内で攻撃的行動をとったアイモ記念日であろう。

いきなり道脇から襲い掛かれ…や、車に乗ってていきなりや、  
シエルターに逃げ込む前に捕まって…、

またギリギリまで開けてて、シエルター内部にバジユラが侵入して  
きた例もあった。

その次に死者数が多いのが、1番始めにシエルが貫かれたバジユラ奇襲の日…

かなりの死者数がのぼるのだが…

カオル介入の結果、殆どが死体発見できず、行方不明者にならなくなっていった。

死体があつて1人死亡とカウントできるならともかく、ただの血だまりで死体がない場合は、当局も行方不明としかカウントできない。

また真空中に吸われた人々も搜索で見つかるならともかく、慣性の力で基本的には永遠に船団より離れ、飛び続ける事となり、これもまた行方不明とカウントされる。

真空中に吸い出されたらレーダーで発見できればだが、人間は通常のレーダーでは発見されない。

その為ミリ波レーダーで搜索をするのだが、マクロス世界の技術でも2km辺りまでが適性だった。

つまり真空中にほつり出されたら、どっち方向に飛んでるのかを計算しなければ、

殆ど発見は不可能であり、発見できたとしても死亡している為、船団行政部や船団保険の取り扱いは、

行方不明と死者は一緒の取り扱いにもなっている事により、



さほど重視はされなかった。

艦の外は死の世界だし…船外活動も危険手当が勿論つく話だ。

死者と行方不明が変わってもさほど問題はない。

現代の海難事故やダイバーの漂流事故でも、

発見できた時には手遅れで死んでいるのは、やはり人体がレーダーに映りにくいという事であり、

搜索は基本的に視認で行う為、夜間は打ち切られるという点だった。

因みに、ダイバーの方にお勧めなのが使い捨てシグナルフロート、これを使用すれば反射材により一般漁船搭載のレーダーでも反応がある為、

発見率が高まる事になる。

巡視艇や救難ヘリのレーダーでも1.8kmで反応ある為、より救助率が高まる事となる。

大きさは縦横10cm以内、厚さ2cmでポケットに入るサイズ。使用時は口で空気を入れ膨らませて使用する。

とまあ話を戻すが…

殆ど見つからないという事だった。

カオルはL5の異世界軍の居住コロニーへと……

因みにコロニーで、難民の話題を久々にするが…

3月頭の時点で、地球上に存在した戦災難民、  
難民キャンプにいた人々のコロニーや、月面都市への吸収は全て完了した。

銀河鉄道の輸送力は、馬鹿にならないものである…

その数、約2億6千万…

全ての被退国が1つのコロニーというわけではないが、  
被退国の政府もコロニーや月面都市に移ってきて、  
ラグランジュ5は35と建造中5のコロニー群を形成している。

さて異世界軍管轄居住コロニーふれおふいつしゅ1の第1グラウンド…

3961

「ご希望の住宅はまだありますからじっくり選んで下さ〜い」

「おいら達はどこに住めば？」

「ゼントランの方はこの区画ですな〜農業区画となっております」

「ありがとう〜」

モーと、カバ牛達が巨人であるゼントランに抱えられていった。

「すみません、中華料理店したいんですが」

「今料理店集まってるのがこことここですね。住居兼で構いませんか？」

「はいそれで」

「それではこの物件で」

グランドではこのように救助した人々の住居の割り振りで賑わっていた。

第一次入植、62万1562名。

第二次入植、217万9243名…

マクロスフロンティア、ギャラクシーから連れて帰った民間人含めての数である。

その人達がこのコロニーに纏まって入植する形となった。

最初は帰して！等酷いいわれようだったが、

あなた方がその世界で死んだ事、

その後、死んだおかげでギリギリフロンティアが入植できた事等を説明すると、

次第に声は潜められた。

救助された人々はその後身内、知り合いを探して、改めて住居に…の形になった。

ここで一つ問題だが…

「ママー」「ファッター？」

そう身内の親族からひき離されて救助した子供達の存在だ。

ベビーシッターととして、キヤーティアからのアシストロイドを一人一人につけた。

泣き叫んでいた子供達も、アシストロイドの愛くるしさで泣き止み、これからスクスクと育っていくだろう。

「僕等と違い、家庭環境補助として優れてるからなあ…」

「学ぶべきところは学ばないと」

「はい…ぼっい、わたしのお・み・せを開きたいんだけど？」

「あ、どんなお店ですか？」

……

次に回収した破棄環境艦、及び自動工業衛星をラグランジュポイント4に浮かべるべく、移動し人員を呼んだ…

「マスター……持ってきすぎ」

「いやさ、修繕できそうなもの放置しとくの勿体ないじゃん」

「…そうだけどさあ」

自動工業衛星が今回10基、

「マザーにもっと弟妹増やしてもらわないと追いつかないよ…」

「あははは…」

100km前後の艦船建造クラスが8基、20kmの人型兵器建造クラスを2基お持ち帰りしてきた。

「まあ…結構固まった地域だったんだよね。  
だから集中的に狙われたみたいなんだよ」

「…だからっていきなり持ち帰りすぎ  
備え付けブースター等破損で、軌道制御ができないのに…追いつかないよ…」

「まあ…頑張つて…な」

外付けブースター等自動工業衛星を固定したり位置修正したりするのを、増産してなかったので…  
暫くは忙しいだろう…

「あと、あの船らも大変なんだからね」

破棄環境艦も13隻回収してきた。

フロンティア船団では、特に船内部にバジュラが湧いた騒ぎでの被害が大きかった…

結果次々と修繕維持管理をが無理と判断、放棄た。

環境船からは空気や水、食料を抜けるだけ抜いて破棄、初期に放棄したアイランド15は建造物、内部構造位しか残ってなかったが、

物語の終盤の放棄したアイランド7等は他のアイランドに移動できるのが、空気と水、食料位だった。

それでも酸素濃度低下及び統制モード継続しても、環境曲線が自己修復以下に陥いつた為、もって3ヶ月という状態になっていた…  
500万以上に及ぶ死者がでなかったら…一週間持たなかったら…

「これ全部駆逐しなくっちゃいけないんでしょ？」

「こつちで発生したら洒落にならないからな…  
とりあえず真つ先に15を検索駆除してくれよ」

「了解、マスター」

寄生バジユラ：フロンティア船団で繁殖してたのだ。  
幸いキヤーティアリーダーには反応するので、  
発見は、早いだろう。

「じゃ、あとよろしくな」

……

## カオル報告

お持ち帰り割り振りで大変でした。

シエリル「作者くわたしの出番冒頭だけなの？」

作者「は…はい…」

シエリル「もっとぶやしなさいよ！これは命令よ」

作者「ぐっ…ど、努力します…」

ナギ少尉「あゝあ…でも次回でる出番ないのにどうするんだろ？」

シエリル「え？ちよつと貸しなさいよ！」

作者「…書き直しといわれる前に…次回、新たなる世界へ(仮)  
お楽しみにい！」

シエリル「ちよつと！まちな」

ぶっん

P・S娘フェス轟沈です…どうすっかなあ…



第205話 新たなる世界へ 投稿日20111231

2002年3月13日

昨日は救助した人達の要望を聞いたり、

自動工業衛星をおいたり等で時間をとられていて、

一通り落ち着き…宇宙戦闘用対策を考えていた。

1作品1コロニーだったからまだあんなもんですんだ。

これが雑多になってたら…

因みにある難民コロニーでコロニー内代表問題が出始めてて、スポ  
ーツで決めたらどうです？の助言はしておいたが…

24の国がその難民コロニーに入る人口しか生き延びてなかったの  
に…

(さて…)

今異世界軍の宇宙戦闘用対策への急務として、

- 1、 対抗できる火力、
- 2、 生産能力、
- 3、 艦隻数、
- 4、 人材、
- 5、 民間人、

この5つがあげられている。

1についてはヤマト級やマクロス技術をはじめ揃ってきたと言えよう。

2については…自動工場衛星修繕や建造ドック作成もしてるが、とにかく時間だ

3も時間とくに2の能力次第で…

4はまだまだ…

5は、救助もするが、やはり時間だろう…

つまりまだ無理ゲーの状態になっている。

そこで…

(あと4月始めまでは動きないから…3週間程あるなあ…)

今現状、甲2号が間隔確認の為、  
落とせようが一回上位存在になった事を確認する必要がある。  
その為予測段階の4月までは攻略できない。

また同様にソ連方面から進行も、ブラゴエスチェンスクハイヴに対しても甲2号攻略後発動…  
ヨーロッパ方面からもだ。

現在世界的には弾薬補充や、先の攻略作戦での損失の補充、訓練等で戦力増強中の流れになっている。

(取得補強できるか…)  
前々から5万隻規模の数個艦隊で全滅など容易に繰り返し、その数を補充し、結局は船体ができても、乗員兵力が教育が届かずおっつかなくなり…敗退になる、

つまり、生産能力と艦隻数を高めるような設計や技術がある世界に行きたいと思っていた。

そう…

(銀河英雄伝説の世界だな…)

たった1個艦隊の規模が大体12000隻から15000隻という  
とてつもない規模で、  
領土を争ってる世界である。

それだけに全滅となれば1個艦隊で100万辺りの将兵が死ぬ事となり…  
中には光る原石もいたろう…

でだ、ここが重要だが…一年間に3万とか4万とかの艦船を再建する能力をもっている、  
つまり一日あたり100隻以上建造している点である。

それも600m級クラスや400m級クラスの恒星間戦闘艦をだ…

片側の同盟勢力だけみても、まずはその年の初めに4万隻数個艦隊

が、約半分までに減っている。

8月に定数回復した13艦隊を始め、約9個艦隊+アルファで20万隻が進行、

惨敗して10月には2個艦隊規模+アルファになった…

翌年はクーデターが勃発1個艦隊がまたここで消える。

その翌年はイゼルローンでの攻防があり、

更に新年になるとフェザーンを乗り越えてきた帝国に対し、

劣勢ながらも大規模防衛戦を行い、

一回和睦後、更に大規模進行に対し全滅防衛戦とイゼルローンに艦船を増援できる等…

実に4年間程で、35万隻以上が沈み、

また新たに15万隻以上が建造されている…

対して帝国勢力は、内乱につぐ内乱で、

本編内ではやはり貴族側参加やロイエンタール反乱軍参加含めて30

万隻以上をを失うが、

それでもラインハルト揮下の艦隊は定数を回復している…

それもたった同盟が130億の人口、帝国250億の人口程度がだ…

人が回復するのが遅い為、有能な人がどんどん軍にとられ、沢山死に、

またとられ…破綻していった同盟、  
一部の特権階級が謳歌し、大部分が苦しい生活していた帝国だが、  
その驚異的な生産建造能力を、是非とも取得をしたいと思っていた。  
全滅した艦隊まるごとそのまま持ってこれれば、  
こっちの世界で十回位は会戦を、回復無しで絶対に凌げるかな？  
の意見もでると思うが…確かに魅力的でもある。

因みに150年に渡り争い同盟、帝国ともに毎年かなりの人口が減り…  
銀河帝国全盛期には約3000億いた人口が…  
全体で約400億位までに減ってるのを付け加えておこつ…

(マクロスゼロは…しばらくは無理だろうな…)

ゼロの時にも勿論破棄衛星をもってくるつもりだったが…  
今あるのをレストアしてからだろう…  
コバッタ達から追いつかないと言われてた。

因みに大規模艦隊なら、ガンバスターの世界は？は…

20年近くで約9000隻…  
大きさは勿論ガンバスターの世界の方が上のが多数だが、  
建造数等は銀河英雄伝説の方が遙かに上回っていた。

その他にも上げられるとすると、スターウォーズや星界の…等が上げられるが、

スターウォーズは戦力艦では100から300隻単位で構成されている。

星界の…の世界は、水雷艦隊がかなり多く、また主戦力が巡察艦隊から構成されて、  
万を構成するのが少ない…という世界だ。

どちらの世界にしる人口が軍隊にとられ、  
その戦闘による激滅、再補充しまた激滅を繰り返す事は、していないという点である。

非戦闘員がまきこまれ惑星滅亡で滅はあるが、  
150年に渡る戦闘でどんだけの艦船数が沈み、  
どんだけの軍人となった人が死んだか検討もつかない状態である。

と行先を決めたが…

(対宙艦載機の評定と更新しておかなきゃな…)

現状VF-171が主力機になってるが…

「フォーールドクォーツ再現できそう?」

「ん〜…無理みたいね」

「となると…ゼロタイムやS型量産、YF-29は難しいか…」  
資材からフォールドクォーツ精製した…

「こんな風に精製はできるんだけどね…」

「VF-25量産したいの？」

「でしょ」

「となるとA型ならできるよ」

一般量産型、フォールドカーボン利用タイプだ。

(A型か…そういえばフォッカーさんいたよな…)

「フォッカーさんと柿崎君の意見聞きたいからよんできて」

「あいよ〜」

……

「ほづ…美しいな」

「へえ、新型ですか」

「VF-25S、フォッカーさんの時から50年後の機体ですね」

1号機、テスト機については用意したフォールドクォーツ分利用で、前回トリップする前に注文してた。

「俺の時からそんなにか…」

「今つかっているVF-19の15年位後で、VF-171の次世代有力候補機です」

「S型っていうと隊長機か……カオル、操縦桿は？」

「あ、これが操縦桿兼ねた対Gパワードスーツです。EXギアとい  
いますね」

「おつ着てみていいですか？元帥殿」

といいながら許可をとるまもなく着て…

「うぐぐ…重いです」

「動力いれなきゃ…ねえ…」



「柿崎……」

「うわわわわ〜」

動力いれた途端にローラーが作動し……

「と、とめてえええ〜」

どがしゃんと壁に激突する。

「あ……いたくはないっすが……怖かった……」

コバツタ達の補助の元、とりあえずローラーをカットして……

操縦席におさまると操縦桿が展開してシートとなった。

「面白そうだな……柿崎変われ」

「た、隊長……」

「試運転いいか？」

「えひびぎ〜」

……

（その間に）

V B - 6 ケーニツヒモンスターをみていた。

「カオルさん…こいつはシャトル？」

「あ、デストロイド・モンスターの発展型、ケーニツヒモンスターさ」

「あれの？」

「うん」

「まさか変形するんですか？」

「そつバルキリーとおんなじでな」

モンスター形態に変形させた。

「くううくしびれるっすう…これなら機動力ありますね」

「だな」

（ただ…弄れるとこがないなあ…）

地上歩行能力は0に等しかった。

何しろ弄るうにも、変型時に支障がきたす為であり…

（ま、いつか…）

V B - 6 ケーニツヒモンスターはそのまま量産体制とした。

（どっど…）

V F - 27が同じくハンガーに鎮座していた。

「カオルさん…こいつはやはり新しい機体ですか？」

「あ、これはサイボーグ専用というか、強化人間専用ったほうがいいか…なんだよね…」

柿崎には無理だよ」

「そつつすか…」

加重Gが30Gにも及ぶ…まさにシユワちゃん専用機だろう。

(グレイスさんものれるか…)

勿論グレイスさんも接触し取得をした。

彼女の場合は生体アンドロイドと違って良かったろう。

身体とネットワーク上に記憶と意識があり、

魂の定義がなかった。

だから今まで使っていたボディで自爆の為に捧げる事ができたのだらう…

この世界でグレイスさん生産だと、各々が独立した思考になるから無茶はしなくなる…筈…

……

しばらくすると、かなり満足げに帰ってきて、

絶賛してたので、一般機V F - 25A、大隊長クラスV F - 25Sの量産が決まった。

もちろんカオル提供が必要だったのでS型は20から30位なら…  
だが…

(YF - 29と、V9、QF - 4000は次回かな…)

艦船建造ドックは…

NEW新規枠1 空き枠2

と表示されていた。

(艦船の検証は帰ってからでいいか…)

ヤマト級2、ノーザンブテン級1を選択した。

(あとは…)

バーナード星系の次に、最優先でグルームブリッジ星系…への進行、  
及び拠点構築を改装終わったヤマトへ命じた。

マクロス世界における惑星エデン…その星系を確保の為に…

(あるかどうかはともかく、ある程度の指針にはなるな…)

ララミス星系や、シャーマ星系など、メガロード船団や初期新マク  
ロス移民船団が発見入植した恒星系等もある。

そういった地球近傍の惑星系等を確保しておけば、そんなないだろ  
う。

厄介なのが既に占拠されてたのだが…  
その時には攻略艦隊の出番となる。

「ま、じゃあこんなもんかな？…行ってくる」

「いってらっしゃい」

世界扉を開き…銀英伝の世界へ…

- 銀英伝の世界 -

扉を抜けると…

(建物？船？)

建造物の中に直接でたようだ。  
とりあえず場所確認の為建造物へと同化する…

(ん？船か…？)

掌握しつつ…400mサイズ…

(同盟側標準巡航艦か…)

緑色が主体塗装、

定員393名、平均運用100名あたり。最低40名でも戦闘行動可能。

遠距離攻撃が得意なレーザー水爆ミサイル攻撃が主体の艦艇だ。

ビーム兵器ではなく、実体長距離ミサイル兵器が主体である。

沢山のミサイルを積載し、その発射砲門は18門。

一斉射撃で、1個戦隊でおよそ2000隻編成なら…実に36000発のミサイルが敵艦隊に到達する。

その有効射程距離は100光秒。

地球 - 月間が1.28光秒といえばその距離感がわかるだろう。

防御力はそれ程はない。

数を揃えて機動力をまし、被弾を避けるをコンセプトにしている、単独遠距離航海可能な恒星間航宙艦である。

そして回りには同系の艦艇が沢山いた。

(どっかの遠征中か?)

システム掌握してくと…

宇宙歴796年2月、アスターテ星系、第二艦隊というのが…

(アスターテ会戦か…なら早いところラップ少佐を探さなきゃ…

あとは第四、第六の人員も…)

- 同時刻パトルクロス -

「それでは第二艦隊作戦会議を行う」

「では私めから説明いたします。

今作戦主目的は、我が方のアムリッツア星域へ侵攻中、帝国軍ラインハルト艦隊約2万の編成艦隊の撃退になります。

我が艦隊は艦隊司令協議の結果、右翼を担当。

迂回して敵8時の方向から包囲網を形成、敵艦隊の殲滅を狙う事となりました」

「閣下、わたしの作戦案はいかがだったのでしょうか？」

「これかね…」

「はい」

「この作戦案に賛同するものはいるかね？」

「一人もたたない。それを確認して…」

「ヤンウエンリー准将、確かに作戦は読ませて貰った。

しかしいささか慎重論過ぎる。敵に比べ我が方は倍だ。

逃げ道を考えて戦っている場合ではない。

何故今更負けない算段をしなければならぬのだ？」

「しかし、戦場では何が起こるかわかりません。油断は禁物ですよ？」

「とにかく全員の意見でこの作戦は却下する。

いっておくが…君にふくむところがあるわけではないぞ」

「そのお言葉だけで充分です。では」

ヤン准将は作戦案を拒否され退出していった。

「ふむ…どうしたもんかねえ…」

自分の私室にはいり、机の上に作戦案提案書をおくと、  
それでわかったのだろう…

アッテンボロー中佐が、

「またですか…」

「どうも教師運が悪いらしく、私の答えは良い点数がでないね」

「しかたないですよ…あいつら年をとって頭硬くなってるんす」

「ほんと年はとりたくないねえ」

「で、ご老体達にお任せして今回は勝てるんでしょうかねえ？」

「数の上ではね…勝利は約束されたようなもんだ。だが」

「だが？」

「敵の司令官はやつこさんだ」

「ローエングラム伯ラインハルト…たしか上級大将」

「そう…白い船の司令官。やつこさんは何をやるかわからない…」

「やですよ。あの世にいくのは…」



「ああ…だから目が離せない。私の作戦を却下した司令官でもね。さて行くこうか」

「読ませてもらいます」

「無駄だぞ」

・ルース改・

（え〜と、艦隊にそれぞれとりついた。増えている…で、大丈夫だよな？）

各艦隊にとりついた分裂体、どんどん分裂して別の艦にとりついていってる…

その数既に3万以上にわかれていった。

殆ど不死だからよいものの、その単体能力自体は普通の人以下にも劣ってきた。

まもなく戦端が開かれる…

……

カオル報告

回収準備中です

第205話 新たなる世界へ 投稿日20111231 (後書き)

シエリル「わ・た・し・の出番は？」

作者「え、えつと……」

シエリル「まだこの話の前半に出番である機会あるじゃないのー！  
だしなさいよ」

作者「すみません」  
全力土下座をする作者。

シエリル「まあいいわ……で次回の出番はいつなの？」

作者「……………」

シエリル「ちょっと……決まってるないの？」

ナギ少尉「まあまあシエリルさん」

シエリル「確か50話辺りから、本編に全くでてない人にいわれて

も…」

ナギ少尉「ぐっ…」

シエリル「作者…早めにだしなさいよね  
と人差し指の腹を作者の顎に添わせ…」

作者「は、はひい」

ナギ少尉「あゝあ…デレデレしちゃって…わたしも艦長にそうじよ  
うかな?…」  
さて次回、アスターテ会戦…お楽しみにい」

第206 アスターテ会戦 投稿日20120103

アスターテ会戦…

宇宙歴796年2月におきるこの会戦は、  
銀河帝国軍2万の艦船に対し、  
事前に情報を掴んでいた自由惑星同盟軍は第二、第四、第六艦隊か  
らなる約4万の艦船を派遣、  
迎撃態勢を整えていた。

同盟側は過去のダゴンの会戦の戦術を利用し、3包囲からの殲滅作  
戦を立案。

必勝を疑うものは…

- 第四艦隊旗艦レオダニス -

『まもなく敵艦隊予定宙域』

「よし…作戦通り包囲を形成させる。距離を保ち第二、第六との  
連携をたもつぞ…」

パストーレは計算しつつ…

「各艦停船せよ」

『各艦停船』

「よし…よし…そろそろ…」

『敵艦隊、予定の宙域に留まらず、我が艦隊へと接近してきます』

「むっ、全艦後進！…距離を保つぞ」

『敵艦隊、更に接近！』

「全艦全速後進！！第二、第六はどうなってる？」

戦域スクリーンには第二、第四艦隊が回頭しつつある状態であり、引き離されていく感じにうつっていた。

『敵艦隊、更に接近イエローゾーンに侵入！』

「帝国の司令官は何を考えている！？」

『敵艦隊レッドゾーンに侵入…敵主砲、ミサイル攻撃きます！』

機先を奪われた第四艦隊…

「これはどういう事だ！？迎撃せよ。全艦総力戦用意、スパルタニアン全艦発進！」

真っ先に命令を出すべきだったろう。

包囲、距離を保つ事に集中していたため抜けてしまった重要な一言

だった。  
結果…

『敵戦闘艇強襲、スパルタニアン発進まにあいません！』  
先制された状態ではたやすく発進できるわけでもなく…  
その直後に狙われたり、

『空母アルキメデス3、ロータス7撃沈！発進不能！』  
母艦もろとも撃沈されたりしていた。

戦闘艇は発進できなければ、空母は火薬の塊を抱えているのと同様  
であり、

『空母全撃沈！！スパルタニアン発進確認できません！』

「持ちこたえさせる！！全艦密集陣、撃て！！」

しかし…この時点で全体の34%に被害をうけ、  
主力でもあるスパルタニアンを封じられたのが痛かった。

『戦艦レメウス轟沈！』

『戦艦クロス、サヨナラを打電してます』

「むう…」

第一戦隊69%、第二戦隊51%、第三戦隊58%の被害数値がど  
んどん上がって…

「第二、第六艦隊に打電！我敵艦隊に突貫す！

同盟に栄光あれ！

全軍機関最大、突き抜ける！」

全滅覚悟の命令を下して旗艦レオダニス以下が突貫するが…

『敵艦主砲正面！！シールド容量80%！！』

「怯むなああ！」

『シールド…』

敵主砲が防御シールドを突き破り艦橋を貫いた…

レオダニスが炎に包まれ轟沈する。

副司令官のフィシャー准将が引き継いだ時には、第四艦隊は分断され、連携がとれずに…

組織だった抵抗ができず、少数グループにわかれた状態だった。

フィシャー准将の第四艦隊は生き残りを選択、

四方八方へと散会していった。

帝国艦隊は追撃掃討をせずに突き抜けていく…

生き残りの第四艦隊所属艦艇は、電波妨害下であった為、レーダーにも映らないが、戦域外のある一点に対して上官の指示通りに艦を進めていた。

- 第六艦隊 -

既に戦闘待機命令をだして長い時間たっていた。兵士達は緊張が続くなか、司令官に文句を言わずに艦隊の運営等についている。

「まだ見えぬか…」

電波妨害下ではレーダーは使用できず、艦橋のムーア苛立っていた。

「あとどれ位だ？」

『会敵予想まで残り1時間!!』

「そろそろ正面に敵艦が見える、正面観測敵にしろ！  
くそっ 忌ま忌ましい…  
妨害がなければ…」

『四時半方向に艦影』

「四時半方向だと？」

右後方の不利な方向から艦影が表れた…

「敵です。迎撃の用意を」

「うるたえおって…敵は我々のゆくてだ。そんな方向にいるはずが



ない」

「ですが閣下、敵は恐らく戦場を移動したのでしょうか」

「第四艦隊との戦闘を放棄してか？」

「申し上げましたでしょう…第四艦隊は既に敗退したのです」

「不愉快な事をいうな」

「現実はおもつと不愉快です」

『敵襲です!!』

敵艦隊からの主砲斉射及びミサイルが第六艦隊へと襲いかかる。

「応戦だ、反転して応戦だ！」

「いけません。勝敗は目にみえています。

今は少しでも犠牲をすくなくすべきです」

しかし命令は続行されつつ…停船反転が…  
振動が艦をおそい…

「黙れ…俺は卑怯者にはなれん」

艦橋に爆発がおこり、

擬体ラップ少佐は柱に押し潰される…

「ヤン、お前はこんなざまになるなよ」

胸ポケットから3Dフォトがでて…

「ジェシカお前とも会えなくなつた。ここで消える俺を許してくれ  
……」  
ペルガモンの炎が艦内を巡り爆沈する……

第六艦隊は早々と旗艦を失つた事により、  
生き残つた幕僚の指揮する戦隊に引き継がれたが、  
もはや勝敗はけつしていたといえよう。

不利な後方からの襲撃により、先制射をとられ、  
早々と旗艦が沈められた。

その混乱により各個に逃走し始める艦、  
旋回命令を律儀にまもり旋回中に撃ち抜かれる艦、

また逃走中の艦が被弾、そのまま旋回中の艦に突っ込み炎上する。

幕僚が引き継いだ時には、最大戦力であつた13000隻が、既に  
9000隻辺りまで減つていた。

『旋回、応射せよ!!』

そして幕僚は前司令の命令を引き継いだ。

主砲攻撃がくるなか、愚かな事に停船旋回する……

正面に正対し、撃ち合うように造られている銀河英雄物語の宇宙艦。

対艦火力も正面方向にすべて向けられていた。  
また撃ち合い想定も正面である。

その為正面に向かなければ撃てない。

何故側面には…それは被弾面積割合だ…

このように次々と主砲ビームが突き刺さると防御シールドが破れ、  
艦中央や機関部に突き刺さり、

爆発炎上してしまう。

その為基本は、被弾面積が一番少なくなるように、  
正面正対で撃ち合う形で設計されていた。

また反転する速度は個々の艦によっても違う。

連携とりつつ等できないものだ。  
つまり艦隊として統制した行動等無理であり、  
秩序の維持もできないものだ。

次々と撃ち抜かれ、  
勢いによる帝国軍艦艇に反撃できるように旋回し終えた時には、5  
000隻を割っていた。

愚かな命令をだしたムーアと引き継いだ幕僚により、  
艦隊の半数以上がすでに沈んだ。

そうなるに数の勝負である…

約19400隻対約4900隻…

勢いによるラインハルト艦隊はそのまま蹴散らし、  
早々と幕僚がのった艦を沈め突き抜けると…

残存兵力を放置し、第二艦隊予測宙域へと向かう。

生き残った艦艇数は…かなり少なかった…

第四艦隊は運用の才能がある、フィシャー准将が生き残りをかけ本  
気でランダム分散をしたおかげで、  
集結地に向かっている艦艇が約6400隻程、  
集結したら戦闘行動は可能だろう。

一方第六艦隊は愚かにも停船回頭繰り返したおかげで…  
戦闘行動可能だけでなく、生存している艦艇は2000を割ってい  
た。

「一方的でちね」

「で、この後逃げ腰の第二艦隊と対戦するんだね」

引き出した重体者をカプセルに入れ、シエルターに入れる。

「数のうえではもう決まってるでち」

「ところがそうでもないんだな…」

また重傷者を引き出してカプセルに入れシエルターにいれる。

「ふえ？なんででちか？」

「第二艦隊旗艦の艦橋だしてみて」

スクリーンに艦橋内部が映される。

勿論ハッキングの成果だ。

「この人が艦隊司令なんでちよね？不安顔しているおっちゃん」

「あゝ…その人でなく、多分左にいる……うんその若手組」

「この人でちか？」

「その右手側にいるのが、キーの人だね」

引き出して放射能まみれの人をカプセルにいれシエルターにいれる。  
コスモクリーナー類似機能で細胞修復機能もついている。

「ヤン・ウェンリー准将…奇跡のヤン、魔術師のヤン…  
このころはエルファシルの英雄か…」

「そのキーの人が司令押しのけるでちか？」

「いんや、それまではしないね…始まったか…」

帝国艦隊は場所捕捉の為電波妨害を解除し、互いに正対しあえる方向へと進路をとっていた。

戦域に残るは数で劣る第二艦隊と壊滅した第六残存艦隊、

そして戦域外に集結中の第四残存艦隊…

数で勝る帝国艦隊が第二艦隊に襲いかかった。

機先を取られた第二艦隊、

『砲撃開始！』

「あ、旗艦損傷したでち」

「そろそろだな…」

『こちら後部砲塔、艦橋応答せよ、

どうか司令を。

こちら後部砲塔、艦橋応答せよ、

どうか司令を』

『機関室、こちら機関室、艦橋応答願います』

「きがついたな」

『こちらは機関室艦橋応答願います』

『総司令官が負傷された。軍医は艦橋にきてくれ。

運用士官は被害状況しらべて修復せよ。

報告は後でいい。

後部砲塔は各個の判断で攻撃続行、

機関室は何か？』

『艦橋が心配なのです。機関室に損害はありません』

『あゝそれはよかったこちらは機能している。安心して任務に専念してくれ』

また引き出して重傷者をカプセルにいれシエルターにいれる。

「これでヤンが艦隊司令の位置にたつんだよね」

「でも最悪の段階でちよ？」

『全艦隊に告げる私は総司令官の次席幕僚ヤン准将だ。

総司令艦は旗艦パトルクロス被だんの為重傷をおわれた。

総司令官の命令により私が全艦隊の指揮を引き継ぐ。

心配するなあ。我が部隊は負けやしない』

『新たな指示が出るまで 各艦は各個撃破に専念せよ 以上だ』

「あ、ごちゅじんたま、帝国軍艦隊が鏃のような形になってきたで  
ち」

「紡錘陣形だね。中央突破を狙つての陣形さ」

「中央突破でちか…」

この先頭の船はちずむ確率たかいでちよね」

「まあ…だろうな…けど軍隊だから、命令には従わなければなら  
ない…」

助かりたいからって離脱は逃亡罪かな？死ぬより悲惨らしいよ」

実際小隊等で敵陣地の射点確認に、部下を2から3名先行させる。

この事にたいして抗命は罪に値するのが軍隊という組織だ。

なをすこしずれるが、人道的にという意味での抗命権≡民間人を虐  
殺しろの命令に対しての抗命令は、  
ドイツ等ではあるが、自衛隊では実は抗命権は存在しない。

『各艦に通達、戦術コンピュータのC4回路を開け』

「C4回路のぞける？」



「ん〜あつこれでちね。…相手が中央突破してきたら…  
わざと分断され、後ろに回りこむでちか…」

ラインハルト艦隊は紡錘陣形で中央突破を執行しはじめた。

『主砲斉射』

バトルクロスの至近距離から主砲の直撃し、

敵艦は防御シールドの負荷が突破し直撃、爆沈す。

『敵艦、ケルベレン正面!!!』

『回避せよ』

敵艦が艦の左側を通ってく。

側面砲塔からシールド負荷を少しでもあげようと…

第二艦隊は傍目には中央突破の圧力にまけて、  
分断されてる様に見えてた。

『機関全速』

両側に広がった第二艦隊は、ラインハルト艦隊の外側を走りぬけ…

『味方艦隊 敵後ろにでました』

ラインハルト艦隊の後方へと踊りでた。

『敵、前進を続けます』

ラインハルト艦隊は後方をとられたので、  
全速力でヤン艦隊の後方に回り始めると…

「あれ？輪になったでち…」

「互いに互いの尻尾を食う形にね。

正面火力集中型だから、まあこうなるんだよ」

ヤマトみたく砲塔型ならまだ横方向にも撃てたかもしれない…

だが、正面のみ、こうなると…

「尻尾しか食えなくなり…しまいにはしようめつするでちね」

「単純には数で勝る帝国艦隊が食い切るかもしれないが、  
まあ被害も馬鹿にならない消耗戦になるからね…」

帝国艦隊の先頭が輪から離脱し始めた。

それに合わせて第二艦隊も追撃せずに敵艦隊からはなれてく。

『きかんのゆうせんに敬意をひょうす。  
再戦の日まで壮健なれ。』

銀河帝国軍上級大将ラインハルト・フォン・ローエングラム』

『各艦に通達、以後戦域の復旧を行う』

ラインハルト艦隊の撤退を確認した第二艦隊は、同盟勢力下にあるアスターテ星系の後始末を、引き継ぎの艦隊がくるまで、星系の復旧及び残存艦艇の救助を行い始めた。

無事な艦艇から100隻単位ずつに別れはじめて、戦域にのこされた帝国軍の妨害衛星の除去。治安維持の為敵離脱艦の有無の搜索。

第四、第六艦隊の残存艦隊の搜索救助等にわかれていった。

また第二艦隊内部でも、大破や修理不能艦の破棄や処分、工作艦までの回航、負傷兵の病院船への移乗など行われる。

……

アスターテ会戦は、同盟側の大破、損失艦隊が実に約22、600隻にも及んだ。

「ハイネセンの場所特定したでち」

巡航艦のデーターから洗いだして、同盟側の各星系の場所を特定できた。

「じゃ、分体回収したら…ハイネセンへ」

「了解でち」

……  
カオル報告

ハイネセンへ、ジャムシードへ

けっこう若い人多かったですね……  
この時点で既に末期か……

第206 アスターテ会戦 投稿日20120103(後書き)

ナギ少尉「新年あけましておめでとございます」

作者「本年度もよろしくお願い致します」

ナギ少尉「この作品も丸一年越えましたが、今だ終わりが見えてませんね」

作者「見えとるわい、見えとるわい…」

地球平定まであと少し、火星、タイタンまであと少し」

ナギ少尉「戦闘用BETAは？」

作者「……………」

ナギ少尉「作者弄りはここまでで、シェリルさんは、ただ今レコーディング中だそうで、今回はお休みです」

作者「彼女一人であって、原本素材とかないから…さ」

ナギ少尉「さて次回予告ですが…地獄への道程、お楽しみにい」

第207 地獄への道程 投稿日20120106

宇宙歴796年8月

イゼルローン要塞を無傷で占拠できた自由惑星同盟は、世論に押され大規模侵攻を計画。

初の帝国領土侵攻となった。

ここイゼルローン泊地には、要塞内部におさまりきれない大規模艦隊が集結。

その数要塞内駐留ロボス艦隊以外で、8個艦隊約11万隻、支援艦艇集団約8万隻…

合計約20万隻に及んだ。帝国領土に侵攻しようとしていた。

一方：事前にフェザンから大規模侵攻情報を流してもらった帝国軍は、焦土作戦を計画、非人道的にイゼルローンからの侵攻ルートにあたる人民から食糧を徴収し回収しようとしていた。

22日、同盟軍の大規模侵攻が開始された。

それを探知した帝国軍、焦土作戦を開始。ケスラー提督艦隊が、次々と辺境恒星系から食糧を回収してく。

同盟軍到達前に回収した帝国軍…

撤退した恒星系を同盟軍は次々占拠して、人民の要求に艦隊の食糧

を提供していった。

しかし…ある辺境惑星が飢餓による滅亡の危機にひんしていた。

12日目

ジャムシードの宙間工廠及びモジュール生産施設等を、ナノマシン利用で取得したカオル一尙。

「やっぱりあるとおもったんだよね…」

「うわぁ…」

集音マイクで地上の様子を確認してた。

『どなたか、ミルクをわたしの赤ちゃんにのませるミルク、あまってませんか？』

『ママーお腹すいた』

『畜生、俺らは帝国にすてられたんだ』

『果樹も作物も何もないのに、どうすりゃ』

同盟軍はイゼルローンからオーディン方向へと、基本的に侵攻範囲を広げていった。

一方帝国軍はイゼルローンから考えられる範囲のすべてを、同盟の勢力進行にあわせて回収…

その戦略的違いが、この星の運命が決まった。



帝国軍も同盟の勢力圏拡大で侵攻してるものと思い引き上げた。例えわかったとして、補給しようにも同

盟の勢力圏内を物資積んだ輸送艦隊が横断しなければならぬ。

一方同盟は既に補給線がのびきつてとりあえず休止の状態で、そのような惨状の星がある事すら、知らない状態であった。

惑星住民が助けを求めようにも、市民には個人船をもつてもなく、貴族も引き上げていった…

そのような星が幾つかあった。

「助けて回収するか…ルーロス姿あらわして地上におりてくよ」

「了解でち」

この惑星に4つあるオアシスの内一つに下りてく…

「助けだあ」

『食糧もらえるの？』

『どこの個人船だ？』

空港に着き外にでると、ルーロスを囲んで人々がいた。

「わたしの赤ちゃんを助けて下さい！」

「どこの誰でもいい、とにかく救援をとってくれ！  
食べ物がかくはないんだ！」

「もう3日なにも食べてねえ…飯を…」

「うちの寝たきりおばあちゃんを…」

「すみません！まずは代表者の方と話させて下さい！」

取り囲んでいた人達が辺りを見回し、町長がいねえ、おら呼んでくる！

と何人かが探しにいった。

町長が呼ばれてくるまでの間に、この惑星のデーターだが、4つのオアシスを中心とした牧農、農耕で成り立っている辺境惑星だった。

羊や牛は食糧になるといつて引き上げられた模様であり、農業は水源施設を破壊され、供給がとめられていた。

その為食べ物もなし、水も貯めてあるだけ…まさに滅亡の危機に貧している。

惑星人口は4つのオアシス合計で34万9254人であった。

「わしが町長ですがなにか？」

「素直におたずねします。あと45日程帝国軍も同盟軍も来ない状態だと…どうなります?」

「……それは真か?」

「と、データーでは…」

「この惑星の人が全てヴァルハラに行きますじゃ…」

「ですよね…で皆さんに二つの道を提示いたします」

「二つとは?」

「一つ、このままこの星で過ごし45日まつこと  
おしまいだあ…等聞こえた。

「一つ、この星を離れ異世界の住民になってもらう事。勿論食住は保障します」

「星をすてるですか…どの様な方法でかの?宇宙船もまさかこの小型船いつせき…」

目の前にシエルターをだした。

「!?!どこから出てきたのじゃ?」

「人間やめてるので、方法はイロイロあります。考えたら頭いたくなりませよ。」

まあ…助かるか、このまま死ぬか?素直にこの二択です。いかなさいます?」

「考えたらわからないか…まあよい。町を棄てましょう…時間はどれくらいあるかの?」

「まつ…特にはないですね」「こんなふうに別の場所にお声掛けしにいくので」「目の前で分裂した。」

「…わかったのう…さて皆の衆!」

と此処は町長以下で移住希望になりました。

我が儘な貴族が部下と共に星を棄ててた様でそこが大きかったろう。

領主、貴族が残っていた場合だと…

そうだった我が民を見捨てられないという、良心的な領主であった為、

同盟軍の進行ルートから外れてる、

補給も勢力圏横断の為ない、  
のを諭すと、  
折れて民を願います。と…

大概この後が、領主はこのまま踏み止まるになり、

「開拓して、先祖代々伝わるこの土地を見捨てては、  
先代に申し立てる事ができません。  
わしらの事は良いので民の事をよろしく願います」

（またかあああ）

そうなるとお決まりパターンで、領主家族や執事がのこり始める…

民に話すと…やはりご恩を…が出はじめたので、

「領主様～」と屋敷を取り囲んで…

領主様とご一緒でなければ…

で、領主様共々救助の形になる事と…

（分裂体じゃなきゃ…どんだけ時間かかったか…）

（こっちはまだ説得中だよ）

（130日かな？）

（まあそんなもんでしょ）

(飢餓というか地獄が発生したよね…)

(だよなあ…)

(こっちは、まさに暴動寸前だったし)

(あゝそこはヤバかったよねえ)

我が子のミルクを貰おうとして、断られた男性が、  
猟銃を家から持ち出し、押し入りしようとしてたのが確認できた。

発砲したらあとは想像がつくだろう…

食糧の為に血を流す争いになる…

(まあ間に合ったから良いさ)

(でも漏れ結構あったね)

同盟側の帝国内部への進行を優先した…  
のが原因だろう。

で、オーベルシュタインは、民の事をなんともおもってなく、  
この後の大惨事を見逃すのを進言したのだろう。

せめて、隠匿できる保存食等の隠蔽、  
医薬品、栄養剤、

子供の粉ミルク等を除外してれば、  
暴動寸前まではいかなかった筈だ…

(擬体残すのわすれないようにね)

(了解)(わかってるよ)

餓死を勿論偽装する為に擬体を残していった。

が、オーベルシュタインにこの情報は握り潰されるだろう…

作戦期間は実に1ヶ月半近く継続する。

カオルは目処がついたので途中、

世界扉で時間を渡る…

10月

人民を犠牲にした焦土作戦は艦隊物資消費に、実に効果的だった。

同盟軍は占領下の有人惑星に対し、人道的観点から艦隊物資を配給。艦隊物資は日に日に減ってきた。

食料生産手段をもっていない帝国臣民への供給が続いてたからだ。

各艦隊司令官達は、この物資の消費に危機を感じていて、再三撤退を提案するが作戦首席参謀であるフォーク准将に一蹴されてしまう。

補給担当のキャゼル又少将も悲鳴をあげ突き付けていたが、フォーク准将は動じない…

そして前線及び司令部からの要望、要請はハイネセンに伝わり、出兵を指示した最高評議会のメンバーも、その結果となる膨大な負担費用に困惑した。

元々の遠征費用でさえ国家予算の5%以上になり、更に5000万人に及ぶ帝国臣民に対する費用まで計上する羽目になり…

責任をとりたくない出兵賛成派は、散々反対派の弁にも関わらず、撤兵をわかっていながら、なんだかの成果をえるまでは撤兵せず。膨大な費用にあたる物資食糧を供給し続ける。という結論に達してしまった。青い顔しながら…

たった90日分の追加でそんな顔してるのに、作物収穫までの270日どうするの？と、どっかの議員が呟いたとか…

if、この時点で撤兵決定すればまた違った結果になったろう。

またフォーク准将という害悪がいなければ…

…  
…  
その後本国からの輸送船団500隻1000万tクラスがイゼルロ  
ーン泊地に到達すると、

各艦隊司令官から重要な絶対欲しい物資を積んだ船に対して、護衛の任務に我が艦隊を派遣したいと、司令部に要望するも…

「前線までは占領下であり、安全が確保されています。各艦隊は占領地の確保を優先して下さい」



というフォーク指示を返信、  
スコット提督以下26隻のみの護衛船団で送り…

10000tの輸送艦500隻と護衛26隻は、  
4個艦隊規模のキルヒアイス艦隊に襲撃され、文字通り全滅した。  
フォーク准将の発言の安全なはずの占領下の宙域内で…  
(回収うまうま)

それでもフォーク准将は撤退を認めず、

本国より新たな物資が届くまで、必要な物資は各艦隊が現地調達せよ。

と愚行なる命令を下した。

各艦隊は背に腹はかえられぬ…

命令違反による更迭覚悟で、撤退準備進め始めたり、  
また食料の現地供給を停止したり、現地より調達し始めた艦隊もいた。

すると…今、食料の供給絶たれたり奪われた占領下の惑星で…暴動がはじまっていた。

第8艦隊占領下である、ここ惑星ペルーでは、  
食糧供給を停止し撤退準備をしたのみの惑星である。

ある程度縮小しつつ進んでいたもの…

撤退間際においてとうとう食べ物をおいてけとばかりに勃発した。

「食べ物をおいてけえ!!」

『これ以上近づかないで下さい!!』

同盟軍の警告にも関わらず、占拠している空港施設のフェンスに突撃している民衆…  
万を越えていた。

「隊長!!」

「まだだ、あと10名いる」

「しかし!!」

無線が入り

「……残り5名だ……襲撃されて墜落だそうだ」

「隊長!!」

フェンスを押さえている兵士から限界の意味で叫ばれた。

「……撤収!!」

押さえている兵士が離れシャトルへと駆け出す。  
鋼鉄製の金網フェンスが民衆の押す圧力により、

根元からつき始める…

「急げ急げ！！」

シャトルは管制無しに発進準備を整え、滑走路へと3便が待機していた。

第1便が満員になり、滑走路で加速しはじめると同時あたりにフェンスが完全に押し倒され、

怒涛のように暴徒と化した民衆がその部分から流れこんできた。

暴徒と化した…は、既に踏み倒されて脚で踏まれ死亡や、フェンス最前での圧死が出てたからだ…

空港施設を破壊し中に探しにいたり、

シャトル目掛けて怒涛の如く押し寄せてくる。

「発砲！！」

暴徒目掛けて2便、3便の搭乗口、非常口から射線が伸びる。

次々と撃たれ、射殺、または負傷して転んだ上を踏まれて死亡する。

第二便が滑走路に出て、発進準備が整い緊急加速すると、滑走路上に暴徒がでて…

車輪で跳ね飛ばされ、シャトルは飛び立った。

第3便も滑走路にでて何とか暴徒を近づけないように射殺して、発進準備が整い搭乗口がしまる。

するとシャトルに取り付こうと暴徒が翼などに取り付くが…  
シャトルが加速しはじめ無事に…

しかし、翼に取り付いた暴徒がエンジンのファンに吸い込まれ…

エンジンの圧縮機内部のプロペラが暴徒のもっていた銃により破損、内部構造を傷つけると炎をあげた。

加速中だったシャトルはバランスを崩し、ターミナルビルへと…

爆発炎上する…

(むりむりむり…)

とても今この時点では救助できるような状態ではなかった。

その後は凄惨極めた…

一旦同盟軍占拠施設を襲撃した暴徒は、襲撃対象であった同盟軍が宇宙に撤退したため、

段々と解散していくが、食料を調達しきれなかったのが飢えをみたくすように、

襲撃対象が隣人へと代わった。

襲い掛かれた隣人は自主防衛するが、

殺されると息子は殺され、妻娘等は犯された後殺され、

屋内を探してないと、ついには殺した人肉で身内の飢えを満たすようになっていた。

供給を止めただけでも…帝国の補給が遅れたら…

第九艦隊指揮下の各惑星でも撤退作業中に同様の襲撃にあっていた。

ましてや調達を行おうものなら…

第三、第七艦隊はそのまま駐留すると判断して、補給がくるまで現地調達を指示して行った為、  
地上では激しい戦闘がおこっていた。

明日の食料も奪われ食べる物返せとばかりに暴動鎮圧の為に、次々と陸上部隊が送られてくる。

それを受けますます抵抗は激しくなっている。

武器も同盟軍地上部隊の死者から奪ったのを使い暴動は激しくなる。とうとう地上装甲車も導入され、帝国臣民は炎の中に消えていった…

男性はほとんどが銃下に消え、か弱い女、老人、子供だけが残り、日々やせ細り…しまいには動かなくなる。  
人間2日目程度なら水があれば大丈夫だ…  
が小さい子供等はそれ以上は耐えられない…

(まさに地獄だな…)

とりあえず助けられるだけは助けた。

が、漏れがこのような地獄をうつしていた…

そして…

宇宙では同盟艦隊に帝国軍が襲いかかるうとしていた。

「うおお！！あたったああ！！」

「何？おめえ…チケット譲れ！！」

「いくら上官でも駄目です！」

彼等が手に持ってたのは、シエリル・ノームファーストライブチケットト当选ハガキだった。

日時は、4月25日約1ヶ月後：

シエリル様はこの世界においても瞬く間に異世界軍のサポートもありながら、

トップシンガーへと登りつめていた。

……

カオル報告

月面都市も使用かな？

第207 地獄への道程 投稿日20120106(後書き)

作者「という帝国領土進行作戦の裏側を…」

ナギ少尉「えつと…人肉って…」

作者「過去の兵站の話から…ね」

ナギ少尉「いくらなんでもないでしょ？」

作者「食べ物が、3日間から10日間あたりまで全くなかったとしても？」

ナギ少尉「…」

作者「断食ダイエットすればわかりますが、他人が肉に見えてきちゃうんすよ…」

ましてや配給受けてて、現代人より栄養分的には下です。そう考えるとね…」

ナギ少尉「他人が肉かあ…」

作者「あと、別の方の論になるんですが、内乱時にキルヒアイス艦隊の戦闘回数が何故60なのか？からですね」

ナギ少尉「あ、辺境の反ローエングラム側って事？」

作者「そこまでの怨みがないと、

五個艦隊以上に全滅覚悟で60回なんて挑みはしないですよね…って事で」

ナギ少尉「……確かに……」

作者「食糧を渡さない同盟にも怨みあるが、このようにしたラインハルトにも怨みある。

これなら貴族側がまだマシだって事ですな。

で、ラインハルト存命中に作戦行動でも、帝国側辺境にたちよりもしない点もね」

ナギ少尉「なるほど、そうだった考えですね。さて、今回は…アムリッツアへ…お楽しみにい」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3682p/>

---

完全なる予定違いより予期せぬ未来を求めて...

2012年1月6日18時06分発行